

Fate/beyond 【日本史fate】

たたこ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

今宵四神相応の地において、聖杯降霊の儀が執り行われる——  
解体されたはずの冬木の聖杯。何者かにより模造され、陰陽道により改造された紛い物の聖遺物——『ヒジリノサカズキ聖杯』。  
失敗するはずのない召喚の失敗、霊器盤の変調、揃わぬサーヴァントとマスター。

それでも聖杯が『願いを叶える』機能を持つがゆえに、彼らは戦場に身を投じる。

※fate原作キャラ出番ゼロ・サーヴァントは日本の英霊オリーのオリジナル聖杯戦争です。

※fateの設定に沿いながら自己設定をぶち込んでる風味です。  
設定について指摘してくださるとありがたいですが、作中で直すかどうかは微妙（失念してて話組んでいる可能性があります、そのままゴ—する方針）。

※FGOなど公式の新サーヴァントとかぶった時は「別側面」。

※同じものをpixivでも投稿しています。

※2017年10月3日追記

続編「fate／Imaginary Boundary【日本史fateホロウ】(<https://novel.syosetu.org/135518/>)」はじめました。

※2016年8月15日追記

副会長さんが、当SS並行世界設定で「Fate／beyond another」と言う作品を書かれています。(当SSのマスターとサーヴァントは不在)

# 目次

簡易設定	1
第0幕 序幕	
1 1月23日① アーチャー召喚	4
1 1月21日 セイバー召喚	13
1 1月22日 準備期間①	35
1 1月23日② バーサーカー召喚	46
1 1月24日 準備期間②	50
1 1月25日 戦争、開幕	58
第1幕 前哨戦	
1 1月26日① 聖杯（ヒジリノサカズキ）の娘	85
1 1月26日② 暗殺者	104
1 1月27日 各陣営模様	116
1 1月28日① 白昼の襲撃	140
1 1月28日② 弓兵 対 槍兵	153
1 1月28日③ 小確命	164
第1幕 兵は凶器	
1 1月29日① 兆候	181
1 1月29日② 弓兵 対 狂戦士	196
1 1月29日③ 三つ巴	209
1 1月29日④ 全て翻し焰の剣	222
1 1月29日⑤ 最弱と最弱	231
1 1月30日① 一夜明けて	240
1 1月30日② 聖杯の娘、かく語りき	255

1 1月30日③ 其は何を求めるか

1 1月30日④ 討伐同盟

1 1月30日⑤ そして誰もいなくなるか

1 1月30日⑥ 兵は凶器

### 第1幕 春望

1 2月1日① 「夢」なるモノ

1 2月1日② ありふれた不幸と幸福

1 2月1日③ 殺意と責務

1 2月1日④ 伝説の激突

1 2月1日⑤ 剣士 対 狂戦士

1 2月1日⑥ 決着、そして

1 2月1日⑦ 背信、そして幕切れ

interlude 1 第七の契約

### 第2幕 一人では戦えぬ

Interlude 2 戦争の終焉

1 2月2日① 碓氷邸にて、三人

1 2月2日② 三者三様陣営模様

1 2月3日① 冬の長い一日

1 2月3日② 束の間の安息？

1 2月3日③ 不穏

1 2月3日④ 風雲急

1 2月3日⑤ 聖杯酒宴

1 2月3日⑥ 何も終わってはいない

1 2月3日⑦ 一人では戦えぬ

1 2月3日⑧ 長き一日の終わり

269

277

292

305

326

343

357

368

381

390

403

420

426

431

452

469

482

498

514

531

553

565

580

第2幕 暗中飛躍の意識なく

12月4日①	陰陽師と聖杯と神父	593
12月4日②	第八の契約	609
12月4日③	山は神域、山は陣地、山は根城	623
12月4日④	未だ喚ばれざるもの	639
12月5日①	最後の平穩	655
Interlude 3	真意の在り処	670
Interlude 4	キャスター召喚	679

第2幕 日本神話・改

12月5日②	先、鬼が出るか蛇が出るか	690
12月5日③	ここは敵地	704
12月5日④	魔術師と眷属	717
12月5日⑤	世に盗人の種は尽きまじ	732
12月5日⑥	槍兵の決意	741
12月5日⑦	約束された栄華の月	751
12月5日⑧	眷属、再び	763
12月5日⑨	碓氷の影使い	771
12月5日⑩	三騎相見ゆ	784
12月5日⑪	聖杯陰陽師 対 槍兵	792
12月5日⑫	勝利こそ全て	805
12月5日⑬	全て呑み込みし氾濫の神劍	814
12月5日⑭	稀代の陰陽師	823
12月5日⑮	幸運と幸福	832
12月5日⑯	大西山決戦・決着	848
12月5日⑰	開闢にして終焉	859

第3幕 生まれた時から決まっていた

interlude 5 女の魔術師たち

12月6日① 願い

12月6日② 日の下の大盗賊

12月6日③ 聖杯の娘、来る

12月6日④ 続・聖杯の娘、かく語りき

12月6日⑤ 夜更ける

interlude 6 人にも神にも剣にもなれぬ英雄・前

942

Interlude 7 人にも神にも剣にもなれぬ英雄・後

956

12月7日① 波乱の朝

12月7日② 土御門の家

12月7日③ 人ではないものたち

12月7日④ 生まれた時から決まっていた

12月7日⑤ 日常との別れ

第3幕 生き様は鮮やかにはほど遠く

12月7日⑥ 願いを叶えることの難きよ

12月7日⑦ 神の剣たち

12月7日⑧ 彷徨う戦線

12月7日⑨ イマジナリ・ドライブ

12月7日⑩ 断たれた伝説

12月7日⑪ 二人の碓氷明

12月7日⑫ この道繋げし吾妻よ

12月7日⑬ 聖杯戦争という名の道楽

11391128111611071094108210671045 102910141000 987 971

933 918 904 891 880 870

Fate/beyond material V:用語集た行くわ	1385
さ行	
Fate/beyond material IV:用語集 あ行く	1366
Fate/beyond material III:マスター編	1345
騎士編	
Fate/beyond material II:サーヴァント 四	1328
騎士編	
Fate/beyond material I:サーヴァント 三	EX:Fate/beyond material
epilogue 4月8日	1322
epilogue 冬来たりなば春遠からじ	1311
12月9日⑤ 最後の剣	1298
12月9日④ 今生きるものたち	1278
12月9日③ 土御門神社・地下大空洞	1268
12月9日② 土御門神社・境内	1258
12月9日① 土御門神社・上空	1246
12月8日③ 決戦前夜	1235
12月8日② その呪いは幸福だった	1216
12月8日① 最終工程	1206
第3幕 fate/beyond	
12月7日①⑦ 続・夜更ける	1193
12月7日①⑥ 生き様は鮮やかにはほど遠く	1179
12月7日①⑤ 魂の偽造	1164
12月7日①④ 攫われた杯	1155



行 Q & A

【予告】 f a t e / i m a g i n a r y b o u n d a r y

1424

【EXTRA】余談

1430

1405

## 簡易設定

### 【サーヴァント】

セイバー

剣士の英霊。「三騎士」の一角で、バランスが取れた能力から「最優」と称される。

衣袴にマントを羽織った旅装の美少年。古代史に名を残す大英雄。

アーチャー

弓兵の英霊。「三騎士」の一角。高い単独行動スキルと射撃能力を持つ。

衣冠束帯に身を包む、優雅な中年の男性。飄々として本音を掴ませない。

ランサー

槍兵の英霊。「三騎士」の一角。最高の敏捷性と高い白兵戦能力がある。

伸縮自在の名槍を振り回す屈強な武人。熱き戦いのみを求め、聖杯戦争に参加する。

ライダー

騎兵の英霊。「騎乗兵」とも。高い機動力と強力な宝具を数多く所有するサーヴァント。

消滅？

バーサーカー

狂戦士の英霊。基本能力を問わず、ただ狂う事で破壊にのみ特化しているクラス。

漆黒の霧に包まれた武士。今日でも恐れられる存在。

キャスター

魔術師の英霊。基本的にランクA以上の魔術を持つ英霊が該当する。

妖艶な妙齢の美女。どこかくたびれた巫女衣装を纏う。

アサシン

暗殺者の英霊。「マスターの天敵」とされるクラス。

とある事情により黒い雨合羽を被っている男性。生前の記憶があまりない。

【マスター・その他人物】

碓氷 明（うすい あきら）

春日の地の名門魔術師・碓氷家の次期（七代目）当主。属性は虚数・起源は分解。

管理者代行中の女子大生。

土御門 一成（つちみかど かずなり）

平安より続く陰陽道魔術・土御門家の一人息子。土御門家の魔術回路は枯れかけている。

春日の私立高校に通う一人暮らしの高校生。属性は炎、起源は保護。

真凍 咲（しんとう さき）

春日の地の魔術師・真凍家の娘。難病にかかり、余命半年と宣告されている。

春日に暮らす中学生。属性は水と風。

キリエスフィール・フォン・アインツベルン

冬木の聖杯戦争・始まりの御三家アインツベルンのホムンクルス。

春日の聖杯用にチューニングされている。見た目は10歳前後だが、実年齢は???

山内 悟（やまうち さとる）

先祖に魔術師を持つが、今は一般人。現在求職中。

請井 将（うけい しょう）

聖杯戦争の話を聞きつけて春日にやってきた外来の魔術師。

ハルカ・エーデルフェルト

時計塔よりやってきた名門魔術一族・エーデルフェルトの分家。

宝石魔術が専門の慇懃無礼な優男。

神内 御雄（じんない おゆう）

春日教会の神父・第八秘蹟会所属。碓氷家とは旧知の仲。元魔術

師。

今聖杯戦争の監督役であり、碓氷明・ハルカと結び何事もなく戦争が終わることを目指す。

神内 美琴（じんない みこと）

春日教会の修道女・第八秘蹟会所属。碓氷家とは旧知の仲。元魔術師、御雄の養女。

今聖杯戦争の監督役補佐。魔導からは離れているが、起源・放出を生かした体術と剣が得意。

PIXIVに鯖と鱒の絵を上げています。興味のある方はどうぞ。

(fate／beyondで検索すれば出ます)

## 第0幕 序幕

11月23日① アーチャー召喚

「平安時代の安倍晴明から発した、陰陽道の流れをくむ由緒正しき魔導の一族」。

それが、土御門一成（つちみかどかずなり）が生まれたときから聞かされてきた、己が一族の在り方だった。

だが、一成が物心つく前から、彼にもはばかりせず不穏な声が聞こえていた。

我が一族は、やはりもう終わりだ――。

このような声は、決して俄かに上がったわけではない。一成がこの世に生を受ける前から、その危惧の声は上がっていた。魔術師を輩出する家として、土御門は終わりだと。

だが、一成の両親はそれをむしろ「良し」と思っている節すらあった。一成の祖父は熱心に魔術を教えていたが、両親はあまり乗り気ではないことを幼いながら、一成自身も知っていた。

彼の魔導の道は、最初から中途半端になる運命を孕んでいた。

だが、彼の両親は嬉しそうであった。祖父の意向に反し、父と母は笑って涙を流しながら言った。

「お前はこの道を歩まなくていいのだ」と。

\*

春日市。関東の某所に位置する一都市。駅前は近年の駅大改修により商業施設や娯楽施設が増え栄えている。しかし少し郊外に向かうと住宅が増え、ベッドタウンの様相を呈している。また、海が近く、そちらに向かえば工場地帯と倉庫街、海浜公園があるという、地方の中規模都市である。

その都市の駅から十分程度の場所に博物館がある。駅の大改修に合わせてこちらも大々的な修改造築が行われて、ガラス張りの近代的な博

博物館へと趣を変えた。

博物館の営業時間は疾うに終了し、夜も更けて久しい頃合い。高校生と思しき少年がいるべき時間では決してないのだが、ダツフルコートを着てリュックサックを背負った学生服の少年が一人、懐中電灯を片手に堂々と歩いていた。

少年は暖房のない夜の室内の寒さをコートでもものともせず、懐中電灯をあちらこちらに当てて観察している。

「懐中電灯だけじゃ見えにくいな。しかもどれを触媒にすればいいか、っていうかもはやどれでもいいんじゃないかねーのかな」

少年のいる二階は日本の古代く中世までの品が展示されており、同時に特設展示のコーナーがあるフロアだ。少年は品定めをするかのように明かりの足りないなか、懐中電灯だけを頼りにじっくりと展示品を眺めている。

——が、突如その作業をやめて背負っていたリュックサックを下ろして、透明な液体の入った袋を取り出した。

心の中で床が絨毯のようなものではなくリノリウムでよかつたと思いながら、少年は液体——水で魔法陣を描いていく。懐中電灯を口に咥えて、黙々と作業を行いながら少年は己の家と、これから行われる戦争に思いを馳せた。

聖杯戦争。何でも願いを叶えてくれる「聖杯」を巡って行われる、七人の魔術師のバトルロワイヤル。「聖杯」——そのような便利なものがあるなら、七人で使えば最も良いと思うかもしれないが、そうは問屋が下ろさない。

願いを叶えられるのは勝ち残った一人のみ。

聖杯は何十年という時間をかけて魔力をため込み、それが満ちる時期に聖杯戦争は起こる。魔力が満ちると、聖杯は自ずからマスターを選定し『令呪』を付与する。

そして令呪を与えられたマスターは、参加者として『サーヴァント』、要するに使い魔を召喚する。

使い魔というとネズミ、フクロウといったものを想像するが、聖杯

戦争における使い魔——『サーヴァント』はそれとは次元が違う。

『英霊』という存在がある。生前に偉業をなした人間は、死後『英霊の座』に引き上げられ、人間の守護者となる。英霊は実在、架空に関わらず人々に信じられてさえいれば、人間の想念によって『英霊』となる。『英霊』という、この世の外側にある精霊のような存在を現世に呼び出し、使い魔として使役する。それを可能とすること自体がひとつの『奇蹟』であり、聖杯の力は召喚そのものにより示されている。

そうして召喚された『サーヴァント』という使い魔を使役し、七人の魔術師が殺しあう、それが聖杯戦争。

しかしこの世のものではない、純粹な力そのものの英霊をそのまま召喚することは魔法使いにも不可能である。

それを可能にするために、英霊を呼ぶにあたって『クラス』という箱を設定し、その箱に沿って英霊の力を流すことによつて召喚を行うのだ。

その英霊の『クラス』には七つが存在する。

剣の騎士、セイバー。

槍の騎士、ランサー。

弓の騎士、アーチャー。

騎乗兵、ライダー。

魔術師、キャスター。

暗殺者、アサシン。

狂戦士、バーサーカー。

セイバーには「剣」にまつわる逸話を持つ英雄、キャスターなら「魔術」にまつわる逸話を持つ英雄が召喚されるという具合に、魔術師は英霊の生前の伝説に当てはまるクラスで召喚を行う。また、召喚の際に英霊ゆかりの品を触媒にすることで呼び出す英霊を限定することができる。

例えばエクスカリバーの鞘で、アーサー王を呼び出すといった具合だ。

触媒がない場合、召喚者本人との相性で英霊が選定される。だがどんな英霊が呼び出されるか予想できずあまりにギャンブル性が高すぎる為、触媒を用意することがセオリーだ。

過去、日本で行われた聖杯戦争で最も著名なものは冬木のものである。だが、冬木の聖杯は何十年も前に解体されてその地の聖杯戦争は終了したという。

今日、春日の地で行われようとしている聖杯戦争は何者が冬木の聖杯を模倣したものである。

さらにその聖杯に日本で生まれた陰陽道による手を加えたことにより、呼ばれる英霊が日本に縁のある英霊に限定されてしまっているという。

聖杯が『真作』であるか否かは聖堂教会によって判断されるが、既にこの聖杯戦争の聖杯は贋作であると認定されている。

しかし真の聖遺物「聖杯」ではなくとも、『願いを叶える』機能が存している限り、その奇蹟を求める者たちにより戦争は開始される。

三日前、少年は自分の左手に鈍い痛みを感じたかと思うと、そこには三画の令呪が宿っていた。彼は聖杯戦争の話を知ったことはあったし、聖堂教会から春日市で聖杯戦争が行われるとの伝達もあったが、己に令呪が宿るまでは他人事だった。

だが、己に令呪が宿った時にはそれを運命だと、少年は間違いなく感じたのである。

己が魔導の家を、ここで終わらせてはならない。聖杯戦争で勝ち抜き、『根源に至る』。

それが、魔導の家に生まれた己の責任。一体何者がこの戦争を始めたのかは気になるが、少年は「願いを叶える」聖杯がある以上は利用させてもらおうつもりでいた。

話は戻るが、英霊を召喚する際に触媒を用意することがセオリーである。しかし少年は諸事情あり、親には令呪が宿ったことを告げない。親のツテを頼れば古い家系故に何か英霊に縁の品が出てくる



と思えたが、それはできなかつた。

そこで少年がとつた手段が、博物館に侵入しそこで召喚の儀を行うことであつた。

博物館ならば歴史的ゆかりのある品がある上に、どれが触媒として認識されてもそれなりの英霊が呼ばれるだろうとの考えからである。

「よし、こんなもんだろ」

少年が満足げに懐中電灯で描いた魔法陣を見下ろす。水ゆえに見にくい、しつかり魔法陣が描かれている。時刻は午前一時。召喚の為にきちんと魔術礼装である神主服を身に着けてきて、体調も万全である。午前一時は少年にとって魔術を行使するのに最も良い時間である。

準備は万端——少年は息を吸い、心を落ち着ける。魔法陣の上に手をかざす。

「一魂清浄・二魂清浄・三魂清浄・四魂清浄・五魂清浄・六魂清浄・七魂清浄・八魂清浄・九魂清浄・十魂清浄——」

英霊召喚の呪文に、土御門家由来の呪文を加える。日本刀で打ち合う音が脳髓に響き渡る。異物が体に切り込んでくるイメージ。少年の魔力回路が起動し、生命力が魔力へ変換され流れ出す。本来人体には有害な幽体と肉体を繋げる疑似神経が鳴動し、少年に鈍痛を与え続ける。

だが、それは慣れたもの。人ならぬ神秘を行うが為の代償。彼の詠唱は止まらない。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば答えよ——」

夜の静寂が震える。水で綴つた魔法陣が光を放ち、溢れ出す魔力の渦。少年は眼を閉じる。室内にも拘らず暴風が吹き荒れる。恐るべき神秘の具現が、手を伸ばせばそこに——！

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

魔法陣は極光といつても差し支えない光を放ち、荒れ狂う風は術者をも吹き飛ばさんとする。それでも少年は集中を緩めない。魔法陣はこの世ならざる場所と接続し、奇蹟の具現ともいえる英霊を招く。

極光と魔力回路の鳴動が収まったと同時に、自らの魔力がどこかに流れているを感じる。

少年はゆっくりと目を開く。いまだ薄明りを放つ魔法陣の中心に、明らかに人ならざる——姿かたちは人だが、放射する力と存在感が人ではない——モノが立っていた。

少年は思わずつばを飲み込んだ。

その英霊は、ゆっくりと余裕のある動作で少年に振り返る。衣冠束帯姿の、三十から四十歳の男性と思われる英霊。動作に洗練された教養を感じさせ、高貴な生まれを連想させる。召喚された『サーヴァント』は、厳かに口を開いた。

「問おう。そなたが私のマスターか」

召喚の余韻であっけにとられていたが、少年は我に返ると勢いよく答えた。

「おう。俺がお前のマスターだ。つと、クラスは？」

「おや、私がアーチャークラスしか該当しないと知って召喚したのでは……ああ、そういうことであつたか」

アーチャーはきよるきよると周囲を見渡し、了解したと言わんばかりに皮肉っぽく笑った。明かりは少年の懐中電灯と魔法陣の放つ淡い光だけのため、アーチャーが何を見て何を了解したのかは少年にはわからなかつたが、彼は直ぐに了解することになる。

「これはこれはいい加減な召喚をするマスターよな」

「う、うるさいな。俺の勝手だろ」

博物館に展示されている品をランダムで触媒にしていたことが露呈して、少年はきまり悪そうに言い返した。

そんなマスターの様子を見ながら、アーチャーは深みのある、落ちて着いた声音で話す。

「まあ良いわ。ともかく、私はアーチャーのクラスを得て現界した。我が主よ、名を教えてもらつても構わぬか」

「そうだな、俺は土御門つちみかどかずなり一成。あと主って呼ばれるのなんか痒いから

名前で呼べよ」

「そう申すならばそうさせてもらおう。一成で良いか」

「いいぜ。あ、アーチャー、お前の真名教えろよ」

「それは断る」

「ハイ!？」

良いテンポで話ができている矢先に、ビシツと真名開示を拒否されて一成はいつものノリでリアクションをしてしまった。

当のアーチャーは文句を言いだしそうな一成を制して、笑いながら説明を始めた。

「不興を承知で言うが、一成や。そなたから流れてくる魔力から察するに、そなたの魔術師としての技量は高くはなからう。幸いにもパラメータに酷い低下はみられないが、仮にそなたが敵マスターの精神に働きかける魔術によって、あつけなく我が真名を吐かれたら困る。サーヴァントにとって真名は秘するものゆえにな」

「……なんでそんなことわかるんだよ」

「ふ、生前私は呪術にはなじみがあつたようだな、それくらいはわかるぞ」

アーチャーは薄く笑いながら、一成の反応を眺めている。アーチャーの言うことは少なからず一成にとって凶星であつた。土御門は歴史のある魔導の家だが、その代々伝えられる魔術回路は成長の限界を迎えて減退している。両親もそれを承知していたが、祖父はそれを信じたくなかったと言わんばかりに一成を跡継ぎとして魔術を厳しく教えこんでいた。

しかし、結果は無残なものであつた。一成の成長は祖父の期待の半分にも達せず、魔導の家の劣化を明るみにさらけ出すこととなった。中学を境に、祖父は諦めたように一成に魔術を教えなくなった。アーチャーの言は事実であり、怒りは湧かない。あるのは、悔しさ。

一成は息をついて、努めて明るく言った。アーチャーの言葉に怒つても、凶星を指されて逆切れしているだけで、いっそうみじめだ。

「なら……仕方ない、お前に従おう。だけど俺は勝手にお前の真名探すからな!」

「好きにせよ。とはいっても、私も自分の真名が分からぬ」  
「ハア!？」

アーチャーは呑気に直衣から扇を取り出して優雅に煽いでいるが、さらつと爆弾発言である。しかも意味が分からない。

「そなたがアバウトな召喚をしたゆえに、どうも少し記憶が混濁しているようじゃ。まあ一晩二晩すればすつきりすると思うが」

「……マジか」

「大マジじゃ。まったく初めからこれではそなたの人格と力量も知れようと言うものよ」

召喚したてなのに既に駄目出ししかされていない。一成は若干ブルールになったが、的を射られてばかりなので反論もできない。しかし駄目出しをしまくったわりに、呆れてはいるもののアーチャーは不満そうには見えない。

「しかし、至らぬ点を衝かれても逆切れ等しないあたり、良しとしよう。性根は悪い者ではなからう」

一成ははつと気づく。不満げではないアーチャーの視線は、まるで値踏みでもするかのように一成を見ているのだ。当然ながら、英霊は生前に人々の記憶に残るほどの偉業をなした人間である。アーチャーも現界している姿が三十から四十歳の年に見えるため、それ以上の年を重ねていたはずだ。人々の記憶に残るほどの遥か年上の人間が、マスターとはいえたかだか十七の学生をどう見るのか。

ともかくここに長居をするわけにもいかないので、一成はその場は片付けて去ることにした。親元を離れて一人暮らしをしている為、アーチャーが家に居ても問題はない。

(衣冠束帯ってことは平安時代?でアーチャー……那須与一?でもなんかイメージじゃないだよな……)

「一成、誰か来るぞ」

「はっ」

魔法陣を始末しているところで、アーチャーに呼びかけられて振り返ると同時に閃光が目を焼いた。明るさで一瞬視界が奪われたと同時に、「誰だ!」と叫ぶ声が聞こえた。

何かと思えば、懐中電灯を持った警備員が警戒と不振の眼差しで立っていた。一成はそれを認識するや否や、声を発せさせる間も与えず警備員の懐に潜り込んで腹に一撃を見舞った。

物が詰まるような声を上げ、警備員はがくりと一成にもたれ掛る。

「これでよし」

「いやそなた人払いの魔術とかかけておらんかったのか？」

一仕事終えたかのように額の汗をぬぐうそぶりを見せる一成に、アーチャーは疑わしげに尋ねる。

「かけたけど、多分召喚の余波でぶっ飛んだのかもしれないな。この手の魔術ニガテなんだ……けど侵入する時出入り口にいた警備員は峰打ちにしたはずなんだけどな」

「いやいやこの建物大きそうではないか、警備員はそこにいたので全員とは限らんだろ」

「まあ会ったら会ったでまたちよつと……な？いろいろ便利なんだ。友達に教えてもらったんだけどよ」

「どうだといわんばかりの表情で返されて、アーチャーは苦笑いを隠そうとはしなかった。」

11月21日 セイバー召喚

己の人生に後悔はない。生前も、命を惜しんだことは一度もない。だから、己の命が尽きることで自体はどうでもよいことだった。

自分がいなくともこの国は未永く、細石に苔の生すまでであり続けるだろう。

もう、そう願うだけだ。

ここで死ぬことは、戦いの生涯から解放されることを意味する。

己に否はなく——むしろ、安息でさえあった。

——もう、戦わなくてよいのか。

視覚、触覚、嗅覚——すべてが失われていく中、己はその安寧に身を委ねようとして——拒否した。

己の生はどうでもよい。どうでもよいが——只、今死ぬわけにはいかなかった。

一つの誓いを果たすまで、死んではいけない。

彼らの願いを、思いを遂げなければならない。

その為に、己は戦いを続けなければならない。

だから——己は、舞い降りた白鳥さえも縊り殺そう。

「喜べ。お前たちの願いは叶う」

\*

『魔術』とは何か。端的に言えば、魔力を使用して「火を起す」「爆発を起す」などの神秘を行使することである。万能のように見えても、『魔術』は「魔力」を触媒にした等価交換が原則である。また、『魔法』と『魔術』は別物であり、その線引きは「現代の技術で実現できるかどうか」である。「火を起す」ことはライターでもできる「現代技

術で実現可能」な事象であるため魔法ではなく魔術だが、「時間を巻き戻す」ことは魔法である。

例えば現代なら「空を飛ぶ」ことは魔術でなくとも飛行機、気球などを使うことで同じことができるため魔法ではなく魔術だが、五百年前の技術では不可能故に、五百年前の時点では「空を飛ぶ」ことは魔法だったのである。

つまり、時代が下るにつれ魔法は減っていき、魔術が増えていく。特にここ百数十年は現代技術を魔術が後追いつている形である。

既に魔術など面倒な手続きを踏まずとも、現代技術でより容易に同じことが可能である。

ならばなぜ、魔術師は魔術を使うのか。

話は変わるが、『根源』というモノがある。世界のあらゆる事象の出発点となったモノ。ゼロ、始まりの大元、全ての原因。有り体に言えば、「究極の知識」である。

全ての始まりであるがゆえに、その結果である世界の全てを導き出せるもの。

最初にして最後を記したものの。この一端の機能を指してアカシツクレコードと呼ぶこともある。

魔術師とは、この『根源』に至るために『魔術』という手段を使用しているから『魔術師』と呼ばれているだけで、わかりやすく言えば実態は学者に近い。

『根源』を追い求める彼らにとって、魔術行使によって発生する『奇蹟』はオマケのようなもので、欲するものではないのである。

現代において魔術師は研究のために魔術を行使するので、それ以外に一般世間で収入源を持っていることが殆どである。または古くからの家柄で、土地などを多く所有していて得る収入で生活している。

つまり、一般人から見れば魔術師の家とは「古くからある由緒正しい家で、資産家」と見られていることが多い。

ここ春日市の管理者である碓氷家も、二百年以上前より春日に暮ら

すそういった魔導の家柄の一つである。

(マジで憂鬱だわ……帰りたい……今家だけど……)

朝、二階の自室のベッドから起き上がると、碓氷明(うすい あきら)は最初から憂鬱だった。

ぶっちゃけて言えば、三週間前からずっと憂鬱だったが、今日はその憂鬱も極まっていた。

魔導の家・碓氷といえばここ春日の地の管理者(セカンドオーナー)で、その筋では有名である。明は七代目当主(予定)であり、初代は北欧出身で二代目が日本に移り住んで定住するようになった。

彼女の暮らす家は、古色蒼然たる西洋風の屋敷である。庭は広々として石畳が敷かれ、家の門と玄関の間には噴水なんてものもまで備えられている。

異人館の風貌を持った三百坪近い屋敷は、周囲の家からかなり浮いている。

ちなみに『セカンドオーナー管理者』とは、魔術協会より霊地の管理を任された名門の魔導の家系・魔術師のことを言う。春日に魔術師が来て魔術工房を作る際には、この碓氷の管理者の許可を得る必要がある。

現在この西洋風屋敷の碓氷家には明しか住んでおらず、母は他界しており父は訳合って時計塔にいつぱりで、実際の管理者の仕事は明がこなしている。

さて、何故このように明が憂鬱極まりないかといえば、それは三週間前のことに遡る。

町はずれにある教会。教会に至るまでの道脇の花壇は常に手入れがなされていて、四季折々に訪れる人々の目を楽しませてくれる。シスターである神内美琴(じんない みこと)の几帳面さがでているなと、明は常々感じている。ただ、その花々もこのような雨降りしきる曇天の下では精彩を一つ欠く。



春日教会はゴシック様式の教会で、レンガで作られたその建物は尖塔をもち、その上に十字架が立っている。教会らしく、どこことなく荘厳な雰囲気を漂わせる建物だ。

春日の地の管理者として、聖堂教会とは「神秘の秘匿」という共通項で何かと関わる人が多いためここを訪れることもままある。今日は時計塔にいる父と神内美琴から話があると聞いた為ここまで出向いたわけだが、この時点で明のテンションは低い。聖堂教会絡みで呼ばれるのは、大体春日の地で外道に落ちようとする魔術師が出るなど、面倒事の場合だからである。

「どうもお邪魔しまーす」

挨拶をしながら教会の扉を開く。教会の中は天井に空間を感じさせる蝙蝠天井という作りになっており、柱頭という柱が等間隔で両側に並ぶ。入口から通路が伸び、その左右に長椅子が配置されている。視線は自然と内陣の祭壇に引き寄せられる。

ひんやりとした堂内にはすでにシスターの神内美琴と、その父親の神内御雄（じんない おゆう）が祭壇の十字架の前に立っていた。傍らには小さな蝙蝠がふわふわと飛んでいる。

明が勝手に近くの長椅子に腰かけると、それを見計らって美琴が口を開いた。

「よく来てくれたわね、明」

ウィンプル（修道女の頭巾）から少し髪をはみだし、修道服に身を包んだ妙齢の美女が出迎えた。いつも思うが、美琴はあまりシスターらしくなく、むしろ会社でバリバリ働いていそうなキャリアウーマンに近い。

美琴とは十年くらい付き合いになるが、いまひとつ彼女のテンションにはついていけないでいる。

「お久しぶりです。なんだかあんまり聞きたくないけど、早く話を始めてもらってもいい？」

「全くあなたって人は……。まあいいわ、端的に言うと、この春日の地で聖杯戦争が始まるわ。およそあと一か月ってところ？」

「はー。」

わざとではなく、明は間の抜けた声を出してしまった。話には聞いたことがある。

聖杯戦争。

その形態は様々だが、ことに日本で有名なのは冬木の地で行われた聖杯戦争である。しかし冬木の聖杯は何十年も前に解体されたはずだが……。

「もう気づいていると思うけど、明、貴方にはこの聖杯戦争に参加してほしい。貴方のお父様からもそのようにとの指示よ」

明は内心で苦虫を百匹くらい噛み潰していたが、表面上は黙って話の続きを促した。

「今回の聖杯……『第七百五十聖杯』は聖堂教会の調査の結果、すでに贋作との判定が下っているわ。だけど、『願いを叶える』機能を果たすには十分すぎる魔力がため込まれているから、それに引き寄せられる魔術師は多いでしょう」

「つまり『神秘を漏らすことなく』『とんでもないことを願う外様の魔術師を排除して』『聖杯戦争に勝て』ってこと？」

「聖杯が偽物と判断された以上、聖堂教会としては何事もなく終わればそれでいい。今回は魔術協会もその意向のようよ。私と父が今回の聖杯戦争の監督役を務めるわ」

本来聖杯戦争の監督役は、第八秘蹟会——聖遺物管理や監督を行う部署から派遣されてくる。幸いにして神父——神内御雄は第八秘蹟会の所属であったが、仮にそうでなかったとしても監督役を担わされていただろうと美琴は告げた。

冬木の聖杯も真の聖杯ではなく、さらにその模造品とくれば——推して知るべしで、わざわざ別の第八秘蹟会の者を派遣するまでもないということだろう。聖堂教会は、冬木の聖杯ほど春日の聖杯を重く見していないのだ。

明は渋い顔をしていたが、引き受けざるを得ないだろうことを分かっていた。春日の管理者として神秘の漏洩を防ぐことは責任であり責務である。魔術師として根源に至ることの両得が叶うことを明が拒否するとは美琴は考えていないだろう。

明が戦争で勝つなら、その用途は「根源に至る」ことに使われ神秘の漏洩にはあたることをしないことがわかりきっている。

だから美琴、いや教会としては明に勝ってもらえれば都合がいいのである。

「教会で真贋判定の際にわかったのだけど、今回の聖杯は何者かが冬木の聖杯戦争を模倣し、さらに陰陽道のアレンジを加えたもののようなの。そのせいと呼ばれる英霊が日本に縁のある英霊だけになっているそうよ」

「はあ」

あまり乗り気でなさそうな明に構わず、美琴はてきぱきと話を進めていく。美琴がぐいぐいと話を進めていくのも、最早いつもの光景である。

「あと、魔術協会から魔術師が一人派遣されるわ。貴方のお父上の推薦らしいの。より確実にこの聖杯戦争を「何事もなく」終えるためにね。聖杯を巡る最後の争いは貴方とその魔術師であればいいわね」

もしかしての場合の保険というわけだ。美琴の表情は、正統派の魔術師が二人いれば外様の急造魔術師に負けるわけではないと語っていた。

つまり、監督役の神内御雄・美琴とその派遣される魔術師と明でグルになって他の魔術師を倒し、最後は派遣の魔術師と私で雌雄を決する、というのが聖堂教会の青写真のようだ。

「だけど、確か令呪？ ってのが聖杯から配られるんだろうけど、私に宿らなかつたらどうすんの？」

「それは心配には及ばない、七代目」

今まで黙っていた美琴の父親、御雄がゆっくりと口を開いた。今年五十五になるそうだが、身長と精悍な肉体からは十歳程度若く見える、年齢不詳の中年である。美琴もイメージからは修道服が似合わないが、御雄も胡散臭い為あまりカソックが似合わないと思は感じている。

「元の冬木の聖杯システムでは、システムを作り上げた『始まりの御三

家』には優先的に令呪を割り振ることになっていた。それを模倣した今回のシステムでも、同じことが起こるだろう。つまり、御三家のひとつ『冬木の土地を提供した管理者遠坂』が今回では『春日の地を提供した管理者碓氷』と読み替えられる」

「じゃあ冬木の御三家の残り二つ、マトウとアインツベルン？ だっけ？ を読み替えた魔術師も令呪が優先的にもらえるの？」

「そういうことになる。霊器盤によると、既にキャスターのサーヴァントが呼び出されている」

そう、と明は呟いた。美琴の話は以上と告げ、聖杯戦争が始まるまではもつと気軽に教会に来て構わないとにこやかに笑って言った。彼女は蝙蝠が父からの伝言を預かっているから聞いておいてと言いつつ、教会の奥に消えた。

伝言を聞いたところ、召喚のための触媒は父と御雄が手配して二週間後には届けるといった内容だった。

用は済んだため、明はもう自宅に戻ってもよかったのだが外の天気故に、なんとなく講堂内に座ってぼんやりしていることにした。

ぼうつとしていても考えることは一つで、もちろん今の話にあった聖杯戦争である。

美琴の口ぶりの中には「あなたみたいな魔術師にも悪い話じゃないでしょ？」というニュアンスが端々に漂っていたが、正直明には一ミリもいい話ではなかった。正直誰かやりたい人間がいるのなら代わってほしいくらいだ。

(めんどくさいな……)

明が魔術師をしているのはそれ以外に生きる方策がないからであり、彼女には根源への興味が強くない。

それに、時計塔から魔術師が派遣されてくるらしいのだがその人とうまくやっていく自信もない。聖杯戦争で勝ち抜くよりも、冬木の聖杯戦争を模倣した奴を見つけ出して潰した方がいいのではないかとも思う。

(だけど、他の変な魔術師がマスターとして参加したら一般人にも被

害が出るだろうしなあ)

魔術師同士の戦いは神秘の秘匿もあり、一般人の目につかないように行うのが常道である。だが、それに頓着せず、一般人が死のうとうも思わないマスターがいるとしたら被害は甚大なものになる。

管理者として一人間として、それを見逃しておくわけにはいかな

い。  
憂鬱に考えていると、ふと頭上から照明が消えた。

「明よ、不安か？」

神内御雄であつた。いつの間にか近くに来ていたようだ。

思案にふけつてい

るのを、これから迎える戦争に不安を感じているように見られたのかもしれない。  
「いや、ぼーっとしてただけ。まあ、なんとか頑張ってみるから、よろしく」

雨、少しましになったようだし、と言って明は立ち上がった。実は、この美琴の父親である神父の事はあまり好きではない。なぜかと言われれば返答に困るが、見透かされているような居心地の悪さがあるのだ。

すたすたと歩いて入口を押し開き、教会から出て扉を閉めようとした時に、神父の低い声が届いた。

「そう悲観するでないぞ、確氷の影使い。何しろ願いが叶うのだからな」

「……あの、それ本当に願いは叶うの？」

美琴がいないこともあり、明は素直に疑問を口にした。かつて、冬木の聖杯戦争は五度にわたり開催されたが、そのどれもが一つの願いも叶えることもなく解体を迎えている。その聖杯の模造品——陰陽道式聖杯、ヒジリノサカズキにそれほどまでの力があるのだろうか。ましてほかの願いならいざ知らず、根源に至ることは別格の願いである。

「……方が「渦」を観測する可能性があるからこそ、教会は我らに監督を命じ、協会も人員を派遣した。それしか私には言えないが——」

神父自身も、この春日の聖杯が真に願いを叶える——根源に至るか——はわからないようだ。しかし、彼はそんなことはどうでもいいと言わんばかりに笑んだ。

「——願いが叶うまいと叶うまいと、始まってしまったのだ。その過程にこそ意味があるとは思わないか、碓氷の影使い」

「……はあ……う？」

神父の言葉と笑の意味を解せぬまま、明は教会を後にした。  
この神父がよくわからないのは今に始まったことではない。

\*

聖杯戦争の参加を命じられてから二週間経ったが、教会から音沙汰がない。

一応明から連絡を取ったが、神父からは「暫く待て」というだけだった。

そしてさらに一週間経った今日のこの日、明は準備が整ったとの連絡を受けて再び教会に足を運んだ。聖杯戦争まで一カ月と言っておきながら、すでにあと一週間のところにまで迫っている。

ようやく明は父と御雄神父が手配してくれたという触媒を受け取ることができる。ちなみに、令呪は美琴から話を聞いた次の日には無事に聖杯から付与されていた。まるで話を聞くまで待つていたかのような聖杯の空気の読みっぷりに、明は静かに歯ぎしりしていた。

しかし、せつかく足を運んだにも拘らずその触媒は教会のどこにもなかったのである。

肩透かしを食らって不愉快そうな顔をしていた明に御雄が渡したのは、新幹線のチケットだった。今日出発、今日終電で帰宅予定の名古屋までの往復切符。御雄神父とはある神宮の名を指定し、そこで召喚の儀を行うように言った。

本当は触媒をここまで取り寄せたかったそうなのだが、極東の地は魔術協会の威光が及びにくいこともあり父のツテを以ってしても流石にその「ご神体」を外に運び出すことに許可が下りなかったようだ。彼は「向こうで官司に色々注意を受けると思うが、しつかり聞くように」とアドバイスをし、

最強にも等しいサーヴァントが呼べると笑った。

新幹線の時間的に、さっさと行ってさっさと召喚してさっさと帰ってきて教会に顔見せに来てほしいということだろう。

明は自宅に帰り、手早く身支度を済ませ召喚に必要な道具をバッグにつめこんで家を出た。

電車で新幹線の停車駅まで移動し、新幹線に乗り込んだ。駅弁を買って食べながら、おそらく自分が召喚することになるであろうサーヴァントのことを考えた。

ただ、伝承によればかの剣は壇ノ浦に沈んだとかなんとかで複製がいくつもあるようだし、あの神社にある剣で本当に目的のサーヴァントが呼ばれるのか疑問である。

万が一、その剣を複製した職人とかが呼ばれたらどうするのだろうか。明にはサーヴァントをえり好みする気持ちはないが、不安の種は尽きない。

「聖杯戦争ねえ……」

明は神父から聖杯戦争の仕組み（冬木準拠）をおおよそ聞いている。それはさておき、できるなら聖杯戦争に参加などしたくはない。戦いで命を落としかねないことよりも、歴史上の英雄とコンビを組んで戦うことの方が気が重い。

聖杯戦争がはじまり終結するまで一か月、もしかして二週間にも満たない時間だが、歴史上の英雄とよろしくやれるかと聞かれたら答えは完全にNOである。英雄なんてものは、人々が驚嘆する華々しい活躍をすることと引き換えに、だれもが嘆くような悲劇的な終わりがセットになっていることがテンプレートだ。

そんな波乱万丈活動的な生涯を送ったお方と良好な関係が築ける気は小指の爪垢ほどもしない。そして明が召喚しようとしている英霊は、まさにそのザ・テンプレ英雄である。

しかし考えても仕方がない。一般人を巻き込むわけにもいかず、管理者としての責務を果たすためには闘うしかないのだ。せめて体力くらいは温存しようと思いい、明は目を閉じた。

\*

時間があるので、せっかく名古屋にやってきた明は神宮近くのひつまぶし屋でもりもりとうなぎを食べてから神宮に向かった。時刻はすでに夜十時を回っている。明としては召喚は午前一時に行いたいのだが、流星にあちらにその時間まで待たせるのも忍びない。

渡された乗車券的に、終電で帰ってこいということだから、明のベストの時間に召喚をすることは元々無理である。

「何気にでかいよねえ……」

熱田神宮。三種の神器の一つ草薙くさなぎのつるぎ剣を御鎮座とし、熱田大神——天照大神を主祭神とする神宮だ。六万坪の敷地があり、都会の中において樹木が生い茂り自然に溢れている。

夜の闇も相まって、鬱蒼とした印象を強める神社に明は足を踏み入れた。

砂利を踏む音と風に草木が揺れる音、月光の降る静かな夜である。境内ガイドによると、正門からまっすぐ入ってそのまま進めば、御神体の祀られる本宮があるはずである。

碓氷の魔術は北欧由来の魔術のため、明自身は神道や神社には詳しくない。熱田神宮に足を踏み入れるのもこれが初めてである。

普通拝観する場合は、外玉垣とたまがき御門の前までである。そこに、神主姿の初老の男が建っており、明の姿を認めると軽く頭を下げた。



「話は伺っています。どうぞ中へ」

流石に本殿——熱田大神の静まる本殿までは通されず、祭典の多くを行う中重なかのえという広場で待つように言われた。

すぐに宮司が長さ一メートルほど、高さ二十センチくらいの樟でできた箱を大事そうに抱えて持つてくる。

それを明に差し出すが、厳しい声で伝える。

「この箱は、決して開けぬように」

明は静かに頷いた。できれば静かに一人で行いたいのだが、触媒が触媒ゆえに目を離せないのか、宮司が側に佇んだままだ。召喚場所が場所だけに汚すわけにはいけないので、明は自前の白い布を広げ、その上に己の血液で魔法陣を描いていく。適当でいいわけではないが、英霊の召喚はほとんど聖杯が行ってくれるので術者はそのきっかけをつくるだけでよい。

魔法陣の真ん中に、樟でできた箱を置く。

己の中身まで静寂に満たされたような空白の後、明は詠唱を始める。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方

の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

淡い光が徐々に魔法陣に沿ってあふれ出す。かすかに感じるのは大気に含まれる魔力の胎動。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

頭の片隅で、もし召喚に失敗したらどうなるのかという疑念がよぎる。参加しなくていいのかという甘い妄想もあったが、ただサーヴァントなしのマスターとして他のマスターに殺される凶しか浮かばなかった。

——戦うしかない。

「Anfang」

己の太股を己で突き刺す、自傷のイメージにより魔術回路が起動す

る。

肉体と幽体を繋ぎ、生命力を魔力に変換する毎に発生する鈍痛。いつまでたっても慣れるものではない。本宮を護るように生い茂っている木々が、常ならぬ空気に気づき騒ぎ立てはじめる。

明はゆつくりと瞼を閉じる。

「―――告げる」

眼を開けていたら閃光で失明してしまいそうな、魔力の奔流。英霊を召喚する余波でこれだけの前兆があるとは、内心舌を巻く。吹き荒れる魔力風は洪水のようにあらゆる物品を吹き飛ばし、跡形も残さぬ災害のようだ。

それでも明は集中を切らさず、言の葉を紡ぐ。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ―――」

吹き荒れる魔力風と雷鳴の如き圧倒的な光量で、境内を照らし木々をざわめかせる。そのざわめきは人知を超えた存在を迎える歓声なのか叫びなのか――。明は目をつむったまま、己の内側に意識を集中させる。

自分が魔力回路そのものになり、人としての意識が失われていくような感覚を超える。

光と風が不意に収まり、今のざわめきが嘘のように境内が静まり返る。もう、眼を開かずとも、圧倒的魔力を秘めた存在があることを明は感じ取った。

すでに目の前には人の理を超えた存在がましましているに違いない。明は恐る恐る目をひらく。

しかし、予想を裏切って目の前には影も形もなかった。

「―――あれ？」

辺りを一通り見回してみたが、宮司と明以外に誰の姿もない。明は

思わず宮司の顔をまじまじと見つめてしまったが、彼に何がわかるはずもない。自らの熱気も収まり、寒気がじわじわと這いあがってきたその時、右手の本殿からものすごい音が轟いた。例えるなら高所から人が落下した感じだろうか。

宮司と明はお互いに顔を見合わせて、本殿を凝視した。すると、閉じられた扉が内側から開かれようと、がたがたと動いている。鍵が外れるかと思いきや、扉は唐突に蝶番ごと砕かれて階段から転げ落ちた。

厳かに閉じられていた本殿の扉は見るも無残に破壊・解放されてしまった。

そして、本殿の中から姿を現したのは——白っぽいマントに身を包んだ小柄な少年。

彼は明と宮司を一瞥し、何事もなかったかのように階段を下りて、魔法陣の中央に立った。

「盟約に従い参上した。これより俺なる剣はお前と共にあり、お前の運命は剣と共にある。——ここに契約は完了した」

明よりも五センチくらい低い背に、少年とも少女ともつかぬ中性的な美貌の少年。

風に翻ったマントの下には、襟の立った簡素な衣袴を纏っている。首元は衣袴の上からリボンで結ばれている。腰には青銅のように青く輝く鞘に収まった——恐らくは剣——を佩いている。

鬱蒼とした神宮で、清かな月光を背に受けて佇んでいる。身に纏っている衣袴は内側から光るように白く美しい。濡芭玉の黒、というべき錦糸のような髪が輝く。同じく漆黒の瞳はどこまでも凜冽であり、射抜くような鋭さを以って明を見つめている。男女の別を超えた、神がかった麗しさがそこにあった。

明は、ぼんやりとその少年を見ることしかできなかった。

「問おう。お前が俺のマスターか」

「……あの、何であんなところから出て来たんですか」

たつぷりと間をおいて出て来た言葉がそれであった。明は我に返ると、内心しまったと舌打ちした。

ぼーっとしていたせいで完全に場違いな質問が口を継いで出た。

しかし、少年は何も戸惑うことなく答えた。「知らない」

「あ、そ、そうですか」

混乱しながらも、明は徐々に落ち着きを取り戻してきた。

自分の得意とする時間でもなく、かつ自分に縁もゆかりもない場所での召喚である。何か間違えてしまっても不思議ではない。少年は、再び同じ問いを繰り返した。

「問おう。お前が俺のマスターか」

「はい……えっと、セイバー？でいいんですか？」

「ああ。セイバーのクラスを得て現界した」

これが彼の東征の皇子なのだろうか。服装からみてしっかり古代の人物であるように見える。

しかし今起きたミスもあるため、明は真名を聞いてみることにした。

「えーっと、真名を確認させてもらってもいいですか？」

「？触媒もあるようだが、俺と知って呼んだのではないのか？」

「あ、いや知ってるけど確認のためです。もしかしたら赤の他人かもしれないです」

セイバーは納得したように頷き、冴える声で真名を述べる。

「我が真名は日本武尊。やまとたけるのみこと間違いはないか」

「あ、うん、間違いはない」

日本武尊——十二代景行天皇の皇子。熊襲のクマソタケル兄弟、出雲のイズモタケルを討ち果たし大和に帰ったのちすぐさま東征を命じられ、荒ぶる神々や国造を従わせ帰途につく。しかし伊吹山の荒ぶる神々を討伐しようとしたとき、草薙剣を持っていかなかったがために神に呪われて病を得て、ついに大和へ帰り着くことができなかった

悲劇の皇子。

日本がまだ今の形をとっていない時代。その一生を国の剣として捧げ、国土平定に尽くした真正の英霊——！

(予想はしていたけど、英雄の中の英雄みたいなのが来たな……)

パラメータを見てみると運は低いが軒並みAかBで、最優のサーヴァントの名に恥じないセイバーである。

ともかく、ハプニングはあったものの召喚は無事に済んだ。早く帰りの新幹線に乗って、教会の監督役たちに紹介しなければならぬ。明は聖杯戦争を行う地にいまから新幹線で行くことを伝えると、セイバーは静かに頷いた。

サーヴァントは召喚された時に聖杯から現代の知識を与えられるため、セイバーは新幹線というモノの意味を分かっているようだ。

宮司に御神体を返して礼を言ったが、宮司はずっとハトが豆鉄砲を食らったような顔で明とセイバーを見ていた。そして本宮を出て振り返ると、なんと宮司がこちらを拜んでいた。というかセイバーを。当の本人は一瞥もしていなかったし、本殿の扉は壊れたままだったが。

それらを全て無視して、セイバーは森閑とした神社を見渡した。

「ここは、尾張か」

「あ、はい」

セイバーはそれ以上何も言わず、明の二歩後ろを黙って歩いている。

それにしても一体サーヴァントに対してどういう風に接すればいいのかと明は頭を抱えた。普通の使い魔なら適当い加減だが、相手は古代の英雄でしかも皇子ときている。

現実で考えれば、初めて会った人間には丁寧語を使うのが普通なのだから、それで問題はないはずだ。

明は木々のざわめきのみがある神社を歩きながら、明は腹をくくりなおした。

神社の出口まで戻ると、大通りに面しているため行きかう車が多く

ある。振り返ればセイバーがいる。

流石に旅装のマント、衣袴の格好でここから先を歩かせるわけには  
いかない。

「あの、セイバー。霊体化してくれませんか？ここからは魔術とか知  
らない人も一杯いるんで…」

何故かセイバーは黙りこくっている。何か気に障ることも言っ  
たかと明は不安に思ったが、顔を見る限り違うようだ。

「マスター」

「はい」

「……非常に言いにくいですが、俺は霊体化ができない」

「え!?……あ……」

明は素っ頓狂な声を出しかけたが、すぐに先ほどの召喚が脳裏によ  
ぎった。あれが召喚のミスによるものだとすれば、霊体化ができない  
のもその影響の可能性がある。明は腕を組んでしばし考え込む。

霊体化できないということは、常に実体化するだけ余計に魔力を  
持つて行かれ、魔力の回復を優先したい時にも魔力の消費を抑えるこ  
とができないということだ。要するに、デメリットしかない。

「あー……なんか、ごめんなさい」

「何故マスターが謝る」

「多分、私がか何か間違えたんだと思います……」

恐る恐るセイバーの様子を窺うが、怒っている様子はない。とい  
うか、先ほどから表情は変化していない。

彼は静かに首を横に振った。

「気にしなくていい。それより、ひとつ聞き忘れていたことがある。  
…マスター、名は何と言う」

「え……あ、碓氷明です」

まさか名を問われるとは思っていなかった明は、妙に挙動不審にな  
りながら名乗った。サーヴァントとマスターの間にあるのは、利害関

係である。主、従といいながら主従関係は無きに等しい。

サーヴァントは聖杯を必要とするからマスターに従うのである。名前を知らずとも、戦いをすることはできる。

「わかった。それと、俺に敬語は必要ない」

名を問う、ということはマスターを単なる現界の為の依代以上のものと見なすことだ。

明は、少しだけこのサーヴァントとやっていけそうな気がした。

\*

終電の新幹線に乗った時にはすでに午後十一時を超えていた。セイバーが霊体化できないという予想外の事態ゆえに、明は実費でセイバーの新幹線代を払わねばならなくなった。幸い混むような時ではなかったため、明の隣の席を買うことができた。

ちなみに衣袴で歩かせるわけにはいかないのです、セイバーは明のロングコートをすっぽり着ている。彼の足元は現代のロングブーツに近いため、違和感はない。変わりに明は晩秋の夜の寒気に身をさらすことになったが。

新幹線が目的の駅に到着するまで二時間はかかるので、到着は深夜になる。新幹線に乗っている間も特に会話はしない。明はなが餅を食べべており、セイバーは席につくなり眠り始めた。

目的の駅に着くと、ここから春日駅はほんの二駅ほどだがすでに終電はない。同じく降車した客がすっかり消え、ターミナル駅も人気はなくなりつつある。タクシーでも使うか、と明は駅を出てからセイバーを呼ぶ。

コートをセイバーに貸しているため、明は相変わらず寒空の下震えている。

「目的の駅がここから二つ先なので、今からタクシーに乗ります」

「……距離と方角はどっちだ、マスター」

「えーっと、東西南北だと南東？に十キロくらい……」

「承知した」

そう言うなり、セイバーは明の手を取って駆け出す。あつ、と声を上げる間もなく明は引きずられるようにして走り出す。セイバーの足についていけなくなろうとしたその時、ふわりと明の足が地面から離れた。

まるで宙に見えない階段でもあるかのように、セイバーは空を上る。見下ろせば、街灯の明かりと未だ眠りにつかぬ家家の明かり。空には、月と星。

一定高度まで上がると、セイバーはそれこそ鳥の様に滑空を始めた。

「言いそびれていたが、俺に騎乗スキルはない。その代わりにこの飛行スキルだ。下にその駅が見えたら教えてくれ、マスター」

\*

午前二時。セイバーと明は教会の扉を叩いた。非常識な時間なことは百も承知だが、あちらも召喚は真夜中に行うと承知のはずである。それですぐにサーヴァントを連れてきてほしいというならば当然このくらいの時間になるわけだ。

案の定、御雄と美琴は嫌な顔一つせずに教会に迎え入れてくれた。明は足音荒く、教会の中に入り長椅子に座る。

「……どうしたの明、なんか珍しく怒っているように見えるのだけど。そしてサーヴァントがなんか不潔っぽい気がするんだけど」

基本恬淡としている明の珍しい姿に、美琴が驚いて声をかける。

明は思い出さたくないと言わんばかりにそっけなく言い放つ。

「怒っているんじゃないやなくて理不尽な恐怖体験に打ち震えているだけ……と、それはともかく、召喚したから連れてきたよ」



ほら、と明は掌でセイバーを指し示す。御雄はセイバーに問う。

「セイバー、あなたは日本武尊で相違ないか？」

「それに答える前に一つ聞く。マスターの言うままについてきたが、お前たちは何者だ」

「明、説明していいいの？」

美琴は呆れたと言わんばかりに肩をすくめた。明はぼつの悪い顔をするが、説明を怠っていたのは事実であり釈明の余地はない。仕方がないわね、と前置きしてから美琴は簡単に自分と御雄の身分を明かした。

聖杯戦争を見届ける監督役であり、暗に味方であることを強調して説明をした。

セイバーは探る様に礼拝堂を一瞥し、最後に明を見てから目を閉じた。

「……お前たちの言うとおり、俺は日本武尊だ」

その返答を以て美琴と御雄は了承の証を見た。

一步セイバーに近づいた御雄神父は、厳かに口を開いた。

「もう一つ聞いておきたいことがある。セイバー、貴方が聖杯にかける望みは何か」

そういえば召喚後の衝撃ですっかり聞くのを忘れていたと、明は思い返した。明としては世界の破滅を願うようなことでなければ何でも構わないのだが、このセイバーに限ってそれはないだろうと思っていたから聞き忘れたのかもしれない。何しろ、彼は護国の英雄である。

セイバーは腕を組んで、鋭いまなざしのまま静かに口を開く。「ない」

「ない？」

思わず明が聞き返す。だが、彼の眼が冗談ではないと語っている。

「聖杯にかける望みはない。俺の願いは、他の六騎のサーヴァントを皆殺しにし、俺が勝ち残ること。聖杯はマスターの好きにすればいい」

い」

深夜の教会に、さらなる沈黙が下りる。セイバー以外の誰もが、セイバーの言葉が嘘ではないとわかった。

「この大和で最強なのは俺一人。それ以外は認めない」

短い間の後、セイバーは明に振り向く。

「俺もマスターに問いたいことがある。聖杯はマスターの好きにしてもらって構わないが、それを「この国を滅ぼす」などの類に使ってほしくはない——俺はこれでも護国の英霊でもあるからな」

もしその類の願いだったならばどうなるか、セイバーの目の冷たさが全てを物語っている。

明は背筋に冷や汗を流しながらも、平静を装って答える。

「私の願いは根源に至ること。別にセイバーの危ぶむようなことは考えてないから安心して」

「私たち聖堂教会は聖杯戦争が『何事もなく』終わることを希望しているわ。セイバーと明の願いなら、私たちのその目標も達成できる」

明に続き、美琴が監督役も味方だとセイバーに伝える。

セイバーは何か思うところがあるように目を細めたが、ようやくその顔に笑みを浮かべた。

「……ならば今しがたの生、俺はお前の剣となろう」

「それはともかく、明はなんでここに来たとき怒ってたの？」

セイバーと意思の確認したところで、改めて美琴が訪ねた。

セイバーは途端にきまり悪げにわかりやすく目線を逸らしたが、明はもう恬淡としたものである。

「ああ、セイバーはスキルで空を飛べるんだけど、いきなり私と空を飛んだの」

途端に弛緩した空気が場に流れる。御雄と美琴は全てを察して生ぬるい笑みを浮かべている。空気に耐えかねたセイバーは言い訳じ

みた弁解を始めた。「いや、俺は知らなかったのだ、マスターが高所恐怖症だとは……………」

「いやさ、さつきも言ったけど知らなかったことが問題なんじゃないか、なんで飛ぶ前に『俺飛べるけど飛びますよ?』とか確認をとらなかつたの?そっちが問題なの!」

セイバーが飛行していると、握られた手が異常に汗ばんでいることに気づいた。どうやらそれは自分ではなくマスターの脂汗のようで、何かと思つたらマスターが顔面蒼白になって震えているではないか。

体調を悪くしたのかと思い、セイバーはあわてて着陸すると、あまりの恐怖で理性が半分飛んでいた明に猛烈に怒られたのであった。

まずは丁寧に対応しようとして決めていた明の心がけは一瞬にして飛んで行つた。

セイバーも「敬語はいらない」と言っており、彼女は完全に開き直つてしまつていた。

御雄は後ろを向いて笑いを堪えているが、美琴はわかりやすく噴出した。

「まだ治らないの、明」

「美琴と知り合う前から……………十年以上高所恐怖症やつてるんだよ、そう簡単に治つたら苦労はしないって」

ぼそぼそとうらみがましく呟く明を、美琴は面白そうに見ている。明と美琴の付き合いは十年程度だが、初めて美琴と出会った時にはすでに高所恐怖症だったのだ。

「小さい時高いところから落ちたと聞いたけど」

「そう。っていうか思い出して怖くなってきたからもうやめようこの話。セイバーも召喚したし、今日は帰るよ」

「ああ。〴〵苦労だった」

まだ笑いを含んだ御雄と美琴の声を背に、明はセイバーをひきつれて教会を後にした。

11月22日 準備期間①

(でも変な話だなあ)

明は半覚醒状態のまま、自室にてパジャマから普段着に着替えつつ思った。聖杯戦争の話が聞かされた時から疑問だったのだが、この地で戦争が行われるならば何故管理者確氷である明はそのことを知らないのか、ということである。

現在この地の管理者は明であるが、そうなってからまだ八か月ほどしか経過していない。

それまでは明の父が管理者の役目を果たし、明はその手伝いだった。しかし明が高校を卒業した時分に諸事情あり、急ぎよ父が時計塔に召喚され、代理を彼女がすることになった。

よって明はまだ管理者代理であり、引継ぎが確実になされているわけではない。

しかしそれ以前から父はひと月の半分は留守にしていたので、管理者の仕事で困ったことはない。

(……ちゃんと管理者になる時に伝えるつもりだったのかな？急に始まるわけじゃないからとか……でももしかしたら根源に至れるかもしれない戦いなのに)

もしかしたら、父も寝耳に水だったのかもしれない。

しかし果てしなく事情は怪しいが、始まってしまったものは始まったのだ。

父は時計塔に行っている為イギリス内には確実にいるだろうが、放浪癖がある為にいつ捕まえられるかわからない。手紙を出したのだが、返事がいい加減欲しいところである。

明は薄紫のブラウスにスカーフ、ワインレッドのスカートにタイツを身に着けた。寝癖が若干ついたままだが、どうせ今日は人に会わないのだから気にしない。

しかし、自室のドアノブに手をかけた時にやっと思い出した。

「……人に会うや」

完全に寝起きで忘却していたが、昨夜はサーヴァントの召喚を行ったのだ。いつも以上に寝起きが悪いのは、サーヴァントに魔力を供給することに体が慣れていないせいだ。

昨夜は高所恐怖症で半狂乱していた後はもう知らんと言わんばかりにぞんざいな口を利いた明だが、一晩明けてみれば正直やつてしまった感がある。

しかし、これから戦いに臨むというのに遠慮はしてられない。

取り合えず二階から階下に降りると、人の気配がある。明にとってはこの家に自分以外の人の気配があること自体に違和感がある。ホールに降り立つと、リビングにセイバーの背が見えた。

リビングの百五十センチの高さの本棚には魔導書は置いておらず、普通の大衆小説や父用の海外の地図が並べられている。明はそつとリビングの入り口から様子を伺うと、彼は五段ある本棚の本を、上から眺めていき、時たま引き抜いて中身をばらばらと見ていた。そしてすぐに元あった場所に戻している。

何故か雰囲気成真剣なので、明は声をかけるのを躊躇っていたが、セイバーは急に振り返った。

「何か用か」

「あ、あるけど急ぎじゃないから。読みたかったら読んでからでも」

「特に本が読みたかったわけではない」

「あ、そう……」

リビングの入り口と奥という妙な空間をおいて、さらに微妙な間が空いた。明はそうだと前置きしてから言おうとしていたことを伝えた。

「今日、この街の散策に行かない？」

監督役の御雄、美琴によれば現在霊器盤に反応のあるサーヴァントはセイバーの他にはキャスターのみらしい。ということは、全サーヴァントが召喚されて本格的に聖杯戦争が始まるまで、若干の猶予が与えられたということだ。この猶予を無駄にする手はなく、さらにキャスター陣営が既にこの地にいる可能性が高いため、遊んでいる手はない。

戦場となる春日の地の地理をセイバーに把握してもらい、少しでも戦闘を有利に進める一助にしたい。そのことを説明すると、セイバーは素直に了承した。

「俺もそれを頼もうかと思っていた。それに、現代の大和を見るのも悪くない」

明は思わず笑みをこぼしたが、そこで問題になるのは衣服である。召喚時の旅装マントに衣袴とロングブーツではあまりにコスプレ染みている。セイバーもそれは自覚していた。

「そういうわけでマスター、出かけるにあたって服を拝借したい。この服では少々浮くと思う」

「いや霊体化……そっか、できないんだ」

消費魔力のことばかり考えていたが、霊体化できないと戦闘以外の時でも地味に困る。

さて、セイバーに服を貸すにしても男モノは父親のものがあるが、セイバーは女の明よりも背が低いためサイズが合わない。となると、明のものを貸し出すしかないわけだが、それは勿論女ものである。セイバーは姿こそ十五、六だが、中身は享年を考えれば二十代後半のはずである。しかし、セイバーは事も無げに言った。

「?明のものを貸してくればそれで構わない」

\*

(これが男の娘ってヤツか……)

生ぬるい気持ちになりながら、明は右を歩くセイバーを眺めた。女ものとはいえ、ジーンズとTシャツなので全く女々しいファッションというわけではないが、きつと女々しいファッションでも似合うのだろうと思わせる美人である。

春日の主要な霊地——聖杯を降霊できると思われる土地——は、主に三つ。一つは碓氷邸から車で一時間ほどの場所にある、大西

山。標高は四百メートル程度だが、周囲を鬱蒼とした森に囲まれている山だ。二つ目は、ここ碓氷邸。最後はここから徒歩で二十分ほどの場所にある土御門神社。土御門神社は山というほどではないが、ちよつとした丘の上にある。霊格としては最初に述べたものほど高い。まずはそこに案内しようかと思つたが、服など入用であることもあり、それ以外の場所、戦場としやすそうな場所から案内することになった。

晩秋の晴れた金曜、実に過ごしやすい陽気の中、明とセイバーは徒歩で市の中心地である春日駅前に着した。元々ホーム五面、十線の電車を通る規模の大きいターミナル駅なのだが、大改築が終了したため駅ナカ事業・駅チカ事業が拡大されて一つのショッピング施設の様相を呈している。近くには五十階建ての春日イノセントホテル、会社の所有である四十階建ての林ビルなど、高層の建物も多い。

セイバーは世の中にこんな人がいたのかなどと呟きながら、御上りさんさながらにきよろきよると周囲を見回している。

「ここがここらで一番大きい春日駅。私の家から徒歩で三十分つてところで、バスとかほかの私鉄使ったほうが早いんだけど……大体入用のものは揃えられるよ。セイバーの服、やっぱりあった方がいいと思うから買おう」

「……マスター、一つ寄つてほしいところがある」  
「？」

「その、地図が置いてあるようなところはないか」

「もしかして、さつきは地図探してたの？」

セイバーは頷いた。なんとなくやりたいことを察した明は、それを否むことはない。

しかし最初はセイバー用の服を整えないとならず、駅近くにあるどの世代でも着れる服を売っている店に向かった。本人はあまり興味がないようで、明が適当にチョイスしライダースジャケットを見繕つた。

ただセイバーが「なんだこの素材は！伸びる！動きやすい！これが

現代の戦装束か！」とジャージ上下を着てハッスルしていたので、仕方なく明はそれも購入した。

その後、二人は駅ナカに新設された書店に向かった。

駅の中だけあって、ここは常に本を物色する人間でなかなかの活況だ。明の案内に従って人を避けながら、セイバーは地図の棚にたどり着き真剣な面持ちで地図を眺め始めた。

「……俺の時の大和は奈良県、というのか。これか……この、端っこの沖繩とかいうのも今は大和で、東国よりはるか北も大和なのか」

その面持ちがあまりにも真剣で、ある種鬼気迫るようにも見えて、明はその姿を見ていることだけしかできない。

「千年以上経っても、大和はまだあるんだな」

大和が現代よりももつと小さかったころの話。

東国へ遠征し、数多の神々を従えた日本武尊はその征討の過程でこうは考えなかっただろうか。

——今、大和は大きくなっているけれど、いつか、立場が変わり討たれる日もくるのではないか。

国は作られ、そして滅ぶ。それは当然のサイクルで、日本武尊も今ではなくとも、己が死んだ後にそのような時が来ることを考えただろう。だから、聖杯から現代の知識を与えられた際には驚愕し、それを疑ったのではないか。

そして、どうにかしてそれを確認せずにはいられなかったのか。

——「その、地図が置いてあるようなところはないか」

大和など、世界から見ればはるかにちつぽけな島国だったということも衝撃だろう。

だが、それよりも悠久とも思える時を超えて、彼の愛した国がまだあるということの衝撃。

その事実が、この国の剣として生涯を捧げたモノにとって、すでに奇蹟にも等しいことなのかもしれない。

セイバーは、いきなり本の前に差し出されたハンカチをみてきよと



んとした。「……マスター？」

「あのさ、イイ感じなところ悪いんだけど流石に日本地図ガン見しながら黙って泣く美人つて相当怖いから」

はっとセイバーが周りを見ると、怪訝な顔で明とセイバーを見る人々。

うつかり目が合うと、気まずそうに目を逸らす。

「すまない、もう用は済んだ」

セイバーは本を閉じ、渡されたハンカチで荒く涙をぬぐった。

明は何と話しかけるべきか迷った時に、ちょうど時計が目に入った。

「……そろそろお昼だし、ご飯にしない？」

「サーヴァントは食事を必要としない」

魔力さえあればサーヴァントは食事も睡眠も必要としない。折角だからごちそうしようと思った明は少し威勢を挫かれたが、自分の空腹も確かである。

「私はお腹空いたから食事したいんだ。セイバーは食べなくなかったら食べなくてもいいから、いいかな？」

「ならば行こう」

駅ビル「ウエルフェア」の中にあるレストラン街で明の好きな店がある。エスカレーターで昇って行き、フロアすべてが飲食店であるレストラン街に入ると明は一直線に目当ての店に向かった。

入口にはガラス張りのウィンドウに模型が展示されている。ウナギの専門店「うな咲」である。

二人と告げて、店員に案内された二人掛けのテーブルに案内される。木製の椅子に座布団を置いたそれに腰かけたが、なぜかセイバーが青い顔をで席に着いた。店員がすぐに熱いお茶とおしぼり、メニューを運んできた。

セイバーはあたりを警戒するようにきよろきよろを見て、明に小声で告げる。

「……一つ聞きたいが、現代では蛇を食べるのか」  
「は？」

何を言っているのかと思っていると、セイバーは指だけで横の水槽を示した。厨房と客席の間には大きな水槽——生簀があり、そこにはうなぎが泳いでいる。

「現代人は狂っているな……明、悪いことを言わないからやめておけ。呪われても知らないぞ」

真剣そのものの表情で言われて明は反応に困ったが、言われてみれば蛇はセイバーの天敵でもある。伊吹山の神退治において、蛇に変化した神を神の使いと勘違いし、「あとで殺そう」と放言したために神の怒りを買ひ、呪われて病を得、死に至った。

明は店員を呼び、うなぎを二人分頼んだ。セイバーの目は生簀から思い切り逸らされたままだ。

「あれは蛇じゃないよ。うなぎっていう生き物」  
「うなぎだろうがへびだろうが、太くて長くてにゆるにゆるした生物にロクなものはない」

セイバーは頑として見たくもないと言いたげな顔をしている。静かに待っているときに、入れ替わり立ち代わり出ていく客がちらちらとセイバーを見ていくことに気づいた。

余計な造作をせず、素の造詣だけでここまで整っているのは珍しいのだろう。

(確かに完全に目の保養なんだけどね)

明はしみじみと感じ入っていると、たれと焼けたうなぎの香りを引きつけて店員がうなぎを運んできた。目の前に二つ並べられたうなぎの片方を、セイバーへ押し出す。

濃いきつね色に焼かれたウナギに艶やかなタレが塗られ、きらきらと輝いている。

「蛇じゃないから食べてみて。不味かったら私が食べるから」

「……思ったより蛇ではないし、マスターがそう言うなら」

セイバーは恐る恐ると言う様子だったが、形が蛇でないことが幸い

したのかそろそろと箸をつけた。明はいつものようにおいしくいた  
だく。セイバーは一口をゆっくり咀嚼してから、静かに感想を告げ  
た。

「……………うまい」

「ね？」

「どうやら形がアレでなければ大丈夫なようだ」

すっかり味を気に入ったらしいセイバーはもさもさとうな丼を食  
べ続けていたが、鰻と同じくらいついてきた漬物も気に入った様子で  
ある。素晴らしい転身振りに明は笑った。

「そんな子供の好き嫌い解決法みたいなのでいいんだ……………」

二人ともすっかり食べ終えて、次はどこへ行くかを考える。

霊地は夜、または明日以降に訪れることにしているから、まずは戦  
場となりうる場所に足を運ぶことにした。

バスを利用して十分ほど移動し、海の近い工場地帯に至る。春日市  
は市の西側を海に面しており、そこには規模の大きなガス工場などだ  
けでなく海運の倉庫がひしめいている。春日市中心からでも、背の高  
い煙突は伺われていた。海風が強く、ばさばさと明の髪がたなびく。  
海沿いを歩き、遠くに製油所の近くなのだろうか、大きなタンカー  
が停泊している。もっと駅よりの方であれば、海浜公園もある。

人払いの魔術はかけるべきだが、ここならば市街地で戦闘が行われ  
るよりは遥に人的被害なく戦えるだろう、と明は考えた。と、そこま  
で考えてセイバーにもそのことを伝えなければと口を開こうとした、  
その時。

「マスター」

ぶらぶらと先を歩いていたセイバーが振りかえる。すでに明の私  
服ではなく、先ほど購入したライダーズジャケットとズボンに替えて  
いる。海風が、彼の長めの前髪を弄って表情を隠す。

「一つ、確認しておきたい」

「何?」

「俺は勝つためには手段を選ばない。マスターの暗殺もだまし討ちは当然、人を食って力を得ることにちも吝かではない」

セイバーの漆黒の瞳は、はつきりと明を捉えていた。冗談でも虚偽でもなく、彼はまさに本気だった。武士道やもののふの道というものの類が生まれる前に生きており、かつその伝承を思えばかくもあらんという言葉ではあつた。

「俺たちサーヴァントなるものはどう取り繕おうと、畢竟の魂食いの類だ。力の源は魂、もしくは精神」

サーヴァントはマスターという依り代と、マスターから供給される魔力により現界している。サーヴァントは食事や睡眠を必要としない代わりに、エネルギー源はマスターの魔力——つまり、第三要素(魂)ないしは第二要素(精神)を必要とする。エネルギー源は多くて拙いということはない。

人を殺して回り魂を得ることで、より多く魔力を確保し無駄遣いできるともなる。

「……私の魔力じゃ足りない?」

「そのようなことはない。ただ多いに越したことはないという話だ」

「もし、私が「やれ」って言ったらやるの?」

「俺に否はない」

セイバーは嘘をついていない。彼はきつと明の一言さえあれば、今夜からでも一般人を殺害するだろう。

明は空寒ささえ覚えたが、今ここで明の意思を確認していると言うことは、明の意思に従う気があると言うことだろう。

明は明確な意思を持って、己がサーヴァントに命ずる。

「一般人を殺してまわることは禁止する。あと、できるだけ戦いに彼

らを巻き込んではいけない。宝具の使用だって時と場所を考えて」

明はこの土地の管理者でもあり、神秘を一般人から秘匿する責務も負う。同時に、神秘さえ秘匿できれば、全く関係のない一般人を巻き込んでかまわないと思うほど、骨の髄まで魔術師となつてはいなかった。

だが、魔術の行使やサーヴァント同士の戦いを一般人に目撃された場合、可及的速やかに口封じを行い抹殺しなければならない。それが『神秘の秘匿』を旨とするこの世界の習いである。

しかし、この戦争に参加した以上、マスターさえも殺さずに綺麗に事が済むと考えるほど、明は能天気にもできていない。

「……マスターの暗殺は、時と場合を選んで」

白い鳥が紺碧の空を飛んでいく。晩秋の風が、一陣走り抜ける。

セイバーは怒る事も反論することもなく、静かに頷く。

「わかった。マスターがそういうのなら俺はそれに従おう」

「そっか、それはよかった」

明はほっと胸をなでおろし、微笑んだ。セイバーは首を傾げていたが、明はそれでも笑った。日本の著名な英雄、と聞いて一緒に戦えるかと不安を抱いていた。明は元々人見知りの気がある上に、相手は生きた時代もなにもかも違う。使い魔といっても、その力は人知を逸した存在であり、普通の使い魔の様に無理やりいうことを聞かせるのも憚られる。

しかし、目の前にいるセイバーは傲慢さや偉そうなところもなく、しっかりとマスターと意思疎通を試みようとしてくれている。

それに、まだその力を確認してはいないものの、者の彼の名は日本武尊——日本史上に燦然とその名を残す、紛れもなき大英雄。

その力を以ってして、この聖杯戦争を何事もなく終わらせてみせる。明は静かにそう誓った。

「……風が強くなってきたな、そろそろここを離れるか」

「そうだね。じゃあバス停に戻ろうか」

「あのバスとかいう鉄馬を使わなくとも俺の飛行スキルで「ごめんなさい却下」

セイバーは目に見えてしゅんとしてしまった。どうやら彼は飛行スキルが甚くお気に召したとようだが、明には到底許容できない。

「セイバー一人で飛んで帰っていいよと言いたいところだけど、今まで明るいから。人に見られて、明日の朝には三面記事を飾りかねないからやめて」

「それはわかったが……マスター、何故そんなに飛ぶのを嫌がるのだ」「教会でも言ったと思うけど、昔高い所から落ちて大けがして以来ダメなの！こればかりはどうあがいてもダメ」

セイバーはまだぶつぶつ言っていたが、明はできるだけ無視してバス停への道を歩き始めた。

11月23日② バーサーカー召喚

そうだ。これは嘘なのだ。全て幻で、幻が解ければ私はいつものように父と母に魔術を教えられて、お前はよくできた子と褒められるはずなのだ。

そうだ。これは偽物の世界なのだ。本当の世界に戻れば、私はいつものように父と母に魔術を教えられて、お前はよくできた子と褒められるはずなのだ。

そうだ。これは悪い夢なのだ。朝になれば私はいつものように父と母に魔術を教えられて、お前はよくできた子と褒められるはずなのだ。

そうだ、これは、これは、全て、虚構——。

「!!」

かはつ、と乾いた咳と共に少女は眼をさます。胸に熱いような痒いような刺激があり、また発作か、とうんざりする。しかし、目を覚ましたことで己の望んだ筈の「悪い夢から抜け出す」ことができた、はずだった。

しかしそれこそ少女の欲した虚構だった。

今の夢も、現実もすべて地続きになつて、起きても寝ても少女の精神を苛んだ。たとえこの体に残された時間がわずかでも、小さなこの誇りさえあれば恐怖も乗り越えられると信じていた。

だが、そもそも、そのような「誇り」など最初からどこにもなかったとしたら。

少女は脂汗で張り付いた寝間着を厭いながら、白い布団の上でもがいてようやく正気を取り戻した。夢だと気付いてわずかにほんの一瞬安堵するが、その安堵こそ夢の様に儂いものだと自覚する。

自分に残された時間はごくわずか——。そのことを医師、両親から知らされた——正確に言えば、三者の話を偶然聞いてしまったのは——一週間前のことだった。

現代の医療では直すことが難しい難病で、持ってあと半年。知った直後は自分の事とは思えず、人の悲劇を眺めるような心持だったが、それでも体がそれはお前のことであると教えた。咳に血が混じり、常に体がだるい。前兆が目立つ病気ではないこともあった。そして生来我慢強い質の少女が、時たま感じる体の違和感を無視し続けた結果であった。

しかし明らかな体の変調、悲鳴にも拘らず、彼女の意思はある一点に向けて明確にあった。

聖杯戦争——何でも望みをかなえると言う万能の釜を巡り、七騎のサーヴァントと七人のマスターによって行われるバトルロワイヤル。およそ一か月前、まだ少女が己の命の短さを知る前にこの春日の地の聖堂教会から、春日で聖杯戦争が行われると言う知らせが舞い込んだ。聞いたときは魔術師として興味をそそられたが、殺し合い、と聞いて怯み、また参加するなら自慢の両親の方が実力もあり向いていると思っていた。

だがそれはすべて過去の話。どうせ息絶えてしまうならば、いや、生きながらえたいのならば、戦わなくても死ぬのならば——少女が何を熱烈に欲しているかは明白である。

「……？」

少女は自分の右腕に軽い違和感覚えた。胸が苦しかったのは発作が起きたからだだが、腕が痛んだことはない。むずむずと熱い、しかし不快ではない疼き。少女は壁と接した方のベッドの端により、白いカーテンを引いた。差し込む月明りの下、違和感のある右腕の袖を捲りあげた。すると、怪我をしたわけでもないにかかわらず、赤い文様のような痣が浮かび上がっていた。少女は一つの可能性に思い至る。

——令呪。

聖杯が自身でマスターにふさわしいと選定した者に、三画の「令呪」という聖杯戦争の参加者たる印を付与する。令呪を付与されたもの



は英霊をサーヴァントとして召喚し、戦いに臨む。

少女は祈る。そして歓喜した。余命半年と言うこの窮状に付与された、聖杯戦争への参加権。

最後の一人になれば、願いは何でも叶う。この命も、何もかも。

少女は人知れずにつこりと笑いながら、右手を宙につきだし短く呪文を唱える。これで朝になるまでは何が起きてもこの部屋に人は来ないだろう。

腕を切るのにちょうどよい刃物がなかったため、少女は己が齒で手の皮膚を食い破る。月明かりを頼りに、魔法陣を描いていく。血が止まろうとするたびに掌を噛み、一心不乱に召喚の陣を描き続ける。

何を呼ぼう、誰を呼ぼうなど、少女は考えていない。誰に相談する気もない。すでに頼れる人もいないと知ってしまった。

ならば己にまつわる縁だけで、己の力だけで、己の願いをもぎ取ってやろう。

圧倒的な、嵐の如き全てを奪い去る無尽の力で――。

少女は寝間着の袖をまくりあげ、魔法陣の上に手をかざす。「――告げる。汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に」

ガチン、と背後から殴られるようなイメージと共に、全身の魔術回路が励起する。体をじくじくと苛む鈍痛。さらに、今は足元から崩れてしまいそうな脱力感。魔力の精製は生命力をエネルギーとして行われるため、病床にある少女にとっては過酷に過ぎる。だが、少女は詠唱を辞めない。それは蜘蛛の糸にすがる罪人の姿にも似ている。

「聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ――」

血で描かれた魔法陣に沿って、禍々しい紫色の光が漏れだす。魔力風は少女の寝間着をはためかせ髪を翻させ、表情をあらわにさせる。血を吐くような声で、詠唱が紡がれる。

「――されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者――」

馬の嘶きか、狼の遠吠えか、勇ましくも、そしておぞましい叫びが  
少女の耳を聳する。

「——汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ  
——!!」

11月24日 準備期間②

薄曇りの正午、一人の男が春日教会の門を叩いた。男の背は百七十五センチほど、細身な体に詰襟の丈の長い紺色のカソックを身に纏っている。色素の薄い肌は、彼が日本の生まれではないことを示している。

聖堂内には、すでに彼の到着を聞かされていた美琴が待ち構えていた。その腕には、一メートル超の棒のようなものが布に包まれて抱かれている。

「お待ちしておりました。ミスタ・エーデルフェルト」

「お時間を取らせて申し訳ない。ミス・ジンナイ」

男の名はハルカ・エーデルフェルト。柔和な笑みを浮かべ、美琴と挨拶を交わす。

エーデルフェルトといえば、フィンランドの名門魔術一族である。当主は代々双子の姉妹であることで有名だ。ただし、ハルカはその正当な跡継ぎではなく、数代前に分家として成ったものである。宝石魔術を得意とし、そのまま北欧の魔術を専門とする。

特にこのハルカ・エーデルフェルトは時計塔でも宝石魔術にかけては五指に入ると言われる使い手だ。美琴もハルカと同様に笑顔で迎える。魔術協会に選ばれたハルカは、恙なく聖杯戦争を終えるために不可欠の人間だ。

「お会いできて光栄です、ミスタ・エーデルフェルト」

「ハルカ、と呼んでくださって結構です。これからの戦い、我々は仲間なのですから」

差し出された手を、美琴は棒——槍を落とさないように気を付けながら握り返した。

ハルカは興味深げに美琴が手にしている布に包まれた槍を眺めた。

「それが用意してくださった触媒ですか？」

「ええ、何でも戦場を無傷で駆け抜けた武者の遺物と父が」

槍の英霊の名に恥じない聖遺物を父と共に探した美琴は、胸を張ってその槍をハルカに渡した。

ハルカは布の上からその手ごたえを確認する。

「なるほど。大変お恥ずかしいのですが北欧出身の身ゆえ、魔術系統の異なる日本の英霊には詳しくなく……どうぞお力をお貸しください」

「もちろんです」

美琴とハルカが和やかにやり取りを交していた時、教会の左奥——通路になり、その奥に美琴と御雄の居住空間がある——から、ゆったりと壮年の男が姿を見せた。神内御雄であった。

「これは遅れて申し訳ない。ハルカ・エーデルフェルト、お久しぶりですな」

「おお、ミスタ・ジンナイ。お久しぶりです」

「何年ぶりかな。最後に直接会ったのは五年以上前だと思うが……時計塔では影景は元気になっているかね」

御雄は懐かしそうに目を細め、ハルカを眺めた。久々に会ったハルカは記憶にあるよりも大分大人びた様に感じる。

神内御雄は生まれてからずっと聖堂教会に所属していたのではない。二十代前半で魔術師を辞め、聖堂教会に所属した経歴を持つ。魔術協会と聖堂教会は長年対立しているが、裏を返せばそれだけ長い付き合いということでもある。現に「神秘を一般人の知るところとならないよう秘匿する」点では魔術協会と利害が一致する場面もあるため、春日の教会は代々碓氷と友誼を結んでいる。

「ミスタ・ウスイはお元気ですよ」

「研究が進むのはわかるが、まだ例の件が片付いていないようだな」  
碓氷影景(うすいえいけい)は明の父で、八か月前から時計塔に渡っている。御雄は手紙でやりとりをしているが、彼の姿もそれだけの間見ていない。

「そのようです。さて、」ハルカは淡泊に話題を切り上げると、渡された槍を持ち上げた。

「それより、今夜にでも召喚を行おうと思いますが」

「そうですね。是非私たちも立ち会わせていただきたいです」

美琴はきらきらと瞳を輝かせる。実を言えば明がセイバーを召喚

する際にも立ち会いたかったのだが、聖遺物をここまで持ち出すことができなかったため断念していた。ハルカは嫌な顔ひとつせず、彼女の申し出に肯った。「ええ、わかりました」

「この戦争中の拠点は今用意している。今数日——戦争が始まるまではこの教会で生活してもらいたい。手狭だが暫しの間我慢してくれ」

御雄は先頭に立って、ハルカを教会奥の居住区間へ案内する。

その目は今一度白皙の青年を眺めたが、そのまま振り返ることはなかった。

\*

昨夜召喚を終え、博物館から帰宅した一成は一人暮らしのアパートにアーチャーを招いた。博物館と一成の暮らすアパートは、双方から見える程度の位置にはあるが、線路を挟んで向かい側なので、目の前にあるのに遠回りをしていかなければならない。

三階建・築十五年の『ルージュノワール春日』なるアパート。リフォームされているため築年数の古さはそこまで感じさせないが、あくまで男子高校生の一人暮らしの為ワンルームで狭い。「狭いけど勘弁しろよな」というと、アーチャーからは「まるで犬小屋のようじゃ。ド庶民だのう」という腹の立つ答えが返ってきた。

一成は霊体化できるのだからどうでもいいだろうと思いつつ、詳しい話は夜が明けてからと眠りについた。

昨夜も帰宅しながら、アーチャーの真名について考えていた。それを見透かされたらしく、「私の装束はおそらく、平安時代のあたりの時代のものじゃ。もしくはその後の時代でも朝廷にて官位を頂き、衣冠束帯を着る機会のあった者であろう。とりあえず適当に上げてみよ。私も思い出すかもしれぬ」とからかわれたので、一成は思い当たる候補を上げてみた。

「那須与一！」 「あの扇的あての兵か。多分違うのう」

「源義家！」 「惜しい」

「平教経！」 「私なら八艘跳びそのものをさせぬがな」

「安倍晴明！」 「あやつ弓使いか？ 鳴弦とかか？」

「物部守屋！」 「装束は平安といったらう」

結局、アーチャーの退屈を凌ぐための道具にされただけに終わったのだった。

\*

昨夜の面白くもない会話を夢の最後に、一成はゆるゆると目を開いた。

ぼさぼさになった頭を荒く梳いて、時間を確かめようとテレビをつける。すでに朝十時をまわっており、たまたまつけた地元ローカルの番組のニュースに昨日の博物館侵入が小さく取り上げられている。警備員は気絶させ（物理で）、関係者用出入り口近くの警備室に座っていた警備員も気絶させるとともに監視カメラも切ったはずだから大丈夫だろう。

一成がそんなことを思っていたら、アーチャーが実体化した。

「遅い朝よのう。それよりも私は食事をしたいぞ、外に出ようではないか」

ここにはロクな食料もないようだし、とアーチャーは付け加える。

「つてかお前、昨日記憶がぶっ飛んでるとか言ってたけどそれはどうなったんだよ」

「おお、その件か。一眠りしたら回復したわ。自分が何者か了解しておる。さ、朝餉？ 昼餉？ ブランチ？ ボランチ？ にでも行こうぞ」

重要な真名を思い出したというのに、割とどうでもよさそうにアーチャーは答えた。思い出しても教える気はやはり全く無いようで、一成は了解しながらも毒づいた。

「ああ？ 別にサーヴァントは飯なんか食わなくてもいいんだろ」

その発言に間違いはなく、サーヴァントは聖杯とマスターから供給される魔力で現界しているために食事からエネルギーを摂取する必要はない。しかし今度こそアーチャーはあきれ顔を向けた。

「全く情緒のないマスターじゃ。エネルギーさえ得られればいいのなら、人間はあままで料理を発達させるものかよ。それにそなたも腹を空かしているようではないか」

アーチャーの指摘通り、起きたばかりだと言うのに一成の腹は田舎の田んぼの蛙集団の如きやかましきである。人間、三大欲求には逆らい難い。一成は億劫そうに立ち上がった。

「……言つとくけど金ないから高いもんはダメだぞ」

「金などどうとでもなろうよ。さあレッツ現世」

「つと待てエー！その恰好で行くつもりかア!!」

ノリノリで実体化したまま、せせこましいアパートを出て行くようにするアーチャーの服の裾を掴む。

そう、問題はアーチャーの服装である。

「そんな恰好で街中歩き回ったら完全に不審者だろーが!!コスプレオヤジか!!」

「コスプレとは失敬な奴よ。これはおよそ現代で言う「スーツ」に等しい正装よ。要するに我らの戦闘服じゃ」

一成は聖杯はいつたいたいどこまでの現代知識を与えているのか怪しく思ったが、とにかく戯言を言うアーチャーをそのままの姿で外出させるわけにはいかない。何しろ衣冠束帯、冠飾太刀まで装備したコテコテの平安時代貴族様スタイルである。

そんな恰好をした男がチェーンの牛丼屋で牛丼をかつ食らっている姿を想像してほしい。完全に変態である。

「ともかく俺の服を貸すからそれはやめろ！脱げ！」

「……」

「どうした一成。何でも好きに食べてよいと言われたのだ、特に許す。

遠慮せず食すがよい」

一成は遠い目をしながら、目の前でステーキを切り分けるアーチャーの話の話を聞いていた。

部屋を出る前に一成の服を貸したが、まだ成長期真っ只中の一成の服を無理に着たピチピチのアーチャーも大分見るに堪えないものがあった。本人は現代の服を身に着けて楽しそうであったが。しかしそのピチピチアーチャーの姿も今やない。

彼はいまや、新品のスーツ上下を身にまとった立派なビジネスマン（見た目は）となっていた。特に買ったわけではなく、アーチャーがふらふらと物珍しきで寄って行った服屋で引いたクジで特等を当て、スーツを景品としてもらったのである。

そして腹ごしらえに立ち寄った駅ナカのファミリールストランでは、来客一万人目の祝いにより無料で食事ができることになったのである。

一成は目の前にある出来立てのハンバーグとステーキをもりもり食べるアーチャーを見比べて呟いた。

「これが幸運A+……恐ろしい……」

そのサーヴァントのマスターに限らず、聖杯戦争に参加しているマスターはどのサーヴァントのパラメーターを見ることができない（宝具やスキルは見るができない）。それでアーチャーのパラメーターを見たところ、魔力や筋力などまずまずの数値の中で、幸運がやたらと高いのである。

「何？お前前世はそんなに運良かったの？」

「あまり自分では意識したことはないが、そういえばそうかもしれぬ。あやかりたいものだなどもしばしば言われたな」

「そりやすげーや。じゃあ毎日こんな感じだったとか？」

「バカを申すな。こんなものは強運などとは言わぬよ。こんなところで運がよくとも、人生のここぞというところで運が悪かったら目も当てられぬわ」

一成も腹は十分に減っているので、注文したハンバーグセットをせつせと胃に収める。食い放題ならどこまでも食ってやろうという



健全な男子高校生の思考で、ウエイトレスを捕まえてさらにハンバーグを注文する。

美味そうに食事をするアーチャーを見ながら、アーチャーの聖杯にかける望みを聞いていないことを思い出した。英霊と言えば生前何かしらの形で偉業を残したもので、そのような人間が何の見返りもなしに会ったばかりの魔術師に協力するとは思えない。生前運が良かったがなんだろうが、悔いの一つや二つは残るだろう。願いの一つや二つもあるだろう。

ただ、マスターとサーヴァントの願いが相反するものであった場合、協力関係を築くことは難しくなる。一成の願いは自家の魔導の存続——『根源に至る』ことで、これに相反する願いはそうそうないと思われる。

また、アーチャーは飄々としていてつかみどころがないが、殺戮や悲劇を望むような質の悪さは感じない。身の毛もよだつような願いを持っているとは思わないが、それでも確認のため一成は口を開いた。

「そういや、お前も聖杯にかける望みつてのがあるんだよな？ 一応マスターとして聞いておかなくちやな」

アーチャーはステーキを食す手を一瞬止めたが、何事もなかったかのように食事を再開した。「あるが、特にそなたの願いと相反するものでもなし、小さな望みよ。言うほどの事でもない」

「言うほどでもないなら言えよ」

「それは断る。ぶらっぱしーの侵害ぞ」

秘密主義か何か知らないが、なんだかんだで自分のことを語ろうとしないアーチャーをジト目で見てみると、突如アーチャーはとんでもないことに気づいたように声を上げた。

「そんなに私の事が気になるとは、まさかそなた私のことが「キモい」と言うなアホサーヴァント」

結局全く話す気はないらしいアーチャーにため息をついて、一成はええいままよと食事を再開した。

成長期の性、かつ貧乏性で食べられるだけ食べてしまった一成は今

にも戻しそうな顔をしてアーチャーと共にファミリーレストランを出た。ちなみに一成の家が貧乏なわけではないのだが、両親の意向で贅沢な暮らしをしすぎるのはよくないとのこと。一人暮らしにふんだんな金をもらっているわけではない。

「オエツプ」

「あのように肉を沢山肉を食べたのは久しぶりよ」

「……何、あんまり肉食べなかつたのか？わりとエラそうなのに」

「宗教上の理由というヤツぞ。さて、腹ごなしにこの街でも散歩しながら面白そうなところに入っていくとするか。本来は車でもあればいいのだが、そなたは持っておらなさそうだし」

「エラそうを否定せず、アーチャーはふらふらと駅ナカの商業施設を徘徊しはじめる。

一成は重い腹を抱えてその姿を追い掛けた。

## 11月25日 戦争、開幕

前にも述べたが、碓氷邸は古色蒼然たる西洋風の屋敷である。

庭は広々として石畳が敷かれ、家の門と玄関の間には噴水なんでものまで備えられている。一階は石の階段からポーチを通って玄関に至る。玄関から入ると紅い絨毯のホールが出迎え、そこからリビング・食堂・応接間・書斎（という名の物置）に行けるようになってい

る。階段を上ると、再びホールから明の部屋・父の部屋・客用の寝室・浴室に行ける。家の中は外見よりは新しいが、どの部屋もフローリングもしくは絨毯でありアンティークな棚の上には由緒ありげな花瓶があり壁には絵画があるような家である。

このような家なので純和風の物体は雰囲気こそぐわないのだが、明の父親はそのあたりには頓着しない人間であったために座布団やこたつ、敷布団、細かなものになると湯飲み等も家にはある。

ただ、明はどちらかと言えば全うな洋風好みだったので、父親が時計塔に行っている今はそれらを地下室にしまっていた。

天気予報では今日は十二月中旬並の寒さになるらしい。予報など聞かずとも体で冷えを感じる事ができる。

明はコートの中にすっかりセーターを着込み、マフラーを巻いて、出かける準備は万端の出で立ちだ。同じ二階の父の部屋に向かい、自らの使い魔を探した。明がノックもなしにドアを開くと、予想した通りの光景が広がっていた。

瀟洒な絨毯が敷かれ、父の趣味である絵画が飾られる三十平方メートル程度の部屋の真ん中、四角いテーブルの上に厚手の毛布が挟まれ、その毛布の上に四角い板が乗っている。要するにコタツがあった。

「セイバー、ねえセイバー」

「なんだマスター」

セイバーは買ったジャージに身を包み、こたつに足を突っ込んで、顎をテーブルの上に乗せただらしないスタイルで返事をした。声の

テンションも低い、というよりは今起きたばかりという感じに近い。

「昨日、明日は教会に行くって言ったでしょ。行こう」

文句こそいわないものの、セイバーの動きは果てしなく鈍い。テレビのスローモーションモードと同じだ。

ここ数日暮らしてわかったことだが、セイバーは表情の変化には乏しいがその代わり行動が全てを物語る。

セイバーを召喚してから丸三日が経過している。御雄によればセイバーに先んじて召喚されていたのはキャスターのみだったが、昨日にはアーチャーとバーサーカーまで召喚されていると伝えられ、明とセイバーはそれらの居場所の特定・訪れていない場所の調査を行った。

霊地である大西山には近くまでバスで、土御門神社には徒歩で向かったが今の所不審な点はなかった。大西山についてはセイバーが異様に魔力が溜まっていると言ったが、そこは春日随一の霊地である為に異状ではない。

また他陣営の動向を探りたかったが、索敵能力の高くないセイバー、かつ敵もうろついてはいなかったのか運がなかったのか、梨の礫だった。

また明は昨日、管理者として得ている情報により、春日に根を張っている魔術師の家を訪ねた。

碓氷以外には二家あるのだが、双方ともに家——工房から異状を感じることはなかった。人気もなく、双方ともに留守にしているようで、あまり収穫はなかった。

正直、セイバーを召喚してから、正直言ってそこまですることがあったわけではなかった。

話は戻るが、セイバーを召喚する前に明は魔法陣を書くために地下室を清掃しており、その際に発掘されたこたつや座布団を父の部屋——現在のセイバーの部屋に置いていた。

そうして暇をしていた彼に、それらを発見されたのが始まりだった。

明と出かける以外の時、セイバーはこたつから出ない。そして寝ている。

彼曰く「全サーヴァントが召喚されれば、俺にもわかる。それまでは英気を養う。眠っていれば魔力消費は少ない」それで、確かに魔力の消費は少ないのだがそれにしてもよく寝るのだ。

現在やることがないのだから文句を言う筋合いでもないのだが、セイバー自身は退屈ではないのだろうか。

外にコンビニに行く以外に、こたつで寝る姿しか見ていない。

明はのろのろしているセイバーを見ながら、この部屋に暖房が入っていないことに気づいた。それにしても暖かい。普通に暖房を使っている明の部屋より暖かいくらいだ。

「そういえば気になってたんだけど、この部屋暖房入れてないの？」

こたつから抜け出すだけで三分ほどかけたセイバーが、怪訝な顔をしている主人に気づいて答える。

「あの天井近くについてる機械か？触ってはいないな」

「にしてはこの部屋あったかすぎるんだけど、なんで？」

「ああ、これのせいだろう」

セイバーは思い出したと言わんばかりに、こたつの中に腕をつっこむと一振りの剣を取り出した。その鈍い銀色はもちろん言わずもがな、草薙剣である。

「この剣は叔母上に頂いた火打石と一体化していて、属性が炎になっている。これに少量の魔力を注ぐと」

セイバーは草薙剣をひゅつと明に向けた。一瞬何かと思ったが、どうやら触れということらしい。

両刃の剣で手を切らぬように触ると、なんと暖かい。ホツカイ口のような暖かさだ。

「これをあのこたつの中に入れておくとよいのだ。流石に刃物だから天叢雲の鞘に入れてからこたつに入れるがな。魔力を増やしてもつと熱くすると野菜など物もよく斬れるし、特に熱さなくとも草刈りに

も俺の剣は役に立つ。草薙だけに」

フンどうだ俺の剣はすごいだろと言わんばかりにセイバーはドヤ顔をかましてくるが、明は反応に戸惑うばかりである。まず剣のすごさというよりは十得ナイフ的な便利なものアピールで、むしろお前はそれでいいのか日本武尊と聞きたい。

あと草薙だけに、とはギャグのつもりなのか、そもそもそれがその剣の由来でしょと突っ込みたい。古墳ギャグはレベルが高すぎてついていけない。

「ついでに言っておけば、この剣を体に入れている間は俺でなくとも、いかなる怪我也治癒させることができる。既に負ってしまった怪我に対しては悪化を止める効力に留まるが……—まあ、俺はこの剣がないとパラメータが落ちるゆえに、おいそれと貸せないが」

セイバーは欲しがられてもちよつと貸せない、と再び謎のドヤ顔をかましてくる。セイバーなりの宝具自慢だろうが、やはりTVシヨツピング的な売り込みが抜けておらず、明は苦笑いしかできなかった。

どうやら明の反応はセイバーの期待したものと違うらしく、セイバーも微妙な顔をして剣を鞘に納めた。

明は気を取り直して、未だにこたつを名残惜しげにするセイバーを引っ張って門を出た。

\*

門を出る時に郵便物を確認すると、町の回覧板と一通の手紙が入っていた。回覧板のボードには、薄水色の紙に印刷された文字が躍っている。「風邪の流行にご注意」と見出しがある。

今年の秋は寒い秋と前々から天気予報で知らされており、十一月であるのにしばしば十二月中旬並みの寒さの日が多かった。かといえれば並みの十一月の過ごしやすい日もあったりで、気温の変化があるた

め体調を崩すものが多いようだ。十一月中盤から、春日に風邪が流行し今も続いている。いつまで続くだろうと思いつながら、明はもう片方の手紙の裏表を眺めた。

普通の手紙ではなく、切手も印もない上に封に確氷の魔術師しか開けない魔術的処理が施されている。父からのものだと思っただけで直感した明は、直ぐに封を解除して中を見る。中には古びた一本の鍵と、一枚の手紙が入っていた。

手紙を開き、その内容を確認する。手紙の内容はおおざっぱに言えば、父も聖杯戦争がおこることについては寝耳に水であったこと、冬木の聖杯の模倣であるが、既に相違点が多くあることが書いてあった。

既に済んでしまったこととしては召喚の儀。本来は魔力を貯める大本の聖杯——大聖杯のある土地でしか召喚は行えないが、始まりの御三家のマスターには何らかの要因で聖杯から魔力が余剰に流れ込んでおり、その為春日でなくとも召喚は行えるということだ。

(つーか、神父多分これ知ってたよね……じゃないと新幹線の切符なんて渡さないよね……)

この手紙で書いてあることは神父からは聞いていない。まあ、確かにどうでもいいといえはいいのだが、何か腹立たしい。

次は、春日の大聖杯の位置について。聖杯戦争自体が寝耳に水だったため、当然父はそこまで知っているはずもなかった。順当にいけば、春日の霊地にあるだろうということだった。

「……なんかすごい奥歯にモノ引つかかった感じだなあ……。結局「要因」わかんないし……」

土地を管理する者として全然知らなかったというのはまずいことなのではないだろうかと思う。しかし二十五年管理者をしてきた父が知らないということは、何かあったとしても亡き先代からもつと前のことになる。

そして最後に、冬木の聖杯戦争は五度も開催されておきながら、ただの一度も根源に至った者がいない、それどころか願いを叶えた者がいないが、可能性がある以上次代管理者として明が真偽を確認めると

いうことだった。感触としては、父は聖杯は根源に至れる可能性についてには眉に唾をつけているのだろう。

明はとりあえず手紙を大切に折りたたみ、バッグの中にしまった。そして、もう一つの入っていた鍵をじつと眺めた。

「はあ…」

この鍵にはいい思い出がない。そこに手紙を読んでいる間は黙っていたセイバーが隣から顔を出した。ちなみにセイバーはコートをしつかり着ていて防寒に抜かりはない。サーヴァントは寒さを人間ほど感じないはずだが、無意味に準備はばっちりである。

「どうした……手紙を読んでいたと思ったが」

「ああ、ちよつとお父様から」

明はシヨルダーバッグに鍵も入れると、セイバーを促した。「あつち。行こう」

寒風の吹く住宅街を歩きながら、特に会話がない。明もセイバーもあまり口数が多い方ではなく、話すことがなければ話さない。

しかし珍しくセイバーは先ほどの話に興味を持ったようで、問いかけてきた。

「マスターの家族はどうしているのか？」

「そういえば言っていなかったね。お母様は私を生んだときに死んで、お父様は今時計塔っていう魔術協会の本部にいるんだ。まあそうじゃなくてもあんまり家にいない人なんだけど……あとは、お姉様がいたけど、今は一般人として暮らしてる」

「ふむ。仲はいいのか」

「うーん……そうでもない。私は確氷の跡継ぎだから、良くしてくれてるだけじゃないかな。お姉様はそもそももう私のことなんか覚えてないし」

明の父影景は良くも悪くも魔術師然とした人間である。明は父の手前、魔術に強い熱意がないとは絶対に口にしない為、とりあえず仲は悪くは無い。



だが、熱意が無くとも魔術師として稀有な体質を持つ明は魔導を修めなければ色々と問題が生じる。

「覚えていない?」

「そこはちよつと込み入った事情があるんだけど、そうなんだ。だから仲良くはないよ。セイバーは?」

姉に関しては長い話になる上に楽しい話でもない為、明はとつさにセイバーに水を向けてしまった。しかし、伝説上セイバーが家族仲のいいわけがないことをすぐに思い出して慌てた。

「あ、今のなし、気にしないで」

「?...何を気にかけているのかわからないが.....」

明の狼狽に対し、当の本人は落ち着いたままだ。首を傾げて、聞きたいならばと口を開いた。

「知っているかもしれないが、良くはない。俺は父帝を尊敬していたが、父帝は俺のことを嫌っていたようだ。今でもその理由はわからない。兄妹も八十人くらいいたからな、それだけいると特に仲がいいと言うことはなかった」

思った以上にセイバーが平静に答えてくるので、明はええいままよとセイバーの伝説で気になっていることをぶつけた。

「.....でも双子のお兄さんは?..つていうか、何で殺しちゃったの?」

日本武尊——小碓命の双子の兄の大碓命は、父から連れてくるように命じられた美しい乙女二人を密かに自分の妻にし、父帝には別の乙女を献上した。父帝はそれに気づいたが黙っていた。後で恐ろしくなった大碓命は、朝夕の行事に欠席して父帝と顔を合わさなくなった。

それを気にした父帝は、大碓命の双子の弟である小碓命に「兄はどうしているのか。お前が良く論しなさい」と命じ、小碓命はその後兄を厠で、素手で振り殺し袋に詰めて捨てたのだ。

伝説上はそのように伝えられている。

「大確の兄上か。父帝のお召しになった乙女を横から掠め取った時点で死を以って償うべきだろう」

「その時、何も思わなかったの？」

あまりにあっさりとは答えるセイバーに、明は思わず問いただした。しかしセイバーは怒るでも悲しむでもなく、純粹に首を傾げていた。

「何を悲しむ必要がある」

予想の範疇外の返事に、明は言葉を失った。当然、英雄なるものは華々しい伝説と共に血腥い伝説も多く存在する。それは仕方がない。

だが、人を殺めることに対するセイバーの無関心が——戦いに於いて人を殺すことを否まないと告げたことが——どうしてもひっかかった。それでも今問いただすべを持たなかった明は、結局言葉を返せなかった。

当のセイバーはすっかりその話は終わったように、別の事を訪ねてきた。

「しかし、今日は何の用があつて教会に行くのだ、マスター」

気のせいかもしれないが、セイバーはあまり教会が好きではないように思える。

とは言つても明自身もそんなに行きたいところではない。

「前にあの教会の二人とは協力体制つて言ったでしょ？ それで、時計塔つてところからもう一人協力者として参加する魔術師が昨日来日したそうなの。もうサーヴァントも召喚したんだつて。で、今日はその協力者と顔合わせ」

「協力者として参加？ もうサーヴァントも召喚？」

明の発言に、寝耳に水といわんばかりの反応が返ってきた。教会の二人が協力することに異論はなかったセイバーだが、今度の反応は雲行きが怪しい。

「何か問題でもあるの？」

「……利点がないことはないが……もしやマスター、その協力者とやらと仲良くやっていけば、最後は正々堂々一騎打ちなどという結末に

なると思っではないだろうな」

流石に明もそこまで能天気になってきているわけではない。相手は見ず知らずの人間で、しかも権謀術数の渦である時計塔で生きてきた魔術師の先輩である。

「まあ、そこまでいい感じになるとは思っていないけど。……これを思いっきり断ると教会の協力も得られなくなっちゃうし、途中までは役に立つんじゃないかな。協力とか言ってるけど、利用しあう感じだよ」

「……」

セイバーはあまり納得したようには見えないが、しばらく黙りこんだかと思うと一人で勝手に頷いていた。

とりあえず納得してくれたのかと明が思った時、唐突に何故か文句の矛先が向けられた。

「……供給される魔力からマスターが極めて優秀な魔術師だというのはわかるがこう、マスターは今一つ頼りない。何もないところで転びそうになるし、アサシンあたりにあっさり殺されそうだし」

「こたつと合体してるものぐさなサーヴァントには言われたくない。っていうかなんで私への文句になるの……」

セイバーだけでなく明も常々思っていたことが口をついて出た。召喚された日、聖杯にかける望みはなく他の六騎のサーヴァントを皆殺しにして最後の一騎になることと言っていたセイバーがいたが、それはきつと別の世界のセイバーに違いないと思うほどの墮落振りを前述の様に見せている。

「いやはや、それに関しては俺も驚嘆している。この神代の気風消え失せた現世において、このような神造兵器があるとはな」

明は別にこたつの話をしたかったわけではない。「こいつマジ何言ってるんだろう」というツツコミを顔面で現した明に気づいているのかいなのか、セイバーは腕を組んで一人何度も頷いている。もし天照様がこれを御覧になれば、大喜びするに間違いないだろうと大絶賛

である。

段々付き合うのが面倒くさくなってきた明は、適当な相槌を打ちながら教会への道を急いだ。

\*

本来、魔術協会——魔術を学問として学ぶ者たちの互助会——は、聖堂教会とは犬猿の仲である。

聖堂教会は要するにカトリック教会だが、その裏の顔とでも言うべき存在だ。彼らの目的は「異端の殲滅」。神秘の技で神を汚すこと、人を殺めること、世を惑わすこと、神の摂理を歪めようとすることはすべて「異端」とされる。それらを行う者達を撲滅することが目的である。

聖堂教会と魔術協会の仲が悪い原因はここにあり、聖堂教会は「神に選ばれた聖人」ならぬものが好き勝手に神秘（魔術）を振るうことを認めない。両者は古より反目してきたが、現代では協定による平穏が訪れている（記録に残らない場所では殺し合いが行われているが）。そのような魔術協会と聖堂教会の関係のため、明は教会の神内親子も付き合いは長いものの、気の置けない間柄と言うわけではない。それでも他で話に聞くほどは、明と教会の仲は悪くはないと、本人は思っている。

それは御雄と美琴がもとは魔術師であり、その後教会に属したと言う経歴から来るものなのかもしれない。詳しいところは明も知らない。

冬の寒気を歩くことで誤魔化しながら、明とセイバーは教会に到着した。到着する少し前から違和感を覚えていたが、それは間違いではないと明は確信した。

セイバーは無言で明の三步前に入る。

道なりに花壇があり、四季折々に目を楽しませる。今はユリオスプ  
デージー——黄色い花卉がよく映える花が咲いていた。石畳の続く  
先に、レンガ造りの教会の入り口がある。そして、その扉の前に、一  
人の男が立っていた。

堂々たる体躯は、百八十センチはあろうかという長身である。筋肉  
隆々とした体を鎖帷子が覆い、鎧は全部装備すれば兜までありそうだ  
が、今は袴に脛当、革足袋に草鞋といういかにも身軽な出で立ちであ  
る。

そして何よりも目に付くのが、その手に掲げられた大槍である。笹  
穂のような刃に、柄は三メートルもあるうか。その丈は血によって呪  
文がつづられた布で巻かれ窺い知ることとはできない。

歳は三十代序盤であろうか、男は勇ましい顔つきで不敵に笑った。

「待っておったぞ、客人」

語らずともわかる。この圧倒する雰囲気、人では到底及ばないほど  
の魂の熱量。

人知を超えた存在、英霊の具現がそこにあった。

「……戦いに来たわけではない。マスターの命に従い、協力者とやら  
の顔を見に来ただけだ」

応じる素振りのないセイバーを、男は全く意に介さない。

「応とも。その件についてはこちらから聞いておるわ。だが、  
共闘する相手があまりにも実力不足であつたらどうだ。つまらぬとは  
思わないか?」

「あまりにも実力があるよりは御しやすいと思うが」

「ははは、つれない奴よ。だがな、僕はそう思うのよ……いぎ、ものの  
ふ同士戦おうぞ!」

先ほどまで不敵に、しかし一種すがすがしきを感じさせる笑いを浮  
かべていた男は瞬間、猛禽の如き笑みを浮かべた。その笑みの変質を  
認識する方が早いか槍が猛威を振るう方が早いか、刹那の間にセイ

バーと男は空間を蹴とばして接近し——セイバーは素手で彼の槍を掴んでいた。

「悪いが俺はもののけの道とやらは知らない」

「勝手に妖怪にするでない！もののけだ！」

「もののけだか何だか知らないが、ともかく戦う気はない」

セイバーは掴んだ槍を離さない。だが瞬時三メートルの槍は長さを変えて、急激に短くなる。二メートル程度の長さになった槍は、既にセイバーの掴むところではない。セイバーの力量を認めたランサーの槍は、先ほどの小手調べのような甘い一撃を放たない。

鋭い神速の槍が教会の道で振るわれ、大気を薙ぐ。風が吹く。

美琴の整えた花壇は全く頓着されず吹き散らされていく。セイバーは未だ自分の武器を取ることなく、風のように槍をかわした。

「その槍、伸縮するののか」

「お前の得物を見せてくれんかな！そう出し惜しむな、せこいぞ！」

「褒め言葉として受け取っておこう」

「!?全く褒めてはいないぞ！」

戦う気がないと言いながら、どこことなくセイバーは嬉しそうにも見える。流石に繰り出される突きを受け止めるのは不可能と思ったように、セイバーはひたすら躲し続ける。

しかし敵もさるもので、せめて得物くらいは見てやろうと迫ってくる。風を斬り裂く一突きを、セイバーが宙を舞って躲す。だが、空中では身動きがとれまいとランサーはさらに神速の一撃を与える。

セイバーは剣を出す気はない。この一撃は躲せる——しかし、セイバーが紙一重で躲そうとしたとき、——再び槍が伸びた。

「!!」

鋭い金属音が空に響き渡る。ランサーは得たりと笑う。

「む、ここに至っても己が武器を隠すか!!しかし、そのように受け止め、今の音ということは……」

男が漏らしたのも領ける。セイバーの得物は、セイバーの手元からおよそ二メートル以上にわたり白い霧で覆われていて、はつきりとその姿を視認できないのだ。霧、蒸気のようなもので覆われてその長さや形状が曖昧になる。

しかし、ランサーは槍を受けた音とその構えから、得物が何かは推測できている。

セイバーは地に足をつき、蒸気の武器を構える。

眼にも追えぬ速さで男は突きを繰り出していくが、セイバーもそれに後れを取らない。

水のベールを纏った剣で次々といなし躲す。

「己の武器を隠蔽するとは卑怯だぞ、セイバー！」

「お前こそ武器を呪布で覆っているだろう、ランサー！」

お互いにどことなく嬉しそうな声を投げて、彼らはお互いの凶器を捌き読み、躲し見つめる。巨軀のランサーの一撃一撃は破壊力があるだけでなく、その体に似合わない俊敏さで付け入る隙を見せない。

ランサーと比べれば遥かに矮躯のセイバーは軽業師のような身軽さで槍をいなが、さして攻撃が軽いと言うことは決してない。一人を素手で千切り殺した逸話のあるセイバーが非力とは片腹痛い。

「その呪符、千切り取ってやろう」

セイバーの蒸気に覆われた剣は、少しずつ、少しずつランサーの槍に巻き付いた呪符を削る。それこそ縛りの緩んでいる箇所から狙うように。しかし、武器を露わにして真名を暴いてやろうというセイバーの試みは、ランサーにもヒントを与えることになる。

ランサーのマスターである魔術師は生半なそれではなく、一流と冠をつけられる魔術師である。それはラインを通して流れ込んでくる魔力で容易くわかる。そのマスターが、武器が丸出しでは都合が悪かろうと渡してくれた特製の呪布である。そこらへんに転がっている布をただ巻き付けたのとは訳が違う。

威力があろうとも、掠めただけではがれおちると言うわけは決してない——それが、セイバーの蒸気の剣を掠めるたびに少しずつ剥が

れ落ちるのである。

「セイバーお前の剣は「そこまでにしておきなさい、ランサー！」  
頭上から、テノールの声が響いた。大きくはないのによく通る声である。

真つ先にランサーが反応し、素早くセイバーから一歩引いた。

「すまぬ、興が乗った！」

見上げて謝りながらも、ランサーは悪びれたところがない。明とセイバーもランサーにつられて顔を上げると、教会の二階の窓から一人の男が顔を出していた。

金髪で、二十代後半だろうか。優男だが、意思の強さを感じる。

ランサーのマスターはランサーが矛を収めたことを見計らい、窓を閉めて姿を消した。

「今更だがセイバー、お前はなかなか名のある英霊だと見受る。生半な相手が共闘相手ではなさそうで、儂は嬉しいぞ」

「お前もかなりの使い手と見える」

最初は乗り気ではなかったはずのセイバーもにやりと不敵な笑みを浮かべている。すると、入り口から先ほどのランサーのマスターが姿を現した。

「ランサー！ 客人に向かって何をしていますのですか」

「はは、すまんすまん。現界してから初にお目にかかるサーヴァントだ。血が騒いだ」

ランサーのマスターは呆れた様子だったが、文句を言うのを後回しにして明とセイバーに向き直った。

「初めまして、セイバーのマスター。ランサーがとんだ無礼をしまして、失礼」

「ごちんこそ、ランサーのマスター。私は気にしていませんが、暫しの間共闘する立場です。気を付けた方がよろしいかと」



「肝に銘じておきます。しかし、共闘に足る相手か確かめたかったというランサーの気持ちには私にも感じ入るところがありましたので、しばし静観させていただきました」

先ほどはランサーに呆れた素振りを見せておきながら、今度は平気でランサーの肩を持つようなことを言う。しかし黙って見ていたのは本当であろう。明も見ていたのだからあまり気にしていない。

胡散臭さを感じながら、明は微笑み返した。

「共闘相手としてお眼鏡には適いましたか？」

「ええ。……失礼、名前を申し上げていませんでしたね。私はハルカ。ハルカ・エーデルフェルト。どうぞお好きなようにお呼びください、ミス・ウスイ」

ハルカは柔和な笑みを返し、握手を求めてきた。明はその手を握り返した。

\*

暖房のついた教会の中では、神内親子とハルカ、それに明が今後の聖杯戦争の進め方について協議をしている。その場に同席することを拒否されたわけではなかったが、ランサーはそこに同席する気がなかったらしく外に出て行った。

そのためマスターを護るために無理に同席することもないと思い、セイバーは教会の庭をぶらぶらしていた。共闘も協力もあまり興味がない。

出てきてしまつて今更だが、己のマスターのことを考えると同席した方が良かった気もしくない。

マスターの明が魔術師として優れているのは流れ込む魔力から承知しているが、ここ三日の様子を見ているとどこかぼんやりしたところがある人間なのだ。何もないところで転び、塩と砂糖を間違え、魔術の鍛錬を行うとき以外はよくソファに座つてぼうつとしている。

それくらいなら笑える程度のぼんやりさであるが、何か希薄なのである。存在感が、とか、そういうわかりやすいものが希薄なのではない。しかし、確かに何か希薄なのである。

その正体の掴めなさが、セイバーがマスターに対し抱いている得体のしれない不安であった。

ただ、このような証拠も何もない感覚の話をしたところで得るものは何もないため、とりあえずセイバーの胸の内に収めている。

ふと、下を向いたときに己の剣が目に入る。現界してからまともに剣を抜いたのは先ほどが初めてだった。

元来力比べ程度の戦いなら好きだが、殺し合いという戦いが好きなのわけではない。先ほど本当はランサーと刃を交えるつもりはなかった。サーヴァントには逆らえないほどではないが、戦争を進めるために「他のサーヴァントを斃したい」という衝動が与えられると、聖杯からの知識で知っていた。

なるほど、あの高揚感とその衝動だったのだろうと、セイバーは冬咲のコスモスをはじめとした花に囲まれる庭を眺めながら、そっと呟いた。

「何の用だ、ランサー」

「おや、ばれてしまったようだな」

教会の屋根の上に立ち、遙か上空からセイバーを見下ろす影がある。鍛え上げられた肉体を余すところなく晒し、仁王立ちするランサーの姿だった。ランサーはにっこりと笑うと、体の大きさに似合わぬ軽やかな動きで屋根から飛び降りた。

「ばれるも何も、教会内にいるサーヴァントの気配ぐらいどのサーヴァントでも察せよう」

「そうつれない返事をするな、セイバー。儂はお前に会えて嬉しいのだ」

「？」

怪訝な顔をするセイバーに対し、ランサーはとても嬉しげに語る。

「この聖杯戦争、というものに参加できることがだ。この聖杯戦争に呼ばれる英霊は、時代を異にしながら生前勇名を馳せた者たちばかりだろう。死してから今一度、そのような兵たちと覇を競えあえるとは、これほど心躍ることもあるまい」

「……貴様は聖杯にかける望みがあるのではないのか？」

「ああ、聖杯か。勝ってから考えればよいであろう。我が望みは戦いそのものよ、正々堂々、名乗りを上げて尋常な勝負をするのだ」

ランサーは身の丈の倍もの長さのある槍を握りしめ、意気を新たにセイバーを見つめる。ランサーのように戦うことそのものが目的になっているわけではないが、このようなタイプを悪く思うセイバーではない。

しかし、ランサーの発言に眉を寄せた。

「……名乗りを上げて？真名を自ら暴露するののか」

サーヴァントにとって真名は秘匿すべきものである。真名を知られることは弱点を知られることであり、対策を取られて不利になる。進んで言ったところで何の得もない。それでも、ランサーは得たりとばかりに笑んだ。

「応とも。尋常なる戦いはお互いの正体を明かしてこそ……といったところだがな。召喚した相方と協力せずには勝ち残れない故に、流石にそこまではおおっぴらにできなんだ。昨夜、思わず令呪を使われかけた！」

呵々大笑するが、セイバーはあまり笑えない。

ランサーのマスターはこの「名乗りたがり」を直ぐに見抜いて嚴重に注意したらしい。

「……名乗りたければ勝手にしろ」

「だからそれはできんだ。ま、しかしセイバー、僕の真名を知ったとしても逃げてくれるなよ？」

投げかけられた言葉は、セイバーを試すように緊張を孕んでいた。

一瞬だけ、先ほどと同じ猛禽の如き笑みを浮かべたランサーに向かい、セイバーは淡々と告げる。

「それはいらぬ心配だ。元よりこの身、戦いを避けるようにはできていない」

「ほほう、女のような姿をしていながらも言うではないか、セイバー。生前、東に儂ありと言われたことなどもあったが、此度の戦いでは日本に儂あり、と思いき知らせて見せようぞ」

本格的な寒気を引き連れたつむじ風が吹き抜ける。ざわめく様に花と草々がこすれあう。

マントと衣袴を風に翻しながら、その凜とした美貌を崩さぬまま、セイバーは一かけらの笑みさえなく、変わらぬ事実を告げるように厳粛に言った。

「日本最強は二人も要らない」

\*

特に指示したわけではないが、セイバーもランサーも教会の中からは席を外した。サーヴァントを抜いて、明、ハルカ、神内美琴の三人が顔を合わせた。

どこことなく荘厳な空気が漂っている為、明はあまり教会にいるのが好きではない。

「改めて自己紹介をいたします。魔術協会から参りました、ハルカ・エーデルフェルトと申します」

金髪の北欧人は穏やかな笑みを浮かべて、日本式に合わせたのか一礼をする。ハルカ・エーデルフェルト。明も父からその名を聞いたことがあった。エーデルフェルトはフィンランドの名門魔術一族であ

る。

特に宝石魔術にかけては一流の魔術師という。

魔力はそれそのままでは一か所に留めておくことはできない。だが、宝石など特定の物質には魔力を貯めておくことができる。日ごろから宝石に魔力を貯めておくことで、いざと言うときの魔術発動時、詠唱を簡略化することや、魔弾と化した宝石そのもので爆破などの破壊力を生み出すことができる。

宝石は高価で純度の高いものほど魔力を貯めやすい。しかし使い捨てであるために金がかかるのが難点である。

「改めて、よろしく願います。ミスター・エーデルフェルト。確氷明と申します」明も穏やかな笑みを浮かべて、改めて挨拶をする。

「時計塔でも噂の影使いと会えて光栄です。願わくば聖杯戦争のフィナーレは、貴方と秘術を尽くして戦いたいものです」

勘弁してくれ、と明は心の中で思いながら笑った。

確氷の影使いとは何のひねりもないが、明のあだ名、二つ名である。それは明が成し遂げた功績によってつけられたものではなく、明の生まれつきの体質よってついたものである。

魔術師一人ひとりには属性というものが存在する。その魔術師がどのような特性を持ちやすいか、どのような魔術と相性がよいかを決定する生来の要素である。

基本は地、水、火、風、空の五大元素。大抵はそこから一つを属性として持つが、まれに二つ、三つ、さらには五大元素全てを属性として持つ者も存在する。

さらに架空元素として虚数属性、無属性がある。この架空元素は共に極めて稀な属性であり、明はそのうちの虚数属性を持っている。

さらに、確氷の家の魔術師には特殊な体質がある。同じ確氷の者の魔術、または己の魔力量を超える規模の魔術でなければ魔術が効きにくくなる体質である。

本来、魔力を帯びたものに干渉する魔術は難しいということが常識だが、確氷の体質は、その常識に輪をかけて影響を受けないモノだ。

相手の魔術が効かないと同時に、己の血族でなければ暗示や催眠、補助魔術や治癒の魔術も通らない。

この二つのことが合いまって、明はその名を知られている。

二人が一通りの挨拶を終えたのを見計らって、美琴が場を取り仕切る。

「ミスタ・エーデルフェルト、そして明。この教会に集まってください、感謝の言葉もありません。我々の共通の目的は一つ。『何事もなく、この聖杯戦争を終結させる』ことです……すでにお二人のサーヴァントは少しではありますが交戦し、お互いの能力を多少は知ったと思われます。セイバーと、ランサー」

そうだろうな、と明は思ってはいたがやはり先ほどのランサーのケンカ売りは、この監督役の許可するところだったようだ。そうでなければ、もっと早く美琴、もしくは御雄が止めに来たに違いない。

「双方のサーヴァントが優れた英霊であることは確認できたと思われます。そして、そのクラスの性質を鑑みるにあたり、まずはランサーに斥候役を務めてもらい、セイバーが主砲となつて敵サーヴァントを葬ることを当面の作戦にしたいと思ひます」

美琴の言うとおり、クラスの性質を考えればそれが妥当なところだろう。セイバーのクラスは強力な宝具と高いパラメータを持ち、その最も向く戦法は「真つ向勝負」である。大火力で敵を跡形もなく葬り去ることができる反面、索敵能力が高くなく、奇襲や搦め手を苦手とするクラスでもある。

ランサーはセイバーに次いで高いパラメータを持ち、特に俊敏であることが特徴のクラスである。宝具の効果範囲は他クラスに劣るが燃費が良く、何発も放てる場合が多い。このような特徴のため、一対一の戦闘では最も効率よく戦えるクラスであり、斥候として引き際を見極めて戦うのに向いている。ハルカは賛成の意を示した。

「私はそれで構いませんよ」

「私も構いません。斥候はランサーの方が向いているでしょう」

ハルカと明はお互いに視線を交わし、頷きあう。当面——サー

ヴァント七騎中三騎が消滅するくらいまではこの方針でいけるだろうと明は考える。最終的には個人の戦いになるとはいえ、いくらかは共闘関係を結んでいた方が効率よく戦いを進められる。それに監督役を兼ねる教会を味方につければ、現在の状況把握に役立つ。

ただ、明がハルカを全く信用していないのと同じようにハルカも明を信用していないだろう。

生粋の魔術師として生きてきたはずのハルカの目的は聖杯で根源に至ることだろうし、そのためならいつ裏切ってもおかしくはない。

そもそも魔術師なるものは自分一人（または一族）のみが根源に至ればよいという考えの人種だ。魔術協会は魔術師の研究互助会を謳っているが、その総本山たる時計塔はその足の引つ張り合い、権謀術数に明け暮れているのが実体である。

魔術師としての素質はほぼ生まれによって決定されると言っても過言ではない。基本は研究を重ねた結果を魔術刻印として子に相続し、一本でも魔術回路を増やしていくことを繰り返していく。代を重ねた魔術の家計ほど魔術回路が多く、研究結果の魔術刻印も増えるのが常である。時計塔にはそのように魔術の研鑽を五百年以上続けてきた家系がザラにあり、中には二千年の歴史を持つ大貴族もある（ちなみに碓氷は明で二百五十年程度）。

そのような積み重ねられた呪いにも似た歴史を持つ、時計塔から来た魔術師を易々と信用することはできない。それはハルカも同じことで、稀有な魔術属性を兼ね備え魔術の研鑽を重ねている明が「別に聖杯に願うこととかなない」と言ったとしても信じないだろう。

結局は互いの腹を探りながら、共闘しできるだけのサーヴァントを排除することになる。

美琴は両者の顔を見て話を続ける。

「それではランサーには早速今日から積極的に索敵してもらいましょう。危なくなったらすばやく逃げる様にしてください。結果は教会に使い魔を使役して報告していただきます」

「わかりました。ランサーにはよく言い含めておきます」

「セイバーは今しばらくは戦闘に出ないで欲しいわ。それにセイバーは有名すぎるから、直ぐに真名を看破される危険がある。いざと言う時まで、おとなしくしていたほうがいいわね」

美琴はこういうとりまとめをしているとき生き生きとしている。

明も教会の方針に異存は無い。ニート全開のセイバーは、暫くの間はおとなしくしているだろう。

しかし、セイバーは有名すぎるから引つ込めておこうと、ランサーのマスターの目の前で言うのは如何なものか。ランサーは有名ではないと言っているようだし、そもそもランサーばかり戦うということは、ランサーの真名が割れやすくなるということだ。明がこっそりとハルカの表情を伺うと、ちようど彼と目が合ってしまった。

「……お気になさらず。ランサーは戦闘好きですからね、引つ込んでいろなんていわれても大人しくできません。それに、真名だつてどこまで隠す気があるのやら」

明の心を読んだように、ハルカは柔和な笑みとともに返した。どこか虫の好かない感じを受けながら、明は曖昧に頷いておく。話がまとまりかけた時、教会の奥の部屋から御雄が姿を現した。

その顔には僅かに笑みが刻まれており、喜ばしい知らせがあつたようだ。

ゆつたりと余裕を含ませた足取りで、御雄は三人に近づいてくる。

「話はまとまったかね?」

美琴が答える。「概ね。お父様、何が良いことでも?」

「……ミスターエーデルフェルト、明。ここに告げよう、霊器盤がアサシンのサーヴァントの現界を確認した」

その言葉に明、ハルカ、美琴の三人も目を見開く。これで現界しているのは、セイバー、ランサー、アーチャー、アサシン、キャスター、バーサーカーの六騎だ。

この聖杯戦争なる舞台の役者が揃うまで僅か。三人が息をのむ中、御雄は少し気落ちした声で告げる。



「だが、少し拍子抜けな事実を伝えねばなるまい。おそらく、これで全てのサーヴァントが呼ばれているということだ」

「？ライダーは？」

素直な明の疑問に、神父は残念そうに答える。「実は、ライダーの召喚はキャスターとほぼ同時になされていた。しかしその数分後、ライダーの反応は途絶えた」

「……数分後？ どういうことでしょうか？」

ハルカまでも眉を寄せて神父を見ている。確か、セイバーを召喚した時点で召喚が済んでいたのはキャスターのみだったはずである。順当に考えれば、それとおよそ同時に召喚されたがないということ  
は――

「あまりに早く消えすぎているが――既にキャスターとライダーが矛を交え、ライダーが敗れたのかもしれない。それともマスターがライダーと反りが合わず寝首をかかれ、その寝首をかいたライダーも現界を保てなくなり、消滅したのかもしれない。ともかく、既にライダーのクラスは召喚されてはいるが、既に反応が途絶えているのだ」

消滅のあまりの速さに神父も何かと思っていたようだが、聖杯が起動してそれなりの時が経っており、他のサーヴァントはそろっっている。それでも再びライダーは現れることはなかった。

万が一の可能性として、春日の聖杯は冬木の聖杯を陰陽道を加えてに摸倣した偽の聖杯であるため、システムに欠陥があるのかもしれないが、それこそまだわからないと神父は付け加えた。

「状況から見て、ライダーは消滅していると判断する」

理由はわからないが、ともかくこれからの聖杯戦争はライダー（騎乗兵）のクラスを欠いたセイバー、アーチャー、ランサー、キャスター、バーサーカー、アサシンの六騎で争うということのようだ。

御雄は深く息を吸い、厳かな声音で宣言する。

「役者は揃った。ここに、春日の聖杯戦争の開催を宣言する」

もとより聞いているのは四人だけ。この宣言に意味はない。

それでも、これからの夜は日常を離れた魔術使いの夜であることが、はつきりと自覚された。

\*

明とセイバーは碓氷邸に戻った。ハルカの拠点となる屋敷も用意が整っており、そこは今は教会が所有している小さな屋敷だ。その鍵と地図を渡して、美琴はハルカを見送った。

教会には何時もの通り、御雄と美琴だけが残る。美琴はストールを羽織って聖堂を出て、入り口の石畳の両脇の花壇を見やった。セイバーとランサーが少々矛を合わせただけでこの惨状だ。花が風圧で吹き飛び、同時に無残に踏み荒らされている。石畳にも槍か剣でつけられたような傷跡があちこちに残っている。

「仕方がないとはいえ……全く……」

精魂込めて花壇を手入れしている美琴からすれば完全に狼藉だ。この程度の被害はサーヴァント同士の戦いではまだまだまだかわいいものであることも承知している。早速多少手入れをし直したいが、またここが戦場になることもあり得なくない。全てが終わってからまとめて手入れをした方がいいかもしれない。

「これは酷いな」

「お父様」

美琴の後から教会より出てきた御雄が、庭を見渡しながら言った。

「聖杯戦争が終わってから手入れをし直すといい。今は片付けるだけでよいだろう」

「そうですね」

荒れた庭を見ながら、美琴は実感する。ついに聖杯戦争が始まってしまったのだと。

同時にセイバーとランサーを引き込んでうまく使えば、きっと無事に戦争を終結させられるだろうとも信じている。

美琴も御雄と同じで、元は魔術師であった。だが、十五歳の時に両親が事故で亡くなった。もちろん悲しかったが——同時に、もう魔導の修行を強いるものがないことに安堵した。魔導が嫌いだったわけではないが、その世界になじめなかった。

魔導を極め根源に至りたいだけなら、他の人の足を引っ張る必要はない。それなのに魔術協会は権謀術数の坩堝と化している。それに付き合うことが耐え難かった。幸いにして美琴の家はそう長い魔導の家系でもなかったため、親の死を契機に魔術協会を辞して聖堂教会に移った。

決して一枚岩ではなくても、神への信仰で結ばれていることに感じ入った。その時、保護者——むしろ支援者として名乗りを上げた御雄が養父となり、それからの美琴を助けた。

御雄も魔術協会から聖堂教会に移った立場であるから、放っておけなかったのかと美琴は考えている。

「最後が明とハルカになったら、どちらに勝ってほしいかね」

「……どちらかといえば明です。馴染みですしね」

碓氷と春日教会が友誼を結んでいる故に、明と美琴の付き合いも長い。それくらいの感情はある。

「まずは何事もないようにしなければならぬ。神秘の秘匿や後処理はお前に一任しているぞ、よろしく頼む」

「はっ」

監督役は御雄だが、その補佐を美琴が行う。サーヴァントの現界を確認する霊器盤は鍵のついた御雄の部屋にあり、明とハルカとの報告等やりとりは御雄が行う。

サーヴァント同士の戦いで、破壊された場所の修復や情報操作を美琴が行うと言う役割分担になっている。

だが、美琴の仕事は基本的に後始末で積極的に戦争自体に介入していくものではない（監督役はあくまで監督なので、非常事態でもない

限りこのように介入してはいけけないのだが)。美琴としてはもつと積極的に働きかけたい気持ちがある。

「お父様、私も何か連携でできることはありませんか？」

「連携に関しては私が行う。二人で行うと、お前には言ったが私には言っていないなどの行き違いが起こる。お前にはお前の仕事を全うしてほしい」

「……はい」

予想はしていたが、断られる。だが、御雄は話を続けた。

「聖杯「戦争」とは言うが、これは現実の戦争を経験したものが行う戦いではない。魔術師は戦争を知らない。戦争のやり方を知らない為に、そこにセオリーや常道が存在しない。要するに行き当たりばつたりの戦いになるために、逆に何が起こるかわからない。サーヴァントも歴戦の英雄が呼び出されているが、春日の地理に精通しているわけでもなく他の陣営を知っているわけでもない。他のマスターやサーヴァントについては実戦で正体を探ることになる。つまり、いくら慣れたサーヴァントとはいえあまりにも準備期間がないためにこちらも行き当たりばつたりの戦いにならざるを得ない。——それに私たちが連携を取っているのは六騎中二騎でしかない。予期せぬことが多い故に、後を始末するお前の働きは大事だ」

「はい」

とにかく始まって見なければわからない。

美琴は聖杯戦争に口出しすることを諦めてはいないが、様子を見ることに決めた。

「今日は寒い。早く中に戻りなさい」

御雄は教会に戻る美琴の背中を見送ると、荒れた庭を眺めた。聖杯戦争の序奏はすでに終わった。

「しかし……ライダーがやはり既にいはいとは……」

腕を組み、どこか惜しむようにその言葉は呟かれた。眉間に皺を寄せた神父は、自分も踵を返して教会に戻った。

## 第1幕 前哨戦

11月26日① 聖杯（ヒジリノサカズキ）の娘

今際の際に、男は思う。薄れゆく意識の中で、己の生を振りかえる。称賛された。憧れられた。当然、嫉妬もされた。

それは、その男が人々の思うとおりに「幸運」であったからに他ならない。

男自身もそれを認める。どのような行いを前世でし、想像を絶する幸運に恵まれたのかと人びとに首を傾げられたほどである。本人も、今振り返っても信じられないような、凶ったかのような時、人生の節目で幸運にであった。

しかし、どんなに幸運であろうと不幸であろうと死は逃れようもなく訪れる。

そして、権力の頂点を極めたものは常にその先に不老不死を求め

る。ただ、この男は違った。

不老不死を求めるのではなく、死後に別世界に行こうとしたのである。

男は仏なるものを信じ、死後、極楽浄土より迎えがくることを願って死の床についた。

死後、男は衝撃を受けた。あれほど固く信じていた浄土にたどり着いたのではなく、己が「英霊」というものになり、この世界を守護する一端を担う力となったことである。

そして男は思う。浄土には行けなかった。

その幸運を称揚された男は、己の生を振り返って自問する。

己は確かに幸運であったが、果たして真に「幸福」であったのだろうか。

「幸福」とは如何様なものか。そのことを思う度に、男は生前の一人の人物を思い出す。

生前、其の男に決して問うことのできなかつた疑問が、今でも胸に燻っている。

\*

(何だ今の夢……)

酷くぼんやりとした目覚めである。自分のものではない、遠い過去の夢を見ていたような気がする。

一成はとりあえず布団から上半身を起こすと、何か体のだるさを感じた。元々寝起きがいい方ではないが、いつもの布団で寝たのではなく全く違う布団で眠ったような、そんな違和感が体にある。

首を傾げながら、ひとまずテレビをつけると病院の話題が上っていた。駅から徒歩十分ほどの場所にある総合病院の話題である。何でも大きな医療ミス——患者の容体を管理する機器——に重大な欠陥があり、手術後の容体急変に気づかず複数人の死亡者が出たとの話が大きく取り上げられていた。

「物騒よなあ」

一成が食パンを焼きもせずベッドの上でそのまま貪っていると、傍らにアーチャーが姿を現した。もうワイシャツとスーツのズボン姿が異様に板についてしまったサーヴァントである。選ぶにももつとラフな格好をすればよいものだが、本人曰く「生前も正装することが多かった故、このくらいの方がむしろ楽なのだ」とか。

「ああ、命かかってんだから本当にな」

飄々としたアーチャーもこのような事件にはまともな感情を持つのかと内心思いながら、一成は答えた。

「全く戦うなど本来は私の役目ではないのだが、多少はやむを得ぬな、

全く」

「?何の話だ?」

「?聖杯戦争とやらの話だ」

アーチャーは別にテレビのニュースにコメントを付けたわけではなかった。

しかし一成としては今、そちらの話の方が聞き捨てならない。

「何かあったのか?」

「そなたも感じておろう。おそらく、聖杯戦争は始まっておる。つまり、全サーヴァントが召喚されたのじゃ」

「!?」

一成は噛んでいた食パンを噴出して噎せた。呆れた眼でアーチャーが見てくるが、気にしていられない。

「本当か!?!」

「斯様なウソをつく意味があるか?一成、そなたも感じておろう。もはやこの春日の地は、そなたの知る春日の地ではなくなりつつあるぞ」

今朝のたるさは気のせいではなかったということか。

人外の存在を七騎も呼び出し、夜な夜な人知を超えた戦いを繰り広げる土地は普通の土地ではなからう。

「そういうわけだ。遊んでられるのも今日の昼までじゃ。というわけで私は遊んでく「まてえい!!」

霊体化して出かけようとするアーチャーの首根っこを寸前でとらえる。文句タラタラであるのを全く隠そうとしないアーチャーを座らせて、一成はベッドの上に仁王立ちする。

「なんじゃ」

「なんじゃ、じゃない!作戦だ!俺たちが聖杯戦争で勝ち残るために作戦を練るんだよ!」

「ナンジャタウンとやらもいいのう」

「だからナンジャじゃない!!」

先ほどまでの寝起きの悪さはどこへやら、一成はエキサイトして



アーチャーを指差す。

だがアーチャーはやれやれと首を振る。

「全く、それなら昨日にも話したである。まずは索敵しつつ、共闘、もしくは休戦協定を結べる相手を探す。仮にセイバーなどがやたら強かったとするぞ。それをターゲットにして他サーヴァントと手を結び、セイバーを破る。強い一体を撃破する前に他のサーヴァントにも渡りをつけておく。こちらは宝具解放を控え、できるだけ同盟者が宝具を解放していくように仕向ける。こちらも同盟者が大体の概要を掴める程度には力を開示していく……」

「ちよちよちよ落ち着けアーチャー」

「そなたが落ち着くがよい」

滔々と作戦を述べる速さについていけなくなり、一成はストップをかけた。「昨日も聞いたけどよ、ややこしい！しかも俺たちが考えていることなんて他の連中も考えてるだろ」

「だろうな」

「じゃあもつと別の方策も検討したほうがいいんじゃないの」

「検討しようにも検討するための材料がなからう。敵はこんなマスターだ、サーヴァントだと妄想するよりも実物を見ぬと始まらぬ。つまり方策を考えるにも敵を知らねば意味がない。そして敵を知るには、夜をにおいて索敵を行うより他に無しつまり私はナウタイム遊びに行く」

一成は再び霊体化で消えようとするアーチャーの襟首を掴んだ。

「ただ遊びたいんだお前は!!っていうか、それじゃ俺外出れないけど!?!アサシンとかには一発で殺されると思うぜ!」

「む。そういうえばマスターの天敵とされるクラスがあつたのう。忌々しいことよ」

アーチャーは舌打ちをして肩をすくめた。聖杯戦争が始まった今、マスターを一人でふらふらさせていてはあつという間に殺されてもおかしくない。

しかしアーチャーは歪みなかった。

「なら今日一日は引きこもっておれマスター」

「何様だお前はアーーーーー!!!」

\*

結局アーチャーは一成の剣幕に折れ、豪遊を諦めた（アーチャーは金などなくても舞い込んでくる質だから無一文でも気にしない）。一成は家の食料のあまりの貧しさと、これからの戦いに備えて買い出しに出掛けることにした。一成は普段着のパーカーに着替え、アーチャーはスーツだ。はたから見たら謎の二人組である。

「そういえば一成、そなたは「高校生」とやらで学校に通わねばならないのではないか？」

アパートの階段を降りながら、アーチャーは一成に尋ねた。

「学校に行ってもいいんだけど、あんま行ってる場合でもないしな。昨日、先生には暗示をかけた」

「どのような？」

「ブラジルの親戚に不幸があったため二週間くらいいないっていう設定だ」

もうちよつと他になかったのかよ、とありありと顔面に書いたアーチャーを無視して一成はすたすたと千切れ雲の浮かぶ初冬の下を歩いていく。普通の買い出しならもつと近いスーパーを使えばいいが、今は学校へ持っていく水筒も壊れていたのでそれも買うためにシヨツピングモールに行くことにした。

駅周辺でもいいが、そこは小さい店がいっぱい入っている形なので日用品まとめ買いには向かない。また、駅近いスーパーは高級志向のスーパーだ。

多少歩くが、あとは上空を走るモノレール沿いに歩いてつくシヨツピングモールの方が割安だ。

一成は散歩がてら、今日夢に見たことを思いだす。普段なら夢など

時間が経てばあつという間に薄らいでいく記憶だが、不思議と今回の夢は頭に残っている。

マスターとサーヴァントは因果線<sup>パス</sup>で繋がれている為に、お互いの過去を夢として垣間見ることがあると言う。

「アーチャー、お前の過去を見たかもしれない？」

「何じや語尾の？は……それで、どのようなものを見た？」

「よくわかんねーけど、お前が死後は浄土に行きたかったって話」

「それだけか？」

「おう」

アーチャーはため息をついたが、特に一成に文句を言うことはなかった。

一成とて見たくて見たわけではないが、人の過去を勝手に覗くのは気分が良くない。

「全く聖杯ももう少し「ぷらいばしー」を考えてほしいものよな。ま、私がそなたの過去を垣間見ても文句など申すなよ」

「別にみられて恥ずかしいことはねえ」

一成は少し見得を張ったが、事実だった。小さい頃におねしよをしたとかいうことは皆共通だからきつと恥ずかしくない。だが、アーチャーは我が意を得たりと言わんばかりにニヤニヤしている。

「ほほう。だがそなたのベッド下は相当恥ずかしいことに……」

「アアアアチャーアアアア!!」

「若いってイイネ!というかそなたベッドの下とかベタすぎてつまらんぞー!」

謎のサムズアップをかまして、アーチャーは全力疾走で逃げている。

完全におちよくられている一成は、とりあえず張り倒すべく全速力で追いかけた。

謎の全力疾走によりあつという間にショッピングモールに到着した。サーヴアントゆえにアーチャーは涼しい顔をしていたが、この寒い季節に一成は汗だくである。ショッピングモールは駅から少し離れている為、敷地面積が広く二階建てである。一階には生鮮食品、日用雑貨、薬品、化粧品売り場、フードコートがあり、二階には衣料品売り場、本屋、子供用玩具や文房具の売り場がある。屋上は駐車場になっている。

かつては屋上の一面に子供向けの遊び場があったが、子供が転落する事故があつてから直になくなったらしい。

一成とアーチャーは当初の目的通り食品売り場を物色する。カツプラーメン、冷凍食品は常識だ。基本自炊をしない為このような食事はばかりなので、大変偏っている。ちなみに一成自身は料理ができるが、自分の為だけに作るのが億劫で今のありさまである。気づいたらアーチャーも自分で籠を持ってきてワインやら豚肉やら野菜やら雑多に買っている。

「お前料理できるのか？」

「ん？私の生きていたころ肉料理系は男もやるものであった故。あとくつくぱつどとかを見て興味がわいたのでな」

このサーヴアント、やたらと現代への順応性が高い。時代は違おうが同じ日本であるからか。あとどう見ても一成の買っているものより値段の高いものが多く、さらにそれをどこからか湧き出た金であつさり会計するのだろう。一成はささくれた気持ちを胸にしまって、己も会計に向かった。

このショッピングモールは十五年ほど前からあるもので、昔から春日の住民には親しまれている。一階の食品売り場で買い出しを済ませ、おニユーの水筒も手に入れた一成はさて帰るかと思つたところ、早速アーチャーが姿を消した。

「つったくあのクソサーヴアン……？」

全くもって自由なアーチャーに憤慨しながらも彼を探そうとしたところ、服の裾を何者かにつかまれた。

何かと思いい振り返れば、そこには十歳程度の女の子がいた。

艶やかな黒髪が腰まである、顔立ちの整った美少女である。肌の色が透き通るように白い反面、その目は血の様に赤い。だが、全体としてか弱さを感じさせる少女だ。

「な、なんだ？迷子か？どうした？」

「迷子なのはあなたの方でしょ？サーヴァントはどうしたの？」

鈴を転がすような声音に微笑む余裕など一成にない。一瞬にして肌が粟立ち、一成は荷物を抱えたままバックステップで少女から距離を取る。しかし、少女はにこにここと笑う。

「やだ、こんなところで戦わないわ。魔術師の戦いは夜って決まってるんだから。偶然、土御門のマスターさんを発見して、声をかけただけよ」

少女はくるりとターンしてみせる。雪のように純白のコートがふわりと舞った。神経を研ぎ澄ませて感じるのは、アーチャーの気配。アーチャーはそう遠くにいない。そして彼女がマスターならば、そのサーヴァントも近くに居るはずである。警戒を緩めず、一成は問う。「誰だ？」

「自己紹介は自分からでしょ？」

相手は既に一成が誰かわかっている風情である。くすくす笑う妖精のような少女を睨んだまま、一成は深く息を吸った。

「土御門一成。お前は」

透き通るような微笑みを浮かべ、少女は笑う。か弱さを感じさせる外見なのに、一成は同時に不敵さも感じた。

「キリエスフィール・フォン・アインツベルン。改造されても聖杯は聖杯。その日本式聖杯のためのマスターが私」

「アインツベルン——!？」

冬木での聖杯戦争そのものを始めた御三家のひとつ。力の転移・流転を魔術特性とし、ホムンクルスの製造を得意とする一族。その歴史

は千年を優に超える大魔術師の家系。一成の動揺をよそに、キリエは微笑む。

「言ったでしよ、魔術師の戦いは夜に行うものよ。今日は貴方に興味があつて声をかけてみたの」

「……？何でアインツベルンが俺に興味を持つんだ」

「あら、案外何も知らないのね。冬木の聖杯はアインツベルンの魔術——要するに西洋の魔術が基盤だから、西欧圏の英霊しか呼べないわ。だけどここ春日の聖杯は三十年前に冬木の聖杯を模倣して、さらに陰陽道でアレンジされているから日本の英霊しか呼べないの。……厳密に言えば違うのだけれどね。ともかく、陰陽道もとの陰陽五行説は中国から来ているそうだけど、陰陽道はそれを日本流にしたあげく別物にしたものだから」

三十年前に模倣されたことは初耳だが、その他の情報は聖堂教会から聖杯戦争の知らせがあつたと同時に聞いている。しかし、キリエスフィールはさらに衝撃の事実を口にする。

「そのアレンジの陰陽道部分はあなたの一族から拝借されているのよ。カズナリ・ツチミカド」

土御門の家が今回の聖杯戦争の勃発に関わっている。キリエスフィール・フォン・アインツベルンの言わんとすることはそれだ。一成はそのようなことを父母から一度も聞かされたことはないし、そもそも、この戦争に参加していることさえを離れた場所に住む父母には報告していない。

何故、土御門の家は新たなる聖杯戦争に手を貸すような真似をしていたのか。

そもそも、土御門の家の魔術回路は成長の限界を迎えて衰退に向かっていたのではないのか。

「つまりあなたは冬木の聖杯戦争で言う『始まりの御三家』なのよ。だ

からそんな残念な魔術回路でも、令呪が宿ったわけね」

だから望む最低ラインの成長にさえ達しない一成を見限り、魔導の教育を放棄したのではなかったのか。

「ちよつとカズナリ・ツチミカド？私の話を聞いている？」

いや、先ほどキリエスフィールは「春日の聖杯戦争は三十年前に冬木の聖杯を模倣し」と言った。三十年も前のことならば、もしかして関わったのは父母ではなく祖父、祖母であるのかもしれない。

成長の限界に達した土御門の魔導の血を絶やさぬために、彼らは聖杯を狙ったのか……。

「人の話を聞きなさいカズナリ・ツチミカド！」

「ぐおうぶ!!」

一成が沈黙考してしたところに脳天を直撃する衝撃。なんと、目の前の可憐な少女は一寸の容赦もなく一成の股間を蹴り上げたのである。ああ恐るべし 聖杯戦争、恐るべし、と一成は残念な辞世の句を頭に思い浮かべたが、なんとか根性で卒倒せずに足をぶるぶるさせるに留める。

かわいい子、可憐な子だなと思ったのはどこへやら、最早殺意しか浮かばない。

「このクソガキイ……」

「女性に向かって無視、さらにクソガキとはなっていないわ。お詫びのしるしに私をエスコートしなさい、カズナリ・ツチミカド！」

全く意味不明な命令を居丈高に発するキリエスフィールに、一成を眼を白黒させることしかできない。あまりの意味不明さに何か時間稼ぎとかその手のこと（稼いだところで何をするというのだろう）かと思ひ、己が従者に念話を飛ばす。魔力の状態から、アーチャーが交戦状態にないことくらいはわかるが、一体何をしているのか。

『アーチャー、お前なにしてるんだ!』

『おや一成。私はいまそちらにいるであろう少女のマスターのサーヴァントと相対しておる』

『ウソだろ!?!』

『ウソなものか。しかしマスター、これはチャンスかもしれない。己を知り敵を知れば百戦危うからず。魔術師の戦いは夜、となれば昼はそのマスターの人となりを探って見るが良い。こちらのサーヴァントも昼間から私と戦闘に至る気はないようだぞ』

アーチャーの様子は切羽詰まった感じではなく、むしろこの状況を楽しんでさえいるようだった。目の前のキリエスフィールは(今の金的蹴りには悪意を感じたが)特に今交戦の構えをとるつもりもなさそうである。

ならばこの少女の言葉に乗ってみるのも一つの手である。それに、土御門家を発端のひとつと言ったことは聞き捨てならない。一成は自分に落ち着けと何度も言い聞かせてから、改めてキリエスフィールに向き直る。

「……本当に今戦う気はないんだな」

「魔術師の戦いは夜って決まっているじゃない。本当はサーヴァントも連れてくる気はなかったのだけれど、一人じゃ危ないってついて来ようとするから」

少女は当たり前と言わんばかりに胸を張った。

「エスコートって……何しろってんだよアインツベルン」

「私のことはキリエ、で構わないわ。そうね、まずは何をするにもお腹をいっぱいしなければならぬと思うの」

要するに腹が減ったからうまい飯屋に連れていけとの仰せだ。幸いにしてここはショッピングモールで、二階にはチェーンながらも飲食店が複数ある。この貴族的な生まれの良家の少女にそのような庶民の味が合うかは全く保証できなかったが、それは現在絶賛庶民



まっしぐらの男をエスコートに選んだ彼女の判断ミスであろう。

「……わかった。何か食べたいものは？」

「あなたの判断に任せるわ、カズナリ・ツチミカド」

「女のなんでもいいはアテになんねーんだよ」と心の中で呟きながら、一成は少女が差し出す手を取った。

ショッピングモールの二階にある『丼幸』<sup>どんさち</sup>という海鮮丼を売りにしているチェーン店の奥のカウンター席に、一成とキリエは並んで座っていた。平日の昼間なのでそこまで混んではない。

「こんな雑多な店私にふさわしくないわ」などと高飛車そのもののセリフが飛んでくるかと思いきや、「これが日本の『丼』というもののね。上品とは言えないけれど、主菜と主食を同時に摂取し時間を短縮する。労働を旨とする者には適した食事ね」とわかるような、わからないようなコメントが返ってきた。表情を伺うに満足しているように見える。

食べるスピードには大きく差があつて、一成が食べ終わったところにキリエが三分の一という状態である。それでも満腹ではないらしく、少しずつ食べ進めている。一成は頬杖をつき、ちまちまと食べるキリエを眺めた。

アーチャーは敵を知れば百選危うからずと言っていたが、何を聞くべきか考えあぐねている。

あぐねた末に、どうでもいい話ばかり口から出てくる。

「エスコートされたいなら知り合いとかを当たればいいだろ、お前」

「私は聖杯戦争のために日本に来たのよ。ここに知り合いなんて他にいないわ」

「いや俺もお前の知り合いとかじゃねーんだけど……あれ？お前って日本生まれじゃないのか？」

名前は外国人のものだが、外見は服装を和服に整えれば完全に日本人形のようなキリエである。一般人からなら日本生まれ日本育ちに

見えるかもしれない。キリエは水を飲んだ。

「日本生まれも何も私は日本式聖杯戦争のためだけに作られたホムンクルスよ。聖杯戦争のために作られた私がそれ以外の事で外に出る用なんてないわ。だから日本は初めてよ」

少女は来日が初めてどころか、生まれた家をでることそのものが初めてだと言いつつ放った。アインツベルン。錬金術を得意とし千年の歴史を数える大魔術師の家系。冬木の聖杯戦争を始めた御三家の一。冬木の聖杯が解体されてからも、彼女の一族は聖杯をあきらめることは無かったのだ。

あくまで聖杯を求める彼らは、再び聖杯戦争を再開すべくこの春日の地にて、聖杯の改造に取り組んだ。キリエは少しずつどんぶりを消費しながら言う。

「でも三十年前に模倣し改造された聖杯による聖杯戦争が起こるかは疑わしかったから、もしこれがなかったら日本に来ることもなかったわね。三十年待った甲斐もあるというものだわ」

千年を経てなお諦めぬアインツベルンの生み出したホムンクルス。魔術回路が成長の限界を迎えて魔導を諦めようとしている土御門の家。時があまりにも長すぎ、その期待を背負っているだろう少女にかける言葉を、一成は持ち合わせていない。何を言うべきが迷っていると、一成はふと違和感を覚えた。

「……三十年待った甲斐がある?」

「そうよ? どうしたのカズナリ・ツチミカド」

「お前、歳いくつだ?」

「女性に年を尋ねるなんて失礼よ、カズナリ・ツチミカド」

「いくつだ」

「人の話を聞きなさい。答えてあげるけど、私は三十二よ?」

「ロリババアかよ!!」

全国の三十代女性を敵に回す発言をかましながら、一成はテーブルに突っ伏した。

当のキリエはロリババアの意味を分かっているらしくぽかんとしていた。

腹を満たした後は、特にプランのないため一成の標準コースをたどった。すなわちゲーセンである。当然ゲームセンター訪問が初めてでまごつくキリエを引っ張り、クレイゲームから音ゲー、クイズゲーム、対戦ゲームまでを教えた。特に熱を上げていたのはクレイゲームで、「あれ握力弱すぎじゃないの!？」などとかなりエキサイトし、こっそり強化の魔術を使おうとしていたくらいである。「私が使え終わったら解除するし、この程度の簡単な魔術一瞬だから一般人にもばれないわ」と胸を張っていたがそれはズルだと、一成が懇切丁寧に諭す一幕もあった。

ショッピングモールを出た後はその近くのおいしいパン屋や、一成の通う高校を見せて回った。駅に行けばもつと栄えているのだが、逆に店が多すぎて目移りしてしまいそうだった為に却下した。

それでもキリエには珍しいものばかりだったようで、あれはなんだこれはなんだといちいち一成に尋ねていた。

公園を通りかかった時には、例によつて興味を持ったキリエは一成の袖を引っ張った。もはやエスコートもへったくれもなく、ガイドとして引き図られているに等しい。

あとついでに当初は買い出しのためだけに来ていたので、キリエに引きずられている間、一成はずっと大荷物を抱えたままであった。

「あの区域はなんというのカズナリ・ツチミカド！行きましょう」

「はいはい……」

夕暮れの早くなる時期、もう日が橙色に染まっている。それでも元気いっぱいなキリエはまずブランコに駆けだした。本人は三十二だと言っていたが、この行動の無邪気さからはやはり年下のあどけない少女にしか見えない。

三十二年もの時期を同じ家の中で暮らし、人に傳かれて生きてくればこのようなものなのだろうか。

一成の心中をよそに、キリエはブランコにのりどう動かすべきか困っている。

「これはいったいどうやって動かすものなのかしら」

「はいはい、ちよつと待ってなお姫様」

どさりと無造作にパンパンになっているビニール袋を地面におろし、一成はブランコに腰かけるキリエの背を押してやる。「揺れるのに合わせて、どう足を動かしたらもつと動くかやってみろ。なんとなくでいいから」

背中を押そうと思ったが見本を見せるために、一成もとなりのブランコに腰かけ揺らす。傍でキリエが歓声を上げて、それを見習い足を投げ出し、折り曲げる。その動作を繰り返す。

歳の離れた妹がいたらこんな感じなのかもしれないと、一成は思う。魔術師の家系は一子相伝であり、特別な例でもない限り兄弟はいない。たとえいたとしても後を継がない方は魔術のことを一切知らされず、一般人として過ごす。それは引き渡される魔術刻印が分割できず一人から一人にしか渡せないため（分割することは研究結果を真二つ、半分に減らしてしまうことでもある）であり、神秘の秘匿のためだ。

「なあお前、聖杯を手に入れたら何をやるんだ」

不意に口をついて出たのは、聞くまでもなかった問だった。アインツベルンの聖杯獲得の目的は聖杯の獲得。

それだけを悲願とし続けた一族だからである。

「それはさつき教えたはずだけど？アインツベルンの願いは聖杯を得るって」

「お前の願いはないのか」

「だから聖杯を得ることと言ったわ」

「それはお前の一族の願いだろ」

キリエはあどけなく笑う。背中に夕日を背負い、一成の事を知ったかのように言う。軽率なことを聞いたと、今更ながら一成は後悔した。見るものすべてに目を輝かせる少女はともすれば本当に無垢な少女に思えてしまう。そんな少女が、「聖杯を求めろ」という千年も続く呪いに無理に縛られているように見えてしまった。

しかし、キリエスフィール・フォン・アインツベルンは違う。外界に出たことがなかっただけで、その中身は魔術師。何代も魔術を重ねて生み出されたホムンクルスは、そのまま言葉を一斉に跳ね返した。

「私の一族の願いは私の願いよ。なぜなら私はそのために作られたホムンクルスだから。私の事をとにかく言うのは勝手だけど、魔術師はそもそも己の家に縛られるものよ。だからこそあなたも聖杯戦争にいるのでしょ」

一成の願いは根源へ至ること。しかし、その願いの根本にあるのは、廃れ行く土御門の家を放っておけないから。誇りある魔導の家、それを己が代で耐えるなど、我慢できなかつたからだ。

果たして、その願いは己の願いなのか、家に縛られた願いなのか。一成の心中を知ってか知らずか、キリエはブランコを降りて彼に近づいた。

「今日はありがとう、カズナリ・ツチミカド。粗忽な面は多かつたけれど、なかなかのエスコートぶりだったわ」

「そりやどうも」  
「名残惜しいけれど、そろそろお別れね。そうしないと夜になってしまふもの」

——魔術師の戦いは夜って決まってるんだから。出会いがしらに放たれた、キリエの言葉が一成の脳裏によぎる。

「今日のエスコートに免じて、今は見逃してあげる。できれば次も昼間に会いたいわ」

何の裏表もない笑顔。そう、きつと本当に裏はないのだろう。「見逃してあげる」「昼間に会いたい」も共に本心。彼女ほどの魔術師ならば、一成のような未熟な魔術師など片手で始末できるといふ宣言。

「ならば此度はお引き取り願おうか、アインツベルンの姫君」

情けないことに一成まで驚いてしまったのだが、彼の隣にはアーチャーが姿を現していた。いつもは飄々としていて掴みどころがないのに、今は珍しく不機嫌である。

キリエは丁寧にワンピースの裾を持ち上げ礼をする。

「あなたのマスターはなかなかの紳士よ。長く借りてしまい失礼をしたわ」

「お褒めに預かり光栄だが、あまり私のマスターを弄ばないでいただきたいものだ。このマスター、単純で扱いやすいのはいいが他のマスターにまで容易く扱ってもらっては困る」

さりげなく一成をこき下ろしながらも、アーチャーは彼の一步前に出る。

キリエを見ながら、その奥もまた注視している。キリエの後方に、キリエのサーヴァントがいるのだ。

「マスターを護るのもサーヴァントの職務よ。私としては弄んだつもりなどないのだけど……それじゃあ、また」

優雅にコートを翻し、静かに公園を後にする。アーチャーは一息入れるが、その雰囲気はまだ不機嫌さを纏ったままだ。いや、怒っているのだ。

「おまえ、いつからいたんだ」

「そなたとアインツベルンの姫がこの公園に来た時からよ。マスター」

そんなことは些事と言わんばかりに、アーチャーは言う。

「そなた、その分じゃ気づいていなかったようだから言っておくが、あ

の姫、おそらく今日何度かお前に魔術をかけようとしていたようじゃ。私は探れとは言ったが、馴れ合えとは言うておらぬ」

思いもしなかったことに一成は息をのんだ。キリエが魔術を使うそぶりなど——ゲーセンで一回あったが、一成にかけようとするそぶりはなかったはずだ。

アーチャーは大きくため息をついた。

「やはり気づいておらなんだか。あの姫の体の魔術回路の量は異常ぞ。恐らくホムンクルスゆえに聖杯戦争用の改造が施されておるのだろうよ。姫君のサーヴァントとは戦っておらぬが、注がれる魔力もかなりの量であった。それだけの魔術師、ということだろうよ」

簡単な魔術なら詠唱さえ省いて、目を見るだけで発動できるものも存在する。

とすれば、キリエが掛けてみたのはその手の単純な魔術のはずだ。

「まああの姫は本気でお前をどうにかする気があったようではなかったから放っておいたが。多分お前の魔術に対する抵抗力、もつと言えば陰陽道術式のを確かめておきたかったのかもしれないな」

アインツベルンの西洋魔術とは系統を全く異にする陰陽道魔術。土御門家の陰陽道は式神（使い魔）の使役と呪詛を専門とするが、陰陽道の歴史故に、神道魔術とも近いいために被い清めることにも優れている。

そして一成の起源は「保護」であり、それも相まって一成でもある程度の魔術は意識しなくてもレジストされる。生まれつき対魔力が高いのだ。

「そなたはどうやらそこそこ対魔力はあるようだが、不用心に過ぎるぞ」

「……わかった、不注意だった」

あまりアーチャーに対して謝りたくなかったが、不用心だったのは厳然たる事実である。

一成は嫌そうにしながらも頭を下げた。アーチャーは怒る気もないようで、そういえばと話を変えた。

「そなた、一日アインツベルンの姫と戯れていたものであろう？何か手がかりになることなどあったか？」

戯れていたと言うかもはやパシられていたに近い気がするが、それは言わぬが花だ。ぶつちやけた話雑談に近い話しかしていないが、それでもキリエの在り方を多少は理解できる。

「……とりあえず、同盟とかは無理な気がする。キリエは聖杯戦争のために作られたんだろう。マスター適性も半端じゃないだろうし、自分が勝者になることを疑ってない感じで、俺たちと組むメリットを感じてなさそうだ」

「うむ。私も同意見よ。現状は無理で、あとは状況次第だのう。個人的にはあまり共闘をしたくはないが、戦力としてはかなりものがある。流石は聖杯戦争のためのマスターよな」

「？したくないってなんで？」

一成は首をかしげて尋ねると、アーチャーはわかりやすく苦い顔をした。

「姫のサーヴァントよ。嫌いだ。汚らわしい」

ズバツと好みを言ってくるアーチャーに一成は驚いた。今まで何回か作戦を話したが、アーチャーの好みや私情を差し挟んでくることは一回もなかったからだ。

「嫌いつてなんだよ。つていうかどんなサーヴァントなんだよ」

「姿かたちはあのアインツベルンの姫の服装を巫女装束に替えて成長させたような感じで見目麗しい女よ。だが、あれは間違いなく人ではなく魔物の類じゃ」

蛇蝎を見たかのように険しい表情で、アーチャーは吐き捨てた。

「刃を交わせばもう少し情報もあったろうが、何分昼であったゆえにな。クラスまではわからなんだ。すまぬな。今日はもう帰ろうぞ」

今更ながらアーチャーも買い物袋を持ったままだ。お互いに膨れた袋をひっさげて家路につくことにする。アーチャーが料理をしたいと言っているから、その腕を見るのもいいだろう。



11月26日② 暗殺者

昨日、教会にて神父が聖杯戦争の開催を宣言してから丸一日が経過した。

昨夜からランサーが春日の街をうろつき始めた一方、セイバーはやることもなく碓氷邸にて時を過ごしていた。

朝になり——とはいっても既に十時を回っているが——借りた部屋から出て階下に降りるが人の気配はない。

ちょうど一時間前、マスターである明がセイバーの部屋にきて、こう告げた。

「昨日、ランサーは収穫なしだった。あと、私昼は礼装とかを整えたいから地下室に籠ってる。集中したいから、何か用がない限りは入ってこないでね。昼はすることがないから、セイバーの自由にしていいよ」

それから、セイバーはリビングのソファに座って一時間が経過している。

昨夜はランサーが夜中に春日市をわざとわかるように気配をまき散らしながら闊歩したが、挑発に乗ってくるサーヴァントはいなかったそうだ。とはいえ全サーヴァントが揃ったばかりで、誰も彼もが様子見を決め込んでいるのだろう。

(……真名は秘匿すべきものだ。だが……いや、)

セイバーは立ち上がり、一瞬マスターを探したがすぐに言われたことを思い出した。

後で伝えればよいと、彼は一階にある物置へと向かった。

\*

鬱蒼とした森の中。日は疾うに沈み切り、闇に落ちている。それで

もこの森の向こうに山が聳えていることがわかる。山の麓である森で、黒いジャケツトを羽織った男は、ぶつぶつと何事かを呟いている。

昨夜放った使い魔が偶然とらえたのは、敵サーヴァントの一騎。

アサシンのマスターは、使い魔を通じてランサーの姿を観察していた。

「これがランサーか。それにしてもでかい槍だな。呪布を巻いて宝具を隠してるのか」

「おーい、本当にここをねぐらにするのかー？」

「もう少し映像が鮮明に欲しかったな……低級の使い魔はこれだから」

「霊地としてとんでもないのは確かだが、すぎすぎて逆にお前が魔術つかうのに影響がありそうならいだけ？」

「いや、誰かが妨害の魔術をかけているのか？」

「なーんかココ薄気味わりーんだよな」うるさい！使い魔風情は黙っている!!」

とんでもない剣幕で一喝されて、アサシンはへいへいと首をすくめて黙る。

アサシンは百八十センチを超える体躯に黒い雨合羽を羽織っている。霊体化していれば服など気にする必要はないのだが、いざサーヴァントと戦う段になり実体化すると、服がかなり目立つので、マスターから着ていると命じられたのである。実際召喚時のスタイルだけで真名を看破されかねないので、アサシンにもとより異存はない。隠れないアサシンなどアサシンではない。

ただ彼の腹に据えかねるのは、このマスターの性質である。マスターは触媒を使用して英霊を召喚した。だが、召喚しなかった英霊はこのアサシンとは別の英霊だったのである。

要するに、召喚に失敗したと言うことになる。

さらにこのアサシンにとって悪いことには、このマスターは非常に魔術師らしい魔術師だったことだ。

「英霊だろうと、サーヴァントとして召喚したからには使い魔。言うことには絶対服従」が考えの大前提としてあるのだ。

ただ、サーヴァントの多くは生前偉業を成した人間や、多くの信仰を集めた者である。そのような存在が、たとえ使い魔的存在として召喚されても簡単に言うことを聞くわけがない。

アサシンのマスターは魔術師としてありすぎるあまり、その簡単な事実を見落としていた。

そして、アサシンは死後に伝えられた伝説によりこのように居丈高なタイプのマスターには腹が立って仕方がないのである。ぶつちやけた話、アサシンは心の中でマスターを裏切り他のマスターに鞍替えする算段を考えている。

しかし始まったばかりの聖杯戦争で、他にどのようなマスターがいるかもわからない状態であるため、アサシンの裏切り工作はまだ白紙である。後先考えず殺したところで、依代（マスター）なきサーヴァントは消え去るだけだ。

「……まあいい、とりあえず工房を立てるには……山小屋等あればいいんだが」

今、彼らがいるのは春日市中心地から車で一時間ほどの場所にある大西山という山の麓だ。

予てから春日随一の霊地と有名なこの山を拠点とするのは、聖杯を降霊する点でも領ける考えである。

ただし、アサシンの忠告したようにあまりに魔力が強すぎて魔術に悪影響を及ぼす場合がある。この地に漂う大量の魔力が魔術行使に影響を及ぼし、悪くすれば魔術回路がオーバーヒートしてしまうのだ。魔術回路は術者の内臓器官と深く結びついており、回路が焼け付くことは内臓が焼け付くことと同義である。

春日の地の管理者である碓氷家が家を此処に構えず、第二の霊地を選択したのはこれが理由である。

「アサシン、適当な小屋がないか探してこい」

へいへい、とこれまたやる気なさそうにアサシンは返事をした。と、アサシンの耳が何かを捉える。

「おい、なんか来るぞ」

アサシンがすつと指差した先。深い森の闇に包まれている。そこからかさかさとした音がする。人が歩いてくるような音だ。訝しんだマスターは手にしていた懐中電灯を音のする先に向けた。

「きゃ」

そこには、一人の女が立っていた。薄着で夜を歩く人間は皆無である時期のため、コートを纏いブーツを履いた長髪の女だ。こんな山中、しかもこんな夜更けにいる女など尋常ではない。当然アサシンは違和感を覚えるが、違和感があるだけだ。

もしマスターであれば、アサシンのマスターが感じ取っているはずだ。マスターは懐中電灯で女の顔を照らす。稀に見る美貌であることがこの闇の中でもわかる。

「すみません、道に迷って、気づいたら夜になってしまつて……」

可細い女の声は震えていた。マスターは魔術を使用していることを見られなかったことを安堵し、薄ら笑いを浮かべながら女に近づいた。しかし、それよりもアサシンが人ならざる速さで挙動し、マスターと女の間を滑り込む。

刹那、森閑とした静寂に鮮血が飛び散った。

「オメー、サーヴァントだろう！」

アサシンの抜いたのは小刀。その小刀が女の手のひらを切り裂いて血が舞った。しかし浅手であり女は引く様子がない。アサシンは両手に携えた小刀を振るい、女を切ろうとするが素早い身のこなしで避けられる。

女は小さく舌打ちしたが、アサシンの小刀と打ち合おうとはしない。

その視線はアサシンの脇を抜けた先——はつきりとマスターを捉えている。目的はマスター。

女は拳を握りしめ、アサシンの攻撃をかいくぐりながら未だに隙を狙っている。このまま斬る——そうアサシンは刀を振るったが、動きが見切られて腕を掴まれる。

アサシンより頭一個以上小さい女の力とは思えぬ強力で振じられ、

アサシンは小刀を取り落とす。

振り返ったアサシンの眼の端にすっかり腰を抜かしているマスターの姿が映る。

「おい！しつかりしろ！腰でも抜けちまったかア!？」

微かに笑いを含ませてアサシンとしては叱咤を加えたつもりだったが、マスターには侮辱としかとられなかったようだ。顔を歪ませながら、ゆっくりと立ち上がる。

もともとアサシンはサーヴァント対サーヴァントの一騎打ちに強いクラスではない。気配を遮断し、サーヴァントの依代たるマスターを闇より葬ることを得手とする暗殺者（アサシン）である。

片腕を折られる——アサシンは空いた手を雨合羽の中につっこみ、黄金の太刀を抜く。

女は目を見開き、あつという間にアサシンの腕を放して、驚くべき俊敏さで距離を置いた。

今までのか弱い声はどこへやら、女のサーヴァントは冷えた声で告げた。

「時に救われましたね。アサシンのサーヴァント」

「お前は誰だ？サーヴァントだろ」

肩で息をし、かろうじてひっかかった雨合羽をかき寄せてアサシンは言う。

しかし敵のサーヴァントは返答をせず、そのまま森の闇へ姿を消してしまった。

\*

教会とハルカと共闘の内容は、まずはランサーが敵の情報を集め真

名を明らかにしていき、セイバーが確実に葬り去るというものだった。そしてセイバーは名が売れすぎていること・真名の秘匿を理由に、初めの段階では敵サーヴァントは矛を交えないことになった。た。

確かに何時破られるかわからない共闘だが、聖杯戦争が始まってからまだ一日だ。セイバーはそれを悠々と破った。

午前中から地下室の片づけと礼装の整備をしており、途中そこで昼寝までしてしまった明が異変に気付いたのは日もとつぷり暮れてからのことだった。地下室なので時計で時間を確認し、一度上の階に戻ろうと思った矢先である。

サーヴァントが戦闘で通常より激しく魔力を消費すれば、それはすぐさまマスターに伝わる。明は通常とは異なる魔力消費から、セイバーが何かしらの戦闘状態にあることをすぐさま理解した。

明は念話でセイバーに戦闘停止を命じたが、まるでセイバーは聞く耳を持たない。仕方なく、明は最後の切り札を切りかけた。令呪を使うと念話で告げると、戦いを続行していたセイバーも流石に焦り、急ぎよ戦闘を止めた。

それから幾分も経たずして、セイバーは昨夜明が貸したコートをロボロにして戻ってきた。

コートの下はいつもの衣袴でもなくジャージでもない。おそらくはスカート。

しかし、服装は置いておく。珍しく本当にモノを言いたげな明と、顔色を微塵も変えないセイバーが碓氷邸の玄関で対峙する。口を開いたのは奇しくも同時だった。

「何故邪魔をしたマスター」

「何やってんの？」

明はかぶったことに驚き一瞬怯んだため、セイバーの語る番となった。

「サーヴァントとマスターは視界を共有できる。俺は共有を否んだ覚えはなく、様子はマスターも見られたはずだ。俺がアサシンのサー

ヴァントを武器なしで圧していたのを知らぬはずはない。アサシンのマスターも戸惑っていてあのままやり続けていれば殺せた」

それをなぜ止めた、と言わんばかりのセイバーに明も言うことがある。

「教会で共闘の約束をしたでしょ？セイバーも領いてたよね？序盤のうちには真名秘匿のため戦わないって約束だったでしょ」

セイバーは少し意外そうな顔をしたが、全く悪びれずはつきりと言いつ分を述べる。

「マスターも言っていたはずだ。あのエーデルフェルトも教会の連中も味方なわけではないと。もちろんランサーたちの集めてくる他サーヴァントの情報は受け取るが、その間殺せるサーヴァントを見つけたならばさっさと殺した方がいいだろう。それに、アサシン一騎を殺したらランサー陣営も喜ぶだろう」

明は教会とエーデルフェルトの関係をできるところまでは円滑に進め利用しようと考えていたのだが、セイバーは最初から共闘に従う気はなかったのだろうか。確かにエーデルフェルトとの共闘には難色を示していた。

だが、相手のランサーを買っていたし、利用する関係ということに納得していたように見えた。しかし、それも協力する振りをするために装っていたと言うのか。セイバーは平然と言葉を続ける。

「既に他のサーヴァントも召喚され偵察などに出ているハズだ。ならば様子見を決め込むよりも精力的に索敵をすべきだ。敵の情報はできる限り早急に集めるべきで、後れを取るわけにはいかない。しかし、真名秘匿が重要なのは了解している。だから俺は剣を使わず臨んだ」

セイバーの言うこともそれはそれで尤もである。だが、現在教会とランサー陣営と手を結んでいる状態にあつて、明としてはいきなり足並みを乱すような真似をしてほしくはなかった。

「・・・アサシンを殺せた、つて言ってるけど、あつちにも宝具がある。それを使われたらどうなるかわからない。真名を知られないことは

大切で、それならば確実に闘わないほうがばれない。．．．いや、そもそも私たちは協力するってことになってたんだよ。セイバーが乗り気じゃないのは知ってたけど、だったらもつとその強く言えばよかったのに」

「ランサーの得てくる情報は貰う。俺が得た情報を流してもいい。だが俺はおとなしく穴熊を決め込むつもりはない」

「ならあの時自分も偵察に出るって主張すればよかったのに」

「言いたいことがあるなら教会で主張すればよかったのに、セイバーはいなかった。」

否——セイバーは共闘に賛成するつもりが無かったからこそ、出なかったのかもしれない。

教会への道すがら、セイバーは共闘に対し否とも諾とも言うてはいない——。

「最初はそれでもよいかと思った。しかしやはり他のサーヴァントが動いているときに俺だけが時間を持て余すのもどうかと思った。よってそのことを告げようと思ったが、マスターは今日は魔術の礼装とやらで忙しいと言っていただろう。事後に伝えようと思っていた」

その口ぶりから、この件については間違いなく「良し」との返事がもらえるだろうとセイバーは思っていることがわかる。明が口を差し挟むよりも早く、セイバーはさらに続けた。

「索敵は一人より二人のほうが見つけられるだろうし、真名については分かっていると思うが——俺は先ほどの戦闘で剣を使っていない。空も飛んでいない。そして相手は俺を女だと思っていよう。どうとでもできる」

「でも、いきなり共闘の約束を破ることになる。私がいいよっていても、神父たちが良いっていうか」

明への報告が後になったことはまだしも、教会へ話を通しておかないのはよくない。この件に関し黙っていられるのなら明の胸一つに収めておくが、教会により放たれた使い魔が、街中に散っているのだ。

特に夜の土御門神社、大西山という霊地には念入りで見ているだろ



う。

他陣営も使い魔を放して偵察を行うこともあろうが、それとて魔力を使う。実際の戦いの時に備え、大量の使い魔を放つことはしない。

だが、教会は戦いに参加しない。監督の一環ということで、神父は正々堂々多くの使い魔を春日に放っている。

神父が堂々と魔術を使っているのは如何なものかと明は思うが、そこは既に教会と何かしらのやり取りがあったのか平気で使っている。長年抗争が続いているということは、聖堂教会と魔術協会はそれだけ近しいということでもある。

しかし、セイバーは教会がどうのという話を全く歯牙にかけていない。

「先手必勝、そもそも、利用しあうと言ったのはマスターだろう。利用しあうだけならば、どちらが見捨てるのが早いかというだけだ。俺は明が良いといえばそれで良い」

セイバーにとつて一番の目的は勝つことだけで、間の過程は本当にどうでもいいのだ。頭を殴られたような衝撃を覚えつつ、明は肩を落としてセイバーを見たが、瞬間肌が粟立った。

「それとも、マスターは俺よりもランサーの方が信じるに足ると言うのか」

あの目。召喚してセイバーを教会に連れ、明の願いがこの国の滅亡を願う類だった時はと告げた時の冷厳な瞳。一切の感情が消え失せた眼差しだ。

しかし明は負けじと息を吸い込み、セイバーを見返した。

「……そんなこと言ってない。だけど、今は共闘に従って、夜の偵察はランサーに任せる方がいいと思う」

いざというときのために力は取っておくべきであり、最初から全力で闘えば魔力も足りなくなる可能性がある。セイバーが戦いの天才であることは承知だが、彼は魔術師ではない。これは魔術師の生み出

した大儀礼であり、魔術師の戦いでもあるのだ。夜の寒気と共に、糸がぴんと張りつめたような緊張が満ちる。

「……わかった」

思い切り不承不承という感じではあるが、セイバーは頷いた。仮に納得していなくても本当にしばらく行動を慎んでくれるなら、明はこれ以上うるさく言う気はない。

ただ、釈然としない。これで円滑に戦いを進められればいいのだが、まだ何も解決していないような気がするのだ。

明の隔靴搔痒の気持ちに気づかず、セイバーは思い出したように口を開いた。

「あと、俺もマスターに対して謝らねばならないことがある。アサシンと交戦した件だが、本当は一撃の元マスターを殺して戻ってくるつもりだったのだ。だが、失敗した。マスターの方針を鑑みれば、その時点で戻ってくればよかった」

謝ってほしいのはそこではない。明は混乱した頭を落ちつけようと、他に聞いておかなければならないことへ話を変えた。

「……そういえば、なんでアサシンの位置を知ってたの」

「知っていたわけではない。あの大西山とはかなりの霊地——一度偵察に行ったが、何か気になったから再び足に向けた。前言った時も何か臭うと思っていたが、アサシン陣営が何か工作を行っていたからかもしれないな——とにかく、最初から交戦するつもりではなかった」

偵察に向かったところにアサシン陣営がおり、セイバーのスキル「偽装」で女をサーヴァントとしての気配を消し、装い素手でマスターを殺そうとしたが失敗し流れでアサシンとの交戦になった、というのが実際の経緯らしい。

勝手に動いたことも問題だが、本当に偵察だけならそこを拠点とするマスターを発見した時点で戻ってくればいい話だ。何も今戦う必要はないと、明は思う。

殺せなさそうだったら引き返したが、殺せそうだったから襲った。

セイバーの言いたいことはそれだ。

兎に角、セイバーは「マスターがそう言うならば従う」と言った。ひとまず話をついたと見なし、お互いに体を休めることにした。家に入り、めんどろなのか明のコートを脱ぎもせずセイバーは独り言のように言う。別に明に聞かれようと聞かれまいと、彼としてはどちらでもよい話なのだろう。

「それにしても、セイバーとは面倒なクラスだな。索敵能力は高いわけでもなく、気配遮断ができるわけでもなく、宝具の威力は大きいが溜めが必要。この聖杯戦争で実際に戦っている時に溜めの時間などであるわけもないだろう。溜めている時にやられた、など全く笑えない」

生前の俺ならば時間差なしで撃つことができたかと呟く。

サーヴァントは英霊の劣化コピーであり、強さは伝説の地に近いほど、マスターの魔力が高いほど生前の強さに近づく。つまりサーヴァントは今より生前の方が強い。

「セイバーは一応『最優』のサーヴァントなんだけど……」

聖杯戦争を戦おうとするマスターは、できるだけセイバーのクラスの英霊を召喚したがる。明は聞いた。基本パラメータが魔力以外は最高ランクで、相応しい剣にまつわる伝説を持つ英霊でなければ呼ばれない誉れあるクラス、のイメージなのだ。

「そうらしいな。しかし結果として正々堂々だろうと汚い手と呼ばれるものであると、結果としてやることは変わらない。他六騎——いや、五騎を皆殺しにできるならばセイバーだろうとアサシンだろうと同じだ」

あまり武士の誉れや騎士道（騎士道は日本にはないが）に関心のない英霊には、セイバーだろうがなんだろうが関係ないのかもしれない。というか、そんな純粹に不思議そうな目を向けられても明には何故セイバーになったかまではわからない。明のしたことは、触媒に草薙剣を使っただけである。クラスまでは選べない。

「それにサーヴァントは普通全盛期の姿で呼ばれると聞いたが、ならば何故俺はこの姿で呼ばれたのかもわからない」

「え、それが全盛期の姿じゃないの」

明も少々疑問には思っていたのだが、セイバーの生きた時代は人世とはいえ神威の強い時代である。そういうものかと思っていた。日本武尊といえれば成長する前は可愛らしい女子にも変装できる美少年、成長後は凛々しい青年というのが伝説上の話だから、セイバーの言葉のほうがイメージ通りではある。

「肉体的全盛期はこの姿から数年後だ。これはまだ成長期の直前とあったところだ……わからんな」

私はお前の方がわからんわ、と明は心の中で呟く。何度も言うが、英霊とは生前になした偉大な功績が伝説として残り、信仰の対象となった英雄がなる存在である。

今更ながらそのような前途有望かつ多難な人生を送ったものが、一筋縄でいく人格だろうか。

明は召喚した次の日に、波止場で安心感を覚えてしまった自分を激しく悔いた。

そんな楽に事が運ぶはずなどない。

明がこれからの戦争に多大な不安を抱いたのとは裏腹に、セイバーは言いたいことを言っさつさつと自分の部屋に戻ってしまった。

## 11月27日 各陣営模様

セイバーの独断行動の次の朝、無駄に広い食堂にて卵焼きをスクランブルエッグにして誤魔化した朝食をとりながら、明はニュースを見ていた。

大きく取り沙汰されているのはこの春日市の一家惨殺事件である。昨夜未明、春日市の住宅地に住む四人家族が惨殺されたという酷い事件だ。四人が四人ともまるで大きな力で拉げられたように体が破壊されていたと報道されている。どのような殺害方法なのか、まだ警察の調べでは判明していないようだ。

その上、その家族の住まう住宅は半壊状態で、爆弾が使用されたのではないかとの話まで持ち上がっている。その癖、その異変に気付いた者は誰ひとりおらず、発見されたのは夜が明けてからだという。

一昨日には春日の総合病院で大きな医療事故があったと報道されたばかりであるのに、立て続けに不審な事件が起きている。

「まさかどつかのバカマスターが人食いでもやってんじやないよね……」

サーヴァントはマスターから供給される魔力で現界をしている。そしてマスターの魔力量と質により、筋力・耐久・敏捷・魔力・幸運等のパラメーターランクにも影響が及ぶ。そして魔力はマスターからの供給で足りなければ、人の魔力——生命力、すなわち魂を食らうことで得ることもできる。

弱いサーヴァントを強化する目的か、それとも元々強いサーヴァントを更に強くする目的か、サーヴァントに人を食わせる行為はありうるのだ。

本当に人食いが行われているのかはわからない。だが、頭の隅にはおいておかなければならない。もしそうだったのなら、明はそのサーヴァントとマスターを優先させて排除しなければならない。

と、憂鬱な気分になっていたところ、教会からの使い魔が姿を現し

た。

昨夜のアサシンとセイバーが戦闘をなしたことは既に教会側が感知していた。やはり神父の放った使い魔のうち一匹が、セイバーたちの姿を偶然捉えていた。もちろん使い魔は大西山全体をカバーできているなからうが、とまれかくまれ、昨夜の戦闘は教会の掴むところであった。

明はセイバーが戦うつもりはなく、偵察だけするもりだったがアサシンに感づかれて戦闘に至ってしまったと、セイバーの話に若干の変更を加えて報告した。

意外と御雄は悪い印象を抱いていないようだった。宝具の解放のような大規模な魔力変動は感知されおらず、剣さえも振るっていないことが幸いしてセイバーはすぐに撤退したと思われるようだった。

ただ、彼曰く美琴は苦い顔だと笑っていたが。

教会の二人はそれでいいだろうが、エーデルフェルトはどう思っているだろうか。

最初から仮初の共闘ゆえに「やはり」信が置けないと思っているのか。

とりあえず昨日セイバーの観察した範囲でわかったアサシンの特徴を告げる。アサシンらしく俊敏だが、今のところそれ以外に特別な能力はなさそうであること。黒い雨合羽を着て外見を隠していることから、外見から真名が読める可能性が高いこと。この二点を報告した。

一通り報告した後、神父は思い出したように声を上げた。

「そういうえば言い忘れていた。ハルカ・エーデルフェルトはお前の屋敷からすぐ近くの洋館にいる。あの幽霊屋敷と有名だったところだ」

明には直ぐに思い当った。この屋敷と教会の間、徒歩十分のところにある洋館。特に魔術師が住んでいたわけではなく、純粹に海外から移住してきた金持ちの老夫婦が建てた館。夫婦が健在だったのは明がまだ幼かったときの話で、高校生になるときにはもう二人とも鬼籍に入っていた。

引き取り手もなかったのか洋館は放置されそのまま幽霊屋敷と呼ばれるようになったが、ある時春日教会がその洋館を買い取った。教会も熱心に保全しようとしていたわけではないので荒れてはいるものの、十分な魔術工房を構築することが可能だ。

(しかし、近いなあ……)

特に文句を言うわけではないが、お互い目と鼻の先にある状態だ。碓氷邸には当然の如く結界も張ってあり使い魔一匹、明の許可しない限り立ち入れないようにはなっているのだが、気分は良くない。

「了解。それじゃあまた」

使い魔を通しての通信を切り返すと、明は一息ついて肩を落とした。セイバーは夜には外出を禁じたが、昼は外に出るも勝手にさせている。戦いは夜なのだから、昼位は好きにさせないとセイバーも窮屈だろうと思うからだ。明は人に命令することが元々性に合わず、強制もしたくない。

だがこれまでなら好きに行動していいと言っても、セイバーはこたつでダラダラすることが普通だった。しかし、本格的に聖杯戦争が始まったと聞いてから、セイバーの部屋に姿はない。

明は肩を回してから、テレビを消して地下室へ向かう。

碓氷邸地下の魔術工房。ひやりとした空気はいつものものである。明は聖杯戦争参加を知らされてから己の魔術行使の準備はしていたが、あまり進まなくて万全の準備にまではなっていない。

しかしそうもいってられない為、今日で魔術礼装を整えておくつもりであった。一度大掃除をし、昨日も後始末の掃除を行ったのでかなり綺麗になっている。明はいつもの作業用の机に椅子を引っ張り出して座った。

机の隅に置いた金属の箱には、一昨日父から届けられた鍵が収まっている。

「絶対使わないからね……」

明はぼそりと呟き、後ろの机に重なっている一番上の本を手を取っ

た。

\*

駅から十分の位置に立つ、春日総合病院。病棟四棟、ベッド数二百五十の中規模総合病院である。十の診療科を持ち、春日でも大きい病院だ。四号棟は今年になって完成した最も新しい病棟だ。

その春日総合病院は、今かつてない大恐慌に陥っていた。一昨日に事態が起き、昨日発覚した医療器具の誤作動とその誤作動の看過により、院内より五人の死者が出てしまったのである。

病院の上層はその医療器メーカー、警察、さらには遺族の弁護士やらの対応で大変なことになっている。動揺はもちろんその医療器具を使用していない患者たちにも広がり、この点滴は大丈夫か、今度の手術に問題はないのかなど医者も対応に追われ、異様な雰囲気広がっていた。

「真凍<sup>しんとう</sup>さん、今日は体調がよさそうね」

「はい、いい感じだと思います」

白いベッドをリクライニングさせて角度をつけ、読書に勤しむ少女に向かって、看護師は嬉しそうに言った。少女もその笑顔と同じように、看護師に微笑む。

歳は中学校に上がったくらい。色素の薄い髪は右肩のところまで緩くまとめられている。チエック柄のワンピースの寝間着を着ており、釣り目気味の目が猫を思い起こさせる、愛嬌のある顔立ちの少女だ。「お医者さんも看護師さんもみんな疲れてますね……」

「ちよつとね。でも真凍さんの体調管理には影響ないから安心してね」

病人は当然の如く、健常人よりも気持ちが不安定になりがちだ。そ



れにこのような事故があつては推して知るべしである。少女——真凍咲（しんとう さき）を担当している看護婦も、心配をさせないように笑つてはいる。

しかしその看護婦の疲れは見て取れるほどだ。行く先々で事故について患者に色々言われたり聞かれたりしているのだろう。

「私が言つてもしようがないですけど、佐々木さんも養生してくださいね」

「患者さんに言われちゃったよ」

若い看護婦の佐々木は、照れ笑いをして微笑む。何とはなしに話しかけやすい雰囲気はこの看護婦と、咲はよく話す。しかし忙しいのか、看護婦はバイタルに異常がないことを確かめると、お大事にと言つて立ち去つてしまった。

咲の元を足早に立ち去つてしまったのは、忙しいだけが原因ではない。病院がおもちや箱をひっくり返したような騒ぎのなかにあることも一つ。だが、さらにもう一つ。

今日に先立つ二十四日の夜に、彼女は両親を失つているのである。それも尋常な死に方ではない。自宅で体を破壊されその部屋を血染めにして絶命していた。体を刺された、殴られたという生温い方法ではなく、それこそ破壊というにふさわしいおぞましき。

まるで巨大な鉄球が胴体に直撃し吹き飛ばされたという状態で、部屋に臓物をまき散らしていた。

この惨事はまだ咲には知らされていない。余命半年の少女に医者たちもどう話すか考えてあぐねていたのだが、その矢先に医療事故が起きてしまった。其の為咲の両親については棚上げされている。特に多感な時期の少女に伝えるには、酷すぎる事実。看護婦たちにも知れ渡っているが、どのように接すべきか困つているところでもあった。

だが、当の真凍咲はその医者と看護婦の姿もすべて見透かして嗤つていた。

そう、己の両親を惨殺したのも、病院の医療事故も、すべて咲の行ったこと。

「動揺もないのも当然で、こうなることを見越していたからだ。」

咲は己のサーヴァントを「バーサーカー」のクラスで召喚した。狂戦士としての逸話がある英雄で、かつ召喚時に特別な詠唱を挟み込むことで召喚ができる。

バーサーカークラスの最大の特徴は、理性を失うかわりに、ステータスのプラス補正がかかることである。他のサーヴァントのように、会話をして意思疎通を図ることができない（ただし狂化のランクにも左右される）。一度このサーヴァントを解き放てば、ひたすらに暴れ破壊しつくす。

その姿はまさに「最強」たるにふさわしいサーヴァントである。

だがデメリットもある。能力が強化される代償として魔力消費量が膨大なものになる。ともすればマスターの方がバーサーカーに魔力を奪われすぎて自滅してしまうほどだ。

咲は患いの身である。魔術師は生命力を魔力に変換するのだが、その生命力が常人よりも劣っている為、バーサーカーなど魔力消費の激しいサーヴァントを使えばすぐに自滅してしまう。

しかし、魔力を得る方法はマスターだけには限らない。人を食べれば魂を得、魔力が補充される。

もしキャスターのクラスがこれを行おうとすれば、殺さない程度に大勢から少しずつ魔力を頂戴することもできただろうが、生憎バーサーカーにそのような芸当は不可能だ。

一人一人殺して肉体を破壊し、そこから解放された魂を食うしかない。

だが、それをした甲斐はあった。彼女は病身でありながら、バーサーカーを何の苦も無く使役できている。

（やっぱり食べるのは一般人より魔術師の魂。父と母の魂は容量があったし。だけど病人はダメね。五人食べても父一人分にもなりや

しないわ)

医療事故は事故ではなく、咲が魔術で電磁波を発生させ医療器具に干渉し、手術後で体力を消耗している患者が息絶えたところ魂をバーサーカーに食わせたことが実態である。

病人の魂は常人のそれより劣るが、魂は魂である。それに、と咲は笑う。

病院は良いところ、放っておいても絶対に誰かが死ぬのだから。

\*

「うぬ、セイバーめ。抜け駆けとはするいぞ」

ランサーは霊体化した状態で文句を言った。本気で怒っているのではなく、むしろ羨んでいる感じである。

文句を言っている件はもちろん、教会から伝えられた話だ。セイバーは最初は能力秘匿のために戦闘に出ないことになっていたはずが、いきなりアサシンのサーヴァントと交戦したのである。

教会の監督役——神内親子、というよりはむしろ美琴は初っ端から余計な行動をされたことが不満のようだったが、ハルカとランサーは正直あまり気にしていなかった。これくらいの逸脱ならばかわいもの——しかしランサーにとっては、他のサーヴァントと戦えていたこと自体が羨ましいらしい。願いが「戦うことそのもの」というだけはある。

碓氷邸から徒歩十分ほどの洋館。館は蔦に覆われ庭には草が生い茂る、周辺では幽霊屋敷と名高い洋館である。洋館、というとき大きい屋敷を想像するかもしれないが、もともとは金のある老夫婦と少数のメイドのみが生活する館、かつ生活主体の屋敷のため、一軒家二個分程度の敷地である。

教会からそこを拠点にと勧められ、ランサーのマスターのハルカ・

エーデルフェルトとランサーはそこを根城にしている。

初めて訪れた一昨日は、ランサーに庭の草を刈り取らせてハルカは掃除を行った。

ソファやテーブルなど、家具が残されているが老朽化が進んでいる。ここに来た当初は全てが埃に塗れており、息をするだけでも大層体に悪そうだった。今では最低限の掃除の甲斐があって、人は住めるくらいの清潔さは保たれている。

そして念のため人払いの魔術を施し、ハルカの魔術工房となっている。

魔術工房とは、魔術師がその家などを、魔術を用いて要塞を作り上げることである。結界や悪霊、トラップをしかけて踏み込む者を徹底的に迎撃する。しかしハルカは相手を徹底的に叩きのめす工房を作成しようとしてはいない。

自分がここで寝泊まりするうえで襲撃をすぐさま感知し、相手を足止めし時間を稼ぐことを重視した簡易な工房だ。

侵入者を迎撃することは難しい代わりに、工房を破壊されてもすぐに修復できる。

ハルカは一階のソファでくつろぎながら、同じく一階をうろつくランサーに声をかけた。

「夜はまた外に出てももらいます。私はここにいるから、それまで好きにしてください」

「おう」

ランサーの気配が薄くなる。ハルカとランサーの関わり方は最低限で、戦争に関することではしか会話をしない。それで事足りるならそれでよい。ランサーはハルカをマスターと呼ぶことはない。言うこととは聞くが、生前のランサーを考えれば彼が仕える主人はただ一人だけで、ハルカは目的を共にする同志に近いのだろう。

ランサーが昼に何をしているのかは知らないが、恐らく物見遊山をしているのだと想像はつく。一昨日にこの家を住めるようにしてから、昼間は不在で夜の偵察前には戻ってくる。駅で配っているポケッ

トティツシユやチラシの類が玄関の棚に堆く積まれているのを見るに、現代を面白がっているのだろう。

ハルカはテーブルの上でトランクを開け、中を確かめる。ルビーやアメジスト、サファイヤと純度の高い宝石が整然と並び、煌めくような輝きを放っている。その一つ一つが、ハルカ・エーデルフェルトの魔力が詰まった秘蔵の品である。長い時間をかけて少しずつ魔力を蓄積した魔術礼装。

「これは素晴らしい宝石ですね」

自画自賛ともいえるセリフを呟き、ランサーのマスターは笑った。

\*

マスターの予想通り、ランサーは見事に現世を謳歌すべく奮闘していた。

初めは春日駅を召喚された当時の格好——つまりは草履に脛当、鎖帷子で闊歩していたのだが、どうにも周囲の視線が可笑しい。よくよく考えればそれも当然で、時代には時代に合った服装というものがある。

昨日のうちにそれに気づいたランサーは、ハルカに少々の金を拝借して、目を丸くして驚く店員に聞きながら服をそろえた。GパンとTシャツ、黒のジャケットを着て、ランサーは春日駅を歩く。

聖杯から現代の知識を受け取っているとはいえ、あまりの人の多さにランサーは舌を巻いた。

「まるで合戦のような人の多さだな！さて、どこから見て回るべきか。ハルカもこの出身ではないというから聞けぬし……観光といってもどうすればいいのにな」

ランサーはそうひとりごちながら、腰に手を当て周囲の煌びやかな店を眺める。駅から直結している商業施設の中には、店が所狭しと

並んでいる。よし、と意を決したランサーは手近にある店に突撃していく。それがいきなり女性向けランジェリーショップだったのだから、不審者扱いされるまであとわずかである。

ランジェリーショップからつまみ出されてから、ランサーは本屋、靴屋、百円ショップなどを巡っていく。持ちは多くなくとも、時代が違えばここまで変わるのかとランサーは興味深く眺めている。

その時、目の前を一人の女学生が通り過ぎた。街を歩いている中で同じような学生を何度も見ていた為、どうも思わないはずなのだが、その人物だけは何かが違う。ランサーは振り返り後ろ姿を注視すると、それは一昨日剣を合わせたばかりのサーヴァントだと分かった。むしろなぜここまで近づくまで気づかなかったのかとランサーは首を傾げた。

後ろからその肩を掴み、ランサーは友でも見つけた様に笑った。

「よう、セイバー！お前も物見遊山か！」

「……ランサー」

迷惑千万という空気を纏いながらも、表情を貌に出さない剣の英霊は振り返った。髪を解き、薄桃色のワイシャツの襟にはリボンがついて、紺色のジャケットを羽織っている。茶色のチエツク柄のスカート、紺色のハイソックスという女子高生スタイルである。今更ながら、ランサーは戸惑った。

「……昨日は女のような成りをしているくせにと言ったが、そもそもお前は女子だったのか？」

「いや男だ」

「趣味か？」

「こちらにも色々事情がある。ところで用は何だ。戦いに来たのか」

「それもよいが、神秘のなんとやらで昼間には戦ってはいかんようだな、そうではないさ」

ランサーは呑気に笑っているが、セイバーは一刻も早く別れたそう

な空気を隠さない。

しかし、ランサーは思い出したように突然悔しげに言った。

「そうだ！お前、先にアサシンと戦うとはズルいぞ！」

「は？」

「儂などここ二日の夜は街を回っているというのに、まだ一騎のサーヴァントにも出会えなんだ！」

「与太話なら他でやれ。俺は忙しい」

セイバーは思い切り剣呑な空気を発散して、ランサーを邪険にする。だがランサーは全く意に介した様子はなく、踵を返すセイバーの肩をつかんだ。

「待て待てセイバー」

「いい加減にしなれば八つ裂きにするぞ！」

人の多い駅直結の施設で、いきなり物騒な言葉が大声で飛んで通行人が振り返る。

ランサーは慌てて手でセイバーの口を塞いだ。

「そう慌てるな。夜になれば……いや、昼でも勝負ができる場所があるぞうだ」

面白いことを見つけたと言わんばかりにランサーは口に笑みを刻んだ。そしてセイバーの襟首を掴むと、そのままぐいぐいと引つ張つていく。傍から見ると可憐な女子高生を中年のガタイのいい男が連れ去ろうとしているようにも見える。言い合うことが面倒になり、セイバーは三十分だけだとため息をついて引きずられていった。

「現代の遊技場のひとつで、ぼっていんぐせんたーというぞうだ」

駅直結の商業施設から徒歩五分、『アスレフィットネス春日』というアミューズメント施設に二人は足を運んだ。五階建ての鉄筋の建物の中には、バッテリーセンター、ボウリング場、ビリヤード場、サウナ、カプセルホテルが入っている。ランサーはそこまでの事は知らず、単にバッテリーセンターがここにあるということしか分っていない。

セイバーを引きずるようにして自動ドアの開くままに中に足を踏み入れ、受付に場所を尋ねてエレベーターで向かう。一階はカプセルホテルになっており、昼のこの時間に通りかかる人は少ない。

エレベーターはすぐに扉を開き、乗り込むと少しの重力を感じながら、ランサーは何とはなしにセイバーに尋ねた。

「お前は現界してからどれくらい経つ？」

「一週間経つか経たないかと言ったところか」

「ほほう！ 儂はまだ三日しかたつておらん。どこかお前のオススメの場所などあるか！」

ランサーは興味深げにセイバーを見るが、当の本人はまともに考えでもないなさそうにそっけない。「ない」

「つまらん奴だのう。戦いに来たとはいえ、気を張ってばかりではいざというとき踏ん張りがきかないぞ」

チン、という音と共にエレベーターが停止する。ランサーはノリ気でないセイバーの腕を引っ張りぐいぐいと進んでいく。五階のバツテイングセンターのフロアは、全体的に緑っぽい印象だ。

エレベーターを出て右手にカウンターがあり、インストラクターと思しき、紺色のジャージを着た若い男がにこやかに声をかけてきた。

「いらつしやいませ！ お二人ですか？」

「ああ、ちなみに初めてなんだが」

ランサーがカウンターに依りかかって、店員からシステムの説明を受けている。セイバーはフロアを見渡した。エレベーターから左手側が緑色の荒いネットで仕切られ、黒い長方形のマットが等間隔で敷かれている。等間隔にネットで区切られ、区切られたごとに一人がマットの上に立ちバットで飛んでくるボールを打つ。ボールが放たれるマシンからの距離は十五メートルくらいだろうか。天井は高く、室内であるため、上にもネットが張られている。

奥の二打席で大学生のカップルが楽しそうにバットを握って騒いでいる様子を見ると、セイバーは再び首根っこを掴まれた。



「ほれ、危ないからこれをかぶれだ」と

ヘルメットをかぶると言うよりは被せられて、同時に金属バットも渡された。セイバーはランサーと隣のバッターボックスに案内される。セイバーが見ていたカップルの隣の席である。インストラクターの男はこのマシンは初心者向けで、球速は時速七十キロくらいだと説明した。

セイバーはちらりとバットを空ぶるカップルの女性を見てから尋ねた。

「時速七十キロというのは、今の隣の速さくらいか」

「そうですよ」

ランサーとセイバーは目を見合わせる。

「もっと速い方がいい。今くらいの速さは止まって見える」

バッティングセンターの控室に、先ほどのインストラクターの男が駆け込む。今の時間のシフトはバイトが三人で、社員が一名。だが社員はちようど休憩に出ていて、バイトの大学生である佐藤、山田、嶺倉の三人で回している。

平日の昼間ゆえに一人でも間に合っており、山田と嶺倉は控室でバットの整頓まじりに雑談に興じていた。控室のドアが乱暴に開かれて、山田と嶺倉は厄介な客でもきたかと訝しがりながら顔を上げた。

「おい山田！嶺倉！ちよつとこいよ!!」

「んだよ」

「やべー女子高生とオッサンがいる!!」

佐藤の興奮した様子から、面倒事が起こったわけではないと察知した二人だが要領を得ない言葉に首を傾げる。だがいいから来いと迫る佐藤に押し流されるまま、二人はバッティングコーナーに顔を出した。

その途端に、連続でマシンから球が放られる音。そして寸分違わず

バットで打ち返す澄んだ高音。素人が聞いても「確実に芯を捉えた」と感じられる痛快な音が惜しげもなく響き渡っていた。

その音を鳴らす好打者は二人。二人ともこのセンターの最高速、百五十キロの球を打っている。一人はジャケットにGパンのラフな格好をした、筋骨たくましい中年の男だ。その威風堂々たる姿通り、豪快なホームランを連発している。そして、その男の連れである女子高生も負けていない。細腕のどこからそんな力が出るのか、一部の隙もない正確かつ強烈な打撃で打ち返す。しかも天井に張ったネットを突き抜けて破らんばかりに、放たれた打球は猛烈な回転と速度を持っている。

「ほほう、なかなか痛快な遊戯だな！」

「しかし、もう少し早い方がいい」

二人は何の苦もない様子で雑談をしながら打っている。二人の隣のカップルも、中年の男と女子高生のすさまじさに口を開けている。

佐藤につれてこられた山田と嶺倉もぽかんとあつけにとられてしまう。だが、大学生青年男子ということでもどうしても目がひきつけられてしまうのは女子高生だった。

「……かわいいすぎじゃね？」

「かわいいいつつーか、綺麗なコだよな……」

黒い艶やかな髪をなびかせて、スカートが翻るのも頓着せず、眉ひとつ動かさずにバットを振るう姿は不思議と違和感なく馴染む。三人は隣の男と見比べて、どんな二人か想像を働かせる。一瞬よからぬ妄想がよぎるが、それは男の様子や雰囲気と全くそぐわない。

感じとしては、スポーツ選手である男が親戚の女の子を連れて来たと言うものが相応しい。

当のランサーとセイバーは、店員の三人とカップルから見られていることを承知していたが気にしていない。

球が打ち出される限り、一球も外さず打ち続ける。ランサーは普通

と変わらぬ声でセイバーに問い掛ける。

「セイバー、お前はこの聖杯戦争では真名を秘匿せねばならんそうだが、それを惜しいと思わないか」

「何故だ」

「儂は尋常な勝負を望んでいると言っただろう？尋常な勝負は、お互い名を名乗り正々堂々一対一であるということから始まる。真名を隠しては初っ端からこけているようなものだ」

「俺はお前のいう「尋常な勝負」には興味がない」

ランサーは悔しげに口をへの字に曲げた。

「ふうむ、つくづく惜しい奴だな。とにかく、儂はそれゆえに敵に真名を看破して欲しいし、同時に敵の真名も看破したいのよ。そうすればお互いがわかるからな」

マスターにも真名を秘匿しろと言われているが、ばれてしまうのは不可抗力だろうと悪童のようにランサーは笑う。確かにランサーが勝手に情報を漏らしてくれるなら、敵サーヴァントもそれに食いつくだろう。

「わからない。お前の言う「尋常な勝負」とやはら、勝利という点については不利になるだけだろう」

「不利になろうと構わぬ。儂が望むのは「尋常な勝負」だからな」

「お前は勝負——戦闘そのものを好むのか」

訝しげに問うセイバーに、逞しい男は快活に頷く。

「そうだな。生前はよく戦ったが、晩年は違った。此度は最期まで戦いで締めくりたいのだ。儂の生きる場所は、やはり戦場だったと思うのよ。お前は違うのか」

バットを振るう腕を休めず、セイバーは当然のごとく答えた。「戦闘そのものを楽しみ楽しくないで考えたことはない。すべきことだったからしたまでだ」

「ほほう、あくまで戦は手段であるがゆえに、目的の為なら尋常ではない勝負でも構わないと。昨夜、無断で偵察に出てアサシンと交戦したこと」

教会・ランサー陣営との協定を結んだ直後に足並みを乱したことを

咎めるのか。

セイバーとしては元々そこまで協力する気がないために言葉に遠慮はない。

「そのことについてあれこれ言うつもりはない。不満とあらば共闘関係などなくてもよい」

「いや、羨ましいとは思いますが僕は好きにすれば良いと思うぞ？教会の連中は教会の連中で目的があるが、お前もお前の目的の為にここにいるのだからな。そもそもお前が乗り気でないことくらいわかっておるし、僕はハルカと共に戦うだけよ」

ランサーはけんみなくさりと言う。ランサーはセイバーと同じことを命じられても、他のサーヴァントが戦っている時に引きこもっていることができない血の気の多い質のようである。

ふと、口角を上げたランサーが言葉を発した。

「セイバー、お前、喋るのが得意ではないだろう」

瞬間、一定のリズムで鳴り響いていた打撃音が狂う。一分の狂いもなくボールを打ち返していたセイバーのバットが芯を外した音だ。同じ軌道を描いて飛んでいた打球は、初めて見当違いの方向へ飛んでいく。

ランサーは得たりとばかりに笑った。

「いきなりなんだ」

「いや、お前と話してて思ったのよ」

満足げなランサーと表情のないセイバーは数分打ち続けると、正面の機械から球が打ち出されなくなった。料金分の球が終わったようだ。セイバーはすたすたとエリアから出て、ずっと眺めていた店員にバットを返す。

三十分だけだと最初から言っていたため、ランサーも一緒に出ていく。ちなみに金はランサー負担である。

行きと同じエレベーターに乗り、そのガラス張りから景色を眺めて一階につく。

セイバーはやれやれと言わんばかりに肩をすくめた。

「俺は用があるから行く」

「応。それではまた会おう」

ランサーは呑気に手を振りながら、人通りの多くない中にセイバーが見えなくなるまで見送った。

「難儀な奴だな」

セイバーの真名は分らないが、己と同時代の人間ではないとランサーは思っている。もののふの道を知らないと言うからには、平安中期以前の人物であろう。そして一昨日剣を軽く交えたときに感じたのは、生前のとある人物に少し似ているということだ。

そのとある人物とランサーは直接対決をしたことはないのだが。

（越後の龍は毘沙門天の化身だとか言ってたが、それに近い何かか……）

しかし生前の越後の龍の力は強い信仰により毘沙門天の力を得たものだったが、セイバーはそれとは違うような感じがする。信仰により得た力よりも純度の高い何かを感じるのだ。ランサーは頭を捻ったが、直ぐに辞めた。

「後で考えるところでしょう」

まだ日は高い。現代を漫遊しても罰はあたるまいと、彼はセイバーとは逆方向に歩き出した。

\*

聖杯戦争が始まったとはいえ、まだ始まったばかりだ。昨夜はアーチャーと索敵に出ることも考えたが、アーチャーはそもそも近接戦闘を得意とするクラスではない。まずは一成の式神（使い魔）によつて

街を監視し、敵の出方を伺うことからにした。

そして、昼間は何だかんだでやることがない。いつそ学校に通った方がよいのではないかとも思うが、既に教師には「土御門一成は休み」との暗示をかけている。それにもし昼間に襲い掛かってくる横紙破りなサーヴァントがいた場合、場所が学校では離脱することも難しい。

やはり家にいる方が正しいか、と一成は自室のベッドで寝返りを打った。

惰眠をむさぼっていると、いきなり布団を剥がされた。

「一成、海とやらを見に行くぞ」

「……うげエ……」

朝（とはいってもすでに十時）から糊のきいたワイシャツとスーツのズボンを身に着けたアーチャーが、血色もよくベッド脇に仁王立ちしている。もぞもぞして動作の鈍い一成に、アーチャーは箆筒からか勝手に服を出して投げてよこす。高貴そうで優雅なくせに、時々端々の動作が適当なのは不思議なところだ。

「…家にいるから一人で行けよ……」

「其れも悪くはないのだが、私は何分この土地を良く知らぬ。それにこの時代の馬、車といったか？にも乗ってみた故に案内が必要じゃ」

「お前の道楽じゃねーか……」

一成はため息をつくが、昼間は特にすることもない。無駄に時間を使うよりは、春日を見て回りたいアーチャーに付き合う方がまだマシだと考えた。投げてよこされたパーカーとGパンに着替えて立ち上がる。「じゃ、いこうぜ」

「待て、せめてそなた顔くらい洗わんか。それにそのボサ髪で外に出るつもりか」

「別に顔洗わなくても問題ないだろ。髪はとかしても大差ねーんだよ」

学校に行く時、出かける時普通は顔を洗う。だが遅刻しそうなとき

はサボる。生まれついでたの剛毛かつ癖つ毛の一成は、伸ばせば落ち着くと言う親の言葉を信じて肩の下あたりまで伸ばした髪を紐で結っているが、本当にそれがベストなのかは謎である。

アーチャーは一成の襟をつかむと、洗面所まで連行していく。

「馬鹿者、人前に入る時はそれくらい整えぬか。見目麗しい者はそれでも見るに堪えるから良いかもしれぬが、十人並とそれ以下は違どうぞ」

「お前はオカンかよ……」

特に逆らうことでもない全うな指摘のため、一成は億劫ながらも顔を洗い、髪を整えた。このアーチャー、偉そうな割に世話焼きなのかまるで小うるさい母親のように説教をしてくる。

アーチャーはベッドに腰掛け、一成を上から下まで眺めた。

「そなた、普段からもう少し髪に気をつかうべきぞ」

「女じゃねーんだし……」

「見目に男も女もないぞ。どちらにしる綺麗な方が好ましいことに変わりはあるまい。ま、今はその程度でよからう、それでは行こう」

アーチャーは颯爽と身をひるがえすと、姿勢よく玄関へ向かった。一成もそれに続く。階段を下りアパートから出ると、空は澄み、雲一つない晴天が広がっていた。とりあえずアーチャー御所望の海へ行くには、一度駅まで十分ほど歩いてからバスへ乗るのが近道だ。そうアーチャーに伝えると、苦しゆうないといわんばかりに鷹揚に頷かれた。

(武将とかそういう風には全然見えねーんだよな)

平安時代の貴族を体現したような姿でアーチャーといえば、平家の人間を想像した。だが、このアーチャーは戦うこと自体が好きではなさそうだ。平家なら戦うことを厭うイメージはないし、同時に幸運なイメージもない。

戦国で公家文化を好んだ今川義元なども考えるが、それなら戦いたがらないわけではないと思う。

アーチャーの後ろ姿を見ながら歩いているうちに、あつという間に

駅に着いた。いつでも駅周辺は明るく賑わいに満ちている。ロータリーのある場所は一成の家からたどり着く駅の出口とは逆なので、ぐるりと回っていくことになる。

ロータリーについてからは、バス乗り場まで一成が先に立っていない。屋根の付いたバス停がいくつもあり、一から順に番号が振られている。一成は慣れたもので、七という番号のついた標識の立つ停留所へ進む。

他には二三人が並んでいるだけで、しかもタイミングよく五分待つたくらいにバスが到着した。アーチャーと一成はバスの最後部の座席に座った。アーチャーは「馬より乗りやすいかもしれぬ」と呑気な感想を漏らしていた。

バスは駅から南に進み、途中で西に向かい住宅街を突っ切り浜辺に出るはずだ。

「そーいやお前って海見たことないのか？」

「ないぞ。故に一度目にしておきたかったのだ。しかしこのバスとやらは早いのもう。情緒がない」

「バスに情緒を求める奴なんていねーよ」

一成は窓の枠に頬杖をつき、眠たげに返事をした。温かいバスの中、心地よい振動に揺られて再び睡魔に手を引かれている。アーチャーは一成が聞いているのを気にしているのかいないのか、首を傾けて呟く。

「ふむ。バスはともかく、現代の旅行とやらは新幹線やら車で目的の場所にすぐについてきつと帰るそう。旅というものは目的地に着くまでもまとめて旅であるというに、なんとも怪しい」

「お前の時代ほど暇じゃねーんだよ……」

一成は完全に船を漕ぎまくっており、顔が頬杖から落ちそうになりながら適当な相槌を打った。

「む、それは心外ぞ。我らは決して遊びほうけていたわけではない。しかしげにおそろしきは物語の影響というべきか……おい」



アーチャーは勢いよく手持ちの扇で一成の頭をぶつ叩いた。景気のいい音が車内に響き、数少ない乗客が後ろを振り返った。

「!!何すんだ!!」

「そなたは阿呆か。そなたが眠りこけてしまうところで降りればいいかわからぬぞ」

「……お前つて結構キレイやすい?」

アーチャーをしげしげと眺めているうちに、車内アナウンスが目的の停留所の名前を告げる。

一成は急いで停車ボタンを押した。

風が強く、塩を含んでいる。浜風は一成のくせ毛をばさばさに乱し、オールバックに整えられているアーチャーの髪を弄る。十一月も終わりに近づいた海に立ちいる者はない。春日海岸は白い砂浜が広がり澄んだブルーの海が広がっている——わけではない。茶色い砂浜に打ち寄せる波も茶色だ。茶色の砂を削り、海水の中に含んでいるからだろう。

空き缶やペットボトルのようなゴミはなく、一応の美観は保たれているがそれくらいで特筆するような海岸ではない。北——右手には工場地帯が見え、停泊しているタンカーも見える。荒れてはおらず、白い波が寄せては返す。

「……おーい、これが海だぜ」

一成は横のアーチャーをちらりと見上げたが、突如アーチャーはその場にしゃがんだ。そして革靴と靴下を脱いでズボンもまくり上げ、勢いよく海に向かって走り出した。「ギャッ」

勇んで海にじゃぶじゃぶと入っていったのはいいものの、今は十一月末。水は冷たいに決まっている。いつもと立場が逆転し、一成の方が呆れている。

「いい年したオッサンがなにやってんだ」

「流石に冷たかったぞ。あのまま入っていくと、もつと深くなってい

くのか」

「そうだな。足もつかなくなつて潮の流れに流されるぞ」

アーチャーはズボンをまくり上げたまま、静かな海を眺めた。水平線の向こうには何も見えず、空との境界が朧になっている。さざ波の音と相まつて、普段暮らす日常とは別世界にいるような感慨を抱く。

「……あの海の向こうに、他の国があるのだな」

「そうだな、ずっと先だけだな」

「私の時代にも今で言う舶来品というものが輸入されておつてな、大層な人気だつたぞ。……そうか、このような海の遠きからなあ」

懐かしむように目を細めて、遠い水平線を眺める。昔から日本人は外国のものが好きだつたのだろうと一成は思った。だが、アーチャーの目は昔を懐かしむばかりのものではなかった。

「……この遠きから来るものは、そのように良きものばかりではなかったが」

悪いもの——海の向こうから、外国の敵が侵略しに襲つてくると言うことか。一成は日本史で外国に侵略された事件を必死で思い出すが、近代以前にはそうなかつたはずだ。

「それって元寇とかか?」

鎌倉時代中期、当時大陸を支配していたモンゴル帝国とその属国であつた高麗による日本侵略戦を「元寇」という。一度目を文永の役、二度目を弘安の役と呼び、鎌倉幕府は苦戦を強いられたが、神風が吹いて高麗軍の船を追い払つたと言う。現在では暴風雨があつたことは勝敗には関係ないとされているが、日本では長くこの「神風」は信じられてきた。

「そのようなものよ。……私は直接目にしたわけではないがな」

アーチャーは目を伏せる。直接戦いを眼にしたわけではないけれど、厭うように踵を返す。海を見るのは初めてだと言うから何の曰くもないだろうにと、一成は首を傾げた。

「一成、褒めて遣わす。さて帰るとしようぞ」

「もういいのか?」

背に風を受けて、アーチャーはうむと頷く。「海なるものも見れた。さて、駅あたりでランチとしよう」

「グツ」

さらりと言ってくるが、一成は現在金欠真っ只中である。いつも月初めに親が金を振り込んでくれるために、月末の今は赤貧そのものなのだ。それに先日アーチャーと買い出しして、家に帰れば食料もある。アーチャーはにやりと笑うと、尻ポケットから分厚く膨らんだ折り畳み財布を取り出した。

その中には予想通りウン十万の札束が入っている。いつ手に入れたそれ。

取り出された札を手に、アーチャーはひたひたと一成の頬を叩いた。

「ほれ、令呪を全て消費すればさらに豆腐ほどの札束をくれてやっても構わぬぞ」

「く……か、かね……ッ!!」

顔は屈辱にゆがみながらも、手は間違いなく顔を叩く紙の束に向かっている。これだけあれば美味しい食事もゲームも好き放題にできる。

「ほれほれ」

「か、……っ、かね……っ、……その手にはのるか!!」

一成は一気呵成にアーチャーの手を叩き落とす。その衝撃で札が数枚アーチャーの手を離れ砂浜に落ちる。慌ててかきあつめ、まとめてアーチャーにつき返す。

「つまらん奴よのう」

「金に釣られたら面白いのかよ!!」

「いや別に面白くないが。そのような人間はごまんと居るからの」

真顔で答えられて、一成は小ざっぱりした其の顔をぶっ叩きたくなかった。

アーチャーはその様子などどこ吹く風で、一成を置いてすたすたと階段を上り、海岸沿いの道路に立って見下ろしている。

「家に帰るのであろう。早よせんか」

「ほんとなんだよお前!!」

遊ばれていることくらい彼自身も承知している。最初から掴みどころのないサーヴァントだとは思っていたが、今もそれは変わらないうい。一体何を望んでこの英霊は召喚に応じたのか——まだ、聖杯戦争は始まったばかりだ。

11月28日① 白昼の襲撃

外は小雨が降っている。十二月も近づき、寒さも厳しくなりつつある。相変わらずの狭いワンルームで、アーチャーのマスター・土御門一成の部屋で一成とアーチャーはテレビを凝視していた。

一昨日に一家四人が惨殺されるという事件があったことは、彼らも昨日のテレビで知っていた。

そして昨夜もまた、新たに住宅街に暮らす家族が惨殺されたのだ。しかも今度は一軒ではなく三軒も、である。

大人子供合わせて十三人が殺された。一成はテレビを指差して憤りながら言う。

「アーチャー、何かおかしくないか。医療事故、一家惨殺事件。全部聖杯戦争が始まってから起こったことだぞ」

一家惨殺事件の方は一昨日と同じ手口——凶器は不明、何か大きな力で潰されたような死体となって発見され、家は半壊状態になっていた——と報道されているが、その手口事態が不可解で何の新情報もない。また、一昨日の医療事故についてもニュースが流れており器具の故障が原因とされているが、その故障原因も不明のまままだ。

アーチャーは顎を撫でながらうむ、と頷いた。

「断定はできぬが、マスターとサーヴァントによる可能性は十分ありうるの」

「もしそうだったらどうなる」

「並みに頭の回る者たちならば斯様に派手な真似はすまいと思うのだが」

テレビで取り沙汰されるほどに派手に殺せば、破壊のあとからどのような特徴を持つサーヴァントなのか割れ、真名の特定につながる。このように自ら正体を晒す真似をするべきではないのだ。

「しかしそういう輩ではないとすると、味を占めて益々派手にやるようになるだけだろうよ」

「それは関係ない一般人がたくさん死ぬってことか」

「そういうことだな」

「放っておく気か？」

「それはそなた次第じゃ。だが私としては好ましくないのう。人の魂を食らえば食らうほどサーヴァントは強化される故に、こちらが不利になる」

「そうじゃなくて……！」

怒り任せに言葉を叩きつけようとした一成を見計らい、アーチャーは素早く掌で一成の口を塞いだ。大げさにため息をついてみせるおまけつきで。

「わかっておる。どうせ正義感のお熱そうな我がマスターのことよ。一般人に被害の与えるサーヴァントを野放しにできないとか言うつもりである」

一成はアーチャーの掌を剥いだ。「そうだよ！放っておけるか！」

アーチャーは一成の愚直ともいえるほどの単純さを嫌ってはいないが、行動が急き気味なのはどうしても止めるべきだと考えている。

「落ち着くがよい一成。まだそうと決まったわけではない。それこそただの殺人なら私たちではなく警察とやらの領分じゃ。まずは事実確認をせねばならぬ」

一成はアーチャーの言わんとするところを察して笑みを浮かべた。「やーつと夜に偵察に行くってことだな」

聖杯戦争が始まってから、アーチャーはまともに夜に偵察・戦闘に出かけたことはない。

これまでは一成が使い魔の式神を放ち町の様子を観察させてきたが、大量の使い魔は放てないので全範囲をカバーなど不可能だ。三日前から街中をランサーと思いきサーヴァントが大手を振って駆けまわっていたことを確認していたが、それも見ていただけである。

他のサーヴァントが出てきたらランサーと戦いになるだろうからそれを観察しよう、と思っていた。しかし結局、他の陣営も同じことを考えていてお互いにけん制してしまっているのか、ランサー以外のサーヴァントをお目にかかっていないのだ。

「そなたの式神で市街全体を掴めているわけではない故に、サーヴァ

ントの仕業かどうかは断定できぬ。しかしサーヴァントの仕業と仮定するならば、おそらくやつはランサーではなくキャスターでもなかろう」

ランサーの出現を確認していた時間と、一家惨殺があった時間にはずれがある。犯人の陣営がランサーと鉢合わせるのを避けたとも考えられる。

「魔術師のクラスのキャスターなら、あんな直接殺すなんてことしなくてもっと魔術でうまくやるってことか」

アーチャーは閉じた扇で一成を指した。「その通りよ。そして、アインツベルンの姫の陣営でもあるまい」

「え？」

「骨の髄まで魔術師をやっている者が、あのように神秘が一般人に漏れる可能性のある方法で魔力を集めたりはせぬだろう」

魔術師は魔術という神秘が一般人に漏れることを嫌う。魔術師は「根源」を追い求める学者であることは前述した。魔術師にとって魔術とは、根源に至るための手段である。

言い換えれば、根源へ至る可能性と価値があるからこそ、魔術師は魔術を学んでいる。

もし魔術が根源へと至る手段ではないものに成り下がったら、魔術師にとって意味が無い。

魔術がその価値を無くすとは、根源から流れる事象が、「一般に知られる」ということが現実起こった場合である。「神秘」という「事象の太い流れ」が、一般に知られることで、「細い流れ」へと姿を変え一般常識と呼ばれるほどになってしまうと、根源から遠ざかる。

それを、魔術師は最も忌避する。故に、魔術（神秘）は秘匿されなければならぬのである。

一成はアーチャーの判断を聞いて、人知れず安心した。

あの少女は、このような殺戮に手を貸していたわけではないようだ。

「なるほど」

「なるほど、ではなくそなたも少しは考えんか。あまり考えなしだと

早死にするぞ」

呆れた様にアーチャーは一成の頭を叩いた。しかし一成はむっとすることは無い。

自分勝手に何様アーチャー様などところもあるが、一成の意を汲んでくれる。

「そういう分析とかはお前の仕事だろ」

「まったく勝手に分類するでない。とにかく今夜から忙しくなるようじゃ。やれやれ」

一成はとりあえず事件のあったらしい家とその時間を地図に書き込み、チャンネルを回してニュースを見比べ、なるべく多くの情報を取得することに努めた。

\*

地下室でランプを灯し、己の試作品魔術礼装を弄りながら明は教会の神父と会話をしていた。

冷え切った空気が体に悪いと思い、彼女はストールを羽織りふかふかのスリッパをはいて机に座っている。

『あれはおそらくバーサーカーの仕業だ。我らの使い魔が姿を捉えた』

使い魔から聞こえるのは神内御雄神父の声だ。もちろん話は件の殺人事件の話である。

昨日から気にかかつてはいたが、本格的に明も取りかからなければならぬようだ。

彼女はため息を隠して使い魔越しに神父に尋ねる。

「一応聞くけど、病院の医療事故の方は関係ないの？」

『断定はできない。しかし大きな魔力の反応はない』

「そう」

『今程度の行為ならバーサーカーを放置しても構わない。しかし、今



以上に悪化するならば』

「わかってる」

神父は昨夜もランサーが街を徘徊したものの、どのサーヴァントも現れずまだ進んで沈黙を破ろうとする者がいなかったと伝えた。セイバーも昼は外に出ていたようだが、夜は家に戻って共に食事をとっていたので当然情報はない。報告を聞き終え、明は使い魔を通した通信を切った。

やはり一家惨殺の件はサーヴァントの仕業であつた。バーサーカーのマスターの仕業だとすれば、使役のための魔力を補填しようとしての行為か。

バーサーカーは強力だが最もマスターの魔力消費が激しいクラスである為に、行為にも理屈では納得がいく。

このような神秘が一般に漏れるような事態が、魔術師と聖堂教会がともに最も危ぶむことである。

そして明は聖杯戦争のあるなし関わらず、春日の地の管理者として、そのような事態を防ぐ義務がある。聖杯戦争に参加すると決めた、いや決まった時点からこのような事態が起こる事を最も恐れていたが、その事態になつてしまった。

ランサー陣営が索敵を担うという作戦だったが、この状態では呑気にランサー任せにはおけなさそうだ。

「ああめんどくさい……どこのアホマスターこんなんするの……バカなの？死ぬの？魔術師じゃないの？」

もう明は現実逃避に昼寝でもしてやろうか、と考えていた矢先に何者かが階段を下りてくる音がした。気配で分かったが、もちろんセイバーである。

明は体をひねって背後に目をやるが、その姿に目を疑った。

「……何それ」

セイバーはいつもの衣袴、もしくはジャケットではなく、明が高校

時代に来ていた制服を身に着けていた。ピンクのブラウスにリボンネクタイをつけ、ベージュのカーディガン。茶色のチェックの入ったプリーツスカート。

紺色のブレザーにハイソックスの三百六十度女子高生である。外の雨を受けてか、髪も服も濡れている。

「この服か？」昨日も昨日も借りたが」

昨日と今日、明は朝起きると地下室に籠っていて、夜になったら出てくる生活だったためセイバーとは夜しか顔を合わせていない。昼間に着ていれば確かに明は女装姿を目にしないことになるが——「いやそうじゃなくて、」

否、セイバーの女装にも驚いたが、それよりも明の目を引いたのは——ベージュのカーディガンに、鮮血と思しきものが散っていることだった。

「……その血、何？」

いやな予感がする。セイバーはいつもと変わらぬ表情で、しかしどこか嬉しそうに口を開いた。

「アサシンのマスターを殺してきた」

セイバーは一昨日に独断でアサシンと交戦し、その次の日の昼間もアサシンとそのマスターを探していた。交戦した時に姿かたちは把握していたから、見さえすればマスターであると判断できる。

途中ランサーにつかまると言うハプニングが起こったものの、昨日は午前から三時まで春日市内、駅を中心に人に入り混りアサシン達が見つからないか探し、日が暮れる頃には大西山にまで足を運んだが見つめることはできなかった。

勿論、セイバーもあの人ごみで簡単に見つかるとは思っていないが、戦争が始まった今、可能性が低くともできることはすべきだと思っていた。

そして今日も諦めず昼間の搜索を続けていたところ、春日駅周辺で発見したのである。

しかし発見したとしても、当然サーヴァントが霊体化して付き従っているはずである。

セイバーもそれくらいは承知している。女装による偽装スキルでできるだけサーヴァントとしての気配を殺し、感知されない程度に離れて尾行し拠点をつきとめてやろうとしていた。

尾行を開始した時は、確かに霊体化しているサーヴァントの気配が、アサシンのマスターの側にあつた。今は昼で特に警戒していないのか、特別な気配遮断は行っていないようでセイバーにも気配が察知できていた。

マスターと霊体化したサーヴァントは駅ビル一階内にあるコーヒーショップに入っていた。有名なチェーン店である店には、ゆつたりとしたソファが並べられパソコンで仕事をする人間、暇を潰して文庫本を読む人間など様々いる。その中にアサシンとそのマスターは紛れていた。

それから一時間ほど経つただろうか。いきなりサーヴァントの気配がマスターを離れて明後日の方向へ行ってしまったのである。何が起こったのかはわからない。

まだ日が高いからとマスターは油断して、一人で寛ごうとしたのか。

神秘の秘匿、とやらが魔術師には重要だそうだ。魔力を存分に振るった戦いは夜に行うべきものと、セイバーは知っている。ランサーも神秘の秘匿とやらで戦いは夜と言っていた。

——この人の中で敵マスターを発見でき、かつサーヴァントを遠ざけている僥倖。

——だからこそ今。

——魔力を使わなければ——神秘を行わなければ——戦ってもよいのだろうか。

もとよりサーヴァントは既に人ではない。さらにセイバーには人を素手で捻り殺せるくらいの力はある。人を殺すのに、セイバーのサーヴァントは武器を要さない。

セイバーは靴音を消してコーヒーショップへ向かう。いらっしやいませと声をかけてくる店員を無視した。店員は先に席をとろうとするのかと考えて、気にも留めない。セイバーは速足、そして駆け出し、他の客を突き飛ばしテーブルを押しつけて拳を握りしめる。

男は何事かと思いい顔を上げる。セイバーと目が合う。その顔は驚愕に彩られ、恐怖が滲む。

一昨日、命を狙って現れたサーヴァントを忘れるはずがない。すぐさま危機に気づいた男が必死で口を開いた。

「……お前は……!!! 令呪を以って命……」

男はその言葉を最後まで紡ぐことは叶わなかった。それよりも早く、セイバーの掌が男の喉笛——首を掴み潰してそのまま上に持ち上げていた。男の足は床から離れ、椅子から尻が浮き、口がぱくぱくと酸欠の金魚のように開閉する——その間もなく、鈍い音の後に男は動かなくなった。疾風のごとき速さで一連の動作はなされ、止められるものは皆無だった。

そのままセイバーは男の首から手を離さず、むしろ力を加え続け——力を失った四肢と首が連結を失い、大きな砂袋が落とされるように胴のみが床に落ちた。噴水のように倒れ伏した体から生命の液体が噴き出す。鉄の匂いが充満して、周囲から悲鳴は上がる。

セイバーにとつて悲鳴は雑音でしかなく、そのまま首を無造作に周囲に放り投げた。

服も手も血まみれになり、黒く磨かれた床には鮮血と肉片が散らかっている。逃げ惑う客、腰を抜かす客、あまりの光景に気を失う者はいるが、凄絶なその光景を止められる人間などいなかった。

セイバーは仰向け——首がないから分かり難いが——になった男の心臓部を踏み抜いた。ろっ骨を粉碎する鈍い音に、臓物のつぶれる温い音。

男の座っていた場所は外に面したガラスの近くだったため、透明な

ガラスに血飛沫が飛んだ。

やっと周囲を見れば、まさに狂乱だった。腰を抜かして動けないものが向けてくる目は、セイバーには慣れ親しんだものだった。もうここに用はないと、セイバーは明の制服に血しぶきを浴びたまま、外に面したコーヒーショップのガラスを破りそのまま雨の中を疾風染みた素早さで逃走した。

「実は逃走中にアサシンを見かけた。戦おうとしたが、そうなるど流石に魔力を使わざるを得ない為放置した。昼間だったことが惜しまれる。アサシンには気配遮断を使用して逃げられたが、放っておけば勝手に消えるだろう」

セイバーは目に止まらぬ速さで駅前を駆け抜けたが、その分雨は激しく体を濡らし、手や素足についた血液は概ね流された。そのままビルとビルの上を駆け抜けて碓氷邸に戻ってきた。

明はセイバーの魔力使用を感知していない。本当かどうか疑われるくらいにセイバーはいつもと変わりが無い。制服に血痕が付着していること以外は。

明は激しく動揺しながらも真実を確かめるべく、セイバーの横を過ぎて一階の食堂に戻りテレビをつけようとした。しかしニュースとして報道されるまでにはタイムラグがある。

明は大急ぎでセイバーの部屋に行き、ジャージと適当なマフラーと帽子を持ってきた。

「……セイバー、その殺したって場所に行こう。駅前だよ。その服脱いで、このジャージに着替えて」

「?何故「いいから」」

まごつくセイバーを急かして上下ジャージ、マフラー、帽子を被せると明は傘を持ち外に飛び出した。

明はいつもは春日駅まで歩くのだが、いてもたってもいられない状

態のためより近い私鉄の駅を使用して向かった。

いつも人の多い駅だが、足早に件の店に向かう。近づけば近づくほど空気が妙な事に気づく。

件のコーヒーショップに多少人垣ができていて、雰囲気尋常ではないことがわかる。そして人と人の間から、黒と黄色のテープが張り巡らされているのが見え、その内側には明らかに野次馬ではない人々が動き回っている。

明とセイバーは人垣をかき分けてテープぎりぎりまでにじり寄った。

「……」

コーヒーショップは流石に落ち着きを取り戻してはいた。だが、外に面した窓ガラスは派手に打ち砕かれ、観葉植物やテーブル、いすはひっくりかえったまま。そしてガラス近くの床は、人型に白いテープが貼られて、まだ生々しく血液が拭き取られないまま残されていた。

ここで、セイバーが言った通りのことが行われたことは間違いがないだろう。

「死体がないな」

明の心境をよそに、セイバーは不謹慎極まりないことを言っている。よく見れば、床だけでなく壁やガラスにも細かく血液が付着している。セイバーはかなり凄惨な殺し方をしただろうことがよくわかる。報道では詳しい死に様は語られないだろうが、すぐどこから漏れるところになるだろう。

呆然と明はその場に立っていると、店員に事情聴取をしている刑事たちから被害者の名前が聞いて取れた。請井将（うけい しょう）という名前だそうだ。

「……」春日の魔術師じゃない……聖杯戦争のために他から来たマスター……」

「春日の魔術師かそうではないかがわかるのか？」

「まあ……碓氷はこの地の管理者だから、新たに春日の地に家を構える……工房をつくる場合は私に挨拶して許可を取らなきゃいけないんだよ。ここで外道に落ちる魔術師、あ、協会の規則に反して魔術を悪用するのとか、魔術回路が止められなくなって自滅するやつのことだけど、そういうのを止めないといけないし。だから基本私は春日に住む魔術師は大体わかるんだけど」

滔々と説明をしながら、明は困り果てていた。はっと我に返ると、こんな人の多い場所で魔術の話をするべきではないことに思い至った。

明はセイバーの手を掴むと、振り返りもせず電車に乗ることもせず、春日駅から雨の降る空の下に出た。

水が跳ねてブーツが汚れることも気にできず、明は人の中を歩きすすむ。

「これでマスターにもアサシンのマスターを殺したことを確認できたと思う。まずは一人だ」

セイバーは呑気に、むしろ楽しげに話しかけてくるが明はそれどころではなかった。

確かにセイバーは魔力を一滴も使わずに仕留め、魔力だって戦闘に使用していない。

だが魔力を使っていないとはいえ、アサシン染みた行為をするにしても駅前なんて場所ではなく、もっと人気のない場所ですべてほしかった。それに今回は幸運にも何もなかったが、もしギリギリのところでアサシンのマスターが令呪を使用してアサシンを呼び寄せていた場合、真昼間の駅で魔力を使った戦いが開始されていたらどうだろう。

そうなつては神秘の秘匿も何もあったものではない上に、関係のない人を巻き込むことになる。

明は周囲には魔術師として振る舞っているが、「根源にたどり着くためには、神秘を秘匿できれば何人死んでも構わない」というほどの心はない。良心というには小さすぎようが、人は死なない方がいいと思っており、ましてや一般人を巻き込むなど以ての外だった。

(……マスターを殺すのは仕方のないこと……だけど、これは……)  
聖杯戦争に参加したマスターの身の保全を請け負うほど、明は余裕があるわけでもお人よしでもない。だが、セイバーの殺し方はどうだろう。

先ほどの説明では完全にやりすぎの感がある。殺すだけなら、首の骨を折った時点で完遂できたはずだ。首を腕いで、心臓を破る必要はない。

頭が混乱状態で、明は肝心のことより周囲のことからセイバーに問うた。

「……なんであんな殺し方したの？」

「あんな殺し方とは？」

「……多分、セイバー必要以上に相手を攻撃したよね」

「殺すならば徹底的にしたほうがいい。生き返られても困るからな」

顔色一つ変えず告げるセイバーに、明は言葉を失った。

おそらくはセイバーは全てを「良かれ」と思っていてやっている。

何を間違えたのか——明はこれまでのセイバーとのやり取りを反芻し、呻いた。

(……私に非がないっていいきれない)

そもそも最初にセイバーは「俺は手段を択ばない」と言っていたが、明はそれに諾とあまりにも簡単に返してしまっていた。セイバーは「どの程度」手段を選ばないのか、しっかり確認を行っていないかった。サーヴァントに現代の知識はあるが、感覚は違う。

けれどそれを差し引いても、まだ聖杯戦争は序盤なのに悪い意味で明はセイバーには意表を突かれたばかりだと思った。これを放置しては、後々大変な禍根を残すのではないか——勘だが、そんな気がした。

明が逡巡するの知らずに、セイバーも別の事を考えているよううで質問を続けた。



「思うのだが、その春日の魔術師の中に他のサーヴァントのマスターも多いのではないか」

「……私とエーデルフェルトとアサシンのマスターを除いて……いや、アインツベルンのマスターがいる可能性が高いからあと二人……」

聖杯は御三家、今回は御三家に準じる家に令呪を優先的に与え、それでマスターが揃わなければその土地から魔術師を選ぶ。確かに春日の魔術師が選ばれている可能性は高い。

「春日在住の魔術師は何人、いや何家ある？」

「今は二家だけ……」

「その家の魔術師を全部殺せば結構手っ取り早いと思う」

明は今度は間違いなく眩暈を覚えた。しかし眩暈で倒れている場合ではない。

ここでセイバーは一応相談を持ちかけているだけまだましく考えよう、と明は自分に言い聞かせる。

「どうしたマスター。具合でも悪いのか」

唐突に呻きだした主人に、セイバーは慌てて声をかけた。

「あーやー……自分のバカさ加減に死にたくなってるだけだから……」

「マスターが死んでは俺も消えてしまう、死ぬな」

明の死にたいは当然ものの例えである。明自身もセイバーがたまた口にする古代ギャグのようなものを笑うところか何なのか分かっていないが、セイバーも大概冗談の通じない質だ。

明は家から出てきてから、初めてセイバーの顔を直視した。

「……私魔術礼装を昨日からいじってあんまり寝てないんだ。家に帰ったらちよつと横になる。セイバーは家で大人しくしてて」

「……わかった」

雨は雨足を強めもしないが止むこともなく振り続けている。明は速足で歩きながら、再び重い思考に浸かり始めた。

だからその後ろ姿を、セイバーが瞬きもせずじっと見つめていることに気づきはしなかった。

11月28日② 弓兵 対 槍兵

流石に晩秋にもなれば、夜は寒い。一成は黒いコートの前を合わせながらそう思った。終電もなくなった深更の、春日駅前の春日イノセントホテル屋上。高度故に地上より強い風が吹きすさび、アーチャーの束帯と一成のコートが激しくはためている。

曇天の下は月明かりさえなく、闇に満ちている。

一成はいつもの学生服ではなく、清潔な神職用の白衣に無紋浅黄の袴を着用している。

その上にコートとブーツなど履いている為に、傍からすれば陰陽師や神主というよりは坂本竜馬かぶれに見えるだろう。

「そなたはついてこないで良いというたのに、全く聞き分けのない」

大きく聞こえるようにため息をついたアーチャーに、例によって一成は文句を言う。

袴に挟んでいた呪符を突き付けて宣言した。

「マスターとして近くにいた方がバックアップもできるだろ」

「というかそなた、まるで神主……陰陽師感ないのう。空恐ろしくなるほどに。アーチャーびつくり」

「余計な御世話だ！そんなことよりサーヴァントの気配はないのか？」

別にアーチャーと一成は酔狂でビルの屋上で吹きさらされているのではない。

ニユースであった一家惨殺事件。あれがサーヴァントの仕業か否かの真偽を確かめるため、聖杯戦争の夜に足を踏み出したのである。アーチャーは直衣を風にあおられながら、こめかみに指を当てる。

「アーチャーのクラスは素敵に優れるが、私は生前の呪いで少々目が悪くて力が低下している」

「アーチャーのくせに目が悪いつて何だよ……」

「それでも弓使い、目ではなく感じで敵の場所はわかる。だが、今の所サーヴァントの気配は感じぬ」

「ランサーも人食ってるサーヴァントも今日はお休みってか？」

「それはわからぬわ。……少々移動するか？」

「そうだな……じゃあもつと住宅街の方に行くか。中学校の屋上あたりなんか見渡しやすいだろ」

よっこいしよとサーヴァントとは思えぬ掛け声でアーチャーは腰を上げた。そして有無を言わせず一成の襟首を掴んで高層ビルから飛び降りる。遙か眼下にはぽつりぽつりと街灯のある、大きな道路が横たわっている。舞うようにアーチャーは隣のビルに飛び移り、さらに駆けてビルからビル、そしてそれが少なくなってから屋根から屋根へ飛び移っていく。

アーチャーは身にまとった重々しい衣冠束帯からは想像できないほど俊敏、かつ身軽な動きで冷たい闇を駆け抜ける。高所恐怖症の間なら卒倒してしまいかねない行為だが、一成は別の理由で気絶しかかっていた。襟首が掴まれていたせいで半ば首が締まっていたのである。

知ってか知らずか、アーチャーは闇に眼を走らせながら、抱えた一成に告げた。

「……一成、サーヴァントの気配じゃ。まだあちらはこちらに気づいてなかるうが……どうする？」

「ゴホ、ど、どのサーヴァントかわかるか!？」

「そこまではわからぬ。私たちはまだ直接サーヴァントにまみえたわけではないからな」

まだ敵はこちらに気づいていない。ならば、一成の指定した中学校の屋上より、先制攻撃を仕掛ける。アーチャーは三分程度の夜間飛行を経て、一成の示した私立中学校の屋上に着地した。

落下防止にフェンスで囲まれた、特に何の変哲もない学校の屋上だ。

一成はげほげほとむせながら涙目で文句を言おうとしたが、当のアーチャーは既にその弓を番えていた。

「――」  
アーチャーの弓は、弓道をしているものなら親しみのある和弓だ。

しかしどうも戦闘用とは思えない。それはアーチャーが衣冠束帯のいでたちであり、その上矢のストックは、漆塗りの箱に入れ、扇型に配置された矢を大きな紙——間塞まふさぎで包み込まれ、平胡籬ひらやなくいで固定したもの——どちらかと言えば儀式に向かう貴族のように見えるからだ。前から見れば、背中に扇状に矢が何本も並んでいるように見える。

儀式めいた厳粛な雰囲気を漂わせ、アーチャーは矢を夜の闇に向けている。アーチャーの構えは弓を知ったもののそれであるが、達人のものかと聞かれれば微妙だと、一成は思った。

圧倒されるような雰囲気もなく——只構えている、という感じだ。

一成は一抹の不安を覚えた時、アーチャーは深く息を吸い、そして告げた。

「——この矢、中れ」

それまでの平凡なる射手は、その一言で全てを変えた。風が渦を巻いて吹き上がり、尋常ならざる魔力をその弓手に凝縮し——引き絞られた矢が放たれた。

その矢は恐るべきや速さで飛んでいくわけでも、超絶技巧がなしえる神技でもなく——それでも、目的に向かって跳んだ。空を切っていくのではない。駆けていく矢ではない。

言うならば、跳躍。この場所から標的へ、一瞬にして跳躍し貫く何か。

一時風が吹きすぎ、すぐに納まる。耳が痛くなるような静寂の中、一成はアーチャーを見上げた。

「祈れよ一成。私の矢は相手が不幸であればあるほど必殺となる」

「何だそれ？」

「少し黙らんか。今敵サーヴァントに中ったか確認しておる……!」

アーチャーは目を見開き、一成を一顧だにせず弓の跳んだ先を目を凝らして見つめていた。しかしすぐに眉間に皺を寄せ、期待が外れたように息をついた。

「どうした」

「弓は中った。中ったが、傷を負わせるに至っていない。——ずいぶん硬いサーヴァントのようじゃ。そして、そやつはこっちに向かっている」

敵は人食いサーヴァントか、それ以外か。どちらにしろずっと逃げ回っているのは敵の情報すらもおぼつかない。

「迎撃するぞ」

一成は頷き、遠き夜から飛来する英霊を待ち構えた。

ほとんど時を置かずして、何か力の塊のようなものが近づいてくるのを感じた。それは目にもとまらぬ速さで、唐突にその威容をアーチャーたちの目の前に堂々と晒したのだ。

空を裂き、コンクリートの上に滑り込んだのは長い槍を手にした男。彼はそれを振り回し、ぴたりとアーチャーに向けて見せた。

「応応、四日目にしてやっと見つけたわ。狙撃とは何事かと思ったが、アーチャーならば道理！」

それは三メートルに達する槍。柄には呪布が巻かれ、槍の神秘を隠している。その槍の担い手自身も二メートル近い巨軀。身軽な鎖帷子に、動きやすい藁草履。

見るからに槍兵のクラス、ランサーと推察された。

「儂はランサーのクラスで現界せし英霊。そなたも名のある英霊と見える。いざ尋常に死合おうではないか！」

嬉々として、という表現がふさわしい朗々たる声が響く。溢れ出す闘気と威容に圧倒され、一成は言葉を失った。

それに反して、アーチャーの様子は微妙、かついつも通りである。彼は一成の耳元でぼそぼそと囁いた。

「一成、アレは私の苦手なヤツじゃ。そもそも武士？侍とやらは我々に仕えるはずのもののだが、何故それと私が戦わなければならぬのかとんとわからぬ。時代の変遷とは恐ろしいものじゃ」

アーチャーはランサーの闘気を受けてもけろりとしている。初め

て敵サーヴァントを眼にして立ちすくむしかなかった一成は、アーチャーの飄々とした態度に助けられた。見るからにやる気に満ち溢れているランサーで、先ほどのアーチャーの矢で傷ついたようには見えない。

「……本当にさっきの効いてないみたいだな」

「うむ。ちよつと頑張ったのだがいたしかたない」

アーチャーと一成の話が聞こえたのか、ランサーは興味深げに口をはさんだ。

「お前の弓か？ありやなんだ？飛来するというよりはいきなり現れた、という感じだったか！」

「それをやりすぎしたそなたじゃ。説明することもあるまい」

「応。儂は頑丈さが自慢だからな——しかし、お前のような不可思議な矢は見たことがない」

ランサーは笑う。決して逃がすまいとする獰猛な闘志を滾らせて、敵を見据えている。

近距離戦は不利と知りながら、アーチャーは、背負っている矢筒から矢を抜き取り番える。

ランサーが大槍を構える。アーチャーが弓を引き絞る。

「本来、戦には向かないが」

常軌を逸したほどの緊張が高まり、放たれる直前の矢のように張り詰める。

「……私は聖杯に用がある故に、此度の生でも戦わなければならぬ」

飄々とした雰囲気は掻き消え、アーチャーも敵意を露わにした。

その豹変に一成が驚くより早く、二騎のサーヴァントの威圧がぶつかり、そして堰を切る。

\*

それは、当然の如く人の所業ではない。溢れ出す魔力の奔流に負け

まいと、一成は目を見開いて己がサーヴァントの戦いを追う。本来、アーチャーとは近接戦に向くサーヴァントではない。遠距離から寸分たがわぬ射撃で敵を射殺す、そういう戦法を得手とするサーヴァントである。

だからある程度の不利を、一成は予想していた。

「重く苦しい衣装の割には素早いな！アーチャー！」

ランサーの振るう大槍を、アーチャーは紙一重のところまで避ける。その大槍の一撃一撃が空気を突きやぶり、衝撃波が波となつてびりびりとして一成の肌をも震わせる。

しかしランサーの言葉の通り、仰々しい衣冠束帯を纏うアーチャーだがまるで舞を舞うかのように猛攻を躲し、隙間を縫い、そしてランサーの懐に潜り込んでいく。

アーチャーの手には銀色の剣。研ぎ澄まされたその輝く剣は、全長五十センチと小ぶりで脇差に近い。それが一突きにランサーの胴を狙った。鈍く槍と剣の交差する音が響き、大槍の柄でアーチャーの剣が防がれてしまう。

その一瞬の間に、目に映らぬ速さで蹴りがアーチャーに叩き込まれ、真横に吹き飛ばされた。

ロケットを放たれたかのようなスピードで落下防止のフェンスにたたきつけられたアーチャーは呻きながらも、直ぐに気を持ち直して屋上を駆ける。駆けながら、剣の代わりに出現させた弓を構え放つ。同時にランサーも迎撃、攻撃を加えるべくアーチャーに合わせ並走する。

これがサーヴァント同士の戦い。最初は二騎の動きを眼で追っていた一成だが、全てを追いきけることは到底不可能であった。槍と剣、槍と弓がぶつかり合うたびに閃光が迸り、それぞれの武器が放つ余波が空気を震わせ轟く。

神秘と神秘がぶつかり合う戦いは、当人同士が意図せずとも周囲を異界の如き様相を現出させる。

一成は全てを眼で追うことを諦めた。手持ちの呪符を握り、心を鎮めて詠唱を始める。

「急急如律令！」

息継ぎは出来るだけ少なく、素早く。詠唱用に省略化した祝詞を詠唱にかえてアーチャーに放つ。すると屋上を縦横無尽にかけるアーチャーの衣冠束帯を始め、負った手傷による出血が止まる。

土御門家の陰陽道魔術は、式神操作の他にも神道の影響を受け汚れを祓い浄化することを得意とし、また一成も起源的にそちらが得意である。他人の魔力に干渉することは難しいと言われるが、サーヴァントであるアーチャーに掛けたせいも、いつもよりよく効いている。

「一成…そなたは私よりも己の身を気にかけてよ！ランサーのマスターがどこに隠れているかしれぬ！」

アーチャーはそう叫んでランサーの薙ぐ攻撃を、背を屈めて逃れる。アーチャーがマスターを案じる声を、ランサーは一笑して掃つた。

「はは、安心せいアーチャー。今宵は我がマスターはここにはおらぬ！見てはいるがな！斯様に気にすることは無い！」

ランサーが振るう大槍の猛威を避け、給水塔の上に陣取ったアーチャーはすぐさま射の構えを取り上空から摩訶不思議の矢を放つ。

だが、まるでそれを総べて見切ったかの如く大槍で一撃目、二撃目、三撃目と叩き落とした。

「そのような言を信じると思うか？」

アーチャーは給水塔の上から飛び降り、一成を護るように前に立つた。そして警戒を切らさぬまま、冷ややかに言い捨てた。ランサーは槍を構えたまま、苦笑する。

「儂としては相方とは共に戦場を駆けたいのが、どうもノリ気ではないようだな。ここにはおらんのだ。……信じるか否かはお前たち次第だがな」

「相方とな」

アーチャーは警戒を解かず、「相方」の意を聞き返した。共闘者でもいるのかと思っただけであろう。



「おお、我が主人の事よ。だが、儂が忠誠を誓うは生前も死後も彼の殿、ただ一人のみ。故に此度の聖杯戦争のマスターは儂にとつては共に戦う相方、仲間なのだ」

ランサーは誇らしげに宣言する。その殿はランサーの誇りであり、かつ忠誠を捧げきつたことも誇りであったのだ。

「なるほどのう。かくいう私もこのちんちくりんを主人として敬う気持ちは小指の爪垢ほどもない故」

「おい」

いつもながら散々ないいように一成は突っ込んだ。それを意に介さず、アーチャーはふむ、と顎を撫でながら、不思議そうな顔を作った。

「しかしそのような誇り高き英霊であるそなたが、今更聖杯などに何を願うのじゃ」

ランサーは、待っていましたと言わんばかりに胸を張った。大きな拳で厚い胸板を叩く。

「戦いそのものよ。儂は生前五十数の戦場を駆け、殿のお役に立てたと自負している。だが、儂のような武骨物は、戦いの必要なき太平の世にはもう必要なかったのよ」

「狡兎死して走狗煮られたわけじゃな」

全く遠慮のないアーチャーの言葉にも、むしろすがすがしいと言うようにランサーは笑った。

そして筋骨逞しいその腕に、再び力が籠められる。

「全くきっぱり言ってくれるな！しかし、そうかもしれないな。太平の世となり、儂の力は不要となった。……だが、やはり儂の居場所は戦場でしかなかったのよ」

「ふむ。日本第一、古今独歩の勇士と見えるとはやはり分が悪い」

「それってやっぱり……」

一成もうすうすう感じていたのか、確認するようにアーチャーとランサーを見比べた。

五十数の戦場を駆け抜け、ただ一人の殿に生涯の忠誠を誓った武士。そして最後まで忠誠を果たすものの、太平の世となった晩年は不

遇をかこつた天下無双の槍使いといえ、とつさに浮かぶ名は一つ。  
ランサーは真名を推測されたことを喜んだ。

「ははは、儂の時代は名乗りを上げ御首をとることこそ誉れだったのよ。よって今も真剣に真名を隠すことに気乗りがしなくてな」

豪放に笑い飛ばすその武人は、そもそも真名を見破つてほしかった気配すら見せて満足げである。流石にマスターから真名を名乗るなとは言われているが、ばれてしまったら仕方がないと言わんばかりだ。アーチャーは口を歪ませた。

「そなたの勝手だ、好きにせよ。しかし真名を知られることは、魂の緒を掴まれることでもあると知ったほうが良いぞ、ランサー」

「こりやつれない奴よ」

アーチャーは再び一成の首根つこを掴んだ。そしてこのまま逃亡する心づもりである。

ランサーの真名は看破した上に、使い魔の式神で観察した上でランサーが人食いサーヴァントでないこと確認済みである。

単騎でランサーに対しての勝算はあるにはあるが、今彼を倒すには犠牲が大きい。

今後を考えるとランサーは後回しにすべき——それがアーチャーの出した結論だった。

しかし、そうは問屋が卸さない。

「そう急ぐこともなからう弓兵。儂は機嫌が良い。……我が槍の真髓を味わってゆけ」

ドクン、と大気が脈打つ。ランサーの全身に漲っていた魔力がいや増し、構えられている槍に凝縮されていく。槍そのものが生き物であるかのように震えているようだ。目の当たりにしたことはなくとも、わかる。

英霊を英霊足らしめる高貴な幻想、ノウブル・ファンタズムそれがまさに解放されようとしていることが一成にも肌で、回路でわかる。

眼が縛り付けられたかのように、ランサーの槍から離せなくなる。凜猛な笑みを浮かべ、ランサーは大きく槍を振り回し一步前へ踏み

出す。

「急所を避けよう、などと甘いことを考えるなよ弓兵。この槍に少しでも掠ればお前の命はない——御首頂戴致す!!」

凝縮された魔力が吹き荒れる。目に映るほどの魔力により、引き絞られた弓のように放たれたランサーとその槍はアーチャーに襲い、かからなかった。

「……?」

急激に拡散する魔力。あれだけの密度が吹き散らされて雲散霧消する。一成は思わず身構えていた力を抜いた。

短い剣を構えていたアーチャーも訝しげにランサーを見た。大槍を肩に担ぎ直し、先ほどまでの緊迫感はどこへやら、ランサーは高らかに明るく呼びかける。

「……アーチャー！期待させて済まなかった！どうやら今宵はまだ我が伝説の具現には早すぎるようだ！」

宝具発動寸前のように見えたのだがどういふことかと一成が首を傾げていると、訳を察したアーチャーがこっそりと告げた。

「大方、やつのマスターが止めたのであろう。あのランサーも我々と同じように偵察なのであろう」

しかしランサーは消化不良と言いたげにため息をついた。「ちと儂は興に乗りすぎたようだ。現界してから初めてまともに手合せした故に、羽目はずしてしまったようだ」

ランサーは宙返りで屋上のフェンスの上に立つ。名残惜しそうな表情をして、闇の中に身を投げた。

「それではまた会おう！アーチャーとそのマスターよ」

深更の夜を、家やビルの屋根を飛んでいくランサーが見えなくなつてからやっと一成は息をついた。

これがサーヴァント同士の戦い。

ランサーがあのような真っ向勝負を望むサーヴァントだったため

か一成が狙われることはなかったが、もし違ったのなら一たまりもないと思う。

飛び交う閃光、剣戟、そして神秘。今更心臓が口から飛び出しそうなほどの緊張を覚え、一成は胸を掴んだ。解れた衣冠束帯にため息をついたアーチャーが、彼を振り返らずに呆れていた。

「何故今頃緊張するのじゃ。わからんマスターよ」

「う、うるせー！眼で追ったり何をすればいいか考えるのに必死だったんだよ!!」

「別にバカにしてはおらぬ。真っ最中に硬直してしまうよりは上等よ」

アーチャーも一息ついて、短い剣と弓矢を消した。束帯に彼方此方破れたり汚れたりした個所を見つけてうんざりしているのが良くわかった。

「しかしアレの槍は相手にしたくないものだ。あ奴、当然のように全力は出しておらぬし、戦という点にかけては私より優れたサーヴァントであろう。それになにより宝具が伝説通りだとすれば、本当に掠っただけで致命傷ぞ」

一成は頷く。ランサーの宝具は、穂先に留っただけの蜻蛉が真つ二つになったという、天下三名槍の一。だがアーチャーはなぜか自信ありげ、というか楽天的に頷いている。

「まあなんとかなるであろ」

「……アーチャー、その自信ってどこから来るんだ？」

決してランサーに対して優勢だったわけではない割に余裕ある態度が謎である。しかも「分が悪い」とも戦闘中に発言していた。

しかしアーチャーは内容を語ろうとせず、一成はさらに首を傾げるしかなかった。

11月28日③ 小碓命

「——がそう望むなら未来永劫、この国で『日本武尊』になる」

父帝が、噂で聞いた美しい二人の嬢子をお召しになった。その二人を連れてくる役目を、少年——小碓命の兄、大碓命が任された。

しかし兄の大碓命はその美しい二人の嬢子を己の妻とし、他の女を父帝に捧げてしまった。

けれども父帝は、その二人が自分の召した嬢子ではないとおわかりになってしまった。

そして大碓命も、今更ながら自分のしてしまったことに恐れおののき、父帝と顔を合わせない為に朝夕の宮中行事に参加しなくなってしまう。

そうなってから暫くしたある日、帝は弟の小碓命を呼んでこう仰せになった。

「お前の兄は、朝夕の行事に出席しないな。私は兄に会いたいから、前から諭してよくしてやりなさい」

まだ年端もいかなない少年であった小碓命は、父から任されたことに喜んで諾と申し上げた。

真実、父帝は御怒りであつただろう。兄の行いを知っていた小碓命は、父帝の思いを自分なりに推し量り、父帝の望むことをしようと思つたのである。

——父帝は大層お怒りだ。

——それこそ、ご自分で兄をお呼び出しになって、葬りたいとお考えになるほどに。

神世の血を覚醒遺伝的に受け、見た目の華奢さとは裏腹に大の男に勝るほどの膂力を持った小碓命は、兄の手足をもいで殺し、便所に捨

てた。

——これで父帝もご満足なさるはずだ。  
そう期待に胸を膨らませて。

数日たつても、大確命は顔を出さない。不審に思った帝は、小確命にこうお尋ねになった。

「お前の兄はまだ行事に顔を出さない。ちゃんと話をしてくれただか」

小確命は晴れやかに笑って答えた。「ええ、もちろん」

疑問をお持ちになった父帝は、再びお尋ねになった。「どのような話したのか」

小確命は晴れやかに笑って答えた。「兄が厠に入った時、掴んで、手足を引き裂いてそのまま捨てました」

小確命はそのまま父帝の「よくやった」という御言葉がもたらされるのを待った。

だが、もたらされたのは恐れを孕んだ、冷たい御眼差しのみだけだったのである。

父帝はこの時、小確命を大層荒々しく、また残酷な心の持ち主だとお思いになった。

小確命は父帝の意図を誤解していた。父帝は確かにお怒りでもあったが、同時に自分の息子を許そうという御気持ちも持たれていたのである。しかし話が話なだけに、表だつて話すべきことでもないのだ、直接大確命と二人でお話になりたかつたのである。

そして父帝も小確命を誤解なさっていた。小確命は荒々しい性格では決してなく、自分なりに尊敬する父帝のために、喜んでいただけると思つて兄を殺したのだ。

この時、小確命は父帝がお喜びにならなかつたことに首を傾げるこ  
としかできなかつた。

\*

「……今の夢は……」

明はゆっくりと目を開いた。眠りにつく前はまだ薄明るかったのだが、すでに日は落ち切っている。自室で、手元の明かりをつけて目をこすった。

まだ幼い少年と、その兄、その父の話だ。夢で展開された話は、明もよく知る伝説と酷似している。古事記にある、景行天皇を語る部分にある小碓命の話だ。

「……セイバーの、過去？」

サーヴァントとマスターはパスでつながれている為に、過去の記憶を垣間見たのかもしれない。もしそうだとしたらサーヴァントとはいえ、気持ちのいいことではない。

(……寝るときは意識をカットしよう……)

若干の申し訳なさを感じつつ、明はのっそりと立ち上がった。

睡眠で頭も幾分すっきりし、やらなければならぬことも思い出した。むしろ、やっと決心ついたというべきか。

階段を下りていくと、リビングにて電気をつけたまま、セイバーはまるで彫像のように身じろぎひとつせずソファに座っていた。またれかかるともなく背筋を伸ばし、宙の一点を見つめている。

てつきり部屋の炬燵で眠っているとばかり思っていた明は、少し驚いた。

隣の食堂にあるテレビがついたままのようで、今ではセイバーの起こした事件が「白昼の通り魔」「謎の女」などと扱われているのが明の耳にも聞こえた。

またここ数日で医療事故・連続殺人・謎の通り魔と凶悪な犯罪が立て続けに起きている春日市が大きく取り上げられている。

——やつぱり、まずいな。

バーサーカーによると思われる連続殺人もそうだが、魔力を使っていないとはいえ白昼堂々とした暗殺もまずい。このままマスコミに取り上げられるような事件が続けば、夜だけの聖杯戦争もやりにくくなる上に神秘の漏えいにもつながる。なにより、関係のない一般人の不安をいたずらに煽る。

おそらくセイバーは文句タラタラに言うだろうが、やはり許すことはできない。

明にどうあつても許可できない一線があるとするなら、まさにこのことに他ならない。

はつきりと伝えなければ、と決めて眼下を見れば、微動だにせずセイバーが座っている。

明がいることに気づいているのかいないのか。もしかしたら目を開けて寝ているのか。

「……セイバー?」

「……!マスターか」

どうやら本格的に気づいていなかったらしく、セイバーは目を丸くしてソファから降り落ちそうになっていた。炬燵にもぐって動作が遅くなることはあつても、返事だけはきちんと返す彼にしては珍しい。

「……何してたの?」

「……特に、何も」

「……そ、そう」

妙な沈黙になった。とても気まずい。セイバーもセイバーで妙に挙動不審で、ちらりと明を見てはすぐに目を逸らしている。いつもはどうかと思うくらい目を合わせてくるタイプなので余計に奇異に見える。明は自分を鼓舞するように手を打った。

「セイバー、お腹すいたからご飯食べよう。今から作るけど何食べた  
い?」

「……作ってくれるなら何でも構わない」



今までに何度か食事をこしらえたことはあるが、セイバーは特にリクエストをしない。出されたものは米粒一つ残さずきれいに食べるが、量を多く求めない（サーヴァントに食事は要らないが、効率は悪いが魔力回復につながる）。

いただきますとごちそうさまを言い行儀よく食べ、やたらと沢庵を摂取するがその程度だ。あまり作り甲斐がないと言えませんが、文句を言わないのでそれは助かる。

あまり時間をかけたくなかったので、明は余っていた肉じゃがにカレーうどんをいれてリサイクルカレーうどんを作った。それと野菜を切ってドレッシングをかけるだけの簡単サラダだ。一人暮らしの大学生がこれだけやれば十分だろうと明は思っている。

のそのそとセイバーはリビング隣の食堂に顔を出した。テレビをつけたまま、六人掛けのテーブルについて二人でいただきますと言つて食べ始める。明もセイバーも喋るときは喋るが、多弁な質ではないため食事は静かなものだ。

黙々と食事をする音だけがして、ある時セイバーは箸を止めて静かな声で尋ねた。

「マスター」

「何」

「……その、なんだ」

セイバーは妙に歯切れが悪い。今までの言動からすれば、言うべきことははっきり言うタイプなただけに妙だ。

「……俺は何か、間違ったことをしたか？」

明はゆっくりと頭を振った。大丈夫、と彼女は自分に言い聞かせてから、ことりと箸をどんぶりの上に置いた。

「そんなことはない。聖杯戦争に臨むサーヴァントとして、セイバーの行いは間違っていない。——でも、私の質問に答えてほしい」

ここでしっかり意思疎通を図らないと——明は一度唾を呑んだ。

「前に『できるだけ一般人を戦争に巻き込んではいけない。宝具の使用も時と場所を考えて』って言ったと思うんだけど覚えてる？」

「ああ」

「その時にさ、セイバーはじゃあ『どれぐらいなら一般人を巻き込んでもいい』って思った？何時どんな時なら宝具を使ってもいいって思った？セイバーの思った通り、素直に答えてほしい」

セイバーは腕を組んで、暫し沈黙考したのちはつきりと答えた。

「この市……春日の人間がいなくなる程度ならよい。宝具の使用は昼より夜が望ましい。場所はどこでも構わない。俺の第一宝具は融通が利くが、第二宝具は見境なく周囲を巻き込むから、直に宝具を見られる位置にいる一般人は死ぬだろう。死人に口はない」

予想はしていたが、明は流石に二の句が継げなかった。明のできるだけ捲き込まないは巻き込んでもせいぜい数人くらい、セイバーのような対城宝具は当然夜に、場所は山や海など、とにかく人気のないところだと思っていたのだ。

明は、無条件にセイバーが同じ意識であると勘違いしていた。ここまで違う解釈をされているとは考えなかった——否、たとえ勝つために人食いを止む無しとしていたとしても、あの日本武尊がこの国の人々を無為に死に至らしめることを全く厭わないとは考えていなかったのだ。

いや、それよりも。

——「その、地図が置いてあるようなところはないか」

悠久にも等しい時を超えて、彼の愛した国がまだあったことを喜んだ彼の姿。その姿が嘘偽りにはとても見えず、明は自分でも気づかぬうちに「このようなセイバーは決して一般人を巻きこみ、無意味な災厄を起すことはない」と思っていた。

明は慎重に言葉を選びながら、重ねてセイバーに問う。

「……この市にはたくさんの方が住んでる。駅とか見たでしょ？そんな宝具の使い方をすれば、たくさんの方が死ぬ。セイバーはこの国の方がたくさん死んでもいいの？」

聞きながら、明には半ば返ってくる答えに予想はついていた。

そして、あたかも朝日は東から上り、西に沈むと当たり前のことを言うように。何がおかしいのかと問いかけてくるようにセイバーは口を開いた。

「今や大和の国には一億を超える民がいると聞いた。その中で一つ二つの街が消えようと国が亡ぶわけではないだろう」

僅かな軍勢で東国の荒ぶる神々を従え、国土を平定せし護国の英雄。

そう、彼は本当に大和と言う国のために戦い、鎮め、護ったのだらう。

けれど、彼は一度として「人」を救ったことはない——  
セイバーの「愛した大和」には、そこに住まう人々が含まれていない。

父の景行天皇は息子の「荒々しい気性と残酷な性格」を恐れたと言うが、本当に恐れたのはその点ではないのではないだろうか。

夢の中の小碓命、アサシンと勝手に戦い、真昼間にそのマスターを殺害したセイバー。

彼はそれをすべて「父帝に／マスターに、良かれと思って」行っている——。

もとよりセイバーに悪意などない、いや、善悪の基準が曖昧とでもいうのか。彼にとって暗殺は手段であり、同時に正々堂々と正面から叩きのめすことも手段であり、彼が暗殺と言う手段を選んだとしても単に最も効率が良い方法だから、と言うことに過ぎない。

正々堂々も、だまし討ちも「相手を殺す」という結果は変わらないのならそこに優劣は存在しない。

今思えば、セイバーが最初「俺は手段を選ばない」と言った時、あれでもセイバーはかなり頑張ってマスターの意を汲もうとしていたのだ。聖杯からの知識を得て、己が当然とするやり方を必ずしも良いと思われないことを知ったのかはわからないが、明にそれを伝えようとしたのだ。

しかしそれにしても、加えて今までの言動を振り返ってみると――

「……セイバー」

「なんだ」

「セイバーってさ……私も人のこと言えないんだけど……」

「？」

「天然っていうか……」

「??」

「……」「ミユ障……?」

流石に聖杯は限りなくどうでもいい現代スラングの知識までは与えない。頭にハテナを浮かべながら、セイバーは真顔で真剣に「「こみゆしよう」とはなんだ」と聞いてくるのであった。

若干親近感を覚えたものの、明は意を決してセイバーに言わなければならぬ。

このままセイバーの好き勝手にさせてはいけない。いや、本人は「良かれ」と思っているのだからなおさら質が悪い。

勢いよくテーブルに両手をつき、黒い瞳を合わせる。

「最初に手段を選ばなくていいっていったけど、あれはなし。手段を選びなさい、セイバー!」

セイバーは訝しげに明を見ている。明はセイバーに人差し指をつきつけ、はつきりと宣言した。

「魔力を使って戦ってるのを見られたとき以外は一般人死者を出さない!そして明らかに「人に見られるだろうな」って場所では戦わない!街中でその……第二の宝具を解放しない!宝具を使っているのは山の中とか、海の近くとか、とにかく人気のないところじゃないとダメ。マスター殺しは……禁止しないけど、魔力を使わなくても駅前みたいな人の多いところでは禁止。誰にも目撃されなくらいのレベルじゃなけりや禁止!」

「マス」そしていつでも戦闘行動をとる前とかには確認を取るように

しなさい！あと、マスターを殺すときには不必要に死体を傷つけない！昼間みたいなのは完全にやりすぎ！」

「明！」

一氣にまくしたてる明に、セイバーも声を張った。

予想はしていたが、セイバーは言いたいことがありげに明を睨んでいる。

「それらの条件が望みであれば、俺は今マスターが言った条件下で戦う。だが一つ聞きたい。——マスターは本当にこの戦争に勝つ気があるのか？」

明とて、自分の提示している方策がセイバーの力を削ぐものであることを自覚している。

白兵戦に強いセイバーだが、彼は暗殺・奇襲も得手とする。それを封じようというのだから。

セイバーの鋭さに怯んだが、明はそれでも負けじと睨み返す。ここで怯んでしまつては、全てが瓦解する——後々惨事を引き起こすに違いない——そう感じた。

「あるよ。だけどこれは魔術師の戦いで、それ以外の人を巻き込むべきものじゃない」

明は聖杯そのものに興味はく、何事もなく聖杯戦争が終わればそれでいいと思っている。つまり彼女自身が勝つ必要もないと言えばいい。だが、さすがにここで「別に勝たなくてもいい」など言つたら令呪を使う前にセイバーに千切り殺されそうで言えなかつた。

セイバーは明の言葉を鼻で笑って返した。セイバーがあからさまにバカにしたように見えてくるのはこれが初めてだった。

「いつまでそんなつまらないことを言っていられるか見ものだ。明、いいか、勝たなければ意味がない。勝つことは生きること、負けることは死ぬことだ。勝つことではしか道を開くことはできない」

「セイバーにとつてはつまらないことかもしれないけど、私にとつては大事なことなんだよ。関係ない人を巻き込んで死人を出して、私だ

「け勝って生き残つてもしょうがない」

「考えに違いのあることはもはやどうしようもないことだ。それくらい明とて百も承知している。」

「だが、セイバーの戦い方は後々大きな被害を生みかねない。」

「ゆえにセイバーの方針は、明にはどうしても許容できないものであった。」

「甘い。この戦いに於いて勝つこと以外を求めべきではない。慢心驕り油断は勿論、甘さも見てくれも全て捨てろ」

「明は静かにテーブルの下で、己の右手の甲にある痣を撫でながら、静かに問うた。」

「……じゃあなたは勝つために全てを捨てたの？日本武尊」

「そうだ。俺の名は日本で最も強き者という意味だ。俺の望みは、他サーヴァントを殺して最後の一騎となることだけ。俺の目的は俺とマスターが勝ち残り、最強を証明することだけ——それは以外は何もいらない」

「セイバーの言葉には揺るぎがない。召喚した夜に教会で願いを尋ねたときと同じ強さが今もある。」

「そっか」

「明は静かに深呼吸をした。いきなり大人しくなったマスターを訝しげに見てくるセイバーに向け、手を伸ばした。手の甲にある痣が鋭く赤い光を発し、さらに膨れ上がる。」

「そして明は意を決し、高らかに命じる。」

「何か勘付いたセイバーは手を伸ばしたが、それよりも明の方が早かった。」

「令呪を以って我が傀儡に命ず！我と意思を通じ、我が意に反する行動を禁ず！」

「まさかマスターがこんな下らないことに令呪を使うとは思わなかった！」

セイバーはすっかり機嫌を損ね、呆れ果てたと言わんばかりに明に怒鳴りつけた。

かつての英雄とはいえサーヴァントとして現界している体は、意思にかかわらず令呪の強制力には逆らえない。普通の人でも意思に反することをさせられては屈辱であろう。

それが古今無双の英雄となればなおさらである。

「言いたいことは山ほどあるが、令呪などに強制されずともマスターの方針には従う！」

「怒ってるのはそっち!？」

わかんないサーヴァントだな、と思っているのが全く堪えていないように見えたのか、セイバーはさらに語気を荒げて怒鳴った。

「大体令呪の効力は期間が短ければ短いほど、目的がはっきりしていればしているほど効果が上がることくらい知っているはずだ！それをこんな漠然としたことに使つては無駄遣い以外の何物でもない！！痴れ者が！」

「でも若干の効果はあると思うんだ。自分で言うのも何だけど、私魔術の素質はあるからさ」

明が令呪を使うことで最も恐れていたことは、セイバーとの関係が完全に決裂することだった。だが、セイバーが斜め上の怒りを飛ばしてくるために妙に落ち着きを取り戻していた。

「……」

明の言うとおりに、セイバーと違和感に気づいている。何か体が重いのだ。自身の内側から大きな力が動きを抑制しているような感じ。しかし重いだけで体が言うことを聞かないわけではない。

動けるが、パラメータが一ランク下がる感覚だ。

セイバーが明を見ると、彼女は得意げに笑っていた。

「私の意に反することを禁ず、って言ったでしょ。期間も限定してないしアバウトな命令だから、セイバーを本当に止めることはできないけど、何か体に違和感はあるはずだよ」

セイバーは静かに頷いた。

「セイバーが聖杯戦争に関して行動しようと思うとき、もし違和感があったらそれは「私の意に反すること」をしているってことになる。緊急の時は仕方ないかもだけど、違和感があったら一回行動を止めて、立ち止まるとかしてほしい」

「……なるほど。一つの意味疎通手段が増えたと考えれば良いのか」

明は令呪によって、強制的にパスによるつながりを強化し、明の思う「禁止事項」を刷り込んだ。

それに抵触する行動を取ろうとするとき、セイバーの体に違和感が生じる。それによってセイバーはそれが「マスターの望む行動ではない」と感覚で理解できる。

明は何でもないことのように言うが、『自分の意思に反する行動の禁止』と具体的な命令でもなく期間の区切りもない命令を若干とはいえ有効にできるのは、明の魔術的素質によるところが大きい。

「もしかしてマスターは、俺が思っている以上に優秀な魔術師なのか？」

「素質はあるって言われてるけど、研鑽期間が足りないからどうなんだろうねえ？」

問われた明はあまり興味がなかった。それより、この令呪の使い方によるとある副作用に思い至り、眉間に人差し指を当てていた。

（……というか実質サーヴァントとのつながりの強化しちやったし……私の精神とセイバーの精神がより混じりやすくなったってことだよな？）

プライバシーもへったくれもないと明は唸った。因果線<sup>パス</sup>でつながることにより互いの夢を過去として見るように、無意識下とはいえ互いの精神に干渉している。今の命令でそれが強化されたことになり、——例えば直近では明が睡眠中に意識をカットしようと、セイバーがそうしない限り完全にカットしきれない弊害が起きる可能性がある。

意思疎通手段の増加という点で考えれば、令呪もあたら消えたわけではないと思っただけセイバーは、落ち着きを取り戻して静かに口を開い



た。

「……マスターの方針には異議はあるが、従おう。だがそうすると、本格的に俺の宝具はゴミだな」

「ゴツ……」

英霊が持つ伝説にまつわる最強の武装。ノウブル・ファンタズム 高貴な幻想とも呼ばれる宝具は、現代の魔術師では足元にも及ばない力を持ち、一度使用すれば伝説通りの効果を発揮すると言う。そんな伝説級の代物を、あろうことかこのサーヴァントはゴミとのたまわったのである。

明が空いた口を塞げないでいるのに気づいていないのかいるのか、セイバーは喋り続ける。

「草薙劍の方はよいが、神劍のほうはダメだな。放つまでに溜めの時間が必要で、一回使えば周囲は何もなくなる、おまけにあれは燃費が悪い。まあ、戦場を山か海にできればまだ使いようはありそうだが」  
「……燃費が悪いの？」

セイバーは人差し指を立てて説明する。「元々神劍は俺の物ではなく、素戔嗚様から借り受けている神によって造られた神の為の劍だ。人の身である俺には、生前から持て余すモノであつたからな。まあ持ち主が持ち主だから……とかく雑な宝具だ」

三貴子の一に対して何やら酷いことをさらりと言つてから、セイバーは明に向き直つた。

「……ところでマスター、改めて聞くが本当に俺は穴熊を決め込んだままでもいいのか？」

今までは穴熊に見せかけて出撃すればよいと思つていたセイバーは、明の命を受けてからそう聞き返した。二十五日を入れれば聖杯戦争が始まつておおよそ四日、教会・ハルカと裏で結び、現在はハルカのランサーが偵察をしているが今の所梨の礫だ。

明は渋い顔で目をそむけた。梨の礫ならまだいいが、一つ困つたところがある——人を殺して回つていくという、バーサーカー陣営。管理者確氷は、これを放置しておけない。

教会はバーサーカーを優先して始末することに諸手を上げて賛成

してくれるだろうが、それをハルカ——ランサーのマスターが賛成するかは別の話である。明は管理者と言う立場上、バーサーカーを優先する義務があるが、ランサーのマスターにその責任はないのだ。

言葉を濁す明を見て、セイバーはにやりと笑った。

「……ほう、何かやるべきことがあるという顔をしているな、マスター」

「……まあ、あるといえればあるし、ないといえれば……あるね」

にやり、と笑っていたセイバーはマスターのテンションの低さ、いや締まりのなさにあきれた。

「……どうしてこう俺のマスターは締まらないか」

おそらくこの事態ゆえに、教会もセイバーの出勤を否まないはずだ。事後報告になるが、さっそく今日から動くべきである。

「とりあえず、今日はここ周辺だけでも探ってみよう」

\*

夜更けの教会にはまだ明かりが灯っている。橙色の光がステンドグラスを通過し、窓の外にぼんやりと色づいた光を投げかけている。暖房をつけて温めているが、天井の高く広さのある教会全体を暖めるには不足がある。

祭壇に最も近い長椅子に腰かけ、足を組んで座る御雄神父は口元に手を当てて笑った。

「ふふふ、始まったばかりだと言うのに波乱だな」

「お父様、笑いごとじやありません！」

御雄の様子に対し、シスターの美琴は落ち着きなく教会を歩き回っている。

彼らが話し合っていることは、聖杯戦争が始まってから起こった事件の数々である。

一つは、教会・ランサー陣営・セイバー陣営で共闘する方針を決め

たのにいきなり足並みを乱すセイバーの行動。さらにセイバーは昼間の戦闘行為は基本御法度であるのにもかかわらず、しかも駅前と言う衆人環視の場所で戦闘を行った。まだ正式な報告が明からあったわけではないが、犯人の特徴と経過を考慮するとセイバーに間違いはないだろう。

「明は一体何を考えているのかしら！あの子が進んでそんなことをするとは思えないけど……」

美琴の知る確氷明という女性は、あまり押しが強くないがマイペース、魔術師として優秀で日々研鑽に励む真面目な人間だった。管理者としての仕事も果たし、神秘の漏えいの恐れがあることはしない筈だ。

「明の報告にもあったが、逸ったサーヴァントが偵察くらいはいいだろうと打って出たそうだ。まだ二人の連携がうまくいっていない……振り回されているのだろう」

サーヴァントは歴史に名を遺した英雄達だ。それに明は人づきあいのうまい方ではない。そういわれれば美琴は納得するしかない。「そうは言っても、明はセイバーを召喚してから一週間以上経っているのよ。いつまでもそんな状態では困るわ……ランサー達が思ううかも気になるし、なにより」

目下、一番の問題はこれである。

一般人を襲い、魂を食らっていると思しきバーサーカー陣営の存在だ。既に十名以上の被害者が出ている。

監督役としては、ひっそりと魔術師のみで行う戦いに、多くの一般人に被害を出すことは好ましくない。——人命を尊んでいるわけではなく、騒ぎになることで「神秘」が一般に漏れることを恐れるからである。

他の陣営で、この事件がバーサーカーのせいであると知っている者がいるかは不明だ。そしてたとえ知っていたとしても凶行を止めるかどうかはますますわからない。

かつて冬木の聖杯戦争では、ある陣営が暴走して一般に大きく神秘が漏えいしかねない事態に陥りかけたことがあった。だが、その時は

其の陣営を倒した陣営に「令呪を一つ与える」という褒賞を出し、他陣営を動員して討伐しにかかったことがあるという。

もし此度の戦争でそれほどまでに被害が拡大するのであれば、監督者権限を使用してバーサーカー陣営討伐の為に他の陣営を動かすこともできる。

だが、先の事例のように「褒賞」とする令呪を御雄たちは持っていない。春日は一回目の聖杯戦争ゆえに、前回からの引き継ぎ分の令呪が存在しないのだ。

それにそこまで被害規模が拡大してしまうと、魔術協会も黙っていない。より事態がややこしいことになる。其の為、春日の管理者である明——できるならばハルカ——には速やかにバーサーカーを倒してもらおうことになる。

「そうだな、明日連絡の際に伝える」

「直接会えないのが面倒だわ、もう」

「お前が苛立つても仕方ない。今日はもう休め」

「……お父様、何か楽しんでいませんか？」

御雄は労わるように美琴に声をかけたが、美琴がじっと見つめ返してくる。

御雄は苦笑した。養女ながら鋭いところがある。

「……元は神域と呼ばれた御三家が生み出した大儀礼。元魔術師ゆえかな、魔術に未練はなくとも興味深いとは思っている」

「……もう、しっかりしてください！ 私たちには私たちの役目があるんですよ！」

「わかっている。しかしそう焦るな。まだ始まったばかりなのだから」

御雄は美琴の背を押して、奥の居住区画へと促した。

そう、聖杯戦争はまだ始まったばかりなのだ。

祭壇の下には暖炉が焚かれている。暖炉の上に十字架に張り付けられたイエス・キリスト像が掲げられている。像は上からも下からも光に照らされて、薄い影を幾重にも織りなしている。

前述したが、聖杯戦争は戦争の素人たちが行き当たりばったりに戦うバトルロワイヤルだ。

実に危なっかしいことだと、御雄は考える。理論だった戦略がない分、逆に次に何をし出すかが分からない。かと言って、御雄にも戦争の経験があるわけではない。

「しかし、聖杯戦争を私たちは行わなければならない」

この儀式を完遂する事、それが神父の思うことだった。

暖炉の焰が薪を弾いて、一際赤く燃え上がった。

## 第1幕 兵は凶器

11月29日① 兆候

どうやら本当に自分とマスターの相性は駄目らしい。アサシンはシヨップینگモールの屋上で霊体化したままため息をついた。

一昨日の謎のサーヴァントから襲撃を受けた後も、武器を使っていないサーヴァントに攻勢に出られない体たらくに怒鳴り散らされた。大西山での拠点構築にこだわるマスターは、アサシンの発見した山小屋に結界を張ろうとするも、アサシンが言った通りに魔術が思うようにできず相当手こずっていた末に諦めてしまっていた。

今日は今日とで買物物の為に従ってついてきたが、些細なことで口論し夜になるまで戻ってくるなど言われてしまった。安全のために、と一応お義理でやめた方がいいとは言ったが、令呪を使いかねない剣幕で追い払われた。

「こりやいつそマスターには令呪を使い切っていたら方向で……」

折角だから遊んで行こうと思うが、持ち金がない。どこかで盗んでもいいのだが、基本まともに働いている庶民から盗むのは趣味ではない。

そんなとりとめのないことを考えていた時、アサシンは急に魔力供給に異常を感じた。

この感じは、マスターが命の危機に瀕していることを示している。本当に危機が迫れば令呪を使うだろうと思うが、何故使わないのかはわからない。とにかくパスを辿りマスターのもとへ急いだ。令呪のバックアップがあれば魔法にも等しい空間転移ができるが、今は全速力で駆けるしかない。

曇天の下に濡れた地面、色とりどりの傘が動いていく。場所は春日駅、先ほどマスターによって、中から追い出されたコーヒーシヨップ。外に面したガラスが大きく破損していて、何か騒然としている。人の

多い駅前から、一人の女が恐ろしい速さで走り抜け騒動の中心から遠ざかる。

その空気はそう簡単に忘れない。大西山に現れた謎のサーヴァント。謎のサーヴァントは、この時代の女学生の服装を血に汚して雨の中を走り抜けた。その女とアサシンと目があつた。だがそれは本当に目が合っただけで、そのサーヴァントはすぐに目を逸らして駆け抜けていった。

アサシンは全てを悟つた。

すでに己がマスターとのパスは切れている。アサシンのマスターは死んだのだ。もしこれが夜ならばかのサーヴァントはアサシンを葬りに来たかもしれない。だが、今は昼。ゆえに追ってくることはなかった。また単独行動スキルのないアサシンは、マスターがいなくなった故に勝手に消えると判断されたのかもしれない。

——ここまでが昨日の昼の話である。

昨日の小雨から、今日は低く垂れこめた曇り空である。昨日の夕方には雨は止んだが、未だ暗い空が泣きそうになるのを堪えている。日の光がなくコートが常に手放せなくなってくる、そういう季節だ。だがサーヴァントであるアサシンに気温の高低は苦痛にならない。

いや、それどころかすでに触覚、視覚等の感覚さえも失いつつあつた。

サーヴァントは依代であるマスターの魔力によって肉体を得て現界する。つい昨日にマスターを失つたアサシンは現界のエネルギー源を失い、今まさに消えようとしていた。寧ろ今の今まで消滅せずを持ったこと自体が奇跡に等しい。

無論、アサシンにはまだ聖杯戦争を戦う意思がある。元々マスターとは全く反りがあわず、他にいいマスターがいれば寝返ることを計画していたアサシンである。マスターが死んでしまったことは気にしていない。消える一秒前にでも新たに契約できるマスターが見つければ、戦い続けることができる。

その希望を捨てていないが為に、アサシンは最後の力を振り絞り、その時まで実体化をしているつもりだ。とはいえ彼にはもう歩き回るだけのエネルギーはない。今は亡きマスターからもらった黒い雨合羽をかぶって道端の塀によりかかって座っているだけだ。傍から見ればただの浮浪者である。たまに人が通りかかるも遠巻きにして避けていくだけ。

ぼんやりと空を眺めながら、消えかけの体を抱えながら、アサシンは悲しんでもいなければ憤ってもいなかった。あるのは物惜しさと僅かな安らぎ、それだけだった。

——サーヴァントってのはえらく安らかに死ねるもんだ。

生前、酷く苦痛を伴う死に方を強いられたアサシンは軽い驚きと共に、一つの味気なさも感じていた。だが、それも仕方がないことだった。

——もう俺ア死人だ。聖杯戦争なんてもんは降ってわいた幸運みてえなもんで——何でも願いがかなう聖杯を争うつー、オモシロイもんに参加できるなんざ。

僅かな夢。もう一度束の間の現世を見ようと召喚に応じたアサシンには、確固たる願いはない。

アサシンに生前の記憶は薄い。英霊というものは生前になした偉業のみではなく、死後に生まれた伝説・人々の信仰がある場合にも生まれる。「人々がどのようにその人物を思い、信じているか」が、英霊に大きく影響を与える。

アサシンは生前、偉業を成したわけではない一介の人間であった。だが死後に人々は彼に様々な伝説を思い、書き記した。その人々の想念により、アサシンは英霊の座に招かれた。

だが、同時にもともとは普通の人間であったアサシンの生前の記憶や人格はその「人々の想念」によって大半が塗りつぶされている。アサシンは生前の人格ではなく、「人々の望むアサシン」に成り代わってしまっている——それでも彼は、別物になった己を悔やむことも恨



むこともなかった。

なぜなら、彼もそういう「幻想」を望んだモノの一人なのだから。

——……ま、特に願いがあつたわけじゃねーし、構わねーが。

……だが、最後に見る景色がこんなつまらんもんじゃない。

曇天。灰色の道。遠巻きに通る人々。悲しくはない。ただただ、つまらないとアサシンは思う。

何の因果か、もう一度この現世に招かれたにもかかわらず何もなさず、何も失わず、何も得ずに終わっていく。

二度目の今際の際に睨に浮かぶのは、見渡す限り山一面に咲き誇る、艶やかな桜——。

「……」

何かが呼ぶ。誰かが呼ぶ。消えかかっているアサシンを、引き留める声が聞こえる。

「あの、大丈夫ですか？」

途切れた糸を、新たな紡ぎ手が繋ぐ。何も失わず、何も得ないと決めつけるには早計だと言うように、新たなマスターを呼び込んで聖杯戦争は巡る。

\*

幸か不幸か、昨夜の唐突な見回りでは何も起こらなかった。(実は見回りに出かけた直後に、セイバーと明はとある件について再びいざこざを起こし、あまり見回りができていなかった)

起床してニュースを確認すると昨夜の春日はごくごく平凡平和であり、特に気になる事は見当たらなかった。

そして、明は久方ぶりに大学に出席することを決めた。

本音を言えば、二十五日に神父が「全サーヴァントが召喚された」と宣言した時から聖杯戦争が終わるまで大学は休んでいようと思っていた。

明が受けている授業の多くは出席を重視せず、期末のテストを何とか乗り切れば単位は確保できる。少ない友人に頼んでノートやプリントを後から拝借する許可は得ている。

しかし、ゼミはそうもいかない。十人程度の少人数で出席だけなら申し訳ないが暗示をかければなんとかなるが、授業内容は違う。二三日休んでしまうと見事に置いてけぼりを食らってしまう。

金曜日は其のゼミのある日で、かつ試作品の魔術礼装の整備も終わった。そして正直、昼間はあまりすることもないのだ。

ずっと家にこもっていては健康にもよくないこともあり、この日は大学に出席することを決意した。

その大学は春日駅から電車で二駅の文教地区にある、公立大学である。周囲に高校や他大学もあり、静かな環境で勉強ができると売りにされている。そこで明は政経学部で経済を学んでいる。

魔術師の家系の多くは魔術師としての面と、一般社会での一般人としての面を持っている。そして主に一般社会で生活費を稼ぎ、余剰金で魔術の研究をすることが多い（魔術で特許を取れば、その特許料で金を稼ぐことも可能）。そのため、魔導の家系はもともと土地を持っているなど資産家である場合が殆どで、そうでなくとも生計を立てる方法を持っている。

というわけで明も大学で、一般社会の中で生きるすべてを学んでいるわけである。

「大学、とやらに行くのかマスター。聖杯戦争の最中でいつ何時敵が襲ってくるかわからない。俺もついていく」

セイバーは頼もしくそう言っていたし、もちろん明も一人でふらふらしようとするつもりはなかった（白昼堂々他のマスターを殺害したのはこのセイバーである）。

現界した次の日に購入したジャケットとズボンを着て、セイバーは出かける気満々で一階の玄関前に立っていた。明は明で、「霊体化できれば電車賃浮くのに」などとけち臭いことを考えていた。

駅から徒歩三分の近さで、駅の日と鼻の先に大学はある。セイバーは護衛が目的の為、当然の如く明と行動を共にする。校舎は良く言えば歴史があり悪く言えば古い。二限目から授業を受ける生徒は多い為、キャンパス内は学生が多く歩いている。

二限目の一般教養の授業は大教室での授業のため、若干高校生が紛れている感じはあれどセイバーも堂々と混ざって授業を受けた。妙な顔をしているから興味をひかれることでもあったのかと思いきや、終了しても動こうとしない。明はセイバーの腕をつつくとビクツと身じろぎをしていた。どうやら目を開けて寝ていたらしい。

その後の昼休みには、明の友達もまだ来ていないためセイバーと学食を食べた。

三限はゼミで二限目のように堂々と紛れることはできない。セイバーは当然の如く教室のすぐ外で待つと言った。

ゼミで使う教室は三号館の地下にある。三号館は近年建てられた建物で、他の校舎と比べて妙にモダンな作りになっている。地下含め五階建てで、もちろんエスカレーターも動いている。白い長机四台を長方形に並べ、ミーティングで使用しやすいようにしている。

ゼミの時間は無事終わり、明は広げた資料を集めていた。「最近どうしてたの？確氷全然こなかったじゃん！」

其の時、明に話しかけてきたのは同級生の青森日向（あおもり ひなた）だった。ショートカットの似合う活動的な友達で、一年のころから語学で同じクラスになり、なんとなく馬があって仲良くやっている。

「明ちゃん久しぶりー。今週一回も見えてないけど、病氣かなんかだったの？」

ワンテンポ遅れたまったりした声で話しかけてきたのは、相楽麻貴（さきがら まき）だ。癖のある茶色の髪の毛を背中の中ごろまで伸ばし、ワンピースをよく着るかわいらしい雰囲気の友達だ。少しばかり久々に会った友達に和みつつ、明は席を立った。

「あーちよつといろいろあつてね」

「明ちゃん、この後学食でケーキ食べない？」

それはいいねと生返事を返しつつ、明は何かを忘れているような気がする。今日ケーキの日だっけなどと言いながら、次の授業で教室を使う人たちのために三人はそそくさと教室を出た。

すると、なにやら廊下にちよつとした人だかりができています。三人は何だと訝しく思っていたところ、その人だかりの中心にいたらしい人が三人に向かってくる。

「というか、それは、「終わったかマス」ちよつとこつち来てくれるかなセイバー!!」

「セイバー??」

しまった、と気づいた時には既に時遅し。

友人の二人は一度顔を見合わせてから、不思議そうに言った。

「何人？」

再び学食。昼食時の混雑は遠のき、次の授業まで暇を潰している者、学習を行う者たちが大半を占めている。その学食内の四人掛けテーブルで、日向と麻貴が明とセイバーを質問攻めに行っていた。

すでに明は家に帰りたくてたまらないオーラを出しているが、好奇心に満ち満ちた友人二人と空気を読まないサーヴァントには少しもそのオーラを感じ取ってはいないようだ。

先陣を切って尋ねてくるのは麻貴である。

「名前は……セイバーくん？でいいのかな？」

「間違いない」

次に訪ねたのは日向だ。「碓氷の親戚なんだって?」

「そうだ。今は旅行に来ていて、家に世話になっている」

「男の子の言うのもアレだけど、美人だよね。女の子かと思ったよ!」  
「よく言われる」

セイバーはいつもと少しも変わらず、質問に淡々と答える。先ほど「終わったかマスター」と場所と空気を毛ほども考えない発言を仕掛けたサーヴァントを、明は大慌てで物陰に連れ込みその場しのぎでの「設定」を教え込んだ。

明自身が思いつきセイバーと呼んでしまったので、見た目は思い切り日本人だが、外国で生まれて外国で育ったという無茶な設定にした。現在は奈良に住んでおり、そこから春日に観光しに来ていて、親戚である明の家に泊まっていることにした。

しかし明はセイバーがとんでもないことを答えないかひやひやしなながら茶をすすっている。和やかな友人とのティータイムがこんなに肝胆を寒からしめるものになるとは予想外である。

「他のゼミの奴らが「碓氷さんとすごく綺麗な女の子?男の子?が歩いてた」「学食に学校で見なれない美人がいる」みたいなこと言ってたけど、セイバーのことだったんだな、きつと」  
「ブツ!」

日向が納得したようにうんうんと頷いているが、そこで明はやつと大変なことに気づいて紅茶を噴出した。現界してから基本一緒に暮らしていたためもはや何も思わなくなっていた、かつ行動が予想以上に斜め上でそちらに気がとられていたが、そういえばセイバーは相当に容姿が整っていた。

つまり無駄に人目を引いてしまう。というかほんの昨日に殺人事件を起こしたばかりである。ニュースでは女、と報道していたから大丈夫だと信じたい。

「そういうえば、セイバーって明の家に泊まってるんだよな」

日向が面白いものを見つけたと言わんばかりににやっつと笑い、そういった。

どこか含みのある口調だった。何かを察して麻貴まで微妙に笑っ

ている。

「そうだが」

「明ってお父さんが今イギリスで、一人暮らしだったよな？」

うん、予想はしていた。明は生ぬるい笑みを浮かべつつ友人の顔を見比べた。セイバーは友人二人の笑いの意味を理解していないらしく微妙な顔をしていた。

明は友人の期待をを断つべく口を開いた。

「……」期待に副えず悪いけど、セイバーは別に私の彼氏とかそういうオモシロイ展開はないよ」

日向と麻貴はそつとセイバーを見た。

セイバーはやつと合点がいったらしく、腕を組んで堂々と明の援護をした。

「安心しろ。俺は明の事を女だとは思っていない」

「……ほらね」

笑ってではなく真顔で言われたため、友人二人は予想だにしなかった一刀両断ぶりに固まってしまった。サーヴァントと惚れた腫れたの面倒な恋愛劇を繰り広げたくないのも、明としてはいいのだが、ハッキリと女扱いしてないと言われるのも腑に落ちないのは普通の感覚だと思いたいところだ。

そういえば人の制服を勝手に拝借していった前科を思い出し、明は複雑な顔で何度も頷いた。

「つていうか私はそんな年下が好きそうに見えるのか……」

セイバーは普通に見ればだいたい高校生くらいの年齢に見えるはずだ。

すると麻貴が気を取り直し、笑いながら手を振った。

「いや、セイバーくんなんとなく高校生っぽくないからさ。高校生よりも上に見えるというか」

「そう見えるのか？」

首を傾げたセイバーに、日向も頷く。「そうだな。あと言葉が綺麗。

ちよつといいとこのお坊ちゃんぽい感じもするけど、よくいわれないか？」

(いいとこっていうか、古代の皇子様だしね……)

日本武尊の享年は確か三十に手が届くか届かないかくらいの年齢だ。生前の記憶をバッチリ持っているセイバーが高校生らしくないのは道理である。

明は引きつった笑いを浮かべるが、セイバーが余計なことを言わなかったことに胸を撫で下ろした。

明が意に介していないことを受けてか、「女じゃない」発言からすっかり復活した日向と麻貴はいつの間にか「観光に来てるんでしょ？時間あるときに案内するけどいつがいい？」などと観光案内の約束まで取り付けていた。

セイバーもセイバーで断るかと思いきや、「昼なら構わない」とか返すものだからいつの間にか観光することになっている。どうにかして断る口実をひねり出そうと明は悪戦苦闘したが、日向と麻貴は明から今まで家族の話をほとんど聞いたことがなかったせい、明の親戚に興味津々だった。

「あのさ、少し変なこと聞くんだけど……セイバーくんって……」

不意に麻貴が遠慮がちに口を開いた。ちらりとセイバーを見て、何か言おうとしたが「やっぱりいいや」と笑った。明は何かと思ったが、すぐに次の話題に移って流れた。

結局日向と麻貴が雑談に花を咲かせ、明とセイバーが解放されたのは次の授業の時刻が近くなった時だった。日向と麻貴はこの後も講義あるために、二人と別れて三号館へ戻っていく。

授業が始まり、一気に人もまばらになったキャンパス内を明とセイバーは並んで歩いた。明は不安そうな目を己が従者に向けた。

「ってかセイバー、日向と麻貴と観光するの？」

「そのつもりだが、何か拙いのか。勿論夜には戻ってくるし、昼にマスタアの外出の用があるときはそちらを優先するが」

「そんな家から出ないし別にいいけど、セイバーが乗り気になるとは

思ってたなかった」

明は、セイバーは何を言い出すかわからないあたりが怖いという言葉は飲み込んだ。

用のないときは基本家でこたつの虫になっていたセイバーである。戦闘以外で進んで外に出歩こうとすることが驚きであり、同時に聖杯戦争とは無関係の人間と進んで関わろうとすることも驚きだった。

「昼の戦闘はできない為に、することがない。それにマスターの友人の誘いだ。むげに断るわけにもいくまい」

「……微妙な気の使い方をするなあ」

セイバーが気を使っていたとは一ミリも気づかなかった。しかし使いどころが今一つである。

よくわからんサーヴァントだなと明が思っていたところ、そちらには頓着せずセイバーは一言付け加えた。

「それに、俺は観光の類は嫌いではない」

「そうなの？戦争始まる前はこたつで食っちゃ寝だったのに」

「睡眠も食事も好きだ。しかし、戦争前のあれは魔力消費を抑えるためだ。サーヴァントはいるだけでマスターの魔力を奪う」

ただ単にセイバーがニート属性だと思っていた明としては少し驚いた。「そんなに気にしなくていいのに。魔力はナモノだから、何もないときの魔力はどうせ破棄されちゃう感じだから使ってもらっても」

何となく二人の間に微妙な空気が流れたが、知ってか知らずかセイバーは話を変えた。

「そういえばマスター、もう授業とやらないのか？」

「ん？ああ、今日は終わり。今日は家に帰って教会に報告をして……そうだ、アサシンが消えたかどうか確認をしないといけないし」

明は頷き、これからしなければならぬことを思いだして憂鬱になった。



昨日、セイバーが白昼堂々マスターを殺した件は記憶に新しい。新たなマスターを発見していなければ、そろそろアサシンは現界でなくなっているはずだ。

昨日の今日で、セイバーが白昼堂々戦闘を行ったことを咎められもするだろう。

明はため息をつきながら、寒風の中を歩いた。

明が帰宅してセイバーと共に地下室に入ると、予期した通り教会からの使い魔が飛び回っていた。教会の使い魔はあらかじめ術者である明が許可を出しているので、屋敷の中に入ってくることができる。明は積み上げられた本を適当に避けて腰かけ、報告を待った。

セイバーは冷たいレンガの壁に寄りかかっている。

「待たせたみたいだね。すみません」

『構わんよ。……ランサーから報告が入っている』

使い魔の蝙蝠を通して、教会の御雄神父の声が届いた。

相変わらず、落ち着く声にもかかわらず好きになれない声だと明は思う。

『昨日ランサーはアーチャーとそのマスターに遭遇し、交戦を行った』  
「ついに動き出した感じだね」

セイバーが視線だけ使い魔に向けたのを感じながら、明は報告を促した。

『アーチャーは平安貴族のような衣冠束帯を身にまとっていたようだ。特筆するようなことは特になく、懐に小刀のようなものを入れて  
いるが、メインウェポンは当然弓』

平安時代の弓使いと言えば、著名なところで言えば那須与一だろうか、または源為朝。日本史上に弓使いは多い。衣冠束帯だからといって平安時代と決めつけるのは早計で、もしかしたら「海道一の弓取り」と謳われた今川義元のような英霊の可能性もある。

『マスターは十六、十七くらいの男。恰好は神職——白衣に浅黄の袴、にコートを着ていたそうだ』

明は机に頬杖をついて逡巡する。自分が言えた義理ではないが、また随分と若いマスターが出てきたものだ。近場にいる魔術師で聖杯に意図せず選定されたのだろうか。

「神道魔術か陰陽道魔術の使い手？春日だと土御門神社があるけど、春日のアレは霊地でも魔術師が私の所に報告をしに来たことはないし」

土御門家は古来の陰陽師魔術の名家ではあるが、本家はこの春日の地にはない。春日にある神社は分霊社のようなもので、できたのも確氷が居ついたときより後年の事だ。

何か問題があれば本家の土御門に連絡して指示を仰ぐ、そういう存在だ。

霊地ではあれど魔術工房がつくられた形跡もない。神父も同じ考えのようである。

『他の土地から来た魔術師の可能性が高いな……そして明』

神父は懺悔に來た者に問いかけるような口調で、続けた。『一つ尋ねたいが、昨日お前のセイバーは白昼堂々、殺人をおこなったか』

明は苦虫をかみつぶした顔をした。教会も教会で放っている使い魔で情報を集めているが、今回は使い魔がいなくても直に知れる。

駅前という目立つ場所で酷い死体を晒し、犯人は女子高生とのニュースは散々流れている。

顔が思い切り映っていたわけではないが、神父たちならばセイバーであると直感したはずだ。

『昨日、昼に駅前で通り魔事件があった。目撃者の話によれば、人間とは思えない殺し方をされていると』

神父は不審、否確信を持っている。明は気を重くしながら、事実を報告した。

「……うん。セイバーの仕業。あれはアサシンのマスターだったみたい。マスター殺しは許可したけど、まさか真昼間にするとは思ってなかった」

『やはりか。明、わかっているとは思いますが、お前はこの地の管理者だ。神秘が一般に漏えいすることを極力防ぐのがお前の義務だ』

「……わかっている」

耳にタコができるほど、父からも神父からも何度も聞かされた言葉だ。

自分のサーヴァントの管理くらい自分でしなければならぬ。セイバーが勝手にやったと責任転嫁することは許されない。アサシンのマスターは明が殺したと同義だ。

「もうこんなことは起きさせない」

静まり返った地下室で、レンガの壁に寄りかかったセイバーが口を挟んだ。「神父、一つ聞きたい。お前らはサーヴァントの現界状態を知っているのだろう。アサシンはどうなっている」

『アサシンの現界か。早朝にはまだ消滅していなかったが……今一度確認しよう』

サーヴァントの現界を確認する霊器盤は神父の部屋に置かれているそうだ。神父は通信をする際には別の場所から行っているらしい。間もなく通信が再開される。

『……アサシンの消滅を確認した』

神父の声にも驚きがあった。これで当初からいなかったライダー、そしてアサシンが省かれ残りは五騎となる。神父はバーサーカーを優先して倒す策を練ることを伝え、通信を切った。

神秘の秘匿、という一点で管理者である碓氷とは友誼を保っているものの、遥に年上で得体のしれない御雄神父とやりとりするには疲れる。

明は使い魔を返して気を緩めていると、立っていたはずのセイバーがいつの間にか勝手に机に座っており、不思議そうに首を傾げている。

る。

「全く魔術師とやらは面倒だな」

セイバーは神秘の秘匿のため、戦いは夜ひそやかに行われるべきなどの決まりを理解しない。彼からすれば敵を屠るのに最も良い方法を否と言う明は不可解と見えるのだろう。手段に良し悪しはない、結果主義のサーヴァント。日常生活では決定的な齟齬を感じないのに、肝心の聖杯戦争になると表面化する。明はため息交じりに苦笑した。「まあ、面倒なことは認める」

セイバーは明の苦笑を気かけず、机に座ったままずっと明を見た。

「アサシンは消えた。残るはランサー、アーチャー、バーサーカー、キャスターだが……昨夜も少々話を聞いたが、バーサーカーを倒すのだろうか？」

流石に報告は余すところなく聞いていたセイバーは、これからの方針についておおよそわかっているようだった。ここで躓いている暇はないと明は頷き、今宵からの作戦を告げる。

11月29日② 弓兵 対 狂戦士

「しまった……マジでマジどれぐらいマジいかと言ったらマジでマジ」

一成はワンルームの自室で携帯電話を片手に突っ伏していた。午後十一時半、そろそろ人々は床に就く時間帯だ。

夜の偵察に行こうと、神主衣装という魔術礼装を着込んでいざ出発しようとした矢先、何気なく携帯電話を確認した。

昨夜は初めてまともにサーヴァント同士の戦闘に臨んだため、慣れぬ魔力消費で今日は日がなごろごろしていたのである。ゆえに携帯電話を確認することは今の今までなかったわけだが――

『何を土下座しておる一成。さてはついに私に金の無心か。よいぞよいぞ、はむかう者には容赦せぬが従う者には寛容であることが上に立つ者の鉄則ゆえ、お前のその態度は喜ばしい』

霊体化したまま念話でからかってくるアーチャーに言い返す元気もなく、一成は携帯電話の履歴を見て再び突っ伏した。

「マジかー……暗示がちゃんと効いてなかったのかよ……」

彼の握りしめる携帯電話の履歴には、彼の担任と親からの留守電が入っていた。

内容は要するに「今日学校来てないけどどうしたのか」という話だ。

一成はアーチャー召喚の前に担任に「二週間くらいブラジルの親戚のところに行く」という暗示をかけていたはずなのである。だが、一週間も経たないうちにそれが切れてしまっている。事のすべてを悟ったアーチャーは、実体化し優しく彼の肩をたたき、穏やかな声で一成を慰めた。

「そう落ち込むな。そなたの暗示が途中で切れそうなことくらい私は予期しておった故、特に幻滅などしておらんぞ」

「別にお前に評価下げられて落ち込んでるわけじゃねエから!!」

もちろん一成が落ち込んでるのは、自分が自分で思っていた以上に程度の低い魔術師であったことをまざまざと知ってしまったからだ。突っ伏して十分ほど経っただろうか、一成はいきなり顔を上げ、

フロアリングの上に設置した小型テーブルの上にある呪符を掴み、そのまま拳を天井に向けて突き上げた。

「今夜も行くぞアーチャー!!」

「どこへだ? 浄土か?」

「誰が逝きたいつったよ!! もちろん人食いサーヴァント探しに決まってるんだろ」

一成はベッドの上から降りて、袴の襷を整える。アーチャーはおや、と面白そうに声を上げた。「立ち直りが早いのに」

「落ち込んで魔術が上達すんなら落ち込むぜ。それよりも今は人食いサーヴァントを捕まえる方が先だろ」

あつけらかんと言われて、アーチャーの方が面食らう。「そなた、怖くはないのか?」

「? 何が」

「己が出来の良い魔術師ではないとわかっていよう。昨夜、サーヴァント同士の戦いも見たろう。ランサーはああだったが、そなたが今追う人食いサーヴァントとそのマスターは恐らく違うだろう」

昨夜のランサーはわかりやすく武士然と、正々堂々の戦いを望むタイプであった。彼のマスターは不明だが、確かに陰から一成を襲う真似はしなかった。

だが、今度は人を食って強化されたサーヴァントと、それを良しとするマスターだ。力不足を以ってしては、命を落とすこともある。それが怖くはないのかと、アーチャーは問うている。

しかし、一成は顔色一つ変えなかった。

「そんなヤツを放っておけないだろ」

「それは正義感とやらか?」

一瞬一成は首を傾げた。だが彼はそのまま笑いもせずには答える。

「別に俺の力がどうかじゃないし、正義どころも興味ねーよ。だけど、そういうことが起こってるって知って、黙って逃げる、見ないふりをするのが嫌なんだよ。人の為とかかどうかはわかんね。けど、

相手が強すぎるから逃げるとか、そんなことはしたくない」

正義など興味はないと彼は言うが、考え方は一つの正義感だろう。しかし正義感にしては我が強すぎる。勿論人を食べることを良しとする者達を許せないと言う気持ちは一成にあるが、彼らを止めるべく行動することは、あくまで自分のためである。

「仮に敵が俺よりずっと優秀な魔術師でも、お前よりずっと強いサーヴァントがいても関係ない。いようといまいと、俺が放っておけないと思うから戦うだけだ」

そう笑う一成を見て、アーチャーは既視感を覚えた。

アーチャーは知っている、かつて同じようなことを言った男を。

「逃げるのが嫌いだ」と笑う男を、アーチャーは知っている。

彼はやれやれと肩を竦め、一成の肩を叩いた。

「ありふれたことを言うが、勇気と無謀は全く異なるぞ。そなたには馬の耳に念仏かもしれぬが覚えておけ」

「別に俺は死にたいわけじゃねーよ！傷つく覚悟はできてるっただけだ！」

「危なっかしいことこの上ないのう」

意気軒昂として活力に満ちながら、一成は堂々と胸を張った。アーチャーはどこかまぶしそうに目を細めて、ため息交じりに言った。

「まったく面倒なマスターよな」

「面倒？あんまりめんどくさい性格とか言われたことはねーんだけど。よし、そろそろ行くぞアーチャー！」

一成はコートを翻し、ポケットに呪符を突っ込んだ。洗濯物を干す為だけに存在するなけなしのベランダから出発する。アーチャーが一成を抱えて飛翔することが普通だ。だが「男を抱えるとかテンション下がるのう」とアーチャーは言うので一成は首根っただけ掴まれて移動、という憂き目にあうことがデフォルトになる予感がある。

今宵、弓兵は陰陽師を脇に抱え、街灯やコンビニなど、商店を眼下に見ながらそれもかなりのスピードで過ぎ去っていく。当然のよう

にアーチャーは屋根から屋根、屋上から屋上に跳び、着地し飛ぶ。その軌跡が一条の黒い光のように見えているのかもしれないと一成は思う。

夜回りを始めて二日目だと言うのに、すでにこの移動にも慣れてしまった。昼間からの曇り空は晴れて、黒い天蓋には月と星が瞬いている。

五階建てのビルの屋上でひとまず止まり、アーチャーは一成に尋ねた。「今日はどこを見て回るか、一成」

「あー、駅から西に行ってみるか。工場とかに近いほう」

一成は適当に言ったのではない。惨殺のニユースを鑑みてみると、これまでの二件は駅から東の住宅街にある家庭が被害に遭っていた。サーヴァントとマスターが犯人なら、同じ住宅街ばかり狙うよりは、ばらばらの位置の家を狙った方が一般人に見つかりにくいのではないかと考えるのではないか。

あくまで犯人が人目を気にしていればの話だが。

「もう少し行くと海沿いの方角じゃな？」

「ああ。お前と海を見た方だな。流石に立て続けに同じ住宅街だとやりにくいんじゃないか……いやでもサーヴァントの場合はもう関係ねーのかな」

「神秘を秘匿する意識がかけられでもあればそなたの言ったとおりになると思うが、はてさて」

相変わらずアーチャーは飄々とした態度を崩さない。頼りになるのかならないのか今ひとつわからないなど一成が思っていると、上からアーチャーの声が降ってきた。

「ぼーっとしておるなよ。考え事なら後にせよ」

一成は頭を振って周囲を見た。アーチャーの駆ける先の上空に、モノレールの線路が見える。住宅街には西と東を明確に分ける何かがあるわけではないが、春日駅を始発にして南東に向かって伸びるモノレールの線路でなんとなく東西に分れている感じた。



その線路を西に超えると、駅からは遠目に見えていた工場の煙突がずっと近くに見えるようになる。一昨日嗅いだ塩っぽい風が鼻孔をくすぐる。そして寒さも増していく。

「二応西の住宅街はこの辺からであろう」

視界の果てに黒く沈んだ海を眺め、それより近くに見える工場の夜間灯に目をやる。

とある一戸建ての屋根に立ち、アーチャーは工場や倉庫街の方を指差した。

「住宅街でサーヴァントを見つけたら、とりあえず工場とか倉庫街の方へ誘導してくれ。無理そうだったらここらへんに人払いの魔術をかける」

住宅街のど真ん中で戦闘をするのは、一般人を巻き込む可能性が高いためできる限り避けたい。アーチャーは頷いた。アーチャーとて無暗に騒ぎを起こしたいとは思わない。

「わかった。それではここ一帯を見回る事にしようぞ」

\*

春日総合病院の屋上に、一人の少女——真凍咲が立っている。まるで下界を睥睨するかのように眼下の家々、ビルを見下ろしている。冬も近い夜に、寒さをもともせずワンピースのような寝間着一枚にスリッパで立っているのは異様だ。

「昨日は他のサーヴァントが東の住宅街をうろついていて行かなかったけど……」

医療事故に見せかけた魂食いも含めれば、故意的に魂食いを四日連続で行っていたが昨日は街で人を食うことはしなかった。バーサーカーを霊体化させて街を歩いていたのだが、東の住宅街にはサーヴァントの気配があるようで、また駅周辺にも他のサーヴァントと思しき

気配があつたために取りやめたのだ。

戦闘そのものについてはまだできるだけ様子を伺っていたかつた咲は、やむなく昨日は病院で死んだ人間の魂だけをサーヴァントに食わせていた。だが、これからどんだん街にはサーヴァントの気配が活発になるだろう。その度に魂食いを控えていたらこちらが弱つてしまう。

ならば、攻撃は最大の防御として戦法を切り替えるべきである。もし人を食っている間に敵サーヴァントと邂逅した場合は、容赦なく――

「私は生きてるのが当然なんだもの」

につこりと幼さのある顔に笑みを貼り付け、小さく呪文を詠唱する。軽く屋上のフェンスを乗り越え、五階建て相当の高さから自由落下した。咲は地面に直撃する間際、ふわりとクッションでもあつたかのように衝撃なく着地する。コンクリートのタイル敷きの道を歩きながら、背後にある禍々しい、しかし彼女にとっては頼もしい気配に話しかけた。

「今日は一杯食べさせてあげる――」

声にならない獣の咆哮が、闇に轟く。召喚されてから一般人を襲うこと以外、その力を現すことのなかつたサーヴァントの猛威が今、具現する。

\*

「む」

「どうしたアーチャー……さっふさっふ」

一時間ほど工場・倉庫街近くの住宅街を回っていたころだろうか。基本アーチャーに掴まって移動し運動していない一成はじわじわくる寒気に震えていた。寒さに震えすぎてもう緊張感がどこかに飛ん

でいたが、直ぐにアーチャーの様子に気づいて気を引き締めた。

一成には何も見えないが、遠く闇を見つめるアーチャーには確実に何かが見えている。

「ここから東に二百メートルくらいにところにサーヴァントの気配があるぞ。ちなみにランサーのものではないな」

「本当か!？」

「私がここまで気づかなかったのじゃ。霊体化しておるせいか……狙撃もできぬが」

寒さも忘れて、一成はポケットの呪符を握りしめ緊張した。ここからわずか二百メートルの位置に非道なサーヴァントとマスターがいるかもしれないのだ。距離というアーチャーの武器を失っても行くべきか否か。

わずかな間の後、一成は唾を飲み込み、躊躇うことなく高らかに命じる。「今すぐそこへ向かえ、アーチャー!」

返事よりも早く、アーチャーが駆ける。景色を置き去るような速さで屋根から屋根へ駆け抜け、その目が深夜の暗闇の中で浮く白い寝間着と、禍々しい気配を捉える。

屋根を蹴り、その小さな人影から二十メートル程度離れて、弓兵と陰陽師は立ち塞がった。

住宅街の道の真ん中。この深更では車も人も滅多に通らない。その道路の中央に中学生か小学生かの年齢の、寝間着を着たあどけない少女が立っていた。色素の薄い髪が暗闇にぼんやりと浮かんで、右肩のあたりで花のついたゴムで結っている。

持ち物は少し大きい目の肩掛け鞆で、何か入っているのか膨らんでいる。

「……?」

「一成や、外見に惑わされるでない。そなたも感じておろう、あの娘の背後の気配」

アーチャーに言われなくとも、少女の背後から攻撃的ともいえるほどの濃密な気配——それも圧倒的に禍々しいそれを一成は感じて

いる。

だが、その主があ普通の少女だということが結びつかなかった。

「おい、お前はサーヴァントに人を食わせてるやつか？」あなた、魔術師？」

半信半疑、いや信じたくない気持ちで発した一成の言葉は、どこか喜色を含んだ少女の声でかき消された。一成は息を呑み、答える方策の見つからず、黙った。

しかしそもそも少女は答えなど求めていなかった。

「もう食事は終わったんだけど」

「食事……!?!」

一成は思わず戦慄する。食事。その意味することは一つ。ちらりと彼女の左隣に立つ民家に目をやると、既に玄関は原型をとどめていなかった。扉など知らぬというように、おそらく玄関のあったであろう場所はぽっかりと黒々とした闇が横たわっていて、家の中にはどのような光景が広がっているのか、想像は最悪の方向にしか向かわない。

つまり——彼女は今しがた己がサーヴァントに人を食わせていたのだ。

俄かには信じられず、それでも一成は少女と従者から目を逸らさず、しかし悪寒を抑えきれないまま声を上げた。

「……お前、」

一成の息混りの声は届けられることがなかった。沈黙を守る住宅街に、幼い声が高らかに響き渡った。少女は無邪気ともいえる軽さでバーサーカーに命じた——一成の戦慄を無視して、しかし悪い予感を当てる形で。



まで押されていなかった。それだけバーサーカーが強いと言うことなのか、いや、そもそもアーチャーの動き自体が昨日より悪い。とりあえず回復の魔術をと呪符を構えたところ、怖気が彼の背中を走った。

魔術回路を一気に励起させ、呪符を振りかざす。使う魔術はアーチャーへの治療ではなく、身を護る防壁を展開する魔術だ。

「急急如律令!!」

一成は確かな手ごたえを感じた。背後に透明な壁が出現し、なにがしかの魔術を打ち消した——その後振り返った先には、バーサーカーのマスターが凍るような眼差しを湛えて立っていた。

「ふーん、勘だけはいいんだ」

つまらなさそうに手をかざし、少女は吐き捨てる。話すことはないと言いたげに、再び詠唱を始めた。この少女は本気で自分、一成を殺そうとしている——。

それを知ってやっと一成はこのマスターがサーヴァントに人を食わせていると本能で理解できた。

その上で、一成ははつきりと問うた。

「おい、お前!なんでこんなことするんだ!」

少女は目を丸くした。そして小ばかにするように頭を振った。「そんなのサーヴァントを強くするために決まってるじゃない」

「関係ない人を巻き込んで何か!!」

「私が生きるために必要な犠牲だもの。仕方ないじゃない」

「はあ!?!」

少女は一成との会話にはまるで興味が無いようで、淡々とした起伏のない言葉しか返さない。少女は鞆を探ると何か液体の詰まったパックを取り出した。

彼女の魔導の家の魔術なのだろうが——とにかく防ごうと、一成は呪符を翳した。

「臨兵闘者皆陣列在、——ッ！」

「遅いわ——ВЫПУСК！（解放）」

続いて結印し四縦五横に切りきるよりも早く、少女の魔術が起動した。

「——ッ！！」

目には移らぬ、しかし確実に何か大きな塊が豪速で一成の胴を襲った。食べたもの全て戻しそうになりながら、一成の体は吹き飛ばされて、コンクリートの塀に叩きつけられた。

肺の中の酸素が一気に吐き出され、一成はそのままずりりと地に落ちた。一瞬意識が飛び、アーチャーの状態でさえわからない。

バーサーカーのマスターはまるで人ではなく虫を見るような眼で一成ををじつと見ている。

\*

距離が全く離せず、弓を番えることは諦めた。銀に磨かれた小ぶりの剣でなんとか厚い刀の一撃一撃を殺し、繰り出される拳を直撃しないように気を払う。吹き上がる黒い霧は通常でさえよくないアーチャーの視界を悪化させ、防御を遅らせ、ダメージを蓄積させる。

（……この者は一体——）

アーチャーはバーサーカーの猛攻をぎりぎりまで凌ぎながら、バーサーカーの正体を見極めようとしていた。もちろんランサーと戦っていた時も、アーチャーはその真名を見破ることに尽力していたのだが、今回はそれにも増してそれに心血を注いでいた。

このバーサーカーを前にすると、アーチャーは体が動かなくなる。正確には動きにくくなる——まるで、恐怖で体が強張ったかのような感覚に陥るのである。

生前、こういった直接的な戦闘とは縁のなかつたアーチャーだ。し

かしサーヴァントとして召喚され、現にランサーとは問題なく交戦できた。

にも拘わらず、今は魂に傷がつけられ、それが痛んでいるような感覚が絶え間なくアーチャーを苛み、動きを鈍らせる。

(全く覚えはないが、この狂戦士は私と縁がある、それか同時代の者か——!?)

とにかく今はバーサーカーの猛攻を凌ぐことで精いっぱい、いや、確実にこのままでは潰えるのはアーチャーの方だ。とてもバーサーカーを工場・倉庫街に誘導する余裕などない。

宝具を使うかとの考えも脳裏をよぎるが、第一の宝具はこの英霊に對してはまるで役に立たないだろうし、第二の宝具もこの状況でつかっては効果が今一つだ。考えを巡らせる間も、バーサーカーの刀は空を裂きアーチャーの魔力を削いでいく。

「ぐっ!!」

バーサーカーの左拳に弾き飛ばされ、アーチャーの体が宙を舞った。その最中、アーチャーは己のマスターが地に倒れているのを見た。その先にはバーサーカーのマスター。

助けようにも、アーチャーはバーサーカーで手一杯だ。

「一成……!!」

「魔術師の魂よバーサーカー!!」

びくつとひととき大きく一成の体が動いた。アーチャーはとにかく己がマスターを助けるべく——必殺の一撃を背後から食らう覚悟で——、バーサーカーに背を向けた状態で塀の上に着地し、走る。やぶれた直衣を翻し、弓兵はマスターを護るべく最大速で駆ける。

「ッ、一成!」

「バーサーカー!?何やっているの!?!」

「……………」



アーチャーの叫びとバーサーカーのマスターの驚愕は同時。一拍遅れて、一成が目を開いた。それと同時にアーチャーが一成を抱え、そのまま一度距離を置こうとするが、交戦していたはずのバーサーカーが襲ってこない。

一成のもとに駆け出した瞬間から、背後を襲われることを覚悟していたのだが――。

「バーサーカー!!言うことを聞きなさい!!」

当惑はマスターの方も同じ。少女の喉を裂かんばかりの命令にも関わらず、狂戦士は明後日の方向へと闇をまき散らしていく。

弾丸の如き猛烈な速度でバーサーカーが一心不乱に向かう先の角から、小さな銀の人影が閃いた。

「このところ、一家惨殺事件が起きてたでしょ。あれがもしかしたら聖杯戦争に参加するマスターとサーヴァント——バーサーカーの仕業かもしれないの」

誇りっぽい地下室の椅子に腰かけ、明はセイバーに説明をした。ニュースで取り沙汰されている残忍な殺人事件で、その殺害方法が常軌を逸していること。それに教会からの情報を付け加えた。

昨夜にもバーサーカーの仕業であろうことは説明したが、さらに細かく話す。

「こんな調子で一般人を巻き添えにしてもらっては魔術の存在が一般に漏れるかもしれないし、そうなったら聖杯戦争の続行も難しくなる。それに」

明の顔は明るくない。今言ったことも勿論重要だが、それ以上に彼女の心を悩ますものがある。

「一般人を巻き込むべきではない、だろう」

セイバーは眉ひとつ動かさず言葉を先取りした。明の方法に相変わらず全面賛同はしていないが、方針は理解してくれている分よくなったと言わなければならない。明は頷いた。

「そういうこと。今日の夜から本格的に巡回するよ」

「それはいいが、あのランサーを使う手はないのか？ 共闘関係とやらにあるし、もともと偵察は奴の仕事だろう」

「あー……ランサーは偵察はするけど、バーサーカーを優先して倒すのを手伝ってくれるかはまだ……」

明はこの地の管理人であるため、神秘の漏えいについて責任を負う必要が出てくる。監督役は表向き聖堂教会が行っているが、聖杯戦争の監視は魔術協会も行っている。

問題が出て何も対処しなかったとなれば明は後々魔術協会から責任を追及される。

だが、ハルカは魔術協会から派遣されたの魔術師だが、明ほどの責任を負うことはない。

むしろ一マスターとしてはバーサーカーとセイバーが戦う様を観察して、双方の消耗と真名看破のための情報を集めることに専念した方が合理的だ。聖堂教会とハルカの協力関係は、「全うな魔術師なら根源へ向かうために聖杯を使う」という一点に全てがかかっている。ハルカは「根源に至る」という願いを叶えるためだけに聖杯を得る。それ以外は教会から強制される要素はない。

そうはいつでも魔術師であるハルカにとっても「神秘」が漏えいすることは忌避すべき事柄のはずだ。それを考えれば、引き続き協力して事に当たる線もある。

ハルカの張り付けたような笑みを浮かべる顔を思い出すと、なんとなく気が重くなる。

元々人見知りする質であるのに、ハルカや御雄のような内心の読みにくい人間が、明は苦手だ。

「まあ、多分協力すると思うけど。明日相談してみる」

「わかった」

セイバーには何の不満もない。二人で相談し、バーサーカーの人食いはどれも深更に至ってから行われている為、午前零時ごろに巡回へ行くことになった。

だがここで一つ問題が発生した。昨夜に周辺だけでも見回りに行ったのだが、その際に揉めた件でもある。

そう、明には譲れない一線がある。

「空を飛ぶのは却下でお願い」

昨夜、セイバーが目に見えてイラツとしたことは知っている。しかしあのようなホラー体験をしたら戦うどころの話ではなくなる。前述したが、明は幼い頃に高所から落下して以来高所恐怖症である。ぜひとも空から偵察をしたいと思うセイバーだが、実際に一度本気で怯える明を見ている為にあまり無理強いもできなかった。

「……それでは普通の民家の屋根から屋根に移動するぞ」

「……」

明はあからさまに嫌な顔をした。しかしさすがに巡回がすべて徒

歩だと時間がかかりすぎてしまう。セイバーに負んぶしてもらい道路を走ってもらう手もないことはないが上空を移動した方が効率は良く道にも迷わない。それに下手な自動車以上の速さで疾走する人間<sup>セイバー</sup>がいてはまた新たな都市伝説が生まれかねない。

結局明が折れて、セイバーに負ぶわれた状態で主にビルからビル、屋根から屋根へ移動することになった。

まずは碓氷邸周辺―駅から東の住宅街―を巡回し、それからより海辺の工場などに近い西の住宅街を回ることにした。今日のランサーは駅周辺の後、駅の北側を回るそうだと神父からの報告で聞いている。

午前零時となれば、家々に電気はついているものの人通りはない。しかし、何時もの住宅街に比べても静かすぎると明は思う。聖杯戦争という異界の戦いが行われることを知ってか、それとも惨殺事件の報を受けてか、町は沈黙に包まれている。そのような夜にコートを着て、住宅街を歩き回る女は大層怪しいのではと思いつつかり更けた空を見上げる。

空気が澄んで星が美しく見える季節だが、気分は上がらない。

「現世は星が少ない」

「まあ、そうだろうね」

セイバーは何の気はなしに呟いた。昔は夜になれば火を灯す以外に明かりはないのだから、今よりずっと光が少ない。それだけ星は輝いて見える。周りが静かな分、セイバーの声は良く聞こえた。

もともと閑静な住宅街、という言葉が似合う東の住宅街だ。西の住宅街よりもこちらのほうが古く、年季のある家が多い。セイバーと明は街を歩くが、特にサーヴァントの気配を感じない。こちらには来ないのかまだ来ていないのか――とりあえず、工場や倉庫街に近い西の住宅街を見回ることにする。

明はセイバーに負んぶされて移動し、新興の住宅街である西の住宅街に足を降ろした。ここは駅の再開発の話が持ち上がったのと同時

期に分譲が始まり、今も続々と家が建ちつつづけている場所だ。言葉少なにセイバーと明は巡回を始める。

東と同じく静まり返った住宅街を歩いていると、明は違和感を覚えた。——真夜中で街が静まり返っていることは普通だが、静かすぎる。同時にセイバーが前に立ち、明を制した。

「サーヴァントがいる。しかも二騎」

「距離は」

「北東に百五十くらいか……行くぞマスター」

セイバーに引つ張られるようにして、明は静かな街を走った。二人の足音が森閑とした住宅街に響いていく。少し走ると走ったところ、広い十字路に出た。

そこでセイバーは止まり、再び明を手で制した。

そこから身を隠したまま十字路の右手を観察すると、セイバーの言った通り、二騎のサーヴァントが交戦していた。双方とも初めて見るサーヴァントだ。

膨大な魔力の渦と渦がぶつかり、弾けて暴風を生み出してこちらまで風が吹きすさんでいる。眼で確認せずとも動く大気と金属音、魔力の濃さでサーヴァントが交戦していると容易く理解できる。

魔力風に吹かれながら、明はじつとサーヴァントを観察した。

方や黒い霧に包まれ、さらに全身を漆黒の鎧に包んだ巨躯のサーヴァント。握られた肉厚の黒刀が、敵対するサーヴァントを骨ごと断ち切り跡形も残さない獰猛さで振るわれている。

方や衣冠束帯に身を包み、弓矢を携えたサーヴァント。だが今や立派だったであろう衣装は見る影もなく破れあちこちに血が滲んでいる。黒いサーヴァントの猛攻を凌ぐことできやうという風だ。

さらにその奥では年端もいかぬ少女と、高校生くらいの男がいるようだ。おそらくは両方マスター。男の方が吹き飛ばされ、受け身も取れずに扉に激突して崩れ落ちたのが明の目に映る。既にあたり一帯

には人払いの魔術——むしろ住宅街の中、対魔力のない人間を強制的に眠りにつかせる結果が掛けられているようで、この大騒ぎにも拘わらず住宅街そのものは森閑としている。

派手に人殺しをしておきながら、最低限の秘匿は行っているようだ。

「バーサーカーとアーチャーみたいだけど、アーチャーの方が大分劣勢みたいね」

「そのようだ。しかし、相性が悪いのかアーチャーが格の低い英霊なのか、マスターが未熟なのか……」

セイバーは顎に手を当てて、目で明に意見を促す。マスターは自サーヴァントのみならず、敵サーヴァントのステータスをも確認できる。

「パラメータ自体はアーチャーはまあ普通……幸運値がやたら高いけど……。ただバーサーカー……耐久A+……」

狂化のためか他のパラメータも概ね底上げされ、バーサーカーの値は白兵戦においてセイバーに引けをとらない。同時に、明はアーチャー陣営について考えた。

なぜ彼らはバーサーカーと戦っているのだろうか。たまたま鉢合わせただけなのか、それとも明たちのようにバーサーカーを放っておくわけにはいかず偵察をしていたのだろうか。

後者であればいいと思うが、明は都合のいい想像を払ってセイバーに尋ねた。

「バーサーカーとアーチャーって私たちに気づいているよね？」

「……普通ならばそうだろう。しかしだがお互いがお互いに夢中でこちらに気を回す余裕がない。マスター同士も取り込み中のようだ」

「乱戦に飛び込むっていうのは」

「……今なら奇襲が成功する可能性は高い。アーチャーなら瞬殺できようが、目的としてはバーサーカーか……」

セイバーがちらりとアーチャーとバーサーカーに目をやった時のことだ。

今まさにアーチャーを圧倒して、食らわんとする勢いのバーサー



サーカー。何か因縁でもある相手なのか、怨嗟の咆哮を吐き出しながら狂戦士は暴威を振るう。狂化の為意思疎通も困難で、バーサーカーはセイバーの言葉を理解してはいないだろう。音速さえ超えかねない速さの攻防は幾度も無限とも思える回数重ねられるが、それも須臾の間。

一瞬、霧の剣と漆黒の剣が衝撃の大きさに弾き合い、空白が生まれた。早かったのは僅かにバーサーカー。

その刀が空を、時間を割き横なぎに襲いかかった。しかしそれを予期していたセイバーはもはやそこにはいない。

魔力放出。武器または自身の体に瞬間的に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出させることによる能力の向上——魔力によるジェット噴射で、セイバーはロケットのように空へ打ちあがった。

物言わぬセイバーはバーサーカーの真上から重力と魔力放出のブーストにより、そのまま真つ逆さま、無防備な頭に向かって剣を突き刺す——！

攻撃力並々ならぬセイバーの剣は漆黒の兜を貫いた。そのまま容赦なく剣を引き抜けば、鮮血が曲芸のように噴き上げた。軽やかに地面に着地しようとする瞬間、飽き足らず振り返り様に喉笛をかき切り、そのまま真横に首を断った。

まさに早業、刹那の勝負。魔力でできているとはいえサーヴァントは肉体を持つ。頭蓋を貫いた時より激しく、真横に血が噴出する。崩れかけた塀に鮮血が迸り、生命の鉄臭が満ちた。

重苦しい音を立てて、殆ど断たれた首が自らの兜の重さに負けた様に道路に転がって、口、鼻、耳からも黒い霧を吐き出し続けている為切り口が杳として見えない。

地面に足をつき、その転がった首に目をやった瞬間。セイバーの真横で爆発が起こった。

「——！！！！」

勿論爆発ではない。バーサーカーが両腕で刀を持ち、セイバーの胴をその圧倒的臂力で薙ぎ払ったのだ。セイバーが完全に殺した、と思つた矢先である。完璧に不意を突かれたセイバーは、受け身も取り



きれずに塀に叩きつけられ、勢い余って突き抜けて民家の庭に転がり込んだ。

鈍い轟音が深更の住宅街に響き渡る。跡形もなく崩れ去った塀の向こうに吹き飛ばされ、セイバーは何が起きたのかへの理解が遅れる。

セイバーが見下ろした自分の鎧には、深く傷が刻まれている。もし鎧なしだったら胴から真つ二つにされていたかもしれないほどの一撃。膝をついたまま見上げた先には、バーサーカーとそのマスターの姿。バーサーカーの首は、何事も無かったかの様に繋がっている。

だが、道路の脇にはセイバーのもぎ取った首が転がっている。

今バーサーカーの胴体についている首は、まるで新しく生えたかのようだ。

セイバーは砂の混じった唾を吐き捨てて、狂戦士を見上げた。

「……首が取れても生きていると言うのは、一体どういうカラクリだ？」

「私のサーヴァントは不死身！首が取れたくらいじゃ死なないわ」

十二、十三と思しき少女——バーサーカーのマスターは可愛げのある顔に高慢な笑みを浮かべ、従僕の後ろに守られるようにして立っている。寝間着と思しき白地にチエックのワンピースにズボンを身に纏い、スリッパを履いている。

セイバーが埃を払って立ち上がった時、年輪を重ねた重みのある声が聞こえた。

「私にもいることを忘れてもらっては困るの」

言葉と同時に、バーサーカーの背後を数本の矢が襲う。だが、それは鉄の鎧を纏うバーサーカーには通じない。満身創痍のアーチャーと、同じく這う這うの体のそのマスターがバーサーカーたちの後ろに立っている。セイバーは現状から事態を察するだけだが、この様子は一時的にアーチャーとこちらが対抗する状態になっている雰囲気である。



言うことを聞かないバーサーカーに地団駄を踏んだ。

「ああもう、セイバーなんかよりも先に食事でしょバーサーカー!!」

「Avoin<sup>開放</sup>」

Om<sup>私</sup> var<sup>檻</sup> jo<sup>は</sup> sin<sup>全</sup> et<sup>て</sup> id<sup>を</sup> k<sup>封</sup> aik<sup>ず</sup> ki!

静かに紡がれた詠唱が終わると同時に、濃い紫色の光が明の足もとから溢れ出す。一条の黒い焰のような影が真凍のマスターに向かって勢いよく伸びていく。

「つちっ、」

少女は液体の入った袋——輸血用の血液が入ったパック——を取り出し、血を操作し影に向かって投げつけて無効化した。明は影を足元に纏わりつかせたまま、表情を変えずに言う。

「春日の魔術師、真凍咲。貴方の行動は神秘の漏えいに関して魔術協会の掟を破りかねない。このまま続けるなら、管理者の責務により始末する」

明は一目見た時、マスターの正体に思い至った。

これでも春日の地の管理者代理であり、春日に根を張る魔術師の姿かたちは知っている。

明の凍るような眼にも怖じることなく、バーサーカーのマスターは不敵に笑う。

「そんなことももうどうだっていい。それよりも、初めて見るわ。確氷の影魔術」

明の魔術属性・架空元素虚数の魔術は、不確定要素を以って対象を拘束し平面の世界へ呑込む魔術である。要するに黒い影を作り、相手を捉えるところか知らないところへ引きずり込む魔術だ。

その影を作り出すエネルギーは術者の魔力と、術者の深層意識の負の側面である。

「ぶっっちゃけあんまり人間には効かないんだけど、そうは言っても迂闊に触ると消えちゃうよ」

明は影を足元に収れんさせたまま、その手を真凍に向けて注意を怠らない。バーサーカーのマスターが止むを得ない事情で人を食らっ

ていたのならともかく、今見た様子では彼女に情状酌量の余地がない。明の冷たい空気にも構わず、真凍のマスターは開き直ったように笑い、手をかざす。

「私だって負けない。こんなところで死ぬ私じゃない」

セイバーとバーサーカーが散らすような、あからさまで激しいモノではない。

しかし少女と女の間には、確かに殺意、と呼ぶべきものが流れていた。

「ВЫПУСК！」  
開放

「Avoin」  
開放

唱えるは同時。明の足元からは黒い影が発射され、下から上に吹き上げる。咲は手元の血液をすべて解放し、明に向ける。黒い血が刃の形をとり明に飛ばされたが、それが明の影によって破壊された。否、影は咲の魔術を分解して消えたのだ。

（真凍の娘の属性ってなんだっけな……）

明は記憶をひっかきまわしながら、油断なく影を展開して咲の攻撃に対処する。彼女が手にしている血は、いくなれば即席での彼女の魔術礼装なのだろう。血液には持ち主の魔力が溶けている。

一般人のものであっても、魔力の原料たる生命力に満ちている為、操りやすい。

（あんまり誰の血かは考えたくないけど……）

流体を操る魔術師は、水銀などの魔力を通しやすい物体に魔力を込めて礼装化することがままある。勿論毎度違う物体に魔力を通してもいいが、慣れた物体のほうが扱いやすいのは言うまでもない。今彼女が使用しているのはとても常日頃使用している物体には見えない。

記憶が確かならば真凍咲は中学生か小学生かそのくらいで、まだ自分自身の礼装を持つには至っていないと見える。

「避けてばっかだと勝てないんじゃないの!?!」

どこかサディスティックに笑う少女は、針のように尖らせた血液を

一斉に撃ちだしていく。その速さは目で追うことがやつとだが、目で終わるならまだ対処のしようがある。

「Nobiro ja kavahataa, ja White vahvist  
影が足元から飛び出し、壁のように立ちはだかつて針から明を護る。薄い影に貫通した瞬間、同時に針は燃えるように浮き上がり、そして影も形もなく消え果た。「分解」を起源とする明の魔術は、血液もろとも全て「分解」した。ちらりと見れば咲のかばんはぺらぺらになっており、肝心の血液はもうないだろう。」

しかし自分の血液を使う可能性もある。明は顔色一つ変えず、足を踏み出した。

「……一つ聞きたいんだけど、人を食べてまで叶えたい願って何？」  
明は険しい表情の咲を睨みながら問うた。「始末する」とは彼女は言ったが、できるだけ殺す殺さないの真似事はしたくない。しかし、魔術礼装を失っても、少女に動揺の色はない。

「……管理者なんだし知ってるんでしょ？私があと半年の命って。じゃあ願いなんてわかりきったことでしょ」

彼女の口調は何を今更、と言わんばかりに嘲笑する声音だ。

「……何で他の人を殺してまで生きたいの？自分だけ生きててもしょうがないと思わない？」

「は？何言ってるの？人を殺してでも生きたいってのがそんなに変なの？あんたが他の人を殺すくらいなら自分が死ぬーってキレイな考え方でもいいけど、私はいや。死にたくなんかない。こんなところで死ぬなんて嘘。私は生きるべきなの」

少女の瞳に嘘の色はない。深く澱んでいながら、力強い光がその目には宿っている。

明は深々とため息を吐いた。

「そんなに自分の未来っていうか、生きる価値を信じられるってのは才能だよ。羨ましいくらいだね」

「何ソレ？碓氷の影使い。貴方が言っても嫌味にしか聞こえない」

サーヴァント同士の剣戟が遠く聞こえる。セイバーのマスターと

バーサーカーのマスターに歩み寄る余地は存在しない。明は息をつき、腕を伸ばす。咲は魔術礼装を失った身だ。一気に陰で押しつぶして令呪をもらおう。令呪の痣が右手にちらりと見えた。

殺生はもちろん趣味ではないが、どうしようもないなら明に躊躇いはない。

「Shadow<sup>影</sup>は vankilass<sup>牢獄</sup>!!」

津波のように押し寄せる影の焰が、一斉に咲を襲う。

咲は眼を閉じることなく、まっすぐ迫りくる黒い焰を見て叫んだ。「私は死なない!」

爆発。その言葉が一番相応しいだろう。魔術の行使ですらなく、咲の体内で生成された魔力がむちゃくちゃに噴射されたのである。その量たるや明の影が分解しきれぬ量を超えていた。

黒い焰と紫の光がせめぎ合い、互いに雲散霧消して消え果てると同時に明は数メートル吹き飛ばされた。なんとか受け身を取り大事にはいたらないが、顔を上げた時は驚愕した。

大量の魔力放出に守られて、咲は消滅せずに立っている。息は荒いがその細い体で、彼女は二本の足で地を踏みしめているのだ。

(どういうこと?)

サーヴァントを従えるマスターは、サーヴァントに供給する魔力の為に全開で魔術を行使することはできない。バーサーカーは人食いの魔力で補っているとしても余命半年の重病人がここまで魔術を行使できることさえ驚きであるのに、一気に大量の魔力を噴出させて倒れもしないとは常軌を逸している。

このマスターに一体何が起きているのか——明がそれを考察する間もなく、セイバーから念話が飛んできた。

11月29日④ 全て翻し焰の剣

アーチャーの攻撃とタイミングを合わせ、バーサーカーの足を蹴り飛ばす。バランスを崩して転倒した隙にその巨体を踏みつけ固定し、すかさず刺す。白い霧に包まれた剣を心臓、鳩尾、胴、脇腹と渾身の魔力を込めて突き立てる。

何かのスキルでもあるのか、バーサーカーの体は異常に頑丈にできている。生半なアーチャーの弓は刺さらず落ち、セイバーでも魔力放出の補助がある斬撃でないと傷がつかない。

それでもすでに何度も、何度も、何度も――殺したはずである。漆黒の胴を突き破り、防具と防具の間――関節を何度も砕き、喉笛を裂いた。血は何度でも吹き上げ、セイバーの剣の正体を覆い隠す白い霧は最早血霧のように濃く染まっている。

決して生き返ることのないように念入りに刺したつもりだのだが――。

「何回殺せばお前は死ぬんだ？ 荒ぶる神々でもここまでしつこくないぞ」

セイバーは顎を伝う汗をぬぐい、霧を纏う剣を構えなおした。首を切った。心臓を刺した。剣で殺す方法に関して、あらゆる場所を斬ってみたつもりだ。それでも、バーサーカーは死なない。何度でも蘇る。

セイバーはバーサーカーの攻撃に対して防御は出来、傷は神剣の力ですぐに修復される。更にセイバーがバーサーカーと単独で戦っている間に明と何らかのやり取りがあったのか、アーチャーとそのマスターも今は加勢している。

それでも、バーサーカーは死なない。何度でも蘇る。

これでは先に魔力が尽きてしまうのはセイバー、アーチャーだ。

宝具を使うか。セイバーはそのことについても考えたが、第一の宝具は自分から仕掛けることもできるが本来は迎撃専門――「幻想返し」の特性を持ったため、相手が宝具を使った時に真価を發揮するもの

だ。第二の宝具については破壊力なら文句なしだが、住宅街で使うなと言うマスターからの命令もある。それに、だ。

——アーチャーがそばにいる。

数分前に会ったばかりの、本来は殺しあうはずの敵サーヴァント。たまたま今は共闘状態になっているが、油断をしていい相手ではない。そのような者の前で宝具を開帳し真名を露わにできるほど、セイバーは能天気にも傲慢にもできてなかった。

おそらくアーチャーも同じことを考えているだろう。お互いに聖杯を狙う身で今しがたの勝利だけを考えても仕方がない——その思考が、今の自分たちを追いこんでいる。

バーサーカーの必殺の刀を回避しながら、セイバーは一つの案を浮かべた。

その途端、わずかに体が重くなる。

「セイバーー！」

「なんだ！」

塀の上を伝い走りつつ矢をつがえるアーチャーが声をかけてきた。「言いにくいだが、ここはお互いのマスターを連れて引くのはどうか」

どうやらアーチャーも同じことを考えていたようだ。セイバーとアーチャーも腹の内を探りながらの戦いで、バーサーカーの突破口も分からない。ここは一度引いて対策を練り直すべきだとサーヴァント達は思っている。

「おまつ、ふぎけんな！ここで俺たちが逃げたら誰がああのバーサーカーの人食いを止めるんだよ！」

ブロック塀にしがみつき滑り落ちそうになっているアーチャーのマスターが、紙の束を握りしめて叫んだ。確かにここで引けば、バーサーカーは今宵人食いを再開する。それは火を見るよりも明らかだ。「百も承知よ。だが、ここで我らが倒れば誰がアレを倒すのじゃ」

人が食われることを了解して、サーヴァントはマスターに撤退を進行する。



「宝具は!？」

「ただでさえ残念魔術回路な上に今の消耗した状態で使えば、それこそそなたの魔力を根こそぎ持っていき死ぬぞ。それに、今の使用は意味がない」

そこまでぴしやりと言われて、ようやくアーチャーのマスターは黙った。嫌々、というよりは悔しくてならないという表情だった。実はアーチャーのマスターはお人よしにも、セイバーにまで治癒の魔術を先ほどから掛けているのだ。魔力の使い過ぎで疲弊しているのが、セイバーの目にもわかる。

それでも真っ直ぐな彼の瞳は、ぶれることなくアーチャーを見据えている。アーチャーのマスターも引く気はないのだ。

「後で倒すから、今夜の人たちには死ねていいのか!!」

「少しは後先を考えよと言っておるのだ!」

アーチャーとそのマスターは進退について喧嘩をし始めてしまった。アーチャーのマスターはかなり猪突猛進というか後先を考えないようだとの心の隅で思いながら、セイバーはアーチャーの申し出に躊躇う。普通なら、すぐさま賛同するところだ。

だが、わずかに増した体の重みがそれを遮っている。

(マスターは引くことを望んでいない)

令呪によつて縛られた効力で、セイバーは明の意に沿わぬことをしようとする動きが鈍る。つまり、明はアーチャーのマスターと思いは違えど、このままバーサーカーを野放しにすることを望んでいない。しかし体を重くする程度の縛りゆえ、その気になればセイバーは縛りに抵抗して戦闘離脱することはできる。

だが、これまでセイバーは良かれと思つてしたことが悉くマスターの意に添わなかった前科があるため、すぐさまそれをすることは躊躇われた。

「ツ……………の!!」

「ツ……………の!!」

肉厚の直刀が真横からセイバーを襲う。剣を盾の様にして直撃を

回避するが、その恐るべき破壊力は殺しきれずに地を転がる。アーチャーが弓を放ち、追撃を抑える。

流石人を食っているだけはある、とセイバーは血の混じった唾を吐き捨てて猛追する竜巻の如き拳と刀を捌く。絶妙にその嵐をいかいくぐりながら、セイバーは念話で明に問うた。

『マスター！このままでは分が悪い。ここは一旦引こうと思うがどうだ！』

『今取り込みちゆ……!?何、よくなさそうだと思つてたらそんなに!?』

セイバーはこのままでは埒が明かず、何故か敵は何度殺しても生き返り、その原因もわからないと告げた。相手のマスターと交戦中の明は、しばらく考えているのか黙った。

そして静かにセイバーに命令を告げた。

それはセイバーの意に沿わぬ命令ではあったが、彼はそつと息を吐いた。

「セイバー……ここは一旦引くのじゃ！」

再びアーチャーが叫んだ。その腕にはもがいているアーチャーのマスターが抱えられているのが目に入った。アーチャーのマスターは令呪を使いかねない形相で叫んでいるが、疲弊は目に明らかだ。

その様子を見て、セイバーはアーチャーに向かって凜と通る声で言い放った。

「アーチャー、巻き込まれなくては少し離れろ」

「何を……」

アーチャーの返答を待たず、セイバーは素早くバックステップを繰り返してバーサーカーと距離を取る。その手に取られる剣は、常に霧に包まれていて姿を伺うことができない、はずだった。

「！」

セイバーが体勢を立て直す。両手で握られるその剣は、全長一メー

トル程。霧が晴れ、月下で自ら光を放ち白金の如く輝く両刃の剣。薄く淡く浮かびあがるは叢雲状の波紋。

全てを了解したアーチャーは、渾身の力を振り絞って矢を射る。それは狂戦士の胸に、腿に命中したが傷つけずには至らず、目に当たろうとしたものは鋼鉄のような剛腕で振り払われる。

しかしそれで十分と言わんばかりにセイバーは白光の剣を振り上げる。

アーチャーはその眩き耀きを見て、確信を抱く。

深更の暗闇の中に、淡い光が浮かぶ。ひとつ、ふたつとその光は数を増やしていく。まるで蛍のようなかほそい光から、徐々に大きく明るい光になり白光の剣に収束されていく。

「……この剣はこのように使うものではないが……」

セイバーはぶつぶつ言いながらも、光を収束させることをやめない。セイバーをセイバー足らしめる、ノウブル・ファンタズム高貴な幻想は神代に生み出され、セイバーの手に渡り銘を変えた剣。窮地続きの東征の旅に出遭った、最大の危機。

相模国を訪れたその時、欺かれ野において焔に取り囲まれた彼らを救ったのは、敬愛する叔母より頂戴した神剣と火打石――。

「ア、■■■■――！！」

いくら急所を刺されようと、意に介せず必殺を迫る黒い狂気。この世のすべてを恨むかのような憤怒と、覆い隠す黒い霧。それに対し、閃光にも等しい光を纏ったセイバーの剣。

其れは窮地におけるセイバーを救い、反撃の機会を与えた剣であり、この葦原国における最強の幻想返しの剣。

抗いようもない暴風の如き狂戦士の直刀と魔力に向かい、極光にも等しい光を振り上げ、セイバーは高らかにその真名を叫ぶ。





「な、」

セイバーは疾風のような勢いで咲とバーサーカーの横を駆け抜けて明を脇に抱えると、そのままの勢いで空を駆った。言葉通り、バーサーカーはセイバーを追ってこない。強くマスターがそうしないよう命じているのだ。

何度も急所を刺したが死なないサーヴァント。このまま戦い続ければ魔力が尽きるのはこちらが先。サーヴァントである以上、必ず弱点はある。宝具を開帳しても殺せなかったのなら、一度引いて対策を練るべき——セイバーにとっては極々当然の判断である。だが、マスターは違った。

「セイバー！戻りなさい！バーサーカーが人を食べる!!」

明はセイバーに抱えられたまま無茶苦茶にもがいている。セイバーの力をもつてすれば抑えるのは苦もないが、流石に面倒だ。

「戻ったところで何の勝算もない。まさか草薙まで効かないとは」「放っておいたら神秘の秘匿に問題があるし、一般人が死ぬ!」

明は今までセイバーに対し文句や注文をつけることは多かったが、あくまで共に戦うものとしての注意だった。しかし、彼女は今が敵意すらこめてセイバーを睨んでいる。

それに対し若干の驚きを感じながらも、セイバーははつきりと言った。

「神秘神秘とうるさいマスターだ。人が何人死のうと構わないが、マスターに死なれるのは困る」

マスターが死ねば、セイバーは現界できなくなる。だが、次の瞬間明の取った行動にはセイバーも虚を突かれた。

「……Avo<sup>解</sup>in<sup>放</sup>!!」

明の魔術回路が起動し、セイバーに向かって黒い焰が放たれた。セイバーに明の魔術が通るはずもないが、純粹に驚きからセイバーは思わず腕を放してしまった。真つ暗い闇の中に吸い込まれるように、明は真つ逆さまに地上に落ちていく。

明自体はそのことを期待していたようで、鋭い目のまま着地の為の魔術を行使しようとしている。だが、セイバーはそれを許さない。

マスターが落下していくよりも早くセイバーは滑空し、地上から十メートルほどの場所で明の服を掴んだ。再び上空に舞い上がって、先ほどと同じように脇に抱える。

なおもバーサーカーたちから視線を離さない明が右手の令呪を掲げたが、今度はセイバーの方が速かった。

「セイ「許せ」

セイバーの手刀が明の首に落ちて、途端に明はがっくりと項垂れた——要するに気を失ってしまったのである。セイバーはそつと深更の街を見下ろし、少なくなつた明かりを数える。すぐ下では、今バーサーカーとそのマスターがどこぞの家を襲つて魂を食らっているだろう。

セイバーは今更ながら今日のマスターはいつになく血が上つていると思つた。いつもはぼんやりしていながらも、冷静なタイプだと思つていただけに奇異だ。

だが、自分の判断は間違つていないと思つている。マスターの人を犠牲にしないという目的の為にも、今は引かなければならない。そして、今ここで余裕ぶつてセイバーとアーチャーを見逃したのは、どう考えてもバーサーカーのマスターの失策である。

真名を考えさせ対策を練らせる時間を与えたことを、かのマスターは必ず悔いるだろう。

しかし、当のセイバー自身も冷静なわけではなかった。バーサーカー。草薙剣がまるで通用しないとは、一体何の英霊なのか。彼のマスターがどう言おうと、サーヴァントに不死身はあり得ない。どこかに必ず弱点がある。絶対に殺すことができるはずだ。

どんな敵も跡形もなく屠り尽くす、それがセイバーの願い——目的であり責任であり義務。相手が誰であろうと、どんな劣勢でも、窮地でも負けることは許されない。

改めて眼下の夜景ともいえぬ夜景を見下ろして、セイバーはつぶやいた。

「……とにかく、帰るか」

11月29日⑤ 最弱と最弱

山内悟（やまうち さとる）は、割と真面目に後悔していた。日は沈みかけ、夕食をつくる家庭も多い頃合いである。宵のアパートの一室には、心細い蛍光灯が光っている。

和室ワンルームのアパート「カスミハイツ」が現在の悟の城である。一応キッチンユニットバス付だが、築四十五年かつ駅から徒歩三十分（普通はバスを使う）かかるのが難点だ。家賃が月三万の安さであることが最大のメリットである。

何故どう見ても不審者でしかない人物に声をかけ、あまつさえ家まで招いてしまったのか悟は自分を疑う。普通に警察を呼べばよかった——そう思ったのも後の祭りである。

今や目の前には、身長百八センチ超の男——髪は時代劇でいう鬘のようなものを結っており、顔には歌舞伎役者のようなメイク——いや歌舞伎役者そのものと言わなければならない化粧が施されている不審者——が、げらげら笑いながら座布団に座りカレーを食べていた。

「見知らぬ男をひよいひよい家に招くとかよー、お前相当なお人よしで騙されやすいだろ絶対」

「ちよつ落ち着いて！食べてからにしてくださいよ！」

「俺の大先輩に袴垂保輔はかまだれやすすけつてのがいるんだが、そいつの手法つてのが面白エ。全裸で道端に寝っころがって、なんだろうと思つて近づいてきたやつをぶつ殺して身ぐるみ奪うつてやつなんだ！お前は恰好のカモだな」

その不審者は、服には黒地に金の派手な刺繍の施されたド派手な金襴襦袢を羽織り、朱い糸でざくざくに編まれた羽織を着ている。その下に龍が縫い取られた着流しを纏い、草鞋を履いているという奇怪な出で立ちなのだ。本気で日光江戸村の人ですかとか映画村の方ですかとか映画の撮影ですかと聞きたくなる。

ただ道で見つけたときには黒い雨合羽を着ていて、服の異様さまでは気づかなかつたのだが。



自宅へ帰る最中に、悟は塀に寄りかかっている男を見つけた。このあたりはホームレスの類を見ることはないため、最初は不思議に思った。生気がまるでなく、もし死んでいるのだとしたら大事であるが、そうでなくても放っておくことは躊躇われた。

悟はおっかなびつくり声をかけると、男は枯れきった声で言った。「腹が減った」と。

成り行き任せに這う這うの体の男に肩を貸して、家に連れてきてしまった。貴重品は常に自分で身に着けられる程度のものしか持っていないし、家に高価なものなど一つもなかった。

それにどうにでもなれ——という気持ちであったことも大きい。作り置きで余っていたカレーを温め、ぐったりしていた男の前に突き出す。しかし不思議なことに、カレーを提供した時には既に、先ほども息も絶え絶えだったはずの男は何故か血色がよくなっていた。

男は渡されたスプーンを握ると、まるでカレーを始めて目にしたかのような様子でしげしげと眺めてからおおそるおそる口をつけた。しかし一口目をじっくり咀嚼した後は怒濤の勢いでカレーを食べ始め、口にモノをいれたまま先ほどの衰弱ぶりがうそのように元氣いっばいに喋っているのである。

「というか、あなたはなんであんなところで倒れてたんですか？ 役者の仕事をしている方ですか？」

男は手を打ち、しまったと言わんばかりに頭を掻いた。

「おっとそいつはすまねえ、自己紹介してなかったな。俺はアサシンのクラスを得て現界したサーヴァントだ」

「……？ 役の話ですか？ 劇とかの話でなくて本名を教えてくださいませんか？」

こんな奇天烈な見た目をしている人間だ。役の話かと勘違いされたのかと悟は思い、改めて聞き直したが、アサシンも渋い顔をしている。

「役？ クラスならアサシンだったろ？」

「あなたが劇か何かでアサシンって役をしているのはわかりましたけ

ど、どこの方でなんであんなところで倒れていたのかを聞きたいんですけど……」

「劇なんてやってねーよ何言ってるんだお前。倒れてたのはそうさな、前のマスターが殺されちまって魔力が尽きかけてたからだ。そこをお前が拾ったってわけだが」

全く何を言っているのかわからない。もしかして頭の方が病氣の人を拾ってしまったのかと悟は頭を抱え始めた。それを見かねて、アサシンと名乗った大男が確認をするように尋ねてきた。こちらも悟と同じように半ば頭を抱えたような顔をしている。

「おいあんた、一つ聞くが、俺をサーヴァントだと知って拾ったんじゃねーのか?」

「サ、サーヴァント?」

「じゃあ聖杯戦争って知ってるか?」

「聖杯って、あのカトリックのキリストの血を受けたとかいう杯?」

「最期にもうひとつ、魔術師っつーのはわかるか?」

「アニメとか漫画にある魔法使っていう感じのやつですか?」

きよとんとした様子を見て、アサシンは本格的に頭を抱えた。だがそれも一瞬の事であった。今度はいきなり膝を叩いて笑いだした。

「こりやまあまた厄介なマスターに拾われたときた。それでも拾われなきゃ俺はもう消えてたわけだが……お前さん、名前はなんっつーんだ」

何故かすつかり元気を取り戻したアサシンという男は、今や家主の悟よりも堂々と部屋に居座っている。むしろ自分が部屋に入れてもらった気分さえ味わいながら、悟は恐る恐る答えた。

「……山内悟です」

「そうか悟、俺の事はアサシンと呼べ。本当の名は他にあるんだがそれはおいおいだ。俺は今からわけわからん話をするが、それは全て本当の事だから心して聞けよ」

腕を組んでどこか得意げな様子なアサシンだが、悟の疑念は募るば

かりである。本名を教えられないなんて怪しすぎる。助けたつもりでいたが、もしかして何かのペテンにかけられているのではないか、最近はやりのカルト宗教の勧誘の手口ではないか――。

もう騙されることは御免だと考える悟は、気が引けながらも意を決した。

「あの、元気になったようですよし出て行ってもらえますか」

「はあ!?!なんでそうなるんだ!?!」

「私は宗教とか興味ないんで……あと浄水器とかも買いませんからね」

「いやいや待って待って何を勘違いしてんだお前、宗教だか浄水器だかしらねーが、お前はもう俺のマスターなんだぜ?お前が俺の手を掴んだときにもう契約は成立してんだ」

今のうちなら穏便に出て行ってもらえると思っていたが、「契約」の二文字を聞いたときに悟から血の気が引いた。同時に半ばやけになっていたとはいえ、得体のしれない人間を助けようとしてしまった、つまらない自分の同情心にも嫌気がさした。

「契約!?!契約書もないし、俺はハンコもなにも押してないぞ!!七日以内ならクーリングオフするからな!俺は何も買わない!」

「つーかお前何の話してんだ?クーニ……?買わないも何も、俺はもうさつきからお前からもらってるぜ」

「!?!何をだ!?!この泥棒!!」

「魔力だよ。あと俺が泥棒つてのは否定しねーけど」

アサシンはけろりとして答えるが、答えがまた悟に油を注いだ。悟はテーブルに置いてあった三十センチ定規を掴んでアサシンに振りかぶった。

「やっぱり泥棒か!!出てけ!!」

「うおおおっと!!おいやめろ!つーかそんだけ防衛意識あるくせに、なんで俺をヒョイヒョイ連れ込んだんだよわかんねーやつだなマジでー!」

サーヴァントに神秘のない攻撃は無効果だが、定規で叩かれて喜ぶ趣味はアサシンにはない。とつさに霊体化して姿を消す。振り下ろされた定規は空を切つて、悟は柵を叩くハメになった。物を叩いた衝撃が腕に伝わるも、叩く対象は影も形もなくなっている。

「……………え？き、消えた??？」

『あー最初から消えて見せりゃよかったのか。魔術師の魔の字も知らねーお前にはそっちの方が速かったな、失敗失敗』

「……………頭の中に声が聞こえる!?!?病気か!?!?」

『騒がしいヤツだな全く。これで俺が人間じゃないってことは理解できたか?』

「……………俺やつぱり疲れてんのかな……………無職も逆にストレスだつて聞いたことあるしな……………」

「いい加減にしろ面倒くせエ!!」

「ほぶあ!!」

再び姿を現したアサシンに思い切り頬を叩かれ、悟は情けない声を出した。ついでに無理やり畳に正座をさせられる。自分より背の高く体格もいい、しかも隈取を施している男に凄まじいと怖い。

「右腕を見ろ!」

「え……………な、なんだこれ」

悟の右甲には、ついた覚えのない痣——鳥をデザインしたような不思議な跡がついていた。どこかにぶつけた覚えもなく、仮にぶつけてできたにしては不自然すぎる。

アサシンはびしりとその痕を指差した。

「それがマスターの証、令呪だ。俺の前のマスターが使い残したヤツがそのままお前に再配布されたんだろな。ま、それはともかくだ」

痣を差した指をそのまま己の胸に向けて、堂々と、かつ偉そうに歌舞伎姿の男はのたまった。

「俺はお前のサーヴァントのアサシン。一から話してやるから、耳の穴をかつぽじって聞けよ悟」

悟の頭は未だ混乱状態で、一体目の前の男が何者であるのか理解で

きない。それでも、自分がとんでもないことに捲き込まれつつあることは流石に理解できた。

アサシンに聖杯戦争、魔術師についての一通りの説明をされたが、悟は全くと言っていいほど理解していなかった。そもそも今まで魔術などという怪しげなものとは一切関係のない世界で生きてきた一般人であるのだから無理もない。

何でも願いを叶える「万能の釜」である「聖杯」の使用権を巡り、七人の魔術師が七騎のサーヴァント——使い魔を呼び出して最後の一组になるまで戦い続けるバトルロワイヤル。悟はその聖杯戦争に参加するマスターとなってしまうのだと言われても、実感はない。

ただ目の前のアサシンが人間ではないことだけわかった。なにしろ自在に姿を消し、頭に直接話しかけてくるのだから。

「つていうか俺は魔術師なんかじゃないんだけど……」

「先祖は魔術師の家系だったが、途絶えたつて奴じゃねーか？ま、素養はあったんじゃないね。現に俺はお前からの魔力供給を感じてるぜ？水で百倍に薄めた日本酒みてーだけどな」

「はあ……」

尋ねるべきことはたくさんあるが、話が突拍子なき過ぎて何から聞いているかわからない。

悟はあれこれ逡巡したあげく、思いついたものから聞くことにした。

「何でも願いが叶うって、本当なのか？」

「多分な。抑々俺たち英霊つっーのは、一介の魔術師に使役できるものじゃないんだぜ？この世界の外側にある力の塊、精霊みたいなモンなんだが、それをこうして使い魔として制御できるつてのは殆ど奇蹟だ。そんなら願い位叶えることもできんだろーってな」

「大金持ちとか不老不死とか？」

「すっげーありがちな願いだけど叶うんじゃない？何だ、お前願いがあ

るのか？」

アサシンが興味深げに笑う。悟は静かに呟いた。

「……ないことも、ない。……というか、お前も願いあるんだよな」  
「まあ、あるっちゃあるけどなー……？受肉とか？」

アサシンは妙に歯切れの悪い返事をする。そしてあまりその気のない言い方だった。

いつの間にか煙管を吹かして家主以上に寛いでいるアサシンに脱力しながらも、悟は質問を続ける。

「戦いに勝ち抜けばその願いが叶う。……戦いつて、つまり、どんなのだ？」

「戦いは戦いだぜ？サーヴァント同士が最後の一騎になるまで殺しあう」

ならばマスターの自分は危険に晒されず、アサシンが勝てば願いを叶えられるのだろうか。しかしアサシンは先に、「マスターが殺されて魔力が足りなくなつて消えそうだった」と言った。

アサシンはにやにやと笑っている。

「残念ながらマスターも高みの見物とはいかねえぜ。サーヴァントはマスターの魔力で現界しているからな、マスターを殺せば自然サーヴァントも消滅する。当然、サーヴァントと直接戦うんじゃないくてマスターを殺しにかかるサーヴァントもいるつてわけだ」

アサシンの上には紫煙がくゆっている。煙は天井に向かって立ち上っていき、やがて消えた。

「それに仮にサーヴァントが居なくなつたマスターと、マスターを失つて消滅前のサーヴァントがいた場合には、そのマスターとサーヴァントで再契約して戦争を続行する。だから本当にライバルをなくすために、マスターまで殺しちまおうつて奴もいる」

「……というか、それに俺は参加することになつちやつたみたいだけど、それつて棄権とかできないのか」

「できるぞ。キョーカイ？に行けば監督役つてのがいるらしーから、そいつに棄権するつて言えばいい。令呪は引き取られ俺は正々堂々

次のマスターが現れるのを待つつてわけだ。お前さんに戦う気がないならそれをオススメするぜ」

正真正銘、殺し合い。殺し合いが行われているのを放っておけない、と思うほどの正義感には悟にはない。しかも舞台は魔術という今ままでファンタジーの世界にしかなかったものだ。

普通ならばそんなわけのわからないオカルトに関わりたくもなく、すぐに棄権を選ぶところだ。

しかし、今の悟はそれを良しとしなかった。

——何でも願いが叶う。

「……アサシン、他のサーヴァント同士が戦ってるどころって見られないのか」

「夜に巡回して、あとはタイミング次第だな。何だ何だ、ヤル気か？」  
魔術のまの字もしらなかつた悟が参加するとは思っていなかったらしく、アサシンは眼を見開いている。

「少し考えてみたい。聖杯戦争がどんなものか、実際に見たい」  
「いいぜ、じゃあ明日から夜は外に出るぞ。お前がやってもやんなくても俺はやるつもりだし、どんな敵がいるのか調べなくちゃいけないしな」

悟にも異議はない。アサシンは妙に楽しそうに立ち上がり、おもむろに屈伸運動を始めた。

とりあえず聖杯戦争に一步踏み出すに当たり、気になるのはこのアサシンの強さである。

「……そういえば、アサシン。戦うって言うけどお前って強いのか？」  
「あん？俺が強いわけねーだろ。激弱最弱丸だよ」

自信たっぷりの態度から強いのかと思えば、自己申告は最低であった。「セイバーとかに真正面からぶち当たったら消し炭にされる自信がある」と言い放つわりに、謎の自信が満ち溢れている。

「……は？あんだけ強いですオーラ出してるくせに!？」

「そんなもん出してねーよ。そりや人間よかは遙かに強いけどな、クラスの中では弱いだろ。アサシンっつーのは特殊なクラスでな、マスター殺しに特化したクラスだぜ？しかも俺、暗殺の逸話あるけど失敗してるからビミョーにクラス合っつてねーんだよな」

「……………」

大丈夫なのか。しかもマスター殺しを得意とするアサシンが一度マスターを殺されている等全く笑えない。悟は早まったかと、前途が昏い事を今更になつて自覚した。

「おいおい元氣出せよマスター。今日は出会いを祝して酒でも飲もうぜ」

当のサーヴァントは呑気に金襴襦袢から酒を取り出して勝手にラッパ飲みを始めている。何だか妙な疲れーそれはサーヴァントに魔力供給をしたばかりゆえのものだがーーを感じつつ、ええいいままよと悟はアサシンから酒を奪い、勢いよく飲み始めた。



11月30日① 一夜明けて

妹にとって、三つ年上の姉は憧れだった。明るくて、元気で、いつも影にひっこんでいる自分を構ってくれる優しい姉だ。

父とよく地下室に籠って何かをしている時は、一人だけ仲間外れにされたようで寂しかったが、姉に憧れる気持ちは変わらなかった。

それが変わったのはいつの事か。いつの間にか地下室に向かう姉を見なくなつたのと入れ替わりに、父は妹を地下室に誘つた。その時は姉と同じことができる、と妹は期待に胸を膨らませていた。

そこで教えられたものは魔術——今まで姉が学んでいたものである。

魔術回路と魔術の行使は痛みを伴う。妹は泣きながら苦しみながら魔術を学んだ。父は我が家がいかに由緒正しい魔導の家系であることを語り、妹は其の跡継ぎだから良く励むようにと言っていた。

それでも妹にとって、我が家が由緒正しい魔導の家系かなどはどうでもよかつた。

苦しかったけれども魔術を懸命に学んだのは、姉も同じことをしているががんばっていると思っていたからだ。

魔術の話を外ではいけなと言われていた。

しかし同じことをしている姉にならないだろうと、妹は軽い気持ちで姉に心中を吐露した。

——魔術って大変だね、お姉ちゃん。

——でも私、魔術が少しだけうまくいってお父様に褒められたよ。

——お姉ちゃんは何が得意なの？

可笑しくなり始めたのは其の頃からだ。事あるごとに妹を構ってくれた姉は、目に見えて妹を避けた。時には存在を黙殺し、手を上げることがあった。

妹には何が原因であるかわからない。

わからないくせに自分が何かをしてしまったと思い、中身のない謝

罪を重ねた。

時が過ぎて、妹は姉の変化の原因を理解した。魔術の修行を重ねることに比例して、ますますわかるようになった。

父は初めは姉だけに魔術を教えていたが、今は妹にしか教えていない。

そして魔導は一子相伝であり、後を継げるのは一人だけであると知った。

———そうか。私は、お姉ちゃんのを盗っちゃったんだ。

ある日、家政婦と姉妹の三人で出かけたショッピングモールの屋上で、姉妹は喧嘩をした。

姉妹は二人とも少し着飾って、姉は豊かな黒髪をポニーテールに結び、青いワンピースを着ていた。それは少し釣り目で気が強そうな姉に良く似合っていた。

かたや妹は、濃い灰色の髪を肩までで切りそろえ、白のブラウスにチェックのスカートを着ていた。姉とは逆に控えめの印象だ。

今や仲の良かったころは幻のように掻き消え、姉は強い口調で妹を詰っていた。

「あんたの、あんたのせいよ！あんたが全部持ったの！あんたが生まれてから私にいいことなんてひとつもない!!」

言葉激しく妹を詰りながら、姉は妹の襟首をつかんでひどく揺らした。姉が怒っているのは当たり前前だ。なぜなら、姉が言っていることは全て本当だからだ。

妹が望んだわけではないが、妹は姉からあらゆるものを持って行ってしまった。妹は「違う」とは口が裂けても言えなかった。

きっと自分も姉であつたら怒っていると思うから、妹は静かに暴言を聞いていることしかできない。

「あんたなんて死んじゃえばいいのよー!」

そういわれるのも慣れたもので、妹は何も言わない。姉は言い返さ

ない妹が癪に障ったのか、妹を思い切り突き飛ばした。屋上のフェンスにぶつかって、妹はその場に座り込む。

それだけのはずだった。

だが、手入れが行き届いていなかったフェンスは鈍い音を立てて少女の体重さえ支えきれず、宙に舞った。破損したフェンスとともに、妹の体も支えるものがない空へ放り出された。

妹には現実感がなかった。数秒後には遥か眼下の地面に叩き付けられて動けなくなるだろうことが身に迫ってこなかったのだ。その割に、妹は冷静に己が消えることは了解していた。

ここで妹が「無」くなってしまうえば、姉は我が家の魔術師として跡継ぎになれる。

妹にとられたものを全て取り戻せる。

妹も苦しくつらいだけの魔術の修行などしなくてもよくなる。

消えるのだから、「生きるために」魔術を学ぶ必要がなくなる。

妹が無くなれば、妹自身も姉も幸せなのだ。

妹が死んでも姉が残るから、跡継ぎが残る。ゆえに父もさほど悲しまないだろう。

落下までの刹那が、体感時間として限りなく長く引き延ばされている刹那。全てを了解したつもりになっていた妹は頭を殴られたような衝撃を受けた。

姉が泣いていた。手を必死に妹の方に伸ばし、見たことがないほど顔を歪ませて、妹の名を叫んでいた。

その姿を目に映して、妹は初めて誤解をしていたことに気づいた。姉は妹を嫌ったり憎んだりしていたのではない。ただ、ほんの少しだけ――。

それが姉妹の最後の記憶。もう二度と、姉妹が姉妹として会うことはなかった。

\*

朝日が碓氷邸の二階に差している。元来サーヴァントは寝なくてもいいのだが、寝ることで魔力消費を抑えることができるという利点はある。昨夜、帰宅してからセイバーは剣を抱えて座した状態で眠っていた。

セイバーはベッドの上で未だ眠るマスター・明をちらりと見て、夢の内容を思い出す。マスターとサーヴァントは因果線でつながっている為、無意識化の映像が伝わることもあると言う。今のは明が見ていた夢か、または実際の過去。

マスターが高所を嫌うのは、子供のころに高い所から落ちたことからだと聞いていた。それが今の映像なのだろうか。

セイバーがじっと考えていると、当のマスターが目をさましむくりと上半身を起こした。寝癖のついた髪に気づかず、セイバーにも一目もくれず部屋を出て階下に降りていく。

昨夜のバーサーカーとの戦いについて何か言われるかと思っていたセイバーは拍子抜けして、とりあえず明の後に従って一階に下りた。明はキッチン冷蔵庫から「ウイダーインゼリー」という飲物を取り出すと、大またで食堂のイスのひとつに腰掛け握りつぶさんばかりの勢いで飲み始めた。

なんとというか、マスターはものすごく機嫌が悪い。寝起きのせいかもしれないが、眼が完全に座っている。昨日のバーサーカー戦でマスターの指示を無視して離脱したのが良くなかったかと、セイバーは思う。

だが今まで聖杯戦争についてセイバーに言いたいことがあるとき、明ははつきりそれを言っていた。明は文句があれば口に出しているのだから、聖杯戦争絡みのことではないのかもしれないと、セイバーは考えた。とすれば。

セイバーは己の剣を天叢雲の鞘に納めて明の前に突き出した。「マスター、これを使え」

「は？何に？」

セイバーの唐突過ぎる行動に、明は驚きながらも投げやりに聞き返した。

「少しだけ魔力を注いであるから暖かい筈だ。これを腹にでも当てておく、いや体に入れておくといい」

「別にお腹壊してなんかないけど」

明は首を傾げるばかりだ。当てが外れたのはなんとなくセイバーも分かったが、ならばなぜ機嫌が悪いのかと不思議に思いつて尋ねた。「月のさわりではないのか？」

「なんだ、バーサーカーのマスターのことか」

頭を摩りながら、セイバーはすっかり真顔で頷いた。流石に如何かと思われるデリカシーゼロ発言に、明が空になったウイダーインゼリーをセイバーに投げつけたのである。セイバーの後だった弟橘姫とか美夜受姫はどういう心持でコレとよろしくやっていたのか理解に苦しむところだ。母性か。

それとも古代は現代より性におおらかだったようだし、これが普通なのかもしれない、と明は思うことにした。

とにかく話を戻すと、朝から明が不機嫌全開だったのは昨夜のバーサーカーのマスターが原因である。セイバーとバーサーカーが戦っていた時、明もバーサーカーのマスターと対峙していた。

明は苦い虫を噛み潰したような顔のまま、低い声で言葉をつないだ。

「あの思い上がったマスターは私直々に決着をつけてやろうと思う。それに対してはいいんだけど、昨日は色々ごめん」

「はー」

離脱すると言われたのに無理に離脱したことについて不興を買ったと思っていたセイバーは、間の抜けた声を出した。

「第一の宝具も通用しなかったとこで、いったん引くべきだった。セイバーが無理にでも引つ張り出してくれて助かった」

「そ、そうか」

人が死んでもいいってのはいただけじゃないけど、と付け加えながらも明は頭を下げた。セイバーは予想外の答えにうろたえたが、頷いた。

だが、あそこで逃げたことでバーサーカーが人食いを再開したことは間違いないだろう。其れに関して明は暗い顔を隠そうとしない。気が向かなそうにのろのろとリモコンに手を伸ばし、テレビのニュースにチャンネルをあわせた。おそらくまた惨殺事件が取りざたされていることが容易に予想できた。

——ニュースは予想通り惨殺事件を伝えていた。ただ今回は住宅街ではなく公園に寝泊まりしているホームレスを狙ったものだった。場所がこの春日で、しかも殺され方が近日の一家襲撃と同様だったため十中八九バーサーカーの仕業だろう。

そして昨夜セイバーとバーサーカーが交戦した住宅街の一角の惨状も放送されていた。そちらは埋まっていた不発弾が爆発を起こしたということにされていた。

御雄や美琴など、聖堂教会のスタッフが後始末に奔走した結果であろう。

撮影された住宅街は散々な状態で、地面はえぐり取られ一帯の塀と塀の間はあらかた破壊され、一階部分がごっそりと跡形もなくなっている民家の映像が放映されていた。これだけの惨状を朝になるまで誰も気づかなかったということが、テレビでは怪奇現象としてとりあげられていた（結界を使ったせいである）。ひととおりニュースを見て、明は深々とため息をついた。

「連日の殺人事件と医療事故で本当春日は呪われた街だよ……」

医療事故に始まり、手法が不明の連続殺人事件。白昼堂々の通り魔事件。事情を知る者にすれば得体の知れなさはないが、一般人から見れば完全に異常事態である。警察も未成年には早く帰宅するように呼びかけ巡回を行っていると聞き、まるで街自体が昏く沈んでいくようだ。

状況は良くない。一刻も早くバーサーカーの対策を本格的に考え、実行しなければならぬ。彼のサーヴァントは人食いを辞める気配はなく、なぜか攻撃が効かない——死なない特殊な能力を持っている。明はセイバーに思い当ることがないか尋ねた。

しかしセイバーも首を横に振った。

「なぜかわからないが、バーサーカーは死なない。何度も首を斬り心臓を刺したが、何度でも蘇ってきた」

「全部は見えてないけど、そんな感じだったね。でもサーヴァントは不死身じゃない……絶対に弱点があるはずなんだけども」

英霊はサーヴァントとして現界する際に、まず霊核を得てその霊核が魔力によってできた肉体を纏うことで実体化している。英霊を倒すということは、その霊核にダメージを与えるということだ。霊格は魔力を消費したり、肉体を損傷したりすることで徐々に弱体化する。その状態でさらに魔力を消費したりダメージを負ったりすると霊核が破壊され、現界できなくなる。

セイバーがバーサーカーの首や心臓を狙っていたのはそこが霊核に直結しており、大きなダメージを与えられるからである。

「真名がわかれば弱点も露呈するんだけど……。あのバーサーカーやたらセイバーを追いかけてたけどなんか恨みでも買ってたの？同時代の人物？」

東の荒ぶる神々、まつろわぬ者共を討伐しつくしたセイバーの伝説からすれば、恨みを持たれていてもおかしくない。しかし当のセイバーは心当たりがありすぎて判断がつかないのか首を傾げていた。

「わからない。意思疎通ができればまだしも、狂化した状態ではな。……あと聞きたいのだが、あのアーチャーたちは何なんだ？」

昨夜、セイバーたちよりも先にバーサーカーと交戦していたアーチャー。そして、いつの間にかバーサーカーに対し共闘していたが、いつの間にそうなったのかセイバーは知らない。

明はそういえばわからないよねと前置きしてから経緯を話す。

「アーチャーのマスターは春日に根を張る魔術師じゃないよ。いきなりバーサーカーがセイバーを襲ったじゃない、その後にそのマスター

とちよつと話してね。ほんとに少しだったけど」

「それで？」

「なんかボロボロだったからさっさと逃げればって言ったんだけど、なんていったと思う？」「人を食うサーヴアントをほつとけるか」だって」

全く物好きなマスターもいたものねと言いながら、明は肩をすくめた。「まあどうあれ私と目的は同じようなものだし、こつちも同じ目的って教えたけど。目の前でバーサーカーがセイバーに襲いかかってたし、その場は信じてくれたみたい」

「なるほどな」

明は投げつけたウイダーインゼリーの抜け殻を拾い、きちんとゴミ箱に捨てる、面倒くさそうに伸びをしてからセイバーを見た。

「今日は学校に行つて終わつたら、ランサーのマスターの根城に行こう」

\*

思つたより、自分は疲れていないようだ。昨夜は帰宅してからすぐに倒れこんでいたと思うのだが、もう魔力を使い過ぎたがゆえの疲れはないと思う。しかしそれでも朝、それに冬に入りかけの季節とくればお布団は抗いがたい魅力となつて二度寝へいざなう。なんとかその魅力に抗つて一成は呻きながら上半身を布団から起こした。魔術礼装である神主服を身に着けたままで、あちこち掠りきれて破れ、無残なありさまだった。半覚醒状態の頭で、目覚まし時計に目をやる。そして、アパート中に響き渡る絶叫が木霊した。

「よう土御門、お前が風邪ひくとは思つてなかったぜ」

「そりやどういふ意味だテメ」

朝から汗だくになりながら、一成は自分の席に着く。始業三十秒



前、芸術的ともいえるタイミングで席に着き、やっと人心地を取り戻した。一成の通う私立埋火高校は隔週で土曜にも半ドンで授業があるため、生徒たちは今日そろって席についている。

昨日、巡回に出かける前に学校から欠席を訝しむ連絡があった。一成がかけたはずの暗示は見事に切れていて、新たに暗示をかけるにもとにかく学校には行かなければならなかった。無断欠席を繰り返しては実家の両親にまで連絡がいき、今の状態——聖杯戦争に参加している——を言わなければならなくなる。それは避けなければならなかった。

(実際戦うのは夜だし、また暗示が解けても事だし、学校には来ておくか……)

朝っぱらからの世界史の授業に眠気を誘われながら、一成はため息をついた。自分ももう少しまともに魔術を使えば今日学校には来ていなかっただろうし、昨夜アーチャーはもつと善戦できたかもしれないのだ。

『そなたの魔術が残念なのは疑うべくもないが、昨夜のこととそなたの腕前は別問題よ』

霊体化したアーチャーが話しかけてきて、全力で舟をこぎかけていた一成は慌てて身を起こした。それにしてもいつもながら一言多い。『……って、そうなのか?』

『左様。私とあのバーサーカーは相性が悪い。有体に言えば、私は何か魂に傷でも負っているかのようにあのバーサーカーが恐ろしい。私単騎では十中八九勝ち目はなからう』

一成は昨夜の戦鬪を思い出す。自然現象の如き、圧倒的な暴力でアーチャーを弄んだバーサーカー。あれだけでも手に負えなかったのに、まだ肝心の宝具を出しておらず力を隠している様子なのだ。アーチャーの言うとおり、単騎であれに勝つことは難しいと一成も思う。しかし頭を抱えるマスターに対し、サーヴァントの声は呑気だ。『そう落ち込むな。単騎でだめなら二人でかかればよからう。あのセイバーとここは協力してはどうか』

『……確かに確氷のマスターはバーサーカーを優先して倒す動機があ

ると思うけど、あいつらが俺らを仲間に入れても得しなくね?』

『おや、そなたはあのマスターが誰か知っているのか』

その魔術を見たのは昨日が初めてだが、一介の魔術師として一成はここ春日の地の管理者について知っていた。基本、魔術師は移動した先で魔術工房を作成する際には、土地の管理者である魔術師に断りをいれなければならない。一成は工房を作っていないから挨拶はしていないが、管理者の姿かたち、大まかなうわさは知っている。

極めて稀有な架空元素・虚数の属性と確氷の体質を色濃く残す女の影使い——管理者である確氷明。管理者である彼女は春日の地の魔術行使で一般人に神秘が漏洩することを防がなければならぬ。有体に言えば聖杯戦争に一般人を巻き込まないようにする義務があるのだ。アーチャーはそれを聞き、ふむと頷く。

『なるほどのう。……昨日の我らは確かにあの者たちに不甲斐ないところばかり見せてしまった。それにセイバーはかの東征の皇子、我らの力などいらぬと仰せになってもおかしくないの』

白光を放つ磨き抜かれた剣を携え、高らかにその宝具を開帳したセイバー。『くさなびのつるぎ全て翻し焰の剣』——草薙剣の担い手、日本武尊。それがセイバーの真名。この日本において伝説の細部までは知らずとも、名前を聞いたことのない人間は殆どいないであろう古代の大英雄。伝説の通りならば、その剣はまだ真価を發揮していないはずだ。

パラメーターも軒並みAとBで、人を食わずともバーサーカーと真正面から渡り合っていた。

『……パラメーターはアレ、依代であるマスターの力量や性格にかなり影響を受ける故にそれだけあのマスターが優れているということでもあるからな、一成』

『……なんか含みのある言い方だなオマエ』

『そのようなことはない。それは置いといてだ、セイバーと交渉する材料がある。……私はバーサーカーの真名に心当たりがあるのだ』

「何!?!」

思わず一成は念話ではなく声に出して叫んでしまった。ちなみに、

世界史の授業中である。教師とクラスメイトの訝しげな視線に身を小さくしながら、消しゴム落としましたと苦しい言い訳を披露してしまった。一成が身を小さくする一方、アーチャーの方は全く気にせず、話を続けた。

『それが正しければ、同時に私と組んだ方があちらにも都合が良いと思うのじゃ』

もしセイバー側が真名を看破していなければの話だ。アーチャーたちは宝具を開帳していないとはいえ、戦力的には格下に見られているに違いない。しかし、情報があれば組む価値も出てくるだろう。一成はアーチャーをせつついた。

『で、誰なんだよ』

『全て私任せではいかんぞ。私も一応確認をしたいゆえ、この図書館を拝借する。手がかりを伝える故、そなたも考えよ』

アーチャーは一つ一つ、噛んで含める様に伝える。

『平安の貴族たる私が恐れる存在であること。かの皇子の伝説には東征があること。そしてここ春日は坂東の地であること。不死身、またはそれに類する伝説があること。同時にバーサーカーに値する伝説を持つことじゃ』

そう伝えると、アーチャーの気配が遠のいた。推測を確認するため、図書館に向かったのであろう。その言葉を反芻しながら、一成はこっそり机から日本史の教科書を取り出したところではたと思った。『図書館に行くって……』

サーヴァントは霊体化した状態では物体に干渉することができない。つまり本に触り開くことはできない。つまりアーチャーはここで実体化するつもりであり、要するに得体のしれない不審者である。(まああいつならなんとかするだろ……)

いざ見つかつても物陰に逃げ込んだときに霊体化してしまえば事なきを得られる。それにあのアーチャーなら色々適当な理屈をこねて堂々と校内を闊歩していてもおかしくない。

ぶつちやけた話、朝っぱらの授業の眠気で一成は考えるのが面倒になつていた。彼はそのまま机を枕にして意識を飛ばした。ついでに

日本史と世界史の教科書は床に落とした。

「一成お前今日寝すぎじゃね？アズマックスの表情マジやばかったんだけど」

「うるせえ……男の子の日なんだよ」

「どういう日だよ」

三限が終わり、今日の授業は終了だ。友人の桜田がからかいつつも、帰りに昼ご飯に誘ってきた。いつもなら二つ返事で行くところだが、今日は図書館で調べものをしなければならぬ。

その旨を伝えると、桜田は宇宙人に出遭ったような顔をした。

「え……お前が……勉強??」

「うるせーな！俺だってインテリジェンスなことしたい日があるんだよー」

「図書館で調べものする程度の事をインテリジェンスって言う時点でもうインテリじゃねーよお前バカだろ」

友人のまつとうなツツコミをスルーして、一成は二階の図書館に向かった。アーチャーの気配もそこにある。今は定期試験前でもないため、混んでいるということもないだろう。

引き戸を開けたところには本の貸し出しカウンターがあり、土曜は三限終了後の一時間は図書委員が本の貸し出しを行っている。が、今日のカウンターには図書委員の女子二人に加え、スーツを着たナイスミドルが平然と座っていた。しかも何やら仲良さげに談笑などしているではないか。

あんまりな光景に、一成は思わず扉のレール部分に足を引っ掛けて転んだ。

「ぶべほ!!」

「おや、どうした」

「何してんだアア……あー……叔父さん!!」

奇怪な声を上げてしまったが、大して痛みはない。一成は起き上がると、思わず突っ込んだ。アーチャーと言いかけたが、図書委員に何

かと思われるので済んでのところ、で親戚設定に切り替えた。アーチャーは何時もと寸分変わらぬ余裕たっぷり、の声でしゃべっており、一成は色々と腹が立った。

「おお、一成ではないか。ちようどな、彼女たちと本の話で盛り上がってしまつてな」

「あれ？アーチャーさんって土御門君の親戚なの？すごい叔父さんね！」

図書委員の片方の女の子は、一成のクラスメイトの子だ。男子による男子のためのクラス女子ランキング（\*女子には極秘）でトップを飾る大和撫子系の女の子だ。腰まで長い髪の毛のわりに先まで艶やかで、肌も色白。着痩せ期待度数が百二十パーセント（\*期待含む）。

一成はますますイラツしながらアーチャーを睨む。というかどうかどう考えても「アーチャー」という外人的な名前が似合わないくせに、どういたいけな女子学生を丸め込んだのか。

「平安時代の国文学のことホント詳しいの！国語の先生とか大学の先生でいらつしやるのかと思う位！」

「はっはっは、そのような高等なものではないぞ。しかし、そなたたちのように国文学に熱心な子がいるとは嬉しい」

オイ、顔緩みまくってんぞこのクソサーヴァント。一成が初めて見るくらいの機嫌の良さを見せつけるアーチャーである。

「あと歴史にも詳しくて」

もう一人の女子図書委員も、にこにこ笑いながら言った。図書委員には当然、本好きは前提として、歴史好き、文学好きが集まりやすい。そういう傾向のある者とはアーチャーは話が合うらしい。

「叔父さん、ちよつといいいか？」

一成は渋面になるのをこらえながら、努めてにこやかにアーチャーを促した。アーチャーは名残惜しげに図書委員に別れを告げた。図書委員の二人も「また時間があつたら来てくださいね！」と言っていたのがさらに一成を渋面にさせた。女タラシスキルでも持っているのかこいつと毒づいた。

二人は図書館の歴史の棚に移動し、目当ての本を探すふりをしながら低い声で話す。

「つてかお前図書館で調べものしてたんじゃなかったのかよ！」

「してたが終わったのでな。はあ、私もあのような女子がマスターならばよかった……やはりこう戦うにも、姫を護つてという方が気分的に盛り上がる」

かなり真剣な声でそんなくだらないことを言うものだから、一成は脱力しきりだ。

「おれだつてかわいい女の子のサーヴァントの方がテンション上がるわ！何が悲しくてオツサンなんだ」

そういや日本武尊は男だが、あのセイバーは美少女とも美少年とも取れたなと思いつきながら、一成はうら悲しい気分になった。アーチャーまで何やら物悲しい顔つきでしみじみと頷く。

「いざと言う時の魔力供給・パス形成のことを考えるとよっぽどでない限り、女子の方がいいのう。そなたではなあ……」

「魔力供……おい、おぞましいことを言うな。つか別にエロいこと必要もねーだろ」

マスターとサーヴァントはパスでつながり、それを通してサーヴァントには魔力が供給されている。だが、パスからの供給だけでは追いつかない場合、他の手段を用いて魔力を供給できる。バーサーカーの人食いもその手段の一つである。

また、粘膜接触で体液を与えることによって魔力を補充することもできる。接吻から始まり、効率がいいのは有体に言えば、性交である。また効率は落ちるが、魔術師の血液を飲むことで補充も可能である。一成の言うとおり、無理に性交する必要はない。

「そなたとの場合は血を飲む方がよさそうじゃ。頑張ればできぬこともないが」

「いや頑張らないでいいですマジで」

明治時代以前は男色というものは忌避されるものではなく、一般的に認知されていたものだという。アーチャーも例によって嫌悪感はないようだが、やはり女の方がいいらしい。そのとき、ふと思いつき

たようにアーチャーが言う。

「魔力供給と言えばそなたの部屋にはこう、女子の匂いがさっぱりせ  
なんだが」

「……何が言いたい」

果てしなく気分を害しながら、一成はアーチャーを睨んだ。アー  
チャーはその睨みをもともしないどころか、生暖かい視線で受け止  
める。その生暖かい視線のまま、右親指を立てて力強く言った。

「励めよ！」

殺してやろうかこの糞サーヴァント。

11月30日② 聖杯の娘、かく語りき

アーチャーのヒントを受けてから、睡魔と闘いつつ考えてみたので一成にもバーサーカーの目星はついていた。あとは図書館で本を探し、自分の覚えている伝説と昨夜のバーサーカーに違いがないか確認する作業だった。

その結果、一成は一つの英雄にたどり着く。

「どうやらそなたも考え至ったようじゃな」

「……マジであの英雄なのか？」

「おそらくな。昨夜の戦いで、私は幾本もの矢をあゝの狂戦士に射かけた。あれは不死身を称する故に心臓を狙おうが首を狙おうが避けなかったのよ。だがな、一か所必ず防いでいた場所があったわ」

確かに体が非常に頑丈なバーサーカーは、アーチャーの弓など避けるまでもないという態度だった。矢で動きを鈍らせることこそできるが、止まりはしなかった。

「どこだよ？」

アーチャーはとんとんとある体の場所を指した。「ここよ。恐らくここを射抜けばバーサーカーは死ぬ」

一成は自分で調べていたバーサーカーの伝説を思い出して口を開く。

「よく見てるな、流石アーチャーのクラスなだけあるぜ。だけど、伝説通りならアイツは一回殺して死ぬのか？」

「もしかしたら死なぬかもしれぬ。それにセイバーが何度も何度も首を落としたりしていたが効いていなかった。もしかしたら、的確に部位を攻撃しなければ死んだことに数えられぬかもしれぬ」

アーチャーの正確な狙撃であれば弱点を撃ち抜くことも可能であろう。だが、アーチャーに言わせれば彼にとってバーサーカーは鬼門であり、その前では性能が劣化する。距離を置けばまじだろうが、距離を置くためには代わりに戦ってもらう者が必要になる。

「やはりセイバーは適任よ。セイバーがいればバーサーカーはそちら



を追う。その間に私は離れた場所かアレを射殺す」

「バーサーカーを倒すまでの共闘か」

こちらはセイバーの真名を把握し、アーチャー自身がいる為バーサーカーの真名を明らかにできた。しかしセイバーはアーチャーの正体を知らず、アーチャーがバーサーカーの前では性能を下げることをまだ知らない。

セイバーが主に戦いバーサーカーを引き付ける。その間にアーチャーが本領の弓を以って離れた場所から正確な狙撃を行い、バーサーカーを死ぬまで殺す。この戦法と情報を持ちかければ、あちらも一考する。

「きつとあつちは真名把握まで行っていないと思うし、把握しててもアーチャーの戦力は欲しいと思う。……あとで碓氷の家に行ってみよう。いいな、アーチャー」

「そうするか」

アーチャーは静かに頷いた。

半ドンの授業で、戻った教室にはすでに人気がなく、日差しが差し込む中に一成のカバンが机の上にぽんとおいてあるだけだった。用のない者は帰宅し、部活動のある者はさつきと場所に赴いている。一成は帰宅部で放課後は友達とゲームセンターにでも赴くことが多いが、今日は別だ。鞆を担いで職員室に向かい、言伝があるふりをして担任の教師に暗示をかけたおした。

さつきと出て行こうとしたところ、職員室を出てすぐに隣のクラスの同級生に呼び止められた。

「おい一成！」

「なんだよ。今日は用事あつから」校門前で高飛車ロリっ子がお前を呼んでるぞ！」

なんだその二次元みたいな現象はとつっこみかけたが、生憎現在の一成にはその高飛車ロリっ子に心当たりがあった。このままではのつぴきならない事態になりそうだと直感し、一成は猛ダッシュで階段を駆け下りた。

校庭は陸上部やサッカー部が部活に励み、正門には下校する生徒が向かっている。そのような普通の放課後の光景がある中、正門の前にはちよつとした人ばかりができていた。一成は頭から冷水を浴びせられた気分になりながら、それでもその人ばかりへ急ぐ。

やはり予想した通り、艶やかな黒髪をした美しい十歳前後の少女が立っている。赤い目が一種幻想的な雰囲気醸し出しているが最早どうでもいい。

「えーっと、キリエちゃんは一成とどういう関係なのかな……?」

「即答はしかねるわね。まあ、わかりやすく言えば私の従者かしら」

「アインツベル……アインツベル!!!」

おぞましいやり取りを耳にして、一成は人だかりを押しつけて高飛車少女——キリエスフィール・フォン・アインツベルの前に立ちはだかった。このまま放置していたら自分が苦心して作り上げたイケてる男のイメージが音を立てて崩壊してしまう。

しかし、当のキリエは平然と腰に手を当てて言う。

「遅いわ!カズナリ・ツチミカド!レディを待たせるとはなつてないわ!あと、私の事はキリエで構わないと言った筈だけど?」

キリエはキリエでこの調子で、さらにキリエを取り囲んでいた同級生たちはそろいもそろつて一成を疑いの眼差しで見ってくる。

「土御門!お前まさかこんないたいけな女の子にそんなプレイを仕込んでいるのか!?!」

「お前、この子どこから誘拐してきた!?そんな奴だとは思っていたが!!」

「非モテをこじらせたつてのは犯罪のいいわけにはならないんだぞ!!」

「うるっせえブラジルの親戚だよ!」

「ウソツケエ!!」

改めて俺のイメージって一体、と真顔になって考えかけたが、この状態はまずい。脳内大混乱の一成を置いて、キリエはゴーイングマイウェイで彼の服を掴んだ。

「さあ行きましようカズナリ・ツチミカド。私はソフトクリームとい

うものが食べたいの」

「お前もウルツセエエこの高飛車ロリババアー!!」

一成はええいままよとキリエを脇に抱えると、一目散に正門から外へ駆け出した。キリエのコンパスと一成のコンパスを考慮して抱えてしまった方が早いと思っただのだ。

キリエはレディの抱え方でこれはないわと文句を垂れていたが、当然彼にそれを聞く余裕などなかったのである。

まるで一人だけ真夏の焰天下に立っているかのような汗を流しつつ、一成は肩で息をした。今度学校に行つた際には先ほど群がついてた連中に質問攻めにされるのが目に見えており、心の中でうんざりする。奇しくも先日キリエと別れた公園まで走ってきたところで、抱えていたキリエを下ろす。

「私だから許すけど、もう少しレディの扱いを学んだ方がいいわよ」  
隣みすらまじつた視線で眺められて、一成は汗をぬぐわず反論した。気づけばアーチャーの気配がすぐ近くにはない。

「うるっせ……っっていうか、お前、何しに、来たんだよ、」  
「ソフトクリームなるものを食べて見たかったから、蛇の道は蛇つてことよ」

一成の知るかぎり、ソフトクリームを食べることはそんなに物騒な行為ではなかったはずである。表現はともかく、キリエは再び一成にエスコートなるものをしろと言っているのである。

一成は前回自分の学校を案内したのを悔やんで、願い下げだ、と断ろうと考えたがはたと思いとどまった。己より遥に魔術師とすぐれ、聖杯戦争のために生み出されたと言うキリエ。聞けることは聞いてやろうと思う。バーサーカーのことを知っているのかも気になる。

やはりアーチャーはキリエのサーヴァントのもとにあり、牽制状態にあるようだ。幸いまだ昼で、夜になるには時間がある。

「わかったよ！食わせてやる……駅前に行くぞ」

「よいエスコートを期待するわ」

一瞬にして上機嫌になったキリエは手を差し出した。引いていけ

ということらしい。流石に幼女は守備範囲外な一成だが、改めて見ればキリエは純然たる美少女である。濡芭玉の黒髪と、透き通るように白い肌、ルビーの宝石のように輝く赤い瞳。すらりとした手足には傷ひとつなく、人の体ではなく人形と言っても通用するのではないかと思える。

そういえばきつと「私はホムンクルスで、人間じゃないもの」という返事が返ってくるのだろう。

「十五分くらい歩くからな」

「わかったわ」

キリエは花が綻ぶように笑った。キリエの歩調に合わせてゆっくり歩きながら、一成はあれこれと何を聞くべきか迷っていたが、やはり気にかかっていることからだと意を決した。

「アインツベルン。最近の一家惨殺事件の話は知ってるか」

「キリエでいいって言っているのに。……それについては知っているわ。サーヴァントの作業ね」

一応この町のあちこちに使い魔くらいは飛ばしているのよ、とキリエは笑う。

「バーサーカーの作業なんだ。人を食って魔力を得ているんだ」

「そんなところでしょうね」

キリエは特に興味もなさそうに言った。その話よりも通りかかる焼き芋屋の方がずっと興味あると言う顔つきだ。一成は眉をひそめた。

「なんとも思わないのか」

「興味ないわ。カズナリ・ツチミカドの言いたいことはわかるけど、助力なら他を当たりなさい。ここの管理者である確氷ならさっさと始末したがるのではないかしら」

キリエに対して腹を立てても仕方がない。そもそも魔術師は一般人の人命を鑑みるような人間の方が少ないことを、一成は知っているつもりだった。

「私はバーサーカーに与するつもりはないから、好きに始末してちょうだい」

「ああ」

「そういえばアイスクリームとソフトクリームの違いが判らないわ！」

基本的にアイスの事しか考えていないキリエに、一成はため息をついた。ある時は酷く冷静な顔を見せるくせに、そうでないときは実年齢三十とは思えないあどけなさを見せる為に一成は対応に困る。

「お前、この聖杯戦争のためにここ来たんだろ？ 昼間は何してるんだ？」

「昼は今みたいに街を歩いているわ。メイドとかも一緒に来ているのだけど、皆日本は初めてだからガイドは当てにできなくて」

そこであなたよと指を指される。能天気かつ無邪気にも思える姿に、彼女が夜魔術師としての顔を露わにして死闘をする姿が想像できない。

キリエが質問し、それに一成が答える形の会話を続けていると、春日駅に到着した。いつものように行きかう人々であふれており、はぐれないようにキリエの手を強く握った。

数日前に駅ナカのコーヒーショップで通り魔があつたそうで物騒になつているが、それでも大きな駅ゆえに人は絶えない。

駅の中にある4ーアイスクリームでいいかと考えキリエをそこに連れて行った。が、行ったら行ったで、「五段重ねくらいにはできないの」「あれもこれも味見をするわ」とやかましく店員を困らせてしまった。おかげで購入にだいぶ手間取ってしまった。

休日故にイートインスペースは込み合っていたが、何とか二人の席を確保した。

「これがダブルチョコレートチーズケーキにラブポーシヨンフォーティーワンね……！」

「溶けないうちに食えよ」

キリエは宝石を見るような眼差しでダブルのアイスを見ている。なぜかキリエの分まで金を払わされた一成は黙々と自分のアイスを

食べる。

「一つ聞きたいんだけど」

「なあに？」

「この聖杯戦争の開始に、土御門の家が関わってるって言ったな」

「言ったわ」

「なんでうちは聖杯戦争に関わろうとしたんだ」

「はあ?……むしろ、なぜ知らないのかしら。それにそんなこと、私ではなくて自分の親に聞いた方が早いのではないですか?」

「家庭の事情で聞けねえんだよ」

親に内緒で聖杯戦争に参加している身としては、そんなことを聞いた時点で逆になぜそれを知っているのかと問い詰められて聖杯戦争の参加がバレるのが関の山だ。キリエはにやりと笑って、アイスのスプーンを振りながら笑う。

「私は土御門の人間じゃないから全部を知ってるわけじゃないわ。それでもいいなら教えてもいいんだけど……カズナリ・ツチミカド、ギブアンドテイクって言葉はご存知かしら?」

「いやこうやって春日を案内してるからいいだろ」

一成のまっとうな反論は、高飛車幼口りっ子の意には沿っていないようでキリエは不服そうな顔を隠さない。

「あなたが何故土御門の者に聞こうとしないのか、その理由を教えてくださいれば話してあげるわ。ひたすら聞かれるだけというのは面白くないの」

周囲の喧騒とは真逆に、一成は黙った。話をしていて面白いことではない——だが恥ずかしい為躊躇われたが、絶対に秘密にするようなことでもなかった。一成は心を決めた。

「俺は聖杯戦争に参加しているけど、そのことを親、家には言っていない。聖杯戦争の開始について聞けば、俺が参加していることがバレる」  
「……え?なんでそんなことになっているの?」

キリエはきよとんとした顔で尋ねる。「魔術師なら根源にたどり着けるかもしれないチャンスだし、願いが何でも叶うのよ?普通は一族

を上げて参加者を支援するものよ。仮に支援がなかったとしても邪魔などしないわ」

一成は苦い顔で答える。「親に言ったらやめろって言われると思ったからだ」

「何故親はやめろと言うの？」

「親がやめろっていうのは、」

「やめろっていうのは？」

他の客の話声が遠く聞こえる。一成は深呼吸して、非常に嫌そうに声を絞り出した。

『『そんな危ないことはするな』って絶対言うから』  
「……………」

キリエの視線がものすごく痛い。きつと異星人を見るかのような目で見られると思っていたが、その予感の外れていなかったようだ。「ひとつ、失礼かもしれないけど聞かせてもらおうわ。……あなたの両親って、本当に魔術師？」

一応魔術師ではある。一成の父、土御門正明は魔術師である。そして母は魔術師ではないが、母体としては優秀な賀茂家の血筋から娶った泉希という女である。二人とも魔術に近い人間だ。それでも両親は一成に魔術を学んで欲しがらない。

「魔術師だ。だけど両親は俺に魔術をさせたくないんだ。俺はいまここで一人暮らししてるけど、それも両親の意向だ。魔術の勉強を一人でもしようと思っただけど、うちからたくさん道具を持ち出すことを禁じられてあんまりできてない」

キリエはとけかけたアイスをすくってから、神妙な口調で答えた。「……信じがたいけど、あなたを魔術師にしたくないよね」

魔術師の家系は、一子相伝で魔術刻印を相続していく「魔術刻印のリレー」だ。魔術刻印は、その家系の始祖から現代に至るまでのすべての研究結果が刻まれた「受け継がれる遺産」である。そこには歴代

当主の「魔術を極められなかった」無念の思いも含まれている為、古い歴史を持つ魔術刻印は、高い価値を持つと同時に歴代当主の無念を宿した「呪い」の結晶ともいえる。

それを体に刻みつける魔術師は、その呪いを背負って魔術の研鑽に励むのである。それを踏まえて「魔術師なんてやめろ」などと言うのは、まっとうな魔術師から見れば狂気の沙汰に等しい。

そして根源に至るチャンス、それでなくとも魔術師がその研究結果を競い合う争いである聖杯戦争に「危ないからやめろ」などという理由で参加を辞めさせることも、同じように狂気の沙汰である。

「でも、それまで魔術は勉強していたのでしょう?」

「ああ、両親はずっとやめてほしいって感じだったけど、御爺様は違ってたからな。当主は御爺様だから、その意向には親も逆らいきれなかったんだと思う。でも、御爺様も俺が中学半ばになるくらいには、ダメだって思ってたあきらめたみてーだけど」

土御門の魔導の家系は枯れかけている。成長の限界を迎えた魔術回路は一成の代で終わる。

土御門の魔導が終焉を迎えつつあることは、一成が生まれるずっと前から知られていた。

「御爺様は俺が参加してるっていつでもどうも思わない……お前如き未熟者が勝ち抜けるわけもないわって言うくらいだろうけど、両親には心配かけたくない。止めろっていうだろうし」

親がやめろと言っても、長く続いた由緒正しい土御門の魔導を繋げられるなら一成はやるべきだと思った。令呪が宿った時は、運命だと思っただけ。

しかし、親は決して喜ばないだろう——そのこともわかった。

「あなたの親の考えることは全くわからないわ。わからないけど、貴方が嘘をついているようにも見えないし……いいわ、質問には答えてあげる」

キリエはむしろ怒気すらにじませていたが、一息ついてから口を開いた。



「聖杯戦争を復活させよう、という計画はアインツベルンのものよ。計画が持ち上がったのは三十年と少し前かしらね。かつての御三家、マキリは今やない。遠坂は当主が冬木の聖杯を解体してしまったし、話に乗ってくるはずもない。その代わりに立候補してきたのが土御門、あなたの家」

キリエは形のいい人差し指で一成を指した。

「願いはあったんでしょね。枯れかけているのは私も知っていたし、それを食い止めて魔術の研鑽を続けるとか、願いはそんなモノだったのかもしれないわ」

これより詳しいことは、本格的にあなたの家に聞かなくてはわからないわとキリエは告げる。

「元は冬木の聖杯だから、ノウハウはあったのよ。紆余曲折を経て、冬木の聖杯は解体された。だけどその時、サンプルに聖杯の欠片を回収しておいたの」

一成も、春日の聖杯が冬木という地の聖杯の模倣であることは聞いていた。だが、どのように模倣したかは聞いていなかった。

「他の土地を選ぶことになったけど、そこで春日の地はどうだろうかということになったの。四神相応ので清浄の地で、霊脈には申し分なし。——でも四神相応の仕組みは西洋の魔術ではなくて陰陽道、いや陰陽五行説のモノだからアインツベルンだけでは聖杯を適応させられなかったのだけれど、すでに土御門の協力は得ていたから大聖杯とその魔法陣を敷くことができたわ。中枢にはある意味私の妹とも言える——ユステイーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンの回路を模倣したホムンクルスと、土御門家最高の回路を持つ女を据えて、回収した冬木の聖杯の欠片を元に聖杯を再構築した」

行きかう人の喧騒も遠く聞こえる。おそらく周りの人間は一成とキリエがゲームかなにかの話をしているとしか考えないだろう。

「冬木の聖杯に陰陽道を掛け合わせたモノが、春日の聖杯の正体。もうこの聖杯は聖杯ホーリィグレイルと言うよりも、日本風に聖杯ヒヅリノサカズキと呼ぶべきね——西洋魔術と陰陽道のハイブリッドだから、本当は西洋のサーヴァント

も召喚できるのよ。だけど、令呪がね」

「……おい」

「冬木の時、サーヴァントを縛る令呪の担当はマキリだったから、今回のアインツベルンだけではちよつとノウハウが足りなかったわ。陰陽道には「式神」を操る魔術が存在するでしょう？だから土御門が令呪を新たに作ったのだけど、魔術基盤の違いで西洋の英霊はうまく縛れない。だから日本の英霊しか呼べないと触れ回ったのよ。あとは冬木と同じね」

西洋のサーヴァントを呼んで、制御できずに大暴れさせてしまえば神秘も被害もあったものではないからね、とキリエは頼杖をついてアイスを口に運ぶ。

小刻みに震えている一成を知って、スプーンを置き手で制す。

「ただ、思った以上に聖杯への魔力が溜まるのに時間がかかったのね。陰陽道的にはかなりの霊地だから五年で開始できる見込みだったのに、魔力の充填に三十年を要してしまったわ。そのせいで土御門は計画が失敗したかと思ってしまった。アインツベルンはずっと春日の聖杯を監視していたから、三十年を経ての開始に一番早く気づいたのだけ」

「おいアインツベルン」

「ちなみにここの管理者の確氷だけど、土地は提供したけどそれだけよ。大聖杯は大西山に設置する予定だったのだけど、彼らが拒否して別の場所になったわ。でも根源に至る道が開けると言うことで、参加資格はよこせと言ってきたの。全くセコイったらありやしないわね……五年で開催されるところが三十年もかかったから、確氷もまさか今になって始まるなんて考えてなかったみたい。冬木の聖杯の模倣なんて初の試みだから、失敗してもおかしくなかったしね」

キリエは約束を守り、きちんと知っていることについて話している。一成はのど元にまで出かかっている言葉を抑え、話が終わるのを待っている。

「何故、魔力の充填にそんなにも時間がかかったのか——といえば、それは冬木と違いこの聖杯は二つの魔術回路を基盤としているから。」

その継ぎ目から魔力が漏れていたから、その分聖杯に充填されるのに時間がかかってしまったようなのだ。戦争前に漏れた魔力はきつと自然に霧散してしまっていると思うけれど、今も漏れている分はおそらく始まりの御三家のマスターに供給されているわ」

漏れたものだけなので、決して莫大な量ではない。それでも外様のマスターより御三家のマスターの方が有利——聖杯との繋がりが生まれている為、御三家は通常春日でしか行えないはずの召喚を離れた土地で行うことが可能になっている。かつてその離れ業が可能だったのは、アインツベルンだけでも拘らず——キリエは憤慨やるかたない様子であるが、綺麗にまとめて話を終えた。

そして一成を制す手を下げる。「以上よ。質問があれば答えてあげる」

一成は信じがたいと言わんばかりの表情でキリエを凝視する。キリエの話すことのほとんどが初耳に事柄ばかりだが、一成を震わせることはひとつ。

「……人を、聖杯に据えたってのはどういうことだ」

「聖杯には魔力を貯める核があるのよ。陰陽道をいれたことで冬木の聖杯とはシステムが変わってしまったから、アインツベルンだけではなくて土御門の者の回路も欲しかったんでしょね」

キリエは何も聞いてないのねという顔で、当然の如く言う。溶けかけたアイスを手で舐めている。けれど、それは一成の聞きかたかったことではない。

聖杯に人を据える——それは人柱というのではないのか——。そして、三十年前。一成の両親はまた成人しておらず、祖父も今と違い心身ともに健康だった。だが、一成は祖母の事は聞いたことがない。

一成が生まれる前に病で死んだと聞かされているだけだ。一成は震える声で問う。

「そういうことに、何も思わないのか？」

「どうして？ 聖杯に身を捧げることで、魔導を大成できるかもしれない。歴代の当主も報われるってものよ」

「おかしいのはお前の方だろ!!」

気づくと一成は拳をにぎり、テーブルを叩いていた。そしてその大声に、周囲の客の視線が集まる。けれど、お互いにそんなものは気にしていない。実の話、一成は家以外の魔術師とこれまでまともに話したことがない。しかし、バーサーカーのマスターが、目の前の少女が、あまつさえ己の祖父が、魔術師がこんなにも人の命を一顧だにせず贄にするような人間だとは思っていなかった。

一成の怒りを目の当たりにしても、キリエは首を傾げるばかりだ。

「おかしいのは貴方の方よ。カズナリ・ツチミカド。貴方はそれでも魔術師なの？」

「人を生贄みたいにして、そこまでして叶えるものがあんのか!」  
「あるわ」

キリエははつきりと言った。コインを零さずすべて食べてから、ひらりと椅子から飛び降りた。振り返って冷ややかな視線で言い渡す。「カズナリ・ツチミカド。そんな些細なことにこだわっているのは、魔導を成すことなど到底不可能よ」

そう告げてから、今度は打って変わって微笑む。「アイスおいしかったわ。今度は別の味も食べたいわね。でも、無理かもね」

それまでにあなたが生きていくかわからないもの——その外見年齢からは予想できないほど艶やかに、そして冷酷にキリエは言い残して、雑踏の中に姿を消した。

魔術師とは、根源へ至るための研鑽を重ねる家系の人間。代を重ねることで研究結果を積み重ね、子孫へと後を託す。土御門は陰陽道で歴史を重ねた、誇りある魔術の家系。それを自分の代で絶やしてはいけない、積み上げた研究結果を台無しにしてはいけないと——祖父が自分を見限っても、両親が魔術など学ばなくていいと言っても、失うまいと思っただけこの戦いに居る。

しかし、「魔導」なるものは、一成の予想を大きく超えて、本当に「魔導」の事しか考えていない。

「聞くしかない」

聖杯戦争に参加していることがバレるなどという些事にこだわっている場合ではない。一度実家に戻り事の次第を聞いたたださなければならぬ。実家は新幹線に乗れば春日から四時間、駅から車で一時間。早朝出て、話すだけ話して帰ってきてても当日の深夜になる。

しかし、それをするのは後の話だ。今日はまだ、やるべきことがある。

『アーチャー！アーチャー!!』

念話で数回話しかけると、アーチャーはようやく応答した。

『お前なにしてんだよ!』

『おおすまぬ。アインツベルンのサーヴァントとちよつと戦闘に』

『はあ!?!』

『入りそうになったが、そうはいかなかったぞ』

一成がキリエと話している間は、キリエのサーヴァントが良からぬ行動をしないようにアーチャーが見張っている。キリエに今の所戦意はなさそうだが、サーヴァントはそうでもないのか。

しかし一成は苛立ちながらアーチャーに命じた。

『あいつは帰った!戻ってこい!碓氷ん家に行く以外に用もできた!』

現在は午後二時。昼ごはん代わりにアイスを食べたことで腹を誤魔化して、一成は従者と共に碓氷の影使いの家へと急ぐ。

11月30日③ 其は何を求めるか

大学の授業を終えると、電車に乗って春日の家に戻った。明とセイバーは教科書などを置くだけおいて、直ぐに家を出た。目指すのはランサーのマスターであるハルカ・エーデルフェルトが拠点になっている洋館である。話す内容はもちろんバーサーカー相手の共闘の持ちかけである。

できればそのような相談は教会でやりたいものだが、すでに聖杯戦争が本格的に開始されてしまっているため望めない。教会は建前中立地帯であるため、令呪を失って参加資格がなくなった時に保護を求められない限り寄り付くのはよくない。

神父もバーサーカー討伐への協力を依頼しているだろうが、管理者としてマスターとして一度様子を伺うべきだ。

かといって、進んでハルカの拠点に行きたいわけでもない。拠点とするにあたって魔術的処置を施しているに違いなく、そのような場所に飛び込むのは危険である。対魔力Aのセイバーを盾にして進めば行けないこともないが、あまりにも物々しい魔術工房を作り上げていたら対話とは別の方法を考えなければならない。

碓氷邸から徒歩十分。住宅街の中にそのこじんまりとした洋館はある。前に見たときは蔦が伸びて雑草が生い茂っていたが、現在蔦は取り除かれ草も刈り取られている。やや古いのは当然だが、これではもう幽霊屋敷とは呼ばれないだろう。明は背後にいるセイバーの姿を確認して、呼び鈴を鳴らした。この屋敷には碓氷邸のような広い庭はなく、門からすぐに木製の古い玄関が見える。

最初にランサーが姿を現し、それからハルカが姿を現した。ランサーは初めて見たときとは異なり、Tシャツにジーンズというラフな現代スタイルだ。しかしハルカは変わらぬ黒く長いカソツクのような服を着て、柔和な笑みを湛えている。明に戦意のないことを見て取って、優雅な動作で中に促した。

「どうぞ、あまり綺麗ではありませんが」

セイバーがいざという時は盾となるべく前を歩いた。もちろん明

も妙な仕掛けがないか注意を払う。石の階段を数段上がり中に入る。靴のまま上がり、リビングまで通される。様子を見るに、敵襲を知らせたり襲撃があった場合に迎撃したりするための魔術がかけられているくらいであった。工房と言うほどの物ではない。

(この拠点が悪されてもいいように考えてるのかな……立派な魔術工房を作るには労力がいるし)

ハルカに促され、明はリビングの二人掛けソファに腰を掛けた。前にはテーブルがあり、向かいにも同じソファが設えてある。ハルカは手早くティーカップに紅茶をいれ、明の前に置いた。

「インスタントですが、どうぞ」

セイバーはソファには座らず、その後ろに立ちハルカとランサーに目を光らせている。同様にランサーも向かいのソファの後ろの立ち、こちらに注意を払っている。

セイバーとランサーの仲は悪くないようには思うが、どうしても不穏な空気が漂う。

ハルカは微笑を絶やさずに明に用件を尋ねた。

「ミス・ウスイ、今日は何の御用で？」

「教会からも連絡があったと思いますが、一時ランサーは偵察を止めて、共にバーサーカーを倒すために戦いませんか」

御雄からの定期連絡で、ハルカもバーサーカーの人食いについては聞いているはずである。余計な説明はいらぬ。普通に考えれば、諾と言う。

ハルカは紅茶を一口飲んでから、すぐに返した。

「申し訳ありませんが、お断りいたします」

「む、ハルカよ。僕も教会からの報告を聞いているが、バーサーカーの所業は看過してよいものではない。ここはセイバーと協力すべきではないか」

ランサーの方は明たちに好意的な意見だったが、それでもそのマスターは首を横に振った。

「貴方はこの管理者で、また教会はその職務上神秘の漏洩を防がな

ければならない以上、優先してバーサーカーを倒そうとしているのは知っています。……しかし、その事情は私には関係ありません」

明は内心何故、と思いつながらどこかそうだと感じていた。元々ハルカと教会の関係は、「ハルカが聖杯戦争でも勝ち残った時、聖杯を根源に至る為だけに使う」ということが肝心要であり、当初の約束に「共に神秘を脅かす者を排除する」というものはない。

しかしたとえ管理者の職務とは無関係とはいえ、神秘の漏えいは魔術師にとって一大事のはずである。これを放置したことが時計塔に伝われば、ハルカの評価が下がるところか危険視されかねない。

にもかかわらず、彼は断った。意外なはずなのに、何故か明は驚かなかった。

しかし、職務として彼女は食い下がった。

「あまりにも事態がひどくなれば、聖杯戦争の続行さえも危ぶまれます。ここは魔導を成しとげようとする者として、戦いませんか」

「魔術協会から命じられれば致し方ありませんが、それまでは動くつもりはありません。——もし聖堂教会共々この意向が不満とあらば、この関係を切っていただいても構いません。ここを出て行けと言うならば、それも受け入れましょう」

ここは教会からあてがわれた拠点。もしこの協力関係がいつ切れても構わないように、ハルカはこの家には最低限の魔術しかかけていないのだ。明はそう思った。

ハルカは魔術協会から派遣されてきたそうだが、彼は魔術協会の意向よりも自分の意向で動いているように思える。

「この件についての対応は、今日ミスタ・ジンナイに伝えました。もちろん偵察は行いますし、その情報も共有します。教会からは既に了解を得、このまま協力関係を続けることになっていますが、もしミス・ウスイが不満だと仰せならそうしましょう」

「……神父がそう言ったのですか」

妙にあっさり引き下がると神父に疑念を抱くが、教会も彼に対して強い拘束力を持たない。基本、教会と協会は相互不可侵であり、たま



たま利害が合致した部分でのみ共に戦うだけだ。

結局、ハルカもこの共闘関係にそんなに積極的なわけではなかったのだ。

明は小さく息をつく。

「……そうですか。教会がそう言っているならば私に異存はありません」

「おいおいセイバーのマスター！もう少し粘ってみたらどうだ？このマスター案外ねだれば言うことを聞いてくれるやもしれぬ」

「貴方はどちらの味方なのですか、ランサー」

明をせつつくランサーを、ハルカは呆れた眼差しで見ている。ランサーの協力を得られないことは痛いですが、明はこのハルカという魔術師が好きにはなれない。

完全に私情だが、共に戦いたいとは思えない。特に理由があるわけではないが、嫌な予感がするのだ。

「無理に協力を仰いでも仕方ないですし。用件は済みましたので、帰ります」

「そうですか。それは名残惜しい」

「これからも、名に恥じぬ戦いを」

につこりと笑って返すハルカ。普通の笑顔のはずなのに、なぜか悪寒を感じて明は足早に玄関に向かった。それではまた、という和やかな声を後にしてハルカの拠点を後にする。

その門を出たところで、ようやく明は人心地つく。挙動のおかしいマスターに気づいていたセイバーは、心配そうに声をかけてきた。

「マスター、どこか体の具合でも悪いのか」

「いや、悪くないよ。ランサーのマスターいるじゃない。あれ私苦手なんだよ」

「……特に不審な点はなかったが……」

セイバーの判断はもつともで、ハルカは敵意を持っていたわけではなかった。苦手な理由は明にも説明がつかない。しかしセイバーも何やら考え込んでいて、歯切れの悪い口調で続けた。

「俺もあのような人間は初めて見た」

「あのような、つて？」

「外と中身がまるであつていないような気がする」

要領を得ず、明は問いただそうと思つたが、セイバー自身も表現しあぐねているようである。今の時点で聞いてもあまり得るところはないとみて、明は話をやめた。

腕時計を見ると、既に午後二時であつた。今夜もバーサーカーは人を食べるだろう。

なんとかしなくてはならないのだが、あの不死身の謎を解かなければ活路が見えてこない。

家で調べることに決めて、二人は自分たちの屋敷へ急いだ。

\*

二階の窓から、急ぎ足に帰るセイバーとそのマスターを見下ろしながらハルカは汗をぬぐつた。危うく地が出てしまうところであつたことの冷や汗だ。

予想はしていたが、背後にサーヴァントの気配を感じた。あまりいい予感はしない。

「何か用ですか、ランサー」

「やはりバーサーカーを野放しにすべきではないと思うぞ。魔術師の流儀なんぞはわからんが、戦う気のない者を巻き込むのは如何なものか」

このサーヴァントは本当に予測に違わないことを言う、とハルカは心の中で思った。戦国武士の気風を強く持つランサーは戦う意欲は高いが、関係のない者を巻き込まんとする性質だ。

民——非戦闘民を殺されることを良しとしない。

「ランサー。私たちの目標は聖杯を手に入れることです。セイバーがバーサーカーを倒すのならばそれでいいではないですか。今は大人しく偵察の役目を果たしてください」

「ハルカ」

ランサーは異論ありげに名を呼んだ。しかしハルカはバーサーカー討伐には興味がない。

「もしセイバーとバーサーカーの交戦を見ても、観察だけしてください。決して手出ししてはいけません」

ランサーはまだ文句を言いたげだったが、ハルカは聞く気はない。ランサーの気配が遠のく。ハルカは再び窓から外を見下ろしたが、もちろん明たちの姿は既がない。

—— 本当に、聖杯は根源に至るのか。

ハルカは勿論聖杯が目的でこの地にやってきているが、その聖杯については半信半疑である。冬木の戦争でも一度として渦への道は開かれないままであったことが疑惑の大本として大きい。

しかし、仮に根源に到達しなかったとしても、彼は神域の天才が作り上げた聖杯戦争という儀式そのものに興味を持っている。

その儀式を己が研究の肥料とすべくやってきた、それが一つ目の目的だ。

そう考えるハルカにとって、儀式自体に興味はあれど、根源に至るためにサーヴァントと戦いに身を窶すことに意欲がわかないし、秘術の限りを尽くして競い合うことにも今一つ意欲がわかない。

だが、儀式を見届けるためにはランサーの存在はあったほうが良い。

故に、余計に戦って魔力を無駄遣いすることは控えたい。

と、既に馴染みになった使い魔の気配が現れた。背後には黒いコウモリが飛んでいる。

『何か考え事か？』

「……ミスタ・ジンナイ、今日の分の報告は済ませたと思いますが」

低い声が蝙蝠の口から発せられている。ハルカはすぐさま外面を取り繕って振り返った。何を考えているかわからぬ監督役の声だ。監督役の娘の方は本当に何事もなく聖杯戦争を終わらせることを望

んでいると思うのだが、あの監督役は何を思っているのかわからない。

『重要な報告が二つある。一つ、バーサーカーのマスターは、真凍咲という娘だ』

「真凍……」

『貴殿は知らないかもしれないな。春日の魔術師で、体に飼った細菌を応用して魔術を行使する家系よ。その咲という娘は今、駅近くの春日総合病院に入院している』

病身でバーサーカーを使役するのは相当な難行だ。人を食ってバーサーカーの魔力を補充しようとする行為にも納得がいく。

『もう一つはアサシンが消滅したことだ』

「……そうですか」

セイバーが白昼堂々アサシンのマスターを殺したことは、前回の御雄の連絡で知っている。その時にはセイバーは横紙破り、かつ好戦的だと思ったものだ。

『話は以上だ。朝にバーサーカー戦には参加しないことを了承したが、やはり加わっていたきたいものだ』

不満でも、文句でも、注文でも、命令でもなく、むしろ可笑しむような雰囲気を漂わせている声が使い魔から漏れる。何故おかしむのか、その理解は今のハルカにはできなかつた。

『話は変わるが、ハルカ、拠点の住み心地はどうか？あまり工房化はしていないようだが』

「良く知っていますね」

『監督役ゆえに使い魔は多く放っている』

どこがおかしいのか、やはりその声は多分に笑いを含んでいる。ハルカは首を傾げることしかできない。

「力技で壊されても事ですしね。堅牢な工房を作成しても、敵マスターがここにそのまま突っ込んできてくれるとは思えないので」

魔術師の作成する工房はそれそのものが要塞である。しかしそれほどまでに作りこんでしまうと、敵は危険視して容易にはやってこない。それでも身を守るという意味では作る価値はあるのだが、ハルカ

はしなかった。ハルカの本格的な工房を作成するにはより時間が必要で、魔力も多く使う——ならば、逃げるだけの時間を確保できるだけの仕組みがあればよいとしたらしい。

『なるほど。それでは健闘を祈る』

使い魔が消える。ハルカは思い出したように己のトランクを引きずり出した。

その中にはハルカの貴重な魔力を注ぎ込んだ宝石たちが並べられている。一つ一つが粒ぞろいの宝石である。ハルカは口を歪ませて、笑う。この宝石たちは今が使い時だと。

どうせこの宝石は、ハルカのものであってハルカのものではないのだから。いぎとなれば、これを使ってもよい。

ハルカは宝石たちの下に保管してある、鉄のひんやりとした触感を  
楽しんだ。

「バーサーカーのマスターは、春日総合病院にいる……」

11月30日④ 討伐同盟

実家に聖杯戦争の経緯を聞いたただしたいのはやまやまだが、バーサーカーの暴挙を放っておくことはできない。こちらは日を伸ばせば伸ばすほど犠牲者が増えてしまう。

一成は気持ちを抑え、しっかりと優先順位を割り振った。

「噴水とかあるけど大丈夫か？」

「いや、別に噴水くらいあってもよからうて」

碓氷邸を目の前にして発した一成の第一声が、これであった。一成はこの管理者が碓氷の魔術師であることは知っていたが、その屋敷に訪れるのは初めてである。一成は高校に通うため、しかも両親から魔術に遠ざけられるために春日に一人暮らししているだけである。

そのため魔術工房らしきものをあのワンルームに構築していない。

つまり、碓氷に工房作成の許可を取る必要がなかったためこれが初めての訪問になる。

「俺の実家とはえらい違いだな」

「そなたの家は陰陽道であるし、そもそも魔術の系統が違うからのう」  
草をモチーフにして芸術的意匠が施された鉄門から、石畳の敷かれた庭が見える。中央に噴水が配され、その奥に玄関が見える。見た目は古いが入入れされた洋館だが、何代にもわたり魔術師が生きてきた屋敷は堅牢な工房と化して、サーヴァント一騎程度の襲撃なら凌げそうなほどである。

呼び鈴を鳴らそうとしたが、それより早く実体化したサーヴァントが門越しに姿を現した。言うまでもなくセイバーである。

「アーチャーとそのマスター。何の用だ」

簡素な衣袴に身を包み、黒髪を頭の上で結ったサーヴァント。腰には例の剣が佩かれている。昨日はあのような乱戦状態だったため、まじまじと姿を見るのはこれが初めてだ。身長はアーチャーよりも十センチ以上は低く、ランサーのような隆々とした体格でもない。

玲瓏たる中性的な容貌を持ち、美少女にも美少年にも見える。

「……バーサーカーについてあんたたちに相談したいことがある。ちよつと中に入れてもらつてもいいか」

セイバーは一成とアーチャーを一瞥してから頷いた。「マスターから許可が下りた。入れ」

鉄門が左右に開かれ、セイバーはくるりと背を向けて玄関に歩いていく。ついてこいという意味らしく、一成とアーチャーはそれに従った。小さな声で一成はアーチャーに尋ねる。

「……アーチャーあのさ、日本武尊つて女なのか？」

「わからぬな。私のところには男と伝わっていたが、実際は違つてもそう驚くほどではない。けれど昨日、一人称は「俺」だったが」

「ひよつとしたら俺つ子かもしれないな」

「男装の麗人と言うヤツか。確かにそれはなかなかテンションの上がる事実よ」

阿呆なことで盛り上がるアーチャー主従の内緒話は、セイバーにダダ漏れである。最早この手の誤解に慣れているセイバーはどうも思わないが、後ろを向いた。

「アーチャーのマスター」

「はいー」

噂の当人に話しかけられて、一成は裏返つた声を出した。

「期待を裏切つて悪いが、俺は男だ」

「あ、そうですか。すみません」

「そなた私にはタメ口なくせに何故今敬語なのだ」

どうせ男でも女でも美人に慣れていないだけであろうというアーチャーの視線を感じながら、気を引き締めなおし一成は確氷の屋敷に足を踏み入れた。

敵対するつもりはないとはいえ、ここは敵地にも等しい場所なのだ。

外見よりも中の方が新しい感じを受ける屋敷だった。屋敷ゆえに応接室のようなものがあるようで、一階のその部屋に通された。壁に

は絵画が飾られ、向かい合った二人掛けのソファに四角いテーブルが挟まれている。座ることを促され、一成はそれに従った。

一成に向かい合うのは、言うまでも無くセイバーのマスターだ。彼よりも若干年上と思える女性だった。大学生くらいだろうか。

こちらにも改めてみると、女性にしては高めの身長にすらりとした手足をしたスレンダーな体型をしている。セイバーを前にしてはさすがに霞むが、少し影のある控えめな表情があう美人だった。

「二応初めましてと言っておきますね、アーチャーとそのマスター。春日の地の管理者、碓氷明と申します」

アーチャーが念話で「マスターサーヴァントともに美しいとはまこと羨ましい」とまこと能天気なことをほざいていたが、一成は密かに同意した。だが、目の前の女は一成よりもはるかに魔術の研鑽をしているだろう魔術師なのだ。

「俺は土御門一成。この魔術師じゃない。昨日は世話になった」

「それはこちらからも礼をいいます。早速本題に入りたいのですが、今日は何の御用でしょう」

出遭ったのは昨日の今日のことだ。きっと碓氷のマスターも要件に感づいているはずである。一成はつばを飲み込んでから意を決して口を開く。

「バーサーカーは連日人食いを続けている。そのことは知っているな？」

「ええ」

「あれを放っておけば、もっとたくさんの方が死ぬ。俺は放っておけないと思う」

目の前の、僅かに年上なだけの管理者はその眼差しを一成に向けた。

「あのような暴挙、この地の管理者として見過ごすことはできません」

よく通る彼女の声は、一成の耳に快かった。セイバーのマスターにはあのバーサーカーを止める意志がある。キリエや己が家にも不審を抱きかけている一成には、それだけの事実が素直に嬉しかった。



「……昨日戦ったバーサーカー、何度殺しても死ななかつた。あんたのセイバーが強いのはよくわかってるが、それでも何度も生き返られたらどうしようもないだろう」

明は静かに頷いた。

「俺たちはあのバーサーカーの真名を割り出した。アレを倒す方法はわかったが、アーチャーだけでは不足がある。そして多分、セイバーだけでも微妙だ」

「……バーサーカーを倒すために、手を組もうと?」

彼女は驚きを示さなかつた。門の前で用件は告げたが、告げずとも一成たちが来たことで、用件はそれだと察していたからだろう。目的は同じで、こちらは真名という情報を持っている。

十分メリツトはあると思ってくれるはずだ。しかし予想外に、口を出してきたのはセイバーだった。

「サーヴアントを消す方法は真つ向からサーヴアントを消すだけではない。そのマスターを殺しても消える」

「セイバー」

明は咎めるような口調でセイバーを制した。だが、当のセイバーは意に介さない。

「こちらはバーサーカーのマスターが誰かを割り出した。それを踏まえマスターを始末する策もある」

その方法があつたと、一成はいまさらながらに思い至る。確かにそれならばうまくいけば最小の労力でバーサーカーを仕留められる。ただ、必ずバーサーカーのマスターは死ぬ。

一成が黙ってしまったところで、助け舟を出したのはアーチャーだった。

「なるほどのう。流石は管理者と言うべきかの、御見事よ。……だが、そのマスター暗殺はセイバーであるそなたに可能であろうかの?」

「一人殺したこともある。やってやれないことはない」

セイバーはすげなく答える。一成はアーチャーがセイバーの心証

を悪くする行為をしたのを見た覚えはないが、なぜかセイバーはアーチャーを疎んでいる気がする。

しかし、それよりセイバーはすでに一人マスターを殺したと言うこととに一成は衝撃を受けた。

一体誰を殺したと言うのだろうか、そしてマスターである彼女はそれを良しとするのか。

「そなたが暗殺の逸話を持っていることは知っておる。しかし、セイバーというクラス上、気配遮断や偽装のスキルを持っていても精々ランクはC程度である？一人殺した、と言ったが、それは状況が許しただけではないか？」

「何が言いたい」

セイバーはいらだった口調で聞き返した。其れに反してアーチャーはあくまで真実を告げるように、真摯な口調である。

「仮にセイバーであつても高い気配遮断に類するモノを持っていたとしたら、それを使って暗殺ができるだろう。ならば何故そなたはこの同盟の話をしつかり聞いておる？何故バーサーカーのマスターの所在を知りながら、バーサーカーが危ういと知りながら殺しに行かぬ？名高き太陽の皇子、日本武尊であらせられるならば、そうなさると思うが」

アーチャーの滑らかな弁舌は止まらない。

彼はちらりとセイバーとそのマスターを見てから、話を続けた。

「セイバーというクラスを鑑みれば、最も向くのは真つ向からの勝負。私たちはバーサーカーの真名とこの弓技を供し、そなたはマスターの情報とその剣技を与える。バーサーカーを倒すには、これが一番の方策とは思わぬか？」

「私はそれで構わない。単純に二対二の方が強いのに疑いはないし、バーサーカーを倒すまでの同盟という形なら」

セイバーが再び口を開くより先に、マスターの明が素早く答えた。セイバーは強いが、一人では人を食い魔力を蓄えた「最強」のサーヴァントバーサーカーを倒すには不安がある。

セイバーは何か言いたげな顔をしていたが、それ以上口は出さな

かった。

その答えに、一成は勢いよく顔を上げた。

「なら、アーチャーが言ったけど俺たちは真名を情報提供して、あんたたちはマスターの情報を提供する。そして、戦うときの役割分担を決める」

「構いません」

ここにバーサーカー打倒のための同盟は成った。とりあえず話に区切りがついたところで、明は客人に何も出していなかったことに気づいたらしく、しばらくアーチャーとそのマスターにゆっくりして欲しさを伝え、セイバーと共に席を外した。

ぱたんと扉が閉められる音がして、二人の足音が遠ざかったことを見計らって一成は深く息を吐いた。

「っあー……緊張した」

元々交渉事、レベルを下げれば口喧嘩も得意なわけではない一成は妙な疲れを覚えた。顔色一つ変えないアーチャーをじろりと見上げる。

「お前、セイバーになんかしたのか？なーんか嫌な顔されてね？」

「特に何をした覚えもないのだが。美人に嫌われるとは悲しい」

重要なのはそれじゃねえ、というツツコミを飲み込んで、暇になった一成は部屋を見回した。

外見を裏切らず、内装もさながら異人館である。そして同じ魔道の家でありながら、自分の家とは随分異なる。碓氷邸はどことなく冷たく、空気が止まっているような感じがする。

土御門の家は流石に寝殿造ではないが、伝統的日本家屋でありここよりは開放感がある。

魔術系統の差か、などとぼんやり考えた。

「にしてもお前、なんでセイバーが気配遮断できないみたいなことわかったんだよ」

伝説を鑑みれば、セイバーはセイバーであつてもスキルや宝具でステータス隠ぺい・気配遮断の力を持つていても不自然さはない。

「ああそれかの。まあ他にも根拠はあつてな——昨夜、バーサーカーと戦っている時に既にセイバーの気配があつたのだが、彼らは直ぐに戦いに混ざつてこなかったのだな。観察をしていたのだろうが、観察するにしても不意をつくにしてもせつかくの気配遮断をしない理由がなからう」

「はー……お前、よく考えてんな」

あの時はセイバーにまで襲い掛かれてたら完全に消滅していたぞ、とアーチャーはぼやきながら一成の頭を叩いた。

\*

過去、冬木の聖杯戦争において神秘を漏えいしうる暴挙をなした陣営に対し、教会が他全陣営に対してその陣営の打倒を最優先に命じたことがあるという。打倒しえた陣営には褒賞として令呪を一面提供することを約したそうだ。

ならば此度の春日教会もそうすればよいのに、それを躊躇うわけがある。

第一に、春日の聖杯は冬木の模造であること。真偽はともかく、冬木の五度にわたる戦争でも根源にたどり着いた者は誰ひとりいなかった。その模造であれば何をか況や、ということだ。

それでも英霊の召喚を可能とするほどのモノであるがゆえ、贋作でありながら教会が監督をする。

だが、明らかに冬木のものよりも注目度も低く、教会と協会も綿密な打ち合わせの上で手を組んでいるわけではない。だから、神父たちもハルカに上から命ずることはできない。

第二に、むしろこちらが大きいのかもしれないが——春日の戦争は一回目であるがゆえに、前回まで消費されず残った予備令呪が存在しない。つまり褒賞がないのだ。

——ぶつちやけた話、教会の持つ権力は弱い。

あまり明に言えた義理ではないが、それにしても教会はあまりにもハルカに対してあつきりと引きすぎていると思う。そしてハルカも、セイバーと二人がかりでバーサーカー退治することは決して悪い話ではない筈なのに断った。

(わかんないな)

あまりハルカに近づきたくない明はそれでよいが、あのランサーを使えないのは惜しい。そう考えていたため、正直土御門一成の話は渡りに船だった。

しかし正確に読んでくるな、と明はアーチャーに内心舌を巻いていた。その通り、セイバーがアサシンのマスターを殺せたのは、たまたまアサシンがマスターの傍を離れていたこと、真昼間という虚をつけたことによる。

しかしバーサーカーのマスターはサーヴァントをすぐそばに置いているだろうし、明は間昼間に騒ぎを起こすことをセイバーに禁じたため暗殺は既に現実的な手段ではない。

明はアーチャーたちが訪れるまでに神父からの使い魔に報告を行い、バーサーカーのマスターのことを報告した。その際に神父から、バーサーカーのマスター真凍咲は春日総合病院に入院している情報を得ていた。同時に、過ぎた二十四日に彼女が自分の両親さえ殺しただろうことも知った。

マスター殺しもやむを得ないかと思っただけだが、上記を踏まえ今回は現実的ではないとセイバーと話していた。はずであった。

キッチンでティーポットを温めつつお湯を沸かせつつ、明は早速セイバーに物申す。あの場でもセイバーはまるでアーチャー陣営に喧嘩を売っているような態度だった。マスター暗殺は現実的ではないという結論に落ち着いたはず、しかも相手はバーサーカーの真名を看破しているという。

それだけでも同盟の価値はあると明は思ったのだが、セイバーは違うらしい。

「……あのさ、アーチャーと組みたくないの？ 同盟が嫌なの？」

元々共闘関係に賛成していなかったセイバーだが、ランサーとの協力関係は（足並みを乱しまくってはいたが）一応受け入れていた。だが今回は最初から嫌そうに見える。

「……別に……」

セイバーはお湯の番をしながら、拗ねたように言った。明は「お前は沢●エリカかよ」とつつこみたい衝動をこらえる。

「……特に理由はない。昨日は戦いに集中していたせいかあまり感じなかったが、俺はあのアーチャーが嫌いらしい」

沸騰したお湯を温めたティーポットに注ぎながら、明は茶葉の量を量りふたをして蒸らす。それから指定されたティーカップをトレイに置いていく。

「なんで？」

「わからない」

セイバーにしては珍しい回答に、明は首を傾げた。セイバーは一見唐突、かつ予想の斜め上の行動に出ることが多い。しかし、話を聞けばセイバーなりの筋を通して動いていることがわかる（明にとってはそれも大分飛んでいるが）。

基本、明確な理由なくしてセイバーは行動しない。ただ明も明でハルカには得体のしれない苦手意識を持っている。それと同じような感覚であれば、あまり文句を言うのも理不尽だ。

「しかし現実的に考えれば、この同盟はいいと思う。あのマスターはもとより、アーチャーもバーサーカーを倒したいというのは本当であろう」

「……？ どういうこと？」

土御門一成は本気だと言うことに明も疑いはないが、アーチャーに關してはあまり自信がない。それでもセイバーは断言する。

「あのアーチャー、昨日より今日の方が強くなっている。正確に言えば、昨日は平常より弱く今日が普通の状態なのだろう」

「……？ アーチャーが弱いってこと？」

確かにパラメータを見る限り、幸運値が異様に高い以外は目立った

ステータスではない。直接の戦闘ならセイバーが勝つだろう。しかし、当のセイバーはそうではないと首を振った。

「昨夜バーサーカーと戦っていた時のアレと、今とでは明らかにその発する力量が違う。何か特別なことがないとしたら、原因はバーサーカーくらいしかない」

マスターの方を相手していた明はそこまで気づかなかった。流石セイバーのサーヴアントというべきか、戦いにおいては注意を怠っていない。

「つまり、アーチャーはバーサーカーが苦手だから早く倒したいってこと？」

「だろう。それにアーチャーは遠距離攻撃のできるクラスだ。セイバーの不足を補うにはいいだろう。もう俺は邪魔をしない」

少し気まずそうにセイバーは謝った。とにかくセイバーには異論はないようである。バーサーカーを倒すだけの同盟という、期間も短く目的も明確な方が余計なリスクを抱え込まないためか、教会とハルカのうすら寒い同盟よりもセイバーは納得している。

「にしても教会の時は渋つてのと比べると、けっこうな差だね」

「同盟は短い方がいい。それに、相手として——いや、マスターとしてあちらの方が御しやすいそうだ」

明は苦笑した。確かに、彼女自身にもそう思うところはある。もともと人づきあいが苦手なほうで、年が近い方が正直やりやすい。

明とセイバーは準備のできた紅茶一式をのせたトレイを持ち、アーチャーとマスターを待たせている部屋に戻った。

明の入れた紅茶を飲みながら、両陣営はお互いに情報開示を行う。アーチャーがバーサーカーの真名を告げると、やはりセイバーと明は驚いてもいたが納得もしていた。

「それならバーサーカーがセイバーを追うのもわかるね。ヤマト王権から命じられ東征の伝説を持つセイバーと、東で朝廷に対し反乱を起こしたバーサーカー。時代は違うけど完全に立場が逆」

セイバーとバーサーカーは生きた時代が異なり、直接の面識はない。仮にバーサーカーがバーサーカー以外のクラスで召喚されれば、お互いに正体のわからない状態で邂逅していたはずだ。

だが、バーサーカーは理性を失ったが故に本能がむき出しになり、その身に宿った伝説のままにセイバーを敵と認識し襲い掛かってきたのだろう。

「バーサーカーは確実にセイバーを追ってくる。人気がないとこにおびき寄せて、セイバーはバーサーカーと戦闘に集中して、そこをアーチャーが射るって感じ？」

一成は明が納得した様子であるのを見て凶らずも嬉しくなった。確氷明という魔術師は人の命を気にかけるマスターだと、彼は思った。

セイバーが弱いわけではないが、昨日の宝具を見るに一对多を得意とし、的確にある部位を狙うことには向いていないことが予想された。それもあり役割分担は一成の想定通り、セイバーがバーサーカーを引き付けている間にアーチャーがバーサーカーの弱点を射て殺すということになった。

ついでにアーチャーのバーサーカー恐怖症なるものも、一定距離離れられればなくなるとアーチャーは明たちに聞こえないように小声で言った。

バーサーカーの正体が割れてみれば、アーチャーの恐怖症もそんなりと理解できるものだった。バーサーカーとアーチャーは生きた時代が重なっているわけではないが、バーサーカーの起こした乱の恐怖は、その後平安貴族の恐怖の象徴として長く記憶に残されたのである。

バーサーカーという恐怖は、アーチャーの魂に刻み込まれている。(つていうか、アーチャーってたぶん……)

アーチャーはその真名を一成に明かしていない。真名秘匿のため、という理屈だったが、一成があれこれ推測しているのを楽しんでる節があった。一成も最初は那須与一や今川義元かと思っていたが、さすがにここまでくれば見当もつく。



その人物に弓にまつわる伝説などあるのか半信半疑だったが、今日図書館に行つたついでに調べたら確かにあつた。というより、その人物の武器や魔術にまつわる話はそれだけで、アーチャーにしか適性クラスがなかったという感じだった。

抑々アーチャーは弓「兵」ではない。寧ろアーチャーが生前に武を誇つたことなどゼロに等しく、当時弓は彼らに必須技芸だつたとはいえ、本気ではないランサーと打ち合えたことも奇跡なレベルだ。

弓は陰陽道にも縁深く、たとえば鳴弦の儀——弓の弦を鳴らすことで、魔を遠ざける儀式——などに使う、呪術的道具でもある。ゆえに一成も弓を扱つたことがある為にわかるのだが、アーチャーはそこまでする弓がうまくない。うまくはないが、弓は当たる。

——アーチャーの弓に纏わる伝説は技の精度を誇る類ではない。生前のアーチャーには「伝説」を作り上げた意識さえなかつたかもしれない。

しかしおそらくその本質は「因果の逆転」。アーチャーの矢はそれに言葉を乗せ、放つことで望む運命を引き寄せる矢。

改めてアーチャーに真名を問いたとしてもよかつたが、一成はあまりその必要性を感じなかつた。強い英霊を呼び出したかつたが、サーヴァントは共に戦う者でもある。相性も大事だろうとおもつたから、博物館にてあえて一つの触媒を使おうとは思わなかつた。

そして今アーチャーは一成が未熟者と知りながら、それに付き合つて戦っている。

一成にとつては、それで充分であつた。

「聞いてる？」

「うお、悪い、何の話だ」

アーチャーのことを考えていた一成は、訝しむ明の声で現実を引き戻された。最初はそれなりに気を使って話していた明と一成だが、歳が近いこともあり面倒になつて口調はぎつくばらんになつている。

「役割分担はそれでいいけど、主な戦場を昨日みたいに住宅街のど真ん中にしたくない。昨日は幸い誰も巻き込まなかつたけど、今度もそうとは限らない。倉庫街とか、せめて学校の校庭とか多少広さのある

ところで戦いたい」

「そうだな……」

バーサーカーはセイバーを追い掛けるが、マスターが強く制すれば追いかけるのを止める。マスターが本格的にセイバーを倒す気になれば、バーサーカーを止めないだろうが今の所彼女の目的は人食いである。街中で出会ったとして、セイバーが人目につかぬ場所に誘導しようとしても、戦う気を見せず人食いに没頭されては戦場の移動はできない。

「人食いを邪魔しつづけければ俺を追いかけるように命じるかもしれない。あちらから戦いに向いた場所を設定するだろう」

「どういうことじゃ」

「戦う力を得るために、あの娘はバーサーカーに人間を食わせている。食事を妨害されればあちらとて迷惑。すぐに相手からこちらを殺しにかかってくる」

「なるほどの」

それにそのような小難しいことを考えずとも、と前置きし、セイバーはさらりと言った。

「相手は余命半年の娘だ。命を明確に区切られた者の反応は色々だが、あの娘は気がせいっている。邪魔者はさっさと殺しにかかる俺は思うがな」

「よめっ……!?!」

まずはバーサーカーの真名を共有、そしてサーヴァント戦の対策、その後にバーサーカーのマスター情報を共有、対策の順で話し合うことになっていった。

そのためマスターについてまだ情報を得ていなかった一成は耳を疑った。

「ああ、話が先になるけど、バーサーカーのマスターは真凍咲っていうの。今年で十三歳の女の子ね。真凍は春日の魔術師だから、管理者の私にはすぐに誰だかわかったけど。何の病気かは知らないけど、難病にかかって余命半年らしいね。春日総合病院に入院してる」

「なんでそんな子が参加してるんだ!?!」

一成は我を忘れて叫んだ。キリエといいその真凍咲というマスターといい、少女がこの戦争に身を投げる。人にはそれぞれ理由があることくらい一成とて知っているが、納得いかなかった。

「そこまでは知らない。真凍で令呪が宿ったのが彼女だったからじゃない？戦うときに聞けば答えてくれるかもしれないけど」

「えてしてそういう後のない連中は結果を急ぐ。なりふり構わない代わりに、隙は大きくなる。サーヴァントはバーサーカーであるがゆえに、全ての判断はあの娘次第だ」

セイバーはあくまで戦力的観点からしか真凍のマスターを見ていない。明もその真凍のマスターが参加することに関して違和感はないようだ。

だが、一成の狼狽ぶりを一目で察した明は太い釘を刺しにかかった。

「……昨夜からあなたは人がいいとは思ってたし、むしろ長所だとは思う。けど、余命半年だろうが少女だろうが、こうなつてはただの人殺しだよ」

そんなことは一成も承知している。しているつもりである。そして明は続ける。

「土御門も戦ってもらおうけど、あのマスター相手にはメインを私に据えてほしい。あの思い上がったバカ娘を締めないと気が収まらない」

この季節の午後四時ともなれば日も暮れはじめる。問題は今日どうするかだが、既にバーサーカーのマスターの居場所は割れている。

セイバーが病院へ向かって動向を監視すると、切羽詰まった彼女がどう動き出すかわかったものではない。

そこで、敵の探知にすぐれるアーチャーが相手に悟られない程度の距離から動向を観察することになった。そこで動きがあれば、一成が携帯電話で明に連絡を取り、セイバーも出動する。

「今までの犯行を見れば、全部夜中にやってる。だから……まあ、夜の九時ぐらいには見張ってて」

「わかった」

かなりギリギリ、むしろアウトのラインだが、「神秘」の意識を持つ魔術師だ。一成も犯行時刻についてはニュースで知っており、明の話に頷いた。

問題はいざ戦闘となった時、人目のない場所に移動できるかどうかである。

「それはちよつとこつちで考えてみる。セイバーを追っかけてくるのをうまく使えばいいんだけど」

そうして明と一成は携帯電話の番号とメールアドレスを交換し、一度解散の運びとなった。

11月30日⑤　そして誰もいなくなるか

まだ召喚から十日も経っていないのに、既に遠い昔のころのようだ。

「——汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!!」

詠唱を紡ぎ切った先に、黒い風が狭い病室に吹き荒れた。人知を超えた、人々の想念の結晶である英霊がそこにいると、咲はすぐに了解した。彼女の目の前に現れたのは漆黒の母衣マントを翻し、同じく闇色の甲冑に身を包んだ武将——その手には長く肉厚の刀が携えられている。刀身には写経のような文字が浮かんでいる。

咲はただただその存在に圧倒された。これがサーヴァント。頼るべきものを無くした少女が召喚した最後の従者。この英霊を以って、私は私の命を繋げる。彼女はそう心に決めた。

とはいえ、咲自身は聖杯戦争について詳しい知識をもっているわけではない。令呪の存在と、他のサーヴァントをすべて倒さないと願いが叶えられないことぐらいの知識しかない。

——教会に行けば説明くらいはしてもらえるのかな。

ベッドの上に寝転がって、咲は聖杯戦争でどう勝ち抜くかを延々と考えていた。使い魔を飛ばし敵状を探る、自らうってでてマスターを殺す。しかし、それら両方とも今の咲には不可能なことだった。

通常、魔術を行使する際に消費される魔力は、小源オドたる術者の生命力から生成される。余命半年の咲——生命力の極めて低下した状態の彼女では、小さな魔術行使一つが命に係わる。

全てをバーサーカーに任せるしかないのか——と彼女が思った時、急に胸が締め付けられるように苦しくなった。ナースコールで看護婦を呼ぼうとしたが、咲は違和感に気づく。彼女の病気は心臓が悪いのではなく、それに今までこのような症状も経験していない。

病状が悪化したとも考えられるが、それよりも明瞭な原因がある。

——サーヴァントである。

サーヴァントは現界するためには、マスターの魔力供給を必要とする。現在バーサーカーは霊体化しており、魔力をそれほど必要としない。だが、そのわずかな魔力消費でさえ、咲には大きな負担となる。これからサーヴァント同士の戦いに赴くならば、実体化させる必要がありさらに魔力消費は激しくなる上に、バーサーカーは「魂食い」とも言えるレベルに魔力を食うサーヴァントである。

(このままじゃ……戦うどころじゃない)

戦う以前に咲は自らのサーヴァントによって死ぬ。そして、彼女はすぐに問題の解決方法に考え至る。魔力が足りないのならば他から持って来ればいい。

抑々、彼女はそういうつもりでバーサーカーを呼んだのだから躊躇うことはない。

頼れる人間はどこにもいない。だから、自分だけの力でこの命をつなぎとめて見せると決めたのだ。

召喚した次の日の深夜に、彼女はこつそりと病室を抜け出した。バーサーカーの気配があることを確認しながら、人目に触れないように歩く。五分も歩くと眩暈がしてきてその度に小休止をしながら進むという、途方もなく長い道のりだった。それでも彼女は諦めずもたついた足取りで夜の街を歩く。

病院から徒歩十五分の位置に、真凍家はある。見た目は他の家々に紛れてはいるが、百五十坪の広い一軒家で、三人で済むには広すぎるくらいだ。近所ではモデルハウスのようにと評判だが、その地下には真凍家の魔術工房が広がっている。

玄関の傍に置かれている鉢植えの下に鍵があることは、家族だけが知っている。咲はその鍵を取り、音を殺して自分の家に入った。真凍の家にも結界が張られているが、それが反応するのは真凍の魔術師以外が侵入した時であるため、咲には反応しようもない。

両親の寝室は二階である。咲は裸足で音もなくその部屋に侵入すると、バーサーカーを実体化させた。漆黒の鎧武者は、刀と共に背後に姿を現す。



「私をいらないうから」

彼女はバーサーカーの肩に乗せられて、家の屋根から春日の街を見下ろした。深更、暗く沈んだ街も今の咲からは別物に映る。

「不思議。今ならどんな魔術でもできそうな気がする」

魔術師の魂を二つ食らい、バーサーカーを実体化させてても苦しくない。それどころか体調さえ良くなったように思う。この時咲は気づいていなかったが、バーサーカーが摂取した魂がパスを通して咲にも流れ込んでいた。通常のマスターからの魔力供給とは逆のルートで、サーヴァントからマスターに魔力が供給されている。

「ああ、もう怖いものなんてない」

魔力がある。戦い抜くためには魔力がもつともつと必要だ。もつと殺して力を蓄えて、他のサーヴァントを皆殺しにするのだ。咲はバーサーカーの兜に頬をよせた。

「……ねえ、私バーサーカーの真名を聞いてなかった。教えてくれる？……狂化してるからわかんないか」

咲はどんな英霊が呼ばれてもよかった。自分の力だけで呼び出したサーヴァントで勝てれば、どこの英霊だろうとよかった。彼女としては、ただ確認の為だったろう。

もしかして、共に罪を重ねたゆえの仲間意識が芽生えたからかもしれない。沈黙が落ちて、咲きが諦めて再び夜に眼を向けようとしたときだった。狂戦士は凝った声で、彼の真名を告げる。

咲はバーサーカーが答えたことに驚き、そして真名を聞いてにっこりとほほ笑んだ。

「そう、……なら、よろしくねバーサーカー。私を助けるのはあんただけなんだから」

\*



仮定の話である。もしバーサーカーがバーサーカー以外のクラスで召喚されていれば、マスターである少女を諫めただろう。千年の時を経て恐れられる怨霊の類となつてしまったバーサーカーであるが、生前の彼はむしろ兄貴肌で頼ってくるものは全て懐に入れてしまうような人間だった。

彼の起こしたとされる乱も、様々な要因はあれど、全ては領地争いを仲介しようとしたところから始まった。

彼は決して朝廷に対して叛意があつたわけではない。彼は朝廷から与えられた土地を開いて駒を飼い、豊かにしていった。農民や伴類、渡来人たちがより豊かに暮らせればよいと思つていたが、その願いは果たされなかつた。

彼の叔父は彼の領土を狙つて何度も攻め込み、彼はそれに対抗するべく弓矢を取つた。争いは小休止を挟みながら何年も続いた。彼は人知を逸するほどに強く、それ故に人に頼られ、それ故に恐れられ、それ故に帝に伸ばし上げられた——彼が坂東の帝となるきつかけとなつたのは、彼が土豪の一人を匿つたことなのだから。

そうして彼は坂東の帝となつた。

彼は戦が強かつた。今まで彼の下で土地を開いてきた民もそれに従つた。体は鉄のごとく、妙見菩薩の加護を得たその身は分身さえも可能とした。その加護を見て誰もが「彼は帝となるべき英雄」と信じた。

しかし、流石に事態を重く見た朝廷が遣わしたのは、ふじわらのひでさと藤原秀郷——

たわらちうた俵藤太——と呼ばれ、八幡神の加護を得て大百足を射殺した男。彼はその武勇を持つて戦つたが、もうひとりの英雄によつて戦況の悪化の一途を辿つた。そして当初はあつた民心も徐々になくなって、最後は朝廷軍に追い詰められ——坂東の帝を誅すべく、靈剣を携えてきたその男と、愛した女の裏切りで彼は死に至つた。

——俺を殺したのは、俵藤太ではない——。

なるほど、直接彼を殺したのは同じく英雄であつた男であつたらう。しかしその実、彼は彼が守りたかつた民共に殺されたのだ。

「皆がこの地で平和に暮らせばいい」と思い、坂東を荒らし、貴重なに火さえ放ち争いを続ける親類を討った。俺が全部勝って納めればいいと、強い彼は思った——だが、戦は止まなかった。帝となつても都から追つ手が来る限り、この坂東の地が戦場となる限り、民に平和はない。

結局、自分は戦を止めることはできなかった。それがゆえに、戦に飽いた民どもに見捨てられた。

戦ばかりしていた人生だったと思う。人を守りたいと思つたゆえに、流されてばかりの人生だったとも。それでも、彼は生きることをあきらめなかった。妥協しなかった。

都に比べれば遙かに野蠻で青臭くて、未熟で自分で自分を救うしかない、どうしようもなく弱者に厳しいこの東国。

それでも、彼が自分の身体で駆け抜けていった原野だった。

しかし、悲劇的な最期を迎えた彼を人々は生前の彼のままにしておかなかつた。

彼が救いたいと願つた民は、彼が間違いなく朝廷を恨んでいるだろうと、恨んでいてほしいと願つた。己たちでは叛意を示せないから、代わりに彼を怨霊にして、自分たちの恨みつらみをぶつけさせることを願つた。

その怨霊が猛れば猛るほど、都の為政者は恐れる。より深く強く濃く、己を打ち取つた都を恨めと願つたのだ。

ゆえに、彼は後千年を超えて恐れられる大怨霊となった。——バーサーカーとしての彼の資格は、死後に人々の想念によつて付加されたものである。

彼を呼んだ少女は、己を救うのは己だけだと思つていた。力そのものさえあればあとは事足りる。

少女は力だけを求め、かの英霊から理性と言う鎖を剥ぎ取つた。

その理性が本当に邪魔な「鎖」であつたのかどうかは、今ではわかるはずもない。

——今日も、夜が来る。一刻一刻と落ちていく砂時計の砂を見るような不安はもうない。余命半年を告げられ、普通ならば常にベッドに臥せっていなければならぬはずなのに彼女は平気で二本の足で立ち、歩くことができる。むしろ召喚した後のの方が体調がいくらいだ。宵にも関わらず窓を開け、冷えた空気を楽しむ。風を受けてはためくカーテンの白がいやにはつきりと映る。体が冷えるにも関わらず、彼女は進んで冷たさを欲した。

——碓氷の影使い。

昨夜、咲が聖杯戦争のマスターとして初めて相対した敵のマスターである。しかし昨夜に会う以前から碓氷明の事を知っていた。

真凍の家は、春日に移住した魔術師の家系である。その魔術の特性は「吸収」。似た魔導の家系を上げるとすれば、間桐の魔術がそれに近い。ただし、体に飼うのは虫ではなく細菌である。体に飼わせた細菌がそのまま魔術回路となり、魔力を生成する。

有害な細菌ではなく人体に自然に存在する細菌を魔術回路とするため、体に害があるわけではない。また、今は外部からの魔力により、咲の体自体がプラスの効果——多少なりとも通常の生活を許すほどの——を受けていた。

真凍はつい二代前にこの地へやってきた魔術師の家系である。当然すでに碓氷がこの地の管理者としてあり、魔術工房を作るためには許可を得なければならなかった。魔術師同士は魔導を研究する者同士とはいえ、お互いに研究成果を開陳することはない。

それでも、先にこの地に根を張った魔術師に対して挨拶に行くことはままあった。

咲が生まれて、物心つく時には彼女自身も碓氷明のことを知っていた。身近にいる魔術師として、次代の管理者として、碓氷の跡継ぎとして、そして稀有な影使いとして。

咲が碓氷明に対して抱く感情を表すのに最もふさわしい言葉は、嫉

妬と羨望であろう。

魔術師の素質は生まれたときに多くが決定している。長く魔導を続けた家ほど魔術回路が多く、研究成果である魔術刻印も増える。そして生まれ持った起源と属性によって決まる。

確氷は元々稀少な属性の魔術師を輩出する傾向にある家だが、その中でも明は極め付きである架空元素・虚数の魔術師だ。魔導の加護なくしては、協会によって生きたままホルマリン漬けにされかねないほどの希少な属性である。

そして魔術師として稀少な属性を持つ者はえてして魔導を大成するという。

咲の属性は「風」「水」の二重属性。流体を操作することに長ける素質である。二つの属性を併せ持つ者もそう多くはないが、魔導の歴史と素質で確氷には見劣りする。

時計塔においては確氷とてそう長い家系ではないのだが、生まれてからずっと春日に住まう咲にとっては羨むべきことであつた。それでも、今の今までは羨ましいと思うだけであつた。

そう、昨日までは。

「何が、管理者の権限で始末する、よ」

「何が、自分だけ生き残つてもしようがないと思わない、よ」

「あんたは全部もつてるくせに」

一つ一つ呟かれる言葉は呪詛の如く。確氷の呼び出したサーヴァントは日本武尊だつた。古代史に燦然と名を残す英雄を彼女だけで呼べたとは思えない。

おそらくは彼女の父または親戚が触媒を用意する工面をしたのだろう。

親にも将来を嘱望され、稀有な魔術属性とすぐれた魔術回路を兼ね備え、春日の霊地を一手に管理する管理者。魔術師としての未来は洋々と開けている。

それに引き替え、咲は余命半年で両親からも見切りをつけられ、ただ病院のベッドで終わる時を待つしかできない。苦しい思いを乗り

越えて、なりふり構わず魔術の研鑽を積んできたのにこんな終わりを迎えてよい筈がない。

——私が死ぬのに、なんであんたはそんなに偉そうに語るの？

初めて言葉を交わした碓氷明は、地面にまつすぐ足をつけて、咲に人食いを止めろと命じた。自分のしていることは間違いではないという顔をして、命令したのである。

勿論咲は聞く気など雀の涙ほどもない。バーサーカーに命じ全てを屠るだけ。

そして彼女の思惑通りセイバーとアーチャーは尻尾を巻いて逃げたのだ。咲は触媒なしで、この現代にも恐れられる大怨霊であるバーサーカーを召喚し、アーチャーとセイバーを追い払ったのだ。

二騎を相手にしても劣る事のなかった最強のサーヴァントを自分の力だけで呼び起こしたことは、誇るべきことであり、彼女に未来への希望を抱かせた。

（碓氷、あんたなんかには私は負けない。次は、バーサーカーで、殺してあげる）

霊体化し姿の見えないバーサーカーを見上げる。彼女の忠実なる僕は命令一つで咲の気に入らないもの全てを殺しつくす。

今までバーサーカーが言うことを聞かなかったことは二回しかない。一回はアーチャーとの交戦中、アーチャーを放り出してセイバーを襲ったこと。しかしこれは、セイバーがかの東征の皇子であることを知れば納得のいくことであつた。不可抗力であろう。問題は二つ目である。

咲はちらりと自分の右手を見下ろした。バーサーカーを召喚する前に浮かび上がった令呪は、すでに一面を欠いている。今思い出しても、何故親を殺そうとしたあの時バーサーカーが命令を聞かなかつたのか不思議である。

だが、それよりも早急の問題がひとつ。魔力が足りない。人の魂を食らってきたバーサーカーだが、昨夜の戦闘により——咲にも魔力を

供給していたこともあり——現在魔力不足に陥っていた。

ここ数日の惨殺事件の陰に隠れて目立たないが、ここ春日総合病院は陰で「入院すると死ぬ」という不穏な噂を流されていた。医療事故を発端に、病院で死者が増えている。昨日は、もともと重篤な病状だった患者が十人も亡くなった。それも「血栓」が原因で死んでいるのである。

病院側は何か事件の可能性があるのではと探っているが、機器等の異常でもなく首を傾げられている。けれどこのまま続けば、病院を閉鎖せざるを得なくなる——それほど異常事態である。

咲が血液を操作し、患者の血管を塞いだ結果であるが、彼女も病院閉鎖の噂を耳にしている。

病院はいい狩場だったのだが、閉鎖となれば咲も別の病院に移される。

魂喰いのバーサーカーの為にオマケ程度の気持ちで病院で魂喰いを行っていたが、それも間もなくできなくなる。手軽に魂を手に入れる場所だった、とまで考えたとき、咲は一つの家を考え付いた。

この狩場がもうすぐなくなってしまうならば、最後に派手に狩りをしてしまおう。それにサーヴァントを召喚して魂喰いを始めてから、咲の体調はすこぶる良い。

病院がなくなつたと今度の咲は困らない。

それに、どうせ病院にいたところで聖杯戦争に勝てなければ半年後には死ぬのだ。

「そうか、もうこんなところに用なんてない」

咲はベッドの上に立ちあがる。ベッドに面した壁にある窓を引き明け、窓枠に足を掛ける。月は何時でも静かに病院を照らしている。勢いよく窓から身を投げた咲は、小さく詠唱を遂げると軽やかにアスファルトに足をついた。地上三階からの落下とて、魔術師には恐れることではない。

行うなら闇に乗じる方がいい。冷たい風が吹き抜けて、髪で咲の顔を隠す。

「さあ食事の時間よ、バーサーカー！」

\*

碓氷明との作成会議の後、一成は急いで帰路に就いた。夜には病院を監視しなくてはならないし、バーサーカーとの決着がつけば彼は一度実家に戻るつもりだった。夜にはまだ時間があるため、今日の戦いの前に、実家に帰る準備だけは済ませておこうと一成は急いでいた。今日の夜無事に生き延びることができたら、すぐに実家に向かうつもりだ。

電話で済ますこともできなくはないが、電話で済ませてしまうことは躊躇われた。魔導の重要な話であると同時に、一成は戦争に参加していることを親に直接言いたかった。

「アーチャー、バーサーカーを倒したら俺の実家に帰るぞ」

「うーむ……何故じゃ。できれば御免こうむりたいが」

今一つ乗り気でないアーチャーを見て、一成はふと思い出した。サーヴァントには敵サーヴァントを倒したいという衝動が与えられている為に、ここから離れることはかなり落ち着かない気分になるらしい。それに、まとも会ったことはないがこの戦争の監督役による補助も受けられなくなるから、あまり良いことはない。それでも一成はアーチャーに頼み込んだ。

「悪いけど、頼む。あとわけは道すがら話す」

「……まあさつきと戻ってくるつもりのようなだし、仕方ないの。わけはしつかり聞かせてもらおうぞ」

一成は気持ちを切り替えるためにアパートの階段を勢いよく駆け上がり、自分の部屋に入ると手早く実家に戻る準備を整えた。そのあとは家から何とか持ってきた呪符を整理し、軽く禊の儀を行い礼装である神主服に着替えた。昼にアイスを食べたきりだったのでかなり

腹が減っていたが、禊の後に食べてしまっは元も子もない。

明は午後九時からでいいだろうと言っていたが、早い分には問題はないと思われる。時刻は午後七時前だったが、一成とアーチャーはベランダから外へ出ようとした。

その時。

「……!?!」

「おや、さっそくセイバーのマスターからの電話のようじゃ」

コートのポケットから取り出した携帯電話の画面には「確氷 明」の文字が躍っていた。何事かと思いい慌てて電話に出た。

『……もしもし、土御門?』

「お、おう俺だ。何か大変なことでも」

『わけは後で説明する。今日病院を監視してって言ったけど、あれはなしで。今日は家にいて』

明の声は妙に切迫している。電話越しには男の低い声と複数人が話す声が聞こえたが、何を話しているのかまではわからない。

「は? いや、バーサーカーを放っておくわけにはいかねーだろ?」

『……今日、バーサーカーはもう暴れない。訳は明日説明する。明日、うちの家に夜十時半にお願い』

「いや意味わかんねーって。つか、本当に何があったんだよ!?!俺にできることなら」

『私の方の都合だから。本当にごめんなさい。明日にはちゃんと話す。会ったばっかりだから無茶かもしれないけど、』

この急な電話、何かあったに違いない。なんとか事情を聞こうとしたが、一成の言葉は明に遮られた。

『信じて』

それだけを残して、電話は繋がりを失った。無機質な音が、一成の耳朶を打つだけだ。繋がりを失った電話を持ったまま、一成は呆然とつぶやいた。

「……意味わかんねえ」

絶対に何かがあったことは明白である。電話越しの彼女の声は、明らかに震えていた。それが恐怖によるものか動揺によるものか怒り



によるものなのか、一成にはわからない。さらにバーサーカーが暴れないわけも不明。やりきれない気持ちになったが、それでも彼女は信じてくれと言った。

「何が起きたかは私にもわからぬが、あの女子が「バーサーカーは暴れない」と言うのなら嘘ではあるまい。本当に個人的なところで何かあつたのかもしれないが」

「……何でわかるんだよ」

何故か知つたような口を利くアーチャーに、一成は訝しげに言った。

「勘ぞ。あの女子、腹の中はどうあれ与えられた職務は果たす。それに嘘をつくほど世慣れておらん」

勘と言いながらも、その発言には妙に説得力があるのも確かだつた。かつて人事の泥沼を泳いだであろう偉人の言葉だからか。

——しかし、アーチャーの言葉を除いても、一成はあまり追いかける気にならなかつた。

彼女が『助けて』と言つたのなら、しゃにむにそこへ向かつただらう。

しかし、伝えられたのは『信じて』。

ならば、ここで腹を探つては彼女を『信じなかつた』ことになる。

それに、一成と明がまともに会話したのは今日が初めてだ。

ならば、初めは信じてみようと思うのだ。

「明日には洗いざらい喋つてもらうからな、碓氷」

一成は携帯電話を深くコートのポケットにつっこんだ。それからコートを脱ぎ捨て、折角整えた礼装を勢いよく脱ぎ散らかしてジーンズとパーカーに着替えた。

アーチャーは彼のやることを察し、ため息を隠さなかつた。

「アーチャー、実家に帰るぞ！」

11月30日⑥ 兵は凶器

明からの電話を切った後、一成はつい先ほど準備をしたリュックサックを背負うと、勢いよくアパートを飛び出した。

春日駅から二駅離れた駅から新幹線に乗ることができるところまでは普通の電車で向かった。

新幹線に人はまばらだ。土曜日の夜、都市から離れる方向に向かう新幹線に乗る客はそう多くなかった。

自由席は座り放題で、一成と実体化したアーチャーは隣の席に腰かけた。ちなみに新幹線の代金は一成の分しか払っていない。一成とアーチャーは真つ暗になった空と景色を眺めている間に、新幹線は春日をどんどん離れていく。

到着するまで時間もあり、一成は念話で（他の乗客に聞かれないように）アーチャーにキリエから聞いた春日の聖杯戦争についての話を説明した。

「ほう、話は大体わかった。だが、そなたは実家に戻ってどうするつもりじゃ」

「アインツベルンの言っていたことを確かめたい。そして、なんでそんなにまでして聖杯戦争するのか聞くんだよ」

土御門家の真意は実家に聞くしかない。自らの妻——一成にとつては祖母——を人柱にしてまで聖杯を願う。魔術とは、魔術師とは、そんな非人道を良しとするのか。

しかし、アーチャーは冷ややかなまでに冷静に問うた。

「聞いてそなたはどうするのだ」

「どうするって、」

「そなたは根源に至ることが目的と言った。だが土御門の家が本当にそなたのいう「非人道」であれば、そなたはそれでも根源に至るために戦うのか?」

「……それは」

枯れ行くわが魔導の家を繋ぎたいという気持ちは本当だ。だが、人を生贄にしてまでかなえない願いかと聞かれたら、素直に頷くことが

できない。何より自分の家がそのようなことを許容してきたと信じたくもない。しかし、アーチャーは戸惑う一成を納得気に眺めた。

「先のアインツベルンの姫君との話を聞いた故に合点はいったがな。祖父からは魔術を仕込まれ、土御門の伝統を教えられる。かたや両親は魔術などしなくてよいと言う。なるほど、矛盾したことを聞き続けて育っただけあるわ。だがな」

普段のふざけた態度は微塵もない。暗闇に落ちた景色を背に、アーチャーははつきりと一成に告げる。避けては通れない道を指し示すように。

「もし根源を諦めるとしても、そなたは自分で願いを決めなければならぬ。魔導が非人道的であれなんであれ、そなたはこの戦争に身を投じたマスターじゃ」

「……おう」

己の家と、魔導と、願いを見つめなおさなければならない。時間のない聖杯戦争の中でも、それをしなければ一成は戦えない。いつも両親からも祖父からも友からも、先走りすぎだと良く言われる。

多分、また自分は先走ってしまったのだろう。だが、まだ取り返しはつく筈だ。

「……あとさ、ちゃんと親に言う。事後承諾になっちゃったけど、やっぱり、内緒つてのはよくねーよな」

自分の力でやりたいなどと思っていたことも今となっては馬鹿馬鹿しい。つまらない意地や、心配をかけたくないということよりも優先することがある。アーチャーは手持ちの扇で一成の頭を叩いた。

「馬鹿者、当たり前じゃ。黙って旅行に行ってきたのとは訳が違うぞ。心配かけたくないと言うが、いきなり息子が死体になってきた親の気持ちを考えてよ」

「……お前、本当に親みたいになつてきたな……」

「そなたがあまりにも不甲斐ないからだ。全く仕様のないマスターよ」

珍しく不機嫌なアーチャーは、腕を組んでそのままそっぽを向いてしまった。一成も新幹線が目的地に到着するまで、暫し微睡に身を委

ねることにした。

\*

「他のサーヴァント同士の戦いを観察する」との目的の為、今宵、アサシンと悟は春日の街に打って出た。アサシンは黒の雨合羽をすっぽりとかぶり、派手な格好を覆い隠している。

悟はワイシャツにGパンの上に黒いコートを着ている。アサシンに抱えられ、悟は夜の街を走る。ビルからビルへ、屋根から屋根へひた駆けるアサシンの姿は子供の頃に憧れた忍者のようだ。

「……お前って本当に人間じゃなかったんだな……」  
「気づくのが遅せえ!!」

本格的に「魔術」なる世界に足を踏み込んでしまったことが実感され、悟は身を震わせた。ついでにアサシンに頭を叩かれそうになった。

眼下を流れていく家家の光。まだ午後六時過ぎで家族のだんらんに対応しい時間帯だが、その光は今の悟には毒だった。かつて、自分もあのような光の中の一つだったはずなのに、もう取り戻せない。

何でも願いがかなうと言う「聖杯」——。悟に明確な願いがあったわけではない。

だが、そんな奇跡の代物を手に入れば、昔に戻れると夢想した。時を巻き戻して、全てをやり直すことができる。

「……アサシン、交戦中のサーヴァントを見るって、当てがあるのかな？」

「ああ？んなもんねーよ。巡回してサーヴァントの気配を探るくらいしか思いつかねー。そもそも今日、交戦が行われるかもわかんねーしな」

「そ、そんな適当な感じなのか!?!」

再びアサシンのげんこつが頭に落ちてきた。「どんなサーヴァント

が呼ばれてどんなマスターがいるのかも教えてもらえるわけじゃねーんだ。テメーで調べるにや足使うしかねーよ!」

「何刑事ドラマみたいなこと言ってるんだ……」

とはいえ、上空から春日の街を眺めるのはそれだけでも楽しい。しかし、何時もの春日も街と比べて何か暗いような感じがする。最近はや、住宅街も水を打ったように静まり返り、まるで魔物が外を通っているかのように家に人々は閉じこもる。

実際、最近の春日は不穏だ。医療事故、通り魔事件、連続惨殺事件とただならぬ出来事が次々と起こっている。今日、ネットを徘徊すると春日市にまつわる都市伝説の類が腐るほど出ていた。

「なあ、アサシン。最近春日で急に妙な事件が増えたんだが、それってこの戦争に関係あるのか?」

アサシンは空いた手で顎を撫でた。「……わかんねーな。だが無関係ともいえねー。サーヴァントに人間の魂を食わせて強化するヤツもいるかもしんねーし」

自らの願いを叶えるために人の命を犠牲にする。悟は憤りを感じるが、自分もその殺し合いの中に足を踏み入れている人間だ。関係ない人を殺そうとは思わないし思いたくもないが、戦争を戦うと決めた時点で、人の命を踏み台にしようとしているのではないか。

悟が悶々としていることを知ってか知らずか、アサシンは駅前近いフィットネスクラブビルの屋上で止まり、肩を落とした。

「……しかしいねーな。景気よく宝具でもぶちかましてくれりゃわかりやすい……んん?」

アサシンは鼻をひくつかせ、春日駅から北の方面を見た。悟には何の変りもないように見えるが、サーヴァントは異変を感じている。

「おい、交戦中とは思えねーがサーヴァントがいるぞ。このまま手ぶらで帰るのも何だし、ちよつとやってみつか」

「え!? やってみつかって、俺たちが戦うのか!」

「何バカ言ってるんだ、俺たち以外に誰がいるんだよ。安心しろ、俺は弱いが逃げ足にかけては最強だ」

謎の自信で胸を張るアサシンだが、悟は不安をぬぐえない。不安を

ぬぐえないが、悟は聖杯が欲しいと願っている。悟はサーヴァントに念を押した。

「……危なくなったら逃げるぞ」

「当り前よ。あと戦闘中は俺をアサシンって呼ぶなよ。昼間辞書めくってたらいいの見つけたから、ガンナー（射手）とでも呼んどけ」「は？何でだ？」

アサシンは得意げにチツチツと指を振った。「サーヴァントは真名を秘匿するのは、真名から弱点を割り出されるからだつたろ。だからクラス名で呼ぶんだが、クラス名でも剣の伝説とか弓の伝説く持ちとかわかんדר？ だったらそっちまで隠しちまえて思ってな。お前さんはハイパーな初心者でもあるしな」

「……そういうもんか、ガンナー」

「そういうもんだ。ま、俺自体は目立つ方が性にあつてるんだがな」

アサシン、もといガンナーの服装は歌舞伎役者のそれに近いので確かにそうだろうと思われた。

聖杯戦争についてはアサシンの方が圧倒的に詳しいのだから、悟は大人しくそれに従う。

「じゃ、行くぞ。舌噛むんじゃねーぞ悟!!」

高所の風が吹きすさぶ。アサシンは闇から闇へ走る忍びのように音もなく春日の街を疾駆する。走りたどり着いたのは、春日駅前の高層ホテル「春日イノセントホテル」のはす向かいにあるオフィスビルだ。今日は土曜、かつ不穏極まる情勢の為、残業で残る人間は幸いにもいないようでどの階も電気が消えている。

軽々と屋上に着地すると、アサシンは悟を抱えていた腕をぱつと離れた。悟はそのまま屋上と熱烈なキスをかます羽目になる。

「グエ!!」

「まったく決まんねー野郎だな」

「お前のせいだろうが!……っ!」

アサシンと悟の立つ屋上の端とは、真逆の端。距離はおよそ五十メートルあるだろう。大きな男がいることが、暗い中でもわかる。三

メートルほどの棒状のもの——先についた刃が月光を受けてきらめく——槍を手にした男は勢いよく振り向いた。

「……あれが、サーヴァント」

「俺もサーヴァントだったの」

アサシンの軽口も、耳に入らない。距離を隔てた男の放つ圧倒的な威圧感が、悟の足を、心を竦ませた。相手は今殺そうとしているわけではないのに、それでも放たれる闘気が悟の全身を縛るほどの畏怖を抱かせる。長い槍を持った男は、立派な体躯に似合いの朗々たる声で名乗りを上げた。

槍を軽々と振り回し、切っ先を変わらずアサシンに向ける。

「応応、名のある英霊と見えるが、何者だ！ 儂はランサー！ いぎ、尋常に勝負！」

「俺はガンナー。ランサー……げっ」

前の宣言どおり、偽りのクラス名を口にするアサシン。途端、アサシンは苦虫をかみつぶしたような声を上げた。それには気づかず、ランサーは効きなれないクラス名に当然の如く聞き返す。

「ガンナー!? そんなクラス聞いたことないが!!」

アサシンはすぐに苦い顔を元に戻した。「エクストラクラスってやつだぜ! ま、既存のクラスに収まる俺様じゃねえってこった」

自分で激弱と言っておきながら、自信たっぷりのアサシンである。黒い雨合羽着用中とはいえ、中身の歌舞伎役者の格好知っている悟には、見栄を張る姿は堂に入って見える。

歌舞伎で張る、もとい切るのは見得だと突っ込むのは野暮である。

「ほう! 面白い。ならばガンナーとやら、手合せ願おう!!」

「嫌だ!」

「ならいぎ尋常に……っておい!？」

威勢よく返事を返されてしまったが、アサシンはランサーの挑戦を却下した。ランサーはあきらめることなくその槍を振りかざした。

「む! なら何故お前たちはここに出てきたのだ!」

「いや、ちろーつと他の陣営観察してーなって思っただけ。それに俺、負けるって決まってる勝負は……するときはあつけど、今

はそういう場合でもねーしな」

アサシンは元々サーヴァント戦向きではない。どのサーヴァントが出てきても、偵察程度の戦いの後自慢の逃げ足で逃走する心づもりであった。そしてこのランサーを見た時、「あ、こりゃ無理だわ」と感覚でわかってしまった。

悪戯に刀を交えては一刀のもとに退けられるのは、火を見るより明らかだ。

後ろに控えていた悟は、小声でおそろおそろ口を開いた。

「おい、ア、ガンナー、アレ、そんなに強いのか？」

「あん？パラメータ見りやお前にだって……ってそれすらわかんねーのか。まあそりゃあとで……とにかく、あれは白兵戦、特に一對一の戦闘に置いて右に出る奴はいねーな。つか、俺あれ誰だかわかったわ。そんで、無理」

それにあの纏う魔力を見れば、おそらくは十全な魔術師をマスターに持っていることがわかる。圧倒的にこちらが有利で、アサシンは圧倒的不利。生前のランサーを思えば正々堂々、戦いを求めてここにいることが予想できるため、マスターによる不意打ちを好まないだろうが、彼のマスターが見えない以上その危険性もある。アサシンは悟の腕を強く掴んだ。

「じゃ、そういうことで！俺は帰る……！」

しかし、ランサーはそれを許さなかった。その神速の如き一撃を回避しえたのは、アサシンの持つ高い敏捷ゆえだった。悟は何が起こったかすらわからず、気づいたらアサシンに襟首を掴まれて引きずられていたありさまだった。

五十メートルあった距離はいつのまにかなくなって、僅か十メートルほどの離れてランサーが立っている。

「……そうつれないことを言うな、ガンナーとやら。英霊同士、出会えば戦う運命だろう」

ランサーの声に先ほどまでの朗らかさがなかった。しかしランサーはすぐに口角を釣り上げて、今度は呼びかけにアサシンが答える



ことさえ求めなかった。

「……！クソが！」

アサシンはどこからともなく——瞬時に雨合羽の袖から黄金造の太刀を二本取り出し、構えた。悟はそれを見たのが最後で、次の瞬間には再び首根っこを引つ掴まれたと思えば、真つ暗な闇に放り込まれた。

「うわあああああ!!」

「るせーなお前は！大人しくしてろ！」

アサシンは騒ぎ立てる悟を自らの宝具である襜褕の中に放り込んだのだ。その最中に、ランサーがあつという間に接近してその手がアサシンの雨合羽を剥ぎ取りにかかった。

「まずはその姿、見せてもらおう！」

しかしランサーの手は空を切る——いや、アサシンのいた場所には代わりに丸太が忽然と現れていた。ランサーの手は丸太を掴むだけ——しかし、歴戦の武士たるランサーは異変に気付く。

アサシンは背後にいる。眼にもとまらぬ速さでランサーは背後へ振り返る。雨合羽をまとったアサシンが宙に浮き、その両脇にはずらりと銃——火縄銃が浮かんでいる。

「発射！」

アサシンの掛け声と共に、火薬の匂いと煙と火花が炸裂した。耳を裂くような破裂音が轟く度と同時に改造されている銃は煙を掃出し、二人のサーヴァントを霧の中に隠す。

槍を振るう勢いで煙幕を散らしたランサーが、猛烈な勢いでアサシンに迫る。其の顔は先ほどまでとは打って変わって喜びににあふれ、猛禽のように笑っていた。

しかしアサシンはそれに付き合わない。

彼は屋上の端から跳ぼうとしたが、それよりもランサーの方が速い。槍兵の腕が暗殺者の雨合羽を掴み、それが破れて暗殺者は屋上から自由落下する。

降下するエレベーターのエレベーターがない感覚——といえばそのままだが、空に放り出されたアサシンはは真下に映った街灯と道路

を見た。

顔を上に向けて振り返ったアサシンが見るのは、同じく屋上から飛び降りて迫るランサーだ。やはりその顔は笑っていて、こうして干戈を交えることが嬉しくてたまらないことが良くわかる。

そして、やはり先ほどの銃撃は傷一つ彼の英霊にはつけられなかった。

(ま、てめーの願いなんで想像がつくぜ、戦国最強)

生前のランサーを知るアサシンからすれば、この喜びようも納得がいく。東にランサーありと勇名を馳せたことは、生前から知っている。

されど、その晩年は寂しいものであったことも英霊となった今、わかるのである。

片や勇名を馳せ主人に忠誠を尽くし、生前の功績で英霊の座についたランサー。方や一介の庶民に生まれて一盗賊として生涯を終え、生前の功績ではなく庶民の想念によつて英霊と化したアサシン。

同時代を生きたとはいえ、その在り方は全く異なる。

アサシンはにやりと笑つて天を仰いだ。「仕方ねーな！ちよつとだけだぜ！」

「そうこなくては面白くない！」

アサシンとランサーはビルの側面を駆ける。アサシンは黄金の太刀を片手に、もう片手にはクナイを持って。ランサーは自慢の槍を掲げて。地面に垂直とはいえ、ビルという足場があれば彼らは落下するばかりではない。ビルの側面を舞台に彼らは己が武器で火花を散らす。

もちろんアサシンは逃げる気なのだが、仮に戦うとするなら平地よりもビルの壁面のような、トリッキーな場所の方が性に合っている。「むんー！」

ランサーの槍は想像を超える冴えでアサシンを屠るべく走る。アサシンは太刀とクナイをしまうと、代わりに改造火縄銃に持ちかえる。ビルを駆けてランサーの上を取り撃つ。使い終われば襦袢の中

から別の銃を取り出して連続射撃を行う。ビルの壁面は屋上と同じように煙幕に覆われるが、銃弾を槍の一薙ぎで振り払うランサーには効き目が薄い。

(アイツと近づいてやりあうのはバカだな)

それでも時間稼ぎにはなる。アサシンはビルの窓を突き破りオフィス内に転がり込んだ。すぐにランサーが追ってくることは目に見えていたが、ランサー相手に後手後手に回ったらそれこそアサシンは死にかねない。ランサーはまだ戦いを楽しむ、という段階なのだ。

アサシンは整然としたオフィス内のデスクや植物を散らして奥へと走る。ランサーからすれば逃げられているように感じるだろう。

「待たんかガンナー!!」

早くもアサシンの逃げ込んだフロアに突窮してきたランサーは、所構わず槍で障害を薙いでいく。あの槍はおよそ六メートルから一米ートルの長さまで、自由自在に変化する。

厄介で直接やりあうにはいかないのだ。

「直接やりあいたいならセイバーにでもあたるんだな! 残念ながら俺はガンナーだ!」

アサシンが軽口を言い指を鳴らした瞬間、ビルから爆音が轟いた。

『おい! ガンナー! ここは何だ!』

『大人しくしろって、俺の宝具の中だ。家に戻ったら出す』

アサシンの宝具『金襴襦袢(かぶきのいしょう)』は、生前・死後の伝承にあるアサシン盗品の盗品を納める蔵に繋がっている。アサシンは袖の中から貯蔵されているものを引き出して戦う。先ほどの黄金の太刀も火縄銃も丸太もそれである。

バビロニアの英雄王の宝具の一つに同種の蔵があるが、アサシンの蔵は性質を異にする。

英雄王の蔵は「貯蔵する」ための蔵だが、アサシンの蔵は「一時保

管」の蔵である。「全ては天下の廻り物」だとするアサシンの蔵には、溜め込む性質がない。

ゆえに、意思のあるものを蔵に入れたとして、「出たい」と思えばすぐに出来る。

『それにお前一体あのランサーと何やってたんだよ！』  
『いやちよつと相手をしたやつただけだぜ？』

宝具の中に入られると外界とはシャットダウンされ、様子は全く分からなくなる。確かに悟は不安だったことだろう。ビルの中に戦場を移したアサシンとランサーだが、先に乗り込み焙烙玉（爆弾）を仕掛けたアサシンが爆発に乗じて脱出して逃げたのが顛末である。

今頃あのビルは火災騒ぎになっていることだろう。しかしランサーがあれ如きで倒れるとは思えない。

とにかく急いで悟のアパートまで戻り、宝具の中から悟を出した。夜はそろそろ暖房が欲しくなってくる季節で、アパートは寒い。

畳に座り込んだ悟は、放心したようにどこともない場所を見ていた。アサシンが頭を叩くとやつと気づいたように振り返った。

「あ、ガ、アサシン」

「予想以上にヤバイやつだったからほとんど見れなかったが、敵サーヴァントがどんなかはわかった。それに運が良かったな、ランサーは真っ向勝負大好きなヤツだろうし、アイツもまだ他サーヴァントの調査の段階なんだろうよ。戦うこと自体を楽しんできます感すごかったしな。まだ全然本気じゃなかった」

アサシンの前マスターを殺したような謎のサーヴァントのように手段を選ばないサーヴァント・マスターであれば、呑気に悟を放っておいて戦うこともできない。

その点ランサーと行き会ったのは、戦いを見せる上では悪いがまだ運は良かった。

「……あれが、敵のサーヴァント」

今でも悟の手は小刻みに震えている。アサシンは悟に敵意を持っていないが、敵意を持つ敵のサーヴァントが、マスターが、悟を殺そ

うと襲い掛かってくるのだ。

「魔術さえも知らなかったお前ならそんなもんだろ。で、だ、」  
まだ呆けている様子の悟の前に腰をおろし、アサシンはその肩を強く掴んだ。

「あんなんが他にも五騎いるわけだ。お前はそれと戦うことになる」  
聖杯戦争。今宵の戦いなどお互いの力を見るくらい的小手調べに過ぎない。さらに戦いは過酷になっていく。その命を危険にさらしても、叶えたい願いがあのか。

悟は自分にもう一度問い返したが、答えは決まっていた。

「魔術とか全然わからないけど、俺は戦いたい」

「……マジでか」

アサシンなら喜ぶだろうと思っていたが、なぜか予想外という顔をされて悟も戸惑う。しかしその表情はすぐに消え、暗殺者は眉間に指を当てて唸った。

「最弱のサーヴァントと魔術のマの字もしらないマスター。くー！これ以上弱そうな陣営はねえな！」

「……お前、それは俺がマスターってのじゃいやだってことか？」

「いや別に。俺は応援するなら巨人より阪神派だから全然」

アサシンは気分を切り替えるように咳ばらいをした。つかみどころのないサーヴァントは珍しく真摯な眼差しでいる。

「俺はサーヴァントだ。俺の人生は、もう終わった。今ここに呼ばれて願いを叶えるチャンスを与えられてるのは、ボーナスみたいなものだ。現世を楽しんでみてーとは思うが、俺自身にそこまでの未練はねーんだ。けどお前は違う」

勿論、生前に大きな未練を残して、それを取り戻すべく聖杯をどんな手を使っても狙うサーヴァントもいる。しかしアサシンは違うと告げる。アサシンは自分自身の願いよりも、悟の願いを問う。

「お前の人生は今だろう。まだ三十いくつかで、先もあるだろ。その今と先を失うかもしれない危険をも背負ってまで叶えたい願いがあるなら、まずそれを聞かせてもらおうか」

悟は息をつく。今でも思い出したいくないことを、このサーヴァントに告げなくてはならない。それでも願いを掴むために、己が従者とともに戦うことを望んだ。

狭いアパートに張り詰めていくのは、緊張と不安を孕んだ沈黙だった。

悟の声は静かに、深い願いを告げた。

「俺はな、アサシン。過去を、やり直したい」

\*

「逃げ足の速いサーヴァントよー！」

ランサーは春日イノセントホテルの屋上で、不完全燃焼気味に文句を垂れた。はす向かい、先程戦場になったビルは今も灰色の煙を上げている。すでに鎮火されているようだが、これから警察などが乗り込んできて騒がしくなるだろう。

ガンナーと名乗るサーヴァントは、今思えばセイバーから戦ったと聞いたアサシンと特徴が似ている。しかしアサシンは疾うに消えたはずである。となればガンナーは本当にガンナーなる者なのか。

(しかし、もう気配がない)

煙幕を使っているとはいえ、敏捷さではトップクラスであるランサーから逃げおおせるほどの素早さを持っていた。それにガンナーはアサシンプラスのように気配遮断に類するスキルを所持しているのか、すぐに気配は杳として知れなくなった。

ランサーはアーチャー、ガンナーと手合せをしたとはいえ、まだ偵察、の命令が出ている。全力を出して戦うまでに至らないことが重なりランサーは不満を溜めている。

「早く戦いたいものだな……待ちの時間と言うわけか」

槍を消すと、さてこれからはどちらを見て回ろうかと思案する。西の住宅街は今日もひととおり回っていたが、特に異変はなかった。昼

間の神父からの報告で、バーサーカーのマスターは病院に入院している娘と聞いていたランサーは、それを思い出し件の病院を観察していることにした。

(やはり、街自体が沈んでいるかのようだ)

住宅街だけでなく、栄えているはずの駅前も当初に比べたら活気がなくなっている。何か暗い影が春日の街全体を包んでいるような、錯覚。魔術師ではない一般人も、ここのとこたて続いている怪事件に何かがおかしいと思っているのだ。

ビルとビルを足場にして宙を飛ばせば、移動は早い。もとより人外の身である。春日総合病院近くのビルから、その大きな病院を見たランサーは一目で違和感を覚えた。

住宅街を回った時も、人一人いないような感じを受けた。だが、病院は本当に誰もいない。生きている者の気配がない。普通、病院に明かりが多少はついていないとおかしいのに、完全に闇に沈んでいる。同時に、隠しようもなく濃い血の匂いが漂っている。

ランサーはビルからビルに飛び移り、瞬間移動の如き素早さで病院の正面玄関へと着地した。

その時、目にしたのは教会の神父とシスター——御雄と美琴の姿だった。二人とも相当急いでやってきたのか、息を切らせていた。

「おや、なぜお前たちがいるのだ」

「お前こそ何故——ああ、偵察をこなしていたのか」

ランサーにも、二人の顔色から異常事態が察せられた。このどうしようもなく強い血の匂いの大本はこの病院の中であると分かっているのだ。三人は、言葉を交わすこともなくそのまま病院の中に足を踏み入れた。

ランサーの予感は間違いではなかったと知れた。一階から病室を確認してまわったのだが、生きている人間がいない。病室に横になっている入院患者は、悉く殺人事件のニュースでやっていたように——ただの肉塊と成り果て、部屋を赤く染め上げていた。飛び散った血液と臓物が湯気をまだうつすら立っていることから、この惨劇が行われ

て時が経っていないことを示している。

ナースステーションに勤務していた健康なはずの看護婦も、患者と同様に原型を失って死んでいた。病室はことごとく赤黒く、ナースステーションも同様で、あるべき病院の色が思い出せないほどの変貌である。巨大な力を加え、其れ任せに人体を破壊するバーサーカーの殺し方そのものだ。

しかし、少なくとも既にこの棟にバーサーカーらしき気配はない。ランサー・御雄、美琴は自然と、生存者の搜索と状態の把握に努めるべく散った。そしてすぐにランサーと御雄は一階のナースステーションに再集合していた。

むせかえるような血の匂いの中、自然とランサーは神父と言葉を交わした。

「……お前たちはなぜここに？」

「私たちが街に使い魔を放っていることは言っただろう？その中の一匹がここに異常な魔力を感知して、その映像を見たというわけだ」

そういえば聖杯戦争による被害の後始末・神秘の秘匿は彼らの役割である。あまり魔術師の営みに詳しくないランサーは今更のように思い出した。この大惨事にもかかわらず、この病棟以外の人間はまだ誰も気づいていない様子だ。それは明らかに異状である。

そのとき、病院正面玄関の自動ドアが開き、新たな人物が現れた。マスターである碓氷明を背負ったセイバーが、ものすごい勢いで滑り込んできて目の前で止まったのだ。

「マスター、着いたぞ」

「……うん、ありがとう」

明はむせ返るような血の匂いに気分を悪くしたのか、白い顔のままセイバーの背から床に足を降ろした。彼女は神父から使い魔により急報を受けてここへやってきたのだ。

「……神父、これは」

「間違いない。この殺し方、場所をとつても——バーサーカーの仕業だろう」



言葉もなく、沈黙があたりを包んだ。

明は、半ばわかりきっているから聞きたくないと言いたげな顔で、問いを発した。

「……生きている人は？」

「中庭に倒れている者はまだ生きていたぞ。それに、ここ以外の病棟は普通だった」

ランサーは少しでも慰めるように言ったが、それすなわちこの病棟内は全滅だということをはっきり示していた。

「……この異常事態を知らせない為に、この一棟にまるごと結界を張っているみたい」

明は気丈にもいつも通りに答えた。その時、状況把握に出ていた最後の一人——美琴がようやく戻ってきた。いつも澆刺とした彼女の顔も今は青白く、そのくせ息は荒かった。

「ご苦労だった。三階はどうだったか」

「そ、それが」

神父の言葉にもまともに返せず、修道女は震え声で闇に沈んだ廊下を指示した。ランサー、セイバー、明、御雄共に顔を見合わせたか、彼らはそろって三階へ急いだ。

\*

見れば見るほど、この一棟の状況は酸鼻を極めた。生きている者の気配なく、そのくせ熱気が妙に漂っている。それはすぐ先ほどまで生きていた人間が大量にいたという事実であり、今は全てがいなくなっただけを如実に示していた。明とて今更これしきのこと吐くほど軟にはできていないつもりだが、それでも気分が悪くなるのはどうしようもないことだった。

病室内は阿鼻叫喚が広がっているが、廊下は病室内ほどではない。だが、病室から漏れて出た血と油が間違いない、ここは地獄であった。

ことを知らせている。

美琴の後について、一行がたどり着いたのは三階の行き止まりであった。その行く手を塞ぐ壁を見た時、全員が言葉を失った。

それはあくまで挑発的に、禍々しく。そして毒々しく、その存在を際立たせて。

元は白かった壁に映える赤い色は、嫌がおうにも全員目を引き寄せた。

「明日十一時 倉庫街で待つ ウスイアキラ」

血液で綴られたその宣戦布告は、敵意と憎悪に満ちて明を指示していた。それを見て、再び全員が言葉を失った。ランサーやセイバーが明の様子を伺ったが、彼女の顔はいつもより遥かに悪いものの、その表情は変わらない。

否、だからこそ。この状態を目撃して、何の変化もないことが奇妙だった。明は無言で壁に近づくと、まだ乾ききっていないその文字に、肉のかけらさえ貼りつけたその文字に触れた。

「……畜生が……」

「七代目。とにかく私たちはこの状況の処理をする。美琴、教会のスタッフを至急ここへ集めろ」

美琴は急いで頷くと、その場を去った。明は一度頭を振ると、何事もなかったかのように神父に向かって振り返った。

「わかった。私も手伝うよ」

「助かる」

神父は神父で電話でどこかしらへ連絡を取りはじめた。その時明は何か思い出したのか、慌てて携帯電話を取り出した。

「そうだ、土御門に連絡しないと」

かなり慌てた状態で連絡をとり、半ば無理やり電話を切る形で話がおわった。明はセイバーをひっぱり、明日の十時半に集合と告げた。

それから先ほどの挑戦状——壁に書きなぐられた血文字を調べている神父の下へ歩いた。

神父も言うことがあるようで、明が話し掛けるよりも先に振り返った。

「……流石に褒賞とする令呪がない、と言っている場合でもない」

まさか病院一棟を食い尽くす蛮行にできることを予想しておらず、神父は厳しい顔で言った。予想をはるかに超えた状態に二の句が継がない状態だ。とにかく他陣営の協力も仰ぐべく、信号弾を飛ばして知らせ、ハルカにも再度協力を要請すると神父は告げた。

しかし、明は能面のような顔で、さらに低い声で言葉を放った。

「……無理にしなくてもいい」

「……何と？」

「アーチャー陣営とバーサーカーを倒すまでの同盟を結んだ。明日、倒しに行く。真名だってわかってる」

ライダー陣営・アサシン陣営はなく、セイバー・ランサーは情報のやり取りをしている。そして今日アーチャーと同盟を結んだ。ここで他陣営に知らせるとしてもキャスター陣営しか残っていない。それにキャスター陣地でなければ力を発揮できないと思われ、強い助力とはなりえない。

そういう意味で、明はしなくてもいいと判断した。

「……勝算は？」

「ない勝負はしないよ」

明はくると踵を返すと、直ぐ近くの病室に足を踏み入れた。例にもれず一面の赤に塗れ、歩けばぬるりと人の油で滑りそうですらある。肉片となった死体を歯牙にもかけず、明は窓を開け放った。

「……人払いの境界が切れそう。神父、かけなおしておくよ」

「……ひとつ聞きたいのだが、お前はあのハルカ・エーデルフェルトについて何か思うところはないか？」

唐突に神父はわけのわからないことを聞いてきた。ハルカに何か思うところがあるのか。あれは明の父とは親交があるようで、春日にやってきたこともあるそうだが、明のまだ幼いころであり彼女は覚え

ていない。

「……何でバーサーカー討伐協力に乗り気じやないのかわからないけど、それ以外は特に……」

神父は何か思案気に宙を睨んでいる。「今、影景は時計塔にいるか？」

「……どうだろ。所属は勿論そうだけど、周辺に出回っているかも」

セイバーを召喚する前、戦争について詳細を聞くべく時計塔に電話をかけたが、父はいなかった。いつ時計塔に戻ってくるかもわからなかったため、手紙を出してその返答を待つということをしていった。

「何か聞きたいことでもあるの？」

「捕まらないのならそれはいい。結界のかけなおし、頼むぞ」

神父はくるりと踵を返すと、急ぎ足に階段を駆け下りていつてしまった。明が窓から見下ろせば、神父と同じようなカソックを身に着けた者が複数人急ぎ足でやってくるのが見えた。

\*

神父とシスターはこの事態の後始末をすべくそれぞれ動きだし、明もその手伝いをしている。現在この状況はサーヴァントにとっては戦いの終わったあとであり、ランサーとセイバーは手持無沙汰であった。双方とも魔術にはとんと縁のない英霊であることもあり、することがない。

しかし、それをいいタイミングとランサーはセイバーを壁の隅に引っ張った。

「……なんだランサー」

ランサーは壁の挑戦状を示した。「お前、明日、この時間の通りに戦いに赴くのだろうか？」

「そうに決まっている」

「お前のマスターがさつき言っていたが、アーチャー陣営と組んだの

か」

「そうだ」

ふむ、とランサーは思案気に顎を撫でた。

「……儂も混ぜてくれんか？」

「お前のマスターは協力しないと断っていたが」

セイバーはランサーの言葉を全く予想できておらず、思い切り眉をひそめた。それはランサーのマスター・ハルカIIエーデルフェルトは対バーサーカーにおいて協力を拒んでいるからだ。

そしてランサーとて本当に望むものは一対一、邪魔立てなしの尋常な勝負である――セイバーに協力する時点で一対二、さらにアーチャーもいれば一対三となり、バーサーカー戦は彼の望むものではなくなる。

それでも、ランサーはこれだけの乱行を働くバーサーカーを放置したくない。最早バーサーカー陣営は尋常な勝負を望むべくもない殺戮者である。

「そうだ。だから、十全の活躍は約束できない。だが、偵察中に偶然行き会ったことにすればある程度役には立てる。このランサー、頑丈さには自信があるぞ」

セイバーはランサーの目をじつと覗き込んだ。セイバーはランサーが質の悪いなかではないことくらい最初から知っている。それでもサーヴァントは令呪の縛りからは逃れられない。

ランサーが共に戦うとすれば問題は、ランサーがバーサーカーと戦っていることに気づいたハルカがどうするかだ。

バーサーカーとセイバーが戦っているときに、どさくさに紛れてセイバーを攻撃する。これは可能性としては低い。何故ならセイバーを倒したところで、バーサーカーがいるのではその相手をランサーが一手に引き受けることになる。また、戦いが終わりバーサーカーが消滅した後にはセイバーを襲うのでは、あまり割がよくない。同じ白兵戦サーヴァント同士、疲労度は同じ程度になるだろう。そして、セイバーのマスターもちゃんと令呪を残している。

それに、人を食って強化されたバーサーカーを倒すことそのものは

益になる。

何故ランサーのマスターが共闘を断ったのかあまり把握しきれていないのだが、ランサーたちにとっても協力してバーサーカーを倒すことに損はないはずなのだ。セイバーは彼の願いに頷いた。

「……わかった。マスターには伝えておく」

「それは重畳！」

ランサーは呵々と笑って見せた。そして、この場ですることのないランサーは早々と病院から立ち去り、セイバーは明が残っている為彼女を待つことにした。

## 第1幕 春望

12月1日① 「夢」なるモノ

陰陽五行説に基づき、森羅万象の背後に秘められた世界の意味と働きを解説し、吉凶禍福を判断し、未来を占う魔導が陰陽道である。

陰陽道の求めるところの究極は、「陰陽五行」。陰陽五行は星満つ天、物満つ地——空間、現在・過去・未来にわたる時間全てを記述・説明できるモノである。陰陽五行を完全に我がものとする事ができれば、過去から未来を貫き世界の全事象を把握するに至る。

つまり陰陽道という「陰陽五行」は、西洋魔術で魔術師の追い求める「根源」と同じである。

陰陽五行説は六世紀ごろ、百済から日本に輸入されたことがはじめとされる。陰陽道は国家を支える技術として利用され、道教・仏教・密教と習合していった。平安時代に至り、歴道（曆）の賀茂家と天文道の安倍家に別れて隆盛を誇った。土御門家の源流はこの安倍家に発している。

時代が鎌倉に移り、陰陽道が果たす役割は公家の世界から武家の世界へと転換した。華道や茶道、田楽や能楽に大きな影響を与え民間に広まっていくが、それに伴い陰陽道は次第にかつての古代のごとく国事を左右する影響力を失っていった。

明治に至り、明治政府が陰陽道を廃止したことに伴い、陰陽道組織を率いてきた土御門家は歴史の表舞台からは完全に姿を消した。だが、民間にしみ込んだ陰陽道により一般生活に広範囲に根を下ろしていたゆえに、魔術基盤としては十分に機能し陰陽道は消え去ることはない。

しかし陰陽道の日本における魔術基盤の強固さとは裏腹に、土御門の陰陽道——土御門神道という——は衰亡の道を辿りつつあった。家系を一度断絶しつつも刻印を伝え続けたその一族の魔術回路は、成長の限界を迎えていたからだ。

一成の祖父は、陰陽道の歴史と土御門家の由緒の正しさを何度も何

度も一成に語った。陰陽道の魔導を伝える家系は、いざなぎ流など他にも存在する。だが、最も歴史古く由緒正しいのは、わが土御門家だと。

「二つを成す。それさえできれば人生と言うものは十分だ」

この名は父が考え、祖父が許可を出して決まったと聞いている。しかし、果たして祖父が望んだ「成す一」と、父の望んだ「成す一」は同一ものであったろうか。

(違うんだらうな)

両親は、一成が魔術を学ぶことには否定的だった。両親は、祖父とは異なる思いのもとに「一成」という名を与えた。

(俺は何をしたかったんだっけ)

千年を数えた陰陽道なる魔術を受け継ぎ、陰陽五行に至る。歴代の当主はそれを目指してきたし、当然自分もその誉れある当主の一人となるために魔導の研鑽を積んでいた。

たとえ「お前には無理」と祖父に匙を投げられ、親に魔導から遠ざけられても、疑わなかった。

だが、それは一成のしたかったことなのか。

本当に、関係ない人を巻き込んでまで成すべきことなのか。

「……それは、……」

「おい一成、そなたの言っていた名前の駅についてだが、下りんでよいのか?」

「ふおっ!ぎやああああ」

昨夜は新幹線の停車駅の漫画喫茶で一夜を明かし、始発の列車で今の駅に向かっていた。漫画喫茶でも熟睡できたはずだが、一成は心地よい列車の揺れで再び睡魔に襲われていた。微睡の中からたたき起こされて、彼は慌てて電車から降りた。

眠い目に朝日がまぶしく、一成は荒く目をこすった。無人駅ではないが、小さな駅である。切符を駅員に渡して改札から出ると、今更ながら一成は気が重くなった。実家に戻るのは一年以上ぶりである。



「タクシーつかまえて一時間ぐらいすれば、俺の実家だ」

「あのやたらと速い鉄の馬でか。遠いの」

陰陽道は神道や仏教のように神社や寺のような専門の建物はない。一成の土御門家は正統なる陰陽道を称しており、一成の実家から少し離れたところに土御門神道の陰陽道祭祀を行う祭壇がある。かつての安倍家の知行地である。

駅から携帯電話でタクシーを呼び、乗り込む。土御門の屋敷へと言えば地元のタクシー運転手ならすぐに通じる。もしかすれば「土御門の坊ちゃんですか!? お久しぶりですねえ!」などと言われかねない。広い日本屋敷に住む地元の名士の子、それが表から見た土御門一成である。

駅前から離れるとすぐに景色は見渡す限りの田んぼと畑、そして遠景に山を臨むようになる。急発展する春日に暮らし、一年ぶりに戻ってくるあまりの自然の多さに新鮮な驚きを覚えてしまう。年々紅葉が遅れているが、流石に見渡す木々は赤く染まっている。そういえば、家には何の連絡も入れていないことを一成は思い出した。もうここまで来たら連絡の意味もないだろうと携帯電話を鞆にしまった。

村の入り口は天を衝く杉の巨木が目印だ。たどり着くまでいくつかの神社を通り過ぎる。

周囲には歴代の当主の墓も並び、静けさだけがある。

一成は一成なりに魔導の家であることを誇っている。だが、その実家での暮らしが本当に快いものであったかは、実家の外で暮らし始めてからよくわからなくなってしまった。

魔導の家はその魔術刻印を伝える者さえいれば、実子でなくとも養子でも後を継げる。だが、その家の魔術に適性のある者に後を継がせることがよいため、通常は実子に継がせる。

しかし、土御門の陰陽道の刻印は他の魔導の家系と馴染みにくかった。養子をとり刻印を移植しても、完全に研究結果を残せない。大きく研究を後退させられることになるため、土御門の家は出来る限り自分たちの実子に継がせることに固執したのである。

しかし、その努力は報われなかった。

一成は生まれたときから、一族の絶望の中にあつた。正統なる陰陽道の家系は、一成の代で潰えると残念そうに嘯かれ、その一方でお前さえ全うな魔術師となれば土御門は絶えぬと祖父に厳しい魔術の修行を仕込まれた。そのくせ両親は魔術師などにならなくてよかつたと喜ぶのだ。

運転手がつきましたよ、と声をかけてきた。流石に一時間も乗っていると代金はばかにならない。そもそも往復の新幹線代で涙目だった。日々ギリギリの生活を送る一成は早くも心折れそうだったが、ここで心折っている場合ではない。

周囲を笹林で囲まれた、日本家屋というより日本庭園と言う方が似つかわしい、土御門の家。

自然が豊かと言えばそうだが、ぶっちゃけた話、ど田舎である。一成は竹垣が張り巡らされた庭を横目で見ると、松も池も、その水の澄み具合も一年以上前にここを出たときと変わらない。静かだが、緊張を強いる雰囲気がこの家にはある。

そうはつきりと感じるようになったのは、家を出てからだ。家に使える女中は、一成の姿を見て飛び上がらんばかりに驚いた。

しかし一応嫡男故にすぐさま通され、居間で待つように言われた。

一成は正座をして祖父を待った。女中に聞けば、祖父は家にいるそうなので呼んできてくれるという。聞かずとも、病床にある祖父は家にいるに決まっていると知っていた。

『なんとなく懐かしい雰囲気をするのう、ここは』

『は？お前、こことゆかりでもあんのか』

『特にないと思うがな、こう、陰陽寮の雰囲気を薄めた感じと言うのか……』

平安時代——人々が呪いや物の怪を近く感じていた時代は、陰陽師も近しく感じられる時代でもあった。一成の緊張をよそに、アーチャーは霊体化したままあちこち見ているようだ。のんきなアー

チャーにいくら緊張を解されたとき、静かな足音が近づき、すぐそばの廊下で止まった。

「待たせたな、一成」

机を挟んで、祖父——土御門嘉昭（よしあきら）は胡坐で座った。今年で八十になるが、背も曲がっていない。一見元気そうに見えるが、既にその体は病魔に蝕まれており、土気色の肌がそれを如実に表している。土御門家現当主を前に、一成は上ずった声を上げた。

「……お久しぶりです。御爺様」

一成は駆け引きの類は得意ではない。意を決して口を開いたが、嘉昭は一成の訪問理由を見抜いていた。しわがれているが、鋭い声は一成を怯ませるものだ。

「……聖杯戦争に参加しておるのだろう。人ならぬ、それにしても高貴すぎる気配がお前の周囲を漂っている。式神……聖杯戦争になぞらえるならば、サーヴァントか」

「おや、話が早くて助かるではないか」

アーチャーは霊体化を解いて、衣冠束帯の姿を現した。嘉昭は目を見張ったが、予想の範囲内であつたらしくすぐに一成に視線を戻した。

「お前がこのような立派な英霊を呼び出せるとは思わなんだ。思う存分聖杯戦争を戦い抜くと良い」

激励するようでいて、それは上を滑っていくだけの言葉である。祖父が自分の事をどうも思っていないことくらい、一成にもわかる。

聖杯戦争は一度きりのものではなく、魔力が聖杯に再充填されれば再び開かれる。祖父は此度は無理でも、次回に望みをかければよいと考えているに違いない。元々魔術を学ぶ際にまず教わることは「諦めること」である。根源には決して一人ではたどり着けない。自分は辿り着けずとも、次代は必ず——そのように教えられる。だから嘉昭はその通りに次代へと望みを託そうとしているのだ。

「春日の聖杯戦争を始めたのは、アインツベルンと土御門と聞きました

た。何故、冬木の聖杯を春日につくろうと思ったのですか」

「何だ、てつきり土御門の魔術礼装でも貸してくれと泣きつきに来たのかと思うたわ」

「質問に答えてください」

幼いころ、厳しく修業を教えられたせいで一成にとって祖父は、畏怖の対象でもある。けれども、これを問うためにここに来たのだ。嘉昭はやれやれ、とため息をついた。

「……決まっておろう。我が土御門の家系を絶やさぬためよ。三十年と少し前か……アインツベルンたちが聖杯の復活を目論んでいると知り、それに手を貸した。予定では五年で魔力が大聖杯に溜まり、戦争が始まるはずだったが、始まらんかった。もし予定通りだったならば、お前は違うお前であつたらう」

二十五年前に聖杯戦争があつたら、参加をしたのはこの嘉昭だろう。病魔に体をむしばまれておらず、老練した陰陽術を駆使する、土御門家最後の華とさえ言われた祖父である。どんな手を使っても聖杯を狙つただらう。

「……お前は違うお前……?」

意味が即座には理解できず、一成は祖父の顔を凝視した。

「我が家系を絶やさぬようなお前が生まれていたと言うことよ」

もし予定通り戦争がはじまり、土御門が聖杯を得たとしたらその願いは「根源に至り、家系を存続させる」こと。つまり嘉昭は陰陽五行を得た大陰陽師となり、また次代の子跡継ぎとしてを最高の魔術の素質を持つ大陰陽師となる運命をもつ子にするということだ。

即ち「土御門の魔導を成す」以外の道をすべて失って生まれる人間。果たしてそれは真人であるのか。

かの人形のような少女は言った。「私はこの聖杯戦争のためだけに作られたホムンクルスよ」と。

たとえ人形として生まれても、そのあと何を感じて、何を思うかで人間になる。一成はそう思う。

キリエは自分を人ではないと言うが、一成は人だと思っている。

最初から「そうするしかない」道を定められて、それに従って生き

させようとする行為は真に子を、人を産もうとする行為とは思えない。真実思いのままになる人形をつくるのとなんら変わらない。

「……我が土御門は数えれば千年続く魔導の家。俺はそういう家に生まれて嬉しかったし、誇らしいとも思いました。だけど、その歴史を絶やさぬためにそんな、人を人形のように操るなんて外道なことをしているとは思えません」

一成の反抗ともいえる態度を見ても、嘉昭は感情を動かさない。疾うに知っていたことを再確認したように、飽き飽きとため息をつくのだ。

「……やはりお前は不出来な孫。お前の父と同じよ。まるで凡俗のようなことを言いよる。我らは魔導を極めるためにある一族。先祖代々、そうしてきた。その重さをわかつているからこそ、お前の祖母はその身を聖杯に捧げたのだ。あれは全てを我が土御門に捧げた佳き女よ」

祖父の口調と表情には、悲しみや憤りの色は皆無だった。むしろ、古きを回顧するようである。

「しかしな、それからよ。お前の父が魔導に励まなくなったのは。……お前が生まれてからも、その貧弱な魔術回路をむしろ喜ぶ始末」  
唾棄すべき、といわんばかりに怒気に満ちた口調だった。祖父は一成にはもう何も期待していないゆえに怒りも悲しみもないが、正明——嘉昭の息子には忸怩たるものがあつた。けれど、一成は父の気持ちを理解した。

——父はついていけなくなったのだ。

おそらく一成の母もそうだろう。魔導の跡取りとして育てられながら、その考え方はあまりにも一般人であり過ぎた。

魔術師の所業——嘉昭のような考え方がおかしいと思われるのは現代の一般人からみた場合でしかない。時と場所が変われば、常識も変わる。

だから、一成の父は、母は、この土御門という世界では異端だったのだ。そして、一成もまた魔術師であるにはあまりにも普通の人間に

なりすぎた。

祖父の思想と、両親の思想で挟まれた一成は、根本のところでは両親の思想を良しとしていた。根っこが世間並の人間だから、キリエの言っていることがわからない。嘉昭の発言をおかしいと思ってしまう。

結局、一成はバーサーカーのマスターのように、人を生贄にして叶えたいほどの願いはない。根源——陰陽五行に至るよりも、人が食い物にされていく方が苦しい。

(……じゃあ、俺は何のために戦争するのか)

陰陽五行に至ることは、もう目標ではない。己が何をしたいのか、模索しなければならぬ。自分が何を指すのかはまだわからない。それでも、無為に人を殺すバーサーカーのようなマスターがいるのなら、それを止めなければならぬことだけは変わらない。

腕は半人前でも、自分から聖杯戦争なる戦いに参加した「魔術使い」なのだから——。

一成は不思議と落ち着いた心もちになり、真つ直ぐ己の祖父を見た。

「……二十五年の時間差があつたとはいえ、聖杯戦争は始まりました。御爺様は、土御門の魔術師を参加させるつもりはなかったのですか」  
いわば土御門は春日の始まりの御三家である。聖杯戦争の開始も早くから知りえたはずで、いくらでも準備のしようがあつたのだ。だが、血を続けようという思いはありながら、一族で聖杯戦争を無事勝ち抜けるほどの素質をもつ魔術師が見つからなかった。

嘉昭は既に病身であり、命は長くない。一成の父は魔道を断念した者であり、一成は言わずもがなだ。その上、本家本元冬木の聖杯戦争御三家の一、アインツベルンが参加している。この体たらくでは、参加しても限りなく勝機は薄いとみていた。

「……我が家は、他から養子をとることにした。土御門の魔導は大き

く後退を余儀なくされるが、致し方ない」

今の土御門では、聖杯戦争を勝ち抜くことはできない。次の開催を待つとしても、次もおそらく同じ程度の時間はかかる。ならば、苦渋の決断として他の民間陰陽道から養子をもらい、魔術刻印を移して命脈を繋げることを選んだ。

一成の父正明は魔導に背を向けたがゆえに、後継者として認められず刻印を受け継いでいない。

一成は、中学時代にすでに嘉昭から資格なしと言われていたため、もちろん少しも移植していない。土御門の刻印はまだ嘉昭に残ったままだ。それを、他派の陰陽道術者に渡す。

ここに至って、一成ははつきりと「後継者ではない」と最後通告を行われたようなものだ。しかし、一成の顔に悲壮の色はなかった。

匙を投げられた時に、もうわかっていたのだ。

「……最後に一つだけ、聞かせてください。俺の御婆様が聖杯の核になったと聞きましたが、御婆様はその時どんな様子でしたか」

「……不思議なことを聞く奴よ。かの女は喜んで身を差し出した」

「そうですか」

ならばよい。魔術師の妻として生きた祖母が、魔術師の価値を良しとして身を差出したのならば——一成には許容できないが——無理に贖となったのではない分、救われる。

獅子絨が音を立てる。祖父と孫の間に交わされる言葉はもうない。嘉昭は病身で、一成はもう席を外そうとした時に、縁側を騒がしく走る音が聞こえた。同じく女中が驚く声も聞こえてくる。

「一成!!」

すぱんと障子が開かれる。息を切らしながら姿を現したのは、土御門正明——一成の父だ。今日は日曜日ゆえに、浴衣を着てゆっくり眠っていたところを飛び起きて駆け付けた様子だ。眼鏡はかけていないし髪はうねったままだ。

「げ」

「一成は借りますよ！」

「好きにせい」

一成は拒否する間もなく、腕をつかまれずんと引きずられるように連行されていく。絶対に怒られるだろうとは思っていたが、唐突過ぎて何が何やらである。アーチャーは律儀に二人の後ろをついてきている。というか若干「当然じゃ」とでも言いたげな雰囲気を出していた。

母屋から離れた、両親が起居する部屋へ連行された一成は正座で座らされていた。アーチャーも一成の隣に座っているが、どこ吹く風で胡坐をかいて自分の冠の纓えいを弄んでいる。

正面には一成の両親、土御門正明と泉希が座っている。

両親はアーチャーを気にしながらも、厳しい目を一成に向けていた。祖父と対していたときの緊張は完全に吹き飛んだが、これはこれで修羅場である。覚悟はしていたが唐突だった。

というかどこから一成が聖杯戦争に参加していると聞いたのか。もしかしたら先の女中が注進しに言っていたのかもしれない——一成はどうでもいいことに意識を飛ばしかけたが、厳しい父の声により引き戻された。

「何で黙って聖杯戦争なんかに参加したんだ、一成」

「……土御門の魔術師として、血を絶やさないように五行——根源に至るチャンスだと思った。でも、父さんと母さんは絶対「危ないからやめろ」っていうと思ったから」

「当り前だろう！それにお前がそんな責任を負う必要はないと前から言っているだろう！」

「もう根源に至ろうって思っていない」  
「今からでもやめなさい。棄権つてできるんでしょう」

一成はアーチャーを横目で見る。それを受けて、アーチャーが口を差し挟んだ。

「できるぞ。教会に行き、棄権の意を表明してこの令呪を一度監督役に返す。そこで私と一成の契約関係は解消され、私は新たにマスター



が選定されるのを待つ。一度マスターになった者は再度マスターに選ばれる可能性が高い故に、戦争が終了するまで教会に保護されている、ということになるのか」

正明と泉希は胸をなでおろし、口を開きかけたがアーチャーが遮った。

「だが、そなたらの息子はやめる気はないようだが」

一成は頷く。「父さん、母さん、黙ってたことは本当に悪いと思ってる。ごめん。でも俺は聖杯戦争を続けるよ。まだやんなきゃいけないことがあるんだ」

両親は酷く傷ついた顔を見せた。決して悲しませたいわけではない。それでも、一成は戦うと決めた。春日で暴れるバーサーカーを止めなければいけないと両親に伝えるが、それでも二人は引かない。

「それはお前がしなきゃいけないことなのか。他に任せられないのか」

「俺以外にも倒そうとしてる奴がいる。俺はそいつと一緒に戦うと約束したし、何より途中で投げ出したくない。俺は聖杯戦争を二度と起こさせたくない」

もうたくさんの人が死んでいる。そんな戦争など、二度と起こすべきではない。優秀な魔術師である明と、最優のセイバーがいるから、一成などいなくてもどうにかなるのかしれない。

それでも、自分にできることがあるのにそれを放り出していくことはできない。

「むちゃくちゃな始め方をしたけど、俺が始めたんだから最後までやる」

「だからお前がそんなことまでする必要はない！死ぬかもしれないってわかってるのか!!」

一成と父の正明は、二人とも譲る気配がない。すると、母の泉希が唐突にアーチャーに対して口を開いた。

「あの、アーチャーさん？」

「アーチャーで構わぬ。何ぞ」

「貴方にも願いがあつて、この戦争に参加しているんですよ?」  
「そうだが、それがどうかしたか?」

「うちの一成は、恥ずかしながら魔術師としては未熟極まりないです。土御門はこの子で終わりって言われています。貴方が願いを叶えるためには、他のマスターにした方がいいんじゃないでしょうか」  
「ぶっ!!」

母親の斜め上の攻撃に、一成は顔面から畳に突つ伏した。父の方は父で魔術師としてどれだけ一成が残念かの話も始めそうである。そしてアーチャーもそれに同調するように頷いている。

「一成の魔術回路がアレなのは既に散々言い倒しておるし、そもそも博物館で「どれが触媒になってもそれなりが出てくるだろ」という呆れ果てるような召喚で私を呼ぶし、恐ろしいくらい考えなしであるし、その上私の清明の末がコレかと知った時には時の流れの残酷さを感じたものじゃ」

アーチャーは至極真顔で流れるように一成をこき下ろす。両親とサーヴァントからの酷評に、知つているとはいえ流石に一成も傷つく。

「ま、それでもこやつは無駄にポジティブ故に立ち直りが早い。それに、何より頑固であきらめが悪い。おそろくな、私が何と言おうとそなたらが何と言おうと続けよう。もしこやつを監禁などしようとしても、令呪の一面でも消費してここから離脱するくらいのこととはしかねんどぞ」

「お前すごいな、よくわかったな」

「馬鹿者、そなたとは生きてきた年数が違うわ」

アーチャーは一成の頭を扇で叩いた。正明と泉希は絶句したが、そういわれては止めるすべを持たない。人知を超えたサーヴァントを行使すれば、一成は両親の意をいつでも無視できる。元々、一度決めたら動かない子であることは二人ともよく知っている。

——今となつては、彼らには願うことしかできない。

「アーチャーさん……一成の事を、よろしくお願いします」

「その「よろしく」が一成を無事に返せと言うことなら承知しかねる。私は他のサーヴァントに後れを取るつもりもないが、勝利を確約できるほど強いわけでもないゆえにな」

一成はアーチャーを肘でつつく。そこはどうであれまかせると言つてほしかった。しかしアーチャーははつきりと宣言する。

「だが、私には願いがあある。私はなんとしてもその願いを遂げる。ゆえに、一成は帰ってくるであろうよ」

一成の両親はお互いに顔を見合わせた。そして深々とアーチャーに向かつて頭を下げた。

とりあえずその場は収まった。一成たちは夜までには春日に戻らなければならぬが、まだ時間はある。一成は昼ご飯を両親と共に食べてから帰ることになった。予想はしていたが、こう家庭内事情を他人に見せるのはどうも恥ずかしい。一成は小声でアーチャーに言った。

「なんか、俺んちのごたごたに捲き込んで悪かったな」

「気にするでない。あの程度、騒ぎのうちに入らぬわ。私の時代の、家庭内トラブルというのか？はもつとデスパレートな感じだったからう。そのうち話してやろう」

アーチャーの真名を感じている一成は苦笑いを浮かべた。アーチャーの時代の家庭内トラブルは国家を動かす家庭内トラブルだ。聞きたいような聞きたくないような。

両親はアーチャーをも昼ごはんに誘ったが、家族水入らずを邪魔しては悪いとアーチャーは姿を消した。

\*

一成がアーチャーを呼び出したときには、既に午後三時を過ぎてい

た。今から帰ると、春日につくのは午後十時近くになるだろう。やはり両親はまだ何か言いたげであったが、仕方がない。

一成たちは涙を呑んで金を払ってタクシーにのり、涙を呑んで金を払って新幹線に乗り込んだ。再び新幹線の中は人少なであり、アーチャーは実体化してシートに座っている。

一成は遠くなる夕暮れの景色を眺めながら、静かに呟いた。

「俺はバーサーカーを倒すぞ、アーチャー」

「いまさら何を言う？」

「……俺は、自分が傷つく覚悟はしてた。だけど、自分が人を傷つける覚悟つてのをしてなかったと思う」

バーサーカーのマスターが人を食うことを良しとしているから、凶行を止めるためにそのマスターを殺す——その行為をして、一成の両親は喜ぶだろうか。

今日、改めて考えたが、きつと喜ばないと一成は思った。アーチャーはいつもの調子で扇で一成を叩いた。

「それはそなたの認識が甘かったということじゃ。戦争、とつく意味を考えよ」

一成として自分が傷を負うことや、殺されることは考えていた。自分よりも遥かに幼い女の子がためらいもなく人を食い物にしていることに圧倒された。

それでも、これまで己が殺すことの意味を考えていなかった。確氷のマスターは言った。「こうなっちゃただの殺人鬼」と。彼女は自分が人を殺すことを考慮に入れていた。一成はいれていなかった。

「貴族に言われるとはなー」

「そなたのー」

とことん呆れた、と言わんばかりの声が無も無いはずの上空から降ってくる。

「ひよっとして平安時代は貴族が女子といちゃいちゃしてる呑気な時代と思っではおらぬか？」

「……そこまでは思っただねーよ。俺の先祖の時代だぞ」

ならよいが、とアーチャーは咳払いをした。

「確かに他時代と比べて、大きな戦乱はなかった。それでも都にはいつも強盗が蔓延っており、夏に疫病が流行れば街路も河も死体だらけになった。また飢饉が起こっても同じぞ」

戦乱の無い「平安」と呼ばれる時代を生きた、権力者の話である。茶化す様子のないアーチャーの話は、身につまされることが多い。

「それに比べれば現代はよいわ。とりあえず日本に大きな戦乱はなく、強盗の凶悪さも平安と比べればかわいいものよ。だが、そなたはこの現代が本当に心から平等で素晴らしいものだと言えるか？」

「いや……」

ニユースでたまに見る。本当に幸せな世の中で、年間三万人も人が自殺するか。世界でも紛争も戦争もなくならない。そこまで大きな話ではなく身近な例をとつても、最初から金持ちの家に生まれるか、貧乏な家に生まれるかで絶対に有利と不利が、努力云々の世界を超えて存在する。

「結局はいつの時代もそうよ。人には格差があり、恵まれた人間と恵まれない人間がいる。現代も生前の私も同じだ。殺す殺さないというふうな極端な形では現れない戦いだっただけで、それは戦争に他ならぬ。己の願いを叶えることで、他の人間が夢に破れる」

平安時代の貴族は、聖杯戦争のような直接的な闘争を生前にしたことはないだろう。しかし英霊となり、「戦いたくない」といいながらも、白兵戦に優れずとも、いざとなった時にアーチャーがひるむことは一度もなかった。

それは戦いが形を変えたただだとわきまえていたからだ、一成はわかった。

「生きることとは戦うことじゃ。人が人である限り、それは変わらぬ。もし誰も争わぬ戦わぬいがみ合わぬ憎み合わぬ、真に平和な時代がくるとしたら素晴らしからう。だがそこに生きるモノは人間ではない。別の何物かよ」

こんなことを言いながらも、おそらく生前のアーチャーは人間が好きだった、一成はそう思う。そもそも、人間嫌いが多くの人に関わる権力者などやっていけないはずがない。アーチャーはお人よしだと思

う。一度懐に入れてしまったら、離すのが惜しくなってしまうのだろう。

こんな説教は、聖杯戦争には余分でしかないのだから。

「お前は、人の願いとか夢を潰しても、自分の願いを叶えるのか？」

アーチャーの答えには淀みがなかった。

「叶える。生前も今も、それは変わらぬ。私は私の願いを遂げるために、今ここにいるのだから」

一成は背伸びをして席にもたれ掛った。まだ十七歳とはいえ、生まれてからの多くを魔術に費やしてきた人間である。幼少から言い聞かされてきた目標が消えてしまった一成にとっては、目指す目標があることは羨ましいことだった。

「でもま、それだけの夢があるってのは悪いことじゃねーよな。俺はもう挑戦する前に夢破れてサンガリアって感じになっちまった」

「……そなた、わざと言っているのか？」

また、元ネタの漢詩としては『夢破れて』ではなく『国破れて』が正解である。絶妙に脱力させられたが、アーチャーは気を持ち直す。

「夢は良い。生きる糧にもなろう。だがな、それが叶わず見果てぬ夢となった時——夢は一步間違えれば呪いとなる。それに取りつかれて追いかけて続けて、結局自分の生全てを壊す」

それに、とアーチャーは息を吸った。

「私の時代はな、怨霊というものが幅を利かせる時代であった。夢を叶えた者は、叶えられなかった者達の無念を全部引きずっていくことになる」

「それ、夢を叶えても叶えなくてもキツイじゃねーか。けど——それでも、お前は夢を叶えるんだろ」

一成はアーチャーの答えを知っている。

人の無念と後悔と恨みを誰よりも知りながら、彼はそれでも逃げないだろう。

彼は震えて怯えながらも、欲にまみれた、どうしようもないほどに「人間」であるために。

「そうだ」

「そういうと思つたぜ。お前欲深そうだもんな。安心しろ、俺は最期まで戦うから、お前はお前の願いを叶えろよ」

呑気に笑う一成を見ながら、アーチャーは目を細めた。

おそらく一成は魔導であつてもなくても、自分のしたいことを新たに見つけるだろう。

もちろん、これはアーチャーの勘である。

一成はバーサーカーのマスターやセイバーのマスターの魔術を目の当たりにし、一成は己の未熟さを知つた。そして、己が誇つてきた魔導の正体——その極端な姿を目の当たりにして、あまりにも一成自身が「良し」とするものからかけ離れていたことを知つた。

それでも、アーチャーのマスターは嘆かない。願いを失つても、力が足りなくても戦いを辞めようとはしない。死ぬかもしれない戦いに怯みはしない。また、新たな道を模索する。

傍から見れば、アーチャーは紛れもなく人生の成功者である。

失敗し、底から這いあがる者の強さを彼は知らない。しかし、彼は覚えている。

一成は似ている。アーチャーが生前羨んで止まなかつた者に。

そのアーチャーの心を知っていたものは、当の本人も含めて誰一人いなかつたかもしれない。

欲深そうと言つた一成の言葉は本当だ。成功を続けると、失敗できなくなる。得れば得るほど不足を感じ、不足だと思つたらさらに求める。また得るからさらに不足を感じる。

この終わりのない贅沢の飢餓というべき感覚は、英霊となつた今でもアーチャーの魂を責め苛んでいる。

——私は、私の願いを叶える。

アーチャーは召喚された時から、そのことだけを考へている。

12月1日② ありふれた不幸と幸福

ランサーとの交戦から一夜明けた日、悟とアサシンは午前九時頃に起床した。サーヴァントは霊体化でき、かつ眠る必要はないと豪語していたわりに、アサシンは実体化して爆睡していた。六畳一間のアパートでは本当に狭い。

悟は台所兼洗面所で身支度を整え、昨日のようなラフすぎる格好ではなく、ワイシャツにズボンの格好になっている。

「ちよつとアサシン、今日はしばらく離れてほしいんだけど」  
「あん？何言ってるんだお前死にたいのか」

昨日、聖杯戦争に参加すると決めたときからアサシンの機嫌が妙に悪い。やはり魔術師ですらない自分がマスターになることが不服なのかと聞き返したら、違うとはつきり返された。

それでも普通に行っているだけなら、アサシンは刺々しいところはない。悟はもう一度頼む。

「でも昼間の間だけなら」

「俺の前のマスターは白昼堂々ぶつ殺されたぜ？」

それを言われたらぐうの音もでない。するとアサシンはいきなり面白そうに起き上がり、にやにやと笑ってくる。

「まさか姉ちゃんとかエロんなことをするとかか!!俺も連れていけ!!」  
「違う!!なんでそう昼から下ネタなんだ!!」

なれなれしげに肩を組んでくるアサシンを振り払おうとするが、流石人外。がちりホールドされて離せない。アサシンは謎のスマイルを浮かべ、ついでにサムズアップも付け加え、下着姿の女性が表紙の雑誌を丸めて叩いてくる。

「サーヴァントは魔力さえあれば睡眠も食事も要らねーが、できないわけじゃねえ。そっちに關しても同じだから不能じゃねエ。どこまでも付き合うぜ、兄弟」

「だから違うって言ってるだろ!ってかその雑誌どっから持ってきた!俺んちにあるやつじゃないだろ!」

抑々悟は今のご時世インターネット動画派である。サンプル動画



で十分イケる。アサシンは自慢げにドヤ顔をキメる。「ホラ、俺は日本の大盗賊だからな?」

「エロ本盗んでドヤ顔してんな! それでいいのか大盗賊!! 俺はな、今日は清らかな気持ちでいるんだよ!」

「お前の家の女つ気のなさやべーし、普通隙あらばまぐわおうとするもんじゃね? 清らかって何? お前仙人か何かか? 引くわー」

「こつちがドン引きだよ! お前何しに現界したんだよ!!」

「そりやナニしに……」

もがきまくる悟に観念して、アサシンはさつと飛びのいた。ぼりぼりと頭を搔いてから腰に手を当てる。

「とまあ冗談はさておいて、マジでこの時期にサーヴァントなしでほつつき歩くのは危ねーぜ。俺が邪魔なら霊体化してるし、悪いことはいわねーから連れてけって」

たっぷり三十秒も間をおいてから、苦虫を百匹くらい噛み潰した顔をして悟は頷いた。現にマスターを殺されたサーヴァントがそう言っているのだから、説得力も並々ではなかったのだ。

「……絶対霊体化したままでいろよ」

「はいはい」

いい加減で胡散臭い返事をして、アサシンは姿を消した。悟はジャケットを羽織り、鞆を持つとアパートを出た。

\*

「過去をやりおしたいなあ? そりやまた何でだよ」

アサシンは畳の上に胡坐をかき、煙管を持って眉をひそめた。アサシンにとっては予想外の願いだっただけ。悟にとってはあまり話して楽しいことではないし、むしろ思い出したくないことだ。それでも、これから共に戦う相手に隠しておくわけにもいかない。

悟は現在三十五歳、妻とは別居中である。実は五年前に結婚し、今年四歳になる娘もいる。今は無職だが、一年半前まではとある商社に経理として勤めていた。

妻とのなれ初めは趣味の登山がきっかけで知り合ったと言う有体なものだ。なれ初めは有体だったが、妻は地方の名士の娘で、なかなかのお嬢様であることを後から知った。

彼女の家は今時（と、悟は思った）相手の家柄も重んじる体質だった。小さい頃に父を亡くし、母の手一つで育てられた悟の家は御世辞にも裕福とはいえなかった。元々勉強が好きではなかったし、早く働いて金を稼ぎたいと思っていたため、高校を出たらすぐに就職した。そのような生まれの為、結婚までこぎつけるには大変苦労したことを今でもよく覚えている。

マンションを借りて、二人で暮らすうちに子供もできた。多分、悟の人生で一番幸福だった時期である。子供が――名前を華という――が三歳の時、このまま今のマンションに居ては手狭であり、将来のことを考えてマンションでも一軒家でも買おうかと相談した。

そしてローンを組み、春日から三駅離れた地にマンションを購入した。

半年前、悟は急に上司に呼び出された。特に心当たりのなかった悟は、何かと思つて個室に向かった。そして、いきなり自主退職を進められたのである。

不景気で会社の経営が厳しいことは知っており、早期退職制度などが会社にあることも知っていた。それでも何故自分がそんなことを言われなければならないのか全く理解ができなかった。

そこで詳しく問い詰めたのだが、とんでもないことが起きていた。会社の金が一年に渡り横領され、総額一千万に上つていたと言う。そしてその犯人はお前だろうと、暗に言われた。勿論悟に心当たりなどない。必死で否定するも、むしろ認めないと懲戒解雇、刑事告訴もありうると脅された。

悟は事態を説明すべく、経理で金の流れを追い真犯人を探した。結

果、横領の犯人はその上司であると——推測できた。推測は出来ても、証拠がなかった。上司は会社の役員に根回しや交渉を全て整えて終えていて、それらを終えたうえで全てを悟に追いかぶせたと知った時にはもう手遅れだった。

なまじつか自主退職を拒み、真相究明に乗り出したせいで上司の追立は苛烈になり、気づいたときには、懲戒免職になっていた。

俺は悪くない。何もしていない。誰にもその声は届かない——否、悟の妻はその声を信じた。

しかし、彼女の実家はそれを許さなかった。

元々悟が熱意で押し切った結婚だった。その事件が起こる前から舅を筆頭に妻の実家とは仲が良いとは言いが難かった。華が生まれたことでそれも若干緩和されていたのだが、この失態は取り返しがつかなかった。たとえ悟に非がなかりうとも。

会社を懲戒免職になったこと自体が、妻の実家にとってはありえない。妻は離婚しないとやってくれたが、強制的に実家に戻された。ローンを組んだ家はすぐさま売りに出された。

無職となった悟は、なんとか今のアパートに転がり込んで生活を始めたが、懲戒免職というレッテルは重かった。カスミハイツに入居してからそろそろ半年が経つ。未だ次の職は見つかっていない。ブランドが空けばあくほど再就職がしにくいことくらい、悟とて知っている。

懲戒免職が響いていることも原因だが、なんとといっても、悟に再就職の意気込みがわかかなかった。何とか就職しなおしたとしても、一度会社にバカを見させられた身としてはまた同じことがあつたらたまらない。それこそバカバカしい。

しかし、再び職を見つけないければ、堂々と妻の実家に妻を向かえに行くことも許されない。

しかし——その堂々巡りから、悟は一步も足を踏み出せないでいる。

このままだと本当にダメになってしまう。焦りはあるが、体が動か

ない。

——そんな時に降ってわいたのが、アサシンのサーヴァント。勝者は何でも願いを叶えられると言う聖杯を巡る戦争。

ついに自分は幻覚さえ見るほどダメになつてしまったのかと思つたが、幻覚ではなかった。悟はこの目で、人ならざる者たちの光景を目撃したのだ。

アサシンは命がけの戦いだと言つた。お前の願いは、お前の命を差し出すに足る物なのかと。

悟は笑つた。大体の願いなど、この体によりも価値があると嗤つた。

——別にいいじゃないか。すでに腐りかけた体だ。おめおめと騙されたまま泣き寝入りするしかなかったつまらない心だ。其れを掛けることで、全てが元通りになるなら素晴らしいことじゃないか。

いつもへらへらしているアサシンの顔が固まつた。眉を寄せ、珍しく難しい顔をしてそうか、と呟いていた。

\*

日曜日の春日公園は、親子連れでにぎわっている。住宅街の中にある、そこまで広い公園ではない。置いてある遊具はブランコ、シーソー、砂場、ジャングルジム程度である。

公園と道路を区切るフェンスには植込みがあり、この季節でも花が咲いている。

(……やっぱりこうなつたか……)

そのにぎわう公園のベンチで、悟は顔を覆っていた。予想していた。うん、予想はしていた。悟の視線の先には、真っ黒い雨合羽を着、年端もいかぬ少女を肩車してロボットの如きにカクカクした動きで

歩むアサシンの姿が在った。

想像の通り、年端のいかない少女とは悟の娘の華である。

「アサシン号はっしーん！」

「ウィーンガッション、ウィーンガッション、プシュー」

無駄に機械声が上手なのが妙に腹立たしい。そして娘が楽しそうなのが見えます。やりきれない。

「えーはっしーん!!」

「エネルギー ギレ デス。 キャンデーヲ ホジユウ シテ クダサイ」

「もーアサシン号はわがままだなあー!はい」

華はポケットに入れていたキャンディをアサシンの口に放り込む。すると再びカクカクした動きで前進を始める。すっぽり黒い雨がっぱを着ているという風貌が相まって、怪しげな感じが好評を博し近所の子供にまでたかられている。

しかも、隣に座る妻まで肯定的な様子でアサシンを見ている。

「貴方、あんな人といっお友達になったの?」

「あ、飲み屋に行ったときに思わず意気投合して。全身雨がっぱですごくアヤしいけど、日光に当たるとかぶれる病気なんだと」

即興で考えたアサシンの設定だが、妻は疑った様子もない。それどころかむしろ嬉しそうだ。

妻と別居はしているが、離婚をしたわけではない。妻は月に一度、華を連れて春日市にやってくる。用事があつてのことだが、その間は華を悟に預けて夕方に迎えに来る。

まるで離婚して、法律で月一でしか会えなくなったようだと思うと悲しくなるが、妻は実家から悟と会うなど言われているそう。今、公園で二人で話しているのを見つかつてもまずいことになる。

妻の着ているコートは同居していた時に、誕生日プレゼントに買ったものだ。

「最近、元気?」

「あ、う、うん。お前は?」

「元気よ。華も見えての通りだし」

そっか、と悟は口クな返事を返せない。聖杯戦争——そのことを話すわけにはいかない。話したところで変な宗教にハマったのかと心配されるだけだ。

もつと話したいことはあるのに、話し方を忘れてしまったように言葉が続かない。

「……仕事とか見つかった？」

「いや、まだ……でもさ、もしかしたら、もう少し全部が元通りになる」  
聖杯を手に入れることが出来れば、全てが。悟は精一杯の笑顔を向ける。すると何を勘違いしたのか、妻は心配そうな顔を見せた。

「いくら御賃金が高くて、変な仕事についてちゃだめよ。貴方人がいいんだから、気をつけなきゃ」

「大丈夫だよ、変な仕事なんかしてないから」

そもそも仕事ですらないけど。妻は時計をみるとすつくと立ち上がった。用事の時間だろう。

悟も合わせて立ち上がる。遠くから華と、ついでにアサシンまで手を振っている。

「じゃあ、四時くらいにまたね」

「わかったよ」

妻の後ろ姿を見送ると、アサシンが華を肩車したまま近づいてくる。アサシンは周りの子供をかなり手荒に振り払っているが、雨合羽をむちやくちやに引っ張られて難儀していた。

ひいひい言いながら悟の元にたどり着いたアサシンは、昨日ランサーと戦った時よりボロボロに見える。

「あんのクソガキども!!」

毒づきながらも、華を地面におろす手は丁寧だ。何気に子供を扱いなれている雰囲気である。アサシンは華を下ろした後にくっすり悟に耳打ちした。「じゃ、俺は一度離れて霊体化して戻ってくつから」  
親子水入らずを邪魔する気は流石にないアサシンは、一度屈んで華に別れを告げる。用事があるからまたなど頭を撫でてから立ちあがり、踵を返して離れようとした。

だが、その雨合羽の裾を掴んでいる者がいる。言うまでもなく、華

である。

「あさしん、行っちゃうの?」

「……オジサン用事があるんだ、悪いなお華」

「行っちゃうの?」

「……悪いな、用事が「本当に行っちゃうの……?」

アサシンは黙った。悟はものすごく悪い予感を覚えた。アサシンは再びしやがみこみ、華の手を掴んだ。「お華、お前俺の嫁に「やめろ!!!」」

完全に予想外である。悟はどうしてこうなつたと悶々としながら、右手で華と手を繋いでいる。華の左手はアサシンに繋がれていて、男二人が幼女と手を繋いで歩いている摩訶不思議な状況だ。

しかも片方はこの晴天に黒い雨合羽を着ている不審者だ。

散歩をしながらやってきたのは、春日のショッピングモール。何でもあるし、駅前程迷わないためになんとなくここに連れてきてしまうが、そろそろ華が飽きやしないか不安にもなる。

その心境などつゆ知らず、アサシンは能天気の不穏なことを言う。「お華ってマジでお前の娘なのか?似てるところがカケラもねーぞ。魔性の幼女だな」

「魔性の幼女って何なんだ」

華が生まれてから最初に発した言葉がママなのは当然として、パパと呼ばれるまで三か月以上の空きがあったことを思いだした。仕事に忙しくあまりかわいがれず、なかなか呼んでもらえなかった悲しみが蘇る。華は無邪気に顔を上げた。

「パパとあさしんは仲良しなの?」

「うーん……」

仲良しも何も、出会ったのさえ一昨日である。この関係をどうこたえるべきか迷っていると、アサシンが勝手に余計なことを吹き込む。

「ま、俺がお前のパパの世話を焼いてるって感じだな」

「そうなの？パパがお世話になってます！ありがとうございます」

「あ〜さ〜しくん〜」

地を這うような声を聞き、アサシンはやっと口をつぐんだ。大の男二人のくだらない戦いを知らない華は、フードコートの一画にあるドーナツ屋を指差した。

日曜で少し混んでいるが、十時半くらいのため座るスペースにも余裕がある。

「ドーナツ食べたい！」

「おお、いいねえ。俺まだ食ったことねーや」

三人は仲良くドーナツを取る列にならんで、色とりどりのドーナツに目移りさせた。アサシンと華が雁首そろえて、やれオールドファツションだフレンチクルーラーだ、ろりぽっぶだとトングでとつていく。アサシンが子供に好かれるのは、大人なのに子供に近く、どこかガキ大将みたいなどころがあるからではないのかと悟は二人を見た。

悟は最早二人の子供を面倒見る心持になってきた。四苦八苦して会計を済ませ、フードコートの四人掛け席に陣取ってもさもさとドーナツを食べる。

アサシンが不可抗力とはいえ邪魔だと思っていたが、華が楽しそうならばそれでいい。アサシンも妙に間の取り方が上手いと言うか、気を使っているのか何くれと話を悟に振ってくる。

ずっと一緒に暮らしていた時は話すことに困ることなどなかったが、月一でしか会えなくなつてから、話したいことはたくさんあるくせに話せなくなること多かつた。

と、その時アサシンがいきなり顔を上げた。ものすごく苦々しい顔をしているのが、正面にいる悟には良くわかる。しかし、アサシンの視線は悟の後ろに向かっているようだ。

そういえば、この気配は前に感じたことがある。

「応応、ガンナーではないか！奇遇だな、共にドーナツとやらを食さないか！」

「本ツ……ランサー!!お前どーいうタイミングで出てくんた！」



筋肉隆々の大男が、TシャツGパンのラフな格好でドーナツをお盆に山盛りにして、にこやかに片手をあげている。アサシンは勢いよく立ち上がると、ランサーの首根っこを掴んでぐいぐいと遠くの席へ引きずっていった。念話でアサシンからの連絡が入る。

『ごっちはよろしくやつとくからしばらくお華と仲良くやれ!』

『そりやいいけど、まさかここで戦ったりとかするんじゃないよ?!』

『しねーよバカ!』

「あさしんどこいくの?」

まず悟は首を傾げている娘に、適当にとつてつけた説明をする作業をする羽目になった。

一方アサシンがランサーを離れた席へ連行し、二人で着席した。

ランサーは不思議そうな顔をしながら、山盛りに問ったドーナツを食べ始めた。

「なんだなんだガンナー」

「あんまりアレにつつかかかっていくなよ。相手なら俺がしてやる」

「あれはお前のマスターか?すると、あの娘は?」

「マスターの実の娘だ。っーかお前何やってんだ」

アサシンはランサーのドーナツを勝手にとって食べ始める。大の男二人が山盛りのドーナツを一緒に食べると言う実にむさくるしい光景だ。

「儂か?儂は折角現界しているのだからこの現世を楽しんでおかねばと思つてな、このように戦いのない昼は漫遊している」

「そりやよくわかるが、一人か?」

「そうさな、相方に案内をしてほしいところだか、どうも乗り気ではないようだ。セイバーとバッティングセンターとやらに行ったことがあるが」

「てーかどいつもこいつも現世満喫してやがんのな」

「お前もだろう」

「俺なんてまだまだだ。ところでセイバーってどんな奴だ」

「それは会ってからのお楽しみと言うヤツだぞ、ガンナー」

ランサーはセイバーについて話す気はないようで、楽しそうに笑いながらもりもりとドーナツを食べている。アサシンとしては正直話すことはないのだが、このままドーナツを食べるむさい男を見るだけなのも手持無沙汰どころか不毛である。

こちらは魔術のマの字も知らないマスターと、最弱のサーヴァントだ。折角の機会と、色々突っついてみるかと決めた。だが、それよりも先にランサーが話を切り出した。

「ガンナー、このところ続いている一家惨殺事件と昨日の病院テロ事件は知っているか？」

「知ってるさ。……もしかしてのサーヴァントの仕業か？」

ランサーは静かに頷いた。「そうだ。そして犯人も判明している……バーサーカーよ」

「ふうん。だがそれを俺に話してどうしてえんだ？」

聞きながらもアサシンは既にランサーの意を察していた。ランサーはそういう陣営を座してみていることを良しとはしないに違いない。

「今夜、アーチャーとセイバー、そして儂でヤツを叩く。お前にも協力してほしい」

ランサーは、自分がマスターの意に背いて参戦するためアーチャーとセイバーに多くの協力はできないだろうことも伝えた。しかし、アサシンはにべもなく断った。

「何故だ？お前はバーサーカーの所業を放っておくような英霊ではないと感じたのだが。このランサー、一度剣を交えた相手を見誤ることはない」

「ハン、仮に俺がそーゆー英霊であってもだ、マスターまでそうとも限らんぜ？」

すると、ランサーはきよとした顔ををして、ならばますます放っておくことはありえないだろうと笑った。先ほどの家族だんらんを思いつきり見られていたとすれば、確かにそうでありまた悟自体も根本的には放っておきたくはないタイプの人間だ。

アサシンは己の返しの下手さに辟易し、うんざりしながら再び口を開いた。

「お前こそ、一騎のサーヴァントに対して俺まで加わったら最大一対四だぜ？いいのかわか？」

生前のランサーは戦となれば無双の強さながら、正堂堂の戦いにこだわっていたわけではない。内応工作や調停もこなす堅実で着実な面も持つ武将であった。

しかし、先日戦ったランサーは戦いそのものを楽しみ、純粹に力を競い合うことを望んでいるようにアサシンには思えたのだ。

「アレは大勢の無関係の人間を殺している。斯様なサーヴァントとマスターは、完膚なきまでに倒さなければならんだろ。それに」

「それに？」

ランサーは少し口ごもったが、直ぐに笑って見せた。

「先程も言ったが、俺はどれだけその作戦に協力できるかわからなくてな。それゆえ、この戦いだけでも協力できる相手を増やしておこうと思った」

「……へえ」

ランサーの話はわかった。アサシンはこれでも庶民の為の英雄である。その討伐に加わることも吝かではないのだが、そもそもこの話自体が罠である可能性もある。

例えば集合場所に来たアサシンを、協力者のセイバーと謀って殺すなど。

生前のランサーと今の姿を省みると嘘をついているようには感じないが、こちらは武力で劣るアサシンだ。ランサーはアサシンの雰囲気を感じて、慌てて手を振った。

「おおっと、詰まらんことを考えるなよガンナー。しかしお前の疑惑もわからんでもないな……うむ」

どう信用されるべきか悩み始めたランサーを見ながら、アサシンも思案する。ちらと横目で見れば、娘と話して脂下がりまくりの悟が見える。彼と会ってから、あれほど幸せそうな悟を見るのは初めてだ。

アサシンは、悟は聖杯戦争に参加すべきではないと思っている。

昨夜の動機を聞くまでは、参加して共に戦うのも悪くないと思っていた。だが、ランサーと戦い、胸の内を聞いてから話は変わった。このまま悟を戦わせるわけにはいかない。

——悟に聖杯アレイなど必要ない。命をかけるなんて、命しかない奴がすることだ。

しかし、アサシン自体は聖杯戦争を戦うつもりだ。そして今日の前には、うまくすればバーサーカー、セイバー、アーチャーの情報を手に入れられるかもしれないチャンスが転がっているのだ。

虎穴に入らずんば虎子を得ず。「ちよつとマスターに聞かなきゃわかんねーな。それはいつだ？」

「今日だ」

「今日!？」

「偶然お前を見かけたから誘ったのだ。お前は決して根の悪いやつではないと思うからな」

本当に考えているのか考えていないのか読めないランサーは、嬉しそうに笑っている。それで重畳、と満足げにして、彼は言葉を残す。

「——今夜、この地の管理者、碓氷の家に十時半だ。そういう約束になっている。来ればお前のことはわしから説明しておくぞ」

へいへいと、アサシンが気のない返事をしたところで話は終わった。するとランサーはひよいひよいとドーナツを食べきってしまった。綺麗に御手拭で手を拭いて、ランサーは席を立つ。

「それでは、また尋常に戦おうぞ、ガンナー」

「そりゃー御免こうむるぜ」アサシンはげんなりしながら答えた。「全くつれない奴が多くて儂は寂しいぞ」

ランサーの後ろ姿を見送り、アサシンは机に肘をつけて、すぐ隣のガラスの壁から外を眺めた。振り返れば、悟と華もドーナツを堪能し終えたようでいいタイミングである。

アサシンは立ち上がるとやれやれと肩を竦めた。

その後、アサシン、悟、華のトリオはショッピングモール内を回りあれやこれやと見て回った。春日の街を良くわかつていないアサシンが、華と同じくらいはしゃぎまわるといふ奇怪な姿を見ることができた。

その後、モノレールで駅にまで戻り、駅の北を東西に流れる美玖川の河川敷を散歩した。今日は良く晴れており暖かく、実に散歩日和である。

途中でアサシンが川に落ちる一幕もあったが、楽しい笑い話になった。あつという間に時が過ぎ、四時近い時刻となった。行きと同じように、華を挟んで悟とアサシンが手を繋いで公園へ向かう。

日は少し傾いていて、三人の影が長く伸び始めている。

「華、もう少ししたらまたパパと暮らせるようになるかもしれないけど、いいかな」

「え!?本当?」

アサシンがフードの奥で眉をひそめた。しかし悟は気づかない。

「そう、昔みたい三人で暮らせる。ちよつとパパとアサシンが頑張るから」

「パパとあさしんが?」

華は素直に悟とアサシンを交互に見上げる。そして、フードの奥にあるアサシンの顔を見る。「あさしん、パパをお世話してるって言ってたもんね。パパをお願いします」

「そんなに頼りないのか」と悟が若干鬱になっている反面、アサシンは笑った。

そして空いた手で華の頭をぐりぐりと撫でた。

## 12月1日③ 殺意と責務

昨夜の春日総合病院を襲ったテロ事件は、バーサーカーとそのマスターの仕業であることがハルカにも教会の使い魔を通じて知らされた。人払いの結界を張って行われたあたり、一応の神秘の秘匿を忘れてはいないようだが、焼け石に水で最早看過できるレベルを超えている。

今回使い魔を飛ばしてきたのは娘の美琴の方で、強くバーサーカーの討伐協力を要請してきたがハルカはやはりにべもなく断った。

聖杯戦争の監督役は聖堂教会となっているが、魔術協会も陰でその行方を見守っている。だから、時計塔の人間であるハルカもこれほどの事件が起こったとあつては協力すべきではある。後々時計塔に戻った時に難癖をつけられるかもしれないからだ。

しかしハルカは意にも留めなかった。日が沈み、日常と非日常の境の逢魔ヶ時。監督役から勧められた小さな洋館の二階で、古びたロッキングチェアに腰かけてぼんやりと赤い夕陽を眺めている。

今宵、セイバーはバーサーカーと戦うそうだ。偵察ではなく、正真正銘バーサーカーの息の根を止めるための戦いだ。報告によればセイバーのマスターはバーサーカーの真名を看破し、かつアーチャー陣営と手を結んだと言う。

だが、一気に五十人以上の魂を食らったバーサーカーの魔力はどのくらいの破壊力を持っているのだろうかは予想がつかない。しかしセイバーもアーチャーという助力を得たのだから、おそらく下手な手を打つことはない。

ハルカが一人で笑っていると、教会からの使い魔が姿を現した。昨日分の報告は済ませたはずである。

「……何の御用ですか、ミスタ・ジンナイ」

『今夜が聖杯戦争でも大規模な戦いになると思うと、落ち着かぬものだな』

質問に答えない御雄の声は、ハルカと同じようにどこか陰鬱な笑いに満ちていた。監督役で娘の方はひたむきに監督役の責務を果たそ

うとしているように見えたが、父親の方はどうも違う。

「バーサーカー討伐の件はお断りしたと思いますが。ミスタもそれを了承したはずでは」

『その件ではない、ミスター・エーデルフェルト。あなたにお伝えした方がよいと思われる事項がある。ところで、今ランサーは』

「私は一人であることが好きですから。今は……外に巡回に出ているようですが」

ランサーは特に用がなくても外を歩き回るのが好きらしく、今日も昼から外にいてまだ帰ってこない。夜になればまた偵察に出歩くと言うのに、モノ好きなサーヴァントだとハルカは思っている。

ハルカの答えを受け、しばしの沈黙が流れた。

『そうか。あなたの願いは根源に至ることと聞いたが、それは今も変わらないか』

「ええ」

『この戦いは最後の一組になるまで終わらず、その一組——サーヴァントと魔術師にはそれぞれ願いを叶える権利が与えられる、そう思っているだろう』

「そう聞いています」

『それは間違いではない。だが、聖杯戦争の真の目的は違う』

そして神父は、静かに聖杯戦争の全容を語った。ハルカには知る由もないが、明にも話したことと同じことを神父は語った。

ハルカは、驚きはしたものの動揺はしなかった。それは彼が聖杯戦争に魔術的興味を強く抱いていたためで、その目的に興味があったためだ。そして神父の語った「真の目的」は、魔術師ならば当然のもので予想の外にできるものでもなかった。

なるほど、聖杯戦争はそのような経緯で始まったのかと思う、其れだけである。

だが、その反応のなさを奇異に思わず——むしろ得たりとした声で神父は笑った。

『ははは、動揺することはないか』

「サーヴァントなど所詮は使い魔ですから」

教会に対しては「根源を目指す」ことになっているため、ハルカはおびなりに言いつくろう。だが、聖杯の真実よりも気になることは、なぜこの御雄神父が今、ハルカにそのことを話そうと思ったかである。

「なぜ、そのような話を私に？」

『いや、協力者であるあなたに話していないことを思い出したのだ。申し訳ない。私たちと明だけが知っているというのはフェアではあるまい』

ハルカは自分でもしらしらしいことを言っただけだと自覚しているが、この神父もまた同じである。一体何を考えているのか、とハルカが思った時、空気が笑った。神父の声音は変わらない。

『ところで、お前は一体誰だ？』

\*

セイバーと明は戦いにそなえ今日は体調を万全に整えた……と言いたいところだが、そうは問屋が許してはいない。昨夜に起きた、春日総合病院のテロ事件——真相はバーサーカーとそのマスターが、病院一棟の患者を食い殺したこと——が原因である。

死因は全てショック死・失血死——バーサーカーが暴れ狂って、死体の原型も不確かになるほどの殺戮を行った結果だ。明は神父・美琴と共に後処理に奔走したが、ある程度まで手伝うとあとは二人に任せてセイバーと共に病院を後にした。

最低限の処理を教会のスタッフが行ってから結界を解いたようで、少しの間様子を見ていたがすぐに病院は警察や病院関係者、野次馬であふれかえった。立ち入り禁止のテープが張り巡らされ、夜であるのに昼間のような騒ぎでありながら、同時に物々しい雰囲気立ち込めていた。



未だに美琴を筆頭に聖堂教会のスタッフは出払い、この事件を丸く収めるために奔走していることだろう。

帰宅した後直ぐ明は眠りにつこうとしたが、なかなか寝付けなかった。突然大量の死体を眼にし相当気分を害したせいもある。しかし、それだけではなかった。

バーサーカーはこれまでの殺害を全て深夜に行っていた為、明はそれより遥かに早い午後七時前に殺戮を行うとは考えていなかった。もし夜中と思いきまず、セイバーを行かせていれば抑止力になったかもしれない。土御門にもっと早く監視を依頼していれば、気づけたかもしれない。

ああすべきだった、こうすべきだったとばかり考えた。

そして明は自分で自分に疑念を抱く。まさか、よもや自分はまだ真凍咲を信じていたということはないか？もしかしたら、同情さえしていたのではないか？

これまでバーサーカーは人を食っても深夜であり、結界を張っていた。ギリギリのところまで護っていた。なにしろ、余命半年の少女だ。何としてでも生きたくて、その一心でバーサーカーを呼んで必死で生きようとした。

それだけならば、まだ大丈夫では——と、思う心が全くなかったと言えるだろうか。

そうだとしたら、何と愚かな事だろう。

その油断が、同情が、この悲劇を呼んだとしたら、むしろ咎は明にある。

明が真凍咲と話したのは、バーサーカー戦が初めてである。それまでは存在を知っていただけで、相手も同様のはずだ。何故彼女が明を目の敵にしているのか、明にはわからない。

だが、今更そんなことは些事であった。

——殺意には殺意で応じよう。

真凍咲はしてはならないことをした。人として、魔術師として、超えてはならない一線を越えたのだ。ならばそれを始末するのが、明の義務であり責務である。

思いにふけってようやく眠りにつき、明が起きた時には時刻は昼の十時を回っていた。

その後、教会から送られてきた使い魔から、ランサーがガンナーというエクストラクラスに遭遇したという話を聞かされた。しかし、靈器盤に新たな反応があったわけではない為、どれかのクラスのサーヴァントがクラス隠蔽のために嘘のクラスを詐称しているに違いないと神父は言った。

となれば、ガンナーなるクラスを称しているのは消去法でキャスターしかないことになる。

ガンナーを詐称するキャスターはともかく、今はバーサーカーを倒すことだけに集中するべきだ。

そして教会との連絡を終えて、ひと段落ついたところでセイバーが伝えたことが、「ランサーも参戦する」ということだったのである。明は疑いの眼差しでセイバーを見たが、セイバーは昨夜、病院で出会ったランサーの発言をそのまま伝えた。

そして明はランサーのマスターは来ないことを知ると唸った。

「バーサーカーは五十人以上の魂を食べてるし、それを考えると味方は多い方がいいし……マスターはアレだけどランサーは信頼できそうだし」

マスターの意向には反しているから宝具は使えず、途中退場する可能性があるといても通常の戦闘ができるなら有利に戦闘を進められる。たとえセイバーたちだけでバーサーカーに勝てたとしても辛勝すると、魔力回復のため数日動けなくなるなど、次の戦いに響くからだ。

ただ、サーヴァントに信頼は置けても令呪がある限りマスターには逆らえない。バーサーカーと戦っている時に、令呪によってセイバーを倒せと命令されたら大変なことになる。明はハルカ・エーデルフェルトという魔術師を信用できていない。

「ランサーのマスターは来ない。しかし普通に考えれば、ランサーの

マスターが令呪を行使して俺を殺しにはこないだろう。俺に対し襲撃をかけたとしても、二人で争っているうちにバーサーカーの餌食になっただけは元も子もない」

確かに、バーサーカーを目の前にしてセイバーを狙ってもその隙をバーサーカーに襲われる可能性がある。バーサーカーが消えるまでは信じてもらいたいとは思える。

しかし、当初はランサー陣営との共闘を渋りまくっていたセイバーが、進んでランサーの意を伝えてきて、しかも共闘を厭わなくなっている。明の知る範囲で、セイバーとランサーがあつたのは教会で初めて顔を合わせたときと、彼らの拠点を訪問した時だけだ。

確かに気が合いそうな雰囲気ではあつたとは思うが、随分な変化だ。

「セイバーってランサーのこと結構好き？」

「……悪いやつではないと思っている。生前の知り合いに似ていない」

セイバーは顎に手を当てて斜め上に目をやった。セイバーの生きた時代に武士という概念はなかったはずだが、ああいう戦好きな益荒男といえど誰だろうか。明は思わず聞き返した。

「え？誰？」

「イズモタケル。あれはいい奴だった」

イズモタケル。父帝からの命により西方のクマソタケル兄弟を暗殺し、大和への帰路の途中で、日本武尊は途中の出雲国のイズモタケルを殺そうと企てた。まず日本武尊は、イズモタケルに接近し、友誼を結ぶ。二人は刀を合わせた時を共に過ごし、仲を深めた。

ある日、水浴びをしていた時に、日本武尊は「お互いの剣を交換して手合せしよう」と提案した。イズモタケルは快諾し、先に体を拭いた日本武尊は剣を交換してイズモタケルに渡した。そしていざイズモタケルが刀を抜くと、それは刃のついた剣ではなく、刀身が木でできていたものだった。驚き慌てるイズモタケルを、日本武尊は容赦なく切刻み殺した。

実は日本武尊が渡した剣は、前日に彼が木で作っておいた偽物の剣

だった。

こうして日本武尊はまつろわぬクマソタケルだけではなく、イズモタケルをも殺し意気揚々と大和に帰った。

昔の良き思い出を語るような顔でセイバーは頷いていた。しかしセイバーの父も、セイバーのこういうところが怖かったのではないかと、伝説を鑑みて明は思った。

友でも殺すべきならば殺すし、兄でも殺せと言われた(と思った)なら殺す。

仲が良からうとも、殺す必要があるなら殺す。

そこに情の入る余地はない。そこでふと、明は冷や汗を流した。

(――あれ?これってもし私がセイバーの力を発揮させられないマスターだったり、私より条件のいいマスターがいたらあつさり裏切られて殺されるんじゃない?)

今更ながら、これまで明はセイバーのやり方に散々文句を言っている。セイバーは渋々ながらも明の言うことを護っているが、本当はどう思っているのかはわからない。

使い魔とはいえ、サーヴァントは歴史に名を遺した英雄だ。彼らが素直に言うことを聞いてくれること自体、感謝すべきことであろう。だが、仮に明より優れた魔術回路を持ち、手段を本当に選ばないマスターがいたとしたら、セイバーは明を裏切ってそのマスターに乗り換えるのではないだろうか。

そんなことはないと言いきれない。

日本武尊は、暗殺もだまし討ちも人の死も是とし、己の目的の為ならば手段を問わない英雄だ。

その上彼は、はつきりと「勝つことのみが目的」とも宣言している。明はそつと右手の令呪を撫でた。

\*

セイバーと話を済ませ食事をとり最後に寛いでいるうちに、いつの間にか時刻は十時半を回った。

聖杯戦争開始前のこの時間はまだ人気があり、家から光が漏れていた。だが、今や誰もいなくなったかのように暗く静まり返っている。医療事故、通り魔事件、一家連続殺害事件、ホームレス殺害事件、そして春日病院のテロ事件とここまで異様な事件が短期間に重なれば、一般人でもおかしいと思うだろう。早くいつもの街に戻りたいと、明は思う。

ランサーとアーチャーが来る予定の時刻だが、双方とも来ない。セイバーと明は自邸の庭に出て、闇に沈んだ空とそこに瞬く星々を見上げた。夜はもう冷えが厳しい。明がそんなことを考えていた時、知ったサーヴァントの気配を感じた。アーチャーだ。

明とセイバーは歩いて門を出た。会うのは昨日振りのはずなのに、長い間会っていないような気分だ。一成は白衣に浅黄袴、その上に黒のコートにブーツという和洋折衷の出で立ちだ。初めて会った時と同じ格好をしていたはずだが、すっかり綺麗な装束——魔術礼装になっている。

一成はよう、と軽く手を上げた。

「また似非坂本竜馬みたいな格好してるね」

「うるせえ！これが一番歩きやすいんだ」

傍に立つ衣冠束帯のアーチャーは準備万端と言いたげな顔をしている。なんとなく昨日話し合いをしたときより、清々しい顔つきに感じるのは気のせいだろうか。とにかくマスターは体調も良いようで、気力に満ちている——のだが、思った通り何か問いたげな顔もしていた。

「あのよ、昨日の電話は何なんだ」

「……あのニュース見た？」

「あのニュースって？」

一成は昨日から今まで実家に帰っており、ニュースなど少しも見ていないのだから春日総合病院の事態を知らなくても当たり前である。しかしそのあたりの事情をつゆ知らない明は、半ば呆れつつ、昨夜の

春日総合病院の惨状を告げた。流石に一成は言葉を失っていた。

「……ま、ニユースで言ってたのはそんなもんなんだけど、病院のある壁に、私を名指しで指名する血文字があったからさ。ああ、これは宣戦布告で決着をつける気なんだってなったわけ」

「血文字!?!」

ぶつきらばうな電話になってしまったのは、あの状況の收拾をつけるためにあわただしかったためだと、明は詫びた。それからそういうわけだから、と驚くばかりの一成を仕切りなおした。

「絶対に相手は倉庫街に来る。私とセイバーは倉庫街にいるから、アーチャーとあなたは視認できる距離、それでできるだけ遠くに出て、バーサーカーの気配を察知してから来て。ギリギリまでこっちが二人がかりつてことを気づかれたくないし」

「……わかった。絶対倒すぞ」

衝撃から抜け出せないまま、一成はそれでも力強く頷いた。明とて緊張を表に出さないだけで、緊張しているし何より、腸が煮えくり返っている。

けれど——明はちらりとセイバーを見た。彼は黙って首を振った。セイバーの言葉によればランサーが援軍に来るはずなのだが、姿を見せない。セイバーは来ないならばそれでいいと言いたげで、何も表情には浮かべていない。

ランサーが協力したいと告げたのは嘘ではないと思う。そのランサーは姿を現さないことは気にかかったが、確かにいないなら仕方がなく、約束の時間もある。

元々セイバーとアーチャーのみで考えていたことでもあり、一成にランサーと言う援軍がいる、と言おうとしたところで明は口を閉じた。

ランサーが来ないなら、むしろ言わない方がいい。面倒な話になる上、ランサーとランサーのマスターは意見に相違がある状態で、来たとしてもどういう状態かはわからない。

セイバーも何も口出しをしないため、明と一成は目配せをして別れた。

明はセイバーに捕まりながら、初冬の闇を駆ける。高所が苦手なため、セイバーにがちり負ぶわれて、しがみついての移動である。セイバーは飛行したらしいが、それは明が絶対反対しているため屋根から屋根へ走る移動法が妥協点になっている。

「目を開けたら死ぬかもしれないから！目を開けたら死ぬから！目を開けたら完全に終わるから！索敵は頼むよ!!」

「……………」

これでも明は必死である。今まで高所が苦手でも別に高所に行かなければいい話だと高をくくっていたが、まさか聖杯戦争でこんな目に遭うとは想定していなかった。

セイバーはげんなりした声を隠さない。

「いい加減少しは慣れたらどうだ、マスター」

「無理無理ホント無理無理マジで無理無理」

うんざりしているセイバーに反論する元気もなく、明は念仏まで唱え始まる。彼女の魔術は北欧発祥で、実際の魔術もそれに色濃く影響を受けているくせに実に現金なものである。

（奴は既に多くの魂を食らっている。マスターもバーサーカーも俺を楽に殺せると踏んでいるだろう）

いくら人の魂を食らおうと、サーヴァントを倒さなければ聖杯戦争は終わらない。力を十分蓄えたバーサーカーは、いよいよサーヴァントとマスターを食らおうとしている。

海岸沿いは勝手な夜の巡回で少し寄ったことはあるが、しっかりと寄るのは召喚の翌日に明とセイバーが街を散策がてら歩いた時以来である。

黒い海が、満ち掛けた月光を受けて波が寄せるたびにちらちらと光る。波止場に留まる船を見て、セイバーは明とここを訪れたことを思い出した。あの時はまだ戦争は始まっておらず、のどかささえ感じる場所だった。

しかし、今や真っ黒に染まる海は禍々しく、底のない闇のようにも







かったのだろう。セイバーが朝廷より命ぜられ、坂東——東国の荒ぶる神々・悪神の類を討伐した伝説の持ち主であることを。

朝廷により東国を従わせた皇子と、東国で朝廷に反旗を翻した武者。

時代は異なれど、相反する伝説を持った二人の英雄。

たとえ相手に理性がなくなるとも——戦に応じることがを示す故か、セイバーはその雄叫びに応えた。草薙の炎で立ち上る天叢雲の霧が、その剣を覆い隠す。

「朝敵死すべし——!!」

霧を纏う白銀の両刃剣。肉厚で長大な漆黒の刀。それがかち合う瞬間、空間さえ歪みかねない衝撃と風が発生し、それだけで周囲の貨物やコンテナを破壊していく。ここにおいてこの二騎は台風といった自然現象そのものの如く、その猛威を奮っている。

バーサーカーの弱点を知ったセイバーは、執拗に弱点——眼を狙って剣撃を見舞うが、バーサーカーは決して許さない。元々高い耐久を誇るバーサーカーが、より多くの魔力を武器にそもそも攻撃することさえ許さぬとばかりに爆発にも等しい暴力を以て滅するべく襲い掛かってくる。

互いの一撃一撃が地面にクレーターを作り上げる程度の破壊力を持つ。セイバーもバーサーカーもお互いしか見えてない。一瞬の隙で体が粉碎される、それが今の戦闘だった。

だが、セイバーは狂戦士でないがゆえに理性がある。

——草薙剣を使えば、動きは止まる。それは前回の戦いで証明されている。その間に目を貫けばよい。

ならば使えばよいのだろうか、話はそう簡単ではない。平将門は一回では死なない可能性がある。七回殺すためにその都度宝具を開帳することは不可能だ。

互いに一步も譲らぬ攻撃が続いている。その速度は人間には目に映すのがやつとで、見切ることは到底不可能な領域に達している。鉄と鉄が火花を散らす、その時。

「ツ■■■■ツ——!!」

「!」

須臾の隙だった。練熟した武人でなければ、並外れた直感の持ち主でなければ見逃したほどの隙である。セイバーが力任せにバーサーカーの刀を押し切った時、力余って僅かに前につんのめっていた。刹那、上段に振りかぶった凶刃が、その小さな体を襲う。

——セイバーの目は、静かにその頭上の刃を見ていた。そして、小さくつぶやく。

「——残念だが、お前を殺すのでは俺ではない」

それは、流星の如き輝きだった。煌煌と尾を引いて落ちてきたそれは、はた目には流れ星のように見えたことだろう。この戦闘の状態でなければ、ため息をつく美しさであった。しかしそれは死を齎すまが凶つ星に他ならない——!

「ツツグ■■■■ツ■■■■ツ■■■■ツ■■■■ツ■■■■ツ■■■■ツ■■■■!!」

獣の断末魔にも等しい咆哮が全てを震わせた。箒星——どこからか放たれた矢は、寸分たがわずバーサーカーの目を射抜いていた。刀を持ったまま、激しくその巨体を震わせる様は前回首を斬り胴を断つた時とは比較にならぬほどの苦しみを示していた。バーサーカーを殺したモノは、セイバーの遥か背後から射かけられたアーチャーの矢だ。

全ては作戦通り。セイバーが戦いの時に隙を作るはずがない。あるならばそれは敵を誘うものでしかない。誘い、アーチャーが確実に急所を狙う機会を生み出すこと——それがセイバーの役目である。

見事それは凶に当たり、バーサーカーを殺した——それでも、バーサーカーは再び何もなかったかのように凶刃を振るう。その咆哮に衰えたところはいささかもなく、セイバーは再び一瞬の油断も許されぬ攻防に身を投じる。

もし、バーサーカーがバーサーカーでなければ、戦い方を変えたであろう。しかし、理性なき戦士であるがゆえに弱点が露呈しようと、

彼は愚直に立ち向かうことしかできない。

——理性の鎖を剥ぎ取り、お前は強くなった。だが理性なきゆえに、お前は死ぬ。

セイバーは海に背を向けている。おそらくアーチャーたちは波止場の船の上にも陣取っているのだろう。その気配を感じながら、再び剣の英霊はその剣を惜しみなく振るう。

そうして、もう二回同じことを繰り返した。要領は変わらない。

——が、その時、バーサーカーは忽然と姿を消した。

\*

『お前は優秀な魔術師になる。私たちの誇りだ』

『あの子はもう駄目だ』

自分は何もしていない。であるのになぜ、掌を返したように冷たいことを言われなければならないのか、咲には理解ができなかった。

魔導の真凍の家に生まれ、『風』と『水』の二重属性を持った咲は魔術の素質に優れていた。厳しい魔術の修行にも耐え、師でもある両親からも期待されていた。魔術の修行に力を入れるあまり、同級生と遊ぶ時間も削り、魔術以外のことをする時間まで極力減らしていた。

だが、それでも咲は後悔をしなかった。むしろ充実感に満ちていた。

『自分は由緒正しい魔導の跡継ぎであり』『両親が手放して褒めるほどに才能が有り、努力も惜しまない熱心な者である』ことが、彼女の誇りとなって彼女を支えていた。

そのあまり、一般の学校生活において友達と呼べるものがいなくても彼女は歯牙にもかけなかった。元々咲自身に高慢なところがあることは事実だ。しかし、思春期に入りかけた少女、少年特有の『特別意識』——咲の場合は『一般人は知らない、魔導を学んでいる』とい

う優越感のため、同級生を見下している節があった。

そのような意識は当然同級生にも伝わり、咲は教科書を隠される、無視されるといいういじめを陰でされていた。

だが、それも彼女にとっては明日の天気よりもどうでもいいことではなかった。

「私は他の凡俗とは違う。私は魔導を学ぶべき、選ばれた人間なの」  
彼女はそう思い、一層魔導の研鑽に力を注いだ。だが、一か月前に事態は急変した。

咲は学校の体育の時間に急に意識を失い、しかもそのまま意識が戻らなかったため病院に搬送された。咲の意識はじきに回復したが、不安を抱いた両親により精密検査を受けることになった。

結果、咲の体はたちの悪い病魔に蝕まれており、もう余命は半年というところまでできていた。病状が進行するまでめまいなどの軽い症状しかでず、手の付けようがなくなるまで気づかないケースの多い難病である。言われてみればめまいを起したり、疲れやすくなったと感じたりすることも咲にはあった。だが、魔導の勉強のため睡眠時間を削ることもままあった彼女は、そのせいだと思って気にしていなかったのだ。

余命半年。あまりにも唐突な事態に、彼女は現実の把握ができなかった。もちろん急ぎよ入院が決定し、薬を投与されながら過ごすようになった。

けれど、目は現実からそらしていても体は正直だった。一度倒れてから、それが引き金になったかのように眩暈や頭痛が増えていった。聖杯戦争がこの春日で行われると言う話を聞いたのは、そんな時である。

「英霊なるものを使い魔として召喚、使役し、何でも願いを叶える聖杯を巡って争うバトルロワイヤル」。病中の咲に、母親はそう説明した。その期間には春日にいる魔術師なら「令呪」——聖杯戦争の参加資格が与えられるかもしれない。

もし、咲にその資格が与えられたら魔術的処置をもつて一時的に父、または母がマスターを代行するとも言った。大儀礼である聖杯戦争に参加することは名誉であるが、あなたは病気だから、とてもそんな戦争に参加できない。いまはそれを直すことに専念しなさいと言った。

余命半年と言われているのに、直せるわけがない、気休めだと咲は怒りすら覚えた。しかし後になって考えると、尊敬している母が気休めでもそう言ってくれたことはありがたいことなのかもしれないと思っただ。

そして、咲に令呪が宿ったら母または父に譲渡する——ことはつまり、両親は聖杯戦争で戦い、願いを叶える意思があるということだ。

——その願いとは、『娘の病気を治す』ことではないか？

自分は真凍家唯一の跡取りで、魔術の素養に優れている。

そんな娘を救うために親が聖杯戦争に出てもおかしくない。

親、または自分に令呪が宿る確証はどこにもないのにも拘らず、その想像で咲はひと時の安寧を得た。

だが、彼女自身意識はしていなかったが、彼女は魔術師の考え方に浸かり切るにはまだ若すぎた。

ある日、外出許可が下りて咲は真凍の家に帰ることができた。とは言っても病身ゆえに、できることは自室でゆっくり寛ぐ程度である。家から本とか玩具を持って来ればよいと看護婦に言われたが、魔導に打ち込んだ咲の部屋には玩具はなく、本も魔導書ばかりで人前で読めるものではない。

特に持つていくものがない、とわかった時に初めて咲は思った。

「私って、本当に魔術しかやってないのね」

だが、それは彼女の努力の証明ではあれど、卑屈になるような事実ではなかった。

またしつかりと魔術の修行をしたい。家族で食事をとり、早く寝る様に言われて咲は布団に戻ったものの、なかなか寝付けず何度も寝返りを打っていた。さして尿意は感じていなかったが、どうせ寝れない

ので自分の部屋を出て一階のトイレへ向かった。

その時、リビングでは父と母が何やら重い雰囲気では話をしていてことに気づいた。その雰囲気故に交じることは躊躇われたが、内容が気になって、咲はリビングのドアに隠れて様子を伺った。

父と母は先ほど食事をとった四人掛けのテーブルに向かい合って座っている。電気はついていのに、どこか薄暗く感じてしまう。

「……まさかこんなことになってしまっなんて。あんなに元気な子だったのに」

「……仕方ないさ」

話は咲のことのようだった。当の本人は、思わず息をつめて聞く。

母はうつむいて、至極残念そうな表情で言う。

「もう咲は死ぬものとして考えた方がよさそうね」

「そうだな。あの子はもう駄目だ」

「けど、十三歳でよかったと思うべきかもしれないわ。もっと成長してから死なれては養子をとって育てなおすことになっていたでしょう。今なら、新しい実子に魔術刻印を継がせることができるわ」

そのあと、どのようにして布団に戻ったのか咲はよく覚えていない。恐らく足は震え立っているのがやつとの状態であっただろうとは思う。どのように音を、息を、気配を殺して二階へ戻ったのかも朧だ。翌朝咲は自分の布団の中にいた。

両親の相談は跡取りが重要な魔導の世界では当然のことであり、咲に聞かせる話ではないから眠った後にしていたのだろう。彼らが全く咲への親愛の情を欠いているかといえ、否だろう。

ただ、聞かれたタイミングがあまりにも悪かった。もし咲が順調に年を重ね魔術師の考え方にもっと身を浸していたら、今の話を聞いてしまっても「然り」と思い大混乱に陥りはしなかったかもしれない。

だが未だ双方の条件を満たしていない彼女には、これまでも短い生のほとんどをつぎ込んできた魔術師としての己まで否定された――

――そう感じられたのである。

己の短い生もまだ受け入れられておらず、己の在り処さえも親に否

定されて、咲は思った。

「本当に、自分には、もう何も残っていない」

けれど、彼女の小さな矜持は何もないことを認められなかった。仮に何もなかったとしても、そのまま自分が消えてしまっただけいいわけではない。

自分には魔術しかないし、何も無いままにしないためには魔導で何かを残すしかない。

「何か」を残す前に、自分が消えてしまっただけいいはずはない。

父と母が聖杯戦争で勝って自分を助けてくれる。そのような甘いことを考えていた自分を殺したい。願いは、自分で叶える。頼れるものは自分だけだ。

聖杯はその願いを聞いたのか。真にそう思うのなら、自分の力で掴んで見せろといわんばかりに、彼女の右腕には令呪が宿ったのである。

\*

「なんじゃありや……」

削る。削る。削る。抉る。抉る。抉る。バースーカーの一挙一動で倉庫の壁が崩れ、屋根がひしゃげ吹き飛ぶ。百メートル程度の距離を置いた場所で戦い始めたセイバーとバースーカーの様子を遠目に見て、明は真っ黒い魔力の塊の暴走に対してそう呟いた。

一昨日のバースーカーの力もかなりのものだったが、今はその比ではない。黒い霧をまき散らしながら、その刀は荒れ狂う自然の猛威のごとく破壊を繰り返す。バースーカーが通っただけでもはコンクリートが抉れ、建物は拉げ、ガラスが歪んで破片を粉のように飛ばしている。まるでダンプカーの交通事故でも立て続けに発生したかのようだ。

(あれが人食いサーヴァントね……)



「どうかしら碓氷のマスター！私のサーヴァントは！」

バーサーカーのマスター——真凍咲が一昨日と同じ寝間着で姿を現した。バーサーカーの破壊した倉庫を満足げに見ながら、笑っている。二人はサーヴァント同士の戦いからは少し離れ、直ぐ海の近い波止場で向かい合っている。

「人食いもいいんだけど、サーヴァントを殺さないで聖杯戦争が終わらないしね！」

余命半年と聞いていたが、その割には血色もよく見えるし声にも張りがある。そもそも、病身で魔術を行使するのはかなり負担を強いるはずである。病身故にバーサーカーの魔力を補い切ることができず、人食いを行っていることは了解している。しかし。

(……バーサーカーから魔力を逆供給されているんだろ……)

マスターとサーヴァントにつながっている因果線<sup>パス</sup>で、普通はマスターからサーヴァントに魔力が供給される。だが、バーサーカーは魂を食ってその魔力で満ちており、かたや病身の咲は自分で魔力生成する負担が大きい。となれば、その逆も然り。

それくらいではなければ、短時間とはいえ病院一棟を丸々覆い尽くす人払いをかけることも、前回ののように魔力を噴射したことに説明がつかない。明は咲を睨みつける。

「……ま、どうでもいいけど。じゃ、サーヴァントはサーヴァントに任せて私たちもやりましょうか」

そうは言いながら明は手ぶらのままで、咲を指差した。「これでもこの管理者だからね。これ以上の狼藉は見過ごせない」

「いいわ。やれるもんなら」

明は波止場を背にして立っている。咲が手を挙げた時、明は背後に魔力の鳴動を感じ振り返った。夜の闇の中に、ひとつの大きな水の塊が浮かんでいる。直径一メートルはあろうかという水の岩。

「！」

その塊は崖を転がり落ちるようなような勢いで明に襲い掛かる。しかし明は慌てず、唱えた。

「h a j o a m i n e n<sup>分</sup>」

怯まず素手を水の塊に突き出す。高速のトラックが人を撥ねるように、明を跳ね飛ばさんとした塊はその手にぶつかると弾け飛び、明の周囲を海水で濡らすだけに終わった。しかし咲はひゅつと息を吸うと、連続して詠唱を行い次々と海水から水の刃を作り出した。

水でできた刃は月光を受けて透明に、そして本物の刃のように鋭く光る。

その数、ざっと見ても二十以上はある。

「さあ、よけられるかしら碓氷の影使い！」

「流体使いか……」

この波止場と倉庫街に待ち構えていたのは、海の水を武器として利用したかったためだろう。慣れ親しんだ物体でもない海水をこれだけ操って見せたことは彼女の素質もあろうが、人食いによって得られた大量の魔力に頼った完全な力技だ。

明は降り注ぐ透明な刃をよけ、魔術で覆った手で打消していく。だが身体能力はあくまで普通の二十代女性のため全て捌ききれない。

「解avoin…放varjo 影killpi盾」

明の足もとから、黒い壁が——壁と言うには薄すぎるが——が飛び出し、透明な刃から彼女を護った。コンクリートの地面から吹き出すように立ちはだかった壁に突き刺さった刃は、まるで脆いクツキーのように砕けて無くなってしまふ。

しかし、咲は焦ることなく透明な刃を再び作り上げる。数も増やし、ひたすら明に襲い掛かる。バーサーカーより供給される魔力を惜しむことなく、咲は魔力を行使しつづけている。

(……あの年にしてはかなりの腕……しかも攻撃するための魔術が得意みたい。魔力量を気にしてないし……)

明の影魔術は、元来対人間用の魔術ではない。影魔術はこの世ならぬ者にこそ本領を発揮する魔術で、人間に使うより異界のモノを攻撃した方が消費魔力に対しての効率が高い。

とにかくこんな海辺で戦うのは分が悪い。数本の刃を身に掠らせながら、明は咲に向かって走る。背後には振り返るのも嫌になるくらい、おぞましい数の水刃が迫っている。

振り返らずとも気配で分かる。

「Varjo 影 killpi 盾 …… Varjo 影 sein 壁 ……  
Varjo 影 Citadel 城塞!」

地鳴りのような鈍い音を立てて、明の背後を一直線に黒い焰が走る。黒い焰は一条の線のように走ると、一斉に上空目がけて伸びる。幾百にも及ぶ水刃が影の壁に阻まれ、ぼろぼろと消えていく。

全力で駆けていた明は太腿につけていたホルダーからダガーナイフを抜き取った。刃渡り十五センチ、刀身が真っ黒に染まったナイフだ。魔力が籠められていることが、魔術師ならば一目でわかる。

水刃を防がれ、ナイフを構えた明に迫られて咲は初めて焦りの表情を浮かべた。

「—ツсжати 空 Воздуха!」

咲の腕を狙ったナイフは、何もないのに——分厚い空気の壁に遮られるようにして止まりかけたが、一瞬だった。明の起源である「分解」の性質を移したナイフは、防御のための魔術を貫通する。

ナイフはそのまま振り下ろされて、咲の右腕を貫いた。

「—ッ!!」

少女の目は驚愕に彩られ、その痛みと噴き出す血に戦いて悲鳴が出かかったが、歯を食いしばってそれを殺した。腕を切断できなかつたのは純粹に明の腕力が足りないかかったからだだが、ならばと言わんばかりに、明は左手を握りしめ、咲の顔面を思い切り殴り飛ばした。

「——ツぐううっ!!」

病身である少女の体は、明が思っていたより軽かった。少女は壊れかけた倉庫の扉に体をぶつけ、そのままずりりと座り込む。苦しうにせき込む咲を前にしても、明の目には一欠けらの同情も浮かんではいなかった。ナイフを片手にしたまま、明は静かに命令する。

「……令呪を捨てて聖杯戦争を放棄しなさい」

せき込みながらも明を見上げる咲の目は、どろりとした闇に濁っている。

「嫌」

「前会った時、病気を治して生きることが願って言ったね。それ



夢の中なら何でもあり——そう、まるで嘘のように凝った闇の塊が明の前にある。恐ろしい咆哮と共に、反りの入った肉厚の刀が明に振り下ろされる。咲が笑っている。

武術の達人は戦いの最中に一秒が十秒のように感じるというが、達人でもない明にもバーサーカーの刃が振り下ろされるのがゆっくりに見えた。だが、頭がそうぼんやりと思っているだけで、体は全く反応しない。

そっか、ここで死ぬのか——濃密な死の気配が、背中にべったりと張り付いている。明とバーサーカーの紅い目があった、その時だった。











に霊核ごと砕け散っている。

避けた刀が、セイバーの背後にあった倉庫の壁を掠めた。掠めただけであるのに、およそ五十メートルはあろうかという壁が上下に切断されて崩壊していく。刀が掠めただけでこれならば、直撃の威力を推して知るべしだ。

さらに悪いことバーサーカーは——硬すぎる。セイバーの通常攻撃が全く通らない。魔力放出を使用して斬撃を見舞っているのに、それでも絶つには至らない。

元々高い防御力を誇っていたバーサーカーだが、今の状態は異常だ。宝具の効果に違いないが、これでは力負けが目に見えている。当初の作戦通りなら、たとえセイバーが押されていても隙をついてアーチャーが射殺せばよいが、この霧ではアーチャーも狙いををつけることができないだろう。

あと三回殺さなければならぬ。セイバー単独で草薙剣によって動きを止めて殺すこともできるが、三回も宝具を開帳できない。どうにかそれなしで殺して見せると、セイバーが気を張り詰めたその時、マスターの魔力がおかしいことに気づいた。

セイバーに供給はされているのだが、量が一定しない。何かが起こしていることは確実だ。

だが、どんな心配をしようとする今のバーサーカーがセイバーを逃がすはずなどないのだ。

入口と言う概念を無くした倉庫の中に、セイバーとバーサーカーは戦場を変えた。船で輸送された貨物が保管される倉庫は、学校の体育館以上の広さがある。夜の今は天井の高さが伺いしれない。しかしコンテナで大量の荷物が置かれているここは、戦うにはあまりに窮屈だ。

されど、どれだけ障害があっても今のバーサーカーは気にもかからない。

「■■■■ッ!!」

黒い刀は一振り一振りが、落ちてくる隕石のような力を持つ。セイバーの剣は幻想返し of 性質の為に、この剣で受ける攻撃は神秘を減ず





潰そうとした時、背中から恐ろしいほどの斬撃が襲い掛かった。

「——!!」

流石に回避も防御も間に合わなかった。かろうじて急所を外したが、斬撃そのものは激しくセイバーの体に食い込んだ。痛みも出血にも取り合わず、セイバーは体を酷使して魔力放出で全力を回避に注ぎ込んだ。紙一重で囲われる事態を回避して、距離をとったセイバーが見たものは——濛々と立ち上る粉塵の中に陽炎のごとく、しかしあまりにも存在感のある、三人のバーサーカー。

その上見たところ、三体の能力に遜色があるとは思えない。同等の力を持つ三騎が、目の前に立ちあはだかっている。

そして絶望を振りまく狂戦士とその分身は、わき目も振らずセイバーに突進する——!

「——ッ、これでは」

明が言っていたことは、「時間切れを待つ」ということだ。バーサーカーは魔術師が死に至る程に魔力を食らうサーヴァントである。人を食わせているとはいえ、マスターである咲自身からの供給はほぼゼロ。故に宝具を解放させ全力で暴れさせていけば、こちらは耐え忍んでいるだけで相手は勝手に自滅するかもしれないという話だった。

バーサーカーに対し、セイバーは決して劣らない。だが、戦いの相性はあまりよくない。セイバーの殺し方と宝具は、一対多に特化している。しかしバーサーカーを殺すためには、的確にその目を打ち抜かなければならない——。

それゆえに明の言葉も「一理ある」と思っていたのだが、最早そういう段階を超えていた。

(自滅を待っている間にやられる)

とにかく向かってくるバーサーカーを回避か防御かと選ぶ須臾の間、突如頭上で爆音が炸裂した。ほとんど青天井と化した倉庫の天井に残ったクレーンが、爆音を轟かせてバーサーカーの真上に落下する。クレーンの落下程度の衝撃は防御の必要もないが、それに狂戦士が「気づく」瞬間がセイバーを助けた。セイバーは魔力放出のジェツトで全力で後方へ飛び退った。



12月1日⑥ 決着、そして

セイバーから離れた明だが、視界が悪すぎていったい自分がどこにいるのかわからない。アーチャーや一成といた方がいいのかもしれない。しかし彼らからも二十メートル程度しか離れていなかったはずなのだが、方向さえもはつきりしない。と、どこからか自分を呼ぶ声がした。

「確氷ー」と呼ぶのは、土御門一成の声だ。アーチャーの気配は共にな  
い。

「あいつ、アーチャーから離れて何やってんの……」

初めて会った時から一成がそれほど手練れの魔術師ではないと看破していたため、こんな状況に自分のサーヴァントから離れるとは何を考えているのかと思う。共闘の手前、明はその声のする方へ向かって走った。すぐに神主服にコートを羽織った一成が見つかった——というより、一成が明を見つけた。

「よかった！無事だったんだな！」

「いやそれは完全にこっちのセリフなんだけど……ていうか元気だね……ていうかアーチャーは？」

「セイバーの援護を任せた！」

本気で能天気な一成の言葉に明は脱力したが、一成は明よりもこの霧の中で元気だった。男であることは別に彼の起源や属性が関係しているのかもしれない。一成は明の異変に気付いたようだ。

「オイ、さつきより顔色悪くないか？この霧、やばいからそのせいかな？」

「まあね。この霧、視界まで悪くするし魔力まで徐々に削り取っていくみたい……あなたは？」

「俺も魔力が減ってる感じはするけど視界はそこまででも……確氷！」

突如一成は明を押しおきのけ、庇うように立ちはだかった。その直後、明も何が起きたのか察知した。彼の肩越しに腕を伸ばし、魔術を行使する。「h a j o o a m i n e n !」

海水を魔力で固めて生成した刃が、黒霧の彼方より彼らを狙って飛来する——明の魔術はギリギリで間に合わず、真っ先に到達した凶刃が一成の右腕を掠めた。

「つぐ……！」

「!?大丈夫!!」

「全然平気だ!」

太く練られた刃ではなかったため、一成は呻き声をもらしながらも倒れることはなかった。コートの右腕部分が赤く染まりつつあるが、すでにその刃は影も質もない。

やはり先ほどの海水の刃だと、明にはすぐに分かった。

「……何だ、今の」

「バーサーカーのマスターの仕業だよ。あいつは海水を刃にかえて襲ってくる……一つ聞きたいんだけど、今この霧の中でどれだけ見えるてる?」

一成は明よりもこの霧の中で視界を保っている。明を発見できたこと、先ほどの水刃を早くに気づいたことからそれは明らかだ。

「近づけば倉庫がどこにあるとか、壁があるとかは見える。多分、半径二十メートルくらいならだれがいるか見えると思う」

「じゃあ、なんとか移動もできそうだね。……移動するよ。バーサーカーのマスターを探そう……怪我してるとこ悪いけど」

周りが見えない明は、彼に先導してもらわないと進めない。明は一成に右手を差し出した。一成は急いでその手を取ったが、視界はあれどどこを探すべきか当てがない。

「俺、魔術師の気配とかあんまわかんねーんだけど」

「気にしなくていい。そう遠くに行ってるわけじゃないから、やみくもでもいい。それに一か所にいるときつきみたいな攻撃がまた「確氷!」

一成が指さした先に向かい、明は影の壁を展開した。今度は間に合ったそれは、水刃をことごとく分解して消し去っていく。二人は頷くと、霧に紛れたバーサーカーのマスターを探すべく走った。

(それにしてもいい目をしてる)



この霧の中、一成にあれだけ見えていることは嬉しい誤算だ。男であることを差し引いても、起源や魔術の素養の補助がなければありえない。しかしそれを考えている場合でもない為、明はそれを思考の隅に追いやった。

「確氷、あつちー！」

「はいー！」

走りながらも、刃は二人を狙っている。時々セイバーとバーサーカーが破壊した建物の残骸で転びそうになりながら、彼らは倉庫街でバーサーカーのマスターを探す。

あちらも移動しているようで、今のところ見つかっていないし一成の目にも捉えられていないらしい。

このまま追いかけて続いていると、明の魔力も一成の魔力も削られてサーヴァントもろとも死ぬかもしれない。三度刃は明たちに群れ成して襲い掛かり、防ぐべく影の壁を展開する。しかし、今度は先ほどよりもずっと数が増えており、分解してもらった数本が一成、または明の体を掠めていく。

「ッ、確氷ー！」

二人の背後から飛来した水刃に反応が遅れ、僅差で早く気付いた明はとつさに一成をかばうようにその身を挺した。ある一本が脇腹を掠め、もう一本が深々と右足に刺さっていた。

妙に深く刃に貫かれた衝撃か、セイバーに与える魔力が乱れた。セイバーの様子を確認したく彼に呼びかけるも、当然セイバーも激闘の最中で話している余裕がないようだ。

一成はその刃を抜こうと手を伸ばしたが、彼がそうするまでもなく刃は形を失い潮水に戻った。

「……うーん、傷口に塩をすり込む機能まであるとは！」

「何のんきなこといってんだ！歩けるか！」

本気で怒鳴る一成に対し、明は顔色を変えずに何も見えない周囲を見渡した。「土御門、バーサーカーを倒すには何が一番有効かって、言ったよね」

「……？時間をかけること、だろ」

一成も油断なく周囲を見回して、焦燥した顔つきで明に肩を貸した。

「そう。時間」

「最強」のクラスとされるバーサーカー。だがその代償は、他のサーヴァントとは比較にならないほどの魔力消費量である。春日の聖杯の元である冬木の聖杯戦争でも、バーサーカーのマスターの多くは魔力を根こそぎ持っていかれ自滅したという。

さらに咲は病床の身であり、余命半年と、本来なら魔術の行使どころか通常の生活さえ制限される状態だ。そのような体で魔力を生成することは想像を絶する苦行である。通常、魔力は生命力を元にして生成されるために咲が生み出せる魔力など本当に微々たるものだ。

——バーサーカーのマスターは、バーサーカーを維持する為だけでなく自分が魔術を行使する分の魔力も、人で補っている。ならば、一層魔力の消費は早い。

ひたすら耐えて耐えて耐え凌げば、バーサーカーは自滅する。そういう策もあるとセイバーや土御門にも言っておいた。まさかバーサーカーの宝具の作用に視覚阻害があるとは想像しなかった為、その戦法も現実味を帯びているのだが——。

(……本当に魔力切れまで耐え凌げるの?)

「おい確氷！アーチャーが宝具を使う！」  
「は？」

いきなり予想しなかったところから話が降ってきて、明は呆けた声を出した。明が影を展開する間も、一成は話を続ける。

「……よくわかんねーけど、使えばセイバーがバーサーカーを殺せるはずだって！」

明は霧に魔力を削がれながらも、アーチャーの言葉を吟味する。今耐え続けるのは、たとえ勝つたとしてもダメージが大きい。明たちも咲を見つけれられる確証はない。セイバーの宝具はバーサーカー殺しには向かない。ならば、そういうアーチャーの宝具にかけてみるべきだろう。

「……アーチャーってセイバーとバーサーカーの場所はずきりとはわ

かってないでしょ？それでもその宝具は使えるの？」

「……セイバーの剣は魔を払う剣、つか魔力を殺ぐ剣だろ？この霧の中でも魔力が薄い箇所があるから、そこだろうって。その程度わかれば大丈夫みてーだ」

\*

アーチャーはアーチャーというクラスにしては目がよくない。勿論バーサーカーによるこの霧を通して戦況を完全に把握できていくわけではない。セイバーの剣の効力により、彼らの位置はわかるが激しく戦う動きを追えるわけではない。

それでもアーチャーは何度も、間断なく矢をつがえて放つ。

矢を放つのだから、その正確さに視覚情報が重要であることは言うまでもない。だが、視界がなくともこのアーチャーが矢を射る意味はある。

「――運が良ければ当たるであろう」

アーチャーの放つ矢は、自動的にアーチャーとアーチャーが狙う相手の幸運値による差で補正がかけられ、威力と効力が変わる。ただ、今は視力による補助がないため威力も下がるが、セイバーを補助するくらいの効力はあるはずである。

ここは波止場に停留された船の上。アーチャーは、ようやくと届いたマスターからの返事に頷く。もともと遠距離型のアーチャーだが、この作戦自体セイバーに損が多くアーチャーに得が多い作戦である。能力上そうならざるを得ないのだが、あまりに動かないことはセイバー陣営の不興を招く。ここで宝具の一つでも解放し力にならなければ、あまりにおんぶにだっこに過ぎる。

それに、バーサーカーはアーチャーにとっても必ず倒さねばならぬ敵であり、それに比べれば真名を示すのも致し方ない事である。

(セイバーはここから北東の方向、百メートルか)

アーチャーはしばし眼を瞑り、己が感覚を研ぎ澄ませる。濃密な霧の中にわずか、清浄な魔力の点が存在する事を感じ取る。それがセイバーの魔力である。

アーチャーの手には磨き抜かれ、銀色の光りを放つ脇差程度の長さの剣があつた。ランサー戦では近接した時に攻撃を防ぐために使用していたが、これこそアーチャーの宝具の一である。

平安の時代。争いなどなき時代と思われていたかもしれないが、将門のような反乱もあり決して呑気に平和を謳った時代ではない。京に盗賊は跋扈し、旱魃が起きれば人は飢え、洪水が起きれば疫病が蔓延する。

しかし、もし仮にそれらすべてがなかったとしても、人は争う。人は、外に敵がなければ、内に敵を見出す。

「——真に争いのない時代が来るとしたら、そこにいるのはすでに人ではない。例え人と同じ形をしていようとも、それは人以外の何かよ」

形式を変え、姿をかえ、血は流れなくとも、人は争う。

剣がなくても、人を殺すことはできる。アーチャーの戦いは、そういうものであつた。

平安時代における、内なる争いの末に頂点に立った者。古代における王朝政治の最高峰。後世のありとあらゆる貴族たちにおいて聖代と崇められ、この世の栄華を極めた男。

聖徳太子の生まれ変わりと呼ばれ、その幸運を称揚された彼は一人、彼の家に伝わる皇統の象徴たる剣レガリアを掲げて高らかに謳う。

剣は月光を受け、アーチャーの魔力を受けて今その姿を顕現す。

「我は皇統を助けし者 我は皇統を保護し者 我は皇統を長らえし者  
——尊つぼきを受け継つぎぎし剣!!」

\*

変化はすぐにセイバーに伝わった。アーチャーの魔力が上乘せされたように、セイバーの魔力が跳ね上がる。まるで令呪を一面消費した、もしかするとそれ以上の多量の魔力が、その体に流れ込んでくる。

これが皇統を助けるといふアーチャーの宝具。同時にアーチャーの強い「バーサーカーを打倒する」意志も伝わってくる。

神剣の回復力のために幾度も怪我を負おうと回復してきたが、さらに今まで受けた傷もなかったのように回復し、宝具を放つ、其の為だけに全てが整えられていく。

——霧の剣は今再びその姿を月夜の下に、その清冽たる姿を曝す。同時に、向かってくる鋼鉄の狂戦士の太刀を渾身の膂力で跳ね返す。

苦しめられた三体もの攻撃も、今なら何体いようと跳ね返せる——

—!!

「ふん!!」

耳を劈くような剣戟音が響き、セイバーは後ろに下がる。剣を構えなおす。この宝具は溜めの時間がほほいらないとところが利点だ。そして、同時にセイバーが危機であるほど、相手が本気であるほど威力を増す剣である。前回は住宅街のど真ん中であり、全力で撃つと余計なものも壊しかねなかったから全力では出せず、かつバーサーカーも本領発揮してはいなかった。

幻想返しの剣は、相手の放った力を焰と共に跳ね返す。白い光が、セイバーの剣に収束していく。磨き上げられた剣は光の束となり、バーサーカーを真正面から向かい撃つ。

凜とした声は、静かに、確かに闇の中へ冴えわたる。

「わが身を焼く、焰など無し」



た。

そして、静かに悶絶するバーサーカーを見下ろしていた。

——もう蘇ることはあるまい。魔力の残らないバーサーカーの姿を見て、セイバーは確信する。その通り、白光の焰に焼かれ体を灰に帰していく。

きらきらと輝く金砂のように、バーサーカーの体は儂くなる。

バーサーカーの体はなくなっていく、今やのこるは大本であろう最後の一体。断末魔をあげながら残っているその手は、あらぬ方向へ必死でのばされていた。

その先には、彼のマスターである真凍咲が倒れていた。肩が小刻みにふるふると震えている。

「あ……ア……」

理性を失っているはずのバーサーカーは、今際の際まで己のマスターを救おうとしているのか。それとも悪あがきの如く、本能につき動かされているだけなのか。

セイバーにはわからないし、どうでもよかった。

\*

「あ、か、はっ……」

真凍咲は苦しんでいた。攻撃を受けたわけではない。むしろ霧に乗じてセイバーとアーチャーのマスターを苦しめていた。彼女を苦しめているのは、絶望的な魔力の枯渇である。

真凍咲は病身で自身の魔力で魔術行使が困難な状況であり、かつバーサーカーは他クラスに比べて圧倒的に魔力消費が激しい。その上バーサーカーの宝具使用によりさらに魔力消費を加速させた。

『ばんどうのてんのう将門大新皇』——バーサーカーの対人宝具。周囲に黒い霧——範囲内にいる者の魔力を削り取る凶悪なモノ——を展開し、その中に置いては著しくバーサーカーを強化する宝具である。

さらに、宝具使用中は残った影武者分の分身を同時に現界させることができる。分身の強さは本体のバーサーカーと同等。しかし、分身を同時に現界させている数だけ倍の魔力を消費する。

本体と二つの分身を使役していた咲は、宝具展開中のバーサーカー三分分の魔力を消費していた。そのバーサーカーたるべき行いによって、バーサーカーは人間から回収した魂も、咲の僅かな魔力をも食らいつくした。

最早、咲の体に一滴の魔力もない。戦い続けるバーサーカーに魔力を吸い取られきってしまったのだ。

飢えのような渇きのような苦しみに、咲はどこへともなく手を伸ばしていた。視界は霞みきって、己がサーヴァントの姿も確認できていない。それでも手を伸ばした。

バーサーカーを召喚してからは楽しいことばかりだった。

気に入らない親も、何もかもバーサーカーが無くしてくれた。

彼は理性を持たなかったけれど、聖杯で咲を救えるかもしれない唯一の味方だった。

「……ない」

最初はそれだけだった。

「……ないよ、バーサーカー……」

人間として当たり前前の願いであり、本能。彼女はまず自分の現実を受け止めなければならなかった。だが、それをするまえに、もしかしたら助かるかもしれないなどという希望を目の前にぶら下げられた。「しにたくない、よ……バーサーカー……」

もし彼女が両親の会話を聞いていなければ、バーサーカーがバーサーカーとして呼ばれていなければ、もし彼女が親を殺していなければ、命は救えなくてもその魂はもう少し安らかであったのかもしれない。しかしそれらはすべて「もし」の話でしかない。

咲の五感は失われていく。薄れゆく感覚の中で、彼女は足音を聞いた。



人間ならざる、英霊なるものの存在が近づいてくる。  
人を食おうとも彼女のために戦ったバーサーカーが、助けに来てくれたのだと、彼女は笑った。

\*

バーサーカーの消滅を確認したセイバーは、血を振り払いもせずそのままマスターである咲の方に歩む。霧が晴れてみれば、セイバーとバーサーカーはいつの間にか明と一成のかなり近くにいた。二人は、お互いに肩を貸しながら立っている。

バーサーカーは消えた。幻のように消えていくサーヴァントを見届けて、一成はぼうっとバーサーカーの倒れていた場所を見ていた。だが、隣の明がいきなり悲鳴を上げた。

「セイバー!!やめて!!」

その声につられて一成もセイバーへ顔を向ける。その剣士は小刻みに震える咲に対し、血まみれの剣を振り上げている。一成は息をのむ。

衝動に突き動かされるまま、明から離れて走った。明の声に剣を振り上げたまま止まったセイバーと、蹲る少女の間に一成は割って入り、少女を護るかのように手を広げた。

セイバーは訝しむ視線を一成に向けた。

「なんのつもりだ、アーチャーのマスター」

「お前こそ何のつもりだ、セイバー」

敵意をはつきり表し、セイバーは氷のような眼を一成に向けている。普段ならばこのまま一成を斬り捨てかねないが、一応の共闘関係があることと彼のマスターの制止があったために流石にしなかった。

「何のつもりもない。そこにいるバーサーカーのマスターを殺さなければならぬ」

「殺すって、もうサーヴァントは消えただろ！」

激昂する一成とは対照的に、セイバーはあくまで淡々と答える。

「サーヴァントは消えても令呪がある。もしマスターを失ったはぐれサーヴァントがいた場合、このマスターは再契約をして戦争に舞い戻る可能性がある」

セイバーの言うことは尤もだった。後の禍根を断つためにマスターまで殺しておくのはこの戦争の常套手段である。

「だからって……」

それでも認められない。認めたくない。一成が言いよんだとき、大きくはないが良く通る声が割って入った。

「セイバー、やめて」

「何故だ、マスター」

戦いを終えて初めて見た明は、あちらこちらと傷をつくっていた。けれど、彼女は傷などないかのよういつも通りである。そしてその顔はどこまでも、不自然なほどに無表情である。

明はそのまま、バーサーカーのマスターの体を指差した。

「……もう、死んでるから」

一成とセイバーは揃って咲を見た。少女は先ほどまで全身が細かく震えていたと言うのに、その震えはなくなっていた。涙の跡があり、薄く微笑んでいる。しかし、その肌に生氣はない。

一成は慌てて彼女の手首を取り、脈を図るが、彼の期待した結果にはならなかった。

「……っ」

彼女の魂はもうここにはない。これが人を殺すと言うこと。余命半年でも、たとえ直接に手を下したわけではなくても、その最後の半年を奪ったことに責がある。

人を大量に殺した殺人犯の少女であっても、一成にとってその事實は果てしなく重い。

「なるほど。わかった」

一成とは正反対に、納得したと言わんばかりのセイバーは血を振り  
はらい、剣を鞘に戻した。まるでどうでもいいと言わんばかりの態度  
に、一成はセイバーに食って掛かる。

セイバーの真名は日本武尊。幼い頃に読んだ日本神話の英雄がこ  
れだとは信じがたいが、相手が誰であれ一成は黙っていられなかつ  
た。

「お前、どうでもいいってのか、バーサーカーのマスターが死んだこ  
と」

「どうでもよくはない。死んでよかったと思っっている」

「土御門、セイバー、やめて」

明は二人の顔を睨みつけて語気強く言った。とにかくバーサー  
カーは消滅し、片はついたのだ。またすぐにこのような争いは見たく  
なかった。

しかし、セイバーは口角を吊り上げてむしろ笑む。剣は振り下ろさ  
れ、一成の鼻先につきつけられる。

「そういえばバーサーカーも倒したことだ。もう共闘は終わりだろ  
う。手始めにこいつから「セイバー、やめて」

明は強い口調で諫めた。セイバーはこの戦争に勝ち残ることこそ  
が目的で、そのためなら手段も選ばずどんな残酷な事だろうとため  
らいなく行うサーヴァントであることは重々承知している。

だが、セイバーは明がやめろと言ったことは、ぶつくさ文句を言い  
ながらもしない。文句を言いながら、明の意向を尊重してくれる。だ  
から今回も文句を言いながらも言うことを聞いてくれる。明は重く  
唾を呑みこみながら、そう信じた。セイバーは大きなため息をつい  
た。

そして、次の瞬間。

セイバーの剣は、鮮やかに一成の左腕を肩ごと切り落としていた。

12月1日⑦ 背信、そして幕切れ

「え？」

それが、ここにいるもの全員の総意だった。なぜか、一成の左腕は彼の胴体を離れ、地面に転がっていた。時が止まったような静寂。

「う……………ああああああああああああ!!!」

一成の目が、脳が、己の左腕のないことを認識してしまった。その瞬間に走る激痛。生まれて一度も体験したことのない痛みにも、一成は聞く者の心が折れそうになるほどの絶叫を上げて倒れる。

吹き出す血が彼の白衣とコートを赤く汚していく。

訳が分からないのは明も同じである。今まで誤解はあっても、セイバーが明らかにマスターの意思に反することをしたのは初めてだった。早く一成の止血をしなければと思う一方で、セイバーの行動から目を離してはいけないと脳が警告を鳴らしている。

俯いたセイバーの顔は窺えないが、彼は血に塗れた剣を間違いなく明に向けていた。

今まで自分の方法ばかりを押し付けて、セイバーには不本意だろうとは思っていた。もし自分がセイバーの眼鏡に叶わないマスターだったら、裏切られるかもしれないとは思っていた。

まさか、今がその時なのかと明が思った時、俯いたままのセイバーから言葉が漏れた。

「死ぬ、マスター」

その白銀の刃は明に向けられる。天叢雲の蒸気を纏った剣が引かれ、明の胴を突き刺すべくセイバーの体が空を破る。もう普通の詠唱による魔力行使では間に合わない。一瞬が永遠にも引き延ばされる中、明は無我夢中で右腕を突き出し、聖痕が焼けつく感覚に全てを任せるしかなかった。

「止めなさい!!」

紅い閃光が煌めくことが早いのか、セイバーの剣の方が早いのか——剣の切っ先は明の腹からわずかにセンチ程度のところまで、震えながら止

まった。貫く寸前に大きな力によって寸止めされたような止まり方だ。

当のセイバーは俯いたままだが、よく見るとその手には妙な汗が流れ、肩で息をしている。バーサーカーと相對した時を超える緊張で全身が強張り、明は手を突き出した格好のまま寸毫も動けない。

さざ波の音だけが、遠く遙かに聞こえた。

「まあ、この辺を妥協点とするかの」

そんな中、場違いにいつもとトーンの変わらないアーチャーの音が響いた。明は弾かれたように顔を上げて、セイバーの遙か向こう——一成が倒れ伏している場所を見た。

倒れた彼の傍らに立つアーチャーの手には彼の宝具たる劍が握られて発動の光りを放ち、もう片手には斬り落とされた腕がある。明の全身から血の気が引いていく。

「そなたのマスターも殺せばよかったのだが、意に反することは魔力を消費していかん。やはり宝具を使う際にはマスターがいなければ」

セイバーは何も答えない。油の切れた機械人形のように鈍い動きで、彼は左手で己の右腕を叩き、劍を取り落とした。

「……藤原道長」

明が小さく呟いたことに応じ、この世の栄華を極めた男は慙懃に頭を下げた。

「自己紹介が遅れてしまい、申し訳ありません。——日本武尊とそのマスター、我が名は藤原北家九条流摂政藤原兼家が五男、道長と申します」

『尊つぼききりのみつるぎ』——それは生前のアーチャーが我が孫を東宮にしたいが故に、新たに東宮（皇太子）となった敦明親王に対し、正当な東宮の証である壺切御劍を渡さなかった——つまり、『氏の長者たる道長はお前を東宮——天皇とは認めない』ことを暗に示したことによる、アーチャーの宝具。

天皇に娘を后として配することで、次期天皇を己の孫とし、さらにその天皇に、を繰り返し皇統を掌握した藤原氏の頂点たる貴族。

その歴代の東宮に藤原氏から送られる壺切御剣は、皇統掌握の象徴<sup>レガリア</sup>。アーチャーは「この宝具を使えば、セイバーがバーサーカーを殺せる」と言っていたが、それは本当だ。

現に先ほどバーサーカーに放たれた『くさなぎのつるぎ全て翻し焰の剣』の二連撃。いくらセイバーが自在に操れる宝具と言えど、インターバルなしで連続で放つなど令呪の補佐なしではまず不可能な芸当である。

——しかし、その剣の効果はそれだけではない。

生前のアーチャーは確かに皇室を輔弼する者であったろう。だが、彼のなしたことはその範疇を遥かに超えている。

その剣は、天照大御神の直系に当たる者を強く拘束する。その拘束力は対魔力を貫通し、対象の持つ神性——いかに由緒正しき天照大御神の直系如何によって拘束強度が変化する。

アーチャーは一成の腕を切り落としたことにより、現在マスター不在のサーヴァントとなった。ただ、単独行動スキルを持つゆえに戦闘を行うことができる。

しかし宝具のような魔力消費の大きいものはマスターのバックアップを必要とする。

ゆえに、アーチャーはもうセイバーの意思に反することを強制できない。

明の令呪と剣を落とすことで、宝具の呪縛から解放されたセイバーは平安の貴族を強く睨んだ。

「……」

「……いやいや、流石碓氷の魔術師と言うべきか、日本武尊と申し上げるべきか。——今日の所はお暇しようかの」

バーサーカーに相對した時には決して見せなかったセイバーの激しい怒りを目の当たりにしても、アーチャーはなんら怯むことはなく、全く笑みを崩さない。今まで水面下で収まっていた怒りと殺意が

噴出し、セイバーは吼えた。

「このまま逃がすと思うか！今ここで殺す！」

セイバーは宝具を放ち、明もあの黒い霧で魔力を相当に削られてしまった身である。しかしアーチャーもマスターを失い、宝具開帳はもうできず全力で戦うことはできない。明の令呪によつて宝具の拘束は切れた——今ならば条件は僅かにこちらのほうがいい——セイバーはそう判断した。

しかし、アーチャーは余裕の表情を崩すことはない。

「そなたの気持ちはおおよそわかるが……このまま一成を放つておいたら流石に儂くなってしまふぞ？」

アーチャーは宝具である剣の切っ先を、地面に倒れたままの一成の頭に向けている。つまり、セイバーがまだ戦うというのならば、一成を殺すということを示していた。

だが、一成が生きようが死のうが、セイバーには関係がない。むしろ死んだ方が安心できる。

「そこの男など知る」「そなたはよくとも、そこのマスターはどうじゃ？」

セイバーははっと背後の明を振り返った。険しい顔をして、セイバーに対し首を振る——しかしそれを見ずとも、令呪の一面によりマスターとのつながりを強化されたセイバーには、するべき行動は一つしかない。

セイバーは俯き、しかし炯々と輝く目を隠さずに恐ろしく低い声で告げた。

「……貴様は必ず八つ裂きにして殺す」

血が噴き出しそうなほど拳を握りしめたセイバーを見て、アーチャーは満足そうに笑う。彼は片手に令呪の残った腕を携え、鮮やかに身を翻した。月の輝く夜に、漆黒を塗り込めたような海と空だけが戦場跡に残っていた。

明はアーチャーが見えなくなるとすぐさまセイバーの手を引き、一成の下へ駆け出した。

「セイバー、土御門を連れて教会まで飛んで！」

\*

妻の元に華を返し、アサシンと悟は家路についた。アサシンがちらちら見る悟は、嬉しいような悲しいような顔を往ったり来たりしている。実にわかりやすいマスターである。

二人はコンビニで夕食を調達すると、その足でカスミハイツに戻った。

アサシンはランサーの話进行い出していた。今日の十時半時確氷邸で、バーサーカー討伐のサーヴァントが集まる——面子はセイバー、アーチャー、ランサー。三騎対一騎では流石に負けることもないとは思うし、付き合う必要もないとアサシンは考える。

それに何より、悟は聖杯戦争に参加すべきではない。

しかしアサシン自体は聖杯戦争を続けるつもりだ。それを考えれば、今夜の戦いには望まず気配遮断をして様子を覗くだけ覗くのが最善だろう。

(けど確氷邸ってどこだ?)

ランサーは有名な家のような口ぶりだったが、生憎とアサシンにはわからない。バラエティ番組を漫然とつけて、カップヌードルをすすめる悟に尋ねてみた。

「おい、確氷邸って知ってつか？」

「あ? ああ、この辺では結構有名だぞ。住宅地のなかにいきなり古い感じの西洋の館が出てくるから」

何でも昔から居ついている土地の名士みたいなものらしいと、悟は続けた。

「それ大体の場所わかるか？」

「東の住宅街にあるみたいだけど、それがなんかあるのか? 別にすごいものが見られるわけじゃないぞ」



「もしかしたら今夜、サーヴァント同士の戦いが見られるかもしれないねー」

悟は勢いよくラーメンを噴出した。アサシンは日本酒の入ったグラスを置いて面倒くさそうに手を振った。「汚ねーなおい」

「どこから持ってきたんだ其の情報！」

「昼間のランサー」

ついでにアサシンは、ここ春日を騒がせている連続殺人事件がバーサーカーの仕業であること、それを見かねたセイバー・アーチャー・ランサーが討伐に出ることを説明した。

「ま、三騎も出るなら俺が出る必要もねーだろ。こちとら激弱貧弱丸だからな、こっそり戦争を拝見させてもらおうってわけだ」

「そうなのか……よし、俺も行くぞ」

アサシンの予想通り、悟は箸を握りしめてアサシンに同行を願った。アサシンは拒否せずそれを肯う。できれば、その戦いは限りなく惨劇に近い戦いになればよいと願いながら。

ランサーは十時半時に碓氷邸に、と言っていた。悟も碓氷邸を訪れたことがあるわけではない為、そのところは目星をつけて探し回っていくことになる。

冷たい風が吹く中、アサシンは悟を抱えて春日の空を跳ぶ。セイバーが夜の街を駆ける様を鳥と比喻するならアサシンのそれは音もなく、忍の如きと言うべきだろう。

飽きないのか、悟はずっと眼下の家の明かりを眺めている。

「……本当に人を食い物にしてサーヴァントを強化する奴がいるんだな」

「まあな。しかもバーサーカーなんぞは魂食いって言われるくらいに魔力を食うサーヴァントだからな、理由としては妥当だな」

悟は不自然に黙った。それから躊躇いがちに口を開いた。

「……俺たちも「三対一なら負けるこたあないだろ。俺らの出る幕じゃねーよ」

アサシンは強く遮ったが、悟はまだ悩んでいる様子だった。三対一であれば大丈夫だろうとも思うが、バーサーカーがどのくらい強化さ

れているのか、そもそもどのような英霊なのか全くわからないためなんともいない。

東の住宅街——駅から南北に出るモノレールの東側を回っていると、南東を指差した。「あれだぞ、多分」

確かに他の家とは趣が違う。闇に沈んでいるが色鮮やかな煉瓦が外壁の建物で、二階の上に尖塔をもつ西洋の館である。敷地も広く、庭には噴水のようなものも見受けられた。

「マジで「お屋敷」じゃねーかアレ。で、今何時だ」

「十時十五分」

「じゃあ玄関が見える場所に陣取ってるか」

気配遮断のスキルがあれば、直ぐ近くにいるのは危ういかもしれない。アサシンと悟は碓氷邸から少し離れた民家の屋根に陣取った。しばらく待つと、碓氷邸の玄関から二人が出てきた。片方は肩当たりで髪を切りそろえた二十歳前後の女で、もう片方は黒髪を頭で結った少年もしくは少女だ。

アサシンは思わず屋根から滑り落ちそうになった。悟が雨合羽を掴んで落ちるのをとめた。

「おいどうしたんだよー!」

「おったまげたぜ……あの黒髪の方、俺の前のマスターを殺した奴だ」  
「えっ!?!」

流星に悟も動揺して、アサシンと遠くの主従を交互に見る。黒髪の方がサーヴァントなら、隣の二十歳くらいの女性はマスターということになる。マスターの暗殺をサーヴァントに命じることが本当にあるのだと、悟は身を戦かせた。

直に高校生くらいの男子と、衣冠束帯に身を包んだ中年の男性が門の前に現れた。あの二組のどちらかがセイバーでどちらかがアーチャーなのだろう。しかし、待てど暮らせどランサーの姿は見えない。

当のセイバー陣営とアーチャー陣営は、待つ素振りもなく二手に分かれていく。アサシンたちは女性と少年（少女）サーヴァントの方を追跡することにした。

二人は迷いもせず海沿いの倉庫街へとやってきた。そして時を置かずして、強いサーヴァントの気配を察知した。アサシンたちは倉庫の屋根の上に陣取り、気配を消して成り行きを伺っていた。

「あれがバーサーカー……」

ランサーとアサシンからも尋常ではない威圧感を感じた悟だが、バーサーカーが並大抵ではないことも感じていた。眼下には霧で覆われた剣を持つ——セイバーと、黒い霧をまとわりつかせた鎧武者——バーサーカーが激しい剣戟を繰り返している。

あれだけ魔力にあふれるバーサーカーと渡り合うセイバーも普通ではない。

「ありややべーな」

「セ、セイバーの方が!?!?っていうかランサーは!?!?」

「バーサーカー、人を食ってるだけあるな。セイバーのが押されてるよーに見えるが……んー?」

ランサーは三対一のような口ぶりじゃべっていたが、本人は今でも姿を現さない。流石のアサシンもランサーの事態まではわからない。それよりも共闘するアーチャーの気配を探っていた。

「来ないもんをどうこう言っても仕方ねーな……おっ」

しかし、いきなりどこからともなく矢が飛来してバーサーカーの鎧の関節に刺さった。アーチャーとそのマスターが、波止場の船の上に姿を現しており、矢を放っていた。しかしその程度でバーサーカーは止まらないだろうと思われたが、違った。

アーチャーが寸分たがわぬ射で狙い打ったのは——目だ。

その瞬間バーサーカーは断末魔ともつかぬ咆哮を上げた。やったのか、と悟が息を飲んだがそうはうまく運ばない。仕留めたはずのバーサーカーは激しく悶絶したかと思えば、再びその自然現象のような暴力をとめどなくセイバーに振り向けているのだ。

そしてセイバーを押ししているように見えるが、隙についてアーチャーが遠くから目を射抜く。それを見ているうちに、悟にもセイバーが押されているわけではなく、セイバーがあえて隙をつかせるように戦っていることがわかった。

そうして三度同じことを繰り返した時、突然バーサーカーが姿を消したのである。

アサシンも悟も、そしてセイバーとアーチャーも何事かと一瞬停止してしまふ。最も早く気づいたのはアーチャーで、彼は跳躍し停留している船の上に乗るとすぐさまに矢を引き絞り放った。

一瞬のうちにバーサーカーは百メートルの距離を移動していた。この空間転移ともいふべき所業は令呪によるものとしか考えられない。アサシンと悟が素早く視線を移動させた先には、バーサーカーと少女、それに先ほどの女性——セイバーのマスター、そしてセイバーが鉢合わせていた。

そして、バーサーカーのマスターである少女が従者に命じると、バーサーカーが宝具を解放する。黒い霧があたり一帯を覆い、当然アサシンたちの視界をも奪った。

「ちっ、これじゃ霧の中がわかんねえ」

アサシンたちから見えるのは、船の上に立っていて霧の範囲外にいるアーチャーだけだ。セイバーとそのマスター、アーチャーのマスター、バーサーカーとそのマスターは霧の中にすっぽり覆われてしまふ。いざとして姿が見えない。

「この霧は晴れるのを待つしかねえな……つてどうした」

アサシンが息をついていると、隣の悟は信じられないものを見たような顔をして、何もうかがえない黒い霧を見つめている。数度口を開いたり閉じたりした後、霧の中を指差す。

「……あんな小学生くらいの子がマスターなんてやってるのか？」

「ん？マスターに年齢制限なんてねーからな」

いや、悟は年齢にも驚いたがそれをいうならアーチャーのマスターだって高校生くらいにしか見えなかった。本当に衝撃的だったことは別にあつた。

「あんな子が、サーヴァントに人を食わせてるのか？」

アサシンは特に驚かない。「そういうことになるだろうな。つか何だ？お前はおっさんが人食いやらせるなら納得すんのか？」

「そーいうわけじゃない!」

悟は娘を持つ身である。娘が成長し、小学生高学年になり、聖杯戦争で人食いをやらせるなど想像するだに恐ろしく、ありえない。それに、人食いをさせるほどあの少女を駆り立てるものは何なのかも全くわからない。

「アサシン、この戦いを止められないのか?!」

しかし、暗殺者の返事は至極冷静なモノだった。

「できないこともねーぜ? マスターを殺すっていう形でいいならな」

今、セイバー・アーチャー・バーサーカーはサーヴァントの戦いに熱中している。霧の中に乗り込まねばならないとはいえ、気配遮断をすれば混乱に乗じてマスターを殺せる可能性は高い。寧ろアサシンとしては最高の舞台であり、うまくいけば三陣営すべてを仕留められる可能性もある。

だが、それをアサシンは見逃す。

「普通に戦って、全員無事にあの戦いを止めろってんなら無理な話だ。つーかそれ、あそこにいるセイバーとかバーサーカーにだってできねーよ」

結局、悟の望む方法で争いを止める力はアサシンにはない。仮に令呪を行使して何とかして一度止めることができても、再び彼らは戦い始めるだろう。

悟が唇を噛みしめっていると、突如強い光を感じた。霧の外にいるアーチャーが持つ剣が、眩いばかりの光りを放っているのだ。あまりの高貴で眩い光に、二人は思わず目を閉じかける。

朗々たる声に乗せられ、高らかに詳らかにされるのはアーチャーの宝具。王朝政治の最高点・この世の栄華を極めた男によるノウブル・ファンタズム高貴なる幻想が開帳されると時を同じくして、黒い霧の中からも白銀の光が放たれる。

月の光を受けるようにして輝く古代の英雄が、今ここに真名を高らかに謳う。

『つぼきりのみつるぎ尊きを受け継ぎし剣——!!』

『全て翻し焰の剣——!!』

「こりやあすげえー!」

アサシンは場違いにも口笛を吹く。悟も目を必死で開いて、事を見逃すまいとする。眩いばかりの極光に焼かれて、禍々しき黒い霧はかき消されていく。そして、セイバーの放った白い焰によりバーサーカーは浄化されるように燃えて、砂金のようにその姿を消していた。

「……おわった……のか?」

「みたいだな」

二人が見下ろす倉庫街にあるのは、セイバーとそのマスター、アーチャーとそのマスター、バーサーカーのマスターだけである。これで決着がついたのだ。少女は人食いをさせることはもうないと、悟が安堵した時、セイバーのサーヴァントがその剣を少女に振り上げていた。

それでもマスターたちがセイバーを諫め、一件落着と見えた。全てが終わったとアサシンと悟が思った時に、アーチャーのマスターである少年の腕が切り落とされていた。

「——!!」

「落ち着け!」

その後の展開は怒涛だった。少年の腕を切り落としたセイバーは、そのまま自分のマスターの命さえも狙った。だが、それはアーチャーが宝具によりセイバーを操っていたためにしたことだった。

令呪の力で束縛を逃れたセイバーだが、魔力が残り少ないために追撃を止めてアーチャーは姿を消した。

残されたセイバーとマスターは、腕を切られた少年を抱えてどこぞへと飛び立っていった。彼らの話す声も聞こえたために成り行きは理解できたが、あまりの展開に悟は理解が追い付かない。

戦場跡に残されたのは激しい交通事故でも起こった後のように傷つけられたコンクリートの地面、半壊して崩れ去ってしまいそうな幾つもの倉庫。

そして——少年の流した血だまりと、何故かセイバーのマスターが放置していった、バーサーカーのマスターであった少女。少女はうずくまったまま動かない。

「……アサシン、下に降りてみよう」

「いいぜ」

アサシンは悟を抱えると、軽い動作でコンクリートの地面に着地した。そして悟を解放すると、彼は一直線に少女の方へ駆け寄った。

彼らの言葉もおおよそ聞こえていたため、アサシンも悟も少女がどうなったのかはわかっている。それでも、わずかな可能性を信じて、アサシンのマスターは波止場へ降り立った。

しかし、そんな可能性はもうどこにもなかった。

「……死んでる」

まだ温もりの残る体で、目立った外傷も見当たらない。それでも手には脈がない。揺すってもたたいても反応がない。アサシンはすたすたと悟の隣に立つと、少女を一瞥した。

「大方バーサーカーに魔力を持っていかれすぎたんだろーな。外傷もないからセイバーやアーチャーに傷つけられたわけでもねーだろうし」

「……これが、聖杯戦争、なのか……?」

継るような、歪んだ顔で見上げてくる悟にアサシンは頷く。アサシンは最初にマスターが殺されたと言った。命がけの戦いだとも言った。サーヴァントの戦いを見せた。

だが、「死」そのものを見せられるわけではない。

命を懸けて、人の命を奪って、聖杯に奇跡を継ることが聖杯戦争。

「これが聖杯戦争だ」

いやなものを見せていることくらい、アサシンは承知している。本当に人を殺し、己が命を危険に晒してでもお前の願いを叶えるのかと、無言のうちに彼は問う。

\*

明はセイバーに指示し、夜の上空を春日教会に向けて一直線に飛行していた。セイバーは本気で飛べば音速の壁も容易く突破するらしいが、生憎明は生身の人間だ。

明は目を固く瞑ってセイバーの右腕にしがみ付き、セイバーは左腕で一成の体を抱えて飛行している。切断された肩からは、いまだにしっかりと鮮血があふれていた。

「マスター！教会についたぞ！」

その声と同時に地面に足がつく感触を得て、明は倒れたい衝動をこらえて明りの漏れる教会へ走った。セイバーも一成を抱えたままその後ろを追っていた。

直ぐに御雄神父・美琴が飛び出してきた。事情を説明して、至急一成の手当てを頼み、ひと段落つくまで教会の講堂で待つことになる。

教会はいつものように明たちを荘厳な空気で包み込み、居所を無くさせる。

明は最前列の長椅子に腰かけ、セイバーはすこし間をおいて座った。

当然のように神父と美琴は事情を聞いてきたので、明はかいつまんでバーサーカーの顛末を話した。しかし美琴はともかく神父は使い魔の視覚を通して戦場を観察しておおむね把握していたため、話の焦点はそれよりもアーチャーがどこへ行ったかに移った。サーヴァントのスピードは使い魔では補足できず、神父は首を振っていた。

「……真名を聞くに、当てもなくマスターを裏切るサーヴァントには思えないが、何とも言えない」その一言が現在のすべてを物語っており、結局その件については後に回された。そのあと、神父は口元をゆるめて笑った。



「しかし、バーサーカー討伐ご苦労だった」

「うん。でも」

「それは私からも言うわ、お疲れ様。だけど、少し言わせてほしいことがあるの」

明が言葉をつづけようとした時に、美琴が口を挟んだ。養父と違い、その様子にはどこか怒りめいたものも感じられる。あまり良い内容ではないことはなんとなく予想がつく。

「……何？」

「私たちもあまり協力できなかったし、バーサーカー討伐が少し遅かったのは仕方がないわ。だけど、あなたたち、大丈夫なの？」

「？怪我はしたけど、土御門の程の大げがじゃないよ……」

「怪我の話じゃないわ！明、あなたとセイバーの関係よ！アサシンのマスターの件、忘れてないでしょう？」

まだセイバーと明の戦闘方式にズレがあつた時、白昼にセイバーが殺害を行った話だ。確かに美琴が怒っているとの話を聞いていたが、すっかり忘れていた。

「大丈夫だよ。もうあんなことにはならない」

「まあバーサーカーもきっちり倒せてることだし……いいけど、次期管理者なんだからしっかりしなさい」

「うん。ごめん」

まだ少し納得いつていない様子の美琴だったが、その返事を受けると踵を返して教会奥の居住区画へ姿を消した。残ったのは神父、明、セイバーだ。神父はちらりと明を見下ろした。

「七代目、お前も傷の手当くらいはしていくか？」

明は体質的に他の魔術師の魔術を受け付けないが、普通の手当くらいならしていく意味もある。言葉に甘えようとした時に、ブラウスを引っ張られた。セイバーだった。

「——できるかぎり早く帰りたい」

何故かセイバーはここにあまりいたくないようだ。明としても無理にしていく必要はないので、否はない。

「じゃあ、家でやるからいい」

「そうか。しかし、明、彼をどうする？」

土御門一成はサーヴァントを失い、かつ令呪を全て失った。おそろく戦争を棄権して、戦争終結まで教会で保護を受けることになるだろう。だとすれば、治療が終わってから目が覚めるまで教会に置いておいてもいい。だが、彼に聞きたいことがある。

「——や、私の家に連れてく。もしかしたらアーチャーの行く先に心当たりがあるかもしれないし、色々聞きたいことがある」  
「ならば連れて行くといい。時期に処置は終わるだろう」

神父の言葉通り、間もなく奥から教会のスタッフと思しき男が処置の完了を報告してきた。セイバーにそれを任せ、明は椅子から立ち上がった。水刃の刺さった足を引きずることになるが、歩けないほどではない。

先に外に出ようと神父に背を向けた瞬間、唐突に神父の声が地を這った。

「これで一歩、願いへ近づいたな」

「……ああ、根源ね」

そのことか、と明は興味なく振り返ることもしなかった。しかし、神父は荘厳たる声で続ける。

「これより先、戦争は苛烈さを増すだろう」

「……」

「お前は人を殺すことが嫌か。たとえそれが、責務を果たす為であろうとも」

明が生まれる前からここで神父をしていた男だ。同時に幼いころの明を知っているということでもあり、流石によくわかっている。明だって責務とはいえ人殺しは御免である。でも、それを誰かがなさなくてはいけなくて、己しかないのであれば。

「嫌いに決まってる。でも、仕方がないときもある」

明の答え慣れた答えを聞くと、なぜか神父は呆れたように笑った。

「……目をそらし続けるには限度があるぞ、七代目」

明が教会の外で待っていると、すぐに一成を背負ったセイバーが出てきた。セイバーの飛行で帰宅するほうが早いことは百も承知だが、やはりそうする気にはなれない。

あちらこちら痛むが、まだ歩ける。明はさっさと行こうとしたが、その時にセイバーが一度一成を地面に降ろしてマントを脱いだ。

「セイバー、どうしたの」

「……マスター、これを着て「明！待って！その恰好で歩いて帰るつもり!？」」

丁度その時、再び扉が開いた。腕にコートを抱えて、美琴が飛び出してきたのだ。

「？.そうだけど、何?」

明の今の姿は人に見られたら大騒ぎされかねないモノだが、この深更の上最近は何も彼も家でおとなしくしているはずだ。明の様子を見て、美琴は大きいため息をついた。

「……人に会うことにはないでしょうけど、万が一ってあるでしょ。いい年の女がそんな恰好で歩くものじゃないでしょ」

確かに今の明の恰好は結構悲惨で、厚手のジャケットもサイハイソックスもスカートもブラウスもずたずたで素肌がかなり露出している。服の損傷ほど出血は酷くないので気にしていなかったようだ。微妙に不服そうな顔をする明に、美琴は紺色のコートを押し付けた。

「明、もう少し年と性別を自覚しなさい!」

「……うん」

あまり気の入っていない返事をして、明はコートを受け取った。

「明はこんなだから、セイバーも気をまわしてあげて」

いきなり話を振られたセイバーは全く予想していなかったのか、びっくりと反応してから頷いていた。以前「女とは思っていない」発言を頂いた明としては、それは無理だろうなと思っていたが、口には出さなかった。

「あ、そうだ、美琴、ひとつだけ聞きたいんだけど」

「何?」

「……何で、エーデルフェルトはバーサーカー討伐を拒否したのか、わかる？」

神父からの交渉も拒否したエーデルフェルト。神秘の秘匿は彼にとつても気にかかる事項だろうに、彼は協力を拒んだ。神父も明も明確なその理由を知らず、正直美琴も知っているとは思えないのだが、ダメ元で尋ねた。

「……わからないわ。人を食って強化されたバーサーカーこそ協力して倒すべきだと思うのだけど」

「そっか」

明は嘆息し、美琴に別れを告げた。美琴は「よく休むのよ」と労いの言葉をかけて教会の中へ戻った。

「……そういえばセイバー、何か用があつたんじゃないの？」

美琴が怒涛の勢いで割り込んでしまったが、何かセイバーは言いかけていた。ついでに地面に転がされたままの一成が不憫なので、明としては早く背負ってやってほしかった。

「いや、なんでもない。明、帰るぞ」

彼は脱いだマントを再び纏うと、一成を背負いなおした。明が飛行を嫌がる為に、遅い徒歩で三人は家路についた。

確かに勝利はした。

だが、勝利という余韻も何もなく、彼らは街の沈黙の中を只管に歩くだけだった。

また、入道殿射たまふとて、「摂政・関白すべきものならば、この矢あたれ」と、仰せらるるに、はじめの同じやうに、的の破るばかり、同じところに射させたまひつ。——『大鏡』

彼にその意識はなくとも、彼の放つ矢は間違いなくその言葉通りに、運命を変えた。

内大臣伊周が、父関白道隆の屋敷で弓の競射を開いていた。その場に、道長は特に呼ばれたわけでもないのに、唐突にその場に現れた。

道隆と伊周は不思議がっていたが、来てしまったものを無下に追い返すのも大人げない。道長を歓待し、矢を射ていくように誘った。

そこで伊周と競射を行ったところ、的に当たった数が伊周より道長の方が二本だけ多かった。親子の取り巻きは気を遣い「もう二回決勝を延ばしたらどうだろうか」と言い出し、その運びになった。

もちろん心中穏やかではないのは道長だ。

彼は「ならそうすればよろしい」と吐き捨てるようにいい、矢をつがえて高らかに宣言した。

「もし、この道長の一家から天皇、中宮がお立ちになるならばこの矢当たれ」

その矢は見事的の真ん中に当たった。穏やかでいられないのは伊周と道隆である。しかし伊周は気遅れしてしまい、全外的外れのところに矢を射ってしまったため、父道隆は顔面蒼白になった。

だが、道長は躊躇わない。彼はさらに天まで届くように、謳う。

「この私が将来、摂政関白になるのが当然であるなら、この矢当たれ」

そして矢は的を壊さんばかりに、同じく真ん中に命中したのである。

道長はいいとして、困ったのは周りだった。関白と内大臣を中心に興じていたのに、もはやそれは跡形もなく冷め切ってしまった。関白道隆は伊周に「もう射るな！やめろ！」と叫ぶ始末。

当の道長は使った弓矢を返却して、さっさと帰ってしまった。

後の藤原道長は、当時の摂政の五男として生を受けた。だが、生まれたときから後の栄光が約束されていたわけではない。

当時父子相続と兄弟相続の過渡期であり、弟にも跡目を狙う機会があったとはいえ、五男ともなると、上の兄たちに時代が移るか、またはその兄たちの子供に流れて行ってしまうことがほとんどだった。

父が強引な手段で前帝を退位に追い込み、自分の孫にあたる天皇を即位させている為、道長は順調に出世をしていた。

しかし将来は必ず自分の兄とその子供たちが立ちほだかる。それは道長だけが思っていたわけではなく、当時の貴族の共通の感覚だったろう。道長がとある高貴な女に求婚したことがあるが、彼女の父にも、そういった理由で結婚に難色を示されたことがあつたくらいである。

そしてその感覚は決して間違っていない。父の死後に、権力の座にあつたのはその長男で、道長の兄である道隆だった。道隆は娘の定子を今上帝の中宮に据え、天皇の閨を独占させた。当時の摂関政治の常道を踏んだのである。

この定子に仕えたのがかの清少納言であり、枕草子には当時の話が多く収められている。

しかし、この時道長の心には忸怩たるものがあつた。予想通り、関白の座に収まった兄道隆は自分の息子たちの官位をこり押しともいえる強引さで急激に引き上げていたからだ。

この道隆を筆頭とした一家はのちに中関白家と呼称されるが、美人揃いであるとともに家族の仲が睦まじいことに評判があつた。

だが、それは防衛本能でもあつたのではないかと後になって道長は思つたのである。

父の後をそのまま継ぐ形で、関白の座にありつき強引に一家のものだけ官位を上げれば、当然反発を買う。兄道隆の長男の伊周は、二十一歳の若さで内大臣の座にあった。表面こそ穏やかでも、周囲は心の奥底で妬みと嫉みを大きく膨らませていたろう。

現代よりも呪いや祟りが普通の人間にも強く息づいていた時代。当時、栄華の頂点にあった中関白家の人々も、当然それに恐怖したはずだ。だから、彼らは妬む必要のない人たちの間での紐帯を強めることになったのではないか——そう後年、道長は思った。

しかし当時、道長も例に漏れず彼らを羨む人間の一人だった。前述した伊周が二十一歳で内大臣の座にあった時、道長は二十九歳で大納言の座にあった。

要するに、甥である伊周に官位を抜かされていたのである。

当時は金を得るにも、信賴を得るにも、方法は一つだけ——位階と官位を上昇させることである。現代の様に多様な職があるわけではなく、貴族は貴族になり、庶民は庶民と固定されている時代の話だ。いわば現代社会で会社が一つしかない状態、といえればよいだろうか。

その出世にまつわる悲喜劇には枚挙にいとまがなく、弟に官位を奪われて憤死した者がいるくらいである。

この話は、そのように道長が鬱屈を抱いていた時の話だった。

\*

土御門神社に向かったアーチャーは、そこで一匹の偵察用使い魔と鉢合わせた。それは間違えることなくキャスターのマスター、キリエスフィール・フォン・アインツベルンの放ったモノだ。それに案内され、アーチャーは春日郊外の山にまで足を運んだ。

「あら、本当に来たのねアーチャー」

道長——アーチャーを迎えたのは、艶やかな紅の髪を腰まで伸ばし

た妙齡の女性だった。巫女服に身を包んでいるにもかかわらず、清浄な雰囲気はまるでない。寧ろ男を蕩かし墮落させるような、淫靡で退廃的な雰囲気を持つ女だ。

魅了——そのサーヴァントの持つスキルによるものだが、対魔力を持つアーチャーには効かない。

周囲は木々に取り囲まれている山のふもと。いきなり場違いに洋館が現れるが、常人には見えない館だ。それどころか、必要な手順を踏まなければ感知することができない強靱な結界を張っている。おかげで術者までも毎度毎度その手順を踏まねばならない、強固だが手間のかかる館となっている。

否、いくら強固な隠へいを施そうと限界はある。術者——女のサーヴァントのマスターの力に加え、さらなる補強をしているのはこのサーヴァントの力に他ならない。

その不可思議な屋敷の内装はホテルのそれに近く、一階は大理石のロビーに赤いじゅうたんが敷かれ、シャンデリアが飾られている。

昼でも薄暗い場所ゆえに、それはいつでもきらびやかに光り輝いている。

「ご主人ー、アーチャーが来たわよー」

間延びしたサーヴァントの声に応じ、二階へ向かう螺旋階段に十歳程度の少女の姿が現れる。このサーヴァントをずっと幼くし、淫靡な雰囲気抜きされればこの少女になるほどよく似ている。

「ようこそ、アーチャー。令呪はちゃんと持ってきたようね」

黒髪に赤い目の少女は、貴婦人のようにゆったりと微笑んだ。

「カズナリ・ツチミカドはどうしたの？」

「おそろくまだ生きておろう」

階段を下りてきた少女に、アーチャーは令呪の刻まれた腕を渡した。令呪は一つも消費されずちり三画ある。少女は赤い目を細めて笑い、しかしその目は揺らぐことなくアーチャーを射抜いた。

「何故殺さなかったの？」

「私はこれでも平安の貴族。殺生は穢れであり好むところではない」



張りつめた空気の中、二人ともその目をお互いから離さない。アーチャーはため息をつき、降参といわんばかりに両手を挙げた。

「私はあの者の親と、「生きて返す」と約束をした。それを反故にせぬためには、殺すわけにはいかなんだ」

「ふうん。まあいいわ。カズナリ・ツチミカドはサーヴァントと令呪を失ったし、無力とみていいでしょう。だけど、アーチャー」

濡芭玉の黒髪の少女は、くるりと外見相応の振る舞いでターンをしてみせる。しかし、その顔は少しもおどけたところはない。

「もし、万が一カズナリ・ツチミカドが立ち向かってくるとしたら、あなたは必ず殺すのよ」

「わかっておる。この温情に気付かずに戦おうとするならば仕方あるまい

少女は満足そうにその頬に笑みを刻む。そして、片手に持ったままの腕を見つめて、何事かを唱えた。一成の腕にあつた聖痕は消え失せ、三画の令呪があつた少女の左手には、今や計六画の令呪が刻まれている。

「そういえば、本当に日本武尊——セイバーのマスターに令呪まで消費させたの?」

「その通りよ。もう少しうまくいけばセイバーにマスターを殺させるか、令呪をなくすこともできそうだったのだが」

ふうんと、少女は頷く。それから痣のなくなった腕を女のサーヴァントに渡した。

そしてアーチャーの方に向き直り、その手をかざし、静かにしかしはつきりと唱える。

「汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に。聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うならばこの命運、汝が剣に預けよう」

少女の手から紫電が迸る。その幼い体からは想像できないほどの魔力が溢れ出し、アーチャーの体に流れ込み始める。

「そなたを我が主として認めよう、キリエスフィール・フォン・アインツベルン——」

アーチャーの低い声が一回に響き渡る。その契約の姿を眺める女——キヤスターは妖艶な笑みを浮かべている。その姿のどこにも、先ほど渡されたばかりの筈の一成の腕はなかった。

## 第2幕 一人では戦えぬ

### Interlude—2 戦争の終焉

——空が燃えている。

否、それは夕日だった。丸い体を半分、地平線の彼方に沈めて、赤と大地と空を染め上げている。かつて緑の海原を見せたこの地は、茶の地肌を見せて煤けた燃え滓ばかりを残してなお赤い。

——血の湯気が立ち上っているようだ。

そのただ只管に赤い風景の中に、一人の少女が立っていた。

真夏の蜃気楼のように、彼女はそこに現界していた。胸には自分のものである短刀を突き刺してあり、霊核は壊れている。時を置かずして、彼女は消えるさだめにある。

そして足元には首からおびただしい血を流してこと切れている、彼女のマスターである初老の男性があった。

しかし、その二人の目の前には黄金の杯が、眩い光を放って輝いていた。魔力で満ちた小聖杯が、此度の聖杯戦争の勝者たる二人の前に現前していたのだ。

聖杯戦争。七人の魔術師と七騎のサーヴァントが、何でも願いを叶えるという「万能の釜」聖杯を巡って争う戦争。少女——アサシンのサーヴァントと、そのマスターは聖杯の使用権を得た。

しかし、この聖杯は「贗作」。いや、それだけではなく「聖杯の贗作」ということすら憚られるような「出来損ない」だった。七騎召喚されるはずのサーヴァントは六騎しか召喚されず、その上、おおよその願いは叶えられるが——アサシンのマスターの目的——「根源に至る」願いは叶えられないという代物だった。

マスターは、アサシンを徹頭徹尾道具として扱った。アサシンは召喚されたときにマスターに名を尋ねたが、必要ないと言われたので今でも主の名を知らない。思えば、それは相互の交流などなくていい、戦いで協調さえしていれば——という意志だったのだと、ここに至り

アサシンはやつと理解した。だからといって、彼女は主に不満を抱いたことはない。

もとよりマスターとサーヴァントは聖杯を得るという目的の為に共にあるのだ。

アサシンとそのマスターが行ったことは、アサシンの常道だった。マスターは影にひそみ表舞台に出ることはなく魔術師を探し、アサシンも同じく魔術師を探し、それを殺す。気配遮断を使うことで、アサシンは昼夜関係なく、休むことなく敵を探し続け、殺した。

結果として、彼らは敵の五陣営中二陣営のマスターを殺して、消滅に追いやった。

残り三陣営は、気づけば二陣営になり、その二陣営が戦って片方が勝った刹那に勝者のマスターをどさくさに紛れて殺した。

——そうして、今に至る。この荒れ果てた原野——古戦場は、アサシンが成したものではなく、己が武を誇って戦った二騎のサーヴァントによるものだった。

アサシン達は聖杯を手に入れた。

しかしその瞬間、マスターは残った令呪でアサシンに自害を命じた。

アサシンは何が何だか全くわからなかったが、大きな動揺はなかった。元より彼女の目的は他のサーヴァントを皆殺しにして勝利することであり、聖杯自体に願いはない。そして今やその目的は果たされているのだから、今更アサシンが殺されても困ることはない。

純粹に自害を命じた理由は何かと思ひ、消える前にそれだけ問おうと彼女が花唇を開いた、その時だった。目の前のマスターは蒼を通り越し白い顔で、静かにつぶやいた。

「……やはり、この聖杯ではサーヴァントを全て殺そうと、根源には至れない——」

その言葉を最後に、彼のマスターは己が首を切って死んだ。

アサシンのマスターは知っていた。否、戦争が進むにつれて理解した。例え七騎、否六騎のサーヴァントを殺したところでこの紛い物の

聖杯では根源には至れないことを。最後の悪あがきにも等しく、アサシンに自害を命じたが——優秀な魔術師でもあつた彼は自分の願いは成らないと、この聖杯ではできないと理解した。そう分かつた瞬間、マスターは自分の首を切つて死んだ。

マスターは、全てを魔導に捧げてきた人間だつた。幼いころから魔導をなすべく鍛えられてきた。妻は病気で早くに死に、息子は事故で亡くなつた。再び妻を取つたが子をなせず、離婚した。

そうして男には魔導以外何もなくなつた——かと思えば、そうとも言えなかつた。同じく魔導を志す者でありながら、知己、刎頸ともいえる友が一人いた。

しかし何ということか、この戦争において、その友は敵陣営としてサーヴァントを使役していた。正々堂々戦うという手もあつただろう。魔術師同士、魔術の粋を競い合う道もあつただろう。だが、アサシンというサーヴァントを使う身であれば、もつとも効率のいい方法は一つだけ。

そうしてマスターは魔導を選んだ。本当に魔導だけでよければ、彼はきつと何一つ思いを変えることはなかつただろうが——結果として、彼はそうではなかつた。

友を殺すことで、彼は己をも殺した。そうして、彼は引き際を失つた。

だから、絶対に聖杯を手に入れて根源へ至るしかなかつた。

そうしてその願いさえ敗れ果てた時、彼は自ら死を選んだ。

勿論、アサシンを道具として扱つた彼は過去の話をしたことはない。パスにより夢の形をとつてその記憶がアサシンにも流れていただけだ。マスターはアサシンに意見を求めず、するべきことと絶対にしてはいけないことだけを厳命し、それ以外に言葉を交わすことはなかつた。

今、マスターがここにあることそのものが大事と思うアサシンは、深く夢見た主人の過去を考察しなかつたし、するには情報も時間も足りなかつた。

赤く染まる大地。それはかつて見た、己が炎に包んだムラのよう。

誰もが死に絶え、漂う終末の空気。東の空は既に藍に染まり、夜の到来を告げている。

「根源、とやらにたどり着くためには、全てのサーヴァントを殺さなければならぬ……」

少女の声を聴く者は皆無。消滅間際に至り、理由を理解した彼女にやはり動揺はない。前述のように、この戦争における彼女の目的は果たされている。そして、

「どうせこの身は死んでいるも同じ。それが死ぬことで、マスターの願いが叶うのなら越したことはない。だが」

アサシンのせいでもなく、マスターのせいでもなく、ただ儀式の不備故に願いは叶わない。原因を求めるのならこの聖杯を創り上げた者たちのせいだろうが、彼らとて不備の聖杯を望んだわけでもあるまい。それに、いまさら詮無きことだ。

荒れ果てた地に、一陣の風が吹いた。アサシンの纏う白い裳が翻る。被っていた領巾ひれが舞って、彼女の手を離れていった。

輝く黒髪を持つ少女——否、少女の姿をした少年は、この世界から消滅した。

アサシン——少年の意志は変わらない。彼はこの聖杯戦争の前にも幾度も幾度も、様々な時間に於いて、聖杯戦争とそれ以外の戦いにも使役されてきた。

「」

負ければすべてが終わる。勝つことだけが己に残されたモノであり、此度もそれを成し遂げた。それ以外の感慨はない。彼が勝利を納めたことに間違いはなく、異議を唱える者はいない。

彼の目的からすれば、今回も事はうまく運びおわたったのだ。

「なんで」

だが、消滅の刹那に彼の口からこぼれた言葉は、全く逆のものだった。

「うまくいかないんだろうな——」

12月2日① 碓氷邸にて、三人

自分の相方——マスターは魔術師としては極めて優秀なのだろう。そしてランサーとして召喚された自分の性向を分かっているとも、ランサーは感じていた。

そうでなければ、令呪の一面を消費してまで昨夜のランサーの行動を縛りはしないだろう。

「どうした、ランサー。不満そうだな」

「ハルカよ、わかっておろう」

西日がさしこむ、小さな洋館のリビング。ソファにこしかけ、優雅に魔導書を手繰るハルカを、ランサーは剣呑な瞳で睨みつけている。ハルカは魔導書を閉じると、静かに目を伏せた。

「昨夜は無理を強いたと思っています。しかし、貴方も勝手にバーサーカー討伐に向かおうとしたのでしょうか？痛み分けと思つて欲しいものです」

昨夜、ランサーはハルカに黙つてバーサーカー討伐に向かおうとしていた。偵察は日課になっているため、その最中にバーサーカーに行き会つたことにして戦うつもりだった。

当然魔力を使つて戦うのだから、戦闘をすればはすぐにハルカに割れることになつただろうが、それでも少しでも協力せずにはいられなかった。

もし、ランサーが生前のランサーのままであつたら、または生前の主君がマスターであつたならば一度ここは堪えたかもしれない。

だが、今のランサーは一介の武人として、尋常な戦いを望む槍使いとして現界したただ一人の男であつた。故に、後ろめたくはありながらもバーサーカーの討伐へと向かおうとしていた。

教会の連絡で明たちがバーサーカー討伐に行くことを知り、かつランサーの行動を危ぶんだハルカは、令呪の一面を用いてランサーを一晩屋敷の一室に閉じ込めた。流石に一晩も効果は持続しなかったが、ランサーが満足に動けるようになった時は既にバーサーカーの討伐された後だったのである。



バーサーカーが倒されたことは、昼に来た神父の使い魔によって知らされた。ランサーはこれで無辜の人々が殺されると言う凶行がなくなるかと安心したものの、セイバーに行くと言ったが行かなかった——結果的にウソをつくことになってしまったことを、強く恥じていた。

その慚愧を押し隠し、ランサーは表情を少しも変えぬマスター——相方に問う。

「一つ尋ねる」

「何でしょう」

「ハルカ、お前は、本当に聖杯戦争を戦う気があるのか」

ランサーの問も最もだろう。ハルカは聖杯戦争が始まってからこの方、教会とセイバー等との情報共有しかしていない。ランサーにも偵察しか命じていない。ランサーが宝具を使おうとした時には、強く諫めて断念させている。さらにバーサーカー戦にも出るなど命じていた。

あまりにも自発的な行動が少ないのは火を見るよりも明らかだ。

「ありますよ。しかし無駄に戦いをすることもないでしょう。バーサーカーは倒す倒すと意気込んでいるセイバーに任せれば、わざわざこちらの魔力を消費せずに済むでしょう」

ハルカは顔を上げ、ランサーを見る。疑わしい、という気持ちを はつきりとあらわした男が魔術師の目の前にある。ハルカはまったく動揺することなく、ランサーに向かって微笑んだ。

「嫌でもあなたがその槍を振るわねばならない時が来ますよ。最も重要な時に、その宝具が使えなくては話にならない。違いますか？」

もちろんランサーもこの戦争に勝つつもりでいる。魔力と言うエネルギーを節約して、のちの戦いに備えるということもわかる。

ランサーは戦いそのものを求めているとはいえ、ハルカの理屈が戦うものとして道理が通っていることも理解している。

だが、何故だろうか。マスターの言葉は全て上滑りしているようにランサーには聞こえてならないのは。その言葉の一つにも、誠実さの

かけらもないようにランサーには思えるのだ。

「お前の言うことは間違っていないと思うぞ、ハルカよ。しかし今やアサシン、ライダー、バーサーカーが消えた。残るは儂、セイバー、アーチャー、ガンナー……これの正体はキャスターだったか……の四騎だ。そして儂は残り三騎すべてと会い見えた。もう偵察、などという時期は過ぎたのではないか」

「……確かにそうですね。当初の予定は、貴方が偵察をして調べてからセイバーと撃破する、という筋書きでしたね」

ハルカは思案気に頬を撫でた。荒れたところが一つもない金髪がさらさらと揺れて、形のいい輪郭をなぞる。

「教会を通して相談しましょう。けれど、今日は大人しくしていなさい。バーサーカーとの戦いが終わったばかりです。どの陣営も、キャスターは別ですが——今日は大人しくしていることでしょうからね。もし、マスターを殺したいと思うなら別ですが」

「儂の願いはお前も知っておるだろう。その手の戦法をする気はないぞ」

ランサーの願いはただ一つ。強敵との尋常な勝負。それだけである。

アサシンまがいの行動をする気はさらさらない。ハルカは知っていると言わんばかりに頷いた。

「でしようね。それなら今日は大人しくしていなさい。必ずチャンスは巡ってきます、ランサー」

西日の橙に染められながら、北欧の魔術師は優雅に微笑む。やはりその表情、挙措から何も読み取ることができなかった。

\*

昨夜、一成の治療の為に教会に行った時にバーサーカーの件について話したため、今日教会から碓氷邸に使い魔がやってくることはな

い。

(……………どうしよう……………)

明は自分に治癒魔術をかけてから、リビングでウィダーインゼリーを飲みつつ頭を悩まし続けていた。テレビで映るニュースには、倉庫街で爆発事故の文字が躍っている。当然、昨夜の対バーサーカー戦の被害である。

バーサーカーが倒れたことでこれ以上一般人を巻き込もうとする事件は起きないだろうが(これ以上咲のようなマスターがいなければだが)、やはり聖杯戦争が終わるまでこの春日の街は危険な街であるのは変わらない。

だが、今明が困っているのはその件ではない。土御門一成のことである。

現在、一成を父の部屋(現在セイバーの部屋)に運び入れてある。一応傷はふさがっているはずだが、一成は魔力と体力の消費もあり、腕を切られてからずっと眠り続けている。

明はセイバーに一成の様子見を頼んで、自分の足の手当を行った後はボロボロの普段着のままベッドにダイブして眠りこんでしまった。そして起きたらあつという間に午後三時になっていた。

とりあえず服を脱ぎ捨て新しいものに替えた。十分眠っていたはずなのにあまり疲れがとれた気がしないのは、セイバーが消費した魔力を回復すべく明から遠慮なく持って行っているからだろう。体力を戻すため、冷蔵庫にある栄養ドリンクとウィダーインゼリーを引っぱり出す。

それらを手に一成の様子を見ておこうと、明は父の部屋の扉を開けた。

ダブルサイズのベッドの上に、一成は寝ている。時々苦しそうに呻くが、ちゃんと眠っているようである。

起きたら、身の振り方を決定しなければならない。令呪とサーヴァントを失った一成だが、それでも完全に安全とは言えない。今後はぐれサーヴァントが出た場合に、新たにマスターとして割り振られる可

能性が高いのが元マスターだ。だからこそセイバーは咲を殺そうと  
していたのである。

この場合、聖杯戦争に参加する意思なしとして教会に保護を求める  
のが最善だ。彼が起床したらその話をするつもりだ。また、腕を失っ  
てしまった一成に腕のいい人形師を紹介しなくては……などと思い  
を巡らせていると、明は何か違和感を覚えた。

そういえば、一成の様子を見ておくようにセイバーに頼んだのだか  
らこの部屋にはセイバーもいなければおかしいのだが、その気配がな  
い。……いや、あつた。

セイバーは例によってコタツに入っていた。そしてなぜかテーブ  
ルの上にあるみかんをじっと見つめて動かない。それだけでも妙だ  
が、セイバーの纏っている空気がやたらに重苦しい。

まさか一成を斬ってしまったことを悔いているのか——いや、セイ  
バーは人間の死に頓着しない。

というか昨日は一成を殺しかねない勢いであつたため彼が落ち込  
むことは考えられない。

まして真凍咲の死を悼む心があるなら、あの時に刃を向けたりしな  
い。

バーサーカーに勝利したとはいえ、アーチャーのためにあの終わり  
方である。そうそう明るい気分になれないのかもしれない。

確かに昨日は本当に大変で、一歩間違えたら死んでいた。だが、元  
より聖杯戦争は命を懸けた戦いである。セイバーも明も力を尽くし  
て戦い、バーサーカーを討伐することができ、自分たちも五体満足で  
帰ってくることもできた。春日市民は少しは枕を高くして眠れるだ  
ろう。

とりあえず、戦果は上々といえる。アーチャーについては対応をこ  
れから考えなければならぬのが大変だが、仕方がない。

これからの事を考えながら、何と話しかけるべきが迷った末に、明  
は栄養ドリンクをこたつの上に置いた。

「まあ、のみなよ。サーヴァントに効くか知らないけど」

まるで居酒屋のセリフである。セイバーはかすかに目を見開いた。

「……マスターか。昨日はよく眠れたか？傷の手当はしているか？」  
「あ、うん。というか、どうしたの？なんか、気になる事がある？」

セイバーは居心地悪げに眼をそらしてから口を開いた。

「……昨日は俺の為に無為に令呪を使わせてしまい、済まなかった」  
「……？」

明は一時本気で何のことかと思っただが、はたと思い出して手を打った。

昨夜、明が身を守る為——壺切御剣の呪縛を解く為に令呪を一面使  
用した。令呪はサーヴァント制御用であると同時に、サーヴァントを  
強化できる切り札でもある。

確かにそれは容易く消費していいものではないが、セイバーの落ち  
度ではない。明は大きくため息をついた。

「セイバーって、……けっこうめんどくさいよね……」

「……？そういうえば同じことを弟橘姫と吉備武彦にも言われたことが  
……」

妻と東征の仲間に言われていたとは、この感じは古代と現代を超え  
て共通だったのかと明は妙な安心感さえ覚えた。何度も繰り返すの  
は面倒なので、はつきりと言っておこうと明は気合を入れた。

「あそこで令呪を使わなかったら、多分私は死んでた。そしたらセイ  
バーだって魔力がなくなっただけで、すぐに消えちゃってたよ。ああいう時  
の為に令呪はあるんだから、いい使い方をしたと思う。だからあれは  
使うべくして使ったの。今セイバーに居なくなったら困るしね」

セイバーははつと顔を上げた。純粹に戸惑った顔を見て、明も頭に  
疑問符を浮かべた。

「いやさ、俺はお前の剣となろうーとか言ってくれたじゃん。セイ  
バーは私の剣なんでしょ？まだ一緒にいてもらわないと困るよ」

抑々令呪とは、サーヴァントが拒否する行為を強制できる権利であ  
る。これがある限り、サーヴァントはマスターに逆らうことができな  
い。令呪が減ることを喜ぶサーヴァントは多いであろう中、セイバー  
は違う。一つ目の令呪を使った時も、「こんなつまらないことに令呪  
を無駄遣いするな」と怒っていた。

令呪をしかるべき時に使うことを願う彼は、明を裏切ろうとは思っていないはずだ。確かにセイバーは人の命を何とも思っていないかもしれないが、彼は確かに明と共に戦うつもりでいるのだ。

——ならば、それで十分だ。明に文句のつけようもない。

「……寧ろ私のほうが謝らなきゃいけないような……」

明がぼそりとセイバーには聞こえないように呟いた。勝利を望むセイバーに対し、あれをするなこれをするなど明は文句ばかりつけているからだ。

ちようどその時、ベッドの上で眠っている人物が身じろぎをした。

\*

——悪い夢を見ている。自分のサーヴァントに殺される夢だ。

共に出かけたことも、戦ったことも全て嘘だったと、衣冠束帯の男が嘲笑う。

「……うああああああ!!」

悪夢から逃れる手段が起きるしかなかった。それ故に一成は脂汗をびっしょりかいた状態で飛び起きた。しかし悪夢はまだ終わっていないなかった。

起きたのは見知らぬ部屋で、そこには黒髪の美しい少女——いや少年がいた。その姿は、一成が気を失う直前に見た人物と全く同じである。「起きたか」

一成は驚きと恐怖で再び絶叫し、勢いよく飛びのいたせいで壁に強く頭をぶつけて再び失神した。

「あー……なんか、とりあえずごめん」

「……いや、別に……」

セイバーと会話をしていた時に、突如一成がうなされだして飛び起きた。目覚めは最悪そうだが、とにかく目が覚めたことを喜び明は立ち上がった。

しかし、一成はセイバーを見ると再び絶叫し壁に頭をぶつけて気を失ってしまった。

言われてみれば、セイバーと明は事の顛末を把握しているが、一成はセイバーに腕を切られたところで記憶が止まっている。つまり、まだアーチャーに裏切られたことも知らなければセイバーもそのマスターの明も敵だと思っている可能性が高い。

すっかりそのことを失念していた明は若干自己嫌悪に陥った。とにかく心臓に悪いセイバーには一度出て行ってもらい、明は気絶した一成を起すことにした。

もしかしたら攻撃されるかもしれないが、魔術で彼に負ける気はない。

起すと、流石に警戒心をあらわにして明を見てきたが、もともと人の好み彼の事である。明に対しては半信半疑の様子で様子を伺ってくる。とりあえずこたつに座ることを進め、セイバーが手を付けなかった栄養ドリンクを渡した。

「……大丈夫？腕痛い？他の場所も大丈夫？」

「いや、痛くない。傷は塞がってるのか……？」

「いろいろやって塞いだけど、ちゃんとできてなかったら言って」

「いや……ありがとう」

重い沈黙が場を支配した。さてどこから話したものがと思っていると、一成の方から切り出してきた。彼の顔からはまた脂汗が噴出している。

まだ一日も経過していない出来事は、彼の中では鮮烈すぎて衝撃が収まっていないのだ。

「あのよ……昨日、あのあと、どうなった……？お前のセイバーに、腕を切られたけど……あれ、もしかして、セイバーの意思じゃ、ないと

か……」

一成はうつすら気づいている。ただ単にセイバーが一成を殺しにかかっただけではないことに。そして、己のサーヴァントとぶつかりパスが切れていることに。

片腕を失った彼に、さらなる真実を突き付けるのは心苦しい。だが、どうせ知れることでもある。明はあの子の顛末を包み隠さず一成に伝えた。

おそらく、アーチャーは渡りをつけていた他のマスターのもとにいるのだろうと。

流石に一成は色も言葉も失っていた。そうか、と相槌を返したが他に言葉が見当たらないように見えた。

「……この後あなたがどうするかで話だけど、令呪とサーヴァントを失っても、戦争が終わるまで教会に保護してもらった方がいいと思う。腕については私の知り合いにいい人形師がいるから、そこに頼もう」

一成は申し訳なさそうに頭を下げた。今は自分の状態を把握し身体を回復させることで精一杯なのは明とて承知しているが、のんびりしていることもできないのだ。

とりあえず彼には考える時間が必要で、休む必要がある。

しかし、青い顔色のまま一成はその面を上げた。

「あのよ……聖杯戦争を続けることはできないか？」

予想だにできなかった発言に、明は目を見開いて驚いた。「……どうやって？」

「……気合で」

しかし当の本人も具体的な方策はないようで、明は一気に脱力した。

「……もうサーヴァントも令呪もない。それに、あなたは無駄に人がいい。これからもっと大変なことになるかもしれないし、もうこのところで手を引いた方がいいと思う。今は怪我して起きたばかりだから、混乱してると思うし、もう少しだけゆっくりして。でも、そうは



いつてもあんまりのんびりもしてられない。とりあえず明日、また聞くから」

そこまでして叶えたい願いが、この少年にはあるのだろうか。しかし魔術師らしくなく、かつ気のいい少年が望むものが何かは分からない。

明は結局手を付けられなかった栄養ドリンクを置いたままにして、部屋を後にした。一成の意向は気になるが、すでにライダー・アサシン・バーサーカーの三騎が消滅したことになる。

これで残るは四騎。聖杯戦争も佳境を迎えている――。

\*

日が地平線の彼方に沈んだ。電気をつけず、貸されたダブルのベッドで寝返りを打ちながら一成はもう何度も思い出していた。

「これはこれはいい加減な召喚をするマスターよな」

そう呆れながら言った声が遥か遠い。バカにしていながら、面白がついていながら、それでいて見守るような視線だと思っていた。しかし、それは自分の勘違いで、すべてまやかしたのだらうか。

相手は千年の昔、宮廷の世界で君臨し権謀術数に揉まれた長者である。

年端もいかぬ、しかも単純な一成を騙しおおせることくらい、朝飯前だろう。

――それでも、アーチャーには無駄が多かったな。

一成を欺くのに、現世の衣装をまとい共に物見遊山に興じることが必要だったらうか。

一成を欺くのに、わざわざ実家までついてくる必要はあったのだらうか。

一成を欺くのに、いつもいつも余計な説教をする必要はあったのだ

ろうか。

もちろん現世に興味がある素振りは本当で騙すのには関係なかったとも考えられるし、一成に親近感を持たせるためだったとか、油断させるためだったとか、いくらでも理屈は考えることはできる。

けれど、どうせ裏切る相手に、「私の時代はな、怨霊というものが幅を利かせる時代であった。夢をかなえた者は、叶えられなかった者達の無念を全部引きずっていくことになる」「そなたは自分で願いを決めなければならぬ。魔導が非人道的であれなんであれ、そなたはこの戦争に身を投じたマスターじゃ」と、小うるさく説教するなんて無駄以外の何物でもない。少なくとも一成はそう思う。

今や一成とアーチャーを結んでいたパスはない。マスターの証である令呪も、左腕ごとなくなつた。起き上がるのにも歩くのにも、フランスをとることひとつに苦勞する。明の魔術か鎮痛剤かで痛みはないし、彼女の知る人形師にかかれば今までの腕とほぼ同じくらいに意思通りに動く義手を作ってもらえるそうだ。

だが、それを差し引いても片腕をなくすと言うことは尋常の事ではない。一成にもそれくらいわかっているし、ショックも受けている。

それでも、それ以上にこの聖杯戦争を続ける意思と——アーチャーと再び対峙しなければいけないという気持ちはどうしようもなく、納めがたくあつた。

(俺、腕切られて壊れたのかな)

普通ならここで聖杯戦争を下りると思う。根源を目指す理由だつて今やなく、人を食うバーサーカーは消滅した。明は一般人に被害を出すようなことはしないだろうし、キリエも純然たる魔術師ゆえにバーサーカーのマスターのようなことは進んではしないだろう。

ランサーとアサシンの陣営はわからないが、明とセイバーがなんとかしてくれるだろう。両親も危ないことをするなと繰り返して言っていた。もうやめてしまえと言う声が、心にある。

けれど、この戦争の発端を担ったのが我が土御門の家だと知って

は、最後まで戦い結末を見届けたい気持ちがある。

けれど、バーサーカーのマスターのような少女さえも戦いの渦に放り込む聖杯戦争を放っておけない気持ちがある。

けれど、あのアーチャーが一体何を考え、何を思い、聖杯に何を願って一成を裏切ったのかを知りたい気持ちがある。

(それと、あの女)

春日の管理者、碓氷家七代目当主である明。彼女が自分よりも遙かに格上の魔術師であることくらい、一成とて承知している。しかし、どこか彼女は危なっかしい。

昨夜のバーサーカー戦でも、傷を負った瞬間は痛がってはいたが、すぐにそれを忘れたかのように魔術を行使していた。魔導という普通ではない道を歩む女はみなこのようなのかもしれないが、明は傷を負っても全く気にしていないように見えるのだ。

「つていうか、よくわかんない奴だよなあ」

バーサーカー打倒の為に碓氷邸を訪れた時は、冷静な魔術師然とした女だと思っていた。だが、昨夜共に戦ったという経験を経てからはそのイメージに揺らぎが生じている。

一成は魔術師を止めた。己のすべきことをするために、魔術使いでいようと決めた。

だから人が死ぬのは嫌だし、殺すのだから嫌だ。

それに引き換え、純正魔術師であろう彼女は神秘を漏えいしかねない、という意味では咲に怒りを覚えることはわかるがその死を嘆く必要はない。

昨日、明は咲を殺そうとするセイバーを止めた。結局既に彼女は息絶えていたわけだが、もしあの時まだ咲が生きていたとしても、彼女はセイバーを止めたのではないのか——そんな気がしてならない。

それに、彼女にはここまで丁寧に一成を世話する義務はない。早い話、あの波止場に一成を放置してもよかったし、セイバーを止める必要もなかった。

それでも彼女は一成を助け、考える時間まで与えてくれているのだ。

「——だから悪い奴では……ないよな?というか、これって借りだよな」

明のことはここで考えても仕方がない。それより、自分のこれからだ。左腕と令呪はもうない。今度は本当に死ぬかもしれない。それでも、己が剣すら失って戦うなど自殺志願者でしかなくても、みつともない姿をさらしても、ここで終えることはできない。

——まだしなければならぬことがある。

一成の心など、とつくに決まっていた。一成は一人領き、気合をいれてベッドに寝転がっている状態から座っている状態になり、右手で膝を叩いた。

「よし「元アーチャーのマスター。食事だ」

「ぎゃあああああああああああああああ!」

ノックもなしに扉が開かれ、一成は悲鳴を上げた。その悲鳴は驚きによるものだけではなく、本能的恐怖によるものでもあった。部屋の入口に立っているのは、一成の腕を切断したサーヴァントである。それが彼の意思でなかったとはいえ、そうそう簡単に恐怖がなくなることはない。

「ななななななんだ!」

「マスターが食事を作った。早く来い」

迎えに来たセイバーは一成の狼狽を全く斟酌せず、伝えるべきことを伝え一成を促した。

「食事……?」

言われてみれば昨夜の戦いから何も食べていない。怪我の事、アーチャーの事、これからの事を考えて悶々としていたため腹具合など全く考えていなかった。

自分でも現金だと思いつつも、一成は食事の話聞いたとたんに腹の虫がうずくのを感じたのであった。一成は反射でベッドの端ま

で飛びのいてしまったが、そろそろと警戒しつつセイバーの後をついて部屋を出、階下に向かう。

セイバーはいつもの衣袴ではなく、Gパンにタートルネックという現代の服装をしていた。アーチャーも現代衣装を楽しんでいた。そのことについて驚きはなかったが、何かセイバーに対しては不思議な違和感があった。

今までセイバーと共に居たのは、ほぼ戦いのときだけである。また、この碓氷邸に交渉に来たときにはお互いにサーヴァントを連れていたからだろうが、緊張した空気が漂っていた。

セイバーが凜として真冬の寒気のような雰囲気醸し出していたのは、良く覚えている。

今が戦うときではないからというのもあるだろうが――

(にしても、なんつーか、ご機嫌なのか?)

セイバーがにやにやしているわけではない。表情は変わっていないが、纏っている雰囲気が、いふなればいつもより春っぽいのである。

「早く来い元アーチャーのマスター」

一足先に下りたセイバーが、下から見上げて呼んでくる。嫌がらせなのか何も考えていないのか知らないが、一成にとってその呼び方で呼ばれるのはかなり不愉快だった。

「おい、その呼び方やめてくれ。名前で呼べよ」

勿論自己紹介もし、マスターの明は一成を土御門と何度も呼んでいる。セイバーもそれを聞いているはずだから、知らないことはないだろうと思っていた。

が、セイバーはじつと一成を見つけてから何やら考え込んでしまったのである。一成の脳裏にひよつとしてこいつ、覚えてないんじゃないだろうかという考えがよぎった時に、セイバーが顔をあげた。

「……土御門カス成、早くしろ」

「どんな間違え方だ！お前わざとだろ!!悪意しか感じねえ!!」

渾身のツツコミはあえなく無視され、一成はあわや階段から落ちる

という惨事一步手前であった。

釈然としない何かを抱えながらも階下に降りると、クリーミーなおいが一成の鼻をくすぐった。シチューかグラタンか、その類の匂いだ。

始めて訪問したときも思ったが、本当に異人館のお屋敷である。ホールに面した食堂の中に、古びて艶のある木で作られたの六人掛けテーブルがある。その上に三人分のグラタンと野菜スティック、デザートらしき杏仁豆腐が置いてあった。

棚の上に無造作に置いてあるテレビがつけられ、ニュースキャスターが春日市の話題を取り上げていた。

セイバーは早くも黙々とグラタンを食しており、時々ニュースに目をやっている。

一成は空いている席に腰かけてから、重大なことを思い出した。そういえば、セイバーのマスターは女子大生だったといことを。

そして、目の前には女子大生の手作りグラタンやらデザートやらがあり、この家は女子大生が一人で住んでいる家であることを――！

「早く食べないと冷めるよ」

「うわ!!」

エプロン姿でタバスコを持ってきた家主が、首を傾げながら言った。一成の頭を席卷していた事象そのものが真ん前に姿を現し、一成は椅子からひっくり返りそうになった。

姿かたちはセイバーの方が整っているが、彼は中性的な美しさである。明はスレンダーで目鼻立ちが整っており、どこか憂いのあるところがまた女性的な魅力となっている。

青春真っ盛りの男子高校生なりに思うところはあるのだが、彼女の隣に座って野菜スティックを二刀流でもりもり食べるサーヴァントも視界に入るのでテンションは微妙である。

「……どうした、マスターの食事は極上というわけではないが食べら

れる味だ」

「……お、おう」

セイバーの微妙に失礼な料理評価のあと、一成がスプーンを手に取り、グラタンの一口めを口に運んだその時だった。「最後の晚餐だ、心して食べておけ」

「ブツ!!」

一成と明が同時に口に含んでいたものを噴出した。シンクロした動きをする二人を見て、セイバーはどうしたと言わんばかりに眉を顰めた。先に復活した明が頭を抱えながら問うた。

「……せ、セイバー、どういうこと?」

「昨夜、お前はこいつを殺すなど言った。その意味を俺なりに考えた。こいつもこいつで俺たちと同盟する以前にも戦い、他の陣営の情報を知っている可能性がある。安定して話せる程度まで回復させた後、情報を吐かせたのちに殺す。と、そこまで考えた」

セイバーは妙に鼻高々でご機嫌に野菜スティックをむさぼっているが、一成は硬直するしかできず明も口をあぐりあけている。

「?どうしたマスター。ああ、殺すときは適当な場所を選びここではない。血で汚すと面倒だろうからな」

「……いや、あの、そうじゃなくて」

明はスプーンを握りしめたまま、何度か逡巡した後意を決して口を開いた。

「……私は土御門を殺そうとは思っていないよ。知っていることは喋ってもらおう。けどちゃんと落ち着いてから、教会に保護してもらおう。そして戦争が終わるまで、そこにももらおうと思ってる」

しん、と静まりかえる。先ほどまでの少し和やかな雰囲気は消えて、重い空気が食卓を支配している。一成もその話の俎上に乗っており、かつ生死を握られているはずなのだが、むしろセイバーと明の間で空気が重い。

「……以前、お前は「関係ない人を戦争に巻き込んではいけない」と言った。俺には面倒なしがらみとしか思えないが、それが明の管理者、魔術師としての責任と使命であるならばよいと思った。与えられ

た使命と責任は果たすべきモノだ」

しかし、とセイバーは息を吸った。

「この男は「関係のない人間」ではない。戦争に主体的に参加している者であり、サーヴァントがなくともマスター。はぐれサーヴァントさえいれば、いつ敵に回るかわからない。ならば殺すべきだ」

「俺はたとえまたサーヴァントを得ても、確氷を殺さねえし人食いなんかもしねえ!……ッ!」

席を立ち叫んだ一成の首には、既に金属のひやりとした感触があった。彼の目の前には同じく立ち上がり、銀色の何かを持ちそれを一成の首に当てているセイバーがいる。

剣の英霊の目は揺らぎなく一成を射抜いているが、それに怯む一成ではない。

「お前が悪い人間ではないことくらい、初めて見た時から知っている。だが、こと戦時においてそれは関係ない。条件さえそろえば人は何でもする。——お前は、同盟の際「関係のない人を殺すバーサーカーを放置できない」の類のことを言っていたな」

一成は冷や汗を背に流しながら、肯定する。「……言った」

「ならば、何故あの時あの娘の前に立ち、俺の前に立ちはだかった?あの娘のサーヴァントは消えたが、令呪が残っていた。再びサーヴァントさえ得れば、あの娘は再びお前の忌む「人食い」をなす可能性が高い。そうなればまた「関係のない人間」が大量に死ぬだろう」

「……!」

セイバーのいうことは限りなく真実だ。真凍咲が生きていて、サーヴァントを得たらおそらく彼女は人を食ってでも戦いを続ける。

たとえサーヴァントによって死にかけようと、余命半年の咲は最初から命の危機に瀕していたのであり、その程度で心変わりするとも思えない。仮に今彼女が生きていても、彼女の考えはきつと何も変わっていない。結果として彼女が死んだから、状況が丸く収まっているように見えるだけだ。

「……敵も味方も全てを救えるのならば、それが最も良いのだろう。だが、それは俺には無理な相談だ。敵を殺さぬと決めて生かし、その



後殺さなかったことでさらに惨事が広がるのならば俺は殺す」

セイバーは銀色を一成に突きつけたまま、その眼を明にも向けた。一成が真凍咲を殺すなど言ったのと同じように、明が一成を殺さないとしたことに対して、問うている。

「俺がお前に渡せるものは勝利のみ。救うだの何だのは専門外であり、またこの戦いで考えることもない、だから——お前が魔術師としての責務を果たすならば、殺すことを選べ」

再び、場が硬直した。セイバーの言葉は間違っていない。敵マスターは殺すもの。一成はセイバーを警戒したまま、視線だけを明に向けた。彼女は魔術師なのだ——ここまでの厚遇が異例であることも、一成は知っている。それでも、明は首を振った。

「——やっぱり、土御門は殺さないよ。土御門は、そんなことしない。そんなことしない人間を、むやみやたらに殺したくはないよ」

「……ならば、仮にこの男がマスターの目から見て明確な「悪」であれば殺していたか」

明は黙った。その顔が妙に悲しげで、かつ諦めたように力がなかったのが、妙に印象的だった。

「……うん」

暫くの間を置いて、セイバーは一成の首元に当てていた銀色——それはスプーンだったのだが——を離し、席に座りなおした。一成は大きく息を吐いて、どさりと席に着いた。

セイバーは不承不承を隠さない。

「マスターがこの男を生かそうとするなら、俺が殺すわけにもいくまい。だが、見誤るな。完全に戦争においては余計な考えだが、にも拘らず誰かを救うのならば、それはお前の仕事だ。それに、何者にも全てを救うことは不可能だ。だから、選ぶしかない」

その時は確実に来る、とセイバーの目は告げている。明が少し躊躇いがちに頷くと、ひとまず全員席に着き直し、食事が再開された。一成などはまだ警戒しながらセイバーを見ていた。

かちやかちやと食器の立てる音、食事を咀嚼する音がする中——再びセイバーがスプーンを握りしめてものすごい勢いで明の方を向い

た。しかもやたら近い。おそらく二人の顔の距離は十センチくらいしか離れていない。一成はまた吹き出しそうになった。

「!?何?」

「今の話でひとつの可能性を失念していた。確認事項がある」

「あ、うん、何?っていうか近くない?あと口の端にホワイトソースついているよ」

見つめるというよりは半ばガンつけている状態で、セイバーは明に真剣に尋ねた。

「まさか、よもや、地球が逆回転を始める程度にはありえないとは思うが——明、この男を好いているということはないだろうな」

「ブツ!!」

本日二回目の噴出しをしてしまったのは一成だけで、明はセイバーと一成の顔を交互に眺めていた。今までシリアスな話をしていたくせに、突然の方向転換だが剣の英霊は大真面目だ。

正直一成とて其の手のことを、これまで全く考えなかったわけではない。ただ戦いの中で考えるには完全に余計なことで、またそういう緩い雰囲気にもならなかったので考える隙も殆どなかった、というのが彼の正直なところだった。

「え?あの、なんで今の話の流れで私が土御門を好きってのが問題になるの?」

何の動揺も見せない明を見て、セイバーは落ち着きを取りもどしかけていた。しかし。

「いや好きだけどさ」

「うううううじゅいいいい!?!」

「ハアアアアアアアアア!?!」

セイバーと一成の奇声が見事にハモって、明は騒音に顔をしかめていた。セイバーはまさかと言わんばかりに視線を明と一成の顔を行ったり来たりさせ、一成は一成で完全に挙動不審と化して、顔を赤くしたり白くしたりして逆に明の顔をガン見しているありさまだ。

「マスターがどの男と番うかなど自由だが、それはこの戦いが終わった後にしろ！惚れた腫れたの念は判断を妨げる！それ以前に相手は敵だ！」

狂瀾の男二人に対し、明は落ち着き払ったもの、というよりはここでやつと勘違いに気づいた。

「あ、好いたってそういう感じ？いや土御門いい奴だし好きな方だけど、惚れたとかとは違うんじゃないかなあ。というかセイバーだって東征で女連れだったくせに」

セイバーはその答えを聞いて胸を撫で下ろし、いつもの口調で答える。

「……二人は敵ではなかったし、美夜受は婚約だけして結婚は東征帰路だ。それに弟橘に関してはアレがヘンなのだ。出発前から来るなときつく言っておいたのについてくる、追いついてもついてくる……その点に関して現代におけるゴキブリ並みの粘り強さをを見せたぞ」  
「そのたとえばはかわいそうだからやめた方がいいと思……って土御門？」

すっかり通常運転の剣主従に対し、一成はスプーンを握りしめたままテーブルに突っ伏していた。それは然も在らん、己がサーヴァントに裏切られ左腕を失い、多少休んで落ち着いたものの再びセイバーにより死の気配にさらされ、その上そこからの思春期には振り向かざるを得ない話題による精神的動揺によるものだった。

彼女いない歴〃年齢、埋火高校二年非モテ同盟番長（他称）の名を恣にする土御門一成十七歳は、完全に燃え尽きて真っ白になりテーブルに沈没していたのだった。

「……やっぱりまだ疲れてる？無理して全部食べなくていいよ」

「……オウ……ありがとよ……」

完全に勘違いした気遣いに、一成はくぐもった声で答えた。もしかしたらものすごく面倒くさい陣営に助けられてしまったのかもしれない。ない。

燃え尽きた一成など綿埃程度にしか思っていないセイバーは、既にグラタンを完食してデザートのアレンジ豆腐に手を付けていた。

「マスター、もしやとは思いますが、この杏仁豆腐とやらは塩と砂糖を間違えていないか」

「えっ嘘……うわっ……」

明まで失敗杏仁豆腐の方に気を取られ、哀れ一成を気遣うものはいなくなつたのであつた。

## 12月2日② 三者三様陣営模様

食後の片付けも終わり、明はリビングのソファに横たわって寛いでいた。リビングの白い天井を見上げてから目を瞑った。昨日消費した魔力を回復しきるにはゆっくり休むことが一番である。

ないと思うが、もしランサーやまだ見ぬキャスター、行方知れずのアーチャーが襲ってきてても対応くらいはできるほどには回復するだろう。

現在一成は明の父、先日までセイバーが使っていた部屋で寝ている。セイバーと同じ部屋では寝にくいと一成が言ったので、セイバーには同じ二階の客間で寝てもらうことにした。セイバーはいつもこたつで寝るので、こたつが設置できればどこでもいいようだった。(この家がこんなに人がいてにぎやかなのって久しぶりだなあ、って言っても三人だけ)

明の母は、明を生んだ直後に産褥死している。姉一人がいたが、明が六歳の時に養子に出されてしまっただけでそれ以来会っていない。この屋敷は父と明だけで済むには広すぎる。

父がいたころには家政婦を雇っていた時期もあったが、家政婦が誤って地下室に入ってしまう事件があったから呼んでいない。掃除は手間だが、おおむね魔術でなんとかしている。

その上、明が高校卒業時にちよつとした騒動を起こし、その始末の為に父は時計塔に渡ってしまった。それきり明は屋敷に一人である。そうではなくとも元々父は家にいつかないタイプで、月のほとんどを留守することさえザラだったから、特に時計塔に行ったからと言って何かが変化したわけではない。

家でのだんらんどころか、家に誰かがいるということ自体が久しぶりだった明は新鮮味さえ感じていた。

常に傍に人がいるということは、鬱陶しいような安心するような、複雑な感覚である。

けれど、それも今だけの話だ。一成は聖杯戦争を離脱して教会に身柄の安全を確保され、セイバーも戦争が終われば座に戻る。東の間の

喧騒——表現するならばそれが最もふさわしい。

明は己以外の気配を感じながら、静かに眠った。

\*

(……魔力の質が変わったか?)

アサシンは闇に溶け込んだような黒い雨合羽を風にはためかせ、鼻をひくつかせた。昨夜までこの街を覆っていたのはおどろおどろしいほどの怨念のこもった魔力だった。

だが、それは恐らくバーサーカーのそれであり、倒された今となつてはその種の魔力を感じることはない。

(だが、こっちもお上品な魔力とはいえねえな)

バーサーカーの時のような、触るものを殺していくような凶悪さを感じない。だが、薄く感じる今夜の魔力は人を蕩かすような甘美さを持つているように思える。

退廃的で墮落を招き、それでいて人を取って食うような魔性。

「おいアサシン、もう出ていいか」

「おつとつと」

コートをまとった中年の男が、アサシンの雨合羽の中から突然姿を現した。アサシンの宝具『金欄襦袢かぶきのいししょう』に収まり、アサシンによって運ばれていたのだ。

昨夜のバーサーカー戦のショックが尾を引いて、帰宅してからの悟は夜が明けて再び日が暮れるまでカスミハイツに閉じこもったままだった。そこをアサシンが宝具に引つ張り込み、外に連れ出したのである。アサシンは湿っぽい部屋の中に閉じこもったままでも腐るだけだと思つた。

「つてか……寒いな……!」

そういうわけでアサシンに連れられてきた悟は、宝具から出るなり

外気の寒さに身を震わせた。足元は芝生で、柔らかく地を踏みしめている感覚を与えてくる。

にやりと笑うアサシンは、ある方向を指差した。その先には何も無い。ただ師走の漆黒の闇の中に、叢雲かかる月が浮かんでいる――。悟は思わず感嘆の息を漏らした。

「……………、スゴイ穴場だな」

春日駅から南を望むと、住宅街が広がる奥に丘があるのが見て取れる。大きな自然公園の中にある丘で、少々市街地からは離れている為、悟は今まで来たことがなかった。

他より高い場所にあるのだから、景色が良く見えるのは当然である。だが、ここは一味違った。

「現代の夜景も悪くねえな。俺としては春だともっといいんだけどな」

下には住宅街の明かりが点々と光る。それより遠くに目をやれば、春日駅周辺のビルの明かりがきらきらと宝石のように輝いている。遙か上空は、その人の営みを見守る白い満月が静かに白光を宿している。薄くかかった雲が白光を和らげる。

丘の上という場所ゆえに、街中と違いこの光源は空の月だけだ。それでも悟にはアサシンの姿がはつきり認識できるし、影だつてできるくらいに月は明るい。

「酒なんてもんは肴がなくても、年がら年中月見て飲んでりやいいんだよ。つつーと、どこに入れたか」

アサシンは半纏の袖の中をひっかきまわし、日本酒の瓶と杯を二つとりだした。そして一つを悟に渡し、酒をなみなみと注いだ。自分も盃を掲げ、透明な酒に月を宿す。

「どこで盗んだか忘れたけど、俺が盗むもんには間違いはないぜ」

「……………おまえのその、宝具だっけ？の中、なんか埃っぽかったんだけど大丈夫なのか？」

「ん？盗んだはいいいけど整理とかしねーからな。まいったまいった」

貯蔵の蔵ではなく一時保管の意味合いが強いアサシンの大風呂敷

は、あまりに物品を放置しすぎるといつの間にか無くなるそうだ。その盗品がどこに行くのか、アサシンですらわかっていない。

悟は飲んでも大丈夫なのかと訝しんでいたが、当のアサシンは自分で注いでぐびぐび飲んでいる。ついでに芝生に腰を下ろしてもいた。悟も諦めて腰を下ろして、冷えた空気のなか二人は酒を飲む。アサシンの酒は辛口だったが、自己申告通り後味が爽やかな佳い酒だった。

「……おい、悟よ」

「何だよ」

雨がっぱをかぶったアサシンは、妙に改まった口調で主人に声をかけた。

「お前、本当に聖杯戦争をやるのか」

一陣の風が吹き抜けて、芝生の草が一斉になびいた。薄く広く魔力をはらんだ春日の大気は、聖杯戦争の存在をいつでも知らせる。悟とて、忘れたわけではない。

昨夜の激闘、人ならざるサーヴァント同士の戦い、左腕を切り落とされた少年、魔力の枯渇により命を燃やし尽くした少女。特に命を落とした少女は、娘を持つ悟にとっては目を背けたいものであった。

答えない悟に対し、アサシンは酒をあまりながら話し続ける。

「あれが聖杯戦争だ。命をかけることあ、命しかないやつがやるものだ。悪いこといわねーから手を引け。おめーには娘も妻もいるだろーが」

命を懸け、人の命を奪い、己が望みを叶える。鉄の如き意思を持たずして乗り越えられる道ではないし、悟の願いは聖杯では叶わない。アサシンはそう思う。

それでも、一人きりの男は目の光りを消さずして確かに答える。

「……いや、俺は戦う」

「お前」

「お前、命をかけることは、命しかないやつがすることって言ったな。」



そっだ。俺にはこの命しかない。昔の幸せを取り戻せるなら、俺はそれでもいい」

自分には何も無い。小さいころから勉強ができたわけでもなく、得意なことがあったわけでもなく、豊かでもなく、貧乏くじばかり引くタイプだった。それでも高校を卒業し、食べていけるくらいにはなり、妻と結婚し子供をもうけることができた。

それが人生で一番幸せだった。しかし、いわれなき罪を押し付けられて、妻と子はいなくなつた。

悟は再び、気づいたのだ。

自分はやはり、貧乏くじばかり引く。何もできない、つまらない人間。妻は地方の名士の家柄で、自分がいなくてもきつと新しく自分より良い男と再婚できる。

そんな自分が過去を取り戻そうとするならば、捧げられるものなんてそれこそ命くらいだ。

「俺は戦うよ。アサシン。魔術のマの字も知らないマスターだけど」

アサシンは盛大にため息をついた。バーサーカーの戦いを見てまでやめないと言うのならば、これは付き合うしかないとの諦めのため息である。

「……つたく想像以上にどうしようもねー奴だな」

「な、何がどうしようもないんだ」

「気にすんな。……とにかく、マジで戦うしかねーようだ。ま、お前に助けられた命だからな、俺のいる限り護つてやるさ」

「……俺がお前を助けた？」

本気で首を傾げた悟に、アサシンは本気で脱力した。忘れたのか、それとも助けたことと認識していないのか、恐らく後者であろう。

「バカ。最初にお前に会った時、俺は消滅寸前だったつたつたろ。あそこでお前が契約しなきゃ俺は今ここにいなねーんだって」

「つか契約も何も気づいたら契約してたから、助けようと思って助けたわけじゃないぞ」

「細けえこたあいいんだよ」

空になった杯に日本酒を並々と注ぎ、アサシンは遠く遙かに月を見上げた。月光を浴びて紅葉に染まりきった木々が、光と影を織りなして二人に投げかける。

何事もなく一時に運命を共にする者と酒を静かに飲める時など、きつと数えるほどしかない。

「お前は自分の命を、腐った体とかつまらない心だっけって言ったな。だけどよ、それは俺も同じだぜ」

「……？英霊、サーヴァントってのは生前偉業をなした英雄がなるもんって、お前言ってなかったか？」

「英霊にもいろいろあってな。実在していよーとなかろーと人の信仰、想念つつーのか？が集まれば英霊になるんだぜ。例えばかぐや姫なんつー英霊もいるからな。俺はどっちかといえはそういう奴だ」

悟は驚いたが、それでもアサシンが悟と同じということには？がないだろう。人の信仰を集めるには、それだけの活躍があるものだ。黒い雨合羽を脱いだ姿を知り、大盗賊と言ってはばからないアサシンの真名については悟も見当がついている。

戦国に生まれ、現代でも大盗賊の代名詞たる英霊は、彼自身を披歴する。

「俺は生前、一介の庶民だった。時は戦国、戦火に巻かれて俺の親は死んだ。俺は生きるために盗賊になった。最後には豊臣の手につかまり、子供や妻もろとも釜茹でにされて死んだ。生前の俺はそれだけだ」

「……あれ、アサシン実は忍者だとか寺に上って「絶景だ——」って言ったとか、そういうことしてたんだろ」

「一介の泥棒がそんなスペックもってるわけねーだろアホかお前。ついでに泥棒が目立ってどーする」

雨合羽の下がド派手衣装な盗賊のセリフとは思えない。悟は何か理不尽な気持ちになった。

「死にざまがエグいせいかな。後世、江戸時代だな、俺をモデルにた

くさんの歌舞伎が演じられ、豪く脚色された。猿関白を殺そうとしたとか、南禅寺の門に住んだとか、実は伊賀の忍者とか色々な。お上に對する庶民のはけ口つつーの？俺は人の思い描いた想念に、生前の記憶が塗りつぶされてんだよ。要するにだ、」

だから、実在はしていたが半分は物語上の英雄のようなものだとかアサシンは語る。すでにアサシンは過去実在した人物ではなく、人々の願った英霊に成り果てている。生前の記憶を薄れさせ、英霊なる存在に祭り上げられる気持ちなど悟には想像が及ばない。

「そういう英霊だからな、要するにだ」

しかし己を語るアサシンに曇りの色はない。彼は杯に注がれた酒を飲み干すとやおら立ち上がり、月光を背に腕を組んだまま高らかに宣言する。

「俺という英霊は——お前みてーな、腐った体でつまらない心を護るためにこそある」

人びとが描いた想念たる暗殺者の英霊は、威風堂々と笑うのだ。

「とはいっても、俺は弱い激弱だ！どうする」

「お前はほんとに上げて落とすよな……」

不覚にも感極まってしまった悟だが、謎の心得のあるアサシンはぼつちりと落としてくれた。涙は引っ込んだ。だが、闘う以上は戦略を練らねばならない。

ことにアサシンはサーヴァント七騎でもお世辞にも強いクラスとはいえないのだから。

「アサシンの常套手段でいけば、マスターを殺しまわることだな」

「できれば、それは避けたい」

「言うと思ったぜ、ったく。俺は逃げ足には自信があるから、基本は逃げまくるが……」

「そーいや、アサシンの宝具ってあの襦袢だけなのか？」

昨夜の戦いでバーサーカー・アーチャー・セイバーの宝具を奇しく

も目撃した悟は、アサシンにも攻撃用の宝具がないか期待した。しかしアサシンは渋い顔をした。

「他の宝具はあるにはあるぜ。だけどよ使い所がめんどくさいっつーか、なんつーかテクニカルっつーか。とりあえずあのセイバーみてーなわかりやすく派手なもんじゃねーぞ」

「お前見た目は派手なのに変だな」

「オイコラ」

悟をどつこうとしたアサシンの腕は軽々と躲された。ここにきて初めて聖杯戦争という舞台に立った二人だが、アサシンの願いは聖杯にはない。

全く狙っていないわけでもないが、彼の目的は既に別にある。

異なる夢を抱き、何もないという男と庶民の想念たる英霊は戦いに臨む。

\*

アサシンと同じ月を、少女——キリエスフィール・フォン・アインツベルンとキャスターは見上げている。しかし、彼女たちが腰を下ろしている場所はアサシンたちよりもずっと高い場所にあった。そもそもキャスターは腰を下ろしているのではなく、一つ背の高い木の上にふわりと立っているのである。その彼女の腕に抱かれているのがキャスターのマスターだ。

「ご主人くまだだめ？わたしもうお腹いっぱいよ」

鈴を転がすような声でありながら艶めく女の声だった。そのふっくらした唇を塞いだのは、キリエの小さな手である。その手の甲には、六画の令呪が刻まれている。

「もう少ししたら運動させてあげるわ。もう少し我慢なさい、キャスター」

「私もバーサーカーみたいに生の人間を食べたいわ。お腹は一杯だけ

ど、なんというのかしら？おかゆばかり食べてお腹を膨らませている気分だもの。私、バーサーカーのマスターに召喚されたかったわ」

キャスターの不平を少女は笑って受け流す。

「私だってまさか召喚に失敗するなんて思ってたわ。おかげで御爺様にはひどく叱られてしまったし、出てくるサーヴァントは殆ど魔物だし。うまくいったら私のサーヴァントはセイバーだったのよ？」

挑発をするように、キャスターのマスターは赤い瞳を細めながら豊かなキャスターの髪を弄ぶ。戯れるようにその挑発に乗るキャスターは、マスターの顎を撫でる。

「あら？主人はあれを御所望なのかしら？それは残念だわ」

「あら、ヤキモチかしらキャスター？」

キリエはくすくすと笑う。少女とキャスターのやりとりは、何でもないやり取りでもどことなく蠱惑的な雰囲気漂う。

人に似て人ならざる少女とその使い魔は、契約によるパスのみではなく、人ではないということ縁として繋がれている。

「悪いけど、もう少し待ってちょうだい」

「仕方ないわ。それに、もうすこしできればこの姿のままでもいいし」  
キャスターはマスターを抱え、木の上から一步足を前に出した。当然、そこに足場となるものは何もない。ふわりとキャスターは落下する。そこに焦りの表情はない。煙にまかれて、まるで雲に乗っているかのように飛行する。

そして山のふもとに突如現れる、西洋風の館の前にゆったりと着地した。

キリエは丸々一分をかけて詠唱を完了させると、空から忽然と西洋の館が姿を現した。そこにあった樹木などなかったように鎮座し、庭こそないものの重厚な白いレンガで整えられた館は三百坪程度の規模をもつ。玄関の木製扉が勝手に開き、キリエが指を鳴らすだけでシャンデリアが灯り、館は熱を得る。ホテルのロビーのようなエントランスは、左手には牛革のソファを置いている。

キリエと、キャスターと手伝いのホムンクルス数名のみの館には、昨日から新たな人物が加わっていた。

黒い束帯に冠をつけ、飾り太刀を携えたアーチャーが、まるで我が家であるかのように寛いだ姿勢でソファに身を沈めている。帰った来た二人に気づいたアーチャーは、姿勢を変えず会釈をした。「今帰ったのか」

「ええ、この山の具合を見てきたわ。準備は整ってきたようだけど、まだね」

キャスターの腕から降りたキリエは、かつかつとアーチャーに近づいた。

「それは重畳」

「そういえばアーチャー、カズナリ・ツチミカドは生きているのよね？」

「昨夜も伝えたらう。おそらく生きておる」

どこか安心したようなキリエの様子に、アーチャーの方が尋ねた。まだ正式に契約を交してから一日経っていないが、彼女は一成よりも遥かに魔術師であり、また聖杯を得ようとする意気込みも並々ではないことを感じ取っている。

「姫、アレの事を気にかけているようだが？」

「彼はなかなかの紳士だったから。殺すには惜しいわ」

マナーは失格だけど、私をちゃんとエスコートしてくれたし。と、キリエは実年齢とはかけ離れたあどけない笑みを浮かべる。生まれてからその人生を閉鎖した城の中で、限られた従者とだけ生きてきたキリエは人生経験そのものが少ない。其れゆえの素直な笑みであった。

「私は部屋に戻るけど、キャスターは？」

「私はもう少しここにいるわ」

にこにこ手を振るキャスターを一瞥して、キリエは静かに螺旋階段を上っていく。それを見送ってから、キャスターはアーチャーの向かいのソファにどさりと腰かけた。

キャスターは魔的な色香が漂うにもかかわらず、一つ一つの動作が

妙に荒い。

「何用か、キャスター」

「別に用はないのだけど。あなたは私たちの一味になるのだから、どんな人なのか知っておこうと思ってるね」

一味とはまるで山賊か何かのような言い草だと思いつながら、アーチャーは苦笑した。

しかし想定したキャスターの真名から鑑みれば、荒い動作も言葉使いも納得がいく。アーチャーは扇で口元をかくし、嘆息する。

「どんな人とは、これまた奇異なことを聞くものよ。もうそなたは私の真名を知っておろう」

「ええ、知っているわ。人間の中の人間、それがあなた。それでも共に戦う仲間は仲間なのだから、知ることは必要だと思おうの」

このキャスター、一見して腹の底の読めない女に見えるがその実考えていることは恐ろしく単純である。英霊というよりも魔物の類であるが、そうなればアーチャーにもキャスターの正体は読める。

アーチャーはこれ見よがしにため息をつくが、それを気にするキャスターではない。

「それで、そなたは何が聞きたいのだ」

「そうね……じゃ、聖杯にかけたいの願いは何？」

「聖杯に尋ねたいことがある。それだけよ」

「何を尋ねたいかが肝心じゃない、もう。でも流石に栄華の頂点を極めた人には、特に欲しいものとかはないのね」

キャスターはつまらなさそうに唇を尖らせたが、すぐに笑う。アーチャーはそのようなことはないぞ、と否定する。

「手に入るものが多ければ多いほど、手に入らないものの存在が目障りになってくるものだ。生前の私とて、ままならぬことなど山の様にあったわ」

一瞬の間が空いて、その後にキャスターは口を手で覆い腹を抱えて笑い出した。

人ならざる身のキャスターは、そのような煩悶とは無縁らしい。

「……手に入らないものが多くても苦しくて、手に入るものが多くても苦しいなんて、人間ってホント病気ねえ!!」

「そなたにはわからんよ」

「ええ、わからないわ!次から次へ欲しいものがある気持ちもわからないわ!私は最初から欲しかったものだけあれば、それでいいもの!」

道化扱いされて笑われながらも、アーチャーは不愉快の色を貌に表さない。アーチャー自身、自分の願いが道化じみていることくらい自覚はしているのだ。

しかし、そうでありながら聖杯を求めるほど、アーチャーは餓えている。

——栄華に塗れて溺死した。栄華と言う酒に浸かり切ったアーチャーは、それゆえに飢えることになる。

アーチャーの心中をよそに、キャスターは極めて上機嫌である。小首を傾げて楽しそうに笑う姿はとても美しい。

「ご主人が何で外で観光したがるのか、ツチミカド?を気にするのかわからなかったけれど、その気持ちが少しわかった気がするわ。他のサーヴァントが何を思っているのか——戦う前の暇つぶしにはもってこいね」

\*

日が暮れた春日教会の礼拝堂の椅子に腰かけ、長い溜息をつく妙齢の女が一人。その隣には書類がまとめて置いてある。黒い修道服はどこかくたびれて見て、其れも相まって彼女の体から発散される疲労を強調する。

「ふう、これで一応ひと段落ってところね……」

神内美琴は自分で自分の肩をもみながら人心地つく。昨夜のバー



サーカー討伐戦の後処理に今の今まで奔走していたのである。複数回爆発が起こったかのような散々な状態の倉庫街の事故に対するマスコミ対応、修理費。さらに一昨日、春日駅近くのオフィスビルでも戦闘が行われたようで、そちらの対応も他の教会スタッフと行っていた。

しかし全身を疲労につつまれながらも、美琴の顔はどこか晴れやかだった。

(ちゃんとやってくれたわね、明)

人びとを食らうバーサーカーは消えた。春日を脅かす脅威は去った。聖杯戦争の円満なる終焉を望んでいる美琴は、セイバーのマスターに向かつて笑う。

残るサーヴァントはセイバー、ランサー、アーチャー、キャスターの四騎。ランサーの報告によれば、一度アーチャーとは交戦しているそう。そしてガンナーなる謎のサーヴァントが現れたそうだが、霊器盤にも新たな反応がなかったため、消去法で考えればそれはキャスターということになる。

となれば、教会はランサーにより全てのサーヴァントを把握したことになる。

ランサーの報告によれば、ガンナーことキャスターはとても素早く多彩な攻撃法をもっており、同時に固有スキルか、気配遮断に似たものをもっており補足が難しい。

宝具は展開されていないが、攻撃力は高くない。そして彼のマスターだが、アインツベルンの消息が未だに知れないことからすれば、おそらくそれだろう。

しかし聖杯に執着するアインツベルンが、そう強いクラスではないキャスターを何故選んだのかは腑に落ちない。

アーチャーは明からの報告も含めれば厄介だ。アーチャーは対神宝具を所持しているため、セイバーに対して有利に戦いを進められる。セイバーと明日く剣を持たなければ強く束縛はされないそうだが、伝説を鑑みれば自殺行為だろう。こちらはランサーを主砲として倒すべきか――。

これからの展望を考えているうちに眠気が襲ってきて、暖炉に燃える火を見ながら美琴は暫しまどろみかけた。眠気を覚まそうと、彼女は立ち上がった。しかしその時、立ちくらみを起こして足を椅子にぶつけた。お陰で眼は覚めたが、少し涙がにじんだ。

だが、その時左廊下の奥の居住区画から姿を現した養父を見つけ、すぐさま背筋を伸ばした。

「お父様、お疲れ様です……どうかなさったのですか？」

養父の顔色は優れない。体調でも崩したのかと、美琴は声をかけたが彼は首を横に振った。

「来客かと思えばお前だったか。お前こそご苦労だったな」

「いいえ、大したことはないです。それよりも、そろそろセイバーとランサーで他サーヴァントの掃討に出るべきだと思います」

美琴は先ほど考えていた話を御雄に伝えた。彼は精悍なその顔を緩ませ、笑った。先ほど使い魔でハルカに連絡を取ったところ、美琴と同じ話を聞いたと言う。

「ならばさっそく明日からでも」

セイバーはバーサーカー掃討により消耗している。今日は回復に努めさせ、明日から打って出る。聖杯戦争を終局に向かわせるべく、美琴は意気込んだ。

しかし、期待した反応は養父から返ってこなかった。

「そうしたいところだが、打って出たとしてちよūdよくアーチャーとキャスターが捕まるとは思えない。その上アーチャーはいまだ行方知れずだ。まずはそちらをつきとめる」

「……それは、そうですね」

陣地作成のスキルをもつキャスターの拠点とアーチャーの行方を探すべきという尤もな考えに、美琴も頷かざるを得ない。こういう調査ならば、教会側も使い魔を放ち行うことができる。

「少し逸っていたようです。それでは明日から、ランサーにその調査を」

「そうだな」

美琴はやはりどこか調子の悪い——いや、機嫌の悪い養父の様子が気になった。お休みになられてはと声を掛けると、彼は頷いて再び居住区画へ姿を消した。

父を見送ってから、美琴はイスに置いたままの書類を手を取った。先程は思ったより強く足をぶつけたようで、まだじくじくと痛んでいる。あとで薬を塗ろうと、彼女も居住区画へ戻った。

(——おかしい)

御雄は教会奥の彼の部屋で、霊器盤を目の前にして唸った。霊器盤には四つの光——セイバー、ランサー、アーチャー、キャスター——が赤く光っており、三つはついていたが消えている。

だが、それは可笑しいのである。

ガンナーと名乗るサーヴァントがキャスターでありアインツベルンがマスターであると、美琴も明も見ているが、それは違う。ランサーの報告ではマスターは三十代くらいの日本人の男だったそうだが、アインツベルンならば、見た目は日本人とは思えない——白い髪や赤い目をしたホムンクルスをマスターにするはずだ。

アインツベルンが外来の魔術師を雇うと言う可能性はまずない。彼らはかつての冬木の戦争において、味方に引き入れた外来の魔術師によって手ひどい裏切りにあっているのだ。

ならば本当にガンナーなるサーヴァントがいることになるが、霊器盤には八つめの反応はない。

どちらにしてもつじつまが合わないのである。

霊器盤に細工がなされようもないことは、監督者である彼が一番よく知っている。

(……まさか、霊器盤が異変を来している?)

そう考えればすんなり納得もできるが、仮にそうだとしたらこの春日で確かなサーヴァントの現界を確認する方法がないことになって

しまう。

しかしサーヴァント同士は戦いあう衝動を聖杯から付与されている為、嫌がおうにも局面は進む。

街に多くの使い魔を放っているとはいえ、不安が残る。

春日の聖杯は冬木のそれを真似た贋作。冬木の聖杯も聖堂教会から「贋作」の烙印を押された、真の聖遺物ではない。二百年以上も昔、アインツベルン・遠坂・マキリの御三家の神域の天才達によって開始された大儀礼、冬木の聖杯戦争でさえ数々の不備があったという。

五度に渡り開催された冬木の戦争において、勝者はいても聖杯によつて願いを叶えた者は誰一人いない。三度目までは儀式そのものが完遂されず、四度目と五度目はいずれの陣営も聖杯を使用せず破壊して終焉を迎えた。

その後、遠坂の当主と時計塔のロード・エルメロイ二世の手により聖杯は解体され、冬木の聖杯戦争は幕を閉じた。

——果てさて、ヒジリノサカズキこの地の聖杯は真に勝者の願いを叶えるや、否や。

しかし、聖杯が「贋作」であると断じられても、戦争が起きた時点で聖堂教会の神父として思うことは一つ。無事に、何事もなく戦争が終わる事である。

一体この春日の聖杯戦争は、イレギュラーな事態が連続している。それは必ずしも聖杯によるものだけではないのだが。

一つ、異常をきたしていると思われる霊器盤。

二つ、あまりにも早く消滅したライダー。

霊器盤がその存在を確認したのはわずかの間で、あまりにも早く消えてしまった。

三つ、時計塔から派遣されたハルカ・エーデルフェルト。

前二つはこれから考えるとして、最後のハルカ・エーデルフェルトの件については一つの結論が出ている。あれは本物のハルカ・エーデ

ルフエルトではない。

見た目は御雄神父の知る彼であるが、それでも別人である。

あの青年は、誰何する神父に対して何のためらいも無く、「ハルカ・エーデルフェルトではない」と言い放ったのだ。いくつもおかしいと思う点があり、ブラフで誰何したのだが最早ごまかしもしなかった。

正直な話、大人しくしていくてくれるのならば神父としては彼がハルカであろうとなかろうとどちらでも構わなかった。ハルカ・エーデルフェルトに成り代わった者がどのような目的を以って聖杯戦争に望んだのかは依然不明であるが、もしハルカが彼の魔術師であるならば、いい使い道があるかもしれない。

たとえ真に願いを叶えるものではなくても、聖杯が願いを叶えると信じ続ける者達がいる限り、この喧噪は止むことなく続く。

## 12月3日① 冬の長い一日

私はなぜこんなにも苦しいのか――。

アーチャーは己を召喚したマスターに、生前のある男の面影を見る。

生前のその男に問いたくて、しかし口が裂けても問えなかったことがある。

己が家の命運尽きようと、夢が夢でなくなっても、戦いつづける姿に過去の幻影を見た。

「そなたを見ていると苦しい」

稀代の幸運児である、藤原道長の話を続けよう。

兄道隆の息子、伊周これちかに官位を抜かされて道長が齒噛みしていた時期はたしかにあった。しかし道隆一家の栄華は長くは続かなかった。

大黒柱たる道隆が、四十五歳の若さで飲水病(現代で言う糖尿病)により世を去ってしまったことから、彼らの終わりは始まった。

問題は空白になった関白――権力の座である。候補としては道隆の息子、伊周か道隆の弟(道長の兄)の道兼がいた。やはり年が若すぎる、ということと道兼が関白となったが、その時の昏い焰の宿る伊周の顔を、道長はよく覚えている。

当時、京では疫病が流行っていた。その疫病は庶民にだけ猛威を振るうわけはなく、貴族たちにも容赦なく襲いかかった。結果、太政官の三分の一が病で世を去ることになる。現代風に言えば、国会議員の三分の一が病気で死んでしまったくらいの緊急事態だった。

その疫病は、つい関白となったばかりの道長の兄をも襲った。そして彼は倒れたまま二度と起き上がれず、そのまま儂くなってしまうた。

またしても権力の跡継ぎ問題が持ち上がる。次の候補は伊周と、そして道長であった。道長にはまだ兄がいたが、様々な理由があり後継者からは除外されていた。

さて、歳の順から言えば次期執政者は道長だが、伊周の妹・定子ていしは現天皇の最愛の後であった。帝の心情からすれば、伊周を後に据えたいところであるがあまりにも彼は若い。

そこへ決め手となつたのは、帝の母であり道長の姉もあつた、皇太后詮子こうたいごうせんしの言葉だつた。

「伊周は余りにも若すぎる。道長を次に据えるべきです」——かの姉は、息子である帝に対し一晩中このようなことを訴えたのである。

結果、道長はあれよあれよと執政の座に就くことになった。彼が特に何かしたわけではなく、これは巡り合わせ——運というべきものであろう。

道長とて出世を諦めたわけではなく、虎視眈々と機会を狙つていた。だが、疫病流行による太政官の激滅——このように降つて湧いたかのように執政の座が滑り込んでくるとは思わなかつた。

だが、納得がいかないのは伊周である。落ち度があつたわけではない伊周は、道長との対立を深めていく。そして年若い伊周は、その緊張状態に耐え続けるほどの忍耐を持ちあわせていなかった。

当時、伊周は自分の通つていた女をめぐり当時の法皇・花山院との間で醜聞を起こした。その伊周の弟に、隆家たかいえという男がいた。この男は貴族に似合わずやんちゃとか無鉄砲とか、勝気な質であるため周囲からは「さがな者（乱暴者）」と呼ばれているほどであつた。その弟を巻き込み、事態は花山院に弓を射かけるところまで発展した。

醜聞は法皇にとつても隠したい事態ではあつたが、事態は明るみに出た。

否、伊周の下につけていた部下が道長に知らせ、そして道長があえてこれを広めたのだ。

これをきつかけに流れが変わつたように、伊周たちに不利な証言・証拠が突如湧き上がつて道長の下に届けられていった。

そして、伊周と弟の隆家には流刑の処分が下つた。

配流先に向かう彼らの姿を見て、道長が何も思わないわけはなかつた。狭い京の中で、彼の兄弟を幼いころから知っている。憐れ、とは

思えど道長は己の選択が間違っていたとは思わない。

一歩間違えたら、彼らの姿は自分であるのだから。

引くことはない。あの兄弟が京に戻ることになっても、彼らは死ぬまで道長に頭を垂れ続けることしかできない運命を背負わせると、決めた。

彼の兄弟は恩赦により翌年帰京を許されるが、その後彼らが政界に返り咲くことはなかった。二人の母は配流された年に亡くなり、帝の寵姫である定子も二十五の若さで産褥死し、同腹の兄弟は出家した弟と伊周、隆家だけになった。

枕草子に描かれた、煌びやかでにぎやかな彼らの姿は疾うに無くなっていった。

彼らには伊周の亡き妹が残した帝の第一皇子、敦康あつやす敦康親王がいたのだが、その後道長の娘・彰子が第二皇子を出産する。

こうなってはたとえ第一皇子を擁していようとも、後ろ盾があるのは道長の孫の第二皇子である。その翌々年に、伊周はまるでこの世に望みはなくなってしまうと言わんばかりに、病で世を去った。

さらに彰子は第三皇子をも出産した。道長の娘、彰子は現在の帝の中宮であり、次女の研子けんしは東宮妃。そして三女の威子いしが彰子の産んだ第二皇子——敦成親王の后になるといふ、一家から三人もの后を輩出する未曾有の栄光——「一家三后いっかさんごう」を成した時に読まれたのが、かの歌である。

「この世をば 我が世と思う 望月の 欠けたることも なしと思へば」

実際、この時道長は得意の絶頂だった。嬉しくてつい詠んでしまった歌のため、彼自身の日記にこの歌は残っていない。

富と権力を得た者が、次に望むことは何か。永遠に生きながらえることが筆頭に上がるだろうが、道長——いや平安貴族はその欲望を持たなかった。

彼らは死んだ後に極楽浄土に迎えられ、平穩を得ることを望んでいた。

道長の栄華が、多大なる運に支えられていたことは是非もない。



疫病で多くの公卿が亡くなることも、伊周が自滅への道を歩くことも、跡継ぎにも入内させる娘にも困らなかつたことも、自分の跡継ぎたる男児が生まれることも、入内した娘と帝に男皇子が生まれることも、そもそも貴族という生まれにある事さえも、全て道長が決められることではない。

生まれたときに既に決まっている、人間にはどうしようもない運命——平安貴族ほど、それを身に染みて感じていたものたちはそうそうない。生まれたときに全てが決まっているから、仕方がないと彼らは現世で善行を積み、来世に期待をかける。または輪廻から解き放たれ、極楽浄土に迎えられ、安泰を得ることを願う。

つまり、道長を含め貴族と言うものは——出世に奔走する一方で、現世を諦めていた。

いくら出世、富、名誉に固執したとて、傍では疫病、天災によってあつけなく人は死んでいくことを庶民ならずとも貴族もはつきりと知っていたのである。

そして、出世の最たるものを極めてしまった道長には、現世の無常さとて肌身に染みて感じられた。

藤原氏——藤原鎌足を祖とする一族は、奈良時代から徐々に皇統と溶け合うことで権力を伸長してきた過程がある。何百年も連綿と宮廷の謀の中にその身を晒してきた藤原の血筋は、その過程で葬り去つた政敵の——平安の世となり血こそ流さないものの、その涙と恨みつらみに塗れている。

そうして落ちぶれていく他家の悲哀と憤怒と無常はいか程か。

それを知りながら、己も同じことを繰り返す。

そうしなければ、裏寂れ行く姿は未来の己なのだ。連綿と続く藤原と言う血の呪いに生きることが、それこそ地獄に等しいのかもしれない。

だが、それでもその血筋にありながら——運命を諦めない男がい

た。

かつて道長がその手で未来を摘み取った、一人の甥。かつての栄光は枕草子にのみ残る、没落の家の生き残り――

\*

世間的にはど平日である、気持ちよく晴れた日だ。空は寒いながらも晴れ渡り、日差しの暖かさがよく感じられる。

そんなうらかな日に、明は家で頭を抱えていた。

この前、明とセイバーが大学に行った時のことである。実体化して校内をふらふらしていたセイバーを友人二人に発見されて、成り行きで知り合いになってしまったという経緯がある。その際に友人である青森日向と相楽麻貴と一緒にセイバーに春日市を案内するという約束をしていたのだ。

平日だが、友人二人がそろって授業がないようなので、この日にしよう決めていた。

だが、明はこのところのゴタゴタですっかりその約束を忘れていたのである。

約束は十時に春日駅集合であるのに、朝八時の時点ですでにセイバーはライダーズジャケットに着替えていた。それよりまるっと一時間ほど遅れてのつそりと起き出した明が一階に下りると、調子のよくなったらしい片腕の一成が食堂のテーブルの席に座ってテレビを見ていた。

毎朝毎朝思うことだが、天井にはミニシャンデリアのある食堂であるのに、平然とブラウン管テレビがあるのは微妙極まりない。

セイバーは勝手にパックのたくあんを開封し、切りもせず箸で搦んで大根そのままを丸かじりしていた。どれだけつつこもうかと思っただが、面倒くさかった明はスルーすることにした。

「……土御門も勝手になんか食べてよかったんだけど……」

明はあくびをしながらテーブルに座る。一応身だしなみは整えてあり、見た目は普通なのだが朝に弱いためテンションが低い。

「人んちの冷蔵庫勝手に開けて食べるほど凶々しくねえから」

セイバーがかなりアレだったため、常識のあるやつだと思いい明は感心して一成を見た。

頬杖をついてテレビを眺めている顔が、明の正面にある。

(土御門をなんとかしないとねえ)

きつと聖杯戦争を辞めるには違いないが、彼の口からその言葉を聞いていない。もつと心を落ち着ける時間をあげたいところだが、聖杯戦争真つ只中にそのような余裕はない。

彼は聖杯戦争をするには普通の人間であり過ぎる。もうサーヴァントも令呪もないのだから、教会で大人しく戦争が終わるのを待つべきであると、明は思う。

「土御門、聖杯戦争は辞めるでしょ？ここは安全だと自負してるけど、私は戦いをつづけるし、やっぱり教会に保護を求めに行った方がいい」

「あ？俺、聖杯戦争はやめねーよ」

聞き間違いだろうか、明はぼかんとした後に改めて聞き直した。

「……はい？」

「だから聖杯戦争やめねえって」

「……え？なんで？サーヴァントいないでしょ？令呪もないでしょ？どうすんのさ」

当然のように聖杯戦争続行を言われ、明としては首を傾げざるを得ない。なぜそこまで参加したがるのかも疑問だが、それよりもどうやって続ける気なのだろうか。

これまで全く興味のなさそうだったセイバーも、胡乱な目つきで一成を見ている。

そんな中、一成はひとつ、思わせぶりに咳ばらいをした。「……それはだな、」

「それは？」

「……協力させてく「断る」」

土下座しかねない勢いで頭を下げてきた一成を、明ではなくセイバーの一声が両断した。明は完全にターンをセイバーに奪われて二人を交互に見た。

というか、セイバーは一成が言い切る前に断つてなかつただろうか。

「せめて最後まで言わせろよ！」

「お前を仲間にして俺たちに何の利点がある。そもそもお前は何がしたくて戦争を続ける？」

セイバーの言葉ももつともだ。明とセイバーに協力したいと言っているが、それで一成に何の得があるのだろうか。聖杯を使用できるのは勝利した一組のみで、一成はカウントされず使用権はない。

「もしかして、私たちに力を貸す代わりに裏切ったアーチャーを倒してくれとか言うわけ？」

「もしそうならばお前に頼まれなくともあれは俺が殺す。お前の協力など不要だ」

「いやいやそうじゃねーよ！ いやちよつとはあるけど！」

一成はバランスを崩しながら立ち上がり、二人を落ち着かせるように言う。

「俺にはもう聖杯にかける願いつてのではないから、それは本当にお前らの好きにすればいい」

「なら何故俺たちの協力をしたがる」

セイバーは完全に喧嘩腰で、隙あらば一成を斬ろうとしているようにすら思える。

それでも一成は引かないし、怯えも見せない。

「別にお前らを勝たせたいって思ってるわけじゃねーよ。だけど、確氷、お前はあのバーサーカーのマスターみたいなのはしないだろ？ もし他にあんなことするマスターがいたら、止めるだろ？」

「止めるね。私はこの管理者だし」

管理者という立場もあるが、明自身も一般人に犠牲者を出したくない。間違いなくバーサーカーの時と同じように、人を食い物にするサーヴァントとマスターの前に立ちはだかるだろう。

一成はやつぱりと、嬉しそうに笑った。

「俺はこの戦争で被害を出したくないし、マスターにもそんなことをしてほしくない。俺に望みがあるっていうならそれだ。だから、同じことを考えているマスターであるあんたに協力したい」

「……悪いことは言わない。とりあえず辞書で戦争をいう文字を引いて傍線を引いたうえで百回復唱しろ」

セイバーは完全に毒気を抜かれたようで、たくあんの咀嚼を再開していた。

もう一成が協力しようがしまいがどうでもよさそうな様子で、あとはマスター任せの空気を漂わせている。しかし、明ははいそうですかというわけにもいかない。

「いや、大人しく辞めれば？ 今度は腕だけじゃすまないかもよ」

「それは俺だけじゃなくてお前もだろ？ 死ぬかもしれないのは」

「魔術とは死ぬことと見つけたら。私は小さいころから魔術漬けだから、そんなことは今更だし。あなたは魔術は知ってるし使えるけど、ちよつと違うでしょ？ 死ぬつてのは特別なことでしょうか？」

戦いの中で一成の魔術とその腕を見て、明は彼が自分ほど魔術に浸かっていないことを看破していた。全く普通の家庭とは言えないだろうが、普通の感性を育みそれで生きてきたならば、その普通を全うすべきだと思うのだ。それでも、一成は全く引く様子がなかった。

「物事を途中で投げ出すのは性にあわない。……これでももう覚悟は決めたつもりなんだ。死んでもお前に文句は言わないし、それに」

一成は一度深く息を吸ってから、凜と目を見開いて言った。

「俺はもう一度アーチャーに会いたい。聞きたいことがある」

本当に一成を戦争に押しとどめているのはこれかもしれない、と明は直感的に思った。訳も分からず裏切られたままでは納得がいかないうちという気持ちだが、恐怖を超えているのかもしれない。

もし明がここで断つても、きつと土御門一成は勝手に聖杯戦争に巻き込まれに行く。

そんな危なっかしいことをして無駄に死なれるよりは、せめて明たちの協力してもらった方がまだマシかもしれない。死んだ人間に口

はきけないが、本人は死んでも文句を言わないとも言っている。

(……それに、もしかしてもしかしたら土御門の魔術はこれはこれで使い道があるかもしれないし)

明は面倒そうにため息をついてから、一成を見た。

「言つとくけど、これから私たちがアーチャーと戦うかわからないからね。もしかしたらアーチャーは他のサーヴァントと戦って勝手に消滅しているかもしれない。私もあなたを護れるわけじゃない。それでもよければ、一緒に戦おう」

「……!!本当か!？」

一成は顔を上げて笑った。しかしセイバーはすかさず太い釘を刺す。

「……マスターが許可するのならば好きにしろ。だが、マスターを護ることは俺の役目だが、その中にお前は含まれていない」

先ほどの強気はどこへやら、今だにセイバーへの苦手意識がぬぐえない一成は盛大に目を泳がせながらぼそぼそと呟く。

「……べ、別に頼んでねえし」

「しかし、お前と言うやつがいたことくらいは忘れない限り覚えておこう」

「いた」つてなんだ！不吉に過去形にするな！あと覚える気ゼロだよな！」

元々一成はセイバーに対し好印象を抱いていないところに、セイバーの取り付く島もない態度である。お互いがお互いに仲良くやれない、という意味をむき出しにしている。

敵味方の峻別がハッキリしているセイバーは馴れ合う気はないのだろうが、一成に対して妙にとげとげしい。ハルカに対してはもつとドライだった。やはり共闘とはいえ、この碓氷邸に足を踏み入れさせているかいないかの差か――。

とりあえず、口げんかで済んでいる今のうちに、明は右でセイバーを、左で一成の顔を殴った。殴るといつても軽く叩くくらいで大した痛みはないとはいえ、二人とも目を白黒させていた。

「マ、マスター？」

「仲良くしろとは言わないけど、これから一緒に戦うんだから無駄に喧嘩しないで。土御門はいちいちセイバーのケンカを買わない。セイバーはいちいち土御門に喧嘩を売らない、そして一応土御門も護るの」

「……おう」

一成は渋々ながらも明の発言を受け入れたが、セイバーは一成よりも不承不承である。それでも静かに首肯した。

とりあえず話がまとまったところで、一成の能力を把握してこれらの対策を考えていきたいところである。明が頭をひねり出したときに、セイバーが明の服を引っ張った。

「マスター、そろそろ家を出ないと間に合わないと思うのだが」

「……あ」

土御門参戦ですっかり頭から抜けていたが、そもそも今日は友達＋セイバーで「セイバーに春日を案内しよう」計画を実行する日だったのである。昼は春日で観光をして夜までに戻ってくるつもりだったが、状況が変わった。

一成が聖杯戦争を続けると言うなら、昼のうちに一成の力を把握しておき、夜になるまでには役割を決めたいと思ったのだ。

(いつそドタキャンさせてもらおうか……)

ふとそう考えたが、流石にあまりしたくない案だった。友人たち自身のセイバーに対する興味からのイベントだろうが、折角親戚(という設定になっている)のセイバーに良くしてくれる気持ちを無下にはしたくない。

ついでに、戦闘以外では日がなゴロゴロする完全に世間一般・休日のお父さんを貫くセイバーがのり気なところにも水を差したくない。「セイバー、悪いけど一人でもいい？日向と麻貴なら大丈夫だと思うけど」

「俺は構わないが、俺のいない間マスターは家から出ないでほしい」

碓氷邸にいる限り、たとえサーヴァントの襲撃を受けてもセイバーを呼び戻すまではしのげる。

また明としても昼間とは言えど、マスターとして聖杯戦争中にサーヴァントなしで出歩こうとは思わない。だから何の問題もないのだが、心配なことは別にある。

——セイバー単騎で友達のもとに向かわせることが不安である。

割とこのセイバー、何を言い出すかわかったものではない。明はセイバーに向き直り一つ一つ確認する。

「セイバー、今からいうことは守ってね。まず殺すとか殺さないとか物騒な話をしない。日向と麻貴の言うことはよく聞く。変な連中に絡まれても手を出しちゃダメ。あと、視界と聴覚を私と共有できるようにしておいて。いい？もしパスを通じて私が何か言ったら、その通りにすること。いい？」

「了解した。だが心配するな。俺もそこそこ現世にいるつもりだ、多少の事はどうとでもできる——見くびらないでもらおう」

ドヤ顔で任せろと胸を叩いてみせるセイバーだが、全く信頼性が無い。明はやっぱりやめた方がいいかと思っただが、セイバーはやたらと自信満々である。

一体その自信はどこから出てくるのだろうか、謎という他はない。

「そういう自称脱ビギナーが一番怖い」「それでは行ってくる。土産を買って来よう」

セイバーは明のツツコミを聞き届ける前に走り出し、玄関から意気揚々と出かけて行った。やはりやめた方が良かったのではないかとそわそわしている明を見つつ、事情を把握しきっていない一成でも一言言わずにはいられなかった。

「……おまえって、セイバーの姉ちゃんか何かか？」

「……妹や弟はいないけど、多少なりともその気持ちかわかりつつあるのは事実かも……セイバーたしか年上なはずなんだけど、見た目に影響されてるのかな私」

セイバーは見た目は十五、十六くらいの美少年、そのうえ背も明より少し低いため、並んで歩けば姉弟（もしくは姉妹）にも見えるだろう。



そしてぶつちやけた話、戦うこと以外に関するセイバーは結構しよ  
うもない。既に一成も感じているだろうが、結構精神年齢が低いとい  
うか大人げないところもある。それになんとなくではあるが、一成と  
話している時の彼はそれに拍車がかかっている気がする。

明が首を捻っていたところ、そもそもセイバーが出かける事情知ら  
ない一成はその事情を聞いてきた。

「どこか行く予定だったのか？」

「私と私の友達で、セイバーに春日を案内する企画。なんか流れて」

突如一成は雷にでも撃たれたように、カッと目を見開いた。「JD  
二人に……春日を案内してもらえるイベント……だと……俺もつい  
ていけばよかった……」

その光景を想像しながら、一成はわなわなと片腕を震わせてテーブ  
ルを叩いた。

「いや、土御門がいたところで完全に誰おま状態だと思うけど」

「クソ……あの野郎生前も今もクソリア充かよ爆ぜろ。まさか伝説的  
に魅了スキルでも……ハツまさか確氷お前も」

明は過去最高レベルに呆れた顔をして、隠すことなく肩をすくめ  
た。

「何がハツ、なのさ。セイバーにそんなスキルはないし、あっても完全  
完璧にシャットアウトしてるから。ただでさえ戦争で一杯一杯なの  
に、そんな好いた惚れた腫れたなんて疲れそうなことするほど余裕な  
いよ」

一応女子高生を経て女子大生をやっているだけあり、周囲の惚れた  
腫れた彼氏がどうのこうの話は、明もよく耳にしている。ついでに仲  
のいい友人二人は「明に彼氏を作ろう同盟」という死ぬほどどうでも  
いい同盟を組んでいる。だが、明としては余計なお世話である。

明は無駄に容姿だけはいい。そのせいかわ女のいる男が勝手に明  
にちよつかいをかけて彼女から要らぬ嫉妬を受ける、全く知らない身  
長二メートル越えの元レスラーに一方的に惚れられてストーカーま  
がいの被害を受けるなど、これまで面倒な事態になることが多かつ  
た。

それもあり人の話を聞くのはいいのだが、聞くにつけ正直「クソめんどくさい」としか思わない。

「枯れてんなあ」

「まあ、私はこの跡継ぎだし子供は必要だから結婚はすると思うけど。相手は放任主義とはいえお父様が探すでしょ」

「……自分で相手決めたいって思わねーの？お前自身のことだろ」

「別に興味ない。私を妊娠させる力があればそれでいいや」

「……お、おう」

「なんで若干引いてるのさ」

あまりといえばあんまりの言い草に一成はかなり戸惑っていたのだが、それを知ってか知らずかあきれ顔のまま明は彼を小突いた。

「はいはい、つまらない話は終わり。ちよつと地下室に来て。どれくらい魔術が使えるかとか知りたいし、戦うなら片腕じゃ不便でしょ。即席だけど義手をつけてあげる」

セイバーを一人で行かせたことを無駄にしない為、明は先に立って食堂を出る。

一成は大して痛くもない頭を摩りながら、すたすたと歩く明の後に従った。

「お、おう。だけど夜になる前に一回俺ん家行きたい。大したモンはねーけど、礼装とか置いてあつから」

「そっか。じゃあ長くはやらないようにするよ」

望ましいとは言えないが、既にサーヴァントも令呪も失っており、一成なら明よりも襲われるリスクは少ない。まあいいか、とつぶやいてから明は携帯電話を持っていることを確かめた。

## 12月3日② 束の間の安息？

セイバーは碓氷邸から北に向かって歩き、春日駅に到着した。

平日の昼ということで、ごった返すというわけではないが、常に人は多い。集場所は駅前の巨大電光掲示板の下だと聞いていたセイバーは、その下で待つことにした。

整った容姿を持つセイバーだが、ナンパ等の類に絡まれることは少ない。もちろん彼を（女と勘違いして）目にとめる人間は数多いのだが、その立ち姿と雰囲気には隙がなさ過ぎて声をかけることを躊躇わせるのである。

もちろん無謀にもかかっていく人間——選りすぐりの勇者か愚者もいるのだが、待ち合わせ現在、特にそのような人間はいなかった。

既に時刻は十時を回っている。携帯電話という文明の利器を所持しないセイバーは、念話で明に確認を取ったが、彼女にも友人たちが遅れるという連絡は入っていないそうだ。

そこで明から「もしかして電光掲示板間違いじゃない？」と言われた。どうやらこの駅前に大きな電光掲示板は二つあるらしい。今セイバーが居るのは東口の掲示板で、掲示板は南口にもあるという。

明を通じて日向と麻貴の二人には遅れると伝えてもらうことにした。

青森日向と相楽麻貴は、明の予想した通りに南口の掲示板の下ですでにセイバーを待っていた。少し早めについてしまった二人は、約束の十五分前にはすでにここにいたのである。

十二月の寒空の下、二人は可笑しそうに笑っていた。彼女らがセイバーを案内しようと申し出たのは、厚意もあれど興味の方が強い。日向と麻貴は明の家にこそ行ったことはないが、彼女が春日市でも有名な古い洋館に住み、一人で暮らしていることを知っていた。

その上、進んで人と関わろうとせず自分の事もあまり話さない彼女が、遠い親戚とはいえ一緒に暮らしているという人間がいると聞いたら興味も津々である。

「セイバーくんおそいねえ」

厚手のワンピースの上にニットポンチョを羽織った麻貴は、のんびりした口調で言った。

「あ、明からメール来た。なんか掲示板間違えてたんだって。もう少しで来るってよ」

麻貴と違いジャケットにGパンという活動的な服装の日向は、スマホの表示を消して言った。明の友人二人は大学生の幸運と特権で、火曜日のこの日は授業をいれず休みにしていた。

雑談をしながら、のんびりセイバーの到着を待つ二人に、三人の男が近づいてきた。見た目は麻貴たちと同じような大学生のようだが、妙に態度が馴れ馴れしい。

「ねえそこの君たち、いまヒマ？」

「え、私たち、友達を待つてるんです」

びっくりした麻貴が、急ぎ気味の口調で言った。だが、男たちはその内容を気にしてはいない。

「とか言って、さつきからずっと待つてるじゃん？ひよつとしてすっぱかされちゃったんじゃないの？」

「……いい加減にしてよ、ナンパなら他に行ってくれない？」

三人の中の一人が、日向の腕を掴んできた。不愉快そうに眉をひそめる日向を、男は面白そうに見下ろしている。

「気の強い女って割と好きだぜ、俺は」

男三人に囲まれ、困っている麻貴と日向を助けようとする人はこの人ごみの中にはいない。よくある風景程度だと思われるのか、関心がないのか。

そんな時に、凜とした中性的な声が五人の耳に届いた。黒のライダースジャケットと半ズボンを身に着けた、黒髪の少年である。

「取り込み中すまないが、日向、麻貴、この三人はお前たちの知り合いか？」

「セイバーくん！あつ、この人と待ち合わせしてたんです、すみません」

麻貴が助かったと言わんばかりに男から離れようとする。だが、男

はその手を離さない。麻貴の腰にまで手を回し、にやにやとセイバーを見る。

麻貴と日向の様子を見て、セイバーはふんと鼻を鳴らした。男は目を見開き、セイバーを凝視した。

「くん？…こいつ男か？」

セイバーにしてみれば慣れた反応で、あっさりと言い返した。「期待に副えていないようだが、男だ。それとその二人は俺の……」

そこまでよどみなく流れたセイバーの声は、そこでぴたりと止まってしまう。「……何だ？日向、麻貴、お前たちは俺の何だ？」

そんなことを聞かれても、日向も麻貴も戸惑うばかりだ。というかそこはウソでもなんでも彼女とか友達というところではなからうか。

あつけにとられてしまったのは彼女たちだけではなく、男たちも同様だった。しかしどうあれ邪魔をしようとしていることには変わらないことを思い出し、二人を強く引き寄せた。

「は、関係ないなら引っ込んでろー！」

麻貴や日向を捉えていない、三人のリーダーと思しき男が腰を曲げてセイバーを睨む。至近距離で凄まれながらも、セイバーは特に動じない。顔色一つ変えないまま、セイバーはその男の足の甲を強く踏んづけた。

「ぐっ……！」

足の甲は鍛えにくく筋肉も薄い。男が怯んだ一瞬、彼の頭を強烈な揺れが襲い、男は意識をもうろうとさせながら倒れた。

実際はセイバーの回し蹴りが、御丁寧に屈んでくれた男の頭に当たっただけである。ただ、足の甲を踏むところからの一連の動きが早すぎて、セイバー以外に何が起こったかわかっている者がいなかっただけだ。

「今思い出した。その二人は俺の大事な者の友人だ。これ以上邪魔をするなら、こ」

さりげなく発言を修正したセイバーの威圧する声が不意に止まる。

謎の空白を開けてから、セイバーははつきりと告げた。

「……こてんぱんにするぞ」

ひとまず騒動になるところだったので、三人はそそくさと駅前を後にした。警察を呼ばれても、セイバーが思い切り手、もとい足を出してしまった故に面倒である。駅前から離れつつ、どうしようかと話しや結果、時間は早めだったが、日向と麻貴が朝食を食べていなかったためランチを取ることにした。

セイバーは大食いというわけでもないが、食えと言われればかなりの量が入るために否むことはない。

おいしい店探しが趣味の麻貴が「このオムライスすごくおいしいの！」と力説していたため、特に意見の無かったセイバーと日向はその麻貴の意見に従った。駅から歩いて五分の近さだが、道が狭く路地に入り込んでいるため穴場である店に入る。

内装がログハウス風になっている店内で、時間も相まってまだ客も少ない。エプロンをつけた店員に案内され、ジャズをBGMに三人はメニューを決める。発起人の麻貴があれこれとこれがオススメだ、シエフの気まぐれサラダは本気で気まぐれだから覚悟した方がいいと注釈をつける。結局オススメだというオムライスを注文した。

その注文を待っている間に、先ほどの待ち合わせの時の事件に話が戻った。

「そーいやセイバーって喧嘩強いんだな！荒っぽかったけど助かったよー！」

自分より身体的に優れる相手に対して、全くひるまないセイバーを見ればそう思うのも普通だろう。日向は素直に感心していた。セイバーは手持無沙汰に他のメニューを眺めながら答えた。

「俺が時間通りついていればなかったことだろう」

「でも助かったよ、ありがとう。いつもはああいう人たちは明ちゃんがあしらっちゃうから、私たちだけで困っちゃった」

「……明が？」

日向が話を継ぐ。驚いているセイバーを面白そうに見ながら、噂話をするように声を潜める。

特に誰が聞いているわけでもないが。

「そうそう。なんていうのかな、ああ見えて友情には篤い？から友達  
が乱暴されそうになると結構えげつないんだな」

「明ちゃん護身術とかできるから、さっきの人たちくらいならなんと  
かしちやつてたと思う。前に『このド変態が……』とか真顔で言いな  
がら金的してたことあったよ。結構喧嘩っ早いんだよね」

本人がいないことをいいことに、日向と麻貴はこれまでの出来事を  
思い出しながら笑う。見た目は大人しそうで護ってやらないと、と思  
わせるタイプであるのに、中身が外見を裏切つてアグレッシブなのが  
二人の友達には面白くてならないようだ。

「……確かに、明はいつもはどこか抜けているが、戦うときは戦う」

言われてみれば、明は案外言うことは言いよく手も出る。聖杯戦争  
の闘い方については散々注文をつけてくるし、セイバーにモノを投げ  
たこともあるし、今朝も頬にグーパンチを頂いたばかりである。セイ  
バーは自分以外からのマスターの人物評を聞くことは新鮮だった。

「ホラ、明って見た目アレじゃん？実態を知ったら学部の男どもが  
ガツカリするだろうなっていつも思ってるんだ」

「見た目がアレとは？」

明は特に人間として異常な見た目をしてしているわけではない。セイ  
バーが疑問を素直に口に出すと、逆に日向と麻貴の方が戸惑った。

「や、明結構美人じゃん？大人しく控えめとか、ちよつと影がある  
とかいう感じの。学校でもファンがいる程度には整った部類だから」  
「……言われてみればそうかもしれない」

あまり考えたことのなかった事項のため、セイバーは中途半端な答  
えしか返せない。

微妙な雰囲気 flowed のを見計らったように、店員がオムライスを  
三皿運んできた。チキンライスの上に程よく半熟の卵がとろけ、特製  
のデミグラスソースが惜しげもなくかけられたこの店特製である。  
白い湯気をスプーンでかき分け、それぞれが口に運んでいく。卵がよ  
い半熟具合でたまらない、と日向は絶賛している。セイバーも発案者

の麻貴も同意見である。

美味しい物を食べると人は無言になると言うが、三人はまさにそれであった。いの一番に食べ終わったセイバーが口を開くまで、それぞれにオムライスを咀嚼していたのである。

「春日の食事は何をとつてもうまいな」

「そんな大げさな」

「明の食事の不味くはないが、時々塩と砂糖を間違えるのはよしてもらいたい」

「ブツ！」

水を飲みながら日向が噴出した。ついでにまだオムライスを咀嚼していた麻貴も動きが止まった。

「明そんなマンガみたいなことすんの!？」

「する」

「マジか。そんなドジっ子属性まで兼ね備えているとは、レベル高いな」

何やら訳知り顔で頷く日向を尻目に、麻貴はスプーンを置いた。「ドジっ子属性……？」と神妙な顔で悩むセイバーを見る目は、日向のそれとは違う。

セイバーがその視線に気づいたが、そこへ日向がニコニコしながら割り込んだ。

「それどうしてるの？」

「どうしているとは？」

「食べてるのかってこと」

「食べる。明は残せと言うが、もったいないだろう」

何故か笑顔のままの日向は、テーブルの下で麻貴をつついた。

「そうなんだ。麻貴、ちよっとトイレいこ？」

日向は麻貴をトイレに連行していった。暢気に水を飲んでいるセイバーを尻目にしつつ、麻貴には日向が何の話をするつもりか想像がついていた。二人は「明に彼氏を作ろう同盟」という果てしなくどう



でもいいえにおせっかいな同盟を組んでいる。

つまりはそういうことだが、生憎麻貴は今回はそれには乗れそうもない。

木製のドアを開き、鏡のある洗面台の前で雁首を揃えた。

「……日向ちゃん、残念だけどやっぱりセイバーくんは違うと思う。親戚だし」

「親戚つっても遠い親戚じゃん？セイバーは全然好みじゃないって言ってたけど、どう考えてもあの二人目で会話してるし、明だって手料理つくってあげてるんだけど！」

日向の言うことももつともだ。遠い親戚とはいえあの一人暮らしの女性の所に平然と泊まり、生活を共にしているなら勘ぐりたくなる。いつもなら麻貴も日向とともにニヨニヨしているところである。「なんだろうなあ、あんまりそんな感じしない」

そうではない、と言う根拠が麻貴にはあるのだが、日向に信じてもらえそうではないため黙っていることにした。

「麻貴のそういう勘って当たるからなあ」

日向はため息をついて、ストレッツチのように肩を回した。そして気分を切り替えるように顔を叩いた。

「そーいや私、博物館行きたいんだよ。ホラ今特別展示でき、藤原道長の自筆日記が展示されてるじゃん？まだ見てないし」

「あれ？日向ちゃんって平安時代好きだっけ」

「一番好きなのは室町だけど、あれ国宝になったし見ておきたいなっ  
て」

日向は麻貴や明と同じく経済学部だが、本当に行きたかった学部は文学部・史学科だった。しかし「文学をやっても食べていけるわけではない」という両親の強い意向があり、やむなく経済に進んだのである。だから彼女は史跡巡りや博物館めぐりが趣味であり、ここ春日にある博物館の常連でもある。

「私はいいけど、セイバーくんがいいって言ったらねー」

「大丈夫！あそこも立派な春日の名所だって！最近新しくなったばっかだし！」

二人はそそくさとトイレを出て、博物館に足を運ぶべくセイバーに話を持ちかけた。

\*

セイバーが無事に友人たちと合流できたことを念話で確認できたあと、明は携帯を閉じた。

薄暗くて埃っぽい地下室に適当に積み残されている魔導書を整理して、魔法陣を書くくらいスペースを確保する。父がいたことはもう少し綺麗に整理整頓されていたのだが、明のみになるとこのありさまである。

「すげー埃っぽいんだけど……」

「おかしいな。最近掃除したばっかなんだけど、埃ってどこからわいてくるんだろうね」

完全に他人事の口調で言いながら、明はどこからともなく二脚椅子を引っ張り出してきて腰かけ、残ったほうを一成によこした。

「私の魔術は西洋のものだから、日本生まれの陰陽道には疎いんだ。確か魔力、って言わないんだっけ」

「ん？ああ、最近じゃ、つか明治以降は魔力っていう様にもなったみてーだけど、陰陽道だと「気」って言うな。でもやってることはかかんねーと思うけど」

中国の陰陽五行説に端を発し、日本に輸入されて神道・道教・仏教・密教と相互に影響しながら変化して今に至る陰陽道。西洋魔術と成り立ちは異なるが、求めるところは一致している。

「陰陽五行」を理解する——すなわち、世界の成り立ちである「根源」に至る事である。

魔術を行使する際には丹田を中心に生命力をめぐらせ、気を生じさせて気によって行こう。西洋魔術のように魔術回路を起動、とは言わずに魔術回路を巡らせるという方が感覚的には近い（やっていることは

同じ)。

「それにしてもなんで藤原道長とか呼んだの？土御門は安倍晴明の子孫なんでしょ？家には『占事略決』とか晴明のゆかりの品とかあるんじゃない？最強のキャスターが呼べるのに」

土御門の祖にして最高到達点である安倍晴明。母は妖狐と言われ、その目は闇を見通し式神を自在に操り、人の生死さえ操ったという大陰陽師。正直なところ、その始祖から変化はすれど晴明の境地にさえ達せられていないのが現在の土御門である。

もちろん、一族を上げて一成が参戦することになったならば、彼の血さえも触媒としてその稀代の魔術師を召喚しただろう。

「それは、ま、色々あつてな」

既にその件についてはキリエに散々言われているために、一成は濁した。

明も大した興味はなかったようで、それ以上に深く聞くことはなかった。

「ふうん。じゃ、何で聖杯戦争やろうと思ったの？魔術やってるくせにあんまり魔術師っぽくないし」

「う、わ、悪かったな。うちんちがもう成長の限界を迎えてて俺で魔術回路がなくなっちまうつてところだったから、存続させたかったんだよ。もう叶える気はねえけど」

既にその夢は夢ではなくなっているが、参加を決めた当初は確かにそう思っていた。今はアーチャーと再び会い、この戦争を終わらせることが目的だ。

明は自分で聞いた割にそこまで反応を示さなかった。一成は拍子抜けの気分である。

「そういうお前は何のために参加してるんだよ」

「私？そりゃ魔術師だし、根源に至るためだよ。それにここの管理者でもあるから、無事に聖杯戦争を終わらせなくちゃいけないしね。神秘が漏れたら困るし」

一成の命を救い、しかもここまで世話を焼いてくれるとはかなり甘

いとは思うのだが、それでも明はこの土地の管理者の一族だ。そして魔術師の目指すところは一つだけ。

かつてはそう思っていた一成にも、明は根源を目指すと言うだろうことは予想できた。

「ま、そんなところだろうなお前は」

「まあね。で、とりあえず、これから聖杯戦争で色々手伝ってもらうためにどんな魔術を使うのか知りたいんだけどその前に」

明はいきなり立ち上がると身をかがめ、唐突に一成の顔に自分の顔を近づけた。

「…お、おう!? 確氷!？」

「ちよつと黙って」

動揺する一成をよそに、明は彼の顔を掴んでその眼をじつと見つめている。眼科医のように目の下を引つ張り、あらゆる角度から一成の目を観察する。

つぶさに観察をしようとしているのだから、自然顔と顔も近くなる。

「…うーん、みたところ変なところないな…」

「お、おい確氷」

一成の声などまるで聞こえていないようで、明は呑気に顔をぺたぺたと触ってくる。

「…後天的、人工のモノでもあるかと思ったんだけどな…そもそも何回も眼合わせてるし、私が何も感じてないんだし」

至近距離にある瞳を飾るまつ毛が長い。知ってはいたがかなり顔立ちが整っており、柔らかそうな唇から洩れる吐息さえ吹きかかる。

そういうえば、セイバーがいなくなったと言うことはいまこの屋敷に一成と明しかいないと言うわけ——「ごめんね、もういいよ」

上げて落とすのが得意技かといわれれば納得しそうな鮮やかさで、明はあっさりと一成から離れた。妙にささくれた気分になって、一成はややつつけんどんに聞いた。

「…で、今のなんだったんだよ」

「ああ、ほら昨日のバーサーカーの霧で、あなたやたらと見えてたみたいだからさ。もしかして魔眼とかそれに類するモノ持つてるのかなんて」

「……俺の眼にそんなすげーもんはねーよ」

魔眼とは、外界から情報を得るための眼を外界に働きかけるようにつくりかえたモノである。魔術師の魔術一工程で、視界に収まったモノに問答無用で魔術をかける代物。人工的にも作ることができているが、その場合の力は「暗示」や「魅了」がせいぜいで、強力な魔眼は先天的に備わっているものだ。それにそのようなものが一成になれば、そもそも祖父から見限られたりはしていない。

「うん。見て分かった。多分、昨日あんだだけ見えたのは魔術特性のかな。というわけで魔術を見せてもらってもいいかな」

「おう。……この壊れたランプ使っていないか」

一成は魔導書だらけの机の上にある、割れたランプを指差した。

明が首肯すると、一成は破片を丁寧に集めて床に置いた。すうと息を整え、空気が変わる。魔術回路を励起させ、魔力を発生させる時の独特の空気だ。

一成は右手の人差し指と中指を伸ばし、ランプを指す。

「急急如律令!!」

見る間にランプの破片と破片がくっついて、何事もなかったかのようになり形をとる。陰陽道の呪文は元来もつと長い、詠唱を省略して「急急如律令」のみで行使できるようにしている。

どうだ、といわんばかりの表情で一成は明を見るが、彼女は表情を変えず、全く同じランプを背後の机から取り出してこう言った。

「直してもらったところ悪いけど、今度は壊して。できる限り跡形もなくなるくらいがベスト」

「……」

沈黙。一成は防壁・結界の類を展開する事、治癒の魔術にかけての出来は祖父にも褒められたことがある。だが、其れ以外はからっきしが実体である。

陰陽道は呪詛・使役の分野も古い歴史を持つが、一成の場合は事情

が異なる。彼の起源——「保護」が魔術に強く作用しているらしく、陰陽道の呪殺の類が全くできないのだ。

式神を使役することはできるが、その式神で人を害することができない。

それでも一成は懐から呪符を取り出し——彼の魔術礼装の助けを借りて、魔術を行使した。

急急如律令、と威勢だけはいい声が地下室に響いたが、しかし何も起こらなかった。

「……ごめんすぎすぎて目に見えなかったのかも。目にも映らぬなんとやらってやつ?」

「はい失敗しました!! すいません!!」

「まあそんなことだろうと思ってたけど」

一成の魔術の腕前を見るとは言ったが、明は戦いの中でいくらそれをしているためにおおよその腕前は把握できている。

明は戦っている時に、彼が攻撃の魔術を使うところを見たことがない。

一成はずっとサーヴァントに治癒をかけるくらいの魔術しか使っていないかったのだ。

「!? わかってたんならやらせんな! なんか恥ずかしいだろーが!」

「あくまで見立ては見立てだし、できたらできたで悪いことはないし」

間の抜けたところがある割にその実飄々としている雰囲気の中に對しては、何を言っても自分が一人で空廻っているような気になってしまう。

一成はそう思いながらため息をついた。それを落ち込んでいると勘違いした明は、一成の肩に片手を置き、もう片方の手で親指を立てた。

「元気を出せ少年」

「……おう」

「そいで話のついででなんだけど、土御門って起源とか属性って何?」

「俺は五行——属性が火で起源が「保護」みたいだ」

それを聞いて、明はなるほど分け知った顔で頷いた。

「専門外だから詳しいことはわかんないけど、今の陰陽道は占いや結界を張る方面に強いみたいだし。その陰陽道の魔導の家で、焰属性ときたらそりゃ浄化の焰になるし、起源が保護ときたらそりゃ破壊なんてできない。性格的にもあなたは起源が濃く出てる気もするし。あれ？焰が浄化なのは仏教だっけ？」

「もうあんまり変わんねーよ。日本において神道と陰陽道は相互に干渉しまくってるから」

確かに浄化の焰の概念は仏教由来だが、こと日本においては神道・仏教・陰陽道・道教等様々な教義が混交されて混ざり合っている。

特に神道は陰陽道抜きで話をできないし、それは陰陽道も同様である。

「うーん、でもなあ……なんかそれだけじゃ腑に落ちないような」「何がだよ」

「治癒魔術が得意なのはわかったけど、バーサーカーの霧の中で私よりもはつきり視界が確保できた理由としては弱い気がするんだよね」  
そういわれると、確かに一成にもそんな気がしてくる。体になんかの異変もないため特に気にしてはいなかったのだが、今まで生きてきて視覚情報に関する魔術は特に得意でもなんでもなかった。

「まああなたも元気そうだし、平将門だし、男だからってことなのかな」

明は一人でぶつぶつぶやいて納得したらしく、その顔を上げた。

「とりあえずそれは置いといても、治癒魔術が得意つてのは悪くないね。魔力を帯びたモノに干渉する魔術は基本難しいんだよ。私は逆に治癒魔術は得意じゃないから、戦うときにはそっち方面はあなたに任せればいい感じかも。セイバーに治癒をかけたたり、結界張るとかさ」

「？あれ、でもお前、俺の腕……」

一成は自分の左肩を見た。腕を切断されたことによる初動の手当は教会のスタッフによるものだが、その後の処置は全て明の魔術と秘伝の薬によるものである（ちなみに一成は教会に連れて行かれたこと

を知らない)。

それを尋ねると、苦手なだけでできないわけじゃないしと普通に返されて、一成は少しへこんだ。

「とりあえずあなたは戦闘時、セイバーへの治癒魔術をかけて。まあセイバーは剣の力で勝手に治しちゃうんだけど。あと、私たちに防壁をはることもね。私には治癒魔術はかけなくていいから。どうせ効かないし」

「そーいやお前、前にもそんなこと言ってたな。どうせ効かないって」  
バーサーカーと戦っていた時、一成は負傷した明に治癒をかけようとしたが、同じセリフで断られたのである。今思えば、一成が明の魔術について知っていることは「確氷の影使い」ということだけだ。

「俺も自分の魔術教えたんだし、お前のことを教えてもらってもいいだろ。一緒に戦うんだし」

「うーん……まあ、それもそうか」

顎に指を当ててから、明は頷いた。明は簡略に確氷家の魔術師の体質——同じ血の流れる魔術師による魔術でないと、魔術が通りにくいことを話した。幻覚のような害を与える魔術が効かないと同時に、治癒のようなプラスの効果の魔術も効かないことも付け加えた。

あくまで少し確氷について調べればわかる程度のことだったが。

「元々他人の身体に干渉する魔術は、ただでさえ効きが悪いし難しい。それに輪をかけて、って感じかな」

「それ、お前って酷い怪我したら本当にヤバイんじゃないか?」

「やばいよ。だから土御門はキリキリ私のために防壁を張ってね」

明はいつもとかわらぬ口調で言うが、一成は強く心に留めておくことにした。バーサーカー戦の時に思ったことだが、やはり女が傷つくものは見えていて気持ちが悪くない。特に明は、自分の体に傷がつくことを全く厭うていないようにすら見えるのだから。

「あと私の魔術だけど、属性は架空元素・虚数で起源は分解。虚数属性って知ってる?」

「すごいレアで、影を使うってことくらいしか知らねえ……俺も魔術



使って見せたいし、見せてくれよ」

極めて稀有な属性であり、人よりも幽世の存在に有効な影を生み出す影使いの属性と聞いている。その珍しさゆえに実際はどのような魔術かよくわからず、先行の研究（あっても普通は他の魔導の家に公開されない）も無きが如しであるのが現状である。

興味もあつて、一成は期待して頼んだが明の返答はつれなかった。

「いやです」

「なんでだよ」

「というか戦つてるときにガンガン使ったから見たでしょ」

「あんなときにまじまじと見てられるか！つーかガンガン使ってたなら別に隠すようなものでもないだろー！」

明は面倒くさそうに頭を掻きながら、少し言いにくそうに言った。

「あれはすごく精神削るからやりたくないんだよ」

「？」

「……そもそも、影魔術の影ってなんだと思う？あの影ってというのは、すごく中二つぽく言うとな術者の心の闇なのね」

元々影魔術は術者の深層意識をむき出しにして、負の側面を刃とする禁呪である。端的に言えば、心の奥底にある他者を傷つけたい、己を破滅させたいという類の暗い欲望をエネルギー源にして影を生み出し、対象を拘束・攻撃するのである。

影魔術を行使する際には、その暗い欲望が強ければ強いほどその魔術も強力なものになる。明に言わせれば「世界滅亡しろとか自殺したいとか、その手のことを考えていればいるほど強くなる。逆に生きてればいいことがあるとか、頑張ろうとか前向きなことを考えるほど弱くなる」ということだ。

理不尽な魔術だよと、彼女は嫌そうに言った。

「私が良く使うのはこの影と起源の「分解」を掛け合わせて相手の攻撃にぶつけて、攻撃を無効化するってやつだけ。身を護るっていうよりは、攻撃は最大の防御って考え方」

「なんか、結構面倒な魔術だな、それ」

「ああわかってくれる？そうなんだよね。もつと土御門の治癒魔法を

見てあげてもよかったんだけど、私は今言った通り変な魔術ばっかやってきたから教えてあげられることがそんなにないし……！ちよつとここで待ってて！」

いきなり明は立ち上がり、あわてて地下室から一階へ出て行った。一成があつげにとられていたが、仕方がないと彼女は思った。

教会からの使い魔の気配を感じたのだ。一成にはまだ教会と結託していることは隠しているの、彼の目の前でおおっぴらに話すのはよくない。

今となつては実は教会とグルでしたと言つても問題はないと思うが、明はとつきに飛び出してしまった。

昨日の報告では一成の治療も終わり、明日にでも教会に連れて行くと言つてしまったばかりだ。

てつきり一成は戦争をやめると思っていたのだが、事態は変わった。どう説明したらいいものか、全くのノープランだった明は冷や汗しきりだ。

リビングには一羽の蝙蝠が飛んでいる。明が口を開く前に、その使い魔が人語を発した。

『明、アーチャーのマスターは棄権するのではなかったか？』

12月3日③ 不穩

「なんなんだあいつ？」

突然血相を変えて地下を飛び出した明に置いてけぼりをくらい、一成は完全に手持無沙汰になってしまった。仕方なくこの地下室を見回したが、やはり埃っぽく雑然としている。

生活スペースは割合すつきりと片付いているのに比べて、この地下室は汚い。

時間があればもつときつちり掃除してやろうかとも思うが、魔導書の類やマジックアイテムがそこら中にあり、うかつに触ると呪われかねない。見るだけ見ておこうと、一成が立ちあがった時である。腕を何かにぶつけ、机に乗っていた古びた箱が落ちた。

金属製のその箱は鍵がかかっていたようだが、ぱかりと開いて中身を散らせた。

一成は身の危険を感じ、思わず身構えたが何も起こらなかった。恐る恐るその箱と中身に近づいてつまみ上げてみる。中身は複数毎の古い写真と、カッターと古い鍵だ。

写真にはどれもこれも幼少期の明と思える少女と、その友達らしき少女数人が仲良さそうに映っているというほほえましい写真である。

(引越した友達とかそういうのか?)

一成は丁寧に箱の中に写真を戻した。もう一つのカッターを手に取ってみたが、その刃は錆びてもう使い物になりそうにないものだった。

しかも、その刃には乾ききっているが恐らくは血がついていた跡があった。

「……魔術で血を使うときに切る用のカッターだったのか？」

ふとカッターの刃に指が触れた時、瞬間的に頭痛がした。

思わず目を閉じかけるが、その時カッター越しに映像のようなものが視得た。

こことよく似た暗い部屋で、年端もいかぬ少女が、カッターで己の太ももを切りつけている――。

「……何だ、今の」

額に脂汗を流しつつ、一成はもう一度カッターを見下ろした。だが、もう何も見えない。

バーサーカーとの激闘の後でまだ疲れが残っているのかもしれない。目をこすって、カッターと古い鍵と合わせて箱を何事もなかったかのようにあった場所に戻したところで、急に地下室が明るくなった。一階と地下室を結ぶ扉から光が漏れている。

「土御門、ちよつと来て」

明が地下室の扉に立っている。一成はそこから漏れる光がまぶしくて目を細めながら、何やら不機嫌そうな彼女のもとに急いだ。

リビングには一匹の蝙蝠が飛んでいた。すぐに分かったが、使い魔である。低く良く響く声が、一成に話しかけてきた。

『ほう、元気そうで何よりだ。アーチャーのマスター』

「……すいませんが、どちら様？」

「今回の聖杯戦争の監督役」

「なんで監督役の使い魔が、お前の家に来るんだ？」

明は深いため息をついて、気が進まなさそうに解説した。

聖杯戦争当初から明は聖堂教会と組んで、サーヴァントの情報をやり取りしあっていたこと。そして時計塔から派遣されてきたランサーのマスターとも組んでいて、情報を共有していたこと。

「私も立場というものがあってね。悪かったとは思ってはいる」

教会の目的が『何事もなく平穏に聖杯戦争を終わらせる』ことであったため、一成は怒りはしなかったものの流石にいい気分ではない。

アーチャーとランサーが戦ったことがあったが、その情報まで明に流れていたことになるのだ。明は目を逸らした。

「……まあいい気分はしねーけど。でもお前はここの管理者だしな」

そしてその話は片付いたとばかりに、蝙蝠は口を開いた。『明から話を聞いたが、本当にまだ聖杯戦争を続けるのかね？』

使い魔から伝えられる低音は、心地いい声音であると同時に不安を

抱かせる不思議なものだった。一成はきつと顔を上げて、躊躇うことなく言った。

「……ああ。確氷に協力する。こいつはいいって言ってたからな」

一成が胸を張って答える。明も「使い道はあるしね」と言って肯定した。使い魔から届く神父の声は、どこか楽しそうな雰囲気をはじめ、特にそれに対し文句を言うことはなかった。

『七代目がよいなら私が文句をつける筋ではないが、生き残ったマスターはぐれサーヴァントがいた場合に優先的にマスターとして復活しうることは覚えているな?』

「……わかつてる」

神父は明に太い釘を刺した。そう、セイバーも言っていたが「マスターは殺すべき」という考えは、一成が良しとしていないだけで、こゝと聖杯戦争において決して間違いではない。

それでも明は一成を殺さない。

(……よくわかんない奴だよな)

一成のような中途半端な教育ではなく、魔術師として英才教育をされているであろう明はもつと、祖父やキリエのようであつてもしかるべきであろう。その時、使い魔越しに神父が話し掛けた。

『少年、棄権する場合はいつでも教会に来るがいい』

「……覚えておく。絶対ないだろうけどな」

一成は参加すると言ったばかりであるのにそんなことを勧める神父にいらだちを覚えた。しかし反論するような場面でもない。神父は話題をすぐに変えた。

『……七代目、少年、土御門、といったか。彼は聖杯戦争が終わるまで君の家にいることになるのか?』

「そうしてもらうつもりだけど、何?」

『うら若き乙女と若い男が、一つ屋根の下で暮らすのは如何なものか』

唐突に果てしなくどうでもいいことを言われて、明は思わずソファからずり落ちそうになっていた。ちなみに、どうでもいいと思っっているのは恐らく明だけである。

「なにつまらない事言ってるの？土御門は変な事しないと思うし、万が一の時は影で跡形もなく分解するから平気だよ。それにセイバーもいるから二人じゃないし」

何だかんだで明とセイバーは似ているような気がしてきて、一成は顔を引くつかせた。

かなり物騒で、しかもそれを本気でやりかねないところが。しかし貞操うんぬん以前に、一成は男として認識されていないような気がする。

弛緩した空気が流れたが、使い魔の神父はひとつ咳払いをした。察するに、今度は聖杯戦争に関する話題と見た。

『そう、ひとつ君たちに伝えなければならないことがある。……霊器盤に異常が生じている——かもしれない』

「かもしれない？」

煮え切らない言葉である。神父は話を続けた。「先日、ランサーが「ガンナー」というサーヴァントと遭遇した旨を話しただろう」

「でも残りの数的に、そのガンナーってキャスターって話になったでしょう？」

『違う。セイバー、ランサーのマスターを除くとあとはキャスターとアーチャーのマスターが残る。アーチャーはひとまず除くとして、仮にガンナーとキャスターが同一だとするとおかしい』

「だからなんでさ」

『消去法でアインツベルンがガンナーもといキャスターのマスターとなるだろうが、ランサーの報告によればガンナーを連れていたのは中年の男性だ』

「アインツベルンが中年の男性？」

そこで一成が口を挟んだ。使い魔と明の視線を一手に受けて少したじろぐも、彼は疑義を述べる。

「キリエスフィール・フォン・アインツベルンは女だぞ？」

「土御門会ったことあるの!？」

「……昼にだけどな」

基本エスコートと称して引きずり回されているだけで情けないことの上なので、詳細は言わない。明はふむと頷いている。アインツベルンは冬木の聖杯戦争では毎回、お得意の錬金術で生み出した女のホムンクルスをマスターとして輩出していた。

今回は男のホムンクルスを作ったと考えられなくもないが、春日の聖杯は冬木の模造品だ。ならば同じ型のホムンクルスを流用した方が効率がよく確実だろう。

『わかったか？ガンナーと名乗るサーヴァントのマスターはアインツベルンではない。おそらくキャスターのマスターがアインツベルンだ。となるとサーヴァントの数が合わない。本当に八騎目としてガンナーというエクストラクラスが召喚されたことになる。しかし、靈器盤には反応がない』

「その中年の男がアインツベルンの手先って可能性は？」

『可能性としてはある。だが、アインツベルンは冬木の戦争で外部の魔術師を招いた際に最後に裏切られ辛酸をなめているらしい。同じ轍を踏む危険があることをするとは思えない』

明るいリビングの中に沈黙が下りる。サーヴァントの現界を知らせる靈器盤に異常が起こるとは考えすらしなかった。しかしここで考えても解決法が出ることもなく、神父は話を切り上げた。

『何かわかり次第連絡する。今夜からは居場所の分からないアーチャーの搜索をしてくれ。もしかしたら新たなマスターが現れているかもしれない』

「……うん」

本当に靈器盤に異常があるならば、聖杯戦争の残りサーヴァント・状況を正確に把握している者はひとりもないことになってしまう。使い魔が消えた後も、明は憂鬱な気持ちで使い魔が消えたあとを眺めていた。

\*

オムライスを満喫した後、日向・麻貴・セイバーの三人は博物館に向かった。駅から十分の場所にある、最近リニューアルされた博物館である。

一階には日本の考古学の時代から平安時代までの土器等を、時期ごとにテーマを変えて展示している。二階は期間限定の特別展示に加え、時期によってテーマを変えて日本美術などの展示を行っている。別館では、日本の美術作品を古代から明治・大正までにわたって展示している。

平日で比較的空いているが、最近ここに泥棒が侵入したという話があったため、警備員が増やされている。とりとめもなく日向・麻貴・セイバーの三人は展示物を眺めていた。

「というか私の勢いできちゃったけど、セイバーってこういうの興味あんの……ってどこ？」

「あ、あそこにいるよ」

麻貴が指差した先に、セイバーがいる。ヤマト政権成立時代の銅鏡や儀礼用の剣を見て、ひとりぶつぶつぶやいている。

「……俺の時とは若干形が……いや、二千年近くも経てこれだけ残っているのならばむしろ……」

「興味あったみたいだね」

麻貴は展示物を食い入るように見るセイバーの後ろ姿を見て、日向と笑った。真剣に見ているようなので邪魔するのも悪いと思い、彼女らはしばらくばらばらに見て回ることにした。

セイバーが一階をふらふらしていると、二階に多くの人が向かっていることに気づいた。何があるのかと思っていると、後ろから肩を叩かれた。日向である。

「二階は期間限定の特別展示で、藤原道長の日記が展示されてるんだってさ。当時の権力者が残した最古の自筆本で、国宝にもなったんだって」



「藤原道長……!?!」

日向はセイバーが興味あるものと思つて案内したのだが、予想外にセイバーは驚きそして苦々しいと言わんばかりの声を出した。

今やセイバーにとってアーチャーこと藤原道長は必ず倒さねばならない仇敵である。

「あれは必ずころ……いや、こてんぱんにする」

「え?」

「いや、こちらの話だ。俺は見るのは遠慮する」

アーチャーの日記など今見たら八つ裂きにしかねないセイバーは、大人しく見物を辞退した。日向が二階に行くのを見送り、一階の自販機近くの休憩スペースでくつろぐ。

生前から物見遊山は好きな方だが、自分で積極的に行こうと計画するほど積極的に好きなのではない。誰かに行こうと言われれば行くような、受動的な態度である。

好きなことであるとはいえ、いかせん現世には人が多い。セイバーの生きた時代の日本は、今よりはるかに人が少なかったのだから当然と言えば当然で、駅前など人の多いところは長くいると気疲れする。

「疲れた?」

「いや、人が多くてな」

自販機でお茶を購入していた麻貴は、二つ買い片方をセイバーに渡した。セイバーは礼を言つて受け取る。特に訪れたいところのなかったセイバーは、日向の提案するまま博物館についてきた。

麻貴とセイバーが小休止を取っている今も、彼女は展示品を見て回っている。

「日向はこういうものが好きなのか?」

「日向ちゃんはねく大学では経済だけど歴史好きだから。本当は経済の勉強じゃなくて歴史勉強したかったんだって」

ふうんとセイバーが気のない返事を返すと、言葉が途切れて沈黙が訪れた。

麻貴はホットのペットボトルを手で弄びながら、ためらいがちに口を開いた。

「セイバーくん、私ね、明ちゃんとは同じ中学校だったんだよ」

文脈も何も無い話が始まり、セイバーは首を傾げた。しかし麻貴は展示物を見る人々を遠く眺めながら続ける。

「お互いにもう同じ中学ってことは認識してるんだけど、中学校の時は、明ちゃんは私の事知らなかったと思う。でも私は知ってたんだ。というか、明ちゃん有名人だったから」

「そうなのか」

「うん。明ちゃん今もだけど、あんまり人とかかわろうとしないんだ。もちろん、私が見てた範囲なんだけどね。……で、中学の時、明ちゃんとても仲良かった友達が事故で死んじゃったの。それだけなら、悲しい事故なんだけど」

そこで麻貴は一度言葉を切り、躊躇いがちに再び口を開いた。

「その後で、明ちゃんは自殺未遂で死にかけたの」

「……自殺？」

穏やかではない話に、セイバーは目を見開いた。あのいつもぼんやりしていて、のらくらしているマスターがかつてそんなことをしていたとは、にわかには信じがたい。

かつて夢で、明が高所から落下する記憶を垣間見たこともあるが、特に気にしていなかった。

——否、セイバーは明の過去に興味がなかった。どんな過去があつても、マスターが今ここにいることが重要で、それに比べれば過去など些事だった。だが、それにしても穏やかな話ではない。

「先生たちは隠してたんだけど、そういうのってどこからともなくわかるものだよ。そういう感じで、明ちゃんは腫物みたいな扱いだったんだ。大学生になってからまた会った時はびっくりしたの。全然普通の人になってたから。でも、多分明ちゃんは昔とあんまり変わってないと思う」

麻貴は頭を抱えて言葉を選ぶ。彼女自身も表現しあぐねているよ

うで、腕を組んで唸った。

「なんていうのかな、もう全部どうでもいいっていう感じ。ごめん、あんまり具体的にできないんだけど」

「……何故その話を俺に？」

セイバーには、彼女が日向がいない時を見計らって、この話を始めたとは思えない。

しかしその話をする意図もわからない。麻貴は多少逡巡する様子を見せたが、意を決して再び口を開いた。

「あのさ、セイバーくんって、人間じゃないでしょ」

セイバーの全身が瞬時に緊張した。まさかこの女、マスターか——セイバーは思わず麻貴に飛びかかろうとしたが、すんでのところで押しとどめた。明の令呪による縛りと人目のあるところでの暗殺を禁じられているせいもあるが、麻貴はあまりに隙だらけなうえにサーヴァントの気配も感じないからだ。

もしサーヴァントがいるとしたら、敵サーヴァントであるセイバーがこれほど近くにいるのにマスターを放置するのは可笑しい。セイバーの警戒を知ってか知らずか、麻貴は続ける。

「私霊感とかある方なんだ。セイバーくんみたいな人は初めて見るからわからないんだけど、幽霊、いや、もっと偉い、神様に近い人みたいだと思うんだけど、違う？」

英霊と言うこの世界の外側から世界を守護する存在であるセイバーは、確かに広い目で見れば神様のようなものとも言えなくはない。さらに日本武尊を祭神とする神社は全国に存在するため、神としての信仰も厚い。否定しないセイバーを見て、麻貴は深々と頭を下げた。

「何の真似だ」

「明ちゃんを、護ってあげてください」

「……どういふことだ」

「明ちゃん、事情は話さないけど多分何かしてるんだよね。ゼミの教授は明ちゃんが休む理由を家庭の事情って言って納得してたけど、きつと違う。休み始めた時期と同じくして、セイバーくんが来た」

セイバーの知ったことではないが、明が暗示をかけたのは大学の教授数名だけだ。彼らから同じゼミのメンバーに話してもらおう方が手っ取り早い。

一名一名にわざわざ暗示をかけるのはあまりにも手間だ。ゆえに、日向や麻貴は暗示の範疇外にある。

「……最近、春日の街はなんか変だよ。お昼は普通だけど、夜が静かすぎる気がするの。それに殺人事件に病院へのテロ、倉庫街での爆発事故……」

麻貴の眼は、一種疑惑を孕んでセイバーを見ていた。そしてセイバーが人の範疇を超えた存在であることを知るがゆえに、恐れの色もあった。それでも、麻貴は話すことを止めなかった。

「……明ちゃんとセイバーくん、何か、危ないことしてる？」

聖杯戦争について話すことはできない。嘘でごまかそうと思えば、ごまかすこともできた。しかしセイバーはその選択肢を却下した。目の前の女——マスターの友人の言葉に嘘はなく、それは間違いなくマスターの身を案じるもの。その心に虚偽で応じることはできない。

「命の危険を冒していると言われれば、そうだ。悪いが何をしているか語ることはできない」

これが、セイバーの話せる限界だ。麻貴は唾を呑み込んだ——そして、絞り出すように言った。

「……なら、だから、明ちゃんのことを護ってあげてください。その、危ないことから」

麻貴は本当に漠然と「危険な事をしている」としか知らない。しかしその「危険な事」——聖杯戦争において、マスターを護ることはサーヴァントの役割である。

どんな状況でも、どんな敵からも護ること。この名と召喚された時

の誓いに懸けて、他の何人であろうと負けるわけにはいかないことは変わらない。

「お前に言われずとも、それは俺の仕事だ」

セイバーの答えに、麻貴は泣きそうになりながら喜んでいた。セイバーの方が逆にその喜びのように驚き何と言えればいいかわからず、心配するなど彼女の肩を叩いた。

「明ちゃんは、私とかみんなを護ってくれるけど、自分のことを放りっぱなしだから——」

博物館を堪能した日向を迎え、三人は博物館を出た。その後は春日駅の北を東西に流れる川——美玖川のほとりでクレープをもさもさと食べた。

夜までには碓氷邸に戻ってくるように言われていたため、少し早いが解散の運びになった。いつまで春日に滞在するのかと聞かれ、セイバーはとりあえず二週間と言ったが、用事が入ってもっと早く帰るかもしれないと伝えておいた。

二人と別れ、セイバーは急ぐこともなく春日の街を徒歩で帰る。午後四時だが、十二月の今はもう夕暮れである。西の空には橙色の光りを放ち沈みゆく夕日が、長く濃い影を投げかける。

美玖川の河川に生えた薄が風になびき一斉にそよぐ。セイバーはかつての旅で、一面になびく銀色の薄を見たことを思い出した。

マスターはいい友人を持っている。セイバーは素直にそのことを喜んだ。

セイバー自身に友人と呼べる人はいないが、少ないものの東征の旅をした戦友はいた。その多くは、旅の途中で命を落としていったが。

(……しかし、この空気)

人の時間と魔の時間が交差する、逢魔ヶ時。バーサーカーがいたときのような重苦しい空気はないが、別の空気がある。もちろん聖杯戦

争中の春日の街の夜は、明らかに異様な空気に包まれている。

世間的には連続殺害事件の犯人はもう絶対に見つからず、総合病院を襲ったテロも永久に解決しない。人々の濃い不安は、長い間春日に闇を落とし続けるだろう。

だが、それはセイバーにとって些事である。

(まるで、魔力を持てあましているような……)

残るサーヴァントはアーチャー、ランサー、ガンナーもといキヤスター、そしてセイバーの四騎である。セイバーが直接姿を見ていないのはキヤスターのみで、ランサーによればそう強くないが逃げ足が速いサーヴァントらしい。

バーサーカーが倒れた今、キヤスターとアーチャーの行方を探すことが急務である。索敵能力が並のセイバーは、とにかく足で探すしかない。

昨夜は魔力の回復にあてて大人しくしていたが、今夜からはまた索敵に出るべきだろう。

そう結論付け、急ぎ足で碓氷邸に帰ろうとした時、すれ違う一人の女とぶつかった。長い金髪をした女は外国人のようだった。紺色のロングスカートに白いコートを着た、眉目秀麗な女だ。

「あら、ごめんなさいね」

「いや、こちらこそ不注意だった。それより落とし物だ」

ぶつかった拍子に落ちたと思われる女物のハンカチを拾い上げ、セイバーは女に手渡した。

「ありがとう」

女は軽く礼をして、セイバーの向かう方向とは反対に歩いて行った。そして何気なく女がセイバーの方向を振り返ると、足の速い彼の姿はもう小さくなっていった。

\*

橙色の光も消え失せ、今日もまた夜は来る。山のふもとに忽然と現れる洋館のロビーで、巫女服の女が精悍な男に駆け寄る。その男は神主のような服を纏い、毅然と立っていた。

しかしその服は漆黒に染まり、袴も禍々しいほどに朱い。とても神職につく者のそれではない。

男は顔に満面の笑みを浮かべて、飛びついてきた女を抱き寄せた。シャンデリアの耀きの下で再会を喜び合う男女は、恋人そのものでありながら、同時に久しく会えなかった友と再会を果たしたようにも見える。

「茨！ やつと呼べたわあ」

「お頭、久しぶりだな！ つつーかなんだその姿！ 流行か？」

「ふふ、キレイでしょ」

女は艶めく唇を寄せる。男は豊かな髪を撫でて笑う。

「人間だったらかつさらって食べたいくらいにはいいな。だけど、お頭、弱くなってねえか？」

「それは仕方がないのよ。この姿だと、本来の三割も力が出ないもの。ちよつとした呪いを使うくらいしかできないわ」

「そうなのか。じゃ、これからを期待するぜ」

二人はまるで幼い悪童のように笑い合わせる。

大の大人の姿をしていながら、悪だくみをして遊んでやろうと言う幼気が見え隠れする。

「あと、遅くなってごめんなさいね。御主人からお許しが出なかったの」

「そろそろ人手がほしいと思つてたところだったから」

ホテルのロビーのごときフロアで、待ち合い用にしつらえられたソファに腰かけるのは黒髪の少女——キリエスフィール・フォン・アインツベルンだった。紅い目を細めて、黒い巫女服のキャスターと男を見る。キャスターは男から離れ、豊かな真紅の髪を翻して己がマス

ターに寄り添う。

「茨、この子が私のご主人よ。粗相をしたら私、令呪で大変な目に会わせられちゃう」

茨と呼ばれた男は頭を下げる。「茨木童子だ。俺のお頭が世話になる。よろしく頼む……ところで、マスターとやら、人間ではないな?」  
「そうよ。ご主人は人間みたいだけど、人間じゃないのよくもし人間だったら私、食べちゃってたかもしれないし、ナイス選択よねく聖杯さん」

「ほーう。聖杯もなかなか気が利くな」

可笑しそうにキャスターと茨木童子は呵々と笑った。物騒極まりない会話だが、マスターのキリエは気にした素振りもない。

むしろ不快そうにしているのは、螺旋階段を上った先から見下ろしているアーチャーだった。

「全く嘆かわしい。私の世がいまでは百鬼夜行の舞台に成り果てようとはのう」

「あら、生前ならいざ知らず、もう英霊になってしまつては人間とは言えないわよくアーチャーはもうおいしそうじゃないわ。安心してね」

艶かしい仕草で唇を舐めるキャスターの姿も、アーチャーには汚らわしいそれとしか映らない。アーチャーは袍を翻して、優雅な動作で螺旋階段を下りていく。

「さてマスター、今日は入用なのであろう?」

「そうね。キャスターとアーチャーはついてきてもらえるかしら。茨木童子、留守を頼むわ」

キリエはぱたんと呼んでいた本を閉じて、ゆつくりとした動作で立ち上がる。その体には全身にわたって魔術回路が刻まれており、さらに右手には六画の令呪が現れていた。

アインツベルンが聖杯戦争のために生み出したホムンクルスであるキリエには、マスターとして最高の性能を誇るように調整が施されている。聖杯戦争の申し子と言ふべき彼女は、己の体を見てから呟いた。

「残るサーヴァントはセイバー、ランサー、キャスター、アーチャー、



……もしかしたらもう一体」

キリエが漆黒の髪を翻した時、シャンデリアの明かりが落ちた。洋館の扉が外へ、主人の出発を見送るかのようには開く。鬱蒼とした木々よりはるか遠くに、丸く白い月が光る。

真紅の髪のキャスターはその腕に小さなマスターを抱えると、やれやれと言わんばかりに息をついた。

「本当に主人は心配性よねえ。私とアーチャーでもういいじゃない？」

「慎重になるに越したことはないわ。もう二度とあなたを呼んでしまうような大ポカはごめんなの。味方は多ければ多いほどいいのではなくて」

一か月半前の苦い記憶が、キリエの中に蘇る。あの時の翁の、親族たちが失望する眼差し。高められていた希望が一気に失望へ変わる瞬間。その時の空気と気持ちを、キリエは生々しいほどに覚えている。

まるで自分の生きてきた意味が奪われるような喪失感は、二度と味わいたくない。

「私は聖杯を手に入れるわ。最終決戦はキャスター、アーチャー、貴方たちで好きに行いなさい」

「全く酷いマスターもいたものよ」

「その酷いマスターを頼ってきたのはどこのサーヴァントかしら？けれど、最強のマスターを選ぶ、という意味では貴方の選択は正しいと思うわ」

弓兵、魔術師、少女が夜の山麓に姿を現す。人ならざる者たちの夜行が、今始まる。気配は静かに、およそ一か月にわたって溜め込まれた魔力により、大西山はもう大西山ではなくなっている——まだ発動させてはいない為ただの霊地であるが、本質はすでにキャスター生前の根城と化している。

術者本人でさえ解呪に時間のかかる複雑な隠ぺい術式に加え、このキャスターの陣地作成のスキル——大西山がキャスター生前の陣地

に非常に近いことはもちろん、その前身を考えればキャスターが山に  
にいることは「自然」ですらある。発動させるまでその存在を気づか  
せない、一流の結界となっている。

その上、最高のマスター適性を持つキリエスフィールのバックアッ  
プを得て、キャスターは最高の陣地を形成しつつあった。キャスター  
は一度目をつむると、密やかにつぶやいた。

「今度はお父様に代わって、私がああ皇子様を殺す——因果なものね  
え」

そして、彼女を異形のサーヴァントとして従える少女は、紅い目を  
光らせた。

「それでは、ランサーを貰い受けに行きましょうか」

12月3日④ 風雲急

夕刻、セイバーが碓氷邸に帰宅してから、明は霊器盤に異常があるかもしれない旨を伝えた。

もしかしたらガンナーなる第八のサーヴァントが召喚されているのかもしれないと。セイバーはリビングのソファに身を沈めて、形の良い眉を吊り上げた。

「霊器盤が壊れたと言うのはどういうことだ」

「……私もよくわからないし、神父も掴めていないみたい。詳しいことはまた連絡してくれると思うけど」

「霊器盤については俺にどうこうできるものではない。だが、あの神父……胡散臭いというか、何というか」

セイバーは珍しく奥歯に物が挟まったような口ぶりでつぶやいた。御雄が胡散臭い神父であることは、付き合いの長い明も同感である。彼女の生まれる前からここで神父であった人間だ。

しかし父の影景も知る人物であり、そうそう可笑しいことはない。

「うーん……うさんくさい神父なのは前からだし、聖杯戦争については変なことするとは思えないんだけど。仮に何かたくらんでるとしても、霊器盤が壊れてるーなんて私たちに嘘ついてどうするの」  
「それはもつともだ。しかし、気を許すべきではない」

直感Aを持つセイバーの勘を侮るつもりはないが、彼の直感は戦闘の中でこそ働くものである。人を見る目に働くのかどうかはわからない。

「まあ、許したことはあんまないんだけど。ところで観光はどうだった？つていうか二人に変なこと言わなかった？」

判断に困るためそれはさて置き、明は問題の観光について聞くことにした。セイバーと視覚と聴覚をいつでも共有できるようにしていたのだが、肝心の明が一成の魔術を見るなどしてほとんどできなかったのだ。

特に大きな問題もなかったので、何を言おうかとセイバーは思案し

だが一つ言っておくべきことがあることを思い出した。

「特にないが、相楽麻貴は俺が人間ではないとわかっていたぞ」  
「はあ!？」

セイバーは事のついでくらいの言い方だったが、セイバーが初めて見るくらいに明は狼狽えた。彼女はセイバーの両肩を掴んで問いただす。

「えつとつどういうこと!?!まさか麻貴がマスターとかそういうオチじゃないよね!？」

「それはないだろう。麻貴の周囲にサーヴァントの気配を感じなかった。昼間とはいえサーヴァントなしに歩く間抜けなマスターはアサシンのマスターくらいだろう」

「もしアサシンみたいな、気配遮断に似たスキルをもったサーヴァントだったら!?!セイバーだって偽装ってスキルあるし!！」

「仮にそうであって気配遮断をして近くにいたとしてもだ、攻撃態勢をとればその精度は激しく落ちるだろう。俺がそれに気づかないはずはない。つまり、俺を間昼間から殺そうとしても無理な話だ。それに、俺という敵が麻貴のすぐ近くにいるという状況で、麻貴が自らのサーヴァントをこの家——マスターを殺そうと差し向けるのはあまりも危険すぎる。よって、麻貴はマスターではない」  
「……そ、そっか」

セイバーの感情の入らない答え方が逆に幸いしたのか、明はほっと胸をなでおろした。

「あの子、昔から靈感あるタイプだったみたいだし、もしかしてもう絶えてるけど魔導の血でも入ってるのかな……?？」

「それは知らない。だが英霊のことは知らないようで、俺の事は神に近いものだと思ってるようだ」

「というか、なんでそんな話になったのさ?？」

セイバーは一度考えていたが、何故その話をする事になったのかは彼にもわからないようである。

「麻貴は聖杯戦争については知らない。だが、俺たちが危険な事をし

ていることは感付いていた。その上で『明ちゃんのことを護ってあげてください』と言われた」

「……いいやつだなあ」

明はしみじみと感じ入ったように頷いた。あまり人づきあいがうまくないこともあり、友達が少ないがその分友達になった人間は精銳ぞろいだと自負している。

その友達に本当のことを話せないのは心苦しいが、聖杯戦争は魔術師の戦いで致し方ない。

明はそろそろご飯ができるので、話を切り上げて食堂にと思った時、セイバーが爆弾を投下した。

「その話の時、麻貴からマスターがかつて自ら命を断とうとしたことがあると聞いた」

一瞬、明は頭が真っ白になった。が、それも一瞬だけだった。

同じ中学であった麻貴が明のことを知っているのは道理で、大学でその話に触れられたことはなかったが、それは彼女が気を使っていたくれたからだろう。

「というかでもなんでそんな話セイバーに……」

「どうなのだ、明」

何故かセイバーもセイバーでかつてない関心を見せている。前に家族構成の話をしたこともあり、高所恐怖症の話もしたが深い興味を示しはしなかっただけ奇異である。

「……いや大した話じゃないよ？私がクソメンヘラだっただけの話で」

「クソメン……？わけのわからない言葉でごまかすな」

「あ、うん、ほら私の影魔術は術者の暗黒面が深く影響するのね。中学生の多感な時期にさ、友達が死んだりしてさ、精神不安定な時にちよつと魔術使つて拍車かかって、それで自分の首ナイフでブツ刺して死のうとしたことがあるだけで」

明はそう言つて、顎を上げて首と顎の付け根を指さした。間違つていなければ、そこに薄くなつた刺し傷の跡があるはずだ。今はイメー

ジで事足りるが、昔は魔術回路の起動も自傷しなければできなかったため服で隠れた部分——上腕部や太ももには自傷痕も多く残ってしまったっている。ノースリーブは着れず修学旅行等でクラスメイトと入浴ができない等、地味に困ることもあり、傍から見たら完全にメンヘラで明としては頭が痛い。

「もう四年以上前の話だから！もう全然メンヘ、いや元気だし普通だから！」

セイバーは異様な真剣さで食い入るように明の傷を見つめていたが、漸く納得いったのか離れた。

「……一時的なものか」

「そうそう、今は元気だから」

「人生など満足どころか納得のいくものにするこすら難い。そういう時もあるう。今のマスターが元気ならばそれでよい」

言葉ではわかったといいながら、セイバーは妙に、まるで自分に言い聞かせるように何度も頷いていた。逆に明の方が心配になって、そつと様子を伺った。

その視線に気づいたセイバーは、やはり明を見ながら無理やり何度も頷くだけだった。明のいぶかしげな視線から逃げるように、セイバーはそういえばと話を変えた。

「そうだ、先ほどからいい匂いがしているな」

食堂のドアを開け放っているせいか先ほどから味噌汁の匂いがリビングにまで漂っている。明は支度を一成にまかせつきりにしていたことを思い出した。

「そうそう、今日ご飯は土御門にアドバイスもらって作ったんだよ。作戦会議をその後にしよう」

一成は一通り腕を明に観察され、そのあとに鋼鉄義手を接続してもらった。碓氷の地下室には何でもあるなど感心し、その義手に慣れる

為に物を掴んだり運動をしていた。

流石というべきが、慣れれば戦闘に邪魔にならないほどに動かせるようにはなるだろうと思われた。

一成の体専用調整した義手を作るには時間がかかるので、今日作成依頼を出すができるにしても聖杯戦争が終わった後になると言う。それ以前に生き残らなければいけない。

それはともあれ、一成は一度自宅のアパートに戻った。家から礼装や着替えを持ってくるためだったが、ついでにスーパーで買い物までしてきていた。病み上がりをもともせず、よく動けたと思う。しかし一成に言わせれば「ここ、冷蔵庫なんもねーよ」と眼に余っていた。「全く、新しい腕に慣れてない人間を放っておくなよな。すげー大変だったんだぞ」

「おお……」

エプロンを身に着けた一成は、やや気恥ずかしそうにテーブルの上に視線をやった。そこにはほかほかと湯気をたてている白米、豚肉やゴボウの入ったスタンダード豚汁、鰯の照り焼き、ひじきの煮つけ、揚げ出し豆腐がきちんと器に収まって並べられていた。

明も半分くらい作業をしたのだが、もう半分の作業は一成でありかつ指示したのは一成である。セイバーと明が話している間に、義手の訓練がてら一成が盛り付けをやってくれたようだ。

明はかつてないほど尊敬の意を込めて、一成の手を掴んだ。

「土御門、あなたいい主夫になれるよ……」

「これでも実家では母さんに教えられてたからな。それよりお前スキルはあるのになんでああ料理が雑なんだ？」

明はめんどろうだと言いながら、料理スキル自体は持ち合わせている為、彼の指示に従うだけでこれだけのものができたのである。ちゃんと言えば塩と砂糖も間違えない。

「自分だけのために作る気にならないからさ。最近はセイバーはいたから、ちよつとはやってたけど」

「そうかよ。まあいいや、さっさと食おうぜ。冷めると不味いぞ」

そういいながら褒められて悪い気がしないようで、一成はぶつきら

ぼうに言った。

彼も食べようと席に付こうとしたところ、いきなり目の前に空の茶碗が差し出された。

「お代わりを頼む」

「早ッ!!」

もりもりと一足早く食事を始めていたセイバーが、さも当然の如くお代わりを要求した。何か釈然としないものを感じながら、一成がその茶碗を受け取った時の事である。

明が突然椅子を倒し、近くの窓を開けて外を伺った。それと同時に突進するような勢いで、黒い何かが部屋に侵入してきた。

一成はぎよつとしたが、よく見ればそれは昼にも見た教会の使い魔であつた。

明は目の前にあつたご褒美を取り上げられたような顔で、不服そうにその使い魔に言い捨てた。

「地味に結界破ろうとしてまで急いでくるって、何？」

『済まない。だが、予想外の事態が起こった』

ふわふわと部屋の中を飛ぶ使い魔の蝙蝠は、低く良く響く声で喋つた。しかしその声はいつもより焦燥に駆られているようだ。

流星に三人ともその様子にただならぬものを感じて、使い魔からの言葉を待った。

『ハルカのランサーが奪われた。相手はキャスターのマスターだろう』

「神父、奪われたとはどういうことだ」

声に意識を傾けながら、セイバーは鱈を口に運ぶのをやめていない。

それでも、セイバーの空気は殺伐とし始めている。焦りを含んだ声の主は続ける。

『キャスターのマスターに襲われ、ランサーとその令呪をマスターに



奪われた。ハルカはその後教会に保護を求めてきた』

明は口を差し挟む。「ランサーがキャスターと戦ったってこと？でもランサーがそうやすやすと負けるの？しかも陣地にいないキャスターに？」

『ハルカによれば、キャスターのマスターはキャスターのみを使役していたのではなく、……アーチャーをも使役していたそうだ』

「二体同時使役……」

一人のマスターが二騎のサーヴァントを使役することは、決して不可能ではない。しかし、二騎分の魔力をサーヴァントに供給しなければならぬため、マスターの負担が増えてしまう。

また、同じ理由で宝具の使用にも支障が出て、サーヴァントの性能を発揮しきれなくなるなどデメリットの方が多いため、そうそう実行するマスターはいない。

だが、明にも一成にも、もしかしてと心当たる名前があった。

「アインツベルン……」

一成が呟いた名前に、使い魔は然りと頷いた。

『少年、その通りだ。キャスターのマスターはアインツベルンの者だ。そしてアーチャーもだ』

聖杯戦争のために調整された肉体をもつアインツベルンのホムンクルスは、他のマスターと比べて段違いのマスター適性を保持している。体に刻まれた魔術刻印と、増やされた魔術回路の数では明も遠く及ばない。それならば、二体同時使役も理解できる。

おそらくアーチャーがランサーと戦っている間に、キャスターとそのマスターがハルカに令呪の譲渡を迫ったのだろう。ハルカは令呪を譲渡し、ランサーを失った。

「ん？ってことは……アインツベルンは今キャスターとアーチャーとランサーを従えてるってことか!？」

『信じがたいが、おそらくそうだろう』

二体同時使役ではなく、三体同時使役。いくらマスターとしての最高の適性を持つとはいえ、本当にその三体を十全に使いこなすことが

できるのだろうか。

現界させているだけでもそれなりの魔力をもっていられるというのに——そう考えながら、明と一成は想像することしかできなかった。思いもしなかった展開に、二人は息をのみ黙ってしまふ。

しかし、その重い空気の中で一人セイバーだけが箸を動かす手を止めて口を開いた。

「奪われたということは、アーチャーとは違いランサーはマスターを裏切ったというわけではないのか。あと、奪われた時点で令呪は何画残っていた？」

『ハルカは奪われた、と言っていたからそうだろう。残り二画の令呪を持っていかれている』

セイバーは顎に手を当てて、ふむと頷くと慌てる様子もなく使い魔に向かってさらに問うた。

「なるほど……神父、そちらでも策を講じているのか」

『正直ハルカは戦意を喪失している。……これと言った策はまだはない』

セイバーの問いに対する答えは重苦しかった。仮にハルカに戦意があったとしても、一人の元マスター対聖杯戦争のために作られた最強のマスターと三体のサーヴァントである。

立ち向かえと言う方が土台無理な話だ。

「そうか。こちらからも何かあれば連絡する。マスター、帰るように頼んでくれ」

「あ、うん。そういうことだから、神父、また連絡する」

セイバーが仕切っていることに戸惑いを覚えながら、思考の追いつかなかった明はセイバーの言うとおりに使い魔を返した。先ほどまで囃らんとまではいかなかったも、和やかな夕食の雰囲気であったのに、その雰囲気は既に跡形もなかった。

セイバーだけが勝手にご飯とみそ汁をお代わりして、普段と変わらない調子で食事をしている。一成は明に向き直って問うた。

「三体同時使役ってどうなんだ？」

「……二体は考えられるけど、三体は流石にわからない。アインツベルンのマスター性能がどれだけなのか、具体的には知らないし」  
「そうか。……やっぱ、キリエスフィール・フォン・アインツベルンのところだったんだな」

——キヤスターのマスターがアーチャーをも使役していた。今しがた聞いたその事実は、驚愕とともにしっくりと一成の胸の内に染み込んだ。昨日は自分の状況を理解し気持ちを整理することに費やしてしまったが、明から得た情報を組み合わせればアーチャーの行き先はすぐに予想がついた。

ライダーとバーサーカーはすでにいない。明にはセイバーのみで、その明と共闘関係であるランサーのマスターの元にも、神父の報告から察するにアーチャーはいない。

残るはガンナーとキヤスターだが、ガンナーのマスターは中年の男だそうだ。

アーチャーが全く新しいマスターを見繕うこともありえるが、急場しのぎのマスターに仕えるより、最初から聖杯戦争に望んでいるマスターの方が実力的に有望であろう。

それに、一成とキリエに面識があるように、アーチャーもキリエと面識がある。

さらに、一成とキヤスターに面識はないが、アーチャーは一成とキリエが話している間に「キリエのサーヴァントを探る」という名目でキヤスターと会話をしている。

(キリエもアーチャーが裏切ることを期待してたんだらうか……)

だとしたらかつての一成は大間抜けということになる。自分のサーヴァントが敵のサーヴァントと裏切る段取りを立てている間に、一成はのんきにそのマスターを観光案内していたことになる。

(アーチャーも最初から俺に見切りをつけてたってことか……?)

一成が情けなさを感じながらため息をついたところに、それを全く察しないセイバーの問いが飛んできた。

「土御門。一つ聞くが、お前はキヤスターのマスターと知り合いか？」

「あ、そういうえば会ったことあるって」

確かにセイバーと明からすれば当然の質問である。

ただ、一成はアーチャーとの関係、さらには三十年前にさかのぼる、この聖杯戦争の発端にまつわることまで話さなければならなかった。自らの情けなさをかみしめている今、話すのは気が進まなかったがそんなことを言っている場合でもなかった。

「……シヨツピングモールで会ったんだけど、あいつは俺と知って声かけてきた。それは、俺の家がこの聖杯戦争の始まりに一枚かんでいたからだった」

「え？ そうなの!？」

明は心底驚いたようで、さらに一成を問い詰めた。一成は、アインツベルンに誘われて土御門が冬木の聖杯の模倣に手を貸したこと、大聖杯の中心にはアインツベルンのホムンクルスと一成の祖母が据えられていること、本当は五年で大聖杯に魔力が満ちて聖杯戦争が始まる予定だったが、三十年もかかったためアインツベルン以外は失敗だと思っていたことを話した。

「確氷は土地を提供したってアイツは言ってたぞ。お前知らなかったのか?」

「三十年前だと、父じゃなくて先代の御爺様が当主だったころだよ。父も聞いていなかったのかも……:というか、なんで土御門はここで聖杯設置することに賛成したの? 土御門の本拠地ってここじゃないでしょ」

途絶えかけとはいえ、土御門の本拠地は相応の霊地であるはずで、わざわざ他の地でやることもないだろうと明は思ったのである。

「そういうえば、そこんところは知らないな。春日は四神相応の地で、魔力が溜まりやすいってあいつは言ってたけど……」

西に海、東に大西山、北に美玖川、南に自然公園内の丘がある春日は確かに四神相応の地である。陰陽道魔術から見れば最高の護りの土地である。

また、春日の聖杯は基盤が冬木のものであり、アインツベルンの何かしら意向により土御門の地ではなくこの春日の地が選定されたの

か。

「まさかうちの祖父がどうかと言い出したとか？」

「いや、あいつの言い草だとそうじゃなさそうだった。確氷は設置してもいいけど参加権をよこせて程度だったっぼいぜ」

確かに、本気で聖杯戦争により聖杯を得、根源に至るつもりなら明の父と明にもっと説明があってもよかつたはずだ。しかし父は聖杯戦争について、これまで明に語ったことは一度も無い。

冬木の聖杯は一度も根源への道を開けていない——その贗作に根源への道が開けるか——明の祖父は、「やれるものならやってみるがいい」程度の心持だったのだろうか。

「……とすると、だれかが仲介したのかなのかな。だとしても誰がそんなことするんだろ」

明はぶつぶつと呟きながら考え込んでしまった。一成はちらりと会話の発端であつたセイバーを見たが、セイバーは既に全く興味がなさそうだった。

むしろ何を話しているんだとという顔をして、箸で一成を指してくる。

「この聖杯戦争の発端の話はどうでもいい。俺が聞きたいのは、サーヴァント三体を使役するキリエスフィール・フォン・アインツベルンとは何者かということだ」

「あ、そうか。セイバーはアインツベルンが何か知らないんだつた」

明は簡略にアインツベルンの概略を説明した。千年の長きにわたる聖杯を求め続ける、錬金術を得意とする魔導の一族で、冬木の聖杯戦争を始めた一家の一つ。

そして、その家から出るマスターは聖杯戦争用の調整を施され、マスターとして最高の適性をもつこと。

明が思うに、アインツベルンならば二体同時使役くらいならこなすだろう。三体同時はわからないが、可能性としては十分可能であると思うことを伝える。

セイバーは味噌汁を飲みほし、腕を組んだ。「そうか」

三体のサーヴァントを使役する、最高適性を持つマスターに対し、こちらはマスターと一体のサーヴァント、それに元マスターである。一体どうやって戦うのか——一成は途方に暮れかけたが、セイバーは落ち着き払っていた。

「そもそもなぜキャスターのマスターは三体ものサーヴァントを使役しようと考えた？ 現在、残るサーヴァントは俺と怪しげなガンナーだけだ」

「確実にセイバーとガンナーを倒す為でしょ？」

セイバーがいくら最優のサーヴァントといえど、三対一では勝ち目は限りなく薄いだろう。

仮にガンナーとセイバーが結託できたとしても三対二である。

「だろう。キャスターと言うクラスを考えれば、まず俺対策に違いない。非常に腹立たしいが、アーチャーのあの宝具は俺には大層効くからな」

キャスターは七クラスのサーヴァント中、最弱のサーヴァントとされている。理由は、他の多くのサーヴァントが対魔力のスキルを保持し魔術が効きにくいこと、そしてマスターも魔術師であるために手数が被ってしまい、戦略の幅が出ないことがあげられる。

そして、全サーヴァント中最高の対魔力を持つセイバーはキャスターの天敵である。

「ガンナーにも三対一なら勝てるぞと踏んでいるだろう。仮に、俺とガンナーが消滅したとする。その後はどうなる」

明はセイバーの言わんとすることを察した。セイバーは頷く。

「アインツベルンのマスターが勝者になる。だけどサーヴァントはまだ三体もいる」

「キャスター、アーチャー、ランサーの間で殺し合いだ。マスターは自分の勝利が確定しているのだから、好きにやらせるだろう。キャスターに見えたことはないからそこはわからないが、あのアーチャーがそのことを考えていないはずがあるまい。そしてそもそも、ランサーは好んでアインツベルンとやらのもとにいるわけではない。令呪の縛りはあるが、ランサーが本気であれらに協力するとは考えにくい。

武士道やらものけのなんとやらだか知らんが、ランサーは尋常に勝負とか言う輩だった」

つまり、とセイバーは一言置いた。「やつらは決して一枚岩ではない。であれば、いくらでもやりようはある」

セイバーは自信満々と言うわけではない。かといって冗談を言っているわけでも虚勢を張っているわけでもない。いつもと寸分たがわぬ様子で考えを述べていた。

その様子が却って頼もしく感じられるのはこの英霊が「日本最強」の名を冠していればこそだろう。

「なんか策はあるのか、セイバー」

期待をこめた一成の言葉を、セイバーは「ない」と一刀両断した。

「あくまでやりようはある、というだけだ。まずはキャスターの陣地・様子を調べなければならぬ。それに、わざわざ丁寧キャスターの陣地で戦ってやることもない」

セイバーは茶碗を一成に突き出した。

一成は受け取るだけ受け取ったが、よそついている場合ではない。

「かといっても今ある情報って、アインツベルンが三体のサーヴァントを持つってただけだろ。どこが拠点とかわかんねー」

「……俺より先に現界していたのはキャスターだけだったな、マスター」

「そのはずだよ。だからキャスターは少なくとも現界してから二週間以上たってる……」

キャスターのサーヴァントには陣地作成のスキルがある。魔術師として自分に有利な陣地を作成することができるのだが、当然作成に時間を掛ければかけるほど陣地は堅牢な要塞と化す。

キャスターのサーヴァントは基本自分から相手を倒しに行くのではなく、自らの蜘蛛の巣にかかるのを待つ戦いをする。

「時間が経てば経つほどキャスターは力をつけてしまう。それに、ランサーを奪ってサーヴァント三体を使役するようになったってことは「もう全部倒す」っていう意思表示じゃないのかな？」

「そうだとすれば、あちらも堂々と拠点を明らかにするだろうが……しかし、現界してから春日の街を何度も巡回したが、そのような気配はどこにも感じなかった」

セイバーは首を傾げた。明も大規模な魔術の気配を感じなかったため、キャスターたちが今までどこに潜んでいたのかわからない。

「……私も、特に。ああもう、魔術とかそういう気配には私が気づかないやいやいけないのに」

「英霊が人間より強いのは当然。相手がどんな魔術師かしらないが、現代の魔術師であるマスターが気づかずとも不思議な話ではない」

ただやみくもに陣地——工房を作成するのでは魔力が漏れてすぐに周囲に異常と感知される。おそらく結界をも張っていたのだろうが、結界自体が異常と感知されるものではない。一流の作り上げる結界は異常そのものを感知させぬモノだ。

そして陣地を張るのならば霊地の方が適しているから、そこから絞るとすればこの碓氷の邸宅を抜いて、名のある霊地は土御門神社と大西山である。

「土御門神社は霊地だが特に何も感じなかった。大西山は何か違和感があったが、あれはもともと魔力の溜まる土地であること、かつ初期にアサシンのマスターが拠点を張ろうとしていたためだと思っていたが……」

その時、セイバーが、明が、一成が身を強張らせた。巨大地震に襲われたような錯覚を抱くほどの衝撃がおおのの体に走る。

セイバーは瞬時に神剣を右手に取り、使い魔が飛び立っていった窓に足を掛けて外へ飛び出した。

セイバーに続いて明と一成も取るものもとりにあえず庭に飛び出した。

先ほどの衝撃は、碓氷邸にかけられた結界が力づくで破られた衝撃だ。

いま邸宅の庭から感じるのは、膨大な魔力による圧力。その魔力に



は明たちを攻撃する意図は感じられないものの、量が圧倒的過ぎてそれだけで体に変調をきたしかねないほどである。

その圧倒的質量を感じながら、同時にその魔力の質が呪いじみた――汚らわしいものであるように、セイバーには感じられた。

暗く闇に沈んだ夜空に、人間――いや、人の形をとる化生が雲のような煙のようなものに包まれてふわりと浮かんでいた。澱んだ真紅の髪が豊かに宙に浮いて、黒い上衣を纏い、毒々しいまでに赤い袴を穿いている。袴の裾が切れ切れになつて、全体に皺が寄っている。

巫女らしくない巫女の衣装に身を包んでいながら、妖艶かつ淫靡な気配を漂わせる妙齡の女。

その両手には、普通なら両腕で抱えて持つのがやつとであろうほどの大きな甕が右手と左手に一つずつぶら下がっていた。その隣に糊のきいた衣冠束帯を身に着け、笏を手を持つアーチャーの姿がある。彼らは当然のようにふわりと碓氷邸の庭に足をついた。

そしてそれを認識するや否や、セイバーは即刻神剣を後ろ手に放り投げた。

背後にはついてきた明と一成が来ているはずで、剣を回収することを見越してのことだ。

アーチャーを連れていると言うことは、この見知らぬサーヴァントのクラスはキャスターに違いない。何のつもりかはしらないが、陣地を離れたキャスターなど敵ではない。セイバーは石畳を打ちぬくほどの踏込でキャスターへと襲い掛かった。

「きや、全く！」

キャスターは持つていた甕をアーチャーに放り投げ、セイバーを迎え撃つべく袴を翻した。だが、セイバーの方が圧倒的に速い。息をする間もなくその喉笛を掴み捻り殺せると、セイバーは確信した。

だが、自分の予想を裏切つてキャスターは素早い。

否、キャスターが早いのではなくセイバーが遅くなっていた。自分の意に反して体が動かないこの感覚には覚えがあったが、あの時よりははるかにまじだった。

喉笛を掴もうとした手は紙一重で横に回避されたが、セイバーは半

身を翻し振り向きざまにキャスターの顔面をとらえた。

握りしめられた拳が振るわれ、そのままキャスターを庭の塀まで吹き飛ばした。「あぁっ！」

塀と共に崩れ落ちながら、キャスターは悲鳴交じりの声を上げた。

「っ、ちよつとまじめにやつてるのアーチャー？」

アーチャーの手にはあの宝具が握られているが、神剣を持たないセイバーには大きな用をなさない。神性によって対象を縛るのならば、己の神性を下げればよい。剣を手放したセイバーは、キャスターを一顧だにしない。

「今の俺にその剣は大きな意味を持たないぞ、アーチャアア!!」

—— 剣を手放すことは、神の加護を失うことだが、奇しくも今はその方が都合がいい。

セイバーは得たり、とばかりにキャスターを無視しアーチャーへと奔った。アーチャーも神速で矢を番え射かけるが、幸運値が低いわけでもないセイバーには必殺とならない。

その矢を見切つて掴み折り、アーチャーを捉える——!

「急ぐ男は嫌われるわよ、セイバア？」

「—— ツツ!？」

悪寒としかいいようのない、全身の毛が逆立つような寒気がセイバーを襲った。背中にべつたりと張り付いて引きはがせない、濃密な死の予感。

その実は、蹴り飛ばしたキャスターが、口の端から血を流しながらも追つてきたのだ。

やはりキャスターからは大した脅威を感じないにも拘らず、セイバーの直感は全力で離れろと警鐘を鳴らしていた。

止む無くセイバーは魔力放出で飛び退り、アーチャーとキャスターから距離を取った。

二人は戦う気はないらしく、攻撃を仕掛けようとしてこない。

「—— 何用か、キャスターにアーチャー」

「やっとお話をする気になってくれた？そうそう」

警戒を隠さないセイバーに対し、キヤスターはもう今までのやり取りをきれいさっぱり忘れたかのように能天気な声を出した。

「飲みニケーションよ、飲みニケーション。あなたとお話ししたくてきたの」

12月3日⑤ 聖杯酒宴

人の身で人ならざる領域の願いに手を伸ばすこと。

人外の身で人の領分の願いに手を伸ばすこと。

双方の願いは同質。その身に分不相応な願いを抱いていると言う意味において。

小碓命が兄の大碓命をつまみ殺してから、父帝は小碓命をお願いになられた。

その人並み外れた怪力と、兄を殺したことを笑顔で報告してくる残忍さを恐れになったのである。

どうにかしてこの恐ろしい子を遠ざけたい——そうお考えになった時、都合のいい口実があった。

当時、西方のまつろわぬ者どもに、クマソタケル兄弟というものがいた。

父帝は、そのクマソタケル兄弟を討て——そう、小碓命にお命じになられたのである。

お命じになっておきながら父帝は、小碓命がまだ変声期も迎える前の少年であるにも関わらず——ろくな軍勢もお与えにならなかった。鋭い者は、帝は小碓命を疎んじておられる、と感づいたが、小碓命本人は全く気付かなかった。

純粹に父帝が自分を頼りにしている——「お前ならこの程度の難関を超えられるだろう」という信頼のもと、試練をお与えになったのだと考えた。

そうして叔母の倭姫命から衣装と剣を賜り、勇んで大和を出発した。大和から筑紫までの長い旅路を、供に連れた弓の名手・弟彦公とともに意気揚々と進めていった。

そしてクマソタケルの屋敷の祝いの席へ、女子に扮して紛れ込み、宴も酣に乗じて殺害しおおせたのである。

酒宴の場は惨憺たるありさまだった。膳はひっくり返され、侍つていた女どもや部下たちも凍りつき、そして慌てふためき逃げるもの、腰を抜かして動けぬ者、わけのわからぬことを叫ぶものと混沌の状態だった。その渦中にいるのは、堂々たる巨軀を持つ益荒男と、可憐な衣装に身を包んだ少女——少年だった。

そして、かつて「最強」を謳った剛の片割れは、少年の剣に貫かれたまま今だ命を繋いでいた。

一度剣が引き抜かれれば、夥しい血を流して絶命することは明白。その口が開かれ、重々しくも息が漏れた。

「お前はもう、オウスでも、ヤマトオグナでもない。クマソ最強を倒したのだから、お前はそれ以上のナニカなのだ」

この壮絶なる激痛の中、あくまでも平然と言葉を紡ぐのは、敗れようとも「タケル」であつたがゆえの矜持か。彼は己よりも頭一つ分以上小さな暗殺者の肩を掴んだ。

「——ヤマトタケル」

その名の意味は「この国で最も強き者」。己を殺しおおせた者への賛辞と、人は思うのかもしれない。

だが、この少年はまだこの国における西のタケルを殺したに過ぎない。大和から東には、クマソ以外のまつろわぬ者ども、悪神が蔓延っている。

にも拘らず、クマソタケルがこの名を捧げると言うことは——。

「ヤマトタケル。貴様は、未来、そういうモノとなるのだ」

真にその名が本当となるまで、戦い続ける運命。今、まさにこの時のように、血と悲鳴と、そして恐れられることを繰り返す生になると。

当の少年はクマソタケルの言葉を聞き流しつつ、無言で剣を引き抜いた。

彼からすれば、与えられた役目を果たしたに過ぎず、その名にも興味はなく今わの言葉にも興味はなかった。誰が最強だろうがどうでもよく、今明らかなのは少年が生き、クマソタケルが死ぬことだけだ。だから、少年はその言葉を無視することもできた。しかし己が父帝

に期待されているからこそ、この重大な役目を任せられたと信じていた少年は、あることを思った。

自分は、この国が好きだ。父帝の愛するこの国が好きだ。

そして、もし己がそれほどまでに強くなれるのなら、もっと多くの大和にまつろわぬ者を平らげることができる。

そうすれば、父帝の愛する大和には、安穩とした日々が約束される。そうすれば、父帝はお喜びになる。

そうすれば、叔母も、妻も、きつと喜ぶ。

己のしたこと、自分の愛する人たちが幸せになる。その幻想を現実に行けるのであれば、このクマソタケルの言う「最強」とやらを体現するのも悪くない。戦い続ける運命ならうと、きつと己は後悔しない。

短い逡巡の後、床に倒れ伏し血の泉に沈む男を見下ろして、少年は告げる。

「わかった。ならば、俺はこの国で『日本武尊』になる」

少年は、その名を肯う。その運命を肯定する。

元々神代の血を色濃く引いた少年は、その自分こそが最強の名を肯うことの代償を知らず。

ただただ、幸せなこの願いが、叶うのであればとだけ思った。

最強を語る者が願うには、あまりにも些細で不釣り合いな願いを。

彼の返事を聞き届け、瀕死のクマソタケルは、左様かと一言だけつぶやいて笑った。

「ならばいい。お前には、人を逸脱したほどの幻想こそがふさわしい」  
クマソタケルは真実、少年の強さを称えた。称え、そしてひれ伏したのだ。

少年は既に用はないとばかりに踵を翻して、風のように狂瀾の屋敷を去った。

残されたクマソタケルは既に虫の息だった。むしろ今生きていることそのものが、彼の生命力の強靱さを示していた。もはや眼も霞み、体は動かない。早くも落ち着きを取り戻した部下が手当てをしようとしているらしいが、もはや手遅れだ。

ひゆうひゆうと笛のような音は、己が呼吸の音だ。もはや言葉には  
らなぬし、届ける相手もない。

強き者は強き者を知る。ゆえにクマソタケルは知った。アレは次  
元が違う、と。この人世において、アレは異常ですらある。もつと全  
てが神に近しかった時代より、送り込まれてきたとしか思えぬ人の形  
をしたナニカだ。

——この国において、どのような英雄が現れようと、アレに勝る武  
の天稟を持つ者は皆無。前人未到、空前絶後、凡百には到底成そうと  
思いつきすらせぬ、遠き未来には奇跡とも言われるほどの偉業を成し  
遂げるだろう。人を逸脱したほどの幻想ユメさえ現実にする。その果て  
が病、驕りによる油断、いかな終わりを迎えようと笑えるだろう。

——だが、だが、しかし。

その武の天稟を知れど、その在り方までは西の最強は知らぬ。ゆえ  
に、よもや、と思いつつも一抹の可能性が脳裏をかすめていた。

——そのような偉業を成し遂げるモノが、凡百の人間が思い描くよ  
うな幸福を手に入れられるとゆめ思うな。もしそのような幻想ユメを描  
くならば——

アレを殺せるものなど、今のこの国には存在しえぬ。

故にアレは、アレ自身の無念と絶望と、思い描いた幻想ユメによって殺  
されるだろう。

そう。

遠き異郷の宴の夜に、「小確命」という人間は、もうどこにもいな  
かった。

\*

「話に来ただと？ 貴様と話すことなどない」

明と一成の前に立ちながら、セイバーは殺気を隠さない。それでも

キャスターは楽しそうに笑う。周囲からは噴水から流れる水の清かな音しかしない。

「そうつれないことを言うものではないわよ？あー、その坊やはセイバーたちの味方になったのかしら？」

キャスターの隣に並ぶアーチャーは、再び見えたかつての主を見ようとはしない。

一方一成の視線は弓兵に釘づけであるというのに。

「セイバー、私は貴方の事をアーチャー伝いで知っているけれど、貴方は私の事など知らないのでしょうか？これから戦う敵を知る絶好の機会だと思わないかしら、日本武尊？」

「……俺にとつてはそうだろうが、ならばお前は何をしに来た」

キャスターの意図を掴みかねていたセイバーは驚きながらも警戒を怠らない。キャスターの言葉を信用するならば、彼女は完全に娯楽のためにここにいることになる。

だが、本当にそんなことのためだけに敵陣に身を晒すサーヴァントがいるのだろうか。二対一という状態でこちらを攻撃しないというのか。セイバーには俄かには信じられなかった。

「二対一、って考えているかもしれないけれど、私ってすつごく弱い。わかるでしょ？」

確かにキャスターは弱い。最高のマスター適性を持つマスターがいる割に、さしたる脅威を感じない。ただ、何か不吉なものを感じる。こと意外は。キャスターは呑気に話を続けた。

「けど、私のご主人はたくさん令呪持つてるのよ？今はあまり無茶をしない方が、あなたも得だと思っけど？」

一成からの令呪が三画、ハルカより奪った令呪が二画、もともとのキャスターの令呪が三画で、キリエは計八画の令呪を持っていることになる。いきなりどうしてこんなことになったのか、セイバーの後ろで明は眉をしかめた。

「私も別に他のサーヴァントと話すことなんかないと思っていたのだけれど、アーチャーとしばらく共にすることになって、その時に言葉を交わすのが結構楽しかったのよね。私の主人も昼間は外を出歩い



て、その坊やを小間使いにして楽しんでいたし、面白そうだと思っ  
たの」

「そんなことしてたの？」

「小間使じゃねえ！エスコートだ！」

「はあ？」

一成がムキになって怒っているが、明の目はとても冷ややかだ。  
キャスターは尚嬉しそうにその様子を見ている。

「私一人でもよかったのだけれど、知っての通り私はキャスターだし、  
ここは陣地でもないし、クラスとして貴方とは相性が良くないの。だ  
から流石に一对一は怖くて、助手にアーチャーを連れて来たわ。お話  
会の面子としてはランサーでも良かったのだけれど、彼は貴方に会い  
たくないとか色々言ってから」

アーチャーの真名を知っているキャスターは、当然その宝具――  
『つぼきりのみづるぎ尊きを受け継ぎし剣』のことも知っているはずである。その効果――  
相手の神性に応じて肉体を拘束する――は、セイバーとは相性が悪  
い。

クラス性能としてセイバーが天敵であるキャスターは、抑止力とし  
てアーチャーを連れて来たというわけだ。実際、剣を持てばセイバー  
はキャスターに攻撃を続けた可能性もあるが、アーチャーがいるゆえ  
にできない。

セイバーはアーチャーに対しては甚だ不愉快の念を禁じ得ないが、  
ランサーの言葉も不思議である。

「会いたくない？散々あちらからつつかかってきたくせに何をいまさ  
ら」

「あらそうなの？細かいことは私は知らないわ。そのうち聞こうかし  
ら」

少し驚いたように目を開いて、キャスターはすたすたと歩いてアー  
チャーが置きなおした甕を二つ担いだ。そして噴水を背後に、石畳の  
敷かれた地にそのまま腰を下ろし、その甕を前に置いた。

アーチャーも今ばかりは致し方なしといった様子でその隣に胡坐

をかいて座った。

「ねえセイバー、私は嘘が嫌いな。真名は教えてあげないけど、何でも聞いてくれていいのよ」

『マスター、どうする。俺は乗ろうと思うが、どうか』

セイバーからの念話に、明はしばし考え込んだ。本当にキャスターが対話を望んでいるのかは信じがたいが、確かにこちら側にキャスターの情報は無に等しい。

アーチャーが割とキャスターに従っているように見えるのも気になる。

もしキャスターが本気でセイバーを殺しにくるのならば、従えたとかいうランサーまで投入して三騎全力を以てすべきだ。それにセイバーが襲い掛かったというのに、彼らは反撃の姿勢を見せていない。そして明たちにキャスター側の情報がまるでないということは真実である。確かに絶好の機会ではあるのだ。

『……言うまでもないと思うけど、油断はしないでね。話に乗ってみよう』

セイバーはちらりと後ろを振り返ると、剣を持っている明と一成の姿が目に入った。よもや知らぬうちに彼らに手を出されることはないだろうが、剣を持っているなら平気だろう。

「あら、そういえば剣をもたないなんて武装解除までしてくれるの？ 結構乗り気になってくれたのかしら」

手を組んで喜ぶキャスターに対し、セイバーの顔には微塵の笑顔もない。剣を明に持ったままにさせているのは武装解除でも何でもない。むしろ、アーチャーの宝具によって縛られることを危惧したためだ。明は仄かに暖かい、青銅色の鞘に収まった剣をかき抱いた。

静まり返った夜の碓氷邸。その庭にある噴水だけがさらさらと流れる音を鳴らしていて、風さえも今日は無い。

十二月の夜は、まだ人を凍えさせるには至らずとも、長居しては体

に悪いだろう寒気を抱いている。

静かな夜に、三人の異形。水流の音を聞きながら、セイバー・アーチャー・キャスターは三者で向かい合っている。セイバーから十メートルくらい離れた後ろに明と一成が座って、事の成り行きを見守っている。夜の寒さに曝され続けた石畳は、直に尻をつくるところから体を冷やしていく。

三騎の中央には大きな甕が二つ、掌を開いたほどの杯が三つ。キャスターは和紙で蓋をされた甕を縛っている縄を解いた。中は並々と酒で満たされていて、芳醇な香りが漂う。

少し日本酒を飲んだことがあるだけの者でも、上等なものとわかるだろう。

「私お酒には目がないの。自慢の一品を持ってきたから、是非堪能してね」

どこか自慢げな表情で、キャスターは指を動かして甕を浮かせる。そのまま並々と杯に酒を注ぎ、セイバーとアーチャーの前に置いた。「毒が入っていると思われるのも心外だから、アーチャー、あなたセイバーの分を毒見してくれるかしら」

「断る。そなたが飲めばよからう」

いけしやあしやあと扇を振って拒絶するアーチャーだが、その傍らのセイバーは躊躇いなく盃を手に取り、一気に飲み干した。手の甲で口の端から漏れた水分をぬぐうと、杯を投げた。

「悪いモノか良いものかくらい判断はつく。要らない世話だ」

「見なさいアーチャー？ 貴方もこれくらいの度量を持つたらいかか？」

「私は毒があるかどうかを気にしたわけではない。この私を毒見如きに使おうと言うそなたのふてぶてしさに呆れたのよ」

そう言ったアーチャーも盃を傾け、それを一口嚙下する。生前に酒など飲み飽きていてもおかしくはないアーチャーも、その酒の豊潤さとコクに唸った。

「これは良い酒だのう、キャスター」

「だからそう言ったでしょう？現界してからは禁酒しようとしたけど、三日と持たなかったわ」

酒の味に舌鼓を打つ二人に対し、セイバーは冷めたものである。酒の美味を愛でる二人に対し反応が薄い。キャスターは小首を傾げて尋ねた。

「あら？もしかしてお酒は嫌いかしら」

「飲めないわけではないが、生前から酒をうまいと思ったことがない」

「まあまあ、そんな人本当にいるのね」

本心から残念そうにキャスターはしよげかえる。セイバーは茶番には興味がない。

鋭い視線をアーチャーに向けると同時に舌鋒を向ける。

「アーチャー。今や新たなお前の主は、三騎のサーヴァントを従えているそうだな。三騎をあやつりうるマスターを選んだ目は良いと思うが、その後の事は考えているのか」

「そなたとガンナーなるサーヴァントを倒したあとのことであろう？当然、我ら三騎での争いになるうよ」

アーチャーは当然のように答えた。セイバーらもそのようになるかと踏んでいる。だが、願いを叶えられるのは一騎だけだ。他のマスターたちには勝っても、内部の戦いで勝てる自信がなければ一成を裏切った意味がない。

「そこにいるお前の元主人を裏切ったのは、他陣営との戦いに不安を覚えたからだろう。だが、同じ条件下でお前はそこのキャスターやランサーに勝てる自信があるのか」

「ま、一成についてはそういうことよ。最強のマスターを得た今、力量に不安はない故。勝った後の事は三騎になってから考えればよからうよ」

「そういうことね。私のご主人は臆病つてくらいに慎重だから、勝てるって思うまで動かないもの。今だって貴方、セイバーを襲わないのは、ここが陣地じゃなくて私がとても弱いからだし。私駆け引きとか苦手だから、他のマスターがいなくなつて、私たちだけになったほうが純粹にぶつかれると思うからそちらの方がいいわ」

他陣営を抹殺するという条件下で戦う限り、彼らは確かに協力するだろう。だが、本当にそうか。キャスターはともかく、アーチャーがその先を考えていないはずはない。

しかし、弓兵の思惑は読み取れない。

「……おい、アーチャー。お前の願いつて、なんなんだよ」

「ちよっ土御門」

立ち上がろうとする一成を明は引っ張って抑えた。彼の声は低く、怒気すら孕んでいる。

聖杯戦争に残った目的の中にアーチャーの件もある彼からすれば、今の状況で大人しくしていることなど無理だろう。

アーチャーの目は、今宵初めて元の主へ向けられた。その瞳に感情はない。

「何だ、そなたか。てつきり棄権したのかと思うたわ」

「途中で投げるのは性にあわねえつつつたる」

「聖杯にかける夢も露と消えたなら、あたりその命を散らすことはないと思うのだが……左様に儂になりたいか、そなた」

かつて、一成と共に戦ったアーチャーではなかった。いま一成の前にいるのは、自らの願いに取りつかれた男である。平安の貴族の最高到達点である彼をそこまで急ぎ立てるモノは何であるのか、一成は問い質さずにはいられない。

たとえ短い間でも共に戦い、目的を共にしたサーヴァントが、遊興如きで一成を裏切るはずはない。

「答えろ！アーチャー！お前の願いは何だ!!」

「私も聞きたいわ。何回か聞いたのに答えてくれないんだもの、ほんとかケチねえ」

キャスターは雰囲気とは裏腹に、あくまでマイペースに口をとがらせている。

問われた貴族は深いため息をつき、手にした盃をあおった。

「私の願いなど取るに足らぬもの。……私は、聖杯に問うためだけにここにいます。——真なる幸福とは、何であるかと」

「……………は？」

誰もが耳を疑った。「本当の幸せとは何か」——それを問うことがアーチャーの望み。

この世の栄華を手にした男は、表情を変えずにそう告げた。

「……………何言つてんだお前」

「だから取るに足らぬ願いだと言ったであろう」

「そんなつまんねー願いの為に」そなたがどう思おうと勝手だが、私にとってはこの上もなく問わねばならないことじゃ」

怒気にあふれた一成の声は、氷点下程に冷淡なアーチャーの声音でかき消された。

明もあつけにとられ、セイバーは鼻で笑っている。一人キャスターのみが腹を抱えて哄笑している。

「本当、人間って病気よね！」「幸福」は「幸福」でしかないのに、全てを手に入れたら手に入れたでこうしてまた悩むのよ。どうして、手に入れた、嬉しい、で終われないのかしら！」

「アーチャー、ならば俺が聖杯に代わって答えてやろう。真の幸福などない、どこにもな。雲をつかむような真似は止めて、さっさと自害して消えろ」

アーチャーは何も答えない。生前からそうだった。得過ぎた者が得過ぎる故の不幸など、同じ位、同じ境地に至った者にしか理解はできない。

他で少しでも口にすれば、キャスターのように口々に言われることが分かり切っているからだ。正直、アーチャーは「真なる幸福」など存在しなくてもいいと思っている。

ただ、己を納得させられる答えを求めてさまよい、彼は戦いに参じるのである。

「なんとも言うが良い。私は私を救うため、ここにいるのみよ」  
「土御門」

明は一成の袖を引いて無理に座らせた。彼は何かを言いたげにアーチャーを見つめ続けていたが、彼の中でも言葉がまとまらず言葉にできないようだ。その手は爪が食い込むほど強く握られている。

ほくそ笑むキャスターは、杯を煽る。自分で甕を持ち上げて並々と酒を注ぐ。

セイバーはほとんど飲まず、アーチャーはちびちびとやるだけなので飲んでるのはもっぱら彼女である。そのキャスターは頬を朱に染めて、機嫌よく口を開いた。

「人の願いを聞いておくばかりというのも公平ではないわね。だから言うけど——」

キャスターは一度酒をあおり、まるで自慢でもするかのように胸を張った。

「私の願いは、私の同族だけの理想郷を作り出すことよ」

「——同族」

セイバーはぽつりとつぶやく。口に扇を当てたアーチャーはゆるゆると息を吐いた。

「察しの通り、このキャスター、人ではない故にな」

「そう。でも少しは人間よ?……魔物とか怪物と呼ばれるものの混血。人ならざるものは、人の世で生きていくことが難しいわ。だから、私は私の仲間たちだけの世界がほしいの」

キャスターは夢見る乙女のように小首を傾げた。姿だけ見れば、夢にふける美女の趣である。人によって討伐された魔物の類であるキャスターにとって、己たちを害する者のいない世界こそ望むものである。しかしセイバーは、キャスターをも笑った。

「魔物か。通りで魔力が汚らわしいわけだ」

「酷いわあ。汚らわしいのではなくて、質が違うだけなのよ?それに、あなたと比べればだいたい魔力なんて汚らわしいって断じられることになってしまっわ」

「私としては殊勝な願いだと思うがのう。自ら人世に害をなさぬよう、別の世界に行こうと言うのならな」

キャスターがアーチャーを見る視線に、僅かばかりの殺気が混じる。しかしすぐに掻き消え、彼女はとろけるような声で語る。なめらかな白い指が、杯の縁をなぞった。

「私たちが人間に害をなしたことは本当だけれど、人間が私たちを害したこともまた本当でしょう？それに、人間は私たちに感謝するべきでもあるわ。私たちを異形と断じること、人間は人間だと認識できるの。人間は比べる対象がないと、己を人間と判断する事さえもできないんだもの」

自分たちを人間と言う種族であると認識するには、明らかに「別物」である種族が必要になる。

人間は「キャスターたち」を異形と見做し、自分たち「人間」としての紐帯を強めていく。

「それでもあなたたちはたくましいから、私たちのようなわかりやすい異形がいなくても、人間の中に異形を見出すでしょう。丈夫にできていることね。愚かともいうけれど」

どこまでが人間で、どこまでが人ならざる者かは極めてあいまいである。ふとしたことで、「人間」でさえ「人間」だと見なされなくなる。

「そんなのだから、人の世で人ではない私が弾かれるのは当然と言うわけ。なら、すみ分けましょ。私の願いはそれだけ」

「お前がどのような魔物かはわからないが、確かにささやかな願いだ」  
極端に言えば、キャスターの願いは「別の世界に行くから、もう私たちに害ささないでほしい。替わりに私たちも人間を害さない」ということになる。

アーチャーの願いに比べれば、ずっとわかりやすい願いである。

「魔物魔物って言うけれど、生前から私はたいそれたものを望んだ記憶はないわよ？で、今度は貴方の番よ、セイバー」

水を向けられるが、セイバーには聖杯にかける願いはない。

アーチャーも、キャスターも、果ては一成の視線が彼に集まるが、期



待には答えられない。

「聖杯に願いななどない。俺は俺以外の全サーヴァントを殺しつくすことのみが目的だ」

「ふうん、聖杯に願いななんてない、ね。でも、目的はある……ねえセイバー、何故あなたは六騎のサーヴァントを殺すことが目的なの？」

セイバーの予想に反し、キャスターはその成熟した美貌に深い笑みをうかべていた。その漆黒に濡れた瞳からの視線は、酷く座り心地が悪く、怖気の走るように気味が悪い。

まわりつくような視線は、まるで体に蛇が巻き付いていくような悍ましさがある。

「全てのサーヴァントを殺しつくす。確かに聖杯には関係ないわね。それでもあなたは其の為に現界して戦っているのならば、それは願いと言つて差し支えないと思うのだけれど、どうかしら」

セイバーは強く首を振った。「……それは違う。俺が聖杯戦争に勝利することは願いではなく、所与のことだ。勝利しないということはあつてはならない」

日本武尊——「日本で最も強き者」という意味の名を持つセイバーにとつて、勝つことは願いでも望みではない。勝利することが義務であり、当然である。

全ての敵に勝つまで、セイバーは終わることさえもできないのだ。

「ならば、セイバー。そなたの願いは「己が最強であることを証明する」ということでもあるのだろうか？」

アーチャーはキャスターとセイバーを見比べる。杯の酒に浮かぶ月は、満月にはまだ少し足りない。

「そうね、アーチャーの言うとおり。……なら、何故あなたはそれを証明する必要があるの？なぜ、「最強」であることにこだわるの？——

—何故「最強」であらねばならないの？」

深い笑みを湛えるキャスターは、自分で問うておきながらその答えを知っているかのような様子すらみせる。だが、セイバーはその笑みを一蹴する。

「知れたこと。俺が日本武尊であるからだ。其れ以外に理由はない」  
キヤスターはそれこそ興味深いといわんばかりの表情をしており、セイバーの断ずる声にも怯みはしない。しなやかな白い指がのぼされ、月光を受けてほの白く輝く。

「そうでしょうね。何者にも勝利する英雄。あなたにはそれ以外何も無いから、勝利<sup>それ</sup>まで奪われては何も残らないから。——私と同じように、人ならざるが故に人世で生きれなかったあなたには」

「……それは違う、キヤスター。この身は人だ。しかし、神剣の加護を借り受けている為に神性を得ているだけだ」

遙か祖先は神の血を濃く受け継いでいたが、セイバーの生きた時代はすでに神代遠くなりつつあった。父から遠く神の血を繋いでいるが、セイバーの生きた時は人の支配する世の中である。

両親ともに人間であるセイバーの身に宿る神性は低下し、すべての加護は叔母より与えられた道具——衣装や神剣の賜物である。セイバーは当然、そう考えている。

当たり前顔をするセイバーに、アーチャーとキヤスターが疑義をはさんだ。

「セイバー、私から一言言わせてもらおう。そなたに宿る神秘の質は、人のそれではありえぬ。そのことは一度でも、そなたの宝具開帳を見た者ならば感じ取れようぞ。私とて、神を信じる時代に生きた人間ゆえにな」

「……驚いたわあ。セイバー、貴方は自分が純粋な人間だと思っっているの？」

「何を驚く。もし俺が神の身であれば、神剣をなくしても最後にああはならなかったはずだ。そもそも、神ならば死を迎えることはない」

日本武尊の最後——日本武尊は、最強の武器であり護りである神剣を、妻の美夜受媛のもとに置いたまま伊吹山の神を討伐に出る。彼は、そこで鬘を振らされ山の神に呪われてしまう。

そしてその呪いにより、彼は故郷の大和に帰れないまま半ばで没する。

もし神剣を持って神の討伐に向かったならば、そんなことにはなら

なかった。だから、セイバーは神剣がなければ自分はただの人間だと、そう言っているのである。セイバーにとっては所与の事実で、疑うべくもないこと。

だが、それを聞いたキャスターはもう我慢ができなかった。飲みかけの酒を噴出して、腹を抱えて笑い出した。

「ふふ、あつははははは！ちょっと、アーチャー！聞いたかしら!!流石というのかしら、これは！どうしてそうなったの？この戦争、もう本当に病人だらけね！」

「ふむ……」

病人だらけ、という言葉に己も含まれていることを察しながら、アーチャーはどこか苦い顔でキャスターとセイバーの顔を交互に見た。セイバーはわけがわからないと顔に書いていて、キャスターはまるで獲物を前にした蛇のような目つきでセイバーににじり寄った。

「貴方は勿論神ではないわ。けれど、人間とも言いがたいわ。神と人、その真ん中にいるのがあなたよ。どこから神で、どこから人なんて区別はとても曖昧なものだけれど——貴方、生前もそんな感じだったのかしら？ああ、ならむしろ納得ね！あなたが人ではないことくらい、貴方以外の人間は知ってたでしょうね！わからなかったのは貴方だけよ！」

「……何を言っている、キャスター」

酒気を帯び、どろりとした瞳の中にセイバー自身の姿がある。濡れた漆黒の瞳の中に吸い込まれてしまいそうな予感があった。

「セイバー、やっぱり私とあなたは似ているわ。魔物か神様つて差だけで、人間からすれば異物なのよ。人間じゃないものが、人間の中でうまく生きていけると思う？人世の中での人外は、排斥され蔑まれるかそれとも崇め奉られるかのどちらかよ。方向は逆だけど、恐れられているという点では同じなの。私が排斥されたのならば、あなたは崇め奉られた。どちらにしろ、人世に交じり合うことができないの」

そう告げるキャスターの眼には、生前の己を懐かしむような光があった。己が人ではないことを理解し、それでも自分のいる場所を探

して見つけ出した。

しかし、その居場所もはく奪された人外魔物——それがキャスターの正体。

「貴方は故郷を追い出された。私は人里を追われた」

ま、私はそこまで人里に執着はなかったのだけど、とキャスターは付け足した。

「だから私は人世で生きるのを諦めたわ。私は私を疎ましがった人間どもに謀られて殺されたの。人外は、人の世に居場所はない——人の世の外で生きていくしかないわ。だから、私は自分の仲間たちと充足する理想郷どこにもない場所がほしいのよ」

キャスターの目は、いつの間にか親愛の情さえ帯びているように優しげになっていた。酒をたつぷりと煽ったキャスターはやおら立ち上がり、微笑む。

「私はもう人世なんかどうでもいいけど、あなたはそれにこだわった。だから」

何故かセイバーではなく、傍観者である明の方が唾を呑んでいた。

「——あなたたちの願いを叶えるから、仲間外れにしないで下さいって言い続けて、その果てに叶わなかっただけの生涯。後世の人は貴方を護国の英雄ともてはやしたかもしれないけれど、貴方自身にその名誉は必要だったのかしら？」

キャスターはセイバーを流し目で見つめながら、闇に浮かぶ紅い髪を翻して手を伸ばす。

「どうせ手に入る聖杯ならば、願いがないなんてつまらないことを言うのはよしたらどうかしら。貴方が本当にしたいことをすればよいのではなくて？」

月を背に伸ばされた手は、乾いた音を立てて弾かれる。

セイバーの手は、差し延ばされたキャスターの手を払った。セイバーの目はひたすらに鋭利だった。

「つまらないことを言うな、キャスター。確かに俺は大和を追い出された。つまはじきにされたのだろう。だがそれでも俺の目的は過去未来に置いて、この国で最も強きは俺であると証明する事だ。それを

証明することは、疾うに俺だけの願いではなくなっているのだから」  
護国の英雄となった英霊は、揺らぎなくキャスターを睨みつけた。  
しかし、キャスターは射殺さんばかりの視線を柳に風と受け流す。

「……これは酷いわ。ガチガチね。別にあなたのことを放っておいてもいいのだけれど、あなたと私はそういう意味じゃなくても無関係ではないし、そわそわするのよねえ。あなた、そのままじゃアーチャーでないけれど、きっと幸せになれないわ」

「そのの貴族と一緒にするな。そも、英霊とはすでに生を終えたモノ。死骸が今更幸せになろうなど片腹痛い」

「もう人の話聞いているのかしら、セイバー。わからずやね」

「どちらが正しいかは、戦って白黒をつける。それがこの戦争だろう」  
誰も声を発さない。一時の交わりがあろうと、最後には戦って雌雄を決する。勝てた者だけが己の正しさを証明する。聖杯戦争に呼ばれたサーヴァントは、根本としてそのことを理解している。

キャスターの目は、今ここに至り始めて凶悪な光を宿した。その凶悪さこそ、この英霊の真の姿。

「……あなたを分からせるには、そちらの方が早そうね」

キャスターはやおら胸元に手をつ突つ込むと、ふくよかな谷間から一通の手紙を取り出した。蠟で封をされたそれは、形式ばった招待状のように見えた。

キャスターの指を離れたそれは、風もないのにふわりと飛んで明の手元に落ちた。

「それはご主人からの招待状よ。私は大西山にいるわ。いつでも歓迎してあげる」

キャスターがそう宣言したということは、もう陣地が整っていることを意味する。

何故気づかなかったかと、明は我知らず手紙を握りしめて息を詰めた。アインツベルンのマスターが高度な結界を張っているのか、キャスターの宝具の効果の為か。

「ふふ、そういう隠すのはご主人が手伝ってくれたし、山は今も昔もい

つでも私の居場所なの」

キャスターは目をしばたかせ、大きな酒甕を持ち上げた。底に残った酒を大胆にもそのまま飲み干して、甕のくびれた部分に縄をつけて背負う。同じくアーチャーも裾を払って立ち上がる。

「キャスター、そろそろ引き上げ時であろう。姫に小言をもらうのはたまらぬからな」

「そうねえ、お酒を飲む時は時間がたつのが早くていやね」

二騎のサーヴァントは薄雲にまかれ、ふわりと宙に舞いあがる。煙のようなものはキャスターの宝具か何かであろう。アーチャーが飛行する姿は見たことがない。

高くからマスター二人とセイバーを睥睨し、アーチャーは薄笑いさえもなく、元マスターに告げる。

「一成」

「……なんだよ」

「悪いことは言わぬ。そなたはこの戦いから手を引け。さもなければ、穢れを厭う私とて殺生もやぶさかではなくなるぞ」

一成は息を飲む。そして彼は本当に、かつて最大に信頼すべきだったパートナーが敵であることを理解する。だが、未熟な陰陽師が怯むことはなかった。

「……嫌だ。俺がお前をこの戦いに引きずり出したなら、俺がお前を還すのが道理だ」

「……ほとほと呆れ果てる男よな」

そしてキャスターとアーチャーは、セイバーたちを一顧だにせずに姿を消した。あの圧倒するような魔力は消え去ったが、濃く残る酒気だけが確かに対話の残滓を残していた。

明は酔いそうなほど濃い魔力を思い出して首をひねる。

（……キャスター本体は強くないけど、あの魔力、何なんだろう）

とろける様に甘美でありながら、向かい合う者を圧倒するほどの魔力が渦巻いている。キャスターは陣地を作成するスキルがあるため、時間を掛ければかけるほど強くなるサーヴァントである。セイバー

より先に召喚されたキャスターは、少なくとも二週間以上前には現界  
していただろう。

「……………つていうかセイバーとキャスターって同時代なの？」

セイバーから返事はない。しばらくの間をおいてから、ようやく反  
応が返ってきた。

端正なその顔はいつものように真顔であったが、今は表情すらない  
ように見えた。

「……………ああ、何だ」

「いや、キャスターが無関係じゃないとか言ってたから、知り合いな  
のって」

セイバーは首を振った。「悪神の類はいろいろ見てきたが、あれに  
は覚えがない。本当の姿が別にあるのかもしれないが」

明はキャスターの真名を掴む大きな手がかりかと思ったが、あまり  
期待できなさそうだった。すでに先ほどまでの熱が嘘のように、確氷  
邸は静まり返っている。

セイバーも一成もどこか心ここに非ずの感じであった。とにかく  
寒空の下に居続けるのは体によくないだろうと、明は二人に呼びかけ  
た。

「とりあえず、中に戻ろうよ二人とも」

一成とセイバーは我に返り、弾かれたように明を見た。キャスター  
とアーチャーに散々浴びせかけられた形の二人は、それぞれに思うこ  
とがあるようだ。

「……………お、おう。つかちよつと話したいことがあるんだけど」

「俺もマスターに伝えなければならぬことがある。この屋敷は――  
――ッ」

セイバーの言葉が途切れる。最も早く異変に気付いたのは彼で、す  
ぐさま明から神剣を奪い両手に持って身を翻した。明と一成もワン  
テンポ遅れて振り返る。

そこには門を飛び越えてこちらに迫りくる黒い影がある。目にも

留まらぬ速さで霧を纏った剣が影を斬り裂くべく振るわれる。黒い影が両断されたかと思つたその時、その場所に影はなかった。

影は間一髪で——紙一重で見切つて——斬撃を回避し間合いを取つていた。二十メートルほどの距離を置いて、セイバーと影は対峙している。

「今度は誰だ!」

どこか苛立つたセイバーの声に、黒い影は答えない。ランサー、キヤスター、アーチャーの姿を明と一成は知っているが、この影には見覚えがなかった。

そして確氷邸の結界さえも無視してここまで接近できるのは、気配遮断にも似たスキルを持つとされる、ガンナーなるサーヴァントではないのか。

明と一成も身構えるが、黒い影は襲ってくる素振りが無い。かかつてこないのならばこちらから、というセイバーが前に踏み出そうとした刹那に、明は鋭く声を張つた。

「……ちよつと待つてセイバー!」

剣を振り上げたセイバーを寸でのところで止めて、明は前に進み出る。それと同時に黒い影は——どこからともなく一人の人間を出現させた。現れた人間はぐったりとしていても戦えるようには見えないどころか、今にも息絶えてしまいそうなほどである。

そして黒い影は自らを覆っている黒い羽織——雨合羽を勢いよく脱ぎ捨てその正体を露わにした。その姿は威風堂々、百日鬘——月代が長く伸び、荒くまげを結っている。金と赤の刺繍が入った黒地の襷袍を羽織り、真っ赤な着流しに黒い帯を締め、その上には荒縄でさらに締められている。着流しのくせに下には袴を身に着け臍当を装備しており、やたらと見た目が派手であるが何よりも目立つのは、その顔に施された赤の隈取。

影とは似ても似つかないサーヴァントは、出現させた人間を抱きかかえたまま跪き、まるで希うように頭を下げた。



「俺はアサシンの位を得て現界したサーヴァント……石川五右衛門  
つーモンだ」

そのアサシンのサーヴァントは、太く芯のある声でためらいも無く  
真名を明らかにした。

アサシン、というクラスにも驚かされた。しかしそれよりも言葉を  
失ったのは、あのランサーでさえ真名を言わなかったのに、このアサ  
シンはあっさり重要な情報たる真名を開帳したということだ。

明と一成、セイバーの驚きをよそに、アサシンは絞り出すように  
言った。

「セイバーのマスターだと思うが、頼みがある。……こいつを助けて  
くれ」

12月3日⑥ 何も終わってはいない

聖杯戦争を戦う意思を固めたアサシンと悟は、カスミハイツの部屋で身支度を整えていた。アサシンというサーヴァントで戦うに当たり、遅まきながらも偵察から始めようということになった。アサシンの宝具と性能を考えると、まず第一に偵察・第二に偵察・第三に偵察である。正面突破は愚の骨頂だ。

アサシンは黒い雨合羽姿で屈伸運動をすると、窓の外を指差した。「よし、じゃあいつちよいくとするか」

偵察するといっても彼らに殆ど当てはない。唯一の手がかりはセイバー陣営のいる碓氷邸を知っているくらいである。だからまずは碓氷邸に張り付いてみようかと考えたのだ。

アサシンはコンビニに往くくらいの気安さで窓の外を指差したが、悟の顔色は優れない。

「あ、アサシン。少し、飲んでからにしないか」

戦うと決めたが、一昨日のバーサーカー戦はまだ彼の目に生々しく焼き付いたままだ。あのような戦いに、自分が身を投じる。

すでに決めたことではあるが引ける腰は隠しようがない。

「……つたくしよーもねーやつ。ま、景気づけの一杯つてヤツつてこ  
とで許してやるよ」

「

アサシンは頭を搔いて呆れたが、飲んでからつてとわめく悟の首根っこをつかんで宝具の中に入れる。

(……この魔力はどっから漏れ出してるんかねえ)

アサシンは襜褕の中に悟を入れて、夜の街を駆けた。バーサーカーが現界している時の禍々しい魔力は消えているが、今は別種の魔力がこの街を満たしているように思う。

大体、アサシンはバーサーカー以外のサーヴァントがどうなっているのか全く知らない。しかしバーサーカーが消えた今、他陣営も着々と戦争に勝つための布陣を敷いているに違いなく、絶対的にアサシンは出遅れているのだ。

(ま、なんとかするしかねえか)

昼は雨合羽の不審者丸出しスタイルで街をふらついているが、夜も運がいいのか悪いのかランサー以外のサーヴァントには出会っていない。アサシンがそんなことを考えているうちに、彼は春日駅前でも高いビル——春日イノセントホテルの屋上に着地して、悟を襦袢から出した。

「少し飲んでからって言っただろ！」

「あのクソ狭い部屋で一杯やるよりはこっちのほうがいいだろ」

屋上で、アサシンは手を広げて眼下の景色を指し示す。ホテルの屋上から、春日市が一望できる。眼下には宝石をばら撒いたような光が散らばり、空には常の様に月が白く光っている。

ホテルの屋上くらいの高さになれば、地上の明かりが多少減るため、天体の美しさが良く見て取れる。幸いにも今日は無風のため、多少高所でも風による寒さは少ない。悟は思わず息を飲んだ。

ここはつい先日ランサーと戦ったビルのはす向かいだが、その時は景色を楽しむ余裕はなかった。

「お前、酒飲む場所にはこだわるよな」

「当り前だろ。酒なんてもんな四季を、景色を着にさえすればウマイもんだ。言つとくがベロベロになるんじゃないぞ」

襦袢から朱色の杯を二つ取り出し、とくとくと酒を注ぐ。景気づけと言った通り、瓶をさっさと襦袢の中に収納した。一つずつ盃を手にとると、それを合わせる。

これから己は生死をかけた戦いに望む。勝てば全てを取り戻すことができる。己の必勝を祈願するように、悟は一気に酒を飲み干した。

アサシンも同じようにするかと思いきや、彼はいきなり空を見上げた。

「どうした？アサシン」

いきなり空を見上げたアサシンに悟は首を傾げた。

と、アサシンは持っていた杯を放り出す。透明な液体が散ってきてきら

きらと輝く。そして目にもとまらぬ速さの挙動で、懐からクナイを二本取り出した。

甲高い音が轟いたかと思うと、いつのまにか足元には矢が転がっていた。

「は？アサシン!？」

訳が分からない悟はまごつくばかりだ。アサシンとてそれもそうだと思ったが、とても説明をする余裕はない。

アサシンから百メートル先には、平安貴族のような恰好をした男が弓を番えてアサシンと悟を狙っていた。今足元に突き刺さる弓は、その男から向けられてアサシンがクナイで弾いたもの。弓使い、アーチャーのサーヴァントだとすぐにわかった。

すぐに悟を襦袢に入れて気配遮断で逃げたいところだが、気配遮断も霊体化も攻防の最中にやれるほど早くはできない。

アーチャーは間断なく弓を放つ。状況が理解できず、驚き飛びのいて尻餅をついている悟を弓から護らなければならぬ。

「悟ウー！立てー！いいから立てー！」

「あ、ああ！悪い！」

(こいつ、俺じゃなくて悟を狙っていやがる)

ランサーは悟を気にかけておらずアサシンしか見ていなかったが、このアーチャーは彼のように戦うことが目的ではないのだ。

相手を手っ取り早く消す——そういう思惑が見て取れた。

アーチャー相手に遠距離の戦いは分が悪い。アサシンは襦袢から五丁の火縄銃を抜くと、それは一斉に火を噴いた。間断なく放たれる矢と奇蹟のような精度で相打ちになり火花を散らす。忍びの如き素早さでアサシンはアーチャーに迫る。

弓兵は距離を取りながら戦うが、アサシンの方が速い。空を裂く矢は当然、近づけば近づくほどアサシンの急所に当たる危険が増すが、マスターを狙い撃ちさせ続けるよりはマシである。

ともかく、アサシンはここで本気で戦う気はない。ランサーと行き会わせたときのように宝祿火矢(爆弾)を利用して煙に巻きながら逃げられることを考える。

平安貴族のような風体のアーチャー。彼はバーサーカー戦の時に己がマスターを裏切ったサーヴァント。別にマスターを裏切ることもくらはよくあることだ。

だが、既にその真名を知るアサシンが、いや、仮に知らずとも本能が相容れない相手だと告げている。かつて殺し損なつた猿関白と似た匂いがする――！

「いけすかねえ野郎だ！」

「ほう、そなたもそう思うか」

アサシンと向き合いつつ並走しながら、彼は口角を吊り上げた。おそらく本気で戦っているのではない、とアサシンは直感する。だが、次の瞬間に悍ましい魔力がずつと背後に降り立つのを察知した。アサシン、アーチャーと同じく人ならざる英霊の気配。

無尽に飛び交う矢を弾き、ちらと一瞬だけ後ろを見る。

その視界の映るのは悟だけではなく、澱んだ真紅の艶やかな髪――

「流石に四騎目はいらぬわねえ。それに、ランサーのマスターみたいに同意してくれるかわからないし――」

濡れた瞳とアサシンの目が合う。唇の動きがそう告げる。言葉の意味は分からない。

蠱惑的なまでの色香に引き付けられ、アサシンの動きが鈍る。

「殺しちやおうかしら」

もし彼に対魔力のスキルがあれば、魅了されることもなかったのだろうが、無い物強請りである。しなやかな女の手が、後ろから悟の首に伸びて触れる。

この「魅了」が今アサシンに向かって意識的に放射されている。しかし無意識に放散される魅了であっても、素人である悟に逃れるすべは。

煙る霧の中にあるような女が何事かを呟くが早いかな否か、悟が叫んだ。

「アサシン、逃げろ――！！」

悟の右腕に刻まれた令呪の一面が、赤く鋭い光を放つ。膨大な魔力の放出と共に、靄のかかりかけたアサシンの意識が戻る。背中にアーチャーの矢を受けたまま、爆発的な推進力を得て馳せ、アサシンは悟を女から奪い取る。

そして魔法にも等しい魔術——空間転移によって、彼らは影形無く忽然と姿を消した。

\*

女——キャスターのサーヴァントはご馳走を目の前で下げられた子供の様に頬を膨らませた。キャスターに近づくのは、弓を持ったアーチャーだった。

「ごめんなさいねえ、令呪使われちゃったわ」

「それは見ていた。まあ、仕方なからう。あのサーヴァント、案外幸運値が高いようであり弓が効かなかったのう」

ふふと艶めいて笑うキャスターと、それを白い目で見るアーチャーのもとに、ランサーとキリエが追い付いた。

ランサーは若干戸惑いを交えた顔で、キリエを左腕で抱えていた。キリエはキャスターとアーチャーを使役し、ランサーを奪い本拠地の大西山に戻る途中だった。索敵に優れるアーチャーが、他サーヴァントの気配を察知したのだ。

アーチャーは初めて感じる気配と言っていたので、消去法で噂のガンナーがいることになる。

事のついで——そうキリエはいい、アーチャーとキャスターを差し向けた。キャスター陣営の三サーヴァントはランサー以外ガンナーに出遭ったことがなかった。

ランサー曰く「逃げ足が速いが、強くはない」らしいため、キリエはキャスターとアーチャーを向かわせた。

キリエはランサーの腕から飛び降りて、キャスターに問うた。

「キャスター、首尾は？」

「令呪で逃げられちゃったわ。あと三秒あれば縊り殺すことくらいできただろうけど、ほんと惜しかったわね……でも呪いは完了。何もしなければ、明日の朝まで持つか持たないかってところね。ガンナーのご主人はずぶの素人みたい。ガンナーも私の魅了にひっかかっていたわ」

本当の姿に戻れば、呪いなどというまどろっこしいことをせずとも軽く捻り殺せるキャスターだが、今の彼女には望むべくもない。

本当の姿に戻ったら戻ったでデメリットもある。

「しかし姫。ガンナーのマスターはガンナーを「アサシン」と呼んでいたが」

アーチャーが不可解そうにひげをなでて報告する。

「アサシンはもう消えたはず……いや、でも」

キリエは眉をしかめ、自身の胸を触りながら深刻な事を考えるように俯いてしまった。

だがすぐに頭を上げると、冷静に口を開いた。

「アサシンでもガンナーでも構わないわ。素人がキャスターの呪いにかかれば直に死ぬでしょう」

そしてキリエは屋上でくると振り返り、己が従者三騎のうち、アーチャーとランサーに向かつて命ずる。彼女の右手の甲に浮かぶ聖痕の二画が強い光を発して輝いた。

「ランサー、アーチャー、令呪を以って命ず。主、キリエスフィール・フォン・アインツベルンに逆らうことを禁ず！」

「ぬ、キリエ!？」

アーチャーは驚きはしなかったが、ランサーはその命令に意表を突かれた。令呪という膨大な魔力を持つてくださった命令は本人の意思を超えて行動を縛る。

現界する限り、マスターの命令に絶対服従という漠然とした命令は、並みのマスターであればほぼ効力を持たなかっただろう。しかし並外れた魔術回路と刻印をもつキリエに限っては、ある程度の効力をもたらず。

キリエは紅い瞳をきらりと瞬かせ、三騎に向かって笑う。

「ごめんなさいね。ランサー、アーチャー。これからが私たちの戦いだから、裏切られたら困るのよ。今、この聖杯戦争で最も面倒な敵は碓氷明とそのセイバーよ。彼らを完膚なきまでに殺すのが、私たち最大の山場。それさえ終われば、あとはあなたたちの戦いよ」

そのことはキャスター、アーチャー、ランサーともに承知している。しかしアーチャーは疑義をはさむ。

「姫、この三騎でこのままセイバーを襲うことも可能だと思うが」「かもしれないわ。だけど、念には念を入れるわ。キャスターは敵地でこの姿じゃ力の三分の一も發揮できないし、碓氷の拠点の時をかけた要塞よ。敵も勝つ気なのだし、来てくれるならこちらの陣地で戦うべき」

キリエの返答に、ランサーがほっとしていたのは彼しか知らない。共に当たるのならばキャスターの力を当てにするべきなのはアーチャーにもわかるので、強く反対はしなかった。落下防止のフェンスを掴んで、キリエは人の営みの明かりを見下ろす。

高所の風が吹き、濡芭玉の黒髪を攫って行く。

「聖杯戦争は何が起こるかわからないものよ。本当に」

キリエは唇をかみ締める。己の過去を悔いるように、強くワンピースの裾を握り締めた。「本当に」

「あ、そうそう、御主人、一つお願いがあるの」

真面目なキリエとは打って変わって、キャスターの声は只管に能天気だった。

「何かしら」

「一度山に戻ったら、セイバーの所にお話ししにいきたいの。ランサーかアーチャーでも連れて」

「はあ？何を言うキャスター」

ランサーは自分が引き合いに出されたことに驚いていたが、キャスターはうきうきした気配さえ交えてキリエに持ちかけた。今戦いは陣地である大西山で行うとマスターが宣言したばかりなのに、聞いて



いなかっただかのような口ぶりでさえある。

アーチャーは苦い顔をしてそのやり取りを見ている。

「セイバーを一度この目で見ておきたいのだけど、あとは興味？他のサーヴァントとお話するのは、楽しいの」

それにセイバー陣営もキャスター陣営の情報を持っていないはずである。そこを突けばあちらも嫌だとは言わない。もちろんこちらも情報を聞き出すとキャスターは言ったが、嘘ではなくてもそちらはオマケである。

キャスターは流し目でアーチャーを見ながら、心底楽しそうに笑った。「いい?」

キリエはため息をついたが否とは言わなかった。そしてすぐにその顔に笑みを刻んだ。

「いいわ」

「姫、よいのか?」

「勿論キャスター一人でなんて絶対ダメよ。条件は2つ。アーチャーかランサー、どちらかを連れて行くこと。そうすればこちらが仕掛けない限り、セイバーも戦おうとはしないでしょう。二つ目は常に感覚を共有しておくこと。私も成り行きを観察しておくわ。それにあなた、何を言うかわからないところがあるから」

「ほんと?」主人は手厳しいわあ」

嘘を嫌い嘘をつかないが故に、キリエはキャスターを心より信頼している。

だからランサーやアーチャーのように令呪で縛ることをしていない。呼び出した当初は険悪極まりない関係だったのだが、一か月半を経てここまで穏やかな関係になれるとはキリエ自身も驚いている。

何より、お互いに心より聖杯を獲得する理由があると言う点において強い結びつきがあるせいだろう。アーチャーが至極面倒くさそうにキャスターのお供をランサーに譲りたがっているが、先んじてランサーは言った。

「キャスター、僕はそのお話とやら遠慮する」

「あら？どうして？あなたそういうことが好きそうだと思ったのだけ  
れど」

「今はセイバーに合わせる顔がない」

「なら寧ろついてきてほしいくらいなのだけれど、いいわ。アー  
チャーと行くわ」

意地悪そうにキャスターは微笑むが、あっさりとランサーのことを  
諦めた。アーチャーは渋面であるが否とは言わない。キャスターを  
一人でセイバーの敵地に行かせるのはさすがにまずい。

「私は情報収集くらいのことしかせぬぞ」

「構わないわ。私とセイバーだと殺伐としてしまいそうだし……い  
や、あなたも殺伐とするわね」

うきうきした気分のキャスターとは裏腹にアーチャーは気も重そ  
うにため息をついた。アーチャーを引き連れて飛び立とうとする  
キャスターに向かい、キリエは追いかけるように呼びかけた。

「キャスター！あなたの娯楽より、これが一番肝腎な事よ」

聖杯の少女は、ここに至り、やっと自信たっぷりに笑った。

そして高級な紙で作られた手紙をふいにキャスターへと飛ばした。  
それは招待状——彼女たちの陣地、要塞での宴へ招くもの。

「準備は整っているもの。是非、彼らを私たちの屋敷へ招待なさい」

\*

令呪のバツクアップにより、アサシンと悟は魔法にも等しい空間転  
移で一瞬でカスミハイツの部屋に戻ってくることできた。アサシン  
もキャスターのスキル「魅了」にひっかかってしまった為に、体に矢  
傷を負っている。だが致命傷というほどのものは食らっていない。

カスミハイツの部屋にたどり着くと、アサシンは慌てて宝具からマ

スターを出した。

「おい、大丈夫か!？」

「あ、アサシン……はは、死ぬかと思った……」

よろよろと出てきた悟はせんべい布団の上に座り、顔を引きつらせていた。一見したところ異常はなさそうだ。傷つけられた様子がないことにアサシンは安堵したが、悟の様子はどこかおかしい。顔色が悪いことはまだしも、目の焦点があっていない。

「れ、令呪つてやつ?ちゃんと使えたんだな、俺、生きてら」

「おう、生きてる。だから落ち着け。とにかく横になれ」

「はは、そっか、華が一番だったか……」

熱に浮かされたように、話の内容すらかみ合わない。これは拙い――アサシンが無理やり横にさせようとした時、悟は俄かに体のバランスを崩して、気を失って布団に倒れた。

「おい、悟……しっかりしろ!」

アサシンは悟の体を揺さぶるが、まるで反応がない。顔色は土気色で、額から伝わる熱は驚くほどに熱い。ぐったりとしていて体に力が入っていない。

悟自身も魔術師ではなく、アサシンも魔術師であったことはないの。魔術の事はわからない。キャスターに触れられて、何らかの魔術、呪いを掛けられたのだと推測はつくが、どうすればいいかアサシンにはわからない。

アサシンは宝具の中から生前の盗品を漁り、薬や体に良いものを悟に飲ませようと試みたが、意識のない者にそれは難しく、それ以前にどう作用するのかもわからないために危険だった。

悟がいつまで持つのか、どういう状態なのか、それすらもアサシンにはわからない。確実にこの呪いを解除できる方法はキャスターを倒し魔術を解かせることだが、現実的ではない。第一彼らがどこにいるのかもわからない。

第二に、気配遮断で接近できたとしても二対一の戦いを強いられることになる。それこそ自殺行為である。

——だが、頼る当てが本当に全くないわけでもなかった。アサシンは、セイバーのマスターの拠点を知っている。

彼女たちならば、この状態を何とかできるかもしれない。

しかし、彼女たちがアサシンに手を貸す義理と理由は何もない。かつて情け容赦なくアサシンの元マスターを殺しおおせた彼女たちが、敵に塩を送るような行為をするとは考えがたい。

——けど、俺を好きにしていいつたらどうだ。

悟は聖杯戦争を戦うと言った。ならばアサシンは戦うと言ったが、今でも悟が戦うべきではないと思っっていることに変わりはない。

悟の願いは、聖杯に託すような願いではないからだ。

アサシンの願いは受肉であつたが、それはそこまで叶えたいという願いではない。

——生は、辛くても悲しくても、終わりあればこそ華のあるもの。もちろん自分の人生を惜しむ気持ちはありあまるほどだが、その惜しむ気持ちがあつてこそ生は尊い。それが彼の持論であつた。

アサシンは、聖杯戦争を戦う中で悟を止めさせられればいいと思つていた。だが、その時を待つ余裕はもうない。

仮にセイバーのマスターにこの身と令呪を預けたとして、彼らが本当にキャスターを打倒してくれるかもわからない。彼らが返り討ちに合う可能性も多分にある。

倒せたとしても倒すまでに悟の命が尽きる可能性もある。

だが、今のアサシンと悟が継るべき対象は、一度覗き見して一方的に知っているだけのセイバー陣営しかいない。

己が願いは強くない。されど、悟に高らかに宣言したように、彼の英霊は人々の幻想ユメが作り上げた。彼の生前を塗り潰すほどに。それでもアサシンは悲観しない。

なぜなら、彼も「そんな英雄がいればいいのに」と思い描いた、人々の一人であつただから。

暗殺者の英霊は、浅い呼吸を繰り返すマスターを宝具の中にしまった。丁寧に電気を消すと、霊体化して慣れたカスミハイツを後にする。

可能性は低いがあるのならばそれに賭ける。暗殺者の英霊に迷いなど最初から無い。敵に継ぐことは、彼にとっては恥でも屈辱でもない。とれる方策がある——可能性があるにも関わらず、何もしないで座してマスターの死を待つことになってしまった時こそ、本当にアサインが死ぬ時である。

それに、なにより。

この暗殺者らしからぬ暗殺者は「お前みてーな、腐った体でつまらない心を守るためにこそある」と、このごくごく平凡な男に誓ったのだ。

12月3日⑦ 一人では戦えぬ

キャスターとアーチャーで招かれざる客は終わりかと思いきや、其の読みは甘かった。まだ酒の匂が残る碓氷の庭、深更の夜に、さらに重い沈黙が下りた。敵マスターに助けを求めに来るサーヴァント——しかも面識もない状態で——に意表をつかれ、明、一成ともに黙ったのだが、セイバーは警戒を露わにしたまま尋ねた。

「……どういうことだ。いや、それより貴様」

てつきり「断る。殺す」と言い放つかと思っていた明は再び意表を突かれたが、彼女とてすぐさま倒そうとは思っていなかった。次なる敵はキャスター陣営、敵は三騎を従え、マスターのキリエは最高のマスター適性を持つ。

こちらはセイバー一人にマスター二人だ。明とて優秀な魔術師ではあるが、マスター適性という点ではキリエに劣る。だからここで俄かに現れたアサシン陣営に、キャスター組討伐に協力をしてもらうことは可能ではないかととつさに考えたのだ。

だが、マスターが倒れたと言う状態では、意識を回復させるまではマスターの真意の確認はままならない。助けたところで恩を何とも思わない人間の可能性も大いにあるのだ。

そもそもこの「助けて」さえも何らかの謀りである可能性もある。

「……お前、アサシン？アサシンって消えたんじゃないか？ガンナーだろ？」

それは明やセイバーも気になっていたところである。アサシンは逆にぼかんとしていたが、はたと手を打った。

「は？……あーそれか？ガンナーは俺がクラス名も隠すかって適当に名乗ってたクラス名だぜ？知らねー間に結構浸透してんのか。マジか」

「……どっちにしろ消えたはずのアサシンがいるってことは、霊器盤がイカれてるのには間違いなさそうだけど……助けるってどういうこと」

セイバーは油断なくアサシンとそのマスターを警戒して神剣を向けている。アサシンはセイバーにひるむことなく、はつきりと頼みを口にする。

「俺のマスターがキャスターに魔術をかけられた。助けてくれ」

石畳に寝かさされたアサシンのマスターは、一見して尋常の状態ではない。顔色は白く、油汗をかいて呻いている。アサシンはマスターの手をとり、甲にある令呪を見せつける。

「助けてくれるなら、こいつの令呪をやる。それで俺を自害させよう  
と自由だが、キャスターたちのこと、知ってるだろ。アレは複数サー  
ヴアントを使役してやがる。数には数だと思わねーか」

明は闖入者たちをじっと見つめた。確かにアサシンの言葉を信じ  
るなら、渡りに船ではある。

いくらセイバーといえど、三対一の戦いは分が悪い——というより  
は、敵との相性がよくない。そのことを分かっているからこそ、協力  
の類に反対する傾向のある彼も何も言わないのではないだろうか。

それに、アサシンのクラスでセイバーの前にバカ正直に現れること  
自体が合理的ではない。おまけに真名まで露わにしている。マス  
ターも具合が悪いのは本当のようで、本当に助けを求めてここに来た  
と思えないことはない。

「……令呪をやるって……」

アーチャーの件を思い出した一成は、冷たくなった鋼鉄の左腕を見  
て顔を歪めた。しかし明はあれは極端な例だとフォローをいれる。

「土御門のは無理やりだったからね。お互いの同意があれば普通に令  
呪の譲渡はできるよ……でも、いまその人意識ない？みただし、譲  
渡は回復してからじゃないとうまくできないかも」

一成の心臓が強く脈打った。彼は一步アサシンに近づく。

「そうか、出来るのか……」

アーチャーという武器を失って、一成は明たちの力を借りて聖杯戦  
争を続行することになった。アーチャーに再び邂逅するために、戦争

に犠牲を出さない為に、最後までやりぬくために。

しかし魔術師として技量の足りない一成は、誰よりも新たな武器を欲していた。

土御門、と呼びかける明の声も耳に入らず、彼は目の前の武器に手を伸ばす。

月の光と星の光の輝く空。奇しくも雲によって陰ることなく、彼らは照らし出される。左腕を失ったマスターは、残った右腕を差し出す。

「おい、アサシン。お前、俺のサーヴァントになれ」

「こいつを助けてくれるっつーなら、俺に異存はねえよ」

アサシンは真摯な眼差しで一成を見つめている。一成は頷くと、明に向けて強く頷く。

「……確氷、頼ぐは」

言葉を紡ぎきる前に明のグープンチが一成の顔に命中した。「何すんだ!」

「本当にあなたの面の皮の厚さというか凶々しさと言うか神経の太さとかはに驚きを禁じ得ないんだけど。……まあいいけどさ」

「いいなら殴ることはねーだろ!!」

うるさく騒ぐ一成を無視して、明はアサシンに向かった。「やってみるけど、どんなの魔術にかかってるかわからないし助かるかどうかは保証しないよ。それでもいい?」

アサシンは深く頭を下げて、明と一成に感謝を示した。一成はそんなアサシンの姿を見て、二人の信頼関係を羨ましく思ったが、それを深く内側に収めた。

「構わねエ。もし助からなくても、俺をあの坊ちゃんのサーヴァントにしてくれていいぜ。……だが、全力を尽くしてくれよ、姉ちゃん」

明が頷いた横でため息をついたのはセイバーである。アサシンの言葉を信じたかはともかく、彼が一成のサーヴァントとなることには口を挟む気はないようだ。

「だが、令呪の譲渡はそいつの回復後だろう」



神剣の切っ先をアサシンの鼻につきつけ、セイバーは冷え冷えとした声で告げる。

「回復してからそいつが『令呪を渡さない』と言い出した時は、俺がその腕切り落としてでも令呪をいただくことを覚えておけ、暗殺者」  
「わかってら」

セイバーは漸く神剣を消した。急転直下の展開で、明は理解がなかなか追いつかない。真にアサシンは共にキャスター打倒の仲間たりうるのか。令呪の委譲が済むまではセイバーに目を光らせてもらうが、アサシンのマスターの様子を見ようにもここでいいのかという疑問がある。

「……まずアインツベルンはここを襲わないと思うけど……」

「俺もそれについて考えていた。しかし、アーチャーとランサーで再びここを襲撃する可能性もある」

碓氷邸は堅牢な工房だが、セイバー陣営の拠点として割れており今や三騎のサーヴァントを従えるキャスター陣営が一斉に襲いかかってきてもおかしくない。キャスターの口ぶりからすれば陣地以外で戦う気はないようだったが、セイバーはそれを完全には信じていない。明も一度も見えたことのないキリエスフィール・フォン・アインツベルンを押し量りきれず、唯一面識のある一成に水を向けた。

「土御門、アインツベルンはここに襲撃をかけてくると思う？」

「うーん……。あんまりだまし討ちとかするヤツには見えねーけど……」

昼間会う分にはそう思うが、それでも彼女は一成の知らぬ間にアーチャーに渡りをつけ新たなマスターとなった。バーサーカーにも強い関心を示さず放置していた。

つまりは一成もキリエスフィールという人物をつかみあぐねており、かつこれまでの経緯故に「新たに襲い掛かってくることはない」と断言することもできなかった。

今日、キャスター陣営が三騎を使役してこちらに襲い掛からなかったのは、マスターであるキリエの慎重さ故か。またはランサーを襲撃しランサーを我がものとしたが、ランサーが負傷していて全力を出せ

ないからなのか。

ともかく、サーヴァント三騎に対してはこの屋敷も既に安全とはいきれなくなっている。だが移動するにしても、問題はどこに行くかである。

「……俺んちはワンルームだから無理だぞ」

明は真顔の一成に生ぬるい笑みを返した。

「うん気持ちだけでもらつとく。やっぱ念のためにホテルを連泊で借りる方がいいかな」

「駅前にある宿泊施設のことか。……ふむ、魔術師は一般に神秘が漏れるのを忌むというから、仮に見つかってもここより襲撃されにくいだろう」

暗に一般人を盾にするといった意味合いのことをセイバーは言うが、アインツベルンは確かにそれはしないだろう。そしてこの屋敷を離れるのもキャスターとの決着をつけるまでで、その数日で確氷の結界を破壊しつくせる魔術師はまずいない。明は顔を上げた。

「……アサシン、セイバーちよつと待ってて、すぐ用意する。土御門も荷物まとめよう」

明と一成は走って屋敷の中に戻っていく。それを見送り、アサシンは悟を再び宝具の中に戻した。

庭に残されたのはアサシンとセイバーだけである。セイバーはかつてアサシンの元マスターを白昼堂々殺した経緯がある。一度自分のマスターを殺したサーヴァントに、今度は己のマスターを救うための助力を請うことになるとは思わず、アサシンは巡り合わせの不思議さを感じずにはいられない。

当然完全に信用されてはいないだろうが、そのマスターと仲間は手を貸してくれそうである。

「恩に着るぜセイバー」

「礼ならマスターに言え。それよりお前こそ、マスターを助ける為とはいえ、よく前のマスターを殺した俺に助力を頼もうと思ったものだな」

不思議そうに見上げてくるセイバーに、アサシンは隠しても仕方がないと言わんばかりにため息をついた。

「頼るアテがなかったんだよ。そもそもキャスターらの居場所もさつきまでわからなかったしな。それに三対一で敵うとも思えねえ」

「さつきまでとは？」

「俺は勿論マスターが襲われてからここに来たんだが、お前らキャスターたちと酒飲んでたろ。その時の話、聞かせてもらったぜ」

急いで碓氷邸に駆け付けたアサシンが目にしたものは、庭で酒を飲みながら語るセイバー、アーチャー、キャスターの姿だった。気配を遮断していたため、気づかれることはなかったが肝を冷やしていた。その話で、キャスター陣営が三騎のサーヴァントを抱えていることと、拠点が大西山であることを知ったばかりだ。

セイバーは眉をしかめたが、盗み聞きをことさらに言い立てはしなかった。

「俺アマスターを助けてくれーって言った瞬間、お前にマスターを殺されるかとも思ってたぜ？一度前科があるからな」

からかう様に喋るアサシンに対し、セイバーはあくまで必要なことだけを答える。

「利害の一致だ。手段を選ばなければもつと手の打ちようもあるだろうが、キャスター陣営を俺が一人で始末するには骨が折れる。三騎も運用でマスターの魔力が尽きてしまえばいいのだが、アインツベルンとやらは破格のマスターらしくその線は期待できなさそうだ」

セイバーも人びとを殺して回れば力も蓄えられようが、それはマスターに禁止されている。と、アサシンが妙な顔をしてみている。「何だ」

「いや、お前さんほどの英霊でもそんなこと言うモンなんだって思ってたな」

アサシンは素直に驚いていた。セイバーの真名を知っている身としては、日本最強の名をもつ大英雄が今初めて会話する相手に、弱音とはいかないまでも正直に思うところを話すことが意外だった。それを言うと、何故かセイバーまで首を傾げ始めていた。

どうしてお前が不思議に思うんだとアサシンが突っ込むより先に、明たちが姿を見せた。

「お、姉ちゃんたちが来たぜ」

玄関に入っていた時と同じ位に慌ただしい様子で、明と一成が姿を現した。一成はドラムバッグを肩にかけて、明は大きな目のトランクを引きずっていた。

「確氷、荷物多くね？」

「いやあ、女性には色々と入用得」

「……俺、持つか？」

一成はそう申し出たが、そこでアサシンが自らの宝具を再び披露し、彼らの荷物を襜褕の中に収納した。それからセイバーの手を借り、春日の空を飛行して駅前に向かった。ちなみに高所恐怖症の明はアサシンの宝具の中におとなしく入っていた。

\*

春日は特に目立った観光地と言うわけでもない上に今日は平日である。飛び入りでホテルに入っても普通に部屋が取れた。贅沢をするなら春日イノセントホテルにでも泊まりたいところだが、一行は普通のビジネスホテルを選んだ。

春日駅前から徒歩七分、ホテルムーンライト春日というビジネスホテルを急場の拠点とすることにした。

十五階建てのそのビジネスホテルは、綺麗に磨きぬかれ、白を基調とした生活感のあるロビーになっている。

一昨年オープンしたばかりで比較的新しいホテルだ。三階から十五階までが客室になっており、二階には宴会場、一階はロビーやレストラン・カフェが併設されている。

とりあえず五泊分、ツインベッドの部屋を二つ借りることにした。ちなみに代金は一成が青い顔をしていたため、明が持つことになっ

た。

全員でエレベーターで七階まで上昇しながら、明は何気なく言った。

「じゃあ部屋は私とセイバー、あとは土御門とアサシンと、アサシンのマスターってことで。荷物置いたらすぐ道具持ってそっち行くから」  
「わかった」

「おう。頼むぜ姉ちゃん」

「キャスターの魔術？呪いを根治するにはやっぱりキャスターを倒すしかないと思うけど、遅らせることくらいならなんとかなるかも」

「いやその部屋割りはどうなんだ！」

「はい？」

部屋割りをつつこまれるとは思わなかった明は、勢いよく一成の方に振り返った。と、同時にエレベーターが七階に到着して、一行はぞろぞろと降りる。

スカーフの柄のような絨毯地の床を歩きながら、明は一成に尋ねた。

「なんかおかしい？」

「いやお前女なんだから、セイバーと一緒にするのはどうなんだよ！つかあの家だとセイバーとお前部屋別だったじゃねーか！」

無頓着な明とセイバーに業を煮やした一成は、流石にその主従に対してつつこんだ。

「碓氷邸は頑丈な工房だったから別室でも良しとしていたが、本来サーヴァントとそのマスターが同室するのは当然だろう。睡眠中は最も警護すべき時間だ。しかし、俺は明と同室でさえあれば、マスター・俺・土御門、アサシンとそのマスターという部屋割りでも構わないが。俺にベッドは必要ない。座っても立っても目を開けても寝られるからな」

「ものすごい斜め上の心配してんじゃねーよ！つかサーヴァントは寝る必要ねーだろーが！」

「それを言うならサーヴァントに性欲はないから気にする必要もないでしょ」

確かにそういわれればそうなのだが、一応年頃の男女である。

むしろ明とセイバーに甘い空気が流れることが全く想像できないが、健全なる男子高校生としては放っておけない。明もセイバーも全く意に介しておらず、やきもきする一成の肩を叩く者が居た。

もちろんアサシンである。驚くほどのスマイルと空いた手でサムズアップをぶちかましていた。

結局部屋はセイバーと明、一成とアサシンとアサシンのマスターに分かれた。明はトランクをベッドの上に放り投げると、中身を漁り、鞆に収まった黒いナイフを取り出す。そのまま隣の部屋に行こうとするが、セイバーもついてくる。

「セイバーは寝てていいよ」

「そうはいかない。まだアサシンの令呪の委譲が済んでいない。仮に済んだとしてもマスターは土御門だろう」

敵サーヴァントの前にマスターを放り出しておけない、とセイバーは言う。明は何回もこの言葉を聞いたような気がする。一成については割と信用していたのかと思っていたが、あくまでサーヴァントがない為だったようだ。

(むしろ土御門がマスターに復帰しちゃうし、「やはり殺しておくべきだった」とか小言言われてもおかしくないくらいだし)

そこまでセイバーは言わなかったが、内心想っていても不思議はない。ともかく部屋を出て隣部屋をノックした。すぐに扉が開いてアサシンが中に招き入れた。

二つ並んだベッドの片方には一成が座っていて、もう片方にアサシンのマスターが横たえられている。

アサシンのマスターは三十なかばぐらいの年に見え、タートルネックにGパンというラフな格好をしている。疲れがたまっているのか目の下には隈が浮いているが、それ以上に異常なほどに汗をかいていて、顔は青を通り越して白い。

サーヴァントの魔術にどれほど対抗できるか怪しいが、やるしかない。放っておいたら死に至ることは誰の眼にも明らかだ。明はベツ

ドに乗り上げ、ナイフを鞘から抜いた。

「聞きたいんだけど、えーっと……」

明とは反対側に立つアサシンが、己がマスターを指差して教える。

「悟。山内悟っつーんだ」

「わかった。悟さんってちゃんと魔術師なの？もしそうならどんな魔術をつかうのかわかる？」

「いや違う。一般人だ」

「じゃあどういう経緯でこうなったのか教えて」

明は服の上から悟の体を検分してみたが、下肢が異様に浮腫んでいすることに気づいた。Gパンの生地がぎりぎりまで張っている。

「俺と悟で二人でビルの屋上で酒を飲んでた時だ。いきなりアーチャーが襲いかかってきた。俺は応戦したんだが、その裏をつかれて悟がキャスターにつかまっちゃった。さっきも言ったが悟は魔術師でも何でもねエ一般人だ、戦うのもこれから聖杯戦争するぞって時だったからな。何とか令呪を使って家に戻ってきたんだが、様子がおかしくなつて気を失っちゃった」

「ふうん……あのキャスター、魅了のスキルあるみたいだったし、何の抵抗力もないと言うがままになるし」

女の姿をしていた割に、あの魅了は明にまで働きかけていた。幸い異様なランクのスキルではなかったため、明、一成、セイバーは無事であったがアサシンには対策がいるのかもしれない。

「土御門、ちよつと悟さんのズボン脱がせて」

「わかった」

明に指示された通り、一成は悟の上着とズボンを脱がしてトランクスのみの状態にしていく。すぐに彼も異変に気付いた。やたらとGパンが張っているなどは思っていたが、そのせいで思ったよりも脱がしにくい。

膝まで脱がせると後は簡単にできたが、一成と明は目を見張った。

「うわ、なんだこれ……」

その足は腿まで黒く腫れて浮腫んでいたのである。普通の浮腫み方ではないことは、一見してわかる。腿は黒く腫れあがっているだけ

だが、足首——末端に近づけば近づくほど折れた様にねじ曲がっているのである。明は冷静にその腫れあがった足に触れる。

「この浮腫みが全身に回ったらその時は死ぬね……ほっとけば、朝を待たないで死ぬかも」

「これは……」

壁に寄りかかって様子を見ていたセイバーが、にわかには四人に寄り寄った。見たくないものを見てしまったような表情でもある。一成が訝しげに尋ねた。

「何か心当たりでもあるのか？」

「……これは、俺を呪い殺したものと同種の呪いだ」

東征の復路、伊吹山の神を討伐することを命じられた日本武尊は、神剣を置いて山に向かう。伊吹山の神に呪われた日本武尊は、高熱を発して足から病んでいった。その足は腫れあがり、直に何重にも折れ曲がったようになり、歩行すら困難にした。

日本武尊はそれでも歩き続けたが、やがて病は彼の命まで奪い去った。

明はセイバーを凝視してから、黒く浮腫んだ足を見る。

「……キャスターのサーヴァントの呪いなんて、究極的にはキャスターそのものを倒さないと治らない。でも治せなくても進行速度を落とさない」と

明は悟の太ももを摩りながら、ぶつぶつと呪文の詠唱を始めた。その傍らで、セイバーは一成に尋ねた。

「土御門、お前は陰陽道とやらの魔術師で、明の納める魔術とは別物

だったか？」

「？そうだけど、それがどうした？」

「この呪いは、マスターが修得しているモノとは系統が違うだろう」

「そうだね。私の魔術は西洋魔術だし別のものだね。多分西洋魔術に対する効果と同じくらいの効果を目指すのは難しいかも」

「ならこいつにやらせた方が効果はあがるのではないか」

珍しくセイバーから当てにされている発言をされて、一成は目を見



張った。明も確かに、と何度も頷いている。

「確かにそつちの方が効果があがる、というか効率がいいかもしれない。そういや、すっかり聞きそびれてたんだけど、陰陽道って結局魔術なの？呪術なの？」

一成はなんで今それを聞くんだ、と言いたげな顔をしたが律儀に答えた。

「……完全な呪術、じゃあない。なんつーか陰陽道の中でも占術とか呪詛とか清め（治癒）で種類が分かれてるんだけど、その種類によって呪術よりだったり魔術よりだったりする。占術は魔術よりで呪詛は限りなく呪術に近い。ざっくり言えば、何か対象に影響を及ぼす系のやつは呪術寄り？」

占術は要するに西洋魔術でいえば探知や監視に近く、対象に何か影響を及ぼすものではない。一方呪詛と治癒は、プラスマイナスの効果の差はあれど対象に影響を与えるものである。

「ふうん。西洋魔術という黒魔術に近いのかな・・・？」

そもそも一成は西洋魔術にはちんぷんかんぷんであり、黒魔術のなるたるかは知らない。ただ明もこのような質問をする時点で、陰陽道に造形は深くない。

だから一成に魔術的にああすればいいこうすればいいと、師のように教えることはできない。

「魔術は「そこにあるもの」を組み替える術。けど呪術は「自分の肉体」を組み替える術——ともあれ、キャスターの呪いが呪術寄りの何かなら、一成の方がいいかも」

魔術回路もあり魔力を動力にすることが同じだとしても、接続する魔術基盤が異なれば効果は異なるのも道理。呪術はその過程故に物理現象のようなもので……とまで考えたところで、明は思考が逸れはじめていることを自覚して顔を上げた。

「んで、結局なんかできそう？」

一成として、未熟ながらも家は千年を数える陰陽道の大家の息子である。彼は頷いた。

「心当たりはある。ちよつと鮑漁るから待つてろ!!」

「急がなくていいから、ちゃんと準備してね。私は私なりにやってみるから」

一成は勢いよくベッドから飛び降りると、どこか嬉しそうにさえしながらドラムバッグを漁り始めた。アパートから持ってきたなげなしの魔術礼装を引っ張り出している。彼の性質からして困った時に自分が何もできないでいることがかなりの苦痛を伴うために、できることがあることそのものが嬉しいのだろう。

治療はできないが、明は悟の容態を把握した。雨合羽のアサシンがマスターの容体を尋ねた。

「……姉ちゃん、どうだ？」

「……まずキャスターのかけた呪いだけど、やっぱり私の手には負えない。完全に消し去るのは無理。仮にできたとしてもできるようになるころには悟さんが死んでる。治すにはやっぱりキャスターを倒すしかない」

人外のかけた呪いである。一朝一夕で解呪できたら苦労はしない。明は順を追って話す。

「で、キャスターを倒すまでは延命しなきゃいけない。私や土御門がなにかしても進行を止めるので精一杯。けど進行を止め続けたら、私たちの魔力が尽きておしまいになっちゃうね」

「どうしようもねえのか？」

ここまでサーヴァントが必死になって助けようとするマスターは、いったいどのようなマスターなのだろうか。二人の関係に思いを寄せながら、必死なアサシンの様子につられて、明も必死で考えているのだ。

一般人を巻き込んで死なせたくなかったのは明とて同じだ。それに決して事態は絶望的なわけではない。

「いや……なんとかなるんだけど……多分」

「なんじゃそりゃ」

先ほどまでのしつかりした答えとは打って変わってふわふわしたことを言う明に、アサシンは思わず呆れた声を出した。

明はちらりとセイバーを見たが、直ぐに目を逸らした。

「で、仮に延命が図れたとしても結局はキャスターを倒さなくちゃいけない。私たちも聖杯戦争を戦う身として、キャスターを倒すつもり。土御門と私でなんとか悟さんの意識くらいは回復させるから、その時にもう土御門と契約して。キャスターを倒すまでは一緒に戦おう」

「ゴイツを助けてくれって言った時点で俺の身は好きにしてくれっていったろ？構わねエさ」

アサシンは一成のベッドの上にどかりと胡坐をかいて、懐から取り出した煙管を振ってこたえた。共闘の類に文句を言いがちなセイバーも、否はないようで黙っている、というよりは何か考え事をしている雰囲気だったが。明は安心して笑みを漏らした。

「そっか、ありがとう」

「そりゃこっちのセリフだ姉ちゃん」

「それにしてもアサシンは随分マスターを慕ってるんだね」

明は右手にナイフを持ち、左の親指を素早く切った。鮮やかな血が黒く浮腫んだ足に滴る。より魔術の効果を伝えやすくするためだ。

アサシンは一瞬きよとんとしたかと思うと、膝を打って笑い出した。

「ん？俺ア別に悟を慕っちゃいねーよ！あれは、ハハハ、なんつーか子分？みてーなもんだ！」

「こゝ、子分?？」

明はぎよつとしたが、アサシンの声音は実に楽しそうなものだった。きつと彼らは主従が逆転しているのではなく、主従ですらないのだ。

「自分を見捨てる頭なんてろくなもんじゃねエからな。ま、俺たちとはとかく、姉ちゃんたちもよろしくやってるみてーでいいこつた。仲好きことは美しきかなくてヤツか」

アサシンからみれば、セイバーと明はうまくやっているように見えるらしい。明は曖昧に笑うしかできなかった。

明とて、セイバーが裏切りを行うような質だとはもう思っていない

い。むしろバーサーカー戦を終えてからはありがたいと思うことの方が増えた。

だが、セイバーは元々いくら人が死んでも気にせず、どんな手を使っても勝てばそれを良しとするタイプである。他のサーヴァントと協力関係を結ぶ気もなく、卑怯な手を用いても自分一人でやろうとする。

明はそれを否定して、目立つ戦い方をしてはいけない、宝具で一般人を巻き込んではいけない、ランサーやアーチャーと協力して戦うなど明の方針に従わせてきたのである。セイバーは文句を言いながらも言うことを聞いてくれるため助かるのだが、彼としてはきつと不本意なはずである。

何しろセイバーの願いは「どんな形でも、この戦争に勝つこと」であり、明の命令はセイバーの手足を縛るようなモノに近いからだ。

一成の用意ができるまで、影で呪いを少しでも分解しようと思ったが、その時セイバーが俄かに悟の寝るベッドに近づいた。

いつの間にかその手には神剣が握られていた。

12月3日⑧ 長き一日の終わり

「セ、セイバー!？」

「何もしない」

ぎよつとした明が声を上げたが、セイバーに殺意のようなものはない。悟の傍らに立った彼は神劍の切っ先を天井に向け、柄の方から悟の体に沈めていく。ゆつくりととけるように神劍は体に沈み、悟は一瞬淡い光に包まれた。

「剣を入れている間は呪いの進行を止めることができる。ただし治りはしない。キャスターと戦うまでは貸してやる」

神劍を手放した場合、セイバーのパラメータやスキルはランクダウンする。伝説から見ても、彼は決して剣を手放さないべきである。そして明は今、まさにセイバーがしたことを彼に頼もうと思っていたのだが、そういう事情の為神劍を貸せとは言いにくかったのである。

「……え、いいの?」

セイバーは盛大にため息をついて、マスターを見る。

「そのアサシンと共にキャスターを倒すまでは共闘だと言ったところから想像をしていた。その男を延命するには、この剣に頼るほかはない」

戦争が本格的に始まる前に、セイバーが剣の効果について喋ったことがある——剣を体に入れた状態で負った傷は全快させることができる。だが、剣をいれていない時に傷を負い、その後剣をいれたところで悪化は止めるが治癒まではできない。

ただし、セイバーに限っては傷を負った状態で剣を持てば、致命傷でもない限り傷は治癒すると。

セイバーはやれやれと言わんばかりの表情だ。ともかく、神劍を体に入れられた悟の様子は、先程と比べて明らかに良くなっている。荒かった呼吸は落ち着きを取り戻し、脂汗も若干引いたようだ。

「しばらくすれば意識も戻るかもしれないが……」

「準備できたぞ!」

ベッドの脇でこそそこそと紙をいじっていた一成が、俄かに立ち上

がった。その右手には人の形に切り抜かれた紙が何枚も握られている。明はそれを見て何をするか大体を察した。

「あとこの部屋って灰皿……はあるな。ライターないか？」

「ないけど私が燃やしてあげるから気にしなくていいよ」

そうならばと一成は悟を静かに見下ろした。残されたセイバーとアサシンは、一成の行おうとする魔術を見る。

一成は深く息を吸い、自らの魔術回路を起動させる。頭の中で鳴り響く日本刀の剣戟が、腕さえもしびれさせる様だ。

「急急如律令！」

急いで律令の如くせよ、という省略した呪文で、一成は握った人形の紙束に魔力を注ぎ込む。薄い水色のような光を放つ人形の紙を一枚だけ手に取り、残りをベッドの上に置く。一枚の紙をそっと、腫れあがった足に貼り付け撫でていく。

其れを何度も繰り返す。五分もしたところで、アサシンがいぶかしげに声をかけた。

「……坊ちゃん、何してんだ？」

「撫物つつー魔術。区分的には呪術に近いもんだけど……まあ見てろって」

一成は人形の紙で何度も悟の足を摩る。最初は薄水色に光っていた紙は徐々に光を失い、白でさえなくなり黒く染まっていく。

「この人形は身代わりだ。身代わりに呪い——穢れだな。を移す魔術だ。人形がけがれるのとは引き換えに、撫でられた者は清められる。今でも神事でこういう人形は良く使われるんだ」

一成の治癒魔術もこの撫物と原理は同じである。血や死を穢れとする陰陽道は、それを清めることで傷を癒す。

「で、その穢れた人形は最終的に川に流すか燃やすかするんだけど、今は燃やす方がよさそうだし——はい、灰皿」

「さんきゅ」

合いの手を入れるように、明は人でも殺せそうな鈍器ほどもある灰皿を一成に向けた。一成は真っ黒に成り果てた人型を灰皿に放り込むと、明が呪文を詠唱する。

「Verbr<sup>燃</sup>ennung<sup>燃</sup>」

ライターの火は黒く燃えあがり、人型を跡形もなく焼き尽くした。「償物(あがもの)ってやつだっけ。人の代わりに罪穢れを背負って燃やされる魔術礼装。専門外だしあんまり詳しくないけどさ」

「専門外でそんだけわかっつてりやいいだろ。くそ、重いな……効いてるけどいつもより全然弱い。流石キャスターのサーヴァントてこんなのか」

一成は二枚目の人形を手に持ち、再び悟の足を撫でている。明の目からみても効果は上がっていると思うが、セイバーの剣ほど劇的な変化はない。

一成が苦闘する横で、セイバーが静かに口を開いた。

「……あれは本来聖杯戦争に呼ばれるべきものではあるまい」

「おつ、セイバー、お前アレと知り合いか」

セイバーは頷く。いつもは表情の出ない顔に、珍しく笑みが刻まれている。

浮かぶそれは穏やかなものではなく、獲物を見つけた猟師のそれに近い。

「俺はあのキャスターを知らないが、よく似た者を知っている。俺の知るヤツとキャスターは姿も魔力の質もあまりにかけ離れているが、奴は元は魔物などではない。神かその親類のはずだ」

「……伊吹山の神」

日本武尊を呪い殺した山の神。おそらくはその縁者。それが時を経て魔物と化し、最後には人間により討伐された者——となれば、その真明も絞られる。明は唸った。

神縛りのアーチャーと、生前セイバーを呪い殺した神に近いキャスター。

キャスター陣営がそれを期していたにしろいないにしろ、それだけで分の悪い布陣である。それにも拘わらず、セイバーはバーサーカーの時には一かけらも見せなかつた笑みをうかべ、くつくつと笑い出した。

「キャスターが伊吹山の神が俺を殺したと信じているならば滑稽だ。悪神ごときに俺が殺されるわけはない——気にするなマスター。あの程度の神もどき、剣さえあればどうとでもなる。むしろアーチャーの方が面倒だ」

明が返事をしようとした時、一成でも、セイバーでもアサシンでもない、小さな声が全員の耳に届いた。いの一番に反応したのはアサシンである。

「おい！目が覚めたか！」

「……、あ、アサシン？」

白い顔をした悟の瞼がゆっくりと開かれ、まだ熱に浮かされた瞳が歌舞伎役者染みたサーヴアントに向いた。焦点はあっており、意思の存在を感じさせる。アサシンは彼の目の前で指を三本立てる。

「これ何本に見えるか」

「さ、三本」

「よし」

灰皿の上に六枚の人型を積んだ一成は、まだ悟に術を行使しながらも胸をなでおろした。明は一成の横に腰をおろし、悟の顔を覗き込む。だが、彼の眼は明には向いていない。彼の武骨な手は宙をさまよひ、アサシンの手がそれを掴んだ。

「アサシン、ごめん」

「別にお前は謝るようなことしてねーだろ」

「ごめん、ごめん、ごめん……」

悟はアサシンの手を強くつかんで、その手に縋りつくようにして離さない。アサシンの言葉も聞こえているのかいないのか、ひたすらに謝罪を繰り返す。熱で潤んでいた目からは、今や涙が次々と溢れ出して枕を濡らしている。

アサシンは手を掴んだまま何も言わず、謝罪と嗚咽を繰り返すマスターを、目を逸らさずに見つめている。十分もその状態が続いた後、悟は糸が切れた様に意識を失った。

「……おいー」



「多分、眠っただけだ。セイバーの剣と撫物でひとまず落ち着いてると思う」

一成の言うとおり、今眠っている悟の顔色は先程と比べればいくらかマシになっている。汗も引いて、体力を消費しない為に眠っているような感じだ。

明はベッドから下りて立つと肩をすくめた。

「……今日令呪を移すのは無理みたいだね。悟さんがちゃんと目を覚ましてからじゃないと」

「……世話をかけるぜ」

「まあいいや。今できることはこれくらいだし、今日は引き上げるよ。神剣入れてるし滅多なことはないと思うけど、何かあったら呼んで」

アサシンは頷いた。明はセイバーと共に部屋を出ていくが、その際に一成にも無理をしないように言った。悟の状態はひとまず落ち着いたが、彼はまだ人形を使って穢れを落とそうとしていたからだ。

明が隣りの部屋に戻り、時計を見ると既に今日が終わっていた。様々なことがありすぎて心の整理が追い付かないが、ひとまず今日は眠るべきだろう。

明日には令呪の委譲を行い、キャスター陣営の偵察をしいかなければならない。明日とは言わず今からでも、セイバーは飛び立って行ってもおかしくはないのだが、令呪の委譲が済んでいない以上そうすることはしない。

ホテルの部屋は白を基調とした部屋で、ベージュ色で統一されたベッドが二つ、手元の明かりと棚を挟んで並んでいる。カーテンで閉められている窓の近くには、鏡付の机がひとつある。洗面所はユニットバスで、上に設置されている棚には白いバスタオルが綺麗に掛けられている。ついでにバスローブまでついている。

セイバーはすたすたと洗面所を通り過ぎると、窓側のベッドを陣取った。

「俺は寝るが、何かあったら呼べ」

「あつちよつ、セイバー！」

ベッドに潜り込むセイバーを慌てて呼び止めたはいいものの、話をまとめていなかった明は妙な空間を開けてから再度続けた。

「ちよつと、セイバーに言っておかなきゃいけないことがあつて」

元々感謝するよりも文句を言うことの方が性に合っているという悲しい性の為に、こういう時にさらりと言葉が出てこないことが悔やまれる。

だが、思っていることは言わなければならない。

「何だ？」

「いや、大した用じゃないんだけどさ」

半分ベッドに入りかけたセイバーは不思議そうな顔をしている。そこへ、明ははつきりと伝えるべきことを口にした。

「セイバー、ありがとう」

たつぷり三十秒ほど待ったが、セイバーは何も言わなかった。明としてはそんな小さな声で言ったつもりはなかったが、再度同じ言葉を繰り返した。

「いつも私の意見を優先してくれて、一緒に戦ってくれてありがとう」  
英霊というものは生前偉業をなした人間で、日本で言えば天皇・貴族・将軍・武将という錚々たる偉人が呼ばれる。その偉人たちが彼らの時代で言う「庶民」に従うのだから、最初からマスターとサーヴァントは反目を招きやすい関係にある。

特にマスターとサーヴァントの方針が違う場合や、願いの利害が反目する場合は尚更である。にも拘らず、文句を言いながらもセイバーは明の方針に従っている。それはとてもありがたいことでもあり、同時にセイバーに無理を強いていると明は気にしていた。だからせめて礼くらいは、と思つての言葉だった。

二回目にて、やっとセイバーは鈍くも反応を見せた。表情はそのまま、ゆつくり口を開いた。

「……りえいを言われるほどでもない」

噛んだ。こいつ、噛んだ。そして特に言い直しもしなかった。礼を言っただけなのに何故これほどに微妙な空気にならなければならぬのか明には不可解だったが、セイバーはしっかりと言葉を受け止めてくれたようである。

「……セイバーのやり方は私の立場的に許容できるものじゃないから、多分私は最後まであだこうだ言うと思うけど、これからもよろしくお願いします」

「こちらこそよろしく」や小言くらいの反応が返ってくるかと思いきや、セイバーは何も言わない。だが、彼は再びたつぷり間を置いた後に口を開いた。

「……わかった」

セイバーを見るに、嬉しそうには見えないが特に不快だと思っはいなさそうではある。とりあえず感謝の意は伝わったようで明は胸を撫で下ろした。

しかしその時、セイバーはいきなりベッドから降りると床に両手をつき、足を延ばしてつま先だけを床に着ける姿勢を取った。要するに腕立て伏せの姿勢である。そして何を思ったか、セイバーはものすごい勢いで腕立て伏せを開始した。

「……何してるの?」

「腕立て伏せだ。軽く千回くらいやったらやめる」

英霊が筋トレをしようと、所詮霊体なのだから意味はない。セイバーがやりたいなら好きにすればいいのだが、唐突なうえに意味不明である。相変わらず謎なサーヴァントだと、明は思った。そして恒例の微妙な空気に耐えかねて、明は目に入った洗面所を話の接ぎ穂に――してはあまりにも乱暴だが、話題を変えた。

「……そういえばセイバーってお風呂には入らないの?」

セイバーは高速腕立てをしながらも、いつもと変わらない調子で答えた。

「現代の襖のようなものか」

「そんなかんじ。なんか腕立て伏せしてるし、入ってみれば? すつき

りするよ」

話を持ちかけられたセイバーはまんざらでもない様子で、ちらりと洗面所に目をやった。

\*

「……っ、疲れた……」

全身を襲う倦怠感に苛まれながら、一成は部屋を出た。一時間ほど悟の体を撫物で清めていた成果はあり、悟は再び目を覚ました。

勿論一成も喜んだのだが、意識を取り戻したアサシンのマスターはアサシンとなにやら話し込み始めてしまった。

彼らには彼らのここに至るまでの経緯があり、それは決して一成には窺い知れないものだ。二人の真面目な話にぼっと出の自分がいるのも場違いな感じがして、一成はそつと部屋を抜け出した。

否、場違いだと思ったことも本心だが、一成には彼らが羨ましかった。アサシンは自分の身を投げて、自分のマスターを救おうとしている。マスターはサーヴァントに心を許し、信頼している。どちらも一成も築こうとしたもので、築ききれなかったものだ。

(碓氷とセイバーもなんだかんだでうまくやってるっぽいし、キリエもだろうし……)

情けなくなつて一成は気落ちする。それでも、アレを呼び出したのが自分なら、引導を渡すのも自分であるべき——なにより、聖杯だろうとなんだだろうと絶対に叶わない夢を見ているアーチャーを放置しておけない。

「つまらない夢をみやがって、贅沢貴族め」

一成は己を奮い立たせるように毒づいた。と、その時急に頭痛が脳を貫いた。碓氷の家、地下室で感じた痛みと同種だが、それより強くなっている。

一成は思わずホテルの壁に手を突き、呼吸を整え目を閉じた。また

前回と同じように、見知らぬ映像が見えてくる。今度は綺麗な女性と、それとよく似た少女と、穏やかそうな男性が仲睦まじく歩いている姿が視得た。その男性は、山内悟によく似ていた。

「……腕斬られて一緒にどっかおかしくなったのか？」

脂汗をぬぐい、人心地がついてからようやく一成は再び足を踏み出した。いまさら二人の部屋に戻るのもなんだか微妙で、今日くらいはセイバーと明の部屋で眠らせてもらってもいいだろうと、彼は二人の部屋をノックした。「おーい、俺だけど」

すぐに明が返事をして、扉が開かれた。

「おう、確氷、わるいけ……うおおおおお!!?!?」

「どんな声？」

白々とした声を出す明とは対照的に、一成は思い切り向かいの壁まで謎のステップを踏んで飛びのいたのちに座り込んだ。

一成が驚いたのも道理、迎え入れようと現れた明は備え付けのバスタオル一枚きりを身に纏っているだけだったのだ。風呂上りですらりと伸びる白い手足には赤みがさしており、濃い灰色の髪からは雫が滴り、鎖骨を濡らして肌を伝っている。

「おおおおおおおまえなんだそのかつこおおおおお」

「何っってお風呂出たばっかなんだけど。で、何の用？」

明は平然と答えるが、一成は予想外のラッキースケベ状態に出くわして完全に思考が停止している。年上の美しい女性の風呂上り姿は、青春真っ只中の男子高校生には刺激が強かった。

「いやいやいやいや待って待って落ち着け」

「?話は中で聞くからとりあえず入りなよ」

手を掴まれて立ち、なすがままに一成は部屋に引きずり込まれる。そして次に目にしたのは、ベッドの上で聖書を読むセイバーの姿だった。ちなみに全裸である。聖書はこういうビジネスホテルに何故かおいてあるものである。

明はベッドの上で一成を座らせると、何時もと変わらない口調で言う。「なんかあったの？」

「それはこっちのセリフだ!! 確氷、お前はなんでそんな恰好で平然としてんだア!! あとセイバーはなんで全裸なんだよ!!」

「ああ、セイバーにお風呂入ったらって勧めて入ったはいいものの、熱いから冷ますって」

あくまで焦りもしない明と、ベッドにうつぶせになってページを繰るセイバーを交互に見て一成はもどかしくも怒鳴る。妙齢の女性と、一成より一つ二つ下（見た目は）の男子がほぼ全裸の恰好で同室にいることは決してよろしくない。

「そういう問題じゃねえ!! サーヴァントとはいえ、女と男がそんなカッコでいるなっつーの!!」

「前にも言ったと思うが、サーヴァントは不能ではないが性欲はない。それにパスで魔力も十分伝わっている為、まぐわいによる魔力供給は必要ない」

「そうだよ。それに女の魔術師にとって髪と処女は大事なんだから無駄遣いしないってば。お父様曰く私の破瓜の血とかホント兵器並みらしいんだから」

「ほう、このロンギヌスの槍とはなかなかいい。神殺しというあたりが特に」

一成が「そうか、確氷は処女なのか」とあらぬ妄想をしたのもつかの間、彼女は彼女で色気もクソもない発言を続け、その上セイバーは一成の話に興味が氷点下と喋っていいほどになかった。

というわけで一成の意見、というよりは一般的常識が寸毫も理解されない。彼は徒労感を覚えるが、魔力の減った体に鞭打ち、必死のツツコミを続ける。

「だからそういう問題じゃねえっつの!! 何!? まるで俺がおかしいこと言ってるみたいなカンジなだけだよ!!」

「そういうええマスター、風呂なる襦はいいものだな。俺はこれから現界する限り毎日風呂に入りたい」

「いいんじゃない?」

「俺の話聞けよ!! ああもう!」

一成は勢いよくベッドから立ち上がる。できるだけ明からは目を

逸らしていたが、ちらちらと見てしまう。その際、バスタオルの裾からのぞく足と左腕——半袖を身につければ隠れてしまう程度の肩よりの部分に、古い切り傷が幾筋も残っているのが目についた。肌が白い分、余計に痛々しく目についた。うっかりじっと見てしまい、それを明に気づかれた。

「ああ、昔は魔術回路を起動させるのに自傷しないと動かなくて。今はそんなことないんだけどさ、ごめんね。気が抜けてたみたい」「べ、別に謝ることじゃねーだろ、つかいいからなんか着ろ！」

とにかくバスタオル一丁の明をそのままにしておけず、明の手を掴むと、無理やりユニットバスの洗面所に向かった。そして明の持ってきたバッグと備え付けのローブを掴んで押し入れる。

一成は髪を乾かしてせめてローブを着てくるまで出てくるなど強く言いつけた。明は文句たらたらだ。

「別にどうでもいいじゃん」

「よくねーよ!!痴女かお前は!」

この主従はどうなってるんだとぶつぶつぶやきながらベッドに戻ると、セイバーも暑くはなくなったのかいつの間にかいつもの衣袴に戻っている。

面白そうな顔もせず聖書を読んでいることは変わらない。明も明だが、全く気にしないセイバーもセイバーである。一成は寝転がる剣の英霊をジト目で見た。

サーヴァントは普通、生前の記憶をすべて持って現界する。姿は全盛期の姿で現界するが、中身はそれより年を取っていると見える。となれば、年下に見えるセイバーも中身は一成よりかなり年上ということになる。

「……お前って姿は俺より年下? ってくらいだけど、歳っていくつなんだ」

セイバーはゆっくりと一成に顔をむけてから、指を折って何かを数えた。

「……死んだときは二十九か三十だったな」

セイバーは答えるだけ答えて、再び視線を本に落としていた。一成

は明がひとまずいなくなったことで落ち着き、彼女のモノらしきベッドの上に座ってセイバーをジト目で見た。

「……こんな二十九はいやだな……っーか、お前も確氷に服くらい着ろっついでよ」

「マスターが全裸で往来を歩こうものなら止めるが、確氷邸やこの部屋において明が全裸でいたいならば俺に止めろという権利はない」

「へー、性欲のない英霊さまは言うことがちげーな」

半ば投げやりに言ったが、何を思ったかセイバーはその時聖書から顔を上げた。「フン、仮に生前であつても今とやることは変わらない。俺の真名を言ってみろ」

「日本武尊だろ」

「そうだ。日本最強は自制心も日本最強だ」

部屋には、洗面所から響いてくるドライヤーの音しかしなかった。あまりにツツコミどころのありすぎる発言に、流石の一成も言葉を失うほかなかった。とりあえずどれだけ「お前、自分の伝説知ってるか？」と浴びせかけたかったが正直面倒くさかったので、一成は一連の流れをなかつたことにした。

暫くドライヤーの音と衣擦れの音が気になっていたが、再びセイバーが口を開いた。

「……それよりお前はなぜこの部屋に来た？」

風呂上り明とセイバーの謎発言の衝撃ですっかり消し飛んでしまっていたが、元々一成は魔術行使を止め、かつアサシン主従が込み入った話を始めたから出てきたのである。その時丁度、洗面所からドライヤーをかける音が消えて、バスローブを纏った明が顔を出した。正直一成的にはそれもけっこうアレなものがあるのだが、先ほどよりは心を落ち着けて会話する事が出来る。

「そうそう、どうしたのさ」

「……アサシンのマスター、また目を覚ましたぞ。でも、アサシンと込み入った話してたから邪魔かと思って避難してきた」



「ふうん。ま、とりあえず令呪は明日にしよう。もうそのつもりだったしね。けど避難してきたのはいいけど、土御門どこで寝る？セイバーと寝る？」

「げっ」

今思えば当たり前だが、借りたのはベッドが二つの部屋である。もちろん明と一緒に寝るわけにはいかないのだが、セイバーと仲良くお寝んねも、一成は御免こうむりたい。

セイバーも嫌だろうと思って様子をうかがうが、やはりものすごく渋い顔をしていた。床で寝ろといわんばかりだが、それでは明が納得しない。そして明と一成が同じベッドで眠るもの論外——という思考の後、セイバーは転がって左端に寄った。

明は明でさっさと自分のベッドに潜り込んでしまし、一成も魔術行使でかなりの体力を奪われている。彼は意を決して、件の布団に体を滑り込ませた。ちなみに右端でできるかぎり小さくなっておいた。

(っーか、サーヴァントは寝る必要ねーよな……)

## 第2幕 暗中飛躍の意識なく

12月4日① 陰陽師と聖杯と神父

魔術の本質は生ではなく死。魔術とは自らを滅ぼす道。自ら争いを呼び込むモノ。

少女はそれを弁えている。弁えながら、その道を進まなければならなかった。

「私は——だから、立派な魔術師にならないといけない」

地下室の薄暗い部屋——ひんやりとした空気の中に、ほんのかび臭さが混ざっている。木製の古びた机に向かう少女の手には、銀色のナイフが握られている。

その小さな手は震えていて、刃は彼女の太ももに向けられている。

「——私が、やらないと——」

呪文のように紡がれる言葉は、真実、彼女にとって呪文であった。恐怖を超え、己の成すべきことに身を投じるために心を奮い立たせるための暗示である。

刃は振り下ろされる。スカートをまくり上げた白い太腿に、ナイフが突き刺される。少女は歯を食いしばり、躊躇わず何度も突き刺す。迸る鮮血が椅子をつたい、床にまで流れ落ちて溜まる。

これは、少女が神秘をなす部品のひとつとなるために必要な儀式である。自分の体を変換回路にし、外界から魔力をくみ上げて自分のモノにする、魔術回路を起動させるための儀式。

魔術回路は一度作成されれば意識のオンオフ、イメージで起動がなるものだが、まだ未熟な少女には実際にその儀式を必要としていた。自傷のイメージは心臓だけを残し、己で己を膾切りにするイメージ。ただ心臓だけが熱く焼けるように残って、赫く脈打つ幻影。

——何で私は魔術師にならないといけないんだっけ。

——そっか、うちは魔導の家系だから私が後を継いで、研究を続けて、また後の代に残さないといけないのか。

——そっか、私は変な体質だから、魔導をちゃんと修めないと周

りに迷惑をかけたがり自分が死んじやつたりするんだ。

———　　そつか、私は変な体質だから、魔導をちやんと修めないとマジツキョウカイ、つてところに幽閉されちゃうかもしれないんだ。

———　　そつか、私はお姉ちゃんが目指したものを横取りしたから、お姉ちゃんができない分まで私がやらなきゃいけないんだ。

少女は雑念を振り払う。魔術の行使中に雑念で集中を切らして魔術回路を暴走させてしまうとそれこそ死んでしまう。

少女はそれを酷く恐れているが、一方ではそれでもいいか、という思いを抱く。

———　　お父様は、お姉ちゃんのじゃなくて私の魔術回路を潰せばよかったのにな。

\*

セイバーはゆっくりと上半身を起こした。すでに左隣にある窓にかかるカーテンは開かれていて、朝日が燦々と差し込んでいる。隣で眠っていたはずの一成の姿は既がない。

隣のベッドには頭まですっぽり布団をかぶった明が懇々と眠り続けている。ベッドとベッドの間の棚に内蔵されているデジタル時計を見れば、既に時刻は九時半を示していた。

セイバーが遅起きなのは寝ている分には魔力を節約できることと、寝たいから寝れる限りは寝ているだけで早起きが苦手ということとは全くない。

しかし見る限り、マスターである明は本格的に朝が苦手の質に見える。

「……マスターとサーヴァントは面倒だな」

ベッドから出たセイバーは、隣のベッドの塊を眺めながら息を吐いた。セイバーとて、これが初めてではない。人の過去を覗き見てしまうことに関して多少悪いと思うが、明とてセイバーの過去を覗くの

だからお互い様である。

そして明が何を思いどう生きてきても、セイバーには関係ない。彼には人の過去にあれこれ首を突っ込む気はさらさらない。

今の明が健やかでさえあれば、そんなことはどうでもいいのだ。

(しかし)

自殺未遂については直接話を聞いたが、それでも拭いきれぬ嫌な予感がある。

明はぼーっとしたところがあるが、とりあえずは健常に見える。そして戦いをつづけてその在り方を知れば、または再び過去を垣間見ることになれば、明に対して感じる予感の正体も掴めるとセイバーは確信にも似た思いを抱いている。

そしてこの予感が当たるのならば、掴む正体は、セイバーの最も見たくないものである。

だが、掴んだところで何をしようのか。仮に想像した通りのモノだったとしても、それをどうにかできるくらいなら、セイバーは伊吹山で呪われ、伊勢の能褒野で行き倒れてなどいない。

「おい碓氷！令呪の委譲をしてーんだけどー！」

セイバーが沈思していた其の時ばぁんと派手な音を上げて、この部屋の扉が開かれた。朝（とはいっても九時半）から元気に溢れる一成が飛び込んできた。この部屋のカギを取ってから外に出たのか、カードキーを持っている。

彼は毛布にくるまったままの明を見て、呆れた様に肩をすくめた。

「まだ寝てんのか」

「……れーじゆのいじょーなら、おたがいのいしさえかくにんできれば、できるよ。わたしがいなくても、へいき」

おそらく一成の騒がしい登場で目を覚ましたのだろう。明は恐ろしく低い声で唸りながら、腕だけ毛布からだして器用にセイバーを指差した。

「ついてっただげて」

一成とセイバーは顔を見合わせた。もし何かあれば、念話で知らせろということらしい。明はさっさと自分の腕を毛布の中にしまい、再

び微塵も動かなくなった。仕方がないと、セイバーと一成は明を置いて、隣の部屋に向かった。

隣の部屋と全く同じ間取りの部屋には、窓側のベッドにマスターの悟が寝かされていて、同じベッドにアサシンが腰かけている。ベッドとベッドの間の棚には、すっかり黒ずんで焼却を待つ撫物が灰皿の上に乗っている。

「……体調は大丈夫です……あれ？」

明に尋ねに行く前には目を覚ましていたはずの悟は、今再び目を閉じて寝入ってしまった。アサシンを見れば、呆れたように首を振っていた。

「わりーな、なんかまた寝ちまった」

あまりのんびり待つこともできないが、無理に起こすのも忍びない。明もまだ熟睡中であることもあり、一成はどうしたものかと首を傾げた。

「昼になりや碓氷も起きるだろ、またその時に聞くことにすつか。俺はちよつと出かけてくる」

「どこへ行く」

「教会」

「何故」

一成に特に明確な理由があつたわけではない。ただ、明と協力しているという神父がどのような人間か、昨日から気になっていたのだ。

正直、明と手を組まずこの状態にならなければ監督役など一成の中では空気であつただろう。しつかり存在を認識したのは明と教会が組んでいたことを知った時からだ。一応敗れたマスターを保護する場所でもあり、見ておいて損はないと思う。

「お前についてこいなんて言わねー。まだアサシンのマスターは悟さんなんだから、お前は碓氷の傍にいろよ。残るマスターはキリエだけだし、あいつは昼間から俺を襲わない」

「無論、俺は明の傍にいる。だがもし何かあつた時は、携帯電話とやらで連絡をしろ。それで間に合うかはわからないが」

バーサーカー討伐戦の時に、一成と明は連絡先を交換している。な

るほど、と一成は思ったがそれ以上にぎよつとしてセイバーをまじまじと見つめてしまった。

あれだけ喧嘩腰だったセイバーが、一応は一成を護ろうという姿勢を見せているのだ。おそらく明が「土御門も護るの」と言ったからであり、かつキャスター陣営と戦うためには必要だと思われるからだろうが目覚ましい変化である。

「お、おう。わかった。じゃあ俺は行ってくるぞ。あと昼飯も買ってくる」

一成は妙にどもつたが、セイバーは興味なさそうに一成からカードキーを奪うと部屋を出た。彼自身もいつてこーい、という呑気なアサシンの言葉を最後に、ホテルの部屋を後にした。

いわゆる冬晴れの日で、空気は乾燥しているがいい天気である。春日市は関東、太平洋側の土地柄であるだけに雪はあまり降らないが風は寒い。

ホテルを出てきたはいいものの、一成は春日教会の場所を知らない。駅に行けば地図の一、二枚はあるだろうし駅員にも聞けるだろうとの算段から、ひとまず春日駅に向かった。

大した観光地はないものの、近年急発展をしている土地だけあって地図も案内も得られ、一成は直ぐに教会の場所を把握した。碓氷邸から少々歩いたところにあり、私鉄かモノレールを使って行った方が早い。しかし昼で時間もあつたため、一成は徒歩にて向かうことにした。通りがけにショッピングモールを通過し、碓氷邸にまで戻ってきた。

相変わらずこの屋敷はここだけ周囲の住宅から浮いて豪奢であり、異質な雰囲気を放っている。同じ魔導でも陰陽道である一成の家は工房作成において閉鎖した空間にこだわらないが、西洋の魔術は密閉感があることが大事らしい。

「そーいやあいつ、両親は……親父はいるんだっけか」

春日の管理者としての彼女を知っていた為、その父がいることも一

成は知っている。だが、この屋敷にその父の影は全くない。結局二日程度しかこの家にいなかった彼だが、碓氷邸に明以外の人間が暮らす痕跡はなかったように思う。

「あんまり家にいねえのか……ッ!!」

「土偶ね!カズナリ・ツチミカド!」

突如、腰のあたりに何かやわらかいものが突撃した。否、それよりのその鈴を転がすような声に反応し——一成は反射的に小さな体を突き飛ばしていた。

そして案の定、体重の軽い少女——キリエスフィール・フォン・アインツベルンはその衝撃に耐えきれず地面に転がった。一成はしまったと思いい、ばつの悪い顔をしながら手を差し出した。

「、悪い」

「全く、驚いたからと言ってレディを突き飛ばすなんてどうかしてるわ!」

キリエは全く変わらず、あどけない表情でぷりぷりと怒っていた。一成とキリエは、バーサーカーと戦う前にアイスを食べた時以来の再開である。

だが顔を合わさずとも、彼女、キリエスフィール・フォン・アインツベルンは大きく戦場を、そして一成の状況を混沌に陥れてきた。アーチャーを奪い、ランサーを奪い、大西山を根城と化したキャスターの主。

その事実を認識していながら、一成には今の目の前に立つ可憐な少女は、無垢な普通の少女にしか見えなかった。

「どうしたのかしら、カズナリ・ツチミカド。元気がないようだけれど」

元気がなく見える原因はまさに目の前の少女なのだが、当の本人は何の含みもなくあつけらかなとしている。対応に困り、一成は結局無難な話を選んだ。

「……別に普通だろ。お前こそ、なんでここにいるんだよ」

「今は昼だし、私もこの目で敵の拠点——碓氷の御屋敷を見ておこうと思ったの。それにしても、カズナリ・ツチミカド。わざわざここか

ら退去する必要なってなかったのに。まあセイバーあたりが「三騎で襲われては困る」とでも言ったのかしらね」

あまりにあっさりと言われて、一成は言葉を失った。その絶句を勘違いしたのか、キリエは続けた。

「確かに私は三騎を使役しているけれど、キャスターは陣地で戦うのが一番強いでしょう？ 私は負けるわけにはいかないから、万全の状態でしか戦わないわ」

昨夜、大西山にて待つと宣言したキャスター。自信満々でそう胸を張るキリエには、余裕の笑みが刻まれていた。それが彼女の夜の姿と思うが早いのか、キリエはくるりとターンするいつもの顔に戻っていた。

「だから昼間は戦わないの。で、あなたは何をしに来たのかしら？ 暇人なのかしら？」

一成はキリエには肉体的にというより精神的に振り回されているような気がしてきた。この顔を見ると、彼女の成し得たことが全て嘘で全て間違いである気がしてくる。

それにしても、いくら三騎中一騎がサーヴァント最弱と言われるキャスターであっても三対一である。そのキャスターも想定した真名が正しいなら、決して弱いサーヴァントではない。その上残りは三騎士クラスのアーチャーとランサーだ。

仮に陣地ではないところでキャスターたちが闘うことになったとしても、いかなるセイバー一人どうにかするのは苦しいと思う。それでもキリエは陣地以外では戦わないと言う。

キリエは基本自信のある態度を取っているくせに、それと行いがちぐはぐだ。しかし、セイバーは「無理に陣地で戦ってやることもない」と言っていたが、マスターのキリエがこれでは陣地から引きずり出すことも難しい。

一成はため息をつくくと、くるりとキリエに背を向けた。

「……悪リーけど、暇じゃない。行くところがあるんだよ」

「あら、どこかしら」



「教会」

「何故？まさか」

キリエははつと息をのみ、嬉しそうに言った。「聖杯戦争をリタイアするのかしら！」

「違げーよ。そーいやこの聖杯戦争の監督役って会ったことねーから、顔ぐらい見といてやるかって思ったただけだ」

キリエはどこか残念そうに息をつく、一成を見上げた。

「リタイアして引きこもるなら命くらいは助けてもよかったのだけど。私、あなたに個人的な恨みがあるわけじゃないし。それに、この戦争何かがおかしいもの」

一成がキリエに聞きたいことは多い。いつからアーチャーが裏切る算段をつけていたのか、今はどうしているのかと個人的なことだからキャスターの力などまで。だがキャスターについてキリエが答えるわけもなく、アーチャーのことに至ってはアーチャーに直接ぶつけると決めている。だから、一成は最後の一言だけ尋ね返した。

「……この戦争がおかしい？」

「ええ。貴方は心当たりないかしら？もちろんマスターとしては絶好調なのだけれど、何か、私の中に霧がかかっているような感じがするの。それに、私がサーヴァントを数え間違えることなんてありえないのだけれど……」

キリエの症状について一成は何もコメントすることができない。サーヴァントの数、といえば霊器盤が狂っていることがあるが、今その話をキリエにすることはできない。キリエに教会と結んでいることが割れてしまう。

「俺にはわかんねえ。じゃあな」

一成はあっさりキリエの脇を通り過ぎた。そのまますたすたと歩くのだが、奇妙なことに直ぐ後ろをついてくる小さな足音がある。誰のモノかは言うまでもない。

「……何でついてきてんだア!!」

「私も教会に行こうかと思ったの。言われてみれば、私も監督役と直

接面識はないのよ。別に、特に用はないのだけれど」

キリエはしれつと答えた。おまけにいつものようにエスコートしろと言わんばかりに手を差し出している。どうもキリエ相手には腹を立てたり苛ついて見せても不毛な気がする。一成はええいままよとその手を取った。

「カズナリ・ツチミカド。道中カズナリ・ツチミカドの絶対滑らない話をしなさい。聖杯戦争の話題はNGよ!」

「なんだそのハードルガン上げは……」

お人よしと言われたことはあまりないのだが、明には「良い奴」と言われたことがある。もしかしてそうかもしれないと半ば頭を抱えつつ、一成は滑らない話を考え始めた。

結果として一成の話は駄々滑りであった。むしろすべり芸。頑張り認めるわ、とキリエは相変わらずの高飛車さを見せつけるだけだったが、彼女としては一成が色々話をするだけで満足だったらしくそうこうする間に教会へ到着した。

その荘厳な佇まいは冬に相応しい。教会の入り口まで伸びる石畳の両側に、花壇が造られて冬の花が咲いている。だが少々花の量自体が物寂しいのは気のせいだろうか。

そして教会に入るまでもなく、その花壇の前に立つ神父と修道女が目に入った。何やら重大な話をしている——特に修道女の方が——らしく、声をかけにくい。すると、たまたま神父と修道女が同時に一成たちに気が付いた。

客人に気づいた修道女は、深刻な顔色を直ぐに打ち消すと修道服を翻して向き直った。

「あら、あなたたちは……」

「……聖杯戦争のマスターだ。俺は土御門一成、こっちはキリエスファイル・フォン・アインツベルン」

「ご丁寧ありがとうございます。私は神内美琴。この聖杯戦争の監督役補助をしているわ——こちらは父の御雄で、監督役をしているの」

よろしく、と一成は軽く返して、キリエもワンピースの裾を持ち上げて優雅に礼をした。隣の神父のことは知っていたが、一成にとって

この修道女のごことは初耳だった。

明よりも年上で、二十代半ばくらいだろうか。きりつとした感じの美人だが、優しく迷える子羊を導くような感じではなく、むしろ商社で元氣よくプレゼンするキャリアアウーマンという印象が強い。

「今日は何の御用かしら。一応ここは中立地帯だから、棄権するのではないならばむやみに近寄らないでほしいわ」

見た目通りの性格らしく、きつぱりと美琴は言い放った。それを遮るのは、これまで黙っていた神父だった。神父はやおら振り返ると、鷹揚な笑みをその顔に浮かべていた。

「——そう邪険にせずともいい、美琴。どうせ我々には今、聖杯戦争関連の仕事しかなく、マスターの問いにもこたえることはその仕事のうちだ」

「聖杯戦争の仕事しかありませんけど、サーヴァントの戦闘の後始末が大変なんですよー」

「それもそうだ。だが、そう急くな。お前の用は了解している——暫く休むといい」

どうやらこの修道女はかなり忙しいらしい。神父はぼんと美琴の肩に手を置いて労うと、教会の方へと彼女を促した。美琴も疲れていることは否定せず、一成たちに一礼をして礼拝堂の方へ小走りで消えて行った。

「ようこそ客人——土御門一成、そしてキリエスフィール・フォン・アインツベルン」

美琴の姿が消えたことを確認してから、神父は、躊躇いなくそう言った。またキリエも神父のごことは知らない、その特徴的な容姿——透けるような肌に紅い目でわかつたのだろう。黒いカソックを着た神父は背が高く、一成より十センチは上だ。

年齢は良くわからないが四十から五十半ばといったところか。精悍、といって差し支えない顔立ちをしている。

「何か用があれば、私が承ろう。——思うに、土御門一成、リタイアの申し出か？そのアインツベルンのマスターは今や三騎のサーヴァントに従える身。いかなセイバーとて一人では苦しかろう」

神父はキリエと一成の顔を見比べながら、あくまで真摯に問うた。先ほど、キリエも一成のリタイアを問うた。キリエの問いは純粹にそうするのかという疑問から浮かんだものだと感じたが、この神父は違う。声音はどこまでも真摯でありながら、一成の身を案じての言葉では決してなく、同時にセイバーのマスター・明の身を案じているわけでもない。

「聖杯戦争を無事に終わらせられれば」、一成も明もどうでもいいのだろう。

一成は力強く首を振った。

「違う。遅くなったけど一応監督役の顔くらいは確認しておこうと思っただけ。時間もできたから。それだけだ」

「そうか」

それきり、言葉は途切れた。どんな監督役か顔を拝みに来たはいいが、特にこの神父に聞きたいことがあるわけでもない。というより、あまり長くご一緒していたい相手ではない。それでもこのまま帰るには何か来た甲斐がない気がして、一成は口を開いた。

「さっきの、神内美琴さん？監督役補佐だったけど」

「そうだ。あれは私の娘だ。血は繋がっていないが。他にもスタッフはいるが、主に私と美琴で聖杯戦争の処理を行っている」

「オウウ・ジンナイもミコト・ジンナイも胡散臭いモノね。貴方たち二人とも魔術師崩れの聖職者じゃない」

キリエは鋭い目つきで背の高い神父を見上げていた。一成はさっぱり気づかなかつたが、魔術師としても優れるキリエは二人に宿る魔力をはっきりと感知していた。魔術協会と聖堂教会は長年抗争を続け、いまでも水面下では争いが絶えないがそれだけ長い付き合いというところでもある。

神父はその手の反応には慣れているのか、やはり鷹揚に笑うだけだ。

「これは手厳しい。魔術を志していたのはもう三十年以上前の話なのだ」

「ま、私の邪魔をしなければどうでもいいけれど。それよりも春日の教会は、まさか管理者の碓氷と結託してなどいないわよね」

一成は頭から冷や水を被せられた気分になった。キリエの視線は鋭く、怯みもせず神父を見上げている。一成は自分が動揺しないように余計なことを言わず黙っていることに努めつつ、そつと神父の様子をうかがった。

「確かに碓氷との厚誼はあるが、なぜそのようなことを聞く?」

「私もアキラ・ウスイとカズナリ・ツチミカドが同盟を組んでいることは知っているわ。でも、中立の立場であるあなたも知っているようだったから」

出合いがしらに確かに神父はその類のことを言っていた。失言かよ——一成が自分のことさておき神父を見たが、彼はみじんも動じていない。

「私が使い魔を放っていることもあるが——バーサーカー戦後だったか。サーヴァントを失い大けがをした土御門を七代目がここに連れてきた。治療のためだが——そのまま彼を引き取ろうとしたが、七代目が彼を碓氷邸に連れ帰っていたからな。それ以来、リタイアの音沙汰もない。あとはわかって」

本来は使い魔で明と連絡を取っていたために知っているのだが、あくまでキリエ向けの方便だろう。そして教会で治療を受けたことを知らなかった一成も驚いていたが、キリエはいまだに挑戦的なまなざしを神父に向けている。それでも神父は慌てずむしろ子供をなだめるような口調で続けた。

「神秘の秘匿という点では目的が重なる部分もある。しかし今この状況——アインツベルンと碓氷、生粋の魔術師同士の戦いに於いて、私が碓氷に肩入れする理由はないと思うが?」

生粋の魔術師の戦いならば、神秘の漏えいはまずあり得ない。ゆえに碓氷に肩入れする理由はない。神父は肯定も否定もしない。元々は相互不干渉——最強のマスターと神父の視線が交錯したのも僅か、キリエの方が先に力を抜いた。

「それもそうね。つまらないことを尋ねたわ、オユウ・ジンナイ——カ

ズナリ・ツチミカド？あなたは何か聞いておきたいことはないのかしら」

すっかりいつもの様子に戻ったキリエは、もう興味はないとばかりに神父から目を離れた。相変わらずの彼女のギャップは慣れないが、一成は思い出したように神父に問いをぶつけた。

「……そういえばランサーってキリエにぶんどられたんだろう。ランサーのマスターはリタイアを望んでここにいて聞いただけ、会わせろよ」

「それはできない。ランサーのマスターは疲労で寝入っている。お前は何かしらの話をランサーのマスターから聞きたいのだろうが、リタイアした者を戦争にかかわらせるのではリタイアの意味がない——それに、ここは中立地帯だ。土御門一成」

もし話を聞きたければ、個人的にランサーのマスターに渡りをつけることだと神父は言う。明と手を組んでいるのだからそれくらいいいだろうとも思うが、今まさに教会と管理者の結託を危ぶんでいたキリエがいれば然も在らんの対応だった。

それ以外にももう問うことがなく、一成は踵を返そうとしたその時、神父の方から声をかけてきた。

「土御門一成、私からお前に問いたいことがある」  
「何だよ」

「お前はサーヴァントを失った。しかし確氷に協力して戦いを続けるという。しかしそれではお前の願いは叶わない。ならばなぜ、お前は戦いを続ける？」

同じことを明にも聞かれたことを、一成は思い出した。これから仲間となるものとして明の問いは当然であり答えるべきものであったが、神父から問われて答える義理はない。

だが、ここで無言を貫き答えを拒否することは、何故か逃げであるように感じられた。

「——俺の目的は、アーチャーをぶんなぐることに。それと、この戦争をこれつきりで終わらせることだ」

「――ほう」

何故か神父はそこで興味深げに口元を歪めた。一成の願いは神父のそれとも近いもののはずだ。無事に聖杯戦争を終わらせる。そしてもう二度とこんな戦争を起こさせない。

「普段は私が迷える子羊を導く立場なのだが――さらに一つ問おう」  
つかみどころのなく、何を考えているのかよくわからない神父。あまり関わりたいと思わないのだが――不思議とその時の神父の姿はどこまでも尊く、ある意味純粹に見えた。

「戦いは、悪か？」

あまりにも唐突な問いだった。その真意はわからないが、一成は領くことはできなかった。戦うことは悪ではない。生きる上で、人が進化していくうえで、戦うと言うことは欠かせない過程である。誰も争わない、争いもない、動かない世界は死んでいるのと変わらない。故に、一成は首を振った。「違う」と。

「ならば――戦いを悪ではないと思いながらも、何故お前はこの戦争を二度と起こすまいとする？」

「てめえで命かけて戦うって決めて、それで死ぬならまだいい。だけど、この戦争は誰を犠牲にしてもいいから勝つてやつがいたら、全く関係ない人間を巻き込むことになる。それは間違ってる」

神父はじつと一成を見つめていた。一成は続ける。

「――それに、バーサーカーのマスター。命のない女の子だった。そんな子が、助かるかもしれない希望を目の前につるされて、普通の判断なんかできんのかよ」

そしてあのアサシンのマスターも、魔術に関係のない一般人らしい。

本当の望んだものにだけ、相応しい者だけに令呪が配られるならいい。しかしこの戦争は違う。人食いを良しとする人間にも令呪を配り、切羽詰まって後のない少女にも令呪を配る。当の一成とて、まだ「根源に至りたい」と思っていた時分に、殺し合いのなんたるかさえき

ちんと自覚せずに戦争へ乗り込んだのだ。

一成は人殺しを良しとしない。だが、相応の理由を持ち命を懸けなければならぬのなら、それを否定することもできない。しかしそういう戦いをするには、この聖杯戦争とやらは不備があまりにも多すぎる。

「だから糞みたいなのこの戦争はこれっきりにしてやる。もう終わるだ」

一陣の風が吹いて、花壇の花が靡いている。神父と一成の間に吹くそれは、まるで何かの断絶を示すように冷たかった。

「土御門一成——お前は戦いを否定しない。だが、お前が否定しなかったそれは、最早戦いなどではない」

「はっ？」

一成はあつげにとられ、神父の顔をまじまじと見つめてしまった。だが、神父はそれ以上語ることはなかった。あつさりと他に問うことはないかと聞き返してきたのだ。

流石にこれ以上、一成に問うべきことはなかった。キリエは既に神父に興味なく花を眺めているだけだった。これでもう本当に用はない。一成はキリエの手を掴んで踵を返した。

「——邪魔したな」

「また来るといい、陰陽師にアインツベルン」

\*

空は抜けるように澄んでいる。春日市で起こる夜の戦争の気配を微塵も漂わせぬ快晴の青は、まさに平和そのものようだった。何のイベントもなくいつも以上に静謐な雰囲気漂わせる春日教会。

御雄神父は陰陽師の少年と聖杯の娘が立ち去っていた道を、何をす



るでもなくただ眺めていた。

「本当の戦いとは見苦しく醜悪で無慈悲で無残、欲望がむき出しになり容赦なく凌辱と蹂躪を繰り返しながら、欲望したものを手に入れる過程のことだ。願いとは欲望。欲望の前には仁義も礼儀も何も存在しない」

あの少年の語った、あの少年が「良し」とした戦いは培養された戦い、ぬるま湯のような戦いだ。むろん彼とて現実における戦いがそんな御綺麗なものではないことくらい知っているだろう。彼が言うのは「あえて聖杯戦争なるもの造りだし行うなら、培養された戦いであるべき」ということだ。

あれは魔術師ではない。神父はそう思う。土御門一成の倫理は、あくまで一般人のものに近い。

「土御門一成——もしお前が私と同じ時分に生まれ、西洋魔術を修め、私に近い位置にいたのであったとしたら——」

神父の考えていることは益体もないことである。既に聖杯戦争は始まり、始まっている以上そのマスターとサーヴァントは余すことなく神父の監督対象であり観察対象でしかないのだ。恙なく聖杯戦争を完遂することが、神父の正直な目的なのだから。

だからこのようなもしも、は本当に意味のない想像でしかない。

「お前は私の敵であり、私はお前の敵であつたらう」

## 12月4日② 第八の契約

結局教会を出た後はキリエと別れた。キリエもキリエで大西山にて何かするべきことがあるのか、エスコートしろとも言わずにあつきりとしたものだった。

完全に慣らされていたのか、拍子抜けの感すらあった一成はホテルへ向かう道すがらにあるメトロウェイというチエーンのレストランで適当に昼食を見繕い、ビニール袋を引っ提げてホテルへ戻ってきたのであった。

ひとまず明とセイバーの部屋へ戻ると、流石に明は起床している……と思いきや、まだ眠っていた。とりあえず買ったサンドイッチをテーブルの上に置いた。

「ほら飯買ってきたぞ。どうせお前も食うんだろ」  
「当然だ」

サーヴァントに食事は不要なはずだが、どうも周りのサーヴァントはそれぞれ食事が好きだ。セイバーは適当にサンドイッチを掴むと、椅子に座って早々と口に運びはじめた。

「どうだった」

「どうだったって何がだよ」

「神父に会ってきたのだろう。どう思う」

正直意味の分からない問答をしてしまったとも思うが、あれはキャスターと戦うに当たり何の参考にもならない。またセイバーは魔術師的観点からの意見を欲していたのかとも思ったが、それなら明の方が神父との付き合いも長く適任のはずだ。

ゆえに一成は本当に思ったままのことを言った。

「胡散臭くてよくわからねえ神父。あといけすかねえ」

セイバーからバカにされることも予想していたが、予想外にセイバーは何も言わず「ふむ」と言っただけだった。

「あと、確氷にも後で言うけど、アインツベルン、キャスターのマスターに会ったぞ」

「何!?それで殺したか!?!……いや、昼の暗殺は……そもそも最強のマ

スターをお前が……何か有益な情報を手に入れたか」

徹頭徹尾バカにしている感丸出しの言葉だったが、最早いちいち取り合うのが面倒臭くなつた一成はスルーすることにした。とはいえ、有益な情報もない。

「あんまねえよ。あいつ、万全を期して戦いたいから陣地から出て戦うことはないつつつただけ」

「キャスターが陣地で戦いたがるは道理だ。だができれば引きずり出したい」

「あいつにその気はなさそうだった。キャスターは黙ってれば陣地が強力になるしな……」

恐らくキリエは一成たちが襲い掛かってこなかったとしても、しびれを切らせて大西山から飛び出してくることはないのだろう。最強のマスターでありながら、これまで一度も戦いに出ず見の立場を貫いてきた彼女だ。

「三騎を以てしても陣地でしか戦わない……万全に万全を期すマスターということか」

キリエスフィールに直接会ったことがあるのは、この中で一成だけだ。セイバーは彼を伺ったが、一成は答えることができない。万全を期すマスターといえ、確かにキリエはそうなのだろう。

「……キリエ、あいつよくわかんねえんだよな。万全つかむしろびびってんのかつてくらいだし、でもなんか態度は自信満々だし」

ふと、急にセイバーは険しい目つきで一成を睨んだ。

「……方が一、俺にキャスターのマスターを殺す機会があり、そしてお前がそれを防ごうとするなら、俺はお前ごと叩き斬る。いいな」

うっかり一成がキリエスフィールをキリエという愛称で呼んだことから、セイバーは強く念を押した。セイバーは一成を護れと明に言われてはいるが、絶好の機会をおいては話は変わるつもりなのだ。一成もそうした場合に助けてもらおうとは思わない。明には明のなすべきこともある。

しかし、一方セイバーの方が難しい顔をしてつぶやいた。視線は熟睡中の明にある。

「……まあ、マスターが何か言うなら話は変わるが」

昨夜の奇妙な酒宴。サーヴァントが互いの願いを語り合う場にて、セイバーは「他のサーヴァントを皆殺しにし、戦争に勝つこと」が望みだと言った。手段を気にしない彼のことから、マスターが死んだことによる消滅でもいいのだろう。

基本真剣で冗談の通じないセイバーがあの場合で嘘をついていたとは思えない。その割には、マスターである明に対しては遠慮がちである。そして明は魔術師であっても、一般人への被害を良しとしない。

「よくお前確氷とやっていけてるよな。あいつ、手段選ぶだろうし」

「……マスターのその点に関しては未だ異議がある。しかし不思議なのは、既に人を殺めたことがあるうにあれほどまでに殺すことを拒むことだ」

セイバーはさらりと言ったが、一成にとっては聞き捨てならない言葉だった。

明が人を殺したことがある。確かに魔術師として生きていくならば、そうしなければならぬことがあるのは彼とて知っている。だが、これまで付き合ってきた確氷明という人間は、多少常識からずれているが親切で優しくかった。ゆえに一成は今一つ彼女のそういう場をイメージできなくなってしまうていた。

「おまえ、それ確氷に聞いたのかよ」

「聞かずともわかる。マスターからはそういう匂いがする」

セイバーは深く説明をしない。する必要もないと思っているのだろう。サンドイッチを食べ終わったセイバーは、アサシン達の様子を見ると言い残して一度部屋を後にした。一成も報告はしたので、セイバーが出ていくことを止めなかった。

「……そうだよな、お前、魔術師だもんな」

またしても勝手な感傷だ。明は何も変わっていない。たくさん助けてもらっているうちに、自分と同じ思いで戦っているのではないかと一成が少し勘違いしてしまっただけだ。それでも、一成は自分の目で見て知っている彼女を信じるだけだ。

彼は勢いよくサンドイッチを掴むと、自分を腹を満たすべくもりも

りと食べ始めた。

\*

明が二度寝から起床したのは結局午後二時であり、流石に明自身もぎよつとしていた。

その後、同じく再び眠りについてしまった悟が目を覚ましたということで、明、セイバー、一成で隣の部屋に向かった。予想通り空いたベッドにアサシンがゴロゴロと転がっていて、窓際の方に悟が横になっていた。

一成はベッドに近づいて、横になっている悟の顔を覗きこんだ。顔色は悪いが、意識はしっかりしている。一成の姿を認めると、彼は浅く会釈した。

「あ、初めまして……山内悟です。話はアサシンから聞きました。よろしくおねがいます」

「こ、こちらこそ初めまして。土御門一成です。こいつはセイバー。それでこっちはセイバーのマスターの碓氷明」

一成はぎこちなく自己紹介と、ついでにセイバーと明を紹介した。昨夜、撫物の成果あつて悟は目を覚ましていたが、アサシンとの話で空気を読んで退出した一成、ましてや明たちのことは記憶にないようだ。

彼の眼はぎよつとしたように一成の明らかに生身ではない左腕を見たが、失礼だと思ったのかすぐに逸らされた。

「それじゃ、令呪の委譲をします。山内さん、失礼します」

一成はベッドにのりあげ、悟の右手を取った。手の甲には、二画の令呪が刻まれている。深く深呼吸して心を落ち着ける。ところが、そこへ割り込む者が居た。

腕を組んだアサシンが、値踏みをするような顔で一成を見ている。

「ちよつと待った坊ちゃん」

「……なんだよ」

「これからお前は俺のマスターになるわけだが、その前にお前の聖杯にかける願いを聞かせろよ。いいだろ」

セイバーたちに助けを請いに来た割に、ふてぶてしい態度を崩さないアサシンだと思っていたが、本当にふてぶてしい質である。しかし、これから共に戦う相手ならば、確かにその質問は道理である。

それにしても今日は良く願いを聞かれる日だ——一成はさらりと口にした。

「願い？そんなもんねーよ」

「へえ……じゃあ、なんで君はこんな戦争をしているんだ？」

疑問の声は下から上がった。腕を取られた悟が、心底わからないと言わんばかりに見つめている。今まで遠慮していた問いが、震える唇から洩れた。

「……土御門君、その腕は」

一成は知らないことだが、バーサーカー戦を覗いていた悟は事の顛末を知っている。知っているが、問わずにはいられなかった。

「自分のサーヴァントに裏切られて、令呪ごと腕がれました。これは義手です。俺はこの戦いが命がけだってことは、ちゃんと知ってます」

「……なら、何で願いもないのに戦うんだ……？親は？」

悟は本当にショックを受けた様に、冷たい光を放つ左腕を見ている。もし腕を亡くしたことを親に言えば、この人のように、それ以上に悲しむだろうと一成は思う。

悟の反応は当然のものだった。聖杯戦争を始めてから、改めて魔術師の常識には馴染めてないとわかってしまった一成にとって、むしろ懐かしい反応だった。

「親は知ってます。事後承諾で、無理やりですけど。……俺が戦うのは、俺のサーヴァントを倒す為です。そして、この戦争を終わらせるためです」

「……何故……君のサーヴァントは、君を裏切ったんだろ？」

「でも、アレを呼び出したのは俺です。それにあいつは贅沢病をこじ

らせすぎてアホな願いを叶えようとして、とりあえず怒鳴りつけて一発ぶんなぐらないと気が収まりません」

「贅沢病？」と悟は間の抜けた顔をしていたが、一成は気を取り直して続ける。

「……そしてこの聖杯戦争は、戦争に関係のない一般人を巻き込むものです。これ以上そういう犠牲を出しちやダメだと思います。だから、俺はこの戦争を終わらせるために戦います」

「……それは、君がしなきゃいけないことなのか？」

信じられないといわんばかりに、悟は目を丸くして一成を見上げる。いつの間にか、彼の掌は悟の手を強く掴んでいる。

確かに、一成がどうしても「しなきゃならない」ことではないだろう。アーチャーの件とて、身の安全を考えるならばとっと忘れてしまふべきことだ。

それでも、一成は戦うと決めた。

「しなきゃいけない、ことじゃないです。俺がしたいんです。聖杯戦争をやるって決めたのは自分なんで、最後までやり遂げなきゃ気が済まないんです」

信じられないものを見たような顔で言葉を失った悟へ、続けて告げる者がいた。

「土御門はこういう理解しがたい妙なヤツですが、そういうことです」  
「妙とはなんだ!!」

一成の後ろで黙っていた明が、まだ眠そうな口調で言った。一成の後ろに立って、その顔を悟に向けた。「さっき紹介されましたけど、私はそこにいるセイバーのマスター、碓氷明です」

「……あ、どうも……あなたは、願いがあって参加しているんですか？」

「そうですね。詳しく説明はしませんが、魔術師の究極の目標「根源」に至ることが願いです。ついでに、私は親からやれって言われてやっているの、ご心配には及びません」

明としては疑問の解消を早めただけだと思ったが、親が勧めるということに驚いた悟は口を開けて固まっている。今更、彼が一般人で魔

術のマの字も知らなかったことを思い出し、明は付け加える。

「魔術の家系とは得てしてそういうものです。魔術は死ぬこととみつけたり、死を観念するところから始まります。死にたいわけではないですけど、恐れることでもないんです。もちろん、これが一般との死生観とはかけ離れていることは知っています。だから一般人の貴方は早くこの戦いから離れるべきです。そして、あなたの命は必ず私たちが助けます。それが私の義務でもありますし」

「安心しろ、あのキヤスターは俺が殺す」

真剣な明と、薄笑いを浮かべているセイバーの姿に悟は口をつぐむしかできなかった。

黙ってしまった悟とは正反対に、アサシンは俄かに上機嫌だ。

「坊ちゃん、そういうわけなら俺は喜んで使われてやろう。特にあのクソ閨白をブチ殺すあたり、気に入った」

「なんか語弊があるような……って、なんでお前アーチャーの真名知ってたんだ」

一成の知る限り、アーチャーはアサシンと戦った覚えはない。悟が呪われた際にやりあったと聞いていたので、その時に見破ったのかと勘繰るも、違った。アサシンはけろりと答えた。

「ああいい忘れてたけどよ、俺らバーサーカー戦観戦してたし酒宴も見てたからな。怒るなよ、その時はコイツ見習い期間みたいなもんだったんだからな」

明と一成は驚いたが、今となっては些細なことである。どうせ共に戦う以上、セイバーの真名も知られる。しかし、セイバーは不快そうにアサシンを睨んだ。

「そう怒るなよ皇子さま。それより、大切な神器を俺に盗まれないよう気をつけたほうがいいぜ？」

セイバーが剣呑な空気を醸し出すが、アサシンがすぐに柳に風と受け流し話を変えてしまった。すっかり話がそれってしまったが、まずは令呪の委譲を行わなければならないのだ。

「与太話はこんくらいにしようぜ。じゃ、坊ちゃん頼むぜ」



「つかお前が与太話始めたんじゃねーの。まあいいか……山内さん、力を抜いてください」

「あ、ああ」

今度こそ一成は集中する。己の内側に意識をむけて、魔術回路を意識する。鈍痛が体に走るが、慣れた感覚故にむしろ安心する。悟も目を閉じて、余計な感覚を遮る。

「……アサシン、ごめんな、ちゃんと戦えなくて」

「いーつつてんだろハゲ」

そもそもアサシンは悟が聖杯戦争をすべきではないと思うのだ。悟は本当に余計なことばかり抱え込もうとする。むしろこの展開はアサシンとしては最高の展開である。

キャスターに呪われていると言うことさえ除けば。

「——行くぞ」

一成が静かに告げる。握った一成の手と悟の手が強く耀きを放つ。一成に遠い記憶がよみがえる。アーチャーを召喚し、自分とは別のモノに魔力が流れつながらる感覚。その感覚が再び蘇るとともに、彼はまた戦いに身を投じるのだ。光が満ちる。

「——告げる！ 汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に！ 聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら——」

アーチャーと契約を交わしたのも、既に遠い過去のようだ。魔力が場に満ちて吹き荒れる感覚を思い出しながら、一成は覚悟を新たに高らかに宣言する。

「——我に従え！ ならばこの命運、汝が剣に預けよう……！」

「アサシンの名に於いて誓いを受ける。お前を我が主として認めよう——！」

アサシンの太い声が、地から響くように呼応する。一瞬の魔力風が吹き抜けた後に、一成はすでにアサシンとの間にパスがつかつていくことを確認した。

右手の甲には、悟の甲にあった令呪が浮かんでいた。

「——契約は無事済んだみたいね」

「おう。坊ちゃんの魔力が流れてくるな。流石に悟のよかはいいい魔力だ」

アサシンに魔力を供給する必要がなくなったことで、悟の体は今より若干楽になるはずだ。明は一仕事終えた一成に向けて肩を叩いた。「お疲れ様。夜になったらまたやりたいことあるから、ゆっくりしててよ」

明は棚の上にある灰皿に手をかざして穢れ切った人形を燃やしてから、セイバーを連れて部屋を出た。

\*

何と自分は愚かなのだろうか。

何と自分は勘違いをしていたのだろうか。

何を自分は一人を気取っていたのだろうか。

本当に死の淵を覗きこむまで気づかなかった。

彼の従者は、何度も何度も言っていたのに。

「命を賭けるなんざ、命しかない奴がやることだ」と――。

彼は「聖杯戦争を戦うためにこの世に現れた」と言った。何でも願いを叶えるという「聖杯」なるものの使用权を巡る争いに、自分は「参加する」と宣言した。己の命をかけて、取り戻したいものがあると、暗殺者の英霊に告げたのだ。

自分がつまらない人間だと、何のとりえもないと思っていた。

それは今も変わらない、変わらないけれど――恐ろしかった。

己の命を失うことが、ではない。

命を失うことにより、二度と妻と、娘に会えなくなるこの方が恐ろしかった。

――聖杯など、いらぬ。時を戻さなくても、妻と娘は消えない。そんな些細なことにすら、これほどに追い詰められなければわから

ない。気づいたところで、自分の命は消えようとしている。

酷く体が熱かった。下半身はもう自分のものではなく、ゴムの塊がくっついているだけのように感じる。痛みはないが、息が出来なくて苦しい。眼を開いていると思うが、世界は闇に包まれている。ここではないどこかへ引きずられていくような感覚に、底知れぬ恐怖を覚えた。

その中で、己の手が何かに触れる。温かく、武骨な手のようだ。苦しみ以外の全ての感覚が消え失せていく中で、唯一道しるべの如く頼れたのはその暖かさだけだ。

その手が誰のものかわかる。全てを始めた、暗殺者。

その彼に伝えるべく、雲をつかむように、声を絞り出す。

果たして本当に彼に伝わっていたのか、自分にはわからない。

ごめん、俺は、戦えない——確かに伝えるように、何度も何度も繰り返す。

そうして全てを吐き尽くした後に、残った一つだけの願い。

「——助けてくれ」

一成も明とセイバーの後に部屋を去ったため、今この部屋にいるのは悟とアサシンだけだ。アサシンと悟を繋いでいたモノは失われたが、彼らは何一つ変わっていないかった。

「……アサシン」

「何だ」

「俺ってすごく場違いなとこに紛れ込んでたんだな」

「そうだな」

悟が他のマスターと顔を合わせるのには、一成と明が初めてだった。そもそも魔術の存在を知らなかったのだから当然である。

魔術、サーヴァント、聖杯戦争、全くの別世界の話に少し慣れたかと思つたやいなや、再び自分とは全くかけ離れた世界の事象だと思ひ知らされた。

最も違うのは価値観である。

一成の方はまだ理解できた。アーチャーにこだわることはともかく、一般人に被害を出さない為に戦うということは悟にもわかる。

だが、セイバーのマスター、碓氷明の方は本当に理解ができなかった。「根源」なるものは見たことも聞いたこともないし、その上「死はいつもそばにあるもので、恐れることではない」という感覚は理解しがたい。

こんな危険な戦いに「戦え」と向かわせるその親の気持ちも分からない。それに、彼女のサーヴァントはかつてのアサシンのマスターを殺したという。

明とセイバーは悟を助けようとしてくれていることは間違いないのだろうが、何を考えているのかわからないのが正直なところだ。

「アサシン、魔術師つてのはあの碓氷さんみたいなもんなのか？」

「さあな。俺は関わったことがねーからよくわかんねーや。だけどお前と同じ常識で生きてはいないヤツらだろ、前のマスターもそんな感じだったしな」

「そーいや、前のマスターはなんで殺されたんだ」

セイバーに殺された、という事実だけ知っているが、悟は経緯を聞いていない。悟の知るアサシンは、乱暴だが気のいい奴である。決して悪い者ではなく、おめおめマスターが殺されるのを黙って見ていたとは思えない。

「前のマスターとはソリが全然合わなくてな。そりやもういつか裏切つてやろうと次のマスターを探すくらいにな。んで、マスターと言ひ争いになつて、いいつて言うまで戻ってくるなみたいなこと言われな、んじやそんならいいわつて思つて離れてた隙にセイバーにマスターを振じり殺された。令呪を使う間もなかつたんだろーうな」

アサシンは襦袢の中から煙管を取り出して吸い始めた。にやりと口角を上げてからからと笑う。

「ま、今となつちやむしろ殺してくれてありがたいがとうつてくらいだけだな。あんなんといつまでもいられつか」

「……ありがとうって……」

流石にあんまりな言い草に、悟はアサシンを睨んだ。アサシンはおや、と言わんばかりに紫煙を吐き出してから笑う。

「確かに俺は弱きを助け強きを挫く、庶民の妄想ユメだぜ？だが、正義の味方かと聞かれれば絶対に違うね。そんなもん反吐が出るぜ。俺は俺が助けたいと思うものしか助けねえ」

権力と権威に抗う者。全うに対抗できるならば、全うに対抗するに如くはない。だが、それができなかつたからこそ、庶民は義賊のアサシンを生み出した。

しかし、義賊と称えられても彼は所詮盗賊であり泥棒であり、法の外にあるものである。全うな正義の味方が、法の外にあつていいわけがない。

「ま、前のマスターは運がなかつたつてこつた。流石に傍にいりやあ護るくらいくらいの事はしたぜ？マスターがいないと現界できねーからな」

「……運。じゃあ、俺は運が良かったつてことか？」

「どうだろうな。俺を拾わなきゃこんな死にかけの目に遭わなかつたらうよ」

確かにアサシンを拾わなければ、生死の境をさまようことはなかつただろう。

だが、会わなければこんな簡単なことにすら気づかないままだったかもしれない。悟は悪い顔色のまま、精一杯の空元気を見せた。

「……いや、お前に会つたのはラッキーだったよ」

「そうかい。じゃ、俺はお前を死なせないように頑張つてやるか。あと、とりあえずセイバーたちは信用しとしても平気だろ」

彼らの事を何を考えているのかわからない、と感じていることを読まれたようで悟は驚く。「え？」

「お前がいま、俺と会話ができるくらいくらいの状態で済んでるのはどうしてだと思つ？」

「それは土御門君が魔術を使つてくれたからじゃないのか？」

「それもあるけどな、坊ちゃんのは状態が安定した前提があるから効果を上げてんだ。——今お前の体には、あのセイバーの剣、宝具が入ってる」

「えっ!? 剣!？」

剣が身体に入っているなど正気の沙汰ではない。悟は慌てて腹を触ったが、アサシンに頭を叩かれた。

「阿呆。魔術礼装だからシヨーみたいに串刺しになるわけねーだろ。とにかく、あいつらは宝具つて切り札をお前に貸してくれてんだ。しかも大盗賊たる俺の前で」

一成がマスターになったということもあるが、悟が体から剣を出しさえすればそれを盗むこともできる。伝説上、セイバーが剣を失えばその戦力が落ちることは目に見えている。

それでも明とセイバーは悟を助ける為に、その剣を貸した。

「アレは神の剣だからな。今のお前は神様に護られてるってヤツだ」  
「そうなのか」

悟は己の体をしげしげと見てから、一成を見た。「なんか申し訳ないな、土御門君と碓氷さんに」

「おいお前が一番申し訳なさそうにするべき相手は俺だぜ？俺はなんて人身御供なんだマジ涙がちよちよぎれる感動巨編じゃねーか」

今では状況もありに共にキャスターたちに立ち向かうことになったが、最初は「俺を好きにしていいいからこいつを助けてくれ」から始まったのだ。自害を命じられてもおかしくない事態にもなりかねなかった。悟はやつと思いついたように言った。

「そういえばそうだった」

「そういえばかよー………ったく、もう寝てろ、無駄な体力使うな」

安定しているとはいえ呪いが体を蝕んでいることに代わりはない。悟自身も喋って疲れたようで、素直に目を閉じた。

しかし、アサシンと悟が運が良かったのは事実であろう。本当にキャスター陣営に勝てるかどうかは別として、一成、明、セイバーはキャスターを倒すという点では利害が一致している。それに、一成と明は基本的人にお人よしなのだ。魔術師であろうとなかろうと、お人よ

しはお人よしだ。

そして権威と権力に抗う者としてはやや業腹ではあるのだが、おそらく悟に対するアサシンの態度と明というマスターに対するセイバーの態度には相通するものがあるのだ。それを感じたからこそ、割合あつさりとセイバーはこちらを信じたのだらうとアサシンは思った。

手段を択ばないということは、汚い手をよしとすることだけを意味するわけではない。目的を成すためなら、どんな苦痛や屈辱も耐え忍ぶことも含むのだ。

12月4日③ 山は神域、山は陣地、山は根城

「其の目は赤かがちの如くして身一つに八頭・八尾あり。また其の身にひかげとひすぎとたにとやまに蘿と檜相生ひ、其の丈は谿八谷、峽八尾に度りて、其の腹を見れば、悉く常に血に爛れたり」——『古事記』

\*

ほおずきの様に赤い目、八つの頭に八つの尾を持ち、その体には苔や杉が生え、大きさは八つの谷、八つの山に匹敵し、腹には常に血が滲んでいる——日本における最高ランクの幻想種の一、八岐大蛇こそキヤスターの親である。

その身は怪物でありながら、氾濫する川の化身である水神でもある。八岐大蛇は出雲国に降り立った素戔嗚尊によって、酒を飲まされて眠った隙をつかれて討伐されてしまう。

その後八岐大蛇は、命からがら近江国の伊吹山まで落ち延びた。既にかつての力はなかったが落ち延びた先で、人間に変化した八岐大蛇は——伊吹弥三郎と名乗り、近江の国の大木曾殿の娘と愛し合うようになる。

だが父親も結婚を許し、無事婚儀を行おうとして酒を飲んでいた時に、弥三郎はその正体を現してしまったのである。驚いた大木曾殿は、すぐさま弥三郎を切り殺した——しかし、その娘の腹にはすでに子が宿っていた。

そして切り殺されたはずの弥三郎は、何の加護もなき人間に殺されるはずもなく、そのまま人里を避けて伊吹山に移り住み、その主となった。

そして残された胎児は母の腹にること三十三か月の長きにして生を得たが、生まれたその時に歯が全て生えそろう、人語を解して記憶もはつきりしている赤子であった。

恐ろしくなった大木曾殿はその赤子を伊吹山の山中に捨てた。

しかし——八岐大蛇の血をいただくその赤子には、少なからぬ神性



が宿っていた。伊吹山に捨てられても、かつての父と山の猪や蛇、狼に育てられながらその異形の血を受けた少女は、すすくと成長した。

少女は伊吹山で暮らしながら、何の不自由も感じなかった。時たまに父と己を山の神として崇め供物をささげる人々や討伐に来る人々もいたものの、彼女の生活は概ね平和なものだった。

しかし、生まれてすぐに「人ではない」と捨てられてしまった少女は何故自分が捨てられたのかわからなかった。生まれてこの方山で蛇や猪たちと暮らしてきた少女にとって、人間とはたまに自分を崇めに来る者。

姿形は同じなのに、なぜか自分を恐れ崇める者達であった。

少女が寂しさを感じていたわけではない。共に暮らす自然、動物がいれば彼女に不満はなかった。ただただ、人間なるモノがとにかく不思議だったのである。

——一度、山を下りて見よう。

八岐大蛇——時を経て伊吹山の神と呼ばれるようになった父は、その彼女を引き留めた。彼は言った。「お前は人ではない。人と共に生きることはできない」と。

しかし、その父とて彼女とは同じではなかった。かつては最高の幻想種であり神でもある父は、人の血の混じった彼女とはやはり違うモノであった。

少女は「人ではない」と言われ、母に捨てられてから長い時を人ならざる者と共に過ごしてきた。

だから。今度は「人間」を見てみたい。

半身を異形、半身を人間として生まれた少女は、長い時を経て——それこそ、決して人間ではありえないほどの年月を経て——若く幼いその姿のまま、人間の世界に足を踏み出した。

人間の世を渡り歩く中で、山にいたときに捧げられた酒という飲物を、特に好んで飲み続けた。また、人の身ではない少女は、男とも女ともつかない美貌により多くの男女を虜にした。

魔性ともいえるその魅力の放射は、多くの人々の人生を狂わせ、恋患いにより死に追いやった。だが、少女はそのことを悪いとも何とも感じない。

——姿形は同じなのに、どうしてこうも違うのだろうか。

姿かたちは同じであるのに、彼らは自分よりも遥かに脆い。自分は可笑しなことを何もしていないのに、彼らは何故か自分を非難する。悲しくはないが、少女はただただわからなかった。わからなかったが、それを繰り返すうちに彼らが「やはり父の言う通り、自分と彼らは違う生き物なのだろう」ということだけは理解できた。

——自分のようなものは、恐らくこの世で自分だけなのだろう。

そういう風に達観した少女は、ある日もらった恋文をまとめて燃やすことにした。男女の怨念のこもった煙は、人々をあまりにも惑わせずすぎた少女を鬼の姿——身の丈三メートル、角が五本のおぞましき怪物——に変えたが、彼女に動揺はなかった。

元々人ならぬ身だったものが、外見まで人でなくなったただけの話である。

少女は昼は人の形をとったが、夜は異形となってしまう体となった。

それでは人間の世を渡り歩くことはいよいよ難しい。

故郷に似たどこかの山にでも身を隠そうかと思っていた時に、少女は運命に出遭った。

丹波国に立ち寄った時のことだった。少女は丹波山に、異形が住んでいると言う話を聞いた。聞くところによれば、その元人間は生まれるときから歯が生えそろう、人語を解したことを恐れられ捨てられていたところを髪結に拾われたという。

その時点で「どこかで聞いた話だな」と少女は思い、興味を覚えた。そして髪結に拾われた異形はわざと人の額を切って血を啜るようになり、それを両親が咎めたところ急にいなくなってしまったそうだ。

そして、その異形は今丹波山に住み着いているという。

少女はもちろん丹波山に向かった。その山で出会ったのは、髪紅く角を生やした男。上流から小川の流れる音が響き、雨上りの湿った空気の中で邂逅だった。

運命と言うものを感じたことのない少女だが、彼女はその瞬間、運命の出会いを信じたのだ。

少女は、岩の上に佇む男に向かい、静かに言の葉を紡いだ。

「あなた、人間ではないでしょう」

「お前もだろう」

静謐な山の中で、二人の間にはそれ以上の言葉はなかった。一目見て、お互いが人ではないことを知った。そして始めて、「同族」というモノを知ったのである。

この世で自分は一人きりではなかった——その気持ちを何と表すのか、二人は知らない。けれど、今まで周囲に感じていた違和感が雲散霧消するほどの感動があった。

二人を繋いだのは友情か、親愛か、恋愛か、言い方は様々あれど、どれでもよかった。

少女の人生で、最も輝いていたのはこの時期から死ぬまでである。連れ合いの男は茨木童子と名乗り、少女は彼と共に丹波と山城国境の大江山を本拠地として暴れまわった。茨木童子という同族がいることを知った少女は、次々と同族を発見し大江山に来るように誘いをかけて、配下を増やしていった。

京の姫君や若君を攫い、日夜山で大騒ぎ。しかし彼らに悪意はない。人間と彼らは「別の生き物」であり、同族を殺すのに躊躇いはあるが、人間という種族を殺すのにためらいなどあるはずもない。人間から見ればおぞましい殺戮の場であっても、彼らには楽しい酒宴だった。

今思えば、とキャスターは述懐する。

「あの時は嬉しすぎて調子に乗ってたのよねえ。私一応伊吹童子——お父様、神の使いっぱの時代を合わせるとかなり長く生きてるようになるんだけど、そのうちのほとんどはひとりぼっちだったから、すつ

ごく楽しかったの」

長い長い、一人が当然だと思えるほどの孤独の果てに見つけた同族たちの宴は、底知れぬ喜びをキャスターに与えた。だが、終わりはあつけなく訪れた。

当時の平安京に跋扈する鬼の話は、朝廷にまで知れ渡っていた。

時の天皇と藤原道長——アーチャーの命により、源頼光とその四天王である渡辺綱、坂田金時、卜部季武、碓井貞光がキャスターたち大江山に住まう者どもを討伐するように命じられたのである。

彼らは石清水八幡宮等に参詣したのちに、神の化身に出遭い「山伏姿で行き、この酒をのませなさい」との助言を受ける。その酒を手土産にした討伐一行は、まんまとキャスターらに面会し、酒好きなキャスターたちはその酒を飲み動けなくなってしまった。

武士姿に戻った一行は、その隙についてキャスターたちの首を討ち取った。だまし討ちにあったキャスターは、死の間際に「私たちは卑怯なことなど何一つしなかった!!」と叫んで、息絶えた。

打ち取られた時は激しい怒りを抱き人間を皆食らってしまったわなかつたことを悔やんだほどだったが、直に人間が憎いとは思わなくなった。仮に人間が鬼たちを食い物にしていたら、同じく自分も人間を憎しみを以って討つだろうからだ。

やりすぎたのだと、キャスターは悟った。

しかし本当に憎いと思わなかったのは、おそらく、彼の人は生きているだろうからだ。

息絶える直前にキャスターは見た。

神経を侵す毒の入った酒をあまり飲んでなかったのか、茨木童子が這う這うの体ながら走り去るのを。自分はもう胴と首が離れている。間もなく意識も消え果るだろう。

ならば、せめて彼の人が生き残ってくれるならそれでいいと、キャスターは今わの際で思ったのである。

——しかし。

彼の人が生き残ってくれるのは嬉しい。けれど。

——おまえをひとりぼっちにしてしまうな。

同族のいる喜びを知った今、お前は一人ぼっちに戻っても大丈夫なのか――。

生まれてこの方、キャスターは嘘をついたことはない。良くも悪くも、全てに対して正直だった。興味を持って山を下り、楽しいから人を食べ、嬉しいから暴れた。それはとても楽しいことではあったが、人間を害することでもあった。

ならばもし、人間を害さないならば自分たちはあのまま、大江山で楽しく暮らせていたのではないか――。

そう思いながら、現世に呼ばれたキャスターが聖杯に願うことはただ一つ。

「人間もいない、鬼だけの世界をつくりたいの。私たちが楽しく永遠を過ごせる理想郷、そういうのが欲しいの」

\*

山の夜は寒い。十二月ともなれば、それもひとしおである。微風にさざめく森の音を聞きつつ、キャスターは月の光を浴びながら笑っている。

片手で酒の入った竹筒をくるくるともてあそぶ。

「鬼の姿って好きじゃないんだけど……じゃあご主人、使っちゃうわよ?」

キャスターをそのまま幼くしたような少女は、赤い瞳を上に向けて命じた。キャスターは今の姿では、全開の三分の一の力も発揮できない。そのうえ、拠点の秘匿にこだわったマスターのキリエにより、この山は全域に人払いがかけられた上に魔力を漏らさぬ結界まで張られている。

そのキリエが、ついにキャスターにすべてを露わにすることを許可した。

「構わないわ」

キャスターの周囲に自然風ではない風が吹き荒れる。大がかりな魔術を行使する場合につきものの魔力風が大気を動かしていく。それと同時に、キャスターの纏う巫女服がはじけ飛ぶ。月光で煙の中にいるキャスターの輪郭が、徐々に女性のそれではなくなっていく。腕が太く、背が高く、頭には角のようなものが浮かび上がる。

煙が晴れてみると、そこにいたのは体長三メートルを越し、頭に角が五本、鋭く大きな目が睨む、黄色く長い髪を振り乱している大鬼だった。体は赤く、腰に太い荒縄で布を巻きつけている。この巨大な体躯そのものが凶器であり、最強の鋼の肉体である。

キャスターは器用に筒を首から下げ、マスターのキリエを肩に乗せた。キリエは物怖じする様子もなく、長い髪を掴んで捕まる。

「嫌がるほど悪いものでもないと思うけど？キャスター」

「あまり綺麗な見た目ではないからな」

予想通り野太い声で話されるが、口調が変わっていることにキリエは首を傾げた。

「あら？貴方女ではなかったの？」

「女の姿が好きだから女でいただけで、本来はどちらでもないぞ」

「あらそう」

キャスターはそのまま空いた左腕を天に向ける。再び風がざわめき、どこからともなく紫電が飛ぶ。電撃は激しさを増して稲光る。

一カ月間にわたって町中から少しずつ集められた魔力と、霊地である大西山そのものから回収した魔力を使用する。地鳴りがキャスター自身をもまとめて揺るがし、まともな人間は立ってられないほどの揺れが起きる。紫電は渦を巻くように飛び散る。

そしてキャスターは号令の如き雄叫びを上げた。

「我が部下！人にあらざる者！皆、楽天地を求めらばいざ集まれ！いざ従え！」おおえやまにようまよゆけ『大江山百鬼夜行!!』

紫色の光の柱が、大西山から雲を衝いた。キャスターの周囲の木々が根こそぎ吹き飛び、ふもとの一帯が更地と化す。上空の雲は渦を巻き、この季節に気味の悪いほど温い風を轟々と吹かせはじめる。妖

魔の類が好む魔力をたつぷりと含んだ風が吹き荒れる。真夜中の暗く沈んだはずの山に狐火が灯り、火の玉がぼつり、ぼつりと明かりのように浮かび上がる。

キャスターほどの大きさはないものの、それでも三メートルもある赤鬼、青鬼がどこからともなく現れ我が物顔で闊歩する。一角の鬼、三つ目の鬼、骸骨そのものと湧き出る水の様にあふれる。

しかし、それらの鬼、妖魔よりも遥かに強大な魔力を持った人間の姿の四体が、キャスターの背後に現れた。四天王と称された茨木童子、星熊童子・虎熊童子・熊童子が恭しく片膝をついている。キャスターは振り返り、地を唸らす深い声で彼らをねぎらう。

「お前ら、よく来たな」

「つて、お頭が呼び出したんじゃないですか！」

笑顔でそう言ったのは、星熊童子である。二メートル近い背丈のたくましい男だ。鬼の代名詞である金棒を肩に担ぎ、黄色の鉢巻を撒いている。久々の娑婆が嬉しいと言わんばかりに、そのまま金棒を振り回す。

「おい星熊、相変わらず落ち着きのない……」

うんざりしているようで、懐かしさを感じている虎熊童子は双剣を持った女だ。真っ白い髪を頭で一つに結び、さらさらと月光に輝かす。着流しのような青い服に身をつつんでおり、中性的である。

熊童子と金童子は、何も言わず静かにキャスターを見上げている。二人とも小柄な少年のなりであり、寺の稚児のような水干を身に纏い、頭には日本の角がはつきりと生えている。二人の違いは熊童子の方が赤い水干で、金童子は青い水干であるぐらいで瓜二つだ、

キャスターは強面だが、それでも声は懐かしさに満ちている。

「再開を祝して酒宴をしたいが、それはまだお預けだ。勝利の後で、たらふく飲ませてやる」

キャスターの『大江山百鬼夜行』おおえやまにようまよゆけは、生前のキャスターが大江山の鬼の首領として、時のあらゆる妖魔魑魅魍魎の類を従えたことによる宝具である。分類としては召喚術であり、真名開帳によりかつての部下である鬼・妖魔を召喚して使役することができる。

しかし一度この宝具を開帳してしまえば途中で止めることはできない。陣地と化した土地は、キャスターの消滅まで魑魅魍魎の行きかう異界となりはてる。

八岐大蛇でもあった伊吹山の神の申し子であり、長い年月を経て鬼と変化した魔物。日本三大悪妖怪の一つに数えられる、大江山の酒呑童子——それがキャスターの正体。

「ここに居る限り、お前たちは死んでも死なない。だから、何度でも死んでもらう」

「相変わらず鬼使いが荒いぜ。全く変わらないっすね」

意味深なキャスターの言葉を瞬時に解し、星熊童子を筆頭に四天王は笑う。かつての頼光四天王により壊滅させられて以来の再会に、鬼たちは湧く。しかしそれはまだ早いと、誰もが分かっている。キャスターは指で肩にのせたキリエを指差した。

「今度は俺が首領なら、こっちの姫は大首領だ。お前らわかっておけよ」

「お頭がそうおっしやるなら、私たちは従うまで」

虎熊童子の凜とした声が冴え、他の者たちも同様の意を示す。

「よろしくお願いするわ、酒呑童子四天王」

キリエは怖じることなく、スカートの上をつまんでお辞儀をした。彼らの首領がそういうならば、鬼たちは従うのみである。

大西山ならぬ大江山は、今宵より鬼と魑魅魍魎の巣窟と化した。

\*

時刻は夕方だが、この時期にあつては疾うに日が沈みきつた午後五時。明、セイバー、一成、アサシン、悟の五人はアサシンたちの部屋に集合して、それぞれがベッドの上に座って作戦会議を催していた。明は人差し指を上に向けて立てて口火を切る。

「とりあえず、アサシンも共に戦うことになったわけで、今日は偵察に



行ってもらいたいんだけど」

キャスターが自ら拠点を明らかにした。キャスターと言うクラス上、かつ今日一成が聞いた話によれば彼女は自ら打って出ることはない。拠点を明かしたのは、セイバーたちを迎え撃つ準備が完全に整ったからに他ならない。

キャスターとセイバーでは、クラス上は圧倒的にセイバーが有利である。しかし、スキル「陣地作成」を持つキャスターの根城で油断するのは命取りだ。キャスターというクラスのサーヴァントはそのスキルゆえに、時間が経てば経つほど強くなる。早く戦いに行くべきであるが、前情報なしに行くのは危険すぎる。

アサシンはおうと声を上げて、「そこは当然俺の仕事だな」

「うん。絶対に気配遮断を解いたらダメだからね。あつちはアサシンがいること、知らないんだから」

キャスター陣営はこちらにはセイバーしかサーヴァントがいないと思ひ込んでいる。それはこちらにとつて数少ないアドバンテージである。アサシンは強く自分の胸を叩く。

「わかってらあ。そこんところはキツチリわきまえてるぜ」

「頼むぞアサシン。あ、俺も様子を見たいから視界をよこせよ」  
「了解」

アサシンは軽く返事をしてから、明とセイバーに向き直った。

「じゃ、俺が出てるときは悟の面倒をたのむぜ」

「あ、アサシンこれ貸してあげる。キャスターの魅了くらいなら退けられると思う」

明がアサシンに手渡したものは、飾り気のない黒いブレスレットだ。アーチャーとキャスターに襲われた時に魅了にかけられたアサシンを助けるべく、彼女が家から持ってきたアイテムである。

幸いキャスターの魅了は明や一成でも抵抗できるランクであったため、このブレスレットがあれば魅了に惑わされることはない。アサシンはさんきゅーといい、それを受け取った。

そしてアサシンはホテルのベランダから飛び出していった。一成もアサシンの視界に集中するため、悟の部屋を出て明の部屋へと一人

移った。

部屋には明、セイバー、悟が残されている。彼等の窓から見える街は闇に沈んでいる。バーサーカーの残虐が止んでも、あの殺人事件は世間的には未解決の事件である。またいつ惨殺が起こるか、人々は戦々恐々として暮らしている。

明が一成から聞いた話によれば、近隣の小学校・中学校では下校時間を早め、かつ集団下校を実施しているという。近隣の高校でも部活動は中止され、早い下校が勧められているそうだ。バーサーカーが消滅したとはいえ本当に聖杯戦争が終わるまで、春日は暗く魔力に包まれたままなのだ。

とりあえず明たちはアサシンが戻るまですることはしない。時間も時間で食事でもしようかと明は考えたが、一成は集中しており、悟も動く元気はないだろう。外食で彼らを放置するわけにもいかない為、出前を取ると言う結論に落ち着いた。

出前は取れるが、チラシの類はない。一階に共有のインターネットがあるので、それを利用すれば注文することができる。

「セイバー、悟さん、何か食べたいものありますか？」

悟は食欲がわかない為に首を横に振った。セイバーは何故か「うなぎ」と言ったが、明は「和食ね」と素知らぬ顔で変換して外へ出て行った。

自然、部屋にはセイバーと悟が残される。セイバーは昼の間に整えられた一成のベッドに寝転がると、何をするでもなく天井の一点を見つめていた。

悟は一日毛布にくるまって寝ているため、体調は優れないが既に眠くない。

悟はマスターである一成、明が聖杯戦争に参加する理由は一通り聞いたが、このセイバーのことは聞いていなかった。アサシンにはもう願いが無いらしいが、このサーヴァントには何か願いがあのだろうか。

聞いてみてもよかったが、悟はそもそもセイバーにあまり良い印象を抱いていない。

それはアサシンの元マスターを殺したのが彼であることによる。其の為、じつと剣の英霊の姿を見てしまっていたのだが、その視線をセイバーが感じないはずがなかった。

「何か用か」

「……あ、いや………セイバーさん、にも聖杯にかける願いつてあるんですか？」

悟は何と呼ぶべきか迷い、さん付けで呼んでしまったがセイバーは呼び捨てでいいと言ってから答えた。

「俺に願いはない」

「……じゃあ、なんで戦いを続けているんですか」

「願いはないが、目的はある。俺以外のサーヴァントを悉く殺し、この戦争に勝つことだ」

バーサーカー戦を覗いていたため、悟もセイバーの真名は知っている。日本最強をその名とする古今無双の英雄だそうだが、美しい見た目からはとてもそうは見えない。

しかし勝つことが目的というが、悟にはその真意がわからない。

「何で勝ちたいんですか」

「……俺が勝利するのは当然だからだ。それ以上問うのならば半殺しにする」

今まで天井に向けられていた目が、俄かに悟に向けられる。殺意をもった視線に射抜かれ、悟は金縛りにあつたように動けなくなった。まるで挨拶のような軽さでありながら、吐かれた言葉は間違いなく本気である。

悟が凍りつき言葉を失った時、丁度扉が開いてセイバーのマスターが姿を現した。

「良く考えたら私あんまりお腹すいてないけど、とりあえず適当に弁当をたのんで……って何この空気」

重い空気を感じ取った明はつかつかと寝転がるセイバーに近づくと、なんといきなり彼の頭からひよろりと立った一本の毛——要する

にアホ毛を引っ張った。

「……何をやるマスター」

しかし当の明はセイバーを気に掛けなかった。「悟さん、すみません。多分セイバーが殺すとか八つ裂きにするとか滅多切りにするとか膾炙りにするとか言ったのかもしれないけど、気にしないでください」

「……良くわかったな。しかし気にするなどは何だ、俺は本気だ」

「こんな調子ですけど、今のところセイバーの「殺す」は「やあ元気？」とか「金貸してくれ」くらいの感じで受け取っておけば問題ないですから」

悟は顔面を引きつらせた。明はマスターだからこそけろりとした顔で言えるのかもしれないが、こちらは元敵マスターである。アサシン曰く「マスターまで殺すのは往々にしてある」だそうで、気が休まらない。悟の様子に気が付いたのか、セイバーの文句を無視しながら彼女は笑った。

「本当に大丈夫ですよ。セイバーが本当に殺す気なら、悟さんは今頃死んでますし。むしろセイバーが「殺す」とか言ってるときは殺しません」

「……俺は殺すとは言ってない。半殺しと言っただけだ」

「あ、そこは妙に気をつかってくれてたんだ。相変わらず気の使い方がよくわからないなあ」

明は呑気にセイバーと話していたが、悟を安心させるようににっこりと微笑んだ。

「そうそう、セイバーは私の意に反することをしようとするのとパラメータが下がるんです。キャスターという強敵を相手取るときに、そんなことはしないですよ」

「……はあ」

悟から見れば明も十分常識の埒外にある。セイバーの人格をわかっている悟は苦手意識をぬぐえないが、マスターの明に害意はないことはよくわかっている。

「そういえば、悟さんはなんでアサシンと契約したんですか？消滅し

そうだったアサシンを拾ったとか？」

明は適当に言ったが、それは奇しくも見事に当たっていた。

「……そうです。家の近くにアサシンが寝転がってて、声をかけて家に連れてきて、そしたら契約だの聖杯戦争だのの話になって」

「けど、アサシンは強い願いがあるみたいでもないし……あなたは無理やり戦わされてたっていう風にも見えませんでした。何か、願いがあったんですね」

明は悟の目を覗きこむ。彼は苦笑してええいままよと正直に語る。

「……一年前、冤罪を押し付けられて会社を辞めさせられました。妻とは別居状態、子供ともなかなか会えません。昔から貧乏くじばかり引いてる質で、それで今度のこともあって……。何でも願いが叶うと聞いて、時を巻き戻してやりなおせたら、と、思っただんです。……自分でもつまらないことを考えたと思っています。こんなこと、また妻と子供と暮らすことなんて、そんなつまらない願い、聖杯なんてなくても……命を差し出して戦うことじゃなかったんです」

悟は自嘲する。今思えば、あれをヤケクソというのだろう。自分には何も残っていないと思いつめた果てに、本当に死に瀕するまで間違いに気づかなかった。

己の願いは、聖杯などというもの継るべき願いではないと。そして気づいた今となっては手遅れで、自分が助かるかどうかも分からない。

アサシンの機転により今はかろうじて生を繋いでいることも承知している。

聖杯戦争に勝利する点でいえば、明たちはすでにアサシンを手に入れているのだから、悟を見殺しにしてもいいのだ。それでも助けようとしてくれるのだから、悟は彼らに感謝の念を禁じ得ない。

「……つまらなくなんかないですよ」

「……え？」

顔を上げると、明がまっすぐ悟を見ていた。淡々と話す女性と思っていたが、今の彼女の視線からわかるのは、限らない真摯さだ。

明は本心を以ってウソ偽りなく悟の言葉を肯定する。

「悟さんの夢はつまらなくなんかありませんよ。いい夢です。……私  
じや頼りないかもしれません、あなたの事は必ず助けてみせます。  
それが私の責務でもありますから」

明は一息入れて、さらに続ける。「助かった後は、もう聖杯戦争のこ  
とは忘れてください。これはあなたのような普通の人が関わるべき  
ことじゃありません。この戦争は、魔術師わたしたちの戦争です」

その瞳は、悟のように死を遠いものと思う人の目ではない。常に傍  
に置き、いつ身に降りかかってきてもおかしくないことを知っている  
目である。頼もしさを感じると同時に空恐ろしくもあり、さらに自分  
よりはるかに年若い女性に生死をかけた戦いをさせる罪悪感があつ  
た。

「……決して無理はしないでください」

「そう気をつかわないでください。貴方のことがあろうとなかろう  
と、どうせ私は戦うことになっていたんですから」

「俺が負けることはありえない。ゆえにマスターは死なない。悟とや  
ら、要らぬ心配をするな」

いつの間にかベッドの上から上半身だけ起き上がったセイバーが、  
顔もむけず当然のように言い放った。そして彼がベッドとベッドの  
間にある備え付けの電話に手をかけたとき、電話が鳴った。出前が到  
着したとの知らせだった。

部屋の前まで来てもらおうと、明が金を払い弁当四人前とおかゆを一  
人前抱えて、窓際の小さい机の上に置いた。

食事をとるような部屋ではないため、明とセイバーは行儀は悪いが  
ベッドの上に座って弁当を食べることになる。おかゆは悟の為に一  
応頼んだのだが、やはり食欲のない彼は遠慮した。

黙々と食事をする明とセイバーを見ながら、悟はここにはいない一  
成とアサシンのことを思いだした。机の上に置きっぱなしになって  
いる弁当は彼らのためのものだ。悟は何の気もなしに尋ねた。

「……土御門君は、どんな魔術を使うんですか？」

「陰陽道です。魔術っていうか呪術に近いところもあるんですけど……  
その辺聞きたかったら土御門に直接聞いてください。魔術師はあん

まり他人に自分の魔術について話すものじゃありませんから」

「あ、そうなんですか、すいません」

(……ん？　そういや土御門って人を直接害する呪術はできないけど、人を害さない呪術はできる？　そして治癒は呪術寄りってあいつ言ってたよね……)

明が何か考える傍ら、申し訳なきそうにしながらも、悟はまだ聞きたいことがあるのか質問を続けた。

「アサシン、キャスター……すごい強い敵のところに行つたみたいですが、大丈夫ですか？」

「アサシンの気配遮断は他の追隨を許しません。攻撃をしかけたりしなければ絶対に気づかれません」

悟にはやはり「そうですか」としかコメントできなかつたが、不安を一かけらも見せない明とセイバーを見て信じることにした。その時、ハンバーグを箸で持ったまま、セイバーは何か異議ありと文句をつけた。

「俺も魔術には詳しくないが、アサシンも同じでかつ土御門も強い魔術師ではないだろう。アサシンとアレでキャスターの陣地のことがつかめるのか？」

セイバーは随分辛辣だが、間違いではない。一成自体は未熟な魔術師である——が、この聖杯戦争において彼は一つのアドバンテージがある。明は口の端に米粒をつけたまま、真面目な顔で口を開いた。

「土御門家はこの聖杯戦争を始めた切欠の一つ。春日の聖杯はインツベルンと土御門の魔術師を核にして成っている。その上御三家は聖杯より漏れ出た魔力が流れ込んでいるからね」

「……つまり、土御門君の魔術師としての力は聖杯戦争においては、補正されてるってことですか？」

「そんなかんじです」

やはり話の半分も理解できていない悟と、胡乱な目つきをしているセイバーだった。明はから揚げを口に運びながら、云々唸った。

「土御門の家が陰陽道について一流なのは本当だし、土御門から私へと視界を繋げるのも手間だし。とにかく待ってみよう」

12月4日④ 未だ喚ばれざるもの

ランサーがキャスター・アーチャー陣営に襲われ奪われるという大事件が起きた。拠点にて突如キャスターたちに襲撃されたハルカ・エーデルフェルトは観念してランサーを引き渡し、教会に保護を求めてきた。

——ここまでが、昨夜の顛末である。

教会は、勿論ハルカの保護を行う。だが監督役補佐の神内美琴は、どうも腑に落ちない点が多くあると思った。

昼の教会は閑散としていて人気がない。この教会も朝の礼拝や信者の賛美歌の合唱の練習を行っている時もあるが、聖杯戦争中ゆえにこのところイベント事は無くしている。よつていつもに比べてさらに人気がないのである。

午前中に元アーチャーのマスターとアインツベルンのマスターが挨拶に来ると言う突発的イベントがあつたが、対応は父御雄に任せていた。彼等は程なく教会を去つたが、同時刻に礼拝堂において長椅子に腰かけ、暖炉に当たる者が一人いた。

ランサーのマスターであるハルカ・エーデルフェルト。彼はゆるりと腰かけて文庫本を開いていた。ステンドグラスが並ぶ通路の奥から、足音高く姿を現したのは、シスターの美琴だつた。父の言葉通り仮眠を取つたがそれもほどほどに彼女は眼を覚まし、毅然と礼拝堂にその姿を現した。

彼女はハルカの姿を見つけるなり近づき、直截に問うた。

「ハルカ・エーデルフェルト。何故あなたはランサーを渡したの」

ハルカは顔を文庫本から上げないまま、美琴に答える。

「何故とは不思議なことをお聞きになるのですね。私はキャスターとアーチャーに襲撃され、とても敵わないと判断した。キャスターのマスターはランサーと令呪を渡せば命は助けると言つたので、私はそれを受けました。臆病なマスターとお笑いになつてもかまいませんよ」  
「教会に逃げてきたあなたには全く戦つた形跡がなかつたわ。服は汚れひとつなく、魔力を消費したようにもみえない……」



「キャスターとアーチャーを使役するアインツベルンのマスターですよ？私は恐れをなしたのです」

「現れただけで、戦いもせず？午前中、襲撃されたと言うあなたの拠点を見に行きました。本当に戦った様子がありませんでした。ぎつと見たのですが傷一つない。これはキャスター側も攻撃をしていないということでもありませんね」

「……何をおっしゃりたいのかわかりかねます」

美琴は一瞬廊下の奥を見やる。すでにこのことは父の御雄にも報告してあるのだ。

「アインツベルンがキャスターとアーチャーを所持しているのなら、居場所のわからないガンナーはともかく、なぜセイバーではなくランサーを奪いに来たのですか？仮に碓氷の家が堅牢だったからやめたにしても——なぜアインツベルンは貴方の拠点を知っていたのですか？そして、アインツベルンはあなたが抵抗もせずランサーを引き渡すとは知っていたのではありませんか？」

ハルカは初めて顔を上げた。おそらく、今言ったことは凶星なのだと美琴は確信する。

この騒動——アインツベルンによるランサー強襲劇は、狂言である。

「貴方はアインツベルンと何らかの条件を以て結託していたのでしょうか。いつからかは知りませんが」

ハルカはアインツベルンと結託していたことを隠したまま、教会・明と結託した。つまり、教会と明から得られる情報をアインツベルンに流す、スパイのような立ち位置にいた。そして概ねの情報収集を終えたところで、自らサーヴァントを手放しアインツベルンに渡す。

あとは最強のマスターたる彼女が残りを駆逐するだけということだ。

もしこれが教会・明に割れば、「根源に至る」という望みのある明とは決裂し、協力を申し出た教会を裏切ることになり全ては決壊する。

「……仮にそうだとしても全ては後の祭りです。しかし、あなたに

とつても困りはしないでしよう。アインツベルンも確氷も神秘が漏えいするような戦いはしないはずです」

「……確かに結果だけみればそうでしょうね。だけど、魔術師としてあなたは根源に至れないことになる。それを構わないとすることがわからないわ」

ガンナーなるサーヴァントの実態は知れないが、三騎を従えるアインツベルンに敵うとは考え難い。日本最強を冠するサーヴァントを従える明とてかなり厳しい戦いを強いられることになる。アインツベルンの勝率はより高くなる。

しかしアインツベルンにサーヴァントを捧げたハルカは根源には至れない。魔術師は根源に至ることを至上命題とする生き物である。アインツベルンと縁もゆかりもない筈のハルカがそこまでするとすれば、一体何があると言うのか。美琴には、その一点だけがどうしてもわからない。

ハルカは文庫本を閉じて立ちあがった。

「採点します。いいところ、二十点ですね」

ポケットに手をいれ、取り出されたのは一つ美しく輝くルビー。そして彼が得意とする魔術を思いかえせば、ここがすぐさま戦場となることは明らかだ。

「な……!!」

「Neun、<sup>九番</sup> Ncht、<sup>八番</sup> Sieben<sup>七番</sup>」

エーデルフェルトの宝石魔術——美琴とて、かつて魔導を志した人間である。しかし、まるで予想だにしない攻撃に反応が遅れた。ハルカの手から放たれた宝石は閃光を放ち、美琴の目の前で爆ぜた。昼間の明るさを圧倒する光量が解き放たれ、教会は光に満ち溢れ、長椅子が破壊されて細かく砕かれた木片と埃が舞い、視界を悪くしている。靄のかかった先を見据え、ハルカは油断なく気配を伺っている。

「……これでおしまいですか?」

「……冗談」

カツ、と靴音高く姿を現した美琴には傷一つない。その右手には、一振りの剣がある。ハルカは目を見開いた。

「おや、私は死徒ではないつもりなのですが」

彼の言も然り、彼女の右手に握られていたのは黒鍵——聖堂教会で使われる悪魔払いの護符、黒鍵だった。十字架を模した剣であるそれは、死徒の体に無理やり人間の頃の自然法則を叩き込み、もとの肉体に洗礼しなおして塵に還す摂理の鍵。

形は剣だが投擲専用の武装であり、むしろ剣としての精度は低い。「悪魔殺し」——代行者にはおなじみの武器であるが、美琴が代行者とは聞いたことがない。それに、投擲の武器ということで何本もの黒鍵を手にして戦うことが通常だ。修道服の下に何本か納められているとしても、彼女は一本しか手にしていない。

「そんなこと知っているわよ。おとなしくしなさい、ハルカ・エーデルフェルト」

「……刀身は魔力で編まれているモノではなさそうですね」

黒鍵を使用する高位の術者はその柄だけを携帯し、戦闘時に自らの魔力で刀身を編むと言う。しかし美琴は黒鍵の切っ先をハルカに向けて、気後れするでもなく言い放つ。

「お生憎様。私は第八秘蹟会所属だけど埋葬機関でも代行者でもないし、そこまでレベルの高い難しいことはできないのよ」

流石は時計塔の魔術師、美琴の魔術のレベルが大それたものではないことは直ぐに見抜いていた。ハルカは静かにポケットに忍ばせた宝石を確認した。彼女はため息をつきながら、その剣の切っ先をハルカに向けた。

「おとなしくしてって言うっておとなしくしてくれば苦労はしないわね。貴方のことは少し調べさせてもらったわ。時計塔の『ジュエル・サイレント・キリング宝石近接格闘術』——見せてもらえるかしら?」

時計塔で名の知られた宝石魔術使い、ハルカ・エーデルフェルト。しかし彼がこの戦争へと駆り出されたのは魔術にたけていることだけが理由ではない。

聖杯戦争において、戦うのはサーヴァントだけではない。マスターを相手取るのはマスターである。その魔術師同士の戦いにおいて遅れをとるような人物は、聖杯戦争には相応しくない。例え堅牢な工房

を作成したとて、毎度敵がそこへやってきてくれるとは限らない。自然、武道にも秀でた人間が選ばれる。

同時に、「聖杯戦争」は時計塔にとつてはあくまで辺境での儀式でしかなく、さらに春日はその贋作。しかし監視の必要はある——至上的は何事もなく終わること。この戦争に送られる者にとつて得るものはなく、かといってしくじることは許されない。故に、戦闘能力に優れると同時に厄介者が選ばれる。

——ハルカ・エーデルフェルト。湖の国の天秤、その分家筋の男。フィンランド 貴族でありながら傭兵のごとき家訓を持つ家柄ゆえに、冬木の聖杯戦争において本家の双子当主が参加をしたこともある。しかしその結果は惨々たるもので、エーデルフェルトは二度と日本の地を踏まないとするほどだったそうだ。

故に分家とはいえ、時計塔ではエーデルフェルトの者が再び日本の土を踏むことにはかなりの驚きがあったらしく、同時に本家の者も引き留めたという。

それでもこの分家筋の男がこの戦争へと赴いたのは、まず碓氷明の父影景から聖杯戦争の話を聞いてしまったことが始まりだ。それから「聖杯戦争にて負った汚名は同じ戦争にて雪ぐもの」と言った、「技術は使わねば錆びる——これほど己の研鑽に役立つ儀式も滅多にな」と言つたなどあるらしいが、結局のところ「魔術師として戦闘を望んだ」ためと、美琴は御雄から聞いている。

しかし分家とはいえ先を案じたエーデルフェルト、それに碓氷影景との縁もあり教会との一時共闘を進められ、彼もそれには諾と答えたそうだ。

だが本当にそうであれば、これまでの彼の態度とは矛盾する。

彼は、あまりにも戦つていなさすぎる。

そして、彼女の言葉にハルカは返事を返さない。それが全ての答え。

動き出したのは奇しくも同時。

「っー」

今度は宝石ではない。前方に突き出したハルカの腕と指は間違はなく美琴を指している。黒い呪い——ガンドが美琴向かって連射される。対象の体調を崩すだけの呪いだ、エーデルフェルトのそれは物理的破壊力を持ってマシンガンのごとく放たれる。

黒い弾丸は教会の椅子を吹き飛ばし壁を抉りその威力を見せ付けるが、彼女はそれにひるまない。

「……当たらないわよ!!」

殆ど人とも思えぬ速さで駆け出し、顔を片腕でガードしながら美琴は直撃を回避する。メリメリと悲鳴を上げて吹き飛ぶ長椅子の破片も見事に躲し、彼女はハルカへと迫る。その動きは女性の速さ——どころか、人間の域さえも逸脱しかかかったほどのもの。

粉塵の中でも彼女は寸分たがわずハルカを逃さず迫る。

「Neun、Nacht、Sieben」

ハルカは小さな宝石を爆発させたが、恐ろしいことに繰り出される剣技による風圧で爆発の攻撃がほとんど殺されている。ハルカは宝石を壁に向かってさく裂させて、狭い教会内に風穴をあけて脱出した。

外は寒々しく晴れ渡っている。石畳の上に躍り出たハルカだが、美琴の姿がない。濛々と煙幕が張られたようになっていて教会内に目を——「アアアア!!」

殆ど絶叫だった。先ほどまでのきびきびした快い声をした女性と同一人物が発したとは思えないほどの裂帛の氣勢である。足元から爆発したように直進するその勢いは暴走する機関車のような。しかしハルカとて武闘派の魔術師だ。

「Es ist gro量s, Es ist klei重n!」

体の軽量化と重力調整を瞬時に行い、魔力を込めた宝石を彼女ではなく足元に向けて叩きつける。暴風と共に半径五メートルの範囲の石畳を粉々に砕き、外に置いて煙幕を張る。だが美琴の剣勢は炎も煙も爆風さえ切り裂く。

直線に向かうのではなく強い力で地を踏切り飛び上がり、真っ直ぐハルカの脳天を狙っていた。

生死を分けたのは刹那の判断。だが、回避には至らない——美琴の振り下ろした凶刃は、上空からハルカの右肩を切り裂いた。

「——!!」

悲鳴さえあげず、ハルカは追撃を逃れるべく強化した体で美琴から距離を取った。幸い右肩から先はくつついているが、どろどろと血を流して激痛を訴えている。

彼の右腕は使い物にはならない。一方直撃を回避された黒鍵はハルカを斬った後、勢い衰えず石畳に深々と突き刺さっていた。当の美琴はその黒鍵を易々と引き抜くと、一息ついて負傷したハルカを見つめていた。

「……私程度には本気を出すまでもないということ?」

「……そんなことはありませんよ。その力は、貴方の魔術特性、ですか」

「そんなところよ」

神内美琴——かつて魔術師であった彼女の家の特性は「放出」。元々空手道を修め、剣だけではく体術にも長ける彼女の肉体は、魔力によるブーストにより驚異的な速度での行動が可能になっている。サーヴァントの中にも「魔力放出」というスキルで筋力を上げる者がいるが、その魔術師版だ。また、彼女の扱う剣術も一般の剣術はかなり毛色の違うものである。

剣としての精度の低い黒鍵だろうか、美琴には関係がない。元々修行でも剣どころか竹刀でもなく、棒切れを使っていたくらいなのだ。

「別に出したくないなら出さなくてもいいわ」

ふわりと修道服の裾を舞い上げた中に見えるは、刀身のついた黒鍵、十本。元々剣として使っていた一本も指の間に挟み込み目に見えぬ速さで投擲される。ハルカは逃れるべく駆けたが、そのルートを予測して放たれた二本によって右腕を貫かれ、背後の壁にまで縫い付けられた。

壁にまでは五メートルくらいあったはずだが、サーヴァント並みの膂力で投擲された剣によって吹き飛ばされたも同然だった。

「ぐ……」

「貴方に聞きたいことがあるの」

美琴にはハルカが全力を出して戦っているとは思えなかった。今まで見たのは普通の範疇に属する宝石魔術で、彼特有の戦闘術ではない。それでも彼女の目的が殺人ではないがゆえに、警戒を解かず黒鍵を構えたまま、一步ハルカに近づいた。

既にこの場には、美琴とハルカだけがいるわけではない。美琴が背後に感じている気配は慣れ親しんだ人物のものであり、先ほど説明した為に彼は事情を知っている。

されど次の瞬間、彼女は背中から刺されたような衝撃を受けた。

内臓がかき回され、熱病に浮かされたように視界が歪んで平衡が保てない。

「……っ」

後ろを見ようと振り返った刹那、首に衝撃を感じて美琴の意識は失われた。確かに彼女は背後に人の気配を感じてはいたのだが、その人物は決して敵ではありえないのだ。だから一体何が起きたのか確かめたく、その眼で後ろを確認したかったが、美琴にそれは叶わなかった。

「——美琴はこの島国においても特異な剣術を学んでいてな」

壁に縫い付けられたハルカ、うつ伏せに倒れた美琴を見ても微塵の動揺も見せず、廊下の奥の居住区画から黒のカソックを纏った神父が姿を現した。彼は教会の中から、ぽつかりと穴の開いた壁を通して離れた位置から彼らを見ている。妙にわざとらしく、傷ついたハルカを面白がるように笑った。

「おや、これはどういう状況だ？ハルカ・エーデルフェルト」

「ご覧になった通りですよ。むしろ、娘に武術のたしなみのあることくらい、私にお伝えしてくれてもよかったですか？」

「それはこちらの失態だ。詫びよう。しかしこの様子、大丈夫なのか？」

神父の発言通り、今のハルカは致命傷ではないとはいえ重症を負っている。それでも当の本人は不自然なほどに涼しい顔をしている。「右腕一本程度、どうにでもなります。しかし事故とはいえ記憶の読み取りがうまく進んでいないせいで、ハルカの体術があまり機能せず困りました」

後ろから美琴を狙撃したのは、この神父。養女である彼女に微塵の躊躇いもなくガンドの呪いを打ち込みハルカを助けたのだ。彼はちらりと倒れた娘を見てから、再びハルカ——否、教会の入り口に目を向けた。

「最後、いや最初のサーヴァントを召喚するために、貴殿に力を拝借したい」

その時、教会の扉が開く。まっすぐ伸びる光と、人物の影。その人物は身長百七十前後、長い金髪の容姿端麗な女性だった。年は二十の半ばを超えたくらいに見えるが、杳として知れない。白のロングコートの下に淡いイエローのボウタイブラウス、紺色のロングスカートを着こなしている。同じく紺色のパンプスが細い足首に映える。

切れ長の眼が笑い、花唇が弧を描いて神父に語る。

「根源に至るか至らないかは興味のあるところよ？けれどどちらにしろ聖杯戦争はあの御三家の大儀礼——私の魔導の肥やしになるでしょうから」

「ならば仮に根源に至るとしたら、お前は どうする？」

「仮に根源に至れるとして——それは魅力的だけれど、私の美学に反するのよ。この儀式でアインツベルンや土御門が根源に至るならそれは道理だけれど、私はこの聖杯に関してはビジター」

女は壊れていない長椅子に腰かけ、ゆったりと手を組んだ。どこか王侯貴族のようなたたずまいすら感じさせ、花唇からは冷たくも快い声紡がれる。

女に比べ、ハルカは礫のままもう何も語らない。

「私は私の方法で根源に至る。此度の目的はもう別にあるの」

聖杯戦争は、二百年以上に冬木の地で始まった根源に至るための大儀礼。アインツベルン・間桐・遠坂の御三家の神域の天才と言われ



た者達が始めたものである。

そして五度にわたり開催され、五回目でその歴史を終えた。

何でも願いを叶える——そのふれこみは、参加者を集めるための方便に過ぎない。七人のマスターを集め、彼らを依代とすることで七騎のサーヴァントを召喚する。脱落したサーヴァントは、座に帰るまえに一度小聖杯に留められる。そして七騎の魂が揃った時、英霊が座に帰ろうとする力を利用して一気に根源へいたる孔を穿つ。

長年かけて溜め込んだ大聖杯の魔力でその孔を固定し、根源に至る道をつくる。それが聖杯戦争の正体、本当の目的である。

もちろん、願いが叶うというのも嘘ではない。

サーヴァント五、もしくはは六騎分の魂があれば、この世における願いは何でも叶うだろう。

だが、根源に至ることは次元が異なる。根源に至ると言うことはこの世界の外にでること、抑止力を超える事で、内にとどまる願いとは全く別である。

そのためには七騎——最後には自分のサーヴァントさえ殺す必要がある。

聖杯は確かに英霊なる存在をサーヴァントとして使役するという、およそ人間に話し得ないはずの奇蹟を具現している。しかし——五度にわたって行われた聖杯戦争——その中で、一度でも根源に至った者が居るかと聞かれたら否である。

そして根源ではなくとも、願いを叶えた者が居たかと聞かれたらそれも否である。

——本当に、聖杯は願いを叶えるのか？

女が最初にそう思ったのも納得できるだろう。女も魔術師として、根源に興味はある。

とにかくそれは確かめるわ——彼女は長い髪を掻き揚げ、言った。

神父は女の隣に歩み寄った。「聖杯以外のお目当てとは？」

「セイバーのマスター・碓氷明。あの子が欲しい」

それまでの峻厳さを感じさせる雰囲気が一転し、女は人差し指を唇

に当てて陶然とあらぬ場所に視線をやった。まるで発情した雌のように、体を震わせている。

「……なるほど。好きにすればいい。だが、彼女は確氷の跡取り。彼女の父親がどうするかわからないが」

「どうせ私は封印指定よ？今更何も変わらないわ」

女は皮肉気に笑い、御雄をちらりと見てから立ちあがる。「できれば生体がいいけれど、死体でもいいわね」

「最初から七代目が望みだったなら、バーサーカー討伐時にバーサーカーに加担すればよかつたではないか」

バーサーカーに加担し、セイバーを二騎で相手取ればセイバーを消滅に追い込めた公算もある。そうすれば明は丸裸である。

「私の話、聞いていた？最初は儀式の観測だけが目的だったのよ。マスター個人なんてどうでもよかつたの。それにハルカちゃんが生き残る為には、あなたと明ちゃんからの情報ももらっておいていいと思つたし、しばらくどっちつかずの蝙蝠でもしてようとおもつて」

「それでも、お前はバーサーカーのマスターを手助けしていたらどう？」

女はああそれ、と今の今まで忘れていたようなそぶりで答える。

「ハルカちゃんの宝石を上げただけよ。体よくセイバーを消滅させてくれればいいなあつて思つたけれど、セイバーはアーチャーと組んでしまつたし」

もしハルカがバーサーカー戦時に明とセイバーに敵対し、そしてバーサーカーがセイバーに敗れていたならその次はランサーを殺しにかかつただろう。ランサーとて名をはせた英霊だが、セイバー相手に必勝とはいかない。女は濡れた瞳で、かつ神父を誘惑するでもない奇妙な色気を以て問う。

「貴方の望みは？ミスタ・ジンナイ」

「何度も言つた筈だ。私の願いは、聖杯戦争の完了だと。正常な聖杯戦争の為には、サーヴァントは七騎召喚されなければならない」

「ほんと病気ね。でも、嫌いじゃないわ、そういうの」

女はくすりと笑うと、優雅な動作で腰を上げた。それから気を失つ

ている美琴をちらりと見ると、朝の挨拶をするように言った。

「そうそう、あの子もらつてもいいかしら？」

「構わない」

「そう。ならハルカちゃん、お願いね」

物言わぬ銅像と化していたハルカが俄かに行動を始めた。傷の悪化にも頓着せず無理やり黒鍵を引き抜き、ポケットに残していた宝石を取り出し——ハルカが数年にわたって魔力を込めつづけたルビーを、気を失ってぴくりとも動かない美琴に向かって放った。

激しい爆音が轟き、地面を激しく衝撃が揺すった。近距離でそれ受けた美琴の上半身は焼かれ、白煙の中に血霧を紛れさせた。

ハルカに手加減をさせていたため、死には至っていない。ハルカの体はロボットのよう動き、動かなくなった美琴の体を担ぎ上げた。

神父と女、それに物言わぬハルカはそのまま、奥の居住区画に向かう。

昼間だから電気をつけていないのだが、暗い空間である。

まっすぐ進んで右手に御雄の部屋があり、霊器盤もそこにある。二人掛けのソファが机を挟んで二つあり、その奥に霊器盤の乗った木製の古い机がある。その左にベッドが置かれており、ハルカはその上に勝手に座り、ベッドに美琴を横たえた。

女はソファに腰かける。

「本当にあなたのいう「七騎目のサーヴァント」は出てくるかしら？」

「霊器盤の異常を話しただろう。それは七騎目——いや、一騎目と言うべきかもしれないが——が原因であろう。彼の英霊はまだ召喚途上のままであるのかもしれない——もつとも、私もこの仮説に至ったのは今日の朝だが」

神父は部屋を回り、霊器盤の表面を撫でる。女は彼の言葉に訝しげに目を向けた。

「召喚途上？」

「アインツベルンが呼ぼうとした英霊は、召喚されなかった。しかしあの触媒で呼ばれるべきはあの英霊のみ——しかし、目的の英霊は現れなかった」

「たんに召喚に失敗したんじゃないの？ 召喚が止まるなんて、ありえるの？ それにもう聖杯戦争が始まって時間が経っているけれど」  
「もちろん、全うにはありえることではない。だが春日の聖杯は冬木の贗作であり、さらに召喚が大聖杯が起動する前の異例の召喚であり、そしてこの日本において破格の力を持つ英霊という条件を鑑みれば」

女は唇に指を当てて、思案気に神父を見上げる。その顔には確かに理知が感じられ、先ほどまでの淫蕩さは身を潜めている。

「仮に召喚途上で止まっている、としましょう。「途上」ということは、その英霊は一度召喚に応答したということでしょう。ならばなぜ一度は応答したくせに、途中で気が変わったのかしら」

「それは本人に聞かねばわからない。だが、英霊を招くのは大聖杯——とすれば、かの英霊は大聖杯に何かを見たのかもしれない」

大聖杯の奥に潜むもの。

そして春日の聖杯は、冬木にて五度の戦いを終えた後の聖杯の模造である——。

「私とてどこまで春日の聖杯が冬木を模造しているのかはわからない。——正しく聖杯戦争が成れば、それもいずれわかる。そして正しき聖杯戦争には、七騎のサーヴァントがいてしかるべきなのだ」

「——けど、なかなかにせこいわねえ。聖杯戦争が進んだ状態で、後出しじゃんけんみたいに召喚されるなんて」

その言葉に神父は反応する。そして鷹揚な笑みを浮かべ、両腕を広げて示す。「私は望むのは正しき聖杯戦争だ。聖杯が目的ならまだしも、そんなことはしない——だが、その再召喚を執り行うには、このままではいささか不安だ」

「触媒は……アインツベルンの本拠地に置いたままなのね」

冬の城に置き去りにされた聖遺物。再召喚に使用したくとも取り寄せるには時間がかかり過ぎ、なにより「何故監督役である神内御雄がそうするのか」とアインツベルンに説明もできない。

そして英霊が「召喚途上」であるとすれば、半ば召喚は成っているのだ。あとは何からのきっかけを作り、こちらに引きずり出す——そ

ここで、女はああと頷いた。

「——あ、令呪のような大量の魔力の補佐がほしいということ」

ふうん、と女は手を合わせて神父を見上げた。神父はステンドガラスの先を見透かすがごとく、目を細めた。

「お前がアインツベルンにランサーを貸したおかげで戦局は動く。近々、少なくともキャスター、アーチャー、ランサー、セイバーの四騎を巻き込んだ戦いが起こるだろう。少なくとも、その中の二騎は消滅しよう。しかし、今朝から七代目との連絡が取れない」

今日、朝に連絡用の使い魔を碓氷邸に飛ばしたものの、彼女の屋敷はすでに無人だった——三騎を得たアインツベルンがいるにもかかわらず、碓氷邸はセイバーたちの拠点として割れていることだ。三騎で襲われれば、流石に要塞たる屋敷でも苦しいと早々と碓氷邸を留守にしたのだろう。

今日、奇しくもやってきた土御門一成に聞くこともできたが、傍らに当のアインツベルンがいるのだから聞けなかった。女は神父を睨んだ。

「あら、それは大丈夫なの？なんなら顔の割れていない私が街を歩いて探してこようかしら？」

神父は咳払いをして続ける。「……その必要はない。教会は戦争による神秘秘匿のためにあらゆるネットワークを持っている。ホテルに仮寓しているであろうから、その特定を急ぐ。魔術師は偽名を使わない。両日中に見つけよう」

「なるほどね——あなたといるとこの儀式を特等席で観測できそうだし、あなたの呼ぼうとしている破格の英霊が、セイバーを倒してくれば万々歳」

女はさらりと立ち上がると、ぱちんと指を鳴らした。それに反応し、ハルカは美琴を背負い先に部屋を出て行った。女もソファから立ち上がると、スカートを翻して出入り口の扉の前に進んでから、振り向いた。

「——けど、そんな英霊を呼ぼうとしたなんて、アインツベルンはやる気があるのかしら？強くて、サーヴァントとしてはド三流よ、それ」

「……かの一族は聖杯を求め続ける一族。サーヴァントならどんな英霊でも御す気構えなのだろうさ」

\*

女を見送り、神父は息をついた。ハルカがハルカではないと思った時にはこの展開になるとは微塵も考えていなかった。だが、これはこれで悪くない。

神父が何かを目論んでこうなったわけではない。仮に目論んでいたとしても、それは戦争が始まるまでの話だ。とすれば、これは「神の御導き」というものではなからうか。

後で講堂の惨状を片付けなくてはならないが、幸い聖杯戦争の煽りで教会にスケジュールはなく今すぐしなればならないことでもない。

神父はソファに腰を下ろし、一人腕を組んだ。

(アインツベルンが動いたはいいが、ガンナーを補足できていない)

召喚失敗により自信喪失をしているキリエを焚き付けるのには苦労した。望外の幸運でアーチャーを手に入れたと言うのに、まだ穴倉を決め込むと言った時には言葉を失った。

しかし、彼女は生まれてからずっと聖杯を得る為だけに生きてきた存在である。そのくせ大一番の召喚で失敗したとなれば、臆病にも見えるくらいに慎重になるだろう。

ひとまずアインツベルンにランサーを貸し与えたのはいいとして、貸したモノを返してもらうにもまた一苦労である。

セイバーが戦う隙を縫って回収するつもりだが、そううまくいくかどうか。

(ガンナーとセイバーを組ませることが出来れば面白いのだが)

そう考えながら、彼の顔は笑っていた。良く浮かべる峻厳ながらも温かみのある笑みではなく、ただただ純粹に笑っていた。聖杯戦争、

正しくあれよと、神父は笑う。

「この戦争が始まった時点で、私の願いは叶っている——」

神父は昔を懐かしむように目を細める。再び礼拝堂に戻ると、思った通り壊れたままの長椅子が当然のごとく放置されていた。ここで聖杯戦争の開始を宣言してから十日近くが経過した。聖杯戦争はおおよそ二週間から長くても一か月で決着がつく。

否、聖杯戦争は急展開さえ起きれば、いつ決着がついてもおかしくない。そういう戦いだ。

そう、神父が「七騎目のサーヴァント」がいると確信するわけは、「七人目のマスター」の存在を知るからに他ならない。そして真に願いをかなえたいならば、現在現界しているサーヴァントが一騎になるまで黙っていればいい。

しかし、その選択肢を神父は論外と断ずる。

かつて、この戦争が始まった時、碓氷の七代目に伝えたように、神父は言祝ぐ。

「戦いにこそ意味がある。その過程にこそ意味がある——ゆえに、私の新たな願いを叶えよう、聖杯」

## 12月5日① 最後の平穩

クマソタケルを下し、返す刀でイズモタケルまでだまし討ちにした小碓命、日本武尊は意気揚々と天皇に復命した。

「きつと父帝は褒めてくださるだろう」と期待に胸を膨らまして大和に帰った彼を待っていたのは——「東方十二国の荒ぶる神、まつろわぬ者どもを平定せよ」という新たな命だった。

お褒めの言葉もなく労いの一言さえもなく与えられた新たな命令に、日本武尊は首を傾げた。報告を申し上げたときも、父帝は全くお喜びの顔を見せなかった。

しかも復命したばかりにも関わらず、「東方十二国を全て平らげる」など、何年かかるか分からない命令を下された。

それでも日本武尊は父帝を疑わなかった。クマソタケルの討伐を遂げて、至難の任務を任せられるほどの者だと判断されたから、自分にお命じになられたのだと信じた。

しかしその思いはすぐに破られた。至難の命令の為に日本武尊に遣わされた軍勢——最早軍勢と呼べるほどではなかったが——は御鉦友耳健日子、おおとものたけひこ 大伴武日、ななつかはぎ 料理人として七掬脛、わたひこのきみ 征西の際に共に居た弟彦公をはじめとするごくごく少数だったからである。

それでも帝の命は帝の命。日本武尊は少ない軍を引きつれて大和を旅立った。出発前、この旅の成功を祈るため、彼らは伊勢の神宮に参った。

そこにはかつてクマソタケル討伐の際に衣装を貸し与えてくれた巫女である、叔母の倭姫命がいる。

天照大神をまつる社の石段で、旅の別れを惜しんで、日本武尊は倭姫命と暫し談笑をしていた。ふと、話が途切れた。

森に囲まれた宮の緑から、突き抜けるように青い空が広がっていた。ここを離れれば、二度と故郷に帰ってこれるかわからない。頬を撫でる風も、土の匂いも、空を渡る鳥も、東の果てでは別物だろう。そうして、二度と見ることも、嗅ぐことも、聞くことも、触れることもないのかもしれない。



「叔母様」

「何でしょう」

「——父帝は俺が死ねばいいと思っただけではないでしょうか」  
東の十二国全てを、数えるほどの僅かな軍で従えよ。それはもう過酷といえる程度をはるかに超えて、要するに——死ね、と言うことに等しい。

そう、父帝は、日本武尊に死ねと仰せになったのだ。

英雄と呼ばれる者が、人には成せぬことを成し遂げる者たちであっても、彼らは死なぬ神ではない。どんなことでも可能にする存在ではない。

冷たい風が吹き抜けた。

その可能性に思い至った時、日本武尊は正直、どうすればいいかわからなかった。ただ、体の中心に穴が開いて、血ではないがそれに等しい何かの流れ出ていくような、そういう気持ちになった。

この空虚をどう埋めるのか彼には見当がつかず、さらに自分が父帝に疎まれる理由もわからなかった。兄の事を不快にお思いになってたと推しはかり、兄を殺し、命じられた通りクマソを討伐し返す刀でイズモをも討ち取った。

——何が悪かったのか、わからない。それ故に彼は叔母に心から問うたのだ。

「叔母様、俺は何かを間違えましたか」

原因があるのなら直せばいい。日本武尊としては至極まっとうな気持ちで、答えを求めていた。叔母は、直ぐにはその問いに応えず、代わりに一振りの剣を差し出した。

深い黒に沈み蛇行する剣。玲瓏として光る青銅に縁どられた神威の剣と小さな袋に入った石を彼に授けた。

倭姫命は神宮の巫女で神に仕える身。神託により何らかの未来を知ろうと、言えぬことは多い。しかし遠き旅に出る甥を思い、彼女ははっきりと口にした。

「あなたは、人の心がわかっておりません」

「……人の、心」

叔母の言うことを、その時の日本武尊は理解できなかった。そんなことを考えたことさえもなかった彼は、何と返事をするべきが迷い、結局叔母の言葉を待った。

その親愛なる叔母は、はつきりとした言葉を放ったが、その口調は暖かさに満ちたものだった。

「それは、これから知ればよいことです。幸いにも旅は、一人ではありませんから」

森閑とした神宮を後にする。僅かな仲間と共に、ついに旅は始まってしまったのだ。

もう一番初めの願い——父帝が喜ぶ、という願いは叶わない。

だが、透明な空を見上げながら、常に日本武尊は考えていた。

自分は何かを間違えた咎でこの旅路についている。しかし、自分についてくる仲間は、いったい何の咎を犯したのだろうか？

いや、何も犯していない。

そうであるならば、彼らがこの旅で命を落とすことはおかしい。

——帰るのならば、全員でこの大和に帰ろう。

そのためにはどうすればいい。わかりきったことで、方法は一つ。

立ちはだかる全ての敵をなぎ倒し、この東征を完遂することだ。

それこそ日本武尊が本当に「日本武尊」であれば、成し得るに違いない。

それに——父帝が自分を疎んでいても、父帝が大和を愛していることには変わらない。

「絶対に成し遂げられない。失敗して死ぬ」と思われていても、大和の敵を滅ぼすこと自体は、父帝にとって喜ばしいことには違いない。

ゆえに、己が最強となる意味がまだあると、彼は信じた。

\*

前日たつぷり寝たことが功を奏したのか、明はこの朝は朝八時半に起床していた。今日こそは大西山のキャスター陣営へ殴り込みに行く日だ。これ以上延ばすことはマイナスしかない。

頭を振って夢の残滓を振り払う。矢張り、冷呪一画分の効力で結びつきを強めてしまった代償で明だけ意識をカットしても無駄だった。セイバーの過去を見てしまう。

一度セイバーにも意識のカットを勧めたが「意識のカット……？」とぼかんとした顔をさせてしまったため諦めた。

「人の気持ちかわからない、ね」

セイバーは人の気持ちが全く分からないわけでもなく、全く空気が読めないわけでもない。自分の言動のせいで「何かがおかしくなった」ことはわかっている。だが「何故その言動がよくなかったのか」がわからない。

そしてその「何故」を理解できるようになったかは、今のセイバーを見れば火を見るよりも明らかだった。倭姫命が見たかもしれない未来の可能性の一つへは、至らなかつたのだろう。

明は再び頭を振って、部屋の窓から空を見た。いくつかの千切れ雲が浮かんでいたが概ね晴れており、点けたテレビの予報は、雲は増えるが雨にはならないと告げていた。

（——とりあえず雨は降らなそうだなあ……ん？）

その時、部屋の窓に何か当たる音が聞こえた。そちらに目をやれば、何か黒い物体が体当たりをしていた。よくよく見れば、それは教会からの使い魔である。

すっかり定例の報告を忘れていたことを思い出した明は、窓を少し開けて使い魔を入れた。

教会との協力関係はまだ続いていることになっており、神秘の漏えいに気を配る彼らとしては明の動向を気にしているのだ。

だが、サーヴァントはあと五騎だが残ったマスターは実質明、一成、アインツベルン（三体使役）の三人である。そして、その三人は誰も一般人を食い物するつもりも、神秘を他に漏らす気もないと考えられる。

アインツベルンは生粋の魔術師の家系だ。それが神秘の漏えいを成すとは考えにくく、キャスターというサーヴァントで大西山の陣地で戦う気だ。そして明たちに二騎のサーヴァントがいる。

つまり、明はもう「意図的な神秘の漏えい」の危険はほぼないと思っている。

だが、何が起こるかわからないのが聖杯戦争である。このまま丸く終わるとはとても思えない。

『……七代目か。探したぞ』

思った通りこちらを探していようと、神父は前置きなしにそんなことを使い魔越しに言った。

「……すっかり忘れてた。連絡しなくてごめんなさい」

『キャスターの三騎同時使役を受けての行動だろう。碓氷邸がお前の要塞とはいえ、サーヴァント三騎の強襲を受けて耐えきれるとは考えにくい』

「うん。とりあえずキャスターを倒すまではここにいる」

そして明はガンナー……アサシンのサーヴァントと協力関係を結んでいることを伝えた。

同時にマスターが一成となり、元マスターがキャスターの呪いにかかっていることも。神父は驚いて一度息をのんだように黙ったが、すぐに落ち着いたいつもの声に戻った。

『いつの間になんかことになった』

「……流れに身を任せてたらそんなことに……。とにかく、今日、キャスターを倒しに行くよ」

悟の体の事もある。さらにキャスターは時間が経てば経つほど強くなる。このまま長々と放置しておけない。

『大西山か。気づいていると思うが明、大西山には極大の結界が張られている』

昨夜、明はアサシンと一成に偵察を頼んだ。その結果、大西山は予想を超えた人外魔境と化していたことがわかった。大西山には濃い魔力が充満し、妖怪魍魎魍魎の類がうろついている魔物の巣窟と化し

ていた。

推定している真名では彼女はキャスターというよりバーサーカーだが、キャスターと呼ばれた故に生前の同類を召喚する宝具を持っていることが考えられた。

アサシンと一成によれば、結界そのものは大西山を包む大規模なものではあるが、主な機能は外敵の侵入を知らせると同時に山を一般人の目から覆い隠すことであった。結界は本来外と内を区切るものであり、それ自体は無害である。問題はその中でなにをするかであるが、調べた結果としては、明たちが内部に入ったからと言って害を受ける者ではなさそうだ。

残念ながら結界を維持する基点の詳しい場所はつかめなかったそうだ。ただ機能を考えれば、今に至りそれを破壊するだけの意味はないと思われる。

(……大きな結界は、本当にそのためだけにあるのかな)

サーヴァント三騎を同時使役し、かつキャスターは宝具を使っているという。キリエが並外れたマスターだとしても、そこまで自分の魔力でカバーしようとするのだろうか。そこは一級の霊地である大西山に溜まる霊気を活用しているのかもしれない。

大西山は標高四百メートルの山で、一時間半くらいで頂上まで登れる低山である。登山口までは春日駅から車で一時間。だが、周囲は鬱蒼とした森で覆われていて、あまり人の立ち入りが多い地域ではない。

迷った児童が返ってこない、幽霊が出る——原因のわからない事故が多発する、いわゆるつきの心霊スポット。

霊地としては抜群だが、霊気が濃すぎて逆に魔術行使がうまくいかない場合があるほどのいわゆるつきである。確氷は二代目から春日に居を移したが、あえて屋敷を立てるのに大西山周辺を避けたのはこれが理由だ。

別の考えに耽ってしまったが、明は神父の声で我を取り戻す。

『七代目、アサシンを加えたとはいえ勝算はあるのか』

「……ない勝負はしないよ」

膨大な魔力と三騎のサーヴァントを使役するアインツベルンのマスターと、魔術師二人に二騎のサーヴァント。厳しい戦いになることは目に見えている。

『……そういうと思った。では、健闘を祈る。これからも私から使い魔を飛ばす』

落下防止用にわずかしか開かぬ窓の隙間に体を滑り込ませた使い魔が、すつと冬の空の下へと戻り、明の視界から消えた。そのまま窓から外を見れば、清々しく晴れ渡った青空の下に、駅前のビル群が天を衝くように立ち並んでいた。

明はそのままセイバーが使用していたベッドの上に倒れこみ、ごろごろと寝返りを打った。

本当にキャスター・アーチャー（とランサー）に勝てるのだろうか。いや、勝てるかどうかの問題ではない、バーサーカーの時もそうであつたが、明は此度の戦いを勝たなければならないのだ。

「……仕方ない、やるしかないしね」

気合を入れて再び起き上がった時に、丁度部屋に戻ってきたのはセイバーだった。

「明、起きたか。食事の時間だ」

「他陣営を皆殺しにする」とのたまわっていたサーヴァントは最高に気の抜けることを言った。

「なんだその顔は」

「いや、すっかり腹ペコ皇子になってしまったなあと……」

最初の頃は、セイバーはむしろ「サーヴァントに食事は不要」派だったはずだ。そして作るから食べるか、と明が聞いたときには「作つてくれるならばたべろ」くらいだったような気がする。それがいつしか「キャスターがランサーを襲った」という教会の知らせに明たちが驚いていた時に、一人黙々と土御門作の夕食を食べるサーヴァントになつていた。

しかし発端は召喚の次の日に明がうなぎを奢ったことであり、そして共に食事をするように勧めたのも明である。いつの間にかセイバーを食道楽に目覚めさせてしまったらしい。

そして当の本人は珍しく口をとがらせていた。

「サーヴァントは食事を要さないが、魔力補充にはなる。また食事の時間と言った件だが、食事は基本定刻通りにすべきだ。しかし戦時において定刻に拘らずできるときにしておくべきだ。これでも俺は皇子であつたから、あまりなかつたがそれでも天候等で思うように進めず野営を行うこともあつた。その際下賤な賊の襲撃で一日の数少ない楽しみでもある七掬脛の夕餉デイナータイムを台無しにされたこともある——つまりだ、食事の定刻に必ずしも食事をとれるとは限らないのだから食べられるときに食べておかねばならないのだ。しかし現状況を鑑みるに、キャスターは山に引きこもっており襲撃に会う可能性は低い。とすれば定刻通りの食事をとり有事に備え精をつけておかねばならない——そういうわけで俺はお前が起きたことを見計らい声をかけたのであり、常に飢えているわけではない」

明は黙った。何かセイバーの妙なスイッチを押してしまったらしい。というか、若干怖い。というか「一日の数少ない楽しみでもある七掬脛の夕餉デイナータイム」で。というか、その下賤な賊さんたちは大丈夫だったのだろうか。命的な意味で。聞かずとも今までのセイバーの行状を振り返ってみれば、予想はつく。明は静かに冥福を祈った。

「……何か失礼なことを考えていないか？」

「いやセイバーがその下賤な賊さんたちを分割した末にフカのエサにしたんだろうな——って考えてないよ」

「何を馬鹿な。そんな者の肉を食わされるフカの身にもなってみろ」

「フカのエサにした」以外は否定しないところが実にセイバーである。ウツカリ明が「腹ペコ皇子」と言ったことがお気に召さないのか、いまだに文句ありげだ。

「はいはい、わかつたから拗ねないですよ」

「む、拗ねてなどいない」

妙な話をしてしまったが、明も食事をとることに異論はない。セイバーはどこから見つけたのか、後ろ手にデリバリーピザのチラシをチラつかせており、何を食べたいかは割と明白だった。明がそちらに話

を変えようとしたが、それより少し窓があいていることを見つけたセイバーの方が早く問いを口にした。

「寒いのに窓を開けて、何かしていたのか？」

「あ、これ。神父に使い魔で連絡をした」

「……ああ」

セイバーはふうんというのと、何か思うところありげに明を見る。「マスターとあの神父はどういう関係だ」

とりあえず愉快な関係ではないことだけは確かである。明はどう説明すべきか首を捻った。

「どういう関係って、うーん……。私っていうよりは、お父様と御雄神父が知り合いつて言うか。教会と協会は一応今は相互不可侵で、かつ「神祕を一般に秘匿する」つていう点では目的が被ることもあるから、管理者である碓氷とは何かと懇意なんだよ」

「つまり、あの神父はマスターの幼い頃からの馴染みというわけか」「でもあくまで業務上って感じ。何故かお父様とは妙に気が合ってるみたいだけど、私にとつては気安くはないかなあ。気安い、つて意味では美琴の方だね、歳も近いし」

むしろ神父との付き合いは、養女である美琴より明の方が長い。抑々美琴が養女になり春日教会に住むようになったのは十年前である。どういいういきさつで養子縁組の運びとなったのか明は知らないが、美琴と御雄の二人の仲は円満である。

美琴は権謀術数渦巻く魔術協会に愛想を尽かし、魔術を断念した。彼女の家は五代の歴史を持つ魔導の家だったが、ある時——一族が一同に霊地へ出かけた際に、列車の横転事故に巻き込まれことごとく一族は死んだ。

唯一生き残った美琴は、これを機会に嫌気の差していた魔導から離れた。彼女は同じくかつて魔術教会に属していたものの、聖堂教会に転身し、第八秘蹟会に身を置く神内御雄神父を頼ったとの話がある。

神父も元魔術師であり、何か力になってくれると感じたのか。

「何か気になる事でもあるの？」

そういえばセイバーは根拠はないが神父の事を良く思っていない。



しかし、彼は首を振った。それで話も終わり、ようやくセイバー待望のデリバリーピザの話となった。

\*

今更出会ったところで、アーチャーと一成は元の通り主従に戻るわけではない。既にアサシンという刀を得た一成と、キリエと言う依り代を得たアーチャーは戦うのみだ。

それでも、一成にはアーチャーに再び会わなければならない。

——アーチャーは言った。

「私は、聖杯に問うためだけにここにいる。——真なる幸福とは、何であるかと」

アーチャー——いや、この世の栄華を極めた男の考えていることなど、若造の一成にはわからない。彼が何に悩み、思い煩った苦しきなどわかりはしない。

だが、これほどつまらない問いはないと、一成は思う。本当の幸福、絶対の幸せなどない。多くの人々が幸せだと感じる事象はあるだろう。

例えば「大金持ちになる」「天寿を全うする」——だが、これだって万人に共通の望みかと言われれば違う。幸せの形など、人によって全く違う。

人が喜ぶのを幸せと感じる人間がいる反面、人の不幸を愉悦とする人間だっているかもしれない。それだけでも幸せの定型を求めるところが無意味かわかる。

そんなことを悟の隣のベッドに寝転がって考えていると、上からいきなり黒雨合羽の大男に覗きこまれた。アサシンだ。「ギャア!!」

「どうした坊ちゃん」

「お前がいきなり覗きこんでくるからだ！」

明かセイバーを交えてアサシンと話したことはあるが、二人だけで

話したことはほとんどないと一成は気づいた。あの時は戦うための刀が必要で、藁にもすがる思いで契約をしたが、アサシン——石川五右衛門はどのようなサーヴァントなのだろうか。

元マスターの為に真名まで明らかにして助けを求めてきたサーヴァント。その時点で一成自身はかなり好感を持っているのだが。

「そういや、お前ってなんで俺の事坊ちゃんと呼ぶんだよ」

「なんとなくいいところの坊ちゃんって世間知らずみてーだったから」  
「ぐっ」

齒に衣着せる気ゼロのアサシンだが、それが強ち外れていないから質が悪い。土御門家は地元では名家の扱いで、はたから見れば一成は「箱入り息子」である。高校進学時に一人暮らしを始めたばかりの頃、同級生に「ぶれいすてーしよんって何だ？ 駅で遊べるのか」と聞いて大笑いされたのは今でも恥ずかしい思い出である。

そして魔術師的にも一成は、土御門以外の魔術師と会いまみえることはこの聖杯戦争が初めてである。

「お前さんウソつけねえやつだな」

「知ってる！ 悪かったな、いろいろ残念な新マスターで！」

アーチャー召喚後にも残念な力量を即刻指摘された一成である。流石に明の魔術や真凍の魔術を見て、多少は自分の未熟さを知ったつもりだ。

「ん？ 別にそんなことあ言ってねーだろ」

「え？」

「魔術師としての力量はしらねーよ。だが腕を元サーヴァントに持つていかれても気力が萎えてねエ。戦う気力が十分つてのは気に入った」

腕を組んで口角を吊り上げるアサシンは、満足げな様子で一成を見下ろしている。思ってもみなかった好反応に、一成は思わず口元を緩める。

「アサシン」

「それにな、俺は弱きを助け強きを挫くんだぜ？ 味方は弱い方がテンションあがるんだよ。応援するのはタイガースだ」

「あ、そ」

途中まですごくいい感じの空気だったが、アサシンのいらぬ一言で色々ぶち壊しにされた。しかし今に始まったことでもないと思いついた時、一成はとあることを思いだした。

五日ほど前に学校へ行つた際に、先生に「二週間土御門一成は用事で欠席するという連絡を受けた」という暗示をけなした。

しかし一成の暗示のへっぽこぶりは既に証明されている。とはいえ、もう両親は一成が戦争に参加していることを知っている。

もし連絡が行つても、事情を察して口裏を合わせてくれるとは思ふ。だが、あまり煩わせたくない。一成の携帯に何の連絡もない為おそらく暗示はまだ効いていると思われるが、前科が前科だけに少し不安だ。

その時、丁度明とセイバーがノックをしてきた。中に入れると、明はチラシを手にかけていた。

「土御門、アサシン、ピザ頼もうかと思うんだけど、なんか食べる？」  
朝九時という食事には妙な時間だが、朝の早くない明は今から食事をとるらしい。そしてピザ屋にしては早い開店時間だが、チラシには確かに九時から営業とあった。

「おっ酒のつまみにうまそーじゃねーか。姉ちゃんのおごりか!!」  
アサシンは悟が寝ているベッドを飛び越えて明たちに近づいた。明は反応の悪い一成に首を傾げた。「土御門お腹すいてない？」

「いや腹は減ってるけど、ちよつと気になることがあって」

一成は暗示の件を明とセイバー、アサシンに話した。  
すると、明は斜め上の返事を返してきた。

「私がちよつと行ってきつく暗示かけてこようか。土御門の生徒手帳チラ見したけど埋火高校でしょ？近いし」

一成の通う私立埋火高校は駅の南口から徒歩十五分の位置にある。このホテルからも距離は遠くない。偏差値は六十三前後で、一成の頭では入れないところであったのだが入試がマークシート方式によるハイパーラッキーで合格したのである。

何故志望したかといえ、ある程度両親と祖父が学校を絞つた中に

あり、かつ高校名鑑で見られる「最も学食がおいしい高校ベスト三」に入る学校だからだ。

「学校の場所知ってるし、ちょっと散歩がてらいくよ。ん？そうするとわざわざ配達してもらうより取りに行った方がいいのかな。これ、取りに来るなら一枚サービスってあるし。そうしよう」

明は一人でよしよしと頷き、ピザ屋のチラシを一成に渡した。「土御門とアサシンも好きなの選んで電話して。帰り際に取ってくるからさ」

「昼間とはいえマスターを一人で出歩かせるわけにはいかない。俺も行く」

マスターを護るべく当然セイバーも追行する。ふと、外に出る前に明が振り返った。

「土御門、その手、ちゃんと動いてる？」

今日の夜には戦いに赴く。にも拘らず片手が満足に動かなくては支障をきたす——ゆえに確認の為に明は尋ねたのだ。一成の義手の動きは着けた日よりはずっと良くなっており、戦闘に支障はないはずだ。

「おう、大丈夫だぜ」

「それならよかった」

一成の返事を確認すると、今度は明は部屋から出た。ジャケツトに半ズボンのセイバーもそれについていった。一成は隣で眠る悟を起こさないようにアサシンにピザの説明をして、あれやこれやと食べたいものを絞ってからやつと電話をかけた。

その間に一成のベッドはアサシンに占領されて、彼は派手にゴロゴロしていた。アーチャーもそうだがアサシンの凶々しさもかなりのものがある。

「……………ん？」

「どーした。腹でも下したか」

「なんでだよーや、俺そういや二騎のサーヴァントのマスターやってんだなって思ったんだけど、セイバーってお前のこと結構好きなのかと思った」

「ハア？」

襦袢から耳かきを取り出して耳糞をほじくりつつ、アサシンはそれはないわと言外に言った。だが、一成から見ればそうなのである。アーチャーと共にセイバーに碓氷邸にて相對した時、セイバーの態度はかなりとげとげしかった。

そしてバーサーカー戦後、一成が目を覚ました後のセイバーの対応を思い出せば、アサシン陣営へのあたりはかなり軟らかい。

「そんなんタイミングのせいだろ。あっちだって三対一なんてやりたくねーだろうし、多少の危険はあつても手を組んだ方がいいって思ってたんだろ。現に「三対一は流石に骨が折れる」つってたしな」

「……俺的にはセイバーがそんなことを言ったこと自体が驚きなんだけど」

あのセイバーは弱音とまではいかないまでも、会ったばかりの敵サーヴァントにそんなことを言うとは俄かに考えにくい。何かアサシンに感じ入る事でもあつたのかと考えたが、一成からみては心当たりがない。

「俺的にはあんまり仲良くしたくない部類だけどな、皇子さまは」

「そーなのか？」

「そもそも俺は権力とか権威の類がでえつ嫌いなんだ。今一つ鼻持ちならねエ……まあそういう意味ではお前のアーチャーは最悪だな。半径百メートル以内に近寄りたくねえし同じ空気を吸いたくねエ」

良く考えなくてもアサシンのいうことはもつともで、権力と富の塊であるアーチャーと庶民の反抗を仮託されたアサシンで相性の良いはずもない。

それ以上話すこともなく、二人してなんとなくダラダラしているうちに部屋の扉が開かれた。予想したとおり、ピザを持って戻ってきた明とセイバーだった。

「ただいま。暗示はばっちりかけてきたよ。食べよ」

流石というべきかつつがなく暗示は完了したらしい。注文したピザをホテルの部屋でセイバー、アサシン、一成、明で食べながら、明が土産話を始めた。話を聞くに学校では「一成が幼女をたぶらかして

いる」といううわさが蔓延していて恐ろしいことになっているらしい。

一成が一人顔を蒼くしたり白くしたりしている脇で、明は感心したように言った。

「結構土御門って顔広いんだね」

「?そうか?」

「いや、土御門の知り合いを装ったんだけど、学校の人に話しかけたり話しかけたりした時に土御門っていうと大体ああ、って顔されたから。特に先生とか苦笑いしたりしてた」

運動部の助っ人をしたりいいけ好かない上級生とケンカをしてしまったたり、一人暮らしをいいことに同級生が家に入り浸ったりするなど騒々しい生活をしている自覚はあるが、顔が広いかは一成自身ではわからない。

「人気者っていうよりは問題児って感じだったけど、うん、高校生っぽくていいねえ」

「?お前も高校生やってたろ」

「まあ、やってたけどね」

妙に他人事のように、かつにこにこしてる明に違和感を覚えたがそれは些細なものだ。一成はアサシンとセイバーに食べつくされる前に、テリヤキチキンのピザを取った。

### Interlude 3 真意の在り処

まだアーチャーが一成のサーヴァントであった頃、春日のショッピングモールでキリエと一成が出会った時の話である。

その時、アーチャーは近くにサーヴァントの気配——おそらくはキリエのサーヴァント——を感じたがゆえに、様子を伺いに行った。

ショッピングモールの屋上は広い駐車場になっている。その駐車場への出入り口の上に、そのサーヴァントはいた。白衣であるはずの衣は黒く、袴は深い赤に裾が破れている。奇怪な巫女の姿に、ウェーブのかかった艶やかな真紅の髪をなびかせる、ろうたけた美女。

彼女から放射される魔力は見る者を魅了し、思うがままに操る魔性そのものだった。

出入り口の上から見下ろすそのサーヴァントは人の形をとっているが、本性は人ではあるまい——アーチャーはそう直感した。

「……そなた、人間ではないな？」

「ふふ」

アーチャーは、同時にその纏う空気から同時代の英霊であるとも直感した。優雅と栄華に塗れながら、裏では魑魅魍魎、呪いと恨みがあふれる時代の匂いだ。それはアーチャーも身に沁みつけた匂いでもあった。

そして、アーチャーがそう思っているということはあちらも同様である。

「そなたら、一体何用得我らに近づいた？」

「私のご主人は本当に他意はないわよ？ 観光したいとか言ってたから。私はサーヴァントだし、ご主人様のボディーガードのためにいるだけ。あなたのご主人やあなたがなにもしなければ、私も何もしないわ」

彼女の言葉をどこまで信用してよいものか。アーチャーがじつとキリエのサーヴァントを睨んでいると、彼女はけたけたと笑い出した。

「もう、そんな目で見ないでくれる？ 私は嘘が嫌いだし、つけないし、

つかれるのも大嫌いなもの」

その言葉さえ本当なのかウソなのか。アーチャーはふいと晴れた空を見て、話を変えた。

「……ボディーガードと言ったが、こんなに離れてて良いのか？ 傍で霊体化している方が普通であろう？」

「近くにいると気配がうつつとうしいからって、あんまり近くにいるなって言われてちやつてねえ。ま、私のご主人はとても強いから、あまり心配してないのだけど」

我がことの様得意げに言う彼女に、アーチャーは目を向ける。「私のマスターも、やや極端だがなかなかの使い手よ」もちろん、はったりである。

「あら、マスター自慢の流れかしら？ あなたのマスターは知らないけど、私の主人以上にマスターにふさわしいものはいないわよ？」

刹那、女の姿が消える。アーチャーは生前の呪いにより、アーチャーの割に鷹の目といえるほどの目は持っていない。だが、それでも素敵に優れたアーチャーである。敵の姿を追うことは得意なはずなのだが——「私の事、見えたかしら？」

目にも映らぬ速さで動いた女は、そのしなやかな手を、背後からアーチャーの首に寄せる。触れる指先から殺意は感じない。正直、キヤスターは強くない。

そう、さしてキヤスターから脅威を感じていないが、——その多大な魔力、圧力をいやがおうにも感じる。

「……これでも私、相当弱いものよ？ 本領はやつぱり陣地でないと」

「ほほう。そなたがキヤスターならば、確かにそなたのマスターも人間離れた力の持ち主と言うことになろうな」

「だって私のご主人は人間じゃないもの。私としては嬉しい限りよ……ところで、マスターを護ると言うのなら、あなたこそ私とお話なんかしてないであなたのご主人の傍にいてあげればいいのではなくて？」

アーチャーは深く口角に皺を刻み、扇で口を隠した。

「せつかくの機会じゃ。そなたのような佳人を放っておくことはなか



ろ」

「情報収集する機会だものね？ねえ、御堂関白藤原道長様？」

アーチャーがキャスターとした話は、まだマスターの話だけである。

それにもかかわらず、彼の真名をぴたりと当てたと言うことは、キャスターのスキルや宝具によるものか、もしくは生前のアーチャーを知っているかのどちらかである。

アーチャーとて同時代に生きてきた者であることは認識していたが、アーチャーはキャスターを知らない。

「驚くことではないでしょう？貴方の時代に、貴方を知らない人なんてモグリよ？」

「……私の時代に、物の怪の類は多くいたからのう」

平安時代——妖魔の跋扈する時代である。彼女が人間ではないというだけでは、真名を絞りきることはできない。

しかし、真名を突き止めてもこのキャスターに対抗する策を編み出せるか。それはまだこれから考えればよいことと、この時アーチャーは思っていた。

次に見えたのは、すでにアーチャーがランサー・バーサーカーと対峙した後の時であった。ランサーは手ごわい。察する真名から、対城宝具のような派手な威力の宝具を持つわけではなさそうだが、全てのパラメータが安定して高く、まともに戦いつづければこちらが貧なのはすぐにわかった。

そしてバーサーカーである。ランサーよりもこちらの方がアーチャーにとつて質が悪い。真名に思至らなかった時でさえ、一対一では勝ち目が薄いとわかっていた。アーチャーはまるで魂に傷があるかのようにあのサーヴァントを前にしては体が動かなくなる。

——バーサーカーは早くに倒してしまうに限る。もし、お互いに生き残って戦うことになった場合、いくら自分がよいマスターを持つて

いても彼が相手では勝敗は目に見えている。今のマスターでは勝敗は火を見るよりも明らかだ。

幸い、バーサーカーと戦っている時にセイバーが乱入し（正確にはバーサーカーが襲い掛かったのだが）、その場を無事逃れることができた上にセイバーの真名を知ることができた。

——日本武尊。日本史上最大級の英雄であり、強敵であるはずなのだがアーチャーにとっては話が違う。

天照大神の直系——皇族に連なる者ならば、滅多なことではアーチャーは後れを取ることはない。

さらに幸いなことに、セイバーのマスターもどうやら一成と同じようにバーサーカーを放置しておけないようであった。一成は、バーサーカーに対してセイバーと共闘をしようというアーチャーに相談した。バーサーカーを一刻も早く倒したいアーチャーにとっては願ってもないことである。そもそも、セイバーとの共闘自体は望ましい。

セイバーは強力なサーヴァントでありながら、共闘関係が終了して敵同士となつても負けにくい相手である。だが、一成とセイバーのマスターはバーサーカーと鉢合わせたときに初めて顔を合わせた同士だ。

バーサーカーに関しては思惑が一致しているが、その後共闘が続くかは不確かである。それに、アーチャーの真名と宝具がばれた時に、その宝具の性質上彼らが共闘を続けるとは思えない。いざとなれば如何様にもセイバーを操れるサーヴァントが味方で安心するほど、能天気な管理者と英雄ではないだろう。

そうなると、アーチャーはアーチャーで他のキャスターやランサー、まだ見ぬアサシン、ライダーに対応する策を考えなければならぬ。その際に不安になるのは、己の能力と、マスターのことだ。

御世辞にも一成は優秀な魔術師とは言えない。そしてアーチャー自身、武を誇るタイプのサーヴァントではない。

アーチャー自身は一成と仲が悪いわけでもなく、むしろその素直さと前向きさを気に入っていた。若さゆえの無鉄砲さもほほえましいくらいであった。

だが、アーチャーには聖杯を得る理由があった。その切実な願いを前にして、湧いた情を置いて、アーチャーの頭は最も可能性の高い手を模索していた。

そして、セイバーのマスターに交渉しに行く段になり、突如現れたアインツベルンのマスターを見て、アーチャーはキャスター陣営に一つの案を提示した。

「今度は何をしに来たのじゃ、キャスター」

春日駅の上から、通行人のにぎわいを眺めながらアーチャーは問う。前会った時と変わらぬ奇怪な巫女服に艶のある真紅の髪をなびかせるキャスターは楽しそうだった。

「私は前と同じ。ご主人のボディガードよ?」

「そもそも、そなたのマスターはなぜ私のマスターにまわりつく? お互いに聖杯戦争発端であるという好だけなのかのう?」

そうはいつでも、アーチャーも一成もそれを知ったのはキリエの話からである。

アーチャーは一成の視覚と聴覚を共有して、キリエの話を聞いていた。

キャスターは怪しげににっこりと笑う。

「聖杯戦争発端である好——それがどれだけご主人にとって大きな意味を持つのか、あなたはわかっていないでしょうね。それに、あの二人は限りなく薄いけれど赤の他人ではないわ」

聖杯戦争を企画した際から、両家には少なからず交流があるということか——アーチャーはそう解釈する。しかし「赤の他人」ではないとキャスターは言うが、見たところ一成は全くキリエの事を知っている様子はない。

どういうわけだと聞き返すと、キャスターは事も無げに答えた。

「大聖杯の核にはアインツベルンと土御門の女が据えられているそうよ。なら、それに適したマスターは双方の血を受けたマスターであるべき……私のご主人は、アインツベルンのホムンクルスが陰陽師の精を受けたことで作られたのよ。そしてその陰陽師は、あなたのご主人と同じ直系ではないけれど安倍晴明を始祖とする陰陽師の家系なの」

「……つまり一成とは遠い親戚というわけか」

アインツベルンのホムンクルスは普通、白銀のような髪と透き通った肌、赤い目をしているという。だが、陰陽道という全く異なる魔術師の精を取り込んだことで、キリエの体は他のホムンクルスとは違うものなっただろう——と、キャスターは語る。

魔術師ではない一般人の生を送ったアーチャーには理解しがたいが、彼らは血縁と言うことになるらしい。

「そういうことよ。ご主人もそういう感覚なのではないかしら？」

この時は、聖杯戦争のために生み出された割に呑気なマスターよと思っていたアーチャーである。一成と話している内容も、聖杯戦争以外のことでは他愛のない雑談にしか聞こえない。

アーチャーは強い風に袍をはためかせながら、話を変えた。

「ところでキャスター。我らのマスターも話していたが、バーサーカーについてどう思う」

「私もバーサーカーみたいなことしたいなあって思ったわ」

どこか恍惚とした表情で恐ろしいことを言うキャスターは、さらに続ける。「やっぱり人間の魂とかはちよこちよこつと奪うんじやなくて丸かじりの踊り食いよね。あと生娘と童貞はいいわね」

アーチャーが聞きたかつた事とはまるで違う答えだが、彼らが特にバーサーカーに対抗しよう、止めようなどと考えていないことはよくわかった。

キャスターに対し人間として悪寒を感じつつ、アーチャーは冷静に告げる。

「そうか。私はバーサーカーと一戦交えたのだが、その際セイバーの真名を偶然知ったのだ。……日本武尊であったぞ」

「日本武尊オ？あら………うーん、どこかで聞いたことある名前ねえ……でも、なんでそんなこと教えてくれたの？」

何故か意味深に笑ったキャスターだが、その笑いはすぐになりを潜めた。

「そなたのクラス、キャスターはセイバーを最も苦手とするクラスであらう？」

「そうねえ、クラス上どうしようもないところよ?」

「我らはこれからセイバー陣営に、バーサーカーを倒すため共闘を申し入れる。おそらく、八割方共闘することになるよ」

「それは頑張つてね、と言っておくけど」

「我らはバーサーカーに勝つ。その後、私は我がマスターを裏切り、セイバーのマスターを殺し……いや、殺すのは無理だろう……令呪を一画奪う。その上で、そなたのマスターと契約したい」

キヤスターは心底言っている意味がわからないと言いたげに首を傾げた。

「私を味方に付けよと言っておるのだ。そうすれば二対一でセイバーを相手取れる。私は故あってセイバーに対して後れを取ることはない。同じマスターを持つているのだから、他のサーヴァントを殺すまでは協力できよう」

最後はアーチャーとキヤスターの殺し合いだ。一成はサーヴァントの意識の共有にまで頭を回していない、というよりキリエの話に聞き付けで、この場の話など全く聞こえていない。そしてキヤスターに伝えれば、彼女は念話でキリエに確認をするはずだ。もしくは強力なマスターであるキリエは、現在進行形でこのやり取りを把握しているかもしれない。

「それ、貴方には何の得があるの? 日本武尊なら、セイバーはとっても強い筈よ。ならバーサーカーを倒した後も一緒に戦えばいいんじゃないかしら? 貴方はセイバーに後れは取らないのでしょうか? 最後に二人になったら、きつとあなたが勝つわ」

「其れも考えた。だが、おそらく——私の宝具の性質上、アレと足並みをそろえ続けることは難しい」

尊きを受け継ぎし剣にて、セイバーを制御することはできる。そんなサーヴァントと一緒にすることはセイバー側も御免だろう。しかしあの宝具は相手の神性が高いほど強く拘束できる反面、消費魔力も増大する。一成の魔力では長くセイバーを制御することはほぼ不可能である。

基本、英霊の格もマスターの格もあちらが上なのだ。また、伝説上

セイバーは奇襲も暗殺も得手とするサーヴァントだ。同盟が終わったのち、一成を狙われてもおかしくない。

「あら、つまり私の方がセイバーより舐められているということかしら」

「そう思ってもらっても構わぬ。……しかしそなた、いや、そなたのマスターか？それほどの強さを持ちながら、何を恐れているのやら」

此処にはいない誰かに話しかけるように、アーチャーは目線を逸らした。「キャスターをここまで振るえながら、夜の戦いには現れぬ。バーサーカーにも素知らぬ顔。魔術師は神秘が漏れるのを恐れる存在と聞いたゆえに、そなたらもアレを殺しにかかってもよかろう。それでも動かないのは、本当にキャスターというクラス上の問題なのかう……」

「私のご主人は慎重な質なのよ」

「……まあよい」

こほんと咳払いをして、アーチャーは続ける。「そなたの言動から察するに、駆け引きの類は得意ではあるまい。私はマスターを裏切り、そなたのマスターに仕える。さすれば、セイバーにも有利に戦えようし、他に対しても二対一で当たれる。最後は余計なわずらいなしにお互いに戦えることになる。いかがか」

空気が変わる。喋らないキャスターは、念話でマスターと会話しているのだろう。キャスターの柳眉は穏やかではなかったが、しばらくした後には彼女は肩をすくめた。

「……本当にマスターを裏切り、マスターの令呪を持って来るのなら、土御門神社。本当に令呪を持って来るのならいらつしやい」

「なるほどの」

「……ご主人たち、終わったみたいよ」

マスター二人はアイスクリームを食べていたようだったが、それも終わったようだ。お互いに自分のマスターのところに戻るときが来た。裾を捌いて身をひるがえしたアーチャーの後ろ姿を、キャスターはため息をついて見送った。

「人間って本当に面倒くさいわ」

この時点でアーチャーは完全に裏切りを固めていたわけではない。もし、自身の宝具を解放せずに済み、セイバー陣営とバーサーカー討伐後に共闘関係が続けた方が利が大きいとみれば、この話を無かったことにするつもりであった。

だが、碓氷邸での話し合いで基本セイバーは「一人で戦う」という態度を取っていた。その上、アーチャーの真名はわかっていないはずなのに彼は剣呑な空気を感じていた。流星は他戦いの皇子と言うべきか、アーチャーとの相性の悪さに気づいているのかもしれない。

抑々、セイバーは手段を選ばない英雄だ。人の良い一成をみすみす殺されては令呪もなくなってしまう。それに、セイバーを宝具で制御できるとはいっても、一成が拒否し令呪を使用されればそれも水泡に帰す。

アーチャーが心を固めたのは、恐らくこの時。

アーチャーはマスターのためではなく、人のためでもなく、ただ己が願いに従って動くのみである。

だが、本当にそうだったのだろうか。

本当にアーチャーは己の願いを叶えるためには、キリエにつくことが最善だと思って行動したのか。

「そなたを見ていると苦しい」。

弓兵のサーヴァントは己を召喚したマスターに、問いたくても問えぬことのあった、一人の男の姿を幻視する――。

三十数年前、冬木の聖杯を模倣した聖杯を作り上げる計画が始まった時から、キリエスフィール・フォン・アインツベルンの生は始まった。

冬木の聖杯戦争の聖杯となったホムンクルスをモデルに、大聖杯の核の片割れとなった女と同系統の陰陽師の精によって生み出された、春日の聖杯用ホムンクルス。

聖杯を求めて千年を数える一族は、気が遠くなるほどの年月の果てに、聖杯によつて「第三魔法」を成すという目的を、「聖杯を手に入れること」そのものにすり替えてしまっていた。

だから新たな聖杯を手に入れること——それがキリエスフィール・フォン・アインツベルンに与えられた全てだった。

五年で大聖杯に魔力が溜まり聖杯戦争が始まる予定であったが、何の手違いか一向に始まらない。聖杯の模倣という初の試みの為、失敗であつてもおかしくはなかった。

現に誘った土御門など十五年を経過した時点で戦争が開始されず殆ど失敗、と思っていた。

しかし満を持して三十年後——聖杯戦争は始まった。この時ほどキリエが喜びに満たされたことはなかった。聖杯を得る為だけに作られた彼女にとっての無念は、聖杯戦争が永久に始まらないことだからだ。

三十二年の間に何度もマスター最高適性を備えように体を調整され、「聖杯」であるにも関わらず魔術の研鑽にもいそしみ、城から一歩も出ることなく育った彼女は城の人間以外に知る者は殆どいない。

実質的に彼女の父にあたる陰陽師はアインツベルンが雇った人間であつたが、精をキリエの母のホムンクルスに与えたのちは、ある目的の為に生きながらにして死んでいるような状態で、城の地下に繋がれている。母に当たるホムンクルスは、耐用年数を過ぎて死に至つた。

キリエが常に接するのは家長たる翁と、メイドのホムンクルス。



それにもう一人、この聖杯戦争の発端に関わる人間。かつて魔導の道を進んでいたが、それを辞め聖堂教会へと移った男である。

彼は聖杯の復活を画策するアインツベルンに春日の土地を紹介し、さらに土御門の一族を紹介した。

冬木の模倣である春日の聖杯には、教会はそこまでの興味を示すまい。冬木の聖杯でさえ「贋作」の聖杯とされているのだから、その模倣はいわずもがな、である——男はそう言い「神秘を秘匿するならば、アインツベルンの聖杯獲得に協力する」約束でアインツベルン城に入りしめていた。

男のなすべきことは春日の土地とアインツベルンと土御門との橋渡しであり仲介役で、技術方面は担当していない。

三か月に一度程度の頻度だったが、外の人間である彼が話すことはいつでもキリエを喜ばせた。度重なる肉体改造でキリエは十歳前後の姿で成長を止め、男は歳を重ねていつてもキリエにとって唯一知る「アインツベルン以外の人間」だった。

聖杯戦争が始まれば表向きは男と素知らぬ顔をしていなければいけないが、彼が聖杯戦争に関わることはキリエに大きな安心をもたらした。

彼の神父が城に来るたび、キリエはその名を呼んで笑顔で迎えるのだ。

\*

かつて冬木の聖杯戦争で、アインツベルンのマスターはシステム干渉により大聖杯からは遠く離れたアインツベルン城にて、しかも開始の二か月前にサーヴァントを召喚できたと言う。

此度は聖杯の都合により、御三家に準じる者ならば——アインツベルン・土御門・碓氷ならば——春日の地でなくとも召喚が可能となっ

ている為、アインツベルンの優位性は失われている。しかし、時期についてはまだアインツベルンに利がある。

キリエは一月半前には令呪の兆しが浮かんだため、早急に召喚を決行することにした。しかし、まだ大聖杯そのものが本格的に出現していない状態でサーヴァントを召喚することは、現界に必要な魔力を全てキリエの魔力で補うということの意味する。

いくら聖杯戦争の為に調整された彼女とはいえ拷問にも等しい苦しみを受けることになる。

しかし少女は躊躇わない。「それが、どうしたというの？」

聖杯に全てをかけた少女は怖じることはない。それは、アインツベルンの一族も同様だ。かつて「殺す」ことに特化したサーヴァントを呼び、「最優」のセイバーを呼び、「最強」のバーサーカーを呼んだ。しかし、どれも満足のいく結果を得られなかった。

——ならば。数を増やしたらどうだろうか。

二騎同時使役。けれど、一度の聖杯戦争で呼び出されるサーヴァントは七騎。マスターが召喚できるのも一騎。このルールを歪めることはできなかつた——それでもルールを歪めずとも、それに近いことを可能とする方法をアインツベルンは編み出した。

同時に、それにより呼び出す英霊も決まった。

その英霊を呼び出し使役することは、バーサーカー以上に魔力を消費する可能性もある。だがそこはアインツベルン謹製のマスター・キリエスフィール・フォン・アインツベルンが操るのだ。問題はない。

触媒が触媒だけにこのアインツベルン城に運ぶには難儀したらしい。西洋圏ではなく東洋の島国であり、魔術系統が異なる地域であることも災いしたのだろう。キリエは細かい経緯を知らないが渡りをつけるのに苦労したそうだ。

しかし準備は整った。専用のチャーター便で輸送された触媒は城の礼拝堂に運び込まれた。

外は強く吹雪き、雪に閉ざされている。凍土の地に立てられた古城は、常に外界を拒むが如く聳え立つ。その中の、森閑とした雰囲気

漂う礼拝堂。冷たく大理石の上を歩く音が響く静謐さの中、キリエは静かに魔法陣を描く。

召喚そのものは大聖杯が行う為、彼女の描く魔法陣は簡素なものだ。間違いないかを確認すると、キリエはその剣を祭壇の上に捧げた。翁やホムンクルス、そして神父が見守る中、キリエは泰然自若として魔法陣の前に立つ。静まり返った空気の中、小さな唇から詠唱が紡がれる。

「告げる——」

少女の全身に刻み込まれた魔術回路が鳴動を始める。オドが魔術回路を動かし、人ならざるキリエの体をさらに一つの機械の如く動かしていく。私が間違えるはずがない——なぜなら、私はこの時こそを待ちわびていたのだから。

三十年の長き時を経て、少女はこの瞬間現世と幽世を繋ぐモノに成り果てる。

「汝が身は我が下に、我が運命は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば答えよ——！」

人の身でありながら人を超えた領分となった者。抑止の輪から、あまねく人々の夢に彩られた英霊が現れる。この世とは離れた場所と接続された魔法陣からは滔々と光が溢れ、誰もが目をくらませて思わず視界を失う。

溢れんばかりの光りが消え失せた先に、その体からは圧倒的な魔力と威容を感じるモノがいる。にも関わらず——キリエは違う、と心の中で呟いた。輝く魔法陣の中央に立ち、豊かな真紅の髪を靡かせた美女は、艶めいた笑顔で少女に誰何する。

「あなたが私の主人かしら？ 小さなマスターさん？」

「!!!」

ありえない、まさか、そんなはずは——己が現実を拒絶する声だけが何度も木霊して、キリエは意識を失った。

キリエが目を覚ました時、体は彼女自身の部屋にあった。天蓋付の

白いベッドは、いつも起居する愛用のものだ。暖炉ではぱちぱちと火が燃えて、この部屋を暖めている。何でベッドにいるのだろうか、と記憶を手繰った時すぐさま異変を感じた。

己の魔力が別のモノに流れており、同時に人ならざる気配がすぐそばにあり——そして体中を走る激痛で身動きが取れなかった。サーヴァント現界の魔力が持つて行かれていることはわかりきったことで、今更騒ぎ立てたりしない。

キリエは目だけ動かして、毛布の外を見た。

キリエの眠るベッドからほど近い位置にあるロッキングチェアに腰かけているのは、真紅の髪をした妖艶な美女。巫女のような姿をしているが、その白衣は黒い。袴は毒々しいほどに朱い上に、しわが寄って裾が千切れている。

「あら、お目覚めかしら？」

キリエが起きたことに気づいた異形は、にっこりとろうたけた笑みを向ける。キリエは再び目を閉じようかと思ったが、閉じたところで現実是不変ならない。其の顔をしかめながら、キリエは静かに誰何する。

「……あなたは誰？」

「キャスターのサーヴァントよ。真名は、酒呑童子」

召喚したサーヴァントは——望んだ英雄ではなかった。酒呑童子——最高の幻想種といわれる八岐大蛇が人間の女と交わって産み落した鬼子。子供が尋常ではないことを恐れた母方の家族により伊吹山に捨てられ山にて成長し、その後同類の茨木童子と落ち合い、大江山に根を張り京都で暴れまわったと言う日本三大悪妖怪の一角。

その最後は、彼らを恐れた朝廷により派遣された源頼光とその四天王により討ち果たされるといふものだ。

つまり、神とは真逆の魔物ともいふべき反英霊である。

当初呼ぶつもりであった英霊の触媒も間違いなく本物であり、召喚時間もキリエに最も相性のいい時間を選んである。それにも拘らず全く見当違いのサーヴァントを召喚してしまったのだから、キリエは途方に暮れた。

それは翁や神父も同様だろう。生まれて三十年、聖杯を得ることだけを存在意義として生きてきた彼女は、まさに雷に打たれたようなショックを受けた。

「主人、あなたの名前を覚えてもらえるかしら？」

キリエの心境を全く知らず、キャスターはにつこり笑って話しかけてくる。現実が変わりはしないとわかっていたが、それでもキリエは一縷の望みをかけて、キャスターの問いかけを無視して再び毛布にもぐりこんだ。

誤召喚から始まったキャスターとキリエの関係は、険悪だった。というよりキリエが一方的に嫌っていたという方が正しい。それでも召喚してしまった以上は、このサーヴァントと共に聖杯戦争を勝ち抜かなければいけない。

流石にこのままではいけないと思ったキリエは、召喚から十日にしてようやく二度目の会話を交わしたのである。場所はやはりキリエの部屋だった。彼女が無視し続けるのにも拘らず、キャスターは大抵この部屋のロッキングチェアで素足をぶらぶらさせていた。

寒いとはいえ外が吹雪かない日もあるのに、彼女は全く外界に興味を示さなかった。

「……キリエスフィール・フォン・アインツベルンよ」

「え？」

「だから私の名前よ。主の名前くらい一度で覚えなさい、キャスター」  
「結局私はご主人様って呼ぶからあんまり関係のないのだけれど、わかったわ」

キャスターは無視されていたことなどまるで忘れたかのように、能天気な返事をした。流石に時がたって落ち着いていたキリエは、最早妙な意地を張るのもばかしくなっただきなため息をついた。

神父はどうに帰国しており、翁や他の者も原因がわからないだけにキリエを怒ってもどうにもならないと思っており、それ以上騒がれることもなかった。

——そう、いかなるサーヴァントを呼び出そうとも。自分が聖杯を

勝ち取ることは使命であり、同時に生きる意味であるのだ。

そうとなればずっとアインツベルン城に居るのは得策ではない。本来ならば訪日は他のサーヴァントが召喚されてからでよいくらいに考えていたが、キャスターというクラス上一刻も早く陣地を作成すべきとのことで、すぐにキリエとキャスターは日本に向かった。

春日一番の霊地である大西山のふもとに、アインツベルンが立てた屋敷がある。大西山は春日のはずれも外れで、屋敷は春日市と隣接市をまたいでいる。

そこを拠点と定め、キャスターに陣地を作成させる。決して、特に碓氷の管理者には気づかれぬよう慎重にキリエが主導して結界を構築した。このキャスターは魔術には疎かったが、幸いにも山神の子であり、山を拠点としたキャスターはその気配を溶け込ませる——結界を山にある当然のモノと見せかける術に長けていた。キャスターの陣地を成り立たせる基点を山中にセットし、山ごと破壊するレベルの攻撃でなければ破壊されることはないモノに仕立て上げた。一ヶ月前に春日の地を踏んだ、時間の利点だ。

キャスターは本人曰く「キャスターというよりはバーサーカー」だが、陣地作成のスキルが極めて高い。彼女は時間と魔力、土地さえ整えれば陣地から魔力を精製して自らの動力にすることさえ可能だと言いつつ放った。さらには山そのものを依代として、マスターと契約を切っても現界し続けられるとも。

「でもそのためには、私は本当の姿に戻らなければならないのよねえ」真の姿に戻ったキャスターは、今の麗しい姿よりも数倍強いと言う。キャスターが弱いサーヴァントだとキリエは思っていないが、確かにこの姿のキャスターのパラメーターは高くない。本領は真の姿に戻ってから、ということだろう。

キャスターの宝具の欠点は、一度発動したら発動したままになることだ。発動するまでは結界の気配さえも消失させられるが、発動すればここにキャスターありと常に知らし続けることになり、同時に魔力も消費する。

よってキリエは出来る限り穴熊を決め込むことにした。山を最強

の陣地となし、勝てると思えるまで戦いからは潜み続けることを選んだ。

そもそも、原因は不明なれど彼女はキャスターというカードを引いた時点で一度失敗しているのだ。これ以上の失態は許されないと、彼女は最強のマスターという名に奢ることはなかった。

正体隠蔽に機能の殆どを割いたキリエ・キャスター特製の結界内に立つ洋館。それがアインツベルンが用意したマスター用の屋敷である。流石に本国の城に及ぶべくもないが、小さな城と呼んで差支えない屋敷である。

シャンデリアが輝き赤じゆうたんの敷かれた、場違いな洋館の中でソファに腰かけたキリエはゆっくりと口を開く。

「そういえば、あなたは一体何を望んでこの戦いに参加しているのかしら」

話す内容は聖杯にかける望みから始まった。生前人間たちに討伐されたキャスターは、二度とそのような目に遭わないように鬼たちだけの理想郷を作りたいと楽しみに語った。

人を食らう凶悪な鬼のキャスターだが、こうして話す分にはただの女、どころか無邪気な子供のようでもある。

「あなたたちって人間を食べないと生きていけないのではないの？」

「アハハハ、違うわ。私たちにとって人間と言うものは……そうね、デザートとかスイーツ？みたいなものかしら。生きるのに必須、というわけではないわ」

「なら私を食べなくてもいいの？」

「食べようと思えば食べれるわ。でも、ご主人ってちゃんとした人間じゃないでしょう？うーん、わかりやすく言うと、ごてごてに要らないものを飾り立てたお菓子みたいで、毒々しすぎておいしくなさそうなの」

キャスターは無邪気に笑う。彼女は人間を食べることを悪いときえ思っていない。人間が牛や豚の肉を美味しく食べることに、キャスターが人間を食らうことは同じなのだ。だからこんなにも屈託がない。キャスターは話を己の願いに戻した。

「生きてるとき、お父様——山の神様の眷属もどきとかやってるときよりも、茨たちと会ってからのの方がずーっと楽しかったわ。多分、私がよくなったことは、楽しくて無制限に人間食べてたことだと思うの」

人ならざるものと人が交わって生きるのはとても難しい、ということがキャスターの持論だった。だから仲間たちがもう死なないように生きるには、新しい世界が必要だと目をきらきら輝かせて語った。「ご主人は人じゃないみたいね。もしよければ私たちの理想郷に入れてあげてもいいわ」

「遠慮するわ。あなたたちは勝手にわいわいやってればいいのよ」

生まれてから城から一步も出ず、メイドに傅かれて成長したマスターと、好奇心と己の欲求に正直であり続けた嘘嫌いのサーヴァント。双方は無邪気さゆえに人を殺めることに躊躇いを覚えないが、同時にあまりにも純粹に過ぎた主従が打ち解けるのは早かった。

結界を強固に保つという仕事はあったが、本格的に戦争が始まるまではそれ以外にキリエがすることはなかった。外の世界を知らないキリエは、その時になるまでこれを機会に観光をして回った。

一成を彼女が発見したのは偶然だが、並外れたマスター適性を持つ彼女がマスターの気配をいち早く感じたのは必然である。

だが、奇しくも——感じたマスターの気配が、己に似通っていることにキリエは気づいた。土御門一成——キリエを造る際に用いられた陰陽師の精は、魔術系統が同一である陰陽師のもの。その縁に引かれるまま、キリエは彼に声をかけたのだった。

\*

春日の地を踏んで一ヶ月、キャスターは嬉しそうにキリエに告げた。一ヶ月にわたる水面下での陣地作成により、大西山は宝具を発動すれば、山自体が魔力を生成しはじめる状態にまで至った。つまり、



キャスターは戦う魔力も自分で補えることになる。

「ご主人、今の山なら私は魔力供給がなくても現界できるわ」

「私もそれを感じるわ。今は隠しているけれど、この山魔力の塊ね」

キリエは満足げにキャスターに笑いかけると、人差し指を顎に当てた。

「じゃあ、契約を半分山そのものに移そうかしら。そうすれば方に一つ、私が魔力供給できなくなってもあなたは現界できるものね」

奇しくもアーチャーが働きかけをしていた時のことだった。二騎同時使役を真剣に考え始めていたキリエは、そうキャスターに提案した。

キリエならば三体なら使役できようが、キャスターが自在に使える魔力があるならそちらで補給してもらえばよい。キャスターは二つ返事です承した——が、彼女は思い出したように声を上げた。

「そうそう、ご主人、宝具について相談があるのだけど」

「なにかしら」

「私の宝具が生前の仲間を召喚するものだと言ったと思うけれど、少し選択の余地があるの。本当はいい所どりをしたいのだけど、さすがにそれは無理みたい」

能天気なキャスターにしては珍しく、本気で悩んでいるそぶりにキリエもつられて向き直った。「言ってみなさい、その選択肢」

「簡単に言うと、生前ほど強くないけれど陣地のある限り何度でも蘇る仲間を呼び出すか、生前に近くなるけど一回死んだらそれっきりの仲間を呼び出すか迷っているの。生前に近いっていつても、私——サーヴァントほどの強さは望めないんだけどね」

数分という短時間ならまだしもキャスターの宝具は長時間展開するタイプで、流石にキャスターと同格として生前の仲間を、しかも五人も呼び出すのは不可能だ。

成すとしたら、それこそ大聖杯しかないゆえに理屈としてはわかる。

「……生前ほど強くない、というのはどの程度？」

「私の使い魔として呼ぶから、サーヴァント(仮)?くらいかしら?宝

具とかもないわよ。もちろんマスターなんかは一ひねりでおいしく  
いただいたちやうけど」

キリエはしばらく考え込み、顔を上げた。「私としては何回も蘇る  
方がいいと思うわ。蘇るなんてあつちは想像だにしていけないはず—  
—殺されたら殺し返せばいいもの。それにサーヴァントほど強くな  
くても、マスターを殺せばいいしね」

それを聞くと、キャスターは満面の笑みを浮かべた。サーヴァント  
としてキリエに尋ねたものの、彼女の中では結論が出ていたのだろ  
う。そもそも、生前人間たちに討たれ、仲間の命を惜しむ彼女が、「一  
度死んでそれつきり」を避ける手があるならばそれを選ぶのは自明の  
理であったのだ。

「大将の私が元気でさえいれば、みんな元気なはずだものね。私、負け  
ないから」

いつもは男をとろかすような、魔性の微笑みを湛えているキャス  
ター。だが一度生前の、仲間の話をする時だけはその魔性は消え去  
り、少女のようにあどけない表情になるのだ。

「——あなた、生前の仲間が大好きなのね」

「もちろんよ。みんな、茨と手分けして見つけてきた仲間なんだから  
！私が声をかけて一緒に来なかった鬼なんていなかった……あ、一人  
いたけど、みんなついてきたのよ！」

魑魅魍魎、百鬼夜行の王と恐れられた彼女が少女のように笑う姿を  
見て、キリエはわが身を思い返した。自分はずっとこの城に1人き  
り。それでも彼女はこの戦いで一人ではない。このキャスターと、そ  
して、白亜の城にやってきていた神父がいるのだから、一人ではない  
のだ。

## 第2幕 日本神話・改

12月5日② 先、鬼が出るか蛇が出るか

日も暮れて、キャスターたちを打倒すべく最後の打ち合わせの為一同は悟と一成の部屋に集まっていた。眼を覚ましていた悟も、内容に口を挟まないまでも成り行きを見守っている。

「色々考えたが、俺が宝具を放てれば仕事の五割は終わる。例えキャスター自身にぶつけないまでも、山自体に放つことに意味がある」  
「キャスターが怖いので、あそこがガチガチの陣地になってるからだもんね」

明の相槌にセイバーは頷く。そしていくら陣地を築こうが、土台から破壊してしまえば怖くない。そしてセイバーはそれをし得るだけの宝具を持っている。陣地を破壊すれば確実にキャスターは弱体化する。しかし、それを易々とはできない要因が存在する。

アーチャーとその宝具『尊つきほを受け継みぎしつしる剣』。

バーサーカー戦終結後、セイバーはアーチャーの宝具により体の自由を奪われた。結局令呪を一画消費し、明を殺そうとするセイバーを止めることができた。だが、今残る令呪は一画であり、かつアーチャーの宝具は何度でも開帳可能だ。

——しかし、あの宝具の影響を無効化することは不可能だが、効力を弱めることはできる。

「俺がアーチャーの宝具によって自由を奪われた時、何故剣を持つのを止めたかわかるか？」

あの時、セイバーは神剣を自ら叩き落としていた。それに数日前、キャスターとアーチャーが碓氷邸にやってきたときも彼は神剣を手放していた。

「あの宝具は対魔力じゃなくて神性によって縛る宝具だからでしょ」

アーチャー——藤原道長の宝具『尊つきほを受け継みぎしつしる剣』は、対魔力を貫通し、対象の神性に応じて拘束する。セイバーの神性Bは格好の

餌食となる値なのだ。しかし、セイバーの神性は神剣によってかなりの補助を受けている。

神剣を持たない状態のセイバーの神性はD。つまり、令呪のバツクアップと剣を手放すことで神性を下げることにより、セイバーは宝具の呪縛から逃れたのである。

キャスターとアーチャーが碓氷邸にやってきたとき、明に剣を預けたのも決して武装解除の為ではなかった。

「セイバーお前あの引きこもり神の直系だろ？にしては素の神性低いな」

アサシンが茶々を入れたが、セイバーは話に関係ないためか答えはしなかった。

「神性Dでは、あの宝具を使われても俺の動きが悪くなる程度に抑えられるだろう。だから、最初はこの剣をマスターに預ける」

「……キャスターってさ、今は別物でも元は山の神の子でしょ？やっぱり剣はセイバーが持ってたほうがいいんじゃない」

伊吹の神の申し子であるキャスター。かつマスターである明は女であり、それに剣を預けるのはどうにも不吉の感がぬぐえない。その視線を受けて、セイバーは胡坐をかいているアサシンに目をやった。

「……お前からの報告によれば、強固な結界は展開されているがあくまで結界で、異界ではないのだったな」

「そうだけ」

「ならば最初はマスターが持つべきだ。キャスターが異界を創造していたなら考えなければならなかったが」

「異界を創造？」

一成が不可解そうに繰り返したためか、セイバーは寄り道ながら説明をした。

「俺の生前、神は異界を成していた。自然物に限りあいつらはいかな法則も捻じ曲げて思い描いた世界を創る。例えば水が下から上に流れ稲妻が真横に走り風が音速を超え、太陽は西から昇るといった具合か」

「それって、マーブル・ファンタズム空想具現化みたいなもの？」

——世界の触覚、自然霊の類が行使する力の一つ。自然に存在するものに限り、ありとあらゆる可能性を引き寄せて自分の思うがままの世界を創造する、異界創造法のことだ。セイバーの生きた時代は、まだ奇跡の殆どが魔法に分類され神秘が神秘そのものとしてあつた時代である。

現代より遥かに自然霊、精霊との関わりは近い。天津神ではなく、この国に蔓延っていたと言う悪神はそちらに近かつたのかもしれない。

「魔術師の世界ではそういうのか？それはともかく、その世界にあり俺が無事であつたのは神剣による加護があつたからだ。またその異界から脱する為には、世界を斬るか、異界の主の気を変えるか、殺すしかない。俺に世界を斬る力はないゆえ、方法は主を殺すことのみ。そして何が神かを見極める為に、これまた神剣の加護が必要だつた」  
つまり、とセイバーは一息置いた。

「相手が人や獣ならともかく、神ならば神剣が絶対に必要なのだ。あれなしで神に挑むのは自殺行為だ。だがキャスターはその手合いの領域には至っていないと思われる」

「……お前って本当に神話の日本武尊だつたんだな」

「今さら何を、というかついに壊れたか」

「ついについてどういふことだ!!」

セイバーは憐れみさえ込めた目で一成を見、彼は律儀につっこみを入れた。その時、アサシンがひゅうと口笛を吹いた。

「へー、つまり今回のキャスターくらい生前に比べれば楽勝つてことか？」

「それとこれとは別の話だ。生前と今ではあまりに状況が違いすぎる。そもそも相手はキャスターだけではないし、マスターを殺されては元も子もない」

「ま、そりやそうか」

セイバーの意見にアサシンも同意見らしく、あっさりと言った。生前と今では状況と目的が違いすぎて、アサシンも簡単にはどっちが楽か判断できない。セイバーは続ける。

「何通りか戦い方を考えてみたが、まず外から宝具解放できればそれが上策だ。だがそうできなかつた場合は、敵が三騎と多いためにパターンが多すぎて意味がない。だが変わりはしないだろうことは」

セイバーは明、一成、アサシンの顔を一瞥した。「キャスターとランサー倒すのは俺で、アーチャーを倒すのはアサシンということだ。宝具の性質からしてそれは変わるまい——アサシン、お前の役目はいかうまくお前が宝具を使うかだ」

アサシンのもう一つの宝具。大盗賊・石川五右衛門の生前・伝説上の技量が宝具の域にまで昇華された形なき宝具。誇りある英霊であれば、使われた側は間違いなく怒り狂う「卑しい」宝具であろう。

しかし、アサシン自身にとっては誇るべき最強の宝——生きた証である。それになにより英霊たるもの、他人からどうこう言われて自ら評価を下げるような安い矜持は持ち合わせていない。

「そしてお前の宝具がうまくいってもいかなくとも、サーヴァント同士の戦闘になだれ込んだ時の行動は決まっている。お前が強いサーヴァントでないことも知っているが、あのアーチャーはお前が殺せ。真名からすれば、最も戦闘に向いていないのはアーチャーだからな」

既にキャスターとランサーの真名はわかったようなものであり、その伝説を鑑みればもつとも戦闘経験に乏しいのは言うまでもなくアーチャーだ。アサシンはにやりとその顔に笑みを刻んだ。

「任された！俺もやりあうならあの胸糞悪い貴族様って思ってたところだ。なあ坊ちゃん？」

「ああ」

アサシンと一成は異議なく頷き合った。

「この戦いは、キャスター側がアサシンの存在を知らないことが重要だ。アーチャーの宝具が解放されるまでお前は絶対に気配遮断を解くな」

あの山は巨大な結界——大江山と化している。膨大な魔力が渦巻く異界となった山。どんなに隠れようとも、アサシンの高ランクの気配遮断がなければ如何な人間・サーヴァントも瞬時に存在を察知される。明は一人キリエとキャスターの姿を脳裏に描いた。

(キャスターがあまりキャスターっぽくないせいで、逆にキリエス  
フィールとの相性はいいのかもしれない)

キャスターのサーヴァントが弱いとされる理由の一つに、マスター  
も魔術師であり手札が被ってしまうことがあるが、このキャスターの  
場合それは当てはまらない。本来の適性はバーサーカーであろう  
キャスターなのだ。実際の魔術行使はキャスターでも、何らかの補助  
をキリエスフィールが成している可能性がある。

それに、マスターが魔術師の英霊を呼ぶということは主人よりも従  
う方がレベルの高い同業者ましゅっしとなることを意味する。その関係性は他  
クラスより幾分か微妙な色彩を帯びる。

それを考えればあのキャスターは、予想外にも妙手であるかもしれ  
ない。

そしてこの戦い、決して楽な戦いではない。抑々三体二で、かつア  
サシンはサーヴァント戦には不向きなのだ。そしてキャスターが決  
して陣地から出てこないならば、セイバーの剣を入れている限り悟は  
死なない。だがそれだけである。それに日数を重ねれば重ねるほど  
にキャスターの陣地は強化される。その上、相手は自前の令呪、一成  
の令呪、ハルカの令呪——もし未使用であれば、最大九画もの令呪を  
所持していることになる。

その時、セイバーは俄かに明の右手を掴んだ。

「最早一画のみとなったが、明、これの使い時はお前に任せるが時を誤  
るな。しかし決して惜しむな——土御門、お前もだ」

残った最後の令呪。一成も明と共に領いた。終わらせるには戦う  
しかないのだ。

「ねえセイバー、どれくらい勝てると思う」

「それは何を以て勝利とするかによる。危うくなれば撤退の手もあ  
る」

だが、ここで全員無事に撤退できたとしても新しい方策があるわけ  
ではない。アサシンの存在も割れ、キャスターは陣地を強化し続け、  
むしろさらに攻略しにくくなるのが目に見えている。

それに悟の命を救うためには、少なくともキャスターを打倒しなけ

ればならない。

（やっぱり今回で何とかするしかない……三騎すべて倒すことができなくてもいい。二騎、いやキャスターだけでも……）

キャスターさえ倒せば、少なくとも悟の命は助かる。そうすれば悟は大手を振ってこの聖杯戦争から離脱し、普通の生活に戻ることができる。

それにあの凶悪な陣地は消滅する。

「でも、今回うまく逃げれても次勝てる保証なんかない。今日、決着をつけるしかない」

「こちらが敵を殺すのに、敵がこちらを殺さぬわけではない。死闘は前提。それでも勝利への道を繋ぐ。そうでなければ俺がここにいる意味がない」

明、一成、セイバー、アサシンは暫く各々ホテルで自由に時間を過ごした。明は自分の魔術礼装を確認し、一成は呪符と神主服を確認し、セイバーとアサシンは自分の部屋で食事をしていた。主戦場は大西山であり、山自体は人気がないと思われるために夜にこだわらなくてもよいかとも思ったが、セイバーの宝具が目立つ可能性を考慮し夜とした。

ホテルを出るのは午後十時と決めている。セイバーは呑気にベッドの上でサンドイッチとスターベツグスのキャラメルマキアートを飲んでいる。セイバーは「注文の方法が複雑怪奇」と抜かしていたが、礼装をチェックしていた一成が「とりあえずキャラメルマキアートをトルつとけばいいんだよ」と極めてアバウトなアドバイスを与えていた。

明は戦いに備え、両方の太ももにタイツの上からナイフホルダーを巻きつけてナイフをセットする。自分のベッドの上にはいつものコートを畳んでおいている。セイバーも既にいつもの衣袴に戻り、マントに身をくるんだうえでもさきもさと食事をしている。



明はそれをじっと見ているだけで会話はない。二人に会話がない事自体は珍しいことではないが、明がセイバーを見ているだけで何も言わないのは若干妙な事ではあった。

そしてその視線に気づきながら放置していたセイバーは、ついに尋ねた。

「マスター、何か用があるのか？」

「あ、えっと、」

そこで初めて自分がセイバーを凝視したことに気づいた明が、慌ててどもった。

「もしや、そちらのミックスサンドではなくこちらのベーコンレタストマトサンドを食べたかったのか？」

「いやそんなことないけど、どっちでもいいけど」

セイバーは不思議な顔をしてから、ならよいかと一言言ってサンドイツチの咀嚼を再開した。明はセイバーを凝視することを止めたが、それでもちらちらとそちらを伺ってしまう。

先程の作戦会議。その中で交わされた一節が、明の頭にこびりついて離れない。

『相手が人や獣ならともかく、神ならば神剣が絶対に必要なのだ。あれなしで神に挑むのは自殺行為だ』

神剣を置いて一人で伊吹の神を倒すと宣言した日本武尊。そうしようと思った理由は、これまで並み居る敵を倒し、驕った彼が腕試しをしようとした説がある。しかし、これまで見てきたセイバーは寧ろ「ライオンはウサギを狩るにも全力を出す」タイプだった。油断をする質にも思えない。

だが、そのように複雑に考えずとももっとシンプルな答えがある。『神剣なしで神殺しに挑むことは自殺行為』と知りながら、『一人で、かつ剣を持っていかなかった』ということは。

日本武尊は、あの時。神を殺しに行こうとしたのではなくて。

——自分を殺しにいったのではないか？

根拠は先ほどの話だけだ。しかし、その想像は余にも納得がいつてしまった。伊吹の山で、たつた一人で呪われて、衰弱死していくセイバーが幻視できる気がするほどに――

「セ、セイバー」

「何だ？もしかしてこのキャラメルマキアートを飲み「そうじゃなくて、えーっと、セイバーって死んでるじゃん？」

あまりにも唐突な振りで、セイバーは首を傾げていた。「それはそうだが」

「それで、護国の英雄っていか国土平定の英雄でしょ？」

「まあそうだな」

「それで、セイバー的に自分の人生を振り返って、ここは自分的に自慢できるなつてところあつたら教えてよ」

「？俺の伝説など現代にも残っている「セイバーの口から聞きたいの！！」

明の謎の剣幕に押され、その理由は理解できなくとも真剣さを感じ取ったセイバーは食べることを中断し、眼を閉じて考え始めた。

その時間がきつと、いくつかある中からどれを言おうかと選定する為のものだと明は信じた。

そして、セイバーは目を開いた。

「――特にないな」

「ない？ひとつかふたつくらいあるでしょ？」

「しかしそういわれても特に思いつかなかつた」

当然のように、朝の挨拶をするかのように「何もない」と言うセイバー。特に興味もなさそうに、サンドイッチの咀嚼を再開させていた。

自らの人生に、自ら誇るところがない。例え誰が護国と平定の偉業をほめたたえようと、その本人が偉業を偉業と思わない。何故なら、彼が剣をとり「最強たらん」と思ったその根本は――そこで、明の思考は止まる。

今度は、訝しげな眼差しでセイバーが彼女を見ていたのだ。

「質問の意図は理解できないが、俺のことは気にするな。今生きているのはお前なのだから、お前はお前のことを気にしていればいい――」

『死骸が今更幸せになろうなど片腹痛い』とは、酒宴にてセイバーが言ったことだ。その言葉はキャスターとアーチャーにだけでなく、自分に向いている。自分のことなどどうでもいいとばかりに、セイバーは鋭く明を見上げた。

「明、そのままだと、お前はロクな死に方をしない」

虚をつかれ、明は目を丸くした。確かに自分は魔術師であるがゆえに人を殺めたこともある為、一般から見ればそういわれても仕方のない部分はある。だが、人を殺した程度でセイバーがそう言うのはおかしい。

「――、それ、どういう「おーい確氷、ゼリー余ったから食うか」

なんとというタイミングか、隣の部屋でくつろいでいた一成が顔を出した。彼は明たちの部屋とアサシン・悟の部屋をよく行き来するためキーを両方とも持っていた。

コンビニで売っているゼリーを片手に、入り口で固まった一成と明の目が合った。空気の重さを感じ取った彼は、明けた扉をそっと閉じかける。

「……何か邪魔したか?」

「いやいやいやいやそんなことないよどうぞいらっしやいウエルカム土御門さあおいでようこそ」

「お前大丈夫? ってうわ!」

天の助けとばかりに重苦しい空気を打破するため、明は一成を無理やり部屋に引きずり込んだ。ついでにゼリーも受け取った。ゼリーを分けに来ただけなのだが、成り行き上一成もベッドの上に腰を下ろした。

明とセイバーのやり取りを全く知らない一成は少し身の置き場がなさそうである。しかし一成の甲斐あり空気が弛緩したのか、セイバーは話を変えた。

「しかしマスター。今度の戦い、お前は嫌にやる気だな」

「……………ん？そうかな」

「いつもは締めまりがないが、今度の明の空気は真冬のように身のしまる思いがする。よいことだ」

セイバーは事あるごとに明の事を「ぼーっとしている」だの「締めまりがない」とこぼしているが、明としては心外である。確かにぼやっとしている時はあるが、これでも時と場合はわきまえているつもりだ。

だが、セイバーの言葉は強ち外れてもない。確かに明は戦う気力十分である。聖杯戦争のマスターとして戦うということもあるが、加えて悟を助けるという明確な目的もある。

彼女はベッドから腰を上げ、ベランダへの窓を開けた。落下防止の為、人が通り抜けられるほどの隙間はない。黒く澄んだ空には星がちらちらと輝いている。街の明かりが目線と同じから眼下へと広がっている。

「キャスターを倒したら、碓氷の家に戻れる」

サンドイッチを飲み下したセイバーがいつの間にか後ろに立ち、同じ景色を眺めている。「そうだ」

「何気にこの滞在費、ツインルーム二部屋分払ってるの私なんだから。魔術ってのはお金かかるんだから、そんなに連泊してお金減っても困るし……あとで土御門に半分請求するからね」

「げっ」

都合よくそのことを忘却していた一成は苦い声を発した。

「……………そうだな」

何故かセイバーの返答が異様な間をおいて返されたが、それを気にする明ではなかった。細かく気になる事はあるが、すべては今夜という死線を越えてからの話だ。

\*

「セイバーらが来たようだな」

大西山の頂上付近の開けた箇所には、巨大な赤鬼と化したキャスター、マスターのキリエ、キャスターの四天王の四鬼、ランサーが揃っていた。アーチャーがいないのは、彼は碓氷邸での酒宴の後、常に山を飛び回って索敵を行っているからである。

子鬼からの連絡でセイバー一行が南の登山口周辺やってきたことを知ったキャスターは、肩に乗せたキリエの指示を仰いだ。

「どうする？主人。敵はセイバー一人、一気に畳み掛けて終わらせようと思う。すでにアーチャーが出迎えにいつているだろうしな」

キリエはゆっくりと肯いかけたが、その人形のような顔には不快の色があった。「いや、待ちなさい。星熊童子と虎熊童子はセイバーを迎撃しにいきなさい。……だけど何か北にいるわ」

まずはその言葉通り、キャスターは星熊童子・虎熊童子にセイバー迎撃を命じた。二匹の人型の鬼は子鬼に従い、軽やかにその場から離れた。残ったのはランサー、茨木童子、熊童子と金童子、キャスターだ。

「熊童子金童子、ランサー、お前たちは北の登山口あたりを見回れ」

「……了解した。さっきの北になにかいる、というやつか」

金童子と熊童子が口をそろえて尋ねた。

「そうだ。人は入ってこない筈だが何故かいる」

召喚した魑魅魍魎どもからの連絡で、キャスターも北の異変を知っている。元々人の立ち入らぬ山であるが、一応人の通れる登山道がある。まだ整備されている正式な南側の道と異なり、北側の登山口は廃れて道に迷いやすくなっている。

身長三メートルを超える鬼は、地を揺るがす声を発する。

「子鬼共によると、人間が入り込んだと言う。主人が人払いの結界を張ったと言うのに入ってくる人間は、普通の人間ではない」

その報告にランサーが興味を持ち、ふむと唸った。瓜二つの鬼はは少しばかり嬉しそうに聞く。

「……食べていい？」

「好きにして構わないわ」

キリエの感情のない声が静かに響く。キャスターもそれに頷くと、熊童子と金童子は素早く揃って姿を消した。一般人を巻き添えにすることを好まないランサーだが、聖杯戦争参加者であればその覚悟もある人間と思っっている為、異論を差し挟むことはしない。ただ賛成をしてくるわけでもない。

あくまで何事もないかのように、ランサーもキリエたちの指示に従った。

「それでは、儂も向かうとする」

「ええ。でも戻ってこいと命じたらすぐに戻ってきなさい」

ランサーは応と返事をする、二人に続いて山の森に姿を紛れさせた。そして残った茨木童子も立ち上がり、キャスターと目配せをしてから気配を消した。

あつという間にキャスターとキリエだけになり、春日市を一望できるこの場所は寂しくなった。頂上付近、かつ開けたこの位置はもし大西山が霊地ではなければ、展望台でも設置されているような場所だ。大西山の周囲は森、森を抜けても畑と農家が点在する、春日の郊外の郊外だ。

それでも遠くには春日駅の光、自然とはかけ離れた文明の明かりが輝いている。

「北の登山口からの人間。もしかして、ガンナー、もといアサシンのマスターかしら？」

濃い魔力の中を吹く風には、大西山の青い香りが混ざっている。キリエは自分の胸に手を当てて首を傾げた。二日前、ランサーを奪ったついでにガンナーと名乗るサーヴァンとそのマスターと交戦した際に、キャスターは確実にガンナー——アサシンのマスターを呪った。並みの魔術師なら一夜で死に至る呪いだ。

もしその通りであれば、マスターを失って一日経つはずのアサシンは消滅しているはずである。

「私の中にはまだ二騎分の魂しかないわ。私だけではどのクラスかまではわからないのだけど、状況から考えてライダーとバーサーカー」  
キリエは一人考え込むが、頭を振った。霊器盤が壊れているという

ことを鑑みれば、別の危険の可能性がある——との考えが彼女の頭によぎったが、今すぐ考えることでもなかった。

「アサシンのマスターは助かったか、それとも新しいマスターを見つけたと言うことかしら」

しぶといサーヴァントねと肩をすくめて、キリエはキャスターを見上げた。マスターにとってアサシンは天敵だが、アサシンのマスターを殺してしまえばアサシンは消える。

「いざとなればランサーを私の護りに使うけど、セイバーと戦うまでは傍につき従いなさい、キャスター」

ランサーは「この戦いではサーヴァントと戦いたくない」と前々からキリエに対して言っていた。元々一対一、正々堂々戦いたいという望みで現世にいる英霊である。

しかしマスターであるキリエを護る事には異存はないようであり、何よりキリエには令呪がある。

巨大な異形——キャスターはその肩に軽々とキリエを乗せた。元々良い眺めの場所であるが、キャスターの背丈でさらにそれが増す。

「承知した。——そうだ主人、これを持っておけ」

巨大な赫い手で渡されたのは、首から下げられるようにチェーンで繋がれた小瓶。水晶で作られた小瓶はキリエの私物で、その中には透明な液体が入って月光に照らされ揺れている。

キリエは受け取るのをしばらくためらったが、漸うそれを手に取るとおとなしく首にかけた。

「……使うことはないでしょうけど、保険の為にもらっておくわ」  
「そうしろ。その量なら全て呑みほしても大丈夫だろう」

大聖杯の起動よりも早くキャスターを召喚したキリエの体を助けたのは、この神の醸造した酒である。仮にキャスターがバーサーカーのクラスで召喚されていれば狂化ランクを落とす機能があつたのだが、狂気に身を落としていないこの鬼には本当に役に立たないモノである。

しかし、逆にマスターにとってはとても有益なものでもある。

山奥、静謐たる月下。風に煽られて雲は速く流れていく。  
キャスターが人型であった時とやら変わる様子はなく、主従は仲睦まじくある。混沌とした山の中で、二人は静かにそこにあつた。



## 12月5日③　ここは敵地

ホテルを出発する前に、一成が事前に作っておいた人形を悟に貼り付けた。セイバーが神剣を彼の体の中から拔出し、今度は明の中に収める。神剣の加護を失った悟は苦しそうに呻き声を上げるが、しばらくは人形が呪いを吸ってくれるだろう。だがそれも長くはない。

人形が呪いを吸えるのは、長く見ても一時間程度。それから呪いの進行が再開し、明け方には悟は死に至るだろう。それまでにキャスターを打倒しなければならぬ。

念を入れて、ホテルからセイバーとアサシンは別行動で大西山に向かう。明と一成はセイバーと共に飛行にて大西山へ向かい、アサシンはホテルから霊体化・気配遮断をして向かう。空に雲は四割程度とあったところで、雨が降りそうにはない。

時々風で流される雲が月にかかり、世界をより暗くする。

相変わらず明はセイバーの腕に抱きつき目をつむり、念仏を唱えていた。仏門の魔術師ではないのだが、実に現金なものである。

「土御門、アサシンはついてきてるか」

「ちよつと遅れ気味だけど、あいつは場所知ってるから大丈夫だ」

「それもそうだな」

其の時寒風に煽られながら、一成は目の前の黒い塊に目を見張った。「——確氷、セイバー、あれだぞ。めちやくちやヤバイ感じだろ」一成の言うとおり、目の前の大西山はかつて見た大西山ではなかった。標高四百メートル程度の小山の上には星と上弦の月が輝いているのにも拘らず、胸が悪くなるような魔力が迸り、肌を粟立たせる。その魔力の質が奥にいるはずのキャスターの本質を示すように感じられた。

鬱蒼とした森の中を通る道路を辿り、セイバー、明、一成は登山口付近に着陸した。

いつそのことアサシンの宝具の中に入って、気配遮断をして山の奥深くまで入っていくという方法を取りたかった。

だが、明たちを宝具から出す瞬間にはアサシンは実体化せねばなら

ず、同時に気配遮断も解ける。そうすれば、アサシンの存在が割れる。  
——敵に気づかれた状態では、アサシンの宝具は使えない。ゆえに、アサシンは姿を現すことはできない。

高所が嫌いな明が蒼白な顔のまま何度も深呼吸を繰り返しているうちに、セイバーは一成に目線を送った。

「あと少しだ」

あと少しでアサシンも追いつくらしく、それを待ってから行こうと決める。明がようやく落ち着きを取り戻す。彼らは眼前にそびえる暗い山を見上げた。ここから五分程度で登山口であり、キリエとキャスターの結界の境界近くである。

「……明」

「食べたサンドイッチが現世にリバーズしそう……、大丈夫もう大丈夫」

「ならいい……ッ!!」

風を切り、何か近づいてくる。気配は間違いなくサーヴァント。セイバーは迎撃の体勢をとるが、相手は斬りかかるでも襲い掛かるでもない。

そして接近しすぎることはなく、害することには興味がないとばかりにその神秘を披歴する——!

セイバーはとつさに一成に視線を走らせたが、彼は苦い顔をして首を横に振った。つまりアサシンはまだこの場にたどり着いていない。敵の到着が早すぎる、もつと集合場所を離れた場所にすべきだったという思考を、朗々とした声が断ずる。

「尊つきほを受けま継みぎつしる剣!!」

翻る衣冠束帯。その英霊の手には、脇差程度の大きさの刀は白き光を放ち輝いている。鬱蒼とした森の中、月よりも輝くその剣を手にしたアーチャーが、その姿を三人に見せた。

「おや、剣を手にしておらぬ様子」

前回に宝具を開帳した時とは感触が違うことに気付き、アーチャーは早くもその原因に気付いていた。

「……一昨日ぶりだな、アーチャー」

地を這うような声音のセイバーに対し、アーチャーは飄々としたものだ。

「ようこそセイバー。知っているとは思いますが、登山口はあちらじゃ」「待てー」

宝具を解放するだけ解放して、アーチャーは再び森の中へと姿を紛れさせた。バーサーカー時のことを思えば、あの宝具はアーチャーがセイバーを視認できなくとも、その魔力を把握できる程度の距離ならば有効だった。

明は表情を変えぬセイバーへと声をかけた。

「セイバー、大丈夫？」

「問題はない。お前たちで言えば両手両足に百キロの重りをつけて水中で行動する感覚のレベルだ——ふむ、アーチャーはあの宝具を使っている間はそれに注力している為にあまり戦闘自体はできないのかもしれないな」

それは大問題ではないかと明は言おうとしたが、セイバーはその点に関してはその以上言わない。どうにかする方法もなく、とにかく信じるしかない。

「……セイバーはいまアーチャーのお宝、いや宝具とつながってる。その匂いは辿れる」

一成の言葉に、明とセイバーが振り返る。それは彼自身の言葉でなく、念話を通じて話しているアサシンのものだ。匂いを辿れる、ということはようやくとアサシンが追い付いてきたことを意味する。

「……遅いぞ愚か者」

『障害物のない空を飛ぶお前の方が速いにきまってんだろーがアホ』

話しているのは一成だが、セリフは念話で伝わってくるアサシンの言葉である。そしてその言葉による殺気をモロに受けるのは一成で、とばっちりである。

「……アーチャーは宝具を解放しているが、お前の方は」

『言っただろ、宝具が開帳されるタイミングじゃねーとダメだって。悪いな』

「……とにかくにも、アーチャーの宝具を解除しないとだめみたいだね」

明が嘆息して山を見上げる。外から宝具を放てば早い——明たちがそう思うのならばキリエもその危険を承知していたはずで、それをさせないが為のアーチャーとその宝具である。セイバーの宝具を制限したら、アーチャー一人でセイバーを相手取ってやる必要もない。「土御門、アーチャーの場所が分かると言ったな。ならばお前が先導しろ。行くぞ！」

「視覚強化と身体強化を忘れないで！」

そして三人は、黒々とそびえたつ鬼の山へと向かう。

ひとまずの目的は、アーチャーだ。

登山口もちろん森に囲まれていて街灯もなく、月と星の光だけが頼りだ。だがそれでも十分周囲を視認できるのは、霧に包まれているとはいえそれだけ月が明るいこともあるが——飛び交う焰——狐火、火の玉の類のせいでもある。

一成を先頭に、一行はアーチャーの下へと急ぐ。セイバーはともかく、明と一成には慣れぬ山道である。それを身体強化任せに上っていく。

「……四枝の浅瀬——別にいいけど」

ぼそりとつぶやいた明の言葉に、セイバーが振り返る。「何だ？」

「いや、ここはもう境界内でキャスターに認識されてるからだけど、とりあえずキャスターを倒すまでは出れなさそうなのが、ルーンアトゴウラの四枝の浅瀬アトゴウラに似てるなって」

四枝の浅瀬アトゴウラは、ルーン魔術における一騎打ちを約束する大禁戒。もちろんルーンなど知らないキャスターが扱うものは違うが、この陣地の効果はそれに近い。

「——どちらかか死ぬまで出れないってことか？」

「どうせそのつもりなのだ、関係ない」

一成は息を呑んだが、セイバーは大きな反応を示さない。明は他に

何か言うべきことはないかと、昇りながらあたりを見回している。

元々、大西山は優れた霊地であり、その霊気の強さゆえに魔術行使にも悪影響を及ぼしかねないほどでもあった。だから注意して魔術を行使するのは当然である。しかし、今山を覆うこの霧はキャスターによる魔力の霧だ。普通は体内で生成した魔力——小源オドにより魔術を行うが、これだけの濃さがあればこの大気中の大源マナから魔力を得て魔術を行える。

つまり、ここにいる限り明や一成は魔術を使い放題ということだ。

だが、一つ問題があった。

「土御門、魔力は確かにたくさんあるけど、これを使っちゃだめだね。やっぱり小源の魔力でなんとかしないと」

なるほど、確かに魔力は満ち満ちている。しかしその魔力は——穢れきっている。普通魔力は無色透明な力であるが、これが無色と片腹痛い。これを言うなれば熱病を起こさせる山の瘴気。かつてセイバーを殺した山の神が放つもの。

瘴気でも魔力は魔力。取り込み魔術を行使することはできるだろう。だがその代償として、術者の体にどのような害があるか。喉の渴きを癒すために海水を飲むような愚行だ。

一成とて明ほど明瞭に言語化するほど理解はできていなかったが、感覚としてよくないものであることは了承していた為、頷く。

登山口付近に足をつけたときから、あの頭痛——碓氷邸の地下室とホテルの廊下で感じたものに近しい悪寒がずっとしているのだ。

「わかった」

登山道は登山道としてあるのだが、そもそも人の立ち入りが乏しい山である。道の両側は鬱蒼とした木々に囲まれて、月の光りさえも遮る。枯れ落ちた木の葉がふかふかと足を沈める。正式な登山道なのに整備が不十分のために荒れ放題、草が生え放題蜘蛛の巣が張りつばなし、しかも夜の為にとても歩きにくい。

その上キャスターの使い魔であろう子鬼の類がそこら中にうろついている。最初はセイバーが律儀に倒していたが、ちらちらと見える

上に襲ってはこない。

おそらく戦闘能力は高くなく、伝令、使い魔のようなものであろうと、途中から放置することにした。

ざくざくと山を登っている最中、いきなり一成が足を止めた。

「さつきからちよこちよこ変なモンが見えるなって思ってたけど、そこ、変じゃねーか」

一成は登山道の脇の、草が生い茂った場所を示した。明もその場所をじつと見つめると、何かに気づいたようにがさがさと草を掻き分けて何かを引きずり出した。

三十センチ程度の長さの木片——よく見ればそれは人の形をした木片だった。

そして黒々とした墨で呪文が書かれている。明はそれを素手で掴むと、ほうとつぶやいた。

「よく見つけたね。これ、多分結界の基点だよ」

「えっ」

「これを山中に配置して、キャスターの結界——陣地を起動させてるみたい。もう結界自体は動いてるけど、これを潰していけば結界を壊せると思う」

そう言うのと、明は短く何事かを唱えた。すると人型は甲高い音を立ててはじけ、跡形も無くなった。土御門の陰陽道と元を同じくするもの——平安の世に生まれた呪いが使われている為に、系統の違う明より一成のほうが気づきやすいのだろう。

「それにしてもこれ、むかつくことにあくまで自然物を加工して作ってる。腐ってもキャスター、おまけに元山の神の眷属で鬼神だからかな……」

「?なんでむかつくんだよ」

「自然物ってことは、そこにあってあたりまえなこと。道端に石ころが落ちてても普通だけど、一億円の入ったバッグが落ちてたら事件の匂いがするでしょ」

要するにキャスターは自然物を偽装して結界の基点を作っているから、それが基点だとはわかりにくくなっているということだ。

「じゃあ俺は変なもんが見えるところを見つけたら、今みたいに人形をぶつ壊せばいいんだな。っていうか昨日アサシンの偵察で見つけた結界とは別なのか？人払いとは」

「——別物、みたい。昨日見つけた人払いと魔力を漏らさない結界は多分、キリエスフィール作。さつき土御門が見つけた基点は、それじゃなくてキャスターの陣地作成を成すもの」

この山は結界が二重に覆いかぶさっているようなもの、と明は諦めた。しかしキリエのものとは周囲への対策、異状を外に感知させないことと魔導の秘匿の為に、無害ではある。問題は勿論キャスターの陣地結界だ。

「けど結界の基点がいくつこの山にあるのか……セイバーのでぶつ壊してもらおうつもりだけだよ」

流石キャスターというべきか、生命力を吸い取る類の凶悪なものではないとはいえ、よく自然に溶け込ませたものだと感心する。どの程度この基点があり、どの程度壊せばいいのかは未知数だが結局はセイバーの宝具で木端微塵にしてもらえばいい。

それでも一成は基点を壊していく気らしく、周囲に気を配りながら上っていく。通りかかる子鬼程度の使い魔は、セイバーが手を出さず明が魔術で退治していく。

アーチャーの気配を探りながら、セイバーは周囲への警戒を怠らない。

「……ところで、アーチャー以降、使い走りのような子鬼程度で何故他は何も出てこない」

セイバーを倒す為に最も手っ取り早いのは、キャスターの全勢力で一気にかかることだ。一体一体ずつ敵を出すなどまどろっこしい上、逆にセイバーには倒しやすい。しかし今、アーチャーの宝具の支配下にあるセイバーは剣を使えない。

とすれば徐々に力を削いでいこうという思惑なのか。

キャスターの動向を訝しみながら一行は山を登っていくと、少し急だった登りが緩やかになった。先頭の一成が振りかえる。

「あの先にアーチャーがいるみたいだ」

「わかっている。しかし」

一成に言われずとも、セイバーと明は背筋に悪寒を覚えていた。三人は、揃って道の先を見上げた。この圧倒するような感覚は——サーヴァントのもの。

いや、アーチャーの気配だけとは思えず、かといつてランサーとキャスターほど強烈なものではない。明が口を開きかけたが、セイバーがそれより早く弾かれたように山道を駆けのぼる。

「様子を窺っている！」

セイバーは素晴らしい捨てた。枯れた木の葉を舞い上げながら、駆け上がり飛び出した先には開けた場所があった。視線の先の一番奥には、宝具を携えたアーチャー。そしてその前衛に男と女の異形。身長二メートルに近い男は、紅い鉢巻を風にたなびかせている。爛々と輝く金色の瞳に、喜悦ともとれる笑みが浮かんでいる。

それよりも目についたのは、その肩に担がれた男の身長ほどもある金棒。相手を威嚇するような棘が無数に生えた凶悪な武器だ。

女の方は銀色の双剣を手にして、長い黒髪を頭で一つに結っている。キャスターと揃いの巫女服に身を包んでいるが、色は普通の白衣に朱い袴だ。

双方、人間ではないことを承知しているが、サーヴァントとも言い難い。

「セイバー——」

セイバーは様子を伺えと言い捨てたはずだが、明と一成はむしろ急いで追いついてきた。護るように二人を手で遮り、向かい合う敵を睨みつける。月光よりもちらつく青白い鬼火が二人の姿を照らし出す。

「おいアーチャー、あれがセイバーか!？」

「そうだ」

「思ったより小さいのね」

男と女は堂々とセイバーの前に立ちはだかつて、何やら楽しげに会話する。アーチャーは二人の後ろにいるままだ。

「何者だ」

「おうおう、良く聞いてくれたな！俺は星ぐギャアア何すんだ虎



ぐおおおおお」

男が威勢よく名乗ろうとしたが、女が左手の剣で男の首を狙った。それに対して男が文句を言おうとしたところ、女は足を突き刺しにかかった。

以上が今の悲鳴の成り行きである。

「貴方はバカなの？お頭から名乗るなど言われたはずよ」

「そうだっけか？」

お頭とはキャスターのことだろうか、それともアーチャーのことか。しかし平安の貴族たるアーチャーが部下に「お頭」と呼ばれていることは想像しにくい。ならばキャスターの眷属かとセイバーが考えていたところ、片手に宝具、片手に扇と優雅を崩さないアーチャーが口を開いた。

「私は戦わぬゆえ、そちらに任せる」

「ケツ、命令すんなクソ貴族。お頭はお前のこと怒ってねえみてーだけど、俺らはちげえんだよ」

鉢巻を翻して、男はアーチャーを睨みつけた。碓氷邸での様子を振り返ると、キャスターとアーチャーは特にいがみ合っている雰囲気はなかった。

だが、むしろそちらの方が不思議なのだ。直接ではないとはいえ、アーチャーは生前キャスターたちの討伐を命じた者である。

アーチャーは男の喧嘩を買うことなく無言を貫き通したため、男もそれ以上つつかかえることはなく、獰猛な笑みと共にセイバーへ振り返った。

「久々の娑婆だ。楽しませてくれよ、セイバーとやら」

「……殺されたいのなら殺してやらないこともない。だがお前たちはサーヴァントか？」

「違うわよ。私たちはマスターなんかに従わない」

金棒の男、双剣の女は嬉しそうに口角を吊り上げている。アーチャーが参加しないところを見るに、やはりあの宝具を使いながらの戦闘はやりにくいのか、実質不可能なのかのどちらかだ。

その宝具に縛られているセイバーだが、目の前の二人からは脅威を

感じない。

男と女もこの世ならざる者ならば、こちらの強さが分からないはずはないだろうが、二人は恐れるでもなく怯えるでもない。そうして女は双剣をセイバーに鋭く向けた。

「私たちに勝つても、殺せるとは思わないことね。先に行きたければ、私たちがちゃんと殺してからにしなさい」

「冷静な顔してやる気満々なのはおめーじゃねーか!!」

男が渾身のつつこみを入れる。とにかく彼らはセイバー達を先に進ませる気がない。そしてセイバーは一度アーチャーの宝具を解除させなければならぬ。ならば、この程度の敵はさっさと片付けてしまうに尽きる。

セイバーは徒手空拳のまま、男と女に向かって突進する。

「剣を使わず相手を殺すのは——現代風に言えば、ステゴロといったか——!」

「おっ、いいねえ!」

男の剛腕によりうなりを上げ、周囲の木をなぎ倒しつつ上から振られる金棒を、セイバーは紙一重で左に避けて躲す。それを見越していた女の双剣が真横から襲い掛かり、セイバーを三つに切り裂こうとする。

その二振りの剣の軌跡を見切り、まるで横に振るわれる剣の上を転がるようにして——軽やかに着地する。女の脇から飛び出してきた男の金棒が目障りと言わんばかりに、セイバーはその怪力乱神の如き拳を圧倒的質量の鉄塊に振るう——!

鉄の匂いがぱつと舞った。同時に凶悪な棘のついた鉄塊がみしりと歪み、ついに可笑しな形に拉げた。男は目を丸くしたが、それは一瞬。深く笑みを刻んだまま、すぐさまその鉄塊を投げ捨てると太く鋼鉄のような両腕でセイバーに襲い掛かる。

その掴みかからんとする両腕を、セイバーは己の両腕で掴む。お互いに人知を超えた怪力の主ゆえに、足をつけている地面が深く深く沈みこむ。このような力比べはセイバーもやぶさかではないが、そうそう楽しんでる場合ではない。

セイバーが急に力を抜き、力のバランスが崩れた男は不意に前のめりになって体勢を崩す。

「は——！」

セイバーは背を低くし、男の手を振りほどくと一気に脇を抜けて後ろから男の背中を回し蹴りで吹き飛ばす。二人が組み合っているところを狙った女の剣は狙いを外し、男は山の木々をへし折りながら呻き、闇の中で見えなくなった。

女とセイバーは三メートルほどの間を開けて対峙する。ぽつぽつと浮かび上がる鬼火が仄かに彼らを照らす。セイバーは土を蹴り上げ、女を睨みつけた。

「お前たちの力は把握した」

セイバーは剣がなくとも、攻撃力そのものは落ちない。人を素手で殺す膂力はもちろん、彼自身もとある武術の祖でもある。

合気道——天地と気を同一にし、合理的に体を使い体格で劣る者が体格で勝る者に勝つことも可能とする武道。これが現代の形に整えられたのは明治・大正期であるが、その源流を遡れば太祖は日本武尊にまで至る。

しかしセイバーのそれは現代の合気道と異なり、精神修養や身の修練を目的としたのではなく、いかに敵を早く簡単に確実に屠るかに重きを置いた殺人術である。

そしてセイバーが見るに、彼らはキャスターにより召喚された部下。とすれば、キャスターよりも遥かに能力は落ちるはずである。パラメータの下がっている自分が苦戦しないのだから彼らはそういうものだ。

セイバーはそう結論づけ、一気に踏み出して女に襲い掛かる。

「く……！！」

女が剣を振り下ろす。セイバーがその首を狙う。どちらが早いか、勝負は刹那。木の匂いが満ちる中にセイバーの腕から血が滴る。右腕を深く切っているがその腕は女の首を捉えて、人知を超えた力で押しつぶす。鈍く低い音が地を這うように響き、女の首があらぬ方向に曲がり、体に入っていた力が抜ける。

しかし、「きちんと殺す」ことが信条であるセイバーは左手で女の肩を掴むと、首を持つ右手を捻り千切った。

セイバーは球体を放り投げ、血糊が降りかかることも気に留めず強く握られている双剣を奪い取った——その時、木々の奥——先ほど男を蹴り飛ばした先から獰猛な獣のような咆哮が山を揺らした。

「うおおああああああ!!」

重戦車の如き重々しき、ミサイルの如き勢いで飛び出し襲い掛かってきた男の顔は、まるで鬼のように赤い。

其れに反し、冷静そのもののセイバーは奪い取った双剣を振り上げる。

双剣と巖の拳が激突するその刹那、セイバーは殺つたと確信を抱いたその時——マスターから供給される魔力に大きな揺らぎが生じた。

予想しなかった事にセイバーの動きが一瞬鈍る。

その隙を逃す相手ではなく、双剣が振り下ろされる直前に拳はセイバーの腹を激しく撃つ。

「…………!!」

完全に攻撃態勢であったセイバーは防ぐ暇もない。体の芯まで破壊するような衝撃に吹き飛ばれて、したたかに体を打った。すぐに立ち上がると、狂戦士を彷彿とさせる勢いで襲い掛かってくる男を躲し、上ってきた登山道を見る。

よろよろと立ち上がった一成と目があい、その一成は叫ぶ。

「確氷が敵に連れてかれたー俺が行く!!」

土御門は右手に呪符を握りしめて、登山道から外れた横道に足を踏み入れる。セイバーは「待て」と声を出したが、すぐさま現在の状況に引き戻される。

足が、動かない。

先ほど殺したはずの女が、胴体のみで地を這いセイバーの足をからめ捕っている。

万力にも等しい力で掴まれる。飛び上がった男が、拉げた金棒を力任せに振り下ろす——！セイバーは動かさないつもりならそれでよいと言わんばかりに地を踏みしめて双剣を捨て、金棒を受け止める。

みしみしとセイバーの矮躯がさらに小さくなるほどの強力を、受け止める。これまでランサー、バーサーカーと戦った時には多少なりとも表情のあつたセイバーだが、今はその表情には能面のようにも浮かんでいない。

しかし、その声色はこれまでなく冷え冷えとしたのであった。

「……首と胴体を離すだけではダメというわけか」

「お前に、私たちは殺せないぞ？」

どこから声が出ているのか、首のない女は嘲笑う。

12月5日④ 魔術師と眷属

「あれはサーヴァントなのか？」

「いや……似たものだけど、違うと思う」

セイバーと男女のサーヴァントもどきが交戦を開始した時、一成と明は木の陰に身を隠して戦闘を窺っていた。アーチャーの宝具下にあるセイバーは剣がないことに加えて性能がダウンしている。

しかし小手調べのつもりなのか——明は訝りながら戦いの成り行きを見守る。

セイバーは男女のサーヴァントもどきを圧倒している。このままいけば勝つのはセイバーだ。一成はアサシンの気配を確認しつつ、セイバーと二人の戦いと同時にその奥のアーチャーをじつと見ていた。考えていたことは、「どうやったら一度、セイバーをアーチャーの宝具支配下から抜け出せるか」である。

キリエがマスター故、魔力切れは望めない為にするとすれば、一度アーチャーを宝具を使う集中をきれさせることだ。

明も同じことを考えていた。一成も明も、キャスターの眷属二人にセイバーが負けるとは考えていなかった。それでも、戦闘のなりゆきとその背後にいるアーチャーを注視していたせいだろうが——それは、気配を絶ったアサシンからの念話と同時に起きた。

『おい一成!!』

「……っ!!」

明が半身を翻しかける。一成はアサシンの念話で振り返る。そこには一成とよく似た衣装——神主じみた衣装に身を包んだ男がいた。そして、彼の手にしていた刀が、明の腹に吸い込まれたように埋まっており、突き出ていた。

刀は突き刺さったままで栓になり、血が噴き出すには至っていない。

「……あれ？」

当の明も何が起こったのかわからないような顔をして、己が腹から

飛び出した刀をまじまじと見つめている。先に我に返ったのは一成だった。

とっさにアサシンを令呪で呼び戻そうとしたが、作戦会議時の「アサシンが相手に知られていないことがカギ」という言葉を思い出す。その一瞬のためらいの間に、その刀はあつという間に明から引抜かれて一成をも狙った。

必死で右手に握りしめていた呪符を振りかざし、魔術回路を励起させて叫ぶ。

「急急如律令!!」

男の刀が一成の胸直前ではじけ飛んだが、同時に一成も派手に体を動かした為にバランスを崩してひっくり返った。その隙を逃す相手ではない。

再び防壁を展開するよりも早く、正体の知れぬ敵は凶刃を閃かせる。月光を浴びて光る血濡れの刃は再び血を欲して振るわれる――

だが、その刃は一成を襲うことはなかった。尻餅をついた一成の目の前には、立っているはずのない明が立っていた。

あまつさえ、一成が受けるはずだった刀をその身に受けて。

「!!う、確氷!?!」

彼女の足元には、ぼたぼたと赤黒い水たまりができていく。腹を一突き、袈裟がけに一撃、およそ立っていられるはずがない。だが、彼女はそのまま立っている。

一成だけではなく、敵からも驚愕の雰囲気伝わってくる。日本刀の主は白衣に浅黄の袴を身に着けた、精悍な男だった。短い髪の毛が少しだけ風に揺れている。

「――女、何故生きている」

良く通る声は、耳に心地よくせに背筋を寒からしめるものだ。

一成の前に立つ明は、微塵の震えもなく答える。

「……私はずっとと丈夫にできているからね」

一成とて、ようやく明の無事なわけに思い至った。彼女の体にはセイバーの神剣が宿っている。悟の呪いを停止させた神の加護。

その加護が今は彼女にあるならば、この尋常ではない状況も理解できる。

(けど……)

たとえ治るからといって、傷を受ける時の痛みがなくなるわけではない。

たとえ治るからといって、日本刀の一撃を正面から受けたいと思う人間はいないだろう。

そして、たとえとつさに人を護るためとはいえ、これほどためらいも無く凶刃に立ちほだかれるものなのだろうか。

「生死は問わず、と言われたからな」

神主服の男はパチンと刀を納めたかと思うと、全身で明に体当たりをしかけた。だが、それは攻撃ではなかった。彼は目にもとまらぬ速さで明を抱えて、風のように姿なく森の奥に消えてしまったのである。

「待てェ!!」

一成が必死で立ち上がった時、遠ざかる明と目があった。神劍の効果か、彼女の意識は既に覚醒している。暗闇の中でありながら、その視線の示すところは一成にも理解ができた。

———まだだめだ。

勿論アサシンのことであろう。明を助けようと追いかけるならば、アサシンの手を借りなければ一成は追いつけない。だが、全開の状態ですえいバーに剣を振るわせるためにはここでアサシンの気配に気づかれるわけにはいかない。

既に明は山の樹木へと姿を消している。一成は奥歯を噛みしめ、一気に上の開けた場所をふり仰ぐ。

そして戦っているせいバーと目があった。明は生きている、だがその身に剣を宿しているとはいえ放っておけない。

何より彼女は、一成を庇って傷を負ったのだ。

「確氷が敵に連れてかれた！俺が行く!!」

せいバーは「待て！」と返したが追いかけては来ない。作戦会議中にも思ったことだが、軍神と崇められるだけあつてせいバーは戦いに



おいての判断は正確であり、かつマスターの明には忠実であろうとする。

そのセイバーが待てというなら、ここは待った方がよいのではないか——一成は逸る心を抑えて、呪符を握りしめながらセイバーが戦う開けた場所へ足を運んだ。

すでに、鉄臭く生臭い匂いが強く漂っていた。

登り切った先に広がっていたのは、筆舌に尽くしがたい光景だった。

戦っていた敵二人はもうどこにもいなかった。正確には、原型がなかった。

戦っていた開けた場所には一面に血糊が撒かれたようであり、肉片のようなものが所どころに残っているだけだ。双剣と拉げた鉄の塊だけが原型を残して、かつて戦う相手がいたことを物語っている。

一人立つセイバーは、白い袴と肌を返り血に塗れさせながらも顔色一つ変えておらず——戦う気のないアーチャーはその場を去ろうとして、其れよりも早くセイバーが距離を詰めながら何かを投擲した。

「——!!」

それは先ほどまで戦っていた敵の肉片を固めたモノ。それ自体に攻撃力は皆無だが、血液を撒きちらしてアーチャーの顔面へと飛んでいく。

アーチャーはそれを左手の扇で以て叩き落としたが、飛び散る赤が彼の片目を覆った。

セイバーはあつと言う間にアーチャーに迫る。そして直前で足を止めたかと思うと、身を引き裂帛の気合と共に掌底をみぞおちに叩き込んだ。

空気が震え、風が止まりアーチャーの体は豪速で吹き飛んだ。道から外れた木々の奥へ、なぎ倒しつづ奥へ奥へと吹き飛んだのだ。

「——ッ!!」

宝具を携えていたため、受け身を取り損ねたアーチャーはあつという間にセイバーたちの視界から消えた。セイバーはほとんど軽く

その場で跳ねると、一人頷いた。

「——これで、一度宝具はリセットされたはずだ」

今のスピードと気合に任せた一撃で、セイバーはアーチャーの宝具発動を一度断ち切った——それを彼は気配のないアサシンへと向けて語る。その顔にすつきりしたところはない。疑惑に満ちて、アーチャーの吹き飛んだ先を見ていた。

だが彼は直ぐに、いつもと全く変わらぬ声色で一成に振り返った。

「マスターの下へ行くぞ」

「……お前、何と戦ってたんだ？」

セイバーの姿とあまりの光景に、状況を忘れて一成はセイバーに問うた。ちやうど足元に落ちていた肉塊かと思われるものは目玉で、一成はなんとか吐き気こそ抑えたものの思い切り目を逸らした。

「アレはキャスターの呼び出したモノ、もつと言えばキャスターの生前の眷属ともいうべきものだ。キャスターは召喚術を使える手合。しかしあくまで眷属、能力はキャスターを下回っている。そこまで強かったわけではないが、俺がアーチャーの宝具の影響下にありかつ徹底的にしていたら時間がかかった」

一成が聞きたかったのはそんなことではなかったが、セイバーはやはりいつもと変わらぬトーンで答えている。

彼はこの光景に違和感はないようで一成を脇に抱えると、山中を疾走した。パスで彼女の居場所を把握しているセイバーは、全く迷うことなく障害物である岩を割って木々を蹴り倒し、最短ルートで駆ける。

「何があった」

「……サーヴァントもどきに確氷が刺された。だけど生きてる」

先程のパスの乱れはそのせいかと、セイバーは静かに頷く。「俺の神剣を体に入れているから、そう易々と死ぬはずがない。今もパスからは俺に魔力が流れている。しかしマスター一人でキャスターのいるところに放り投げられてはひとたまりもないだろう」

一成は自分に喝を入れ、懐に収めた呪符を握りしめた。一刻も早く明を見つけなければならぬと二人は大西山山中を突き抜けていく。

「……しかし、少し気になることがある」

「何だよ」

「あの男——アーチャーはお前が頼りないから最強のマスターに乗り換えた。だが終われば三騎で争い合うことになる。ゆえに奴らは一枚岩ではない——それは、先のキャスターの眷属からの言葉からも明らかだ」

その話は、神父の使い魔からアインツベルン三騎使役のことを聞いた時にもあった。キャスターたちはあくまでキャスター陣営以外の敵、もつと言えばセイバーを殺す為に寄り集まっているといつてもいい。

「しかし、おそらくキャスターはアーチャーより強い。ランサーもだ。三騎の戦いでアーチャーがアレに勝てる保証はどこにもない。結局負けるならお前を裏切った意味はない」

「あいつのことだろ。宝具がまだとんでもないとか、陣地外に連れ出す策を練ってるとか」

アーチャーは自分とは違って計画的だ。セイバーを倒した後の為におそらく何かしら手は打っているのだろうと一成は思っている。

しかし、セイバーは眉間にしわを寄せていた。

「——どうも、アーチャーは今一つやる気がないように見えるのだが」

\*

「……ッ」

明は神主姿の男に俵のように抱えられ、山の道ならぬ道を走っていた。最早登山道も何も関係ない。男はうねる木々や岩を器用に避けて、己の庭であるかのように走る。

見た目だけなら明は満身創痍だ。コートとブラウスはぎつくりと破れてその上血まみれになって湿っている。しかし、明は概ね平常通

りである。

(致命傷を此処まで回復しちゃうのか……)

明はセイバーの神剣の威力に内心舌を巻いていた。もちろん剣は傷を負った時の痛みまでを消し去ってくれるわけではないが、傷自体は時を巻戻したように綺麗に無くなっている。

明は飛ぶように過ぎていく木々の間を運ばれながら、今の状況を観察した。自分を抱えている男はもちろん人間ではない。先ほどセイバーを襲っていた二体も人間ではない。サーヴァントに似た気配だが、サーヴァントほどの力強さは感じなかった。

おそらくキャスターが呼び出したモノ。

キャスターの正体は英霊なるものではなく、悪鬼と言う方がふさわしい。ならば今自分を運んでいる男も、キャスターの眷属の一員である。

この男は「生死は問わない」と言っていた。聖杯戦争においてマスターを殺すことは常套手段だが、生かしてまで連れて行く意味は何か。考えられるものとしては残った令呪を奪うことだが、それならば腕だけ切り取ればいい。

それとも、セイバーの剣を入れている為に殺せないが、いつでも殺せるように手元に置いておくためか。

(何をするつもりか知らないけど、ロクなことはないよね)

どのような目的にしろ、向かう先はわかり切っている。キャスターとキャスターのマスターの元である。最高のマスター適性をもつアインツベルンと、そのサーヴァントに一人で立ち向かつては自分が無事でいられるかどうかなど考えるまでもない。

明は暗闇の中目を凝らして周囲の様子を観察し、男が登山の休憩所となるような平らな場所に出たところで、一気に詠唱した。

「Anset—Shadow<sup>影</sup> keih<sup>槍</sup>・s!!」

一瞬にして魔術回路を励起させ、小源を魔力に変換する。自分の左手を、自分を抱えてる男の右腕にたたき付け、影魔術を発動させる。影魔術は元々人間よりも幽世の存在に有効な魔術の為、この世ならぬものである眷属にも効く筈である。

はた目には黒い焰の様に見える明の影は、纏わりつくように鬼の腕を覆った。

「――！」

不意を衝かれた男は、思わず明から手を離す。ちよūd岩を駆け昇ろうとしていたところだったため、落とされた明は体を強かにぶつけたが気を失うには至らない。今ならば死ぬほどの無茶も効くとかかった彼女は怯まない。

湿った地面を転がったが、直ぐに体勢を整えた。

「……った」

「女、何故生きている？」

岩の上に立ち、鬼火に照らされながら神主服の男は明を見下ろしている。其の顔は精悍でありながら、どこか野性味を感じさせる。明の放った炎は消えていたが、それを受けた腕は重症の火傷を負ったように激しく爛れている。明は太腿の黒いナイフを右手に持ち、その口角を吊り上げた。

「さつきも言ったと思うけど、私はもともと丈夫にできているから」

ふと男は思い出したと言わんばかりに手を打った。

「……そうか、セイバーの神剣はお前が持っているのか。何故剣を持っていないのかといぶかしんでいたが、アレの神性は剣の有無で影響を受けると見た」

「へえ、アーチャーの宝具についてよく知ってるね」

「われらは同陣営だからな。アーチャーもランサーもお頭の宝具を知っているし、俺たちもアーチャーとランサーの宝具は知っている」

アーチャーやランサーが易々と宝具の性能について話すとは考えにくかったが、マスターのキリエが情報共有の一環として教えさせたのか。明は心の中で嘆息した。

男は一度、今気づいたように己の爛れた右腕を見ていたがすぐに日本刀を、再びどこからともなく取り出した。

「神剣で怪我を治してしまうというならば、これはお前を殺すのは骨が折れそうだが――切った腕が生えるほどの効果はあるか？怪我を治しても強すぎる痛みの衝撃で死ぬかもしれない」

「……あなたって私を殺したいの？殺したくないの？なんなの？」

「生死問わず連れて来いというのはマスターの指令だ。令呪があるならほしいとか言ってたからな。だが生きていたほうがいい、と思うのは俺たちの都合だ」

死んでもしばらくは令呪は死体に残る。キリエは殺したほうがいいと思っっているに違いないが——男はしなやかな指で、明の右手を指し、それから胸を示して嗤う。

「腕はマスターが持つていくが、俺たちは体を頂く。大体において、肉は新鮮で、生きたままの方が美味いんだ、人間は」

「……！」

明とて予想をしていなかったわけではない。むしろ想像通りと言った方が正しい。現世界した今、キヤスターは自重しているが、彼らは本来そういうもの。

「生前ならともかく、いま霊体の俺たちにとって魔術師の踊り食いはただの人間以上のごちそうだ」

全身の毛が逆立つような感覚。人を殺すのは食べる為、快樂の為にその表情が告げている。セイバーが来るまでは、己で戦うしかない。明は立ち上がった。

「やるか、女」

神主服が笑う。この男、先ほどセイバーが相手していた二人よりも強い。あくまで眷属故にキヤスター本体ほどの強さはないが、その魔術師を相手取るのとはわけが違う。倒す道を見出すならば、その余裕から来る油断を突く。

月が照っている。満月に足りない其れは、男の背後から照らして濃い影を投げかけている。明は太ももにくくりつけたナイフを勢いよく引き抜くと、その濃い影へと投擲する——てっきり自分目掛けて投げられるかと思つた男は意表を突かれた。

「……これは」

男は今いる場所から一歩たりとも動けない。自分の影に突き立った漆黒のナイフに縫い付けられたかのごとく身動きがとれないのだ。その眼ははつきりと明を見据えたが、当の明も僅かに驚いていた。

「——なんと、移動はできないみたいだけど腕とか口は動くんだ」  
影縫い。対象の影をその場に縫い付けて縛りつける魔術。影に突き立った明のナイフを抜くまで対象は身動きが取れなくなる。

キャスターに対魔力はない——ならば、その眷属に対魔力があるはずもない。

「動けないなら上々、そのまま私の影のハチの巣にな「燃えろ」

呪文どころか一言の言葉により、月を背後にする鬼の周囲に火の玉が無数に灯る——そしてそれはそのまま、全てが明に叩きつけられる。

「ツ——Varjo<sup>影</sup>はkillpi!<sup>盾</sup>」

咄嗟に行使しようとした魔術から防御の影に切り替え、その火の玉は影に分解されて消え去った。二人はじっと、明は敵意の眼差しで、男は薄笑いのまま見つめ合っている。

「キャスターは呪術なんて使わなかったけど……いや」

キャスターは既に悟を呪っている。鬼たちには確かに妖術を操ったと言う伝承がある。術を使用できてもおかしくはない。だが、男の方からあっさり「微妙」と返答した。

「いや、お頭はロクに呪術はできやしない。他の四天王共も使えない——使えたが、あまりに使わなさすぎて忘れたんだ、バカだから」

「じゃあ、あなたは」

男は面倒くさそうに、動けないのにも拘らず明を高めから見下ろしている。よくよく見れば、彼も美貌の持ち主である。男の姿をしているが、キャスターと同様に本来は男でも女でもないのだろう。彼は半ば呆れたように、笑う。

「お頭も四天王共も、呪術なんてこまごましたことは性に合わないのさ。そういうわけでそういう類は全部俺の役回りとなったわけだが——」

風が強くなっている。その風に乗る、呪いの如き言葉が紡がれる。  
「お前も呪術師ならばひとつ、呪術合戦でもしてみるか？」

「——ごめんなさい。私が使うのは呪術じゃなくて、魔術なんだ」  
言葉の途中で、両手の人差し指を男に向ける。じわりと空が滲んで

黒い弾丸が、男に目掛けて発射される。

ガンド——北欧の著名な魔術の一つで、相手を指さすことで相手の体調を崩す呪い。物理的破壊力を持つものではないが、魔術師によっては魔力密度を上げて物理的破壊を可能としている者もいる。

明のガンドも物理的破壊を可能とするが、彼女の場合はどうしても「影」の影響があり、「この世にあるもの」への影響力が薄くなりがちで効率がよくない。だからあまり使うことはないのだが、今は「この世にないもの」が敵であるがゆえに遠慮はない。

「燃え——」

其の時、世界が暗闇に包まれる。否、風に流された雲が月にかかり、月光を遮ったのだ。その瞬間、男を縛りつけていた影が解ける。

それを知るや否や、男は日本刀を手に岩を蹴る。明のガンドは見事に回避されるが、刻印を通して発動している為に再発射に時間はかからない。

しかし男は、あつという間に明との間を詰める。そのたくましい手が明の右腕を掴み引つ張られ日本刀が再び心臓を狙う。

しかし、明はだからどうしたと言わんばかりに——それを避けようともしなかった。

男の刀は寸分変わらず明の胸を再度貫く。丁寧に捻りまで入れて抉り、当然絶叫上げてもだえ苦しむほどの激痛があつてしかるべきである。だが明は強く唇を噛みしめただけで、その左手で男を抱きしめる様にして唱えた。

「Te, j o t k a e q u i n o x, p y r t e i d e n p i m e y d e  
s e p o i s t a a k a i k k i S a r e——!」

明の体全体から、黒いインクが染みだしていくように影が溢れる。胸に刀を差されたまま、むしろ相手を離すまいと左腕に力をこめて、ゼロレンジで魔術を放つ——!

「Y h t e y s, p o i s t a a!」

この世ならぬモノを葬り去る影魔術。サーヴァントの多くは対魔力を持つがゆえに、サーヴァントに対して使うことはないと思つていた。



またこの世ならぬ者に特化した魔術ゆえ、マスター本体に対して使うこともないと思っていた。しかし、キャスターそのものに対魔力のスキルは存在しない。

男は目を剥いて、憎々しげに叫びをあげた。

「ッ、何だ!？」

全てを分解していくその魔術は、異界の体さえも分解していく。ぼろぼろと神主服が、己の左腕が崩壊していくさまを目撃して、男は明を突き飛ばした。胸から抜けた刀は血を散らした。

明は歯を食いしばり、倒れそうになるところを木に寄りかかって踏みとどまる。セイバーの神剣は致命傷でも即座に治してくれる。明は太腿からもう一本のダガーナイフを手にとった。男は崩れ落ちかけた神主服と左腕を見て笑う。

「なんと恐ろしいことをする。死が怖くはないのか？」

「知らない？魔術師の道は死ぬことと見つけたら、って」

そう、魔導の道は常に死と隣り合わせである。魔術の行使で失敗し、魔術回路を暴走させることは即座に死を意味する。その上、魔術師は限界を容易く超えることができる。根源への追求をするあまり、限界を超えて、神経をズタズタにしても魔術回路を動かし続ければ奇蹟には手が届く。

しかし、その代償に術者は死に至る。其れだけの話なのだ。

——死ぬ気になれば、できないことは少ない。

血の混じった唾を吐いて、明は男を睨みつけ、笑う。

だが、男は驚いたように目を丸くすると、唾棄すべき風に呟いた。

「……なんだ、お前は既に死んでいるようなものか」

「？」

「まあいいさ。しかしお前の魔術は何だ？お頭と話が違う」

男は崩壊しかかった自分の右腕と、爛れた左腕をしげしげと眺めた後、今度は何事かを呟き始めた。複数の気配が周りにわき始めるのが明にも感じられる。

男に注意を払いつつ、仄かに明るい木々の間や草、岩陰に目線をやると続々と子鬼たちが続々と姿を見せた。山を登り始めたときから

セイバー・一成とともにこういった子鬼を複数見てきたが、彼らは明たちを攻撃しようとはしていなかった。だが、今は違う。

子鬼、というのは目の前の男と比べたら力量の点において遙かに格下という意味だ。大ききだけなら明の身長ほどはある。形相は様々で、着物を着ていたり虎島の腰巻だけだったり、肌は肌色だったり青かったりしているが、一樣にその頭には二本の角を生やしている。それらが三百六十度、円を描くように明を取り巻いている。

その呼気は生臭く、おどろおどろしく不快でしかない。

「……人ひとりによってたかつてどうなの？」

「俺たちは決して嘘をつかず信用したにもかかわらず、それを裏切る人間どもにいわれたくないな」

子鬼一匹一匹は大した敵ではない。だが、大勢となると流石に骨が折れる。影魔術とガンドによってもろとも消すことはできるが、おそらく鬼は後から後から湧いてくる。

——何もなければ、恐らくセイバーはあの二体を倒したあとにこちらに向かってくる。それまで耐えられればいいのだ。

まだ本命のキャスター自体は傷一つついておらず、アーチャーも姿を見せていない。両手にナイフを構えて腰を落とす。

耳障りな金切り声をあげて、子鬼たちは明の周囲を取り囲む。

足場の悪い道ではない道で戦うのは非常に骨で、実に不利としか言いようがない。

「殺すのは無理だろうが、気ぐらいは失ってもらわなければ面倒だ」

ぱちんと男が指を鳴らすと、どこから現れてくるのか知れない子鬼たちは一斉に襲い掛かってくる。三百六十度、逃げ場がない。それでも、彼女は躊躇わない。

「H a j o a m i n e n , a n a l y s o i n t i , p o i s t a m i n e n !」

明の足元から黒い影が巻き上がる。三百六十度を覆うように噴きあがる焰は群がる鬼を焼く。影に触れた子鬼たちは例外なく黒焰にまかれて、跡形さえ残さず消える。

金切り声が耳を聳し、聴覚を奪う。だが明の目は、神主服の男が地

を蹴る姿を見る。

果たしてあの男にもこの影は有効だった。だが、それを知る直前に、鬼たちの隙間を縫って空から降り注ぐ彗星の様に何かが突撃してきた。否、空からではなく森閑とした暗闇からだが——尋常ならざる速度で飛び出してきたそれにより、風が吹き荒れて木々は戦く。

視認が追いつく寸前にそれは途中で何かを投げ、神主服の男に立ちふさがった。

彼は男の刀を白刃取で受け止め、左に流して向き合っている。

ブーツは赤黒い染みがつき、簡素な白っぽい衣袴は乾いた血飛沫にまみれているもの——それは明が待っていたサーヴアントの姿だった。

「ぎゃああーっと、確氷!!」

ちなみに途中で投げられたのは一成で、受け身を取り立ち上がるなり明の姿を見てほっとしている。明はよくセイバーに放り投げられてびんびんしているものだと思った。

「あなたこそ平気?」

「お、おう」

一成は頷く。男と向き合っているセイバーは、前を向いたまま言う。

「マスター、剣を返してもらどうぞ」

セイバーが後ろ手に腕を明に向けると、明の胸から徐々に神剣がその姿を現す。全体を現した剣は、勝手にセイバーの方に飛んでいきその右手に収まる。

「これより先、俺から離れるなマスター」

セイバーが明を放置していたのは(眷属二騎を相手取っていたこともあるが)、彼女にこの剣が入っていたからでもある。キャスター本体を前にしては怪しいが、剣の守護がある限り明が死ぬことはない。だが、これより先は違う。

明がちらりと一成をみると、彼は頷いた。セイバーは神剣を構え、剣先で男を指した。

「次はお前か」

「——お前、既にアーチャーの宝具の支配下にあるはずでは」

「——俺は既にあの宝具を使われていた。だが、一撃を加えて呪縛からは脱している」

明の見ていないうちに、セイバーは星熊童子と虎熊童子を下して、離脱しようとしたアーチャーに一撃を加えている。それからすぐに明を探して山を駆けまわっていたが、その間アーチャーは宝具を再度開帳していない。

それを不審に思ったのはセイバーと一成だけでなく、この男もだ。離れて様子をうかがっているに違いないアーチャーに対し、大きく声を張り上げた。

「——アーチャー、聞いているのだろう。セイバーを縛るのがお前の役割だ」

しかし、アーチャーが返答をする、もしくは姿を現すより先に口をはさんだのはセイバーだった。

「——お前に一つ聞きたいのだが、お前は本気でアーチャーが俺を殺そうとしていると思っているのか」

セイバーは剣を肩に担ぎ、殺意を潜めて、あくまで真面目に男に問うていた。

12月5日⑤ 世に盗人の種は尽きまじ

「……は？」

セイバーの意図がつかめていないのは男だけではなく、明と一成も同様だった。

「仮にお前たちが俺を倒したとして、その後だ。ガンナーとかいう謎のサーヴァントはいるが、他は全て一人のマスターのサーヴァントだろう。お前たちの共食いだ。そして戦闘能力を見るに、アーチャーはキャスターとランサーには劣っている。しかし宝具の性質ゆえにアレは俺に対しては有利だ」

それはここにいる誰もが承知していることだ。キャスターとキャスターの眷属である男も、他陣営を消滅させてから三騎で戦うという青写真を描いているのだ。

「俺が消え、丸丸アーチャー、キャスター、ランサーが残る。キャスターの眷属よ、お前が最高とするのはその結末だろう。だがその絵はアーチャーにとって望ましくない。アーチャーがこの戦いで臨む最高の結末は、俺がキャスターとランサーを、深手を負いながら消滅させることだ」

「それは聞き捨てならぬな、セイバー」

その時、木々をかき分けて飛び出してきたものがある。遠くからセイバーらを監視していたのであろうアーチャーだ。

見事な衣冠束帯は、セイバーに一度吹き飛ばされた故に少しほつれている箇所があったが大きな崩れは見られない。弓と剣を手にしているアーチャーは、神主服の男に近づいた。男とて既に臨戦態勢の霧囲気を醸し出している。

「ほう、何が聞き捨てならないのか？」

漏らさずセイバーと男のやり取りを聞いていたアーチャーは、困ったように肩をすくめた。

「仮に私がそう思っていたとしても、令呪があろう。それに私はもうそなたに宝具を使っていたらう」

「それはそうだ。だが、マスターにとって令呪を無駄に消費するのは

避けるべきことだろうか？それに既に一度、お前の宝具の拘束はほどこしている。なのに、お前は再度宝具をかけようとはしない」

セイバーに一撃を加えられたことで一度宝具の使用を切断させられたとはいえ、再度使用には問題がないはずだ。そして、アーチャーの宝具はセイバーを視界に入れなければ使えないのではない。それでもアーチャーはあの剣を再度開帳しようとしていない。

「そなたはそなたのマスターを巻き込みかねない状態では、大規模な宝具を放たないであろう。それに、剣を持たぬそなたでは縛る意味が薄いようじゃ。ならば無理に開帳せずとも、抑止力としてあればよいである。マスターの魔力を無駄遣いするものではない」

「——もう明は俺の近くにいる。それに、お前のマスターは最強のマスターと聞いている」

沈黙が落ちる。神主服の男とアーチャーの間には、妙に陰悪な雰囲気の流れている。

明はセイバーが何をやりたがっているのか見当がついた。

神主服の男とキヤスターは、生前人間に討伐された悪鬼——その上、討伐の命を下したのは生前のアーチャー本人である。

「俺たちは決して嘘をつかず信用したにもかかわらず、それを裏切る人間どもにいわれたくないな」——

キヤスターは「人間を恨んではない」と、碓氷邸での酒宴で言った。だが、彼女の眷属たちも同じであるとは限らない。頭数では劣るセイバー陣営に対し、彼らを団結させてはいけない。それに、アーチャーの言うとおり、開帳されずとも抑止力としての壺切御剣には意味があるのだ。だから、もう一度開帳してもらわねばセイバーは困るのだ。

再開の口火を切ったのは神主服の男だった。

「なら、さっさと再び縛るといい。魔力のことは気にしなくていいと、知っているだろう」

アーチャーは黙り込んだ。明は「魔力の事は気にしなくていい」の言葉が気になったが、確かにもう宝具を使わない道理はない。セイバーの言う通り、アーチャーは倒すまではいかなくとも、できるだけ

キヤスター、またはランサーを倒すくらいのことをセイバーに望んでいたことは十分考えられる。

アーチャーの手にある月の光を受けて輝く皇統存続の剣は、セイバーにとつては天敵そのものだ。

「使うも使わないも関係ない。その自慢の宝具の前に殺す！」

地を踏み抜かんばかりの勢いで、セイバーはアーチャーに向かって地を蹴った。その間に神主服の男が割り込む。

「ただではいかせないぞー！——アーチャー！やれ！」

「そこをどけ！茨木童子!!」

アーチャーの宝具が白い光を帯びる。二回目の宝具開帳の魔力消費ものともせず、再度弓兵は銀色の光を集め、その真名を再び謳う。

——だが、それと同時にこの場所にはありえないはずの声が重なる。

アーチャーのものとは異なる魔力の凝縮。姿は見えず、気配は全く感じないが、それでもあれはここにいます。

影から影に移り、光あたるは一瞬の密やかな、しかしその一瞬に命を懸ける刹那の宝具の名が、ともに謳われる。

眩い光の影に隠れながらも、その神秘は確実に開帳される——！

「尊つぼききりを受け継つぎのしみ剣!!」

「全よてはに天ぬ下すのつ廻たりねもの!!」

アーチャーの宝具がセイバーを拘束する、その直前。アーチャーの手にはその剣はなくなっており——代わりに今まで気配さえなかった大男がセイバーの隣に立っていた。

その手にはアーチャーのものであるはずの、壺切御剣が輝いている。

全てを悟ったアーチャーは、韜晦することなく敵意をむき出しにした。

「アサシン——!!」

「ごちそーさん。お前の物は俺の物ってな」

今まで姿かたちどころか、気配さえなく突然現れた、真つ黒な雨合羽を着込んだサーヴァント。

その姿はアーチャー流に言わせれば、かつてガンナーと名乗っていたサーヴァントである。

ガンナー——もといアサシンはその場でくるりと一回転して、ぬけぬけと剣を自分の襜褕の中に入れる。アーチャーは眦を吊り上げて敵意をアサシンに向けている。セイバーは、やれやれと言わんばかりにため息をついた。

「全く、登山口前にお前が間に合えばこれほど面倒にはならなかったものの」

「そりゃ悪いと思っただ、一応。空飛ぶ速さをナメてたぜ」

セイバーは不満げに傍らのアサシンを見上げたが、当のアサシンは呵々大笑して受け流す。

アサシンの宝具は、ただ単に敵の宝具を奪うだけのものではない。今や壺切御剣にまつわるアーチャーの伝説まで、ごっそりとアサシンに奪われているのだ。

アサシン——大盗賊として名を馳せた石川五右衛門の技量が結晶化した宝具『よにぬすつとのたねはつきまし全ては天下の廻りもの』。

その宝具は物理的に敵宝具を盗み出すだけでなく、その宝具にまつわる伝説や逸話まで篡奪し所有権を書き換える。つまり、魔力さえ事足りれば盗んだ宝具はアサシンも使用できるといふ、名実ともに宝具を盗む宝具だ。

だが、無制限に盗めるわけではない。宝具を盗むためには対象が形のある宝具でなければならず、かつ事前にその宝具の正体を知り、担い手の真名を知っている必要がある。

そして実際に盗む時にはアサシンの存在を敵に気づかれていない状態で、敵が宝具を開帳しなければならぬ。

「盗もうと思えば、三種の神器さえ盗んで見せる」とアサシンは豪語するが、英雄の最強の武装を掠め取るのは同じ英霊と言えど至難の業であるがゆえにこれほど、アサシンの宝具には使用条件がある。

「つーわけで、セイバー。そっちのヤツとキャスターは任せるぜ」

宝具を開帳した以上、アサシンの真名は既に割れている。アサシンは常にまどついている黒い雨合羽を脱ぎ捨て、襜褕から一メートル以上



はある巨大煙管を出して肩に乗せた。

ぼうぼうに伸びた髪を乱暴に髷に結い、赤い派手な隈取をし、金糸と赤糸が主になって派手な襦袢をたなびかせるその大男は、アサシンとは思えぬ姿で見得を切る。

「アサシンのサーヴァント、石川五右衛門。こっちの御貴族さまは俺の獲物だ。直接の恨みはねえが、その命盗らせてもらうぜ」

「盗人が良く吠えたものよな。我が剣を奪った程度で調子に乗られては困る。——一成、代わりのサーヴァントを選ぶにしてもこれはなからう」

扇を口に当て、ため息交じりに一成を見る。一成は一瞬怯んで言葉に詰まったが、アサシンは半笑いで肩をすくめた。

「主を裏切る貴族よりは下品な盗人の方がマシなんじゃねえの？」

「良いわ。貴様は私が相手をするような輩ではないが特別じゃ、その榮譽をやろう」

「そんなありがたい榮譽は犬に食わせてやれよ。しつかしまさか俺が殺しに行った関白の元ネタ様と戦うことになるたあ合縁奇縁ってヤツか？」

アーチャーは弓を構えて何時でも戦える体勢に移っている。アサシンも腰を落として巨大煙管を振り回した。そして一度一成を振り返る。

「アイツに用があるんだろ坊ちゃん。アレは俺が締め上げるが、その後はお前さんしだいだぜ？」

一成は右手でぱんと自分の頬を叩くと、呪符を取り出して構えた。

「……ああ。やるぞ、アサシン！あと俺は坊ちゃんじゃねえ！土御門一成だ!!」

「ハッ、今日生きて帰れたら名前で呼んでやるよ！」

アサシンとアーチャーが戦いを始めたとき、セイバーと明も神主服の男——茨木童子と交戦を開始した。今やアーチャーの宝具に操られる憂いはない。

となればやることは決まっている。——陣地の完膚なきまでの破

壊。

「マスター、宝具を使うぞ！」

敵・キャスター本体は視界に無い。だが、セイバーの宝具を解放することで陣地を一網打尽にすれば、陣地からのバックアップはなくなりキャスターは著しく弱体化する。それに（セイバーの剣を入れていた為に）無傷同様の明の魔力量なら、燃費の悪いこの宝具も二回は撃てると踏んでいる。

「もちろん！」

一成にはアサシンがついており、明はセイバーの後ろにいる。彼女は勢いよくその許可を与えた。セイバーの霧に覆われた剣は、その覆いを解き放つ。

月下にさらされた剣は、前に見た銀色の諸刃剣ではない。

黒鋼で打たれた蛇行剣——それは草薙剣が、草薙剣という銘を得る前の原初の姿——！

「——八雲立つ出雲八重垣、其は暴ふ——っ!？」

詠唱は途中で途切れる。否、途切れさせざるを得なかったのだ。

押しつぶすような圧倒的な死の気配が、すぐ目の前に現前している。セイバーが悪寒を感じ、明を抱えバックステップで飛びのく。今の今までそのような気配は全く感じなかったにもかかわらず、それは忽然と、中空に姿を現した。

「お頭！」

喜びに満ちた、神主服——茨木童子の声。その着陸の衝撃で、地が揺れる。橙色の霧のようなもの包まれた、この山の主はその威容を露わにした。

「何やらあちらもあわただしいようだな——私が来た」

体長三メートルを越し、頭に角が五本、黄色く長い髪を振り乱している大鬼——体は血をかぶったように赤く、腰に太い荒縄で布を巻きつけた異形がそこにあった。

その肩には十歳くらいの少女を乗せている——キリエスフィール・フォン・アインツベルン。そして碓氷邸に酒宴を催しにやってきた美しい女性の姿はどこにもない。

だが、今日の前にある大鬼はあの女性と間違いなく同一である。

セイバーは自分と茨木童子の間をさえぎった大鬼を見上げた。

「キャスター——酒呑童子だな」

「いかにも」

キャスターは腕を組んだまま頷いた。前身は日本における最高の幻想種・水神である八岐大蛇、伊吹山の神の子であった者が、山を下りて人を食い魔物と成り果て、大江山に住み着いた日本三大悪妖怪の一、酒呑童子。

かつて討伐に来たセイバーこと日本武尊を呪い殺した、伊吹山の神の申し子。

だが、セイバーの持つ神剣の本来の持ち主は素戔嗚命——八岐大蛇を討伐した神である。

その神威を纏ったセイバーと、かつてセイバーを殺したモノの子同士との戦いである。

「セイバー、随分部下をかわいがってくれたようだな」

セイバーは不敵に笑う。「ふん、かわいがりのある連中で、思わずみじん切りにしてしまった」

「御礼はたんとするぞ。今度は父上のように呪いではなく、捩じり殺してやろう」

「貴様の父はあの程度で俺に勝ったつもりなのか。それは御笑い種だ」

キャスターは肩からキリエを降ろし、茨木童子と並んで拳を握る。

マスターであるキリエスフィール・フォン・アインツベルンは白いワンピースのすそを持ち上げ、セイバーと明に向かって丁寧な頭を下げた。

透けるように白い肌、赤い瞳の少女が戦闘の場には似つかわしくない優雅さで微笑む。

「初めまして、セイバーとそのマスター。私はキリエスフィール・フォン・アインツベルン」

「ご丁寧にありがとうございます。私は碓氷明」

挨拶を返しながらも、明はサーヴァントのパラメータに目を疑って

いた。先日、女性の姿で碓氷邸に現れたキャスターは、キャスターらしいパラメーターといえよいか——例を挙げれば筋力D、耐久Cなど、とてもセイバーの敵になるとは思えないパラメーターであった。

だが、今の数値は全く異なっている。女性の姿を取っていた時と比べ、全ての値が三倍以上の数値をたたき出している。面と向かい合っているだけで、呼吸さえ苦しくなるほどの死の匂いが漂っている。

一秒後には物言わぬ死体となっている自分が、明にははつきりと想像できた。陣地外は弱い代わりに、真の姿を取り戻した際における圧倒的パラメータ補正。

だが、それだけではこの尋常でない数値は説明がつかない。元々著名な英霊であり、かつ最強のマスター・キリエスフィール・フォン・アインツベルンを得て、さらに万全に作り上げた陣地の力。

(……キャスターの結界の基点、来る間に少しずつ壊したけど……) キャスターによって張られた結界には基点がある。これまで山に登りながらいくつかを破壊してきたが、それでも結界に揺らぎは無い。まだまだ大量の起点が山のそこかしこに設置されているのだ。それを一つ一つ壊して回っていたら日が昇ってしまう。

ここまで気づかなかつたのは、一つには魔術基盤と系統の違い——キャスターの結界のそれは土御門の陰陽道や寄りのそれで、明の西洋魔術とは異なる個所も多い。

だがそれよりも、かつて神であったキャスターのスキルによるものだろうと思われる。

伊吹山は日本七大霊高山の一つに数えられる霊峰で、その神の子であったキャスターが山にいついて結界を構築するのは「普通」のこと。

そしてそこまでキャスターが力を発揮できているのは、ひとえに最強のマスター・キリエスフィール・フォン・アインツベルンの力。

「ガンナー……いえ、アサシンが出てきたことは想定外だけど、私のサーヴァントが他に負けるはずはないわ」

キャスターよりもバーサーカーのようなそのサーヴァントは、素手

で戦うつもりである。その赤い鉄のような皮膚は鎧そのもので並大抵の攻撃が効くとは到底思えない。まさに、全身が宝具。この場所そのものがキャスターの武器。

キリエは明に目をやり、平然と茨木童子に命じる。

「あなたはあのマスターを始末なさい。セイバーは気にしなくていいわ」

「了解」

セイバーが明の前に立ち、剣を構える。セイバーはキャスターと戦い、同時に茨木童子も相手取るつもりだ。キャスターに比べれば茨木童子は大した敵ではないが、茨木童子はセイバーではなく明を殺せ、と命じられている。それに、セイバーはランサーをも相手取る予定だ。

明ではキャスターとランサーには太刀打ちできない。だから、明は完全なる足手まといなのだ。

「セイバー」

「何だ」

「宝具の使用タイミング、戦い方は全部セイバーに任せる。私のことは気にしないでいい。宝具は私に直撃じゃないかぎり、自分でどうにかする」

彼女は太ももにくくりつけたナイフと、自らの魔力残量を確認した。サブも解放すれば、セイバーが大盤振る舞いの魔力の使い方をしても平気だ。

明の様子を訝ったセイバーが不審な視線をよこしたが、明はひっそりと片手でVサインを作り、笑いながら何かを言おうとした。が、キリエが声高くキャスターに命じる声がかぶさった。

「さあ、暴れなさいキャスター!!敵を塵殺してしまいなさい!」

権力と権力に抗う者。神と魔物。

最強のマスターの鶴の一声により、今一度神話が再編される。

## 12月5日⑥ 槍兵の決意

——生前に果たせなかった、正々堂々の戦いの中で生きて死ぬ。

それがサーヴァントとして現界したランサーの願い。一介の武人として現界したランサーは、聖杯に興味はなかった。否、英雄として祭り上げられた者達は、殆どが二度目の生になど興味がないのではないかと、ランサーは思う。

英雄は、生前の未練を果たすためにここにいる者ばかりだ。ランサーも、未練を果たすべくここにいる。彼はただ、再びの尋常な戦いを求めている。

十三歳の初陣の時は、一生を捧げることになる主君に諫められて実践には加わらなかったものの、十四歳の時には他の手助けを断って自分で手柄を立てた。

一言坂の戦いでは危急のうちに殿を務め、傷一つ体につけなかったほどの兵。

だが、ランサーは決して武勇一辺倒の人間ではなかった。戦国の世の習いとして、内応工作も行い、関ヶ原前の小山評定では軍議を主導しまとめ、西軍への内応工作、東軍内での調停もよく行った。

一將軍として、主君の天下取りを支える者として、ランサーは粉骨碎身働いたのである。

それでも、ランサーが最も輝くのはやはり戦場だった。生涯で五十を超える戦場を愛馬と共に駆け、尚傷つかなかったその武勇こそランサーのランサーたる証。

天下を決めるその戦の場で、ランサーはその槍を、武勇を存分に振るったのである。

しかし、ランサーの主君が天下人となってから、ランサーの運命は陰り始める。

日本一の大名となった主君は、ランサーを含む関ヶ原の戦で活躍した武将たちに思うような領地の加増をしなかった。

むしろ、ランサーは江戸から遠く離れた領地に転封されてしまった。島流しとも言っている。主君の片腕を自負し、天下統一に貢献し

たと自負するランサーの受けた衝撃は大きかった。何故、と何度も考えた。

己に落ち度あったのかと、疑った。どうして、と何度も自問自答した。

だがランサー自身に落ち度があったわけではないと、思慮のある彼は気付いた。

それどころか、何が悪と、何が間違いを決められるものではなかったのだ。

——世は、強きものをもう求めてはいない。

勝つことが最も重視される戦国の世は終わりを告げた。これから必要とされるのは政治を安定させることのできる実務家。すでに天下の主となった主君は、そのことをよく踏まえていた。ゆえの行為、それだけの話であった。

ランサーにもその考えは理解でき、また時代が移り変わることも知っていた。伊勢桑名の領主となったランサーは、城下町づくりに力を注ぎ、今も桑名中興の明主と言われている。

だが——それでも、彼の居場所はやはり戦場でしかなかった。

絵師を呼んで自画像を描かせた時に、何度もやり直しを命じた末に彼がやっと満足した出来栄えの自画像は、愛用の兜に身を包み采配を片手に握った戦姿だった。

ランサーと共に四天王と言われた武功派の面々も、さびしい最期を迎えている。一領主としてランサーは静かな最期を迎えたが、それは果たして彼の意に沿うものであったのか言うまでもあるまい。

時の流れには逆らえない。この身は存分に戦場を駆け抜け、己が主君は天下人となった。その成り行き上、全ては致し方のないこと。人生に悔いはない。

それでも、彼の心に最も焼きついた景色は。

今でも瞼を閉じさえすれば、己が眼と鼻と皮膚と耳と舌は、熱く滾るあの関ヶ原を思い出す。

だから——もし今一度願いが叶うのならば、この身をかけ死力を尽

くして戦いたいものだ——。

それが「天下人に過ぎたるものがふたつあり」と謳われ、主君の四天王の一角と称えられたランサーの願いであった。

それ故に、ランサーは勘違いをしていた。古今の日本の英雄が集まり、死力を尽くして戦う聖杯戦争には、マスターという存在があることを。

そのマスターと仲違いを起しては勝ち抜くことはおろか、尋常な勝負をすることも難しいことを。マスターも其々の思惑があり、そのためには尋常ではない手段に訴えることもある。

聖杯戦争は決してランサーの夢見るような、サーヴァント同士が一對一で尋常な方法だけで戦うものではない。現在を生きるマスターと未練を抱くサーヴァントが入り乱れる——かつてランサーが生きた世とやら変わりが無い世界だった。

ランサーと同じ思いを抱くものばかりとは限らないのだ。

今に至り、ランサーはその勘違いを自覚する。そして、戦う意欲を新たにする。

己が願いを叶える為に——マスターたるハルカの方針も呑み込もうと決めた。

バーサーカー戦で無理やり戦うことを封じられたランサーは、それ以来マスターであるハルカに対して「本当に聖杯戦争を戦う気があるのか」と疑いを抱いていた。

それより以前から、人に害をなすバーサーカーを放置しておこうとする精神も気に入らなかった。

しかし生前の習いと言うのか、主替えの当てがなかったこともあるが——生涯を一主君に任せ続けたランサーには此度の主君を裏切るうという気にはなれなかった。

たとえランサーはハルカを主君と思っていなくとも、である。

キャスター陣営の強襲は突然の事態ではなかった。キャスターが襲来する日の昼に、ランサーはハルカに呼ばれて一階のリビングにいた。ハルカは常と変らぬ様子で紅茶をたしんでいた。

話とは何かとランサーが尋ねると、マスターは柔らかな笑みを浮かべ



たままこう言い放った。「今宵、キャスター陣営が襲いに来る」と。

「ランサー。貴方には一度キャスターに奪われてもらいます。令呪もキャスターのマスターに引き渡します」

「な!？」

耳を疑う発言に、ランサーは己がマスターを凝視した。聖杯戦争をやめると言うにも等しい言葉は、ランサーにとって許容できるものではない。それに、キャスターのサーヴァントは偵察を続けてきたランサーもまだ見えていない。

だが、ハルカは動揺せずに話し続ける。

「二度、といったでしょう? 令呪と契約を一時的にキャスターのマスターに引き渡しますが、直ぐにあなたとの契約を取り返しに行きま  
す」

訳が分からないという顔をするランサーに対し、ハルカが言うことは以下のことだった。

「現在、キャスターのマスターはキャスターとアーチャーのマスターを使役しています。ここにあなたが加われば残るサーヴァントはセイバーとガンナーのみ。ガンナーは現在どの立ち位置にあるのか不明で、三騎対一騎、仮にセイバー陣営についても三騎対二騎では、キャスター陣営が勝利を収める可能性が高くなるでしょう」

セイバーと共にバーサーカー打倒に戦ったアーチャーが、マスターを裏切ったことはランサーも神父からの連絡で知っていた。しかしそのアーチャーがキャスターのマスターの下に行ったとは初耳だ。

そしてキャスターのマスター——マスターとしての最高性能を持つアインツベルンは、キャスターを使い一カ月間にわたってひっそりと陣地を築き続けていた。

その力をもってすれば三騎同時使役も可能——ハルカは言う。

「アインツベルンが動かなかったのは、戦闘力に不足するキャスターの性能を補うために陣地作成に注力し、堅牢な陣地を構築するため——ということもありますが、本質はキャスターのマスターの精神的な問題によるようです。しかし、アーチャーを手に入れ、さらにランサーまで手に入ればアインツベルンはサーヴァントで多数派を抱

えることになります。そうすればアインツベルンは一気にセイバー・ガンナーを殺しにきます。戦局が動きます」

ハルカは不敵に笑う。その好戦的な笑い方は、ランサーが初めて目にするものだった。

「セイバーのマスターはこの戦争を何事もなく終わらせる義務を負い、サーヴァントは勝者になることが目的でしょうか？セイバーは三対一でもキャスターに戦いを挑みます。彼らが戦いに赴く日は、神父を通じて私も知ることができます。その日に乗じて、私はあなたを取り返します」

これで一気にサーヴァントを減らすことができるかもしれないとハルカは言う。だが、そんなことをする意味は何なのか。

ハルカは「キャスターのマスターの精神的な問題により、キャスター陣営はアーチャーも擁しただけでは動かない」と言った。

そこにランサーを加えることで、「勝てる」と思ったキャスター陣営が重い腰を動かす。ガンナーを勘定に入れないとして、三対一なら、セイバーでも勝つのは難しくなるだろう。

もし、ハルカの命令が単に「キャスター陣営に加わりセイバーを殺せ」というのなら、ランサーに従う気はなかった。しかし、「セイバーがキャスターと戦うのに乗じて、ハルカがランサーを取り戻しに来る」ということはどういうことか。

「……本当の目的はセイバーを倒すことではない。キャスター陣営の腰を上げさせることだとも言うのか」

「流石呑み込みが早いですね。キャスター陣営の腰を上げさせることが目的なだけなので、キャスターを勝たせる気はありません。この戦い、キャスターの拠点——大西山にて残り五騎中少なくとも四騎が入り乱れる乱戦になります。貴方はキャスター陣営を内部から崩壊させるのです」

ランサーにも大体の意図は掴めた。一時的にランサーはキャスター陣営に入る。決戦の日のハルカはキャスターの拠点に乗り込み、マスターから令呪を奪いランサーと再契約を結ぶ。

そしてキャスター陣営を裏切り、ランサーも戦いに身を投じる。

「しかし一度契約をやめてしまえば取り戻すのは至難だ。儂と再契約へこぎつける為に何か手はあるのか」

「それについては考えがあります。しかし、これからあなたはキャスター陣営に入る。新にマスターとなったアインツベルンに令呪を使われては、あなたも計画を話さざるを得なくなる。だから内容を話すことを控えますが——決戦の日、セイバー陣営以外の異状は全て私の成したことだと思っただきたい」

確かに、一度キャスターのマスターと契約するだから計画を話さない理屈では納得できる。だが、ランサー自身がマスターであるハルカを信じきれない。

ランサーはハルカがいつキャスター陣営の状態を知ったのかも全くわからない。

それに、今提示された方法は、——生前ならともかく——ランサーの好む方法ではなかった。ランサーの心を見透かしたように、ハルカは舌鋒鋭くサーヴァントに迫った。

「……聖杯戦争は、あなたが思うようなお綺麗な戦いではありませんよ。願いをもった人間同士が戦うのです。それがあなたのような願いを持つ者ばかりなら違います。欺き裏切りを成しても叶えたい願いがある者もいます」

生前のランサーであればその程度の事を承知していた。だが、今しがたの生に浮かれていたランサーはそのことを考えていなかった。いや、聖杯戦争も生前と変わらず人間同士の戦いであることを都合よく解釈していたと、気づかされたと言える。

「そして、私の事が信じられないのならそれもよいでしょう。決戦の日、私が来なければ、そのような人間だと思いなさい」

ランサーはハルカを信じてはいない。だが、ここまで聖杯戦争に意欲を出す彼を見たのはこれが初めてである。マスターが聖杯戦争を本当に戦うと言うのなら、ランサーに異議はない。諾、と彼は頷いた。

「……しかし、ハルカ。お前はなぜ今日キャスター陣営が襲ってくる」と知っている。それに拠点があることも」

ランサー達はセイバーのマスターと同盟を組んでいる状態の為、他サーヴァントの情報も神父を通じて耳に入ってくる。だが、これまでキャスターに関する情報はなかったうえに、ましてや未来の情報だ。ハルカは慙懃無礼ないつもの笑顔を、少しも崩さない。

「簡単なことですよ。あの神父、碓氷のマスターと私たちとだけ情報をやり取りしていたのではなかったのです。——キャスターのマスターとも、私たちと同様の関係を結んでいるのです」  
「なっ」

「彼の目的は無事に戦争を終わらせることです。キャスターのマスターが動かぬままでは戦局が動かぬと、神父はキャスターのマスターに私たちを襲うことを提案し、私は了承したのです」

その裏をかく。ハルカは自分の魔術なら令呪の奪還も可能だと告げる。キャスター陣営の瓦解を目論んでいる。だが、ランサーにとっては神父の行動の方が衝撃だった。

「あの神父は儂らの情報もキャスターのマスターに流していたのか!?!」

「そうです。七騎——いや、六騎中の半分と連携を取れば、いかな他のマスターが神秘を漏らそうとしても対処できると言っていました」  
ならばハルカと碓氷明を引き合わせたように、キャスターのマスターも最初から引き合わせていればよかったのではないかとランサーは思った。

それを読んで、ハルカは説明を続けた。

「神父が私と碓氷をインツベルンに引き合わせなかった理由は多々あります。かつてインツベルンが外様の魔術師に手ひどく裏切られたことがあり、容易く私や碓氷と同盟しないだろうこと。それに、七陣営中、いや六陣営中半分が手を握り合ってしまったえば逆に戦況がこう着する可能性がありますからね」

ハルカはさらに付け加えた。「あの神父は悪ではありません。決して善でもありませんが」

ランサーは神父の件にも驚いていたが、自分のマスターにもある念を抱く。

——一体この男は何を考えているのか。

一体聖杯戦争に何を求めているのか、どんな人間で、何を望んでここににいるのか。そういった背景が、このハルカ・エーデルフェルトという人間からが全く見えてこない。

根源に至ることが望みだと聞いていたが、どの程度本気で願っていることなのか。

\*

セイバーが星熊童子・虎熊童子と戦っていた時、山の北側で熊童子と金童子が首を傾げていた。

子鬼たちの報告によれば、北の登山口から入ってくる人間は多数とは聞いていない。お頭のお頭——キリエスフィールは、ガンナーことアサシンのマスターかもしれないと言っていた。

だが、北の登山口をうろうろ探っていた二匹の鬼の目には、人間が複数山に入ってくるように見えたのである。しかしマスターからは入ってくる人間を好きにしていと聞いていたため、見つけては殺し一か所に集めていた。

だが、殺してみても——そもそも、彼らは人ではなかった。人ではなく、精巧に作られた人形だった。そのうえ戦闘能力もない。それがわらわらと、これまで二人が破壊しただけでも十体は侵入してきている。

聞いていた状況と違うということをつまえた子鬼を通し、キャスターに報告する。熊童子と金童子は人間の気配や魔術師の気配がわかるわけではなく、足を頼りに歩き回って見つけたものを殺しまわっているという具合である。

(……殺してもらいそうだな)

そのようなことを考えながら二人は人間を探していると、後ろから山を駆け下りてくるものがあることに気づいた。ランサーである。

そういえば、後から追ってくるランサーは言っていた。

「ランサー」

「なにやら人間が複数入り込んでいるそうだな」

「そうだ」

「人払いの魔術はかけたと聞いているから、一般人が入ってくることはないと思うが何故そんなに魔術師が入ってくるのだ？」

「わからない。それに、ちゃんと言えばこいつらは人間じゃない」「人形だ」

代わりばんこに答えた熊童子と金童子は指を指してある一点を示す。荒れ果てたが登山道、ぼうぼうに茂った木々の間に、壊れた人形が積まれている。見た目には人間にしか見えない為におどろおどろしい。

ランサーは軽く眉を顰めたが、とやかに言わない。

「……とにかく、儂もここらを探ってみる。何かあれば子鬼で連絡することしよう」

熊童子と金童子が頷いた瞬間、ランサーは音もなくその槍を振るった。その槍は熊童子の胸を貫き、生命の赤を流させる。熊童子は今起こったことが理解できず、己の胸とランサーの顔を代わる代わる眺め——とどめの一撃を食らい、その場に崩れ落ちて動かなくなった。

「……ランサー何を——!?!」

残った同じ姿をした金童子は、小柄な体軀を生かしてランサーから距離を取る。いかな眷属である四天王が陣地内では蘇るからといって、無意味に殺されてはたまらない。

とにかくこのことは間違いなくお頭に報告をと思った時、俊敏なランサーの槍は金童子の首をも刎ねていた。

しかしランサーは更に二体の身体を原型が無くなるほどに滅多刺しにした。むわりと生暖かい湯気と鉄の匂いがたちこめ、ランサーは顔をしかめた。決して酔狂でこのようなことをしているわけではなく、少しでも生き返るのを遅らせるためである。

ため息をついたランサーの背後から姿を現したのは、金髪の優男——かつてのランサーのマスター・ハルカの姿だった。

山道の中でありながら、彼は衣服の乱れなく変わらさずランサーを見上げた。其の顔は、相変わらさず柔和な笑みを湛えている。

「短い別れでしたが、久しぶりに感じますね、ランサー」

「……よく儂の場所が分かったな、ハルカ」

当然キャスターのマスターと現在五感を共有していないことをランサーに確認し、ハルカは指を鳴らした。セイバーが暴れている頃合いを見計らっている為、キリエはあちらに夢中であろうが、ランサーに視界の共有を命じられるとまずい。ハルカは手早く説明する為、重なり合った人形の山に目を向けた。

「私の人形を見ましたよね？あれらの位置は全て把握、視界を共有していますから」

人形そのものはかつて作ってもらったものの再利用ですけれど、とハルカは付け足した。ランサーはその精巧さに驚くと共に、本当に人間ではなかったことに安堵した。

ランサーがあっさり熊童子たちの虚を突けたのは、彼らがランサーを疑っていないことの証左である。キャスターらが邪悪ではなくむしろ人間よりはるかに純粹であることを、短い付き合いながらもランサーは感じ取っていた。ゆえに熊童子たちが嘘をつくとは考えていなかったが、彼らは人間を食らう魔物である。

「ハルカ、熊童子と金童子は今殺したが、キャスターが居る限りこやつらは蘇る。できるだけ徹底的に殺したから多少猶予はあるが、何か事をなすなら素早くしなければならんぞ。それに儂は契約、令呪共にキャスターのサーヴァントのままだ。本当にどうにかなるのか？」

「なりますよ。一応魔力殺しのブレスレットは着けてきたので、まだアインツベルンは私を私と認識していないでしょうし……マスターのもとへ連れて行ってください」

自信を持って頷くマスターを見て、ランサーはマスターを連れて山を駆けた。キリエとつながるパスを辿り、仮初のマスターのもとへ急ぐ。

12月5日⑦ 約束された栄華の月

「私はそういう風にしかできてないのですよ、叔父上」

そういう風に、彼の男は京を発つ前に笑った。

道長の甥——藤原隆家の人生の最高点は十六歳、父親が死ぬ前までだった。その後は、前述したように若さゆえの不祥事を起し左遷、帰京が許されるも姉や兄も皆若くして亡くなってしまい、姉の残した帝の第一皇子たる敦康親王も、道長の娘が男皇子を生むことで、皇太子になれず二十歳に満たずして世を去った。

かつて清少納言が枕草子で称えた中関白家の栄華は疾うに過ぎ去った。世は道長とその一家の時代になっていたのだ。

気丈な質の隆家は弱音や愚痴の類を人に言うことはなかったが、自分の置かれた立場に忸怩たるものはあったに違いない。かつて肩で風を切つて歩いていた家族と自分。

それに引き替え、愛した一家も離散し果て、もう官位が上がる望みもなく道長の足もとに頭を垂れるしかない残りの人生——。

もちろん、彼は太政官にあり続け生活に困ることがあったわけではない。だが、衣食住が満ちても、京に生きる貴族に巢食う鬱屈は晴れない。

「衣食足りて榮辱を知る。倉廩満ちて礼節を知る」という言葉がある。人は物質的な余裕を得てからこそ、礼儀に目を向けられるという意味である。

だが、知つてしまふのは礼儀だけではないだろう。衣食住が満ちて本当に幸せならば、人を呪うことが日常であるはずがない。

隆家はかつての道長の政敵であったという立場から、今以上の立身を望めなかった。

彼の甥は道長と気はあったが、道長の事は嫌いであった。二人だけで酒を飲みながら双六をたしなみ、よく宴に呼ぶ仲であったが——それは太政官の安定を図るため、隆家を取り込もうとする政治的意図もあったが——自分の一家に代わつて道長が居座っていることが、仕方がないことと思つてはいても楽しくなかったであろう。



言うなれば、めぐりあわせが悪かったという、それだけの話だ。

かつての栄華は見るべくもなかったが、隆家はあまりめげているようには見えなかった。それが彼の矜持か意地か。彼はいたずらに道長に喧嘩を売るわけではないし、敬意も払うが、自分の気に入らないことには従わなかった。

隆家の甥でもある敦康親王の立太子が潰えた次の年に、隆家は几帳で目をぶつけ片目の視力を失いかけた。九州に宋から腕のいい医者 が来ていると言う話を聞き、隆家は九州の長官——大宰権帥への任官を希望した。

当時、太政官(参議)左大臣の貴族が、任地へ行くことは少なかった。大体が代理を派遣して、収入だけをもらうことが主流だった。都からすれば大宰府など鄙びた田舎であり、かつて菅原道真が流されて身罷った土地だ。太政官で行きたがるものはいない。

しかし隆家は自ら九州に赴任することを希望したのである。

道長は当初、隆家の希望を却下したが、帝等との兼ね合いもあり隆家は結果的に大宰権帥に就任することができた。

大宰府へ出立する前に、道長は挨拶に来た隆家と話したことがある。九州は都から遠く、大変だろうが頑張れと月並みなことを言ったあとのことだ。

「医者ならそなたがいかずとも、呼べばよからう」

隆家は傷ついた目を宋からの名医に見てもらいたいと言っていたが、呼ぶと言う選択肢はなかったのかと問うた。

「別にもう私が京きやうにいる必要もありますまい？ 必要のない者が居座るのもつまらないことでしょう」

相変わらず齒に衣着せぬ男である。隆家はその顔に笑みを浮かべて、道長を見た。

「私はそういう風にしかできてないのですよ、叔父上」

もしかしたらそれは自嘲だったのかもしれない。京には彼の妻子も、姉の残した宮もいる。隆家は九州に赴任せずとも、現在の中納言のまま生活するに困ることはない。

だから、これは自分のわがまま。自分が生きられる、戦える場所を

求めて旅立つわがままでという意味だったのかもしれない。

しかしたとえそうだとにしても、そんな甥の姿がとてまぶしく、羨ましく思えた。

だが、何故自分がそう感じたのか——その理由を、道長はわからなかった。

隆家が赴任している間、九州は特に大きな混乱はなかったが——一つ、大きな事件があった。女真族（満州民族）の海賊が、九州の対馬・壱岐そして筑前を襲った——刀伊の入寇と呼ばれる事件だ。記録されているだけでも殺害された者は約三百五十名、拉致されたもの約千五百名、その他盗まれた牛馬や燃やされた家屋も多数に上った。

大宰府の長官であった隆家は急いで九州の武士団をかき集めて応戦し、なんとか賊を追い返すことができた。後処理も滞りなく行つたが、そこで問題になったのが恩賞である。

この非常事態を朝廷が知つたのは、隆家らが賊を追い払ってからであり、朝廷はなんら対策をとっていない。

そして結局、隆家らへの恩賞は何もなかった。勅符の到着前に戦いは終わっておりこれは勝手に戦つたのだという論調、賊を退治するために戦つたのだから恩賞はあつてしかるべき——さまざま論調はあれど、道長は恩賞なしに票を投じる側であつた。

かつて藤原純友は、伊予の国司として赴任したあとに海賊化し朝廷に反旗を翻した。つまり、かつての純友のように、隆家と九州武士団と密接に結び付くことで力を蓄えられては困る——道長はまたしても、そうしたのである。

もう二十年以上前に、彼の未来を断つたように。

——奇しくもこの刀伊の入寇があつた年は、道長があゝ望月の歌を詠んだ翌年だった。

任期が終わり、京に帰ってきてても隆家は特に恩賞がないことについて不満はないように見えた。いや、そもそも期待さえしていなかったというのが本当のところかもしれない。欲しいものはあるか、と聞いても、双六の賭物としては何々がいいとか、適当に流されるのが関の山だ。

道長は信心深く、死後は浄土に迎えられることを祈って出家をしたが、隆家はそうではなかった。宮中行事の仏事には参加するが、本人はからつきしである。

願い事があれば参詣もするが信心が深いとは言い難い。

それはたんに、隆家は浄土、御仏による救いを必要としていなかった——それだけの話だ。

だが、道長にはそれが不思議でならなかった。幸運幸運ともてはやされてきた己より、自分が運命を摘み取ったはずの男の方が泰然自若と生きている。

生まれが人生を規定する世において、その来世における運命を良くしようと、死後の幸福に願いを掛けようとしないうちに。考えた末に、道長は理解した。

「私はそういう風にしかできてない」——その意味を。

隆家は運命を変えようとか、良くしようとは考えていない。運命と言うものがあつたとしても、自分がどう行動するかくらいは自分で決める。たとえば手に入らないものがあつたとしてもそれを受け入れて、それからどうするのかを考える。

足ることを知り、自分の限界を知りながら、それでもあきらめない。だから隆家は強く「幸福」であつた。たとえばその生がいくら没落の一途であつても、家族が死んで行つても、出世が望めなくても、運がなくても、隆家は「幸福」だつたと、道長は思った。

——それは決して道長に持ちえぬものだつた。幸運に恵まれた道長は、幸運であつたがゆえに際限がなかった。未曾有の一家三后を成し遂げ、手に入らないものが少ないがゆえにその数少ない「手に入らない」ことを受け入れられなかった。

幸運であつたがゆえに、いつかその幸運が消え去ることを恐れて仏に縋つた。死後も幸運であるように、浄土へ行けるように必死だつた。

あまりにも幸運だつたがゆえに、誰もに等しく訪れる死や愛する人との別れを受け入れられなくなっていった。

比類なき幸運の持ち主——そう謳われたことも今や虚しい。

いくら幸運であっても、それは「幸福」を意味しない。

——お前が羨ましいよ、隆家。

だが、それは決して口に出して言うべきことではなかった。己が未来を摘み取った相手に対し、そのような言葉は侮辱にも等しいと理解している。

言っても決して理解されない。

なぜなら道長は都の誰もが認める、「最も運に恵まれた一人」なのだから——。

死期の迫った道長は、妻や娘に先立たれ、病に悶絶し、「これが幸運のありさまか」と問い続けた。だから道長は聖杯に問いたたださなければならぬのだ。

己が人生を受け入れる為に、「真なる幸福は何か」と、問わなければならない。

\*

(あいつ、強くなってやがる!)

弓を射かけるアーチャーと、それを俊敏にかいくぐり迫るアサシンの攻防が続いている。マスターは敵サーヴァントのパラメータを見ることができ、アーチャーの数値は一成がマスターであった時よりも上昇している。

彼らは切り開かれた場所から山の森に戦場を移し、束帯を翻しながらアーチャーは間断なく矢を放つ。

「暗殺者、私の宝具を盗んで見せたことは褒めて遣わすが、それだけで調子に乗られては困るのう」

「そーいうお貴族様の矢もなかなか当たたんねエみてえだけど!!」

後世の創作により忍者の性質を付加されたアサシンは、忍術を操ることが出来る。無限空間に等しい襜褕から、手裏剣を取り出し巧みに

木を避けて投げる。それはアーチャーを狙ったものではなく、別々の場所に当てて音を出し、アサシンの居場所を誤認させるための技である。

アサシンは俊敏の値が高くいざとなれば気配を遮断することも可能のため、逃走については他の如何なるサーヴァントの追隨を許さない。また同様の理由で回避も得意だが、クラス特性故にどうしても攻撃力に欠ける。

アサシンの宝具『金欄襜褕』の中に入りアサシンと共に動く一成には、外の様子が見えない。だが、アサシンとの念話で概況を把握している。

『おい、お前何かもつと攻撃っぽい技とかないのか?』

『そりやあるが、アサシンつつークラスはもともと対サーヴァント戦に向くクラスじゃねーし?今どうすつかなくて』

『オイ!ついさっきこいつは俺の獲物だって大見え切ってたじゃねーか!!』

『あれは勢いだ』

こんな時でもホテルにいたときとノリが全く変わらないアサシンに、一成は脱力した。何か自分にもできることはないかと考えるが、知つての通り一成は攻撃魔術が苦手中の苦手である。治癒魔術、祓いの魔術、防壁が得意で、占術を少々くらいの実力である。

それに魔術を外界に向かって行使するためには、一度宝具から出してもらわなければならない。

(攻撃の魔術が使えれば、対魔力なんてブチ抜けるかもしれないのに) 陰陽道において、対象に影響を与える結果を齎す術は魔術より呪術に近い。魔術が「対象を組み替える」作用ならば、呪術は「自分を組み替える」作用で、物理現象の形をとる。物理現象であるがゆえに対魔力は機能せず、一成が攻撃の呪術を習得していればセイバーさえ傷つけられる可能性がある。

しかし一成はそちらの方面はからつきしだった。だがこのままではアサシンはじり貧確定である。

『おめーは大人しくしてろって!』

『そりやそうだけど！』

多分、大人しくしている方が邪魔にはならない。だが、それでいいのか。せめて攻撃の術が使えればと思ったその時、一成はあることに思い至った。

『アサシン！お前、アーチャーの相手はできてるよな！じゃあ、俺を出せ！』

『何をするつもりだ坊ちゃん！』

『俺も戦うぞ！』

手短に思いついたことを話すと、アサシンは念話で派手に噴出してそれから笑った。いいぜ、やってみろよ坊ちゃんと告げた。それは一成をそこまで護る気がないからなのか、単に面白がっているだけなのか——一成としては最後のものだと思った。

アサシンは襦袢から筒のようなもの——火縄銃を十丁抜き出す。サーヴァントとして現界したアサシンの盗品は、一つ一つが魔術礼装<sup>マジックアイテム</sup>である。火縄銃はふわふわと宙に浮いてそれに火がつけられていく。アサシンとアーチャーは互いに中距離戦を展開しており、そしてアサシンは気配を遮断して闇にまぎれる。

もちろん、一度アーチャーはアサシンをサーヴァントとして認識している以上、彼の気配遮断のランクは下がるが、アサシンの居場所を細かく特定することは困難だ。アーチャーは腰の飾太刀を構える。

飾太刀——あくまで人を斬る刀ではないが、防ぐことには使える。暗闇に橙色の閃光と破裂音が響き渡った。アーチャーは身を翻して、闇より飛び来る弾丸を躲す。火薬のにおいがアーチャーの鼻をつく。須臾の間のこと、闇から鉄の球が飛来する。

鉄の球は小さいが鎖につながれており、直衣を掠めるだけに終わった——それはすぐさまアサシンの元に戻される。

鎖鎌。山中にある屋敷の片方の尖塔に立つアサシンは、鎌を構えて鉄球を振り回している。方やアーチャーは向かい合った尖塔の片方に立ち、弓を射る構えを取っている。アーチャーは心の中で笑った。バーサーカー、ランサーよりもはるかにこの英霊は弱い、と。

明たちと山を登っていた一成だったが、アーチャーとアサシンの戦闘が開始されてから戦いつつ移動した結果、山を下りていたようだ。ふもとに立てられ、場違いに忽然と現れる中世の城のような屋敷に、彼らは戦場を変えていた。一成たちは知る由もないが、言うまでもなくキリエの拠点だ。

一成はアサシンが火縄銃でアーチャーの気を逸らせたときに、宝具から解放された。夜気が再び肌を刺し、満月には僅かに足りぬ月が浮かんでいる。

屋敷の屋根の上で、二騎は火花を散らしている。アサシンは鎖鎌を振り回し、俊敏さを生かしてアーチャーに迫る。気を逸らした隙に出され、アーチャーに気づかれていない一成は、屋根に突き出た部分——とんがり帽子のように突き出ている屋根の後ろに潜んで隠れている。

手にしているのはアサシンの襜褕にあつた黄金の太刀である。脇差程度の長さだが、日本刀の使い方を知らない一成には大刀よりもいい。一成は人を害する呪術の行使ができない——だが、護るのなら話は別である。

自分への身体強化はうまくいく。ならば、陰陽術で強化した武器であればどうだろうか。

話は襜褕の中にいた時につけてある。内容は簡単で、アサシンがどうにかしてアーチャーを釘付けにしてその時に一成がアーチャーを斬るというものだ。しかし一成から見るところ、現状押されているのはどちらかといえばアサシンである。

アサシンは鎖鎌を手にしたまま音もなく屋根の屋根を奔っていた。それは今までの忍び隠れる奇襲戦法からすれば愚直に見えるほどの単純さである。しかし、速い。アーチャーはアーチャーらしく距離を置くべく跳躍をするが、其れより早く鎖鎌の鎖が伸びる。

「……ッ、」

見逃すまいと戦況を追っているこんな時に、また頭痛がした。確氷の地下室で、ホテルの廊下でよくわからない映像を視た時と同じもの。

意識が何か得体のしれないモノと混合し、ここではない時間と世界の映像が映る——だが、その瞬間、一成は刀を手に走り出していた。そしてアサシンがしようとしていることが分かった。否、視えた。

アサシンの走り方を真似て音と気配を消して、一成は屋根の上を直走る。

しゅるりと鎖鎌の鎖がアーチャーの左腕に巻き付き、アーチャーの移動を妨害したが、アーチャーはすかさず飾り太刀を抜いた。

「——斬る刀ではないゆえ、むしろ痛むぞ暗殺者よ——！」

「望むところだ——!!」

アーチャーの飾太刀はアサシンの胸を狙う。其れにかかりきりであるアーチャーは、背後に迫るかつてのマスターに気づかない。

息を殺し、音を殺し、一成はその太刀を振り上げた。緊張は頂点に達している。アーチャーの飾太刀が速いか、一成の太刀が速いか——!!

「——ッ!!」

月の光に照らされた屋根の上に、鮮血がまき散らされた。それはアーチャーのものでもあり、アサシンのものでもあった。アーチャーの飾太刀はアサシンの脇腹を貫き、一成の太刀はアーチャーの右肩に突き立っていた。本来なら背中から心臓を貫いていたはずが、とつさに気づき身を翻したアーチャーによって狙いを外されたのだ。

刀の柄を握ったままの一成は、身を翻しかけたアーチャーと視線を交わした。そして次の瞬間、アサシンから勢いよく飾太刀を引き抜いたアーチャーの肘鉄で吹き飛ばされていた。

「——ぐっ!!」

息が止まり、一瞬視界も暗くなった。離すまいとした太刀は握りしめたまま、アーチャーの肩からずりりと抜けた。支える者もなく、そのまま一成は屋根の上から落ちていく。

これはアインツベルンが作り上げた屋敷の上——少なくとも見積もっても十五メートルは落下することになる。

じやらり、と金属の擦れる音が聞こえた。それはアサシンの鎖鎌。「あつぶねーな!!」



落下し行く一成を受け止めたのは、アーチャーから身を離れたアサシンだ。彼の派手な衣装の腹の部分が赤く染まつている。それでも常と変らぬ身軽さでアサシンは地面に着地した。

「た、助かったアサシン！いまその傷直して」

「おう！——つて、そんな暇ねえってか……!?」

アサシンが頭上高くを見上げている。一成もつられてその視線を追う。当然、屋敷の屋根に立つアーチャーが立っている。

「本当に気にくわぬ者達よ」

氷柱のような鋭さと冷たさを合わせ持つ視線が落とされている。敵意だ。純粹な敵意。裏切られてから、碓氷邸にアーチャーが来たとき、そして今まで感じたことのないほどの強い敵意がある。

アーチャーの背後空高く中天に、月が浮かんでいる。望月にはまだ足りぬ。真つ暗な空に穴が空いたように見えて、吸い込まれそうな引力がある白き月。

アーチャーは手持ちの扇を左手で広げ、右手で懐からなにやら古びた紙を取り出し、天高くそれを掲げる。

それは藤原道長という歴史上の人物を、最も強く印象付けた歌を記したものだ。その歌は、平安の歴史を深く知らぬ者にアーチャーの人格を誤解させうる天下の歌。

それを見上げた時、一成の目はある光景を「視た」。そして彼自身が気づいた時には反射的に叫んでいた。

「アサシン!!逃げろー!」

一成の必死にも構わず、平安の貴族の朗々たる歌声は古の山に響き渡る。遙か昔の栄華を再現するかのごとく謳われる奇蹟。

「この世をば、我が世とぞ思う 望月の かけたることも、なしと思えば——」

月光を受けて煌くその姿は、この世のものとは思えぬほど眩く。貴族達が空前絶後の権力を誇り、後代の貴族達に聖代と崇め奉られた栄華の最高峰——古代王朝の文化と世界が、今ここに蘇る。

「約束された栄華の月——!」

王朝政治期最高の到達点を誇る、アーチャーの栄華そのものの具現である形なき宝具が発動する。術者の心象風景を再現し、現実を侵食する結界。

道長の人生最高の時——『一家三后』を成し遂げ望月の歌を詠んだ夜——を再現する、魔法に近い大魔術。

今、瘴気に塗れた山が消え失せる。雲一つなく星が瞬く美しい夜空の真ん中に、望月が浮かんで白銀の光が降りそそぐ。十二月のはずだが、この世界の木々には白い桜の花が**つぼみ**をつけ膨らみ、そして綻んでいく。爽やかな風が吹き抜けると同時に、一斉に桜が舞い散る。

鬱蒼と茂っていた木々や、岩も見る影もない。一成とアサシンは寢殿造の広大な庭に立っている。後方には複数の池が作られ、中島に反り橋がかけられている。底の平たい高瀬舟が浮かび、龍頭りゅうとう鷓首とうげきすの装飾を施され、楽人たちが笙や箏を奏でている。

目の前には寢殿造の母屋。その屋根の上に仁王立つアーチャー。左手に扇を掲げたまま、右手は空手。戦うとはゆめ思えない優雅な姿。

今宵、千年前の栄華の宴よ再び——！

「……………ここで片を付けさせてもらおう」

氷よりも冷たく。海よりも深く。この世界の晴れやかさに反して、アーチャーの言葉は呪詛のようだ。アーチャーは扇を閉じて、アサシンを睥睨し指さした。

「この矢、当れ……そして、死ね」

最早脊髄反射だった。この宝具がどんな効果などわからない。この矢、当れと言いながらアーチャーは矢など全く番えていない。

それでも、先ほどよりもはつきりと「視得た」。

アサシンが死ぬ——その映像がはつきりと一成の網膜を焼き、脳に伝達された。刹那、悲鳴にも近い叫びが空を斬った。

「逃げる!!アサシン!!!」

「な——!?!」

次の瞬間、一成の目に入ったのは数十本の矢に穿たれたアサシンの姿だった。傍らに立っていたアサシンが体のバランスを崩し、そのまま力なく地に倒れ墮ちる。

肉が碎けるような音と共に、動かなくなったアサシンが血だまりを作って倒れている。人間なら心臓があるであろう場所には、確かに数十本の矢が刺さっている。

その上にひらひらと、麗らかな桃色をした桜が舞い落ちていく。

「……………え？」

一成の頭にぽつかりと空白ができる。何が起きたのかわからない。この矢はどこから、いつの間に飛んできて、何より、何故アサシンは串刺しとなり息絶えたのか。

しかしそれを考察することは許されない。未だ尖塔に立ったままのアーチャーは、敵意に満ちた眼差しを一成から外していないのだから。

「この矢、当れ」

## 12月5日⑧ 眷属、再び

セイバーとキャスターは、相性から見ればハブとマングースのそれに近い。

セイバーにとってキャスターは、彼を呪い彼を死に至らしめた原因八岐大蛇・伊吹山の神の申し子だ。既に鬼となり以前とは変わり果てた姿になっているとはいえ、その体に伝説は確実に残っている。

そしてセイバーは神の血を強く引き、特にその神剣が示すように素戔嗚——八岐大蛇を討伐した神——の因子を色濃く持つ英雄である。またセイバー自身にも竜退治の英雄ドラゴンスレイヤーとしての逸話がある。

セイバーは魔力で編んだ白銀の鎧を纏い、神剣を携えている。一方キャスターは神経毒の酒を煽っていない。これはお互いに十全な状態で行われる、素戔嗚と八岐大蛇の神話戦争の再開と言っても過言ではない。

それはまさに神話の再現だった。荒れ狂う巨大な鬼——キャスターの自然現象にも等しい暴力が渦を巻く。山の木々は容赦なく引きちぎられ、引抜かれ、セイバーを襲っては投げ捨てられていく。

セイバーは魔力放出を惜しみなく使い蒸気を纏った剣を振るい、投げられてくる太い木々を切り裂いてキャスターの拳を剣で受ける。剣で受け止めているのだから、キャスターの拳も傷つきそうなものだがキャスターの皮膚にはかすり傷一つ残らない。そして傷をつけたとしても瞬時に回復されている。

その上セイバーはキャスター一人に専念できているわけではない。キャスターの呼び出した部下の茨木童子も相手にしなければならぬ。しかも茨木童子はセイバーを倒せと命令されているのではなく、マスターである明を殺せと命令されている。

キャスターは一撃一撃が爆弾のような攻撃を繰り出し、セイバーがそれを躲したりいなしたりしている隙に茨木童子は明へと向かう。その手には立派な日本刀が握られている。仮に茨木童子の狙いがセイバーであれば、彼は大して気にかげずに相手取っただろう。

だが、目的が違うために茨木童子はセイバーを無視して、大回りを

しても明だけを狙う。

ゆえにセイバーは明を護ろうとするためにあまり派手に動き回れず、キャスターへ向かうはずの意識も散漫になる。

明はそんなセイバーを見ながら、やはりこのままではよくないと思っていた。今の状態、セイバーは明を護るために意識を割いている。

その上、何故まだ姿を現さないのか不明だがランサーもいるはずなのだ。

アサシンが早々とアーチャーを倒して戻ってきてくれることを期待するのは論外だった。戦闘能力の低いアサシンでアーチャーと戦うという、あちらもあちらで分が悪い戦いを強いられているのだ。

明はセイバーらに巻き込まれないように距離を置いて後ろに立っている。棒立ちまでとはいかずとも、周囲を伺っていることしかできていない。意を決し、彼女は念話を飛ばした。

『セイバー、やっぱり茨木童子は私がなんとかするよ』

『!?何を言っている!?もう神剣はないぞ!!』

神剣があれば致命傷を負っても回復させられるが、今はそれはセイバーの手にある。明は既に殺されれば死ぬ体である。

『知ってるよ。だけどこのままだとセイバーだってキャスターに集中できないし、キャスター化け物みたいなパラメータだし。いやあここまでとは思わなかったなあ。私ここにいっても足手まといだし、自分でもなんとかするよ』

この場でも緊張感のない明の念話とその内容に、セイバーの方が早くも堪忍袋の緒を切っていた。

『いいわけあるかこの痴れ者が!相手はサーヴァントほどの力はないが、人間が相手にすべきものではない!!殺されるに決まっている!!』  
予想した通り、セイバーは真っ向から反対してきた。だが呑気に口論をしている場合ではない。影魔術はサーヴァントに有効で勝ちを拾いに行けるとも明は伝えたが、セイバーは決して諾と言わない。

『いいから大人しくしている!死なれることが一番困る!!』

結局のところ、セイバーは明が茨木童子に勝てるとは思っておら

ず、明は何とか勝てると思っただけで大きな断絶がある。明とて危険に身をさらしたいわけではなく、セイバーの発言する気持ちもわかるが、この状況でサーヴァントの魔力タンクに甘んじて良いとも思えない。

「――！」  
セイバーが明の斜め右前に滑り込み、回り込んで襲い掛かってきた茨木童子の刀を払う。

刀が弾かれた刹那、明は意を決してあえて左――鬱蒼とした登山道から外れた道へと駆け出した。木の根っこや切株につまずかぬようにしながら、確実にセイバーから離れる。

「明――」  
「宝具は好きに開放して。さつきも言ったけど直撃じゃなきや自分で自分の身くらいどうにかするからさ」

明は振り返ることなく、そのまま全速力で走り出した。当然一人になった明を放っておくはずがなく、神主服に日本刀を持った茨木童子が、セイバーをキャスターに任せて飛ぶような速さで迫ってくる。

明はつばを飲み込み、魔術の行使を再開する。フィジカル・エンチャント身体強化と視覚強化を三重にかけて、移動の速度を引き上げる。だが、それでは足りない。

「A n s e r t  
Varjo 世kat 界tav をat 覆mail うman 影」

ならばさらに影によって移動の速度を引き上げる。影、というものは常に物があるところにできる。何も無いところに影はできようもない。つまり、影は明のいる場所に存在する。

それを裏返せば、影のあるところに明は存在する。

――魔力によって発生させた影を伸ばすことにより、影の先へ自分の体を飛ばす。飛ばすというが、それは引力によって肉体を無理に稼働させて通常をはるかに超える速度で移動を可能にする代物だ。当然体にかかる負荷は想像を超えるものがあり、肉体を強化していても長時間の行使は死につながる。だが、茨木童子なるモノと戦うためにはこれしかない。

しかし先ほど、この男に向かってゼロ距離で影をぶつけた際に持つて行ったのは左腕一本。解決する策はないこともないのだが、難しい。

「女！よい度胸だ……！っ!?」

明に迫る茨木童子をさらに追ってきたものがいた。——セイバーが鬼気迫る表情で茨木童子の背後に迫り、その蒸気の剣を振り下ろしていた。

「……！」

すんでのところまでセイバーに気づいた茨木童子は、蒸気の剣を回避しようとする。だが、神速のセイバーには及ばない。裂帛の気迫による一撃で、茨木童子は脳天から右と左に両断された。容赦なくそれが飛び散って、明もセイバーも鉄の匂いを被った。

セイバーの殺気は変わらない。マスターとサーヴァントの視線が交錯するのかわずか。

「何を考えて「セイバー後ろ!!」

追いかけてきたのはセイバーだけではない。セイバーを追って、キャスターが木々を吹き飛ばし土を蹴り上げ怒濤の勢いで迫っていた。本当に茨木童子を斬り伏せることしか考えていなかったのだろう、セイバーはキャスターの丸太のような剛腕を、防ぐ間もなく吹き飛ばされた。

「セイバー!?!……！」

セイバーは塵の様に吹っ飛び、山の木々を折りながらの中に転がり込む。キャスターはついぞと言わんばかりに鋼の拳を明目掛けて打ち下ろした。とにかく振り下ろされただけの拳は命中しなかったが、土を抉り岩を破壊し、衝撃で明の体を吹き飛ばした。

「……う、」

岩にぶつかったおかげで転がることは防がれたが、背中を強打した。セイバーを相手取るべく激しい足音は明から遠ざかっていった。未だにセイバーの宝具はキャスターの大敵ゆえに、セイバーに宝具を使う隙を与えるはずはない。

背中への痛みを耐えつつ立ち上がると、舞い上がった粉塵とその先

に、生臭い液体と臓物を撒いた、茨木童子だったものの残骸しか残っていなかった。

(私の事はいいっていったのに)

バーサーカーと戦うときにも見せなかった形相で、茨木童子を一刀の元に斬り伏せたセイバーの吹き飛ばされた先を見れば、既にキャスターとの戦いが再開されていた。

とにかく、茨木童子は倒れた。ならば自分はキリエスフィールを探そうと思った時、明は反射的に今いる場所を跳び退っていた。

「……っ!!」

ズドン、と重いものが飛来し、地面に突き刺さる。そこはつい先まで明が立っていた場所で、今避けていなければ間違いなく死に至らしめる一撃だった。

双剣が、衝撃に震えながら突き立っている。

「この剣……!!」

明には見覚えがあった。最初にセイバーが戦っていた、おそらくは四天王の二人。星熊童子と虎熊童子か。あの時明は茨木童子に襲われたため、その戦いの結末を見ていないが彼らはセイバーに倒されたはずだ。

「おい虎熊ア！なに避けられてんだバーカーカ!!」

明はさらに跳び退った。押しつぶされた茨木童子の死体のそばに、二人の鬼が木々から飛び降りて姿を現した。予想した通り、片方は紅い鉢巻を締めて巨大な金棒を手にした大男、片方は着流しを纏い、髪をポニーテールにした女。とっさに明は太ももにあるナイフの片方を投擲したが、当然の如く避けられてしまう。ナイフは木のひとつに当たって落ちた。

「……あなたたち、何で生きてるの?」

警戒心と疑念がむき出しの明に対し、あくまで自然な動作で女——虎熊童子は刺さった双剣を引抜き、深い関心もなさそうに答えた。「確かに私たちはセイバーに殺された。だけど、私たちは生き返る。お頭のいる限り」

「そーいうこった。なんか茨木のヤローが死んでるけど、五分くらい



すれば戻るんじゃないの？」

「セイバーにも告げたのだが。お前は私たちに勝てても、殺すことはできないと」

「……」

明は言葉を失った。茨木童子を始め、彼らはキャスターによって召喚された使い魔だ。通常の使い魔の範疇を超えた性能をもつ、キャスターの眷属。この山にある限り、そしてキャスターのいる限り、その体を復活させることも可能だと、彼らは言うのだ。

霊核を粉々に破壊されたとしても、この山に溜まった魔力によってかき集めて再構成し、さらに肉を再生する力技としか言えぬ、限定的蘇生。理屈としては理解できるが、それはどれだけ魔力を消費する行為だろうか。

明は背筋を伝う冷や汗を無視して、敢えて笑みを浮かべた。

「……驚いた。せつせと一ヶ月陣地を作ったことは知ってるし、キリエスフィールが並外れたマスター適性を持つのも知ってる。にしたって」

「驚くことはない。ここは落ちた霊脈で、一か月もかけてお頭が陣地を作ったのだから、もう山から魔力を吸い上げさらに魔力を精製とすることさえ可能」

「はあ!？」

確かにここは一級の霊地だ。一ヶ月の時を経て頑強な陣地とされたこの一級の霊地から魔力を吸い上げて、編み上げた結界で魔力を逃がさぬように蓄え続けていた——まではいい。その上山を魔術回路となして魔力を生成すると言っているのだ。

(……バーサーカー紛いだと思ってたけど、結構魔術師してる)

彼等は軽く言ったが、やっていることは規格外だ。酒吞童子は魔術師ではないが、スキルの「陣地作成」はA判定以上のものをもっているに違いない。魔術師の部分はキリエが補佐すればいいだけの話——悪い予想が当たった。

結局、キャスターを倒すには、魔力での修復が追い付かぬほどの致命的ダメージ——霊核を粉々にする程の——を一撃で負わせなければ

ばならない。それより浅いダメージでは、魔力で修復させてしまう。もしくは結界を壊した上で、キャスターにダメージを積み重ねていくか。

どちらにしても難行であるが結界を壊さなければ、キャスターの部下は何度でも蘇ってくる。

なれば、一番最初に彼ら眷属が現れたのも納得がいく。どうせ戦うのなら、最初から酒呑童子やランサーがセイバーを叩きに現れればよかったのだ。にも拘らず、サーヴァントに比して弱い星熊童子と虎熊童子をよこした。

それは、彼らは死んでも何度も蘇るのだから、まずは彼らにセイバーたちの魔力を削って弱らせていけばいいという判断に違いない。

「さて、じゃあセイバーのマスター？でいいんだよね」

金棒を携えた男は、愉快そうに顔を歪ませた。承知してはいたが、彼らは明を殺す為にここにいる。茨木童子の言を信じれば、彼らは茨木童子のように呪術は使えない。しかし、二人と言うのがより厄介だ。

明はセイバーに念話で伝えるようとしたが、止めた。彼の事だからキャスターを放り出してこちらに駆けつけてくるに決まっている。セイバーにはあの凶悪なキャスター本体とランサーを仕留めてもらわなければならない。その上彼らをセイバーに殺してもらっても蘇るいちぢごつこだ。

（——むしろこれはますます私が相手した方がいいね）

明は茨木童子の姿を思い出した。蘇ると言うことは、死なずとも負った傷も時間を待って回復させることを意味する。だが明の魔術を食らった彼の左腕と右腕は、回復する兆しを見せていなかった。しかし、思考はそこで中断された。麗しい女の鬼と、筋骨逞しい男の鬼が双剣と金棒を握り、地を蹴った。

「わかっていうとは思いますが、死んでもらうぞー！」

「……っち、ー！」

二対一はどう考えても分が悪い。しかもここはアウエーだ。せめて数を減らさなければ、明に勝ち目などない。明は地を蹴ると同時に

右手を突出し、素早く詠唱を紡いだ。

「Takaisin alkuperäiseen jokeperustun  
「は……い！」

闇から闇へ何かが飛ぶ。煌めきさえも放たずに、仲間も味方もいるはずのない鬼たちの背後から、凶器が襲う。ずぶりと鈍い音の後、星熊、と呼ばれ金棒を持った男の胸には赤黒い染みが広がっていた。見事腹部を貫いた漆黒の刃は、そのまま一直線に明の手に戻る。

「……つぶ……!!」

「星熊!!」

どうと倒れる星熊童子を振り返ることもなく、明は森の中に駆け出す。彼らはキャスターが居る限り、何度でも蘇ると言った。そのせいかもしれないが、彼らは攻撃を防ごうとする——命を守ろうとする意識が薄い。

星熊童子は一時的に不意をつけただけなので、また蘇って襲い掛かってくるだろう。

明手製の魔術礼装であるダガーナイフ『黒刃影像』は、明の影を閉じ込めたナイフである。影は基本、明から出でて明へ戻っていく。その性質をナイフそのものに封入した、ナイフの形をした影の分体である。

影であるから、それは明が命じれば明のもとへ戻ってくる性質を持つ。それによって飛び道具のように操ることが可能である。ただ、確氷と明の魔術の性質的に、宝石魔術のようにモノにためておくことはできない。精々持つて一時間程度が限度の為、出発前に二本のナイフに魔力を込めてきた。

残り一本であるナイフの魔力を確かめて、身体強化と影を駆使し、明は深く暗い森へと紛れた。

## 12月5日⑨ 碓氷の影使い

碓氷の家の大本は、北欧——フィンランドとスウェーデンの間に本拠を構えた神代からの大家である。大昔は北欧神話の神々に仕えており、神代の遺物を多く受け継いできた。

似たような家にはフラガ家が挙げられるが、そのフラガと碓氷の本家が異なつたのは、今から三百年前ほどに大本の大家が分裂してしまつたことである。

その原因は遠くなくて久しいが、ともかく大家における争いで分裂し、受け継いできた神代の遺物や技、土地の奪い合いが勃発した。

その魔術合戦に終止符が打たれ、結果として碓氷の一代目となる人物は部分的な土地と神代の遺物を所持する権利を得た。にも拘らず、碓氷の一代目は土地を放り出し遺物のみを手に北欧の地を去つた。

土地は得たが、かつての分裂前の時より遥かに小さくなっており、かつ周囲には元同家の魔術師が涉猟して落ち着かない情勢だった。ならばいつそ新天地を求めようと、魔術協会の監視すら薄い極東の地に身を寄せた。

基本的に西洋の魔術と日本の魔術は相容れぬものだが、春日は陰陽道の思想だが四神相応の加護で護られた霊地である。要するにれつきとした霊地であり、魔力が溜まりやすい優れた土地であることには変わりない。先住していた日本の魔術師を駆逐して春日の管理権を奪い、新たに管理者となつたのが碓氷の始まりだった。

幸いにも春日の土地は碓氷の者の血にも合い、彼らはここで魔術の研鑽を重ねてきた。碓氷の体質はこの一代目から続くもので、七代目となる明に至るまで途切れたことはない。

そしてこれまで二重属性、三重属性の当主もいたことがあるが、アベレージワンや架空元素の跡継ぎを輩出したことはない。かつ強い男系の血筋の為、六代目までの当主は全て男性であった。女子が生れても男子ほどの素質ではなかったり、既に長男がいる場合ばかりであった。

ゆえに架空元素・虚数を持って生み落された明に、父碓氷影景が驚

き、あらゆる意味で期待を抱いたのも無理からぬ話である。

「明、お前のような影使いが最も強いときはどのようなときかわかるか」

かつて、父は明にこのようなことを言った。まだ幼かった時分のため明はよくわからず、素直に思った通り「わかりません」と答えた。「影魔術はこの世のモノよりも、この世ならぬ霊体・悪霊の類にこそ有効な魔術だ。お前は魔術師と戦うよりも、そういう怪物と戦う方が向いている。そして影は己の暗黒面を刃と成す禁呪。その暗黒面が濃ければ濃いほど、強くなる。だが己の暗黒が強すぎるとどうなるかわかるか」

「——自分に、呑み込まれる」

「そうだ。『怪物と戦う者は自らも怪物とならないように気を付けねばならない。汝が深淵を覗き込むとき、深淵もまた汝を覗き込んでいるのだ』という言葉は、魔術師ならなじみ深いものだが、こと影使いには尚更だ」

影を鍛え上げる為に、己の暗黒を覗き込む。一つバランスを誤れば生きながらにして己が己で亡くなる危険さえ孕みながら修練を続ける。それが影使い。されどそれは虚数と言う属性故に多少極端なだけであり、魔術師なら誰もがその危険に瀕していることが日常なのだ。

其の時、父影景は急に破顔し明の頭を撫でた。

「心配するな。たとえお前が己の影に呑み込まれても、俺が何とかしよう」

その微笑は、純粹に愛する娘に向ける、父親としての情であったのか。

幼いながらも、違うのだろうか。と明にはわかった。

「できるだけ殺さない。そして決して魔術協会にはやらないさ。きちんとこの碓氷の家でホルマリン漬けにして保管してやる」

お前が跡継ぎとなれなくなっても、北欧の元から養子をもろう手もあるから心配するなと、魔術師たる父はそうにこやかに笑った。

父がおかしいわけではなかった。むしろこの世界において明の方

がどうかしている。仮に父が手ずから明を育てたのであれば、明は父と同じ思考に至ったであろう。

しかし影景は明を育てなかった。あくまで父は魔術の師でしかなく、親愛の対象ではない。魔導を継がせるために教えるのは己の仕事だが、「子育て」は己の仕事ではないと見定めていた彼はそういった作業の一切を雇いの家政婦に任せた。彼自身も幼い時に同様になされ、それで困ることもなかったが為にだった。

明とその姉を育てた家政婦は、普通の人間だった。誠実であり、優しく、人に偽らぬ、凡俗の親に足る普通の女。彼女が明を育てたことが真に幸いであったのかどうかは、明自身にもわからない。

ただ、得難い人間だったと、後に彼女は思った。

その母代りであった女は、もういない。この世のどこにもいない。死のうとした明を救った女は、その代償に自らの命を奪われたのだ。

\*

眷属たちは殺しても生き返る。なるほど、セイバーによって殺された星熊童子と虎熊童子が生きているのだからそうだろう。

セイバーの殺し方は分かりやすく物理的に急所を貫き殺すものだ。眷属たちを成す核や肉が、この世から消えてなくなるわけではない。

蘇生のなされ方はキャスターのこの結界内で宝具が続く限りであろうし、かつ膨大な魔力で霊核を再構成しているため。ゆえに粉みじんにしても、この世に肉があるかぎり彼らは蘇る。

明の影は人間そのものよりも、この世ならぬものにこそ最大の効果をもたらす魔術。それに、この異形たちには対魔力はない。明の魔術

——影によって殺すことはセイバーの殺し方とは違うのだ。それは殺すと言うよりは、消し去るといふ表現がふさわしい。影は対象をこの世に肉片一つ残さず、平面世界というこの世ではない世界に引きず

りこむ。

さて、肉を、核をこの世界ではない場所に放り込まれた眷属は生き返ることが可能なのだろうか？

——否。確信とまではいかないまでも、明はそう思った。先ほど茨木童子に影魔術をぶつけたが、彼は「お頭の話と違う」と言っていた。おそらく、蘇生と同じ要領で左腕も回復するはずだったのだ。しかし茨木童子の左腕の傷は治らなかつた。

とすれば、むしろこの眷属たちを消し去れるのは明だけ。この眷属たちは、まさしく明が倒すべきもの。この力は人を殺すことよりも、異形、怪物、この世ならぬモノを殺すことに——消し去る為にある。

「……っ！」

闇を駆ける。異形が追う。明のすぐそばを二本の銀色の筋が通りすぎた。明は横っ飛びに飛んでその軌跡を紙一重で回避した。双剣の女が迫る。纏った紺色の着物の裾がはためき、虎熊童子は余裕の表情で剣を振るう。

「……あとから星熊も茨木も蘇る。無駄なあがきよ」

山道に慣れていない女の足と、人ならざる者の足では後者が圧倒的に速いのだが身体強化と影による移動で互角にまで持ち込んでいる。しかし肉体的に時間制限がある。

虎熊童子が本気になっていないことを明は承知している。ならば、先程と同じように油断しているうちに倒さなければならぬ。鬼なるものは、人を食料としか見ていない。

「……ツ、こういうの、力の無駄遣いっていうんじゃない!?  
V e t o v o i m a , . . . . s . t . . . !」

足元から影を伸ばす。大きな石を超え倒れた木々を超え、伸ばせる限り伸ばす。月と星だけが照らす場所だが、視覚強化と純粋に目が慣れたために視界はある。虎熊童子を迎え撃つ場所を探し、明は人間離れした速さで森を跳ぶ。

「……ハハ！あがくな人間！殺しはしない！」

「殺さない、って言っても人間の踊り食いしたいだけでしよう……！」

美しく整った顔はどこへやら、完全に鬼の本性をむき出しにして牙を見せている。足の筋肉だけではなく全身の筋肉をひずませながら、明は木の枝につかまり、跳び、岩に着地する。

(……双剣、つてのはやりにくいな)

片方を避けても、もう片方の餌食になる。実際の剣道に置いて二刀流使いはほぼいないそうだが、あれは攻撃よりも防御に優れた使い方だ。今通り過ぎていく道は——道と言うには難があるが——ぼうぼうに木々がおい茂り、通ろうとする場所は定まっていな。そこを虎熊童子は己の庭のごとく木々の間を駆け抜け向かってくる。

今明が持てる武器は足のナイフと魔術のみだ。しかし、影により茨木童子の腕が爛れてナイフは星熊童子の体を貫通したのだから効果はある。セイバーの神剣があれば、遠慮なく接近戦術で特濃の影をぶつけられるが無理な相談だ。

必要なのは純粹に出力。大量の魔力を注ぎ込んだ影にて一気に消し去る。可能は可能だが、この状況で丁寧な魔法陣を刻んで溜めて放つことが許されない。詠唱にも時間がかかる。

(……ノタリコンは練習中なんだよなあ……)

最速の短縮詠唱法とされるノタリコンは、詠唱中の単語の頭文字をとり新しい単語にして詠唱を行う方法である。呪文詠唱はあくまで自らに働きかける鍵であり、術者本人に意味が通じればそれで十分である。

ゆえに短縮して第三者からすれば意味の分からぬ言葉の羅列となっても、術者がわかっていれればいいのだ。だがそれはその特性故に習得(読解)には時間と天稟が要され、明も習得には至っていない。ないスキルを嘆いても仕方がない。

月光の下、明と虎熊童子はほぼ同等の速さで森を疾駆している。虎熊童子の双剣は明を狙い、彼女は紙一重のところをそれを躲し、隙を見てガンドを放つ。虎熊童子は颯ってから生きたまま食うことを目的にしているからか、急所を狙わず四肢を切断する目的を持つ斬撃を繰り出す。明のガンドは飛びながら撃っている為に、なかなか当たら



ずむやみに樹木を倒していくだけだ。

明は影を伸ばし、今まで逃げてきた方向とは逆——来た道に戻るよ  
うに体を反転させる。虎熊童子が周囲の木々をなぎ倒しながら追  
かけているのと自分のガンドで、自分たちがどこから来たのかはわか  
る。だが、あまりにも戦いの場から遠ざかりすぎるのはよくない。セ  
イバーの状況も把握にしにくくなり、彼の下に戻るのにも大変骨が折  
れる。

明は下っていた方向を変え、まずは右に跳んでからUターンするよ  
うに、今まで下っていた道なき道を登っていく。

「これ以上影での移動はまずいな」

既に明の全身は悲鳴を上げ始めている。もう明日一日は絶対に動  
けないことは確定としても——と思ったその時、背後から空を切る音  
が肌に刺さった。

「——!!」

ブーメランの如く飛来する二つの剣。森の中に陰影だけを残して  
襲い掛かるそれは、明が反応するより早い。月光で煌めく銀色の刃は  
その切れ味を誇示して、一本は袈裟に明の右肩を切り裂いた。肩甲骨  
で止まったのか、骨はいかれていない。

もう一本は斬る、というよりは突くという方が正しいが、幸いにも  
こちらも左の太ももを掠めるだけで済んだ。痛みを覚えるより早く  
刀を投げ捨て、明は魔術の行使を止めない。振り返る事すらなく、木  
から木へ飛び移っていく。だがもう最初ほどの速度で走ることでは  
きていないようで、濃密な殺意が、すぐ後ろにまで接近している。

「良く避けたな、人間！」

「……ち、」

明は自分の傷に指を突っ込み、そのぬるりとした感触を確かめた。  
それから腿のナイフを一つ手に、取り敵へと投げて闇へ吸い込まれて  
いく。

そうしている間にも、虎熊童子の剣が再びブーメランとなり襲い掛  
かってくる。

しかし、飛び道具ならば明も負けはしない。両手でガンドを放ち飛

ぶ剣の軌道が無理やりに曲げる。しかし木の太い枝をしならせて飛び掛かる虎熊童子の凜猛な腕が、いや、腕ではなく口から飛んでくる  
!!

危険を感じ、明は渾身の力で影と足を動かした。だが、僅かに遅く——左足の肉が、食われた。

「っ!!」

痛みは感じている。明の一瞬見た光景は、左足の脛にかみついている虎熊童子の姿。美しい女性の形をした鬼は、性的興奮にも似た表情で肉を貪る。

——捕食者は、獲物を得た瞬間が最も隙ができる。

「pauu!」

闇より飛来するナイフ。先ほど何もない闇に放り投げたナイフが、明の呼びかけに応じて飛来する。だが、一度星熊童子にむけて放った攻撃であり、虎熊童子は心臓——核ど真ん中に受けるようなハマはない。肩にナイフを受けたが気にならず、彼女は落ちた自分の双剣を引き抜いた。こくりと肉を飲み下し、明を舐めるように見つめている。

「……お前、処女だろうか?そういう味がする」

「——Ne, jorka muttavat mooto!」

明がそう叫ぶが早いか、肩に刺さったナイフから黒い影が噴出し、まるで人のような影が虎熊童子の後ろに張り付く。影故に虎熊童子の体を焼くが、全てを葬り去るほどの力はない。ただ、只管に虎熊童子をその場に足止めするためだけに——!

明は噴き出る血も構わず、一気に虎熊童子から距離を取る。木の陰に紛れ、大急ぎで詠唱を編み上げる。突き出した両腕の肘まである魔術刻印が激しく鳴動を始める。明の影の分身というべきナイフにも魔力を注ぎ込みながら、かつ今から放つ必殺の一撃の為に全てを注ぐ。五小節からなる長詠唱。

できるうる限りの高速詠唱を加えても二十秒——!!

「Sutele. Palaan. I Kayes.」

Ikuiseen pimetyen, jotta kuollut sok  
Ghostmaille.  
Seeiolenpaikkaissa.  
Maailmankieltä sinua.  
Kielinomanolemassaolon.

虎熊童子が影を振り払う。狙うはもちろん明ただ一人。真正面からぶつかりに行く真似はせず、明の照準から横にそれて木に飛び移り上空から迫りくる。

間に合うか否か。悲鳴を上げる魔術回路が、激しくめぐる。空には魔法陣が紫紺の光を放ち、充填の時を待っている。彼女の両手へ集まる光は、光のくせに星の光までも吸い取る暗黒の渦の如く。

魔力はセイバーに供給する分を残し、それ以外を注ぎ込んで撃ちだす幽世への特攻弾。ガンドのうちでも強力なものはフィンの一撃といわれる。体調を崩させるという呪いを超えて、それだけで心停止にまで至らせる死の呪い。ならば、さしずめ今明が撃ちだそうとしているものは、フィンの大砲の名が相応しい。

「Mene takaisin maailman niin kuin pi  
掲げられた両手は真上へ。紫に微光を放つ刻印の補助を受けて、その一撃は撃ちだされる——!!

「musta pyrrre——!!」

「——!!」

言葉にならぬ叫び。否、言葉を発する暇さえなく虎熊童子は黒い渦に吸い込まれるように、魔弾へと姿を消した。血も肉片も残さず、かの女がいた証は何一つ残っていない。明はあたりを見回し、がくりと膝をついた。

「——ツ、ハア、」

大量の魔力を注ぎ込んだ疲労が全身を包むが、セイバーへの供給は滞りもなくまだ魔術行使はできる。鬱蒼とした木々に包まれる山を見上げ、其の時。雷に撃たれたかのごとく明はあることを思い出し、そしてその思い出したことそのものが彼女を救った。

後方斜め後ろに向かって振り返りざまに両手を突出し、ガンドを放

つ。鋭い音を立てて呪いは振り下ろされる何かの軌道を逸らした。

紙一重で軌道を変えられたそれは、明を押しつぶすことなく地面へ叩きつけられて木の根や草を巻き上げた。明は重い体を翻し、とっさに距離を取った。

「お前、何者だ——」

振り下ろされたのは金剛の金棒。扱う者はセイバーにより粉みじんに碎かれ、明のナイフで脇腹を撃ちぬいた星熊童子の姿。筋骨隆々の益荒男は、訝しげな眼で明を見ている。

その問いが示すところは明もわかっている。これだけに直ぐに姿を見せた星熊童子は、虎熊童子の姿が見えないこと、その死体すらどこにもないことを訝しがっている。

明は背後の岩に手をつき、立ち上がった。

じりじりと距離を取りたいが、この山の中、後ろは岩を乗り越えねばならない。いやそれよりも、星熊童子を消し去るためには先ほどと同年以上のフィンの大砲をぶつけなければならぬ。再び詠唱時間を稼ごうにも、影の分体ともいえる二本のナイフの魔力は今や空っぽだ。

（——というか、魔力が）

フィンの大砲は、あと一撃ならば問題なく撃てるだろう。さらに自分の治療にも充てる分も残る。しかし問題がある——セイバーだ。

セイバーに供給する魔力を考慮しなければ、の話だ。だが彼の第二宝具は本人いわく「燃費が悪」くあり、そこへマスターからの魔力が足りなくて中途半端な威力になってしまつては目も当てられない。なにより、魔力の消費を気遣うなど明が言っただけあり、現在進行形でセイバーは景気よく魔力を持って行っている。

「答える義理は、ないかな」

静かに答えた明に対し、星熊童子は豪放に笑んだ。

「……まあいいさ、生死問わず連れてこいってヤツだし！俺が頂くー」

「……」

V a h v i s t a m i n e n <sup>強</sup>, k o l m i n k e r t a i n e n <sup>三</sup> <sup>重</sup>

！」

明は身体強化をかけなおし、背後の岩を乗り越えた。再び影による移動を再開したが、既に全身の筋肉は悲鳴を上げている。背後から襲い掛かるのは、金棒を遠慮なく振り回して木々をなぎ倒しながら迫る星熊童子の姿。

彼が通ったあとは、その破壊で妙に見晴らしがよくなって山道が見える。

一つだけ思いついた。五小節の詠唱の時間を省いて一撃を見舞う方法を。明は欠けた左足の脛から、いまだにしとどに血が垂れ流されており岩や木に付着していくのを見た。

「おらあちよこまかと!!」

「……ッ！」

直ぐ頭上を金棒が通過し、髪の毛が攫われていく。それをよけきれたかと思った時、右腕が強く掴まれた。振じり切られると思うが早いか、左の人差し指を突き出して至近距離でガンドを放つ。虎熊童子の腹に直撃するが、予想通り効き目が薄く相手が少々驚いただけ——それでも、一瞬の隙をついて掴まれた腕を振りほどくことができた。腕は魔術刻印が刻まれている為に狙われるのはまずい。

狙うなら足にしてほしい——そう明が思った時、その望み通り、左足に激痛が走った。

この痛みは金棒のそれではない——もっと鋭い、ナイフのような何かで切り裂かれたような。

目だけで後ろを見れば、金棒を持っていない方の敵の手の爪が——鋭利な刃物のように伸びて、血を滴らせていた。

「——ッ、ずいぶんと器用なこと……」

「……もうつまんねえな」

「……!?!」

これまで明と星熊童子はほぼ併走、互角のスピードで攻防を繰り返してきた。

だが、明の気付かぬうちに身体強化をしても影の移動に肉体そのも

のがついていけなくなったのか、いつの間にかスピードが落ちていた。そして星熊童子はご丁寧にも明の進行方向へ先に回り込み、その金棒を明の腹に叩き込んだ。

眼は、闇の中でも金棒の軌跡をはっきりと映していた。自分の腹に直撃するとわかりながらも、体が追いつかずそのまま直撃を受けてしまった。腹から全てが吹き飛んでいったような衝撃に意識さえもはく奪される。

明の体は容易く弾かれ、星熊童子が金棒で切り開いた場所に転がった。

幸い、身体強化の魔術のおかげで本当に内臓がごっそり持って行かれるような事態は回避された。明の意識も全身の痛みと共に直ぐに戻ったが、冷たい地面に引き倒された彼女が見た光景は、通常の間人間であれば夢かうつつか己の正気を疑うものであった。

己が地面に引き倒され、両足を肩に担がれながら——足を食われている。もったいないのか味わっているのかは知らないが、左脛から流れる血を丁寧になめとりながら、少しずつ肉を齧っているのだ。

人の肉に夢中なのか、明が暴れないからなのか星熊童子は明の意識が戻ったことにも気づかず足に顔を埋めてしゃぶっている。

それでも明は慌てなかった。むしろ、勝手に足位食っていればいとさえ思った。本当は自分の血液で大雑に、詠唱の手間を省くためだけの機能に絞った簡素な魔法陣を刻むつもりであった。その完成は水泡に帰ってしまったが、人肉を食らっている間に消してみせる。

魔術回路は激しく鳴動し、再び神秘を成すべく跳ね回る。そして魔力など、そこらじゅうに溢れていると明は知っているのだ。

紫の光が迸り、周囲から同色の燐光が浮かび上がる。ずるずると音を立てて血肉を嚼む鬼は、そこでやっと異変に気付いた。しかし時すでに遅し、明の大砲は既に発射秒読みに入っている。

「*Me* 女 *ne* の *ta* あ *kai* る *sin* ま *ai* き *l* 世 *ma* 界 *n* に *n* く *ui* へ *n* 帰  
*dar* 黒 *k* い *mu* 満 *st* い *a* 満 *py* 満 *rr* い *e* 満 *—!!*」

至近距離で直撃する暗黒の渦。全てを平面世界へ消し去る魔術が

鬼へと向かう。星熊童子は先に消えた虎熊童子と同様に毛一本も残さず姿を消す運命にある。

刹那たくましい腕が明の細い喉を巻るべく伸ばされたが、それは届かない。

「き、さま……!!」

鋭い爪が少しだけ皮膚を掠めたが、眷属たる鬼の一人は憤怒の形相を強く残して、何も残さず消滅した。

「……余裕、ぶってるから、っ、あ、っ……」

明は大きく息を吐き、立ち上がる気力もない。先程までは戦闘の真つただ中で痛覚がマヒしていたのか、今更痛みが強くなっていた。左足が脛から膝の上まで食い荒らされて血まみれになり、目も当てられない。

だがそれよりも金棒で腹を殴られたことの方が大事で、地面の上で胎児のように丸くなった。

怪我もあるが、其れとは別に体が熱病にかかったように重いのは別の理由がある。セイバーに供給する魔力をとっておくために、この山に充満する魔力をとりいれて魔術を行使したのだ。魔力は魔力でも、この山に渦巻くものは瘴気。

取り入れれば取り入れるだけ術者に害を成す。だが、軟な魔術回路を持ち合わせていない明は、その選択肢を拒否しなかった。

幸い回路が一時的にショートするような事態には陥っていない。まだ魔術は使える。セイバーへ与える魔力にも滞りはない。足がロボロだが、この程度は魔術刻印が勝手に修復しにかかるだろう。

この程度、傷のうちには入るまいと明は自分自身を叱咤し無理に立ち上がった。肉体強化を続ければ歩くことくらいはできる。

治療については血止めは行ったが、残りは全てが終わってからにすることにした。移動もまだ魔術で強制的に体を動かさねばならないし、それにセイバーはまだ戦っている。

とにかく、セイバーの様子を見に行かなければならない。もう明には戦えるだけの体力はない。幸い、投げたナイフの場所は礼装故に場

所くらいはわかる。ここから上に登って行けば、セイバー達が戦っている場所にたどり着くだろう。

パスから察するに、今の所セイバーは大ダメージを負ってはいないようである。ひとまず明は安心した。

(「そういや、アインツベルンのマスターは……?」)

キリエは茨木童子に明の相手を命じてから何もしていない。自分が殺すまでもなく彼のサーヴァントの眷属に任せればいいと思っていたのだろう。小聖杯であるキリエの魔術は、「結果そのもの」を引き寄せるものと聞いている。今の自分で太刀打ちできるとはとても思えない——が、その姿はどこにあるのか。

マスターはマスターの気配を感じるが、彼女がこの山にいることしかわからない。

キャスターを倒すには、膨大な魔力による回復が追いつかないほどに一瞬で即死にいたらしめるか、魔力を漏らさぬようにしている結果を壊したうえでキャスターを倒すかだ。前者はキャスターの伝説——首だけになっても戦った——の話からすれば、かなり難しい。

そして後者は、この山に設置された陣地用の基点の半分以上を破壊しなければならぬが、セイバーの宝具なら一度に壊すことも可能だ。

だが、いまのキャスターと戦うセイバーにその宝具を放つだけの時間を確保できるのか。そしてもしキャスターが消えていなかった時、対抗する魔力は残っているのか。

「戦闘続行」のスキルを持ちうるキャスターが、そのまま消えるとは思えない。そして一成とアサシンたちの戦況はどうなっているのか。

「ここで考えても仕方ないな……」

一息ついて、明は木につかまって歩き始めた。もう厄介な何かが出てこないことを祈りながら、セイバーの元に戻るべく再び山を登り始めた。



12月5日⑩ 三騎相見ゆ

本来、セイバーは武の天稟に男女の別はないと思っている。仮に戦う力がないのであればマスターにはずっと家に引きこもってもらい、一人で聖杯戦争をするつもりであった。

しかし、生前東征に同行した妻とは異なり、明は戦う力のある者だった。ゆえに、死を覚悟するのならば共に戦うことに異論のあるはずもなかった。

そしてセイバーの目に狂いはなく、明は「死ぬことも承知で」この戦いに臨んでいた。だがその覚悟は正しく「死ぬことも承知している」覚悟であるのだろうか。それを、セイバーは危ぶんでいる。

ゆえに「一人で茨木童子を相手取る」というとんでもないことを言い出したマスターを助けるべく、セイバーはキャスターに背を向けて茨木童子を追ったのだ。だが茨木童子の体を両断した瞬間、世界が反転したかと思うような衝撃で、セイバーは薙ぎ飛ばされた。

開けた場はすでにセイバー、キャスター、アサシン、アーチャーの戦いで木がなぎ倒され土が抉られ、勝手に拡張されている。その広場を突き抜け、さらに森の奥までセイバーは転がる。神剣の護りを得たセイバーはこの程度で傷つきはしない。とにかく茨木童子は真つ二つにし、明は無茶な戦いをする必要がなくなっただけで十分である。

地鳴りの如き音が聞こえる——キャスターは悠々とした足取りでこちらに向かってくる。木を引き倒し、草を踏み潰し岩を砕く。襲い掛かってくるかと思いきや、キャスターは鬼火をまとわりつかせたまま、襲い掛かってこない。

「セイバー」

「何だ」

セイバーは警戒を緩めず、その遥かに大きい巨体を見上げた。黄色く濁った眼がぎよろりと動き、見下ろしてくる。今に限って、圧倒的な死の気配は鳴りを潜めている。

「私がかつてお前に言った。お前と私は似ていると」

「……そうだな。そんな戯言を言っていた」

キャスターとアーチャーが酒を持って碓氷邸にやってきた時の話だった。

神との混血であるセイバーと、魔物の混血であるキャスターは、人間を間に挟んで鏡写しの関係にある。

「お前の願いはまだあの時と変わらないか」

「変わらない。俺はただ勝つ、それだけだ」

キャスターはため息をついているように見えた。その意味を理解できず、セイバーは訝しげにキャスターを見上げた。

「その願いはそれでいいだろう。だが、もし聖杯を手に入れた場合の使い道は考えたか？」

「なぜそのようなことを聞く。貴様は貴様で聖杯に用がある。ならば俺は倒すべき敵、それだけのはずだ。ここまできたら、あの時のような与太話はもういらないだろう」

「確かにそうだ。だが、放つては置けなかった」

今だけ、かのサーヴァントに敵意はない。その空気が物語る。清かな月光が、人世で暮らせなかつた英雄と妖怪に降り注いでいる。

「今のお前は哀れすぎる」

「……何だと？」

セイバーの言葉も尖っているわけではない。寧ろ疑問に満ちており、殺すべき敵である自分を気にかける心情を窺おうとしていた。

「幾らお前が願おうと、お前は決して人の世に交わることはできない。居場所などない。人でない者は、恐れる人によって追いやられる」

「……だから、お前の様に同類だけの世界を願えと？」

「お前が何を願おうが自由だ。だがお前は決して人ではない。消えるまえにそれだけは論しておこうと思った」

キャスターは、ベクトルは異なるとはいえ同じく全き人ではないセイバーに対し親近感にも似た気持ちを抱いている。そしてそのことにすら気づかないセイバーを論するのは、同じ人外である己の役とも考えていた。

しかし、セイバーは一度目を閉じ、静かに異を唱えた。

「……居場所などない、とお前は言った。だが、俺の居場所は確かに

あつたのだ。その者達に応えるには、やはり俺は最強であり続けなければならぬ」

神剣から蒸気が立ち上り渦を成す。セイバーの目は鋭くキャスターを見据えている。キャスターもその髪を逆立たせ、赤銅色の体が輝く。

「これ以上の問答は無用！朝敵死すべし！」

「……ならば仕方ない。その体、食らうのみ!!」

堰を切ったように、神秘と神秘が激突する。セイバーの蒸気を纏う剣と、キャスターの真つ赤に熱されたような鋼鉄の剛腕が唸りを上げる。膨大な魔力が散らされ、巻き起こる風のみで周囲が開けていく。神剣の加護を得たセイバーは生半な攻撃では傷つかないが、膨大な魔力に後押しされたキャスターもそれは同じである。

そもそも、キャスターの真の適性クラスはバーサーカーであるためにその力は、初めから生半ではない。かつ、それだけの勢いを持ちながら俊敏さを失わない。

避けた拳が地をも破壊して、まるでクレーターを作っているかのようだ。拳を掠めた木々は魔術の影響下にあるのか、それだけで発火して炎を纏う。

「むん!!」

岩を砕き土煙を舞い上げたそのキャスター拳の先に、木や岩ではない柔らかい何かを潰した感触が伝わった。だが、何かがおかしい。

高く跳ねて拳を避けたセイバーは、土煙の中正確にキャスターの腕に着地してそのまま腕の上を走り神剣を振りかざす。狙うはその首

「死ねエー・キャスター——!!」

渾身の力に魔力放出を加えたセイバーの斬撃がキャスターを襲う。唸りを上げる蒸気が肉薄したその時、黒板をひっかくような不愉快な音が、セイバーの耳にまわりついた。

命を絶つはずの彼の剣は、下を向いたキャスターの歯によって止められている。巨大な白のように見える一つ一つの歯がぎちぎちと神剣をかみ砕こうとしている。

「……いっつ、燃えろ、草薙!!」

瞬間的に神剣が橙色に光り、纏わる蒸気が倍化されて吹き出す。圧倒的な熱量に焼かれてキャスターは神剣を吐くと同時に、セイバーは赤銅色の肌を蹴りキャスターから離れた。

「流石に神剣とやらは固い」

あめのほばきり天羽々斬剣を欠けさせる硬度を持つこの神剣がかみ砕かれるなどありえないが、魔力を込めたセイバーの剣を歯で受け止めるなど尋常ではない。

セイバーはじりじりとキャスターと距離を取ろうとするが、キャスターは許さない。巨体に似合わぬ俊敏さであつという間に距離を詰め、雨霰と力任せに地面とセイバーを殴りつける。周囲の木々は赤赤と燃えて、今が冬であることを忘れさせる。

キャスターには、セイバーやランサーのような戦闘の為に磨かれた武術は存在しない。ただ力のままに拳を振るい、邪魔なものを蹴り殺し、人を捻じり殺す純粋な暴力だ。荒れ狂うままで全てを破壊しようとする力は、自然現象にも似る。彼の親は山神にして八岐大蛇、変質し堕ちた最高の幻想種の力。

拳と剣が目にも映らぬ速さで幾合もかわされる。素早さは互角、だが力はセイバーの魔力放出を使ってもキャスターの方が上。その上傷をつけても、膨大な魔力の為即座に修復される。あちらも神剣の加護を持っているようなものだ。

「ふん!!」

「——っ!!」

ガギン、と右拳をはじめた刹那に真横から左拳が襲い掛かる。その拳は殴りかかってきたものではなく、かつ一瞬の差で——セイバーの首が掴まれた。そのまま宙へと持ち上げられ、捻じり切るべく振るわれる。

セイバーは叫びたが、瞬時に両手で握った剣で、腕ごと断つべく魔力放出全力の力で切り払う。邪魔をするキャスターの右拳を足で蹴り払うという、曲芸の如き技で脱する。だが腕は落とせず、半ばまで肉を斬ったに過ぎない。

「流石日本武尊と言おうか！まだ死なぬか!!」

「——神ゴときに負けてたまるか!!」

再び拳と剣のやり取りが成される——だがその時、セイバーは何か違和感を覚えた。

(……地が揺れている?)

地震の類ではない。蠕動しているともいうのか、まるで寒い中に放り出された人間が体を温めようと体を震わせる様子を思い出させるような揺れである。

生前山の神の申し子であり、魔物と成り代わってから山を根城としたキャスターの山における陣地作成の能力は最高クラスだ。さらに明は春日一の霊地はこの大西山と言っていた。まさか、とセイバーは息を呑んだ。

「この山そのものが魔術回路か……?!」

「丹精込めて作り上げた私の根城だ！それくらいのものでなくてどうする！」

この山そのものを壊さない限り、山そのものが霊地である為に魔力を生成してキャスターに魔力を与える。

しかし奇しくも対抗するすべをセイバーは持っているのだが——

「チツ!!」

キャスターはセイバーに宝具を放つだけの余裕を与えない。全身が凶器に等しい鬼は、再びセイバーに迫る。

ふとセイバーは、アーチャーと戦うアサシンとそのマスターの安否が気にかかった。

だが、その思考も一瞬で掻き消えた。

(……どうにか宝具を放つだけの時間を稼がなければ)

空から宝具を使えればすぐにでもできるが、十全の威力を発揮するには足を地につけなければならぬ。三十秒、いや二十秒でいい、キャスターの動きを止められれば。

セイバーは己が剣を振るいながら、その為の策を必死で手繰り寄せんと考えをめぐらせた、その時。背後から澁刺とした野太い男の声

が、朗々と響いた。

「応心！随分と困っているようだな!!」

月下に立つは、三メートルもの槍を携えた偉丈夫。鎖帷子の下に見える肉体は、鍛え上げた武士の姿の見本——のはずだが、今は黒漆塗の当世具足を身に纏い、肩からは大振りの数珠をかけている。それよりも目を引くのは、その兜——鹿を模した角が天高く夜空を衝いていること。そして威風堂々の鎧と兜でありながら、それはランサーの俊敏さを聊かも損なわない軽量なものである。

ランサーは武骨な顔に笑いを浮かべ、男は天下に鳴り響いた名槍を振り回した。

「二対一、正々堂々の戦いを望む」と誇らしげに語った男が、ついにその姿を現した。決して不快だと思わなかったサーヴァントだが、ここに出てこられると厄介である。セイバーは内心舌打ちした。これでは、宝具を解放するどころの話ではない。

ランサーはその槍を構え、地を蹴った。

「助太刀するぞ！セイバー!!」

虚を突かれたのはセイバーだけではなくキャスターもだ。完全にキャスターの不意を突いた鋭き槍の一閃は違うことなく、キャスターの脇腹を裂いていた。

月下に鮮血が飛び散り、疾風の如くランサーは奔りセイバーの隣りへと移動した。キャスターはその腹を押さえ、セイバーは改めて剣を構えなおしランサーから距離を取る。ランサーはいつものように豪放な雰囲気纏っていたが、其の顔はどこか寂しそうでもあった。

「いやはや、どうしても二度目の生とあらば欲を張ってしまうものだな!」

激怒したのはキャスターだ。赤銅色の肌が血の色そのものに染まり、血の湯気が立っているかのようだ。全ての目がランサーに向いて殺意を露わに睨みつけている。

「……ランサー！何のつもりだ!!」

「何のつもりもないぞ。儂がお前らを謀っただけの話だ」

怒りの化身となったキャスターに物怖じすることなく、ランサーは

ぬけぬけと言い放った。

「お前は一对一で正々堂々と戦うことが望みだと言った筈だ!!あれは嘘だったのか!!」

「いや本心だ。ただ、うまくいかぬなという話だ」

「訳の分からぬことを!!」

「ははは、鬼は、いや人ならざるものは人間よりも純粹だ。儂は羨ましいぞ」

酒呑童子の最期は、頼光四天王たちの言葉を信じ、彼らの持つてきた酒を飲んでしまったことによる。神経毒の入った酒により体が動かなくなつた酒呑童子たちを、頼光四天王は刈り取っていった。

鬼は「俺たちはお前たちを信じたのに」と恨み言を吐いて息を引き取る。

——そのキャスターは、嘘偽りを蛇蝎の如く嫌う。

「セイバー、お前との決着は最期に取っておきたい。今は手を貸そう」突如現れたランサーに動揺したのはセイバーも同じである。本当にランサーが今だけでも敵ではないのならいくらでもやりようはあるのだが、簡単に信じることもまたできない。

「……お前は令呪ごとキャスターのマスターに奪われたのだろう」

仮にランサーが手を貸す、という言葉が本当だったとしても令呪には抗えない。

ランサーはそれはそうだ、という顔をして槍を構える。三メートルの槍はランサーの意志により長さを変え、二メートルほどになっている。

「令呪に関してはハルカがなんとかしたわ」

「私の主人が易々ととられるわけがない!それに現に生きている!!」

怒号にも等しいキャスターの声にもランサーは動じない。そう、キリエスフィールは最強のマスターであり、仮に令呪が奪われる——命の危機に瀕することになった場合、キャスターが気づかぬはずはないのだ。

双方から疑いのまなざしを受け、槍兵は朗々と声を上げた。

「もし信じられぬというなら、我が槍を見るがいい!!」

稲妻のような速さでランサーはキャスターへと駆ける。彼の手足の延長に等しい槍は、疾風を伴いキャスターへと迫る。しかしランサーがセイバーに加勢しても、相手はこの山が生み出す魔力を食らうサーヴァントだ。先に魔力が尽きるのはランサーの方だ。

しかし、ランサーによりわずかでも時間稼ぎが可能となる――。

「……ッ、!?!」

その時、セイバーの背に凄まじい悪寒が走った。血の抜けるような感覚に近い何かが、セイバーの総身を震わせた。これは、セイバーにとって既知の感覚であり不吉なもの――バーサーカー戦で明が傷を負った時に感じたものと同じだった。

しかし、今の感覚はその比ではなく今も続いている。だが、茨木童子は確実に殺したはずである。

刹那、セイバーは反射的に身を翻した。

「お、おい!?!」

セイバーはランサーとキャスターに背を向けて駆けだした。驚き戸惑うランサーの声も振り切つて、セイバーは主の姿を探す。



12月5日⑪ 聖杯陰陽師 対 槍兵

ランサーがセイバーに加勢する前の話だ。

森を疾駆する。ちらちらと光る鬼火と月光のみが光源である闇の中を、ランサーに抱えられてハルカは駆ける。この闇も、視覚強化と肉体強化をしたハルカにとっては物の数ではない。二人とも周囲への警戒を怠らない。

「ランサー、キリエスフィールはどこですか」

「この先に少し開けた場所があり、そこにいる。あと二十秒くらいで着くが……どうする気だ、ハルカ」

ハルカはしばし考えこみ、顔を上げた。「彼女の傍にサーヴァントはいますか」

「そこまではわからん。だがセイバーたちが山に入ってから時間が経っている。そろそろ全員戦闘に向かっているだろうが、彼女の護衛に鬼を一人残しているかもしれない」

「キリエスフィールの姿が見えたら、彼女の頭上を通過するように私を放り投げることはできますか」

「できるが、何をするつもりだ」

「彼女を倒します。もし護衛がいたらランサー、貴方が相手をして時間を稼いでください。十秒もあればいいでしょう」

キリエのサーヴァントであるランサーは、令呪を使われればひとたまりもない。だが高い対魔力で少しはこらえることができるだろうから、秒単位ならなんとかなる——ランサーは諾、と答えた。

木々が後方へ飛び去っていく。遠くに目をやれば、たしかにランサーの言った通り開けた場所があるようで、鬱蒼としたここよりもほのかに明るそうだ。既に戦いが始まっているのか、激しい剣戟の甲高い音が鳴り響き、熱気も伝わってくる。

そしてすぐにハルカは足にくくりつけたモノの感触を確かめて、そして自分の身が空に打ちだされるのをはつきりと感じた。冷たい山の空気を打ち破り、開けた場所の上空を飛ぶ。

眼下には、石に腰かけて離れた戦いを眺めるキリエスフィールの姿

がある。

「——!!」

魔術による攻撃なら、かのマスターは一瞬にして気づき防御するであろう。故に完全に不意をつくことを狙ったハルカは魔術を使わない。足にくくりつけたそれを勢いよく引き抜き、滞空した状態で上空からキリエを狙い撃つ——!!

魔術と瘴気が支配するこの世界において、ありえない音が轟きありえない匂いが漂う。硝煙と火薬の匂い——キリエを狙撃したものは、拳銃。普通の魔術師は手にしないはずのSIG SAUER P220——自衛隊で使われている拳銃によって、ハルカはキリエを襲った。

生粋の魔術師であろうキリエスフィールは、全く予想だにできなかった攻撃方法に不意を突かれ反応が遅れ、その身に鉛玉を受けた。肩に二発、足に一発。キリエは舞うように跳ね、そしてぼたりと地面に倒れ伏した。

遠くのサーヴァント同士の戦いの音を背に、ハルカは乱れなく地面に着地した。流石に対空中で銃を撃つのでは狙いが粗い。しかし彼はぬかりなく、もぞもぞと動くキリエに再び何度も鉛玉を打ち込んだ。そして足早にその小さな体に近づき、左腕に手をかざした。

キリエの腕にある、キヤスター分の令呪・ランサー分の令呪・アーチャー分の令呪六画を全て剥奪するべく心霊医術を行使する。心霊医術といっても対象の同意なく行うので、キリエの体にはダメージが残る。だが、ハルカには関係がない。

ランサーは今にもキヤスターが襲い掛かってくることを警戒し、ハルカとは別の方向——剣戟の音のする方向を睨みつけていた。因果線によってサーヴァントとマスターはお互いの状態がある程度把握できる。

マスターが撃たれたとあってはキヤスターがその異変に気付かないはずはない——そう判断したランサーは決して間違っていない。

だが、キヤスターが来る様子はない。

鋭い光が走り、残った六画の令呪はハルカの腕に移った。ハルカは

右腕を確認すると、ランサーと再契約を交すべく振り返るが、槍の英霊は何か言いたげに北歐のマスターを見つめていた。

「……何か思うことがあるのですか、ランサー」

「再契約には応じよう。だが一つ、願いを聞いてほしい——お前は儂が聖杯戦争に夢を見ていると言ったな。確かにその通りよ」

人間同士の戦いであることを失念したランサーは、己を戒める。この槍一本だけで戦国の世を渡り歩いてきたわけではないランサーは、戦に至る前の工作を認める。

それでも彼は現世に望むものを捨てない。

「だがな、この戦争どいつもこいつも何かしらの夢を持って参加してもいよう。儂もそうだ」

お前もそうなのだろうとランサーの目が語る。

「だから、キャスターとの戦いを勝ち残った時——セイバーと一騎打ちをさせてくれ」

正々堂々、尋常な全力勝負をしたい。それこそがランサー唯一の願い。

ハルカは溜息をつく。

「本当に仕方のない人ですね。そこまで言うならセイバーは好きにしてください。それにもうこれほどのことをすることもありませんでしょうし」

その返事に満足して、ランサーはハルカに向き直り高らかに宣言する。青白い火花が散り、魔力が溢れる。失われた因果線が再び繋がれ、ランサーに新たな魔力が注がれる。

「——再び汝を我が主と認めよう、ハルカ・エーデルフェルト——！」

「ならばここに契約は完了し「何が完了したのかしら」

ありえない声。先ほど鉛玉を何発も打ち込んだはずの相手から、令呪をはぎ取ったはずの相手から声が発せられている。だがハルカはそれさえ予想していたと言わんばかりのスピードで身を翻し、ランサーを盾にした。

同時にランサーもハルカの盾となるべく槍を構え、その切っ先を眼

下に向けた。その声の主は、小さな体に二本の足で立ち、二メートルほどの距離をとっていた。その程度の距離、ランサーからすれば無に等しい。

何度も鉛玉をくいこませた少女の白いワンピースは、何か所も血に染まり、同時に土で汚れ、白と言う色を忘れていた。だがその紅い目は瞋恚に燃えてハルカとランサーを睨んでいた。そして気づけば、キリエは片手に空になった小瓶を握っていた。

「……神便鬼毒酒、ですね。かの酒吞童子の力を失わせ、神経をマヒさせた酒」

「あら、よく知っているのね」

キャスターの宝具『神しんの方便鬼へんきの毒酒どくしゆ』は、酒吞童子討伐に向かった頼光四天王に石清水八幡宮・住吉大社・熊野大社の神々が授けた酒である。

鬼がその酒を飲めば力を失わせ、人間が飲めば力みなぎらせ超人へと変える。本来の適性クラス・バーサーカーで呼ばれた際に酒吞童子がこの酒を摂取すれば強化のランクを下げ、知性ある会話をも可能とする。しかしキャスターで呼ばれている今、キャスター自身にはマイナスの効果しかない宝具である。

だが、ひとたび人間であるマスターが飲む場合は話が違う。

「……ランサー、二人で当たりますよ」

ぼそりとささやかれた言葉に、ランサーは耳を疑った。あの少女のマスター一人に、サーヴァントとマスターである人間のハルカで向かうと言うのか。

「あれは最強のマスターです。それに、今のあの娘を人だとは思わない事です」

「人だとは……ッ!?!」

ランサーが非難めいた言葉を返そうとした刹那、ランサーよりもはるかに小さい体躯のそれが電光めいた速さで蹴りを繰り出した。防いだ槍がしなりたわむ程の力である。ランサーは驚き、素早く少女から距離をとった。

わかっただろう、と言わんばかりの視線をハルカは送った。

近代兵器による攻撃を全く予想していなかっただけに、キリエはハルカの不意打ちを見事に受けてしまったが、急所ではなかった。そして再度ハルカが弾を撃ち込む前に、小さく身じろぎをしていた。その際に宝具を飲んだに相違ない。

生憎目覚めたのは令呪が取られた後ではあったが、それでも超人的な速さで意識を取り戻し、ランサーに比肩しうる膂力を一時的に得ている。回路の一部ごと令呪を剥がされた激痛もそれによって癒されている。

少女の眼は未だに焰を抱いている。それはランサーに向けられたものではなく、その後ろのハルカに向けられている。

「ミスター・エーデルフェルト。あなたの家はそこまで堕ちてしまったのかしら」

歴史ある魔導の家柄ほど、近代文明を見下す。そして拳銃などの近代兵器も然り。キリエとてこの戦いが殺し合いであることを了承しており、ただ「マスターが足りない」と言う理由で選ばれたマスターがそうするのならここまで激昂することはなかった。

だが、相手は彼女の家ほどではなくとも歴史を重ねた魔導の家、その分家である。

そして、それ以外にも彼女が怒りに震える理由がある。むしろそちらの方が、キリエの逆鱗に触れる事柄だ。

「あなた、何のつもり？オウウはどうしたのよ」

ハルカはその問いに答えない。キリエもならばよいと言った風情で息を吐くと、一気にランサーとの距離を詰めた。黒い髪をなびかせて疾駆する矮軀からは、その姿からは想像もできない巖のような一撃が繰り出される。速度も重さもサーヴァント並みの攻撃だった。

「……!?何!?!」

未だにキリエの力に対し半信半疑であったランサーも、はつきりと認識を改めざるをえなくなっていた。

ハルカもランサーを援護すべく距離を取り、拳銃を再び構える。能力が向上しているとはいえ、キリエが流石に二方向からの攻撃対応で

きるほど戦闘慣れしているはずもない。

ハルカは駆けて彼女の背後を取り引き金を引いた、其の時。疾風の如く間に割り込んだのは、子供程度の背丈に紅い水干。頭には角が生えた——熊童子と金童子の姿だった。

キリエを護るかのように割り込んだ少年の鬼は、放たれた近代兵器の凶弾を手のひらを重ねて受け止めた。弾は貫通することなく、そのまま地面に落ちた。

「お前、なんのつもりだ。ランサーもだ」

この陣地にある限り、キャスターを倒さない限り蘇る眷属。ランサーの槍で貫かれたはずの鬼が、再び平然とした姿で立っている。熊童子たちは事情を理解していない。しかし、ハルカとランサーが確実に敵にまわっていることは理解している。

（……相手は何度殺しても蘇る。殺すならマスターでなければ意味がありません）

ハルカは拳銃を足のホルスターにしまい、代わりにガンドを撃ち熊童子たちをけん制しながら、ランサーの背後へとまわった。バラバラに一对一でやるよりも、ランサーが三人を相手にしてその援護という形がいい。そしてキリエと戦っているランサーは、明らかに彼女を圧倒している。

熊童子たちもキリエの劣勢を見て、彼女を——首領の主人を助けるべく動くことにしたのだ。

\*

——キャスターからの酒をもらっておいてよかったと、キリエは心底思った。まさかエーデルフェルトが近代兵器を使うという蛮行をなすとは思わなかった、否、そもそもこの男がここにいること自体が  
あり得ない。

何故こうも、うまくいかない。

キリエはランサーの奥にいる男を捻り殺したい衝動にかられていたが、既に奇跡をおこなう令呪は奪われている。念話でキャスターを呼び戻すことはできない——それに呼び戻せば、セイバーに宝具を使う隙を与えてしまう。

アーチャーは迷うところだが宝具（固有結界）の展開中であり、厄介な気配遮断スキルを持つアサシンの相手をしている。呼びだして意味があるかは微妙だ。

「——ランサー、殺してあげる……！」  
「……ッ、」

ランサーは迫るキリエに対し、神速の槍が繰り出している。空気を切り裂き闇を穿つ裂帛の槍は、それでもキリエスフィール・フォン・アインツベルンの黒い髪を一本断ち切るのみである。

ランサーは既に幾合もこの槍を振るっているが、キリエは人知を逸した素早さと視力で槍を回避している。確かにキリエの力と素早さはサーヴァント級だと、ランサーは感じた。彼女を助けるべく蘇ってきた熊童子と金童子よりも、マスターであるキリエの方が身体能力は上だ。

——だが、押しているのは圧倒的にランサーだ。そう、宝具の力によつて一時的に超人的な力を得ているキリエだが、魔術戦ならいざ知らず、彼女はこういった直接の戦闘についてはずぶの素人だ。

身体能力と視力は素晴らしいが、槍がどのように繰り出され次などの攻撃に繋がっていくのか、そういった判断があまりにも未熟なのだ。

「っ!!」

ランサーの槍がキリエの柔らかい腕の肉を斬った。これまで浅い傷で済んでいるのは、戦闘経験ではキリエより長のある熊童子たちがその判断の素早さで彼女の回避を促し、間に合わないときは彼らが盾になっているのだ。

三人合わせて、ランサーと同格のサーヴァント級といったところ。魔力を消費し宝具を開帳するまでもない——そう認識されていることは、キリエ自身も自覚していた。

そしてランサーの背後から、ハルカがガンドを時折発射してくるのも煩わしい。

固く湿った地面に足を突き、背中を掠めていく槍の気配をまざまざと感じながらキリエは熊童子たちを見た。

やはり、こういう荒事はサーヴァントの仕事で自分のやるべきことではないと再確認する。神便鬼毒酒の効果も永遠に続くわけではない。

——キリエは紅い目を熊童子たちに再度向けた。

幾度もキリエの命を狙った槍は、此度も鋭さを失うことなく繰り出される。熊童子がキリエを背中で押し、眼で追うのがギリギリの槍を躲し——交わさなかった。ランサーの槍は見事に熊童子の腹を貫通して、穂先は背中から突き出していた。

だがむしろ熊童子は腹に刺さった槍を逃がさぬとばかりに掴んだ。今まで熊童子と同様に動いていた金童子は、ここにて初めて別の動きを見せた。

「!?」

「Shape、ist Leben!」

ランサーが何を、と思った刹那。キリエの魔力で編まれた銀色の針金が煌めき、白鳥の形を取りランサーに襲い掛かった。だがランサーが焦ることはない。高い対魔力スキルを持つランサーに、一工程の魔術など無意味——だが、其の時ランサーの背後からハルカの声があった。

「避けなさい、ランサー! ——ツ、

Sechs Ein Fluss, ein Halt!」

迫りくる銀系の白鳥。ランサーに呼びかけるハルカには、紅い水干の片割れ——金童子が迫る。矮小であるのはその体躯だけ、振るわれる拳は烈風の如き速さを持ち、素で受けてしまえばハルカとて大きな損傷は免れない。

魔力を貯めた宝石を解放し、直前で拳を避ける。金童子は完全に熊童子と離れ、ハルカを狙っている。

一方、キリエはさらに追加詠唱を加える。ランサーは知らぬとばか



りに白鳥を無視して襲い掛かろうとした。

「急急如律令！」

白鳥はその形を保ったまま、網のように広がってランサーを襲った。そして対魔力を持つ彼にもかかわらず、その針金は極太の鎖の如き強靱さでランサーの腕に絡みつき彼の体を浮かし、背後に茂る大樹へと縛りつけた。

意地か、決して槍だけは手放さずぶりと熊童子の体からそれは引き抜けて、ランサーの手にある。

何故魔術が効いているのかわかっていないランサーは驚いてはいるが、あのまま大人しく縛られてくれることはない。針金が壊れずとも、ランサーは直に膂力で木をねじ切ってしまう。

キリエは腹に穴をあけた熊童子に容赦なく命じた。

「あなたは金童子と共にこのエーデルフェルトを殺しなさい！」

「……了解」

「……い、stark！」

熊童子と金童子がハルカに迫る。二人の鬼がハルカを殺そうとする間、キリエは人差し指と中指を合わせて頭上から目の前へと降ろした。その作法はどう見ても西洋の魔術師のものではなく、むしろこの国に育まれた陰陽師のそれ。

今やキリエの背後には薄く白いレイヤーのような羽が浮かんでおり、それには梵字と思しき文様が刻まれていた。それは宙に固定された魔術刻印——既にキリエの体には、アインツベルン謹製の刻印が体中に刻まれていて他の刻印を刻む場所はない。否、陰陽道の刻印——全く別系統の魔術刻印はキリエの体に決してなじまない。

キリエの父である陰陽師の刻印を摘出し、空に固定してキリエに使用できるようにしたものがこのレイヤーだった。

「示現真意、真姿影現、式神扶翼、五方布陣」

本来、キリエは聖杯であり「魔術」であれば理論を飛ばして結果そのものを導き出すことができる。だが、いま行おうとしているものは魔術ではない。それゆえに彼女もそれなりに手順を踏まねばならない。

「東方青帝、南方赤帝、西方白帝、北方黒帝、中央黄帝、北斗三台、天文五星、妖魔封結」

離れて真正面にあるランサーを縛る木が激しく揺れている。あと何秒持つかわからないが、それでもキリエは冷静に呪文を紡ぐ。ぬばたまの黒髪が風にあおられて舞い上がる。

「死者現世、亡者可語」

ここに詠唱は成った。キリエは合わせた人差し指と中指で五芒星を切った。

「現出雷精!!」  
げんしゆうらいせい

雷鳴。空気が焦げるような臭いが溢れ、耳を聳する轟音が木々と地面をも揺らす。閃光は術者のキリエの視界さえも一瞬奪うほどの眩さで、この山の夜を昼となした。必殺の雷撃は過たずランサー樹木ごと撃ち貫いた。

「ヤエイズモ アマツキザハシ オギマツル ヨセマツル——」

締めくくりの詠唱を追い、キリエは自分の視界が回復するよりも先に、まだランサーが息絶えていないことを知った。だがこれを食らって、無傷なはずはない。

その時、意識とは裏腹にキリエの体は斜めに傾いだ。

（——おさげ宝具が切れたのかしら。まだ瓶の中には余って）

ポケットに入れていた小瓶には、まだ酒の余りがあつた。キリエは急いでポケットを探したが、その前に彼女の上から影が落ちた。目の前には、紅い水干をどす黒い血に染めた子供姿の鬼。そして突き付けられていたのは、黒く鈍い光を放つ近代兵器。

口を開く動作はそのままに、ハルカは今までとは全く違った声音でささやいた。

「——宝石って、高いのよ?」

貴方は誰、と言う言葉を放つ前にキリエの意識は激痛と共に無くなった。

\*

「ランサー、大丈夫ですか」

「ああ。いやはや、かなり堪えたが……」

ランサーをしばりつけていた針金はただの針金に戻り、木は叩きつけられた雷によって真つ黒に焦げて跡形もなくなっていた。

周囲の木々数本もその有様で、あたりには焦げ臭い匂いと熱気が残っている。

ランサーはぶるぶると頭を振ると、手にした愛槍を一度振り回して気を入れた。彼の体はあちらこちらと煤けた跡があるが、よく見れば傷に至っていないことがわかる。

「少ししびれているが、じきに取れるだろう。しかし儂に魔術は効かないはずだが」

「陰陽道は魔術ではなく呪術に近く、いうなれば物理現象ですから。私こそ教えるのが遅れました」

ランサーのスキル「無傷の誉れ」。生前戦場で一度も傷を負わなかった逸話から得たスキル。キリエの今の雷撃をサーヴァントの攻撃に置き換えればBランク相当であり、かなり強力だったが、このスキルはBランク以下の攻撃を無効化する。キリエの雷撃でもノーダメージ同然で済んだのはのスキルのおかげである。

「……しかし、キリエは儂のスキルのことは知っていたはずだが」  
「彼女から冷静否判断力を奪いましたから」

「……魔術師と戦ったことなど儂はないからなあ。それよりも、ハルカ」

ランサーの視線は斜め下に落ちた。そこには、黒焦げになった二体の鬼の姿があった。ランサーは呪術によって拘束されたときに、熊童子と金童子がハルカに襲い掛かっていたのを見ていたのだ。まずい、と思ったが、ハルカは身体強化の魔術でなんとかいなしていた。それよりも驚いたのは、鬼に止めを刺した宝石の威力である。

ランサー目から見ても、少なくともBランク相当の破壊力を有するものであった。

「お前、強いのだなあ！」

「褒め言葉として受け取りますが、個人的には大失敗です。彼らは蘇るのに、そんなもの相手に五年モノの宝石をぶちまけてしまいました」

「そうなのか。それはともかく、ハルカ」

ハルカの右腕には、抱えられたキリエスフィールの姿があった。ぴくりとも動かず、体のあちこちからは未だに出血が続き、純白のワンピースは見るも無残なありさまになっている。ハルカは今までその存在を忘れたいたかのようにああ、と軽く声を漏らし、何事かを唱えた。

「仮死状態みたいなのですが、生きていますよ。彼女は連れて帰りますから——殺しません」

幾つもの戦を潜り抜けた女武者が相手なら、ランサーは遠慮なく愛槍を振るえた。だが一時的に驚異的な身体能力を得ていたとはいえ、動きから素人であることが丸わかりであったキリエスフィールを槍で真つ二つにすることは、躊躇いがあった。

それでも、殺すのは致し方ないと、ランサーとて承知している。だからこそその言葉に、ランサーは意表をつかれた。彼女は幼くとも敵マスター。たとえ令呪を奪おうとも、キリエとマスターの契約が切れたわけではない。

その体が生きて魔力の尽きぬ限り、マスターには魔力が供給される。

「術者が瀕死状態ですから、もうアインツベルンからはほとんど魔力は通っていきません。それにアインツベルンを殺そうと、マスターが魔力切れに陥ることはありませんし依代の不在で消滅することもありません。すでにマスターの依代はこの娘というよりは、この山そのもの——驚異的な陣地作成のなせる業です」

ランサーは息を呑んだ。その表情から察して、ハルカは説明を加えた。

「あなたとアーチャーにより多くの魔力を注ぐために、アインツベルンはマスターとの契約のラインを分割し、この山へと分けたので

しよう。もしかしたら契約ラインを全てこの山へと移し替えることさえ考えていたかもしれませんが、令呪の行使を可能とするために、自分にもラインを残す必要があったのでしよう。しかしけれどそれはサーヴァントの結びつきを弱めることに他なりません」

あの神父から聞き及んでいるのか彼自身による考察か、それとも両方か。冷静に状況を分析するハルカに気おされ、ランサーはじつと己がマスターを見つめた。

「それにあの宝具たる酒を持たせている。アレを飲めば大抵の怪我は治るでしょう——キャスターはマスターの危機に最も鈍感なサーヴァントでしょうね」

ハルカは最後にそう結び、ランサーに背を向けた。

「そういうわけなので、キャスターはまだ健在です。そして、そのキャスターはセイバーと戦っています。私たちの目的は、キャスターの打倒です」

ここまで言えば、お前のすべきことはわかるだろうと言わんばかりのハルカの態度。だが、それによってランサーが槍を握る力がみなぎる。聖杯戦争の初日、教会で僅かに刃を交えただけでその力を知ったあのセイバーと、共に戦うのだ。

「応！その使命、しかと果たそう！」

「待ちなさい。その前に」

逸るランサーに対し、ハルカは静止をかける。そして右手で黒焦げとなったもの——熊童子と金童子の死骸を指示した。

「これを粉みじんにしてから行きなさい。どうせ生き返るでしょうが、少しでも遅い方がいいですから」

12月5日⑫ 勝利こそ全て

冴え冴えとした月。風に吹かれて早くも流れていく雲。靄に包まれたこの山に、剣戟の音が鳴り響いている。ハルカの視界に映っていないだけで、セイバーとキャスターの戦いは今も続いている。そして、ランサーもその戦いに加わっている筈だ。

ハルカの右腕には、鉛玉に撃ち抜かれた少女がいる。か細いがいまだ息はある。数メートル離れた場所には、肉片となった熊童子たちの死体が撒かれている。蘇る眷属たちから逃れるために、ハルカはキリエを抱えたまま、身を翻そうとした時のことだった。

見知った気配——いや、彼にとつてはのつぴきならぬ相手が姿を現した。

「エーデルフェルトッ！」

振り返ればブラウスを血まみれにさせているセイバーのマスター——碓氷明が険しい表情でハルカを呼びとめていた。足を負傷しており、歩き方がおぼつかない、むしろよく歩けると感心するほどの姿だが、おおよそキャスターの眷属の相手をしていたのだろうとハルカは検討をつけていた。そして笑みを押し隠し、慇懃に挨拶をする。

「おや、どうしたのですかミス碓「何しに来た!!」

姿とは裏腹に、鋭い声がハルカを止めた。

「何とは、私は私のサーヴァントを取り戻しに来ただけですよ」

「ランサーを奪われるとき、抵抗しなかったって聞いたんだけど！」

「あの時は気が動転しまして……落ち着いてから、やはりランサーを取り戻さなければならぬと。そこであなたたちが乗り込む隙をついて……心霊魔術、得意なんですよ」

こんな真つ赤なうそを信じる者はいない。ハルカも特に信じてもらう必要を感じていなかった。腕に移った六面の令呪を見せると、明は息を呑んだ。

それでも彼女は気丈にも、弱さを感じさせない態度と声で言った。

「……見たところ令呪は奪ったみたいじゃない。じゃあ、その子おいてよ」

「それはできませんね。貴方だつてご存知でしょう？アインツベルンの「聖杯」」

御雄神父から冬木の聖杯戦争の概要を聞いている明は、ハルカの言葉を解していた。セイバーの様子を確かめに必死に山を登ってきたものの、彼女の傷は浅くない。明はハルカを発見したとしても、おとなしく隠れていた方が体を思えば最適解なのだ。

されど、最初から今一つ信用しきれなかった相手——その上、神父からリタイアしたと伝えられた者を見て、黙っていられなかった。そして、その神父もいったい何をしているのか。

「それにしても、ずいぶんとややこしい状態になってしまったものです。今貴方に手を出したくとも、キャスターを倒さないことにはここから出られない——キャスターを倒すには、本来あなたのセイバーが適役なのですから」

キャスターの、アトゴウラにも似た結界。このままキャスター側が勝てば、このハルカも殺される。キリエがぐったりとしているのに、駆けつけてこないキャスターには納得がいかないが、まだセイバーとキャスターは激闘を繰り広げている。陣地の恩恵か、明にはそれくらいしか心当たりがない。

「貴方のことは殺しませんし、生きていてほしいのです。私のことは於いても、あなたはキャスターを倒す必要があります。ここはお互い会わなかったことにでもしておきましょう」

「何を勝手な、というか、あなた、ランサーは」

明はハルカの発言の意味が全く分からない。何故彼が明に生きていてほしいのか。ランサーを取り返しに来たと言ったが、そのランサーは。神父は。血が足りなくて頭が回っていないのか、考えがまとまらない。先程までは戦闘で動き回り、冬とはいえ熱いくらいだったのだが、今や悪寒が全身を包んでいる。

それでも鍛えた明の体は、別なる死の気配を鋭敏に感じ取った。

「女、命はいただくぞー！」

「茨木——!!」

血に染まった神主服を身に纏った茨木童子。キャスターが居る限

り蘇る彼は、日本刀を振るい再び明を襲うべく迫っている。明は急いで身体強化をかけ、さらに影によつて無理やりにも動かすを試みる。

「s<sup>調</sup> t<sup>整</sup> ……ッ!!」

現在の明にできる全速力での魔術行使だったが、茨木童子の方が僅かに速かった。横に薙がれたその刃は、彼女の胴を両断するべく走る

——が、明も茨木童子も同時に激しい爆風に煽られた。

「E<sup>灰</sup> i<sup>は</sup> n<sup>灰</sup> K<sup>に</sup> r<sup>に</sup> p<sup>に</sup> e<sup>に</sup> r、i<sup>塵</sup> s<sup>は</sup> t<sup>は</sup> e<sup>に</sup> i<sup>に</sup> n<sup>塵</sup> K<sup>に</sup> r<sup>に</sup> p<sup>に</sup> e<sup>に</sup> r——!」

「エーデルツ……!」

エーデルフェルト伝統の宝石魔術。そのとつておきであろう宝石が放たれ、激しい爆風と熱量を巻き起こしたのだ。鋭い刃はその暴風によつて明の胴を断つどころか斬ることも能わなかった。明を救うため——にしては彼女も吹き飛ばされているのだから荒っぽいにもほどがあり、一歩間違えれば明も死ぬ。が、ハルカが直接助けるのは間に合わず、明は確実に真つ二つにされていたらう。

しかし明は今の衝撃と熱に十メートル以上吹き飛ばされ、受け身を取る間もなく地面に叩き付けられて倒れた。ハルカからは背中しか見えないが、全く動かない。今の爆風によつて背中が焼けて爛れている。

「——お前、何者だ」

日本刀を携えた茨木童子は、流石に大きなけがもなく爆風の熱残るその場に立っていた。既に倒れて動かない明はいつでも殺せると踏んだのか、眷属は目の前の優男を敵と認識している。何しろ、その腕には首領の主人——キリエが抱えられているのだ。

「これは失礼。ハルカ・エーデルフェルトと申します」

その丁寧さは、この山に置いては限りなく浮いていた。ランサー強奪の際には留守番をしていた茨木童子は、この男がランサーのマスターだと知る由はない。

それでも、眷属は目の前の優男が掛け値なしに敵であることを了解していた。



\*

「マスター!!」

セイバーはか細くなった因果線をたどり、己の主人の居場所を探る。まるで切り開かれたようになった山の広場は、倒された木や割れた岩で覆われている。それでも明が立っていればすぐに見つかるが、眺めたところその姿はない。

もしかしなくても瀕死で倒れているのか——そうセイバーが思った時、明ではないが一人の男の姿——月光に照らされた流れるような金髪の優男——ランサーのマスターと、殺したはずの茨木童子が対峙していた。ハルカから十メートルほど右に投げ捨てられたように、ぴくりとも動かないキャスターのマスターが倒れている。

そしてその近くに、服を土に汚して倒れている自分のマスターの姿があった。死んだように動かず、服が燃やされたように背が剥きだしにさらされ、赤く爛れている。

「マスター!!」

因果線はまだ繋がっている。頼りなくか細いが、確かにある。僅かなつながりを頼りに、セイバーは主の元へ走った。

明は地面に倒れ、腹を抱えて丸くなっていった。火傷は遠目から見たより重傷で、血も滲み出していた。同時に左足は野犬でも食われたかのように肉が見えていた。いつの間になんかことになったのか、セイバーには全くわからない。

無我夢中で意識だけでも戻すべく体を揺すって見たり顔を叩いたりして見るが、うめき声を上げるだけで意識が戻らない。

其の時、ころりと何か石のようなものと瓶詰の液体が投げられた。月光を受けて深い赤に輝く石は宝石であるが、液体の方は何だかわからない。投げたのはランサーのマスター、ハルカ・エーデルフェルト。何故か生きている茨木童子と対峙し、セイバーの方を向かずに彼は口を開く。

「使ってください。この場で魔力はあってもありあまることはないでしょうし、彼女は自分で傷を治すしかないのでしょうか？それは魔力の塊ですから、飲ませてください。瓶の方は気付け薬です。とりあえず意識は戻るでしょう」

「どういうつもりだ。——そしてお前、何故生きている」

セイバーの目は、宝石と、対峙するハルカと茨木童子を往ったり来たりする。ハルカの投げてよこした宝石が真実良い物か、セイバーには判断がつかない。そもそも、なぜこの男が当然のようにこの場にいるのか、セイバーは全く知らないのだ。

ハルカは戦闘用に用意した宝石を指の間にはさみ持ち、いつでも茨木童子と戦える体勢に入っている。

「信じるかどうかはあなたの勝手ですが——茨木童子たちは、キャスターの収集した膨大な魔力と陣地によって、キャスターが消えるまで何度でも蘇ります。令呪は私が奪いましたが、あのキャスターは既に山そのものを依代とし、同時に魔術回路として魔力を精製して得ています」

それを聞き、セイバーはようやく合点がいった。星熊童子虎熊童子茨木童子とも、全てセイバーが一度は殺している。だが、再び蘇った彼らが明を襲ったのだろう。

「キャスターは魔力を自給自足し、すでに一人で現界することさえ可能です。しかし、契約のラインを薄めているがゆえにマスターの異変を感知するのが遅れています」

状況を語るハルカの言葉も、セイバーには全ては入っていない。必要な部分だけは冷静に認識していたが、それだけ。明は人ならざる者との戦いを余儀なくされた時、何故セイバーを呼ばなかったのか。「セイバーにはキャスターとランサーと戦ってもらわないと」と彼女は言っていたが、マスターが死んではどうしようもないと知っている筈だ。だが、細かく考えている時間はなかった。

ランサーのマスターは人の身で茨木童子と戦いを始めた。意を決してセイバーは明の口に宝石をねじ込んで飲み込ませようとした。しかし意識のないものに呑み込ませるのは難しく、うまくいかない。

セイバーは宝石、そして気付け薬を自分の口に含んでから、そのまま明に口づけて無理に流し込んだ。

どれくらい経っただろうか。おそらく数秒なのだろうが、セイバーには永遠にも思えた。突如明がせき込み始めて、落ち着いた末にうつすらと目を開いた。

「……ううお、は、え、な、何……」

「明！大丈夫か！」

「……お腹痛い」

言葉こそいつもの明だが、力がなく、セイバーを目に映しているかどうかとも怪しい。あーあ、と何でもないことのように血まみれになった体と手を見下ろしている。

「……っ、何故俺を呼ばなかった！」

「？……呼ぶほどじゃなかったから？」

先ほどより近くにキャスターとランサーの剣戟の音を聞く。キャスターはセイバーをも殺そうとしているのだから、セイバーの気配のある方に向かおうとするのは当然である。その状況であるのに、セイバーに音は妙に遠く聞こえた。

——この満身創痍の状態でさえセイバーを呼ばないのならば、いったいどのくらいの危機に陥れば明は助けを求めのだろうか。

セイバーは頭を振った。今やハルカと茨木童子が戦闘を開始しており、その至近距離に明を置いておくわけにはいかない。

セイバーは彼女を抱えると、木々の後ろに隠すように寝かせた。そして神剣を取り出し、ついさきほどまでしていたように明の体の中に封ずる。足や背中で流れる血は止まり、少し血色がよくなるが、直るわけではない。

明は訝しげに、傍らに膝をつくセイバーを見上げた。

「……何してんの？」

「剣を入れれば悪化はしなくなる」

「でも直らない、し。……セイバーが使いなよ」

明は自分の意思で神剣を体から抜き出した。そしてその柄をセイ

バーに向けて返そうとしたが、セイバーは受け取らない。明は顔を歪めながら、再び剣を突き返した。

「なんで使おうとしないの……」

しかしセイバーの方こそ、何故明がそのようなことを言うのかわからない。

剣を体に入れた状態で負った傷は回復させることができる。だが、剣をいれていない時に傷を負い、その後に剣をいれたところで悪化は止めるが治癒まではできない。

だが今の彼女の状態を見るに、悪化を止めるだけでもかなりの意味がある。この状態を目の当たりにせずとも、セイバーには伝わる魔力の乱れと減少で状態の悪さは歴然としているのだ。

「俺にマスターの傷を治すことはできない。ならばせめてこれを入れておけ」

セイバーは剣を明の体に戻そうとするが、やはり明は拒む。

「……じゃあ、セイバーは、どうするのさ」

「このまま戦う——撤退も視野に入れる」

「……は？……剣なしで、あれと？山から魔力を作っている、あれを？」

神剣を体から出した為、止まっと思ったと思っただけ血が再び流れ出す。明は腹を潰すように抑えながら一言一言、はつきりと放つ。

「キャスターが、山から、魔力を作るのを、止めるには、……基点を壊していくしか、ない」

「知っている」

「それに、キャ、スターは山を、依代に、してるって、だから、山、を壊さ、ないと」

「わかってる」

「そ、それは、対城道具、をもつ、セイバーにしか、できない、でしょ？私が、持っても、しょうが、ないよ？一度、引くのも、それ、無理って、言った、でしょ？」

まるで幼子に聞かせるような言い方だと、セイバーは思った。それに撤退と言っても、この山には既にキャスターの結界内であり、キャ

スターに探知された者はキャスターを倒さねば出られない。

セイバーはそれも承知で「引くことも考慮に入れる」と言った。今や易々とあの宝具を使うわけにはいかなかったのだ。

「……あの宝具は俺にも操りきれぬものではない。すべて俺の貯蔵魔力で賄いたくても、マスターの魔力がなければ」

人間の思惑が一切介入しない神造兵装である剣は、もともとは神霊が行使するためにある真正正銘の神剣である。セイバーは神霊ではないため、その神剣を完全にコントロールすることができない。一度解放すれば、剣は荒れ狂うままに周囲を破壊し、担い手の魔力を貪る。既にぼろぼろの明に、それを強いるのは無茶だとセイバーはわかる。

それでも、それを全て承知で、明は普段と全く変わる様子もなく、まるでコンビニに行くセイバーを送るかのような軽さで言う。

「……まあ、だろうね。わかってる、から、早く、いきなよ」

「……………死ぬかもしれないと言っている!!」

セイバーからすれば、物わがりの悪いのは明の方だった。マスターを死にさらしてまでお呑気に宝具を使うなどセイバーには考えられなかった。

そもそも、いま明がこんなに怪我をしているのも、茨木童子を斬り伏せた後にマスターを放置した己のせい——セイバーが無理に神剣を返そうとした時、いきなり頬を殴られた。痛くはないが、訳が分からずセイバーは呆けてしまった。

明は血だらけの手でセイバーの襟をを掴んで振じる。そして青白い顔で、息以上に荒く言葉を、血を吐くように紡ぐ。

「だから、何？私が、死ぬかもしれないから、何？、あなたは、何のため、ここに居るの？……全部の、サーヴァントを、倒すのが、目的、って言った。あれは、嘘？」

「嘘ではない!!」

セイバーは殆ど反射的に言い返した。その言葉に、明は満足げに笑う。

「……剣は、敵を、倒すもの。なら、倒しなさい、セイバー。マスターの、せいで、宝具が使えないから、負けたとか、言い訳だよ」

近い剣戟が遠く聞こえた。清かな月光と、身を震わせる寒気。

その中に青い匂いと、鉄の生臭い匂いが立ち込めている。セイバーは一度だけ、眼を閉じた。

暫しの沈黙のあと、彼は静かに神剣を受け取った。手から剣が離れたことを知り、明は目を閉じた。

「……大丈夫。私、結構、なんか、生き汚い、んだから……」

その言葉を聞き届け、セイバーはゆつくりと立ち上がり、明に背を向けた。

そして槍の英霊と魔術師の英霊が鎬を削る戦場に、剣の英霊はその真価を顕現す。

12月5日⑬ 全て呑み込みし氾濫の神劍

——走水の海には、神が棲む。

「貴方はこんなところで足止めくらっちゃだめですよ。御役目果たさないといけないんですから」

——神の生み出した空想具現の異界から抜け出すためには、術者<sup>かみ</sup>を殺すか、

「大丈夫ですよ。だって貴方は、この国で最も強いんですから——日本武尊」

——その身を賭して、世界を斬るか。

死刑宣告にも等しい、難局続きの東征。その過酷な旅に同行を願った、一人の奇妙な妻がいた。

彼女が何を思い旅についてきたのか、そして最後に何を思い身を投げたのかはわからない。

今はもう、永遠に。

だから彼女が最後に何を思ったのかは、届いた言葉から考えるしかなかった。

「だって貴方は、この国で最も強いんですから」——

ああ、なるほど——つまり、お前は、俺に日本武尊に「最強」を望んでいるのか。

そしてきつと、それ望んでいたのは妻だけではない。東征の旅で道半ばにして倒れて行った少ない仲間たちも、日本武尊という「最強」を信じて、絶望的な東征の旅についてきてくれたのだ。

死んでもこいと言われたに等しい、あの旅に。己さえいなければ、そのような苦難とは無縁に生きてであろう彼らは、それでも共に旅路へついてくれたのだ。

彼らには望む旅路ではなかったとしても、あの旅は間違いなく己のあるべき場所であったのだ。故郷にはいられなかつたが、それでもキャスターに「自分の居場所はあつた」と告げたことは虚勢でも見栄

でもない。

だからこそ。

その命を散らした者達がそう望むなら。かの女が身命を賭してまで強く望むなら。

「俺は確かにそうあろう。未来永劫、この国で『日本武尊』になる」  
そうして己は剣を取る。いかなる状況、いかなる敵が相手でも関係ない。

東征で誰が死のうと、自分は神の加護の元に生き残ってしまったのだ。

ならば、彼らが残した夢は、自分が叶えなければならぬ。

負けてはならない。

負けることは許されない。

負けることはあつてはならない。

負けることは認めてはならない。

勝利しなければ先はなく、其れ以外に道はない。

たとえこの力が原因で、愛した故郷から追われていたのだとしても。

東征から全員で帰る夢が、潰えても。

己の矮小な希望が、全て打ち砕かれたとしても。

それでも自分の愛した人々が、己に「最強」をユメみるのならば、この身は「最強」を謳わなければならない。

「喜べ。お前たちの願いは叶う」

人の気持ちなど知らぬ。

人の助け方など知らぬ。

人の救い方など知らぬ。

人の導き方など知らぬ。

知っているのは殺し方、ただそれだけ。

それ以外には何も無いが、戦うことしか能がないならそれで結構。  
元よりこの身は日本武尊。この国で最も強き者。



「俺は」

——クマソを殺した、異郷の宴の夜。あの時、一体自分は何を願ひ、何を思つて、「最強になる」と誓つたのか。

もう忘れた。忘れてしまふくらいだから、きっと、取るに足らぬことだったのだろう。

だが、最初を忘れてしまつても、今でもこの一点せうききょうだけは誰にも譲らない。

それを叶えるまでには、死ぬわけにはいかない。

「お前たちの望む俺であろう!!」

\*

空気が燃える。キャスターの拳によつて燃え上がる木々の炎が周囲に燃え移り、焼け野原の如き様相になりつつある。冬は空気が乾燥しており、このまま戦い続ければ山火事にもなりかねない。

俊敏さを生かすランサーが、周囲の木々や巨石をもともせず破壊しながら槍を振るう。力任せに真正面からではなく、背後死角を取るべく目にも映らぬ速さで地を駆ける。しかしパラメータランクが軒並みAを越しているキャスターの速さもランサーに劣らず、巨体もなんら動きを鈍らせることなく紙一重で槍を避ける。それどころか、背後を取つたランサーが槍を突出すのに合わせ、槍を見切つてクロスカウターの如くすれすれに巖の如き拳を繰り出す——!

ランサーはその驚異の挙動に気付いたものの、既に己が槍は鬼の心臓目がけて放っている。自分の力を信じる彼は、その槍を止めず、だがやはり肉を貫くべく軌道を微調整し走らせる。

「むん!!」

己の力を信じるは、キャスターも同様。烈槍は槍兵の思惑が如く、

胴を衝くが心臓ではなかった——リーチ差で槍が先に刺さるが、キャストは気にもかけずに剛腕をランサーを叩きつける。

「——ッ!!」

拳がぶつかる瞬間、その速さと質量による風圧と衝撃波が発生して同時に襲い掛かる。ランサーはその拳を受けて、体が傾き地を転がる。だが無様に滑るわけでもなく、素早く体勢を整えなおし軽やかに起き上がる。

そして驚くべきは、それだけの拳を受けて槍兵に傷一つ負っていないことだ。だが、その姿を未だ此処に在りと見せ付けつつも、ランサーは内心苦衷していた。

(とんでもない英霊だのオ。このままではじり貧だ)

ランサーの鎧『黒糸威胴丸具足』は、マスターの魔力を追加することにより——魔力消費が増えることを意味するが——スキル「無傷の誉れ」を強化する働きをする。スキルだけではBランクまでの物理攻撃の無効化だが、魔力を得ることでAランクまでの攻撃を無効にできる。セイバーの魔力放出が魔力消費によつて攻撃力を上げるスキルならば、こちらは魔力消費で耐久を引き上げる礼装である。

それによりキャストの猛攻を受けながら、彼は傷一つ負っていない。しかし、傷を負っていないのはキャストも同様なのだ。否、ランサーは数度キャストを傷つけることに成功している。だがキャストは膨大な魔力任せに傷をすぐに回復させてしまう。

ハルカの魔力の続く限り、ランサーは斃れない。だがそれが無くなった時、ランサーは傷を負う。そして悪いことに、ランサーが一度負った傷は、時を置いても回復しない。

「——流石傷つかぬか。東にお前ありと言われただけはあ、槍兵よ!!」

「——傷を負うようでは、この儂も終わりだからなあ!!」

互角に見えても長い目で見れば、この戦いはランサーに不利。それは当人も承知している。しかしかたに不利であっても、この状況そのものはランサーの願ってやまなかつたもの。

間を置かず再び迫りくるキャストを見て、ランサーは切り開かれ

た場所へと地を蹴って着地する。幸いにも、ランサーの宝具は発動に時間を要すものではない。

ハルカの言によれば、キャスターを相手取るとはこの山そのものと戦うことと同義である。それでも、キャスターそのものを殺すことをあきらめるランサーではない。

己が槍に渾身の魔力を凝縮させる。生前のランサーが振るった天下三名槍の一。穂先に留まっただけの蜻蛉が真つ二つになって息絶えた逸話をもつその槍は、いかな英雄にも迎撃を許さぬ武の結晶。この烈槍の前にあつては、全てが致命傷となる。

大いなる魔力の気配を感じ、キャスターも空気を変える。しかしこの大江山において、鬼の総大将が揺らぐことはない。

「――殺せるなら殺してみよ、神の加護なき侍よ――!!」

「――御首頂戴致す!!」

戦国において最強を謳う武将と常に共にあつた、その名槍の銘は――

「絶てぬもの無き蜻蛉切!!」

白光は迸り、流星の如き鮮烈さを伴い、槍は赤銅の鬼へと突き抜ける。その槍は対象を掠めたのみ――たとえそれが服であれ髪の本一本であれ――であつても、「掠めた」事実を「急所にあたつた」という事実書き換える。

つまり、宝具を発動したランサーの前にあつて敵は全身が心臓となつたも同じ。その槍を前にして、いかな英雄も迎撃を許されない。己が武器でその槍を受け止めることは、槍が「当たる」ことと同義であるからだ。

助かるにはただ一つ、完全なる回避を成し遂げること――それは、図抜けた戦人としての技量か直感か、因果を歪めるほどの強運があつてなお成功するかどうか。

「!!」

そして、彼の槍は間違いなく鬼の胸を違わず貫いたのだ。赤銅の体に黒い穴が空き、覗けば向こう側の景色が見えるであろう死の穴。

キヤスターはその巨体をぐらつかせ、そのまま後方へと斃れる——はずだった。

「……何?」

ランサーの驚愕も当然、キヤスターはその場で踏みとどまり、斃れない。胸に空いた黒々とした穴は確かにある——しかし、その部分だけみちみちと肉が盛り上がり、穴を埋めてしまったのだ。

「——仮に頼光共のような、神威を帯びていればまた話は違ったかもしれないぞ、戦国最強よ」

「——キヤスター、お前、よもやそこまで、この山となつたか」

ランサーの宝具は、確かにキヤスターの霊核を砕いた。それでもキヤスターが立つは、砕かれた霊核を膨大な魔力で再構成したという、至極簡単な話である。本来砕かれた霊核の修復は、三画消費ならまだしも、通常令呪でも追いつかないほどの業である。

——この山において、キヤスターは不死身に至ったのか。キリエが絶対にキヤスターは負けないと信じたのは、この状態となるのをひたすら待っていたが為。ランサーがそれでも戦意を奮い立たせようとした時、背後から涼やかな声が聞こえた。

「死なぬサーヴァントは存在しない」

「……セイバー!」

先程いきなり姿を消したセイバーは、森の奥から姿を現した。その手にあるのは常に見る白銀に輝く両刃の剣ではなく、黒く曲りくねった蛇行剣。それは透き通った水のような青銅に縁どられ、月の光を受けて煌めいている。

ランサーはどうしたと声をかけようとしたが、セイバーは顔を向けることなく淡々と告げた。

「最早貴様が倒すべきはあの鬼ではなく、この山そのものなのだ」

「セイバー」

「いかな陣地といえど、ここはまだ完全なる「異界」ではない。とすれば壊すことはできる」

セイバーの声は普段と変わりないが、どこか据わっているようにランサーは感じた。セイバーが怒る姿を見たことのないランサーだが、

今セイバーは怒っている。それは、目の前のキャスターに対してか。訝しげなランサーに対し、セイバーは軽く吐き捨てた。

「……本多忠勝。お前の宝具は一对一の勝負には強いが、あのキャスター相手には相性が悪いようだな」

五十数の戦場を駆け抜け、なおその体に傷一つ負うことのなかった不朽の武将の名は、徳川四天王が一、本多忠勝<sup>ほんただただかつ</sup>。そして彼と共に名をはせた天下の名槍、蜻蛉切。彼の槍は間違うことなく、確実にキャスターの心臓を抉る力を持っている。だが、それでもキャスターは生きている――。

「わざわざ出向いてくるとは酔狂だな、セイバー。お前のマスターはまだ生きているか」

「おかげさまでな」

「また私の四天王が殺しに行くが、放っておいていいのか？」

セイバーはその問いには答えない。そして傍らのランサーにだけ聞こえる程度の音量で何事か囁くと、顔を上げて巨大な鬼を直視した。

「――俺は誓っていてな、何があろうと全てのサーヴァントを倒すと」

その言葉と同時に、ランサーは再度槍を構えて地を蹴った。ランサーはセイバーの宝具を具体的に知らず、それはキャスターも同じである。だが、伝説を鑑みればあの草薙剣以上のモノを持っているも何ら不思議はなく、キャスターはそれを最も警戒してきたのだ。

なるほど、確かにここは敵地にして死地である。この陣地において、己の槍が通じないことを、ランサーは先程の一撃にて知った。悔しくないことはありえない。

そしてここにおいて、ランサーがセイバーを助ける義理も貸し借りも存在しない。

だが、主であるハルカに「セイバーに加勢し」と命を受けた。それにもまして、ランサーは戦いを求める。

現界して初めて出会った高名な英霊と、正々堂々尋常な勝負をしたいと願っている。

ゆえにランサーはその槍をキャスターへと向ける。「二十秒、稼げ」

と頼まれたのならば請け負うことに否はない。

生前となんら変わらぬ、策謀が渦巻き流血迸る戦場において、誰も謀らなかつた鬼をも殺すのだ。

ランサーの全力を振り絞るほどに槍は鋭さを増して、キャスターの腕を貫く。しかしキャスターの傷は膨大な魔力の為に治癒してしまふ。セイバーの狙いを知つたキャスターはランサーよりもセイバーを殺すべく走る。だが一度請け負つた以上、ランサーはその進撃を渾身の力を以て阻む。

眼前に激しく火花を、鮮血を、魔力を散らすランサーとキャスターを見ながら、セイバーは己が剣を見た。

その剣の柄は、ぐるぐると乱雑に白い包帯のような布がまかれてゐる。それを外して、右手で柄を持ちその上から再度布で縛り上げてから左手で握る。

「アーチャーとかいう面倒な輩がいなければ、これほど手こずることはなかつたのだが——ランサー、うまく避ける」

その声は届いたか否か。いや、仮に槍兵に届いておらずとも、かの高名な英霊は避けられるに違いないと、セイバーは確信している。ここに準備は整つた。明の位置は遠くセイバーの背後にあり、巻き込む恐れはない。

——敵は倒し、殺す。それこそが我が使命。

時は満ちた。かの東征の皇子は、全身に渾身の力を込めてその神剣を振り上げた。清水を思い起こさせるような、清浄たる魔力が凝縮し集約されていく。

透明に煌めくかの剣は、時さえも止めるよう。

「——八雲立つ出雲八重垣、其は暴風の神よ——」

——遠く遠く、世界が神のものであつた時代。素戔嗚命なる神は、その鳴き声で山を枯らし海を干上がらせたという。そして氾濫する河川の化身でもある八岐大蛇の尾から出でた剣は、とりもなおさず氾濫——豊穰と旱魃、天候さえも操る神剣となつた。時を経て剣は素戔嗚命から姉の天照大神に献上され、倭姫命の手を通じて日本武尊に託

された。

日本武尊により振るわれ荒ぶる神々を斬り伏せ、東国を平らげた剣。それは人の思惑が全く介在せぬままに、神々の為の武器として鍛え上げられた神造兵装。それ故に人と神の間にある日本武尊にさえ制御しきれぬほどの神秘を秘めた、真正正銘の神剣。

「荒れ狂えよ天空。吹きすさべよ神風。迸れよ激流——以て此処に朝敵討ち果たさん」

かつて、国なるものによつて振るわれた剣の英霊は、悠久の時を超えて再びその名を轟かす。

其は——

「あまのむら全て呑み込みし氾濫の神剣——!!」

蒼い稲妻が轟き、激流が吼える。燃えるような水が爆ぜる。セイバーそのものの焰によつて溶岩の様に燃え上がる圧倒的な水流が迸る。それはセイバーが剣を振るつた先より全てを破壊しつくす。

されどその水流はあくまで余波でしかない——神剣より解き放たれた力は、青みを帯びた巨大な光の刃となり、キャスターを消し去るべく地を砕く如く駆け抜ける。夜を昼と帰るほどの極光が、神剣の矛先を向けられたキャスターを貫かんと欲している。

溢れ出た爆流は岩を砕き木々をなぎ倒し土を抉り土石流と化しながら、この山そのものを削りとる。想像以上に広範囲に影響を及ぼす宝具であったため、光の刃には巻き込まれずとも、ランサーも爆流に捲き込まれる。

一直線に向かう神の光刃からは避けられぬ。そう思った時——キャスターはかすかに声を聞いた。彼を呼んではいけない——幻聴かと思う一方、その声はあまりにも悲痛に満ちていた。

「今度は、俺の番だろうが!!お頭——ッ」

12月5日⑭ 稀代の陰陽師

目の前には、四角い黒い箱がある。上面には貯金箱のように細長い穴が開いており、下面にも同様の穴がある。大きさは自分の背丈よりも大きいようで、手のひらよりも小さい気もする。

否、この箱の大きさには意味がなく、また箱と評しているのも自分のイメージに過ぎない。

重要なのは中身であり、中身を直視したらきつと死ぬ。自分が自分ではなくなる。

それを防ぐため「箱」というフィルターをかけて中身を直視しないようにしているだけだ。

この黒い箱ブラックボックスの上面にある穴から情報を入れると、下面の穴からそれに対応した望んだ情報が吐き出される。

そう、今でなくとも一成は無意識にそれを行ってしまっていたのだ。

確氷の地下室で、古びた箱と写真という入力から視えた「過去」。ホテルの廊下の景色という入力から視えた「過去」、そして先程アーチャーとその心象風景という入力から視えた「予測された未来」。

この「箱」の中身は何なのか。決して覗いてはならず、覗こうにも今の一成では決して敵わないもの。視えた「過去」「未来」は、全てこのブラックボックスから吐き出された欠片に過ぎない——ならば、この中身は、陰陽師の言葉で言えば。

全ての始まりであり終わりである、陰陽五行。

ならばそれは易々と一成ごときが触れていいものではない。アーチャーに殺される前に、その魔術を使えば、それに自滅するかもしれない。

だが、このアーチャーの世界において何もしなければそれでも死ぬ。

だとすれば、選ぶ方は決まっている。

自分が未だこの戦いに身を投じているのは、あのアーチャーバカを叩きのめす為なのだから——!!



\*

「——何故、立っておる」

アーチャーは一成の遙か上空——寝殿造の母屋の屋根からつぶやく。宝具『約束された栄華の月』——アーチャー・藤原道長の心象風景を具現化した固有結界。

この世界で起きることは、並外れた幸運値による因果の逆転、さらに過程の省略。アーチャーがこの世界で「こうあれ」と言霊にした物はまずその通りの結果をもたらす。そして単なる因果の逆転であるならば、その結果をもたらす「経過」をこなさねばならないが、ここでアーチャーに限ってそれは不要である。つまり、アーチャーが口にした言葉はすなわち事実となる。

今のように「この矢、当たれ」と言えば、まず矢が当たる。因果の逆転なら「道長が弓を放つ動作」も必要とされるが、経過の省略によりそれは不要となる。

それに従えば——一成は、矢を受けて地面に倒れていなければならないのだ。

そして、今貴族の邸宅の広大な庭に立つ一成は見事に立っていた。その右腕に矢が刺さっていたが、腕ゆえに一成はまだ戦うことができる。

其の時、一成はやつと矢が刺さったことに気づいて呻いた。

「——ッ!!」

「このくらいなら抜くぞー！我慢しろよー！」

「うああー！」

刺さった痛みと、それが引抜かれる痛みは同時。アサシンによって抜かれた矢は地面に転がり、一成は腕を抑えた。

「——って、アサシン？何で生きてんだお前」

「気づくのが遅せえよ!!なんでってお前が令呪を使ったからだろう

が」

一成の右の甲を見ると、確かに令呪が残り一画になっている。はつとアサシンが倒れていた場所をみると、そこには数十本の矢が刺さった丸太があるだけだ。忍者でもあるアサシンが、令呪の補佐で使用した変わり身の技だった。

「つーても令呪がなけりやマジで死んでたと思うけどな。あの補助がなけりや、あんな高速で身代わりなんてできねーや」

「あいつの宝具……幸運EX……！」

「ここは私の世界。私の思い通りになるのは当然であろう——しかし、一成、そなた何をした」

すっかり様変わりしたこの世界。桜が咲き誇り、満月の浮かぶ黒い空。温かい夜の春風も、今や少しの慰めにもならない。屋根の上に立ったまま、アーチャーは優雅に扇を口に当てて隠しているが、その視線がこの上なく厳しい。

しかし、一成はアーチャーに答えない。彼にも説明できず、これからアーチャーを打ち破る打開策があるわけでもないのだ。

——唯一の望みは、固有結界なら持つて数分。

固有結界は魔力の量が十分であろうと長持ちしない。現実には、ありえない幻想の世界を許容しない。現実を侵食する魔術は世界からの修正力を受けて崩壊する。

答えぬ一成を見て、アーチャーは時間が限られているもあり其れ以上問うことはなかった。

——このままでは再び「言拳」が来る。何か手は、何か手はないか——一成は必死で彼らの交戦に目を向け、凝らした。

「——！！」

目の前を走る閃光。青光りのような光の後に、一成の知らない映像が目に入り脳へと伝わる。右から左、下から上に縦横無尽に襲い掛かる光景はどれもこれも——アサシンと自分の死を示していた。

体中を射抜かれて死ぬ。

刀でなます切りにされて死ぬ。

外傷はないが何かしらの傷を受けて死ぬ。

だが視界の端に、一成は妙なものをとらえた。

「……キリエ」

見てて気持ちのいい映像ではない。それどころか信じたくない未来の映像。——しかしこの映像が正しければ、この世界は思う以上に早く終焉を迎える。だがそれでも自分たちは危険にさらされる。

手は、あるのかもしれない。黒い箱が視える。だがあれを使うには、ふさわしい入力が必要ならば手が付けられない。

今一成の視覚や聴覚等の五感を入力として、「黒い箱」から最も可能性の高い未来をはじき出している。自分の望む未来を測定しているわけではなく、それはやり方だつてわからない。

このままではやられる。だがどうすればいい。アーチャーを倒しうるだけの力を「眼」で「箱」にアクセスして引き出すためには、引き出す為のキーが必要だ。

こんな力、これまでつゆほども知らなかった一成がするにはわかりやすく直接的な入力でなければ、アーチャーに能う出力は得られない。

しかし、その思考をすつとばして一成はすでに実行してしまっていることに気付かない。絶対に死ぬわけにはいかないと強く思う彼は、複雑な思考を置いてその神秘に手をかけていたのだ。

ゆえに、一成は思考によつて、今やつと気づくことができた。土御門家。千年を数える魔導を紡ぐ一族、その血脈の末が土御門このからだ一成である。

この体は遠く落ちたとはいえ千年の昔、魑魅魍魎が跋扈する魔の都において、名を馳せた稀代の陰陽師の血肉。

——出来損ないが、千年前の陰陽の術理を使うのだ。

迷う時間はない。一成は、この戦いで負けるわけにはいかないのだ。次の瞬間、彼は顔を上げてアサシンの腕を掴んでいた。それと同時に、アーチャーの口が動いた。

「アサシン……とにかく俺の言うとおりにしてくれ!!」

「ハ？」

「——この矢、中れ!!」

「アサシン右に五歩! 急急、如律令!!」

一成は勢い任せにアサシンを連れたまま、前方斜め左へと跳んだ。それと同時にいつもの詠唱を唱え切る。防壁を張るのかと思いきや、何も展開されない。普通の防壁を張ろうと、あの宝具は結果を呼び寄せるモノであり、避けることは不可能なのだ。

一成とアーチャーの言葉は同時、もしくは一成がやや早いか。全く意味がわかっていないアサシンは、とにかく一成の言うがままに身を護る。

ガラスが砕けるような甲高い音が響き渡った。十数本の矢はアサシンの体に突き刺さり、彼は苦悶の声を上げ——なかった。

「……? どういうことだ?」

アサシンの体に矢は刺さっている。だが、心臓を貫くわけではなく一成に刺さったのと同じように腕や足で致命傷ではない。アサシンは一成とアーチャーを交互に見た。

しかし、動揺はアーチャーも同じであった。

「——二度あることは、偶然ではない——」

結果を先取る矢がしくじることはいえぬ。この世界でアーチャーをから逃れうる者がいるとすれば、相手もアーチャー同様の強力な幸運値を持っているか、固有世界を斬る力を持つか、もしくは。

「——それはあるまい! もう一度——この矢、」

「アサシン、もう十歩後ろに下がれ! 急急、如律令——!!」

再び叫びが交錯し、アサシンはわけのわからないまま一成のいうがままに行動する。一成は斜め後方という全くわけのわからない場所に目を向け、詠唱を成す。そして再び同様に、アーチャーの矢によって碎かれる。そしてやはり矢が刺さるとはいえ、急所ではない。

アーチャーの疑念は確信へと変わる。

「そなたが莫大な幸運を持つのはあり得ぬ。この世界はあるのだから世界を斬るわけでもない——ならば、同じく因果を操作しておるのか

!？」

「方違えは、お前にも馴染み深いだろ——!!」

陰陽道において、方忌みという概念がある。向かう方角の吉凶を占い、その方角に大將軍・太白神・天一神・金神の蟠踞する方角を凶方とみなすことである。その凶方に進むことを方位を犯すというのが、例えば金神の方角は方位を犯せば七人の死者が出るとされる。

方違えとは、方忌みの方向へ向かわねばならないときに、一度余所へ移動・滞在してから目的地が凶方にならないような位置から出発することを言う。

さらに陰陽道の術技においては、『幸運な方位』を利用して結界を構築する・あえて凶方の力を用いて呪詛となす用法がある。

一成が今行っているのは前者の結界構築である。ただ通常の結界とは異なるため、目に見える形をとっていない。わずか数歩の異動で方角を変えたとみなさせ『幸運な方位』へと変換し、短期的に因果律へと干渉する結界。

それにより、一成とアサシンはアーチャーの死の言霊をぎりぎり回避しえている。一成は攻撃する気はない。とにかく時間を稼ぎ、この固有結界をしのぎ切ることを考えている。

「あり得ぬ」

アーチャーの驚愕は道理である。因果律に干渉する魔術・呪術は存在し使い手も存在する。だが、未熟である一成の相手は人間を超えたサーヴァントであり、かつその必殺の武器と言える宝具による因果干渉である。

それが因果を捻じ曲げる強さと、現代の未熟な魔術師が因果を曲げる強さ。どちらが押し勝つかなど、火を見るより明らかであるの——未熟な陰陽師の結界は確かにアーチャーの言霊と渡り合って防御の体を成していたのだ。

そしてアーチャーは、かつてのマスターの手並に別人を幻視する。己が表の朝廷を統べる貴族の頂点であったとすれば、裏から京の都を守護する陰陽の守護者。

「おい、よくわかんねーけど、お前それ大丈夫なのかよ!？」

奇しくもアサシンの懸念と、アーチャーの疑念は同時であり内容も同じだった。詳細はわからないまでも、一成が通常以上の力を発揮していることくらいはアサシンにもわかる。無茶は後で絶対につけがくる。

「ああ！平気だ！今なら世界だってひっくり返せそうな気がするぜー  
—!!—

魔術師は回路を回して回して、回し続ければ奇跡にも手が届く。たとえ術者の体がどうなろうとも。

一成の既に体は悲鳴を上げ始めている。肉は確かに千年の魔導を受け継ぐモノであつても、その術技のレベルは常に使うものとは天と地ほどの開きがあり、魔力の消費も尋常ではなかった。体を巡る高レベルの術技は血液を沸騰させ正常な思考を失っていく。それでも術の冴えだけは鈍らず、一成は笑った。

と、その時、ほとんど意識を刈り取ろうとするかのような一撃が首に落ちた。回避の指示に従うだけで余裕のあつたアサシンの一撃だった。

「何が世界をひっくり返すだ！アホか！すっかりしやがれ！」

「……っつー！」

我に返った一成は、勢いよくアーチャーの向こう側、中天にかかる月を見上げた。体は燃えるように熱く、すでに手足の末端がしびれていることによく気が付いた。それでも一成は、術の行使をやめず、かつ小さくつぶやいた。

「っつてーな……けど、多分、あと少しなんだ」

「お前、いったいどういうこつた」

再度アサシンが問いただそうとした、その時——このアーチャーの世界に変化が起きた。

月の照り輝く美しい夜に亀裂が入る。桜が舞い散り、芳醇な香りが人を酔わせていた夜が歪む。怪訝な顔をしていたものの、まだ余裕を持っていたアーチャーの顔が、初めて焦燥に染まる。言霊は途切れ

た。

「なつ、まさか姫……!!」

満月の夜が崩壊する。浩々と輝く白い月が天から落ちて、馥郁たる香りは雪崩れ込む瘴気でかき消されていく。肌を刺すような風が吹きすさび、ガラスが砕けるのに似た音と共に、どういうわけかはわからないまま、この世の春は終わりを告げた。

あまりにも急な世界の終わりは、ある状況の変化を示唆する。単独行動のスキルを持つアーチャーと云えど、宝具の行使にはマスターのバックアップが必要になる。そのうえ固有結界と言う大魔術は、それそのものが魔力を大幅に使う。

つまり、——マスターであるキリエの身に、何がしかの異変が起きている。

「隙あり!!」

アーチャーの動揺をよそに、固有結界から解放されたアサシンは襜袍から十丁の火縄銃を引き出す。

一瞬にて発砲準備を整えた其れを一齐にアーチャーに向け、放つ。虚をつかれたアーチャーは避けきれずにそれを食らった。耳を聳するごとくの爆音を響かせ、火薬の匂いが漂う。アサシンは鉞を取り出して、一成を抱えたままアーチャーに迫る——!

だが、一成は何かの異変を感じた。地面が揺れている。今の視界を入力として少しだけ先を覗き見るやいなや、彼はアサシンを止めるべく叫んだ。

「アサシン、アーチャーはいい!できるだけ高いところへ、」

しかし、その声はアサシンの耳へ入り、その通りの行動をさせるには少しだけ遅かった。

アーチャーの宝具が破れ、キャスターの作り上げた禍々しい魔力が満ち満ちるはずだが、それとはまた違うもの。みしみしと地面が唸っている。なにか山そのものが蠕動しているような感じ。

キャスターのクラススキル、障地作成により生前の根城——大江山と化したこの山は豊かな霊脈を吸い上げ、山が回路となり魔力を生み出しキャスターに供給している。今や山自体が魔術回路と化してい

ることを、アーチャーは知って居る。

しかし、一成のいう意味を彼は知らなかった。

「アサシン、逃げるんだ!!早く!!これセイバーの宝具だ!!」

その時、山の上から爆発音が轟いた。同時に地が跳ねた。それに顔を上げたサーヴァントたちが見たものは——圧倒的神威とともに迫りくる荒れ狂う龍の如き、熱湯の激流だった。

山に津波。月光を覆い隠すほど黒々とした壁のごとき龍が雪崩を打つ。一成もこの激流に捲き込まれたら命はない。

ありえない光景と、そのあまりの突然さに、アーチャーも回避行動をとれずにその激流に捲き込まれる。両者を巻き込み水でありながら、あらゆるものを干上がらせうる熱量を持った濁流が山を破壊しつくしていく。

どれだけ押し流されたか、どれだけ神威に焼かれたか。アサシンの意識も、アーチャーの意識も、そして一成の意識も激流に飲まれていく。



12月5日⑮ 幸運と幸福

(こやつ、本気で裏切ったわけではないようだろう。まあそもそも裏切るといふよりは、あのマスターも諦めていたようだから違うが)

アーチャーがランサーに対する違和感を抱いたのは、ハルカの陣地を強襲した次の夜だった。物好きなキャスターはアーチャーまで引きつれ、セイバーのマスターのところへ酒宴に向かった、その後の話である。

やれやれとキリエの邸に戻ったが、其の時はアーチャーもキャスターに毒されていたのかもしれない。ソファに腰かけていたランサーに、なぜ「主人を見限った」と尋ねたのだ。そこでランサーは「己のマスターが、共に戦うに足るに値しないから愛想を尽かした」と言っていた。

アーチャーは武士の心に詳しくない。アーチャーの生きた時代にも武士はいたが、それらはアーチャーに仕える者でありランサーの時代とは質を異にする。

それでもランサーの伝説は、聖杯から与えられた予備知識でアーチャーも知っている。

幼少から死の床に就くまで、ただ一人の主に仕え続けた古今無双の槍使い。

——それが、我々に強襲を受けて宝具の一つも解放せずに降参するものなのだろうか？たとえマスターに抗う気力がなくとも、それに発破をかけて相手取ろうとするのがこのランサーという男ではないのか？

それに、ランサーを迎えてキャスター陣営が行おうとしていることは、三騎のサーヴァント対一騎のサーヴァントの戦いである。尋常な勝負を望むランサーが、この陣営に喜んで参加するものかと、アーチャーは怪しんでいた。

昼間は特段することもないこの陣営は、その時は比較的自由に行動していた。アーチャーはそれとなくランサーに近づき、言葉を交わし

た。流石にランサーはハルカ——かつての主人を裏切っていないとは言わなかったが、悟った顔つきで告げた。

「やはり生前のくせと言うか、業は抜けぬものだな」と。

もつと余裕があれば、アーチャーはランサーの思惑を探り切れたかもしれないなかった。

冬木の聖杯戦争は短ければ一週間、長くても一か月で決着がついていた。仮に聖杯戦争がより長期間の戦争であれば、アーチャーはランサーの心も状態も読み切ったであろう。だが、その時間はなかった。アーチャーにとって聖杯戦争なるものは、あまりに刹那の決着に過ぎたのである。

\*

確か今宵は師走の夜であったはず——そう自らに確認せずにはいられぬほど、この山は蒸し暑さに満ち満ちていた。神威の濁流は冷たい水ではなく、蒸発直前の熱湯であった。それにのまれたアーチャーは、這う這うの体で体を起こした。身に纏う衣冠束帯は破れ果て、腰の飾太刀も鞘がいつの間にか消え、持っていた抜き身の刀だけが残っている。不作法ながらそれをそのまま腰に差し直す。

(姫は、死んだのか……いや……)

宝具が思ったより早く破れた原因は、マスターであるキリエからの魔力供給が途切れたからだ。彼女の生死はわからない。ランサーのことを思い出したが、令呪はキリエの手にあるはずだ。

キリエはいつでもアーチャー、ランサー、キャスターを呼び戻せたはずだ。誰がどのようにキリエを攻撃しえたのか、アーチャーには察しきれない。

しかし、今の天災の如き現象が何によるものかは推測がついていない。山ごと破壊しうる何かを遠慮なく振った主は、こちら側の陣営の

ものではない。そしてアサシンは目の前にいた——となれば、これはセイバーの宝具——おそらくは水神の尾から出たと言う剣。

(だが、手負いだったとはいえここまで威力とはもう……)

アーチャーは弓を杖代わりにして立ち上がる。マスターからの魔力がなくとも単独行動スキルのお蔭で現界を保っているが、宝具の解放はもちろん、派手な戦いはできない。

顔を上げると、三十メートル先の岩の上にアサシンが伸びていた。アーチャーの言霊で放たれた矢が体中につきささったまま、恐らく気絶している。

やはりあちらも相応の傷を負っているが、霊核を破壊されるには至っていない。アーチャーは飾太刀——生前は儀礼用の剣だった、攻撃力の低い剣——を手に持ち、暗殺者の息の根を止めるべくぬかるんだ地を踏む。

アーチャーそのものは決して殺生を好む質ではない。寧ろ忌み嫌う側の人間だ。だが、聖杯に願いたいことがあるからこそ弓の英霊はその手に刃を持っている。

「めちやめちや腹減ってる、みてーな顔してんじやねーよ」

まるで宙からこぼれた様に現れたのは、かつてのアーチャーのマスター・土御門一成だった。アーチャーと共に夜を駆けた、神主服の上にコートという出で立ちは変わらない。左腕が不自然に鋼鉄のきらめきを見せていることと、その黒く真っ直ぐな目が蒼く輝いていること以外は。

一成は片手に黄金の太刀を引っ提げて、すつくとぬかるんだ地面に立っている。アサシンの盗品であろうそれは、一等等な刀であり、かつ現代から数えれば少なくとも五百年は前の品である。モノは、時を経ることそのもので神秘を宿す。

アーチャーがぼろぼろなのはセイバーの宝具の余波を食らい、かつマスターからの魔力供給がないせいだ。一方アサシンも満身創痕なのは一成を守って、セイバーの宝具で一時的に大打撃を負ったせいである。

目の前の未熟な陰陽師はやはり未熟なままだ。己が使っているモノがどんなものか、おそらくはアーチャーの方が分かっている。

（そういえば、清明は竜宮に訪れたこともあったと言うておつたな――）

アーチャーの言挙を完全に防ぐまでは至らずとも、アサシンを致命傷から護れたこと。一成は『方違え』の魔術を応用し、幸運の方位にて狭い結界を構築し、短期的に因果律に干渉した。つまりはアーチャーの「殺す」結果と一成の「無事である」結果の、因果のつぶし合い。

そして、アサシンに「セイバーの宝具から逃れる為、高いところへ逃げろ」と伝えられたこと。「未来」を知らねば、あれほど早い指示を飛ばすことは不可能である。

その眼は、かつての部下であり稀代の陰陽師が所持していた力と同じもの。

その陰陽師でさえ完全には使いこなし切れなかった異能。アーチャーがまだ一成のサーヴァントだった時分には、彼はこの力を持っていなかった。

ならば、その力が起きたのは理由は。

アーチャーは考えることを止めて、改めてかつてのマスターを見た。

（……本当に何も変わっておらんなあ）

アーチャーと共にいたときから今まで、一成は変わっていない。自分の身を顧みない無鉄砲さも、危険を恐れないところも、その視線のまっすぐなことも。

「アーチャー、聞きたいことが二つある。お前は、何故俺を裏切った？」

一成は残った素の右手で持った黄金の太刀をアーチャーに突き付けている。

アーチャーは肩をすくめて笑った。

「左様なことを聞きに聖杯戦争に参加し続けたのかのう。酔狂な奴よ」

「悪いか」

「いや、そなたらしい。ただ、そなたが思った以上に酔狂であっただけよ。理由は、……ま、そなたの魔術師としての力に不安があった。それだけよ」

この期に及んでアーチャーは嘘をついた。しかし始まりは間違いなくそうだったのだ。踏み切るまでには様々の要因が重なったが、もし明やキリエがマスターだったら裏切るなどの選択肢を選ばなかったかもしれないのも、確かである。

「本当にそれだけか？」

アーチャーの心を見越したように、一成はさらに問うた。アーチャーは自嘲する。

「案外敏いではないか」

「俺を裏切るにしても、お前は心の贅肉だらけだったからな」

ふとアーチャーは空を見上げた。

桜も満月も消え失せた空。ひとひら、季節外れの花びらが舞い落ちた。

「……何故かな、そなたと居るのが苦痛になってきた、ということがあろう」

「……？俺が嫌いになったってことか？」

「其れは違うぞ。個人としては、むしろ好ましい部類じゃ」

一成は要領を得ることができなかったが、問題を仕切りなおした。「じゃあ、二つ目だ。お前の願いは、まだ幸せとは何かを問うことか？」

一成を裏切り、根本として殺生を好まないかの貴族をここまで駆り立てた願い。

アーチャー自身とて、ばかばかしいことを願っているとわかっているのだ。彼は嗤う。

「そなたもなーほとほとしつこい奴だのう」

「うるせーよ。つーか答えるよ。なんだそのアホみたいな願い」

アーチャーは、元より一成に理解ができるとは思っていない。

いや、一成に限らず理解できる人間の方が少ないであろう。

「そなたには話したろう？ 幸運と幸福は違うことを。確かに私は幸運であつたろうさ。だがな、幸福ではない。手に入るものが増えれば増えるほど、手に入らないことが苦しくなるのよ。満たされればされるほど、失うことは恐ろしい。それでもその状態を失つて、死んですべてなくなることが恐ろしい」

——そして、そんなことばかり考えて生きることは、幸福か？

世の人々にその栄華と繁栄と幸運を称えられた生前のアーチャーは、確かに人々の思うとおり「幸運」だったのであろう。

だが、その反面アーチャーはずっと一人、壁に向かい返つてこない問いを投げ続けていた。

真に幸せであるとは、どのようなことか——。

「栄華を極めることと、幸福であることは違うのよ」

静かに月光の降る中、沈黙が満ちる。だが一成は静謐な空気をぶち壊しにする素っ頓狂な声を上げた。殆ど悲鳴に近い。もし彼がハリセンを持っていたら、それでアーチャーの脳天を叩いていたことだろう。

「どんだけアホなんだてめー！ーはあ!!何だ!?英霊つてのはみんなそんなアホな願いばっかもってんのか!？」

「アホとなほとほと失敬な奴よのう。元々理解されようなど思つておらぬわ」

一成は何から言えはいいかわからないという様子で頭を捻っている。アーチャーと一成が共にあつたころ、このように頭を抱えるのは主にアーチャーの方であつたはずだ。

しかし一成は意を決したようにアーチャーをまっすぐ見る。

「……お前は興味がねーかもしれねーけど、俺は言いたいから言うぞ。俺がここまでお前を追っかけてきたのは、今言ったことを聞きたかったってのもある。だけど、裏切ろうと何だろうと、お前は俺のサーヴァントだ。俺が呼び出したモノは、俺が始末をつける。そのクソつまんねえ願ひ、俺が摘む！」

「よく言うたものよな！今度は腕だけでは済まさぬと言うたはずじゃ」

口では強いことを言ったものの、一成とて今通常の状態にない。手に握る太刀の感覚だけが鮮やかで、此処は熱いのか寒いのか、今の足場は平なのか坂の上に立っているのかもわからない。

アーチャーとてスキルの単独行動のおかげで、かろうじて戦闘ができる状態だ。

人間対サーヴァント。まともな状態なら勝てる要素が一つもない。イレギュラーなくしてサーヴァントが人間に負ける道理はない。そして今、一成は間違いなくイレギュラーの側にいる。

——それでも、そういった話の次元を超えて、一成は絶対にアーチャーに負けれないと思ったのだ。

「——」

本当は、自分の力だけでアーチャーと対峙したかった。一対一で向き合ってすべてを解消したかった。唐突に降ってわいたような、千年前の術技に頼りたくはなかった。

その時一成が思い出したのは、何故かセイバーだった。セイバーは「手段を択ばない」のだが、少しニュアンスが違うのではないかと、一成は思う。「手段を択ばない」のではなく、むしろ「なりふりをかまっていない」と表現するほうがふさわしいと思う。

そもそも、此処まで一人では絶対に来れなかった。明に助けられ、アサシンに助けられ、そうしてここまでたどり着いた。自分の力だけでここに残っていたわけではない。

それを思うと一成の迷いは消えた。手段を選ぶような、上等な身

分ではない。

そして二人はむせ返るような熱気の中、静寂をもって対峙している。

何が切っ掛けか、動き出すは同時。

「この矢、中れ！」

アーチャーが距離を取り矢を番える。宝具展開中は矢をつがえる必要性はなかったが、今や違う。だが、腐ってもサーヴァントの矢——取りこぼすはずはない。一成が右手を前に突き出して、言霊を紡いだ。

「燃えよ」  
ほむすび

その一言だけで、神秘は成った。凝集した山の瘴気——魔力そのものが発火してアーチャーの放った矢を迎撃して焼き捨てた。消し炭となった矢が、空中で分解して消える。

今の魔術は、おそらく魔術回路を通して行ったものではない。大気に充満する魔力に直接働きかけてなされている。かつ、一成は人を害するための術は行使できなかったはずである。

アーチャーは驚愕したが、同時に納得もしていた。今の一成は、生前の知り合いによく似ている。固有結界で見たあの幻視は、決して幻ではなかったのだ。

あくまで一成の技量自体は半人前である。その分際で大陰陽師の術を駆使しようというのなら、その後に関ってくるつけは考えるまでもない。本人もただで済むはずがないと、流星に知っていよう。

——そうまでして殺すか。

ならば、弓兵も当然のごとく、それに応じるまで。

「この矢、中れ！」

「燃えよ!!」  
ほむすび

アーチャーは光線のように矢を射かける。だがそれらをすべて見切って、一工程で発動した魔術——呪術は矢を焼き捨てていく。

セイバーの宝具による大規模破壊によって開けてしまった山は、木々に遮られることのないためアーチャーにとっては有利だ。アー



チャーは奔る。速さで翻弄し、素早く、そして死角からその体を射ぬくのだ。そもそも、一成は先ほどから一步も動いていない為に的としては当てやすい。

正確には動いていない、のではなく動くほど余裕がないのだろうが。

しかし、今や一成は後ろに目でもついているかのようにアーチャーを捉えている。

いかづちのたまふり  
「雷撃」

手が伸ばされる。先程の炎のような防衛の為の魔術ではなく、明確な攻撃の意志を持ったもの。バチ、と何かがはじけて収束する。アーチャーはとつさに弓を射るよりも回避を優先し、その場を退いた。

刹那、耳と目を聳する雷撃が縦に空を貫いた。空気が焦げて、転がっていた大樹が丸焼けになつて崩壊する。

煙り上がる煙越しにアーチャーは、言霊を乗せて矢を番える。純粋に速さではアーチャーの方が上なのだから、攻撃を続ければ一成が反撃できる余地はない。防ぐだけだ。

其の時、一成の蒼い目と視線が交わった。そして一成は身を翻して、その足をアーチャーへと踏み出す。強化の魔術をかけている——どれだけ強さでかけているのか——地面を蹴ってアーチャーへと愚直へ突進する。

「中れ」

ほむすび  
「燃えよ!!」

連撃として放たれる矢。まだ距離がある。よって、放った矢は術によつて焼き落とされた。

「中れ中れ」

しかし、近くなればなるほど矢は回避しにくくなる。認識し魔術を発動させるまでの時間に射抜かれて死ぬのだ。

「中れ中れ中れ中れ中れ中れ中れ中れ中れ中れ中れ中れ中れ中れ!!」

「急急如律令!!」

懐の呪符と共に叩きつけられる術は、アーチャーの世界で披露されたものと同じ。幸福な方位を利用し、短期的に因果律に干渉する結

界。アーチャーの世界でないがゆえに、此度は一成にかすり傷一つついていない。

元マスターが迫り、右手には黄金の太刀が煌めいている。こうなればアーチャーも腰元の刀を抜く。鈍ではあるが、刀は刀。二刀が月光を照り返して閃き、交錯する。袈裟がけに断ち切ろうとしたアーチャーの刀は、力で押し勝ち一成を斬った——だがそれは、鈍く輝く彼の義手を破壊したにすぎない。すうと息を呑み、一成は一息にさらに踏み込んだ。

——きつと最初から勝敗は決まっていたのだ。

アーチャーが再び構えなおすよりも早く、黄金の太刀が再度、閃いた。

\*

(……姫は一体どうなったのかのう)

あの人を疑わないマスターはどうしているだろうか。人を疑わないのはそのサーヴァントも同じだったのだが。しかし、すべてはもう済んだこと。

すでに命運は決まっていたのだろうと、アーチャーは胸に突きささった剣を、他人事のように眺めて思う。

目の前にはかつてアーチャー自身が裏切ったマスターの姿がある。裏切ったサーヴァントをその手で仕留められて喜ぶ、という感情とは無縁の顔が目の前にあった。

既に戦意の失せたアーチャーは不思議と清々しい気持ちでかつてのマスターを見上げた。ふと、二週間近く前——博物館にて、召喚をされた時のことを思った。

「……何故、そなたは私が幸せになれぬと思うた？」

一成は目を逸らさない。己が始めたことだから、そのすべてを直視する。

その眼は、数分先のアーチャーの運命を識っていた。

「聖杯に「幸せって何か」って聞いても意味がない。人それぞれで違うし、絶対の答なんかねーし、それに、たとえ聖杯が答えたってお前は納得なんかしない」

「何故、そう思う？」

「お前は「満足する」ってことを忘れてるからだ」

アーチャーはその答えに苦笑した。

ああ、知っていたのだ。

ああ、その通りだろうと思ったのだ。

人からその幸運を称えられ、羨まれて、妬まれて、同時代の他の人間よりも遥かに多くを手に入れたが故に、手に入らないものに悩まされ「満たされること」に餓えてしまった憐れな——そして、どこまでも人間。

果ては人間として当然の死や別れまで厭い、辛いことなど何一つない——ありえない「幸福」を求めた、人間としての運命を否定したかった男。

だから、苦難の運命でも、人々から「哀れで不幸」と思われていても、強く生きていこうとする人間が羨ましかった。

「——そなたな、私が生前に知っていた男とよく似ているのじゃ。あれは無駄に頑丈にできている男でな、本当に腹立たしい奴であった」  
一成は不思議そうな顔をしている。それも当然、とアーチャーは笑う。アーチャーは一成に対し色々な話をしたが、ついぞ生前の甥の話をしたことはなかったからだ。

終わりを迎える魔導の家の跡継ぎで、己の才能の乏しさを認めながら戦いに赴く姿。己の家の真実を知っても、人を死なせまいと戦い続ける意義を見つけていく姿。

己を裏切ったサーヴァントを問いただすべく、片腕を奪った相手に

相対する今。無鉄砲や思慮が浅いなど、一成に欠点は数多いが——それでもその精神は、アーチャーがかつて羨んだ者の姿によく似ていた。

——僅かでも「尊し」と思ったものを、アーチャーが殺せるはずも無かったのだ。

裏切ることを決めた要因は、一成の魔術師としての未熟さと状況だった。しかし、もしかしたら、この土御門一成というマスターを厭っていたのではないかと、今わの場でアーチャーは思う。

真の幸せとは何か——その願いを根本から揺るがしかねないことを、一成はあつさりというのではないかと。其れを恐れていたから、アーチャーは一成を厭うたのだ。

奇しくも本能的ともいえるその予感当たっていたわけだ。

「そなたの申すことが真ならば、私は決して幸せになれんわけだのう」  
「……だな」

足元から織物がほどけるように己が消えていくのが、アーチャーにもわかった。もう聖杯を得ることができないのならば、目の前のマスターに答えてもらおうとアーチャーは口を開いた。

「ならそなたが聖杯に代わって答えよ。幸せとはなんだ？」

「はあ?? いやそんなの自分で考えろ……っつか自分で考えてたらこんなひでーことなったのか……俺は……飯がうまいとか、百円拾ったとか、友達と遊んでるときとか？」

「……安い男だのオ……」

思わず素直な感想が出てしまった。予想通り、一成が顔を赤くして怒った。

「……ッ、だからお前は欲ボケだっつたんだ!! 普通の奴は幸運⇨幸せくらいにしか思わねっつの!!」

家族と団らんを過ごしたこと、綺麗な景色を見れたこと——そのような些細なことを幸せと思え。死も、別れも当然人である以上訪れる

ものとして受け入れる。

完璧な全き幸福など——無い物強請りでしかない。完璧とは程遠い人生を受け入れる。

その中に少しでも心温まるものがあれば、それはきつと何にも代えがたい尊いことだ。

「全く、この世の栄華を極めた男に難しいことを申す奴よ……目の前に何でも願いが叶う、なんてもものを出されたら願いたくもなろう。きつと私は答えなど知っていたのだろうが、ゴネたくなつたのじやな、きつと」

「ゴネたあ!? お前のゴネで左腕ぶつとんだ俺はどうすりやいいんだ!! っていうかお前は俺に謝るべきだろ!!」

一成は憤懣遣る方ない様子でいい、さらに視線で自分の亡くなってしまった左腕を示す。裏切ったことに対して謝罪などないのか、と訴えている。

もう下半身が消えてしまったアーチャーは、どこ吹く風、いつもの飄々とした風に答える。

「最初から恨まれると思ってやった故、謝ることなどない。謝るくらいなら最初からせぬわ。一生恨むも憎むも好きにせよ」

「この……」だが、消える前にそなたに伝えておきたいことがある」  
金糸がほどけていくように儂く存在を消しながら、アーチャーは最後に再び、己が弓を手に取った。放たれる矢はないままに、しかしアーチャーは虚空に矢を放った。

弦の震えが波紋を投げかけるように広がると、不思議と戦いの疲れが軽くなったように一成は思った。

鳴弦の儀——平安の時代にありて、魔を払う儀式。自分勝手なサーヴァントはちよいちよいと一成を手招きした。恐る恐る近づいた一成の両目を、アーチャーは自分の手で覆った。

「千里天眼通と、清明は申しておったか。本来、そなたにその眼はいらぬ。過去を糧として未来を足で歩みたがるそなたには」

「——!?千里天眼通!?それは、んなわけあるか」

一成もその力については知っている。何しろ、清明直系の土御門家においておよそ十代に一度生まれるかどうかの「体質」である。しかし、今まで一成にその片鱗も何一つなかった。生まれてこの方、ずっと。

「……んなわけあるのじゃ。終わった後に確氷の姫にでも相談せよ。そのまま放っておくと、死ぬぞ」

アーチャーは物騒なことをつぶやいてから、一成の目から手を離れた。それからいつものように、裏切る前のように呆れて笑った。そして姿を薄くしながら、静かに目を閉じた。

「——そうさな——バーサーカーを倒した時」

思い残すことはなく、散々わがまま放題に現世を闊歩したかつての貴族の頂点。

そういえば、藤原道長は父兼家の五男坊で末っ子であり、一成は何だかんだで長男坊である。

長男が末っ子の面倒を見るのは、現代ではよくあること——一成は思い切り苦い顔をしてアーチャーを睨んだが、アーチャーは答ええずむしろ笑む。

「そなたを殺さなかった時点で、私はそなたには負けていたのじゃ」

そうして、弓の英霊——藤原道長は現世から消滅した。

今しがたまで、平安貴族がいた場所には、かろうじてかの英霊が流した血がしみ込んでいるだけだった。一成は月下、その刀に付いた血を眺めた。

「裏切るつもりのマスターに小うるさく説教するサーヴァントも、そうそういねえと思うけどな……」

この山に突入して上っていた時、セイバーは「アーチャーにやる気を感じない」と言っていた。

彼は聖杯を得ると言う目的の観点からそう評したのだが、其れとは全く異なる、否、より根本的なところでアーチャーはやる気がなかったのだ。

本当に一成のことがどうでもよければ、バーサーカー戦後の時に腕だけ持っていくなど温いことをせず、殺せばよかったのだ。アーチャーの固有結界において、アサシンを狙ったときは「この矢、当たれ。そして死ぬ」と言拳だった。だが一成に対しては「この矢、当たれ」、そして失敗した時に漏れた言葉は「なぜ立っている」——。事実アーチャーが一成を殺すチャンスはいくらでもあった。それにもかかわらず、一成は生きている——それが全てだ。

一度懐に入れたものを冷たく扱い続けることはできないアーチャーは、おそらく自分が一成に残したことを気づいてはいない。あのサーヴァントは、基本的には自分の事でいっぱいだったのだから。

と、その時一成の頭に大きな手が置かれた。泥まみれで破れ果てた着物を纏ったアサシンが、おぼつかない足取りで傍にいた。アーチャーとの戦闘で、アサシンのいた場所から離れてしまっていたが、目を覚ましたアサシンが探しに来てくれたのだろう。いつから見えていたのかはわからないが、大体のやり取りは把握しているようだ。

「一成、浸っているとこわりいが、まだ戦いは終わっちゃいねえぜ」  
「アサシン」

暗殺者の英霊は、一成を労いながらも気を引き締めることを促した。その通り、アーチャーは消滅したが、まだキャスターが控えている。

先ほどセイバーの宝具が解放されたところを見ると、あちらも決着がついたと思えるのだが——一成は自分で自分の頬を叩いた。

「アサシン、お前あとどれくらい行けるか？」

「正直キツいな。アーチャーの宝具世界での弓とセイバーの宝具の余波食ってるからよ……できれば霊体化していたくらいだぜ」

一成を護って宝具を食らったアサシンも、激しい戦闘はできそうにない。

「ともかく……ッ、」

明たちの様子を見に行かないと、という言葉は続かなかった。まるで電池が切れたおもちゃのように、一成はその場に崩れ落ちた。慌てたのはアサシンで、済んでのところで一成を受け止めた。

「おい！どつか怪我してんのか!!」

「……っ、え？あ？どうした？」

「どうしたじゃねーよ！」

アサシンに支えられながら、一成はむしろ何故アサシンが慌てたのかをわかっていない様子である。少しの間をおいてようやく自分が倒れかけたことには気が付いたが、はた目からみた様子は尋常ではない。極度の疲労に侵された人のように、顔色は体は小刻みに震え、そのくせやたらと体温だけは高い。

「……確氷たちの様子を見にいかねーと……悪いけど、あいつんところに行くまではお前の足に頼らせてくれ」

「お前それ、絶対アーチャーの宝具内でやったなにかのせいじゃねーの!?!生憎俺は魔術わかんねーから、あの姉ちゃんたちに後で見てもらえ！」

アサシンは一成を宝具の中に収納すると、自らも魔力を節約するために霊体化してぬかるんだ禿山を駆け昇り始めた。彼らは宝具の水流で山の下へ押し流されてしまったため、セイバーたちの戦いはもつと頂上に近いところで行われているはずだ。

それに宝具が開帳されているのだから、あちらの戦闘も終盤に向かっていているに違いない。

「……頼むぜ……！」

柄にもなく祈りを抱き、アサシンは遥か上の戦場へと駆けた。



12月5日⑩ 大西山決戦・決着

捨て子だった茨木童子は床屋の夫妻に拾われた。そして客の額を剃っている時に誤って傷つけてしまい、その血を舐め病み付きになってしまったことから、本格的に鬼と変化したという。

本当の親はわからない。もしかしたら酒吞童子と同じように、何かの幻想種と人間の混血であったのかもしれない。

彼も一人きりだった。親には気味悪がられ捨てられるのも、正直あまり気にしていないかった。気味悪がるのもわかる。彼自身から見ても、己は他の人間とはあまりにも異質だったのだから。

——ま、しょうがねーか。

特に一人になっても苦しいとは思わなかった。大勢の中にいても、仲間と思える者がいなければ一人なのは変わらない。つまり、特に変化はなかった。

彼の世界が変わったのは、丹波山にて一人の女を見たときだった。見た瞬間に、あれは自分と同じものだとわかった。その気持ちを、彼は死んでも忘れない。

それからは楽しかった。女と共に鬼に限らず各地の魍魎魍魎共に声をかけ、大江山を住処にとつて日夜飲めや歌えの大騒ぎ。食べたいものは食べたいだけ、飲みたいものは飲みたいだけ。

その乱行を据えかねた人間たちにより討伐の憂き目にあった時、彼は一人あの神経を犯す毒酒をあまり飲んでいなかった。人間を疑っていたからではなく、例えばいつもは貪り食う相手であっても、此度は客人として迎えると決めた首領の意をくんだ為だ。

茨木童子もやりたい放題をするが、四天王と首領は輪をかけて酷い。仮にも客人の前なのだから、酒をあおってあまりにも粗相をするなら自分が止める役割だと定めていた。

だから、人間たちが神威を笠にその正体を現した時、毒で身動きをとれない仲間とは違い、彼は逃げる程度の力を有していたのだ。

しかし、彼は逃げようなどと小指の爪赤ほども考えていなかった。仲間たちが傷ついているのを黙って見過ごせず、一人逃げるので

はなく動ける自分が敵を殺そうと思った。たとえ相手が神威の加護を得た、勝ちがたい敵であっても。

だが、結局彼はそうしなかった。考えを変えた理由は、首を切られる我らが首領の姿を見た時だ。彼女は、今まさに自分の命が消え失せようとする其の時、未だ動ける茨木童子に対して、助けを求めなかった。

茨木童子に伝えられたのは、ただ一言。

「逃げろ」と。

己が命絶えようとする時に、自分の身ではなく、この茨木童子を気に掛けた。皆が楽しいと自分も楽しいと、あつけらかんと言う首領は今わの際でも変わらなかつた。

そういうやつだから、他の仲間もついてきたと、彼は知っている。

ゆえに、茨木童子は逃げた。他の仲間が討たれるのを見捨てて、一人で逃げた。例え他の誰から「我が身惜しさに仲間を見捨てた」と思われようが、彼にとつては何よりも大切な仲間の願いを裏切る方こそ重罪であつた。

その願いを聞き届ける為に、例え一人きりに戻ろうと生き残ることを決めた。

だから後悔はしていない。それでも、やはりあの時、共に討たれるべきだったとも考えた。一人生き残ってしまったから、討伐の四天王を一人で殺そうとも思つた。

特に、同じ鬼でありながら詐術を弄した足柄山の鬼は許し難かつた。

それでも、彼は知っていた。誰を殺しても、茨木童子にとつてただ一人の頭であり初めての仲間は二度と帰ってこない。

仮に彼女がいなくとも、鬼たちで寄り集まって騒ぐのはとても楽しい。だから自分が音頭をとって再び魑魅魍魎共をまとめ上げることも考えたが、あまりうまくいく想像ができなかつた。

自分には彼女ほど仲間を引き付ける力はなく、それに「あの酒呑童

子が殺された」という事実は、ある種の見せしめの効果を以て魔性たちに知れ渡っていたからだ。

なに、一人きりには慣れてる。大江山で仲間を糾合する前はずっと一人だったのだから——茨木童子に寂しさはあったが、それでも何とかなるだろうと思っていた。

「二人だどつまらないな」

夢のような時。あの大江山は、まさしく茨木童子にとつての桃源郷。もう二度と手に入らず、失われてしまった理想郷。今はもう、その輝かしい時を胸に収めて生きていくことしかない。

自分がいつどのような理由でこの世から消え失せたのか、あまり覚えていない。多分取るに足らぬ事で命を落としたのだろうが、彼に興味はなかった。

最終的に、茨木童子は。あの大江山を胸に抱き続けて、言い方を変えればそれにとられ続けて——それが無くなってしまったあとも、魂は大江山に残ったまま、一步も前に進めなかったのだ。

「きつと、俺は」

丹波山で、酒呑童子おまえに出会った時に生まれて。

大江山で、酒呑童子おまえが討たれたときに死んでしまったのだ。

彼の愛した総大将は、今の茨木童子を望んで生き残らせたわけではないと、彼は知る。自分が亡きあとも面白おかしく生き続けてくれることを願っている。そういう意味では、茨木童子は顔を上げられない。

折角生きながらえさせてもらったのに、合わせる顔がないな、と思う。

「ごめんなお頭。でもな——」

だからもし、一つだけ願いが叶うならば、あの初めての仲間に生きてほしい。

彼女ならきつと、再び自分たちの世を作ってくれと信じたがゆえに。

「あんたがいないと、楽しくないんだ」

\*

この山に散る桜は消え失せ、魑魅魍魎の気配も消える。上限の月が光る空は、一段と清々しく澄み渡っている。だが、山は一様にこの季節にありえない湿気と熱気に包まれていた。鬱蒼とした森に包まれていた山の姿は既がない。見渡す限りの木々は激流で押し流され、土石流となりそのまま上から下へと流れ落ち、木々を根こそぎ抜き去っていた。そして草の根一本も残さず浚い、この山は泥で塗り固めたようなモノに成り果てている。

そしてキャスターに向かって放たれた「あまのむら全て呑込みし氾濫の神剣」の本撃は本当に山を真つ二つに割り、冬山のクレバスのように深い溝を刻んでそれが闇に隠れた先まで続いている。恐ろしいほどの力任せで断たれた山は、激流の余波で地面が緩くなり放っておけば再び土砂が崩れ落ちる。そして再び形を変えるだろう。

天叢雲剣。

本来、これは人を斬るための剣ではない。暴風の神である素戔嗚尊の力と氾濫する水神でもある八岐大蛇の力を、自らの魔力と神性で束ね挙げ増幅し、光に変換し刃となして敵を貫く——神霊の力を行使する為の剣。

行使者が素戔嗚命であれば、力は百パーセント光へと変換される。だが素戔嗚命ほどの神性を持たぬセイバーは暴風の力と氾濫する川の力を完全に変換できない——そして、変換できなかった力はどうなるか。

答えを言えば、どうにもならない。それは神威を帯びたむき出しの暴風であり氾濫する流れのままに、対象範囲を蹂躪する——当の

セイバーはその力が、完全に不意をつく形でアーチャーとアサシンを襲ったことを知る由もない。

如何な陣地で最強を誇ろうと、その基盤を破壊し尽くすものが対城宝具。その力は伝説に違わずキャスターの世界を崩壊させたのだが、セイバー当人も好調ではなかった。片膝をつき、片手で剣をついている。

セイバーの手に蛇行剣はない。いつもの白銀の草薙剣があるが、蒸気に覆われていない。明がああ状態の為、宝具の発動をできるだけセイバーの貯蔵魔力だけで補おうとしたが、セイバーの手にも余る神剣は一度発動させれば魔力を容赦なく奪っていく。

サーヴァントを倒す方法は霊核を破壊するか、魔力切れを起こさせることだ。後者は主にマスターを殺すことによつて成される。しかし宝具の開帳は程度の差こそあれ、使用者の魔力を大きく消費する。

宝具を開帳するからには相手は殺さなければならない、という鉄則は真名の露呈により弱点を晒してしまうということもあるが、同時に宝具を放った後は大きく魔力を削られた状態でもある。

つまりキャスターと激しい白兵戦を行い、対城宝具を放った今のセイバーの状態で大きなダメージを受けるのは危険である。セイバーは一面茶色になり視界の良くなった山を見渡した。

本撃は確かにキャスターを貫き殺した。激突の刹那に、まるでキャスターを護るかのように飛び出してきた彼女の眷属をセイバーは見ている。だがキャスターの眷属ごとき羽虫も同然と、光はもろともに焼き殺したはずなのだが――

キャスターの姿が……その赤い霧を体中に燻らせる鬼の姿が、そこにあつた。

「……ッ！」

宝具は間違いなくアレに直撃した。陣地もたつた今無に帰した。今キャスターの姿があるのは、陣地の残骸からなけなしの魔力をかき集めた末、彼女の強力な戦闘続行スキルがあるためにほかならない。

キャスターは地を揺るがすような歩みでセイバーに向かつてくる



目に見えて削られている。

セイバーはすぐさま立ち上がり、距離を置いたキャスターの様子を伺う。キャスターは、微動だにしない。ついに動けないほどに力を使い果たしたのか、とマスターの明を気にかけて続けているセイバーは踵を返そうとした。だが、それは彼の直感によって止められた。

魔力の胎動。ランサーに胸を抉られたはずのキャスターは、その傷も癒えぬままに再び立ち上がったのだ。セイバーとランサーは同時に耳を劈く叫びを聞く。

「何イ!？」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!」

確かにランサーの槍はキャスターの心臓を貫いたはずだ。それでも立ち上がれるということは、強力な戦闘続行の類のスキルの恩恵。だが今ここに至りキャスターを動かしているものは執念。なによりもキャスター自身の「戦う」という意思が現界を支えている。

その咆哮はまるで何かを悼んでいる、嘆いているようにも見えた。

おそらく攻撃を凌ぎ続けさえすればキャスターは消える。だが、対城宝具を放った今のセイバーにはそれすら難行である。それでもより苦しいのはキャスターの方、あれは風前の灯そのもの——そうセイバーが剣を構えたその時、ランサーが吼えた。

「今度は儂の番だー」

三メートルの長大な槍を振り回し、びたりと止める。笹のような槍の穂先に、魔力が凝縮されていく。宝具の解放を予知し、セイバーは己が肉体を削るようにキャスターの猛攻をしのぐ。圧倒的魔力が槍に集中し、ランサーは口角を吊り上げる。

先程はキャスターを貫こうとも、結果を無に帰された必殺の宝具。されど今、セイバーの宝具という名の「台風」によって陣地を根こそ

ぎ吹き飛ばされた今ならば――

その必殺の槍が、本来の力を発揮する。

「掠れば死ぬぞ?……『絶てぬもの無き蜻蛉切!!』」

魔力が炸裂する。暴風の如き勢いで槍が空を駆けていく。幾多の戦場をランサーと共に駆けたその槍は、幾多の戦場において無双の名を謳う。

目にも映らぬ速度で放たれた槍は、セイバーを襲うキャスターの赤銅色の腕を貫いた。

それだけにとどまらず、槍が腕を貫くと同時に、キャスターの胸により巨大な空洞が空いた。その空洞からキャスターの向こう側の景色が見えるほどの大穴が穿たれたのだ。

「……う、ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

まさに断末魔。異形の終わりに相応しい絶叫が山に轟く。黄色の髪を振り乱し、目と言う目から血を噴出して恥も外聞もなく身悶えるするキャスターに向かい、セイバーは地を飛んだ。

「さっさと死ねエ!!」

抜身の白い鋼が、その紅く太い首を斬り捨てた。末期の悲鳴にも眉ひとつ動かさず、蒸し暑い山に生ぬるい体液をまき散らさせる。

身軽にキャスターから距離を置いたランサーは、セイバーにちらりと目をやった。

「おや、お前は首級にこだわるとは思っておらなんだが」

「興味はない。しっかり殺しておかねばならないと思うだけだ」

ランサーの軽口に返した時、セイバーは俄かにパスから伝わる魔力が増したことに気づいた。慌てて後ろに振り返れば、こちらに歩いてくる一成とアサシンに背負われた明の姿があった。セイバーは思わず三人に駆け寄った。



「マスター！」

「……セイバー、お疲れ様」

セイバーの姿を確認すると、明は汚れた手を伸ばしたが、途中で力尽きて宙に手が落ちて目を閉じてしまった。セイバーはその手を取ると、温もりがあることを確認してひとまず胸を撫で下ろした。

明は元気とは言い難いが、魔力状態から危機的な状況を脱していることをセイバーは感じた。アサシンの気配も傍にあり、一成も無事であることからしてアーチャーは消えたのだろう。

「アーチャーに勝ったのか」

「……ああ」

アサシンたちもアサシンたちで激闘だったのだろう。一成は見るからに疲弊しており、アサシンも見た目は空元気しているが、感じる魔力がかなり弱くなっている。セイバーはとりあえず全員の顔を確認した。全員生きてキャスターとアーチャーを打倒することができた。

セイバーが胸をなでおろした時、ランサーが叫び、同時に彼は飛び出してその名槍を振るった。

「……ふん!!」

なんと——首だけになったキャスターが襲い掛かってきたのだ。しかしその首はあえなく鋭い穂先によって薙がれ、赤黒い血液を撒いて地面に転がっていく。その後、ランサーによって再度槍がさらに突きさされ、動きを止められた。

元々人間の顔ではなかったが、槍で最早肉塊と成り果てたキャスターの首は、口かどこかわからない場所から朦朧と言葉を漏らした。

「……お前に、生きていて……」

誰に向けた言葉か、察せるものは一人もいなかった。キャスターがその言葉を届けたかった相手は、既にいない。

霊核を破壊しつくされた魔術師の英霊は、砂が宙に舞っていくように、消滅した。

\*

キャスターとアーチャーは消滅した。それはセイバーや一成が確認している。そしてキリエの陣営に残るサーヴァントは、ランサーのみ。

ゆえにアサシンと一成、セイバーはランサーに目を向けた。元々ランサーはキャスター陣営に襲撃されて、嫌々マスターを裏切る事になったサーヴァントのはずである。

心底キャスターに従っているわけではないだろうが、令呪の縛りは確実にある。それが何故キャスター相手にセイバーと共に戦っているのか、アサシンと一成にはさっぱりわからない。そしてセイバーも突如姿を現したランサーが、何故共に戦う事になったのかわかっていないのだ。

疑いの眼差しを向けられて、ランサーはアサシンに背負われている明の具合の悪さを気にしながら言う。

「お前たちがここに来る隙について、ハルカが儂を奪還しにきたのよ。ハルカは心霊魔術とやらができるらしくてな」

しかしそのハルカ・エーデルフェルトの姿がない。同時にキリエの姿もない。セイバーたちは今だ疑わしげな視線を向けていたが、当のランサーも詳しいことはわからないのだ。

「……今宵は皆消耗している。今日はここで手打ちとしないか？」  
ランサーはキャスターに敵対して共に戦っており、今も敵意は感じない。何より重傷のマスターをこれ以上ここに居させたくはないセイバーは、ランサーの提案に首肯する。

それを受けて、アーチャー戦で魔力を消耗した一成とアサシンも頷いた。

だが、セイバーは一つだけ尋ねるべく話を続けた。

「キャスターのマスターはどこへ消えたのか知っているか」

「さつきから少し探してるんだけどいねーし」

一成は縁もあり、キリエの安否を気に掛けていた。そしてアーチャーの宝具の中にいる時、偶然視えてしまった不吉な映像は成立しなかったと信じたかった。

だが、ランサーの顔色は良くない。

「……キャスターのマスターの無事はわからん。だが、ハルカが連れ去ったのだ」

一成は息を呑んだ。マスターである以上、死の危険さえ伴うことは周知である。だが、連れ去るとは何の為に。一成はセイバーやアサシンの顔を見たが、彼らは一様に首を振った。キリエを殺すことは理解できるが、連れ去る意味は。

キリエの正体を知らぬ彼らは、首を傾げるだけだった。

「すまん、アサシンのマスター」

「お前が謝る事じゃない」

サーヴァントが消えたのにマスターを殺すことについて一成は否定的だ。しかしそうではない状況でマスター殺しを否定しきることはできない。

たとえ一成がやりたくないとしても、他を非難できることではない。

重い沈黙が場を満たした。勝利した側であるのにもかかわらず、喜びはない。セイバーもアサシンもランサーも満身創痍で、明は重傷を負っている。

それでもセイバーはいつもと変わらない凜とした声で言う。

「なぜキャスターのマスターをここで殺さず、体を持ち帰った理由は、またお前と会いまみえるときマスターに聞けばいいだろう」

標高を低くし木々は消滅し、戦闘の傷跡深い山。生き物の死に絶えたような静寂の中、セイバーの一言が木霊した。

「帰るぞ」

12月5日⑰ 開闢にして終焉

——つまらないな。

それが、男が常々思っていたことだった。魔導の家柄、そして跡継ぎとして生まれ家族にもその才能は優れていると認められていた。修行が嫌だと思ったことはなく、跡継ぎとなることも嫌だったわけではない。

しかし積極的というわけでもなく、やっておかねばならぬ義務だったがゆえにこなしていただけだ。

そんな男にも、趣味があった。何の変哲もない、野球やサッカー、ラグビー、ボクシングなどのスポーツ観戦だ。自分でプレーをしようという想いはかけらほどもなかったが、双方のチームや人が勝利を求めて戦う姿は見ごたえがあった。

テレビ越しではなく、実際にスタジアムや球場に足を運ぶことも多かった。

かつて、男はサッカー観戦を共にする知人からとあること聞かれた。

「お前はどこかひいきのサッカーチームとかないのか？」

男は首を振った。特にどこのチームだから見る、ということはないからだ。

「そういうえばお前、スポーツなら何でも見るよな。スポーツ観戦自体が好きってことか」

言われてみればそうかもしれないと、男は頷いた。だが、よく考えれば男はスポーツだけではなく、チェスや将棋の対戦も誰彼かまわず見ている。

改めて考えると、一体自分は何を求めて対戦を見ているのだろうか。男にはわからなくなった。ただ面白いから、それだけでよいはずであり、正味「面白いから」で納得しておけばよかつたのだろう。しかし、男は思考をやめることができなかつた。

——もしかして自分は、戦いそのものを鑑賞することが好きなのか？

男はそこに思い至り、そして確証を得るべく飛行機へと乗り込んだ。戦いの最たるモノ——それは今も世界各地で行われる紛争だろう。その最前線へと、男は単騎向かったのだ。

そこで目撃した光景は、まさに悲惨そのものであった。国上層の意向に従うしかなく、まだ幼い少年兵に銃器を持たせ、ろくな訓練も施さぬままに投入する。戦場に救いなどはなく、あるものは果てしのない悲惨と絶望だった。

しかしそれを目撃しても、男の心に何か響くものがあつたかと言われれば嘘だった。人並みに悼みも悲しみもしたとは思うが、失望の念を隠せなかった。

求めていた答えは、これではなかったのだ。

紛争を鑑賞するよりも、サッカーやラグビーの試合を見る方が遥かに血沸き肉躍る。

その差は、どこに。そうして思考の果てに、一つの答えにたどり着く。

——大事なものは、その欲望の有無である。

\*

「さて、そろそろいいかしら……つと」

夜も更けた頃合い。白のコートをまとった金髪の女は、軽い足取りで春日教会への道を歩いていった。既に大西山におけるハルカの役割は終わっており、セイバーたちの戦いの顛末を見るまでもなく山を後にさせていた。

もつとも、キャスターの陣地結界の作用でキャスターが消滅するまで登山口以降先にできることは不可能だったため、結果的にキャスター消滅を確認してからハルカを脱出させていた。

そしてハルカを先に教会にやり、六画の令呪中四画を神父に明け渡させた。そして、一度彼には拠点に戻ってもらった。

しばらくしたらランサーも拠点に戻ってくるだろうから、ハルカにはその相手をさせねばならない。

ハルカから四画の令呪を受け取ったということは、都合神父が所持する令呪は七画ということになったはずだ。

「さて、例のド三流サーヴァントは何画の令呪を要求するのかしら」

白い息を弾ませて、彼女は春日教会の門の前にたどり着いた。教会には明かりはないが、人の気配を感じる。彼女はこれまでの足取りとは打って変わって、一步一步何かを確かめるように慎重に進んでいく。

扉に手をかけ、礼拝堂の中へと足を踏み入れた。室内は当然のごとく冷え切っている——先日修道女とハルカの戦闘により破壊された箇所が全く修復されていないために、外とつながっているようなものだったためだ。

整然と並んでいた長椅子は無造作に堂の端へ追いやられており、その何もなくなつた中央に神父が一人、凄然と立っていた。足元には、彼の血で描かれたであろう魔法陣があつた。女は物怖じすることなくまっすぐその魔法陣に近付くと、真面目な顔つきでそれを眺めた。

「長く魔導を離れていた割には、まともに描けているじゃない」

「記憶力には自信があつてな」

さらりとそう告げる神父の右腕——袖が肘までまくり上げられた彼の腕には、今や七画もの令呪が浮かんでいた。三画は元々付与されたものだが、残りはキリエスフィールから奪った分をハルカを介して渡したものだ。

「——本当に聖杯戦争は一筋縄ではいかぬ。まさか最後にこの私をマスターに選ぶとは。その上、現界すらはたしていないサーヴァントにここまで混乱させられるとはな」

誰に聞かせるでもなく一人言ち、神父は魔法陣に向き直る。その直

線上には神の子が磔刑にされた像がましましている。教会において、勝手に魔導を扱うなど不信心にもほどがある。

しかしこれから呼び出す英霊を考えれば、その不信心さも似つかわしい。

外に通じた穴から、烈しい風が吹き付けている。寒さに身を竦めることもなく、神父は右腕をかざした。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

洗礼の福音にも似た響く声に応じ、魔法陣に沿って仄暗い光が躍る。最初にして最後のサーヴァント。

彼の英霊は何を思い、召喚を拒んだか。その疑問も全て、幽界へとつながる感覚に摩滅される。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

女は手出しをせず神父を後ろから見つめている。同盟者を心配する目ではなく、その神秘を遍く見逃さず、己がモノとするために。

最初に呼ばれたサーヴァントは、召喚の途中で大聖杯の中に留まったまま。留まったまま現世で聖杯戦争は進み、同時に召喚を待っている。

大聖杯の魔力は聖杯戦争が進む——サーヴァントが消滅していく——につれて外に接触しようとする働きが強まる。

——サーヴァントごときに召喚を拒まれるなんて、贗作もいいところね。

そのことは神父とてわかっていよう。だが、彼にとってはそんなことは些細なことだった。

「——告げる。誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

神父は目を開き、己の左甲を見る。七画の令呪。

「汝聖杯の寄る辺に逆らいし者。我は久遠より勅令を以って再び命ず

る！我が命運、汝が剣に預けよう——」

令呪の三面が赤く光り輝く。同時に魔法陣から突き上げる様に暴風が吹き荒れる。女も神父もあまりの魔力風に目を瞑る。神々しいばかりの光が溢れ、月明かりさえもかき消す。その中で天を裂くような神父の詠唱が紡がれた。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

凜猛な風と切り裂くような轟音。神父の腕が激しく上下に揺れている。立っているのもやつとである魔力の嵐が吹きすさぶが、英霊が現れる気配はない。

「仕方がない——」

言葉とは裏腹にその顔に笑みを刻んだ神父は、高らかに、さらに告げる。

「——重ねて勅令を以って命ずる！抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

残った四画のうち、三画の令呪が強い耀きを放った。そして一際大きな風が吹きあがった瞬間、あれほどの風がびたりと止んだ。

しかし、安堵もつかの間。これまでの風が凧と思えるほどの突風が、神父を貫いた。

否、それは風などではなく——魔法陣から矢のごとく放たれた剣が、一直線に神父目掛けて飛んだがゆえの衝撃波であった。呼び出したモノの姿を確認すべくもなく、神父と女は思わず刹那、目を閉じた。だが、己が首筋に当たる惨憺な温度を認識すると、神父はすぐさまその眼を開いた。

彼等の視線の先には、一人の男。磔刑像によりかかると言える彼を一言で言い表すならば、白。彼はどこまでも白かった。白い絹のように流れる髪を一つに結び、その肌も、身に着けた具足も全てが白一色でまとめられていた。ただ一つ、その眼だけは血を連想させる紅だった。



白は何物にも染まる色だと評されることが多いが、男の白は違った。全ての始まり、全てを白紙に戻す原初にして絶対の白。ここまで自己主張の強い白を目にするのは、女も神父も初めてだった。

ここは教会。その教義において神は唯一。だがこの男がいることにより、唯一であるはずの神が、八百万の神の一柱でしかないと思わせられる。

この男こそ、アインツベルンが本来召喚しようとした英霊に違いない。

磔刑像の十字架の上には、闇にまぎれて分かりにくいが一羽の鳥が留まっていた。ここは教会、聖域ゆえに害鳥の類は寄り集まらない一種の簡単な結界が施されている。

ゆえに、あの鳥はただの鳥ではない。その佇まいは天から下界の者どもを睥睨するような不遜さを感じさせながら、それが似つかわしいと思わせる何かを持っていた。

その鳥を従える英霊は、マスターの確認など興味がないと言わんばかりに、整い過ぎた口をゆっくりと開いた。

「——問おう、草。お前は何故わたし公を呼んだ」

あてがわれた剣が、さらに冷やかに神父の首へ食い込む。神父にはわからないだろうが、後ろから見ている女には、その剣の形がよくわかる。その刀身は長方形をしており、人を斬るのに向いているとは思えない。

そして剣の腹には読めない文字——おそらくは神代文字でなにかが綴られていて、鏢は大きさの違う円が何重にも重なったような形状をしていた。

いや、それ以上に奇異だったのは、その剣は持ち手なく、その剣のみで宙に浮いて神父の首筋に刃を当てていることだった。

厳かにして絶対の声。この英霊は女を認識してはいるが、それより神父への問いを優先しているがゆえに無視している。完全なる傍観者として女は決して怖じはしなかったが——心の中で、アインツベル

ンを笑った。

他の国ならいざ知らず、この日本であなたたち、こんなのを使役しようとしていたの？と。

そして今問いを向けられている神父は、回答を間違えれば一秒で五回は死ぬに違いない。

「よもや、聖杯が欲しいというつまらん用ではあるまいな？」

しかし、刃を突き付けられている神父は動じない。

「かつて聖杯に用はなかった。だが、今は欲しいと思っている」

白の英霊は、重ねて問う。「その心は？」

「当初の願いは「正常なる聖杯戦争の完遂」だった。今も私はそれを願っている。だが、その上で聖杯を欲するわけは——」

神父は己が願いを口にする。おそらく普通には理解の範疇を超えた無意味な願いだ。されど、英霊はその彫刻めいた相好を崩して笑ったのだ。

「——なるほど。合点がいった。神父、お前の公に対する敬虔な態度には違和感があったのだが——お前はサーヴァントが出そろったことが嬉しいのだろう。最後のサーヴァントが公であったことを喜ぶのではなく、誰であろうと七騎がそろったことそのものが」

「その通りだ」

英霊が笑う。それに合わせて神父も笑っている。サーヴァントなど誰でもいいという発言に気分を害した様子もなく、むしろ英霊はつきつけた剣を神父の首筋から離れた。

剣はなめらかな動きで英霊の腰に収まった。

「——そこな草、名は」

「神内御雄」

「公のことはライダーとでも呼ぶがよい。さて御雄、どうやらすでにこの聖杯戦争とやらはなかなかの佳境に入っておるようだが、まさか最後の一騎になったところに公を呼んで殺させて聖杯を得る、という

つまらぬことを考えてはいないだろうが」

そんなことを考える輩なら疾うに土に帰しているがな——言葉にせずとも、真紅の瞳がそう語る。だが、その問い自体が不愉快だとばかりに神父は堂々と胸を張り、返答する。

「召喚が遅れたことは事故だ。だが、本当に申し訳ないと思っている」  
「申し訳ない、のではなく最初から呼ばれていたほうが、面白かったの間違いだろう——だが奇しくも、公が最初から呼ばれていたとしても大して状況は変わらなかつたろう」

神父はそこで初めて眉を寄せた。ライダーは具足の音さえ立てずに歩き、そして神父の傍らに立つ。

「公は案山子だ。この国の雑草どもが戦い誰が勝とうとどうでもいい」

「——戦う気がない？」

神父は初めて驚きを見せた。その驚きの理由を見透かし、白の英霊は鷹揚に笑った。神父からすれば、戦わないとはもつとも唾棄すべき事項であるのだ。

「そう逸るな。公が全力で草を刈り取り聖杯の使用権を得たとしても、公が面白くないと言う話だ。元々聖杯などというモノに願うことなどない」

「聖杯に興味がないから戦わないと。ならばお前は、この国を滅ぼすモノが聖杯を手にしてもよいというのか」

「極論すればその通りだ」

その言葉には神父だけではなく、女も驚いた。この国における開闢の帝——真名から想像するに、この英霊はその手の邪悪な願いを最も忌むと思っていたからだ。

しかし当の本人は当たり前のごとく告げる。

「全ての生きとし生けるモノは生まれた瞬間に死を内包する。どんなものでも最後には死を迎える。それは国でも世界でも同じこと。辿る道筋は軽く一億通り以上あるが、結果としてこの豊かな自然に満ちた秋津島は、最後には鋼の大地と成り果てる。それが少々早まるだけ

の話だ。公が意固地になって止める必要はない」

確かに英霊の言うことは間違っていないどころか、物心ついたものなら誰でも理解できることだ。生まれた者はいずれ死ぬという、当たり前の話。

それでも、ライダーの発言はあまりにも気の長い話である。普通の人間であれば世界が終わる前に自分が死ぬのだから、そのスパンで「結果」——幸福を求めるのだ。

ゆえに、今度は神父が問うた。

「ならばお前は、何を望み、召喚に応じた？」

煤けたステンドグラスから差し込む幽かそけき月光に、絹糸のような白い髪が輝いている。その英霊の顔に浮かんだものは、笑みであった。

「——結果に意味はない。ならば意味があるのは過程だ。最後がいか  
なこの世の地獄となろうと、この世の極楽となろうがどうでもいい。  
それに至るまで、そこにいる者たちが何を思い何を選び何を捨てるの  
か。それこそが重要であり——」

静まり返る礼拝堂。白き古代の英霊は、呼び出した神父とそして魔術師を慈しむように、あくまで優しく声をかける。

その声音は本当に優しく、それだけで彼らが如何なる邪悪であろうと、存在することを許す色だった。

「それこそが、全てであろう」

ライダーはくるりと、再び神父と女に背を向けた。既にその背中には先ほどまでの——崖の淵に立たされているような錯覚を抱かせる殺意はなかった。そうして神父の値踏みを終えた英霊の視線は、ようやく女へと向かった。

「はてさて、御雄。そこな魔術師は何者だ？」

神父は何も答えない。靴音高く女は彼の前へと進み出て、その碧眼を細めた。

「初めまして、ライダー。私はそのクソ神父の……何かしら？まあ、同盟者みたいなものと思ってくれればいいわ」

「——ほう、だが、貴様はこの場で最もこの戦争に関係のない者だろ

う。サーヴァントでもなく、マスターでもなく、監督をするものでもない完全なる部外者よ」

ライダーの言葉は真実だ。本来、女は聖杯戦争に関係がない。聖杯に選定されず、マスターでもない。だが、その程度のことはどうでもいい話だ。

「聖杯は狭量なのよ。そもそも魔術なんて排他的なものだけど。元々この儀式は御三家のもので、それ以外はみんな部外者というエサなんだから、言えばどいつもこいつも部外者よ——でも」

暴論を繰り広げる女は、紅い目をひるむことなく見返した。

「あなたはそういう部外者、顔を突っ込みたがる異邦人は嫌いかしら」  
「女。名は」

吹き曝しになった壁から、寒い風が吹き入る。外から差し込む月光が、彼女の金糸を輝かせている。美貌を崩さず、彼女は堂々とその名を口にする。

「——シグマ・アスガード。魔術師の端くれよ。——経歴とかも必要かしら？」

「不要だ。お前の名が全てを語っている。それにしても、シグマ……総和と来たか——いやはや、屑のような聖杯だと思いきや巡りあわせだけは一人前な事よ」

神父は歩みを進める。静まり返った教会に坐す神に対して、恐れることもなく近づいていく。

「ライダー。お前は——人の欲望を食って成ったものなのだな」

「人の欲望なくして公はありえぬ。もしなかったのなら、公はいまだにつまらぬ神のままであつたらう」

思い描く事柄の規模は、神父よりもライダーの方が遥かに遠大にして深刻で在り方に根差している。見渡す視界は、シグマよりもライダーの方が鳥瞰的であり、かつ多くを総和している。だが、間違いなく彼らは同類であり、同じ穴の貉であつた。

人の欲望を愛で、それによって己を構成する、それなくしてはあま

りに虚にすぎる伽藍の洞たち。

戦いはいまだ渦中。ここに最初にして最後のサーヴァントが召喚されたことを知る者は他になく、深い声だけが教会に響く。

「——その道楽、付き合おう。精々道中楽しもうではないか」

かつてこの国の神の一柱であった男は、清々しいほどの笑みをその顔に浮かべて、高らかに宣言する。

「さあ民草よ、聖杯戦争を続けるとしようか」

### 第3幕 生まれた時から決まっていた

#### interlude—5 女の魔術師たち

その女には、何もなかった。ただあったものは、途方もなく大きな虚。

その虚はただの虚。放っておこうとどうにかなるものでもない。何もない女には、趣味嗜好は存在せずただただ与えられる役目を果たすだけだった。魔導を修め次代につなげるという役目を。

そうしてただただ修練を続ける女は、ある日唐突に興味を抱いた。それは彼女が生まれてから初めて抱いた「指向」であった。

——いつになったら、この虚はいっぱいになるのだろうか？

女の家系は、大昔には神代へとさかのぼる。大昔は北欧神話の神々に仕えており、神代の遺物を多く受け継いできた。しかし今から三百年ほど前に、大家における争いが勃発した結果分裂し、受け継いできた神代の遺物や技、土地も共に分かれてしまった。

女の先祖はその争いにおいて結果的に第一勝者となったため、大家の領地の大部分と秘儀を我が物とした。

女の一族が得意とした術は神落。この土地ではセイドと呼称される降霊術である。神代より授かった術を今だに保ち続ける一族において、秘儀は他の魔術の家系同様に一子相伝で伝えられるものである。

その魔術の特性ゆえに、当主となるのは常に女と定められている。そして歴代の当主と比べても、女の素質は群を抜いていた。

己と異なる魂を己の中に招き入れるその業において、術者の器は空洞であればあるほど都合がよい。生まれながらにして何も持ちえなかった女は、業に受け継ぐにおいてあらゆる苦しみも悦びも拒むことなく受け入れた。ゆえに随一の降霊術者となったが、その業自体は伝えられるもの。一代限りの保存すべき封印指定とはなりえない。

彼女の本質は、空洞にあるのではない。

その空洞を埋め満たそうとし続ける、あくなき欲求にあった。いつになればこの空洞は埋まるのか？どこまでやればもう一杯になるのか？それを知りたくて、封印指定を受けた後に女は故地を離れた。その力のままに、己の限界を試すべく放浪した果てにこの極東の地へと身を寄せた。

極東の地においても、彼女は名のある魔術師を探していた。ゆえにこの戦争でなくともじきに大昔の同族であり遠縁でもある碓氷を見つけたかもしれない。

しかし彼女は、聖杯戦争の復活を目論んだというかつての同族に強い興味を抱く。聖杯戦争という稀代の大魔術儀式と、稀代の体質を持つ魔術師。それを双方とも食せるまたとない機会を、彼女が望まぬはずはない。

——  
メイガス・イーター  
魔術師食い。

それが、彼女の本質と性質を端的に表す言葉である。

\*

「俺の名は「根源の『景』」色を見よ、叶わずばせめてその『影』を掴め」という想いからつけられた、ミヨーに悲観的な名だ。むしろこのような名は、影使いである明に与えるべきだったかもしれないが、しかもあ影使いの名が「明」というのも、それはそれで示唆的で悪くない」元々は「根源を『明らか』にする」というつもりだったのだがなあと、碓氷の六代目、碓氷影景はそう語る。

碓氷影景とその妻には、明よりも先に女兒が生れていた。だが、その娘は体が弱かった。そのため、保険のためにもう一人産むことにした。その妻は、明を産み落とし死んだ。



保険として明を生んだはいいものの、明の姉は成長につれ丈夫になり、生まれたときのか弱さはなくなつた。

魔導は一子相伝のため、二人に伝えることはできない——父、影景にとつては二人とも実の子であり、共に魔術の才能に優れていた。だが、それでも決定に迷いはなかつた。

彼が跡継ぎに選んだのは、明だつた。理由はその体質にある。

架空元素・虚数という極めて稀な属性を持つて生まれ、かつ極めて高い魔術師の素養を兼ね備えている。高すぎる魔導の素養はそこにあるだけで怪異や災難を呼び込む。さらに虚数という稀な体質は放つておくと、魔術協会によりホルマリン漬の標本として保管されかねないものでもあつた。

つまり、妹——明は生きるためにどうしても魔導の家の加護を必要としたのである。

却つて、姉は魔導の素養はあれども、妹ほど極端なものではなかつた。このような場合、他の魔導の家に養子に出すことがままあるが、この魔導の家の場合それも難しかった。

確水の体質は、同じ血の流れるものの魔術しか受け付けない。それゆえに、養子に出したとしてもその家の魔術に極めてなじみにくいのである。

残る方法は二つ。姉を魔術師ではなく、一般人に戻す。その魔術回路を潰し、記憶を洗脳により消去した上で、一般家庭へ養子に出す。二つ目は明に不幸な事故があつた場合の「予備」として、確水家で育て続けることだ。

父影景としては両方ありの選択肢であつた。だが幼くも魔術師としての矜持を身に着け始め、されどもその精神は未熟な姉が、おとなしい妹へどういふ行動へと出るか。姉にとつても予備として生涯をすごすのと、一般人としてだが好きに生きること、どちらがよいか。

子供は大人が思う以上に、場の空気を知る。父の意向を感じ取り気の強く魔術にも自信のあつた姉は、徐々に明を責めるようになり、二人の仲は悪化していった。そしてある時、姉が明を屋上から突き落とす事件が起きた。

幸い、植えられていた樹木がクッションとなり、彼女は一命をとりとめた。その一件を受けて、父は決断を下してすべての処理を済ませてしまった。

明が入院し退院して家に戻った時に、既に家には姉はいなかった。それどころか、姉がいた痕跡さえなくなっていた。

入院の間に、これ幸いと父が全ての処理を施して姉を養子に出していた。

明がショックを受けられないわけがなかった。だが、彼女は父に対して反抗の意を示すことはできなかった。自分が生きるために魔導の加護が必要であることを、少女は身を以って知っていたからだ。

まだ自分の力を扱いきれない少女は、外に出ると他の子よりも倍以上の頻度で怪我をして帰ってきた。誘拐されそうになったことも一度や二度ではない。しかし、堅牢な結界でもある家で大人しく魔術の修行をしているときはその限りではなかった。

明は姉について本当に心を痛めていた。しかし、この時はまだ彼女は——ホルマリンにもなりたくなかったし、死にたくもなかったのだ。

明は、禁を破り養子に出された姉とこっそり話をしたことがある。謝ろうとしたのか単に寂しかったのか、本人にもその時の気持ちははつきりしない。

姉は楽しそうに笑っていた。養父母に囲まれた買い物帰りの姉に、明は道を尋ねるふりをして話しかけたのだ。当然妹のことなど記憶にない。車椅子に座りながら、姉は親切に道を教えてくれた。

魔術回路というものは神経に直結している。それを潰すことは、一歩間違えれば死に至る危険すらある行為である。車椅子になることくらいは想定内の範囲だ。姉は魔術を奪われ、足の自由を奪われても楽しそうに笑っていた。明は魔術を得て、五体満足であるけど笑えない。

——会おうと思わなければよかった。

会わなければ、姉の人生を潰した、損なってしまった罪悪感だけ背負っているだけだった。けれど、姉の持っているモノを奪った筈の自

分が、奪われたはずの姉よりも楽しくないのはどういうことなのか。それでも明は生きるために魔術を学ぶ。父親の期待以上の成果を上げているが、教える父親も四苦八苦していた。何しろ存在そのものが封印指定一步手前の虚数属性は、その稀有性ゆえに先人の残した魔術の修行法などが無いに等しい。仮にあったところで、魔導の家は他家に研究結果を広めない。

幸い父親も三重属性という珍しい体質だった——かの魔術の家は元々珍しい属性を輩出しやすい家系だけに、これまでの研究を応用しなんとか明を形にしていた具合だ。

元々、虚数の影魔術は術者の深層意識を剥き出しにして、負の側面を刃とする禁呪である。魔術師としての基盤ができていればよいが、それが完成していない状態の明が影魔術を使用すれば、深層意識の負の側面に精神が全て蝕まれる危険性があった。

だが、魔術を習得するにはどうしてもそれを行わなければならなかった。しかも、彼女の魔術回路の起動方法は自傷行為。目に付く場所は避けて、太腿などをナイフで切って回路を励起させなければならぬ。イメージだけで起動させるには未だ至らず、実際の行為を必要とする。それが幼少から思春期にかけての少女にどれほどの影響を及ぼすか。

そのころの明——中学に上がった時——の精神状態は、目に見えて歪んでいた。魔術刻印の移植が途上であることもあり、久しくなりを潜めていた怪異や災厄が再び明に纏わりつくようになっていた。

しかし、そんな明にも友達がいた。自分の何がよかったのか明自身にはわからないが、良く話しかけてきて、くだらない冗談をいつも言っているような女の子だった。明自身はそんな友達に色よい反応を返せたとは思えないが、彼女はそんなことを気にする人間ではなかった。

とある日、その友達と下校していた時だ。その日は酷い大雨で、室内の部活動も中止して早く帰るように指示が出ているほどだった。

豪雨の中、いつものように友達が喋ってそれを明が聞く、いつもの二人。信号が青になって渡ろうとした時。視界が悪かったのか、ス

リップしたのか、トラックが二人に突っ込んできた。そのまま行けば、二人とも直撃を免れなかった。

だが、友人は——生死を分けるその刹那に、友達は明の背を押した。轟音。豪雨。壁にめり込んだトラック。流れる雨は透明か、埃などで茶色くなっているかのどちらかの筈であった。なのに、なぜその雨が赤いのだろうか。そして、友人はどこに消えてしまったのだろうか。

叩き付けるような雨でずぶぬれになりながら、明は、その、変わり果てた友人の姿を、見なかった。

しかし、幼いころから怪異に遭遇し続け怪我を負ってきた妹には直接それをみなくとも、雨に混ざる赤の量だけで想像ができた。そして、想像してしまった。

中学生と言う多感な時期で、魔術の基盤ができあがりきつていない魔術師。精神を犯す可能性の高い影魔術を行使していたこと。友人の死が、運悪く重なってしまった結果だろう。

自分が不幸だとは思わなかった。自分が不幸はずはないと思っていた。この体質に捲き込まれて災難に会う人こそ不幸で、自分を生み落して死んだ母こそが不幸で、持っていたものを奪われた姉こそが不幸で、巻き込まれて死んだ友人こそが不幸で——本当に申し訳ないと思っていた。

——でも、ならなんで、自分はこんなに苦しいのか——。

苦しい理由などどこにもない筈だった。それなのになぜ自分はこんなにも苦しいのか。理由が理解できず、それでも苦しかったから——魔術で使用するナイフをそのまま、自分の首に刺した。

幸いにして、長年通いの家政婦によって早くに発見された彼女は、病院に搬送されて一命を取り留めた。唯一の友も冥府に旅立ち、父影景も一般の家族の情とは縁遠いタイプだ。

見舞いに来る人間がいるわけではない——ふと、明は疑問に思った。ただ一人、見舞いに来そうな人物が来ない。

顔はとても合わせにくいが、いつもの彼女を考えれば来ない方が不

自然だった。

そのまま退院の日を迎え、明は向かえもなく一人で家路についた。古い屋敷のリビングには旅支度をする父・影景がいた。

「何だ、お前か」

「……ただいま。出かけるの?」

「ああ。二週間ほど留守にする」

地下室に籠って研究に没頭するという姿も魔術師であるが、明の父はそうではなかった。もちろん専門とする魔術はあるが、それ以外にも肥やしになればとあらゆる魔術に首を突っ込んでいく者だった。ゆえに家にはあまりいつかない。

明が死にかけようと、それに変化はない。明とてそれが父と知っているから、それはどうでもよかった。

ただ、気になる事があった。

「あの、透さん、どうしたの」

透、とは碓氷邸で働く通いの家政婦の名だった。通いといっても週五、六で来ており、明を育てたのは実質その女だった。自殺を図った明を助けた彼女が、全く見舞いに来ない。そしていつも家で家事全般をこなしているのに、今日はその姿が全く見えない——否、週一の休みにしては、この屋敷は妙に掃除が行き届いていない。

もしかして、彼女は暫くこの家にやってきてはならないのかもしれない。

「ん? ああ、あの家政婦か」

父は、言われて思い出したとばかりに振り向いた。「殺したぞ」

朝の挨拶をするかのような軽さだった。明はその一言で、その理由も何もかも理解していた。それでも彼女は、口の中の水分が全て蒸発してしまったかのような、カラカラの声で問うた。

「ど、どうして」

「お前が倒れていたのは地下室で、しかも魔術の行使中だったろう。そんなものを見た一般人を生かしておけるか」

「お、お父様はルーン得意でしょ、忘却とかでも」

「死人に口なしというだろう。それにあれを雇った理由をお前にも言ったと思うが——天涯孤独。あれがいなくなるうと騒ぎ立てる人間がない」

それきり、明は言葉を失った。父はさっさと出かけてしまい、広い屋敷には彼女一人が残された。自分の首にナイフを突き立てるまで己を苛んでいた苦しみは、もう消えていた。

——あ、もうだめだ、これ。

明は魔導自体は好きでも嫌いでもない。新しいことができるようになったときは、微かに高揚感を覚えることもあるが、基本的には厳しく辛いものだ。

だが好き嫌いの次元ではない。明には魔術の家の加護がどうしても必要であり、その上研究結果を後世に残すという義務がある。その体に植えられた魔術刻印は、魔術における恩恵でもあると同時に、運命を義務付ける鎖。外的要因で死に至るのならばありえるが、自ら死を選ぶことはできない。挫折したから死ぬ、つらいから死ぬことはできない——確氷となつては六代、分裂前の時代を含めれば神代に至る、鉄血の掟。

ゆえに彼女はやっと理解した。

——辛いとかそういう次元じゃないや。やるしかないんだ。だつてもう、こんなに狂わせた。

顔も知らぬ母も、回路を潰された姉を、助けてくれた友と、親代わりを。

もし自分もつと真剣に魔導をしていれば、影に侵されることなく友は生きていたのかもしれない。

もし自分が死んで逃げようとしなければ、家政婦は生きていたのかもしれない。

——逃げれば、きつとまた誰かが死んでしまう。

姉の望んだ道を奪い、自らを律しきれぬがゆえに友を殺し、逃げようとして親代わりが死んだのならばやることは一つしかない。できることがそれだけならば、しなければならぬことがそれだけならば、魔術を修めなければならぬ。

もう誰も、死なせたくない。ゆえに、彼女は魔術師としての役目を果たすために／＼一般の人の世界を護りたいがために、戦うと決めたのだ。

そう思うから、その普通の幸せを打ち砕くバーサーカーのマスターを許すことはできず、悟を見捨てることはできなかった。

自分とは縁遠いものかもしれないとも、彼らの幸せは尊いことだ。それを護れるなら護りたいと、思ったことは本心だ。だが、同時に。

——私のことは、もういいや。

明は諦めたのだ。自分のこととその未来を。修行を続け仮に虚数の魔術を極めたとしても、待っているのは封印指定。待っているのは時計塔に保護という名の幽閉をされるだけの一生。もちろん逃亡して野に潜み、研究を続ける手もある。

だが、そこまでして成したい何かは今の彼女にはない。

——そんなもんか。

魔術師として大成し、跡継ぎを残し、魔術刻印を譲る。その義務を果たせば、姉も犠牲になった親しき者も、きつと納得してくれる。誰も文句を言わない、一番いい道だ。

だから、自ら死を死ぬことは決して許されない。自分の体はそれらを果たす為だけに在り、一般の人々を侵すべきものではない。

ゆえに碓氷明は聖杯戦争を戦う。しなければならぬことを果たす為に。魔術師が死に瀕するのは当然のことであり、最早恐れるべくもない。むしろ聖杯戦争という闘争において死ぬのならば、魔術師として戦って死んだということになり恥じるどころなどない。

——望むと、望まざると、逃げるわけにはいかない。

——この体で生まれた時から、この道しかなかったのだ。

「私、何がしたかったんだっけ」



12月6日① 願い

——古い、古い夢をみていた。

明は鈍痛の中に目を覚ました。自室のベッドで眠っていたことは家具や調度品を見て理解したが、そもそもなぜ全身がこんなにも痛むのか思い出せない。特に腹と背中、足の痛みが尋常ではない。

と、自分の腕を見るといつの間にかブラウスから寝間着に着替えさせられていることに気づいた。そしてベッドの足の方で自分のサーヴァントが座ったまま眠っている。こたつで寝ればいいのに、とうっかりどうでもいいことに思いを馳せたが、良く考えれば全身痛いなんてただ事ではない。

(しかも魔力がなんかカラに近いような……昨日は、えーつと)

痛みで目が徐々に覚めてくると同時に、昨夜のキヤスター戦の記憶も蘇る。

ランサーの裏切り、セイバーの宝具の解放、アーチャーとキヤスターの消滅、ハルカがキリエを奪ったこと。

「……寝てる場合じゃ……ぐあっ!!」

飛び起きようとした明は、年ごろの女性とは思えない声を上げて再び布団に蹲った。その奇声でうとうと眠っていたセイバーが目を覚ました。

「明！気が付いたのか!」

セイバーは立ち上がり、目を開けている明をみて胸を撫で下ろしていた。当の明は一成とアサシンはなんとか無事だったことを思い出し、そうしてからやつと気づいた。

「あれ? 何で家に戻ってるの?」

第一声がそれか、と言いたげな顔をしたセイバーだったが、彼は律儀に明の質問に答えた。

「……あのホテルを借りていたのは、三騎使役していたキヤスターの

マスターの襲撃を回避するためだろう。だが、キャスターとアーチャーは倒れた。もうホテルにいる必要はあるまい」

そういうことで、昨夜の激闘のあとはホテルに戻らずこの確氷の家に戻ってきたのだ。確かにヤクザの抗争にでも巻き込まれたような体たらくだったため、そのままホテルに戻れば警察沙汰だ。いい判断だと明は思った。

「部屋は適当に割り振って使っている。文句があるならあとで土御門に言え」

「わかった。そういや、悟さん大丈夫？」

「は？」

一瞬何を言っているのかわからず、セイバーは間の抜けた声を出した。

「だから、悟さん。キャスターの呪いはちゃんと解呪された？」

「あ、ああ。土御門が無事を確認していた」

「そっか、よかった」

そう笑って言うと、明はベッドから起き上がろうとする。慌てるのはセイバーで明の肩を掴むとそのままベッドに押し戻そうとする。

力比べで明に分があるはずはなく、あっけなくベッドに戻される。

「自分の体を分かっているのか！まだ寝ている！」

「体中痛いだけで普通だよ」

「体中痛いことを普通とは言わない！腹は強く殴られた跡があり、背中は酷い火傷、何故かは知らないが全身傷だらけで、特に足など見れた状態ではなかった！」

「マジで？」

「マジだ！」

セイバーの口調が狂っているが、面倒くさかったので明は突っ込まなかった。そんなに大怪我だったのかと他人事のように腕を見たが、きちんと包帯が巻かれていた。

また体の感知的に、背中や肩、足も同様であることを察した。

「——そういや、これ誰がやってくれたのさ」

明としては何となく尋ねただけだったが、セイバーは俄かに苦い

顔、というよりは居心地悪げに眼を顔を曇らせた。

「……土御門が治癒の魔術を掛けようとしていたが、あれもかなりまいてっているようで無理だった。代わりとはいかないまでも俺の剣を体に入れた。包帯の類は俺がやった」

明は一成の戦う様子をまるで知らない。しかし激闘であつたことに疑いはなく、生き残つただけでも表彰ものである。それにしてもお人よしな人間だと感心する——それはともかく、今の言葉だけではセイバーが顔を曇らせる理由はないはずである。

「……申し訳ないが、血をぬぐつたり包帯を巻く際に服を脱がせてもらつた」

「？そりゃあ脱がさないと拭けないし巻けないし」

何を当たり前のことを、と思つた時、明はやつとセイバーの意味することに気づいた。

「……あ、裸見たこと気にしてるなら気にしなくていいよ。っていうか、セイバー私のこと「女だと思つてない」って言つてたじゃん」

大学の友達、麻貴と日向と共に茶をしていた時、関係を怪しむ友人二人の視線を「明を女だと思つていない」とバツサリ切り捨てたことは記憶に新しい。

セイバーは奇妙な顔をして答えた。

「……？当然だろう。お前は俺のマスターなのだから」

「——なるほど」

あの時は思いつきり恋愛向きの話だったため、「女だと思つていない」イコール「女性としての魅力ゼロ」と明は解釈していた。しかしセイバーは「女性としての魅力どうこうの次元ではなく、女である前にマスター」と言っているにすぎなかつたのだ。明がセイバーを「男の前にサーヴァント」と言っているのと同じである。

明は盛大にため息をついたが、それと同時に、かつ同じくらい盛大にセイバーもため息をついていた。

「……何でセイバーがため息をつくのさ」

「……サーヴァントの俺だからいいものの、他でもその調子では思いやられる。もう少し恥じらい、いや違うな、危機感を持って」

「別に大丈夫だよ。魔術師だから一般人なら地球最強の男もどうにか  
なると思うし、魔術師だったらそもそももつと警戒するし」

ただ一般人相手に魔術を使うという時点で半ば「殺す」と同義ゆえ  
に、明はする気はないのだが。というか何故自分はセイバーにお説教  
をされているのだろうか。

当の英霊様は「なまじ腕が立つのも考えものだ」とさらにあきれ果  
てた眼差しだ。明も絶好調とは程遠い体のため気づくのが遅れたが、  
セイバーの顔色は青を通り越して白くなっていた。

明自身の魔力もカラに近かったのだから、セイバーが魔力不足状態  
なのは聞くまでもない。セイバーが宝具を解放したのは知っている  
が、明自身はフラフラだったためにあまり覚えていないのだ。ただ、  
魔力をゴツゴツり持っていていかれたのはよくわかる。

そう、確かに昨夜は激闘に次ぐ激闘だったのだ。それでも明とセイ  
バー、それに土御門もアサシンも無事という、文句のない戦果をもぎ  
取ったのだ。

「ま、でもみんな無事だったし、悟さんは治ったし。魔術師なんていつ  
死んでもおかしくない職業なんだから、この怪我くらい大したこと  
じゃないよ」

ふと、セイバーが急に口を噤んだ。じつと明の顔を見て、何か文句  
ありげに、しかし確信を以て——それでも信じたくはない嫌な事を聞  
くように、口を開きかけた。

その時、様子を見に来たのか通りかかったのか一成が扉を開いた。  
それなりに騒いでいたため、耳に入ったのだろう。

「確氷！起きたのか!!」

「うん起きた。痛いけど平気……アサシンは霊体化してるの?」

そう言って起き上がろうとする明を、セイバーが無言で布団の中に  
押し戻す。明はやっと起き上がることを諦めてベッドに横たわった  
まま二人を見上げた。気配遮断をしていないらしく、アサシンが霊体  
化しても部屋の中にいるのはわかる。

改めて一成を見上げたが、よく見れば彼も酷い顔色をしている。土  
の上に寝転がられたら区別がつかないかもしれないくらいに土気色

の顔をしている。そして、はつきりと目の下に隈がある。もしかして寝ていないのかもしれない。

明の心配と疑問を知らず、一成は右手の甲を見せた。二画あったはずの令呪は一画に減っている。「令呪。なんとか一画だけは残してる……で、だ」

彼は咳払いをして、少し言いにくそう……むしろ残念そうに口を開いた。

「俺はアサシンと戦争を続ける。だから、もしお前が出てけつていうなら出てく」

「そっか、私たちに協力するって条件でここにいたけど、キャスターも倒れて、アサシンが残ったから……」

残るサーヴァントはセイバー・アサシン・ランサーの三騎。正真正銘、明と一成は敵同士だ。ならば、碓氷の家に居続けるのは筋が合わない。これまで一成はサーヴァントがいないから明を助けるという理由で共に行動していた。

そしてキャスターと悟のことがあったとはいえ、もう協力する義理はない。

しかし、明は首を振った。

「でも、今日明日はお互いに回復に費やさなきゃいけないし、別にいてもいいよ。というか一成が私やセイバーの寝首をかくとは思えないし、かけるとも思わないし」

一成となら、神秘も漏らさず純粋にサーヴァント同士の戦いができる。明はそう思う。セイバーも流石に一成の人柄を分かってきたのか、ため息をついたが文句は言わない。

「おまえな……って、今一成って言った？」

「土御門って長いし、言いにくいし。あ、嫌だったんならやめるよ、ごめん」

「いや、好きにしてくれー」

何故か挙動不審に目を泳がせる一成を、明とセイバーは顔を見合わせて首を傾げた。ちなみに霊体化しているアサシンが爆笑している

のは一成しか知らない。一成は咳払いをしてから、仕切りなおして二人を見た。

「……そんで、さっそく相談に乗ってほしいことがあるんだけど、いいか？怪我してるところにマジで申し訳ねーんだけど。流石に今じやなくていいんだけど」

「いいよ？ただ、今日は流石に寝たきりだから魔術的なことはできないと思うけど……」

一成はあからさまにほつとした、と言わんばかりに息をついた。

「そか、ありがとう……っーか、俺が言うのも何だけど、セイバーお前霊体化した方がいいんじゃない？お前ソーメンみたいな顔してるし、確氷にも負担が増えるだろ。アサシンも実体化大好きだけど、流石に今はキツいって言うてるし」

明は言いよんだ。一応一成にもセイバーが霊体化できないことを隠していたが、もう今更な気がする。セイバーも紙のように白い顔をしながら霊体化しないのも限りなく不審だ。

「……実はさ、セイバーは霊体化できないの。多分、召喚する時にちよつと間違つたせいだと思っただけど」

「は!?!そんなことあんのか!?!」

「いや、それに関しては俺から訂正をしたい」

セイバーは静かに絨毯の上に正座をした。妙に畏まった雰囲気、明は横になったままだが一成はつられて正座をしていた。セイバーはいきなり明に向かって頭を下げた。

「済まない。俺が霊体化できないのは召喚のミスだと言ったが、違う。あれは俺自体の欠陥だ。事情が込み入っている為、今までは召喚ミスで通させてもらっていた」

「えっ」

明も含め、その言葉に全員が啞然とした。霊体化しているアサシンも同様だ。

「だがそろそろ言っておいてもいいだろう。俺が霊体化できない理由

は、俺は死んではいないからだ」

「おいセイバー、俺の指何本に見える？」

「二本」

「いだだだあだだだ千切れる離せごめんなさい!!」

セイバーにつぶさんばかりに指を握られて一成は涙目だった。一成には構わず、セイバーは話を続ける。

「今流れている時間上では、俺は死んでいるだろう。だが、俺の体は死の直前、伊勢の能煩野のぼので止まっている。時間は進んでいるが、俺の体は死なずに時間に止まっているというのか」

一成も明もセイバーの言っている意味がわからず、お互いに顔を見合わせた。

「……いや、なんでそんなことになってるの？そもそも死なないと英霊になれなくない？」

「俺、日本武尊は世界と契約を交さずとも、それそのものだけの功績で英霊の座を獲得した。何もしなくても、死後は英霊となっただろう。だが、俺は死の直前に世界を契約を交し、その「契約」が果たされたのちに死を迎え、守護者としての英霊となることに決めた。そのままでは死ねなかったからだ」

「……ああ」

一成が頭にハテナを浮かべつつづけていたので、先に理解した明が説明を付け加えた。

英霊は英雄の死後、魂が格上げされてこの世界の時間軸から外れた魂だ。精霊や天使、悪魔に近い。それ以外でも生前に世界と何らかの契約した者が死後、魂を守護者として明け渡すことでも成立する。

前者は純粋な英霊だが、後者は守護者としての英霊だ。

この守護者はサーヴァントのように自由意志を持たず、人間の世界が「人間の手による破滅」を起こしそうになった時に人類の集合無意識（アラヤ）によりその土地に召喚される存在だ。

世界の力をバックアップとして受けた「戦うだけの現象」として、誰にも認識されずにその場の人間を皆殺しにして事態を收拾させて消え去る殲滅兵器として扱われる。

とにかく、セイバーは死の直前に世界と契約を交して、死後は世界に魂を殲滅兵器として売り渡すことを条件に何かの願いを叶えようとしているのだ。

「その願いを叶え終わつたのちに、俺は本当の死を迎え、英霊となる。俺は死後英霊になることが確定しているから、この戦争にもサーヴァントとして参加している。しかし願いを叶えるまでは死んでいないことになるから、霊体化できない」

「……よくわかんねえけど、お前は死にそうになつても叶えたい願いがあるから聖杯戦争に呼ばれてるんだよな？」

一成の問いに、セイバーはゆるゆると首を振った。

「俺は聖杯には興味がない。俺が聖杯戦争にいるのは、そこに戦いがあるからだ」

一成が思いつきり顔にわからん、と書いている。勿論明もよくわからない。

「や、要するに、セイバーは死ぬ直前に何を願つて世界と契約したの？」

魔力不足で蒼白な顔色をしているが、剣の英霊の瞳は変わらず凜として真っ直ぐである。迷いも揺るぎもなく、彼は自分の望みを口にす

「戦いだ。俺は未来永劫、この国で最強でなければならぬ。俺は、未来永劫この国があり続ける限り俺が最強であると証明したのちに死を迎える。だから俺はあらゆる時間軸、平行世界に呼び出される——この聖杯戦争のように、大和の英雄たちを呼び出して戦う儀式を必要とする場所に」

部屋は水を打ったように静まり返った。セイバーは確かにキヤスターの酒宴でも「最強を証明する」と宣言した。だが、それは誰もあ

くまで「今回の聖杯戦争」での話だと思っていた。



それは違った。聖杯戦争ではなくとも、日本の英霊の戦いが要請される場所や儀式ならば、可能な限りセイバーは何処へでも呼び出される。

「……じゃあ、その「最強を証明するまで」「こんな戦いに何度でも呼ばれるのか?」というか、最強を証明するって、具体的にはどういうことだよ?」

「契約は「この日本が消滅するまでに成立する英霊全てと戦い、その全てに俺が勝利を収める」ことを以って完了する」

「——な」

二人は思わず言葉を失う。セイバーは何でもないことのように言うが、この国に成立する英霊全てと戦う——其れはどれだけの回数戦い、どれだけの年月戦い、どれだけの死力を尽くす戦いなのか想像もつかない。途方もなく無限とも思える戦いに、死の間際になっても身を投じるのか。

「……あのさ、一つ聞きたいんだけど、セイバーって戦うの好きなの?」

「戦いを楽しい楽しくないで考えたことはない。しなければならぬからしているだけだ。趣味で戦うなど時間と労力の無駄だろう」

「じゃあなんで、」

同じようなことを前にも聞いた気がする、明は思った。そう、キャスターによる聖杯の酒宴は、これと似たような流れを追っていた。あの時、セイバーは「勝利しないことがあってはならない」と言っていた。そして此度も、彼は誓う。

「……勝つことは俺が俺である唯一だ。そして、それが俺の成すべき誓いだ。生前に、俺のいるべき場所であった人々が、俺に「最強」を望んだ。その望みに俺は応える」

「でも、それ、その願いを果たしてからも、セイバーは世界に兵器扱いされてずっと戦い続けることになるんだよ」

あまりに常軌を逸した願い。本当に本気かと知りたく、明はセイバーに「自分の終わりがそれでもいいのか」と問う。しかし、護国の英雄がその瞳の鋭さをひるませることはなかった。

「——その望みが叶うなら、俺は構わない」

それから打って変わって、セイバーは正座のまま、明に向かって再び頭を下げた。

「霊体化できない半端なサーヴァントで本当に申し訳がない。……あと、俺からマスターに言いたいことがある。しかし今は回復を優先するべきだから、それは後にする」

それだけ言うと、本人は話が終わったと言わんばかりその場に寝床もなく横になり眠りについてしまった。明と一成は顔を見合わせていたが、口火を切ったのは明の方だった。

「あのさ、一成、一つお願いがあるんだけど」

「……なんだ？」

「昨日ホテルから戻ってきたって言ったけど、ホテルの荷物とかちゃんと持ってきた？」

「……いや、昨日は戻ってくるのに一生懸命で置いたまんまだ」

「じゃあそれ取りに行ってくれない？あ、もしキツかったら無理しなくていいから……」

「お、おう」

ぎこちない動きで立ち上がると、一成はアサシンの引きつれて明の部屋を後にした。セイバーの寝息だけが部屋の中にあった。明は寝返りと打とうとしたが、腹が痛くて断念する。やっと気付いたが、傷が熱を持っていて痛みと共に意識を遮ってくる。

疲れと眠気、痛みの上にセイバーの衝撃発言が加わって頭が混乱している。

「……セイバーって正気？」

古代日本の英雄の気持ちなど、現代の一魔術師である明には理解の仕様がなない。英霊は生前の記憶を持っており、セイバーだってあのなりだが中身は明より年上である（良く忘れそうになるが）。

それにセイバーの人生はセイバーのもので、ポツと出の明が余計な

口出しすることではない。何を願おうと彼の勝手だ。

それでも、セイバーの願いは尋常ではない。「戦いが好きだから、もつと戦いたい」というならばわかる。だが、それでもないのに未来にも生まれるすべての英霊と戦うことは狂気の沙汰だ。

永久とも思える戦いに身を晒し続けていくうちに、その「日本武尊」の魂はいずれ「日本武尊」であることを忘れ果ててしまうだろう。何故「最強」を願ったのか、最初の思いさえ忘れて、最後には「戦って勝つ」だけのモノに成り果ててしまう。

仮に人格が残されていても変質は免れない。その末に彼は彼本来の時間軸に戻り、伊勢の能煩野で死を迎える。そうして死んだあとでさえ、世界との契約により彼の魂は「世界」なるものの手によって、殲滅兵器として使役されるのだ。

——何故、セイバーはその道を選んだのか。

一欠の救いさえも投げ捨て、聖杯にも目もくれず、好きでもない戦いに身を窺し続けると決めさせたものは何か。

剣を置いて伊吹の山に向かい、死にかけた果てに思ったことは。

——「生前に、俺のいるべき場所であった人々が、俺に「最強」を望んだ」から——

「——ばか」

明とて未だ重傷を負った身である。体に残った熱と疲れによる睡眠に手を引かれ、彼女は再び眠りについた。

## 12月6日② 日の下の大盗賊

明がひとまず覚醒したことを確認した後、一成は屋敷の食堂のイスにどざりと座り込んでうつぶせになり、テレビを横目で眺めていた。

全身が猛烈な筋肉痛になっていよう、歩くごとに体が痛む。一成自身、普段の運動量が相当なもののため、これほどの筋肉痛は久しぶりである。ただ、行動できないほどではないために体を動かしている。それにはもう一つ理由があるのだが――

『CMの後も、引き続き春日市における異常気象と不発弾についての報道をお送りいたします』

点けていたニュースでは、予想はしていたが大西山のことが取り扱われていた。昨夜（今日）深更、局所的な大ゲリラ豪雨と雷雲が発生し、それが地中に埋まっていた不発弾を誘爆させて大西山を無残な有様と変えた、との物凄い理屈で特集が組まれていた。

中継の映像に映し出された大西山は既に原型がないといっても差し支えない。木々に覆われていたはずの山は地肌を晒し、標高が明らかに低くなっている。セイバーの対城宝具が振り下ろされた箇所は、あたかも雪山のクレバス現れたかのごとく、真つ二つに引き裂かれ地層を剥き出しにしている。多量の水が降り注いだこともあり、一成たちが立ち去ったあとに土砂崩れが発生して山自体の形が変わっていた。丁寧にビフォーアフターで比較してくれているので、その様は一目瞭然だ。

一成とアサシンは直接その宝具が解放される瞬間を見たわけではないが、宝具には巻き込まれている。それに加えてこのニュースの映像で桁外れの威力を改めて知った。

「残るサーヴァントはセイバー、ランサー、アサシン、か」

『何気に大詰めじゃねーか』

アサシンはご機嫌に念話で話した。一成とアサシンの契約関係はもちろん続行中だが、大きな目的である「キャスターを倒すこと」は

完結した。

けれど、一成はアサシンとこのまま戦いを続けるつもりであり、アサシンも異存はなかった。

今でもアサシンの本当のマスターは悟だ。そして、一成も本当のサーヴァントはアーチャーだと思っている。一成とアサシンは、偶然、利害の一致にして契約を取り結んだことが始まりだった。今、互いに当初の目的は果たし終わっているのだ。

しかし戦いはまだ終わっていない。アサシンには悟を何事もなく日常へ返すという目的が、一成はこの戦争をやりぬき終わらせるという目的がまだあるのだ。

一成はテレビの電源を切ると、席を立った。明に頼まれたように、ホテルに放置した道具を回収しなければならぬ。

その前に一度、悟の状態を確認しようと一階の客間に向かった。

碓氷邸は暮らす人数に比して無駄に広く、客用寝室と応接間がある。一成が二階の客用寝室で、悟は一階の応接間を改造して寝室にした部屋を使っている。二階の子供部屋は明のもの、父が使っていたと言う部屋はセイバーの部屋だ。

一階のホールを横切って応接間に入ると、ソファベッドの上に寝転がり毛布にくるまった男の姿があった。

昨夜、山を下りてからは一成が明を抱えてセイバーと飛行して碓氷邸に戻った。その間、アサシンはホテルに戻り、悟を連れてきた。キヤスターの呪いが解けていなかったらどうしようと思ったが、杞憂に終わり無事悟は通常の状態に戻っていた。

だが、一成たちが戦闘を行っている間、撫物が切れた後は彼自身の力だけで呪いを抑えなければならなかった。もちろん悟にそのような力は望めない。結果、呪いは解けたが悟の体は著しく衰弱した状態であった。

一成が治癒の魔術をかけようとしたが、彼自身魔術を行使できる体調ではなかったためにできなかった。しかし解呪された今、悟は体力そのものが弱っているだけのため、眠っていれば回復する筈だった。

一成は起きないようにそつと様子を窺うだけのつもりだったため、忍び足で近寄ったが無駄だったようだ。

「……土御門君か？」

悟の顔色は土気色をしているが、意識はある。少し前からまどろんでいたようで、焦点の合った目が壁に掛けられた絵を見ていた。

逆に一成の方が驚き、おっかなびつくり声をかけた。

「……お、おはようございます……」

「……戦いは、どうなったんだい？アサシンは？」

「俺アこのとおりぴんぴんしてるぜ。キヤスターは見事俺の八面六臂の大活躍により御退場したぜ。あのねーちゃんとセイバーもちやあんと生きてら。今は寝てるけどな」

アサシンは霊体化を解いて、いつものド派手な襦袢と着流しの姿を晒した。アサシンが相手をしていたのは本当にアーチャーだけだが、そこはご愛嬌である。悟はほうと長い息を吐いてから、一成に顔を向けた。

「土御門君、ありがとう」

「……俺は別に、大したことはしてません」

「おい無視かコラアいい度胸だ」

「……悪いけど、もう少しだけ寝かせてもらってもいいかな」

悟は笑っていたが、体力が回復していないために再び瞼を閉じた。一成たちの気配で起きて、彼らが無事であったことに安堵して再び気が抜けたと見える。アサシンは微妙に消化不良の様子だったが、相手は状態が状態だ。諦めて再び姿を消した。

「……とりあえず、大丈夫っぽいな」

一成はそつと応接間を後にする。これからホテルに向かい、道具を取りに行くのだが目が霞んで体が重い。

「……あー……」

最初にバーサーカーと戦った時、次にバーサーカーを倒した時――

腕を斬られた時も、次の昼には、体調的には回復していた一成である。しかし彼は昨夜の激闘からまだ一睡もしていない。もちろん明や悟の手に奔走していたのもあるが、二人が安静に入ってからには仮眠をとる時間くらいはあった。

それでも彼は眠っていない。

意識を失おうとすると、何かわけのわからないものに体と意識を持って行かれそうな、気がする。それがあまりにも気になって、休息を求める体に鞭打って何か雑用をして目を覚まし続けていた。

『つーかお前、大丈夫か？寝てねーだろ』

「……寝てねーな」

流石にアサシンも一成の変調を知っており、声をかけてきた。一成とてこの変調の原因が何かくらいはわかっている。昨夜のキャスター戦——一成とアサシンにとってはアーチャー戦が原因に決まっている。

「……あの時、俺は、未来が」

『は？』

魔術に詳しくないアサシンはぼかんとした声を出した。あの時——アサシンとアーチャーが戦っていた時からアーチャーが消滅するまで、ほんの僅かの未来だが、それが一成には映像としてとらえられていた。そして黒い箱の中身から引きずり出した、稀代の陰陽師の術技。

アーチャーは、『千里天眼通』と言った。千年の昔、安倍晴明が乙姫——竜の娘から授かったモノ。

『……とにかくあの姉ちゃんにやあ悪いが、お前絶対相談すんだぞ！今度はお前がぶつ倒れたら洒落にならねーだろ』

「お前って結構世話焼きだよな」

『あん？』

アサシンがいきなりドスの効いた声で脅しつけてきたので、一成はおとなしく黙ることにした。

気づけば時刻は既に午後三時を回っている。日の暮れの早いこの時期では、もう太陽が傾き始めているように感じる。

先ほど明から頼まれた任務を果たすべく、一成は簡単に身支度を整え、碓氷邸を出た。外は風が冷たいが日差しは暖かい。何の変哲もない住宅街を歩いて北上し、春日駅方面へ向かう。

何か考えていないと眠りの世界に引きずり込まれそうな一成が考えることは、明とセイバーのことだ。二人とも変わった人物だとは思っていたが、キャスター戦を通して変わっている、と言うどころの話ではない気がしてきた。

「——勝つことは俺が俺である唯一、か」

セイバーは嘘をつかない。当初はマスターに対してだけかと思っていたが、一成に対しても流石に仲間と認識している為か、齒に衣着せないレベルで本当の言葉しか言わない。だから、先ほどのことも真実だろう。

途方もないほど長い戦いを求め、勝利に至るまで戦い続け、その果てにようやく死を迎え、その先も魂は殺戮の為に使役される。行く先々に安寧の欠片もない荒野。

『願いにもよるけどよ、なーんか聖杯自体に願いのあるヤツって病気にしか見えねーぞ。お前の貴族サマとかもうヤバかったな、病膏盲に入るってのはアレのことだな』

「……アーチャーがアレなのはわかってら」

アーチャーは「幸せとは何か」の答えを探していたが、その願いのバカバカしさには気づいてはいたのだ。認めたくはなかったのだからうけれど。

『ままならねえからこそ人生だろうが。それをあんなチートな道具でやりなおしたり逃げたりできるんなら、歯食いしばって生きるのがバカバカしくなっちゃう』

アサシンの意見には一成も同感である。自分が呑気に生きていた、比較的幸せな人生を送ってきたせいかもしれないが、今となっては願いななどない。

「じゃあお前、セイバーをどう思うっ？」



『掛け値なしのバカだな』

あんまりな言い種に一成は言葉を失ったが、アサシンは気にかけない。もし実体化していたらハナクソでもほじくつているであろう投げやりさだ。

『これだからクソマジメで融通が利かない奴は始末が悪いんだよ。極端から極端に走るからな。お前のいい加減さをわけてやれ』

「俺のサーヴァントはどっちも俺をディスることが趣味なのかア!!」

サーヴァントが過去の英雄とはいえ、もう少し尊重してくれてもいいのではないかと思う土御門一成十七歳。彼のツツコミを無視し、アサシンは続ける。

『まー皇子サマもあれだが、あの姉ちゃんの方もだ。そっちもいい感じやしねえな』

「……だよな」

セイバーの剣をその体に入れていたとはいえ、彼女の大西山における行動は納得しがたい。いかに傷が治るとはいえ、腹に剣を刺されて動揺せずにくろつとしていられるのは可笑しい。その上、一成を守るべく何の躊躇いもなく盾にすらなつた。

そして今日彼女の部屋に入る直前に聞こえた言葉。

「魔術師なんていつ死んでもおかしくない職業なんだから、この怪我くらい大したことじゃないよ」

魔術行使が危険を伴うから死に瀕することに慣れていると彼女は言う。だが、死を覚悟して戦うことと、「死んでもいい」と思って戦うことは絶対に同じではない筈だ。

一成は首を振つた。自分を助けてくれた者が、自分のことを粗末にしている——あまり想像して楽しいことではなかった。今は結論を出せない、一成はアサシンに話を振つた。

「あいつのことは俺たちだけで考えてもしょうがないな、セイバーも混ぜないと。話は変わるけど、お前の聖杯にかける願いつて何だっけ？受肉だっけ？」

『あー……最初はそう思ってたつちやあそうだけど』

戦争も終盤に近付いているため改めて一成は聞いてみたのだが、本

人ですら自分の願いを把握してなかったのではないか、と思われるほどの適当さでアサシンは応えた。セイバーもキャスターも、ランサーも、願いはなくても目的をもって聖杯戦争に望んでいたのに、アサシンは違う。

『やっぱりもう特にねえな。つか現界してから月見酒も飲めたし、悟も無事だし、猿関白の元ネタもぶっ飛ばせたしなー。あとは今が桜の季節なら言うことなしだったんだが……じゃあ聖杯得たら一日だけ春にして花見でもすつか』

見る限りアサシンにはなんの屈託もない。彼が虚言を弄すことはイメージに合わない……こともないが、今嘘をつく意味は感じない。だが、それならば何故彼は聖杯の召喚に応じたのだろうか。

「お前には心残りとか、生前何とかしたかったこととかないのか？」  
『おいおい俺の伝説くらい知ってんだろ？ 歌舞伎とかも含めておおよその話くれーは』

石川五右衛門。戦国時代にその名を轟かせた大盗賊。実在の石川五右衛門よりも、彼の死後江戸時代に浄瑠璃や歌舞伎の英雄として扱われ、伝説化した石川五右衛門像の方が人口に膾炙している。

出生は諸説ありはつきりしない。伊賀にわたり忍者の弟子になったあと盗賊となったとか、奉公した男性の妻と駆け落ちしたとか言われている。

手下や仲間を集め、権力者相手に悪事を繰り返した。秀吉の甥・豊臣秀次の家臣から秀吉暗殺を依頼されるが、寝室に忍び込んだ際に香炉が音を立てて気づかれ、さらに部下の裏切りで悪事の全てを暴かれて釜茹でに処される義賊でもある盗賊が、伝説の石川五右衛門である。

最も有名なのは、以下の風景だろう。秀吉の命を狙ったが失敗して追われる五右衛門が、それでも京都の南禅寺の山門の上からの景色を眺めて詠う場面だ。

橙色の光が山端に輝く。眼下に広がる山々は、満開の花弁をつける木々に覆われて薄い桃色に染まる。風が吹く度に白い花びらは宙に

舞い踊り、光を透かして煌めいている。

一世を風靡した大盗賊は、門の上にしつらえた部屋に悠々と腰をおろし、手に馴染んだ煙管を燻らせる。芳醇な花の香りを含んだ風が、紫煙を吹き散らす。

「絶景哉！絶景哉！春の眺めを値千金とは小せえたとえ。この五右衛門が目からは値万両、何万両」

弱きものの味方であり、風流を知る義賊——それが、人々が夢見た「石川五右衛門」の姿。

だが、そのような華々しい姿に対して、実際に生きていた石川五右衛門についての記録は少ない。生年は不明、大々的に盗みを働いていたことと、最後は時の為政者・豊臣秀吉の手の者に捉えられ母や子もろとも釜茹でにされたことだけしか残っていない。

アサシンの伝説を説明され、一成はほうと呆けた声を出した。義賊や大泥棒というイメージを抱いていたため、生前のアサシンにまつわる話の少なさに驚いたのだ。

「石川五右衛門の話は知ってるけど、じゃあ生前のお前ってどんなだったんだよ」

『それがわかんねーんだよな』

「は？お前の事だろ？」

『前に悟にも言ったけどよ、俺は記憶が幻想伝説に塗りつぶされてる。食ってけなくて盗賊してたことと釜茹でにされたことくらいは多分生前にしたことだろーがな。閔白を殺そうとしたこともあるし黄金の太刀を盗み出した記憶もあるが、もう伝説なのか本当に生前俺がしたことなのか境がわからん。生前の俺なんて殆ど残っちゃいねえぜ』

生前は一介の盗賊でしかなかったアサシンは、生前の話よりもその後には作られた伝説の方が人々に知られている。権力に立ち向かう庶民の為の英雄像——人々の願望で英霊となったため、その願望によって生前の記憶が塗り込まれてしまっているのだ。

最早今のアサシンの人格も「人々の願った」それであり、過去も「人々の願った」それである。

「人々の願う「アサシン」は、この世に悔いなしって思うから、お前に願いはないのか……?」

死後に伝説によつて記憶が霞むという状態がどういうことなのか、今生きる人間の一成には到底わからない。人格を形作る記憶が「伝説」にすり替わっているとはいへ、記憶となった伝説から生まれる欲望はないのだろうか。

アサシンは体があれば殴っていた、と言わんばかりの語調で叫んだ。

『この世に悔いなし? バカ言うんじゃない、悔いだらけだぜ!! 覚えてる生前の俺は、食い詰めてやむに已まれず盗賊を始めたんだぜ? その果てに、あの終わりだからな』

子供、妻、もろとも釜ゆでにされて死ぬ。五右衛門はその刑の執行の際、自らの子を先に熱湯に沈めたという。あまりの熱さにわが子を踏み台にしても熱湯から逃れたかったのか、それとも苦しむ間もなく殺すほうが慈悲だと思つたのか。『英霊』となつてしまった彼には、それもあやふやだ。

それでもアサシンには確固たる願いはない。かつて受肉を願ひに上げていたのも、現代の日本を覗いてみたいという気持ちから発したものだ。今や彼には受肉という願いも最早淡い。アサシンは頬を掻きながら——霊体化した状態だが——言つた。

『生前の自分のことは断片しかのこつてないが、それでも忘れてないことがあつてな。食い詰めたから盗賊になつたつ——ことは、たとえば他人の物を奪つても——生前の俺は、死にたくなかつたんだな』

元々は、食い詰めたから盗賊になつたというくせに——この暗殺者は、えらく自信のある声を出す。ただ死にたくなかつた——何も持たざる庶民が最後に持つ、自分という名の財産を守りたかつた。

一成は、何故アサシンが英霊となり過去の記憶を薄れさせても気にしていないのか理解した。

生きるために、他人を押しつけてでも命と財を望んだ。アサシンはそれを好いとは思っていないが、後悔もしていない。釜茹でも彼に非のないことではない。

けれど、元々戦乱の被害にあっていた彼はこうも思っていた。

——殺さなくては殺されるなら、自分は殺すほうを選ぶ。

けれど、もし、こんな持たざる者である自分たちを助けてくれる正義の味方がいるのなら、それはどんなに嬉しいことだろうか。

天下の義賊。庶民の幻想。代わって権力に抗う者。

そういった存在<sup>英雄</sup>を望んでいたのは、生前の石川五右衛門も同じだったのだ。

『だから、生きて、死んで、それだけで大したもんだ。どんなにクソつまんねえ人生でも、どんなに悲惨でも、どんなに幸せでも生きてただけで大手柄の表彰モンだ』

弱きに寄り添うアサシンは、どんな人生でも良しと受け入れる。悪人でも善人でもそれは変わらない。悔いだらけでも、それでも己が生き足掻いた結果ならばそれでいい。一成はじんわりと嬉しくなって、顔を綻ばせた。

けれど、決してアサシンは善人ではない。生前「生きる為なら、他を殺す」と開き直って豪語するように、彼は悟の前のマスターを裏切ろうと画策していた。筋金入りの権力・権威嫌いのアサシンは義賊であるにしてもやはり盗賊でもある。人生は生きただけで足るものとしながら、自分の楽しみには妥協しない。

アサシンは霊体化のままにやりと笑って、妙な笑いがにじんだ声を出した。

『ま、そういうサーヴァントだが改めてよろしく頼むぜ、マ・ス・ター？あと二騎だしな』

「キモっ……つか、あとはセイバーとランサーか。キツいな」

三騎士クラス中二騎が残っており、一成はなまじ二人の実力を知っているだけあって背筋を寒からしめた。セイバーの宝具は強烈で、かつ堅実に戦えるランサーとでは地力の差が目立つ。しかしアサシンは一成ほど危機を感じていない。

『あん？ランサーはともかく、セイバーはどうかなるかもしれない

ぜ？俺はあの剣を持つてゐるって知ってるだろ？』

「――あ！『尊つぼききりを受け継つぎし剣!!』」

対神宝具である神縛りの剣があったからこそ、一成たちはキャスター攻略をあんまどろっこしい方法で行ったのだ。今やその剣はアサシンのものである。

「でもアイツ、山で剣なしで戦ってたけどそれでもやたらと強かったよな？」

大西山決戦の序盤・キャスターの四天王と剣なしで戦ったセイバーは、それでも彼らを圧倒していた。神性の下がったセイバーを剣で縛る意味はあるがそれでも強い。そしてアサシンは火力として圧倒的に劣っている。

『そりゃあ気になるところだが、俺は敏捷ならあの皇子サマと違ってタメを張れるレベルだ。それにキャスター四天王は準サーヴァント程度だからな、俺なら互角くらいには持ち込める。場所を市街にすればあのアホな宝具は使えネエだろうし、どうにか殺れるかもしれないねえ』

それでも互角か、と一成は唸った。元々マスターとしてもサーヴァントとしても、向こうの方が圧倒的に格上なのだ。ただ、明とセイバーと戦うのなら、言い方としては変だが円満に戦って終われると思う。

『ランサーの方はなア……真名をわかつちやいるんだが、あいつの宝具をどうにかできる気がしねーんだよな』

折悪しくキャスターと戦うランサーを目撃できていない彼らは、ランサーの宝具の開帳を見逃している。だが、アサシンはかすれた記憶とはいえ、生前にランサーを知っていた者なのだ。だから宝具の開放を見ていなくても、内容は見当がつく。しかし、わかっているも避けられないものは存在する。

念話で話しながら歩いているうちに、宿泊していた「ムーンライト春日」に到着した。明は長めに宿泊費を先払いしていたというから、問題なく荷物を回収できた。

一成は自分のドラムバッグと明のトランクを持ち出した。こういうときに便利なのがアサシンの宝具で、人影のない場所にて彼を実体化させて宝具の中に荷物を収納させてもらった。

今日明日は回復に費やし、アサシンを自由に動かせるようにしなければならぬ。一成は当然のようにさっさと碓氷邸に戻るべく踵を返す。いつものように人通りの多い春日駅前を後にして、コートの前を合わせた。と、唐突に彼の腹の虫が鳴いた。

「……そっ、いや、今晚の飯……」

思えば昨日の夜から何も食べていない。正直一成は食事どころではないのだが、さらに食事をとらないと精力がつかない。明は食事をとれるのかと心配しながら、一成はショッピングモールに立ち寄っていくことにした。

立地面積が広く二階建てのショッピングモール。一階の食品売り場は時間も相まって人が多い。特に夕食の食材を買いに来た主婦が多い。

彼は出来合いの総菜や温めるだけで食べられるレトルトを籠に放り込んでいき、会計を済ませた。しばらく霊体化を決め込むアサシンは今晚食事をとらないつもりらしく、注文を付けてくることはなかった。

人目につかない場所がモール内には見つからず、碓氷邸はここから徒歩十分もない。アサシンの宝具に入れないで、このまま帰って帰ろうと出入り口へと向かう。

モールといえば、一成がキリエと初めて出会った場所である。昨夜、ランサーのマスターにさらわれたというキリエのことが気にかかるとのだが、アサシンも自分も絶不調で拠点とかいう屋敷に行っても口々に戦える気がしない。明たちに助力を頼みたいが、明もあの状態である上に、彼女らにはキリエを助ける理由がない。

「くそ」

一成は毒づきながら、ビニール袋を抱えて歩く。モールの出入り口は三つ存在するが、北口の傍には休憩用のベンチがある。いつもは親子連れがよく座っている。今日もそういう光景が広がっているだろ

うと、何の気なしに目をやったが、彼は我が目を疑った。

「……キリエ？」

艶があり、腰まで伸びた黒い髪。白いワンピースに、腰には紫のリップンがついている。黒の革靴に白い靴下。それに、紅い目。

——キヤスターのマスター、キリエスフィール・フォン・アインツベルンがそこにいた。

足が床についておらずぶらぶらさせて、所在なげにその目は伏せられてる。

ランサーのマスターによって連れ去られたという彼女は、はっきりと生きた姿を一成の眼前に現わしていた。



12月6日③ 聖杯の娘、来る

「おい！キリエ!？」

「……！カズナリ・ツチミカド!!」

キリエは弾かれたようにその顔を上げた。一成は反射で彼女に駆け寄り、実体を確かめるように頭やら肩やらを触る。

「お前、生きてたんだ……ぐおふ!!」

「レデイの体を無遠慮に触るなんて失礼よ、カズナリ・ツチミカド！」  
キリエの張り手が炸裂し、一成はものの無様に床にひっくり返った。道行く人々の冷たい視線が刺さるが、気にしている場合ではない。ダルマのように起き上がり、キリエの腕を掴んだ。

「お前、体は大丈夫なのか。何でここにいるんだ。ランサーはお前の事を生死不明だって言ってたぞ」

「……見ての通り、体なら平気よ。あのハルカ・エーデルフェルトとか言う魔術師は魔術師の風上にも置けないモノね」

キリエは吐いて捨てるように呟く。「二つ目の質問だけれど、ここにいるのは、これからどうしようかと考えていたからよ。どうにかして屋敷に戻ろうと思ったのだけれど、駅のテレビを見て、私の拠点は——セイバーの宝具かしら？に壊されてしまったってことを知ったから」

一成もキリエの拠点である城のような屋敷を見た。そこで戦っていた一成とアサシン、アーチャーはセイバーの宝具に捲き込まれたのだから良く覚えている。山に不釣り合いな壮麗な屋敷は、もう木端微塵に跡形もなくなった。

「……お前はサーヴァントを失った。じゃあもう戦争に参加しないでいいだろ。サーヴァントを失ったマスターは教会に行けば保護してくれる。一緒に教会行っただから場所、知ってんだろ」

「……あんなところ、行けるわけないわ」

キリエは俯いて、声を絞り出した。一成も喉に小骨が引つかかったような感覚を覚えた。元々ランサーのマスターであるハルカはラン

サーをキリエに奪われて、教会に保護を求めた。

しかし、ハルカはこちら側の騒ぎに乗じて山に侵入し、まんまとランサーを奪還しキリエを連れ去った。なのになぜ、こう簡単にキリエを逃がしているのか。わざと逃がしたのか。

それにハルカは一度教会に保護を求めたくせに、平然と聖杯戦争に舞い戻っている。それを教会は許しているのか、そもそもハルカは本当に保護を求めたのか。

一成はここで初めて「教会」の神父たちを訝しんだ。教会の神父はいけ好かないと思っただけだが、これまでには明の協力者ということ、何かをたくらんでいる者たちとは考えたことがなかった。

もしかしたら、キリエが教会に行かないことは良い選択なのかもしれない。

「……お前の家って、立派な魔導の家なんだろう？じゃあその家に帰れよ」

「……バカね、カズナリ・ツチミカド。私は聖杯を得るために生まれた。帰れやしないわ」

その言葉は前にも一成は聞いた。聖杯を得る為だけに作られたホムンクルスが、キリエスファイル・フォン・アインツベルンだと。役目を果たせない彼女に意味はないと、アインツベルンは思っているのか。

だとすれば、今のキリエが行くべき場所はどこにもないということになる。

「……じゃあ、うちで良ければ来いよ」

「……え？」

予期していなかった答えに、キリエははつと顔を上げた。アサシンは念話で「気持ちわかるが姉ちゃんたちがウンって言うか？」と一成に告げた。一成も、明たちが同意してくれるかは微妙だと思っている。

サーヴァントを失ったとはいえ、キリエはマスターである。それを

ほいほいと家に呼び寄せるなど、セイバーは無論明だつて反対するだろう。

しかしキリエは一成たちが知らない、この戦争の裏事情を知っている節がある。それを全て白状するといえ、交換条件で碓氷邸にて保護できるかもしれない。

ただキリエがそうしてくれるかもわからず、白状しても明やセイバーが同意してくれるか。

けれども、キリエをこのまま放っておく選択肢は、一成にはなかった。

——もしそうなつたら、クソ狭い俺の家に戻るか。

「……私に居場所をくれるというの？カズナリ・ツチミカド？」

「そんなたいそれたもんじゃない。メシと寝床くらいなら……」

「……それなら、あなたのサーヴァントと令呪、くれるかしら？」

一成は思わず跳び退った。キリエの小さな体には余すところなく魔術刻印が刻まれていて、今、それが鳴動している。まさかこんな人の多いところで派手な魔術を行使するつもりかと、一成は懐に入れた呪符に触れた。

「……そうすれば私はまだ戦えるわ。聖杯を得られるわ!!」

「……やめろ!」

「一成!」

キリエの魔術が速いか、一成の叫びが速いか、アサシンの実体化が速いか。キリエから炸裂した光の球がどこかに向かって炸裂し、爆風と光によって視界と感覚を奪う。普通に買い物にやってきた人々は、何が起こったのか全く分からない。

だが、幸いにもそう大きな魔術ではなかった。近くのキッチン用品売り場を破壊したが、重傷を負った人間はいない。

「な、なんだ!!」

「爆発!？」

彼らには何もない場所がいきなり爆発したようにしか見えないだろう。シヨツピングモールは一気に騒然とし、警備員が走ってくるのが見える。巻き込まれては厄介、と判断したのはアサシンだ。彼は一成とキリエの首根つこを掴むと、疾風のような速さで出口から飛び出した。

奇しくもそのままやってきたのは、一成がキリエに無理やりエスコートさせられた時に休んだこじんまりとした公園だ。日が暮れかかった公園には、一成とキリエ、霊体化したアサシン以外誰もいない。騒然とする春日市において、小学生は集団下校をし中高生も部活中止で早帰りさせられている。

逃げてきたはいいものの、一成はどう声をかけるべきか迷っていた。当のキリエはおとなしくベンチに座ってはいるが、黙り込んでしまっている。

いつまでもこうしてはいられない。一成は言葉を選びながら、話しかけた。

「……悪いけど、アサシンはやれない。俺は最後まで俺の戦いを全うする」

「……そう。サーヴァントのいるあなたがそのつもりなら、私には奪うことはできないわね」

先ほどはヒステリックささえあったのに、今のキリエは見る影もないほど落ち込んでいる。いや、この振れ幅こそ、今のキリエが極めて情緒不安定でいる証拠だ。

聖杯戦争に敗れたことは、それほどまでに彼女に衝撃を与えるものだ。聖杯の為に作られたのであれば、生きる意味を奪われたに等しい。

そこまで考えて、一成に言えることはもう決まっていた。

「……行くところなかったら、うちに来いよ。確氷がダメって言った

ら、俺の家に来ればいいから」

夕暮れのこの寒気の中、キリエは白のワンピース一枚だ。寒さには強いと彼女は言ったが、それでも体には悪いだろう。公園の街灯が灯り始め、釣瓶落としの日はもうわずかだ。そうしてキリエは漸く口を開いた。

「……わかったわ」

「よし、じゃあ行くか。流石に寒いだろ」

「……セイバーを奪ってもいいかしら」

「いいわけないだろ!! いやその前にセイバーにぶつ殺されるからやめろ!」

「冗談よ」

キリエの冗談は、ランサーとアーチャーを従えた経緯があるだけに冗談に聞こえない。キリエはそつと手を伸ばす。この手を取り、連れて行けと言うように。その手を取って、一成はキリエを立ち上げられた。

その時に、彼女は久方振りにその顔に笑みを刻んでいた。

「……何か忘れているような……」

右手はキリエとつないでいる。しかし、キリエとつなぐ前に何か持っていたような気がする。

『お前メシショッピングモールに置いていったろ』

「あっ!!」

冷静なアサシンのツツコミで我に返る。騒動のはずみで完全に忘れていたが、買ったものをモールに置いてきてしまった。それどころかあの爆発に巻き込まれて完全に亡きものになっている可能性も高い。一成は深々とため息をついた。

「……近くのコンビニかなんかで買いなおすか……けどコンビニ高いからな……」

「ねえ、カズナリ・ツチミカド。一つお願いがあるのだけれど、聞いて

くれるかしら」

「んだよ」

「ちよつと今から大西山に行つてほしいの」

「今から!？」

「もしかしたら空手に終わるかもしれないけれど、私の礼装が残っているかもしれないわ」

日が暮れたら夜になる。夜になれば戦闘が始まる可能性がある。危ないと一成は思ったが、昨日の今日である。アサシン、セイバー共に消耗が激しいことは当然だが、それはランサーも同様だろう。

今日は襲い掛かつてくる公算は低く、それに逃げるだけならアサシンに一日の長がある。

一成が諾と言おうとしたその時、キリエはきつと朱い目で彼を見上げた。

「私のキャスターが敗れたことは認めるわ。でも、私のキャスターを倒して無傷でいられるサーヴァントなんて存在しないんだから」

「……おう。クソ強かった」

裏切られても一成のサーヴァントがアーチャーであったように、アーチャーとランサーを使役しても、キリエのサーヴァントはキャスターであったのだ。

キリエの言葉はそういう意味だと、一成は信じた。

今から行くのならば、アサシンの宝具の中に入って彼に移動してもらった方がはるかに速い。アサシンはサーヴァント使いが荒いと文句を言いながら、彼らを大西山まで運んだ。

\*

平時はこたつを布団代わりにしていたセイバーだが、基本的に彼は

いつでもどこでも寝られる。魔力不足の際は物理的にマスターの近くにいた方が魔力供給がはかどるため、明の部屋の絨毯の上で寝ていた。

昨夜の激闘により魔力を大幅に消費したため、セイバーの体は風邪に罹患したようにだるくなっていた。それにマスターである明も浅からぬ傷を負い動けないため、彼女の負担を極力減らすべく限界まで魔力供給を控えていた。このペースでは再び宝具を放てるようになるには、あと丸一日の休息が必要だ。

セイバーが目を覚ました時には、既に日は暮れきっていた。部屋の電気をつけっぱなしにしてマスター共々眠りこけていたため、部屋は暗くない。窓から見える外は濃紺に染まり、太陽は家々の隙間から見える地平線に一筋の橙を残しているだけだ。

「……何だ、起きていたのか」

明はベッドの上で上半身を起しており、何故かセイバーをじつと見ている。それに気づいたセイバーが声をかけると、何故か彼女は残念そうにため息をつく。

「……動かなくて黙ってれば美少年なのになあ」

「何か腹立たしいことを言われているような気がするのだが、何か用か」

「いやなんでも……っ」

慌てて頭を振った明だが、俄かに声を詰まらせ、腹を押さえて顔をしかめた。彼女の体にはセイバーの剣が体に納められているとはいえず、傷は治ったわけではない。一成による治癒なら明にも効くだろうが、一成の不調でそれもできていない。

セイバーは見えていないが、明は四天王との戦いで腹部を強打していることは知っていた。どんな攻撃を受けたか、傷を見て大体わかっているのだ。

ランサーもアサシンも、昨夜の消耗が激しい。ゆえに今夜の戦いは

どこも見送るであろうと考えているセイバーは、明を寝かせるべくベッドへ押し付けた。

「まだ大人しく寝ている」

「……きついで大丈夫だよ。戦おうと思えば戦えるし」

「……本当に、その状態で戦えるの？」

あまりにもお気楽な発言に、セイバーは容赦なく不機嫌な声を出した。

そう、セイバーは明に聞かなければならないこと、言わなければならぬことがたくさんある。キャスター戦の最中、勝手に茨木童子と戦うと言いついたこと、その後キャスターの部下と戦うことになったくせに、セイバーには何も伝えなかったこと。

そうして気づいたときには、血塗れで倒れるだけになっていたこと。

今思えば、バーサーカーとの初戦時に空中から無理に落下したことも今回の前兆であったのだ。

「二つ聞こう。お前は、キャスターの眷属ともいうべき鬼に立ち向かって勝てるよ、無事に生きていられると思っただけか」

茨木童子・星熊童子・虎熊童子は勿論サーヴァントほどの強さはない。だからといって一魔術師が易々と勝てるような相手でもない。おまけに彼らはキャスターの死なない限り蘇るといっておまけつきだった。明は布団にもぐりこみ、考え込む。

「……サーヴァントほど強くないし、勝算はないこともなかったし。それに色々なのにうろろうろされると困るでしょ、セイバーも。キャスターホント、化け物だったし」

「それはそうだ。だが、お前が死ねば俺も消えることを忘れたとは言わせない。せめて俺に「戦う」と念話で知らせるくらいはしてもよかっただろう」

「でもそんなことしたら、セイバーは絶対キャスター放ってこっちにくるでしょ。キャスターはセイバーじゃなきゃ相手できないし、私が



戦つちやう方が早い。それに後から気づいたことではあるけど、四天王が殺しても蘇ってこないように殺せるのは私だけだったし」

明の言うことはその通りだ。眷属と戦う、と明が言い出したらセイバーは間違いなく彼女の元へ駆けつけていた。明とて、彼が自分の身を心配していたことくらいは知っている。だから、彼女はセイバーに対して詫びた。

「心配をかけたことは私が悪かった。けど、あの時私が戦ったことは間違いじゃないって思ってるよ。元々魔術師っていうのは死と隣り合わせの人種。この程度なら大したことない。かすり傷みたくないもんだよ」

本人も気づかぬうちに、セイバーの空気は氷点下といってもいいくらいに冷たくなっていた。元々セイバーに愛想は乏しいが、今はそれを乗り越して能面のような顔になっている。

——死を覚悟して戦うことと、死んでもいいと思って戦うことは似ているようで全然違う。

「……内臓が吹き飛ぶくらいに殴られ、肩を切られ、爆発で吹き飛ばされ、俺に供給する魔力も尽きかけている状態を大したことではないと言うのだな」

流星にセイバーの様子がいつもと違うことに気づき、明は訝しみながら言葉を選んだ。

「……まあ、大したことないは言い過ぎかもしれないけど……でもこの聖杯戦争に参加する以上、死んでも仕方ないってところはあるでしょ？そういう戦いなんだからさ」

「……そうか。ならお前は死んでも仕方ないと、本当にそう思うのだな？本当に惜しくないと言うのだな」

これ以上聞けば取り返しがつかなくなることを、セイバーは知っていた。

しかし、万に一つ——ここで想定していた答えと違う言葉を、明が返してくれる期待もセイバーは捨てられなかった。きつと全ては自

分の考え過ぎなのだと思いたかった。

異様に重い沈黙が部屋に満ちた。

問われたセイバーの主は、暫し沈思したのちにやはり常と変わらないトーンで言葉を紡いだ。

「……まあ、仕方ないとも思うよ」

こういう時に限って自分の勘は外れない——セイバーは我知らず拳を握りしめた。

「いい加減にしろ!!死んでも仕方がないわけがないだろう!!死んでもいいと思いながら戦う者は必ず死ぬ!」

聞いたことのないセイバーの怒声に、明はびくりと身を竦めた。セイバー自身も自分の声に驚いていたが、それでも抑えることができなかった。

死んでもいいと思いながら戦ったのは、マスターの確氷明だけではない。

かつて、妻の元に神剣を置いていった己もまた——

「……私が死んだらセイバーが現界できなくなる。この国に成立するすべての英霊に勝つっていう目的を達成できなくなるから……私が迂闊すぎるから、控えろって言ってる?」

明は一つ一つ確認するようにセイバーに問う。だが、彼女が一生懸命に考え出した言葉はセイバーの思うことではない。

「……そういう意味ではない」

「……じゃあ、私が魔術師としてど三流だとか……」

「……そういう意味ではない」

「……マスター失格とか……」

「……そういう意味ではない」

「……どういう意味?」

——マスターは、死を覚悟しているのではない。

これほどに酷い怪我を負っても自分の傷にこだわらない。目覚めたときに一番に聞いたのは元アサシンのマスター、山内悟の安否だ。そして今問われ考えて出てきたのは、自分の力量が足りないのかもしれない、との見当違いな答え。

バーサーカーと初めて戦った時、彼の正体が掴めなかったため、セイバーは明の意志に逆らい撤退した。セイバーは相手の手の内もわからないまま戦うのは危険だと思ったが、明はバーサーカーが人を食うことを厭い戦い続けようとした。

明の消耗故にキャスター戦で宝具を使うことを躊躇うセイバーに、それでも使えと明が命じたのは、キャスターを倒すため——悟を救うためか。

あれはいつのことだったか。セイバーが真昼間絵にアサシンの前マスターを殺したあと、セイバーが明の方針の温さに異議を唱えたことがあった。その時に、明ははつきりと答えた。

——「セイバーにとつてはつまらないことかもしれないけど、私にとつては大事なことなんだよ。関係ない人を巻き込んで死人を出して、私だけ勝って生き残ってもしょうがない」

明は決して進んで死のうとしているわけではない。危ないと思えば身も護る。

死を望んでいるとも少し違う。だが「死んでしまってもいいか」とは常に考えている。

何故明がそう思うようになったのか、いまならセイバーにもわかる。

手掛かりは、今までいくつも拾っていた。そして昨夜、パスを通じて垣間見た己がマスターの記憶にてセイバーは理解してしまった。

明は優秀な魔術師だそうだ。伝わる魔力からもその程度は知れる。だがいかな優秀であろうと、才能があるうと関係ない。

否、寧ろその才能こそが諸悪の根源、全ての始まりだろう。

——望むと望まないにかかわらず、稀代の魔術師そういう風に生まれてしまっ  
た。

——望むと望まないにかかわらず、神の剣そういう風に生まれてしまっ  
た。

セイバーは生前から人の気持ちを推し量ることが苦手だった。聖杯戦争においても、マスターの意を誤解していたことも多い。しかし、今は明の内心を見抜いていた。

見抜いたのではない。かつての己を幻視している。

「死んでほしくない人はいる。でも自分が死のうとどうでもいい」

——東征の帰路につく日本武尊もそう思いながら、思いながら、その思いを変えることのできぬまま、死の直前で時間に止まったまま、さらなる戦いに身を投じている。

——大和に戻っても、自分に未来さきなんかない。

気づけば、明が寝たままセイバーの顔を覗きこんでいた。どれだけ黙っていたのかセイバー自身もわからないが、訝しがられる程度には黙り込んでいたようだ。

「……セイバー？」

「……明。お前は聖杯を手に入れ、根源に至ることが望みだと俺に言ったな」

「……そうだけど、それが？」

「それは嘘だろう。お前に願いなどあるはずがない」  
「な……！」

明の目が驚愕に開かれる。しかしそれよりも、彼らは同時に別の事に気を取られた。碓氷邸の結界——誰が門から出入りするかを伝える結界が反応している。

気配は三つ。二つは一成とアサシンだが、もう一つは。

「キリエスフィール・フォン・アインツベルン……!!」

「俺が行く！お前は動くな動いたら……何かするぞ！」

起き上がろうとする明に意味不明なことを言いつけ、セイバーは瞬時に部屋から飛び出した。階段は使わずにそのまま一階へ飛び降りて、玄関前のホールに着地して玄関を突き抜ける。

昨日攫われたはずのキャスターのマスターが、何故平然とこの屋敷に現れるのか。一成にはアサシンがついており、滅多なことは起こらないはずだ。

ポーチから見て、こちらへ歩いてくる人間は二人。片方は一成、もう片方は見た目はいとけないキャスターのマスター。濃紺に包まれた時間であろうと、セイバーの目には誰かくらいの判断はつく。セイバーと彼らの距離は十五メートルほどだ。

「止まれ。貴様、何をしに来た」

「……、セイバー、落ち着け、話せばわかる!!」

「何故お前がここにいる？キャスターのマスター。お前はランサーのマスターにさらわれたと聞いていたが」

一成を無視し、セイバーはキリエに問う。セイバーの殺気にも物おじせず、キリエは毅然と答えるだけだ。

「ええそうよ。だけど運よく、というかあいつがうかつだったのね。逃げ出すことができたわ。行く当てがなかった私を、彼は自ら招いてくれたの」

「行く当てがない？サーヴァントを失ったのならば教会に行けばいい話だろう」

「貴方だって教会がただの中立地帯でないことくらい、もうわかってるでしょう？」

噴水の音だけが、彼らの間に流れている。ここで交わす言葉はいつも殺伐としたものばかりだ。

セイバーとてキリエの意味するところは分かっている。一度は

あつさりとランサーをキリエに奪われておきながら、セイバー達の騒動に紛れて山に入り込みまんまと奪還したランサーのマスター。

そして神父は彼を保護しておきながら、山に向かうハルカのことを明たちに事前に知らせなかった。

「私を危険視する気持ちはわかるわセイバー。だけど私にはサーヴァントもないし、令呪の一面も残っていないわ。確かにアキラ・ウスイから奪うこともできるけれど、貴方たちがいては無理でしょう？」

キリエは両袖をまくりあげ、薄い令呪痕が残る腕を晒した。「私にも思うところがあるわ。だから、私に危害を加えなければ貴方たちの知りたいことは私の知る限りで話してあげる。神父——オユウのことも含めてね」

「追い出すにしても、一度確氷と相談させてくれ。もしあいつもダメっていうなら、俺もこいつと出ていく」

当然、何事もなければセイバーは容赦なくキリエを斬り殺している。だが、勝手に行動して良いことがあった試しはない。斬り殺していない、という意味では一成も悟も、マスターが諾とさえいえば既に斬っているはずの人間たちだ。

セイバーはそつと息をついてから頷いた。

「……いいだろう。明の元へ連れて行こう」

12月6日④ 続・聖杯の娘、かく語りき

碓氷邸に上げられたキリエは、家主の明よりも家主らしく、彼女の部屋でロッキングチェアに腰かけている。いつもならば明は客人に紅茶くらい振る舞うのだが、今は体を動かすこと自体が苦しい為、ベッドの上で上半身だけ起こしたままセイバーにウイダーインゼリーを持ってこさせた。

「私のお城ほどではないけれど、まあまあ良い屋敷ね、アキラ・ウスイ。本当は紅茶が欲しいところだけれど、カズナリ・ツチミカドに免じて許してあげるわ」

ウイダーインゼリーを啜りながら偉そうなキリエ。一成を白けたような生暖かいような目で見てるのは明で、セイバーは相変わらず刺々しいままで、当の本人である一成は妙に身の置き所がなさそうにしている。アサシンはわざわざ霊体化を解いて、何も言わず生ぬるい目で主たる一成を見ていた。

「なんだよ碓氷その生暖かいまなざしは」

「いや、そっちの趣味なんだって思ってる」

「そっちってどっち!？」

一成はうつかりそんなに自分はロリコンに見えるのかと沈思したくなった。アサシンに至ってはなぜか元気づける様に頷きながらサムズアップして「頑張れ!」と謎のメールを送ってくる始末だ。というか同じようなことをアーチャーにも言われたような気がする。

「お前のくだらない話はいい。キャスターのマスター、何しに来た?」ランサーから、ランサーのマスターがキリエを攫ったと聞いていたセイバーは、当然の如く警戒をする。しかしキリエは柳に風と相手にしない。

「先ほども言ったと思うけれど、もう私を警戒する必要などなくてよセイバー。キャスターは正真正銘消滅して、令呪もランサーのマスターに奪われたわ」

「というか、あなたハルカにさらわれたんじゃないの? 何でここにい

るの？」

明の問いに対し、キリエは今までの余裕を消し流石に憤懣遣る方ない様子で、憎らしげに窓の外を睨んだ。

「……あの魔術師ときたら、この戦いに現代兵器など持ち込んで。魔術師の風上にも置けぬ輩ね」

それには明も驚いている。まさかエーデルフェルトとあろう貴族の家柄の魔術師が、拳銃を持ち出すとは思わなかった。

「あの男は私を撃ったあと、心霊医術で令呪を奪ったの。回路と接続している令呪をはぎ取られたわ。……キャスターの宝具の残滓で重大な損傷はないけれど」

令呪は体の魔術回路と接続している。それを本人の同意なく奪うことは、魔術回路を無理やり引きちぎること、神経を無理やり引き抜くことと同じである。心霊医術を使おうと、その本質は変わらない。キリエはキャスターの第二の宝具である酒について軽く説明を加えておいた。

「私はもう意識がなかったから後の事は覚えていないけれど、起きたら、そうね……教会の地下室に寝かされていたの。……その時にはもう体も治っていたわ。拘束などはされていなかった上に人気もなかったから、逃げ出したの」

純粋な魔術対決なら私にかなう魔術師なんていないから、もし出てきても殺してやったけどと付け加えて、キリエは静かにウィダーインゼリーを口に運んだ。

ハルカ・エーデルフェルトは宝石魔術の名手だと聞いていたが、心霊医術にまで心得があったのだろうか。心霊医術は魔術より呪術に親和性があり、西洋の魔術からは下に見られる術である。明は首を傾げた。

「カズナリ・ツチミカド。敗者の私に声をかけてくれたことは、余りある厚意よ。そしてアキラ・ウスイ。すぐさまサーヴァントに私を殺させない情け、二人とも感謝しますわ」

「そうだ、確氷こいつ「ああ、うちにいてもいいよ」

さらりと吐かれた言葉に、一成とセイバーは驚く。しかしふたりの



驚きは真逆のものである。一成は喜びも交えた驚きだったが、セイバーは良くないと主人の誤りを見たが故の驚きだ。しかしセイバーは今の所むつつりと黙ったままだ。

「マジか確氷！」

体調の悪い明は若干不機嫌そうな声を出す。彼女とて慈善事業、同情心でキリエを屋敷に留めようと言うわけではない。

「いや、一成落ち着いて。キリエスフィールが家に居るのは構わないけど、その代わり知っていることを話してもらおうよ」

「ええ」

既にそのつもりであったキリエは、少しの間も置かず返答した。手に握りしめたウイダーインゼリーは殆ど飲み干されて空っぽだ。

もうこの場にいる全員は、教会が中立地帯でないことをわかっている。その上彼女は、冬木の聖杯戦争を開始した御三家の一であり、同時に春日の聖杯戦争を開始した家の一でもあるのだ。

「私にも何故ランサーのマスターが私を逃がしたのかはわからないわ。そもそも、聖杯だけが必要とするなら、彼らはもう私を生かしておく必要なんてないのだからね」

「そうだね」

「??何の話をしてんだお前ら」

「もうライダー、バーサーカー、キャスター、アーチャーの四騎が消えたわ。もう一騎が消滅したら、私は徐々に壊れていくと思う」

「……あなたは聖杯だからね」

キリエと明は話が分かっているようだが、一成を始めセイバーとアサシンにも全く話が読めない。二人に代わって一成が話の腰を折って割入る。

「は？聖杯？キリエが？聖杯って最後の一組になったマスターとサーヴァントに与えられるもんじゃないのか？」

「カズナリ・ツチミカド、あなた自分の家で聖杯戦争の話聞いたのはなかったの？」

一成は一度実家に帰宅した際に聖杯戦争を始めるに至った話を聞

いているが、キリエが聖杯という話はいぞ聞いていない。

「聖杯の魔法陣がこの土地にあるってことは聞いたけど、何だ、お前が聖杯ってのは!!」

キリエはため息をついた。しかし「他にも話したいことがあるし」と前置きすると、ウィダーインゼリーのキャップを締めてから一成に向き直る。

「あなたは聖杯戦争を、選ばれた七人のマスターがそれぞれサーヴァントを呼び出して戦い、最後の一組が何でも願いを叶えられる戦いだって思ってるわよね?……それは本当だけど、目的じゃないわ」「本ただけど、目的じゃない?」

「そう。確かに聖杯で願いは叶うわ。けれど目的は別にあるの。春日の聖杯のもとになった冬木の聖杯の目的は——根源に至ること。アインツベルン流に言えば、第三魔法の成就。その方法として聖杯戦争という儀式が考案され、副産物として願いが叶うようになったと言う方が正しいの」

一成は何言ってるんだと言わんばかりにキリエを凝視している。キリエは説明を続ける。

「聖杯戦争の為にマスターが英霊を召喚する。戦って英霊が消滅すると、彼らはどこに行くと思う? 座に帰るのではないわ。座に帰る前に、一度小聖杯である私の中に入るのよ」

言われてみれば、祖父の嘉昭は春日の地に配された魔法陣のことを「大聖杯」と呼んでいた。その時は単に大きさ、規模を表す「大」だと一成は考えていたのだが違うようだ。

「御爺様は「春日の地にある大聖杯」とは言ってたけど、小聖杯なんて全然言わなかったぞ」

「もしかしたら、あなたの御爺様は貴方が既に多少知っている前提でお話していたのかもしれないわね。それはともかく、サーヴァントは消滅したら一度私の中に回収されるわ。聖杯戦争が終わりを迎えるまで。……そして七騎すべてのサーヴァントを」

そこまで言って、キリエはまずいと言わんばかりに口を覆った。しかし、キリエが一番気にかけて相手はまるで頓着せず、あっさりと言

い放った。

「……俺のことなら気にするな。根源、とやらに至る為には俺をも含めたすべてのサーヴァントを殺す必要があることは、可能性として知っていた」

「ハア!?なんだそれ?俺は聞いてねーぞ!」

いの一番に反応したのはアサシンだ。しかしキリエも明も、一成も皆が驚いて口をあんぐりと開けているのはセイバーに対してだ。その知識は決して召喚されたサーヴァントが持ち得るものではない。最も動転しているのは明で、彼女はずっと「根源に至る」願いであるとセイバーに言っていた。

「セイバー、あなた、なんでそれを知っているの」

「前に召喚された戦争で知ったことだ。ただ此度の聖杯と仕組みが同じかまでは知らなかったから、こちらでも皆殺しの必要があるかどうか確信はなかった。そのあたりの事情はあとで土御門からでも聞け」

セイバーが霊体化できない理由は、明と一成は先ほど聞いて知っている。キリエはセイバーを気にながらも、話を戻した。

「……七騎全てのサーヴァントを殺し、七騎分の英霊が一気に英霊の座に戻ろうとする力を利用して根源に至る穴を穿つ。それを長い年月をかけて集めた大聖杯の魔力で穴を固定し、根源に行く。これが目的なの。「根源に至る」以外の願い——たとえば大金持ちになるとか、この世界を平和にするなんて願い、つまり世界の内側で完結する願いなら、サーヴァント五騎、多くても六騎の魂があれば大抵は叶うわ。けれど、「根源に至る」ということはこの世界の外に飛び出すこと。抑止力を超える為には、サーヴァント七騎分の魂は必要なの」

「そんなこと俺たちは聞いてねーぞ」

「そうでしょうね。根源に至る、と言う願いは即ち最後に自分のサーヴァントも殺すことを意味するもの。サーヴァントにも願いがあるなら、最後には裏切るつもりのマスターになんか従わないでしょうしね」

アサシンは胸糞悪いと不快気に眉を顰めたが、セイバーの様子はや

はりいつもと変わらない。彼は当然のように気になった疑問を口にした。

「そうだとすれば、そもそもこの聖杯戦争とやらには戦う必要性はないのではないか」

「ないわよ。マスターだってサーヴァントを呼ぶために依代として必要なだけで、呼んだらあとは用なしなの。何でも願いが叶う、というのはマスターを集めるための謳い文句。サーヴァントを召喚してすぐにマスター全員で自分のサーヴァントを令呪で自害でもさせれば、殺しあう必要はないわ」

明がキリエの後を継いで説明をする。「でも、聖杯を使えるのは一組だけ。そりゃ使用権を巡って争いにもなるでしょ。だから利害の調整として、戦った最後の1組だけが願いを叶えられるっていう風になったみたい」

明の後を継ぐ言葉はない。五人が五人とも黙っていて、重い空気が支配する。かろうじて一成は了解の意を示した。しかし。

「……そうなのか。っていうか確氷知ってたなら言えよ」

「教える流れにならなかつたでしょ」

明は流石に申し訳なきような顔をしたが

「あとは私が聖杯って話よね。カズナリ・ツチミカドの為に説明してあげるわ」

キリエは顔色一つ変えていないが、また「魔術」の世界特有の人を人とも思わない話だと一成はわかる。彼の祖母が聖杯の核となるために身を捧げたような話だろうと。聞く前から渋い顔になるのを隠せなかった。

「私の体の中には本当に「聖杯」が入っているのよ。むしろ聖杯に人間の外装を取り付けたって言う方が正しいわ。だけど人間、私はホムンクルスだけど——の体に英霊なんて規格外の魂をそう何個も入れておけないの。私が人間のカタチを保てるのは四、五個が限界かしら。今の時点でバーサーカー、キャスター、アーチャー、ライダー——四つの魂があるし、そろそろね」

「限界って、限界を超えたらどうなるんだよ」

一成はあまり聞きたくない話だと既に予感している。それでも聞かなければならない類の話と、彼はつばを飲み込んだ。

「だんだん本来の姿に戻るわ。人間の外装が剥がれ落ちていくって聖杯そのものに戻っていくの。五感が失われていくともいうのかしら。その時の補助の為にメイドと一緒に来ていたのだけど、セイバーの宝具でダメになってしまったわ」

「——!!」

「私は聖杯を得る為だけに生まれた」とキリエはかつて一成に言った。その言葉は真正正銘、徹頭徹尾間違っていなかった。たとえキリエが聖杯戦争に勝ち抜いたとしても負けたとしても、聖杯が完成して戦争が終わるときに命はないのだ。キリエ本人はそれを理解し、所与の事として受け止めている。

「ただ、不思議なのは四個の魂を持っているのに、私が特に苦しくないこと。それに、何かこう、聖杯戦争が始まってからずっとなのだけけれど、私の中にある聖杯にもやがかかっているような感じがするの」「うーん……」

一成の気持ちをやそこに、キリエは眉を寄せた。明はキリエの不調に對して答えを直ぐには出せず、唸っていた。

殆ど魔術師らしい考え方をしない一成には、キリエをおかしいとか思えない。しかし——これまで「聖杯」の事だけを考え続けて生きてきて、死に向かいつつあるキリエの生を否定することは、彼女そのものを否定することでもあるとわかる。

聖杯戦争後の生が存在しない彼女をどうすることができらるだろう。悶々と反芻する一成とは違い恬淡とした明は話の続きを促した。

「そーいや他に話したいこともあるって言ってたけど。というか、多分私が聞きたいのもそーちの方だと思う」

「そーよ、むしろこちらの方が重要よ、アキラ・ウスイ」

キリエは少し躊躇したが、意を決して真実を口にした。

「私は聖杯戦争が始まる前からオユウと組んでいたわ」

それに一番に反応したのはセイバーだ。明も一成もセイバーもアサシンも、それを聞いて衝撃はあるが、雷に打たれるようなというほどではない。今の言葉が正しいとすれば、何故、キリエはセイバーを奪うのではなくランサーを奪いに行ったのか、その疑問が解けるからだ。

「……こちらもあの神父から「聖杯戦争を何事もなく終わらせる」という名目のもと、ランサーのマスターと共闘を持ちかけられていたが」「お前らもんなことしてたのかよ。全くどいつもこいつもしらけるな」

教会・ランサー・セイバーの関係を知らなかったアサシンは、大きさに肩をすくめた。しかしキリエは全く驚いた風もなく取り澄ましている。

「それも知っているわ。でも、貴方とオユウが組んでいたのは精々聖杯戦争が始まる少し前くらいからでしょう？私とオユウは春日の聖杯戦争が構想された時——三十年以上前から組む約束だったもの」「さんじゅっ……!?っていうかあの神父は、もしかして聖杯戦争の開始に関わってんの!?!」

勢い余って明は噎せた。せき込みながら、その衝撃で傷が痛んで背中を丸めた。セイバーが「横になっていろ」と言ったため、明はおとなしく布団に潜った。

「おい碓氷、大丈夫か!?!つかキリエ意味がわかんねーんだけど」「やっぱりそつちは知らなかったのね。あたりまえだけど、カズナリ・ツチミカドにもオユウの事は言わなかったし」

キリエは「監督役と結んでいるなんて他の陣営にばれると面倒なのよ」と呟いたのちその話は後にしましようにと脇に置く。ついでに一成と共に教会に向かった時、まるで神父と初対面であるかのように振舞っていたのも、当然演技であった。彼女は咳払いをして仕切りなおります。

「オユウはアインツベルンと共に春日の聖杯の発端に関わっているわ。何故かは知らないけれど、彼は聖杯戦争という儀式について興味を持っていたようよ。三十年前、オユウは春日の監督役になるために魔術協会を辞めて、聖堂教会へ入ったの。「神秘の漏えいをする事なく、聖杯戦争を完遂する」ためにね。オユウに信仰心なんて一かけらもないわよ」

一成、特に明は言葉を失った。物心つく前から教会の神父であった神内御雄は、明がこの世に生まれる前から聖杯戦争を画策していたというのだ。

明にとって神内御雄神父は立場上心を許す相手ではないが、父とも知己の仲であり、協力を仰がれることも多かった。何を考えているかわからないのは昔からで、今更言い立てるほどのことでもなく「そういう人間だ」とずっと思っていた。

魔術師が聖杯戦争に興味を持つと言うなら話は分かる。だが、「聖杯戦争の監督役となるために魔術協会を去った」というのは俄かには受け入れがたい。「聖杯」を求めるのではなく、「監督役」を求める意味は何だろうか。逡巡する明を置いて、キリエは話を進める。

「そして聖杯戦争が始まることになった時、オユウはこう言ったわ。「確氷の管理者と魔術協会から派遣された魔術師と協力関係を取り付けた。そちらから得た情報も提供する」って」

「神父は最初からアインツベルンにしか協力する気がなかったのか？」

一成の問いに紅い目の少女は肯う。「途中まではその通りだったわ。私はセイバーとランサーが得た情報を、オユウから教えてもらったわ。バーサーカーの下りも、カズナリ・ツチミカドに言われなくても知っていたわよ」

明たちはキリエの存在など、一かけらも神父から聞いていない。一成の言うとおり、神父が初めからアインツベルンにしか協力する気がなかったのはわかったが、ならば今の彼女の状態どうということなのか。

「でも、私貴方たちにアサシンがいるなんて全然知らなかったわ。オウも一言も言わなかったもの」

アインツベルンだけに協力するというなら、それは不自然である。明はキヤスター戦の前に神父に対し、アサシンが仲間になったことを伝えていた。しかしそれはキリエに伝えていない。やはり、神父が何をしたいのかがわからない。

「私、最初はセイバーを呼ぼうとしたの。日本武尊ではないけどね。でも失敗してキヤスター……酒吞童子を呼んでしまった。まさか間違えるなんて思っていない……、最初からこんなミスをしてしまって、本当に勝てるか不安になったの。だから山で魔力を貯めこんで、陣地以外では戦わないようにするつもりだったわ。アーチャーが裏切ってきたのは望外だったのだけど——二騎のサーヴァントを得ても、私は動かなかったわ」

膨大な魔力量と二騎のサーヴァントなら、陣地に誘い込みさえすればどんなサーヴァントでも倒せるだろうと神父は言ったが、キリエは不安だった。

そこへ持ちかけられた話が、ランサー強奪計画である。神父曰く、ランサーのマスターは既に聖杯戦争を戦う気力が失せているため、もしキヤスターとアーチャーを連れて強襲をかければすぐに渡すだろうとキリエに勧めたそうだ。

その話を、キリエが疑うことはなかった。そもそも、聖杯戦争が始まるずっと前から、彼女が神父を疑うことなどありえなかったのだ。

「オウはね、私がメイドやアインツベルンの者以外で私が知ってた唯一の人間なの。たまにお城に来た時にしてくれる話が、とても楽しみだったわ」

三十年もの間、白亜の城に一人きりだったキリエに小さな楽しみを運んでくる神父を、彼女は何の疑いもなく信じた。そしてその言葉の通り、ランサーはあっけなく彼女のものになったのである。

「あとはもう知っていると思うけど、ランサーは心から私のサーヴァ



ントになったわけではなかったわ。でも令呪もパスも私にあって、確かに私がマスターではあったの。ランサーとエーデルフェルトが連絡を取り合う方法なんてなかったはず。でも、とにかくランサーはハルカ・エーデルフェルトを手引きして私を襲って、令呪を奪ったの」

神父はランサーを奪われたハルカの事を、「もう戦う意思はなく、棄権するようだ」と明たちに伝えていた。のちのハルカの行動を見れば、棄権などお笑い種だ。

明が神父に違和感を覚えたのはそこであり、ハルカと神父は何かを企んでいると思った。しかし――。

「……意味が分からない。あの神父は何をしたいのだ」

セイバーの言う通りである。キリエを謀りランサーを渡し、再びランサーを回収しにハルカが向かう。神父は「平和裏に聖杯戦争を終わらせたい」そうだが、この虚偽はその目的には全く関係ない。

「……とりあえず、あの神父とランサーのマスターは胡散臭いってことか」

「……じゃあ、美琴は？」

明は心配そうにキリエに目をやった。あの猪突猛進の気があるなじみの修道女はどうなったのか、今までの話では一切出ていない。明とて彼女と会ったのは、神父が開催を宣言した時が最後である。

「多分何も知らないとは思うけど、今となってはどうかしら。何も知らせず体よく彼女を使っているのかもしれないけれど、本当は何か噛んでいても不思議じゃないわ。でも私は彼女とは手を組む話をしたことはないの」

明は顔を曇らせたが、キリエは本当にそれ以上を知っていそうになり。知っていたとしても、隠す理由がない。澆刺とした修道女の行方を気かけながらも、明は視線を小さなマスターに戻した。

「……で、何であなたはそんなランサーのマスターから逃げ出せたの？」

明の目は、ランサーのマスターに操られるなど何か魔術的な手を加

えられているのではないかと言っている。その疑惑の瞳を跳ね返すように、キリエは小さな胸を張った。

「私は聖杯そのものよ。その辺のテキトーな魔術師が使う程度の魔術に侵されることはないわ。それに暗示にかかっているくらい、あなたならわかるでしょう?」

「ぎつと見、おかしなところはなさそうだけど」

それはそうだと明も頷かざるを得ない。そもそも暗示にかかった者には何らかの違和感がある。しかし——キリエは隙を衝いて逃げたということを言っていたが、ハルカは易々と聖杯であるキリエを逃がすだろうか。

一同を見渡してから、少女は弾みをつけてロッキングチェアから飛び降りる。ついでに飲み干したウイダーインゼリーをゴミ箱に放り込んでから、唾棄すべきといわんばかりに絨毯の模様を睨みつけた。

「オユウも限りなく怪しいけれど、あのランサーのマスターも底が知れた者ではないわ。それに、あれは本当にハルカ・エーデルフェルトという人物なのかしら」

「? どういうことだキリエ」

「どういうことも何もその通りよ。エーデルフェルトといえば、北欧で宝石魔術を得意とする、なかなか歴史を重ねた名家よ。名門の魔術師である彼が、拳銃……: というのかしら? のような下品な兵器を使うとは思えないの」

生粋の魔導の家系に生まれ、聖杯としてだけでなく魔術師としての流儀を身に着けたキリエは、魔術戦において現代兵器を使うことを忌んでいる。しかし明とて扱いに長じているわけではないが、身を護るためにある程度の知識はある。

そしてこの戦争は命を落としかねない危険なモノで、報酬は何でも願いが叶う聖杯だ。ならば拳銃位持ち出すこともありうると思う。しかし、キリエはさらに重ねる。

「アキラ・ウスイやカズナリ・ツチミカドには常識だと思いうけれど、魔導は代を重ねるほど強く濃くなるものよ。ゼロとは言わないけれど、

一、二代しか重ねていない魔導の家から、いきなり魔導を極める天才が現れるなんてありえないの。家系で得意とする魔導があるのもそういうことよ。生まれで決まってしまうものよ」

アサシンはそういうものか頷いていたが、セイバーは何故か複雑な顔をして明を見ていた。

「そこでエーデルフェルトだけれど、あの家は力の流動と転移が特質なの。私から令呪を奪った心霊医術なんて、専門外のはずよ……もちろん私はハルカ・エーデルフェルトの力を知悉しているわけではないけれど、疑わしいことに変わらなと思うわ。どうかしら、アキラ・ウスイ」

「……神父は昔からハルカ・エーデルフェルトと知り合いだったみたいだけれど。そして私の父もハルカとは知己で、交流もあったみたいだけれど……」

そもそも明は聖杯戦争が始まるまで、ハルカのことなど欠片も思い出さなかったし今でも思い出せていないのだ。思い出したところで十年以上前のことで、当てにはならない。

「そう。あと最後に、不可解なことがあるわ。霊器盤よ」

キリエも明と同様に、御雄から霊器盤によるサーヴァント現界状態を聞いていた。しかし、明らかに齟齬が生じている——今となってははっきりわかるのだが、元気に現界し続けているアサシンが、霊器盤上では消滅した事になっているのだ。

可能性としては、本当に壊れている。または、確認を行っていたのが神父だけの為、彼がわざと偽りを伝えていた。しかし仮に後者だとしても、なぜそうしたのが全く分からない。

一同を重い沈黙が包んだが、そこでキリエは勢いよく両手を叩いた。

「話すことは話したわ。で、私の部屋はどこかしら」

「……は？」

アサシン以外の三人の気持ちが一瞬になった瞬間だった。今まで真面目な話を既に忘れ去ったかのような顔で、小さなマスターは偉

そうに両腕を組んでいる。

「私は話すべきことを話したわ。ならばしばらくここにお邪魔するわ。カズナリ・ツチミカドには土下座して「ここにきてくれ」って頼まれてしまったしね。勿論私の部屋には最高級のスイートを所望するわ」

「……………碓氷、頼む」

彼にしては珍しいほどのインターバルを挟んで、一成は頭を下げた。明とて洗いざらい話すなら、という条件を出した手前今更断ろうとは思わない。

が、キリエの切り替えの早さは異常である。

「……………土下座したんだ」

「それはしてねえ!!」

一成は必死の形相で否定したが、全員にスルーされた。

明は流石にキリエを疑惑の教会に行かせる気も起きなかった。それに「聖杯」であるキリエを匿しておくのは何かで役に立つかもしれない。また、たとえキリエ自身が戦争を諦めずセイバーを奪いに来ても、人間の身では太刀打ちはできない。

態度がLサイズなことを除けば、滅多なことにはならないだろうと明は判断した。

「……………そうだね。私今動けないから、父の部屋に土御門とアサシンでいい感じに寝床作ってあげて。セイバー、こたつこっちに持ってきていいから今日からは私の部屋ね」

セイバーは完全に呆れた目つきだったが文句は言わない。だが、一成が腹に据えかねたように口を出した。

「おいセイバーと碓氷が同じ部屋ってのはどうなんだよ」

「どうも何も別に普通じゃん。サーヴァントとマスターなんだからさ。というかホテルでもそういう部屋割りだったし」

「前から思ってたけどお前は危機感がない！もうすこし警戒しろよ！サーヴァントとはいえ男だぞ！つーか、お互い全裸に近い状態でケロっとしてんのはどうなんだよ!!」

ホテルにおいて全裸でゴロゴロするセイバーと、バスタオル一枚の明の映像は未だ彼の脳裏に強く焼き付いている。あの時はテンパリすぎて深く突っ込めなかったのだが、かなり由々しき問題だと思っただ。

「逆だよ一成。男とはいえサーヴァントだから気にすることなんてないって」

「土御門、くどいぞ。それに俺が明とまぐわいにより魔力を供給するという事態はまずあり得ない」

「は!?!お前確氷じゃ不満だっつーのか!?!」

「……?マスターの魔力量に不満はないぞ。当然、俺と明にはパスがあり、それで魔力が供給される。そして、粘膜接触を行っても得られる魔力はマスターの持つ魔力量を超えることはない。それならば他の人間を殺して魂を回収するほうが良い」

「……………」

一成は沈黙した。明はものすごく生ぬるい目で彼を眺めている。アサシンは声を殺して爆笑している。セイバーはあからさまに馬鹿にした顔を隠さない。

一成は完全に墓穴を掘ってしまい、顔を赤くしていいやら青くしていいやら石化していたが、話から置いてけぼりにされていたキリエが怒鳴ることで我に返った。

「もう！何をつまらない話をしているの!!レディを待たせるなんて紳士失格よ!」

「お、おう。……っーか、俺は認めないからな!」

完全に捨て台詞だったが、一成はキリエに手を引かれながら剣陣営の二人に向かって怒鳴る勢いだった。当の二人は完全にどこ吹く風状態で、明は相変わらず生ぬるい笑みを浮かべていた。

12月6日⑤ 夜更ける

明の父の部屋は、明の部屋と同じ二階にある。彼女の部屋よりも広く、この屋敷でスイートといえばその部屋に違いない。明はキリエの注文に頓着していたわけではないが、キリエに貸すにちよいどいい部屋がそこであつたため期せずしてキリエは注文通りの部屋を得ることになった。「まあ許容範囲ね」

今まではセイバーが占有していたため、キングサイズのベッドの脇には場違いなこたつが鎮座している。キリエは部屋を一通り眺め、棚の上に載っている置物を触ったり絵画を見ている。と、キリエは勢いよく一成の方へ振り返った。

「それで、あなたその酷い顔はどうしたのかしら？寝ていないのでしようけれど」

「……」

一成は息を呑んだ。キリエと別れた後に、明の部屋に戻ろうかと思っていた矢先のことであつた。明に話すつもりだったが、キリエとて魔術師である。

「今日会った時から気になってはいたのだけれど。アキラ・ウスイは何も言わな……ああ、彼女も平気な顔をしているけれど、重傷のはずだものね」

キリエが指で座りなさいと指示したので、一成はおずおずと正座した。そして促されるまま、昨夜のキャスター戦での顛末を話す。今思い出せば、アーチャー戦以前にも明の気づかなかつた結界の基点を見することもできていた。

常の一成からすれば、それもでき過ぎた出来事である。

それに、眠れないのではない。

普通に起きている分にはいいのだが、眠ろうとするとあの黒い箱が現前する。本当は決して触れてはいけないはずのなにかに触ろうとする自分がある。

一成は訥々と、昨夜のアーチャー戦でなしたことをキリエに語った。垣間見えた少し先の未来と、過去。たしかに「千里天眼通」の機能があれば成し得ることではあるが、今の今まで一成はその機能が自分にあることを存在を知らなかった。

「……あなたに何か、それが目覚める心当たりはないのかしら」

「……御三家は聖杯のつなぎ目から漏れた魔力が供給されてるっていう話あったろ。それか？」

「大聖杯の核はアインツベルンのホムンクルスとあなたの家の魔術師だから、アキラ・ウスイに流れる魔力よりは私たちに流れていく魔力の方がずっと多いわ。だけど、それはあくまでただの魔力。余計な力なんてない」

となれば、異常の原因は一成自身にあることになる。一成と膝を突き合わせたキリエは、一成にさらに近づき、その眼を覗き込んだ。そして、彼女は息を呑んだ。

「……あなた、もしかして昨日から魔術回路を開いたままなの？」

「いやそんなアホは……」

魔術回路のオンオフくらい、魔導の初歩である。言葉は違うが、陰陽道でもその基本は変わらない。いつも剣戟の音と共に回路を開き、閉じる。現にバーサーカー戦の時は普通にできていたことだ。

「……ちよつと見せてもらおうわよ」

すると、キリエはいきなり正座をしている一成の太ももの上にまたがった。十歳程度の少女とはいえ流石にギリリとしたが、キリエは気にしていない。額と額をぶつけ、その小さな手は一成の手を握っている。

「……っ！」

待て、と言うよりも早く脳髄に剣戟の音が鳴り響いた。その途端に今まで張りつめていた何かが途切れ、一成はどつと疲れを感じた。

この感じは戦いが終わり、魔術回路を閉じた時そのものではないか。キリエはそのまま一成の目を覗き込んでいる。

「……よく今まで動けていたわね、体力馬鹿？全身の魔術回路が開いたままで魔力を無駄に流し続けていた状態——水道の蛇口を閉め損ねて漏れつづけていた感じよ。あなた、もともと魔力が多いわけではないのだから、今日から明日にかけて絶対に魔術を使つてはいけないわ」

「……おう」

「……今日のところはどこも守りに入っているだろうけど……起きなさい、話は終わっていないわ」

今までの疲れが一気に噴き出し、フルマラソンを全力疾走したような顔で今にも倒れてしまいかねない一成の頬をはたいて、キリエは話を続けた。

「私は陰陽師の精を受けて生まれたホムンクルスよ。聖杯戦争が始まるまで三十年あつたから、それなりに陰陽道も知っているわ」

普段は見えないものが視得、未来さえも垣間見たというその眼。

「千里天眼通——魔眼ではないわね」

「……ああ、確か魔眼じゃなくて、結局処理は脳みそで……碓氷も前にそんなこと、」

「アキラ・ウスイはあまり陰陽道に造詣はないけれど、きちんとした魔術師よ。それくらい見抜くわ。だけど、なんで今あなたにそれが」

そこまで言つて、キリエは一成の膝から退いて立ち、彼を見下ろした。

「……止め。明日にしましょう。というか一番陰陽道を知っているのはあなただし、普通の状態になれば、ちゃんと自分でわかるはずよ。今はとにかく、眠りなさい!!」

びしりと指を差されて、一成はその剣幕に頷いてしまった。しかしそうでなくともあの激闘の後に貫徹状態が続いていて、彼自身も限界だった。

「わ、わかった。明日、また頼む」

「アキラ・ウスイもいた方がいいから、一緒によ」

「ああ」



一成はふらつきながら立ち上がった。キリエはすでにベッドの上に座っている。

「じゃ、明日」

扉を閉めようとした時、不意にキリエが小さな声で問うた。「ねえカズナリ・ツチミカド。貴方は明日もこの家にいるのかしら」

キリエは妙な事を聞くと、一成は思った。既に明は「キリエはここにいていい」と言っているのだから、一成がいようがいまいがキリエは困らない。むしろ自分の体について相談しているのは一成の方であり、彼こそキリエがいないと困る。

キリエが碓氷邸にすることが決まった今、一成も当然いるに決まっている。

「……？ 碓氷はいいつつつてたし、いるぞ。聖杯戦争が終わるまで居るかつて聞かれたらわかんねーけど、俺はお前に相談してるんだし」  
「……そういえば、そうね」

キリエは顔だけ一成の方に向けて、笑った。それは安心したような、とても穏やかな笑い方だった。

「おいキリエ「おやすみなさい。カズナリ・ツチミカド」

話を遮るように、彼女は穏やかに笑って直ぐに毛布の中に潜り込んだ。相談に乗っているときはいつもの彼女だったのに、既にその背中話しかけることを拒んでいた。だから電気を消して、一成はその部屋を後にした。

先日までの激闘に比して、今日は穏やかな日であった。ランサーも今日は回復に費やし、それぞれが傷を癒していたのだろう。

だが、残るは三騎。動向のしれぬ教会とランサー陣営と共に、戦いはまだ続くのだ。

\*

月が煌煌と夜を照らしている。長い石階段を上った果てに、朱塗り

の鳥居が出迎える。

そして石畳が真っ直ぐと伸びており、その先には神社の本殿が坐している。

ここは土御門神社——この神社に祭られるは安倍晴明——信仰を得た稀代の陰陽師。京都にも晴明を神として奉る神社は存在するが、そちらもここも、魔術施設としては万全を期したものではない。

陰陽道は本来——その由来である中国における陰陽五行説は、学問であり宗教ではなかった。ゆえに神道における神社や仏教における寺のような宮廟や道観を持たない。

しかしのちに仏教・道教の影響を受け——最もはなはだしくは神道の影響を受けて、民間の信仰として生きている。

民間信仰化したために、本流の土御門のみならずいざなぎ流など、各地に様々雑多な流派が命脈を繋いでいる。しかし陰陽道専門の施設にして総本山は、それこそ土御門一成の実家である。

これら晴明を奉る神社は、魔術施設としてではなく各地に散在する陰陽道流派の支店——ここ春日の土御門神社は、本流土御門家の指示を仰ぎ四神相応の地を監視する。かつてはあわよくば奪取、の目論みもあつたらしいが、今や居ついた確氷に叶うべくもない状態だ。

小高い丘にあるその神社の境内において、並ぶ灯籠によりかかった金髪の女が不満げに言った。コートも眩しく白いため、彼女自体が闇に浮かび上がってみえる。

「アインツベルンがあれを呼び損ねたのは失敗だったのかしら、それとも寧ろ僥倖だったかしら!?!」

「私としては僥倖だと思おう」

あつさりと女の問いに返したのは、闇に溶け込んだような黒いカソックを身に纏う男だった。彼は安倍晴明を奉る本殿に向かい、特に願うわけでもなくじつと奥を見つめていた。

「前日の大戦闘で、セイバーもアサシンも疲労しマスターたちも同じ。それに小聖杯はライダーに気づいていない、叩くには今が一番だと思うのに——」

——公はこの世界を知らねばならぬ。

ライダーは大真面目にそんなことを言っただけで、単騎春日の街に繰り出している。鳥だけは鳥居の上に留まって、ただ神父と女を睥睨していた。

「地の利は徹底的に明ちゃんにあるから、空手で屋敷に向かうのは私だって微妙よ。監理者確氷の地脈と結界を破るには、それなりの準備が必要。でも、ライダーの剣があればそんなもの問答無用で断ち切れる」

ライダーの剣は、物を断ち切るときの擬音がそのまま剣の銘となった剣。

その剣が斬るモノは、目に見える物質だけではなく形なき魔力や概念にも及ぶ——『断絶』の概念武装。だがその剣の担い手は、前述のとおり留守にしている。

「やっぱりサーヴァント失格ね、それに、絶対ライダーはアインツベルンが嫌いだと思うわ」

「それは否定しないが——しかし、あれは基本的に何もかもを愛しているのだ。もしかしたらうまくいくかもわからない。そうなった場合の戦況を考えてみるのも一興だ」

「そんなのが楽しいのは貴方くらいだから」

女がライダーを「サーヴァント失格」と評したのは、ライダーが弱いせいではない。むしろ彼はこの国においては並ぶものなき至高の英霊——神霊もどき——である。

元来魔術師にとって「使い魔」とは、己に絶対逆らうことなく、己亡くしては生きていけない忠実なる僕である。

その「絶対服従」という点において、ライダーはあまりにも粹を逸しすぎている。召喚、現界のきつかけとしてのマスターは必要としたが、最早憑代として彼はマスターを必要としていない。

かつて冬木の戦争において、サーヴァントがサーヴァントを呼び出すというイレギュラーが発生したという。サーヴァント自体は霊体であるため、別の霊体をこの世にとどめる楔とはなりえない。ならば

どうしたかと言えば——優れた霊脈であるお山の山門を憑代とし、サーヴァントを現界せしめたのだ。

ライダーがしていることも根本的にはそれと同じだ。陰陽道の影響で大聖杯が冬木のモノより魔術的にこの土地に馴染んでしまっていることもあり——ライダーは、国内において最早マスターを必要としていない。マスターは紛れもなく神父であり、念話も令呪も使えるが、憑代としてはいてもいなくても変わらない。

ゆえにシグマはライダーを使い魔<sup>サーヴァント</sup>として失格と見做している。

その上一度は召喚に応じたとはいえ、それを拒否して大聖杯に居すわった英霊を再度召喚しなোসという荒業の為に、神父の令呪は既に残り一画。

あのライダーは令呪一画では縛れない。神性と対魔力が高すぎて、二画までなら耐え凌いでしまう——この国にとつては特別な英霊。彼女の考えていることを知ってか知らずか、神父は飄々と提案した。「そこまで今日が絶好だと言うのなら、ランサーをけしかけてはどうだ？アレの為に令呪の二画は残しているのだろうか」

「そうだけれど、ランサー自体はセイバーと同じくらいの疲労が残っているし……むしろマスターのことを考えれば、ランサーの方が危ういくらい。やめておくわ。それに——」

女——シグマ・アスガードは嘆息しくるりと踵を返して、鳥居に背を向けた。

「今日こちらから攻めないならば、むしろあっちから来てもらう方がいいかもね。小聖杯も回収しなオさなければならぬけれど」

聖杯の娘、キリエスフィール・フォン・アインツベルン。大西山にてハルカがどさくさに紛れて攫ったその少女は、キリエから奪った令呪を神父に渡す為教会を訪れた際に、教会奥の一室に放置したままであった。

傷も浅くなく、起き上がることも難しいと考えていたシグマは彼女に大した処置も施していなかった。そして仮に逃げ出したとしても、彼女の拠点の大西山はセイバーの宝具で原形がない。かつ生まれた時から聖杯を手に入れることだけが存在意義として生きてきた少女

が、サーヴァントを失い自らの回路も傷つけられて、今更どこに行く当てがあるものかと思っていた。

しかし、小聖杯は逃げたのだ。

探し物は彼女の手にかかれば——魔術師でもあり英霊の魂をその身に抱えている小聖杯ならば、見つけることはたやすいだろう。けれど彼女が探すこともなく、神父があっさりと行き場所を示した。

魔術的方法によるものではない。ただただ人間的に、今の、全てを失ってしまった彼女がすぎる場所があるとしたらどこだろうと考えたまでの結論である。

神父は大西山決戦の前日の昼、彼女と共に教会に現れた少年の姿を思い出す。一人では既に敗れ去っているはずか、どんな強運か運命か、未だこの戦争に身を置き続ける未熟な陰陽師。

それを想い、神父は「もし野垂れていないのならば——あれは確氷の家にいる」と、シグマに告げていた。

「施した処置は完全じゃあないけれど、小聖杯の視界を覗くくらいならできるかも。でも流石に小聖杯自身にはバレそうだし——でももしかしたら確氷のお宝を」

「とところでシグマ、聖杯降臨の準備とお前自身の準備は進んでいるのか？」

ぶつぶつと自分の世界に入りかけたシグマから、聞くべきことは聞こうと神父は問いかけた。

「？・当り前よ。正直聖杯よりも私の方に時間がかかるのだけれど、それは美琴ちゃんの助けを借りることにするわ。脳みそ筋肉でできてるみたいだけど、素体としてはなかなか優秀ね。どこから見つけてきたの？」

神父の養女であった神内美琴——教会においてハルカに倒された彼女は、まだその命を保っている。保ってはいるが、それだけである。「特に何の目的があつて娘にしたわけではない。使おうと思ひ立ったのは後付だ」

「まあいいけれど。便利なことには変わりないし」

シグマは美琴と大聖杯の様子を見に行くべく、そのまま左手に曲つて神社の社務所へと足を進めた。彼女の魔術特性と神父の願い——ライダーの願いは街を歩き回る今は定かではないが、それらは矛盾することなく共存している。

「私の命は、聖杯戦争の為にある」

碓氷の娘は、根本的には聖杯に願いなどない。むしろ自己の破滅を望んでしまっていた節さえある。それに加えあれば、無辜の民を巻き込む惨事を望まない。ゆえにこの目的を知れば、それこそわが身を捨てて殺しに来るだろう。

そして争いを人間には不可避なものと知りながら、聖杯戦争——欲望の戦いを認めない陰陽師も、また同じ。

最初は、聖杯戦争さえ起こればそれでよかった。それだけで、神父の願いと欲望と魂は完結する——はずだった。もし自分が初めから「いまの願い」に自覚的であったならば、聖杯獲得へ最短の道のりを取っていたのだろうか、神父は沈思する。

——それは、ない。ただただ効率よく敵を屠り、最短の道で目的を遂げる。結果だけを求めて戦うなど——。

それを見るのは楽しいが、自分がするには性に合わない。ライダーは言う「道中楽しもうではないか」と。意味があるのはその過程。戦いそのもの。

土御門神社。遥か地下深くの胎動を感じながら夜は更ける。鳥居の鳥は何も言わない。

interlude 6 人にも神にも剣にもなれぬ英雄・前

今でも、日本武尊は彼の女を思い出す。

彼女は死出の旅路ともいえる東国への遠征へ、しつこく同行を願い出た。彼自身「死ぬ、と言われていても同然」と解しているのだから、彼女もこの東征が死出の旅路であることを知っているはずである。

その上女の身でついでくることは無理だと何度も言いつけたにも拘らず、彼の女はついてきた。結局周囲をふらふらされるのも危なっかしいため、近くに置いておいた方がまだましという理由でなし崩し的に同行することになった。

それ故に、なぜそこまで彼女が共に旅に出たがるのか、さしもの日本武尊も聞いたことがある。大抵の答えは「少人数で男だけの旅などむさくるしすぎるじゃありませんか、ここは私という潤いが必要とされてると思ひまして」「ここまで気合の入った妻なんて私くらいだし、つていうか旅中は基本小碓様の夜はひとりじめゲヒツ……ハツ心の声が」「だって帝から暗に「イチャイチャしてこいよ!」つて言われたようなもんじゃありませんか? 困難を超えて夫婦のきずなを深める的な? キャー!!」などと少々正気を疑うモノだったが、流石に本心とは思えない。

「大丈夫大丈夫、小碓様アホ強いからなんとかあります。チャチャつと片づけて大和に帰って、お疲れ様宴会でも催しましょう!」

……彼の女は常にこういうことを抜かし、能天気でいつもへらへらと笑っていたが、それでも決して愚かではなかった。無論口にしたような思いがあったとしても、それが全てだとは思えなかった。

しかし無理に聞き出す必要はない、と日本武尊は聞くのをやめた。彼女が突拍子もないのは今に始まったことでもなく、また適当な時に聞けばいいと思っていた。

否、それよりも——もうついてくることに決定したなら、彼はその理由を聞く必要を感じなかった。彼女がいるなら存在を考慮にいれ

て戦うだけで、戦鬪上において、その理由はもうどうでもよかったのだ。

——もつと言え、彼の／彼女の生涯において、彼が彼女について知ろうとしたり理解しようとしたことはほぼ皆無と言っている。

日本武尊が生涯において、自ら求婚した女はただ一人。それ以外の妻は周囲の勧めや取り決めて夫婦となることになったのであり、彼女もその中の一人だった。

最初に夫婦と言う形だけがあり、形に添ってそれらしくしていただけた話だった。

現代の人が、普段吸う空気に礼を言わぬように。普段飲む水に礼を言わぬように。そして、置いてくるつもりであつた東征にすらついてきたことがさらに拍車をかけ——日本武尊にとって、その女はただただ当然のように傍に「在る」ものだった。

だから知ろうとしなかつた彼には、彼女が何を思つて強硬に同行を願ひ出たのか、わからない。

今も、昔も、そして永遠に。

その女の名は、弟橘媛。

走水の海にてその身を賭して世界を斬つた、彼の妻である。

\*

東征往路も佳境に入つたところだったか。相模から上総国に渡るために走水海を船で渡ろうとした際、晴れ渡つた天候もあり、目指す対岸は目に見えるほどに近かつた。

そのために日本武尊は呑気に「すぐにこんな海くらい渡れるだろう」と言つた。日本武尊としては決して海の神を侮つたつもりはな



く、本当に見たまま思ったことを口に出しただけだったのだが、海の神はそれを聞きとがめた。

そうして神の怒りは、一行の船を異界へと連れ去ったのだ。

それは本当にこの世ではなく、神の空想が具現した異界だった。出港した船は、海の神が起こした嵐の世界に囚われ、全く進むことができなくなってしまうた。

暗黒色の空の下、凌いで待てども待てども雨も風も止まず、激しく白波を立てて海は荒れ狂うばかりだ。稲光は下から上に走り抜け、黒々とした空から降る雨はまるで槍が降り注いでいるかのよう。しづきを上げる波は巨大な地震がずっと続いていることを連想させるほどに激烈だ。

最早この海は海ではなく、神によって呪われた戦場。

しかし、日本武尊のいる船は沈まない。水神・八岐大蛇の尾より出でた天叢雲剣の剣——水神の加護を持つこの剣がある限り、彼の居るこの船が沈むことはありえない。

だが、ここから先に進めるかどうかは別の話である。

日本武尊は神を殺せる。だが、世界を殺すことはできない。もし海の神が出てくれば、その刹那に術者である神を殺すことはできる。さすれば彼らはこの異界から解き放たれ、あつという間に対岸に到着するだろう。

しかし、その海の神が何時顔を出すかなど、誰にもわからない。

神の生み出した異界の海。剣の持ち主である日本武尊が単身海に飛び込み潜って、神を斬り伏せることは可能である。だが、そうした瞬間にこの船は神剣の加護対象から外れて、一瞬にして呑み込まれてしまう。かといって剣を船に置いたまま海に潜れば、日本武尊が死ぬ。

だから今必要とされるのは神を殺す力よりも、「世界そのものを斬る力」だった。しかし、日本武尊に世界を斬る力はない。

だから、彼は只管神の姿を見つるべく荒れ狂う波濤を見つめ続けていたのだが、待てど暮らせど神は姿を見せなかった。

船は沈まなくても、足止めをくらい時間ばかりが無為に過ぎる。当初すぐに到着すると想定されていた為、船に乗せている食料は僅かで、何日もこの異界に留められては根を上げるのはこちらである。

東征軍の焦燥は募り、船の船頭たちは陰で話し出していた。

「これだけお怒りになつている海神を鎮めるためには、誰か乙女を供奉なければ——」

日本武尊はその声を無視した。この旅に出る前、伊勢神宮で一人誓つたことがある。

『帰るのならば、全員で帰る』と。

己が死ぬのはともかく、何の咎もない仲間たちが死んでいいはずはない。だから己はすべて殺さなければならぬ。人であろうと、獣であろうと、神であろうと。

たとえ既に、幾人かが黄泉路へと旅立っているとしても変わらぬ。い。

しかし今、彼に打つ手はなかった。徒に時が過ぎていく。船の外にいては、まともに立つことも、目を開くことすら困難な嵐に巻き込まれてしまう。真夜中のような暗さで、時折閃く黄泉の雷鳴がかるうじて光を齎す。誰もが船の中に籠り、悪夢のような嵐が過ぎることを祈っていた。

そうして、どれくらいの時が経つたのか。とりあえず船内にて仲間と船頭たちの状態を見ていた彼は、ある違和感を抱いた。船内はそう広くなく、全体を見て回つたはずなのに、ある一人の姿がどこにも見えない——。

日本武尊はまさかと思ひ、今にもひっくり返つてしまふような船の外に躍り出る。

その果てに、信じがたいモノを見た。

船の先に、その衣服をずぶぬれにしながら立つ女の姿があった。海の上に敷物を置いて、すでにその上に立っている。

荒れ狂う海だ、そのような敷物など一瞬にして海の藻屑となつてし

まう——！

「……小碓様……見つかったやいましたか」

周りの者、従者がことごとく日本武尊のことを日本武尊と呼ぶようになったから、彼女だけは頑としてその名前で呼ぼうとしなかった。その理由を、彼は知らない。

弾丸のような雨粒に打たれている彼女は呆けたようにいつもの名で呼んで、一瞬まさかという顔をした。その顔が見えたのは、彼女のすぐそばを稲妻が過ぎ去っていったからだ。

弟橘媛はいつもと寸分変わらない笑顔で叫んだ。嵐の中でも間違いないく届く様に。

「今まで、本当にありがとうございました。あの時、相模の国で、燃える火の中で、名前を呼んでくださっただけで私はもう十分です」

これは現実か——日本武尊は飛沫の上がる船の上を走る。だが、中から出てきた仲間が死にも狂いで止めにかかる。彼らは皇子である日本武尊を死なせるわけにはいかないのだから。

それでも日本武尊は妨害を振り切って、嵐の船の上へ躍り出る。

頼りない敷物の上で、今だに彼女が無事であること自体が奇跡的だった。彼女との距離がどれくらいか——船から僅か十歩程度のところにいるようにも見えて、遙か遠くの彼方にも見える。

異界ゆえ感覚が狂っているのか、それとも。

「こんなところで足止めくらっちゃだめですよ。御役目果たさないといけないんですから」

最早、何を言っているのかわからなかった。濡れた床に足を取られ滑った時に聞こえた、凜冽なる声。

そして、やはり彼女はいつも傍らにあるように変わらず笑っていて、平時と寸分違わぬ口調で、告げる。

「大丈夫ですよ、だって貴方は、この国で最も強いんですから——日本武尊」

高い波濤が彼女を襲う。あまりにも頼りない敷物はついに槍の如く突き刺さる雨に砕かれて崩壊する。暗闇に世界が包まれ、そして彼女の姿が視界から消え失せる時に見た、最後の顔は——見えない。

世界は暗黒と轟音に聳され、稲妻の光も彼女の顔を照らすことなく、どうしても見えなかった。

だから、彼はただ手を伸ばしてその名を叫ぶことしかできなかった。

「弟橘——!!」

伸ばした手は届かない。世界は暗闇に包まれた。海の底から、ひときわ高く押し寄せた青白く光る波は、神の手だったのか。

弟橘媛を飲み込んだ海は、今までの嵐が嘘であるかのように静かに風いでいた。うららかな日差しが降り注ぐ恵みの海。あれだけ進めなかった船も、今はすいすいと海を進んでいく。

這う這うの体で対岸についた時、一行はこの恐ろしい航海に疲れ果て休息を求めているため、この海岸に宿を取り暫く休むことになった。

そして対岸についてから、日本武尊はただぼんやりと海を見ているだけだった。何も言わず、何も食わず、何も語らず、眠りも取らず。ずっと浜辺で水平線の向こうを眺めて、何かを待っていたのだ。

見かねた部下が無理に宿に連れ込んで寝かせようとしたが、彼は頑として海岸から動かなかった。

旅の最中、彼女はよく遅れた。女ゆえ弟橘媛の歩みはどうしても遅

いのだ。それでも、足を止めてしばらく待てば彼女は絶対に追い付いてきた。追いついてこなかったことは一度もなかった。

だから此度も自分が足を止めて待つてさえいれば、彼女は絶対に追いついてくる。「遅れました！すいませんー」と、悪いと全く思っていないような顔で、追い付いてくる。ゆえにいつもの通り、彼は自分の妻を待ち続けていた。

日が暮れて、日が昇り、日が暮れて、日が昇り、何日経っても、待ち続けた。

「遅いぞ」

曲がりなりにも彼女の夫である自分が待たねば、誰があれを待つと言うのか。

誰が「媛様はもういません」と言っても、待つことを止めても、自分だけは待つていなければならないのだ。

あれは戦う力を持たない。だから旅において、自分が傍にいて護らなければならない。

ゆえに日本武尊は、彼女が追い付いてくるのを、海辺でずっと待つていた。

しかし、かの妻の入水から七日後。星の良く見える、空気の澄んだ夜。海は凪いで、さざ波が僅かに遠く聞こえる静かな世界。

待ちがてら手持無沙汰に浜辺を歩いていた日本武尊は、ふと眼の端に不思議なものを捉えた。海藻や枝のような自然物ではないもの――それは、加工が施された茶色の櫛だった。

驚くべきことに、それは弟橘媛が常に身に着けていた櫛だった。海に落ちたその櫛が、日本武尊が目指した海岸と同じ場所に流れ着き、かつ日本武尊がその櫛を見つけ出す。それ自体が奇跡といえるほどの偶然だった。

彼はそれを拾い上げたが、砂を落とすために何とはなしに海水に浸して洗ってみた。

海水にぬれて僅かに色を深めたそれを撫でた時、日本武尊はやつと、本当の意味で理解した。

——あれはもう帰ってこない。もうこの世界のどこにもいない。

水面に月が映る程に凪いだ海の様には、日本武尊の心は恐ろしいほどに静かだった。

——帰るのならば、全員で——。

その願いが、もう果たされないことは弟橘媛が消える前からわかっていた。

相武の国での火計、襲撃、この櫛の齒のようになだでさえ少ない仲間たちは、ぼろりぼろりと、数人が命を落としていたから。

静寂の中に、かの声だけが繰り返し聞こえた。

——「大丈夫ですよ、だって貴方は、この国で最も強いんですから」  
日本武尊はその櫛を手になぞるか、とひとり呟く。

頑なに小碓と呼び、日本武尊と一度も呼ばなかった彼女が最後にそう言ったのだ。

「我が妻よ——」

妻はその身を海に投げてまで、日本武尊の東征の成功を祈った。今わの際に、そう願った。

日本武尊——この大和で最も強き者であれと。

ならばそれに応えよう。全員で帰るといふ願いが果たされずとも、亡き者が命を懸けた願いが残っているのなら、日本武尊は命に代えても聞届けなければならぬ。

「——いかなる敵も、いかなる神も、全て平らげて見せよう」

この東征の旅が始まった時から、引く道などどこにもなかった。進むためには勝ち続け、東征を成し遂げる以外の選択肢はなかった。それは今も昔も変わらない。

早かれ遅かれ、人は死を迎える。

残された者ができることは、死んだ者の思いを持っていくこと。その願いを遂げることだけだ。

だから——道半ばで散った者達が、そして彼の妻こそが——東征の成就を望むなら、日本武尊の名が真であることを望むなら、本当にそうでなければならぬ。

もし日本武尊の名が嘘であれば、彼らの願いは、死ねと言われているに等しい旅についてきてくれた彼らの思いは、何処へ行く。今更、この足を止めることはできない。

——喜べ、お前たちの願いは叶う。

日本武尊は叔母から賜った剣を砂浜に突き立てた。他には誰もいない。丸い月がその姿を照らすのは、日本武尊ただ一人だけ。

漣の音がだけが四十万に響く、暗く静かな夜に一人、佇むその顔には深く笑みが刻まれている。

この感覚は何かに似ている。そう、東征に出る前に「父帝が自分に死んでほしい」と思っていることを知った時に似ている。だが、その時とは決定的に違うことがある。妙に気分がすがすがしい。

何かがずっぽりと抜け落ちて、体の中が空洞になったような。それは喜ばしいことだ。

体が軽くなれば、もつと速く動ける。もつと速く動ければ、もつと多くの敵を殺せる。

\*

——アレは、戦のできる女ではない。むしろ、剣や弓を取れば何故か扱いを間違えて自分を傷つけてしまうような女だ。武の神、アメノミカゲ天之御影や建御雷神タケミカヅチノカミからは嫌われているのであろう。

弟橘媛に戦の才はない。日本武尊は武の才能に男女の別はないと思っているが、それでも弟橘媛は絶望的に不向きであった。

流石に彼女自身自覚していたため、戦闘に口出ししたり参加したりすることはなく、後ろで控えているだけだった。

だからこそ、日本武尊はこう思っていた。

「自分が死ぬ時はこの女も死ぬ。自分が生きているなら、この女も生きていくのだ」と。

前線に出て戦うのは日本武尊だ。別働で戦い、その際に仲間が死亡するケースは考えられたが、戦えぬ彼女は違う。彼女が殺されると言うことは、既に日本武尊がその敵に殺されていることを意味する。

はつきりと言えば、彼は「彼女とは生きるときも、死ぬ時も同じ」だと思っていた。

だから、まさか、いつも自分の後ろをついてきた彼女が。

自分を置いて手の届かない場所に行ってしまうことを、寸毫ほども考えていなかったのだ。

人は脆い。天災で、病で、怪我で、あっさりと死ぬ。

自分こそ、多くの人間を容易く屠ってきて、そのことを最もよく知っているはずなのに、彼女だけは例外と思っていたのか。体さえ護ればいいと思っていたのか。

あまりにも間抜けで滑稽で、あまりにも致命的な慢心だった。

\*

走水海を越えてからの日本武尊はそれこそ神がかった強さで敵を



斬り、神を斬る。

立ちふさがる全てを薙ぎ倒して屍を積み上げる。自分の体すら顧みずにその戦う姿には、味方すら畏怖させる鬼気迫るものがあつた。そしてついに東の果てにたどり着く。

東方十二国の果て、常陸の筑波山の神を下して日本武尊は己が来た道を振り返る。大和への帰り路に従えるべき者どもはいるが、それでもこれまで以上の危険はない。

ここまで共に歩んだ部下たちも、大和へ帰れることへの喜びを隠さない。皆のその姿を見て日本武尊も久しぶりに笑つた。

——見たか、弟橘媛。俺はお前の願つた通り、東征の完了に近づいたぞ。

後は残り少ないまつろわぬ者を従えつつ帰路につくだけだ。見事東方十二国を平らげて帰る自分たちはきつと歓迎されるに違いないと——そこまで考えて、日本武尊は凍りついた。

——この東征の旅に出て、何年が経過した？

——そもそも、父帝は途中で俺が死ぬことを願つてこの旅へ向かわせた。俺が気づいているということは、大和の周りの人も俺が疎まれていることを知っているだろう。

——そんな人間が帰ってきてても、喜んで迎えられるのか？

旅に出たころは、その場その場を必死で戦ってきただけだった。

しかし、今や「生きて帰る」ことが現実として迫っている。『全員で生きて帰る願いは破れたが、今も共に戦う仲間がいる。その仲間——部下たちは絶対に無事に帰るべきであり、彼らもそれを喜ばしいと思つていることは、今の喜ぶ姿で明らかだ。』

だけど、自分は？無事に大和へ帰れたとしても——

父帝に「早く死ねばいい」と思われながら、もっと遠い場所へと戦

いに行くことになるのではないか？

また、仲間を行きたくもない死刑代わりの旅に付き合わせるのか？  
それとも、少数で東征を成した実績を立ててしまったから、今度こそ一人か。

その想像は全身から冷や汗が出るほど悍ましいものだった。尊敬する父帝から「死ねばいい」と思われていることに気づいた時の空虚は今でも忘れていない。

東征以上の旅を命じられれば、それこそ異郷の地に身を沈めることになるだろう。

——もう俺が大和に戻ったところで、誰も喜ばない。

喜びに沸く仲間をよそに、日本武尊は再び己が来た道を振り返る。  
先などないと思っていたこの旅路の先に、生きる光明は確かにちらついているのだ。

それに向かって直走ればいいのかもしれない。されど、それは真に光明であるのか？

光明ではなく、索漠として暗澹たる旅路が広がっているだけではいいのか？

全員で帰ろうと、願った。それこそが一番だと思った。

仲間は間違はなく大和、そして彼らの故郷に帰らなければならないが、自分は。

——なあ、弟橘媛。もう、いつそ、大和に戻らない方が——

問いかけても答える人も、いない。どんなに自分が武功を立てても、父帝は喜ばない。

何が悪かったのか。兄を誤って殺してしまったことか。勝手にイズモタケルを殺したことか。

それとも大和を追い出されても、帝に実質「死ぬ」と思われていても、仲間を妻を殺されても、自分だけがのうのと生きていることそのものか。

振り返れば落日の夕日が、長い影を投げかけていた。日が沈み、日が昇り、日が沈み、日が昇り、を繰り返す。それと同じだと、日本武尊は思った。

斬って、殺して、斬って、殺して、斬って、を繰り返す。否、同じではない。日が沈んでもまた昇る。終わりがあつて始まりを迎える。だが、己には終わらせることしかできない。殺すことしかしていない。

この旅に出る前に告げられた、叔母の言葉が蘇る。

「もし、人の心が分かるなら」

あの時、兄を殺さなかったのか。兄を殺さなければ、そもそも熊襲討伐に行かなかつたか。仮に行つても勝手にイズモタケルを殺すこともなかった。

そして死刑代わりの旅に出ることもなく、仲間も妻も、巻き込まれて死ぬことはなかったのだろうか。

「こんなことには、ならなかったのか——」

何故、ばかりが繰り返されて答えはない。己が影で「あれは人ではない」と言われていることは知っていたが、今までは「人間離れしている」という程度で、強さを讃える言葉の一つとしか考えていなかった。

だが、今に至りそれは別の意味をもつのではないかとの思いが過る。

——己は人として、壊れている。

それでも東征の復路にて、彼は正しく日本武尊だった。

誰も彼も日本武尊の最強を、東征の成功を疑わない。己が勝ち続けることが仲間の支えたるならばと、彼は最強であり続けたのだ。

その「最強」という外装の内側がただの伽藍堂だったとしても、彼は必死で外装を取り繕い続けたのだ。

## Interlude 7 人にも神にも剣にもなれぬ英雄・後

彼と父帝の間に決定的な亀裂の入る前——兄を殺害するという事件の起こる以前にも、彼の異常はささやかれていた。

マイナスの異常ではなかったために大事を起こすことはなかったが、それはやはり異常であった。

天孫の伝説を一度で覚えてしまい、すぐさま暗誦ができるようになる。一度耳にしたことは忘れない。武術においても、十にも満たぬ齡で並み居る大の男を皆倒し切ってしまう。帝には多くの子がいたが、他の子よりも頭二つ以上抜けた力を見せる。

——この皇子はあまりに、出来過ぎているのではないか？

初めはほめそやしていた周囲も、徐々にその力を恐れるようになってきた。

出来が悪ければ陰で誇るが、あまりに度を越した場合恐れる。

褒められたことではないが誰もが了解する心の動きを、その出来の良い皇子は全く知らず——できればできるほどよいのだろうと一途に信じ、力の研鑽に励んでいた時分の話だった。

大和の国を一望できる丘に、帝が彼やその兄、従者を引き連れてお出ましになった。新緑が香しい季節で少々暑かったが、外を散歩するには最適の気候である。

行幸ではあるが、気心の知れた従者や親族だけを連れただけの和やかなものだった。

その丘からは、青々と茂る木々、畝を作る畑、まだ実をつけぬ緑の稲穂——人々が今まさに暮らしている光景を一望できる。そして、帝は目を細めながら遠くを眺めていた。

「この大和が、何物にも脅かさされず、皆が健やかでありつづけなければよいな——」

少年よりもよっぽど人間であった天皇が、誰に伝えるのでもなくそ

うつぶやいた。もとより誰に聞かせるつもりでもなく、聞かれているとも思っただけはなかったのだろう。

国を愛し、守ろうという心は本来自然なものだ。己が生まれ育ち、己を愛し育てくれた人々が暮らす土地。今まで生きてきた年だけ、共にあった己が人生の片割れが人々であり土地であり——国である。

国を愛する根源はその程度の話であり、国が発展しているから優れているから愛するのではない。ただ己と共にあったから、国——人を愛するのだ。

それは敵を討つ際には「いかに大和が優れた国か」を述べる帝がふと漏らした、素直な心であり、願い。天孫の子孫の支配を伝え続ける帝という立場を一時離れた、ただ大和にくらす一人の人間としてつぶやかれた言葉だった。

少年の父である帝は素朴に己の生まれ育った国を愛し、護りたいと願い、その国の長たる立場に生まれ、在ることに誇りを持っている——人間であったのだ。

その時、傍らに侍っていた少年はその父帝のつぶやきを聞き届けた。少年にとつて父帝は、現人神として崇めるべき存在であり、尊敬すべき存在であると教えられてきていた。

そういう存在だから、敬意を払い続けていた。現代の父親像と、少年の生きていた時代の父親は違い、まして王の一族であり天孫の子孫である。尊敬すべき対象ではあったが、親愛の対象とは違うのだ。

今まで少年が見てきた父帝の姿とは、誠心誠意公務に励み、神々の末裔として国の運営に力を尽くす立派な天皇だった。

だから、誰にもなくつぶやかれたその言葉に——少年は我知らず衝撃を受けた。知らず知らずのうちに、父帝の眺める方向に目をやり——同じ景色を見た。

帝として責務を果たそうとする気持ちも、全ては素朴なその願いから湧き出でたもの。父帝は天孫の子孫だから責務に励んでいると教えられ、そう信じてきた少年は見たものを即座に信じられなかった。

天皇という現人神である前に、父帝はただの人間だった。

口に出せば不敬と断じられるその思い。しかし彼は言語化できるほどにその正体を掴めていたかったため、口にすることはなかった。それでも受けた衝撃は、人間と呼ぶにはあまりに歪に過ぎた少年の想いを変えた。

自分も父帝のように——天孫だからではなく、ただただ人の為に責務を果たせるだろうか。育ててくれた人々の為に、共にいてくれた人々の為に、力を尽くせるだろうか。

彼が父帝を本当に尊敬した——憧憬を抱いたのは、きつとこの時。

尊崇すべき天孫の子孫、現人神であるからではなく——ただ自然に国を人を愛した姿。誰に強制されたわけでもなく、自然に愛した人の心。

——自分もそうなれるのだろうか。

——この人のように、自然に愛して、そのものの為に戦えるのだろうか。

——人の、誰かの願いを——

景行天皇が己の知らぬままに残した最大の呪いは、このことにつきる。

人ではないものが、人と同じ夢を見ていた。

景行天皇は、彼の力を恐れたから小碓命を遠ざけたという理解は正しい。ただしそれは我が身可愛さよりも、「此度は兄一人だったが、この人ならざるモノを国内においておいた場合、今後大和にどのような禍が起こるかかわからない」と恐れたためだった。

親子としての情は、それなりにあった。しかしそれよりも、子の中にある神の影を恐れた。神代を離れても、神の血を引く人間である天皇は、神とは如何なるものか理解していた。

持っている力が違う。見ているモノが違う。  
神は崇めるモノだが——共に生きることができないと。

\*

確かに彼は、神に愛されているのだろう。

しかしその神の愛は決して人と人とが思いあうそれではない。例えるならば、屈強な武人が己が武器である剣を誇る気持ちが最も近からう。

「自分は多くの戦功を重ねた。その自分に振るわれて敵を殺してきた武器は素晴らしい武器だ」と自慢する——それが、彼が神に愛されているという意味だった。

——人の外装を纏う神の剣。

その神の愛なるものを、女は知らない。それでも、女は気づいてしまった。

大和という国の為にその力を振るい続けた英雄はその実、大和の為に戦ったことなど一度もなかったのだ。

それなのに何故「大和の為に戦った」と思われているのか。

理由は簡単——彼の尊敬し憧れた人間が、大和を心から愛していたからだ。

彼は尊敬する人の愛するものを愛そうとした。

尊敬する人の護りたいものを護ろうとした。

「大和を護れば、大和の為に戦えば、きつと——はお喜びになるだろう」

西の最強へと挑んだ時の彼は、本当にそれだけを想っていた。

「お前ならばきつと成し遂げられる」と信じられていると、信じていた。

ゆえに「敵を殺し、大和の国を安んずる」ことは彼にとって目標で



はなく「手段」でしかなかった。

「そうすれば、きつと喜んでくれる」

ただほんの僅か、尊敬する人、憧れる人、愛する人を喜ばせたかっただけだった。

その凡百が描くような、些細な夢を後生大事に願っていた。

しかし空前絶後の、ただ人には打ち立てられぬほどの偉業を打ち立てても、その願いは叶わない。むしろそれほどの偉業を成せるがゆえに、その夢は絶対に叶わなかった。

かつて、その身をかけて世界を斬った彼の妻は今わの際、「あなたはこの国で一番強い、日本武尊」と告げた。

しかし、彼のもう一人の妻は、それとは全く異なることを口にする。

「貴方は、日本武尊になるべきではなかったのです」

\*

東征の帰り道、彼にも喜ばしいことが一つあった。東征の行路、尾張で東征が終わったのちに結婚を約束した女——美夜受媛との再会である。

ただ、東征の旅路に於いて彼女の兄である武稻種命が水死していたため、手放しでの喜びとはならなかった。

尾張にて美夜受媛と結婚した日本武尊は、なかなか尾張を離れようとしなかった。

ここで羽休めをしているとか、他にまつろわぬ者がいるとか、結婚した美夜受媛を甚く気に入っているなど話は流れたが、実際日本武尊は大和に帰りたくなかったのだ。

また遠くに行かされるくらいなら、この尾張で過ごした方がよっぽどましだと——そう思った。

けれど、尾張に居ても少しも楽にならない。何を食べても味がしない。何を見ても楽しいと思えない。時間は無味乾燥に過ぎていき、世界のなにもかもが色を失くす。

日本武尊は、そつと部屋の片隅に置いてある剣を見やった。尾張に着いてからは一度も使っていないため、手入れも怠っている。

叔母の倭姫命から剣を受け取って以来、叔母の言いつけを守るように彼は片時も剣を離すことはなかった。それは今でも変わっていないが、剣を見る彼の目には今や怨望にも似た色があった。

この剣は、確かに日本武尊を護る剣だった。彼は深手を負ったとしても何事もなかったかのように治癒した。しかしそれは彼だけの話で、他の仲間は傷つき、死んでいった。

剣は、真実『日本武尊』を護る剣だった。

これまでは東征を成すという命のために、それでいいと彼自身も思っていた。しかし。

これ以上自分だけが残ってどうする——彼がその念に駆られていたこともまた、真実であった。

そして幾月を尾張にて過ごした頃か、日本武尊の元に父帝から新たなる、そして最後の命令が届けられた。

「伊吹山の神を討伐せよ」

日本武尊は此度の神は神剣を使わずに、自分の身ひとつで倒すと宣言した。当然旅の仲間も猛反対した。日本武尊はその体だけで神を殺せる。殺すだけなら神剣は要らない。

しかし神剣が絶対必要とされる理由は、その守護の力が不可欠であるがゆえ。異形の神がもたらす呪いを防ぎ異界から脱出するためには、剣の加護に頼るしかないのだ。

それを知っていたからこそ、これまで日本武尊は肌身離さず剣を持っていたはずなのだ。

にも拘らず此度は置いていくとは——いくら太陽の皇子といえど、神剣の守護を失うのはあまりにも危険だと誰も彼もが咎めた。それ

でも日本武尊は頑として剣を手に取ろうとしなかった。

その姿を「東征を終えて増長している」と見る者も多かったが、日本武尊はそのような増長とは無縁だった。

\*

日本武尊が伊吹山に、一人で向かうその前日。美夜受媛は尾張にある寂れた神社の一つへと急いでいた。

既に日が暮れかけており、山は夜に染まりつつある。

彼女の夫は、その神社の本殿の中にいるはずだ。如何な皇子といえど、本来神を奉る場所に無遠慮に立ち入る真似はよくないが、不思議と彼とこの場所は溶け合っていた。

神域。神の坐す場所。崇め奉られるべきモノの座。人から離れ、高みにあるもの。

斯様な場所が似つかわしい彼女の夫は、きつと死後、遠き未来に置いて彼自身も崇め奉られるモノになる。たった一人で日本を平定するモノが、只人のはずはありえない。

「——何だ、お前か」

美夜受媛が扉を開く前に、中からその声が聞こえてきた。同時に寝転がっていたのか、木の板がぎしりと音を立て、剣を持ち上げる音も聞こえた。

直ぐに中から扉が開き、日本武尊は顔を出した。やはり眠っていたのか、少し気だるそうだった。

「日が暮れます。帰りましょう」

夕暮れにここへ彼を迎えにくることは、既に美夜受媛の日課になっていた。日本武尊は朝起き、朝餉の後——食べないときもままあるが、この神社へと向かい日中をすごし、美夜受媛の迎えで夜に帰り少しだけ夕餉を食べて寝る。

基本はその繰り返しである。神社で何をしているのかと問えば簡単に「寝ている」とだけ返ってきて、実際その通りのように見えた。

傍から見ればぐうたらな生活だろうが、長い戦の骨休めだと思われるのか、誰一人目くじらを立てる者はいなかった。美夜受媛も最初はそうだと思っていた。

されど、その実——人を避けるように、彼はもう全てに倦んでいたのだ。

しかしその長閑で閑散とした日々は、今日で終わりを告げる。明日、彼は一人で伊吹山に向かい神を殺しに出かけるのだ。

二人で山を下る。その最中、日本武尊は美夜受媛に腰に下げていた剣を渡した。渡した、というよりは押し付けたと言う方が正しい。

「それは今からお前のものだ。取っておいてくれ」

「しかし、ミコト」

「取っておいてくれ」

彼は決して剣を取ろうとせず、先導して山を下りていく。

剣を持たずに神を殺すと、彼は言った。その言葉は決して傲慢や慢心から発せられたものではないことを、美夜受媛は知っている。

先日、何故そのような危険な事を望むのかと既に問うているのだ。

死ぬかもしれないのに、何故、と。

「仮に俺が死んだとしても、東征はほぼ成っている。問題はなく、俺に残された役目はない——だから、此度、俺は俺の運命を尋ねたい」

もし素手で神に向かい打ち取ることができたのならば、まだ自分の生には成すべきことがあるということ。もし叶わず死ぬのならば、それだけのことだと。

その意味を、美夜受媛は理解していた。

日本武尊。その名は東国の誰も彼もが知る、神がかった強さの大和の皇子。しかし、その彼の故郷である大和においては、彼の名は半ば忘れ去られたも同然だった。

東征にて従えた国々を放置するわけにもいかず、統治の為に人が置かれ、同時に大和との連絡もある程度図られる。

日本武尊は戦の最前線に立っていた為、そのあたりの事情には疎いかったが——とにかくここ尾張も大和からの使者と交流が図られて

おり、美夜受媛もその使者と世間話をしたことがある。

その使者は、驚くほど日本武尊の成したことを知らなかったのだ。平定の連絡・使者ゆえにどこを平定した等の情報は知っていたがそれだけだ。彼の妻の弟橘媛が亡くなっていたことすら知らなかった。

使者でさえこれなのだから、大和に暮らす人々は推して知るべしである。

元々が父に忌まれて死刑宣告代わりに出された旅だ。その大和への帰着は、絶対に華々しいものではありえない。

しかし、それさえも本質的な問題ではない。たとえ凱旋という誉れになくても、彼自身が自分の成したことに自信を持ち、自分で自分を誇っていれば大した問題ではないのだ。

美夜受媛も、彼の成したことは空前絶後の事業であり誇るべきことであると思っている。

されど、その偉業をなした英雄は、むしろ自らを蔑むが如く振り返って、言った。

「その剣は良いものだ。俺よりも遥かに役に立つ。大事にしてくれ」  
彼は本当にその名の通り「日本最強」だった。彼以外の人物が同じ命を任されたら、一瞬にしてその命を散らしていたことだろう。

その体に宿った力は、神の剣——まさにこの国に蔓延る叛乱の芽と悪神を全て刈り取る為のもの。

人の外装を纏う神の剣。

彼はその役目に相応しいだけの力を持っていたから、誰も気づかない。

彼の辿った運命は、彼の望む在り方を踏みにじるものでしかないことに。

日本武尊は、最強の誉れや遠き未来に名を残す栄誉など、一かけらの興味もない。

彼が叶えたかった願いは、あまりにも些細過ぎた。

自分の運命を試したい、と彼は言うが、そんなことを言う時点で先は見えている。

彼はもう、帰ってこない。

それなのに引き留める言葉が見つからない。美夜受媛は、夫の幸せを願っている。それでも、今の彼を止める術がどうしても思い浮かばなかった。

「いつそ、貴方に血も涙もなければよかったのかもしれない」

橙色の薄暮が逆光となり、振り返った日本武尊の表情は何えなかった。その読み取れない表情のまま、彼は静かに問うた。

「美夜受」

「何でしょうか」

「——俺はどこか、人として壊れているのだろうか」

人の心が分からないと、誰かが言う。それを壊れていると評するか否かは人それぞれだが、きつと彼は昔から変わっていないのだ。生まれた時からそうなのだ。

美夜受媛は、うわべの言葉で取り繕うこともできた。だが、本当に彼が求めるものを与えるのであれば例え苦くとも、本当に思っていることを言わねばならない。

遠回しに言っても、彼には通じない。

「——壊れているのではなく、あまりにも歪だったのです。あなたは、日本武尊になどなるべきではなかったのです」

「……何故、お前がそんな顔をする」

無礼とも取れる発言にも怒りを見せることなく、むしろ日本武尊は美夜受媛の様子を訝った。自分は泣きそうな顔をしているのだと、美夜受媛はわかった。

彼はあまりにも歪な魂を持ちながら、悲しいほどに——それこそ剣の如く——真っ直ぐであり過ぎた。

美夜受媛は日本武尊の意志をくみ取っていたが、若干の差異があった。  
た。

本当に雀の涙ほどの思いだったが、それでも彼はまだ、全てを諦め

たわけではなかったのだ。

剣を持たぬ自分は、人により近くなる。生身の体だけでは蔓延る悪神の力に抗しえぬから、倭姫命を通じて神剣が与えられた。

だから全うに考えれば、剣なしで悪神を相手取ればは自分は死ぬ。

だが、そこでもし、剣なしで神を殺すことができたのならば——この定められたかの如き運命を、超えられる気がしたのだ。

されど結果は知つての通り。神剣を持たずして伊吹山に向かった日本武尊は、途中で見かけた山の神の大蛇を神の使いと勘違いし、無礼な発言をして怒りを買った。

神に降らされた雹によつて呪われ病を得てしまった日本武尊は、熱にうなされながら山を下るといふ這う這うの体となつてしまったのだ。

——決死の覚悟で挑んだ伊吹山の戦いにおいて、彼のわずかな希望もついに空しくなつた。

結局神の加護なき、戦う気のなき日本武尊、勝てない日本武尊——ただの小確命はもういらぬと、最後通牒を突き付けられたに等しかった。

ここに至り、本当に心の底から彼は、自分の命などどうでもよくなつたのだ。

病は確実に日本武尊を蝕んでいく。

杖を突きながら、意識がもうろうとしながらも足が止まらない。もう行く当てなどないのだから、さっさと倒れてじつと死ぬのを待てばよい。

それなのに一体自分はどこに向かおうとしているのかと、ロクに働かない頭で彼は考え続けた。

どれくらい歩いたか、どれくらいの時が経ったか。

五感も時間の感触さえも失い始めたころに、日本武尊はようやく氣付いた。

「——帰りたいのか。たとえ何もなくても、誰も待っていないくとも」  
もしかしたら兄の件がなくとも、最初から父帝は自分を疎んでいたのかもしれない。何も知らず何も気づかず何も考えていなかったがゆえに、自分は幸せだったのかもしれない。それでも、かつて、彼の幸せは確かに故郷に在った。

今の大和に日本武尊が望むものがないことくらい、彼は知っている。

もう誰も彼も自分のことを忘れているかもしれない。それでも。

——俺は、何でも気づくのが遅いな。

これだけ切羽詰まらなさと、帰りたいという気持すらわからない。歩けなくなるまで弱り果てて、彼は木に身を寄せて空を見上げた。

降りゆく白いモノは雪か、桜か。日本武尊にはわからなかった。

体は重く、悪寒がずっと止まらない。視界は薄れていくが、何故か空が果てしなく青く澄んでいることはわかった。

青い空に、一点の白が見える。不思議とその点は徐々に大きくなっていく。それは白い鳥。鳥は高度を落として、日本武尊の足の上に入りわりと羽を休めた。

世の穢れを知らぬような純白を宿した鳥は、そつと彼に身を寄せている。

彼はもう、長く時を置かず自分の命が消えることを知っている。

——この魂くらいは、大和は拒まないだろうか。

そのような幻想ユメに身を委ねたもの僅か。日本武尊の傷だらけの手はそつと白い鳥に触れて、——その長い首を握りつぶした。

甲高い鳴き声を上げて、白鳥は死にも狂いでその体を震わせる。日本武尊は凄惨ともいえる笑みを浮かべて立ち上がる。

その足は既に彼の体を支えるに足る強ささえないにも関わらず、血が噴き出して溜まっていくにも拘らず、日本武尊は立つ。





「俺は、お前たちの望む俺であろう」と。

「俺は、未来永劫、この国で「日本武尊さいきょう」になる」と。

ゆえに、今わの際になつて、彼はこのまま訪れる死を——大和へ帰る道を——拒んだ。

「俺の魂が欲しいか！ならば磨り潰れるまで好きにすればいい——  
——その代わり」

日本武尊は戦いが得意だったが、自ら望んだことはない。必要でないならしない。ただその才能が他と冠絶していたから、戦うことが使命となり戦い続けてきただけだ。

流石に彼とて、わかっている——もしその力さえなければ、別の生き方ができたのかと思ひながらも。

それ以外に、何もないから。助けたことも、救ったことも、ないから。

ただ願いを叶える為に、継りつけるものが戦以外になかったのだ。

「俺に戦いを与えろ！未来永劫、この国で最も強き者は俺であると証明させろ！」

その願ひは、未来永劫この国に現れるであろう英雄豪傑怪物の類をも乗り越え打ち勝つ誓いのちい。

彼が死と言う安息を得るのは、彼以外に立つ者が居ない世界に至つた後の話だ。

「世界」は彼の願ひを聞届ける。死後英霊の座に招かれることが約束されている日本武尊は、魂を世界に引き渡すことと引き換えに戦場を得る。

それは、聖杯戦争に限らず、英霊を呼び戦い合わせる儀式の際には優先的に呼び出されることを意味する。

願ひが「聖杯を得る」というものではないために、彼は聖杯を得ようと戦いを止め、本当の死を迎えることはない。

一度生を諦めた者は、今一度この日本と言う国が消滅するまで、永劫に戦いつづける。

「最強」の名に偽りのないことを証明する、その為だけに。

12月7日① 波乱の朝

「……ここは？」

悟は眠い目をこすり、上半身を上げた。一体この、異人館のような家はどこの誰の家なのだろうか。きよろきよろと見回せば、ここは寢室の類ではないようだ。二組のソファとテーブルが部屋の隅に押しつけられていて、代わりに悟が横になっているパイプの折り畳み式ベッドが鎮座している。

覚醒しきらぬ頭で記憶を掘り返す。自分はキャスターというサーヴァントに呪われて、セイバーのマスター・碓氷明のところに助けを求めた。アサシンとは契約を破棄して、土御門という少年がマスターとなった。

そしてセイバー、碓氷明、アサシン、土御門一成の四人はキャスターを打倒しに行った――

「……彼らは？」

そこまで思い出し、悟は勢いよくベッドから跳び起きた。いきなり立ち上がったため眩暈を起して倒れ掛かるが、なんとか踏みとどまる。体はだるいが、歩けないことはなく腹も減っていることがわかった。魔術を知らない悟でも、体の状態からもう「呪われていない」だろうことは理解した。

ということは、彼らは無事キャスターを倒せたことになる。

それでも彼らの姿を見ないと落ち着けず、悟はそつと部屋を出た。

「……そもそもここはどこなんだ？」

部屋から出るとやはり西洋の邸で、朱い絨毯が敷かれたホールのような場所に出た。だがそれよりも驚いたのは、丁度通りかかったと思しき少女と目があつたことである。腰まで伸びた黒髪はつややかで、肌は雪のように白い。目鼻立ちの整った美少女だが、朱い目が異彩を放っている。

少女は一瞬目を丸くした後、向こうの――大きなテーブルが見える

食堂らしき部屋に駆け去って行った。

「……カズナリ・ツチミカド!!ドロボウよ!!ヘンタイよ!!下着ドロボウよ!!」

「ええっ!?!」

「何!?!キリエさつさとこつちこい!!」

キリエと呼ばれた少女が駆けて行ったのと入れ替わりに、土御門一成——新たなアサシンのマスターがエプロン着用、フライ返しを片手に飛び出してきた。警戒心に満ちた顔は、悟を認識するなり驚き、そして安堵へと目まぐるしく変わった。

「悟さん!もう大丈夫なんですか!?!」

「あ、ああ。土御門君も無事でよかった、」

一成が無事であったことに安堵するが、同時に先程の少女の事も気になる。彼女も部屋の奥に隠れながら、ちらちらとこちらの様子を窺っている。

「あ、おいキリエこつちこいよ。この人は泥棒でも変態でも下着ドロでも痴漢でもないから」

手招きに応じて、キリエという少女はおそろおそろ近づいてくる。見れば見るほどその姿は人間と言うよりは人形、という形容が似合う少女だ。

警戒心を隠さない少女の為、悟は自分から身分を明かした。

「えー……始めまして、山内悟です。キミは?」

「……あら、よく見ればあなたマスター?」

「!?!」

少女から警戒心が消える。しかし悟は逆だ。

てつきりこの家の少女かと思いきや、聖杯戦争という戦いの参加者だとは思わなかった。

「土御門君、この子も聖杯戦争の参加者なのか?なぜここにいるんだ?そもそもここはどこなんだ?」

「カズナリ・ツチミカド、私はお腹が減ったわ。それに台所にアサシンを放ったままよあなた」

「いっぺんに喋るな！わかんねーから!!」

「……朝から元気だねみんな……」

混沌とした場所に一条の光、階段をゆっくりと降りてくる明とセイバーだった。上下薄い水色のパジャマ姿の明は、あまり興味なさそうに一同を眺めていたが、悟に目を止めると笑った。

「……悟さん、体は大丈夫ですか？」

「あ、はい。少しだるいくらいで、」

その時、ナイスタイミングと言わんばかりにぐぎゆる、という妙な音が全員の耳に入った。それは悟の腹から漏れた音である。

「……」

居心地悪げに悟は身を竦めた。さらに食堂の奥にあるキッチンから、アサシンの「おい一成ーなんか焦げてンだけどいーのかコレエ」というお香気な声まで聞こえてきた。

何ともいえない雰囲気は漂ったが、階段を降り切った明はセイバーに助けられながら食堂へと向かう。

「……とりえあずご飯食べる？」

悟は食堂の席についてからも、きよろきよろと部屋の様子を見ていた。ジャコビアン様式だかコロニアル様式とか細かいことはわからないが、れつきとした洋館だった。

絨毯の敷かれた上に黒いしつかりしたテーブルが鎮座し、木の肘掛椅子が六脚、三脚ずつ向かい合っている。部屋には暖炉もあるこれぞ西洋の御屋敷、に相応しい様子だ。

だがそのテーブルの上に用意された朝食はド和風で、白い皿にはひじきの炊き込みご飯、スープポウルにはネギと腑の味噌汁、出来合いだろうが揚げ出し豆腐、きゅうりと白菜の漬物が少々乗っている。食器とメニューが若干合っていない。

キリエ、一成、アサシンが座り、その真向いにセイバー、明が着席した。悟は余った明の隣の席につく。

「多めに作つといてよかったな。昼間も持たせるつもりだったんだけど」

熟睡した一成はすっきりした顔で笑っている。そんな彼が指揮監督、アサシンが調理補助したという朝食は、碓氷邸にしては珍しく手の込んだ食事である。一成は一人暮らしではあまり作らないが、実家にいた時は作らされて腕が鍛えられたらしい。

「……一成、私の媚に来ればいいのに」

「ブウツ!!」

出来立ての食事をしげしげと眺めながら、明は何気なく言った。幸い食事をする前だったので嘔出して食卓を汚すことはなかったが、一成は恐ろしく挙動不審になった。

「おおおお前、そういうこと、冗談でもあんまりいうもんじゃねーぞ！」

「いや冗談だけど……あなただってちゃんと冗談だってわかってるし、いいじゃん」

「極めて不本意だが、俺も土御門に同意する。明、あまり不用意にそういうことを言うな」

「……なんでこんなに大不評なんだろう」

不平を顔に書いたままの明を置いて、一成は咳払いをした。

「……とにかく、食べるぞ。いただきます」

一成に続いて、各々いただきますと言ってから食事に手を伸ばす。そうして朝食が始まった。セイバーは挨拶だけ済ませるなりキツチンに向かい、パックのたくあんを勝手に持つてきて切らないまま丸かじりしている。一成と悟は不可解な顔でその光景を見ていたが、セイバーはまるで気にしていない。

そんな中、キリエが悲鳴染みた声を上げた。

「大変よカズナリ・ツチミカド！私はチョップステイクが使えないわ！」

「あれ？シヨッピングモールでどんぶり食った時どうしてたっけお

前

「あの時は店員にスプーンを用意させたわ！」

「あーもう騒ぐな騒ぐな。今持ってくるから」

腰をかきながら一成はキッチンへ足を運ぶ。アサシンはその様子に半笑いだ。スプーンを得たキリエはもりもりと食事を始め、セイバーが手を付けていない揚げ出し豆腐を強奪しようとしたが、セイバーは素早く自分の方に引き寄せた。

「嬢ちゃん案外意地汚ねーな。俺的には親近感を覚えるけどよ」

「だってセイバーはこれ食べてないわ。なら私が食べた方がエコというものよ」

「食べていないわけではない。取っただけだ」

「地味に意地汚いんだよね、セイバーも」

悟以外の五人はまるでいつものように食事をとっているが、彼は全く訳が分からない。箸を握ったまま、そっと隣の明に尋ねる。

「あの、確氷さん、ここはどこなんでしょう」

「私の家です。一応安全地帯だと思ってきていいです。あと早く食べた方がいいですよ、ご飯のおかわりはセイバーが食べてしまうかもしれないんで」

ん、と空になった茶碗を突き出してお代わりを無言で要求するセイバー。一成は「お前亭主関白!?!」とぶつくさ言いながらもキッチンからご飯をよそってくる。とりあえず悟も食事を始めた。キャスターに呪われていた期間を含めて、およそ丸三日はロクに食事をとっていないことになる。

悟が胃を驚かせないようにゆっくり食事に手を付け始めたところで、明が説明を始めた。

「キャスターは倒しました。見ての通り、私たちは無事です。あと経緯は省きますけど、そこにいる女の子はキリエスフィール・フォン・アインツベルン。もっと簡単に言えば、キャスターのマスターです」

「……はっ!?!あの子が!?!」

驚く悟をよそに、明はキリエに向き直って悟を紹介した。「アイン



ツベルン、そしてこの人は元アサシンのマスター、山内悟さん」

「そう。あとアキラ・ウスイ、私の事はキリエと呼んで結構よ」

キリエは既に悟に興味がないらしく、もりもりとひじきごはんを食べている。

ここでも悟は逆で、自分を容赦なく殺しにかかったマスターが目の前にいること、それよりもマスターがこのような幼い少女であることにも衝撃を受けていた。

「ほ、本当なのか」

震える声で話しかけられ、キリエはそこでやっと思に顔を向けた。「ええ。マスターであった時はあなたを殺そうと思っただけれど、私はもうマスターでもないし、あなたをどうこうする気はないわ。アキラ・ウスイとカズナリ・ツチミカドという奇矯なマスターに感謝なさい」

殺す気はない、ということを示した。しかし、それは悟の衝撃を薄めるのに何の役にも立たなかった。彼が本当に衝撃を受けていたところは別にあるのだから。

悟の動揺に気づかないまま、明は申し訳なさそうに口を開いた。

「悟さんはもう令呪もないし、早くここから出してあげたいんですけど、聖杯戦争がちゃんと終わるまで無理かもしれません。本当に申し訳ないんですが、もう少しだけここにいてください」

「あ、はい……」

衝撃から抜けきらぬまま、悟は明の言葉に生返事を返した。一成はおかわりをよそったりキリエのこれは何あれは何質問を受けたりしてロクに自分の食事が進んでいなかったのだが、やっと思自分の食事に箸をつけ始めていた。

「だけど悟さん、まだ全快じゃねーけど治って本当に良かったな」

「そうだね」

「……そのことには、本当に、申し訳なかったです。死ぬかもしれない目に遭わせて」

最初から悟自身が「聖杯」なんていらないとわかっていれば、明と一成を巻き込むことはなかった。アサシンは「聖杯はお前には必要ない」と言っていた。

すっかりそれを聞届けていれば、こんなことにはならなかったのだ。

「ま、終わり佳ければすべてよしだろ。この俺の八面六臂の活躍によつてどうにかなったんだから気にするな」

アサシンが箸で人を指差し、ドヤ顔で鼻を鳴らした。それに引き続き、明も頷く。

「そうです。どうせ私たちはキャスターと戦うことになっていましたし、気にしないでください」

「でも」

悟から見て、一成は具合の悪いところはあるそうにない。しかし明は階段から降りる時にセイバーの助けを借りており、元氣そうに振舞っているが負傷していることは明らかだ。

それでも心配をかけないように元氣に見せているならば、あえて問うのは無粋ではないかと悟は逡巡した。

「……ありがとうございます、碓氷さん」

「一般の人をこの戦争から護るのも、管理者の仕事ですから。助けられて本当によかったです」

そういうと、明は良くない顔色のまま笑顔を悟に向けた。そう言われてしまつては、そう本当に屈託のない笑顔を向けられてしまつては、悟も謝り倒すわけにはいかない。

その時、急にセイバーが口を開いた。

「——何もよくない。最悪だ」

「……セイバー?」

明は訝しげな声をセイバーに向けた。言葉からしてもものすごく機嫌が悪い。思えばキャスター戦後のセイバーは、どこか態度がおかしい。

キリエの乱入で話が途切れてしまつていたが、昨日の話の続きだと

明は瞬時に了解した。

「……この男が助かったのが、そんなにうれしいか？」

「え？……うれしい、よ？」

「……碓氷さん」

悟も訳は分からずともかける言葉を失って、沈黙が流れた。明はセイバーの意図するところが全く分からず、ただセイバーの様子を訝っていた。

一方セイバーは無愛想だが、今はそれに輪をかけて表情がなくなっていた。かちりと茶碗の上に箸がおかれる音が妙に響いた。

「何故」

明はちらりと戸惑う悟を見た。

「……だってバーサーカーの時はさ、皆死んでしまった。普通に暮らしてた人、病院に入院してた人も、マスターも、たくさん」

「……もしかして、病院で起きたテロって」

悟はアサシンから、春日の惨殺事件がマスターとサーヴァントによるものだと聞いていた。だが、あの五十人以上が死に至った病院のテロ事件までそうだったとは信じられなかった。

いや、バーサーカー戦を見たことのある悟は、本心から否定したわけではない。

この戦いにおいて人はあまりにも容易く死ぬと、彼は知っている。

明は静かに頷いた。

「犠牲はその死んだ人だけじゃない。その人の家族や友だちも被害者だよ。だけど、今回は違った。悟さん一人だけだけど、ちゃんと護れたから」

「そうか」

「セイバーにも一成にもアサシンにも感謝してる」

バーサーカー戦までにたくさん「普通の生活」という奇蹟が奪われた。その人が生きていると言う「当たり前」を失った家族も、「普通

の生活」を奪われた被害者だ。

しかし、キャスター戦は違った。悟だけではなく、その娘と妻の気持ちまで殺さずに済んだ筈だ。

普通の人は、普通の幸せを全うすべきだ。

魔術師として、管理者として、神秘を護りその責務を全うできれば誰も文句は言わない。

セイバーからの返事はない。だが、刹那彼は椅子を倒すほどの勢いで立ちあがり、その手が、明の頬を弾いた。

あまり力の加減がなっていないそれは、明をも椅子から叩き落とした。明はうめき声をあげて床に転がった。

「っ……………」

「碓氷さん！」

「やめろ！」

隣に座っていた悟が、慌てて明を背中から抱え起こした。いつの間にか一成がセイバーを羽交い絞めにしていた。訳が分からない明は、頬を手で摩りながら自分のサーヴァントを見上げた。明を見下ろしてくるその顔に、どこか見覚えがあった。

キャスターと戦っているとき、明から剣を受け取れることを拒んだときと同じ。

「っ……………え、な、何？」

「他の人間の生死などどうでもいい」

「……………セイバーが一人の命をそんなに大事に思っていないのは知っているよ」

セイバーが人命を尊ばないことは、最初は衝撃を受けたものの明とて既知だ。明がいくら悟やその家族の幸せを思おうと、セイバーには関係ない。

しかし本当に興味がないなら、何も言う必要はないはずだ。その逡巡も、わずか。

「そんなどうでもいいもののために、お前が死んでいいわけがあるか!!そんなもの、勝手に死なせておけばいいだろうが!!」

窓が振動するほどの大声だった。セイバー以外の誰もが目を丸くして、彼を見ている。しかし、明には呑気に驚いている暇はなかった。何故セイバーがここまで怒るのか考えるよりも、苛立ちが先に立った。

「……私は普通の幸せってのは、すごく大事なものだと思ってる。まして魔術師たちの戦いに捲き込まれて死ぬなんてとんでもないことだよ。みんなを助けるのは無理だよ。でも、この管理者として、魔術師として、私にはやらなきゃいけない責任がある」

セイバーは不本意にもかかわらず、明の命令を聞いてくれているから感謝している。しかし管理者としての責務を全うするために命を賭けるのは、明の自由のはずだ。それをセイバーにとやかく言われる筋合いはない。

「私の役目だから、ちゃんとやらなきゃいけないんだ」

「うるさい。そんな役目さつきと捨ててしまえ」

いつもとは打って変わって、明の言葉を聞き入れることなくセイバーは言い捨てた。

「私がどうなろうとセイバーに関係ないじゃん。昨日「死んで仕方ないわけない」って言ってたけど、別にどうでもいいよ」

「……お前、それは本気で言っているのか?」

明は完全に苛立っていた。負傷が未だ体に残り熱を持ち全快には遠い事、セイバーが何故今更自分の方針にあれこれと言っているのかわからないせいもある。

だが、それとは別に今日の夢がまだ、頭にこびりついている――

「何もできなかつた」と本気で考えてしまった、あまりにも愚直に過ぎた護国の英雄。本人はきつと、護国など全然興味なかったのに――やれ神命だ天皇の命だに振り回されて、それでも投げ捨てず戦ってきた者が何のつもりでそういうのか。

「うるさいなあ……セイバーは自分の心配だけしてれば?そんな、身

売りみたいなことまでして叶えたい願いがあんだから。あれしちやだめこれしちやだめって口うるさい、私みたいなクソマスター見捨てていいよ。神父がなんだって言っても、あっちの敵はランサーくらいだし、そのキリエとでも契約して一成アサシンとでも協力して頑張れば？キリエと一成なら神秘漏えいも一般人を巻き込むこともしないし、いいんじゃない」

場は水を打ったように静まり返った。今まで言いたいことがあれば文句は遠慮なく口にしてきたセイバーは、一度深く目を閉じた。

再び目を開けたセイバーの顔には、落胆ともあきらめともつかぬ表情があった。

「……マスターがそう思っていることはわかった。だが、俺は召喚された時から「お前の剣である」という誓いとともにある。だから、俺から契約を破棄しようとは思わない」

だが、とセイバーは続ける。

「もし明が本当に俺との契約を破棄したいならば、その際は応じよう。その令呪を渡す先さえ見つければ、俺はそれに従う」

彼の顔から表情は消え去っていた。明ははっと顔を上げてから再び言葉を探したが、それよりも彼の方が強かった。

「……セイ」だが、一つ言っておく。やはりお前は、自分のことがどうでもいいんだ」

それだけ言って、セイバーは一成を振り払って食堂から出ていく。出ていきざまに彼は振返らずに付け加えた。

「どうあっても俺は聖杯戦争に勝つ。それが、俺に残された全てだからだ」

和気あいあいと始まったはずの朝食は、白けた空気の中で終わりを迎えた。セイバーは一応碓氷邸の敷地内にいるそうで、明自身は自室で寝入っている。

キリエは自室に戻ると言い、一成は朝食の後片付けに精を出してい

る。まだ体調の優れない悟は応接室で眠ろうかと思ったのだが、どうしても気になる事があった。あまり深入りすべきことではないとは思ったが、放っておけなかった。

悟はそろそろと、台所に立つ一成と、洗った皿を拭いているアサシンに近付いた。二人も、それまで何か話していたようだったが悟に気づくと、振り返った。

「おう悟、どうした」

「ちよつと聞きたいことがあつて。碓氷さんのこと、なんだけど」

そう切り出すと、一成とアサシンも同じような事を考えていたらしく顔を見合わせてからため息をついていた。一成の方は若干怒っているのか呆れているのか、気分を皿洗いにつつけて勢いよく水を流していた。

「あいつらはアホか!!」

「おう、姉ちゃんと皇子サマを見事に現した一言だな」

知らぬ間に一成とアサシンはすっかり意気投合しており、若干の寂しきを感じつつも悟は口を開いた。

「俺は魔術のことを全然知らないし、完全に見当違いなことを考えているのかもしれないけど。——彼女、役目だとか、魔術師だから大したことじゃないって言っているけど」

悟と碓氷明の付き合いは三日程度で、その上その三日の殆どの時間を、悟は眠って過ごしていた。ホテルで目を覚ました時に聞いた「魔術師なるもの」の倫理は完全に悟の理解の範疇外であり、彼女のことを良くわからないと思っていた。

だが、今日顔を会わせた碓氷明は悟の無事を、心からよかったと笑っていたのだ。

——魔術師といっても、普通のいい人じゃないかと思つたこともつかの間。セイバーとの喧嘩を経て、悟は思ってしまった。

「碓氷さん、もしかして自分のことを粗末にしているのかな、って」「俺もそう思う、います」

彼自身も苛ついているのか、慌てて口調を直して一成は悟の言葉を肯定した。最後の一枚を洗い終わり、アサシンにパスしてから悟へ振り返った。

「あいつ悟さんに余計な心配させたくないとかで、俺がこんなこと言ったら怒りそうなんですけど言います。碓氷、セイバーの剣の力で致命傷を負っても死なないって状態だったんですけど、キャスターの手下にあいつ一回斬られたんです。その後、敵が俺を狙ってきたときに、あいつ、俺をかばってまた斬られた。死なないからって」

今でも一成はその光景を鮮明に思い出してしまう。一分の躊躇いもなく、敵の茨木童子の刃をその身で受ける姿を。何でもない風に彼女は振舞っていたが、そこで何も無いようにふるまえることが既におかしい。

「そこらへん時皇子サマいなかったけどよ、もしいたら卒倒してただろうな」

珍しく笑いもせずにアサシンが言うあたり、悟にもかなり根の深いことがうかがえた。一成もアサシンも深々とため息をついた。

「そこで言えば姉ちゃん和皇子サマは似た者同士なんだろ。どうしてああまでこじらせちゃったのかは知らねえが、滑稽なことって。お互いにてめえはてめえを粗末にしてもいいが、近しい人間がてめえをないがしろにするのが許せねえんだから。おい一成」

「……んだよ」

「いまの姉ちゃんたちにあんまり茶々いれんなよ。あつちもあつちで話すだろうしマジでマズいってなるまでは放っておいた方がいいぜ。めんどくささに拍車がかかるからな」

セイバーと明の二人に関してツッコみたいことが蓄積している一成を見切って、アサシンは先手を打って釘を刺した。

一成はタオルで手を拭くと、すたすたと台所から出て行こうとした、が渋い顔で振り返った。

「……今から用事あるから碓氷の部屋に行くけど、何も言わないことにする」



そうは言うものの傍観はしないぞという様子でのしのしと台所を出ていく一成を見送り、その場にはアサシンと悟が残った。

そういえば、悟はアサシンと二人だけで話をするのは解呪後初めてである。

明には礼を言ったが、アサシンにはまだしつかり礼を言っていない。今更少々気恥ずかしい気もするが、悟が意を決した時のことだった。

「おい悟、お前はもう戦争するとかアホなことあ言わねえよな？」

無事で良かったといった喜びの声一つなく、いきなり喧嘩を売るように人さし指を突き付けられて悟は面食らった。ただそちらの方がよっぽど知るアサシンらしい。

お涙ちようだいな再会から一連の流れをする自分たちを想像すると、悟としてはうすら寒いものがある。

「ああ。俺に願いはあるけど、それは自分で何とかする事だから」その顔に、一かけらの悔いはない。本当に遠回りになってしまったが、大切にしたいことがやつとわかった。自分の命を擲って「時を戻したい」とは思わない。

それに、別居してからも会いに来る妻と娘の気持ちを、こんな遠回りでも危険でもアサシンと過ごした時を、「時を戻して」なかったことしたくない。

まだ、彼女たちの気持ちがあるから、これから悟は応えていくだけだ。

「……よしー」

一体どこで覚えてきたのか、アサシンは小気味よく指をならした。彼は自分の活躍を誇張するが、恩は着せない。「面倒でも子分を助けるのが親分」「弱きを助け、強きを挫く」を、アサシンは信条にしておりそれに従ったままでの話だ。

たとえその生涯の終わりが子分による裏切りだとしても、その信条は変わらない。

「しっかし俺は職探しからか。全く気が重い」

「ま、なるようになるだろ。死にやあしねーよ」

能天気極まりない、かつ無責任な発言だがその声はどこまでも快活だ。庶民の夢見たアサシンという名の英雄は、歯を食いしばって生きていく人間の為にある。

「……アサシンは、土御門君とこの戦争を続けるのか?」

「おう。ま、あいつもあいつで悪くないぜ。お前も助かったし、あいつもアーチャーとのゴタゴタは終わったんだけどよ、物事を途中で投げ出すなんてヤダー!とか言ってるからな。俺も最後までやってみらあ」

悟は思わず苦笑した。今でも彼らがこんな危険な事をするのはよくないと思っているが、そんな彼らに助けられてしまった身だ。特に一成の様子は、石にかじりついてでも最後まで戦うと決めているが如くだ。

アサシンは勝手に冷蔵庫を開けて、未開封の牛乳を取り出した。

「何だかんだで俺も結構真面目に戦争してっからな、もうちよつと現世に長居して夜の街に繰り出すとかしてーしな」

「今思ったけど、お前って結構土御門君のこと、気に入ってるよな」

「ん?なんだ悟ヤキモチか?」

「いや純粹な興味だけだ」

「そこは「キイイ!俺の他にもマスターがいるなんて!このアバズレサーヴァント!」とでもいうところだぜ?ノリの悪い奴だ」

どこから出したのか不明な甲高い声で演技をするが、悟には正直気持が悪い以外のコメントが出なかった。若干外したことを解して、アサシンは咳払いで仕切りなおした。

「ま、そうだな。アレは魔術は未熟なくせに、姉ちゃんとか皇子サマ、一流のマスターと天下の槍使いに勝つってバカみてえに信じてやがるとこ最高だな。あいつは強いマスターじゃねえが、それでいい。強い者が勝つのは当たり前のことだ、弱きものが勝つてこそ勝利つての意味がある」

権力に叛逆するモノ、庶民の夢を形どった英雄ならではと思われる言葉だ。弱きを助け、強きを挫く。常勝という言葉には程遠く——アサシンや悟、一成にとつては勝利とは得難い貴重なものである。

彼らは勝利そのものを欲するのではなく、勝利のために戦う、立ち向かうことこそを尊く思う。

「しっかしこの戦争も大詰めだ。残るは俺、セイバー、ランサーだ。昨日は全部休息日みたいになっちまったが、流石に今日あたりランサーも動き出すだろ」

「……それは、今日で戦争が終わるかもしれないってことか」

「そーだとしても全然不思議じゃねえってこった」

アサシンは酒のようにぐびぐび牛乳を飲みながら、空っぽになった牛乳パックをシンクに置いた。それから何事もなかったかのように、すれ違いざまに悟の肩を叩いた。

「まだ全快じゃあねーんだろ、おとなしく寝てろ」

悟は食堂をすり抜け、一階のホールへと歩くアサシンの背を追いかけた。無事を祝して抱き合い感動するなんて柄では全くないが、伝えられるうちに伝えなければならぬ。悟はその派手な羽織の背中に向かって叫ぶ。

「アサシン、ありがとうな！」

「そんなデカイ声じゃなくても聞こえてら」

やはりアサシンは常と変わらず、ひらひらと後ろでに手を振るだけだ。

12月7日② 土御門の家

昨日は本格的に明が寝込んでおり、かつ一成自身も戦闘の後遺症で  
這う這うの体だったために何も言わず、かつ言えなかった。しかし大  
西山での戦いについては、魔術師としては後塵を拝してばかりでも何  
か言わねばならないと思っていた。

セイバーが怒るのも、今回ばかりはよくわかる。

「しっかし、言いたいことはわかるけどセイバーのやつ、言葉の選択へ  
タクソすぎだろ」

無暗やたらと「殺す」など物騒な言葉のばかり言い過ぎているせいで、普通のコミュニケーションに支障をきたしているのかと疑いたくなる。明も明で、相当頭に血が上っている。あれだけ不機嫌なのは体の状態、朝だったこともあるだろうがそれだけとは思えない。

ただそれを差し引いても、売り言葉に買い言葉にしても、明はセイバーの地雷を踏んだも同然である。

一成はぶつくさ文句を言いながら、階段を上ってホールを挟んだ真正面にある、明の部屋へと突進した。

「クツソーーーーゆる仲立ち？取り持ち？みたいなのはニガテなんだつ  
の……おい！確氷！入るぞ!!」

勢いのまま古い金属製のノブを掴もうとしたその時——一成がノブに触れるよりも、内側から扉を押す方が早く、彼は思いつき扉に顔を強打した。

「あでっ!!」

「はい?」一成?」

驚いたのは明も同様で、一成の様子をしげしげと眺めた。「ご、ごめん。大丈夫?」

「……まあな……つかお前その恰好。どこ行こうとしてんだよ」

頭をさする一成がそう言うことも然り。明は薄いピンクのブラウスに深いワインレッドのスカート、黒タイツといういつもの恰好だったのだ。セイバーの剣を体に入れている為傷の悪化はないが、彼女はまだまだ安静が必要だ。

「昨日は俺もあれだったけど、俺の陰陽術ならお前にも効くかもしれないしせめて治癒でもかけてから……って待て!!」

一成は、話も早々に横切つていこうとする明の腕を掴んだ。彼女は容易く歩みを止められたが、勢いよく振り返り矢継ぎ早に言った。

「セ、セイバーがいなくなっちゃったから探しに行かないと」

「? いなくなつたつて?」

「屋敷の中にいないんだよ、さつきから念話で呼びかけてるけど全然返事してくれないし、多分駅の方にいる感じなんだけど、」

本調子ではないせいか、一成を振り払おうとする力も大したことはない。それよりも明は一見して度を失っている。親からはぐれて途方に暮れる子供のようであり、大事なものを落として慌てている姿にも似ている。

「お、おい落ち着けよ」

「謝らないと、いくらなんでも言い過ぎた、セイバー冗談通じないって知ってたのに、離して」

「だから落ち着けつつの!! テンパつたまんまだとまとまるもんもまともまねー!! お前がセイバーの地雷ブチ抜いてきたことは間違いないけど、お前、セイバーの言わんとしたことわかってんのか?」

「魔術師の役目なんてやめちまえでしょ!?!」

「くっつ、なんで「やめちまえ」って言ったかって話だ、このバカ女!」  
明は明でセイバーに対しての失言で頭がいっぱいになっていたのだろう。セイバーの真意にまるで気づいていなかった。

セイバーの発言もよくなかったが、コミュ障コミュ障言う割に明も絶対に人づきあいに長けてはいない。というより、ケンカに慣れていないというのか。

とにもかくにも一成は頭を抱えて絶叫したい気持ちだったが、大きくため息をついてから明の両肩を掴んだ。

「お前がどうして自分を粗末にするようになったのかは知らねー。だけど、それをセイバーはイヤだって思ってたんだよ。自分を擲つてまでもしなければならぬ役目なんてしなくていいから、もつと自分を大

事にしろって言うてんだ！」

「自分を大事にして、そんなのセイバーの方が」

明にあの夢が、蘇る。誰かの願いを叶えたいと思っただけで叶えられず、いまだ大和の国へと帰ることすらしない。マスターの願いが「根源」と聞いて、最後には殺されると思いながらも、正しくサーヴァントであらうとする者に「自分を大事に」云々言われたところで説得力がない。

一成は呑み込みの悪い明にしびれを切らし、一気呵成に結論をぶつけた。

「だから、お前らはお互いに自分はどうでもいいけど、自分をないがしろにする相手に怒ってるんだっつーの！いい加減わかれ！バカ！」

しん、と静まり返った。下の階にはアサシンや悟もいるはずなのに、誰もいないところへ放り込まれたような静寂のあとに、明は静かに息を漏らした。

「……あ、そっか……」

「そっかじゃねえよバカ確氷」

「そりゃあ、お互いに「何言っただ」ってなるよね……」

拳動が落ち着き、いつもの明の様子に近くなってきたのを確認して、一成は内心胸を撫で下ろした。

「ありがとう一成、ちよつとまともにセイバーと話せる気がしてきた。いってくるよ」

まだ気は急いでいるようだが、明は礼を言うの不調を押しして素早く階段を下りていった。

「気を付けろよー」

とりあえずやれるだけのことはやったが、あとはセイバーたちの問題である。サーヴァントとマスターという繋がりゆえに、彼らには彼らにしかわからない過去や思いがある。セイバーなら明が今の状態になった理由もわかり、明ならセイバーが今の状態になった理由もわかる可能性がある。

「……………ん？なんか忘れてるような」

すっかり一仕事終えた気分になっていた一成だが、何か頭にひっかかっている。かなり大切なことだった気はするのだが、と思いつたところで手を打った。

「…天眼通の相談だ!!」

昨夜キリエに「眼の話は明日にしましょう」と言われており、明を連れてキリエの部屋へ行こうとしていたのだった。一成は困ったように頭を掻いた。

「……………まあ、確氷にはあとにするか……………」

\*

大西山において、キリエはハルカによって気絶させられていたため、キャスター消滅の姿を目撃していない。それでも、マスターとサーヴァントとのつながりが切れる刹那に、音は不鮮明ながらも彼女はその光景を夢の形で幻視した。

かつて、鬼たちの楽園は人間によって打ち滅ぼされた。頼光四天王に斬られながら、自分たちを欺いた人間たちに怨嗟の念を吐きながらも、彼女が思ったのは一人の仲間の無事。

その名を茨木童子。仲間はいないと、死ぬまで一人きりだと思った自分を変えた、一人の仲間の無事を——今わの際で酒呑童子は願った。

そしてその願いどおり、茨木童子は一人落ち延びた。

ただ、一つ酒呑童子が心配していたのは——仲間がいなくなつて、彼は一人ぼっちで耐えられるのかということだった。

一方では彼がきつと、また自分のような者を見つけて異形で仲良く楽しく暮らすと信じ。また、もし一人の孤独があまりにも耐えがたかったなら——

私たちのことなど忘れろと、思っていた。

過去の幸福な時間が、これからの茨木童子を苦しめるだけならば忘れればよい。彼が忘れても、この酒呑童子は覚えている。その時に討たれた鬼たちも覚えている。

しかし、現世において再開した茨木童子は酒呑童子の思いすべてを裏切っていた。彼はあの後楽しく生を謳歌することもなく、大江山を忘れることなく、大江山が壊滅した時を止めたままだった。それを、現界して茨木童子を召喚してから確信してしまった。

だから理想郷を作らなければならない。そうすれば全員幸せに痛みなく生きていける。それだけを願っていたキヤスターは、望みを果たすことなく、慟哭の中で消滅した。

キリエはキヤスターを望んでいたのではなかった。寧ろキヤスターの召喚は失敗であった。何故聖杯はキリエとキヤスターを引き合わせたのか、キリエ自身もわかっていない。

そのくせ、キヤスターの心は良くわかった。人間たちに悪鬼と蔑まれる彼らは、実際人間たちから見ればその通りの悪鬼である。

だが彼らの中では、仲間の間においてキヤスターたちは途方もないほど純粹であった。人間を食べるのも、理由なんて「おいしいから」「楽しいから」の簡単なものである。激しい暴力と包み隠さない力そのものである彼らは、仲間内でも争いを厭わない代わりに、欺くと言うことを知らなかった。

ある意味純粹であり過ぎたために、彼らは人間に謀られ殺された。

一般人の中に置いて、魔術師は異質、その中でもキリエはさらに異質である。聖杯を手に入れるためだけに製造されたホムンクルス。

人とも合わず三十年に渡り深窓の城にて暮らし続けた雪の令嬢。聖杯の娘。

ゆえに、人が死ぬことも躊躇わず聖杯の身を純粹に欲した彼女に、キヤスターが似通うのは道理である。キリエの最高といえるマスターの資質と、その心が——本当は何も召喚されず終わるはずの召喚で——残酷でもありながら、偽らぬ鬼であるキヤスターを呼んだ。



——彼女は、決して失敗してはいなかった。  
キヤスターを呼び出したことも、本来の召喚も。

\*

明の父の部屋であったモノは、キリエの魔改造により別物と成り果てていた。というかキリエは着の身着のまままでここに来たようなものなのに、なぜこれほど部屋が改編されているのか摩訶不思議である。

(いや、そんなに着の身着のままでもねーか)

昨日、一成はキリエに頼まれて大西山に向かった。屋敷に置いてきたものを回収したいと彼女は言った。しかし、大西山はセイバーの宝具によって大方破壊されている。もう屋敷も跡形もないのではと一成は思った。

それでも彼女曰く「屋敷は壊れても、大切な礼装は何重の守りを掛けてあるから大丈夫よ。屋敷は宝具が直撃したわけではないし。探せばあるはず」とのことだった。

果たしてキリエの言葉通り、彼女の言う礼装は確かに大西山に残っていた。だが屋敷は激流で破壊・押し流されていたため、それらも山のおふもとあちこちに散ってしまっていた。

アサン含め三人で捜索を行い、概ね回収できたが日が暮れてしまったため、ふてくされるキリエを連れて捜索を切り上げ、碓氷邸に戻ったのだ。

つまり、様々な礼装とやらでこの部屋は魔改造されてしまったわけである。

クローゼットの脇には男モノの服が積まれている。元はそれがクローゼットの中にあっただろうが、無残にも引き出され放置されている。今やその中にはキリエの服型の礼装が入っているのだろう。

何故か本棚と机の位置も派手に配置転換がなされ、机の上には試験管やらビーカーは山と積まれている。というか自分で動かせたのだ

ろうか。明が見たら絶句するに違いない。

その魔改造された部屋にて、キリエが家主の如くロツキングチェアに腰かけ、一成は絨毯の座に座っている。そしてキリエは正座する一成を見やり、一言告げた。

「——千里天眼通。せんりてんげんつう 大本は安倍晴明の竜宮伝説っていうことはあなたも知っているでしょう」

安倍晴明が幼少時、安倍野で暮らしていた時のことだ。神社の祭礼に行く途中で、子供たちがよつてたかつて一匹の白い蛇をいじめていた。

晴明はそれを見かねて蛇を助けてあげたところ、なんとその蛇は竜宮の乙姫の化身であった。助けてもらったお礼に晴明は竜宮に招待された。

そこで彼は乙姫から感謝の気持ちとして、竜宮の秘宝『竜宮の秘符』と『青眼』を受け取った。もとの世界に戻った晴明は、目と耳に入れた『青眼』のおかげで、人間の過去、未来や鳥獣の音が理解できるようになった。

その力を利用し、彼は当時の帝の奇病をも治癒させたという。

「秘符の方がこれで修行すれば天地全てを見通せるってやつなんだけど、そつちは置いとくぞ。とにかく、俺にはその『青眼』の力——千里天眼通がある……んだよな？」

「何であなたが一番半信半疑なのかしら？へタレでも陰陽道の基礎は叩き込まれていると思っっているのだけれど」

「俺だってそれが安倍晴明以来、我が家に十数代に一度発露する体質ってのは知ってるぞ。俺の前はもうめっちゃ前で、南北朝時代の先祖だけ——つか俺、今の今までそんなの全然使えなかったんだぜ」

小学校の時は、まだ一成に希望をかけていた祖父によってみっちり術は教えられてきていた。だが、一度もこんな力は発露したことはなく、もししていたら祖父は黙っていなかった。

一時的に視得ぬはずのものを見て、未来さえも予知したこと。モノに触れた時に、おそらくはその物にまつわる映像を見たこと。

「あなたの話を聞いただけでも未来視に透視、もしかしたら過去視

……なのに、今までずっと使えなかった。あなた、自分の家のことくらいわかるでしょう？過去にこの力を発現した者たちの共通点はないかしら」

キリエは顎に手を当てて、鋭いまなざしで一成を睨んだ。何故か若干怒っているようにも見える。しかしそういわれても、一成と彼らに共通することは同じ一族であることくらいしかない。

「——わかんね。つーかそんな体質持つて生まれたご先祖はみんなスゴ腕で、誰も彼も陰陽道において名前を残す人たちばっかだぞ？俺とは全然違くない？」

過去と未来を見通す、と簡単に言うが、それは並大抵のことではない。自分の持つ情報——五感から得る情報・記憶などをアクセスキーにして、根源すら覗き見る——アカシックレコードから情報を引き出す技。

鍛えて鍛えて鍛え上げれば、その力は根源にも至りうる道。あの安倍晴明すら極めつくすには至らなかった力。

「ふーん、スゴ腕なの。その人たち、その眼以外になにか得意にする術はあるのかしら」

「呪詛やら式神やらばらつきはあるけど、もちろんだ。むしろ眼は関係ない部分での功績の方がスゴイってお爺様も言ってた。眼がなくても名を遺したろう、とか」

「貴方の前はナンボクチョウ——元々は数代に一度の体質でも、現代に至り時が経ちすぎることにより顕現しにくくなることはあるわ。それでも千年を数える家でしょう、眼についての研究成果はあるはず」「あ、それがあんまりねーみたいなんだ、それ」「は?。」

真面目に考察をしていたキリエは、あっけらかんとした一成の声に妙な声を上げた。

「戦国時代に有脩ひさながっていうご先祖様がいたんだけど、時の権力者の関白秀吉をキレさせて流罪になっちゃった。元々関白秀吉が陰陽道を弾圧してたつてもあるけど——その事件で、今までの文献、研究成果の書が散り散りにっていうウチの暗黒時代だ」

この事件を切っ掛けに、平安時代以来宮廷陰陽師としての安倍家——土御門家は終焉を告げる。豊臣が没落し、江戸時代に至り幕府の許可と勅許をえて全国の陰陽師を統括して持ち直すことになるのが、それでも古代の研究を失った痛手は計り知れなかったのである。

逆に秀吉の一件により、宮廷のものであつた陰陽道は民間に広まり魔術基盤としては強固になつてはいる。

ちなみにこの事件の為に、土御門家は代々アンチ豊臣・アンチ西軍である。

「そういうことは早くいいなさいバカズナリ・バカミカド!!」  
「であだだだだなんだお前!!」

藪から棒に両頬を思いつきり左右ひっぱられて一成は悲鳴をあげた。当のキリエは当然といわんばかりに目を吊り上げて怒鳴つた。

「ヨシアキラ・ツチミカドがわからなかつたことも納得ね!五百年以上発現せず、かつ研究結果もなくなつてしまつていた体質だもの!!」  
「やつと気が済んだのか、キリエは再びロツキングチェアに腰かけ直した。頬杖をつき、じろりと値踏みをするごとくに一成を睨んだ。

「となると本当に五百年もの間、誰にも体質が宿らなかつたつていうのも怪しくなるわ。今までのアナタみたいに、発現しないで終わった可能性もある。あなた、この戦争を始める前と後で何か変わったことはないかしら。何でもいいから言つてみなさい」

「そういわれたものの、一成に目に見えた変化は特にない。ただキリエの迫力で、バカ正直になにもないということも躊躇われた。

「……アーチャーの有無?」

「確かにアレは貴方の先祖の関係者だけれど、魔術には長けていないし関係ないわ——ん、眼がなくても、功績を遺しただろう……?・ねえ、歴代の陰陽師にあなたみたいなの、魔術の才能なしみたいって言われた人はいるかしら」

「……?ああ、いるな。なんとか起源寄りの魔術はできるけど、それ以外はからつきしみたいなの……そういう時は大体妹とか弟が当主になつてみるみてーだけど」

一成も起源「保護」寄りの魔術しかできない。それに起源が強く出

ているとはいえ、覚醒者と呼べるほどのレベルに達しておらず、そこまで突出した魔術ができるわけでもない。

キリエは何か思い当たることがあるらしく、紅い目でじっと一成を見つめた。

「その眼を持ったと記録されているご先祖は、その力に早く気づくものかしら」

「そうみたいだ。修行を始めるころにはもう自覚してたつて聞いた」

「……春日の御三家には、聖杯から漏れる魔力が流れてくる」

聖杯から漏れている魔力は、春日の御三家——核の性質上、キリエと一成に流れ込んでいる。

一成にある回路は、次代には消失しているであろう程度のもの。勿論一般人よりは遥かに魔力は多いが、明やキリエからすればスズメの涙である。魔力を有り余らせているキリエはすっかり忘れていたが、与えられる魔力は一成には多大な恩恵である。

キリエはおおよその事情を把握して口を開いた。

「清明から伝えられる千里天眼通なる機能。——それを始めに起動させるには、かなりの魔力量が必要なんでしょう。機能は体質でも、使えるのは才能ある者だけ——そう言う風にしたのは『青眼』そのものがそういうものだったのか、清明が何か処理を加えたのかはわからないけど」

要するに、燃料が足りないから動かなかったという話だった。この機能を動かす為に、体は最優先にそれに魔力を割り振ろうとする。だから他の魔術を使おうとする時も、機能を起こすべくそちらに魔力が持っていかれてやりたい魔術はうまくいかない。

千里天眼通を自力で起動できる魔力のある魔術師なら、千里天眼通がなくとも名前を遺す。

おそらくこれまで土御門に生まれた者で、この機能自体を持って生まれた者はもっと多かった。しかしそのほとんどは機能を起動させることさえできず、自分は出来損ないの陰陽師と見定めて生涯を終え

ている。

そして一成も何もなければ、そのうちの一人となるはずであった。しかし、一成は聖杯戦争に参加した。

「……聖杯戦争中なら、その力を使うことはできるわ。でもやめておきなさい」

「……」

キリエの言うことは一成にもわかった。そう、千里天眼通を使つたとはいうが、どういう風に起動させて未来を見たのか、一成は最早はつきりと覚えていない。ただ必死で、どうにかしなければという一心で動いたと言う方が正しい。

「一時的に魔力が増えているから使えるけれど。問題は」

キリエは椅子から降りて一成の前に仁王立ちをする。その眼を覗き込み、大真面目で告げる。

「貴方が大西山でそれをどんな使い方をしたのかは見えていないけれど、昨日の様子から想像はつくわ。清明の術儀を根源から引きずり出して使っていたところかしら。完全に回路が焼けていたもの」

完全に大西山の行いを当てられて、一成は黙った。魔術がらみの話をするときのキリエは、街中を歩くときとは全く違って年上であり、ずっと魔導に優れた者であることを再認識させられる。

「貴方程度の魔術師が稀代の大陰陽師の魔術を行使するのは、式神が出せる程度の者が泰山府君するって言うのと同じよ。根源を垣間見るほどの力を扱えるほど、あなたは魔導に長けていない。それに聖杯から魔力が流れ込んでいるとはいえ、それでも十分かどうかもわからないし。身の丈に合わないモノを無理に使いこなそうとするのはやめなさい。使いたいとしても、それは聖杯戦争を生き残ってから考えるべきことよ」

根源に至らなくていい、立派な魔術師になれなくていいと思つたたん、この力が浮かび上がってくるとは皮肉なものだ。

しかし心を決めた一成は、やはり根源に興味はない。

元々、生まれそだった家を終わらせたくないという願いで根源に至

りたかった為、魔法使いになりたい、真理を極めたかったのではない。それに今や残るサーヴァントはセイバー・アサシン・ランサーだけだ。神父が何を考えているのかは未知だが、現実問題サーヴァントは三騎のみ。

そして碓氷明は聖杯戦争の終結を望んでおり、聖杯を壊すことに反対しない。聖杯の破壊ができれば、一成は自分が最終勝者でなくとも構わない。

(でも、もしこの力をちゃんと使えたら、もつと碓氷を助けられるんだろうな)

ずっと彼女には負んぶにだつこの状態で、少しはマシなところを見せたいのだがどうにもそれは無理な相談らしい。何より、こんなわけのわからない力で自分が死ぬことにでもなつたら明や悟は嘆き責任を感じるだろうし、アサシンが激怒すること間違いなしだ。

身の丈に合わぬモノを振り回して、さらに目も当てられないことになつてはいけない。

何より既にこの身は左腕を失っている。それだけでも、両親はきつと嘆く。

「……おう。それもそうだな」

「わかればいいのよ」

キリエは満足げに胸を張った。とにかく、眼の方については話がついた。このままキリエの部屋を去るのが流れだが、一成はことのついでとばかりに口を開いた。

「そうだ、今からアサシンでもつれて買い出しに行くんだけど、お前も来るか?」

「はっ?」

今までの毅然とした顔から一転して、外見年齢相応の顔を見せたキリエ。この部屋に来る前、一成はアサシンと食器を洗っていた時に冷蔵庫を確認したのだが、絶望的に食料がなかった。元々この家は明一人で暮らしていて、そこにいきなりサーヴァントも含めて五人もの人間が転がり込めばこうなる。

悟はまだ疲れが抜けていない様子で、明はセイバーを捕まえに出かけた今、行ける人間は一成・アサシン・キリエだけだ。荷物持ち戦力としては四次元ポケット宝具のアサシンだけで十分だが、やることがないのなら一緒に行くこうと思ったのだ。

「休みたいんだつたらゆつくりしていいぞ」

「行く！行くわ！これぞ語るに落ちるね！一人でいたつてつまらないもの！」

「……？渡りに船？」

全く意味不明の慣用句を使い、キリエはいつかのように手を差し出してきた。妙にテンションが高く変だとも思ったが、一成は軽くその手を取った。

雨合羽アサシンと合流しともに外へ出て、ショッピングモールへの道を歩く。よく晴れて日光が暖かい日だ。セイバーやアーチャーは現代の服を着ていたのだが、アサシンは何故か雨合羽で異様に浮いている。

何故普通に現代の服を着ないのかと聞けば、彼曰く「この恰好そのものが呪い、人々の思い描く石川五右衛門の姿の一部だから脱げない」らしい。

「——千里天眼通、魔術師としては実にもつたいないわね」

「あ？」

「貴方の力の話よ。言ったけど、聖杯戦争が終われば逆戻りでまた使えなくなるわ」

「だろうなー……魔力、足りないもんな」

それも仕方がない。元々は眠らせたままになるはずの力だったのだ。むしろ今の方がイレギュラーなのだから、終われば元通りは当たり前前だ。

それでもキリエはショッピングモールに到着するまで、何事かをぶつぶつとつぶやいていた。



12月7日③ 人ではないものたち

「ここにもアイスがあると音に聞いたわ!」

大して疲れもないまま、一向はショッピングモールに到着した。キリエは道中考え事をしていたことを忘れたかのようににはしゃいでいる。アサシンの恰好のせいで、周囲の客が胡乱な目で一行を見ている。

食料品売り場に足を運んだが、キリエは相変わらずのあれは何これは何の質問攻撃でいちいち一成に聞いてくるため、買い物は遅々として進まない。

律儀にキリエの質問に答えながら、一成は改めてここがキリエと初めて会った場所であると思いついた。まだ二週間もたっていないのに、とても昔のような気がする。

「そういやお前、なんであの時俺にちよっかいかけてきたんだ?」

キリエが練乳のチューブを驚づかむ手をほどきつつ、一成は聞いた。キリエは何をいまさらと微笑んだ。

「勿論キャスターがサーヴァントの気配を感じ取ったからよ。あと、貴方からは私と同じものを感じたの」

「同じもの?」

「魔術の系統とでもいうのかしら。私は貴方の所ではないけれど、陰陽師の精を受けて生まれたから。少し親近感を感じたわ。ほら、頼るなら血の縁って言うでしょう?」

「それ俺とは血が繋がってなくね?」

「カズナリ・ツチミカド!私あれが食べたいわ!アイス!」

「無視かよ!!」

都合の良い実年齢三十超えの少女は、とたとたとアイスケースの方に走っていく。放っておくと迷子になりそうなので、うかうかと放置もできない。一成は頭を掻いて、カートを押して追いかける。こういうときほどアサシンは何も言わずニヤニヤしているだけなので鬱陶しいことこの上ない。

「頑張れよ、一成」

「何を!!」

「カーズナーリーツーチーミーカード!!」

キリエはキリエでアイスケースの周りで飛び跳ねているし、アサシンは笑っているだけで役に立たない。騒がしいことこの上ない。ツツコミ属性は一成（自分）以外にいないのか。

「ああもううるせエ!!ちったあ買物させろ!!つーかアサシン、何さりげなく酒入れてんだ!」

「おい一成、ビールと第三のビールの差って何だ?つーか第二のビールは何処いったんだ?全部飲むか」

いつの間にかアサシンは勝手に自分で籠をもち、その中にひよいひよいとビールやワインを放り込んでいる。多分、彼自身も何がどれだかわかっていない。

「そんなに買ってどこのだれが飲むんだ!!つーか金ねーから!!」

「俺と悟にきまってるんだろ。お前も飲むか?何、別に金がなくても構いやしねーだろ」

「構うわこの盗賊野郎!!つーか年齢確認されたら一発でアウトだつつの!」

すっかり忘れていたがアサシンは伝説の大盗賊だ。盗みに頓着しない——いや、彼のターゲットは悪徳勘定奉行とか悪徳権力者などタチの悪い金持ちだけのはずだ。多分。一成は対抗すべく酒を元の棚に戻していると、今度はキリエが叫んだ。

「アイス!カズナリ・ツチミカド!」

「つーかお前ら何しに来たの!メシを選べよ!」

セイバーと明、一成だけだった時では想像もしなかった騒がしさである。

とにもかくにも何とか買出しを終えた一行は、碓氷邸には戻らず、その足で駅を超えさらに北に向かった。

今日はよく晴れて風もなく、日差しがうららかに降り注いでいる。最近日の光を浴びることが少なかった一成は、晴れやかな気持ちで散歩する。買物物はアサシンの宝具の中に入れているので、手ぶらで歩

ける。

一成とキリエは光を反射する水面の眺めながら、美玖川の河川敷を歩く。十二月だが、コートを着ていれば日差しが快い暖かさだ。スーパーでアイスを買わなかったせいか、キリエは口をへの字のしている。

「わざわざこんなところまで歩かせて、何かしらカズナリ・ツチミカド？」

「本当の春日通はショッピングモールアイスなんて無粋なことはいねえ。この美玖川の河川敷でクレープを食うのが本当の春日通だ」

「別に私春日通になりたいわけではないのだけれど」

キリエはそっけない。アイスやソフトクリームへの執着からその手の類のスイーツは好きなのだろうかと想像したが、違うのだろうか。それ以前に陰陽道を除き日本の事に疎いキリエは、クレープというスイーツの存在を知っているのか。

三人で歩いていると、河川敷を上がった道路に止まっている一台の車を見つけた。それが一成のお目当てのクレープを売る車だ。

張り出されているクレープメニューとポスターを見て、キリエの顔色が変わるのがすぐに分かった。少女マンガのような、星でもはめ込んだ目をしている。

「こ、これがジャパンクレープなるものなのね!!カズナリ・ツチミカド!!」

「好きなの買ってやるから選べよ」

「!?あ、あなたもレディの扱い方を心得てきたようね!」

「本当のレディはクレープでそんなにテンション上げねーと思うけど……」

そんなツツコミはどこへやら、キリエの目はメニューに釘づけ、ぶるーべりーまるんくりーむなまくりーむと呪文のように唱えている。たまたま他の客がいなかったものの、丸々十分はその状態で、一成と店員は共に苦笑いしていた。

結果、キリエは苦渋の決断を下し、フローズンヨーグルトマンゴー生クリームなるクレープを注文していた。一成はさっさとブルーベ

リー生クリームを注文して食べていた。アサシンは抹茶あずきクレープを仁王立ちしながら食べている。

一成とキリエはアサシンの隣に、クレープを携えて適当な芝生の上に腰を下ろす。キリエは四苦八苦しなから、口を汚しながらクレープにかぶりついている。

その姿を見ると本当の年齢が三十過ぎとはとても思えず、聖杯戦争の為に作られた人造人間（ホームンクルス）とは信じられない。妹が居たらこんな感じなのか、と一成は思うばかりだ。

本当なら春日を案内することや、何かスポーツを教えるとかそういう楽しいことをしたい。いつも聖杯戦争の話ばかりだなとうんざりしながらも、一成は気を引き締めなおして聞かなければならないことを聞く。

「キリエ」

「なあに？」

「お前、聖杯戦争が終わったら死ぬのか？」

「……死ぬ、という表現は正しくないわ。サーヴァントが消滅していった魂を回収すれば、私は人間の機能を保てなくなる。本来の姿に戻るのよ。仮にキャスターが生き残って私が勝ち残ってもそれは変わらない」

それは、一成からすれば死ぬのと同義である。キリエはキリエでなくなってしまうなら、それは死ではないのかと思う。

「お前はそれでいいのか」

「いいも何もないわ。私は生まれたときから自分がそういうものだとして知っていたし、聖杯を得る以外の機能はないの。それに、聖杯戦争後を生きていたとしても、どっちにしろ私の命は長くないわ」

「……聖杯戦争後生き残っても、長くない？」

「元々、聖杯は本当にモノだったの。聖杯に人間の外装をとりつけたのは、もし聖杯が破壊されそうになっても聖杯そのものが自分の意思で逃げられるようにするためよ。聖杯に相応しい殻であるべく、私——私たちホームンクルスの体は、改造を重ねられているわ。そのせい

で、普通の人間ほどの寿命が与えられていないの」

キリエはあくまで、淡々と事実を述べる。

「正直、私の体はもう耐用年数ギリギリなの。ホムンクルスで三十年も生きられるのは、あえてそうしたのでなければ破格の寿命よ。私は聖杯を手に入れるチャンスすら与えられず死ぬのかと思ったこともあるわ。だから、遅くなつたとはいえ聖杯戦争が始まってとても嬉しかった」

セミは幼虫のまま何年間も土の中で過ごし、成虫となって外で飛び鳴くのはわずか一週間だという。その間に交尾をし子孫を残し、遺伝子を繋ぐことで彼らの生は成る。

三十年も城の中で聖杯戦争を待ち続けたキリエは、わずか一か月にも満たない戦いに全てをかけて、聖杯を手に入れる——聖杯となる——ことで彼女の人生は完遂される、はずだった。

「でも、私はサーヴァントと令呪を失ってしまった。令呪を奪われる際に神経——魔術回路を多少持つていかれたから、以前ほどの魔術だつて使えない。それに、貴方のサーヴァントを奪うマネをしておいてなんだけれど、キャスター以外をサーヴァントにする気も起きないの」

キリエはクレープを持ち、にこりと一成に笑った。

「もうセイバーをアキラ・ウスイから奪おうなども考えていないわ。……勝てなかったのは私の力不足。カズナリ・ツチミカド、あなたは参加者として戦っただけ。立派だったわ。でも、迂闊なのは直した方がいいわよ」

魔術回路を削られ、マスターの資格とサーヴァントまで喪失したキリエには本当に何も無い。生き延びたところで、なすところもない。冬の城に戻つても居場所はない。

「そもそも、最初から聖杯戦争なんて幻想<sup>ユメ</sup>だったのかもしれないわ。聖杯の模倣の構想と同時に作られた私は、オユウのことをちつとも疑わなかった。でも、あの人は最初から私のことなんてコマのひとつとしか思っていなかったのね。何を考えていたのか、私にはわからない

けれど——」

キリエは大人びた表情で微笑む。だが、その瞳には一抹の悔しさ——いや、悲しみがあつた。生まれてから一度も城を出ることはなかったキリエは、彼の神父を信じ切っていた。彼女とてもう神父が完全な彼女の味方ではないことを承知している。

涙こそ流さないが、キリエは落胆の息をついた。その気持ち、自らを裏切った者の真意を気に掛ける気持ちは、一成には痛いほど理解できた。

「貴方に会えてよかつたと思つているわ。エスコートぶりはまだまだだけれど、何より優しいし楽しかつたわ」

聖杯戦争後すぐか、何日後か、何か月後か、何年後か、キリエは死ぬ。その体は、既にギリギリのところనికిきていた。

そして、彼女は自身は生き延びることを望んでいない。

一成にも彼女を救う手だてがあるわけではない。未熟者もいいところであるのは知つている。

元より彼に深い考えなどない。聖杯戦争の発端である彼の神父を問いただせば、キリエを助ける方法が見つかるかもしれない。けれど、キリエを欺いたあの神父が今更彼女の延命を手助けするとも思えない。

——何より、ただ彼一成が彼女に死んでほしくないという理由だけで延命を望むのは違う。生きるにしても、彼女自身が生きる導を見なければならぬ。

彼女自身が望むかはわからないが、一成流にケリをつけるとしたらすることは一つだけ。一気にクレープを口の中につっこんで、一成は立ち上がった。

「おい行くぞ」

「あらどうしたの？今度は何を食べに行くのかしら」

「食べ物しか頭にねーのか。教会に行くぞ」

キリエの手を引っ張つて立ち上がらせると、一成はそのまま歩き出

す。クレープを持ったまま、危なっかしい足つきでキリエは引つ張られながらもそれに抗う。

「ちよ、ちよつと待ちなさいカズナリ・ツチミカド！ 訳が分からないわ！」

「お前、あの神父が何をしたいのか知りたいたいんだろ。じゃあ聞きに行こうぜ。こつちにはアサシンもいるんだ、逃げるだけならどうにかならだろ」

目の据わった一成は、ちらりとアサシンに目配せする。アサシンは手についたクリームを舐めてにやりと笑う。

「おーそりやいいな。その胡散臭い神父？ 一度会ってみてーと思ってたんだよ」

「やめなさい！ 私はオユウが何を考えているかなんて興味ないわ！ もう戻りましょう！」

「なら散歩ついでについてきてくれよ。そーいや、大西山での戦いの前に一回教会行つ

たけど、お前、あんとき神父のこと知らないふりしてたのは芝居だったんだな」

キャスター戦の前までは、神父はともかくキリエは神父を信頼して手を組んでいるつもりだった。一成はすっかり担がれていた形だが、最早彼はキリエに対して怒りを覚えない。頭を占めているのは、その神父の真意とは何か、ということだけだ。

「やめなさいってばー！」

キリエが手にしていたクレープが芝生の上に落ちた。悲鳴のような声に、河川敷を歩く人々の目が集まる。隣に黒雨合羽の大男がいるが、一成とキリエならかうじて兄妹くらいには見えるので兄妹喧嘩くらいに思われているだろう。

「興味ねーならそんなに泣くこともねえだろ」

キリエはコートの裾を片手で掴んで、その紅い目から雫を落としていた。しゃくりあげることもなく、唇を噛みしめて俯いている。掴んだ片手から伝わる震えが、彼女の動揺をそのまま一成に伝える。

城に閉じこもって過ごした彼女が唯一触れた外の人間が、一成にとつては得体のしれない——おそらくは敵であろう、神父だ。キリエは何でもないように話していたが、初めて踏み出した外の世界で信じていた、ただ一人の人間に裏切られたことを何とも思わないはずがあるだろうか。

頼れる人間が一人ではない一成だって、誰かに裏切られたら腹も立つし傷つく。アーチャーに裏切られたことは、まだ新しい傷として痛む。

だが、一成はアーチャーを信じていたからこそ、信じていた彼が何を思つて裏切つたのかを問い詰めずにはいられなかった。

だから、聖杯戦争を続けて今ここにいる。

人に裏切られることさえ初めてのキリエは、しばらく落ち着かせた方がいいのかもしれない。だが、彼女には時間がない。聖杯戦争が進めば進むほど、彼女は彼女でなくなっていく。

助ける方法があればそれに越したことはないが、このまま、信じた人間の真意を知らないまま、消化不良で生きながらえても苦しいだけだ。

ならば、彼女が彼女である間にその真意を知らなければならぬ。

「何で裏切られたのか、神父が何を考えてるのか、何も知らないままお前は消えていいのか！悲しいだけ、悔しいだけでいいのかよ」

「……そうね。私は、悲しかったのね」

初めて知つたと言わんばかりに、キリエはコートを掴んでいた手で涙をぬぐつた。

「オユウが私を信じてさえいなかったことも、キャスターが消えてしまったことも」

キリエは一成の言う「何も知らないまま消える」ことまでは考えられていない。悲しいという気持ちで一杯一杯になり、その先を思うことができていない。一成は渋い顔をして、それでもキリエの手を引い



て川から遠ざかる。

結果的に一成とアーチャーは、争った末に和解を見た。一成としては望外のことで、奪われたものも残した傷も甚大だが、あれが少しでも安らかに帰れたのならばもういいと思っている。

(だけど、多分)

勘ではあるが、神父とキリエは一成とアーチャーのようには終われない。「まあ、いいか」と納得することもない、理不尽な理由と結果が横たわっているだけの予感がする。

しかし、一成とてまだマスターであり、キリエは聖杯なのだ。聖杯戦争を続けるに当たり、あの神父との再びの邂逅は避けえない。それが早いか遅いかだけの違い——しかし勇む一成の端を止めたのは、アサシンの極めて現実的な一声だった。

「教会に行くのはいいけど、一回戻ろうぜ。食料を冷蔵庫に突っ込んだ方がいいだろ。俺の宝具には保冷機能なんかねーぞ」

「……それもそうだな」

「それによ、今や教会は敵地かもしれないねえんだろ。まだ協力してる姉ちゃんに無断で行くのはどうかと思うぜ」

思いつきり出鼻をくじかれて、一成はさらに洩面になる。だが流石年を食っているだけあるというべきか、アサシンは一成より頭が冷えていた。

その言葉に従い、一行は一度碓氷邸へと戻ることにした。

\*

召喚されたときに、マスターである明の願いを聞いていた。

「根源に至る」というその願いは、奇しくも前回のマスターと同じ願いだった。ゆえにその時にセイバーは「最後にこのマスターが自分を殺

す」可能性があることをわかっていた。

そんなことよりも、一番気にかかっていたのは。

『やはり、この聖杯では根源に至れない』——かつてのマスターの願いは、叶わなかった。

もしかしたら此度の聖杯も同じように、根源には至れないのではないかとということだった。

しかし、今は。

「……勢いで出てきてしまったが……」

セイバーは行く当てもなく、人の流れのままに春日駅までやってきてしまった。相変わらず人の多い場所だが、むしろ紛れて一人になるという意味では適していた。

かといってすることは何もない。朝とはいえラッシュは既に過ぎている時間だ。駅ナカのコーヒーショップやファーストフード店をなんとなく眺めた末に、駅前電光掲示板の前の広場にて、適当なベンチに腰を掛けて呆けているだけだった。

明はああは言っていたものの、契約を切る気はない——と思う。きつと。多分。おそらく。運が良ければ。こういうところでの判断に甚だ自信が持てなかった。その上うっかりとはいえ手が出てしまつて申し訳が立たない。

かといつてここで愚図愚図していても無駄に時間が過ぎていくだけでしょうもない。

思い出したのは、マスターの過去<sup>ゆめ</sup>。

親しき人々を殺してしまつたと思い、その体質と資質を呪つた果てに、己を諦める——この先には、もう何もないと。

かつて明の友人である相楽麻貴は、セイバーに願つた。「明ちゃんを、護つてあげてください」と。「明ちゃんは、私たちを守ってくれりけど、自分のことを放りっぱなしだから」と。あれは、物理的なわかりやすい敵から明を護つてほしいと言う意味ではなかつたのだ。

「……ッ!？」

セイバーは座っている状態から一気に立ち上がった。この朝から、人ごみの中ではつきりと感じたサーヴァントの気配。しかし、残るサーヴァントであるアサシンやランサーの気配であればここまで驚きはしない。

だが今感じた気配は、その両方とも異なっていた。

それでも気配はサーヴァントのもの。

殺し合うというのならセイバーはいつでも受けて立つ。けれど勘であるが、気配に攻撃的なものを感じない。

速度は人間の歩行程度で、徐々にこちらに近付いてきている。セイバーは腰を落として、いつ何時気配を変えて襲ってこられても対処できるように備える。

「——聞いてはいたが、随分と生き急いでいる者のようだな——」

雑踏から音が消えて、ただただ相手に眼が吸い寄せられる。徐々に近づく気配を感じていたにも関わらず、忽然と目の前に現れたように感じられた。

真っ白の着物、黒みのある臙脂の袴。その上に鮮やかな赤の羽織、純白の首巻。近頃は和装を普段着にする人も増えているが、それにしは強い色合いの和服だった。

しかしその日本人らしい服装に対して、男そのものは日本人離れしていた。髪は輝くように白く、それを後頭部で一つに結んでいる。肌も白いが、眼が沈む夕日のように紅い。

その上、その顔立ちや体の造形も恐ろしく整っており、一周して逆に人間味を薄れさせていた。

偉大な彫刻家を作り上げた彫像か、それとも人ならざる何かかと思わせる雰囲気、男にはある。

現代の世はセイバーが生きた時代から二千年近くの時が経過して、かつて世界を覆っていたエーテルも神秘も薄れ果てている。にも拘らず相手は、生前に神の類と対峙した時を思い出させるような雰囲気纏っていた。

「——貴様、何者だ」

「お前と同じ神の剣だ」

「は——？」

男はセイバーの警戒をよそに、セイバーが先ほどまで腰かけていたベンチに腰を下ろした。そしてセイバーからあっさりと目を離すと、道行く人々をそぞろに眺めていた。

「時の流れとは恐ろしいものだな、ここまで人間が増えるとは思わなんだ」

「貴様は何者だ、答えろ」

「そんなに呼び名が欲しければ、ライダーとも呼べ」

ライダー——春日教会において、神父が開催を宣言した時には消滅しているときれたサーヴァント。そしてその通り、これまで全く姿を見せることのなかった為本当に消滅しているのだと思っていたが——それがなぜ、今ここに。

セイバーの動揺をよそに、ライダーのサーヴァントは深く紅い目を以てセイバーを見上げて笑った。

「しかし、なるほどなあ——神々が公の欠陥を克服しようとした解がお前か。卑近な例をとれば、お前をナイフとするなら公は十得ナイフ。余計な機能を削ぎ落とし、ひきかえに破壊力を追及した形か」

「何をわけのわからないことを言っている。貴様、まさかあの神父のサーヴァントか」

「公は誰の使い魔でもない——さて、お前は理由のない限りマスターと常に行動を共にすると聞いていたのだが。何故ここで阿呆のように暇を持て余している？」

サーヴァントクラス・ライダーを名乗りながらも誰のサーヴァントでもない、奇も衒いもなく男は言った。それよりも興味深げに値踏みをするかのごとく、セイバーを見つめている。

「貴様には関係ない」

問いの内容は今のセイバーとしては、全く持つて不愉快極まりない。強くつっぱねたが、その態度が触れられたくないことを如実に示していることを、セイバーは気づかない。

「ふむ、まあよい。だが老婆心ながら言っておけば、人間に仕える価値はないぞ——神の剣よ」

セイバーの剣呑な態度を見ても、ライダーには一かけらの敵意もない。今は。

「神が神に仕えるのはよい。人間が人間に仕えるのはよい。人間が神に仕えるのはよい。だが神が人間に仕えるのは好くない。己より遥かに強大な力を持つ者が、おとなしく従うと人間は信じられない」

それは、人同士でも同じこと。遥かに強い人間が、遥かに弱い人間におとなしく従う道理がない。人間同士でさえそうなのだから、それ以外は推して知るべきだ。いくら赤心を以て仕えようとも、その相手が信じてくれない。

「神々も中途半端な事をする。破壊力に特化させるならば、人格さえも道具そういうものにしておけばいいものを。まあ、アレらにそのような情緒を求めるのは酷か」

「——お前は、誰だ。目的は何だ」

セイバーの直感が、この男の正体を知らねばならないと告げていた。何を望み聖杯を狙うのか、もしくは他の目的があるのかもわからない。

しかしこのライダーは掛け値なしの強敵であると、既にセイバーは本能で理解している。

「公は楽しみたいだけだ。世界を滅ぼそうなどと大それたことは考えておらぬ、興味もない。ただ、そうさな、確かに」

ライダーは何かを思い出すように目を細め、あっさり和不穏な言葉を口にした。

「あまりに平和すぎると、少々見ごたえに欠けるのも確かだな」

「見ごたえ……、！」

セイバーは突如、ライダーから意識をそらしはしないものの、じりじりと距離をとった。それから、背を向けて駅の雑踏へと姿を消した。

ライダーもあえて追いかけることはしなかった。彼自身今戦う気はなく、現世を見分しているに過ぎない。

またライダーはセイバーには興味を持っている。愛すべき子孫であり、己と同様に神々からの神命を受けた者の在り方に。

「これはますます、あの道楽神父に乗る方が楽しいだろうな」

12月7日④ 生まれた時から決まっていた

外は晴れており、少々風が吹いているが暖かい。無理を押しして小走りで進みながら、明は私鉄を使って春日駅まで急いだ。パスでおおよそセイバーのいる位置はわかる。おそらく春日駅周辺にいる。正直、何を言ってもどう謝ろうかまで考え至っていない。

自分をないがしろにするな、と言われても、ずっとこうしてきてしまったからどうすればいいのかわからない。明は考えをまとめきれないまま春日駅に到着してしまっただが、それでも思ったことがある。

もし本当にセイバーが自分の人生を無意味どころか害悪だと思い、共に生きた人たちに対して罪悪感しか持っていないとするならば――あの願いはどこか変だ。

「……しかし、駅前っていつでもなあ……」

相変わらずの駅前には、仕事に行きかう人、レジャーに向かう人で溢れている。このなかからあのセイバーを探し出さねばならない。とりあえず、パスの気配を頼りに足で探す。

やるしかない、と明が顔を上げた時、急に後ろから呼び止める声がかかった。

「あ・き・らちやくん」

妙に甘ったるく、それでいて艶めかしい声だった。一度碓氷邸にやってきた女姿のキャスターのそれに通じるものがあるが、それよりも遙かに意図的なものを感じた。

キャスターは悪鬼であったが、彼女自身に嘘偽りと悪意はなく、甘ったるい魔性も誰彼かまわず振りまかれるものだった。だがこれは、明確に明を志向している。

「……どなたですか」

警戒しながら振りかえると、その相手は思った以上の至近距離に立っていた。振り返った明の右手が掴まれるくらいの近さだ。

「やっこの姿で会えたわ」

「……だから、どなたですか」

目鼻立ちの整った、二十代半ば過ぎの美女だった。豊かな金髪が風になびく、豊満な肉体をもつ女だ。同じく空気を孕んだロングスカートが膨らんでいる。明の手を掴んでいる女の手は、見た目の華奢さとは裏腹に絶対に離すまいとする力が込められている。

女はどこか淫蕩さを含んだ眼で明を見つめ、花唇を開いた。

「ランサーの本当のマスター、といえはいいかしら？」

「は……っ!?!」

明が驚愕した瞬間に、女は明の手を強く引きさらに空いた左手で腰をとらえて引き寄せた。二人はぴったりと密着し、明は女に抱きしめられている格好になる。吐息がかかるほどに近く、女の碧眼が明の目を捉えている。

「な、なに、あなた、ランサーのマスター……!?!」

ランサーのマスターはハルカ・エーデルフェルト。目の前の女とは似ても似つかない。仮にそうだとしても、魔術師にここまで近づかれて明が気づかぬはずはない。強力な魔力殺しのアイテムでも身につけているのか——そこまで混乱した頭で考えた時、ぞわりと総毛立った。

女の白魚のような手が、明のスカートの中に滑り込んで柔い尻の肉を撫でている。明は反射的に女を退けようともがいたが、怪我のせいでうまく力が入らず激しい抵抗ができない。

「太もも、古傷だらけね。でも嫌いじゃないわ、そういうの」

どこまでも澄んだ碧眼が覗いている。艶やかな花唇が明のそれに近づいて、「女、そこまでにしておけ」

白く細い女の首を、後ろから何者かの手が掴んでいる。ライダーズジャケットを着たセイバーが、女の首を掴んでいる。

明を見る甘ったるさは掻き消えて、無感動な声で女は言う。

「……まだ昼なのに気の早いサーヴァントね」

「昼だから殺さないでいてやっている」

女はぱつと明らから体を話すと、軽やかな身のこなしで明とセイ



バーから距離を取った。先ほどのまでの陶然とした表情はどこへやら、冷たく高貴な雰囲気が出た。女を取り巻いている。

「本当に邪魔なサーヴァント。明ちゃんとベタベタして」

「……待って。ランサーのマスターって言ったけど、あなたは何者」

通りかかる人々が、じろじろと三人を見てくる。ここで聖杯戦争の話をおおっぴらにするべきではないとわかっているが、何も得ずに逃すわけにもいかない。

「シグマ・アスガード。ランサーの、本当のマスターよ」

女——シグマ・アスガードは冷酷に微笑む。彼女は優雅に明の横を通り過ぎると、その存在感がなかったかのようにあつという間に雑踏に紛れた。

シグマ・アスガードという女が去り、ちらちらと明たちを見る人もいなくなった。人々の交錯する駅前には、セイバーと明が残されて立っている。セイバーを探すために飛び出してきた明だが、いざ目の前に現れると気まずい。

セイバーも同様なのか、言葉を発さずに、ちらちらと明を伺っている。今の女の事など色々と言わなければならぬことはあったが、一番先に出てきた言葉は全く別の言葉だった。

「セイバー、帰ろう？」

\*

明はセイバーの手を引きながら家への道を歩いていた。二車線の左側の歩道を歩いており、散歩やランニングをする人たちとすれ違う。道並に植えられた木が遅い紅葉を示し、落ち葉が道をうずめてい

る。

あんな喧嘩をした後でも、セイバーは助けに来てくれた——その事実が、明に少しの落ち着きを与えていた。

「……セイバー、ごめんね。私、契約を辞める気なんてないよ。頭に血が上ったからあんなこと言っちゃったけど」

「……それは、よかった」

後ろから聞こえる声は、あからさまに安堵した声音だった。

「あとさ、聞きたいんだけど、私、願いは根源って言ってたよね。それって、最後にセイバーは私に殺されるってことだよ。……セイバーはそれでいいの?」

セイバーは先日「明に願いなさない」と言っていたが、それまでは普通に「根源に至る」という明の願いを信じていたはずだ。つまり、召喚された日から彼は「最後にはマスターによって殺される」可能性を承知で明に従っていたことになる。

「俺の目的は他陣営に勝つことだけだ。それは聖杯を得る条件でもあるから、マスターは俺を殺すわけにはいかない。まず俺の目的は果たされる。その後に俺が死ぬことでマスターの願いも叶うなら問題はない」

「——それは、本気?」

明は振り返る。冬の木枯らしが寒々しく吹いている。セイバーは少し逡巡した後、それでもはつきりと言葉を口にした。

「……英霊はもう死んでいる。俺は死体が剣を握ってかろうじて動いているようなものだから、それが改めて死ぬことでお前の願いが叶うのならそれでいい」

明は、セイバーが何を望もうと構わないと思っていた。それがどんな願いであれ、この春日や日本を害するモノではないかぎり、彼が好きにするべきだと。

何の根拠もなく願いを間違っているということは彼を侮辱するにとだと。

——でも。

明は右拳を握りしめた。手加減などはいらない——そんなことをすれば、決して何も伝わりはしない。

「ごんの、大馬鹿サーヴアントがあ!!」

予想だにしていなかった攻撃に、セイバーは明の拳をまともに顔に食らった。けが人、しかも女のパンチくらいでセイバーはびくともしないが、それでも眼を丸くしていた。

「な、なんだマスター」

「今日の朝のお返し!!セイバー私を殴ったでしょ!!」

「あ、う、そ、それに関しては……済まなかった」

セイバーは文句は言う。明がたてた方針に対してこれは可笑しいと意見を言っていたし、本当に勝つ気があるのかときついことも言っていた為に明は気づかなかったが、彼は最終的には明の言い分を全て呑んでいる。

明はてつきりセイバーの「許せる範囲」に自分の要求が入っているのかと思ったが、それは違う。

端からセイバーには、「マスターの意向を拒絶する」という選択肢が存在しない。「言うことを聞かせたいなら、令呪を使え」と彼が言うことは絶対でない。

どんな無茶な命令だろうと、明が「やれ」といえば彼はする。夢——セイバーの過去でだって、彼は「死ぬ」と言われたにも等しい東征という命を受けた時も、嘆きはすれど父帝を恨んだり誇ったり怒ったりすることはなかった。

勿論当時のセイバーからすれば、帝の命を断ることはできなかっただろう。

しかし、そうでなかったとしても彼は断ったのだろうか。

——ただ、親しい人の願いを叶えたかった。

それが始まり。セイバーが抱いた原初の願い。誰もがそう思う気持ちを理解できる、小さな願い——でも、それはどうしても彼に叶えることができなかった。

そんなちっぽけな願いの主に生まれながらにして与えられた神命は、彼を英雄とならしめ、小さな願いを砕いた。

誰も助けられず、誰も救えず、誰の願いも叶えられず、その己を許せずに望むものは「かつての親しき人が己に望んでいた願いを叶える」、すなわち最強。

けれど本人は気づいているのか。「人の心がわからない」と自覚しているのに、彼はどんな理由を以て「かつての仲間たちが、妻が、日本武尊の最強を望んでいる」と思っているのか。

人の願いを叶えたい。だけど、自分にできることは戦うことだけ。だから、かつての人々が願ったことは戦いに関するものでなければ自分には叶えることができない。

だから、かつての人々の願いは戦いに関するものであってほしい。

「セイバー、あなたの最強なんて、誰も望んでない。それを望んでいたのは、『親しき人たちには、そう願っていてほしい』と思っていたあなただけ」

誰が望んでいるのかも定かではない願いを抱え、ずっと一人戦い続けてきた英雄。この呪いのような願いが生まれてしまったのは、何か一つが原因とは言えない。それでも、この願いにセイバーが縛り続けられていいはずない。

「……マスター!?!」

明はセイバーを抱きしめた。当のセイバーは驚いて突き放そうとしたが、明の剣幕に押されて止まった。まだ続けなければならぬ言葉は多かったが、言葉の体を成さなかった。だから出たのは、思いだけ。

「……だから世界との契約なんて、やめなよ。やだよ」

セイバーが明の責務を否定したように、明はセイバーの誓いを否定する。この思いはきつと勝手なもので、セイバーは怒るだろうと思っ

た。

それはちようど、朝食の時に明がセイバーに対して怒ったのとまったく同じだからだ。知らぬうちに声は湿りを帯びて、明は泣いていた。しかし、明の声は間違いない聞こえているにもかかわらず、セイバーは怒らなかつた。

何も言わず、答えず、ただ泣く明の背をさすっていた。

泣く明に抱きしめられながら、セイバーは妙に落ち着いた心境になつていた。あまりにもわかりすぎて、最早受け入れるしかないと理解してしまつたからだろう。

人の心がわからない。昔も今も、死したのちも。そんなこととつくにわかつていたのに、何故彼らの願いが最強と思つていたのかと言われれば、明の言うとおりだ。

過去は変えられず、死人は蘇らず、なくしたモノは取り戻せない。ならばその過去となくしたものに報うべく戦つてきたつもりだが――愚かすぎて涙も出ない。

最強になつても誰も喜ばないならば、戦う意味がない。ならばセイバーは聖杯戦争を降りるのかといえ、その気もない。

目の前にいる、碓氷明というマスター。明がセイバーの過去を見たのと同様に、セイバーも明の過去を覗き込んでいる。

――明は、自分の命をどうでもいいと思つている。

魔導をなさねばならぬと知りながら、一方で魔導などどうでもいいとも思つている。

魔術を学ぶということは、人に生まれた体を「魔術師」という血に濡れたモノに変える事。そして何代も続いた、先祖代々の願いを引き継ぐために、神秘を成すモノになること。その責任は、「イヤだから」の一言で逃げ出せるものではない。

それ以前に明の魔導に適し過ぎた体質は、魔を呼び込む。望むと望まないに関わらず、生きるためには魔術を学ぶ選択肢しかなかった。

——姉を犠牲にし、先祖の願いを背負って、魔導を学ぶ。お前は素質もあるから、立派な魔術師になれると何度も聞かされてきた。

けれど、明の別の部分は違うことを考えていたのだろう。

——それって、そんなに価値ある事？魔導を極めるって、そんなに大切？そんなに魔術師って偉いの？

——こんな苦しいことよりも、普通の家族みたいに、普通に幸せであるほうが、ずっと——

そう思えど、彼女に魔導を捨てることはできない。

優れた体質は、他の選択肢を許さない。先祖代々の責任も投げ捨てることを許されない。

だから、自分の事を諦めた。そのかわり、せめて普通に幸せである人たちがいればいい。彼らが幸せであるのを見て、その幸せを追体験して、満たされよう。

——何事もなく、聖杯戦争を終わらせるために——。

魔導の素質は生まれでほとんどが決まるという。だから、彼女がその道歩くことは生まれた時から決まっていて、どうしようもないことなのだ。

あまりにも凡庸な願いと在り方に宿ってしまった、優れ過ぎた魔術の素養。

「……お前が俺を呼んだことは必然だ、マスター」

セイバーの服で涙を拭いていた明は、無言のまま頷いた。おそらく同じようなことを、明も考えていたのだろう。

セイバーは日本の英霊が呼び出されうる戦場には優先的に召喚される。さらに触媒がない場合、召喚者と性質の近い英霊が召喚される——要するに、似た者が呼び出される。

そうだ、セイバーと明は似ているのだ。

——行き過ぎた素質は、本人の意思をも裏切って進む運命みちを規定していく。

能力が向いているからといって、嫌が応にも果てしのない道歩く辛さをセイバーは知っている。

己に未来などない、と諦めたまま生きながらえる苦痛をセイバーは知っている。

——自分と明は、生き物としてどこか欠けてしまったのだ。

そこまでわかっておきながら、セイバーは己がマスターにかける言葉を持ち合わせていなかった。それでも、セイバーは全てが終わったわけではないことをわかっていた。もし明が本当に全てを諦めているのだとしたら、彼女はもうここにはいない筈だ。

「……とにかく、明、泣くな」

「……おくい……」

その時、セイバーの背後、明の正面から聞き馴染んだ声が聞こえた。ものすごく居心地が悪そうで気の引けた声だった。

明とセイバーは二人して声の方に顔を向けると、そこには買い物帰りにらしき一成とキリエ、雨合羽のアサシンが立っていた。

\*

セイバーが去った後も、ライダーは駅前電光掲示板の前の広場に、適当なベンチに腰を掛けていた。そこへ姿を現したのは、金髪に碧眼の美女——シグマ・アスガードだった。今その美貌には険があり、文句ありげにライダーを見下ろしている。

「探したわよ、ライダー」

「おや、何かと思えばお前か。公に何用か？」

とぼけた様子のライダーに向かい、シグマはその表情のまま口を開いた。

「聖杯と貴方のことについて話があると言ったはずだけど、あなた朝から歩き回っているんだもの」

駅前には人に満ちている。金髪の美女と白髪の美男の取り合わせは

嫌でも人目を引くはずなのだが、当人たちは何故か注目を集めない。それはシグマが自分とライダーから視線を外し誘導する魔術を周囲に掛けていたためだった。

周囲の一般人はシグマとライダーが見えていながら、認識できていない状態にある。

ライダーはあまり興味もなさそうに、鼻で笑った。

「ほほう、わざわざ公を探しに来たか。しかし大した話ではない。既に大聖杯を見たのなら、民草おまえにもわかろう。道楽神父はアレを冬木の複製といったが、本当にあれは冬木の複製なのだろうよ。穢れも、全くな

神父は聖杯の正体を最初から知っている。シグマも大聖杯の在り方を見て、神父の言葉に納得をした。確かにこの聖杯は願いを叶えよう——但し、非常な悪辣を以て。

だから、シグマが気にしているのは聖杯の正体についてというよりは、それから出でたライダーのことだ。

「——最初にアインツベルンに召喚された貴方は、召喚を途中で拒んだ。だけど拒んだ後、貴方は神父の召喚に応じるまでどこにいたの？」

「決まっておろう。英霊を呼ぶのは大聖杯。それに一度は諾と答えたのだから、座にはただでは戻れない——となれば、行く当ては大聖杯そのものでしかなかろうよ」

「それはわかるわよ。だけど、呪いの塊になっちゃった大聖杯に浸かって、どうして平然としているのかしら」

膨大な魔力を伴った呪いの塊たる大聖杯に、英霊が居座り続けて正気を保てるのがシグマには不思議だった。そして彼女がそれを問うのは、この戦争を勝ち抜くためもあるが——彼女はただ知りたかった。基本的に彼女が動くのはその程度の理由であり、満たす為だけにある。何でも知りたがる姿は、妖艶な姿とは裏腹に無邪気な子供に似ている。



「——通常は無事ではおれまい。だが、大聖杯の場所とある犠牲がそれを可能にした。そして犠牲もあつたが、恩恵も多い」

「犠牲って何かしら？」

しつこく問い続けるシグマに飽きたのか、ライダーはベンチから腰を上げるとどこへともなく歩き出す。しかしすぐに何かを思い出したらしく、女へ振り返った。

「気が向いたら語ってやろう。しかし民草、お前は神父の願いを叶えるということでもいいのか」

「いいのよ？ 根源に至るにしても、これまで成功した人間が皆無の聖杯なんて、何かしらの呪いの因果の可能性もあるしね。調べるにしても、これからじや時間がかかりすぎるし……それに、神父の願いが叶えば、この地にはウジャウジャ魔術師が集まるじやない。貴方こそ、この国の人間がたくさん死にかねないのにいいのかしら」

「先日それは言ったはずだ。公が死んだ時に、この国は公の手から離れている。この国は公の庭でありながら庭ではない——ゆえに今生きる者が、この国が滅びる選択を望もうと、公が否定するほどのことではない」

その言葉を聞いて、シグマははてと首を傾げた。「あら、あなた、この国が好きなのではなくて？」

「当たり前だろう。この公が民草を愛さぬわけはない」

ライダーは、遙か高みから下々を睥睨するかのような尊大さで当然のように言った。しかし「愛」と言う彼の口調は、確かに常より優しさを帯びたものである。だが先ほど、ライダーはこの国が滅びても構わないと言ったばかりだ。

この男のいう「愛」は、おそらく現代で一般的に語られる愛とは違う。愛しているから守り大事にしようという心の動きとは無縁の境地にある。

「まあ別に、あなたの愛の形がどうであれいいんだけど」

シグマは腰に手を当て、やれやれと言わんばかりに溜息をついた。

基本的にシグマの視線は、明に対してのみならず常に不躰と評されるほどに遠慮のないものである。それはライダーに対しても変わらない。

しかし、神父に対してのみは違う。彼女曰く、同じ過ぎてつまらない。

明に手を出そうにも、昼間では都合も悪く、基本的にはセイバーが貼りついている。シグマは大聖杯の元に戻り、ある準備を進めようと考えていたところ、いきなりライダーが振り返った。

「民草、お前はあのセイバーのマスターが欲しいと言っていたな。とすれば、お前にとってセイバーは邪魔者ということになるな」

「ええ」

「だがしばらく放っておけ。公は公の後を継いだ者の力を知りたい。神々の出した一つの解の形に興味がある。それに、あれ自身の答えも」

シグマは初めて、ライダーに対し鋭い目を向けた。今や彼女の目的には神父の願いの成就があるが、明はも重要な目的の一つには変わらない。ライダーはシグマの険のある視線を意にも解さず、雑踏へと歩き出した。

ランサーを用いてセイバーを殺すことは、宝具とそのタイミングで可能であろう。だが、勝手に行えば、シグマはライダーに殺されるだろう。

このライダーを縛れる者は存在しない。神父には残り一画の令呪があるが、令呪一画では高すぎる神性と対魔力でライダーに命令を強制できない。その上、依代としてのマスターを必要としていない。

神父は最初からライダーのあだこうだと命令する気はなく、ライダーが戦いさえすればそれでいいと考えている為、彼らの相性は良いといえれば良いのだろう。

「……サーヴァント失格」

「褒め言葉として受け取ろう、草。それより公はこれから映画なるものを見る、供をせよ」

英霊の戦いは英霊に任せればいい。シグマは魔術師を食らうだけ

——彼女はライダーの後を追った。

\*

春日の住宅街にある、ハルカ・エーデルフェルトが拠点にしている洋館。一昨日夜の激闘により、ハルカの魔力もかなり減っていたために昨日一日は回復に費やした。

恐らくセイバーやアサシンも同じだろうと、ランサーは霊体化し、自身も回復に専念した。

だが、丸一日を回復に費やしても、それに見合った回復が全くなされていない。

要するに、ランサーの魔力源——ハルカの魔力が戻っていないのだ。ベッドに横たわるハルカからは、健全な状態とは思えないほど微量な魔力しか渡ってこない。

『これはおかしいぞ』

一昨日の戦いでは、山に乗り込んできたハルカと合流したランサーは再び別れた。ランサーはキャスターへ、ハルカはキャスターのマスターへ。

ハルカはキャスターの召喚した部下である茨木童子と一戦を交えたらしいが、無事にハルカはキャスターのマスターを連れて先に山を下った。魔術の身体強化を使い、かつ「たくしー」でも捕まえられれば、早々に拠点に戻ってよい筈だが、彼が戻ってきた時刻とランサーが戻った時刻の差は、僅かにハルカが早かった程度だった。

ハルカが離脱したあと、ランサーはキャスターとの戦いに鎬を削っていたため、ハルカがどこにいたのかは知らない。

少し気になって遅かったなと尋ねたところ、ハルカは山を下りてからもキャスターが消滅するまでは、キャスターの結界に阻まれ山から出ることはできなかつたからだと言っていた。

その時に気になったことは、ハルカが連れ去ったはずのキャスターのマスターの姿がどこにも見えなかったことだ。一体何の為にさらったのかを問いただしたかったが、深く眠りにつく彼を見て、後回しにした。

同時にランサーも消耗していた——宝具の解放よりも、それに至るまでのキャスターの猛攻を凌ぐ経緯で消費した魔力減少によるものが大きかった。

だが、一日が経過し流石に黙ってはいられなくなった。

「ハルカ！ 邪魔をするぞー！」

ランサーは二階のハルカの部屋の扉を、勢いよく開いた。カーテンを閉め切つて薄暗い部屋の窓際に据えられたベッドの上には、一人分の盛り上がりがある。

ランサーはつかつかと歩み寄ると、太い手でそれを揺すつた。「ハルカ！」

人間の体温を感じるものの、反応は何もない。焦燥に駆られたランサーは毛布をはぎ取つて、己がマスターを直視する。

「おいーどうしたー何があつた!!」

仰向けになつた顔には血の気がなく、青いどころか白い。いつの間にか痩せ細つたその体は、腕は、ともすれば折れてしまいそうな気さえした。しかし目立つたが外傷はなく、ランサーと離れていた時に傷を負つたわけでもなさそうだった。

それだけにこの衰弱ぶりが不可解で、ランサーはさらに焦る。必死に頬を叩き、目を覚ませようとするうちに、その微動だにしなければ瞼がぴくりと動いた。

非常に緩慢な動きで瞳が覗くが、焦点があっていない。「ハルカ！」

夢と現をさまようハルカの左手が、ランサーの腕に触れた。二画の令呪が残つたその手が落ちる。

「……二画？」

キャスターにその身を受け渡す前のハルカの令呪は、二画であつ

た。だがその二画とともにランサーをキャスターのマスター・キリエに受け渡し、キリエの令呪は八画となり、ハルカの令呪は失われた。それから、ランサーとアーチャーを従える為にキリエは二画を消費して六画となった。それを心霊医術とやらで無理に剥奪し、ハルカの手には六画の令呪がある——はずである。しかし、何度ハルカの手を見ても二画の令呪しかない。

「——残りの四画は……」

ふと、ハルカが身じろぎした。ランサーのマスターはその目にやつと己が従者を映して、言の葉を紡いだ。

「あなたは……誰ですか」

12月7日⑤ 日常との別れ

「……何してんだお前ら」

碓氷邸に一度戻ろうとしていた一成、アサシン、キリエはその帰りで明とセイバーに行きあった。何故か明とセイバーは人の往来で抱き合っていたのだから、気まずさは極まっている。明は状況の拙さにやっと気づいたのか、セイバーを突き放した上で彼の頭を一発叩いていた。

しかしセイバーの方は何がおかしいと言いたげに、じと目で一成たちを一瞥した。

「……何って、見ての通りだが」

「わかるか!!」

いくら思春期真っ只中の一成とはいえ、彼らの雰囲気は恋人同士のような爆散四散を祈るべき甘いものではないことは察してはいた。だがあまりにも雑なセイバーの発言には突っ込みを入れざるを得なかった。

しかし話が進まなくなるため、一成はとりあえず買い出しに出かけていたことを説明した。勿論全員戻る先は碓氷邸の為に、五人連れ立って帰ることになったのだが。

「……世界との契約は止めだ。奴らの願いが「俺の最強たること」かどうかかわらない以上、俺が戦う意味がない」

セイバーがぼそりと言った言葉の意味を、明だけでなく一成もしかと理解していた。一成としてはそれでいいと思うが——明とセイバーの顔は、晴れやかというものからは程遠かった。こちらもキリエが黙ったままで、アサシンも特に言うことはなく静かにしている為妙な雰囲気である。

その雰囲気は解消されないまま碓氷邸に到着し、自然と全員がそのままリビングに集合した。一成にも、明にも話さなければならぬ事項がある。

ソファにそれぞれ腰かけてから、一成が一番に切り出した。

「確氷、俺とキリエは教会に行く」

「……何でいきなり」

明は呆けた声を出して一成とキリエを交互に見る。キリエもアサシンもうんともすんとも言わず、黙っているだけだ。今や完全にいわくある教会になってしまったため、明も一度足を運ばなければならぬと思っていたが、突然だ。

「教会にあの神父がいるんだろ。聞きたいことがあるから行つてくる」

「いやいやちよつと待って。一応教会は中立つてことになってるから昼間からそんな堂々と行くのはちよつと」

一成はその制止を鼻で笑う。いつになくピリピリしている。

「中立つっても形だけなのか。それにキリエと組んだりお前と組んだり、あげくの果てにはランサーのマスターとグルとか一番胡散臭い奴だろ。お前だって、あの神父を放つておいていいなんて思っていないだろ」

神父が何か隠しているのは明とて分かっている。キャスターと戦う前に使い魔で連絡を取った際には「ハルカはもう戦う気はない。身柄を教会で保護している」と言っていたが、知つての通り大西山の戦いにおいて、ハルカはセイバーらに乗じてランサーを取り返した。その時点で神父はウソをついていたことになる。同時にキリエにもウソをついていたことになる。

どうせ取り返すのなら何故ランサーを一回キリエのサーヴァントにしたのかも不明だが、神父はランサーのマスター・ハルカとは組み続けているに違いない。それだけ怪しいからこそ、明は悟に教会に行くことを勧めず、この家に居させているわけだ。

明は自分の体の調子を確かめる。傷は自分の治癒で全快には程遠いが、走ったり蹴ったり、一通りの運動はできるだろう。

「……セイバー、戦える?」

「……通常戦闘ならば。宝具も草薙なら使うこともできるだろう」

「じゃあそれ、私も行く」

「えっ!？」

「驚くことはないでしょ。というか放っておくつもりはないだろうって言ったの一成じゃん」

共闘を持ちかけておきながらそれを破った神父を問いただすべく、明は目を光らせた。明が行くならばと、そのサーヴァントのセイバーも肯う。

「べ、別にいいけどよ」

俄かにやる気を見せた明とセイバーに、逆に一成がたじたじとなる。「ただし行くのは夜だよ」

「は？夜行ったらそれこそすぐ戦いになるかもしれないねーぞ」

「だからだよ。相談が通じるのか、それもわからない。あっちから仕掛けられて応戦するとしても、昼間は拙い。だったらいつそ夜に行った方がいい」

最初から教会が中立の立場ということはかりそめであったが、最早中立もへつたくれもない。安全地帯の教会でさえもう闘争の場となる可能性がある。あちらとて明や一成に疑われていることは承知であろう。ランサーを繰り出してくる可能性も大いにある。

「だけど俺は話を聞きにいくだけのつもりだ。昼間にアサシンとセイバーが居れば、滅多なことをしないだろう」

「そうかもしれないけど、あっちはどう出るかな？それに、ランサーのマスターは令呪をたくさん持つてるから何をしでかすか」

「令呪？」

何故ランサーのマスターが大量の令呪を持っているのか、かつてのキリエの腕を見ていない一成は首を傾げた。だんまりしていたキリエが、小さな声で令呪について説明する。

「……私の元々の令呪が三画、カズナリ・ツチミカドの令呪を三画。それにランサーを奪った時に二画の令呪。合わせて八画の令呪を持っていたわ。ランサーとアーチャーを従える為に二画使ったけれど」

もしキリエがハルカに襲われず、まともな判断ができる状態で戦い続けていたら令呪の使用により大西山での戦況は一変していたかも



しれない。一成は今更ながら背筋を寒からしめた。

「それを全てランサーのマスター、ハルカがキリエから奪っていった。結果、ハルカが六画の令呪を持っていることになるね」

一成は残り令呪一画、明も同じく一画を残すだけだ。ランサーは単騎とはいえ、六画もの令呪——サーヴァントのブースターとも呼べるそれ——を持っているとなればただことではない。一成は生唾をのみこんだ。

「迂闊に神父に会いに行けば、そのままランサーとの戦いになるかもしれないよ。準備を整えて、夜に行こう」

「——神父に会いに行く件だが、伝えておかねばならないことがある」話がまとまりかけた時、今まで黙っていたセイバーが重々しく口を開いた。「ライダーのサーヴァントがいる」

「……どういことツ!?!」

全員がセイバーを注視するが、最も激しく反応したのはキリエだった。この春日の聖杯たる彼女がサーヴァントを数え間違えることなど、基本的にありえない。

しかし靈器盤の異常はだいぶ前から知られており、かつキリエ自身も自らの違和感はある自覚していたのだが……

「わからない。だが、今日駅前で会った奴は間違いなくサーヴァントだった。神父のサーヴァントかと聞いたが、自分は誰のサーヴァントでもない、と言っていた。本当かどうかはわからない」

「……真名は?」

「わからない。だが、どこかで会ったような気もする」

本人は誰のサーヴァントでもないと言うが、マスターなきサーヴァントはありえない。神父のサーヴァントだという確証はないが、あちら側のサーヴァントである可能性は大きいだろう。

「でも教会には行くぞ。どうせ籠ってたって何もわかんねーんだし」  
「……まあ、それもそうだね。それで驚いているところなんだけど、私からもひとつ」

「げっまだなんかあんのか」

げんなりしたアサシンの声を流して、明は全員に尋ねた。

「シグマ・アスガードって誰だか知ってる？」

「……誰だそれ？」

一成はてんで知らないという風だったが、キリエは一度目をつむつてから考え込んだ。その間に、明が話を続けた。

「私も、どこかで聞いたことある気がするんだけど」

「……私も」

明とキリエはそろって首を傾げていた。さっぱり心当たりのない一成がつっこむ。

「というかその、シグマって何なんだ？」

「わからない。今日、駅前で会った女で——ランサーの本当のマスターだって言ってた」

「は？」

一成の反応は至極当然で、明も全く同じ気持ちなのだ。彼女と今まで会ったことは全くない。その時、黙っていたアサシンが腰を上げた。いつのまにか大きく膨れたビニール袋——買い出した食品——を襦袢から放り出している。

「俺は謎のマスターやサーヴァントに助言できそうにねえし、ちよつくら気配遮断してそのランサーの拠点と教会を探ってくるわ。場所しらねーからさらつと教えてくれよな。その間にいろいろ考えてくれや」

「……わかった。無茶はしないでね」

教会もランサーの拠点も碓氷邸から近い。明は立ち上がると、近く本棚に収められている地図を引っ張り出して広げ、ざつとアサシンに場所を教えた。その後アサシンは了解、と軽く答えると、霊体化して姿を消した。

「時間もあるし、行く前に飯つくる。あと俺も今は元気だから、後で治癒の術かけるか？」

「あ、うん。じゃあお願いしてもいいかな」

一成も千里天眼通の反動からは回復している為、今まで通りの魔術

行使が可能だ。明の体質にも一成の陰陽道は有効だ。一成は立ち上がり、アサシンの放り出していったビニール袋を抱えて部屋を後にした。

残された明とセイバーだが、二人は特にすることがない。いや、明は自分の状態を鑑みるならば寝ているべきだ。

「……教会の思惑はわからないが、残るサーヴァントは俺、ランサー、アサシン、ライダーだ。流石にこれ以上はいるはずがない」

「そうだね」

「場合によっては、今宵決着がつくこともありうる」

アサシンはあの性質で、明確な聖杯への願いもない。それにマスターが一成であることもあつて今さら明たちを裏切れることは考えにくい。ランサーも周知のとおり、正々堂々の戦いを願ってここにいる英霊だ。

もちろん令呪六画のこと、神父の思惑とライダーの謎はある。しかし、聖杯戦争は既に佳境を迎え——終わりはもう近い。

「本来ならばまだ戦うこと自体を避けたいが、そうも言っではいられないようだ。土御門が来る前に明、少しでも多く眠っておけ」

「う、うん」

セイバーの言う通りにすべきだとは了解しているが、あの女の名前が気になっており、安らかに寝られる気がしない。

「アスガード……」

アスガードは英語名である。それはまたの名をアースガルド、アースガルズ、アスガルズともいう。

それは北歐神話において、アース神族の住まう国の名。そして確氷の始まりの先祖は、北歐からこの地、春日に棲家を移したのである。思わず考えに耽ってしまうところだった明を止めたのは、キリエの一言だった。

「忘れてたわ。アキラ・ウスイ、ちよつと話しておきたいことがあるの。カズナリ・ツチミカドの目についてね」

言われてみれば、昨日明は一成に「相談したいことがある」と言われていた。しかしセイバーとのあれこれですつかり頭から吹っ飛んでしまっていた。

キリエの言葉に頷くと、明は休む前にキリエと向き合った。

\*

結局、夕食を作ったのは一成ではなく悟だった。回復した悟はまんじりと居候することに居心地の悪さを感じたのか、自らすると言い出したのだ。

とはいっても、おせっかいな一成は彼を手伝っていた。

メニユーは寒い冬に相応しいシチューにこんがり焼いたフランスパン。添えには野菜スティックとソースがついている。朝は最も騒がしかったキリエが喋らない為に、今はなんとなく雰囲気重くなっている。

それでなくても、疑惑に満ちている教会へ向かうのだ。バカ騒ぎする気も起きないのも然りである——が、当然今日の夜について話し合わなければならず、話はそれに向かった。

「……教会に、何もなかった?」

「おう」

シチューをがつつと平らげながら、アサシンはあっさりと答えた。「マジでもぬけの殻って感じた。しかも礼拝堂?はなんか壁にでっかい風穴開いてたぞ」

最後に教会に向かったのは、大西山決戦の前の一成とキリエである。その時教会の中に入ったわけではないが、外見は何の変哲もなかった。実際礼拝堂の風穴は、彼らが帰ったあとの修道女とハルカの

戦いで開いた為、知らないのは当然である。

「教えてもらったランサーたちの拠点にランサーはいたぞ。そのマスターもいたけどよ、なんかベッドで眠りっぱなしで全然動かねー。ちなみに、女の魔術師なんて影も形もなかったぜ」

「ハルカ・エーデルフェルトが眠りっぱなし？大西山で実はかなりのダメージを受けたのかな」

そのあたりのことは、明にはわからない。正味な話、ハルカがどのようなにして山を脱出したのか、一杯一杯だった彼らは把握できていなかった。

ちぎったパンを片手に、明が首を傾げた。アサシンの言うことが本当だとしたら、宝石魔術の名手で強敵だと思われたハルカは易い。神父は特に魔術に秀でている話は聞いたことがなく、第八秘蹟会に所属するが代行者のような戦闘派ではない。ライダーとシグマを除けば、残りは脅威ではないのか。

「とにかく教会にはいつてみようぜ。確氷の目を通せば、別の手掛かりがあるかもしれないしな」

「何もなかったら、ランサーの拠点にも行ってみようか。何もなかったらその時に別の場所を探しに行こう」

一成と明がその流れで合意したとき、かちやりとスプーンを置いて、キリエは静かに口を開いた。

「……私、教会にはいかないわ」

「はっ？」

「私はいまやサーヴァントを失った聖杯だもの。うかつに敵前に行くより、要塞であるこの家に籠っていたほうが安全なの」

キリエは一度、ハルカ・エーデルフェルトに攫われている。何故だかはいまだ不明だが、彼女は一度逃げ出すことに成功している。

しかし、聖杯である彼女はまた狙われないとも限らない。そういう意味で、サーヴァント一騎の攻撃程度なら暫く耐えうるこの屋敷に残る選択は間違っていない。共に戦闘に出たとしても、セイバーは明を

優先して護りアサシンもキリエまで手が回るかどうかは怪しい。

しかし、一成はじつとキリエを見据えた。昼間、神父に会いに行こうとした時、彼女は強く拒んだ。キリエは神父との邂逅を恐れているのではないかと一成が思った時、キリエは強い口調で言った。

「オユウの真意を知りに行くものいかないのも、私が決めることよカズナリ・ツチミカド。貴方が口出しすることではないの。それに、」

買い物など外で遊ぶときのキリエと、夜の魔術師としてのキリエは様相をまるで異にしている。そして、どちらともつかない今も別の顔を見せる。

「私の前に、貴方は自分の戦いに集中なさい」

どう返すべきか困って、一成は野菜スティックを口につっこんだ。一成とて彼女を危険な目にあつてほしいわけではないのだが、どうも納得がいかない。

「確かに、そんなことお前が決めることだけど」

「私はここを護っておくわ。もし本当に私の身が危なくなったら助けを呼ぶから」

「……おう」

微妙な空気の中で、夕食は続く。戦争は終わりに近づいているにもかかわらず、まだ何も進んでいないかのような奇妙な錯覚を誰もが抱いていた。

ライダー、女魔術師、ハルカの正体、狂った靈器盤。美味しいはずの食事を砂をかむように食べながら、明は一人別のことを考えていた。

（……何で私、教会に行くって自分から言いださなかったんだろう）

一成が「教会に行く」と言い出さなければ、恐らく明は今日の夜も何も行動を起さなかった。体が全快になるのを待っていたと言えはそうなのだが、セイバーやアサシンに教会の偵察を頼むくらいのことには相談してはしかるべきだ。きつと体が本調子でなかったせいで、明は頭を振った。

聖杯戦争は着実に進行している。それは確かだ。

戦争が終われば、セイバーとアサシンは消える。一成と悟は自分の家に戻る。

そして明は一人に戻る。

こうして大勢で食事をとることもなく、家に人の気配がないのが普通の日常に戻る。寧ろこれほどの人がいる方がイレギュラーなのだ。

セイバーは「食事は共にとるものだ」派のため昼と夜は一緒に食べていたこともあり、僅か二週間程度のことなのにそちらの方が当たり前になっていたことに、明は今更ながら驚いていた。

食事後は大量に出た汚れた食器を、明は一成とともに洗った。朝は何だかんだで彼一人に押し付けてしまったので、罪滅ぼしとばかりに明は手伝うことにした。

明が皿を洗い、一成が水で流す。今気づいたが、大西山での戦闘のせいか左の義手が傷だらけになっていた。

「……一成の腕もちゃんと人形師に依頼しないとね。もうアテはあるんだけど」

「世話になって悪いな。ありがとう」

「前も言ったような気がするけど、折角だし霊体でもつかめる義手にしてもらおうか。費用は貴方持ちだけど」

「フツウのでいいです!!別に霊体とかつかむ機会ねーから!」

冗談はともかく、ちゃんと腕のいい人形師に渡りはつけてある。聖杯戦争が終わってからそちらに取り組むことにするから、まずは生きなければならぬ。

「なんだ……それはそうと、キリエから話は聞いたよ。千里天眼通のこと」

「ああ、おう。……とりあえず、使うつもりはない」

魔術師的には稀有も稀有なその機能をあつきりと使わない、とする一成の態度はいつそ清々しい。たとえ使いたくても使いこなすには修練が必要で、そのうえ教えてくれる相手がいない。天眼通のことはもういいのか、一成は別件で複雑な顔をしていた。

「あのよ、確氷。キリエって、聖杯戦争が終われば必ず死ぬのか？」  
「……そうとは限らない。サーヴァントが消滅していても、結果的に聖杯として使わなければキリエは元に戻る。あとは大本の大聖杯を壊してしまえば。多分、絶対とは言えないけど」

「本当か!？」

一成はぱつと顔を明るくした。しかし、今一つ歯切れの悪い明に引っかかって言葉を重ねた。

「多分？」

「……キリエは聖杯としての完成度は今一つみたいだから。全サーヴァントが消滅すれば、キリエの中に全ての魂が入ることになる。一度は人間の外装が全部剥がれ落ちることになる。聖杯として機能しなくてすんでも、その状態から元に戻るか保証はないよ」

「……一応聞くけど、だけどその大聖杯ってどこにあるんだ!？」

「それは私もわからない。キリエは何か言ってた？」

一成は首を振った。「いや……」

確かに聖杯の降霊自体は霊地であれば、大聖杯の設置場所でもやる必要はない。知らなくても困ることはない。

「だとしたら知ってるのは」

「神父か」

聖杯戦争の発端である神父ならば、大聖杯の設置場所も知っているはずだ。それでも、明はキリエを生かそうとする一成に疑問がある。

「でも、仮にキリエを死なせなかったとしてどうするの。あの子、インツベルン城に戻るの？」

「あいつは居場所がないからあんまり帰りたくないって」

「聖杯を得る為だけに作られたホムンクルス——そうだろうね。聖杯を手に入れられないキリエに意味はない」

一成は明の言い方にむっとしたが、同様のことはキリエも言っていた。明はやれやれといった顔をして続ける。

「それに、あの子ってあとどれくらい生きられるの？ホムンクルスの寿命は長くないよ。ちゃんと延命させたいなら、それこそ城に戻るべ



きだし——それに、そこまでして生き続ける理由があるの？キリエは」

アインツベルンが聖杯を得るために作られた彼女は、これ以上生き続けたいと思うのだろうか。一成もそれは承知しているようで、苦虫を噛み潰したような顔を隠そうとしない。

「今のあいっには、ない。でも、神父との決着をつけさせないと、あいっは次を考えることだってできない」

急に一成が「教会に行く」と言ってきた理由が明にもわかってきた。全ては、キリエに神父の真意を知ってもらうためだった。

一成は、どこまで言っても一成だ。

アーチャーに裏切られた時の彼は、決してそこで諦めなかった。

「……でも」

——彼は、土御門一成はそれでよかつただろう。しかし、キリエも同じか？

神父の真意を知っても、どうにもならないことだってある。真実を知って、立ち上がろうと思う者もいれば、返って絶望に打ちひしがれ、起き上がることを止めてしまう者もいる。

ならばいつそ、耳を塞いで目を閉じて、ずっと引きこもっていたほうがむしろ心安らかにいられるのではないか。

「……キリエがどう思うかなんて、私にもわからない」

キリエは、教会にはいかないと言った。実質脱落者である彼女は、もう無理に闘争に加わる必要はない。神父が何を想っているかなど、知らなくても死ぬことはない。

「……おう」

決めるのはキリエの意志だ。一成は神父を問い詰めるべきだと思っているが、彼女が必要はないと思うなら押し付けるのは何か違う。

それを了承しているが、彼自身としては納得できていないから齒切

れの悪い返事をしている。

洗い物を終え、出かける前の準備をすべく、明と一成は自分の部屋へと戻ることにした。「じゃあ後でな」と速足で食堂を後にする彼の背中を見て、明は小さくつぶやいた。

「……一成はすごいなあ」

何の気もなしにこぼれた言葉だった。仮に明が一成の立場だとしたら、おそらくとつくに戦争を止めていた。

アーチャーに裏切られ腕を無くした時点で、本当にひどい目にあつた、もう関わりたくない教会に保護を求めていただろう。そして、その選択も決して間違いだとは思わない。

でも、少しだけ。

彼のように、強く——下品に言うならば、自己中にも戦いを掴むと決意できることは、凄い事だと思うのだ。

「アキラ・ウスイ！カズナリはどこかしら！」

「キリエ？」

一成と入れ違いに、先ほどまで話の俎上にいたキリエ当人が姿を現した。少し声が緊張していたようなのが不思議だったが、明は一成が自分の部屋に戻ったと伝えた。

「わかったわ。三十分くらい、彼を借りるわ」

急いだ口調で明にそういうと、キリエは一目散に踵を返して一成の部屋に向かった。

\*

「えっ!?!今日で聖杯戦争が終わる!?!」

「ちげーよバカ早とちりしすんな。終わる「かも」だ。まだうさんくさいライダーもいるらしいしな」

月が上る空の下、二人は碓氷邸の庭の噴水に腰かけていた。悟はコートを着ているが、アサシンはいつもの派手な赤い襦袢を身に纏っているだけだ。腰かけている縁に空いたビールの缶が二つ、未開封のチューハイが二つ、赤ワインがある。

ガンガン飲んでいるアサシンのおかげで、周囲の空気も酒気を帯びている。

「そうか、だから食事のとき妙にみんな神妙な顔つきだったんだ」

「お前微妙に浮いてたからな」

「悟をこれ以上聖杯戦争に巻き込むべきではない」とする明の方針で、悟は作戦会議には参加していない。悟としても魔術に關せずぶの素人である自分が紛れて、話の進行を妨げることがはしたくはなかった。ゆえに、置いてけぼりを食らった形になっているのは、仕方ないことではあった。

「……でも、じゃあセイバーとお前戦うのか?」

「もし今日ランサーやライダー?を倒すことになったらそうなるな。倒さなくても、戦争はもう後半に入ってる感じだ、いつの夜に全部の決着がついても不思議じゃねえってこった」

「……そっか、お前人間じゃなかったよな」

悟のつぶやきに、アサシンは盛大に噴きだした。「何今更言ってるだお前」

「いや、だって確かに消えたりするけど、人間だし」

悟とアサシンが出会ってから、約一週間しか経過していない。その上、半分の時間悟は倒れて寝込んでいた。であるが、二人が共にあった時間はあまりにも濃かった。命の危機にさらされ、そこでやっと自分の望みを知るまでの怒涛のような一週間。

既に悟はアサシンがいることが当たり前だと思っていたが、今の事態が非日常なのだ。

「ま、そういうわけだ。いつ今生の別れになるかもわかんねーんだから、俺に感謝の言葉とか、感謝の言葉とか、感謝の言葉とか言ってもいいんだぜ」

アサシンとしてはツツコミが返ってくるのかと思っていたが、悟からはつっこみどころか言葉も帰ってこない。そして、神妙な顔つきをしている。

「アサシン、お前杯とかもってなかったか？」

「あ？持ってるけど」

「それで飲もう。お前と月の見える場所で飲んだとき、すごくうまかったから」

生憎、アサシンは今日の買い出しで日本酒を買ってくることはなかった。日本酒は既に良く飲んでおり、それ以外の酒を飲んでみなかったためにビールやワインの類だらけだ。アサシンが宝具から取り出した盃に、悟は赤ワインを並々と注いでいく。

真紅の杯に注がれ、暗闇に浮かぶ赤ワインは血のように見えた。

「半分ずつ飲めばいいんだっけ？映画かなんかで見たのしか知らないけど」

アサシンが言葉を発するより早く、悟はワインの半分を飲んだ。そして乱暴に口を拭い、杯をアサシンに渡した。

「……お前俺に向かってマジいい度胸だな」

暗殺者は苦笑いにも近い笑いでその盃を受け取り、一息に飲み干した。悟は少し挙動不審になり、慌ててアサシンを窺う。

「え？俺、何か間違えたか」

「半分ずつ飲み交わすのは五分の兄弟の契りだ。つまり対等ってヤツ。この俺様に向かって対等たあお前も豪くなつたもんだなーあーうっかり手が滑って鎌で首すっぱーんするかもなー」

「えええええ！俺は子分くらいのつもりで……」

悟は己の適当な極道映画知識により、残念なポカをしていた。子分くらいの関係ならば、四部六の兄弟で、酒を飲む量もそれに合わせる。アサシンも悟がアバウトな知識でやったことくらいは了解している。

「ま、勘弁してやらア。なーんか結局夜の街に繰り出せなかったが、許

してやる」

「アサシン」

「もし明日があつたら、一晩くらい姉ちゃんたちとパーティーするのも悪くねーな」

明や一成、セイバーたちとバカ騒ぎ。年齢も離れているし、どんな風なパーティーになるのか全くわからなかったが、その想像は楽しいものだった。

だが、その幸せな空想はまずありえないことだとも、悟にはわかった。戦争が終わればサーヴァントは消え、そして明や一成も生還を約束されているのではない。

「……」

悟が気にしていたのは、あまりにも自分にできることがないことだった。命を助けてもらったのに、いまだ明や一成は己の命を懸けて戦いに望んでいる。

もし彼らが死んで、安全な場所にいる自分が生き残ってしまったら、と考えたくない。

流石に鋭いアサシンは、悟の思考を読んだかのように釘を刺した。

「言つとくが、妙なこと考えんなよ。たとえお前に何もできなくて、これから姉ちゃんたちが死んだとしてもお前は生きる。姉ちゃんたちは、お前だけの為じゃあねえが、それでも命をかけてお前を助けたんだからな」

助けた相手が死んでしまつては、それこそ報われない。悟は神妙な顔つきで頷き、酒をあおった。

### 第3幕 生き様は鮮やかにほど遠く

12月7日⑥ 願いを叶えることの難きよ

悟とキリエに留守を頼み、明、一成、セイバー、アサシンの四人は教会に行くため碓氷邸を出た。「教会にて何も起こらないかもしれない、しかし何が起こるかかわからない」とそれぞれが承知しているがゆえに、自然と無駄口が減る。

聖杯戦争も佳境を迎えている今、春日の空気は一層の重苦しさを増している。冬に向かって星の瞬きが煌めいていても、いつもの春日とは違う。バーサーカーという街から魔力を集めていたサーヴァントは消えても、キャスターと言う巨大な結界を巡らせたサーヴァントが消滅しても、それは変わらない。

セイバーとアサシンが先頭に立って進み、明と一成がその後ろに並んでいる。ふとアサシンが口を開いた。

「姉ちゃんはあの神父と付き合い長いんだろ。仮にも協力を申し出られるくらいなんだからな」

「……そうだね。私が生まれたときにはあの教会の神父は神内御雄神父だったし。神秘を秘匿する点に関しては協力してきたけど、仲がいにかつて言われたらそうでもない」

碓氷家がかねてから春日の教会と友誼を結び、神秘の秘匿については共同してことに当たってきた経緯がある。だが、元々聖堂教会と魔術協会は犬猿の仲で、かつては殺しあう関係だった。今は休戦状態だが、日の当たらない場所では今でも闘争が繰り広げられている。それだけ近い間柄ともいえるが。

「神父は元魔術師だよ。何で魔術師から聖職者に転身したのかは知らないけど」

「で、どんなヤツなんだ」

アサシンが重ねて聞いてくる。この面子ではアサシンだけ神父と面識がない。明も語りにくいのだが、それでも言葉をひねり出した。

「……何考えているのかわかんない？ 胡散臭い？」

あんまり得意じゃないんだよねと付け加えて、明は憂鬱そうに言った。しかし一成は付き合いが浅い——むしろ一回しか顔を合わせたことがない割に、嫌悪感を露わにした。

「胡散臭いどころがむしろ良くないやつだと思うけどな、俺は」

「——ほう、何故そう思う」

セイバーは異議があるというより、むしろ同感といった様子で聞いてきた。おそらくセイバーも神父を良くないと思っているのかもしれないが、一成と同様に確信がないのだろう。

当の一成も、キリエと共に教会で顔を合わせた時は、まだ明と似たような感覚を抱いていた。得体のしれない、よくわからない人間だと。しかし、今までのキリエの話を通して振り返ってみると——殆ど勘やひらめきに近い考えが一成の脳裏にあった。

「……キリエは言ってた。この戦争は、あの神父がアインツベルンに持ちかけたって。だけど神父の目的は分からない。アインツベルンに協力しているときだって、自分が聖杯を欲している様子なんてなかったんだろう。あつたら、監督役になんてならねーだろうし、俺の家やアインツベルンが許さない」

「そうなんだよね、神父が何したいのかわからない」

それはキリエの話を聞いた時から、一同を悩ませていた問題だった。しかし一成は、あの日教会で、神父のある問いかけを聞いており、今それが頭に浮かんで消えない。

「——戦いは、悪か？」

「何だそれは」

「神父に会った時に聞かれたんだよ。なんでかそんな話になった」

話の脈絡がないために、セイバー、明、アサシンは首を捻るだけだった。一成にもうまく説明はできない。

だが仮に、春日聖杯戦争準備期間において、神父の目的は聖杯そのものではないとすれば「聖杯戦争そのもの」ではないのかと——「そろそろ教会だよ」

明の声が寒々しい空気を通って響く。元々碓氷邸から教会は歩い

て十五分程度であり、すぐの距離だ。あとは角を右に曲れば、坂の上にある教会の門が見えるはずである。

アサシンがまだ日の高いときに行った偵察では、既に教会には人つ子一人いなかったが、礼拝堂には争った形跡があった。また、シグマ・アスガードらしき女の姿はどこにもなかったそうだ。

何はともあれ、一回は教会を覗き魔術的視点から、明や一成が検分を行うことにした。もし何もなければ、そのままランサーの拠点にも足を運ぶつもりだ。

だが、教会の姿が視野に入った時点でセイバーもアサシンも、マスターたちも身を強張らせた。サーヴァントの気配が、教会から強く漂っているのだ。

見知った気配はランサーのものだとすぐに知れた。——教会に令呪六画を備えたサーヴァントが待ち構えている。自然とセイバーとアサシンが前に立ち、明と一成を護る態勢で移動する。

このような夜更けに教会を訪れる信者はおらず、殺人事件が続く春日の街は静まり返って人気の欠片もない。

聖杯戦争初日、セイバーとランサーの手合せによって荒らされた石畳の道の花壇は、花の数こそ減ったが綺麗に整えられていた。屋根から三角の屋根の上に白い尖塔があり、その頂上に十字架が立っている教会らしい教会の姿は変わらない。

教会の中は暗く闇に溶け込んでおり、礼拝堂には人気はなさそうだ。だが彼らの注意を引く人物は教会の中のものかではなく、教会の前に威風堂々と仁王立ちしていた益荒男である。

その出で立ちは一昨日に大西山で見た姿と寸分たりとも変らない。天上から降り注ぐ白光に照らされた鹿角が、地面に映し出す影に明確な特徴を与えていた。

勇ましく天を衝くような鹿角の兜。黒糸緘の鎧を身にまとい、最大長——六メートルにもわたる槍を立てて門番の様に待ち構える姿。しかし不思議なことに燃え立つような闘志は激しく伝わってくるにも関わらず、彼から放出される魔力がその闘志に伴っていないように思えた。



セイバーたちとランサーの距離は二十メートルほど。石畳の上で、セイバーは剣を取り、蒸気を纏わせながら訝しげにランサーを見た。口火を切ったのはランサーが先だった。

「待っていたぞ、セイバー。もし来なければ今からお前の家に入り込もうかと思っていた」

いつものように張りのある声だったが、何とも言えない寂寥に包まれていくようにも聞こえる。

「今こそお前と雌雄を決する時だ。それがお前と初めて会った場所となるとは思ってもいなかったが、何とも不思議なモノよ」

セイバーはふんと鼻で笑うと、剣の切っ先をランサーに向けた。

「お前との戦いを避けるわけではないが、今は神父、いや教会に用がある。そこをどけ」

「そちらに用があるなら儂を倒していけ、剣の英霊よ」

ランサーの声に余裕はない。まるで今戦わなければそれこそ死んでしまうかのような、切羽詰まった印象を受ける。そしてランサーから伝わる魔力の薄さを鑑みれば、一つの可能性がある。だが何故、と明は思う。

「……ランサー。あなた、マスターは？」

ランサーは答えないが、沈黙が全てを語っていた。そしてランサーの立ちふさがる先——教会の扉の前に、マスター——ハルカ・エーデルフェルトが座り込んでいた。闇にまぎれて気づかなかったが、明たちはその姿を見間違えない。

座り込んで微動だにしないマスターは、大西山で見た彼の姿とは大違いだった。ランサーは諦めてやれやれと首を振った。

「儂には何が何やら皆目見当もつかぬ。だが、ハルカはもう数刻も立たずに使い物にならなくなる。パスを通じてそれはわかるのだ」

明は自分の耳を疑った。何故ハルカが使い物にならない——死ぬのか全くわからない。だがランサーが嘘を言っているようにも見えず、座り込むハルカは既に息絶えているようにさえ思える。

「そんなアサシン。今、セイバーとの戦いを邪魔しないでくれまいか」  
アサシンもランサーの頼みを鼻で笑った。セイバーと戦うことについてはランサーが問答無用で襲い掛かれれば戦いになるだろうが、アサシンの介入までは防げない。

「あん？俺がそんなの護る義理ねーだろ。そこにへたり込んでるマスターをぶっ殺せば数刻たあ言わずお前もマスターも今すぐ昇天だ。一応俺はセイバーのお仲間ってことになってるんでな」

「だからこうして頼んでるのだ、アサシン」

「いいけど、代わりに聞きたいことがある」

答えたのは一成だった。その返答を予想しないでもなかったが、アサシンは渋い声を出した。この先の事を考えると、アサシンとしてはランサーが生き残るよりセイバーが生き残ったほうが都合がいいことくらい、彼も知っているはずだ。

しかし、それ以上に一成が勝ち残る事を至上としているわけではないことをアサシンは知っている。

「おい一成イ、あいつが令呪六画持つてるのを忘れてねーか？」

「忘れてねーよ。だけど、今あの状態のハルカ・エーデルフェルトに令呪が使えるとは思えない」

アサシンはいまいち納得いつていない様子だが、彼自身も反対を押しつけて戦う気はないようである。こうすれば有利という理屈はもちろん、アサシンにはある。

だが、交わした言葉こそ多くはないもののランサーという英霊は、アサシンにとつてある意味特別な英霊である。

「さつきも言ったけど、聞きたいことがある。それに答えるなら、アサシンや俺たちは邪魔をしない」

「儂に答えられることであれば答えよう」

このやり取りをセイバーが静観しているという事は、彼も一成が何を問おうとしているか察しているからだろう。

「お前、ライダーのサーヴァントを知っているか？そいつはお前の仲間か？」

「……!?ライダーのサーヴァントは戦争の初期に消滅したのではない

か？」

ランサーは全く予期していなかった様子で、驚愕の言葉を返した。セイバーも「嘘ではないように感じる」と、ランサーを見つめながらつぶやいた。

「もう一つ聞きたい。お前、シグマ・アスガードってやつを知ってるか」

「……？誰だ？少なくとも僕は初耳だ」

気がせいしているのか、やや早口でランサーは答えた。何か隠しているように感じられない。一成、明がどうしたものかと考え込んでしまい、一時場には静寂が満ちた。しかし、沈黙は名槍の一薙ぎで殺される。

「問いは終わりか」

短くなつた三メートルの槍を携えるランサーは、語気鋭く突き付ける。その言葉一つ一つに本気の気迫と熱気がこもっているのを誰もが感じている。今までマスターの方針に従ってきたランサーだが、今ここに至り何があつても戦うという意志を表している。

聖杯戦争初日、日の下での挨拶代わりの手合せ。聖杯戦争佳境、月下において雌雄を決する死合。何もかもが対照的な槍と剣のこれまで。

セイバーは蒸気をまとう剣を両手で持ち、ランサーを睨んだ。

「——ああ」

「それでは行くぞーセイバー!!」

最早止める者は皆無。全身を自慢にして最硬の鎧で武装した、正真正銘のランサー——本多忠勝の全力の戦だ。

「じゃこっちは好きに教会内を探すぞー行くぞ一成！」

駆けだすアサシンに追行し、一成は置いて行かれぬように全力で駆ける。

対峙するセイバーとランサーを置いて、二人は教会の入り口の扉を開ける。その時にアサシンがハルカの体を脇にどかしたが、思わずアサシンは動きを止めた。

先に教会内に入った一成は、追いかけてこないアサシンに気づき一度引き返した。

「どうしたー！」

入り口でアサシンはハルカの腕を見ている。ぐったりと顔色を失ったハルカの腕には、令呪の跡が二画残っている。——二画？

「何で令呪が二画しかないんだ」

明とキリエの話によれば、ハルカにはまだ六画もの令呪が残っているはずである。しかし彼の腕には二画しかない。残りの四画は一体どこに消えたのだろうか。

その行方はわからないものの、一成の背を得体のしれない悪寒が伝う。

何かもつと悪い事態が進行しているのではないかとの予感がある。

「……アサシン、とにかく教会を探してみよう！」

「そうだな、行くかつと……おい、姉ちゃん！こいつ、令呪が二画しかないぜ!!」

大声で明とセイバーに向かって叫んでから、アサシン一行は礼拝堂に突入する。

教会の礼拝堂には人一人いない。教会特有の蝙蝠天井、玄関を突つてすぐ正面に磔刑に処されたキリストの像がある。真ん中の通路を挟んで右左両方に長椅子が整然と並べられている——はずなのだが、今は無残に真つ二つに破壊されているものもザラにあり、そうでなくとも本来の配置からかけ離れて雑然としている。

それに一番奥にはなにか衝撃派でも叩きつけられたよう放射状の罅が入っている。とどめとばかりに、入り口から見て左手の壁にぽっかりと穴が開いていて、どう考えても何か起きた後である。

どこか埃っぽくて視界が煤けている。電気もついておらず、当然暖房が効いているはずもなく、異様な雰囲気だ。礼拝堂には誰もいない為、キリスト像の左側にある扉から教会の奥に入ることにした。アサシンが霊体化して内側から鍵を開ける。

「人のいる気配がないな」

御雄神父たちの居住スペースになっている扉の先には、人つ子一人いなかった。こちらも暖房の類が掛かっていた痕跡はないほどに冬の寒気に満ちている。先程まで人がいた、というわけではなく、だいぶ前からいなかったのだろう。

「……俺が昼間に見に来たときから、なんも変わってねーな」

たとえ神父がいなくても、どこに行ったかの手がかりがあることに望みをかけ二人は分かれて家探しを開始した。

一成が金属の扉の一室を開けると、そこにはベッドと簡素な椅子、テーブルがあるだけの質素な部屋だった。テーブルの上には三つの光りが点滅している古めかしい盤——陰陽道で使用する式盤に似たものがのっている。

「これが靈器盤……か。見方は……」

サーヴァントの現界・消滅を確認するための道具が靈器盤である。一成も目にするのは初めてでまじまじと眺めてしまったが、やはり靈器盤は正しく機能していない。セイバーとランサー、二騎分の反応があるだけで、アサシンの光もライダーの光も消えていた。神父が虚言を弄したわけではないことは明らかで、靈器盤は本当に壊れてしまっているのだと思われた。

「二応持っていくか」

明やキリエに見せればまた異なる言葉がもらえるだろうと思い、一成はそれを持って行こうと脇に抱えた。

続いてベッドに目をやると、神父のものではない、二十センチ程度の長さの金髪が落ちていた。大西山にて出会ったハルカ・エーデルフェルトは北欧人で金髪だったため、彼のモノかと思われるが、もう一本別の髪の毛を見つけた。今度は金色のより長い髪で、これも神父のものではない。

「えーっと、ここにいたのは神父だろ、後修道女だろ、ハルカ・エーデルフェルトだろ。あの修道女も黒髪だったしな」

金色の長い髪は、あのハルカというマスターの物とも違う。ハルカの髪は長くて肩程度までだ。とすれば一成は見えていないものの、考えられるのはシグマ・アースガルドという魔術師か。しかし魔術師、

とくに女性の魔術師の髪の毛は魔力を多く貯める切り札である。陰陽道においては呪殺の触媒にすらなりうるものを、易々と放置しておくものだろうか。

それとも、回収されたとしてもなんら害はないから放置しているのか。まあ、一成には呪殺は力量的にできないのだが。

一成は髪の毛を回収し他も探すべく、その部屋を出た。地下へ向かう石造りの階段を下りていくと、アサシンがランプだけの明かりの元、魔導書だらけの部屋を探している。一成が迂闊に魔導書を開くと危ないぞと声をかけようとしたところ、彼は魔導書ではなくノートを開いていた。

昼間来ていた時は念を入れて霊体化していたため、物に干渉できなかったアサシンは興味深げにノートを繰っている。

「アサシン、何見てんだ？」

「おう、ちょっとこれ見てみろよ」

一成はアサシンが見ていた机の上に目をやると、魔導書ではなくノートの束が大量に置いてあった。そのうちの一冊に手を伸ばし中を見ると、聖杯戦争に関することがびっしりと書き込まれていた。

十数冊に及ぶそのノートは色褪せており、かなり古くから溜め込まれていたようである。一冊をぎっと確認したが、情報量は相当のものだ。聖杯戦争の発端に関わる神父ならばこれほどの調べもしていることもわかるが、一体聖杯戦争の何が、彼をここまで駆り立てたのかまではわからない。

「これ、何だ？あの神父のものか？」

「そーだろうな。これ、一応全部俺の襜褕に入れて持って帰ろうぜ。だけだよ」

「……やっぱり神父がいない」

彼らはこの居住区画のおおよそを調べたが、どこにも神父の姿が見当たらない。一成は拾った髪の毛をアサシンに示して見せる。

「俺も神父の姿はみてない。ここに神父以外に二人の人間がいたことくらいしかわかんねー。絶対神父のじゃねえ髪の毛が二種類落ちて

いた。片方は同盟を組んでいたハルカ・エーデルフェルトのものとしても、もう一人はわからないんだ」

「ただたんに客が来たとかじゃねえの？」

「それもないことはないけど、もっと怪しいのがいるだろ。碓氷の言つてた女魔術師だ……けど、あの神父の行き先を掴む当てにはならねーなあ」

隠し部屋さえなければ、概ね部屋は周り終えたはずである。とりあえずこのノートには何らかの手がかりがあるかもしれないと思い、全てアサシンの宝具に収納した。

「とりあえず一通り見たし、上に戻るか？」

もしかしたら既に決着がついているかもしれない。死に体のマスターと魔力不足のサーヴァントに対して、万全でないとはいえ遙かにましな状態の明とセイバーが負けるとは思えない。それに令呪ならば明も一画持つているのだ。

これまで共に戦ってきたセイバーの力を知っている一成たちからみれば、セイバーが負けるとは思えない。

「そうすつか」

一成、アサシンは双方ともに頷き合うと、踵を返して再び礼拝堂へ向かった。

\*

剣の英霊と槍の英霊。奇しくも同じく初日に教会で刃を交えた二騎が、雌雄を決すべく会い見えている。

セイバーも絶好調とは言えないが、ランサーはそれ以上に不調に見える。それでも彼らは油断することなく、お互いの武装に魔力を渦巻かせている。蒸気に覆われた神剣と、伸縮自在の天下の名槍。

今にも飛び掛からんばかりの二人の間に、涼やかな声が割って入る。明とて今更二人に水を差す気はないが、それでも聞いておかなければならないことがある。

「一つ聞いておきたいんだけど、ランサー。何故あなたはここにいるの？」

「セイバーのマスター。確かに気になっておるだろう。お前ならわかってるだろうが、我が相方はあの状態よ。あの神父は監督役なのだろう？ハルカの状態がこんな風になってしまったがゆえに、どうすべきか問うために来たのだ」

監督役、中立の立場上神父は通常ならばランサーに手を貸すことはない。だが、あの症状はサーヴァントの戦いで傷ついたものではなく、かつ彼らは教会と協力関係にあったがゆえに何か助けしてくれるかもしれないと、ランサーは思ったのだろう。

だが、ハルカはあの体でありランサー自身も神父の居場所を知らない。ハルカと神父は真正銘手を組んでいたのだと明たちは思っていたが、それも微妙に違うようである。

「それで、神父は何て？」

「ここで既に一刻（二時間）も待っているのだが、姿を現さん」

けろりとランサーは言ったが、それはやはり教会に神父がいないことを示している。もしかしたら戻ってきている可能性を考えていた明は思わず険のある目でランサーを見たが、ランサーは軽く手を振った。

「すまん。ここに神父がいないと言えばそなたらは別の所へ探しに行ってしまうと思ってな」

セイバーは切っ先をランサーに向けたまま、鼻で笑った。

「……フン、神父がいない可能性についてはこちらとて既知だ。それにしても、お前がそこまでマスターを気にかけているとは思わなかった」

ランサーからハルカがどのように映っているのかはわからないが、彼はマスターを「共に戦う者」と言い、尋常なる勝負を望んでいた。しかし教会との作戦もあったとはいえ、ハルカはなかなかランサーを全力で戦わせようとしなかった。あまり気の合う主従には見えない。言われたランサーでさえ意外そうに、そういえばと頷いた。

「うむ。儂が仕える主君は生前の殿一人だけなのだが……生前の習い



のようなものかの、ひと時の生とはいえ、共に戦うと決めた者をそう  
そう見限れなんだ」

生前は戦国という生き馬の目を抜く世界で、工作も策謀も良しとし  
ていても——生涯ひとりの主君に仕えつづけた男の在り方だった。  
そのランサーのまつすぐな瞳は、同胞を見つけた様に笑っている。

「——たとい良好な関係を築けなかったとしても、お前もおいそれと  
マスターを変えるなどとは思わん質だろう？日本武尊」

「……………」

ランサーとセイバーはお互いに殺気を散らしながら笑っている。  
明はセイバーからじりじりと後ろに下がり、いつ戦闘が始まっても構  
わないように距離をとった。

普通の話をしているようでも、二人の間の空気は極限にまで張り詰  
めている。

何が合図か、一陣の風か——剣と槍は同時に地を蹴った。

「いざ尋常に勝負！」

「朝敵死すべし！」

黒糸緘の鎧を纏ったランサーとの槍と、魔力で編んだ銀の鎧を纏つ  
たセイバーの刃が激突する。

現在、ランサーの槍の長さは二メートル弱で彼自身の身長よりやや  
高い。セイバー相手に遠距離の対応は不要と、振り回すのに最適な長  
さにしている。先手必勝、その名槍が目にも止まらぬ速さで、何撃も  
突きが繰り出される。それに応じて蒸気の剣が正確に一撃、二撃、三  
撃と受け払っていく。

「——ッ！」

セイバーの巖のような一撃を槍で受けて一度穂先を地面につけ、そ  
のまま棒高跳びのごとく飛び上がりセイバーから距離を取る。鎧は  
全く速さを損なう枷にはならず、ランサーは迫力を伴って瞬間移動で  
もしているかのような速度で襲う。頬のすぐそばに走る槍を感じな  
がら、槍で防げぬ間合いの中へとセイバーはもぐりこむ。小細工なし

で剣を胴体に叩き込むが、鎧を砕けない。

烈しい音だけ立てて、ランサーとその鎧は健在である。セイバーもランサーも距離を取り、互いの武器を構えなおした。

「……そうか、お前の鎧——生半な攻撃では砕けぬ鎧だった」  
「応とも。まずはこの鎧、砕けるか日本最強」

セイバーは戦うことは好きではないと言っており、バーサーカー戦やキャスター戦ではその通り楽しそうには見えなかった。だが、ランサーが相手の時は違う。

初めてここで顔を合わせた時もそうだったが、ランサーと戦う時はセイバーはどことなく楽しそうで、またランサーも同様だ。

ランサーによれば半死半生である彼のマスターのため、ランサーには十分な魔力がいきわたっていない。セイバーもそれよりはずつとマシだが、第二宝具を解放できるほどの魔力は回復していない。できて第一宝具を一回だが、それをすればセイバーも長時間の戦闘はできないだろう。

明は残ったはずの六画の令呪を不安に思っていたが、使う気力すらあのマスターには見られない。それに、先駆けて教会へ突入したアサシンたちによれば、何故か二画しか残っていないと言う。四画は一体どこに行ったのかが気になるが、まずは目の前のランサーだ。

眼にも追えない速さで槍が飛び、剣が振るわれる。長大な槍を捌くランサーの技量は、いつみても驚くばかりだ。しかも、その槍は自由自在に伸び縮みをする。セイバーが紙一重で避けようとすると、直前で槍が伸びる。それは初日の戦いでも目にした姿だ。

「相変わらず奇怪な槍だ!!」

セイバーはそれでも俊敏な身のこなしで致命傷を避ける。ランサーは愉快気に笑う。

生前、長大な槍を扱っていたランサーだが、歳をとり長い槍を使いづらくなった時に、蜻蛉切を改造して長さを変えて使ったと言う。その由来の為に槍はランサーの意思により、限界はあれど自由自在に伸縮する。

だがセイバーはその槍を躲しながら、伸縮する幅を見極めていく。

最初は本当に紙一重で躲していた動きが、あえて紙一重で避ける余裕の動きに変わっていく。

「斯様な速さでこの槍を見極められてはたまらんなあ!!」

「お前もな、——ッ、この聖杯戦争とやら、随分と頑丈な輩が多いと見える!!」

クラスとスキルによって傷つかなかったバーサーカー、陣地作成で膨大な魔力量で塗り固められたキャスターに続き、ランサーも傷つかない。戦場を駆けること五十数度に渡り、一度も傷つかなかったという彼を傷つけるのは生半な技では不可能だ。

ランサーの槍は石畳を削り、空を衝き衝撃波を生む。それを躲しながら、セイバーは神剣で胴を断ち切るべくぎりぎりに踏み込んでいく。

「バーサーカーといいキャスターといいお前といい、もつとさつさと死ね!」

魔力放出の追加効果を得た刃が、槍と交差し激しく撓らせる。俊敏さはランサーに分があるが、破壊力ではセイバーが上を行く。その力に汗を流しながら、ランサーは素早く距離を取る。それを追い、セイバーは容赦なく畳み掛けるが流石に隙がない。隙がなければ、作る。ランサーを追い踏みこむ刹那、セイバーは必要以上にランサーに接近して剣を振るのではなく——その足を捉え渾身の力で踏んづけた。

「——!!」

戦闘に於いて機動の核となる足を正確にとらえた力量もさることながら、まさか足を踏まれると考えていなかったランサーは一瞬反応が遅れた。接近した状態で、今度こそセイバーは横なぎに全力で草薙剣を振り抜く——!

がぎぎ、と鈍い音が夜に溶けた。草薙剣は金剛石もかくやという硬度の鎧を砕いた。だが鎧を砕くだけでその力を使い果たし、肝心のランサー本体は浅手だった。

すぐさま長さを変えた槍がセイバーへと奔り、飛んでセイバーは距離を置いた。

薄氷の上であるような緊張感のまま、ランサーは己が鎧に目をやり  
そして笑った。Aランクの攻撃をも殺す自慢の礼装は、もう機能して  
いないにも等しくなっていた。

理由は明白、魔力供給そのものが足りていないのだ。

「……宝具でもなくこの鎧を砕くとはな！ 儂が聖杯戦争に求めている  
ものはやはりお前のような強者よ!!」

ランサーの声は、最後には獣のような咆哮となっていた。たとえ魔  
力供給が十分でなくても、マスターが死にかけていても、己の全身全  
霊をかけて戦に身を投じる武士の姿が在った。

セイバーの霧の剣がその鎧を絶ち、切り裂いてもランサーは誇らし  
く笑う。

そして槍兵は俄かに構えを変えた。セイバーにも、その構えには見  
覚えがあった。セイバーはにやりと口角を吊り上げると、魔力で編ま  
れた鎧を消した。あの宝具の前にあつては鎧は無意味であり、致命傷  
を受ける可能性を増やすだけである。しかし剣は相手との距離を測  
るために使うため消さず、構えなおす。

いくら効率のいいランサーの宝具といえど、今の状態で宝具を使え  
ば魔力は殆ど使い尽くされる。真正正銘、最後の一撃になる。今も微  
塵も動かないハルカは、すでに意識さえないのかもしれない。

この大一番に、令呪でバックアップする様子を全く見せないのだ。  
槍に魔力が充填される。陽焰のように、槍の向こうの景色が歪んで  
見える。ランサーは笹のような穂先をセイバーに向けて、堂々と吼え  
た。

「この槍、掠れば死ぬぞー!」

「お前の槍がどの程度か、見極めてやろう」

剣戟の音が止み、沈黙が満ちる。張り詰めた緊張の中、ついにその  
宝具が再び放たれる。

「絶てぬもの無き蜻蛉切——!!」

その咆哮が早いか否か、セイバーは己が直感に全てを任せて槍を避

ける為だけにその身を翻す——しかし、その時。セイバーに向かうはずの槍は突如その速度と魔力を失った。

「!?」

驚いたのはセイバーだけではない。ランサー自身も驚愕に目を見開いている。されど驚いていることすら許されず、再びその槍には強く魔力が凝縮されて宝具を放つ。

その伝説の担い手の表情は、驚愕に包まれたまま。

「絶てぬもの無き蜻蛉切!!」

槍の矛先が向くは剣士ではない。それはランサーの背後、礼拝堂の扉。教会内を調べ終えた一成——正確にはアサシンに向かって放たれたのだ。

その場の全員が、当のランサーさえも予想していなかった。勿論アサシンが攻撃を予期できているはずもなく、その必殺の槍は過たずアサシンへと流星の如く駆ける。

何の前触れもなく、セイバーとの一騎打ちのみを望んでいたランサーが何故と考察する間もなく、それでもアサシンは須臾の間にも一成を突き飛ばした。

「——ッ!!」

肉を、骨を貫いた鈍い音。そうして、宝具たる槍は深々とアサシンの胸に突き刺さった。飛ばされて地面に転がった一成はあつけにとられ、わが目を疑う。それでもアサシンの口からはとめどなく大量の血が吐き出されたのを目にして、現実に引き戻される。

槍が刺されたまま激痛にさいなまれているだろうに、暗殺者の口から放たれる言葉は常と全く変わらない。

「……オイ、俺に手だすなつっつといてこれはどういう了見だア、戦国最強?」

「あ、アサシン……」

当のランサーも自分の目を疑い、槍を疑い、その果てにマスターである——礼拝堂の入り口で座り込んでいるハルカを見た。意識がないはずの彼の腕は何故か持ち上がっていて、その手の甲にあるはずの聖痕は、今や薄い跡を残すのみとなっていた。

——令呪によつて発動をキャンセルされ、さらに使うべきではない相手に向かって宝具を放たされたのだ。しかし意識がないはずのハルカが使用したようには思えない。

例えるなら上から操り人形の糸が伸びていて、何者かが彼を操っているというような——。

今、この場でもっとも呆然としているのはアサシンでもなくセイバーでもなく、ランサーだった。激痛の中アサシンは自らその槍を引き抜いた。それと同時に、一成は叫んでいた。

「アサシン、消えるな！」

そして、刹那、混乱の真つただ中にあるランサーの体を、一振りの剣が貫いた。

「——」

その剣はランサーの胸を抉って貫通し、彼は赤黒い血を吐き出した。剣の主は間違いなくセイバーだった。こちらも間違いなく正確に心臓を貫き、致命傷を与えている。元々ランサーには負った手傷を修復するには並みのサーヴァントの倍の魔力がかかるのだが、いかなサーヴァントでも霊核を破壊されてはどうしようもない。

「……せ、いば……」

「俺と戦っている時に隙を見せると言うことは、こういうことだ」

隙だらけの敵を討つのは当然と、セイバーの声色には一度の変化もない。血を吐きながら、ランサーは末期の言葉を紡ぐ。

ランサーとて、混乱の真つただ中に未だありながら自分がじきに消えるであろうことは知っている。その顔には、寂しげな表情が浮かんでいた。

「……すまぬな」

「何を謝る」

「バーサーカー討伐の際、約束を破ったこと。……そして、今正々堂々の戦いを頼んでおきながら、お前の味方であろうアサシンを討つてしまったことだ」

最早、ランサーには何もわからない。大西山で、ハルカは確かにセイバーと好きに一騎打ちをすればよいと言った。結局己は騙されてしまったのか、それともハルカ自身にもものつびきならぬ事情が為かさえも、わからない。

アサシンへの宝具解放がランサーの意志でなかったことは、この誰もが了解している。だからといって、ランサーの悲壮が軽減されることはない。

セイバーはその表情を全く動かさない。ランサーに突きたてたまの自分の剣を引抜く。一気に鮮血が胸からあふれ出しランサーはうつぶせに地面に倒れたが、渾身の力で寝返りを打って仰向けとなった。セイバーは剣についた血を払ってから鼻で笑う。

「……約束は必ず守るものだ。しかし、敵との約束はその限りではない。それくらい俺は知っている」

セイバー——イズモタケルをだまし討ちにした日本武尊の伝説を顧みれば、然もあらんという都合よい言葉だった。だが、その言葉は今のランサーに快く響いた。

敵と言いながら、約束を破ったことをセイバーは咎めない。

「……つはは、セイバー、お前もひどい奴だ。全く、戦国も現世も、人の世はままならん」

ランサーの泣き笑いのような声はかすれている。そして、体はもう足から徐々に消えていつている。それでもランサーはようやくと、恥じることなくセイバーを見上げた。本当にその瞳にセイバーが映っているかは定かではないが、それでもセイバーを見ている。

正々堂々と戦いたいとそれだけを願ってこの戦争に臨んだランサー。しかし、彼が戦ったのは全力を出さぬ偵察と、大西山での入り乱れた乱戦だった。

そして今のセイバーとの戦いも、令呪のためとはいえ自ら関係のない者を不意打ったのだ。

——ランサーの願いは、どうなったか。それはもう言うまでもない。存在感を失いながら夜空を見上げ、ランサーは嘆息した。

「正々堂々、戦うことは難しいな——、否、願いを叶えることは、難しい」

「それは、よくわかる」

セイバーがそう答えて、音が消えた。生前の未練を果たすべく機会を与えられても、現界するのはその未練を残した世界と全く変わらぬ世界なのだ。願いを叶えることが難しいのは、当然だった。

そして、胸まで消えかけたランサーは、消える寸前、確かに言った。かすれた声でも、静まり返った夜には深く響いた。

「かたじけない、日本武尊」

その言葉を最後に、この世界から槍の英霊は消滅した。ランサーが確かにいたこと示すのは、セイバーの服や剣、石畳についた血だけだ。剣から振り払われた血が飛んで地面を汚す。セイバーはランサーが倒れていた場所を、じつと見つめている。

明がそろそろとセイバーに近づくと、彼は何ともいえない表情をしていた。

「……どうしたの？」

「……殺した奴にありがたがられたのは初めてだ」

セイバーは珍しく苦い顔をして、剣を消した。

「俺が殺した奴の最期は、大抵殺されたことさえわかっている。呆け面か、呪詛でもかけようとするように恨みのこもった面か、助けを願う泣き顔のどれかだからな」

喜ばれて何とも言えない顔をすることはわかったが、未だにセイバーは苦い顔のままだ。明が何故と聞けば、何を当たり前のことをと言わんばかりに言い捨てられた。



「ランサーは戦うことそのものが目的と言っていたが、違う。こいつは戦ってその中で死にたかったのだらう。自分の居場所が戦場だと思うからこそ、その居場所で死にたかった。最初から死ぬために戦っていたようなものだ」

空気の読めないセイバーにしては、驚くほどの的を射ていることを言う。最早ランサーが消えてしまったので、それが本当に確かなのか判断はできないけれど。「俺が負けるわけではない」と言いながら、セイバーは吐いて捨てるように続ける。

「俺がランサーに勝ったのは、俺が強かったからではない。早かれ遅かれ、俺以外の何者かによって消滅していたらう。死ぬために戦う者の末路は死でしかない」

仕えた相手に忌まれ、戦にて没した日本武尊は平穩を望んでいた。仕えた相手に信頼され、大戦を乗り越え太平の世を手に入れた本多忠勝は戦を望んでいた。無双を謳う英雄は、互いに無いモノを望んでいた。

その時、なんとか立っていたアサシンがくりとその場に膝をついた。一成は慌てて支えようと肩を貸した。

「……っ、アサシン、どうした!」

「どうしたもこうしたも、……霊核ぶちぬかれたんだっつの」

「でも令呪つかつたら!それで、」

先ほど「消えるな」と強く願った一成の呼応し、最後の令呪はその効力を発揮した。ランサーが消滅したにもかかわらず、それより先に急所を貫かれていたアサシンがまだ現界を保っていられるのはそのおかげである。

「……一成、令呪を使っても破壊された霊核は治らないよ。もしそれができるなら、どのサーヴァントだって三回までは生き返ることになる。三画使えばわからないけど、一画でできるのはせいぜい、壊れた霊核をむりやりつなぎ合わせて多少生きながらえさせる程度だともう」

「……!」

言いつらそうに語る明が嘘をつくわけもない。一成は思わずアサ

シンを見上げたが、彼は常のごとく笑い、変わらない様子を見せている。その顔と体からは、脂汗が流れ続けていること以外は。

「まあいいさ、悟のコトは済んだしな。一成オメーにはちよい悪いが、俺に思い残すことはねえ……だが……？」

バーサーカーを倒し、アーチャーを倒し、キャスターを倒した。そして今ランサーが消滅し、アサシンも消えるのは時間の問題だ。噂のライダーを除けば、残るはセイバーのみである。そして、女魔術師と神父は。

「一成、ここにはやつぱり神父も美琴も、シグマもいなかったんだね」  
「……おう。一応靈器盤とか神父が書いたっぽいノートは押収してきただけだよ」

「このまま帰れない。今からランサー拠点に行ってみるのも」

その屋敷の主は、今礼拝堂の入り口前で斃れている。先程令呪を行使したのは確かに彼だが、また動かなくなっている。もしやの想像が、明の脳裏にあった。

あのシグマ・アスガードという女は「真のランサーのマスター」と言っていた。令呪は確かにハルカ・エーデルフェルトに存在していたが、そのハルカそのものが何者かの支配下にあるとしたら——そう、明が口を開きかけた時、彼女は突然その場に崩れ落ちかかり、しかし何とか踏みとどまり胸を押さえた。

「……うッ……！」

「明!？」

「いや、だ、大丈夫なんだけど……どういうこと……？」

明を支えようとしたセイバーだが、明が自力で踏みとどまったのを確認するとやおら消していた剣を再び手にし、鎧で体を覆った。そして南の方角へと目を向けた。その纏う空気は明らかに戦闘中のものになっていた。

「……セイバー、どうしたの」

明が訝しげに尋ねたが、セイバーは目を空に固定したままだ。

「……何か来る」

同じくサーヴァントたるアサシンは、笑みをひきつらせて応じた。

「……サーヴァント、だろ」

「……ああ」

全く予期しなかった発言に、一成と明は言葉を失った。いや、むしろセイバー以外のサーヴァントが消えることを見はからっていたとすれば？そう、そのハルカ・エーデルフェルトを通じて。

「……この気配は間違いない、昼のライダーだ」

「へッ、ランサーが消えて、俺が消えそうで——セイバーだけが残った状態で現れるなんてセコいやつだ」

空元氣のアサシンの声は、妙に寒々しく響いた。迎え撃つ準備をするも何もなく、一成と明はセイバーが睨む空の方角を見つめた。

## 12月7日⑦ 神の剣たち

上る月は、彼らを睥睨するように高く高く孤高にある。セイバー、アサシンはその雰囲気を固くしながら南の空を食い入るように見つめている。

その方角から、眩い光が見える。月の輝きとも星の輝きとも異なる、もつと強烈で眩い光だ。例えるならば白昼の太陽。その光で、月も星も覆い尽くされる。

だがそれよりも全員が感じたのは——怖気が走るほどの膨大な魔力。絶対の白でありながら禍々しい。キャスターが作り出した山の禍々しさとはまったく別種のもので、それよりもずっと激しく、全てをさらけ出させて焼き尽くす強いモノ。

セイバーはすでに蒸気の剣を構えて臨戦態勢に入っている。明たちが己の寒気をねじ伏せつつその空を見上げると、夜さえも覆う闇から一羽の白い鳥が飛来してくるのがわかった。

しかし、それは鳥ではなく、鳥を模した飛行艇のようだった。白銀に輝くその乗り物はどう動いているのか、エンジンのような音もなく静寂を保ったまま接近する——。

そして教会を通り過ぎようとしたその刹那に、空を裂いて何者かが飛び降りた。それは何の危うげもなく、花壇と花壇の間の石畳に舞い下りる。人数は二人で、片方は鎧の金属音を立てて、片方は重力制御でもしているのかふわりと着地した。

先に舞い降りた男は、間違いなくサーヴァント。圧倒的存在感と魂の質量は、英霊と呼ばれる存在に違いない。

その姿は、精悍で美貌の青年だった。真紅のマントを翻した姿は、神々しささえあった。着ている鎧は、短甲と呼ばれるそれでセイバーの鎧と似ている。籠手と具足も身に着けており、こちらは輝くような純白である。

動作の度にガシャン、とかち合う音が響く。その髪も同じく純白で頭で一つに結ばれており、上から下まで輝きの白に満たされているが、その眼は鮮血の如き紅みを帯びていた。マント以外は白で統一さ

れていて、その禍々しくも輝かしい魔力と相まって白い光のごときサーヴァントだった。

気になるのは、そこまで立派な武具を身に着けておりながら肝心の武器——剣、槍、弓のようなものが何一つみえないことだった。男は空手にて、悠々とその姿をさらしている。

一同はそちらに目をとられるが、また後から舞い降りた女にも目を奪われた。豊かな長い金髪に、碧眼。純白のコートに紺色のロングスカートを優雅に捌く女。その美貌には、蠱惑的な笑みが浮かんでいる。

「——ライダー、シグマ・アスガード」

「お昼振りね。私たちの時間——夜なら、好きなことが何でもできるわ」

今までハルカのおかしな姿を見て明が考えたことは、いつからかは不明だがハルカはこのシグマに操られていたのではないか、ということとだ。シグマはランサーのマスターのマスター、という意味で真のランサーのマスターなのだ。

しかしそれだけではなく、彼女は本当にライダーのマスターでもあったのだろうか。コートとロングスカートという露出度のない姿からは、令呪の確認ができない。

明が考えているのを察してか、シグマ・アスガードは髪を掻き揚げてから告げた。

「あら、私はマスターじゃあないわよ?」

「おい、確氷、あれがシグマとかいう奴なのか?」

小声で確認する一成に対し、明は頷いた。一方、セイバーは女よりもサーヴァントに注意を払っている。

「……こちらも昼間ぶりだな、神の剣<sup>セイバー</sup>」

ライダーの挨拶に、セイバーは答えない。彼のサーヴァントは明や一成には眼も呉れず、セイバーを注視している。無視をされていながら、それでも明たちは身を以て理解した。この何の英霊ともしれぬライダーは、恐ろしく強い。

そして顔かたちではなく、何かがセイバーに似ている。

「……確かにセイバーは放っておけと言ったが、ここまでモノがなくて戦い甲斐はないな」

その紅い目はランサーの散らした血痕を眺めたあと、傍らの女に注がれた。だがライダーに気後れすることなく、シグマは反対に言い返した。

「慢心は敵よ？アサシンの気配遮断は一番面倒だし、ランサー——私に使われてくれるなら生かしておいてもよかったけれど、そういう夕子じゃあないものね、あの男。令呪も足りなかったのもあるけれど」  
「慢心は敵とはな。おめおめと聖杯を逃がした草に言われるとはな」

構えるセイバー達に対し、あくまで泰然としているライダーとシグマは会話を続ける。

「あの聖杯に行く当てなどないと思っていたのよ。負けた聖杯に価値などなく、行く当てもないはずだったもの」

シグマはそれから、一人ぶつぶつとつぶやいて何事かを思案し始めた。仮にライダーたちが隙だらけだったら、セイバーはとつくに襲い掛かっていった。しかし彼がそうしないのは、その隙がないからだ。

ゆえにセイバーは襲撃にはでず、できるだけ多くの情報を引き出すべく口を開いた。

「何をしに来た、ライダー」

敵意を露わにするセイバーに対し、ライダーは鷹揚に笑って、むしろセイバーをなだめるような口調で告げた。

「そう生き急ぐではない、神の剣。サーヴァントは公とお前のみだ、慌てずともよからう」

既にアサシンがサーヴァントと戦える状態ではないことを見抜いているライダーなるサーヴァントは、にやりと笑った。

「公は現在あの神父に聖杯を使わせようと思っているが、ことによってはお前に与えてやらんこともない。申してみろ」

特に隠す気がないのか、ライダーは神父の仲間であると暗に告げ

た。

昼のやり取りを思い出せば、ライダーには聖杯に望みはない。楽しみたいだけ、と言っていた。具体的にそれはどうということなのか問うべく、セイバーは話を続けた。

「……俺に聖杯に託す望みはない。お前こそ、何をするためにここに立つ」

「公は聖杯に興味はないが、聖杯の使い手には興味がある。戦争で幾人も屍を踏み越え、何を選び何を捨て、果てに何を願うのか。そして願いを叶えて終わりではない——願いを叶えてから、お前は何をするのか」

セイバーは「無事に聖杯戦争を終わらせる」という明の目的のためにここにいる。しかし既に最強を証明するという誓いは無意味となったため、セイバー自身の戦う理由がない。この戦争が終われば世界との契約を取りやめ、死を迎える。

戦いに明け暮れて、戦うことしかできなかった一生がやつと終わる。やつと終われる。ゆえに「何をする」という問いに返す言葉は一切なかったはずなのに、セイバーは何か言葉にしようとしていたが、できなかった。

「その点でいえば神父は及第点。アレには願いを叶えた先の光景がある。ついでに言えばアレは、この戦争においては一番の努力家だぞ？ 努力には正しく報いてやりたいのが人情だからな」

非常に怪しい「人情」という言葉を使い、ライダーは笑った。

もしライダーは当初から現界していたのであれば、彼は本当に案山子となって成り行きを見守ることにしていただろう。しかし紆余曲折を経て既に残るはライダーとセイバー、アサシンのみとなつてしまった今となつては、ライダーが動かねば場は沈黙したままになる。要するに、ライダーが案山子のままでは終わらないのだ。終わらないということとは始まらないと同義である。

「しかしお前は奇しくも公と同じ神の剣ゆえに興味深い。人にも剣にも神にもなれなかったがゆえになお面白い。案山子を善しとする公としては少々不本意だが、戦うとするか」

ライダーは徒手空拳のまま、右手を上げた。「一瞬にして撃ち殺されてくれるなよ」

それは剣を持つセイバーに対し、大胆不敵な宣言だった。それでもセイバーは怒ることもなく、剣を構えなおす。相手が空手だからこちらが剣を使うのは卑怯という考えは、彼には端から存在しない。

今すぐにも戦闘となる緊迫した空気の中、問うのであれば今しかない。明は冷や汗を流しながら叫んだ。

「……シグマ・アスガード！あなた、いつからエーデルフェルトを」  
「？そんなの、最初からよ？あなたとハルカちゃんが会った時には、ハルカ・エーデルフェルトなんていなかったの」

もうハルカちゃんは壊れかけているから言うけど、と軽く付け足したシグマは異様なほど満面の笑みで明の問いに答えた。明は二の句が継げなかった——最初から、明たちは一度も本物のハルカ・エーデルフェルトには出会っていなかった。

ライダーがセイバーを注視する傍ら、シグマは明を見ているばかりだ。

「本当はもつと早く明ちゃんと接触したくてたまらなかったの。これまではずっとハルカちゃん越しで我慢していたんだから。でもランサーに気づかれたらちよつと面倒だったし」

私自身はマスターでもなんでもないんだから——と歌うように、女は告げる。

「病院にハルカちゃんを送って、バーサーカーの子に宝石上げて協力したりもしたけど、流石にそんな簡単なことでセイバーは負けてくれなかったわね」

「なっ、」

流石にそれは、明も知らないことだった。常時魔力不足であったろう真凍咲へ陰ながら協力する意味はひとつ。その時シグマ・アースガルドはセイバー陣営の敗退を願っていたのだ。女は微笑む。

「ハルカちゃん越しだけど、視てきたわ。確氷明。あなたのこと。本



当にあなたって素敵。最初はその素質を食べただけだけど、本当に、本当にあなたは中途半端。魔術師にも魔術使いにも一般人にもなれなくて、どれでもありたくない——悩める少女って、甘美」

最初は広い目で見れば「笑み」と思えたシグマの相貌は、徐々に異質なものへ変化していく。明とシグマの距離は二十メートルは離れている。だが、その口調はあたかも空間を伝わりその熱っぽい吐息が届くような錯覚を抱かせる。

一人悦に入るシグマを目の当たりにして、一成が至極まっとうなことをつぶやいた。

「……大丈夫かこの女」

「知らないよ……」

明は俯いたまま、シグマから目を逸らしている。既にシグマの瞳は、情欲に濡れ濁りながら執拗なまでに明に釘付けになっている。それでも彼女がうかつに手を出してこないのはセイバーがいることはもちろん、アサシンが未だ現界を続けていることもある。

「冷静なのか狂っているのかわからぬ草よなあ」

ライダーは呆れた口調だが、厭うているわけではないようだった。しかしあっさりした声は俄かに様子を変える。

「さて、公はそんな草一本に興味はないが——」

これまで圧迫感があったが、それはまだ害意には至っていなかった。だが今この時において、ライダーの魔力は覚醒する。例えるならば太陽——普段は恵みを与え、光を齎す穏やかなものであるが、近く触れんとする者を焼き焦がす激烈さを持つそれ。

セイバーの直感に南の空に異変を感じた時から警鐘を鳴らし続けているが、それが最高潮に高まっていく。

同時に、どこからともなく甲高い鳥の鳴き声が響いてきた。

「——ッ」

「——我が神威の前に」

ライダーは厳かに、神の言葉を告げるが如く述べる。空手にも拘らずその迫力は尋常ではなく、舐めてかかつては死を見るのはこちらとセイバーは了承している。

「――朝敵死すべし！」

セイバーは先手必勝とばかりに神風の如き速さでライダーに接近する。その踏み出しとほぼ同時に、ライダーの口は惜しげもなくその真名を晒した。

「ひれ伏せ！『天啓齋たかむすびのやたがらす導きの金鷄』！」

それは重力だった。音はなくただ静寂に、されど大気自体が巨大な錘となってその場にいる者を押しつぶすべく伸し掛かり、セイバーは飛び出そうとした足を止めざるを得なかった。彼は剣を握りしめてその場に踏みとどまった。

顔を上げると、ライダーの頭上には黒い鳥が――三本足の鳥が、夜中の太陽の如く眩く光り輝いている。形は鳥を取っているが、あれはライダーの宝具だ。魔術よりもっと原始的な、神秘の塊。

セイバーは警戒したまま後ろに視線をやると、アサシンは完全に地面にへばりついており、一成と明は彫像のようにその場に固まっている。

「な、んだこれ、動けね」

そうかろうじて言葉を発せたのは、地面に這いつくばったアサシンだった。マスターの二人は声すら出せずに、その場にとどまることで精いっぱいだった。大気全てが重さを持ったよう、という表現も正しいが、これはもつと精神にまで働きかけるものだ。

――このまま地に頭を垂れ、あの英霊の足もとに跪き憐れみを乞えるのならばそれはどんなに楽な事だろうか――。

全身全霊を以て、一成と明、アサシンもそうしたい欲求をねじ伏せている。一瞬でも気を抜くことはできない。高い神性のスキルを持

つセイバーのみが、その効力から逃れている。

「ほう、神の剣は動けるだろうと思っていたが、盗人が話せるとは思わなかった」

「……へッ、こちとら減らず口が取り柄でな」

アサシンは気丈にもそう吐くが、戦える状態でない事は火を見るよりも明らかだ。ライダーは相変わらず徒手空拳のまま構え——そして、地を蹴った。

セイバーは一瞬だけ背後の明たちを確認すると、ライダーの攻撃を迎撃すべく遅れて地を飛んだ。蒸気を纏う剣はライダーを真つ二つにすべく振り下ろされたが、紙一重で回避される——それどころか、速さを知っていたかのように襲い掛かる拳が、入れ違いざまに加速してセイバーの首を取らんと伸びた。

ライダーを叩き斬る為に前のめりになっていたセイバーは、その手を躲すために避けることはしない。髪の毛一本程の隙間で、ライダーの手のひらはセイバーの首を掠めるだけで何も掴むことはなかった。勢いのまま双方は立ち位置を入れ替え、再び殺気が交錯する。セイバーの振るう神剣によって石畳が巻き上がり、発生する暴風もライダーを襲うが、彼が動揺する様子はない。セイバーが幾度も幾度も切りかかるが、それは敵を断つには至らない。

見た目はセイバーが攻めている形だが、ライダーの様子はむしろセイバーの力の程を見極めようとしているようにも見える。

そしてライダーの戦い方は、セイバーのそれとよく似ている。

その身のこなしが、セイバーが大西山で披露した古代相撲のそれに酷似していたのだ。

ライダーの真名は、宝具の開帳によってすでにわかっている。その真名からすれば、昼間の発言に納得がいくことも多い。それよりも重大なことは戦闘の相性として、セイバーは決してライダーに優位ではないということだった。

神秘は古ければ古いほど強度を増す。しかし、人々の思い描く幻想に強く影響を受ける英霊は、伝説に語られる弱点——ジークフリート

の背中的一部分、アキレウスのアキレス腱——が存在する。弱点を突き、戦闘を工夫することで、近代の英霊が神代の英霊を打倒することは往々にしてありえるのだ。

神をも恐れぬ英雄ならばこのライダーに対し、もつとやりようもあるのだろうか——悪いことに、セイバーはライダーと同じ側の英霊なのだ。その上、ライダーの伝説はセイバーの伝説の原型オリジナルである。

従ってサーヴァントとしての能力も自然似通っており、さすれば強弱を分けるものは——。

——それが、どうした。

最強の誓いがなくなっても、まだ何人たりとも負けるわけにはいかない——そのとき、セイバーの視界の端を何かが掠めた。

女の長い金髪であると気づくのに、時間はかからなかった。

「天啓齋す導きの金鷄」の効果で、明と一成、アサシンは動けない。セイバーはライダーにかかっている——その隙を縫い、シグマ・アスガードが大回りに迫る。

「マスター！逃げろ!!」

セイバーの絶叫も、明たちの行動を可能にすることはできなかつた。強化の魔術で一跳びに迫る彼女が狙っていたのは明ではなく、一成だった。

一成たち左斜め前方から黒い弾丸が飛来する。明も使っていた、北欧の呪い「ガンド撃ち」。明のそれは物理的な破壊力を伴う弾丸と化していたが、シグマのそれも同様だった。

明よりも少し奥に立っていた一成に向け、器用に明をさけたガンドの乱れ打ちが、群れを成して襲い掛かる。

「——!!」

顔さえも動かさずとも一成の視覚は、黒い凶器を認識している。しかし体が全く動かない。脳裏をよぎるのはこの眼を使うことだが——間に合わない。

「貴方はメインじゃないから、死体でいいわ」

場違いに涼やかな女の声。蜂の巣にされようとしたその刹那、彼の目の前で派手な襦袢が翻った。振るわれるは彼の中でも一等の盗品である黄金の太刀。黒い弾丸はもの見事に一つの漏らしもなく弾かれて、地面を抉り取るだけで終わった。

しかし刀の主はそれでは飽き足らず、太刀を握りしめなりふり構わず、シグマを屠るべく走る。

「……テメェ!!」

「……ッ、死にかけなのにしぶといわねえ!!」

敏捷Aを誇る彼ではあるが、今やその身のこなしは無残なものだった。死にも狂いの一撃は、引いたシグマのスカート割くだけにすぎなかった。その上追撃に移れず、大量の血を吐いてその場に片膝をつく有様だった。

しかし警戒したシグマはそれ以上迫っては来ず、あっさり引いた。一体何をしに来たのか、と一成は訝ったが、それよりもアサシンの様子が危機的だった。

ライダーの宝具の影響下において、アサシンがかろうじて行動できたのはスキル「反骨の相」のおかげである。権威・権力に抗うモノの特性により、神威の具現である宝具に抵抗できている。

だが元々ライダーの力の方が上回っていること、さらにアサシンはもう致命傷を受けている——霊核を破壊されたところを令呪で無理につなぎ合わせ、かろうじて現界を続けている状態なのだ。太刀を杖替わりにしやがみ込み、ごほごほとむせている。

「おい、一成、こりゃあまじでやべーぜ……!、おい、あれ!」

アサシンが蒼い顔をさらに蒼白にして、セイバーとライダーの戦いの先を指さした。幸か不幸か、一成はライダーたちの方向を向いていた為に、アサシンの示す方向は視界内にあった。

そして見た光景に、思わず目を疑った。

セイバーとライダーの攻防は続いている。ライダーがあくまで様

子を伺う風で攻撃よりも防御を優先しているため、今一つ攻めきれずセイバーは苛立ちを募らせていた。

ライダーの動きは読めないことはないが、セイバーの体術と比べるの一つ一つが極めて正確で正当であり、正しい動きをどこまでも追及した姿だった。

セイバーの体術である合気道の原型は、精神修養の為の武道ではなくひたすら殺害のために特化した技であり、ライダーのそれとは根本が違う。

背後では、アサシンがライダーの宝具に逆らい行動したことをセイバーは察している。セイバーとライダーの戦う最中、一成たちに迫ったシグマという女魔術師はアサシンに撃退され、再び距離を取ったのだが――

「!?」  
ライダーの向こう――教会の礼拝堂入り口。そこで斃れていたはずのハルカが二本の足で立っており、その片腕には明が抱えられていた。

「明!」  
セイバーはシグマの接近を目の端でとらえていた。アサシンがなんとか彼女を追い払ったのだが、そちらに必死になっている間に、背後からハルカが硬直している明を攫って行ったのだ。

最初からシグマの攻撃は、本当の目的である明を奪うための囮でしかなかった。

明を殺さなかった、ということはまだ何かしら生かす意味があるのだらうとセイバーは理解している。しかし、敵の手にマスターがいることそのものが許し難い。

魔力が全快ではないことは承知だが、即刻目の前の敵を焼き果たすべく神秘を現す。

「そこをどけエ!! 『全て翻し――』」

ライダーは避ける、もしくは己も攻撃に転じる様子を見せない。予想される真名からすれば、ライダーもまたセイバーと似た宝具を持つ

ていてしかるべきだが、剣の姿はどこにもない——その時、セイバーが視界の端に奇妙なものをとらえた。

月光か星のきらめきを反射して輝く、一筋の銀色。光輝く鳥とは別の光線。

「セイバー、後ろー！」

水中から出てようやく酸素を得たように、明が叫んだ。それとほぼ同時に、セイバーの直感と背後の空気の変化が瞬時に危機を知らせた。振り向くよりも早く、直感に任せて右手へと横っ飛びに回避した。

セイバーの服の袖を掠めたものは鋭い弓矢——否、それは剣だった。

「——ッ、!?!」

紙一重の差で標的を撃ち殺し損ねた剣は、勢いをそのまま教会の石畳へと叩きつけた。地を砕き深々と突き刺さったそれは、激突の振動で今も僅かに震えている。

頭椎の太刀——柄頭が塊状の剣。

その刀身も長方形であり、セイバーの剣のように刀身が菖蒲の葉状になっていることもなく、日本刀のように反りがあるものでもない、およそ人を斬るのに向いているとは思えない不可思議な剣だった。刀身には神代文字が連ねて刻まれている。

ライダーの手を離れた状態で襲い掛かってきた剣だったため、セイバーは警戒して後方に跳んで距離を取った。

悠々とその剣に歩み寄り、引き抜いたのは勿論ライダーだ。長方形の刀身を肩に担ぐ姿はまるで一枚の絵のように似合っている。

「この剣の便利なところはな、公が持たずとも自律しているところだな」

セイバーは人知れず息を呑んだ。第一の宝具を見た時にも「あの英霊であれば、何故あの剣を携えていないのか」と不審に思っていた。その剣は、セイバーの剣と同じく神代三剣の一——この国の始まりに

して、この国を開闢ひらいた剣。

ライダーはセイバーに背を向けて泰然と距離をおいてから、やおら振り返る。

「——さて、流石に素手ではお前に勝つことは難しいと見た」

その顔は間違いなく笑っていた。これまでは小手調べでしかなかったと言わんばかりの、壮絶な殺意がセイバーに向けられる。なぜ今まであの剣を使わなかったのか、その理由を考える暇はない。

公に逆らう者は、朝敵である——白金が笑う。

「これくらいで撃ち殺されてくれるなよ——ヤマトタケル大和最強」

片手で振り上げられた剣に、景色が歪んで見えるほどの濃密な魔力が収斂されていく。煮詰められた白く輝く魔力は、あまりにも膨大に過ぎる。もし魔術師ではない一般人がこの場にいた場合に、圧力のみに卒倒しかねない。

——宝具というものはどの英雄のものでも究極の一、とびぬけた限定魔術礼装である。その宝具の中においても、ライダーのそれは群を抜いているに違いない。

それほどの神威が、あの剣には内包されている。セイバーは白い光、ライダーの向こうにいる、ハルカに抱えられた明を見据えた。

「明！宝具を使うぞ！」

セイバーは己が剣の蒸気の覆いを解き放つ。白銀の刀身がそれ自身で耀きを放ち、叢雲状の波紋に合わせて強く淡く周囲を照らす。

ライダーの剣は強烈な魔力風を纏いながら、火花を散らし始めている——強い火花程度だったはずの光は徐々に雷のごとき轟音を放ち始める。

だが、セイバーの第一の宝具は最強の幻想返しファンタジックリターンの剣だ。特に今ライダーが放とうとしている一閃のように、一撃がはつきりしている宝具に対して最も効率的に働く。



(しかし——)

セイバーには一抹の不安があった。万全を期すならば天叢雲剣を使うべきだが、ここは市街地の上に、そもそもそちらを使えるほどに魔力が戻っていない。苦虫をかみつぶしながらも、今は草薙が最善である。

そして、早躊躇いを許さぬ段階にお互いが踏み入っていた。

今や一成たちだけでなくシグマやハルカも、吹き飛ばされないようにとどまることが精一杯の状態だ。

雷の白光と、炎を纏う白光が膨れ上がっていく。双方の発する膨大な魔力風は教会の石畳、草花をはぎ取り木々さえも激しく揺さぶっている。発する熱量は真冬を忘れさせ、世界の風景を変えて白一色へ染まっていく。

白金のライダーは笑い謳う。「開闢ふつのみたまのせし——」

白銀のセイバーは強く叫ぶ。「全くさなぎのて翻し——」

蒸気の剣と両刃の剣が交錯する。この国を開闢ひらいた幻想殺しの剣と最強の幻想返し返しの剣が今、その真価を發揮する。

「断絶つるの剣神ぎ——!!」

「焰つるの剣ぎ——!!」

白い極光と白い極光が、世界を覆う。二騎は白い光の柱を夜に突き立てた。セイバーはありつただけの魔力を注ぎ、白炎は力を増している。日本最強の剣は、今までバーサーカーもキャスターをも葬り去った剣である。「断絶剣」とされるかの天皇の一撃を撥ねかえすことができなければ、剣はセイバーを断ち切るであろう。絶たれたものは、おそらく二度と繋がるまい。

「……!」

宝具の光が炸裂する溢れる中、セイバーは耳を劈くような、何か

途切れるような音を聞いた。  
もし擬音でたとえるならば——ふつ、と。

12月7日⑧ 彷徨う戦線

どれくらい経っただろうか。光が消え失せて、世界は闇に戻る。

荒れ狂う暴風は花々を跡形もなく消し飛ばしていた。魔力が激突したであろう場所は石畳が破壊され、セイバーとライダーの光線が激突した中間地点は地面が抉れ——さながらクレーターの様相を呈している。言うまでもなく、最早庭は原型を失っている。

薄く煙の舞い上がり、月の明かりがさす教会の庭には、セイバーとライダーが向かい合って立っている。セイバーは肩で息をしているが、烈しい魔力消費を鑑みればその様子に違和感はない。

しかしライダーの方は少々異常である。宝具は通常戦闘をはるかに上回る魔力を消費するはずだが、彼は剣を肩に乗せて、宝具を解放する前と少しも変わらない様子を見せている。

それでも宝具は見事相殺されたようで、セイバーの後ろにいるアサシンと一成には傷一つない。だが相殺できても、草薙剣は通用しなかった。本来であれば、これは完璧に相手の宝具を跳ね返す効果を発揮するはずなのだ。

「ライダー！私は目的は果たしたわ！セイバーを倒すんでしょ！」

教会の扉の前で、静かにしかし明を離そうとしないハルカを侍らせて囃し立てているのはシグマだった。ハルカの腕に抱えられた明はぐったりと脱力して動かない。魔力は伝わっているから殺されてはいないことがセイバーにはわかるが、返事がないため気を失っているのだろう。明を助けなくては、とセイバーは逸るが、目の前のライダーを放っておくことはできなかった。

「全く小うるさい草だ——ふむ、しかし、うむ」

すう、とライダーの手が掲げられる。宝具を同時に二つ使用することとはできないのか、ライダーの頭上を浮遊する宝具・八咫鳥——『天啓齋す導きの金鷄』の拘束は既に途切れている。だが既に現界していることがやつとのアサシンは動けず、本来の俊敏さを以てライダーの脇をすり抜けていくことは到底不可能だった。

轟、と風が吹き荒れた。どういいう理屈か下から吹き上げる風に、一同は空を振り仰いだ。それと同時に、あまりの眩さに一瞬視界を奪われる。

——元々このライダーは一体どこから来たのか、何に乗っていたのか。それを思い返せば、空を駆る奇妙なモノに思い当たる。

それはかつて高天原と葦原国を渡した鳥。世界の裏側と物理法則の世を繋ぐ船。

ライダーが愉快げな声をにじませると共に、空から音もなく滑走路も必要とせず、垂直に何かが舞い降りた。それは純白に光り煌めく鳥——否、鳥と言うには機械的に過ぎる。

鷹の形を模した飛行艇が舞い降り、ライダーがそれに飛び乗ると同時に駆け寄ってきたシグマとハルカも、船上へと引き上げられた。

「——お前も空くらい駆けられるであろう?」

ライダーがまるで悪童のように笑った瞬間、鳥船は猛烈な風を吹き上げて暗闇の空高く舞い上がった。空の人となったライダーたちを見上げ、宝具の影響から解放された一成が声を張り上げた。

「確氷!!」

「俺は追いかける」

セイバーの言葉は端的だったが、その声音が焦燥に満ちていることは誰にでもわかった。彼は勢いよく地を蹴りつけたが、その足が完全に地を離れる直前、必死の速さで近寄ったアサシンが腕をセイバーの捉えた。いつもは飄々とした態度の彼も、この今は真剣だった。

「バカ、殺すことだけが目的ならすぐにでも、ここで殺せただろ! 連れてったってこたあすぐ殺すつもりはないんだよ! わかってるだろ!」  
「だが待ったところで手があるのか? 事態が好転するのか? ないだろう」

セイバーは素早くアサシンの手を振り払うと、助走をつけて一気に空へと舞いあがった。夜の帳に一点、星——むしろ恒星の如き輝きを放つ鳥へと向かって一直線に飛んでいく。

一成は勢いよくアサシンに振り返った。彼がもう命の長くないこ

とは明白で、現在進行形で霊核が壊された激痛にさいなまれている。それでも、大西山と同様に一成は叫んだ。

「アサシン！あいつらを追いかけるぞ！」

暗殺者はそれに当然のごとく、笑って答える。「……あのアホ皇子が!!乗リかかった船だ、行くぞ！」

アサシンは一成を宝具の中に入れると、彼自身も最後の力を振り絞って恒星に追いつくべく、夜陰に紛れた。

\*

碓氷邸には、キリエと悟だけが残されていた。キリエはリビングのソファに座って何かを考え込んでおり、悟は夕食後の皿洗いを終えて手持無沙汰に食堂のテーブルに座っていた。

空気は酷く重かった。元々悟とキリエは敵同士、ともすればキリエは悟を殺していた関係で、一成や明の仲介なしに仲良く話をする間柄ではない。

とはいえ、悟はあのキャスターのマスターがキリエ——自分の娘と近い年頃の少女がそのような事をしたとは信じ切れていなかった。しかし、この戦争——魔術師の戦いは、悟の常識を遥かに超えたものだということも、確かであった。

キリエと無理に話そうとする必要はない。悟は腰を上げ、自分とキリエの分の茶を入れた。食堂から中央ホールを横切り、リビングのテーブルに緑茶を置いた。特に言葉をかけず、そのまま立ち去ろうとしたのだが、彼女の表情が気にかかった。

ちよこんと行儀よく膝をそろえて座っているが、両手は腿の上で固く握りしめられており、眼はテーブルの一点をじっと見つめていた。

「……あの、キリエ「ちょっと出かけてくるわ」

悟の声を遮り、キリエは勢いよく立ち上がった。悟など目に入っていないように、真っ直ぐホールを突っ切って玄関へと向かう。

「……ちよ、キリエさん、どこへ!？」

「カズナリ・ツチミカドたちの後を追うわ」

「!? 食事の時に行かないって言ってたじゃないですか。事情はよくわからなないけど、自分は危ないって」

食事の時、キリエははつきりと「行かない」と告げていた。その時はどこか「行きたくない」という雰囲気も感じ取れたのだが、今はその空気は微塵もない。

「今出ていくのは危ないわね。主のアキラ・ウスイが不在とはいえ、ここセカンドオーナーの結界は伊達じゃないわ。サーヴァントの襲撃も一騎程度ならしばらく持ちこたえるでしょうし」

「じゃあなんで」

「私は、オユウに会いたい」

キリエはその時、初めて悟へと振り返った。その手は僅かに震えているが、紅い瞳は明確な意思を示していた。

「聖杯戦争には負けて、私には意味が無くなってしまったけれど——意味が無くなったまま、終わるのは癪なのよ」

キリエの話す言葉の真意は、悟にはわからない。それでも彼女が、彼女としてあるために必要なことをしようとしていることはわかった。

悟は魔術師でもなんでもない、彼女についていっても足手まといにしかない。しかし、死地に向かうであろう彼女を送り出すだけではないのかと、彼は煩悶していた。

悟の反応を待たず身を翻したキリエだったが、その瞬間体が震えた。キリエだけでなく悟も異変を感じた。

卑近に例えるなら極寒の地で着こんでいたコートを、無理やりはぎ取られたような感覚。今まで自分たちを護っていた何かが、烈しく損傷されたような。

悟よりも何が起こったかを正確に理解したキリエは、自分の感覚を疑い玄関から飛び出した。

「——まさか、碓氷はこの管理者なのよ？その結界がこんなに易々と——」

「キリエさん！」

キリエにつられて、悟も玄関から飛び出した。二人の目の前には、寒々しい碓氷邸の庭。そして庭の門の内側に、二人の影を見た。片方は背の高く引き締まった体つきの男で、剣のようなものを持っている。もう片方は年若い女で、こちらも細い剣のようなものを持っている。

——神内御雄と、神内美琴。教会でのカソック・修道服と、変わらぬ姿を見せている。

「ッ、オユウにミコト・ジンナイ……！」

「し、知り合いなんですか」

「アキラ・ウスイたちが神父が怪しいとか話をしていましたでしょう。その神父とその娘よ」

悟はちらりとキリエを見下ろしたが、彼女の視線は彼等と——男が持つ剣に集中していた。

「断絶剣……!!どうやったのかは知らないけれど、あなた、私が呼ぼうとしたモノを呼んだのね——!!」

キリエが断絶剣と呼んだ、神父が持っている剣は神父に握られているのではなく、手のすぐ近くに浮いていた。そのうえ、刀身が長方形という人を斬るものとは思えない形状をしていた。

本来土地の管理者である碓氷の家に、碓氷の者の許可なく立ち入れはしない。だが断絶の概念武装である剣——物質化した奇跡により、屋敷に張られている結界は一刀両断にされているのだ。キリエの目には、無残に引きちぎられた結界跡がはっきりと捉えられていた。

件の浮いている断絶剣は、何者かに操られているかのように神父から離れると空高く吸い込まれていった。

己が娘を従えた神父——神内御雄は、ゆつたりとした足取りで石畳

を踏む。

「キリエスフィール・フォン・アインツベルン。聖杯の娘。聖杯戦争が始まってからまともに話すのはこれが初めてだな」

神父とキリエは、二十メートル離れて対峙している。吐く息が白いほどの寒さ、かつキリエは白のワンピースしか身に着けていない。にも拘らず、彼女は既にそれを感じていなかった。

「……ええ、そうね。さっきの剣を見て、仮説だけれど色々合点がいったわ。何故私がライダーを召喚できなかったのかはわからないけれど、概ねそのせいでおかしくなったのね、私と霊器盤は」

神父がライダーこと、初めにキリエが召喚しようとしたサーヴァントを呼んだことは先の剣で知れた。しかしそれを召喚するには、神父には縁がない。キリエが触媒に使った剣は神社に返納しているが、魔術協会の力の及びにくい日本ではアインツベルンさえ持ち出しに苦勞した代物である。神父がこの短期間に持ち出せるとは思えない。

にも拘らず召喚できるということは、ライダーは既に召喚に  
応じていたということである。

召喚応じてはいたが、現界を果たしていないという本来ならあり得ない状態——それが霊器盤とキリエに影響を及ぼした。

「おかしいと思っはいたわ。もしライダー、バーサーカー、アーチャー、キャスターの四騎が消滅していたのなら、私がこんなに元気に歩き回れているわけないもの」

キリエはこの春日の聖杯の為に作られた小聖杯第一号である。何度も改造を重ねた末に春日の大聖杯用の小聖杯としての完成度は随一だが、小聖杯そのものの完成度はかつての第五次聖杯戦争の小聖杯に勝っているとはいきれない。

四騎のサーヴァントが倒れた時点で、行動は困難になり始めるはずだ。だが、キリエはまだそこまでの状態に至っていない。

だが、もしかまだ三騎しか消滅していないとすれば。

「本来、私がサーヴァントの数を間違えるなんてありえないのだけれど、ライダーのイレギュラーと春日の霊器盤の仕組みを考えればわか



らないこともないわ」

サーヴァントの現界を確認するための道具である霊器盤。主に所有するのは監督役たる教会の第八秘蹟会所属の神父・修道女のみで、魔術師である者は関与しない。

だがそれは冬木の場合の話だ。この聖杯模倣の計画は神父が草創期から絡んでおり、神父は暗にアインツベルンの陣営であるために、その仕組みは冬木のものから改変を加えている。

霊器盤を単なるサーヴァント感知道具で終わらせるのではなく、キリエ（小聖杯）の状態をも正確に把握できる機能を付加させた通信具に変えた。聖杯戦争が進み、キリエが不自由になった場合やその他、万が一にそなえ神父に補助をさせようという試みである。

また、キリエは聖杯である為に消滅したサーヴァントの数は把握できず、現界したサーヴァントの数はわからない。キリエと霊器盤を繋げサーヴァントの召喚自体も把握させようとしたためだが、それは逆に——霊器盤が何かで異変をきたせば、キリエ自身にも影響を及ぼすリスクを孕んでいた。

まさか霊器盤自体が異変を起こすことなどないだろうと、そのリスクは捨て置かれていたのだが——。

「何故ライダーがそんな状態になったのかまではわからないけれど——今だ続く皇紀二千六百年の王朝、開闢の帝。まさに始まりの地においてその英霊を呼び出す。魔術師としては一流とはいえないあなたが、それを使いこなせると思っっているのかしら」

「その言葉はそのままお前アインツベルンに返そう、キリエスフィール。大聖杯が他の国にある聖杯戦争ならばまだしも、よりによってこの国でアレを使役しようとはな」

キリエは悟より前に進み出て、素早く周囲を伺った。件のサーヴァントの気配はどこにもない。ここに呼ぶ気はないのだろうか、それとも明や一成の方へ向かわせているのだろうか。そして神父の傍にいるのは養女の美琴のみ。

彼女の人格までは知らないが、どのような魔術特性を持つかは知っている。

サーヴァントを呼ばれては方に一つの勝ち目もないが、神父と美琴だけならば。今まさに、ライダーをセイバー達が相手し、かつハルカもそちらにいるのならば、キリエはこの二人を下せばいい。

陰陽術は、キリエにとっていわば借り物である。キリエの母にあたるホムンクルスに精を与えた陰陽師が所持した魔術刻印を、剥がして使用してただけだ。

呪術に近い性質を持つ陰陽術は対魔力を無視できるため、大西山ではそれを駆使しサーヴァントと大立ちまわりを演じたが、キリエの本領は千年を数える大家の錬金術だ。そして当然だが、神父と修道女はサーヴァントではない。

芯まで凍るような、厳寒の深夜が熱気を帯びる。無風にも拘らず、キリエの黒髪がふわりと浮いた。

「Shape 形骸 i s t 生命 l e b e n を宿せ!!」

わずか二小節の詠唱で、キリエの背後上空に細い糸——彼女の髪で精緻に編まれた烏が三羽出現した。一本一本に濃い魔力の込められた髪から生まれた使い魔は、それぞれ両翼を広げた状態で一メートル以上はある。神父は鷹揚とした姿勢を崩さないが、代わりに受けて立つと美琴は剣——黒鍵を青眼に構えて進み出る。

「あなたが アインツベルン 私 に話を持ちかける時、私たちはあなたの頭の中までのぞいたわ。だから、貴方の力も、ミコトの力も知っているわ」

アインツベルンは、ただの神父をそのまま信じるほど愚かではない。キリエの言う通り、神父はその能力も望みも、協力を申し出る際に全て吐いている。だからこそ、尚更キリエには謎であった。今、神父たちの目的は間違いなく聖杯たるキリエ。

だがかつて神父の願いは、聖杯戦争の開催そのものだったはずなのだ。

「それでも私と戦うつもりかしら」

「ああ。私の願いには、おまえ 聖杯が必要だ。キリエスフィール」

「——ッ」

神父は、敵だった。今まで、白亜の城から一步も外に出ず生きてきたキリエにとって、アインツベルン以外の唯一であった神父。聖杯を

得るために協力してくれる、味方だと信じてきた男が本当に自分の敵であると、キリエははつきりと認識した。

息が苦しい。その顔も低い声音も、城で聞いていた時となら変わりはしないのに、千里の隔たりを感じる。

キリエはサーヴァントを失ったのに、聖杯を得られないのに、今更自分は何故戦おうとしているのか。大人しく捕まって、聖杯になってしまえばいいのではないか。

「何も知らないまんまお前は消えていいのか」

わからない。何故、自分が今戦おうとしているのか、キリエにはわからない。それでも、黙って聖杯になる事を肯わない何かがある。

「細かいことは後で考えるわ！オユウ、あなたが私を欲するように、私もあなたに聞きたいことが山のようにあるの！」

「お互いに、勝てればの話だな」

薄氷を踏むような沈黙。場を満たしているのは闘志か殺意か。完全に蚊帳の外に置かれている悟でも、この庭が死地になりつつあることは察知できた。それとほぼ同時に、悟へ振り向かぬままキリエがつぶやいた。

「——サトル・ヤマウチ、屋敷の奥に戻りなさい」

「え……」

「死ぬわよ」

怜悯なナイフのような言葉が届く方が速いか、修道女の刃が速いか。庭園に、爆音が轟いた。

\*

船はそれ自体が恒星であるかのように、寒気満たす夜の帳の中で強く輝きを放っていた。近くで目撃してしまえば、眼底まで眩ませる極光。

『天地渡る岩鳥船の神』——かつて建御雷神が葦原中国平定の為、葦原中国に降臨する際に副使として同行した天鳥船。建御雷神はこの神に乗り込み、降臨したとされる——神霊が船となったモノである。

まだ世界が移り変わっていない時分とはいえ、神代と人代を繋ぐもの。空を舞う鳥船の上で、ライダーは仁王立ちしたまま同乗者を見下ろした。

「さてお前の目的の娘は得たわけだが、聖杯はいなかったな？」

「てつきり一緒に来るかと思っただけけれど、もしかしての方が当たったわけね。そつちは神父がうまくやるでしょう。新・美琴ちゃんもつけてあげたんだから。それよりライダー、絶対来るから、セイバーを頼むわよ」

高速で飛行する船だが、船上は魔力によるフィルターがかけられており地上に立っているのとなんら変わらぬ環境となっている。いつのまにかハルカから明を奪い抱きかかえたシグマは、船の上に坐った状態で文句を言った。

過ぎ去った背後と春日市に灯る街の明かりが見える以外は、眼下には何も無い。天蓋高く浮かぶ月と幽けき星々、それに彼らの船がこの世界のすべてだった。

それでもシグマは下界を睨みつけていた。

「セイバーが来ないわけではないもの」

彼女は見ていた。ハルカを通して、神父を通して、セイバーと明の経緯を。それを見ていれば、シグマに限らず誰だって「セイバーは来る」と理解するだろう。そして彼女は、剣の英霊がその名に恥じぬ強さを持つこと知っている。

アーチャーの神縛りの宝具——ライダーの神性は高すぎて、あの剣を以てしても効果はせいぜい一秒足らずだろうが——を持つアサシンはじきに消える。そうすれば残る敵はセイバーだけ。

「あなたがセイバーを試すのは自由だけど、ちゃんと殺してね」

「そういう結末にはなると思うが、はてさて。神父の願い以上に面白い願いを持つのであれば、公はアレに負けてやるにも吝かではない」

「セイバーの願いは日本最強、他陣営の皆殺しって言ったじゃない」

聞き捨てならないライダーの発言に、シグマは強い口調で言った。このライダー、神父やシグマの味方を気取っているようではあるが、土台が気まぐれな質らしく油断ならない。

「その願い、判りやすいようで甚だ曖昧だとは思わぬか。何を以て日本最強とするのか。あれは此度の六騎に勝ったくらいで最強を嘯くのか？あれの願いは、最強とは関係のないところにあるうよ——最強はただの手段だ」

セイバーの状態——まだ死を迎えていない——を知らずとも、ライダーは確信を以て笑む。

「さて、セイバーの願いを見定めるにしても、やはり世界において戦いなるものは極限らしい。本心か、在り方か、欲望か。極限に至れば、普段はみえぬそれらこそ鮮明になる。公くらいになれば平静であつてもわかるのだが、極限ではないとわからぬあたり御雄は修行不足だ」

「何の修行よ、何の」

「言うまでもない。道楽だ」

飄々と笑うライダーに対し、シグマは冷静にツツコミをいれた。彼女として、ライダーの言っていることはわかるが、シグマのなしていることは娯楽ではなくて己の道であり魔導の一環でもあるのだ。

——けど、神父のアレは趣味……道楽ね。信仰も魔導にも、あの男は興味なんて無いもの。

ライダーは神父のそれを道楽と読んだが、趣味と道楽の差は何か。それをシグマは以前に聞いていた。曰く、簡単に言ってしまうば趣味は軽く道楽は重く、趣味は有益で道楽は有害で、趣味は己がそれから自由であり、道楽は己がそれに縛られていると。

ライダーの言を受けずとも「女道楽、酒道楽、博打道楽」という言

葉が表すように、趣味と比べて道楽には身を滅ぼすニュアンスが含まれる。

「お前とて道楽神父を笑えぬぞ？シグマというその人格、一体どうやって培われたことやらな？」

「身を滅ぼすことが道楽の一条条件だとするのなら、魔術だって道楽たりうるわ」

「お前にとってはそうであろうよ、草」

身を滅ぼすことになっても辞めずにはいられないという意味では、シグマにとって魔導は道楽だ。魔導なくして彼女は何者でもないままに人生を終えただろう。ただ魔導の道を歩んでも、別の意味で彼女は何者でもない。

そよぐ夜風に吹かれながら、ライダーは振り返った。眼下には春日市のかそけき明かり、天上には白々とした月のみがある。

「さて、神父のようなわかりやすい娯楽に身を投じるのも悪くはない。神秘が地に堕ちた現代とて、人は人であることに変わらない。いつでも楽しいものだ」

自律する宝具である彼の頭椎の太刀は、今は使い手の右手に収まっている。それを虚空の闇に突出して告げる。

「思えばお前の魂は白鳥であったな。ならば空くらい駆けられよう」  
追撃するは凜冽なる声。焦燥に駆られて掠れたソレが、夜の帳を破く。ライダーと同じく空を駆ける力を持ち、同じく神の思惑によって生まれた英雄が、船の背後に迫っている。

「ライダーアアア!!」

「——来たか」

ライダーの従えていた鳥の姿が消え失せ、ライダーの体に吸い込まれた。

そして開闢の帝は、迷うことなく神舟から飛び降りていた。

12月7日⑨ イマジナリ・ドライブ

轟々と風が通り過ぎる音だけが世界だった。自分が寝そべっているのは、何か金属のようなものの上。

いや、それにしても妙に暖かく、心地の良いところだ——しかし、突如激しいノイズが脳裏に奔り、明は意識を覚醒させた。真っ先に眼に入ってきたものは、月。

それは地上から見上げるよりもずっと大きい。つまり、今明は何かに乗って空を飛んでいるのだ。

「……ッ!？」

明は反射的に床を転がって今の場所から離れ、膝をついて起き上がった。月光の元に立っているのは、美しい金糸、白い肌。昼間よりもなお立ち姿に凄味を漂わせる——シグマ・アスガード。

「……弾かれちゃった?」

船の全体は白く輝き、月明かりでさえ不要なほどの明るさを持っている。

記憶が戻ってきて、シグマに操られているハルカにとらわれ、腹に一撃加えられて気絶していたことを思い出した。腹部の鈍痛はその名残であろう。

ふらふらと立ち上がったはいいものの、その瞬間にここが地上から遥か高所であることに明は気づいた。この船——ライダーの宝具の形は鳥であり、戦艦や客船のように人が内部に入るカタチのものではない。つまり眼を他にやれば、暗闇ではつきりと視認できるわけではないが、ここが高所であると実感できてしまうのだ。

「そんなに嫌わなくてもいいじゃない、明ちゃん」

「シグマ・アスガード……あなた、何者なの?」

明の声が震えているのは、目の前の魔術師に対する恐怖ではなく——この場所のせいだった。極力脇見をせず、シグマだけを見るようにする。同時にシグマの後方に控えて微動だにしないハルカ・エーデル

フェルトに注意を払った。

「何者だなんてさびしいわ。私と貴方、赤の他人じゃないのに」

「……もしかして、くらいにしか思っていなかったけど……」

明に確信があったわけではなかった。しかし、そのファミリーネームには聞き覚えがあった。

「……アスガード。アースガルド。かつて分裂する前は、北歐神代の遺物を遺し続ける大家」

その言葉を聞いて、シグマは大仰に手を広げた。「ちゃんとわかっているじゃない。私とあなたの大本は同じなの。分裂した大家で、私の家、アスガードが北欧に残って、今は確氷となったあなたの家は日本に来たのよ」

私も聖杯戦争が始まるまでちゃんとあなたのことは知らなかったのだけど、とシグマは軽く言いながら立ち上がった。紺色のロングスカートを捌いて、あくまで華麗な所作である。

「殺すでもなく、なんで私を狙うの」

「私の魔術的な問題よ。生きていたほうがいいの——あら、戦う気かしら」

シグマが手練れの魔術師であることは、明も察している。そして大本が自分と同じ魔術師なのだから、得意とする魔術も見当がつく。それは逆に、明の手の内も読まれやすいということだが。

「貴方自身が戦うの？その傀儡にしたハルカ・エーデルフェルトじゃなくて」

「ハルカちゃんを操ったことが私のすべてと思わない方がいいわよ。それだけなら、私は封印指定なんてされないで、わざわざ協会の眼を避けてここまでこなかったもの」

封印指定とは魔術協会が判断した、希少能力を持つ魔術師に与えられる称号である。対象は「一代限り」であり、「学問では習得できない」もの。つまり、その魔術師の死と共に失われ、他の手段では再現できないものである。

その希少能力を永遠に保存するために、対象の魔術師を「貴重品」と



して優遇し、「保護」する。しかしそれは名目にすぎず、実際は一生涯幽閉し、その能力が維持された状態で保存する。言つてしまえば、ホルマリン漬けの標本にして飾るのと変わらない。

封印指定されると、研究を続け次の段階を目指すこと（根源に至るための研鑽を積むこと）ができない。魔術師である以上、次の段階を目指せないのでは魔術師である意味がない。よって、封印指定を受けた魔術師は協会から失踪し、身を隠すことになる。

逃亡しても、協会はその魔術師が神秘を一般に漏えいすることをしなければ放置する。対象がさらにその術を極めるのであれば、魔術のサンプルとして言うことはないからだ。

だが、逃亡し研究を続ける魔術師が神秘を漏らさず研究しきることもない。よって聖堂教会による異端狩りが行われて貴重な研究が灰にならないよう、「神秘の秘匿」「魔術師による魔術犯罪の隠蔽」のために、最終的にはエージェントを派遣することになる。

確かにここ日本は、時計塔から遠く離れた地であり協会の眼がとどきにくい。何かを画策するには適した地であるといえる。

しかしシグマが封印指定であると知ったところで、状況をどうにかできるわけではない。明は腰を沈め、いつでも対応できるように構える。

今時点ではシグマは明を殺す気はないのだろう。だが、この船はそのうちシグマたちの拠点へと向かうに違いなく、明は背筋を這いあがる悪寒を止めることができなかつた。

ただここから逃げるにしても——眼下に映るは、米粒のような微かな街の明かり。ここから飛び降りるには重力操作に頼ることとなるが、ここは余りにも高すぎて相当高度な技術を求められる。

かつ、明は高さに竦む。夜ゆえに高さが分かりにくいのだが、夜ゆえに闇は奈落の底まで続いているようにも思えた。

——セイバーは？

セイバーは間違いなく生きている。彼がマスターである自分を放っておくはずはない。明は視線だけそれとなく深い闇に投げかけてみたが、光も何も視えはしなかつた。

「セイバーなら、今頃ライダーと戦っているはずよ。だから、あんまり助けを期待しない方がいいわ」

「……っ」

明はセイバーの力を良く知っている。彼は戦闘力にかけては無二の強さを誇るが、決して無敵ではない。

重い緊迫感が船の上に漂っている——そう感じているのは明だけだが、彼女はあることに気づいた。鳥船はシグマらの拠点へ向かっているのだろうと思っていたのだが、様子がおかしい。どこに進んでいくわけでもなく、同じ場所を旋回しているように思えるのだ。

思えば、この宝具の持ち主であるライダーは不在である。流石にこれをシグマが操縦しているとは思えない。とすれば、この船はライダーが戻ってくるのを待っているのだろうか。

シグマやハルカから距離を取ったまま、明は念話でセイバーに状況を聞こうとした。だが彼も必死の戦闘を重ねているのか、明の呼びかけに大丈夫としか返してくれなかった。

「そんなに警戒しないで。殺さないって言ってるじゃない。私、明ちゃんのことには結構気に入っているの」

全くうれしくない言葉を吐きながら、シグマは変わらずに笑っていた。

「ハルカちゃんや神父から聞いているのよ、あなたのこと。折角魔術師として優れた素質を持っているのに、中身が追い付いていない、合っていないの。その軋轢に苦しみながら、それでも全てを捨てきれない中途半端な女の子。ま、その不安定さは、虚数使いとしての力を育む上では最も優れているかもしれないけどね」

明はしかとシグマを見つめつつ、自らの記憶を掘って思い出そうとしていた。確氷は日本という遠く離れた土地に馴染み、元本家のスウェーデンに絡むことはもうほとんどない。

しかし大本の家が、神代から何の魔術をもつぱらにしてきたかを知っている。

北欧の降霊術セイド。ヴォルヴァと呼ばれる巫女によって成される神落とし。けれど、この業そのものは歴代に伝授されるもので、一

代限りで再現不可能の業ではない。ならばシグマが封印指定たる理由は、他にあることになる。

今のところ、シグマに敵意は見えない——否、今まで彼女は一度も明に対してそのようなものを見せたことはないのだが。

「アスガード……あなた、ハルカ・エーデルフェルトとの関係は？」  
「？関係なんてないわよ？封印指定が鬱陶しくてこっちに来ちゃったけど、元は北欧で魔導の実家もそこだから、時計塔にツテがあるの。そこから聖杯戦争の話も聞いたし、ハルカ・エーデルフェルトが派遣されることを知ってそれだけ」

日本の英霊しか呼ばれないという聖杯戦争ならば、召喚に使う触媒も日本で調達すべきであり、そもそも召喚自体は大聖杯のある土地でしかできないのだから——来日した時のハルカ・エーデルフェルトは身一つで、血縁はない。持っていたものは戦争用の礼装以外は令呪だけ。

ハルカを襲撃してその身を奪ったシグマは、ハルカを意のままにあやつりランサーを召喚させ影から聖杯戦争に加わっていた。ハルカの体そのものは死んでいない——死んでいれば令呪が大聖杯に回収されてしまう——ため、傍から見てハルカ・エーデルフェルトは正しくマスターにしか見えなかったのだ。

「記憶を読んで、かつてのハルカちゃんそのものみたいに振舞わせてたつもりだったのだけれど——神父とハルカちゃんが古い知り合いだったことからぼろが出てしまったわね」

笑うシグマだが、明は全く笑えない。明は彼女が呑気に語る内容から、シグマの魔術の程を考察しているが納得がいかない。

結局本物のハルカ・エーデルフェルトがどのような人物であるのか明にはわからずじまいであったのだが、彼とて戦争に相応しいとして送られてきた人物である。腕の立つ魔術師であることは想像に難くない。

元々魔力を帯びたモノへの干渉は難しいというのに、一流の魔術師を生かしたまま操れるということは、高位の洗脳か催眠の使い手か。

しかし碓氷の大本となった大家は、そういった魔術を得意としていたことはない。神落としても関係がないように思える。

「……っ！」

そこまで考えて、明の思考は止まった。シグマが何かを仕掛けるといふ外側の問題ではない、明の内側の問題だ。魔力が吸い出されていく感覚は、セイバーが宝具を使用していることを如実に教える。ライダーとの戦いはどうなっているのか。

明の回復を優先させるためまだ魔力が回復しきっていないセイバーがこれ以上宝具開帳すると、現界自体にも関わってくる。

「あら、セイバーとライダーたちに動きがあつたのかしら。明ちゃんけっこうわかりやすいんだから」

先程も述べたが、この鳥船はライダーを待つかのように美玖川上空を旋回している。そしてセイバーの状態を気に掛ける明は、自分とセイバーの距離がそう遠くない場所にあることを理解した。

おそらく、彼らもこの美玖川周辺で戦っている。明はシグマとの距離を取ろうとするが、退いた分だけ相手も足を進めている。

「聖杯戦争については最初は本当に願いを叶える、根源に至れるほどの代物なのか見定めて食べれるなら食べるつもりだったけれど——碓氷を見つけるとは思っていなかったし、虚数なんて珍しい属性は回収しておくにしくはないし」

「……もしかして、今碓氷の屋敷を襲っているのは」

先程、ライダー襲来直前に感じた衝撃。あれは、明やセイバー自身の不調ではない。

春日の管理者碓氷は、この土地の霊脈を押さえて管理している。そしてその霊脈の結節点があつた碓氷邸であり、その屋敷には碓氷がここに移り住んで以来の結界が張られている。

明が魔術回路に受けた衝撃は、その結界が破壊されたことによるフィードバックである。そこいらの魔術師に破られるほど、この土地に根付いた碓氷の結界は柔ではない。しかしライダーのあの断絶剣をもってすれば話は違う。あの剣は自律宝具の側面もあり、その上ライダーは最初空手で姿を現したではないか。

狙いは何か——聖杯の娘、キリエスフィールか。大西山で彼女を捉えたはいいが、事故で逃がしてしまったのだろうか。

シグマは美しい顔に蕩けた笑みを浮かべたまま、続けた。「それに碓氷は三百年前の大お家騒動で分裂した際に、こっそりと礼装を持ち出したんでしよう——？」

——セイバーを召喚してから数日後、明は父から鍵を送られた。それはある礼装を保管している箱の鍵である。暗に父から使っても構わないと言われているのだが、反面厄介な事柄が多いものだ。それでも魔術師一般から見れば、その礼装は飛びぬけて価値のある遺物——それを知っているということは、実に認めたくないことに本当に明と遠縁であることを物語っていた。

「……あなた、神父と組んでるみたいだけど、叶える願いはどうするの。神父だって願いがあるのに——それとも、魔術の力量では神父よりあなたが圧倒的に上だから、神父も殺すつもり？」

「最初はそれでいこうと思ったけれど、今はわからないわ。殺すかもしれないし、あの願いに尽力するかも。どっちでもおいしいことに気づいたから」

にこやかに笑うシグマ。今のところ、神父と聖杯を巡って不和を起していることはなさそう——神父より優れた魔術師であるが故の余裕か——である。明はセイバーに呼びかけてみたが、返事がない。一体どんな戦闘状態にあるのか気にかかる。

大人しくしていれば、シグマは何もしないかと言われれば否だろう。明が目覚める直前に感じたノイズは、魔術干渉によるものに違いない。碓氷の体質は他家の洗脳・催眠の魔術に対し強い抵抗力を持つ——もしそれがなければ、今頃明はどうなっているかあまり考えたくない。

しかし戦うにしても、ここは明にとってかなり不利な立地である。そもそも高所が苦手な上に、戦うにしては手狭で落下防止の策もない。

ならば飛び降りて逃げることを考えるが、もつと無理だ。明は思う通りの魔術行使ができず失敗し、コンクリート同然の水面に叩きつけ

られるのがオチである。

「殺さない」という言葉は、殺さないだけでそれ以外の全てはする、と言っているも同義である。

高所の強風にあおられたシグマのロングスカートが翻る。「大丈夫、落ちそうになっても助けてあげるから——」

その言葉と同時に現れたのは、刃渡り八十センチから九十センチほどの細長い剣。聖堂教会代行者の武器、黒鍵に酷似している。

柄だけ実体で持っていて、刀身は魔力で練り上げているようだが——「ハッ！」

広くはない船の上にもかからわず、シグマは躊躇することなく黒鍵もどきを掲げて床を蹴った。爆発的な推進力を持っていたが、決して防御できない速さではなかった。

黒鍵の剣は魔力で生成されているから、影の盾で分解し崩すことができる。頭では理解していた。しかし明はそれを実行に移すことができなかった。

空を裂いた細い剣は、何一つ障害に阻まれることなく——やや上方から明の左肩を貫き、そのまま勢いと重力に任せて船の床に明を叩きつけた。

「ぐ、っ——!!」

叩きつけられた衝撃で、一瞬明の身体は跳ね上がった。貫通して床深くまで突きささった剣で、明は標本の虫のごとくに縫い付けられる。急きよ右手に魔力を集め、影を纏わせて剣を掴む。剣の魔力は分解されて霧散したが、立ち上がるよりも早く二本目の黒鍵が右肩を貫き、再度床に明を縫いとめていた。

剣を手に、明を跨いで仁王立ちしているシグマ・アスガード。背後に月光を受け白い光の輪郭を纏う女の姿はあまりにも美しかったが、明の頭の中はそれどころではなかった。爆発的な——セイバーの魔力放出にも似た推進力を使用し、黒鍵を叩きつけてくる戦闘スタイルはあまりにも見覚えがありすぎた。

「あ、なた、それ」

最後に彼女の姿を見たのは、もう十日以上の前の話。神父が教会で、聖杯戦争の開催を告げた時。いつもきびきびと働く、シスターというよりはキャリアウーマン然とした女性。

神内美琴。九州は示現流の使い手たる彼女の戦闘スタイルではないか。

……実を言えば、考えないわけではなかった。神父が明らかな背信を示したということは、彼女も養父やシグマとともに何かを画策していたのではないかと。

ただ明は人を見る力を養えていないなりに、神父よりも美琴に信を置いていた。魔導の徒と教会の信者ということもあり、それに気が合うとは少々言い難かったが——彼女自身は善良で、明になにくれと良くしてくれていた。

自分がずっと欺かれていただけならまだいい。しかしもし彼女が真面目に監督役補佐の役目を全うしようとしていたのにも拘らず、神父とシグマの企みに巻きこまれていたのだとしたら。

明の顔色を察したシグマは、笑っただけだった。さらに増やした黒鍵を、勢いよく明の足にも突き刺そうとしたが、それよりも我に返った明が影で右肩の刃を破壊して上半身を跳ね起こす方が早かった。

起き上がった勢いのまま、シグマの股を潜りぬける形で床を転がり体を反転させて、シグマへ振り返った。すかさず飛んできた豪速の黒鍵を避ける暇はなかったが、魔術なら分解して消し去ればよい。

「Var:jo<sup>影</sup>ki<sup>は</sup>il<sup>盾</sup>pi!!」

魔術回路を高速で回し、虚数の影を盾に展開する。刀身はあつという間に虚数の平面世界へと引きずり込まれて消失する。何故シグマが美琴の魔術だけではなく示現流まで使用できているのか、それが彼女の起源もしくは封印指定の所以なのか。

正直美琴の術だけを使ってくるのであれば、どうにかできるだろう

がそれだけとは思えない。弾幕のように投擲され続ける黒鍵を消し続け、その影の壁を盾にして今のうちに刺す——！明が意を決して地面を蹴った時、全く意図しない声音と衝撃が走った。

「急急如律令——」

「!?!」

この戦争で聞きなれた詠唱。しかし決して、明と大本を同じくするシグマが口にするはずはない過程。明は反射的に急停止して横に跳ぼうとしたが、それよりも黒鍵が飛ぶ方が圧倒的に速かった。陰陽術の工程を経た黒鍵が、易々と影の壁を突き破る！

端からシグマは明を殺す気はないのだから首や心臓は狙っていないが、それでも爆速の黒鍵は、明の鎖骨下に激突してその体を易々と吹き飛ばした。息がとまるほどの激痛に苛まれながらも、明は今までの投擲がすべて今の一撃のための布石だと理解した。

呪術に近い性質を持つ陰陽術は、自分の身体を組み替えて実行する物理現象。魔力を分解する影は、陰陽術の加護をえた黒鍵を素通しさせていた。

「ぐう……いー」

右肩に激突した黒鍵は、そのまま明の身体を吹き飛ばした。ここが地上であれば、明は痛みを耐えてどうにか受け身を取ればいい。しかし——

「っ、うあああああ!!」

減速することなく、明の身体は光り輝く船から大きく飛び出した。眼下には闇と、月光を反射する水面の漣。遠くに春日駅前周辺の都市の明かりがちらつく。

今の明を襲うものは、既に両肩を貫く激痛でもなく、落下して死亡する恐怖でもなかった。

かつて見逃して喪ってしまったもの。二度と戻らない過去の幻影。泣き叫んで手を伸ばす姉の姿。「明、ごめん、」

思考が漂白されていく。目を開けたら、また大事な何かが失われて



いる恐怖。

大事な人が、己のせいでもどこにもいない。

……ああ、でも、もう私のせいで死ぬ人などいない。

聖杯戦争で戦って死ぬのなら、言い訳にもなる——だけど。

——今、自分から流れ出ている魔力はどこに行っているのだ？

まだ、戦っている。

共に戦うと誓った人が戦っている。

今自分が目を瞑って諦めてしまえば、彼が死ぬ。

——今、セイバーをこのまま死なせるわけにはいかない。この瞬間目を瞑って諦めたら、再び目を開けられたとしても、二度と立ち上がれない気がする。

しかし、明が水面へと落下することはなかった。無重力状態から落下へと移り変わる刹那に、その右手を何者かにつかまれていた。もちろん、シグマにだが。

底なしの闇を眼下に宙ぶらりんの状態で、明は下をみないようにしてシグマを見据えた。

「……何をやる気。私に、それに聖杯に」

「明ちゃんは私の糧に。聖杯は新たな私の糧を集めるために。聖杯が穢れていても、願いが叶うことには変わりはないし」

「聖杯が、穢れている……？」

シグマは予想外、という顔をした。「あら、それも知らなかったの？ そつちに聖杯の娘がいるの……アインツベルン聖杯の娘にとっては第三魔法さえ成就すれば、穢れているようがいなかろうが関係ないものね」

明が彼女の言葉を考察する暇はなかった。シグマは空いた左手で明の頭に触れる。何をしようとしているのかは、直感的に察した。

シグマは今ここで明を殺す気はない——だが、逃がす気もさらさらないとくれば。

強風に髪を煽られたシグマの顔は笑っている。

「Die engine, der Willie」

明の脳裏に閃光が走った。洗脳の魔術だが、碓氷の体質は血縁以外の魔術を強力にレジストする。しかしこれは先程明が寝そべっていた時よりも遥かに強力に、魔力を込めた干渉——！

「……ッ!!」

明は急ぎよ身体強化を上半身にかけ、シグマの両腕を振り払おうとした。しかし振り払えばこの体は真つ逆さまに落ちていくことを思い出す。

それはとても恐ろしく、想像するだけで思考が乱れ魔術にも影響を及ぼす。

魔術とは行う事そのものが死に触れることであり、一瞬の油断が回路の暴走を招く。

「……っ、う、あ……!」

明は呻いた。思考の混線、自分が誰で、何処にいて、何のために戦っているのか——激しい痛みとともに、理由の全てが虚ろになっていく。

このまま、高所への恐怖感すら忘れ——しかし忘れてしまえば、碓氷明は碓氷明ではなくなる。それは駄目だ。

けれど碓氷明である限り、こんな状態でまっとうな魔術行使ができるはずもない。

「殺さないって言ったでしょ?おとなしく傀儡になっておきなさい」

シグマの声が、脳内で何度も何度も反響する。意識が奪われるのは時間の問題、己が己でなくなるのは時間の問題。

「……!」

……そうだ、どうせこのまま、己が己で無くなってしまふのならば。このままシグマの意のままになり、セイバーも助けられないまま消えてしまうなら。

ならば、セイバーを助けられる己になりたい。

大事な人々を殺し、未来を奪い、それでもただただ魔導を繋ぐとい

う役目だけは残っていたから魔導を続けていただけ。魔術など義務で楽しくはない。己に未来など、ない。

だから未来の想像など、したことがなかった。

しかし、今先を望むなら想像しなければならぬ。

虚数とは物質界にありえない数。

しかしあると仮定することで如何なる不可能をも可能とする業。

人が想像できる全ての出来事は、起こりうる現実である——そして想像力という形なきものは、形なき虚数において力を得る。

——想像するのは、常に最高の自分だ。

「Ku<sup>虚</sup>vitt<sup>数</sup>e<sup>よ、</sup>llinen<sup>魂</sup> numer<sup>を</sup>ot、Teh<sup>成</sup>d・s<sup>せ!</sup>ielu!

私が生きるために、私を殺すことになるとも——。

「ku<sup>イ</sup>vitt<sup>マ</sup>e<sup>ッ</sup>llinen<sup>リ、</sup>hy<sup>ト</sup>・kk<sup>イ</sup>・ys!!

## 12月7日⑩ 断たれた伝説

宝具を開帳されたのだから、セイバーもライダーの真名を把握している。

それでもセイバーには関係がない。相手が誰であろうと、セイバーは間違いなく日本最強であり、主の剣であり盾である。それが彼の誓い故に、セイバーは刹那も怯む間なくライダーと明を追った。

景色が飛ぶように過ぎていく。眼下に見える街並みは、人がいないかのように静まり返って、暮らしの明かりもひそやかである。おかげで直ぐにライダーを乗せる白い鳥を捉えることができた。

鳥は目的地があるのかないのか、美玖川周辺を旋回しているようだ。ライダーの舟はもつと早く飛べるのかもしれないが、生身の人間であるシグマと明を乗せているのだから速度には限度があるのだろう。

セイバーには鳥の背中に立つライダー、座るシグマと横になっている明の姿が視えた。

「マスター!!」

明は気を失っているのか、セイバーの声に応えない。それと同じく、飛行艇の上に仁王立ちしているライダーと目があつた。

「――来たか」

ライダーの肩に留まっていた鳥が俄かに姿を消して、ライダーの中に吸い込まれた。その直後、彼は自ら飛行艇の上から飛び立った。

自律制御された剣がライダーに先んじて、セイバーを貫かんと突撃する。

「――!」

剣の自律を承知しているセイバーは草薙剣でそれを弾き、火花を散らした。今セイバーの最優先目的はライダーを倒すことではなく、明を救出することだ。彼の目は神舟を追うが、白き帝はそれを許さない。

ライダーが飛び立つと同時に振り下ろされた右腕と同期したかの

ように、弾かれた直刀は向きを変え、再びセイバー目がけて撃ちだされる。

「ふむ」

シグマたちを運ぶことを舟に丸投げしたライダーは、剣を操り遠慮なく速度を増してセイバーを襲う。自由自在に操られる剣は、曲芸のごとく奔放にセイバーを四方八方から斬りつけようとするが、両腕の力で振るわれる剣の威力には敵わず、何度もあえなく弾き返される。

だが攻撃力は脅威ではなくとも、一撃一撃はセイバーにとって煩わしくライダー本体を攻めづらい。魔力放出を駆使して全力で叩き落としているが、草薙と同じく、いや神そのものである剣神は決して折れない。

夜空を舞台に二騎が走る姿は幻想じみて、神話の再現——いつしか二騎は美玖川を遥かに離れ、春日駅周辺のオフィス街上空へと場所を移していた。戦いながらである為音速には至らぬものの、その速さは常人には捉えがたい。ライダーは空を旋回して戻ってきた己の剣を肩に乗せ、笑った。

「さて、俺にはあの草をおんなどうこうする気はないが——シグマに任せておいていいのか？あやつ、なかなか愉快な嗜好持ちだぞ！」

その時、ライダーは力任せに己が剣をセイバーに向けて投擲した。セイバーの眼は易々とその剣の軌道を捉えて、先ほどまでと同様に叩き落としたのだが——その瞬間、ライダーは妙な事を口走った。

「ふっのみたまのつるぎ開闢せし断絶の剣神！」

「!?」

勿論、その手に剣はない。セイバーを狙うにしても——そもそも剣の形をとる宝具でありながらその手に持たずして真名解放したところで何も起こらない——と、セイバーが思ったのも一瞬だった。

遥か下方、先ほどライダーが剣を投げ、セイバーが叩き落として落下していた——つまりはセイバーの真下のビルとビルの隙間から、魔力の極光が放たれた。教会で解放されたときとまったく同種の光が夜の闇に迸る——！

「ッ!!」

空中では足元の踏ん張りがきかない分、セイバー自身の機動にも鋭さが失われる。それでも彼は持ち前の俊敏で身を翻した。ただの間であれば焼き果たされている熱量が、セイバーの約五メートルとなりを走り抜けていった。

されど真下から猛烈な勢いで走り上がる光柱を回避できたのは、一瞬気づくのが早かったこと、そして大きくは手で振りぬいておらず狙いが正確に定まっていなかったため。宝具開放によつて放出された濃い魔力の後を感じながら、セイバーは遙か下——春日のオフィス街を見下ろした。

ここは春日の中心地だ。昨今の異常事態で、夜の春日は極めて人が少なくなっているとはいえ、全くの無人ではない。特に警邏中の警官などには、今の光は超常現象かと怪しまれてしまうだろう。神秘の秘匿にこだわる明のことを思い出し、セイバーは急いた。

「——貴様」

いつの間にか宝具たる剣は再びライダーの手に収まっていた。今のあれは自分で振りぬいていないためか、威力は教会より控えめで狙いもぶれていたが、まごうことなき宝具の開帳だった。

「矢張り両手で振り抜かねば威力は落ちるな。……しかし何も驚くことではない。あれは今や公の宝具ワタシだが、元々は神霊であり公よりも高位のモノであったのだから」

「——経津主神ふつぬしか」

ふつのみたまのつるぎ  
布都御魂剣。

かつて建御雷神が葦原中国を平定する際に使用した剣。そしてナガスネヒコ討伐に失敗したライダー一向を熊野にて救った、魔を退ける剣。その剣は神である経津主神、剣の威力そのものである神を剣とした代物。

それはセイバーの天叢雲のように「神が造った剣」ではないために、神造兵装ですらない。「剣の神」——神霊が剣の形をとっているに過ぎない、神象宝具。

「……神霊は聖杯によって呼ぶことはできないと聞いたが」

「だからこやつは神ではない。あくまでこやつは公の『宝具』として現界している。神霊としては人型もあるが、そういう制約でこいつは剣でしか現世にいられぬ」

セイバーの認識通り、本来神霊をサーヴァントとして召喚することはできない。だが経津主神は神霊としてではなく、ライダーの宝具としてあることで現界を可能にしている。ゆえに神格自体は持ち合わせていない。

「とはいっても神霊は神霊。人格ある剣、意志ある宝具。今はおとなしくさせているが、公の真名開帳がなくとも自ずからその威力を振るうことができる」

「やはり、お前は——」

今更確認の必要すらないが、セイバーはその真名を口にした。ライダーは面白くもない顔をして肯う。

「当然だ。公は秋津島における開闢の帝。集合より生まれた原初の人間。それ以外の何物でもない」

ふん、とセイバーは鼻を鳴らした。もう驚くべきことではないが、奇妙なことがまだ一つある。このライダー、短時間に二度も宝具を解放している。

おそらく今のも前回のものも、本当の全力を尽くして放ったのではないにしても、今のライダーは余りにも変わらなさすぎる。汗ひとつかかず、顔色一つ変えず、悠々と構えてセイバーに対峙し続けている。

一体魔力源たるマスターは、どのようなからくりをしているのか。まさか無尽蔵の魔力ではあるまいが、不可解な事がライダーに関してが多い。

今やセイバーの視界に神舟の姿はない。そして明とのパスから伝わる感触では、彼女はまだあの船、美玖川周辺に留まっているのだらう。異状は感じられないが、あの得体のしれない女魔術師と一緒にあるとすればゆっくりなどしていられない。

ライダーは倒さねばならない。だが、それは今すぐなすべきことで

はない。セイバーは一度深呼吸すると、ライダーが追いかけてくることを承知で彼に背を向けた。

セイバーは背後を気にしながらも、全速力で音速を超えオフィス街から美玖川へと急いだ。黒々とした川が流れるその上を、先ほど見た神舟が旋回していた。しかし、その上にはすでに明の姿も、シグマの姿もなかった。

「……どうへ」

ぞわりと走る悪寒。背後に間違いなくライダーが接近してきている——後ろを振り向けば、迫るのはブーメランの如く飛来した剣。とっさに剣でわが身を庇うが、衝撃までは殺しきれず落下する。眼下には大橋のかかる美玖川が流れている。

そして、セイバーの目は上空から落下してくるライダーの姿を捉えた。サーヴァントにとって空中からの落下は大げさに騒ぎ立てることでもない。そしてセイバーは、落下地点が川だろうと海だろうと恐れない。しかし、それはライダーも同じであろう。

二騎は水しぶきを跳ね上げて、水上にて対峙する。海神の加護を受けた双方は自分が踏みしめているのがまるで大地であるかのように、川の上に立っていた。

「——海神の娘の子であったな、ライダー」

「——お前は、剣と——妻の命と引き換えに加護を得たのだったな」  
ライダーはセイバーの言葉を歯牙にもかけず、頭椎の太刀を向けて告げる。紅い目は細められ笑っている。

「……お前のこれまでの行いは、御雄からおおよそ聞き及んでいる。その上で問おう。お前の目的は何か？」

「……」

『日本最強』が目的、というわりに、お前はマスターに気を使い過ぎている。お前の目的は、日本最強などではない」

それは、セイバーとして自覚していた。かつ目の前のライダーは、会ってからほどなくせに、セイバーのことをセイバーよりもわかっているようにすら感じた。



「もしお前がその目的のために、赤心を以て公に嘆願するのであれば、聖杯を譲ってやらんこともない。答えよ?」

ライダーが嘘をついているようには見えなかった。もし本当に願えば、聖杯を譲りそうな気がした。しかしセイバーは今も昔も、聖杯に興味はない。

——目的。そんなもの、こっちが聞きたい。

皇子は人の気持ちが変わらないと、言われてきた。しかし、人の気持ちを知るようになるその前に、自分の気持ちがわからない。

かつての仲間の願いたればと目指した日本最強となる目的が敗れども、今セイバーが剣を握る理由は何か。

明を助けるために戦っていることに間違いはないのだが、ただ体を助けるだけでは駄目だとわかつている。

——そして、彼女には彼女自身のために生きてほしいと思っているのに、今の己は……

思考に耽つていい相手ではない。セイバーは鋭く声を放った。

「……聖杯は要らない。明を返せ」

「……ふむ、結局道具の枠から出れぬのならそれもよい。それはそれで生き様であり、道具には道具の幸せがある」

ライダーの纏う空気が、一気に氷点下にまで下がる。セイバーの体は万全の状態には遠く、今宝具を撃つことは叶わない。セイバーの構えた剣は既に蒸気を纏うことなく、天叢雲剣として蛇行したモノの姿を見せている。それでもセイバーは引かない。

引くことはすなわち、むぎむぎとマスターを連れ去られることを意味する。

「エイ、シヤコシヤ!」

ライダーの体が水上を疾走し、それより早く放たれた剣がセイバー目掛けて突き刺さる。天叢雲剣で見事に弾き返すが素手のライダー

が迫る。自律操作される剣が前後左右なく襲い掛かってくるのと同じ時に、正面よりライダー自身が迫る。

弾かれた剣を曲芸師のごとくに受け止め、ライダーは正面から胴を狙い突き刺す。剣は鎧を掠め火花を散らし、双方は入れ違い立ち位置を変えた。先手必勝——セイバーはライダーに背を向けたまま両手で剣を握りしめ、気配を頼りに振り返り様に切りつける。

鋭く金属がかち合う音が響き渡ったが、セイバーが目にしたものは断絶剣によって受け止められた。ライダーは背後を向けたまま——自律の剣がそれだけで斬撃を受け止めていた。

(……面倒な)

戦闘技術的にはむしろセイバー自身の方が僅かに上ともいえる。だがそれ以上に意志を持つ剣の自在さが障害となっている。いや、ライダーは剣の操作を考慮して戦っているのだから、結局スタイルが違うだけで技術に差はないのだろう。

剣が半飛び道具と化している同程度の敵との経験が乏しいだけで、目が慣れればどうにかなる自信はある。セイバーは剣を弾き、ライダーから距離を取った。

景色は暗く、星の明かりはわずか。遠く離れて左手に見える大橋のライトが届くものの、それ以外に光源はない。細く長い息のあと、セイバーは水上を走った。

目に映らない速度で上段から叩き付けられた剣は——当然のように断絶剣に止められるがセイバーは力任せにそれを弾き返すことをせずに、競り合った状態の断絶剣の柄を掴んだ。一瞬だけでいい、この邪魔な件の動きを止めて、右手だけで掲げた天叢雲剣をそのまま振り下ろす！

空気は震え、静かな川面がさざめいた。ライダーの籠手が、神剣を防ぐ。剣は深く食い込んではいないもの、その腕を、骨を断つには至らない。片手だけではやはり力が乗り切らない——その時、ライダーの唇が動いた。

「開闢せし——」  
ふつのみたまの

その言の葉に応じ、断絶剣が光を帯びる。ほとんど反射でセイバーはその剣から手を離し着地すると、すぐさまライダーから距離を取る。やおら己の剣を手にとったライダーは、汗ひとつ流さずに三度目の宝具開帳を行わんとしている。

断絶剣を中心にして白い渦が激しく巻いていくのを見ながら、セイバーは確信する。このライダーの宝具は、セイバーの天叢雲ほどでなくとも決して燃費のいい宝具ではない。明は神父を優れた魔術師だとは一言も言っていない。

にもかかわらず彼が平然としていることには、絶対に理由がある。だが、最早セイバーに考察を許す時間はない。

断絶剣・布都御魂。この国を開闢いた剣が、三度その威力を開帳する。対抗するには己も宝具で打ち消すしかない——セイバーも白銀の剣を振り上げる。

神話の時代の英雄同士の激突は何度でも繰り返される。

「断絶の剣神！」

セイバーは魔力が限界であることを承知で、ライダーに対抗すべくその真名を開帳する。

「全て翻し焰の——」

しかし鋭き声は途中で途切れた。彼の宝具、草薙剣が何の反応も示さない。常のように魔力を凝縮して白い光を放つこともなく、ただの剣のままである。

それ以前に彼の剣は白銀の草薙剣ではなく、いつからかずっと——蛇行する天叢雲剣のカタチのままである。

断絶剣が絶つモノは、かたちあるものにとどまらない。概念や因果の線をも切り裂く兵装。そして宝具というものは、伝説の武装のみで成り立たない。

人々に語り継がれてきた伝説幻想とつながりがあってこそ——

「——あ」

セイバーは原因に思い至るも、とにかく今は避けるしかない。だが

全てが後手に回っている。教会で見た白い宝具の光が目前に迫り、激突してはじけ、全てを斬り裂いていく。

白金でありながら昼よりもさらに強い日の光が世界を覆い尽くす。川の水は二騎を残して高く高く水柱となり噴き上げて、まるで津波の如く両岸へ押し流れていく。堤防を越えて波は溢れる。

衝撃波によって天高く舞い上がった川の水がにわか雨となり、夜の四十万に降り注いだ後に川に残ったものは――。

「……………ふむ」

水に濡れている以外は全く変わらないライダーと、川の上に倒れているセイバーだった。

セイバーは剣を放してはいないが、胴体からはおびただしい量の血が流れて川を染めている。宝具の一撃を防げなかった鎧は無残に砕け、編み直す魔力もなく破片を散らしていた。

だが、セイバーは血の気を失った顔のまま剣を杖替わりに無理に立ち上がるとうとした。

「ぐ……………」

「ほう、まだ息があつたか。どうせこのまま消えるだろうが――」

ライダーは半死半生のセイバーに興味がなさそうに、だが、何か糸があるかのように、人差し指の腹で空間を撫でている。そして輝きを失わない宝具を片手に、水の上を滑るようにセイバーに近寄った。

「おまえなりの解があるのだと思つたが、盛り上がりんな」

そう吐き捨て、ライダーは剣を振り上げた。立ち上がるうにも、膝立ちの状態から動けないセイバーに向けて、それは無慈悲に振り下ろされる。

## 12月7日⑪ 二人の碓氷明

正直に言って、シグマは驚いていた。碓氷明は幼い頃のトラウマにより、高所恐怖所になっていると神父から聞き及んでいた。だからこの遙か高所から宙ぶらりんにされた状態で、無理にシグマの手を振り払って落下を選ぶことなどありえないと思っていた。

だが——その予想を裏切って、詠唱の直後に明は魔力をこめてシグマの手を振り払ったのだ！

「——!？」

漆黒の闇の中に、明の身体が躍る。もしやセイバーが追いついてきたのかと思っただが、その姿はどこにも見当たらない。重力に従い自由落下する明の身体を追い求めるべく、シグマは船の縁に足をかけ、己も闇へと身を投げた。

「……元々私は巫女だから、戦うのには向いてないのよねえ」

シグマは少々不機嫌そうに呟いた。魔術刻印は死んだからといって消滅するものではないため、最悪明は死体でも用を成せないこともない。無論生体の方が都合がいいことには変わらないが——体があればそれでよいと口早に重力操作の詠唱を紡いだ。

「戒律引用、重葬は地に還る……  
Vox Gott, Es Atlas」

空気抵抗を受けて落下の中にあるシグマに、下から重力に逆らって黒い弾丸が連続して襲い掛かってきた。北欧の呪いであるガンド——呪いの密度が濃すぎて物理的破壊力を持った弾丸が夜にまぎれて、殺意と共に打ち上げられている。シグマは瞠目したが——決して慌てることなく自らも同じく呪いを放ち相殺する。

火薬もなく光も硝煙もなく、ひたすらに黒い弾丸が交わされる銃撃戦。

妙である。この状況で碓氷明は、魔術を狂うことなく操れている。精神の乱れた状態で魔術を操り失敗すれば、それこそ死に直結するにも拘らず。違和感を懐きながら轟、と風を切って高速で落下するシグマは懐から数枚の呪符を取り出す。血液でしたためられた黄金比の

五芒星と呪言が彼女の魔力で暗い光を宿す。

「我は此れ、天帝の使者なり。執持しむる所の金刀は不祥を滅せしむ。此の刀は凡常の刀に非ず、百練の鋼なり——急急如律令——刀禁呪！」

詠唱が成るや、襲い来るガンドはシグマの手前一メートル程度の位置で急に軌道を変えて逸れた。

刀禁呪はもともと道教から生じた呪いであり、呪文や刀を用いて邪気や敵兵の侵入を防ぐ術である。日本の陰陽師は、呪文や礼装(刀)とともに反閉へんぱいという特殊な歩行法を用いてこの術を行使する。今シグマは反閉もしておらず刀も持っていないが、呪符一枚を刀に見立てて術を行使している。また呪符にあらかじめ刻んだ文言は、反閉の術式である。予め持つ礼装たる呪符にて、移動式結界を構築する。

シグマのかつての贄となった者の一人に陰陽師がおり、彼は結界術の達人だった。結界自体で殴る——移動要塞となった己そのもので、物理的に相手を壊す力を持っていた。

こうなれば最早重力操作の魔術など不要——重力加速で時速二百キロにまで至ったシグマだが強固な結界に包まれた状態で美玖川の河原へと激突した。隕石が落下してきたかのごとく、シグマという要塞は河原の地面を抉り取り激しい土煙を巻き上げた。

小規模なクレーターの中央で微笑む彼女は、目的の女が己と同じく、五体満足で存在していることを感じ取り笑った。

「……っただ」

シグマの豪快な着地で巻き起こった煙幕の中目をこらしながら、明はしびれる足を叩いた。彼女が上空から河原へと激突するまでに行ったことは、単純な重力操作につきる。

今ならば冷静に分かるが、あの神舟は地上からおおよそ三百メートルの高さを飛行していた。そこから自由落下すると、人間の身体が受ける空気抵抗を無視すれば地上に到達するまでに時速二百七十キロ超

のスピードに至る。そのうえ地上までは十秒に満たない。

敵もさるもので、一瞬の躊躇いもなく明の後を追って船から飛び降りてきた。その最中、空中落下にあつて見たモノは陰陽術——しかも、観る限り一成よりもはるかに高度な術だった。

しかし彼女は間違いなく大本を明と同じくする、北欧由来の魔術師のはず。

地上に足を降ろした二人の魔術師の視線が交錯し、妙齡の魔術師——シグマは訝しげに明を見据えた。

「……いつの間に、変わったの？」

流石に鋭い。明は唇を舐めて、その問いには答えずに聞き返した。

「よくわからないけど、それがあなたの封印指定のいわれなのかな」

シグマは答えない。既にその唇は新たな呪術を刻んでいる。「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前！ 来れ四神守護せし靈獣！」

「——！！」

空間がゆがみ、そこから現れた巨大な白い獣を見たとき、明はさすがにわが目を疑った。見た目は鋭い牙と爪をもつ巨大なホワイトタイガーである。

行っていることは使い魔の召喚だが、呼ばれたものが並ではない。四神相応の地を守護し、安倍清明の式神十二天将として数えられた靈獣——白虎。

十二天将とはもともと陰陽道の六壬神課りくじんしんかという、天文と干支を交えた占術で使われる体系である。その十二天将がそれぞれ北極星を中心に天文に星・星座・方角に起源をもっている。その概念に魔力によって形を与えて使い魔として使役したものが式神、使い魔としての「十二天将」である。

方角の吉凶と星に込められてきた概念にカタチを与えたものであるがゆえに、彼らは動く概念武装といつてよい。否、持つ概念がなんであれそれ自体が日本においてさえ千五百年を超える神秘を帯びた概念である白虎の具現は、およそ大抵の魔術を打消し噛み砕く。

神秘はより古い神秘に打ち消される——かつて大陰陽師安倍清明

はこの十二天将を自在に、かつ同時に使いこなしたという。それには及ばずとも、陰陽術でこれほどの召喚を可能とするとは――。

「……!!」

獰猛な牙と爪が、隙を与えることなく明に一直線に襲い掛かってくる。明は舌打ちをすると、しかし素早く詠唱を紡いだ。

「Varjokilpi、Varjo sein!」

詠唱の直後に、明の真ん前に展開されたのは分厚いが実質質量のない影の盾。魔術を分解して平面世界へ飲み込む黒い炎――しかし、千五百年前から守護の概念としてあり続けた白虎の前にはあつさり、盾のほう突き崩される。

四肢の獣はあつという間に明まで接近し、その爪牙は女の肉を易々と食い千切ろうとする。月光に煌めく刃のごとき爪が触れる刹那――明の姿が、まるで蜃気楼のように消えた。

驚いたのは白虎とシグマのほうだった。白虎の爪は勢いのままに明がいるはずの場所を切裂いたが、長い明の髪の毛を掠めただけだった。白虎は身をかがめ、明の気配を五感の全てを使って察知しようとしているが、その気配はどこにもない。

幻覚・暗示の類にかかるシグマではない。ただ姿を消しているだけならば、白虎がすぐに嗅ぎ付ける。可能性としての空間転移は、魔法に近い大魔術であり詠唱もなしにできるモノではない。

だが――その時とつきに今立つ場所を離れたのは、シグマに少なからず虚数魔術についての知識があったからである。身を翻し、白虎の隣へと移動した瞬間にそれは起きた。

「!?――まさか」

「Tulin helvesti,」

Minun suihkulhde jtkiehuva ylij

Olen syntynyt valtiolle,

Olens litv lapsi, jokaymprijo

須臾、気配も形もなかった確氷明が突如としてシグマの上空十五メートルに姿を現し――既に詠唱を終えて放たれた影魔術は、まつす



ぐにかつてシグマが立っていた場所に直撃し空気を闇で焼きつくしていた。すぐさまシグマを外したと知った明の姿は、瞬く間に消え失せた。

「虚数空間——」

シグマは早々にこの姿が消えるカラクリを見抜いたが——それをまさか、碓氷明がするとは思わなかった。それに仮にするような性格だったとしても、力量的に不足していればそれまでである。そして神父から聞いた限りでは、碓氷明の虚数魔術はそこまでの成長を果たしていないはずだった。

しかし、地上で姿を見せた碓氷明の姿は同じに見えたが——髪の毛が伸びていた。

(……あれは、今の明ちゃんじゃないわね——)

シグマはぬるりと口の端を舐めた——決して焦ったのではなかった。むしろ良いものを見た、と言わんばかりに。

まず、碓氷明が消えて現れたのは空間転移である。より正確に言えば、虚数空間を通過することによる範囲を限った空間転移であり時間旅行だ。

虚数自体は五大元素と同じく太古からあるものだが、架空元素・虚数が虚数と呼びならわされるようになったのは、魔術の歴史的にはごく最近のことである。数学の世界における虚数の発見とその類似性からそう呼称されるようになった。

数学における虚数とは、二乗してマイナスとなる数のことである。プラスとプラスを掛ければプラス、マイナスとマイナスを掛ければプラスとなるため、二乗してマイナスになる数はこの世には存在しない。

ならばなぜ虚数というものが生まれたか——それは、答えのない問題に答えを出すためである。虚数があると仮定することで成り立っている方程式、理論は山のように存在する。とどのつまり、虚数とはあると非常に便利で威力のある道具である。

そして魔術における虚数とは、平面世界とも呼ばれる虚数空間にアクセスする力である。

虚数空間は時間・空間ともに物質界から切り離された場所であり、物質界のものは虚数術者の加工なしに存在することはできず、逆もまた然り。

普通に生きる者が全く触れることがなく、時間空間共に切り離されたという「異界」である。明がよく使用している「影」は、この空間から引きずり出した物質界にありえない炎である。

今の明はその「虚数空間」から何かを引きずり出すのではなく、自身自身を投げ入れているのだ。

簡単に言うが、魔術師からしてもこれはめったになしうる魔術ではない。虚数空間は物質界ではない。すなわちそこに自分を投げ込むことは、一度自分を物質として殺し幽体として構成することに他ならない。そして帰還する際も幽体を物質に再構成する——つまり生物として再生し、再びこの世に生まれるという強固なイメージを以て魔術行使をしなければならぬ。魔術とは死を観念することである以上、後者のイメージの難度は遥かに高い。

さらに帰還する際の座標を虚数空間から正確に観測できる術がなければ、深海や土の中に帰還してしまう危険性もあり、さらには帰ってくることでできず虚数の檻に閉じ込められたままになってしまう。

要するに影を出すよりもはるかに高難度の魔術であり、先ほどまでの碓氷明では絶対に使えるはずのないモノであったのだ。ならば考えられることはひとつ。

あれは碓氷明でありながら、先ほどまでの碓氷明ではない。

しかしそれを把握したとしても、

（——虚数空間にアクセスできるのは、虚数の使い手だけなのよね）  
今のシグマには、虚数空間にアクセスする手が存在しない。それでも先ほどの明の動き、シグマを狙ってきたことを見れば考えはわかる。

千年クラスの魔術ですら食い破る白虎を真っ向から相手取らなく

ても、使い魔の主であるシグマ自体を倒せば白虎は勝手に消える。

碓氷明は虚数空間から帰ってくる。先程は上空に姿を現した——  
上空にしておけば、多少の座標のズレがあつたとしても問題はない。  
そして虚数空間に身を置いたまま、この物質界に影響を与えることは  
できないため——絶対に碓氷明の魔術は帰還後、物質界にて詠唱とい  
うステップを踏むことになる。

「白虎！上空に注意なさい!!」

獐猛な咆哮を上げて、霊獣はシグマの指差した空へと向かつて体をもたげた。と同時に予想通り——上空に碓氷明が現れたのだ。白虎は飢えた獣の獐猛さで高く跳躍し、女の体を食い破るべく吼え立てた。明は目を見張り、素早く詠唱した。

「Svalinn——Suojata est Jumala!」  
体を宙に浮かしたまま展開される黒い盾だが、それは白虎の爪にて一閃のうちに食い破られた。しかし、それと同時に遙か下——河原から明の声が響き渡る。五節にわたる長詠唱の大半を終え、既に起動間近の一撃——!

「Mene takaisin maailman niin kuin pi  
musta pyöre——!!」

白虎の巨体に、黒の大砲が打ち放たれる。フィンの大砲は、虎の体に激突して黒煙を噴き上げるも——神秘の塊である獣にダメージを与えることはできなかった。しかし虎の呼気と牙を至近距離で感じるまでに至っていた髪の毛長い明は——くすりと微笑み、シグマを指さした。

途端、シグマの体は頽れていた。

「っ——!!」

すでに、シグマの心臓に刃が刺さっている。ゆらりと体が地面に落ちる刹那、見目麗しい少女の唇からは、この世のものとは思えぬ断末魔が迸った。シグマの視界に最後に映り、その耳に最後に入ったものは——髪の毛が肩までの長さの碓氷明と、腰までの長い髪を持つ碓

氷明の二人だった。

\*

虚数空間と物質界は死と生と同様に表裏一体の世界でありながら、決して交わらぬ世界である。生者が死者をどうにもできないように、死者が生者をどうにもできないように、虚数空間から物質界に魔術を放つことはできない。物質界に戻った明が、礼装ナイフ『黒刃影像』だけ虚数空間を通じて移動させ、シグマの体内に帰還させた結果である。（自分という生物を虚数空間で動かすより、無生物であるナイフのほうが圧倒的に操りやすい。）

幸いだったことは刀禁呪が対外は強固に護っていたのだが、体内そのものは対象外だったことだ。こればかりはやってみなければわからなかった。

「座標設定に不安があったこと、見抜かれてたなあ」

虚数空間から帰ってこれないような下手はしないが、半径十五メートル程度の誤差はまだ発生してしまう。髪の毛の長い確氷明は、嘆息しながら眼下の人間だったものを眺めていた。かつてシグマ・アスガードだったものは、その痕跡を失った。シグマは倒した——だが、その死骸を見る彼女の眼は険しかった。

「別の魔術師を操っていたのかな……」

先程までシグマ・アスガードだった魔術師の肉体は、もうシグマの特徴を持っていなかった。美しい金髪に碧眼は見る影もなく、豊満な肉体もどこへいったのか原型すらない別人だった。少々ケースは違うが、似たようなことが最近あった——ハルカ・エーデルフェルトという男は最初から最後までシグマの手の中だった。

つまりハルカ以外にも、この女魔術師に捕えられ利用された魔術師がいたということだ。聖杯戦争に参加しようとしてスタートラインにさえ立てなかった人物か……。

(——これは、今日の昼間に会ったシグマでさえも本人かどうか)

体についた土を払って、明は再び原型を失ったシグマを眺めた。シグマ・アスガード——彼女の封印指定たる理由を考えていたが、これまでの戦いを経てそれなりに考察はできてきた。だが、それによって希望が見いだせたかと言えば領けない。

(示現流、陰陽術、ガンド、それに高度な洗脳術。洗脳はともかくどれもこれもバラバラの魔術基盤を持つ魔術で統一性がない。にもかかわらず、シグマはどれも高い精度で使いこなしている。通常、これだけ一貫性のない魔術を一人で修めることはできないし、できても大したレベルにまで持っていけない器用貧乏に終わるから魔術使いでもなければやりはしない。それでも、あらゆる魔術を収集し修めるとすれば)

それは、そういう起源か魔術特性を持ち得たからこそしているのだ。とすれば一代限りであることにも納得がいき、希少であれば魔術協会は保存に取り組むだろう。

シグマ・アスガードは何らかの手を使い「魔術」と名のつくものすべてを修めようとしている。自分にこだわるのは、「虚数」という稀有な魔術属性のためであろう——と、明は冷静にあたりをつけた。

魔術の研究の結晶は魔術刻印である。一子相伝で伝えられる研究結果は、実の子に受け継がせても結局は他人の臓器も同然である。ゆえに移植には長い時間がかかり苦痛を伴ううえに、周期が合わなければ体調を崩すこともある。そもそも刻印は系統の後継者にしか力を貸さない——ゆえに、自分がもつぱらとする魔術系統以外の刻印は奪っても役には立たない。

もしそれを全く関係なく奪える特質を持つていたら。いかなる魔術基盤の魔術も呪術も、刻印を奪い刻み続ける——どう考えても並の魔術師の所業ではない。

いかなる他人の血肉も苦痛もすべて受け入れる器。広く空にして、何色にも染まる者。

虚の魔術師。しかし、その想像は確氷の大本の魔術と矛盾しない。

体質が特異だとしても——虚であることは、神落としを旨とする北欧の巫女ヴォルヴァにとつては利点しかないのだ。もちろん、巫女という魔術師としては利点のみというだけで、人間としてどうかという話は計算の埒外にある。

——虚ならば。それを埋めるには、外から持つてくるしかないのだ。

考察はここまでである。明は長い髪を風になびかせながら——なんでもないかのように振り返る。その視線の先には、自分と全く同じ姿の——違いは髪の長さだけの——碓氷明が立っている。こちらの長い髪の碓氷明が余裕の笑みを浮かべているのにひきかえ、肩までの髪は明は唇をかみしめていた。

「にしても私はものすごいバカじゃない。やりようによっては反則級の強ささえ身に着けられるのに、こんな中途半端な力を最高だと想像するなんて。想像力貧困すぎ」

びくりと、何を恐れているのか短い髪の明は震えた。さらに追い立てるように、長い髪の明はあてつけるように声高に述べる。

「まあしようがないか。私は今まで、あなた「最高の自分」なんて考えたことなかった。自分の未来などないと、責務と苦痛だけを負って、何の喜びもない人生を歩くって信じてたバカなんだから」

未来を考えたことのなかった人間が、いきなり土壇場で最高の自分を想像しろといっても限界がある。それを思えば、むしろこれだけの出力が出せたことをは褒められるべきかかもしれないと、長い髪の明は思っていた。だがそんな優しい言葉を、この自分相手にかける気にはならなかった。

髪の短い明はなにか言い返したげにしていたが、口をもごもごさせるだけで言葉にはならなかった。長い髪の明とて、長く相手の話に付き合う気はない。事態は切迫している——というか、バラバラの戦いになってしまったせいでセイバーや一成たちがどういう状況か把握できていないのだ。

「私あなた、セイバーの様子は「おいつ、姉ちゃん！」

二人は同時に背後、美玖川の下流へと顔を向けた。アサシンの声であり彼は重傷のまま全速力で明たちに接近した。しかしすぐに明が二人いることに気付いたアサシンは、警戒して十メートル手前で足を止めた。

「……どういうことだった？」

「訳は後で話す。ちよつと変な魔術使っただけだから」

アサシンはまだ警戒を解いていなかったが、場合が場合のため、そつと襦袍の中に入れていた一成を解放した。空中からまろびでた一成は当然の如く二人の明に目を剥いたが、長い髪がアサシンの時と同じ言葉を繰り返した。

「……とりあえず、大丈夫なんだな？」

「ちよつとややこしいことになってるだけ。平気だよ、ね？」

「……う、うん」

長い髪の明に話を振られ、短い髪の明は慌てて頷いた。長い髪の明はシグマの姿を失った死体を指さして示した。

「シグマ・アスガードは何とかしたんだけど……そもそも、やってきてたシグマは魔術師をのつとつて使ってただけで、本体は全然違う場所にいるみたい」

「……マジかよ」

と、その時、その場にアサシンが崩れた。ランサーに霊核を貫かれたアサシンは、令呪一画を消費してなんとか崩壊を食い止めている状態である。蒼白な顔で息も切れ切れに一成をせかした。

「……オイ一成、さっさと用件言え。流星に持たねえぞ……」

一成は苦しい顔をしながら、言葉を吐き出した。「……つ、確氷、なんかキリエがやばい。確氷の屋敷が襲われてる。俺はキリエを助けに行きたい」

「……それは知ってる。むしろ私からあなたに頼もうと思ったんだけど……一成、なんでそれを知ってるの」

管理者代行である明は、確氷邸の結界が斬られたことを回路へのフィードバックという形で知ることができる。既に明は教会での戦

いでそのフィードバックを受けていたのだが、ライダーの襲撃からの怒涛の流れでそれについて言及する暇がなかった。だから碓氷邸の危機を知っているのは明だけのはずなのだが、何故一成が知っているのか。

それを問うと、なぜか一成は妙に挙動不審になって「いろいろ知ったんだよ」とわけのわからない言い訳をした。後で問い詰めることは確定としても、今は時間が惜しい。

アサシンの「持たない」は、一成を碓氷邸に運びキリエ救出を完了するまで現界できるかわからない、という話だ。短い髪は、意を決して口を開いた。

「……一成とアサシンは急いで私の家に戻って、キリエを助けて。私はまだ行けない。セイバーがまだ戦っているから」

二人の明と一成たちはうなずきを交わした。アサシンは再び一成を宝具に収納すると踵を返して走りだし、霊体化した。

一成とアサシンの見送ったあと、二人の明は視線を交わした。短い髪は明はセイバーに己の無事を伝えようとしたのだが、伝えられなくなっていた。

今、つながっているパスが何らかの力でちぎられている。それがすなわち消滅を意味するわけではない。しかし魔力供給先を失ったサーヴァントは長時間の現界を維持できず、戦闘などいわずもがなである。間違いなく、セイバーは危機の直中にある。

セイバーを探さなければならぬが、宛はない。おそらくこの美玖川周辺だが——その時、長い髪が嫌そうに短い髪に手を差し出した。

「私と一緒にあなたも虚数空間移動ができるでしょ。虚数使いなんだから——小刻みに飛んで効率よく探そう」

短い髪は長い髪を心から信じているわけではないが——それでも、彼女の言うことが最善であることはわかる。その手を取り、二人は一瞬にして姿を消した。



12月7日⑫ この道繋げし吾妻よ

振り下ろした剣は空を切った。魔力で構成されているとはいえ、肉体を断ち切るはずだった剣は汚れることなく水面に切っ先を触れさせている。

ライダーはゆるりと標的が逃げた、避けた方向にゆっくりと振り向いた。さざ波すらない、ゆるやかな流れの水面の上に、セイバーは剣を杖代わりに立っていた。

何のことはない、ライダーの刃を水面を転がることで躲しただけである。先ほどまでセイバーは片膝立ちとはいえ、体のどこかを抑えつけられていたわけではないのだ。

それでも無理に体を動かしたせいで、切り裂かれた胴からはぼたぼたととめどなく出血が続いていた。

「今のは、」

セイバーは疑いの眼差しで、開闢の帝を見据えた。今の一撃は、セイバーを本気で殺そうとしたものではなかった。確かに自分に向けて振り下ろされたと思えたため、セイバーは回避したのだが、何か別の物を切ろうとしたように思えた。

一体何を、と思った次の瞬間、セイバーは信じがたい事実気が付いた。

——明との因果線<sup>パス</sup>が、切れている。

それは明の命の危機を示すものとは違う。危機なら危機として、パスを通じて気付くからだ。しかし今は命の危機を感じる間もなく、魔力供給をもなくなったのだ。

セイバーはライダーを睨んだまま口を開こうとしたが、それよりもライダーが早かった。

「察しはつくが、お前にはほかに問いたいことがある」

聖杯への望み以外に聞きたいことがあるとは意外だったが、セイ

バーは体の出血を止める時間が欲しいため黙っていた。

「何かを斬るためにはその対象が見えていなければならぬ。たとえ死の線がここにあると教えられても、死が見えぬ者には斬れぬようにな。生前の公は見ようと思えばいかなる因果線も見えたが、サーヴァントとして現界している今は違う。だが——お前とお前のマスターの線は見える」

セイバーは最初、意味を把握しかねたが思い当たることがあった。セイバーがアサシンの最初のマスターを殺害しおおせたその日、明がつかつた令呪の二画。あれは「セイバーとのつながりを強化する」ために使われたのではなかったか。まさかそれが仇になるときがくるとは考えもしなかったが、それゆえに剣はパスを切れたらしい。

しかし、今の状態がさらに悪化したことには変わりがない。魔力供給がなくなってもすぐにサーヴァントは消滅するわけではないが、セイバーは深手を負っている。今死ぬわけにはいかず、とにかく明と合流してパスの再構築をしなければならない。頭の隅でこのこと離れる算段を立てながら、セイバーは時間を稼ごうと話を振った。

「パスが見えるのは、令呪を使ったせいだ。しかしライダー、宝具を連発しているが、その魔力は」

差はあるが宝具とは、魔力を著しく消費するものである。にもかかわらず、ライダーは顔色一つ変えていない——セイバーの思いを知つてか知らずか、彼は口元を緩めた。

「言つたろう。公は、努力して成果を掴んだものには正しく報うべきだと思ふ質でな」

「——？」

「にしては、この聖杯はいささかよくない。大聖杯の奥にあるもの話だが——大本の冬木聖杯の汚れをそっくり引き継ぎ、春日聖杯は黄泉と化した。勝者に与えられるモノがこんなまがい物ではさぞ悔しかろうと、公自ら大聖杯の奥にあるものを浄化しようとした」

黄泉のごとき聖杯——セイバーは意味が分からずライダーを凝視した。今まで戦いのみを望んできたセイバーは、具体的に聖杯が何か

考えたことはない。

「結局その試みは無駄だったがな。歪みの大本は「悪意」の願いそのものの英霊。公はこの国において「永久」を願われた英霊。仮に公が「希望」「善意」の願いそのものの英霊であれば、あとはどちらが強いかという話だったが、そもそも在り方として対立すべきわれらではなかった」

聖杯程度から与えられるサーヴァントの霊基ではなあ——と、ライダーは薄く笑った。正直、セイバーは意味の半分も理解していなかった。明が聞けばまた違うのだろう、と思考がそれる。

「結局、公はただ大聖杯に引きこもり——ひたすらに汚染された魔力をついばみ続ける羽目になった。その呪いから公を守るため、経津主神は自我を失ってしまったが」

当初、消滅したとされていたライダー。その実彼は、召喚に応じながらも現界しないという離れ業を見せていた。この国の神祖とされる英霊にして神霊の現身。無尽蔵にも等しい大聖杯の魔力を、セイバーたちが戦っている間蓄え続けてきた——。

あまりに規格外ではあるが、底なしの魔力は理解できた。しかし明らかに、ライダーは今全力でセイバーを殺しに来ているわけではない。今すぐにセイバーに襲い掛かれれば、魔力補給もなくなったセイバーは一瞬にして消えてしまい、戦争は終わる。決して今死にたいわけではないが、セイバーは吐血をこらえながら、問うた。

「……お前は、この聖杯戦争を見るがために現界したと言った。この戦争を戦う者の選択を見る為だと。お前自身に目的はないというのか。俺を殺せば、お前は勝者だろう」

「物わがりの悪い。お前も今言ったように目的は見ることでそのものだ。ゆえにもし公が最初から現界していたら、最も楽しませたマスターに聖杯をくれてやるため自害してもよかったのだ」

「——!!」

「お前は結果を善しとするが、公は違う。勝利は必須ではない。公の生涯には、結果として勝利があったただけだ」

セイバーは思わず自分の耳を疑った。他陣営に聖杯を与えるため

に自害をもよしとするとは、セイバーには理解の外だった。しかし見に来ただけなら、どこの陣営に肩入れするはずはない。それでも神父の味方の立場に立っているのは、神父自体を気に入っていることもあるが、それ以上に。

「ん？お前には言わなんだか？公は原因に興味はなく、結果にもない。肝要なのは過程で何を選ぶかだ」

油断や慢心で、ライダーは今セイバーを生かしているのではない。ただセイバーの「選択」「その先」を見たかったがゆえにここまでまどろっこしいことをしていた。

しかし言葉が終わった時、す、と水面に波紋一つ起こさずにライダーが一步足を踏み出した。直刀をセイバーに突き付ける。風もないのに、殺気を孕んだ空気が圧迫して迫る。

「まあしかし、もうこれまでで出し惜しむというのなら——お前には今の経津主神で十分だろう」

セイバーは息を呑んだ。ライダーは、セイバーのまだ持っている宝具に気付いている。確かにあれは日本武尊としての伝説を知るものであれば、当然思い至る宝具ではある。

しかしセイバーは今までそれを使う気はなかった。たとえ自分が消滅の危機に瀕しようとも、これを使って生き延びるくらいなら敗北を選ぶつもりだった。

今まで明にもその宝具のことを伝えていないが、セイバーとしては背信のつもりはない。本当にそれを使う気がなかった、すなわち宝具として認識してこなかったのだ。

セイバーの逡巡をよそに、静かにライダーは剣を振り上げた。最早言葉はない。ライダーの直刀が光り輝き、魔力が光に変換されていく。

彼の宝具は、仕組みとしてはセイバーの天叢雲剣と同じである。神造兵装である神の剣は、神によって錬鉄された剣に込められた力を持ち主の神性と魔力で縛り上げて指向性をもたせるもの。

しかし、それが神の剣の全てではない。神霊は自然現象に人格が付随したものであり、それ自身が現象を引き起こすだけの膨大な力を

持っている。それは権能と呼ばれるもので「ただそれをする権利がある」だけで現象を引き起こす。

つまり剣に込められた力に権能をも加えたものが、神の剣の神髄である。ゆえに天叢雲剣と布津御霊剣の真の力は、セイバーもライダーも「サーヴァント」という英霊コピーとして召喚されている限り、引き出すことができない。

しかし真の力には至らずとも、真にせまることはできる。神性——セイバーのそれより、ライダーのそれが遙かに勝っている。ライダーははるかにセイバーよりも剣を御しているのだから——。

「天地神明——」

ライダーを中心に、その足元から水がさざめきだしている。掲げられた剣はすでに直視ができないほどの極光を放ち、月明かりをかき消していく。白く渦巻く魔力が、これまでに放たれたモノとは格が違うと告げている。

神霊は聖杯戦争に呼ばれることはない。だがもう神霊かどうか以前に、深手を負った今のセイバーでは逃げ切れはせず、ただ防いだだけでは影すら残さず焼き果されるに違いない。

——死ねない。

もう自分そのものに戦いを続ける理由はないはずなのに、それでも今負けられない、死に切れないとセイバーは思う。

自分に彼女をどうにかできるなどとは思っていない。それにたとえ明をどうにかできても、自分の人生が変わるわけでもない。

誰の願いも叶えられないで、誰一人幸せにできぬまま、戦だけを引き連れて歩んだ人生が終わるだけだ。

それでも——鏡うつしのような主を救うことで、己を救おうとしているのか？

なにもない生でも、最後に一人を救えたと思いたいのか？

わからないのだ。

昔からずっと、人の気持ちよりもその前に——自分の気持ちがわからない。

それでもまだ明が生きて戦っているならば。

生きていることそれ自体が、希望であるというのならば――

「開闢せし断絶の劍神！」

「――ッ!!」

真夜中の太陽が煌めき、闇を切り裂く。ライダーの雄叫びと同時に、セイバーは躊躇わず自分の懐に腕を突っ込んだ。一瞬でも躊躇えばこの体は消し飛ぶ――直撃が早いか、開帳が早いか。

取り出されたのは、少し齒の欠けた茶色の櫛。傍目には古びた櫛にしか見えぬそれこそ、日本武尊最強の護りの宝具。

絶対に使うまいと思われていたそれを、彼は惜しげもなく翳した。

目の前は真っ白に染まり、原初の世界へと誘われる中――セイバーの声はそれでもはつきりと鋭く響いた。

「――この道繋げし我が妻よ！」

かつて、海に身を投げた女。彼女の命と魔力の総てを結晶化した計二十四枚の障壁こそ、日本最強の結界宝具の正体だった。櫛自体が魔力塊であるため、発動時にセイバー自体の魔力を一切必要としないその宝具は、障壁を隔てて一時的に日本武尊を位相のずれた世界に隔離する。そのうえその身を賭して神の怒りを殺した神話時代の巫女の魔術は、神性に対する特防となりライダーの宝具を完全に無効化しにかかる。

――が。

視界が四方八方とも光に覆い尽くされるなか、セイバーは障壁の一枚目が破壊される音を聞いた。確かにライダーの剣はセイバーのものと同じく神性の剣であるが、性質が違う。天叢雲剣は荒れ狂う力のままに破壊する剣、しかし布津御霊剣が旨とするものは「断絶」の概念である。時間も空間も世界も切り裂く力は、膨大な魔力のままに異なる世界の物体をも断絶する。

故にその刃は、神ではなく「概念」ゆえに日本武尊本体にも届きうるやもしれず。しかしセイバーはその切り札に今、すべてをかけるほかないのだ。光と熱の洪水が、今は隔離された世界の外で激しくうねりを上げて、結界に守られたセイバーにも気配を感じさせていた。

宝具のあおりを食った川の水が天高く柱となって噴きあがり、深夜の豪雨が降り注いだ。双方、撥ねる水飛沫の中に立っていた。

「——ッ」

もしセイバーは焼き果たされるのならば、それは極光の奔流においてである。月下に意識をもって戻ったということは、凌ぎきれたことを示す。

「……やはり聖杯の泥の影響を被っている。……御雄！」

水面に仁王立つライダーは、何やら神父にコンタクトを取っていたが神父から返事がなかったようで、やれやれと鼻を鳴らした。それから何の未練もなくセイバーに背を向け、指を鳴らした。秒をも待たぬうちに先ほどの白い鳥船が、何も無い空中から音もなくぬうと現れた。先程その上にいたはずの明もシグマも既にその姿はなく、ハルカ・エーデルフェルトだけが残っている。

「うむ。……もしお前が再び繋がりを得て戦うというのなら——公も、真の神剣を見せてやる」

ひよいと軽く船の上に乗ると、氣息奄々のセイバーを見下ろしてライダーは笑った。逃げるのか、などとセイバーは言わない。今の一撃で宝具の障壁の三分の一は破壊されており、単純に考えるとあと一回は防げることになるが、実質相手の宝具は回数制限がないようなもので終わりが見えている。

悠々と空の星となったライダーを、必死で平静を装いながら見届けたセイバーは満身創痍の身体を押し川を走った。向う場所は、確氷邸か。いや、ライダーたちの本拠地か。当てがあるわけではなかった。パスがあるためマスターたる明の位置はだいたいわかるはずなのだが、パスが切れているがためにわからない。だから今の明がまだ無事なのか、それとも死んでいるのかもわからない。

水面を走りつつ水ぬれになった河川敷を見渡しつつ、セイバーは叫んだ。

「明ー!!どこだー!!」

「ここだよー」

セイバーは思わず前につんのめった。「!?」

それでも、その声を聴いてセイバーは胸を撫で下ろした。重傷を負ったようには思えない声であったからだ。彼女がいる場所はセイバーから見て左手側の河川敷らしく、彼はそちらを振り向いた。

「!?」

服が薄汚れて先程の宝具激突の水柱の影響でずぶぬれではあるものの、大西山でのような大怪我は全くない。大きく手を振って呼びかける姿からも、健全さが伺えた。

セイバーはすぐさま彼女に駆けよろうしただろう——もし、明が一人であったなら。

そこには同じ人間、確氷明が二人、同じ声でセイバーに呼びかけていた。双方とも気配は見知った確氷明のものだが、セイバーは天叢雲剣を構えたまま近づく。

「……どつちが明だ」

どちらも見た目は確氷明だが——差はある。服装はワインレッドのプリーツスカートにタイツ、短めのコートを着ていることは同じ。だが髪の長さが腰までである明と、見慣れた肩までの長さの明がいる。そして雰囲気、長い髪の明のほうが大人びて見える。

「これ……」一応二重存在者っていいばいいのかな?説明は後でするけど、両方確氷明だから、警戒しないでよ」

髪の長い確氷明がそう言い、二人の確氷明は手招きをした。確かに悪意や害意を感じない為、セイバーも剣を一度消して河川敷に上がり、明に近付いた。

「……どういふことかわからないが、無事で良かった」

「セイバーも、ライダーは倒したの?」これは髪の長い明の言葉だ。

「……いや、見逃されただけだ。ライダーそのものに傷をつけられたわけではない」

「というかセイバーは大丈夫なの?その傷、というかパスが切れて」短い髪の明がセイバーの負傷を指さし、心配げに言った。一応、ラ



イダーの宝具の一撃による血だけは止まった。ただ表面をふさいただけで、中身は全く回復していない。

二人になっていたものの明が無事であったことを確認したセイバーはそのことを忘れていたが、パスが切れているのは由々しき問題である。セイバーは傷を癒さなければ戦闘などできるはずもなく、また魔力的な問題もあるが英霊の座からのマレビットであるサーヴァントは、依代となるこの世のものがないと現界を維持できない。

「……ライダーの仕業だが……あの剣で、因果線を斬られた。お前は俺とのつながりを、令呪一面を使うことで強化していたから、それで見えるようになってしまったらしい」

二人の明は神妙な顔をしていたが、今はとにかくパスの再構築が急務である。長い髪の明は短い髪をつついた。

「……とにかくパスだけでもつなぎ直そう。ほら私<sup>あなた</sup>」

話はどちらかといえば長い髪の明が仕切っている……否、短い髪の明の方が何か長い髪の明に遠慮しているようにも思える。今までセイバーに話しかけてきたのは、ほとんど長い髪の明なのだ。しかし再契約の詠唱を長い髪の明はしないらしく、短い髪の明をせっついただけだった。

「告げる！ 汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に！ 聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら——」

紫の魔力光が飛び散り、明の魔力が迸る。この魔術の使い方は、セイバーが何度も見てきたものである。多分、本来の明は短い髪の明なのだ。見た目は同じでも、何か長い髪の明は違う。

「——我に従え！ ならばこの命運、汝が剣に預けよう……！」  
「セイバーの名に懸け誓いを受ける！ 貴方を我が主として認めよう、確氷明！」

一際強い光が爆ぜた後には、静かな夜が戻っていた。そして無事にパスは短い髪の確氷明と繋がっていた。しかしパスは繋がったものの、魔力が一向に流れてこない。

その異変は明も感じ取っているようで、首を捻っていた。依代を得たことで消滅の危機はひとまず免れたが、外部からの魔力が絶たれた

ままでは戦闘が不可能だ。深手を負ったセイバーの内部魔力も、治癒に充てることで精いっぱいだろう。

「……とりあえず、魔力のことは後で考えよう。急いで碓氷邸に戻らないと」

「何かあったのか」

長い髪の明は手短に碓氷邸の結界が破られ、キリエが狙われていることを説明した。先に一成とアサシンが碓氷邸に向かっている。しかしアサシンは消滅寸前であり、一成だけでは心もとない。消去法だと碓氷邸に向かった可能性があるのは神父に美琴であるが、先ほどのシグマが本人ではなかったということ踏まえれば、シグマの本体がやってきていることもありえる。

「ライダーは最初、剣を持ってきてなかった。あの剣は遠隔操作できるから、剣だけでうちの結界を斬ってから教会に呼び寄せたんだと思う」

そのとき明はライダーの鳥で行動不能であり、その上シグマと船により上空に連れ去られてそれどころではなかった。とにかくキリエを守るため急ぎ戻る必要があるのだが……今明側での実質戦闘要員は明二人と一成、サーヴァント戦はできないセイバーくらいだ。それに碓氷邸の異変を感知してから、すでに戦闘が終わるには十分な時間が経ってしまったている。先に向かった一成が間に合っているかどうか、といったレベルだろう。

「……とにかく行こう。セイバー空飛んで、急ごう」

そういうと、長い髪の明は躊躇いもなくセイバーの手を取った。飛んで急ごうという意見はわかるが、高所を嫌う明にしては躊躇いがないさすぎる。いや、バーサーカー戦後などは飛行を止む無しとしていたが……。

一方、短い髪の明は止む無しという顔で、空いたセイバーの左手を取った。やはり大本は短い髪の明だと確信しながら、セイバーは不思議に思いながらもまじまじと長い髪の明を見た。

「何ぼーっとしてるの。急ぐよー！」

長い髪の明にせつつかれ、セイバーは二人と河川敷を助走をつけて

走り空を駆った。

## 12月7日⑬ 聖杯戦争という名の道楽

——すでにこの異変に、アキラ・ウスイも気付いているはず。けど、すぐ向かえる状態にない。とすれば、あちらにシグマやライダーがいる可能性が高いわね。

魔力を通した針金で生成された鳥の使い魔たちは、美琴と神父めがけてその口腔から光弾を一斉に打ち放った。背後と下以外の全方位から同時に爆発が炸裂し、轟音と閃光によって狙われていない悟も、暫し感覚を失った。鮮やかなキリエスフィールの先制攻撃だが、爆発に劣らぬ雄叫びがその成功を許さなかった。

「キエエエエイ!!」

美琴が掲げた一振りの黒鍵が目にもとまらぬ速さで動き、あまつさえ一撃も漏らすことなく黒鍵を振るう風圧だけで、光弾を払いのけてみせたのだ。光弾の破壊はまるで美琴と神父だけを避けるかのよう  
に地面をえぐり、空気の焦げたにおいを発散させていた。

——示現流を基幹とした、起源「放出」による魔力の運用。

美琴自身は魔術に対する造詣は深くない。彼女の戦いで際立つのは、その剣術である。

示現流は、九州は薩摩にて戦国の世に生まれ古流剣術だ。その剣術の特徴は一言でいえば『二の太刀要らず』。髪の毛一本でも敵より早く刀を振りおろし、初太刀で決着をつける究極の『先手必勝』である。野太刀と疾走による威力の初太刀は躲すことそのものが困難である。幕末に薩摩の者と戦った武士の中には、その一撃を防ごうとしたものの、威力を殺し切れず自分の刀の峰や鏢を頭に食い込ませて絶命した者がいたという。その上美琴は起源「放出」によるブーストを加えた代物であり、並みの人間なら意識する間もなく文字通り「真つ二つ」にされていることだろう。

かつその剣術を幼い頃から習得していた彼女は、たとえ初太刀を躲されてもいくらかでも反撃できるパターンを身に着けており、連続行使

も可能にしている。彼女の黒鍵は特別製のため何の損傷もないが、もしこれが稽古で使う木刀であればその木刀は空気摩擦により炎上しているところだ。

しかし彼女は途中で魔道を投げ出しただけあって、魔術の練度自体は高くない。ゆえにキリエは今の砲弾で打倒せるかと思っただけだが、予想を超える力量だった。それどころか、今の速度はあのセイバーの魔力放出による戦闘を思い起こさせるものであった。

——そもそもミコト・ジンナイは、ミコト・ジンナイのままなのかしら？

それはキリエがここで美琴の姿を見てから感じていたことでもある。一言も発さず、ただただ御雄神父の言うがままに行動する。大西山決戦の前に一度見えた美琴とは別人のようだ。

シグマ・アスガードという女魔術師……

「聖杯を捕えろ」

神父の感情のこもらない声が、キリエの耳に届いた。神父の好き勝手にさせるつもりはない。

鳥の使い魔自体は弾を打ち出すための砲身でしかないため、打ち出した衝撃で自壊した。すばやくキリエは自らの髪の毛を数本引き抜き、一小節で詠唱を成す。

「Winterdich tung」冬 詩

洋館と夜陰を背景に浮かびあがったものは、白い光の線で編みあげられた巨大な剣だった。それらは整然と並び、猟犬が主人の号令を待つように鋭い魔力をほとぼしらせている。自らの髪の毛を触媒とした使い魔は、針金で生成した先ほどの鳥よりもはるかに高度な使い魔であり、自動で美琴を追尾し殺害すべく動く。

「Schwert Tanz von Rittern!」騎 士 た ち の 剣 士 劇

光を纏う剣は、一斉に美琴を串刺しにすべく襲いかかる。たとえ初撃を外すか避けるかしたとしても、「殺害せよ」との命を与えられた剣

はその命を果たすまで止まることはない。

雨のように降り注ぐ剣を、美琴は避けなかった。「二の太刀要らず」といわれる示現流だが、実際は連続技も存在し、決して一撃きりではない。だが全力を込めた一撃の次に、すぐさま次撃に移れるはずはない——にも拘らず。

「チエストオオオッ!!」

左足を踏み出し、一気呵成に魔力放出を使用し最速の剣を上段から一刀に叩き壊す。そのまま振り下ろした黒鍵を左斜め上に向かって、放出の力のベクトルを変えて跳ね上げ、次の剣を下から引きちぎる。そして振り上げた黒鍵を持ち上げたまま横なぎに払い、次次の剣を横へ吹き飛ばす。

まるでそのスピードと強力はサーヴァントの如く——否、実際にサーヴァントに肉薄するレベルの魔力放出である。

キリエは差し向けた剣のすべてがなぎ払われる前に、もう一本髪の毛を引き抜くと一気に詠唱を紡いだ。

「Strafe des Gottes、  
Schild des Donners!!」

剣の形ではなく盾の形をとる使い魔を形成し、自身から手前一メートルほどの位置に展開させてキリエは走った。もちろん、使い魔であるからには盾はキリエに自動で随伴する。

その判断は正しく、なんとすべての剣の使い魔を破壊しおさせた美琴は、修道服の内側に仕込んでいた黒鍵を取り出すと——先ほどまで持っていた黒鍵とともに、キリエに向かって投擲したのだ。本人が振るうほどの威力はないが、鉄甲作用もかくやとばかりの威力は鋼鉄程度なら貫くだろう。

幸いにしてキリエ御手製の盾は鋭い音を立てて黒鍵を叩き落とし、ていつた。

「Fortpflanzung、  
Zerstören, Schwert meiner Marionette」

キリエの詠唱とともに、破壊された剣が再び魔力を得て形を取り戻す。それは何度でも、キリエの魔力が尽きぬ限りに再生して美琴の命

を狙う。いまやサーヴァントを持たぬキリエは、全力で魔力を使っても問題ない。魔力をそそぎ剣の再生の速度を上げていけば、美琴はいつか仕留められる。

キリエの目的は我が身を守ることと、神父の真意を問いたただすこと。キリエは盾を随伴させたまま、悠然と立つ神父へと迫る。

「オユウ——聞かせてもらおうわよ——!!」

「キリエさん、後ろッ!!」

しばらく見ておらず、屋敷の中に引きこもったと思っていた山内悟が神父のやや後ろから叫んだ。死にたいのか、と毒づきつつ背後を見やれば——使い魔の剣に押しとどめられているはずの美琴が、至近距離にまで迫っていた。

今だ剣は再生を続け、美琴を執拗に狙っているのだが——当の美琴が、すでに剣を眼中に入れるのをやめていた。致命傷こそ避けているものの、既に体は血まみれであった。

腹には剣が刺さっているにも拘らずなぜここまで変わらずに動けるのか。まるで狂戦士ではないか。彼女には随伴させている盾の使い魔があるとはいえ、それは投擲黒鍵を防ぐためのもの。彼女の本撃を防ぎきれるかどうかは。

「チエストオオオオオ!!」

背後で響く、美琴の絶叫。裂帛の氣勢が迫る。キリエは全速力で魔力を盾に注ぎ込む。真紅に染まった修道女が渾身の魔力を込めて黒鍵を振り下ろす——あまりの速度で空気が切り裂かれる音が聞こえ——盾は紙を破くがごとくに、引きちぎられた。刃物というより鈍器である黒鍵の上空からの一撃は、キリエの右半身をたやすく打ち砕いた。

「ぐう——!!」

冬木の聖杯戦争から、御三家の一であるアインツベルンにはある弱点があった。魔術師としては一流も一流だが、直接的な戦闘を得手とする家ではないことだ。

キリエはその点、ホムンクルスとしては戦闘の素養がある方では

あった。だがそれもアインツベルンにしては、の域にとどまるものであった。

キリエは受け身も取れずに石畳の上に倒れた。かろうじて右肩と右腕はつながっているが、骨を砕き鮮血を溢れさせていた。悲鳴をかみ殺し、キリエは立ち上がろうとするがそれよりも美琴の方が早く、キリエの背中に馬乗りになり、左手を黒鍵で刺し動きを封じた。

「……ッ！」

全身の激痛で意識が乱れ、正常な魔力行使を阻害する。黒鍵自体に何かを塗りつけてあるのか、痛みははつきりとあるにもかかわらず刺された左腕が思うように動かせない。

「そのまま刺しておけ。私は碓氷の屋敷に邪魔させてもらおう——おや？」

神父は悠然とした表情のまま、その足を屋敷に向けて踏み出した。だがその時、彼は動きを止めた。神父の背には人影が一つ。

「キリエさんを離せ！」

御雄神父の首元には、一振りの包丁が突きつけられていた。キリエと美琴が大立ちまわりを繰り返す間に、誰も悟に気を払わなかったため、彼は全速力で屋敷に戻り武器になるものを持って戻ってきたのだ。

神父の首筋に宛てられた包丁はわずかに震えている。神父は全く恐れることなく、懺悔に來た信者を諭すように柔らかに、背後の悟へと声をかけた。

「おや、命は大事にしろとは言われなかったのか？元アサシンのマスタァー」

「キリエさんを離せ！そもそも、あんたたちはなんで聖杯がほしいんだ！」

その言葉に神父ははて、と視線を背後にやった。

「なぜお前がそれを気にする？お前の聖杯戦争は終わっただろう？おとなしく日常への帰還を待てばよいのではないか？」

それはアサシンにも明にも言われたことだった。特に明はあえて



情報を悟に与えないようにしている節もある。それは一般人——聖杯戦争という奇跡に触れてしまった人間を一般人に分類するべきかた怪しいが——に神秘を漏らすまいとする気持ちもあろうが、何の心配もさせたくないことの方が大きいだろう。

それでも同じ家において、会話を聞けば不穏な空気はにじみ出さきつとまだ春日は危機にさらされていて、同時に彼女たちもまだ、危険に身をさらすのだと。

「俺は、彼女たちに恩がある。その人たちに危険なことはしてほしくない。あの人たちは、春日と、平和を守るために戦っている。もしあんなたちの願いが平和を害さないものなら、話し合えば碓氷さんたちは聖杯を譲ってくれるかもしれない……」

「なるほど。あなたは善人なのだろうな——この戦争に場違いな人だ」

悟の言葉を御雄は間違うことなく理解したが、その言葉は的外れであった。魔術を行う者にとって、魔術を行うこと自体が既に命がけである。

危険なことをしてほしくないということは、魔術をやめろということと同義になる。何百年もの先祖の宿願を背負った彼らにその選択肢は存在しない。そして話し合いの件についても、到底ありえないことであった。

「私の願いを、碓氷の七代目は許さない。どれだけの死人が出るかわからないが、穏当な願いではないことは自覚している」

「……そうよ、オユウ……貴方の願いは何……？」

這いつくばって苦痛にうめきながらも、キリエは顔をあげた。恐れながらも、彼女はその問いをせずにはいられなかった。

アインツベルンと手を結ぶ際に、神父が望んだこと——その時はまだ魔術教会に属しており神父ではなかったが——は、かつて冬木の御三家、神域の天才とが生み出したと言われる儀式を再現して己が魔術の糧としたい、ということだった。

実際に聖杯戦争を勝ち抜くほどの技量は己にはないから、せめて儀式を間近に観測する立ち位置が欲しいと述べたのだ。

確かにアインツベルンは、御雄神父と出会わなくても別の場所で聖杯の構築を行っていたと、キリエは考える。

参加者よりははるかに安全な監督役という特等席での、儀式の観測。その意味で聖杯戦争そのものが目的だと神父は告げていた。また御雄神父は魔術師としては一流というほどでもないためよからぬことを企まれてもどうかできると、アインツベルンもそれを信じていた。

「私の願いは聖杯戦争という儀式の観測に間違いはない。だが、魔道のためのものではない。ひとえに私の道楽の為だ」

「……道楽？」

悟もキリエも、聞き間違えたかという顔をして繰り返した。ただ一人、神父のみが凍てつく冬の寒さそのままに変化しない。

「私は聖杯戦争という、世界最小の戦争を砂被り席で見たかった」

世界は一時、沈黙に包まれた。いったいこの男は何を言っているのかと、一般人の悟も魔術師のキリエもこの時ばかりは思うことが一致した。聖杯に掛ける願いがあるわけでもなく、大儀式を己の魔道にフィードバックするでもなく、ただ血の戦を見たかっただけ——神父はそう、高らかに謳う。

「聖杯戦争を行いたかったから、戦争を始めた……？」

「然り。私が七代目やハルカ、キリエスフィールと組んでいたのは——三陣営と連絡をとれば、もし戦況が行き詰った場合も何らかの手を打って事態を打開でき、趣深い戦況に導くことも可能だったからだ」

二の句を継げずに啞然とする一成らをよそに、御雄神父は話を続けた。

「私は元々魔術師だが、根源に興味はない。ただ魔導の家に生まれたという義務のままに魔導を修めてきた」

神内家は、元をたどれば神道魔術を生業とする家だ。本家は神代以来の巫女の家系、信託を受けた巫女の言葉を解釈する審神者の一族だったが、神内家は明治時代にその本家から刻印を株分けしてもらった分家である。ゆえに陰陽師と同様に魔術師というより呪術師の側面が強いのであるが、文明開化以降の新興であるため、西洋の魔術教会とも細々とつながりを作り続けてきた。ゆえに、勉強の一環で御雄も十代後半に時計塔の末席に席をおいており、北欧の呪い程度の魔術は扱えるがその程度である。

彼は魔術を嫌っているわけでもなかったが、たまたまあつた家業を継ぐような感覚であった。「魔導を継ぎたくない」といえば親は怒るだろうが、自分の「継ぎたくない」気持ちもたかが知れており、特に望んでいたいこともなかったために、御雄は魔導の徒となる運命を受け入れていた。

時計塔に渡り一年を経た時、彼は運命の邂逅を果たした。かつて日本の冬木という地で行われた聖杯戦争という儀式のことを知ったのだ。

聖杯を求めて争う形式の儀式はバリエーションが多く、その手の中では冬木の聖杯戦争はマイナーなものであったが——強烈に御雄の心に焼き付いた。

——世界の守護者である英霊を呼び出し、魔術師が使役して殺しあうバトルロワイヤル。

最初は引き付けられた理由は判然としなかったのだが、彼は興味を持った。時計塔にいたため、冬木の戦争がいかなるものかはおおよそ了解することができた。

御三家の一、遠坂の当主とロード・エルメロイ二世が冬木の聖杯を解体する作業にも同行してつづさに観察したこともある。

そうして、彼は何故自分がこの戦争に興味を持ったのか理解する。生前の未練と共に呼び出される英霊。欲望に取りつかれるままに戦う魔術師、中には魔術師ではないものもマスターとなり、その命をかける。己が至上とする願いのぶつかり合い。「生死をかけた戦いの中にこそ、人の真価・本性が現れる。聖杯戦争は、力のぶつかり合い

ではなく、欲望の激突」

英霊と人が入り乱れる欲望の饗宴。それが崇高な願いであれ下劣な願いであれ、男の中では等価。

極論すれば、彼は人間という生き物を愛していた。

たとえ死にゆく終わりと決まっていなくても、人の生き足掻く姿、醜くも欲するものを追い求める姿は美しい。そして、その姿が尤も先鋭化するのには生死をかけた戦いである。それを見ることを、彼は望んでいた。

その気持ちを自覚した後の彼の行動は早かった。冬木の大聖杯が失われたことは非常に痛い——「他の土地で聖杯を作り上げればいいではないか」と。

御三家のひとつ、アインツベルンはいまだに聖杯を求めていると言う。御雄も大聖杯解体の最中に、わずかだが聖杯の欠片を入手していた。ノウハウはある。アインツベルンに誘いをかけ、適した場所を選定すれば新たな聖杯戦争の開始も不可能ではない。

元々は古い御雄の家を辿れば日本の地における人脈と情報網はある。そのうえ神道と陰陽道は歴史において分かちがたく影響を与えてきたため、陰陽道の家とのつながりもある。

刻印が枯れつつある大家土御門に話を持ちかけ、日本中の霊地を訪ね歩いた。土御門の地にて大聖杯を設置する手もあったが、今彼らが住む土地は戦国の時代に追い出されて仕方なくいる土地だった。

候補がなければ土御門の土地に大聖杯を設置する予定だったが——

「碓氷の先代が、何処から話を聞きつけたのか——我が土地に大聖杯を設置することを赦した」

明はまだ正式に家督を受け継いでいない為、先代とは明の祖父のことを意味する。だが土地は貸し与えたものの、碓氷家自体は積極的に聖杯に関与しなかった。その理由を知るは先代のみだが、なにはともあれ後は聖杯を満たすだけとなったのだ。

春日の地に使い道無く滞留していた魔力を大聖杯に注ぐことがで

きたため、恐らく五年で戦争は始まるだろうと思われていたが、初めての試み故に何かしらの不具合があり予定通りには始まらなかった。原因は大聖杯の核によるものであったが、確氷と土御門が諦めてもアインツベルンと御雄は諦めなかった。

また御雄自身は魔術師を辞め、聖堂教会に入っていた。その理由はただ一つ。来るべき春日の聖杯戦争に向けての監督役となるためである。それこそが願い。

——闘争において、人の本性は剥き出しに。

——かつて死した英雄も、今を生きる人も同じく。

——傷も欲望も全てをさらけ出す。

——人の根源を垣間見ることこそ道楽とする。

「自分の魔道などどうでもよい。アインツベルンを妨害する気も、確氷を謀る気もなかった。誰が勝って戦争を終えようとよかった。だが、私は途中であることに気付いた」

ふう、と仮初の神父は嘆息する。万感の思いを込めて、彼は真実の言葉を吐いた。

「——戦争が終わってしまったら、私の人生のほとんどをかけた願いは叶って終わる。また魔力の充填に何十年かかるかわからない。ああ、つまらないなと」

「つ、つまらない？」

悟が心の底から声を絞り出した。春日総合病院で無数の死者を出し、大西山を崩壊せしめた争いが終わって安心するのではなく、残念がっているのだ、この男は。

目の前にいるのは本当に同じ人間なのかと、魔術師である明や一成と引き比べて思ってしまう。

「しかしどういうわけか、おかしな英霊や予想しない魔術師の出現——それを受けて、私にある願いが芽生えた。聖杯に、再び聖杯戦争を開催してほしいとの願いをかければどうか、と」

聖杯を以て聖杯を満たし、聖杯戦争を行う。再び聖杯を以て聖杯を満たし、聖杯戦争を行い、再び聖杯を以て……。

戦争をするために戦争を願うと、この男は本気で思っている。

悟だけでなくキリエにとつても、彼の発言は理解の外である。だが小聖杯の立場としてその願いに対して答えるならば。

「……オユウ、その願い、あなたの、思っている通りに、叶うかどうかは賭けよ」

かつて冬木の聖杯戦争で、願いを叶えずつまり魔力を使用しないで終わったことがあった。その時でも魔力の再充填に十年の時間を要していた。既にサーヴァントを召喚する、という時点で膨大な魔力を消費しているため、その分回復時間が必要となったのだ。

つまり戦争の即時再開を願ったとしても、再開の間隔は短くなるだろうが御雄の望むものになるかどうかはわからない。

しかし、冬木の聖杯戦争を調べつくした男が何の策もなくそのようなことを言い出すとは思えない。

「私はいつでも、自分の思いつく限りの最善を尽くしてきた。諦めはしないさ」

その瞳に、キリエも悟も見下す色はない。むしろ興味深げに輝き、それを放っておかねばならないことを惜しんでいた。キリエは唇を噛みながら、声を上げる。

御雄に問うべきことがあるならば、今を置いてほかにはない。

「……ランサーの、奪取を進めたのも、私を裏切るつもりで、進めたこと、ね」

「召喚に失敗したお前は、再びの失敗を恐れて山に籠った。アーチャーを得ても動かなかった。最大勢力でもあるお前がいつまでも動かぬままでは戦況が停滞する——ゆえにハルカのランサーを潜り込ませることにした」

召喚のミスを引きずるキリエは、第二のサーヴァントアーチャーを得ても動かなかった。彼女を動かすため、神父は一度ランサーをくれてやることにより彼女の腰を上げさせた。さらに戦いのどさくさに紛れてハルカを山に入れてランサーを回収し、キリエのサーヴァント三騎のみで戦いが閉じてしまうことを防いだ。これがそっくりその

まま御雄の描いた図ではないが、彼はサーヴァントなきままに聖杯戦争に参加していたのだ。

当初は純粹に局面の停滞を防ぐつもりであっても、今や彼は目的を持ってしまった。

そしてキリエは、決定的に御雄はハルカ（本当はシグマだが）と結んでいた事実には震えた。三十年間、ずっと味方だと思い、御雄も——その実キリエに思入れもなかったのだらうが、戦争が始まるまでは味方するつもりではあったのだ。

しかし御雄を責めるべき事柄ではないと、キリエの冷静な部分は理解していた。魔術師の大願の前には倫理も家族の情も無意味となる。御雄は御雄の願いの為にキリエを無に帰しただけである。御雄の願いの前に、キリエが敗れた——事はそれだけの話である。

ならばもうその話は終わりだ。聖杯になりアインツベルンの悲願を叶えることが生まれた意味とならなかったのなら、もう生まれた意味はなくていい。

これから考えればいいと、あの未熟な陰陽師は言うのだろう。ただ今は、死なぬ為に。

キリエは既にパスを通じて、土御門一成に今の状況を視覚を共有して伝えている。本当に彼が来れる状態なのかはわからないから、頼りにするわけにはいかない。魔術的な意味では、本当に頼りないんだから——キリエは知らず知らずのうちに笑っていた。

その一方で、キリエの冷静な部分は神父——否、御雄に目を向け続けていた。彼がキリエだけを目的とするなら、碓氷邸本体に用はないはずである。だが御雄は碓氷邸に足を進めている——さすがに何が碓氷の家に眠っているのかまではキリエも知らないが、何か聖杯に係るものがあるのか。

「さてアサシンのマスターよ、その意志は素晴らしい。本来私が茶々を入れるべきではないが——おとなしくしている」

「ツツ!!」

御雄が手をかざした瞬間に、背後の悟の体が宙を飛んだ。額を拳銃で撃ち抜かれたように頭から吹き飛んで、石畳の上を滑って行った。

西洋魔術をもっぱらとする者にはガンドそのものに見えただろうが、これは神道における遠当てと呼ばれる技である。自らの魔力を高密度で固め物理的破壊力を付与させ、それを対象めがけて放つという、明のガンドから「呪い」を抜いたようなものである。

それをゼロ距離で食らった悟は、今や地面に転がって動かない。神父の遠当てにそこまでの破壊力はないため、死んでいないが気絶している。御雄は肩を払い、呟いた。

「やはりガンドより、こちらのほうが性に合っている」

御雄は悟には目もくれず、泰然とした足取りで碓氷邸の玄関へと向かう。だが、その足が再び止まる。足元に何か絡みついている——今しがた吹き飛ばしたはずの山内悟が、御雄の足首を掴んでいたためだった。

「……キリエさんを」

殆どわごごのような言葉だった。意識は戻っていない。

「……やめなさい、サトル・ヤマウチ。あなたでは敵わない、のだから。無駄に、死ぬことは、ない……わ」

キリエの言葉も途切れ途切れだった。黒鍵に塗られた毒物で、左半身が最早いう事を聞いていない。意識はまだクリアなだけ余計にもどかしく、キリエはできる限り顔を上げた。

何故あの男は、キリエのためにここまでするのか。御雄は悟を殺すつもりはないが、邪魔をするなら殺す程度のこととは考えている。大人しくしていると、明もキリエも伝えたはずだ。それでも彼は、殺されることを畏れず神父を止めようとしている。

「……キリエさんを守りたい、のもあるけど……」

見目はキリエよりも年下だが、悟には娘がいる。近い年頃の少女を見殺しにしたくないこともあるが、それよりも。

会社の事件で、結局悟一人が泥を被らされて追われることになった。自分が間違っていないことを行なったとしても、周囲がそれを正しく受け止めてくれなかった。もっと賢くうまく立ち回ればよかったと後悔した。それでも——

あの時の自分の行い自体は、間違っているか？



今振り返って、恥ずべきことであるのか？

直すべきはそのときのやり方と振舞い方で、間違いを糾そうとする  
行い自体は間違っていない。

——だからあの時の行いを、後悔していない。

このまま少女が殺されることを見過ごして、震えて待っているなんて。きっと後で絶対に後悔する。その負い目をもっては、真つ直ぐ妻や娘の眼を見られない。

アサシンと碓氷明には、本当に申し訳ないけれど——死にたくはないけれど、避けられる後悔ならばしたくない。

そのとき、キリエを押しさえつけていた美琴が素早く黒鍵を取り出し立ち上がる。刹那足元のキリエを踏みつけ、御雄を守るかのように悟を蹴って彼の背後に立った。彼女は悟のことを転がった丸太程度にしか思っていない。

「たとえ力足らずでも、誰かの為になりてえ野郎ってわけかよ。まだお前がそうしたいいつつーなら、もつと力をつけることだぜ」

聞こえないはずの暗殺者の声が、聞こえた気がした。

後は反射としか言いようがなかった。悟は痛む体に叱咤し体を立ちあがらせ、全力で修道女に体当たりをした。全く予想しなかった方向からの攻撃に、美琴はその攻撃を避け損ねた。

「……ッー」

しかし悟より遥かに鍛えられた体幹の持ち主である美琴はそれに倒されることはなかったが——その一瞬の対応が、致命的な隙を生む。

遅れて異変に気付いた御雄が振り返る。そこにいたのは——暗殺者の姿。

結界の破れた碓氷邸の塀を乗り越えて姿を見せた、大盗賊の金襴襦袢は今や泥と血にまみれていた。攻撃態勢に移っている為、気配遮断は切れているがその俊敏さで狙うものはひとつ。塀と御雄たちの距離は二十メートルほど。アサシンにとっては一秒の内に詰まる距離

——襦袍から引き出された黄金の太刀。  
悟によつてバランスを崩された美琴の奥に、狙う命があつた。

「てめえが神父かあ!!」

血を吐くような言葉が先か、刃が先か。御雄を守るべく駆動する修道女の動きと暗殺者の速度。美琴はすぐさま悟を振り払い、全力でサーヴアントに向かつて黒鍵を突きたてるべく振り上げた。

挙動は音もなく、絶対の殺意を以て。暗殺者らしくない暗殺者は、最後の最後に暗殺をなすべく走る。美琴に荒く振り払われ、またも地面に転がされた悟が顔を上げて見た光景は。

「——あ」

アサシンの太刀は、美琴の胸を穿ち貫通していた。太刀が栓となり出血は少ないものの、命はない一撃だつた。そして、美琴の黒鍵はアサシンの右肩から胸までを深々と断っていた。

通常のアサシンであれば、美琴の一撃を易々とかいくぐり彼女を殺した上で御雄の息の根を止めることができたであろう。しかし悟は知らなくとも、アサシンは今や現界で精一杯だつた。美琴も悟の邪魔が入らなければ刹那の差でアサシンを斬り倒していたのだが、一瞬の遅れがこの状態を招いた。

美琴は自重で崩れ落ち、傷からは噴水の如く温い血液が溢れ出させた。そしてアサシンも微動だにできず、ただ口から鮮血をこぼし続けていた。

御雄は動かなくなった美琴とアサシンを一瞥すると、向かう先を変え——伏したままキリエを抱え上げた。それから悠々と——軽やかに跳ねて碓氷邸の塀の上に立った。

「思ったより早いな。——どうせ、七代目がシグマと殺し合うのならば願いを叶える剣が必要になる」

「……ま、待て……」

キリエを助けなければ——その一心で、悟は立ち上がろうとしていた。しかし悲しいかな、魔術回路の痕跡しかない彼では抵抗する術がない。深々と傷を受けたアサシンを見上げたが、彼も限界だといふこ

とは一目瞭然だった。

「……………ツ皇子、マ……………あ、けたぜ……………!」

そう吐くようにつぶやかれたのも僅か、アサシンの太刀が空に溶けて彼の身体そのものも蜃気楼のように消え失せた。それと入れ替わるように現れたのは、土御門一成と、教会で回収されたノートのことだった。

「……………おいアサシンツ……………さっきから何も……………!?!」

急に宙に放り出された一成は、思い切り地面に激突したがすぐさま立ち上がった。

そうして彼が目にしたものは満身創痍の山内悟と、冷徹の月下に立ち塞がる神内御雄と、彼に抱えられたキリエスフィールだった。

12月7日⑭ 攫われた杯

明と別れた後、一成はアサシンの宝具『金襴襜袍』に入って碓氷邸に急行した。金襴襜袍に入っている間は、外の様子はアサシンからの念話に頼るしかない。

しかし一成はその念話以外にも、キリエの五感を通じて碓氷邸の様子と神父の発言を聞いていた。『戦争のための戦争』は理解の外であつたが、キリエと碓氷の家にあるなものかを狙っていることは把握した。

ボロボロのアサシンであっても、素の一成よりは強い。彼らは念話によつて、気配遮断で碓氷邸にまで駆け戻り御雄神父を殺してでも止めることを決めた。

その通り電光石火、まさしく最後の力でアサシンは神父を殺そうとした。されどあの人外といえる力を示した修道女に阻まれ、その殺害はならなかった。

アサシン消滅の際、『金襴襜袍』に入っている現世のものは異物として吐き出される。まさに今、一成は強制的に宝具の中から吐き出されてここに至っている。

「――神父ッ!!」

「久しいな、土御門一成」

まるで仇敵に出会ったかのように、一成は塀の上の神父を睨みつけた。キリエを取り戻さなければならないが、手が無い。そもそも一成には遠隔攻撃の魔術は使えない。

嘲笑うかのように、御雄は微笑む。

「待てッ!」

御雄は手のひらを一成、ひいては悟へと向けて遠当てを放つ。一成が呪符で簡易結界を構築することで直撃を防ぐが、こちらから攻める手が無い。一成はそつと右目に触れた。キリエは「使うな」と言ったが、いや、それ以前に使い方も判然としていないのだが……。

「安心しろ。私は聖杯を使う故に、聖杯は殺さない――」

一成の逡巡を待たずに、御雄はキリエを抱えたまま塀を飛び去り碓氷邸から離脱した。一成は慌てて追いつがり塀へ飛びつきよじ登ると、路地の右手、曲がり角に翻るカソツクの裾を見た。

「急急如律令ッ!!」

とつさに身体強化をかけ塀から路地に飛び降りて後を追ひ、素早く角を曲がったが——その先には深夜に沈む家々があるばかりで、御雄の姿も気配もなかった。それでも一成は次の曲がり角まで駆けて周囲を見渡したが、やはり何の気配も感じられなかった。

(姿も、魔力の痕跡もない……)

追跡しようにも、もう当てがない。まさか教会に戻ったとは思えない。一成は気を失ったキリエの姿を思い出し、齒を食いしぼる。

忸怩たる思いを抱え、一成は碓氷邸へと戻った。正面の門を押し開いて戻った先に広がっていたのは、庭に残る戦いの残滓だった。爆撃後のように抉られた石畳、土と埃が舞い上がった空気。

キリエが倒れていた場所にははつきり生乾きの紅血が貼りついて、そして悟のすぐ隣にはこと切れた修道女の姿があった。腹部と胸部を刺されて激しく血潮を流れさせ、この場を鉄臭いものにしていた。

そして彼女の血と混ざってしまっているが、おそらくアサシンが流したであろうモノも。

今更恐ろしくなったのか傷だらけの悟は腰を抜かして、しかし美琴の死体とアサシンの消えた場所から目を離すこともできず固まっていた。一成は小走りで悟に駆け寄り、手を差し出した。

「……悟さん、大丈夫ですか」

「……あ、ああ。す、すまない」

一成は必死で大西山での戦い——千里天眼通を使った時のことを思い出そうとしていた。あの力が使えれば、キリエを追いかけることができる。そもそもキリエとのパスは、万が一一成が眼を使う状況に追い込まれた時、足りない魔力をキリエに補助してもらおうこと、それに彼女の魔力操作で「眼」をうまく開閉させるためのものだった。

大西山、あの時己は一体どうやって目を開いたのか——。

「つ、土御門君、大丈夫かい？」

「!あ、いや、大丈夫、です」

悟の声で一成は我に返った。焦っても何もいいことはない。アサシンが全力を尽くしてくれたのに、その刃はあとわずかのところで届かなかった。一成はまさにその瞬間宝具の中にいたために目撃していないが、この戦闘跡で予想はつく。

「すみません、キリエさんが」

「悟さんのせいじゃありません。というか、なんで出て来てるんですか？」

明と同じく、一般人である悟には大人しくしているべきという意見だった一成は首を傾げた。悟は気まずそうな顔をしたが「キリエさんを放っておけなくて」と告げると、人のことを言えない一成は慚然とした顔で頷いた。

庭の惨状を見直し二人が無言になった時に、上空から聞きなれた声が降ってきた。「一成、悟さん!」

その声に、一成と悟は驚きと同時に胸を撫で下ろした。セイバーの飛行で帰ってきたということは、明もセイバーも何とか無事であったということだ。二人は揃って、月と星々の灯る空を振り仰いだ。

そして、我が目を疑った。

「碓氷が二人……いや、違う……か？」

セイバーの右手左手は、それぞれ碓氷明とつながっている。ふわりと着地した三人は普通の顔をしている——否、セイバーと片方の明は複雑な顔をしていた。明が二人いるという常軌を逸した光景に、一成と悟は言葉を失った。

二人の明の差は、髪の毛の長さくらいだ。彼らの驚きを理解している二人の明は、あえてその話を後にして周囲を見渡した。

「……屋敷はひどいことになってるけど……中には入られてないみたいだね。そっか……キリエは？」

返事をもらわずとも、二人の表情を見て結果を理解する。庭の惨状に、キリエの姿がどこにもないのだから——。

長い髪の明は沈黙の後、言葉を絞り出した。  
「とにかく中に入ろう」

\*

——国を開闢いた男は、遠くから聞こえる、己を呼ぶ声に目を覚ます。膨大な魔力の渦が、座にまします彼を誘う。

公を呼ぶとは、どのような不遜。

そう思いつつ、そのような不屈き者の顔を一目見るべく、国を開闢ひらいた男は誘う声に逆らわなかった。

近く、近く。純粋な力の塊の導くまま、世界のこちら側と向こう側の境に近づく。

普通の英霊ならば気が付かなかっただろう。壊れかけた大聖杯に魔力の溜め込まれた、奥底の淀み。

また、聖杯が冬木のもとの寸分たがわず同じであれば気づかなかっただろう。

しかし、これはもつと日本という地に慣れさせられた聖ヒヅリノサカズキ杯だった。ゆえに彼はそれを見た。

そして彼は、現世に誘う声を振り払い、大聖杯の奥深くへと身を沈めて行った。

結論から言えば、春日の聖杯は冬木のそれとくらべて不完全な代物であった。神域の天才がいてこそ作られた聖杯戦争というシステムを再度作り直すことは、御三家の一つが残っていようとも簡単ではなかったのだ。

当初五年で魔力が溜まり戦争が始まる公算だったものが三十年の時を要してしまったのは、大聖杯の核がホムンクルスと陰陽道の魔術師という二人の魔術師の回路を繋ぎ合わせたため、僅かな回路の接続ミスから魔力が漏れ出していたからだ。





「穢れた聖杯よ——わが手で浄化が叶うか否や」

彼は、国を守ろうとしたことなど一度もない。彼がしたことは、国を作ることだけ。その後の発展と維持は彼の子孫たちの役目だった。彼が生きている間国は彼の所有物であったが、己が死を迎えたら手を離れるのだと。

「さて悪意の願いよ。それでもお前はヒトから出でたものならば、その生きざまで楽しませてくれ」

\*

碓氷邸の南東、山には足らぬ丘の上。鬱蒼とした林に囲まれた自然豊かな春日市の南はずれに位置する神社が、土御門神社である。丘を登る階段をの先にそびえる朱塗りの鳥居に、三本足の鳥が闇にまぎれて留まっていた。

その鳥居をくぐり、両側に燈籠を従えながらまっすぐ伸びる参道の先にはこの神社の拝殿と本殿が連なっている。

神社内に人の気配は全くなく、凄愴な雰囲気すら漂っている。元々はやっっている神社ではなかったが、ここ数日は輪をかけて無人である。

理由は見る者が見れば既に一目瞭然、丘全体にかけられた人払いの結果に加え、神社を中心にあまりにも濃い魔力が立ち込めているからである。

既にサーヴァントが五騎消滅した今、この世の中で完結する願いであれば聖杯を降霊することも可能となった状態に至っている。ゆえに——春日聖杯戦争における大聖杯設置場所であるここ土御門神社における魔力が、異常な濃度に跳ね上がっているのである。

正確に言えば大聖杯は土御門神社の地下に広がる空間に設置されている。その地下にはずつとシグマ・アスガードが籠っており滅多に

出てこない。今教会や美玖川で繰り広げられた戦いにも、彼女の本体は顔を出していない。

「大聖杯の中からはなく外から、かつ浄化ではなく方向の修正——あの草めになしうるかな？」

拜殿の前、賽銭箱の上に腰かけるは白金の男は騎兵、ライダーのサーヴァント。セイバーと繰り広げた戦いの疲労も見せず、じっと鳥居の向こうを見つめていた。

おそらく彼のマスターである神父は直に帰ってくる——と思ったところで、鳥居から当該の男が姿を現した。

その小脇には第一目標である小聖杯がかかえられていた。

「ほう、聖杯は手に入れたか。さてしかし、シグマが申しておった剣とやらは」

「……存外早く陰陽師と七代目、セイバーが戻ってきてしまった。早期に戻らざるを得なかった」

第二目標は成らなかつたというわけだ。しかしふん、とライダーは鼻をならすと話を変えた。

「しかし御雄、公からの呼びかけも答えぬとはどうした？ 斯様に確氷邸は楽しかつたか？」

言葉は御雄をとがめているようであるが、声音に剣呑の色はない。興味深げにその顔を眺めている。一方問われた御雄は、今思い出したように考え込んだ。

「……それはすまなかつた。そうだな……楽しかつた、のだろうな」

「傍観者としてではなく、自ら戦いに参ずることが？」  
「いや……」

御雄ははじめて、荷物のように抱えていたキリエを眺めた。出血は止めているが、美琴の黒鍵にはしびれ薬を塗り付けていたために、キリエは自分の意志で体を動かすことはできない。ただ今や薬などなくても、内に五騎もの英霊を抱えた少女はまず動けないが——この激しい戦いの跡は、聖杯が生き足掻いた証である。

「聖杯の娘——ただ聖杯を得るためだけに生きていた娘は、その枠を

超えようとしていた。アサシンの元マスターは、護るために命を懸けていた。陰陽師とは——時間が足りなかった」

彼はあの戦いのさ中で——まさに砂かぶり席で、ヒトの姿を見ていた。これまでも使い魔を駆使し監督の名目で春日の戦いを監視していたが、流石にその場にいることはなかった。そのため、今の感動もひとしおであった。だが己の思う未来のために、陰陽師こと土御門一成とはすれ違いになってしまった。

「ほう、あのアサシンを従えていた草か。まあ、なあ——」

珍しくもの惜しげな御雄を見て、ライダーは笑って自らの顎を撫でた。「あの草、公としては少々つまらんが、お前とは似合いかも知らん。傍観者を願うお前と、常に己の主役たらしんとするあの草では。なあ御雄よ」

「何だ」

「お前は何故お前自身を、お前の人生の主役にしないのか、その根本を分かっているか？」

そのことは御雄自身も考えたことはある。ただ人の生きざまを見るだけの欲求は、一体どこから生まれてきたのか。幼少期にトラウマがあったか？そんなことはない。何かひどい目にあったのか？そんなことはない。気が付いたら、こうなっていただけ。

戦争のために戦争をする、願いだけで生きている。沈黙から回答をもたぬことを確信したライダーは然りと笑んだ。

「お前は神父としては精々二流だな。隣人は遍く愛しているが、人を導けぬ。ま、公も積極的に人を導いた覚えなどないが」

「ならば私の先達としてのお前に尋ねよう、ライダー。お前が自分を犠牲にしても人の過程を愛できるようになったのは、何故か」

ライダーは賽銭箱から腰を上げて、参道の半ばに立つ御雄に歩み寄りながら口を開く。

「それは簡単な話よ。公の人生はつまらない人生だからだ。生まれた瞬間に自分の終わりど、人の終焉を知っていたからだ」

初代神の剣。次の神の剣よりも遙か昔に神命を与えられたライダーは、自分の人生の道のりを知っていた。細部まで知らなくとも、

東征において誰が犠牲になるかわかっていた。

「全てを知る公は、子供の時は絵に描いたような鼻持ちならない神ガキだった。もし五瀬あ兄にがいなかったとしたら、「神日本磐余彦尊カムヤマトヒワレヒコノミコトという名の建御雷」がいただけに終わつたらうよ。……おっと、そうだ、お前に仕事がある」

元々は御雄に用があつて話しかけてきたライダーである。無駄話は案外好きな質なのかやつと話を元に戻しつつ、彼は鳥居に留まっている鳥を指さした。

「その手にある令呪を以て、公に宝具あの鳥を破棄させよ」

神を象る宝具かたじは、それ自身が意志をもちライダー本体よりも神霊に近い。ゆえにライダーの意志だけでは、あの宝具を破棄することは不可能だ。それゆえの命令、最後の令呪の使い道。それは決して己の戦力を削ぐものではないと、開闢の帝は笑う。

12月7日⑮ 魂の偽造

夜もとつぷりと暮れた、深更の碓氷邸。神父の襲撃により破壊された庭をそのままに、美琴の死体も庭においたままにしている。

一同、二人の明とセイバー、一成、悟は一階のリビングに集合していた。テーブルを挟んだソファに、明二人とセイバー、向かいのソファに一成と悟が座っている。テーブルの上には一成とアサシンが持ち帰ってきた、神父のノートと霊器盤が鎮座していた。

全員が複雑な面持ちで、重苦しい空気が場を覆っていた。セイバーは常と変らぬトーンで口を開く。

「では、情報を整理するか。まず山内悟、俺たちのいない間いったい何があつた」

「……っーか、それよりも碓氷の状態について話してほしいんだけど……」

一成の言葉に、悟も無言のうちに頷いた。超常現象を見過ぎておかしくなってしまったのかと自分の頬をつねりたくもなるのだが、驚いたことに——彼らの前には、当然のように碓氷明が二人いるのだ。概ね同じ人間がふたりという感じだが、髪の毛の長い明は、髪の毛の短い明よりどことなく大人びた印象を受ける。

「……セイバーはもう事情を聞いたのかもしれないけど、俺たちにも教えてくれ」

「いや、俺も事情は聞いていない」

「聞いてなくてなんでそんなに落ち着き払ってんだ……」

「もちろん驚いたが、明が減るよりは増える方がいいだろう」

一成は「何言ってるんだこいつ」と顔に書いていた。すると、年上らしく見える方の明が続けた。

「しようがない、説明するよ。今の状態はドツペルゲンガーに近いんだけど。いや、モデルがドツペルゲンガーというべきかな」

ドツペルゲンガー。ドイツ語であり逐語訳すれば「二重に歩く者」。ドツペルとは「写し、コピー」の意味である。自分はA地点にいたはずなのに、第三者がB地点で自分を目撃する、また自分自身が自分を

目撃するという怪現象のことを言う。古来から「ドッペルゲンガーを見たら死ぬ」と言われ、恐ろしく不吉なものであるとされる。

「ドッペルゲンガーと呼ばれる現象を魔術的に起こす方法はいくつかある。生霊の幽体離脱の二重存在者、空間転移、見た目がそっくりな人形作成、未来もしくは並行世界の自分の二重存在者」

「……で、お前が二人になっているのはそのうちのどれなんだ？」  
「消去法でわからない？」

髪の毛の長い明は口角をあげて笑った。この明は、今までみてきた明とはどこか違うと一成は感じた。碓氷明という女はこういう作戦会議や情報交換の場では真面目で冗談を挟まず話をしていくタイプだと思っていたが、どうにもこっちの明は違うらしい。と、髪の毛の短い明が一成に代わって答えた。

「幽体離脱はここまで明確な肉体を持つことはない。空間転移は魔法級の大魔術だけど、肉体が二つになるわけじゃない。そして碓氷に人形作りの教えはない」

「あなたが答えちゃ意味ないよ。まあいいけどさ」

髪の毛の長い明は横を向いて、もう一人の明をにらんだ。髪の毛の短い明は少し怯んだものの、負けじともう一人の明に鋭い目をやった。なにやら、二人の明はあまり仲が良くないらしい。

「じゃあ、未来か並行世界の碓氷……？ つつても意味わかんねえんだけど……」

「虚数魔術。概要はそっちの私が説明したと思うけど、それは全部じゃないよ。影魔術と言ったと思うけど、影魔術は虚数魔術に包含される感じだから」

術者の他者を傷つけたい・己を破滅させたいといったくらい欲望を源とし、目に見えぬ不確定を以て対象を拘束・破壊する、幽世の者への特攻攻撃——影魔術。

「影は虚数魔術、いや虚数空間から漏れ出たものにすぎない。虚数空間から必要に応じて影を引きずりだして使っているっていうのが正しいの。ま、虚数魔術としては初歩なんだよ」

碓氷明が大西山において放った「フィンの大砲」とも呼べる一撃は、

この初歩の魔術出力を限界まで上げただけであり、難度としては易しい方に入る。ただ出力の大きさが破格だっただけである。髪の毛長い明はにつこり笑って、一成に問いを投げた。

「時に一成、あなたは数学Ⅱを勉強したかな？数学における虚数の概念はわかる？」

「……二乗したらマイナスになる数のことだろ」

「よくできました。すごい」

そう言われても一成としては完全に馬鹿にされているようにしか感じられない。明自体にもとぼけたところはあるのだが、それと髪の毛長い明は性質が違う。やっぱり、これまでの碓氷明とこの髪の毛長い明は別物のように思える。

となれば、いままでの碓氷明は髪の毛短い方なのだろうか。

「もちろん魔術の方では違うものだけど、名前には重要な意味がある。二乗したらマイナスになる数は自然界に存在しない。ならなんでもんなモノが必要とされたのか？簡単にいえば便利だから。虚数というものがあるとすれば、何次の方程式だろうが解があると証明されているよ。今の量子力学には虚数の存在が欠かせないし、虚数時間の概念で宇宙の開闢を説明することもできる。虚数を仮定することで、いかなる問題にも答えを出す——それが虚数の威力なんだ」

「……あなた、話が長い」

うつつとうしそうに、髪の毛短い明がつつこんだ。しかし片方の明は気にも留めない。

「さて、いくら便利でも虚数はない。少なくとも物質の世界で存在するものではないんだ。ないのにあると仮定されるもの——それは、死後の世界にも似ていない？世界の裏側とも星幽界とも違う、この物質界の裏側に張り付いている虚数空間。それにアクセスする力こそが架空元素・虚数魔術の真髄だよ」

バーサーカー戦後、共闘することになった一成に対し、明はここまでの説明をしてこなかった。それはする必要がないと思っていたこともあるが、同時に魔術とは秘匿するもの——同じく魔道を目指す者であっても、他家の人間に易々と自身の魔術を披露するなどありえ

ないと思っていたからでもある。しかし、ここ至っては是非もない。「虚数空間っていうのは、この物質界とは時間の流れも空間の概念も異なる世界。虚数の使い手はこの空間にモノを放りこんでタイムカプセルみたいにしたたり、自分自身が空間に入ることでも物質界のある場所から別の場所に現れたりとか、空間転移の真似事もできる」

前述したが、空間転移の真似事にはかなりの制限がある。虚数空間に飛び込むことは——物質界から物質界ではない場所に行くということは——一度死ぬことにも等しい。そして物質界に戻ることはもう一度生まれること。

また、物質界に現れる際に座標を正確につかめなければ、土の中に出現したりコンクリートの中に出現したりすることもある。勝手に知った場所でなければ、むしろ大惨事を引き起こす。

「で、やっと私の今の状態の話になるんだけど。さっきも言ったように虚数、いや架空の数の真価は「いかなるものにも答えをつける」と。架空、つまりは想像——虚数空間において、私は——そのオ리지ナルの私は「未来の理想の自分」を想像したの。想像してその通りに理想の在り方とその魂を偽造した」

悟がもう話についていけないのは当然としても、一成も既に理解の外にあった。魂の偽造とさらりと明は言ったが、それはとんでもないことなのではないだろうか。

しかしよく考えれば、既にキリエ——人造人間という錬金術の粋の結晶が存在している。

「ただホムンクルスの寿命が普通の人間より短いように、虚数空間で造られた魂もまがい物の域をでない。魂だつて腐る。それが普通の人間よりずっと早い」

一成は思わず息を呑んだ。そしてキリエを思い出す。普通の人間のようにしか見えないのに、そこにいるのは人造人間でありクローンのようなものである。しかし想像された明は一成の様子に頓着しなかった。

「虚数空間で魂と体を想像して、本来の私の魔力を楔に物質界へ叩き込んだ。魂と体を想像しても、それそのもので存在できるのは虚数空



間だけ。物質界で活動させるには確氷明の魔力という物質界と虚数を繋げる楔が必要不可欠。こっちの私はある意味——セイバーと同じくサーヴァントみたいなもの、と言えなくもないね」

説明をする髪の長い明が「魂の偽造」イマジナリ・ドレイブで造られた理想の明で、髪の短い方が「大本の魂を持つ」明ということになる。

つまり、二人は同一人物だがあえて本物と偽物を分けるなら髪の短い明が本物で、長い方が偽物となる。想像の明は、オリジナルの明なしでは存在できない。ゆえに河原での戦いで——先に物質界へとあらわれた想像の明は、虚数空間にいたままのオリジナルを引き戻して来ざるを得なかった。あくまでも自分が存在をし続けるために。

その時、セイバーが困惑した様子で問いかけた。

「……しかし明、どうしてそんなややこしいことをした？」

「言ったでしょ？この私は「未来の理想の明」——そのオリジナルのおぼこい明が「こうあれたらいい」と想像した姿。今の自分の魔術ではシグマ・アスガードに勝てないと理解した確氷明の窮余の策ってことだよ」

「理想、とは魔術の腕という意味でか？」

「第一にはそれだよ。だけど魔術は精神が強い影響を及ぼすから——人格も「こうあればいい」という理想に基づいている」

ならば想像された明は「明がこうなりたい」と願った姿ということになる。なんとなくセイバーと一成はまじまじと髪の長い明を見てしまったが、その時彼女は伸びをして不意に口を開いた。

「にしても、私が二人じゃ呼び分けに困るね。明の名前はオリジナルのだし、茜とでも呼ぶ？」

「ちよっ……い！」

オリジナルの明が急に声を上げ、想像の明を遮る。「それは、だめ。

影明とか、想像明イマジナリとか、そんなのでいいでしょ」

「ま、何でもいいけど。好きに呼んで。わかればいいよ」

想像明はひらひらと手を振って、ソファに深くすわりなおした。セイバーはじつと二人の明を見比べたが、ようやく概ね納得ができた。

だが、普通に考えて同じ人間が二人いるということは異常である。

何か後々、明に酷いフィードバックのようなものがあるのではないかと気にかけて。

セイバーとて、魔術が自由自在に何でもできる業ではないことは承知している。だがセイバーの不安も想像明はどこ吹く風で、オリジナルの明は穏やかならぬ目でもう一人の己を見ている。想像明はソファから立ち上がり、勢いよく両手をテーブルについた。

「さて、碓氷明が二人になった話はここまで。まずは悟さんと一成から、この屋敷に何が起こったのか教えてもらおう。その次に私から、女魔術師シグマ・アスガードの正体について。そして最後にセイバーからライダーの対抗策について。それを踏まえて、対策を考えよう」

一成やセイバー、悟に異論はない。ただ言葉少ななオリジナルの明が気にかかっていたが、当の彼女も流れ自体に文句はなく頷いていた。

明、一成、セイバー、そして今は無きアサシンが教会へ向かった後に碓氷邸に姿を現したのは、御雄神父とその娘の美琴であった。狙いは聖杯たるキリエであることは明確だったが、それに加え神父の様子からして碓氷邸にある何かも目的であるようだった。

それに加えて明とセイバーが驚かされたのは、神父の聖杯戦争についての動機だった。戦争をするために戦争をするなどと、およそ理解の範疇を超えていた。一体神父の中の何がそうさせるのか全く分からない。明と神父の付き合いは長いとはいえ、それでも聖杯戦争準備期間の三十年を超えることはない。

出会った時には、既に神父は戦争を画策していた。

「全く意味がわかんねーけど、聖杯戦争で聖杯戦争を起こすなんて絶対ダメだ」

一成が言うまでもなく、この場の全員がそれに同意している。しかしその思いとは別に、想像明はその願いが実現される可能性について考えていた。

大聖杯に魔力が充填されるのを何年もかけて待ち、仮に聖杯が使用されずに終わったとしても——それは冬木の第四次と第五次であるが——すぐに戦争が再開されるとは思えない。既にサーヴァントを召喚した分だけ、魔力の充填が必要になる。

(……神父は、キリエ以外にも碓氷の家に目的があつた……)

聖杯戦争が本格的に始まる前、父親から送られてきた鍵。碓氷が日本に移ってくるときに持ち出した礼装の特質は「持ち主の願いを叶える」こと——ただそれはあくまで神代の話であり、現代においてはその機能まで再現はできず別の用途の魔術礼装になつているのだが、それでもあれは願いをかなえるモノであつたのだ。オリジナルの明は頭を振つた。

「……とにかく神父を止めるよ。だけど、たぶん美琴は知らなかつたんだろうね。神父がこんなことを考えていたなんて」

今も庭に野ざらしにしている、変わり果てた修道女のことを思う。神内御雄は見た目はどこからみても敬虔な神父だったが、今の状態を鑑みれば一体何を思つて美琴を引き取つたのかわからない。一体美琴は意志を奪われ操り人形にされ、息絶えるその時に何を思つていたのか。

「そのところにしときなよ、<sup>わたし</sup>あなた。今は感傷に浸つてる場合じゃない」

冷酷なまであつさりと、想像明はオリジナルの心を読んだように切り捨てた。オリジナルの明も、一成や悟もその態度には反感を覚えただが、言い分は決して間違つていない。こほんと咳払いをして、想像明は話を続けた。

「で、何故神父と美琴が私の許可なしに屋敷へ立ち入れたのか。管理者の結界は何代にも渡つて強化されてきたもので、一朝一夕にして破られるものじゃない。だけど謎は解けてる——ライダーの宝具だよ」想像明の言葉の意味。ライダーの宝具である断絶剣は、概念をも断絶させる。その古い神秘を秘めた剣によって、碓氷家の結界はあつさり破壊されたのだ。

世界を斬る剣であるそれは、宝具開帳もせず結界を斬ることもた

やすい。それに教会でライダーと見た時、最初彼は剣を所持していなかったことと、協会にて明が感じた衝撃があったこと——結界破壊による魔術回路へのフィードバック——も証左である。

しかし一成が今気にかけていることは、碓氷の結界が破られたこと自体よりも神父たちの襲撃の結末であった。アサシンが消滅し、その上。

「……キリエ、攫われちゃった」

あの時千里天通眼が使えるば、未来でもなんでも覗いてキリエを奪い返したのに。一体この目は大西山で何をきつかけにして動いたのかわからない。肝心な時に使えないのでは、いくら立派な能力でも無用の長物である。

一成の言葉に沈むのは、悟も同じだった。キリエを守るべく動いた彼にとつて、近い年ごろの娘を持つ彼にとつて心痛事だった。アサシンが命を懸けてくれたのに、そのかいもなく少女は攫われた。

「でも殺してはいないはず。小聖杯の本体はキリエの心臓だけど、他の魔術師がいるならキリエを殺して心臓をそれに埋め込むつてもあり得る。でもそんなめんどくさいことするよりキリエ自体でいいしね。……ま、キリエの生死なんて今は一成が一番わかるでしょ」

びくり、というよりぎくりといった様子で一成はぎこちなく明の方を向いた。どうにもバツの悪い顔である。想像明はあえてそれには触れず、意地の悪い笑い顔のまま話を続けた。

「助けられるに越したことはなし。キリエは助けるとして——で、その神父と手を組んでいるらしいシグマ・アスガードだけど……あれは封印指定を受けた魔術師だった。というか、これはさつきと思ひ出すべきだったというか、家にある目録を見ておくべきだった」

「封印指定って……一代限りの特異な魔術師に与えられるっていうヤツだろ？」

「アスガード家、いやアスガルド家。かつて碓氷の大本にして、今は分裂した大家の第一位。碓氷の大本は北欧の神代から続く大家で、あの女はその血縁。ウチの本家は元々神降ろし——要するに巫女の家系なんだけど、あの女の家は特にその血を色濃く持っている。でも神代

から伝わる神落としての魔術を持っていても、歴代受け継がれるものだからそれで指定を受けているわけじゃない」

ならば彼女の魔術の真髄は何か。これまでの彼女の魔術を振り返ってみると、まずは時計塔から送られてきたハルカを下し操るほどの洗脳・暗示の魔術、明に見せた重力操作に陰陽術と全く一貫性が無い。

陰陽術に至っては魔術基盤そのものが異なり、北欧の魔術を専らとするシグマでは絶対に使えるはずがない。にも拘わらず使えている事実を鑑みれば、それこそがシグマの特異さである。

「……あの女の力に検討がついたのも、遠縁という魔術的に近い位置に私がいるから。っていうかわかったところかどうかにかできるとも思えないんだけど、今のところ」

腕と足を組み、眉を寄せて悩む想像明を焦れた一成がせつついた。彼が焦っている理由は敵の能力とは別の話なのだが、心のままに急いだ。

「とりあえず言ってみろよ碓氷、もしかしたら俺やセイバーでも何か気づくかも知れないだろ」

「……まあ、言うよ。簡単にいえばあの女の魔術はたぶん吸収なんだ。いや包摂かな」

「……包摂？」

碓氷の元は巫女の家系であると、先述した。遠い昔北欧の巫女はヴォルヴァと呼ばれ、ヴォルヴァの女の周囲にさらなる巫女を配置し歌い踊り、己の体に神霊を降ろす。その時巫女が持っている己の魂は限りなく薄まり、神霊に肉体を明け渡すのである。

よってすぐれたヴォルヴァの条件には、己の魂を極限まで希薄化させる才能——短時間でも自我を無くす才能の有無がある。

しかし魂を希薄にしながら魔術行使後に己を保つには、高度な精神干渉阻害魔術の行使が必要である。それを持たずして降霊を行った後に待っているのは、魂を失った抜け殻の体だけ。

碓氷の元の大家は大勢の女を廃人にし、体を改造して研鑽を続け、神代からの業を継いできたのである。

魂とはそもそも記録である。肉体に依存せず、物質界の上の星幽界にあるもので永劫不滅の存在であるが、肉体なしに物質界にとどめることはできない。肉体があれば記録を肉体で再現するが、代わりに肉体に固定され、肉体とともに劣化し滅ぶ宿命を持つ（ゆえに肉体なしで魂を物質界にとどめる業があるとしたら、それは真の不老不死となる）。

その魂が薄いということは、記録が薄い——記憶と人格さえも薄いということ。だからこそ己れ以外の何物かである神霊の寄りしろとしては優れている。

「あの女、シグマ・アスガードはその手の巫女だと思う。むしろ巫女としてその性質を生かしているんじゃないやなくて、その性質を以て魔術を成している。多分、他の魔術師の魔術を受け入れる魔術。ただ具体的にどうやるのかまでは……。魔術刻印を奪うのか、魔術を見て魔術式を解析して取り込むのか」

明にまわりついていっているのも、明の虚数という特異な体質と魔術を欲しているからとすれば説明はつく。そういう意味では、千里天眼通に目覚めた一成もそれを知られたらまずいことになる。

「……何度もここに聖杯戦争を起こすことが本当にできるとしたら、魔術師も続々とこの地に集まる。そうしたらあの女は好きだけ魔術師を影から襲って魔術を吸収できる——ハルカ・エーデルフェルトにそうしたようにね」

おそらくシグマと神父は最初から結託していたのではない。神父は明の父影景と親交のあったハルカ・エーデルフェルトを以前から知っていた。当初から操られていたと思われるハルカ・エーデルフェルトに対し神父は違和感を抱いたのであろう。

「神父の願いをかなえた後で聖杯を我がものとしていいと思っているかもしれない——とにかく、あの女に関する対処はもう少し考えてみる。今はなんとも……。強敵であるとしたか」

オリジナルの明に比べて自信ありげに振る舞う想像明も、強い言葉を避けている。今この中で最も魔術に長けた者は明であるがゆえに、誰もそれに意義を述べなかつた。想像明は周囲を見計らい、最後にセ

イバーに目をやった。

「……で、セイバーだけど……」

明二人、一成、悟の目が彼に向いた。あの白いライダーとの戦いに向かい、無事生還した。しかしセイバーの顔色と様子をうかがうに、よい話が出てくることはなさそうだった。

「俺は明を連れ去ったライダーを追い掛け、交戦した。結局明は自力で逃げ出せたからよかったが、こちらの戦績はよくはない。むしろあれに見逃されたに近い……それに」

セイバーはそう言つて、宙から草薙剣を取り出した。白銀に輝く両刃の剣はいつもと全く変わらない。だが、セイバーは重々しい口調で告げた。

『『全てくさなぎのつるぎ翻し焰の剣』が使えない』

「？魔力不足で発動できないって話じゃなくてか？」

一成の疑問はまっとうだが、それだけならセイバーはわざわざ話などしない。

「違う。恐らく魔力が戻ろうと俺は全てくさなぎのつるぎ翻し焰の剣を使うことができないだろう。現に少量の魔力を流しても、剣に熱が少しも発生しない」

セイバーは草薙剣を「少量魔力を流せばホツカイロ、もう少し増やせば野菜が良く切れる」と言い、その通り彼に宛がっていた部屋は暖房を一切使用せず、草薙剣で暖を取っていた前例がある。一成、明、悟はセイバーの持つ剣に触れたが、それは彼らに金属の冷たさを伝えるだけだった。

「え……？何で」

「原因はわかっている。教会で放たれたライダーの宝具のせいだ」

神秘はより大きな神秘の前に打ち消される。教会での宝具の撃ちあい——幻想返しくさなぎのつるぎの全てくさなぎのつるぎ翻し焰の剣とライダーの剣神。あの時に草薙剣は本領を發揮することなく、相殺に終わったと思っていたのだがその実撃ちあいに敗れていた。

その時に、既に『全て翻し焰の剣』は使えなくなっていたのだ。

「フツ、というのは刀剣でモノを斬る様のことだ。布都御霊剣はこれ

までを断絶し、新たな世界を切り開く断絶の剣であり開闢の剣。アレは『断絶』という概念を内包した剣であるがゆえに、形のある物質に限らず概念や縁のようなものまで断ち切る」

だから、とセイバーは繋ぐ。

「あの宝具の直撃を草薙剣で受けて敗れた為、俺と草薙剣を繋ぐ伝説・由来が断ち切られてしまった。今や草薙剣は通常の剣としては使えないが、伝説の具現たる宝具の発動はできない。今は全て呑込みし氾濫の神剣しか使えない」

全員、黙りこくった。教会での宝具の撃ちあいを見ていたのだから、一成と明はライダーの真名についてはわかっている。

布都御魂剣の担い手で召喚が可能な英霊となればそれはただ一人。

九州・日向の高千穂より発ち、大和を征服し橿原宮で即位した開闢の帝。両親を神にもつ、神代と人代を結ぶ者。

その名を始馭天下之天皇——初代天皇・神武天皇。またの名を神日本磐余彦尊。

父親は天照大御神から四代目の彦波瀲武鸕ひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと草葺不合命、母親は玉依姫命——海神の娘という、正統な神の系譜に名を連ねる両親のもとに生まれた限りなく神霊に近いサーヴァント。

ライダーこと神日本磐余彦尊の宝具『開闢せし断絶の剣神』は、セイバーの『全て翻し焰の剣』と激突し打ち勝った。

布都御霊剣といえ、建御雷から神日本磐余彦尊に下賜された神剣。いや、一説には刀剣の神威を現した剣、剣自体が経津主神という建御雷と対になる神だとも言われる。

そしてその通りあの剣は剣そのものが神霊級の力を持つ代物である。

「……マジで？」

「認めたくはないが事実だ。言い訳のしようもない」

暗い雰囲気部屋に満ちる。セイバーはそのまま二つ目の報告をする。

「俺はその断絶剣によりマスターとパスを断ち切られた。だが、それは再度の契約によって修復されている」



「……それは多分、私とセイバーは令呪の一面を使って繋がりを強化していたから見えただと思っ」

剣の力が断絶であっても、捕えることができなければ断ち切れる説明が見つからない。やたらめったらマスターとサーヴァントのレイラインを断ち切られては、一瞬にして聖杯戦争の決着がついてしまうだろう。

「……だからもうレイラインが断ち切られることはあり得ないと思う。だが、あれを倒せるかといえば、難しい」

セイバーは僅か数十分前の戦闘を思い出しながら、苦々しく口を開いた。

「アレから直接聞いた話だが、あれはもうマスターを必要としていない。大聖杯に浸かったというライダーは魔力にも不自由していないから道具も回数制限なしに撃ち続けられる」

「……お前、どうやってそんなのから生きて帰ってこれただ？」

「それは……俺の道具もあるが、大きくはライダーの方に要因がある。ライダーは、聖杯の泥がどうか真の姿を見せてやるとか言っ行って行った」

「聖杯の泥？キリエが語った以外にもまだ何か聖杯にあるっていうの？」

その時一成は、テーブルの上に置いたノートに手を伸ばした。神父が記した、古びて年季の入ったノートの中にこそ手がかりがあるに違いない。しかしパラパラとめくった程度では把握できないほど、中にはびっしりと文字が書き込まれていた。

また、見られてもどうということのない内容だから置いていった可能性もある。だが、今頼るべきはこのノートだけである。想像明は数冊のノートをひとまとめにして膝の上にかかえた。

「……後でこのノートの中身は精査するよ。とりあえず話はわかった——そして、大聖杯の場所も、推測はついてる。教会を捨てハルカもなく、行く場所ならもう大聖杯の元だけだろうしね」

「それってど……もしかして……土御門神社か？」

春日の地における霊地は三か所。大西山、碓氷邸周辺、土御門神社。

春日教会も霊地ではあるが、上記三か所に比べれば格が落ちる。大西山はセイバーがさんざんに破壊しつつし、碓氷邸であれば明が知らぬはずはない。

となれば残りは消去法で土御門神社となる。

「大西山の地下にあるという可能性もあつた。セイバーが破壊したのは地上だし、霊地としては春日最大、キリエが陣取っていたのも、大聖杯の設置個所だったから——って理屈もある。だけどさつきライダーが飛来した方向は、教会から南。大西山から来るなら東からになるはずだし」

それに現在大西山には近付きにくい。セイバーによる山を變形させるほどの大破壊により、一般人は立ち入り禁止で昼間は作業の為に一般人が多くいる。教会の影響力とシグマほどの魔術師をもつてすればそれらを追い払うことなど朝飯前だろうが、すでに大西山の事件はマスメディアにも扱われており、他のニュースがないこともありテレビはその話題で持ちきりだ。今も警察が頻繁に出入りし、新しい情報が流されていることを鑑みれば人払いはされていないため、大西山は候補から外れる。

「……春日の管理者は碓氷。大聖杯設置の話が出たころはおそらく先代のおじい様のころだろうけど、冬木の御三家みたいに一から聖杯を計画したわけじゃないから、第一の霊地を費やしてまでとは思わなかったから消去法なのかな」

想像明とオリジナルの明は同じように腕を組んで唸った。ぶつぶつと「本当にお父様は私に真実を伝えていたのかな」と不穏なことを呟いていた。

しかし今考えても無駄だと思ったのか、勢いよく二人とも立ち上がった。

「…よし、話はここまでにしよう。一成、悟さんの傷の手当てをしてあげて。それからゆっくり休んで。今日またすぐにライダーが襲ってくることはなさそうだけど、セイバーは家の中でいいけど警戒はしているほしい。屋敷の結界が破れてるから」

言葉は見事にハモっていた。大げがはないものの悟は擦り傷を

負っているため、一成は静かに頷いた。それ自体に異論はないが一成が別に尋ねたいことがあったのだが、どうも明と明の様子がおかしい。少し剣呑な空気が漂っているように感じるのだ。

オリジナルの明が救急箱は棚にあるからとリビングの隅の棚を指さしてから、二人の明は揃ってリビングを後にしてそのままホールを横切り、外に出た。

12月7日⑩ 生き様は鮮やかにはほど遠く

「……碓氷さん、二人になってましたね」

腕に包帯を巻かれながら、悟は間の抜けたことを言った。魔術の徒ではない悟にとつては、先ほどの襲撃も今の状態も狐につままれたような感じなのかもしれない。

しかしキリエがこの家にいない——それだけで、一成と悟の間に漂う空気は重苦しいものだった。

「……大丈夫です。キリエはまだ生きています。それは確かです」

「それは、魔術的な何かで？」

「ま、まあそんなもんです。勘とかじゃあないです」

明には言つてなかったはずだが、彼女はとうにキリエと一成のからくりを見抜いているらしい。しゆるしゆると使い終わった包帯を巻きなおす音を最後に、手当は終わった。その間セイバーは身じろぎもせずに成り行きを見つめていたのだが、一成が救急箱を片付けようと立ち上がった際に呟いた。

「土御門、山内、ひとつ答えろ」

「……う・なんだよ」

「もしお前らも今の明と同じように、もう一人の自分が出てきたらどうする？もう一人の自分がいたとして、平穩にやっていけると思つか。もう片方は、自分の上位互換としても——」

そう言われると、二人とも自信を持つて領けなかった。同じ人間が二人になることは常識的にありえないため、全てを分け合うことになる。

ひとつの居場所に二人の人間がいる。その想像に至った時、一成が声をあげると同時にセイバーが立ち上がった。

今、二人の碓氷明は二人つきりで庭にいる——

「……庭の碓氷達、大丈夫か？」

「不安だ。俺が見に行つてくるから、お前たちはここにいろ」

表情は変えないが気遣わしげなセイバーは、一成たちを残して庭へ

と向かった。再び沈黙が戻った中で、一成はてきぱきと救急箱を片付けた。

一成はキリエの視覚を通して碓氷邸での戦いの一部始終を目撃していたのだが、確かにその中で悟はキリエを助けようとしていた。

彼の奮闘は、結果的にキリエを助けるためには役に立たなかった。

「……土御門君」

「?何ですか」

「ごめん」

「キリエは攫われたことは、悟さんが謝ることじゃ」「それもだけど、あの戦闘に飛び出したことを謝りたい」

一成は一瞬首をかしげたが、すぐにその意味を理解した。大西山の戦いで一成たちが救った悟の命だが、今ひとたび非力にも関わらず飛び出し危険にさらしたことを謝っているのだ。

仮にアサシンがまだ存命だったら、悟の行動を褒めはしないだろう。けれど結末が、かつての会社のように報われないものだったとしてももう後悔はしていない。たとえしなかったとしても、しなかった後悔を抱える。

どちらにしろ後悔するなら、自分の選んだ後悔を抱えて生きる。

「……はい。無茶はしないでください」

一成はあまりの説得力のなさに居心地を悪くした。無茶については一成も人のことを言えない。

「……キリエさんをお願いします」

その願いに、一成は頷いた。

キリエだつてまだ死ぬ気はないことを、彼はもう知っているのだから。

夜は静まり返っていた。ただただ冷え込んだ魔術師の庭の隅に、二人の次期当主がたたずんでいた。

二人の前には無残に刀に貫かれ、ボロボロになって息絶えている修道女の遺骸があった。

「levitt. laajennettukompleksitasoa. Ta

自らに語りかける詠唱に伴い、その遺骸は見る見るうちに粒子となつて消え去つていく。最後には跡形もなく、衣服ごと消え去つた。

これは葬送——一般人に説明できない方法で殺害された遺骸は、警察や役所に届け出ても説明が難しい。不意の事態で不運にも巻き込まれてしまった一般人を殺害した場合などは教会と組んで揉み消しているのだが、神父を頼れない今となつては手間が多い。

遺骸は明で始末し、世間的には行方不明で方をつけることになるだろう。

明二人は静かに冥福を祈り、手を合わせた。神内美琴が存在した証拠は行方不明のまま、彼女が存在した証は戸籍と、明や神父の記憶の中だけになる。

——生まれたときに母が死に、姉の自由と魔術師としての未来を奪い、友人を死に追いやり、家政婦を殺し、そして十年の付き合いになる女が死んだ。

神内美琴が御雄の養女となつたのは、およそ十年前。明が十歳になるかならないかの時で、美琴は十五歳だった。管理者の確氷と春日の聖堂教会は友好的な関係を継続しており、同性で年も近かつた明と美琴は自然と絡むことも多かつた。

年が上だつたこともあるが、大きくは性格的なことで美琴がひつぱり明がそれに従う形になる事が多かつた。美琴の押しの強さと大雑把ぶりに辟易することもあつたが、良くも悪くも明の半生を知っている相手であり、神父よりははるかに気の置けない人間であつた。

聖杯戦争にだつて立場は違えど彼女は本気で「無事に終わらせる」ことを願つていたのである。

彼女に非はなかつた。運がなかつただけだ。

「何、まさか泣いてるの」

声を発したのは、想像明である。オリジナルの明は声を上げずに目を開いたまま、涙だけを流してた。それを拭いもせず、もう一人の己を睨みつけた。

「……悪い？」

「別に。でも今は泣くよりも、決めなきやいけないことがあるでしょ。

シグマ・アスガードについてね」

オリジナルの明は乱暴に目元をぬぐうと、厳然たる事実を告げた想像明を見据えた。

シグマ・アスガード——碓氷の大本の大家に連なる、碓氷の血縁にあたる魔術師。先ほどまで戦っていた彼女は彼女に化けさせられていた他の魔術師であったことからして、昼間に出会った彼女さえも本体ではない可能性もある。

ということは、シグマ本体は大聖杯の設置地において、魔術工房化を進めているに違いない。

碓氷の屋敷が明にとって要塞であるように、大聖杯設置個所はシグマの要塞になっているかもしれないのだ。

想像明はゆつたりとした足取りで噴水の周りを歩きながら笑んだ。

「率直に言つて、私あなたより強いしこのまま激突したら死ぬね」

魔術師の力量としては、明の理想である「想像明」は今の明よりも遙かに格上である。虚数空間を通過することによる空間転移と魔力の可逆運用、使つてはいないがノタリコンによる魔術の早撃ちも自在。（空間転移は、大西山や大聖杯の周囲ではうまく使えない。魔力の濃すぎる場所だと明自信の魔力に影響を及ぼし、虚数空間から帰還する際の座標特定が狂ってしまうためにあまり意味がない）

しかしその想像明をもつてしても、シグマの本体の降霊術に適わない。

ただ戦う術がないことはない。その案はオリジナルの明にも想像明にも既にある。だがそれは——オリジナルの明が唾を呑み込んだ時、もう一人の明は人差し指を向けていた。

「私を殺す？」

「——!!」

空気が凍り、呪いは既に封を切られていた。弾丸よりも光の速度にも近い呪いが放たれた、が、それはオリジナルの明に激突する直前に雲散霧消した。

一息の間に割り込んできたセイバーの対魔力によって、彼に激突した瞬間に無効化されたのだ。

「やめろ！」

「セイバー!?!」

蒼白な顔をしたセイバーが、オリジナルの明を守るように立ちはだかる。剣は出さずに素手でもう一人の明をけん制するが、襲おうとは思っていない。

パスがつかないでいるのはオリジナルの明だが、二人とも明なのだ。

想像明はつまらなさそうに指を下ろすと、ふと話を変えた。

「……ねえ、セイバーはやっぱりそっちの私の味方なの？」

「は?..」

オリジナルの明の身体は魂も大本の明であり、想像明は体も魂も虚数による偽造である。どちらが明かと言われれば前者であろうが、後者を明ではないと言えるのか。

「俺は明の味方だ。だから明が明を害そうとするなら俺はそれを防ぐ」

「じゃあ、そっちの明が私を攻撃したら護ってくれるの?」

「そうだ」

セイバーは交互に二人の明を見た。真面目な顔のまま二人に注意を払っていたが、殺伐とした雰囲気はない。

「同じ人間が二人、というのは普通の状況ではない。だがそれでも——その状態になっても、お前が生きようとして今ここにいる、という事実のほう俺はずっと喜ばしい」

その答えに息を呑んだのは、どちらの明か。

架空疾走・虚数の魂（イマジナリ・ドライブ）は、元々明の魔術師としての修行用に明の父が考えた魔術である。元々稀な素質の架空元素は修行が難しく碓氷の家でも虚数使いが過去にいたわけではなかったため、どうやって修行をするかがネックだった。

そこで虚数世界で「想像上の自分（虚数の魔術を高レベルで習得した自分）」を仮定し一時的に物質界に作り出すことで、その自分から手ほだきを受けて修行し、その先への次元へと到達できる。

つまり自分自身を教師・対戦相手にしてレベルを上げていくための



魔術なのだ。

自分よりレベルの高い偽造の自分を呼ぶことになるが、万一偽造の自分がオリジナルに牙を剥いても問題はない。なぜなら偽造の自分は虚数空間の生物であり、物質界にて存在を保つにはオリジナルの魔力（正確には虚数使いの魔力）が必要不可欠のため、魔力供給を絶つてしまえば偽造の自分は一秒と持たずに消えるからである。

効率よく魔術の改定を上げるための魔術——しかし、明は今まで使ったことは一度もなかった。完璧に成すにはまだ修行が足らなかった——否、分身を作り出した後のことを恐れていた。

明あつての二重存在とはいえ、別個の意思と体を持つ一人の人間。議論を交わせば意見は対立し、好みも違う別の人間を——最終的には殺さなければならぬ。

二重存在の維持にはそれなりの魔力が必要であり、用が済んでも維持し続けるのは邪魔でしかない。仮に魔力を費やしたとしても、偽物の魂は早々に寿命を迎える為に分身は数カ月命だ。ゆえに明は、この魔術の実践を拒み続けてきた。

だからこの魔術を使った瞬間に——明は強く思っていた。

今ここで死ねない——たとえ他の誰かを殺すことになるうとも、と。

己であり他人でもある明を殺しても生きてやる、と。

想像明はセイバーを挟み、大本の明へと告げる。

「……美琴が死んだばかりなのに、今度は私を殺すの？ 私あなたの人生、ほんと周りを殺してばかりだよ。いや、私は私あなたの理想でもあるんだから、今度は自分の理想さえも殺すの？」

そうして想像明の話は、セイバーがわりこんでくる前の事柄に戻る。

「うちにある礼装、偽造の魂と体——それを考えればもしかして私あなた、最初から私を殺してシグマを倒すつもりだったのかな？」

オリジナルの明は唇を引き結んで、何も言わないでいたが深く何度も深呼吸をした後に顔をあげた。美琴を追悼した時の涙が、まだ瞳には残っていた。

「——そうだよ。私には死んでもらう。シグマに勝つために、聖杯戦争を無事に終わらせるために」

その眼は、

「そして——私が生きるために」

迷わなかった。

「——それはご立派だけど。わかっているでしょ、私はこの先生生きてても一般人になれやしないし、きつとまた私のせいあなたで人は死ぬ。その度に罪悪感に苛まれ、己の価値を失って、魔道のためだけに生きるの？」  
想像明が言うことは、オリジナルとて骨身にしみてよく分かっている。そういう体質と魔道の家に生まれてしまったのだから、今までの二十年近い年月をこうして過ごしてきたのだから、これからそれが一気に変わることはありえない。

きつと自分は苦しむだろう。きつと自分は罪悪感に苛まれるだろう。それが生きている限り逃れられない運命だからこそ、諦めていたのだ。

しかし、姉から魔導を奪ってしまった責任と、魔導の家に生まれた責任を果たすためだけに、自分は今まで生きながらえていたのか？

それは違ふと、明は思う。

——顔も覚えていないが、自分を産み落として死んだ母。

——シヨップピングセンターの屋上から落ちる時、最後に見た姉の顔。

——雨の中、迫るトラックから自分を突き飛ばした友の姿。

——立ち入りを禁じられた部屋に飛び込んで、明を助けた家政婦。彼女たちは明を愛していたのだろう。

愛していたからこそ、全てを諦めていた明を哀しく思いどうにかしたかったのだろう。

——セイバーと会うまで、自分がそんな思いを人に与えていたとは露ほども思わなかった。

自分のことにはまだ価値をおけないが、それでも彼女たちが愛するだけのなものか己にはあったのだろう。

——たかだか二十年に満たない時を生きただけで、いったい何が決まるというのか。魔道など悠久に近い時をかけて根源を追い求め、それでも諦めず足掻き続ける学問であるというのに。

「生きるよ、私にはまだわからないことが多いから」

……自分はきつと、彼女たちのことを愛していた。愛した分だけ、喪失は深く鋭く刻まれた。このようなことが死ぬまで続くと考えると吐きそうになる。

それでも、彼女たちが救ったこの命に何かあるのか見極めるまで、死にたくない。自分で自分を認められるまで、死ぬわけにはいかない。

結果としてこの生に何も見出せなくとも。

己に引きずられて死を迎える者がいても。

「この先、私の生が悲劇で終わっても」

鮮やかに生きることとはできない。自分の道は信じていない。本当にこれは正しいのか、とひたすら自分に問いかけながら、暗渠を這いつくばって進み続けることになるだろう。颯爽とは程遠く、泣きべそをかきながら生きていく——。

想像明は呆れた、とばかりに溜息をつく。

「自分のことが嫌いで、自分の運命も嫌いで、自分の価値があるのかどうか知るために生きるの？それが報われることがあるかわからないのに。貴方が生き続ける根源は、自分の価値を信じていないけどあなたを尊しとして死んだものがあるから、それを確かめるため。自分で自分を認めているわけじゃない」

それは想像明の言う通りだった。だから彼女はそこで肩を竦めた。

「フッフ、やっぱりお父様は慧眼だったね。魔術師の資質として貴重なものあなたを私は持つてる。自分以外のために先を目指し、自己よりも他者を優先し、何よりも自分を嫌いなものあなた。私が憧れていた人は壊れていないけれど、壊れている方が魔術師向きなの」

イメージするのは、最高の自分。

魔術的には今研鑽を重ねている術が使える自分を想像すればよかったが、人格面で最高の己を想像したことがなかった。

ゆえに明は、過去の中で憧れた人の人格を偽造の魂に反映させた。まだ魔術の何たるかを知らず、単純に憧れていた人と同じことができることを喜んでいた時。

「明、こつち」と、幼き頃は手を引いてくれた人の似姿。

「——うん。私の死さえも連れて行くなら、殺すといい」

異常な状態でも生きようと思ったことがうれしかった、と告げたセイバー。オリジナルの明は申し訳ないと思ながらも、どうあっても生きるために己という別人を殺す。

納得した顔の想像明とオリジナル明の顔を交互に見て、セイバーは双方の腕を掴んだ。

「……お前たちは何か納得しているようだが、どういうことだ？ 想像明の命が長くないことはさっきの話で知ったが、殺す殺さないなど、「フフツ、いつもはさっさと殺せー！ って言うセイバーが困ってるなんて面白い」

「笑い事ではない！」

剣呑な雰囲気は消え失せた想像明は、のんきにセイバーの頭を撫でていた。彼女は軽くステップを踏んで二人から離れて、星空を見上げた。

「心配しないでよ、セイバー。人生が長い短いが問題じゃない——長いほうがチャンスが増えるからいいけど……大事なのは後悔してもやりきること」

空は遠く。星は遠く。理想を殺し、果てに己は何を求めるのか。生きることの方が、死ぬことより多くの苦難を孕むこともある。

「それに、意地の悪い言い方をしたけど私は殺されるんじゃない。だって私はあなた生きるのだから。……じゃ、ちよつと一成見てくるからよろしく」

「ちよつ」

オリジナルの明が声を上げたのにも取り合わず、想像明はすたすたと屋敷の玄関へと向かった。少々人を食ったようであり、マイペースであり、言いたいことを言う。

今ここに残った明が臨んだ理想の姿が、あの明。セイバーは少々あつけにとられながら、残った明を見返した。

「もうひとりのわたし、私が昔好きだったお姉ちゃんによく似てるんだ。まあ、私の理想で人格を造ってるから、そりゃそうなんだけど」もし、あの明を造った時に無意識のうちに「死ぬことさえもよしとする」と想像していたとしたらなんと自分は底意地が悪いことだろう。またしても嫌気がさすが、それでも戦うと決めている。

まだ諦めたくない。まだ死にたくない。たとえ無価値に終わるとしても、這いつくばって前のめりに生きた末には自分を認められると思うのだ。

「セイバー、私は魔術師になるよ。もちろんそれは魔導の道でないと体質的に問題があるっていうのが大前提だけど——そういう体質に生まれちゃったからこそ、中途半端はよくない。それに振り回されて終わりたくない」

この体質が運命を決めたのならば、それを超えられるのもまた己の身体でしか有り得ない。

いくら厭うとも己の身体と運命からは逃れられぬのなら、その道を真っ直ぐ突き進んでいくしかない。魔術師たればこそ、自分の理想己も殺し果せて見せよう。

「……」

セイバーの息が止まる。己も生まれてしまったことを悔むだけでなく、受け入れての生を突き進むことができたなら、何か変わっていたのだろうか。部下や妻が死に、それでも生き続けて戦い続けたら——己を認めることができたのだろうか。

無価値ではないと想えたのだろうか。

今やそれはわからない。何故ならセイバーの人生は終わっているから。

それでも自分の人生が、あの時に死に至る事が一番ましであったと

思いたくない。既にセイバーは明が今死ぬことを幸いとするのではなく、歩き続けることを喜ばしいと思っている。

「……たとえ無意味に終わるとも——お前の生には価値がある。少なくとも、俺にとつては」

明に会わなければ己の望みの深淵を臨むこともなく、本当に戦う機械になっていただろう。

己が戦うのは何のためか。愛おしき人々の願いを叶えるため。生きた先にある未来のため。東征に出た頃に、皆で生きて帰ると誓ったように。

結果として日本武尊はその誓いを護れなかった。

それでも——その旅路において、仲間たちの中で、最強の彼は希望であり憧憬であった。

生きているだけで、そこにいるだけで、人は誰かの希望になる。

今セイバーはかつての仲間が彼に抱いたものと同じ希望を、目の前のマスターに抱いている。彼は決して碓氷明の人生を見届けることはない。

それでも己とあまりにも似たマスターが、己の脚で歩こうとする決意をするのなら——それを護ることこそがセイバーの希望である。

「この剣は人を殺すためにあるのではない。この剣はお前を護るため、先を開くためにある」

「うん。よろしくね、セイバー」

二人は視線を躲して、僅かに微笑み合った。夜半も過ぎ去り、最も凍える時間帯であろうに明は不思議と苦には感じていなかった。

しかし彼女はなにやらせわしげに両手を組み合わせて手を揉み、セイバーから目をそらした。

「……で、さあ……、セイバーと私、パスは繋げ直してあるけど……魔力が伝わってないよね」

「それを言わねばならないと思っていた。現界はよくても戦闘ができない。しかし、どうすればいいのか」

断絶の概念を内包する剣により断ち切られたものは、二度とその繋

がりを回復することはないのだろう。少なくとも伝説の担い手である神武天皇が消滅するまでは。

双方の同意と詠唱による因果線形成で、憑代としてのサーヴァント・マスターの繋がりは回復できたが、肝心の魔力供給のパスがつからなかつた。

「……解決方法は二つある」

一つ目の方法はサーヴァントなきマスターとなった一成にセイバーのマスターになつてもらふこと。明は持っている令呪も彼に渡す。問題点は一成の魔力量で、明と比較すると十分の一以下になることだ。

セイバーは燃費がいいサーヴァントとは言い難く、その分戦力に不安がある。もしかしたらその点は解決されているかもしれないのだが、彼には眼の問題もある。

もう一つの方法は、明とセイバーが正規の方法とは別の方法でパスをつなぐことである。この場合セイバーにデメリットはないが、明の方に魔術師として若干の問題がある。

「……問題点とは何だ？」

「正規の方法じゃライダーの剣のせいで魔力供給のパスが形成できない。なら違う方法でパスを形成すればいい。……私の魔術刻印を使ってセイバーにパスを形成できる」

「……魔術刻印を使う、とは……」

魔術刻印が魔導の家が代々受け継ぐ研究成果の結晶だということ、セイバーは現界してから知つた。問題とは、三百年近く続く確氷の研究結果の一部を損なう点だつた。

「いや、工夫するからほんのちよつとで済むんだけど、0.5%くらいで」

明としては僅かでも刻印を損なうことが躊躇われるなら、そもそも案自体を出さない。正直、魔術に詳しくないセイバーに何も言わずに行うこともできた。しかし方が一、セイバーがあとからそれを知つた時を考えると先に言っておくべきだと思つたのだ。

セイバーは暫く黙りこみ、じつと明の眼を見つめた。星影の下で、

白い息が吐き出される。

「俺はお前のサーヴァントだ」

その言葉は、戦略的・戦術的観点ではなかった。これまで共に戦い続けてきたマスターと、最後までこの戦いをしたい。セイバーはそう思っている。

セイバーはいつも明のいうことを聞いてきた。

勘違いはあっても、彼はマスターたる明のためを思って不利益を排除すべく動いてきた。

しかし今、彼は自らの意思で明の不利益も承知で願いを口にした。

「明、どうした!？」

「え?」

セイバーは何故か狼狽して明を覗き込んでいる。何かと思ったが、言われてみれば明自身の頬が濡れていた。どうやら泣いているらしい。怪我でもあるのか、と狼狽するセイバーを抑えて明は涙をぬぐった。

「だ、大丈夫、どこか痛いとかじゃないよ。なんか、弟が、立派になっただけだ。たなつていうか……」

一瞬の間があき、セイバーは苦虫を五千匹くらい噛み潰した顔をした。

「……まさかとは思いますが、弟とは俺のことか?」

「え?他に誰がいる?」

最早否定し得ない明の言葉を受け、確信を得たセイバーははつきりと宣言する。

「いいか、前にも言ったと思うが、俺はこの姿で現界してはいるが死んだ年齢は三十路に近いのだ。つまり明よりも十歳近くは上だ」

「それは知ってるんだけどさあ……何だかんだ一成といい勝負というか……」

「……アレと同じか。頭が痛くなってきた」

セイバーは本気でげんなりしたらしく、がつくりと肩を落としていた。何分見た目から受けるイメージの威力は大きく、最初はともかく



気心しれた今となつては素直に所感を吐露してしまう明だった。

「え、えつと戦闘面では年上だなつて思つてるよ！年上つていうか経験あるなつていうか」

あまりフオローになつていないフオローをされ、セイバーは反応に困つた。むしろ戦闘面で土御門一成と言われたら、流石に心に甚大な傷を負いかねない。

それこそ自害案件である。

「……まあいい。それより、魔力供給のパス形成をしまおう。準備など必要か？」

そう聞かれた時、一瞬明は目を泳がせた。だがすぐさま頷き、いつも通りの口調でセイバーに告げた。

「……ちよつとだけ。私準備してから行くから、先に私の部屋に行つてもらつてもいい？服脱いで待つてて」

12月7日⑰ 続・夜更ける

——仮に無事に戦争を終えられたとしても、やることは山積してるなあ。

そう思いながらも、明の顔は笑っていた。一成の義手の作成依頼、春日内で起きた騒動——病院での惨殺事件に市街の殺人事件の後始末、ライダーの剣によって断ち切られた碓氷の結界の修復もある。その上、もし最後の決戦において使う魔術の如何によっては、時計塔に出向いての説明も必要になるかもしれない。

正味な話、明には高校を卒業した時点で大学進学ではなく時計塔へ留学する選択肢もあった。大学で経済を学ぶことは、一般世界で生きる方便を学ぶという意味では悪くはなかった。

だから父も大学進学を許可したのであるが、当の明はきつと理論的にその進路を選んだわけではなかったのだ。

時計塔に留学することになれば、本当に魔術の徒になるのだと。魔術の庇護なしでは生きれぬ体であることを知りながら魔術に生きることを拒み続け、中途半端なまま生きてきた。

——しかしそれも、もう終わりにする。

今明の手に握られているのは、一振りの剣。自分の部屋に向かう前に一度地下室に寄って取り出してきたものだ。

明は呼吸を整え、意を決して自分の部屋をノックした。

「セイバー、入るよ」

「ああ」

いつもと変わらぬ真面目な声を聴いてから、明はノブを捻った。

電気をつけた部屋の中に、明のベッドの上で、全裸で正座しているセイバーがいた。

「……何で全裸なの？」

「……服を脱いで待てと……!?!」

セイバーはベッドの上で片膝立ちになり、明の持つ剣を睨みつけた。全長は八十センチあるかないか、刀身は六十センチ程度の西洋

剣。刀身は、映り込む部屋の様子が箆笥の模様も判別できるほどに磨き抜かれている。しかもつとも目につくのは、柄の部分——目にも鮮やかな黄金である。

総じて芸術品と言っても差し支えない剣だが、セイバーの目つきは剣呑だった。

「……その剣は何だ？」

「セイバーの言いたいことはわかるけど、大丈夫だから。覚えてる？ まだ聖杯戦争が始まったばつかのとき、お父様から手紙と鍵が届いたの」

もう二週間は前のことになる。明がセイバーを連れて教会に向かい、ハルカ——既にその時にはシグマに体を奪われていたのだが——とランサーに会った日のことだ。家を出る時、明は手紙とそれに同封された古い鍵を受け取っていた。

「この鍵はね、確氷が大本の大家から分裂する前に、その大本の大家から盗み出してきた魔術礼装を保管する箱の鍵なんだよ。簡単に言えばウチのお宝」

この礼装を保管する鍵は、もうアンティークと言っているいい年代もので複製を作れない。それだけなら物理で箱ごと破壊する手もあるが、箱は明の父が魔術をかけたうえに魔術錠をかけているために生半な魔術師では破壊も開錠も不可能である。

そして手紙とともに鍵が送られてきたということは、父が礼装の使用を許可したということだ。この礼装が明に向いていることを父はよく知っている。

これを使うことになる筋書きを父が予想していたように思えたが、明はそれを否定するだけの材料を持たない。

基本的に確氷影景という男は、いつも明の予想を上回って——魔術師であり人でなしであり、賭け事が好きなのだ。

逸れはじめた思考を振り払い、明は剣を掲げた。

「セイバーの思っている通り、この剣はあんまり縁起のいいものじゃない。聖剣、神剣、その類とは真逆にある魔剣の類」

魔術刻印は代々受け継がれるものだとは前述した。その受け継がれる最初の魔術刻印のことを、源流刻印という。現代においては既に確立した歴史ある魔導の家から刻印の一部を株分けしてもらい分家となり、新しい魔術刻印を持つというパターンが多い。

しかし大昔の源流刻印は、魔術礼装や幻想種の欠片を体に埋め込んで核として作成されてきた。

そう、碓氷の源流刻印もその手法で生み出されたものであり、その核となった魔術礼装の黄金はこの剣の黄金と同質である。だから由緒ある品ではあるが紛れもなく「魔剣」であるがゆえに、生粋の神剣使いであるセイバーにはよくないものに見えるのだろう。

「今からパスを作る為に、私の魔術刻印ををちよこつとだけセイバーに移植するよ。刻印の大本と同質のこの剣を触媒にすることで、刻印に与えるダメージを軽減できるんだ」

魔術刻印を切り取って他者に与える、しかもサーヴァントになどは本来すべきことではない。それは先祖の研究を後退させることにはほかならないからだ。だがある一定以下の損傷に抑えることができる。ば、調律師の治療を受けて刻印を回復することができる。

セイバーは足を正座の状態に戻すと、静かに頷いた。

「……………わかった」

「あと全裸じゃなくていいから、下は穿いて」

明は机の中からろうそくとライターを取り出し火をともし。香料が混ざっているのか、微かに甘い香りが漂う。少しあいていたカーテンをきつちりと閉めて、電気を消した。

セイバーが何事かと思いつつ明を眺めていると、突如明が脱ぎだした。まずはタイツを脱ぎ捨て、スカーフを外してブラウスも脱いだ。

素足に膝上スカート、キャミソールのみである。

「……………何故お前も脱ぐ？」

「魔術刻印移植の為に移植者と被移植者の間で高い共感状態を維持する必要があるんだけど、そのためにはできるだけくつついてた方がいいんだよ」

明は恥じらいもへつたくれもなくさっさと自分もベッドの上に乗

りあげる。そして右手でセイバーの左手を、左手で彼の右手を繋ぐ。足を崩して座り、額と額がつくくらいの至近距離でセイバーを見た。剣は、明の太ももの上に鎮座している。

移植の儀式は明の専門ではないが、方法自体はわかっている。ただ移植するモノがモノであるだけに、失敗は命に係わる。

否、それは今更である。魔術師である以上、魔術の行使自体に常に精神の危機と死の危険は付きまとう。

——変なの。ちゃんと生きる、つて決めた途端に魔術が怖くなるなんてね。

「——明、手が震えている」

内心の動揺があからさまに体に出ている。この状態では移植を行えない。

「——あ、ごめん、ちよつと待って、」

深呼吸をして息を整え、呼吸を落ち着ける。暗闇の中で己の内面に意識を集中させる。その時セイバーが、小声で呟いた。

「……お前はその体を以て、例えばその道に、大事な誰かの死が転がっていくとしても生きていくのだな」

「……うん」

己の人生の価値をつけられるのは己だけ。自分を愛した人が価値を己に見出したなら、自分も見つけるために生きてみようと思う。結果は無為に終わるとしても、諦めるには早すぎる。

「……俺はそれに耐えられなかった。俺が生きること、大事な誰かが死んでいくことに。どうせ生き続けても、俺自体にも先はない。実際俺が伊吹山で斃れなかったとしても、どうなったかはわからないが……」

セイバーが望んだものは、最後まで手に入らなかった。誓いも果たせなかったが——その日本武尊の生に、価値を見出した者はいたのだ。

それは美夜受媛であり、かつての東征の仲間であり——誓いが果たせずとも、彼が生きていること自体が旅の希望そのものであった。

日本武尊が生きていること自体が生還の希望であり——この国の

未来であると。

「結局俺は人の願いを叶えたいと思いつつも、俺のことしか考えてなかったわけだ。俺が生きていることそのものが誰かの希望だと、考えたこともなかった」

「……サーヴァントとマスターはよく似る。そうだね、私も自分ことばっかだった」

もうこの体で生まれたのはどうしようもない。ならば——運命を規程するほどの力を超えるには、その力を以て成すしかない。明はそう思う。

「私は魔術師になる。終わりがどうなるかは、死んでみなきやわからないけど」

ふと気づけば、セイバーが笑っていた。

「……笑うとこじやないと思うんだけど……」

「いや、済まない。これでは弟扱いも仕方がないと思ったただけだ」

なぜそこで弟扱いが出てくるのか、明にはよくわからなかった。一方セイバーはまだくつくつと笑っていたが、顔を上げた。目と目がまともに合って、明は改めて気恥ずかしいと思った。

「俺は責任のない適当なことは言いたくない。だから、お前が納得のいく生を送れるかどうかは、結局お前次第だ。もしかしたら、さつさと死んだ方が楽な道かもしれない。それでも、戦うことを選ぶと言うならば——」

既にセイバーの顔は笑っていなかった。どこまでも真摯で真っ直ぐ見つめてくる瞳は、神宮での召喚を思い起こさせた。

「たとえお前が道半ばで倒れても、戦った果てに死を選ぶことになっても——」

そう、たとえその人生において望んだものが手に入らずとも。たとえ、道半ばで力尽きてても。

それまでの道のりが、全て無駄だったのか。

それまでの出会いが、全て価値のないものだったのか。

それまでの行いが、全て徒労であったのか。

それまでの己が、全て無に帰すのか。

「誰の為でもなく、お前がお前を認めなければならぬ」

そういうセイバーの顔は、思いつめたそれでも悔やむ顔でもなく、ただいつも通りだった。どこか達観したように長く息を吐いてから顔を上げた。

「長い話をしてしまった。頼むぞ、マスター」

「そ、そうだね。もうちょっと近寄って」

もうかなりの至近距離だが、儀式には共感状態を高めるために近い方がいいのだ。セイバーはおそろおそろ近付き、ほとんど抱き合っている状態になった時、明が奇声を上げた。

「ふぎやあー！」

「何だ!?!」

「髪の毛がくすぐったくて……」

明がひきつった声をもらすと、セイバーは呆れた様のため息をついた。明はこほんと咳払いをして仕切り直すと、既に夜の——魔術師の姿になっていた。

「Levinneisyys, alkun」

漸う明が儀式の詠唱を始めた。魔術のことはわからないが、その声音に動揺や焦りの類は読み取れない。よい感じなのだろうと、セイバーは思った。

「Pudota, pudota, varjominnunyhdistykäiskäily」  
降下、降下、私影、は全てを  
眼を閉じて何も見えないはずなのに、真つ暗ではない。体を包むのはぬるま湯のような液体。その中に浮かんで揺蕩っている。例えるならば暗渠。

この水の流れは今まで停滞していたように淀んでいたが、今は僅かに定められた方向があるように流れ始めている。そして視界は暗渠の奥深くへ向かっていく。

原初の世界は混沌だという。混沌とは暗闇を意味するのか、それとも光や闇などは表し切れないものなのか。揺蕩う世界はただ、闇。ひたすらに闇だった。しかし深き闇の中では、微かな光さえ際立って見える。

蛍光ほどに幽けき光でも、全き闇の中では大きな道標となる。

転々と灯る光はどこへ向かっていくのかわからない。

果てなき道の先までは見通せない。

一寸先、一步先、広がるは黒。それでも光が見えるならば、誘われる蛾のようにでも進む。たとえ光がなくとも、止まるという選択肢はない――。

何処からともなく、声が聞こえた。

「――待って、お姉ちゃん！」

「明、こっちよ！」

在りし日の光景を幻視する。仲睦まじい姉妹の映像――それが疾うに失われたものでも、もう戻らぬものであっても、大事な――の一部で――

「……あ」

急激に意識が引き戻され、セイバーの視界は明の部屋へと変わった。すぐ至近距離にいた明はいつのまにか少し離れている。

キヤミソールの右肩のストラップがずり下がったまま、気まづげに眼をそらしている。

その頬はほんのり朱に染まっている。

「……せ、成功したよ。魔力、流れているでしょ」

「あ、ああ」

セイバーの右腕に、令呪を思い起こさせる文様が浮かんで光を淡く放っている。それこそ明の魔術刻印の一部を移植したものであり、新たなパス。一成のモノとは違う甘い魔力が伝わってくる。

しかし、明は黙ってベッドから降りると、黙々と服を身に着け始めた。

「……明、何かあったのか」

もしかしてまた己は粗相をしてしまったのかとセイバーは不安になったが、明は小さくいや、とつぶやいた。

「……まあ、しょうがないんだけど、私の中、……見たでしょ」

「見たな。だが明、何故今更……むしろその恰好を恥ずかしいと思わない方が」



明の記憶。魔術師の体の中身。かなり明の内面に踏み込んでいることは事実だが、彼女の過去は今までも夢の形をとりセイバーの中に流れ込んでいた。

それを恥ずかしがるならば、土御門相手にもタオル一丁で平然としていられることを気にするべきではないのかとセイバーは思う。

「全裸なんて自分でも見られるんだから恥ずかしくないの！でも、過去の記憶はわかってるからいいけど……中身とか、自分でもよくわからないものを人に見られるのは恥ずかしいんだってば！」

「……よくわからないのだが」

正直明の言い分はセイバーの理解の範疇を超えていた。しかし魔剣を投げつけんばかりの照れ隠しで、セイバーは曖昧に頷くことしかできなかった。

明はまだほんのり紅い顔のまま、頭を振った。

「と、とにかくこれで魔力には問題ないから！一成の方はもう一人の私になんとかしてくれるから、今日はもう休むよ！疲れたし」

セイバーもいつもの衣袴に着替えた。明はさつさと部屋を出て行くようにしたが、セイバーはその腕を掴んで引きとめた。明は何事かと振り返った。

「——一つ、マスターに言っていないなかったことがある」

セイバーは自分の服の中から一つ的首掛けを取り出した。簡素な紐で結ばれていて、小さな袋がついている。その中から取り出したのは、古い木製の櫛だ。

「俺の宝具は草薙剣と天叢雲剣——だが、それとは別にもう一つ、宝具がある」

「それは」

「海に身を投げた妻の形見だ。俺の身を護る結界宝具」

セイバーにまつわる伝説で、櫛といえば思いつくのは一つ。荒ぶる海の神を鎮めるために、その身を投げた弟橘姫。人の命を捧げることが得た魔力は、日本武尊における最強の守護の力であろう。

明とて、当初はそういう宝具があることを勘ぐっていたのだがセイバーは一言も口にしなかった。ゆえに、そういう宝具はないと思つて

いた。

「昨日までこれを使うことを考えさえしなかった。だが、今日の戦闘で俺はこれを使った。しかしただ使うだけでは、あのライダーに届かなかった」

その時セイバーは己の決意を告げた。「だが——これにはもう一つの使い方がある。俺はこれを壊す」

宝具は一度限りの『壊れた幻想』フロックンファンタズム。英雄の半身でもある宝具を損ない、修復するためには長い時間を必要とする。生前からの宝、亡き妻の形見を破壊するとは——セイバーの過去を知る明は口ごもった。

「……それ、セイバーの大事なものなんですよ」

「そうだ。だが使う——マスターの方針に従ってきたが、基本的に俺は勝つためには何でもする者だ」

そう言つて、セイバーは珍しく笑つて見せた。勝つためには手段は択ばない。自分の目的を遂げる。セイバーの中で、それは今も昔も変わらない。

それでもこれほどまでに、この言葉を朗らかに言ったことはなかった。

戦況が有利というわけでは決してない。ただ、この戦いに勝てば——明には先がある。勝つても勝つても何もなかった、索漠たる戦いではない。たとえ道半ばにして倒れることになっても、生きることを選んだことに価値がある——かつて己が選べなかった選択をした碓氷明という女の未来を繋ぐための戦いなのだ。

「……それと明、ここを出て行こうとしていたが、ここはお前の部屋だろう」

「……そうだった」

\*

セイバーを庭へと見送つた後残された悟と一成だが、悟も怪我人であり先に応接間で休んでもらうことになった。また一成や明は決戦

を備え、さらに作戦会議をすることも鑑み、悟が食事の用意をすると言った。

明二人とセイバーの帰還を待ちがてら、一成はリビングのテーブルに置かれた古いノートの手を伸ばした。おそろく神父としてはもう知られても問題はない内容ばかりだと思われるが、それでも情報源である。

できるだけ早くノートに目を走らせて読むが、大体は「神父はこの聖杯戦争の発端の一人」だということの証左にすぎなかった。中身は神父が冬木の聖杯戦争について調べ上げたことであり、内容は仔細にわたっていたが、基本的にキリエから聞いたことばかりであった。

あまり意味はないのか、とノートを置こうとした時、一成の手はあるところで止まった。

「冬木の聖杯は、第三次の戦争をきっかけに汚染されている……?」

「いいところ読んでるね」

「うわっ!」

脇から顔を出したのは、年上らしく見える想像明だった。当然のように一成の隣に座り、彼そっちのけでノートに眼をやっている。

「おまつ、もう一人の確氷は!」

「んーもう少ししたらセイバーと戻ってくるよ。一成の方は私がどうにかすることになったから……ふうん」

「つーか俺をどうにかするってどういうことだ!」

一成は怒涛の勢いで想像明につっこんだが、彼女はどこ吹く風でノートの記事を読んでいた。挙句の果てに一成の手からノートをひたたくったのだが、彼女の眼差しは真剣そのものだったため、一成も雰囲気にもまれ様子を暫し見守ることとなった。

暫くの後、明はノートをテーブルの上に荒く投げ捨てた。

「……こりゃ神父、本当に聖杯が本物かどうかなんてどうでもよかつたんだね。聖杯戦争というバトルロワイヤルがきちんと開催さえされれば……」

一成がどういふことか問う前に、先んじて明が話し始めた。

「冬木の第三次の戦争で、私のアインツベルンはエクストラクラス——アヴェンジャーというクラスで、『この世全ての悪』なるサーヴァントを召喚した。けどアヴェンジャーは弱くて、直ぐに敗退してしまった。そして第三次の戦争は、小聖杯が途中で破壊されることで中途半端に終わった。……そして先に消滅していたアヴェンジャーは、その後大聖杯にとどまり続けることになった。だけど、このアンリマユというものはそもそも存在しない英霊だって」

明はノート本文を指さしながら、一成にひとつひとつ説明する。

アンリマユ、とは拝火教の神の名前である。だが、冬木の聖杯戦争において神霊は呼ばれることはない。その正体は、世界がもつと小さかったとき、小さな村にて『この世全ての悪』なるものを肯定するという役割を一身に背負わされ、延々と蔑まれ、疎まれ続けた結果、『この世全ての悪』という反英雄に祭り上げられた普通の人間である。

つまりそのアンリマユとは「世界を呪う悪であれ」という願いそのもの。聖杯は万能の願望器。元々は無色の力の塊である聖杯は、その「アンリマユ」の願いを叶えてしまった。アンリマユの願いによって、聖杯は悪意ある穢れたものになってしまった。

「——それは、聖杯は願いを叶えられないということなのか?」

明は頭を振った。「……いや。願いは叶うと思う。だけど、聖杯はその願いを曲解する——すべて悪意で解釈して叶えようとする、いわば猿の手」

例えば「世界一の金持ちになりたい」と願ったとする。聖杯がどういう手段で願いを叶えようとするかは、この聖杯の場合だと「世界中の金持ちを殺して、願った者に金を集める」手段となる。

「願いを叶えようとすれば、それに対して不釣り合いな代償があるってことだな」

「そ。まあそれを聞けば、つじつまの合うことも多いんだよ。キリエのキャスター——酒吞童子は前身は神とはいえ、今は魔物・悪鬼の類。それを聖杯が呼ぶのかって疑問だったけど、聖杯が悪意の塊であればそういった反英雄だって呼びうるし」

「……ちよつと気になるんだけど、それキリエも知らなかったのか?」

言われてみれば、キリエが碓氷邸にやってきた時に聖杯の穢れについては説明しなかった。元々聖杯で願いを叶える気のなかった明や一成にとっては大した情報ではないのだが、気になる。

「キリエ自体が知らなかった可能性がない事もないね。アインツベルンの悲願さえ達成できれば聖杯が穢れていようとなんだろうと関係ないし、魔力が変質しているだけで量が減ってるわけじゃないから根源にも……」

「浄化とかしようと思わなかったのか？アインツベルンだけじゃなくて、うちも……」

「それはさつきと同じ。願いさえ叶えばあとは何でもいいって考えながら、そんな手間はかけない」

明があっさり結論づけたが、一成は渋い顔つきをしていた。廃れつつあるとはいえ、千年を数えた魔導の家土御門家——祖父が聖杯の穢れを知らなかったとは考えにくい。

此度は諦めたと祖父は言っていたが、次回は——。

「……やっぱり、聖杯は壊すべきだ。たとえまっとうに願いを叶えるものでもそうするべきだと思ってたけどよ」

勿論一成は冬木の最終聖杯戦争、第五次聖杯戦争がどんな結末を見たのかは知らない。だが五回も繰り返し願いが叶うことがなかったとすれば——もしや、一成と同じ結論に至った者たちが願いの成就を阻んできたのではないか？

そう、一成は都合のいい想像をした。

「それには同意だけど、実際大聖杯本体を壊せるかはアヤしい。で、その為に、勝つために——一成には眼を使ってもらいたい。魔力の問題はキリエで解決しちゃってるみたいだし、あとは使い方が」

「や、やっぱりそれ知ってたんだな!?!?つかなんでそれ知ってたんだ!?!?」

一成はソファからずり落ちる勢いで明に突っ込んだ。今日、教会へと出陣する前にキリエに呼び出された記憶がよみがえる。いや、決してやましいことをしていたわけではないのだ。

明は深々と溜息をつき、若干口元を歪ませて笑った。

「まーキリエもキリエで結構テンパってたみたいだけど……一言くらい教えてほしかったかな、パスを繋いだならパスを繋いだって」

「……ご、ごめん。なんか言うタイミング逃しちゃって……」

一成とキリエは、サーヴァントとマスターというパスを繋いだ状態にある。明がそれに気づいたのは彼女がシグマとの戦いにケリをつけ、一成とアサシンが追い付いてきたときの連絡にあった。

明は境界が破壊されたことによるフィードバックにより碓氷邸で何か起きたことを知っていたが、一成には異状を知る手段はない。にもかかわらず、彼は明と再会したときに「キリエが危ない」と言ったのだ。しかも明よりも詳細に事を知っていた。

次いで先ほどの報告において、キリエの無事はわかるとの発言から明は確信した。

「もし何かがあつた時にあなたに助けを求めためか、またはあなたが危なくなつたとき、キリエからの遠隔操作で眼をサポートして使用できるようにするためか、両方か知らないけど」

「……」

一成はぐつと黙り込んだ。まさにこの想像明の言うことそのものずばりがキリエの意図と同じだからだ。キリエとて、わけあって黙っていたのではない。

彼女はずっと自分がこのままでいいのか、神父と向き合わずにいいのかと考え続けて、とにかくまだ死ねないと一成に命綱を託したのだ。

「とにかく今日は寝るよ。明日の朝は……あなたが一人で眼を使えるように……は無理でも、つかってもらいたいことがある。拒否権はないよ」

おう、と一成は頷いた。明はキリエがいなくなった部屋——父の寝室で眠ると告げて、リビングを立ち去った。

### 第3幕 fate／beyond

12月8日① 最終工程

星の祭壇。半径二キロはあるであろう円形の空間が、土御門神社の地下深くに広がっていた。天蓋は暗い闇となりどれくらいの高さがあるのかわからない。知れない。

薄紫色の光がぼんやりと覆っており、空気の禍々しさはここに頂点に達し——祭壇の中央には黒い太陽が浮かんでいた。

燃える地獄、溢れだす憎悪と悪意。ブラックホールのようにぽつかりと空いた穴からは、暗紫色の光りがぼんやりと放たれている。穢れた冬木の聖杯を模倣した春日の聖杯。

アインツベルンは気にしなかったのか——いや、本当に気にしなかったのは神父の方であろう。彼の目的において、聖杯が穢れているか否かはどうでもよいことなのだ。

当のアインツベルンの聖杯は、今は神社の境内に横たわっていることだろう。聖杯の降霊自体はそちらで行う予定のため、神父はこちらには滅多に来ない。

祭壇のホールは平らにならされたただの地面のようにしか見えないうが、隙間なく魔法陣が刻まれている。発動すれば一目瞭然だが、発動前の今は目立たないのみ。陣を刻むため、その陣の主はここしばらくこの地下空洞に籠りきりであった。

昼間、碓氷明と遭遇した彼女も、先ほどまで碓氷明と激闘を繰り広げていた彼女も、彼女の本体ではない。春日で聖杯戦争が開催されるという触れ込みに引き寄せられてやってきた、外様の魔術師の肉体である。

熱心に陣を刻んでいたのは、来るであろう碓氷の七代目を倒すためではない。彼女を倒すだけならば工房のごとくにこの場を要塞化する必要はない。

魔法陣は——魔剣を触媒に聖杯を再構成するためにある。

そして今、彼女は陣を刻む作業を終えて黒き聖杯を眺めている。ふ

と遙か背後に白い気配を感じて振り返る。

「墮落の黄金よ、お前の準備は終わったようだな」

当然のようにライダーが悠然と立っている。ちらりと黒い太陽に眼をやるものの、大した興味はなさそうに視線を戻した。

「あら、ライダー。あなたこそ街を歩き回らなくていいの？ 面白いはずっとここにいた鳥の姿が見えないけれど、どうしたの？」

ライダーの宝具でもある鳥は、戦闘時以外はライダーと行動をとみにせずこの地下空洞で飛んでいた。ライダー自身も鳥を常に連れるつもりはなく放っていたが、姿が見えない。

「あれは焼き鳥にして食った」

「は？」

「言葉の綾だ。フツヌシは大聖杯の魔力のあおりで、最大解放するためには少々神性が落ちている。その分、鳥の神性を取り込んで解放しようと思っただけ」

ライダーは現界する前に大聖杯そのものの魔力に浸かっている――冬木の聖杯からそのまま『この世全ての悪』に侵された聖の杯。シグマから見れば、あの悪性に浸って正気でいられること自体が規格外なのだ。

以前に『犠牲もある』と呟いていたのは、このことかとシグマが思った時、ライダーが口を開いた。

「ハハッ、セイバーには最初から『天啓齋す導きの金鷄』は効かないが、あの草たちには違う。あれが開帳できなくなった今生け捕りにするには、お前はお前自身の力でやらねばならぬということだ」

「別にいいわよ。明ちゃんが碓氷の家宝を持ち出せばあまり意味なさそうだし、鳥さん。というか持ち出す前提で考えてるし」

シグマはつんとそっぽを向いた。美玖川周辺にて展開された昨夜の戦い――傀儡化した魔術師を通してシグマは明の戦いとその変貌を確認している。

おおよそ彼女が何をしたかは把握しているが、その未来の彼女を以てしても工房を設置したシグマには届かないと、彼女自身は見ている。明自身とて楽観はしているはずがない。



ゆえに明がシグマを下そうと思えば、碓氷の家宝に頼るしかない。今やシグマと神父の目的は大局で一致している。神父の「聖杯戦争を開催し続ける」という願いを成就させれば、ここ春日には有象無象玉石混合に魔術師が終結するであろう。それら全てがマスターとしての資格を得ようと得まいと、シグマとして関係がない。

聖杯につられてやってきた魔術師・呪術師・錬金術師を食らい糧にするのが、シグマの目的である。いちいち彼らをを捜し出さなくともここ春日にいれば集まってくる。

——食えば食うほど、この刻印と回路は肥え太る。

シグマ・アスガードには己がない。巫女として最適の肉として生を受けた彼女の身体は、生まれる以前から降霊を行うためだけに改造されていた。

自分以外の何かを己の身体に降ろす時に、自我は邪魔でしかない。ヴォルヴァの神落しの儀式が性的恍惚を伴うのは、自我を喪う方法として簡便なことも理由の一つだ。

——きつと、一番降霊に適しているのは人形なのね。

今にしてシグマはそう思うが、かつての実家にいたときには考えもしなかった。代を重ねた降霊の大家は、虚ばかり巢食わせた女を生んだ。神代の御業を現代にまで遜色なく引き継ぐため、かの家に生まれる女に己などないことが常だった。

彼らの期待に違わず、シグマは傑作だった。

ただその虚が、虚でい続けることに耐えられなかったことが彼らの誤算だった。

己が空虚なら、他のもので埋め合わせるしかない。

「さてシグマ・アスガード。今宵、あやつらはここに来るだろう。公とセイバーがここでやり合えばここ自体が崩壊するゆえ、地上か上空で演じてみせよう」

なかなかもってセイバーも見どころはある、とライダーは楽しそうに笑った。本来この英雄は聖杯を正すべく大聖杯に居残ったのだ。

その目論見は果たせずとも、彼はあくまで彼のままここに立っている。

「勝者に聖杯を与えよう。ゆえに勝って見せよシグマ・アスガード。あの道楽の殉職者と共にな」

「勝つわよ？ だけど聖杯は神父のものでいいの。私は聖杯を以て私を満たそうなんて思っていないから」

だってお腹いっぱいになったら、楽しい食事が終わってしまうじゃない——黄金の髪の女は臍長けた笑みを浮かべた。

\*

冬の早朝は当然のごとく寒い。しかも夜明けすら迎えていないのであればなおさらである。

そして一成と想像明が立っているのは、荒れた碓氷邸の庭である。昨日の激闘の色もそのままに、二人は立っている。

想像明はいつものブラウスにスカートに紺色のコートを着た格好、一成は神主衣装に茶色のコートと、こちらも通常の格好である。

「寝る前にも言っただけど、こっちは敵についての情報が足りてない。神父のノートは有益ではあったんだけど、流石にシグマの力が書いてあるわけじゃないし」

庭のど真ん中、地面に立つ想像明は腰に手を当てて説明した。なお、神父側にも碓氷の魔術のすべてが漏れているわけではない。

魔術師が自分の家の魔道を他家に教えるなど分家にもならないかぎりありえない。ただ、大本を同じくするシグマがいるあたり、神父の情報とあわせて分析されている可能性は高い。

「こっちも対抗策はある。だけど相手ははるかに格上の魔術師。手の内をすべて暴いたとしても勝てるかどうか」

相手が百メートル十秒で走れることがわかってても、今の自分が百メートル九秒で走れるようになるわけではない。しかし力の差に唾然とするだけかもしれない。戦力は把握する必要がある。だが今から土御門神社に乗り込めばそれこそ戦闘再開であり、隠密行動ので

きるアサシンはもういない。

「だったらもう一成の眼に頼るしかないんだよね。そうか、キリエがいればな……まーないものを言ってもしょうがないんだけど」

そのため、一度睡眠をとってから眼を使う相談をしようとして一成と想像明は決めていたのである。そうしてこの状況に至る。

あの時——キリエが碓氷邸にやってきたときは、明は己とセイバーのことでいっぱいだったために気が回っていなかったが、キリエも内側で不安定な状態だった。

一成にパスをつないだことも土壇場でなされたことだ。キリエは生き続けるつもりだったから一成にパスをつないだ。

もし私が危なくなったら助けて、との願いをこめて。

千里天眼通。「へとつながる眼。しかし使用のネックは、一成にコントロールがまったくできていないこと。起動と終了を制御できず、その上使用に伴う魔力消費に一成の魔力と聖杯からの微量の魔力を加えてもおいつかない。

その魔力不足が大西山では吉と出たのだが……。

キリエとのパスはそれらすべてを解消し、眼を使用するための策だった。要するにキリエに一成を遠隔コントロールさせるわけで、キリエが眼を起動させ」との接続を切り、伴う魔力消費もすべて彼女が請け負う。

無論キリエとて眼の使い方を知っているわけではなく陰陽道のエキスパートとも言いがたいのだが、それでも魔術師としては一成よりも遥かに格上であり、確実だった。

しかしそのキリエの意識も今はなく、魔力源としては頼りになるが肝心のコントロールができない。

実際の決戦で眼を使う必要があるかはまだ判断できないが、とりあえず今一度だけ使いたい。ちなみに明がパスをつないで一成の眼を開くことは現実的ではない。明はキリエと異なり陰陽道の魔術経験が全くなく、かつ想像明とセイバーの二人に魔力を与えている状態なのだ。

「キリエも」との接続を切るのは楽と想定してはたはず。キリエから供

給している魔力を止めればいいんだし……まあそれはパソコンの電源をいきなり引っこ抜いて切るみたいなやり方だから、やりすぎると本当に脳に損傷がいくよ」

「……マジかよ。キリエぜんぜんそんなこと言っていなかったんだけど」

「んーそれは急いでたのと、もうわかりきってるから説明しなかったんじゃない？そうなるよ、って言ってもあなたは頷くって」

信用されているにしても少し複雑な気分になった一成だが、正直自分でも明の予想通りだと思うので反論できない。一成にかまわず、想像明はてきぱきと話を進める。

「というわけで問題は起動。確か起動したのは大西山での戦闘だと思うけど、そのときのこと覚えてる？私は直接見れてないから」

「そういわれてもなー……ただただ必死だったって感じだしな。アーチャーの固有結界の中で、あいつが真っ先にアサシンを殺しにかかるのを見て俺も死ぬ、って」

結局アーチャーに一成を殺す気など微塵もなかったのであるが、あの時点で一成に気づくことはできなかった。アーチャーの濃密な殺気の中で、あれは目覚めた。

すると、明が呆れたようにため息をついた。

「じゃあ、もう一回死ぬしかないか。――

Mu<sup>平</sup>tin<sup>架</sup>ta<sup>空</sup>sai<sup>の</sup>selle<sup>移</sup>alustalle,  
En<sup>我</sup>ole<sup>は</sup>t<sup>架</sup>ss<sup>空</sup>ma<sup>存</sup>ailmasa<sup>在</sup>!

「はっ……!?!」

突如一成の目の前から明の姿が消えた。いったい何事かと思ったそのとき、背後に人の気配を感じてとっさに前方へと走って逃げた。

ちり、と背中のコートの表面が裂かれたことで刃物が振るわれていたことを理解した。

「何だお前!?!」

「ほら、さっさとしないと死ぬよ?」

一成が振り返った先には、大西山での戦闘で使っていたナイフを握った明の姿があり——一寸の躊躇いもなく彼女は素早く踏み込み一成の腹めがけて刃を突き出す——！

まさか、と思いつながらもその速さに止める気配はうかがえず、一成はとつさに魔術回路を励起させ詠唱を行った。

「急急如律令！」

一成お得意の防御障壁。だが慌てての急造であるため、強度は話にならず明のナイフにあっさりと砕かれてそのまま黒い刃が彼の腹に突き刺さった。

「……ッ!？」

深く体にもぐりこむ深い刃。痛みよりも衝撃が先に勝ったが、刃が引き抜かれると同時に血が噴出すのを見て、一成は現実を自覚した。

白い装束が塗れた赤に染まり、燃えるような痛みを認識した。

「……っ、おい、確氷っ……!？」

「ほら、早く使いなよ。私は殺しが嫌いだけど、理想たる私は違うから  
ね? …… P u h u n ———

T a r i n a 無 j o h t a a 至 t y h j y t e e n 語

明はくず折れそうな一成から距離をとった。だがそれは、彼に猶予を与えるための行為ではない。血に塗れたナイフで一成を指し示し、詠唱がつむがれる。明の唇が動きをとめた刹那、赤黒いナイフは彼女の手になかった。

苦悶の叫びを上げる暇すらない。そのナイフは虚数空間を通過して空間を超え——一成の体の中、まさに心臓へと突き刺さった。

「……」

ここは一体、どこか。一成が眼を覚ました時、世界は一面の闇だった。この現代において味わうことさえまれになった真の闇。

距離も時間も空間もなく、高いのか低いのか、自分は血に足をついてるのか浮いているのか、ずっとここにいるような来たばかりのよう  
な。

しかし、明確な理由はなくとも——ここにずっといることはよくな  
い気がしていた。ここは、ひどく寒い。

「……」

ああ、またあれか。いつだったか、見た記憶がある。大きいようで  
小さく、小さいようで果てしなく大きい黒い箱。触らぬ方が良く  
知っている箱。

真の暗闇であるはずなのに、何故かその箱の輪郭ははつきりと掴め  
た。

しかしこれからどうしたものか。そもそも、自分はいったい何故こ  
んなところにいるのか。こんな場所、一刻も早く離れたい。

寒くて冷たくて、ここには誰もいない——あの箱の傍にいたくない  
のだ。

帰らなければ——どこへ？

帰らなければ——何のために？

帰らなければ——誰のために？

そうだ、帰らなくてはならない。

だけど手ぶらでは帰れない——何かあの箱に触れるため、そう探す  
ための鍵が欲しい。

東の空が薄らと紫に染まっている。夜明けはほど近いだろう。確  
氷邸の庭の真ん中——土御門一成は仰向けに眼を開いて倒れていた。

想像明は倒れた彼の上に跨り、額にしかと手を当てている。

「ギヤKerro ラGjallarhorn,  
ラAlku Ragnarok, ナOma ホvisaus,  
我minun ラohi……」  
我が 記憶 を 伝 え よ  
始 ま り と 我 が 知 恵

彼女が行っていることは、自らが知り得るシグマ・神父・土御門神  
社についての記憶の共有だ。一成の千里天眼通をまともに機能させ  
るためには、情報を検索するための鍵が必要になる。その鍵——情報  
を、明の魔術で伝え続けている。

想像明は礼装のナイフで一成を刺してはいない。一成が体験したであろう明のナイフによる攻撃は、すべて幻覚魔術によるもので一成本体には傷一つない。

起き抜けに一成を呼びに行った時から一成の感覚は明の支配下にある。明は暗示や幻覚の魔術を得手とするわけではないが、ここは腐っても自分の工房である屋敷。一成程度の術者相手にかけるのなら難しくはない。

一成の話を聞く前から、おそらく天眼通発現のきっかけは「死にかけたこと、もしくは死を間近に感じたこと」であろうと見当はついていた。

魔術とは修行の初歩で死を観念するもの。死という絶対にして最終的に不可避の無、そして「」に近いものに触れることで呼び起こされる力が多い。

——ただ、今の私と一成じゃ……。

当初はただの共闘であったのだが、予想を超えて共にいすぎた。そしてお互いがお互いを「信頼に足る」と認識してしまっている。

それは悪い事ではないのだが、その関係の中で「お前を殺す」としても説得力がない。それに本当に殺してしまったら、困るのは明でもある。ゆえに殺しはしないがそれに匹敵する状況を再現するために——明は一成を幻覚の世界に引きずり込んだ。

その中で、明は彼を殺している。

肉体的に一成は傷一つつかない。しかし、それは無事を意味しない。一般の世界にもプラシーボ効果と呼ばれる——鎮痛剤と聞かされて薬を飲んで痛みが治まったとおもったら、その薬はただの砂糖の塊だった——ものがあるように、本当に「死んだ」と精神が認識した場合の肉体への影響は計り知れないものがある。

とくに魔術という精神に重きを置く活動においては……。

「……………ッ!!」

その時、今まで微動だにしなかった一成の身体が跳ねた。次の瞬

間、バネ人形のように明を突き飛ばして、一成は立ち上がった。その体は左右に揺れて不安定だったが、頭を抱えてながら前を向こうとしている彼の眼は通常と異なり、蒼に燃えていた。

——これが千里天眼通か、と明は息を呑む。立ち上がった時点で、明の幻覚の魔術は解除されてしまっている。その時点で彼は命の危機を脱している。

「……」

天眼通の発動は成功したが、明の送っていた記憶で「」を検索できなかったのかどうかは判断がつかない。しかし、今のまま彼を放置して待つことはできない。

彼の蒼い眼はもう焦点があつておらず、熱病に浮かされた患者のようになんか何を呟いている。「」から流れ込む情報の制御ができず、ただ魔力が尽きるまですべてが叩き込まれるのみ。

明は勢い避く地を蹴り、一成の胴体に掌底を叩き込んだ。隙だらけの身体はあつけなく、大きく咳き込んで明へと顔れかかる。

「戒律引用循環は死に絶えるLain Laina us, Pyre die……!」  
「うっ……」

一成の身体が大きく体が跳ねた次の瞬間には、ぐったりと脱力していた。明は一成の重さをささえつつゆっくりと庭に寝ころがしたが、既に意識は失われていた。

自分の魔術回路を一成の魔術回路に接続する術式妨害により、一成の魔術回路をショートさせることで強制的に止めたのだ。本来この手のジャミングは一流の魔術師には通じないどころか、逆に自分の魔術回路をショートさせられる危険すらある。つまり、一成が魔術師として未熟であるが故にこの手法は使えたのである。

彼が視た結果は一成をたたき起こさなければわからないのだが、とりあえず彼は無事である。話を聞くにしても冬の早朝に外に居続けたせいで体が冷えてきた。

一度部屋に戻って休ませようと、明は一成を背負って屋敷へと戻った。



## 12月8日② その呪いは幸福だった

——黄金の女が立っている。女が立つのは螺旋の底。

土御門神社の地下深くに設置された大聖杯の魔法陣に繋がれたホムクルスと陰陽師の女。アインツベルンの錬金術と陰陽道によって生まれた異形の聖杯。

陰陽道において四神相応の概念は霊地を見定める為の理論だが、その真髄は人為的に霊地を創り上げることにある。山川を動かすことは規模が大きすぎ、実際に行うのならば国家レベルの権力と金が要求されるが。

されども一度霊地として龍脈を固定した土地は、要石となる場所さえはずさなければ霊地でありつづける。今の平安京は南の池である巨椋池は干拓されてしまっているが、北に霊山をかかえ今でも一等の霊地でありつづけていることが証左だ。

本来であれば土御門一族は春日ではなく遙か格上の霊地である富士山周辺、もしくは京都において聖杯の製造を行いたかったのだろう。いや、土御門家としてはむしろ聖杯などではなく泰山府君祭の完成を目指したいのだろう——。

カーテンの隙間から差し込む光によって、一成は緩く目を開いた。眠って休んでいたはずなのに、体力が快復した感じがしない。当然ながら二日酔いは未経験だが、もしなるとしたらこうだと思おうような、頭痛と倦怠感に覆われている。

否、二日酔いよりももっと適切なたとえがある。丁度一昨日、千里天眼通を発動させた後——瞼の裏に浮かぶ黒い箱。焼きついたそれから目を背けたくて、一成は倦怠を振り切り力を込めて目を開いた。顔だけを動かして、近くの棚に乗っている時計を見ると時刻は十一時を回っていた。

「……………」

上半身を起こそうとした一成は、傍らにあるものに目を奪われた。

彼が横になっていた客用のベッドの脇のスツールの腰かけ、俯いている女性に。

碓氷明の理想の碓氷明が、座ったまま頭を傾けて眠っていた。鈍色の長い髪がさらさらと流れ、静かな呼吸と共に僅かに肩が上下していた。何か見てはいけないものを見ている気がしてきて、一成はおずおずと彼女に声をかけた。

「……おい、碓氷」

「……んっ……」

呼びかけに応じ、元々眠りが浅かったらしい明はうつすらと開けた。眼をこすって一成の覚醒を横目で確認すると、両手を上に伸ばして伸びをした。

「おはよう。とりあえず無事っぽくてなにより。起きなかつたらどうしようかと」

「無事っぽくってそんな危ない事……!!」

そうだ、確か眠りにつく前、この明は自分を殺しにかかったのではなかつたか。自分の体の中にナイフがめり込み、どうにもできずに死ぬ——そのはずだった。

それでも一成は生きている。混乱の極みにあったが、徐々に記憶が繋がっていく。

——これは、大西山でアーチャーと戦った時と同じだ。千里天眼通の発動で数秒先の未来を読み、普段では不可能な術を行使した時と同じ。

今回は碓氷明によって掛けられた幻覚を解呪し、その後。

碓氷明から伝えられたシグマという魔術師の情報をカギに、「」よりさらなる情報を引き出す。そうだ、碓氷明は一成を殺そうとしていたのではなく、疑似的に死を錯覚させるという意味で大西山のアーチャー戦を再現し、「眼」を起こそうとしていたのだ。

「……無茶すんなお前……」

「一成に言われたくないんだけどね。で、無茶をした甲斐はあったか

な」

明は椅子ごと動かして、より一成のベッドににじり寄った。一成は躊躇ないながらも頷いた。確かにシグマの魔術の本質と、さらに土御門神社の奥深くまで「視えた」。

だから説明することはできる、しかし……。

(……あれにどうやって勝つんだ?)

セイバーに先んじてシグマを倒してもらうか。ただ、ライダーが黙っていないだろう。とすれば、自分がまたしても眼を使えばと考えたところで、明が口を挿んだ。

「細かい話は後で聞くけど、シグマは私がやるよ。こつちだつて秘密兵器の一つや二つあるんだから。それに一成にはあまりやらせたくないというか……どーせ死にかけたら眼使えるし、とか思ってるんでしょ」

「うっ」

「ほらやつぱり。それに見てて気づいたけど、君は起動できても検索を自在に操れているわけじゃない」

現状、この眼は一成にとつて「暴れ馬」そのものである。起動——なんとか馬に乗ることはできるがつかまっていることに精いっぱい。検索——馬は走るが向かいたい場所にまつすぐ向かわない。あちらこちらを走って結果的にやっと目的地へいける。眼の停止——馬から降りるのにも一苦労で、間違えれば凶悪な蹄で踏みつけられるか振り落とされるか。

「二人でコントロールができてないんだから。私やキリエが傍にいればまだしも、最後の戦いではあなたのサポートをする余裕はない。だからだめ。使ったら」」からの情報の渦に呑み込まれて脳がいかれるって覚えといて」

本当は二回も無理に接続を切っていること自体危ないんだけど、と明はぶつぶつと呟いていた。そこで一成はふと考えたが、多分明がシグマと戦いセイバーがライダーと戦い、自分が神父と戦うことになる。それは全く構わないのだが、神父の魔術の問題だ。元々は神道魔

術をもつぱらにしていたというが、昨日は神父自身の魔術を殆ど見れていない。

「確氷、神父って強いのか」

「……ん〜……神父としては一・五流、魔術師としてはど三流。大した使い手じゃあないよ」

だからなんとかなる、と言いたげな明の口調であったが、一成はあえてそれに反駁した。

「……じゃあ、呪術師としてはどうだ？」

盲点だったのか、明の口は返答に迷っていた。明も、神父が元は神道の家の出とは知ってはいた。しかし明が神父を知ったのは、既に御雄が神父になったあとのことだ。

埋葬機関や代行者でもない……という程度で、戦闘派でないと思っていた。

「……わからない。でも多分、西洋魔術よりは使えると思う」「そうか」

一成は困る素振りもなく頷いた。仮に神父が神道においても大した使い手ではなくても、一成自身も練度の高い呪術師ではない。どちらにしろ、楽に勝てるとは考えていない。

明はああは言ったが、自分が危機に陥ったらきつと一成は眼を使うだろう。自分の危機だけでなくも、キリエや明の危機であったもきつと。

止め方はわからなくても、死を近く感じるものがトリガーならば使うことはできる。先程、明の幻覚による覚醒で二回目——眼を開く感覚自体は掴めてきた。何をインプットとして何を引き出すかについても宛はある——何しろ決戦は「土御門」神社である。

「ところでお腹空いてない？一成朝ごはん食べてないでしょ……時間的にはもう昼だけだ」

どうやら悟が作った朝ごはんがあるようで、ご丁寧に一成の分はラップをかけてとっておいてあるらしい。そういわれて初めて一成は己の空腹を自覚し、腹が鳴るのを感じた。まだ言う事を聞かない体をリハビリがてら無理に動かして、彼は立ち上がった。

「食う。……そういや、もう一人の確氷とセイバーは？」

「あの二人？デートするとかしないとかでゴチャゴチャしてたから、もうここにはいないんじゃない？」

「……デ、デートオ?!?!」

さらつと言い捨てられた言葉に動揺し、一成はいきなり滑りそうになった。いや、明とセイバーは確かにホテルでも平気で同じ部屋にしようとしていたし、そもそも以前からこの家で二人だし、わりとナチュラルにベタバタはしている、でも甘い雰囲気とは無縁だし、と一成は無意味に頭を高速空回りさせていた。

あからさまな動揺をみせる彼に対し、想像明は薄ら笑いを浮かべた。

「まあ落ち着きなよ思春期。あなたが想像しているようなことは絶対はないと断言してもいい。言葉のイヤってやつだよ」

「人で遊ぶな！」

明はくつくつと笑いながら、客用寢室の扉を開いて一成を誘った。掃除機でもかけているのか、階下からモーター音がする。階段を降りホールに出ると、案の定悟が掃除機をかけていた。

「あれ、よく見つけましたねそんなの」

家主の割に知らなかった、とばかりに明は呑気に言った。悟は掃除機のスイッチを切ると頭を下げた。

「その物置にあつたので……あ、まずかったですか？」

「助かるんですけど、でも御飯も作ってもらってますし、無理にやつてもらわなくても」

昨夜の確氷邸襲撃で、悟も傷を負っている。ワイシャツの下には包帯を巻いている箇所が多々あるはずだ。しかし彼は顔色もよく、掃除機を持ち上げた。

「いや、体力も戻ってきたのでむしろ体を動かしたい感じで」

明はその返事に頷くと、後を任せて一成と共に食堂に入った。サラップを掛けられたコンソメスープにポテトサラダ、ハムエッグが

並んでいて、焼かれる前の食パンが置いてあった。

一成はパンを焼くのが面倒くさかったのか、そのまま齧り始めた。窓から差し込む日差しは明るく、空には雲一つない。良い冬晴れだが、木々の揺れ具合からして少し風が強そうだ。

もさもさと食事をしながら、一成は成り行きで正面に坐っている想像明に話しかけた。

「……夜作戦会議して、深夜に戦いに行くことになるんだよな」

「そうだよ」

「……ちゃんと勝てたら、お前どうすんだ？」

一成も、こちらの明の存在の不安定さについては知っている。想像上の明は、虚数の製造物であるがゆえに、虚数使いである本体の明からの魔力なしには存在できない。

そして明と全く同じ見た目であるゆえに、聖杯戦争後の生活もいろいろと面倒そうではあるが、生きていてほしいというのは当然の心理だった。

明は一成の問いを受け、しばらく考え込んだ。

「そうだね、私あの子と仲良くやるには時間がかかりそうだけどがんばりたい。まあ、それ以前に今日の戦闘で生き残らなくちゃなんだけど」

今夜の戦闘において本体の明が無事であっても、魔力を使い過ぎて想像明の身体を維持できなくなったら彼女は消えてしまう。本体明よりも厳しい立場にいる。

だが、それはどうでもいいのだ。想像明は、聖杯戦争が終われば消える。本体の明と決めて彼女自身もそうするつもりだった。しかし、その事実を一成に伝えるつもりはない。言えば絶対彼はやめろ、というだろう。

実現可能か不可能かはともかく、そういうに違いない。

「本体が無事でも私が残ってるかわからないからさ。もしもの時のために」

正直、決めたのに一成に騒がれたくないという気持ちもある。

やめろ、と言われたら嬉しいから未練が生じることを畏れてもいい。死にたくはない。

しかし、明の理想として生まれたこの明の土台は姉でもあり——  
明の<sup>あの子</sup>将来を祈っている。

だから明は、真実を彼には言わない。ただ生まれたモノとして願うことはひとつ。

「私のことは、覚えておいてよ」

\*

「マスター！朝だ！」

日が昇りきった午前九時、明は毛布を引きはがされて強制的に起床した。暖房をつけているものの、冬の朝はどうしても寒い。ベッドの上でダンゴ虫のようにまるくなりつつ目を開けば、そこには毛布を片手に仁王立ちするサーヴァントの姿が在った。

その姿はいつもの衣袴ではない。現界して次の日に、明が買ったライダースジャケットだ。

「……毛布を返してください……」

「もう朝の九時だ。今日は出かけるのだからそろそろ起きてほしい」  
「……そうだっけ。ごめん、ちよつと待って……」

明は寝ぼけ眼をこすりながら緩慢な動きで箆笥に向かう。セイバーと同じ部屋で寝起きしていた明は、彼が居ることにも構わず着替えを始めた。

明にはデリカシーという言葉は残っていたが、セイバー相手には働かないのか躊躇いはなかった。セイバーもセイバーで退出しなかった。

いつものブラウスを着てタイツまで履いたところでようやく頭がまともに動きだし、明は首を傾げた。

「……どっかでかける用なんてあったっけ」

今日は自宅で体力と魔力を回復し、ライダー戦に備えて魔術礼装を整備し、一成と想像明で作戦会議を行うはずであった。

(一成は想像明が見てくれるって言ってたけど)

元は同一人物であり、かつ本体明から想像明へと魔力供給のパスがつながれているために念話も可能となっている。しかし魔術的には想像明の方が先を行っているため、明には思いつかないこともしているかもしれない。一成の眼についてはそちらに任せしたが、明としてはすることがあまりない。

だから出かけることにはやぶさかではないのだが、セイバーには何か目論見があるのだろうか。

「……なんかしなきゃいけないことある？夜の戦闘に備えてさ」

セイバーは端的に、あっさりと言った。「ない」

「はい？」

「お前は放つてくと起きないからああ言ったまでだ」

セイバーは基本的に素直だと思うが、たまに小癪である。「……セイバーのくせに生意気」

「む。俺がアーチャーやランサーで現界したなら生意気ではないのか」

まだ眠くて答えるのが億劫だったため、明はその文句に返事をしなかった。しかし出かけるのか。当然ながらここ数日は戦うか家に籠るかの二択で、大学にも行っていない。ちなみに大学についてはノートと代返を日向たちによりしく頼んでいる。つまり、殆ど昼間に出かけていない。

「出かけるってどこか行きたいの？」

「結果がどうあれ、俺は明日にはもう現世にはいない。だから最後に現世を見ておきたい。だから案内してくれると助かる」

「それはいいけど、お店とかに行くなら九時じゃまだどこも開いてないよ。せめて十時くらいにならないと」

「……」

セイバー沈黙。そのところは考えていなかったらしい。わりと古代時間、要するに日が落ちれば眠り昇れば起きる健康的な生活（サーヴァントだから睡眠はいらぬが）をするセイバーにしてみれば、むしろ開店十時が遅い感覚なのだろう。



分かっていたことだが、セイバーはこと戦闘以外に関しては本当に抜けている。バツの悪い顔をしているセイバーを見て、明はそれとなく付け足した。

「じゃ、十時……いや、十一時になったら出かけようか。——うーん、それまでは……」

「山内悟が食事をこしらえている。とりあえずそれを食べてはどうだ」

「ほんと？」

僅か数日の話だが、悟が台所に立つのが固定となってきた。明としてはありがたいが、少々申し訳ない気もする。とりあえずセイバーに従って階下に降りたが、予想通り朝食の匂いは鼻をくすぐった。

メニューは洋食のようで、コンソメの匂いが漂っている。

「碓氷さん、おはようございます」

「あ、おはようございます」

エプロン姿が板につきはじめた悟は、明の姿を見てそそくさと朝食をセツトしはじめた丁度今トーストを焼いてくれているようで、台所からバターかジャムかを問う声が聞こえた。明はバターと返答すると食卓につき、テレビのスイッチを入れた。

ニュースは相変わらず春日市について取り上げており、連続殺人とテロの捜査状況と禿げ上がった大西山の状況を解説していた。

その時、悟が果物のスムージーとトーストを明の前に置いた。

「お待たせしてすみません」

「あ、いえ。すごく助かってます……一成ともう一人の私は？」

「朝早く二人で何かしてたみたいですけど、今は土御門くんが倒れているみたいで」

おそらく想像明とのやりとりによる結果だろう。想像明のことだから本当の無茶はしていないとは思うし、彼女も一成のそばにいるだろう。明は頷くだけ頷いてスムージーを手を取った。

「明、出かけると言ってしまったが、体や戦いの準備は平気か」

セイバーが今思い出したとばかりに問うたことに、明は口にスムージーを含みながら答える。身体は一成の治癒を受けたおかげで八割方回復している。烈しい運動は控えたいが、散歩位ならばむしろちょうどいい。

キリエは敵の手に落ちたが、彼らが再び碓氷邸を襲撃する可能性はある。今度は明を奪うため、セイバーを屠るために来る。

ただあちらも神秘の秘匿は気にする魔術師がいるため、昼間は心配ない。しかし夜は危険である。とすれば明たちは今宵、土御門神社で彼らを倒さなければならぬ。

また、碓氷の結界が破壊されている状態を長々と放置することは、有象無象の魔術師がさらにこの土地を狙って余計にややこしいことになる。

戦闘としては明と想像明がシグマと戦い、一成が神父と戦い、セイバーがライダーと戦うことになる。

(……大聖杯そのものを壊せるかどうか)

聖杯戦争に勝てたとしても、大聖杯を残したままでは再び聖杯戦争は再開される。結局この問題は終わったとしても後々まで尾を引くが、今は生き残ることを最優先にするべきだ。

「私個人の準備としては大丈夫。あとは一成頼み」

「む……あいつか……」

セイバーは若干不服そうな顔をしたが、すぐにその表情をひっこめた。

明はとりあえず朝食を食べ終わり、眼も完全に冴えてしまった。二度寝をするのも不毛であり、地下室へ行くことにした。

地下室はいつでも寒い。電燈に明かりをつけたが、例によって薄暗い。昨日セイバーとのパス再構築に使用した黄金の柄の剣が鞘に収まっている。

魔剣『破滅呼ぶ勝利の剣』——碓氷の一代目が持ち出した家宝である。

セイバーはリビングのソファに座って、適当な推理小説を読んでいた。明の気配に気づくと、セイバーは本を置いて立ち上がった。

「少し早いができるか？」

壁にかけた時計を見れば、十時四十五分を差していた。明として異存はないがそれにしても、セイバーはノリノリである。

前から観光にはやぶさかではないようだが、それでも自分から戦闘以外の事柄で明を連れて出かけようなどということはかつてなかった。悪いものでも食べたのだろうか。

「というかセイバー、行きたいとことかあるの」

「特にはない。ただ春日の景色を見ておきたいだけだ」

今日も良く晴れた冬の空の下、セイバーと明は連れだって春日の街に足を踏み出した。セイバー自体に明確なプランはあつたわけではないようで、散歩で沿岸部の倉庫街に向かうことにした。

冬の海風は寒いが、澄み渡った空気のためにいつそ清々しさがあつた。そこはバーサーカーとの戦いの舞台になった場所であり、いまだに破壊された倉庫の周辺には立ち入り禁止のテープが張り巡らされていた。

未だにその傷跡生々しく残す倉庫街に物々しい雰囲気はない。バーサーカー戦後のここは警察や野次馬でごったがえしていたのだが、野次馬の姿はない。

バーサーカーとの決戦は十二月一日だった。それからすでに一週間が経過している——いや、一週間しか経っていないというべきか。

「お前が俺を召喚したのが十一月二十一日だったか。それから二週間で少し……早いものだな」

「そうだね」

話の接ぎ穂を見つけられず、明はただ頷いた。最初から知っていた、どうせサーヴァントとは別れることになる。

ただ正味な話、明の魔力量をもってすればセイバーを現界させつづけることは可能である。

しかし、流石に彼女も解っている。セイバーをこのまま現界させつづけてはいけない。彼はちゃんと——自分の時間に戻って死ななけ

ればならないのだ。

明は碓氷明として、鮮やかにはできなくとも、自分の価値を自分で見極めるまで生き続けることを決めた。たとえ最後まで己の為に戦えない、壊れた人間として終わるとしても。

けれどセイバーはどうするのか。世界との契約はやめるにしても、彼は本当に無念の中にはいないのか？何を言うべきか困って、結局明は無関係な事を口に出した。

「そうだ、ここから南にちよつと行ったところに海浜公園があるんだ。行ってみる？」

特に反対する理由のないセイバーは提案に頷き、二人は倉庫街からほど近い場所にある海浜公園に二人は足を運んだ。

そこは一応春日ベイパークという名前もあり、それなりに大きな公園ではある。公園の中央にはベイタワーなる建物があり、春日が一望できる。ただ、高さは春日駅周辺にある高級ホテルのほうがあるため、いまひとつの知名度と迫力である。

公園の多くは木が植えられて茂っているが、最近葉が落ちてしまった木が多く少々寂しい。カップルの憩いの場にしては多少殺風景だが、芝生の広場でバーベキューを行う者達が、暖かい時期には見られる。

天気のいい今日のような日には、ランニングや散歩をする人々の姿が散見される。海浜公園とだけあって夏には春日海岸として海開きがされるが、当然今の季節は遊泳禁止だ。

公園の南側には池があり、普通のボートやアヒルボートを貸し出している。明とセイバーはその池の周りに置かれたベンチの一つに腰かけて、ぼんやりと池に浮かぶボートを見ていた。

大学生と思われるカップルが二組と、母子が一組きやつきやと騒ぎながら漕いでいる。

「ん？」

何やらセイバーが怪訝な顔をして池——否、池の上に行くボートを見ていた。明もつられてセイバーの視線の先を追うと、そこにはもう一艘、数え損ねたボートがあった。

若い女性に見える乗り手は、明たちから見て右手の淵にボートを止めていた。距離は三十メートルくらいだ。

「あれって日向？」

「だろうな」

特に声をかける理由はない。ボートに乗る青森日向は何やら熱心に空を見たり森を見たりしているが、ついに二人の視線に気づいたのか振り返った。そしてがたがたとボートから岸に飛び移ると、そのまま明とセイバーの所へやってきた。

コートとブーツ、シヨルダーバッグの身軽な姿である。

「明にセイバーじゃん！さっきから見ただなら声かけてよ恥ずかしい！」

「なんか熱心そうだったから」

「とうかあんたは街で見かけた知り合いに声かけるタイプじゃないか」

日向は勝手に納得して頷いている。それからセイバーの方に目を向けた。

「セイバーまだ春日にいたんだ。いつまでいるか未定っていつてたけど」

「……そうだったが、明日にはここを発つ」

「マジで？すごいタイミングで会ったなあ。じゃあこれからごはんでも食べに行く？」

何かしら用でもあるのかと思いきや、日向は結構暇らしい。一週間のうち三日は授業なしに言ったと言っていたため、今日もないのかもしれない。誘いを受けたセイバーは、ゆるゆると首を振った。

「悪いが、今日は明に用がある。気持ちだけ受け取っておく」

「ははあ」

何を勘違いしたのか、日向は思わせぶりな笑みを浮かべて明とセイバーを代わる代わる見比べている。セイバーはセイバーでその意味に全く気付いていないし、明もいちいち相手にすることはしなかった。日向が案外恋バナに食いつきがいいのは知っている。

だがその時、セイバーはいきなり彼女に対して頭を下げた。

「俺はいなくなるが、見ての通りこんなマ……いや、人間だが、これからも明をよろしく頼む。麻貴にもそう伝えてくれ」

「……セイバーのことはあんまり気にしないで」

明はお前は私の保護者かとおつこみたくなかったが、面倒くさかったので受け流すだけにした。言われた日向も面食らっており、何故か神妙に頷いている。

「明がけっこう……うん、なのは知っているよ。大丈夫。任せて」など、真顔でセイバーに向かって言っている。それほど自分は頼りなさそうに見えるのかと思うと、明はなんとなく忸怩たる気分になる。

「というか日向はなんでここにいるのさ」

「ああ、私まだ写真部やってるし。ここけっこう鳥が飛んでくるから、バードウォッチング的な企画でもやろうかと下見にね」

「なるほどね」

「二人はまだやることがあるみたいだし、私は下見に戻るわ。じゃ、明、さっさと学校出てくるんだよ！代返の貸はでかいからね！」

テンション高く去っていく日向に手を振りながら、セイバーと明は彼女を見送った。流れで公園に立ち寄ったが、のんびりしていた為既に時刻は二時近かった。

「これからどうする？」

「……ひとつ、行きたいところがある」

今まで特に行きたいところはないと言っていたくせに、今に至りセイバーぼそりとそう告げた。もしかして最初から今から言おうとしている場所に行きたかったのか、それとも最後にそこへ行きたかったのか。

そうしてセイバーが提示した場所は、ごく変哲もない、あのショッピングモールであった。

明の朝食が遅かったとはいえ、時間が時間だったために二人はショッピングモールの二階で食事をとることにした。セイバーはうなぎを所望したため、丼幸という丼もの専門店に入った。

ただ初日に案内した駅ナカのような専門店ではないために、セイバーは当然の如く初日の店の方がうまいと言っていた。

冬の夕暮れは早い。特に十二月は冬至になるまでは一日一分ずつ日が短くなるという。既に夕方に差し掛かりつつあるために、買い物に来た主婦が多く見える。

遅い昼ご飯を終えると、セイバーは、観たい景色があるとエスカレーターへと足を進めた。二階建てのショッピングモールの上は屋上駐車場だ。

明はしばしばこのショッピングモールに訪れるが、屋上には行かない。明は免許を持っているが、車は運転しないからだ。

屋上は傾いた日を浴びて、駐車されている車の影が濃く長く伸びていた。高く張り巡らされた落下防止用のフェンスが格子状の影を作っていた。

まだ明が幼かった頃、屋上は全面駐車場ではなく一画が子供向けの遊具が置かれている遊び場であった。明が覚えている屋上の姿はそれのまま、現在の屋上はまるで別の場所のようだった。

セイバーは屋上一帯を眺めまわすと、何かを発見したようにまっすぐに一画へ足を進めた。明もそれに倣いついていくが、あまり気は進まない。すでに面影はないが、その場所は十年以上前に、明が落下していた場所なのだ。

セイバーはフェンスを掴んで下を眺めている。今も昔も下には樹木が植えられ、さらに植込みがある。

「マスターが落ちたのはここか」

「……そうだけど、ここに何かあるの」

「何もない。見たかっただけだ。お前の見た景色を」

碓氷明という女の始まり。碓氷明という業の始まり。姉、友、家政婦を、もしかしたら母さえも己の生まれ故に殺してしまった始まりの景色がこの夕暮れだった。

「明、昨夜お前の覚悟は聞き届けた。本当に自分のために生きられるかわからなくても、己の価値を信じるために生きると」

西日を背に受けたセイバーの姿は、逆光になって暗く見える。少し

だけ明を見上げたセイバーの目は、射抜かんばかりの真摯さで見つめてくる。

「俺の最強の夢はいまや無為になった。ならば俺は何のために戦うのかと、考えた。マスターであるお前の為か？それもある」

しかし、セイバーがいくら明の為に戦おうとセイバー自身の人生は変わらない。無念に終わった人生を改変できるわけではない。ただ、やっと死という安息が訪れるだけ。

「俺は人の願いを叶えてみたくて戦ってきたのではなく——人の願いを叶えることができれば、人として生きること認めてもらえると思っていたのかもしれない」

邪悪を排斥するのも、神を崇拝するのも、恐れているという意味では同じだとかつてキャスターは嘯いた。

その通り、日本武尊は最後まで人になる事は出来ない運命だった。

「お前も普通の人としての人生は送れない。しかし、それでもなお生きようとする。なお己の価値を信じようとする。それは、かつての俺にはできなかつたことだ」

——生きる、という選択肢が明にただ苦しみを強いるだけになるかもしれない。

それでもセイバーは、明の生を願っている。

「鮮やかさなど不要。はいつくばり涙を？むそれでも——お前の選択は間違っていない。やはり俺が戦うわけはお前がそうやって生きていくことこそが、俺の希望だからだ」

自分ができなかつたことを、今を生きる人間に託す。たとえ己の人生が変わらなくても、誰かを同じ道に踏み入らせない。

人の歴史は、只管に失敗を繰り返す。しかしそれは無意味な失敗ではない。ただひたすらによりよい生を求めて試行錯誤する苦闘の軌跡である。

「ゆえに今の俺にできることは、俺の人生がいくらどうしようもないものだったとしても、それでも俺の人生だと受け入れて死ぬことだ」  
ただ願いの叶わなかつた生涯を受け入れる。明の未来がたとえ、セイバーと同じ末路を迎えることになっても、それでも自分の人生だと



受け止めて死ぬるようにと。

——しかし、セイバーの予想に反して明は妙な顔をして言った。

「ぼか」

「は？」

「死ねてはいないけど、セイバーはもう自分の人生は受け入れているよ、とつくに」

今度はセイバーが妙な顔をした。薄々感付いてはいたものの、やっぱり自覚がなかったとわかり明は苦笑した。

やはりセイバーの一番の難点は人の気持ちが分からないことよりも、自分で自分をわかっていないことである。

「もし本当に自分を人々にとって害でしかない、迷惑ばかりかけたと思っているだけなら、あなたは最強を願わない。願うのは自己の消滅による歴史の改竄だよ」

仲間や妻を死なせるような情けない自分など日本最強に相応しくないと否定して、彼らを生かせる本当の日本最強を生み出すこと。

自分の価値を根本から無に帰す願い。死の間際のセイバーには、それを条件に世界と契約する方法もあったのだ。

しかしセイバーが願ったのは、「他ならぬこの自分」が日本最強となるということ。

セイバーは意識こそしてなくとも、わかっていたのだ。

自分の存在を抹消するということは、彼とともに戦った仲間や妻の意思や行動をも抹消することになると。

最後に自分が戦う機械となるのはよくても、それだけは絶対に許されない。

自分が消えることで、大事な人たちが平穏に生きられることになっても、日本武尊は絶対にその選択肢を選ばない。

何故なら、

——その選択が尊く。

——その過去が尊く。

——その記憶が尊く。

自分に意味と価値失つても、自分以外の人々は違う。共に旅をすることを選り、戦い続けた彼らの人生が貴くないはずがない。

それを、己の一存で抹消していいはずがない。

愛したその記憶が、己を苛む呪いになろうとも。

たとえ己の平穩を投げ捨てる結末になろうとも。

あの記憶／記録だけは絶対に消させはしない。

それは、人ならざる神の剣として生まれたモノが唯一残しえた——小確命という人間の我儘<sup>エゴ</sup>だった。

「己の人生を呪うほどに、愛すべき人々がいた。己の魂を犠牲にしても、幸福を願いたい誰かがいた。たとえ人生の終わりに、その願いが叶わなかったとしても——それは、ろくでもない人生なのかな」

セイバーに問いかけながら、同時に己に問いかけるように明は言葉を口にした。

きつとそれは激しく痛みを伴いながらも、これ以上なく幸福な生だと信じて。

橙色に染まる日が、風になびいている二人の髪を照らし——

「……あつはつはつはつはつは!!」

「!?えっ!」

セイバーが爆笑していた。フェンスの金網を掴んで俯きながらひいひい笑っている。今まで不敵な笑み、馬鹿にしたような笑み、微笑みレベルの笑いなら何度かあったが、このような哄笑はなかった。明は一瞬セイバーの姿を凝視してから、一步引いた。

「え……なんか急に笑い出した怖っ。私変なこと言った?」

セイバーはまだふるふると体を震わせながら、目じりに滲んだ涙を拭きながら言った。

「いや、申し訳ない……お前の言うことは間違っていない。本当にものは考えようというか……しかし、安心した」

「え?何が」

「そんなことをいえるなら、明、お前は大丈夫だよ。俺よりもずっと頑丈にできている」

明はセイバーが明のことを信じるほどに、自分のことを信じられていない。しかし彼がそう信じるなら、自分はそうありたいと思うのだ。

「まあ、生きてみるよ」

「ああ」

夕日の色を帯びてきた太陽が、西から差す。長く伸びた二つの影は、確かに笑っていた。話は途切れ、静かなときが流れた。そのとき、明が不意に口を開いた。

「……ところで、話変わるんだけどさ。泣いても笑っても今日で戦争は終わる。セイバーは消えるつもりだろうけど」

「そうだが、どうした」

「ちゃんと勝てれば、私の魔力でセイバーを現界させつづけることはできるんだよね」

言わなくてよいことだと、明自身は承知していた。セイバーの決意を試そうとしているわけでも、セイバーに本当に現世に残ってほしいわけでも、事実として知らせておこうと思ったわけでもなかった。

ただ、彼が消えてしまうことがさびしかったから、なんとなく口をついで出てしまったのだ。セイバーが明の心境を察するわけもなく、純粹に驚いたようにつぶやいた。

「……そうか、その気になれば俺は現世に残れるのか。そうすれば、お前の行く先も見届けられるな」

何を考えているのか、セイバーはしばし黙り込んだ。

しかし不意に、いつも朝の挨拶をするような気軽さで言った。

「それでも俺は帰るさ。だって——」

## 12月8日③ 決戦前夜

「……さて、今日で決着がつくよ」

悟の作った夕食のカレーを平らげ、二人の明・一成・セイバーに悟は引き続き食堂に顔を突き合わせていた。場の全員が息を詰めて、主導の本体の明の言葉を待つ。

しん、屋敷の外は深い闇に覆われていて、住宅街にも拘わらずこの家しか息をしていないかのようだ。

「ライダーの撃破が最優先、大聖杯自体も破壊したいところだけど……セイバーはそのためだけに力をセーブしようとしないでね。とにかくライダーをなんとかして」

セイバーは無言で頷いた。勝算はある——問題はタイミングと、ライダーがさらに何を持ち出してくるかである。最後の戦いは二人どころか三人共、別々に戦うことになる。

「もうわかつてると思うけど、私たちがシグマ、一成は神父、セイバーはライダーと戦うことになると思う」

二人の明は一成の千里天眼通を通してシグマの力を把握している。そして、土御門神社地下に広がる大聖杯の全容もわかった。

一成の得た知識をもとに、おおまかに図に起こしてもらった。テーブルの上にはその図をコピーしたものが人数分広がっている。木々の生い茂る丘の上に立つ土御門神社に向かう階段を上らずに、森の中にある入り口から地下への階段をひたすらに降りていく。

大聖杯の魔法陣のある最下層は直径二キロ以上ある円形の広場になっていて、一成は視たそうだ。そしてキリエはまだ生きており、地下ではなく土御門神社の境内に捧げられている。既に七騎中五騎が消滅しているため、たとえ神父たちに身柄を奪われていなくともキリエは意識を失っているだろう。

さて、問題は神父にシグマ、ライダーがどこにいるかだ。土御門神社には違いないが、地下か境内か。神父の願いは「聖杯戦争の継続と再開」であり、イレギュラーであるとはいえ世界の中で完結する願いのため、一応小聖杯たるキリエがいれば叶えられる。

とすれば彼らは境内に居ることになるが、シグマはそれとは別に地下大空洞にて待っているかもしれない。魔術師として大儀式の魔法陣を調べることはもとより、工房を築くのならば、開放的な神社そのものよりも閉鎖空間の方が適しているからだ。

魔術師の創り上げた工房に乗り込むことは自殺行為に近い。キャスターのサーヴァント酒呑童子の陣地で苦戦を強いられたように、本来すべきことではないのだ。

しかし今の状況になってしまった以上、立ち向かわねばならない。明はおめおめ神父を信用し、中盤まで色々な情報を自ら提供してしまっていた。ハルカのことをもっと詳細に神父や父に聞きただしていれば、今よりましな状態だったのかもかもしれない。

自分の見る目のなさで失態に頭が痛くなる。想像明の視線もどことなく痛い。明は咳払いをして話を続けた。

「少しでも体力を温存、回復してから行きたい。皆ゆっくり休んで準備して、夜のうちに行くよ」

想像明とセイバー、一成、それに悟も頷いた。当然悟は行かずに、私たちの帰りを待つ。大本の明はセイバーとの話は昼に済ませてある。一成は強制的に千里天眼通を落とした反動を回復させ全快に戻るべく、ぎりぎりまで体を休める。

それでも重さがぬぐいきれない沈黙を最後に、一同は解散した。

空気が重い。夜が深い。セイバーが現界した約二週間前とは、やはり春日の空気が違うと感じる。元々ここは住宅街の中で夜の人通りが多いわけではないが、それでも日が暮れると不気味なくらいに人がいない。

作戦会議の後、セイバーは碓氷邸の屋根の上に立ち、春日の住宅街を見下ろしていた。バーサーカーの凶行がなくなっても、その恐怖はまだこの春日を覆っている。それでも、人気がないからこそ感じるのか、澄み渡った冬の空には星々の煌めきが良く映っていた。

当然、セイバーの生きていた時分の数には遠く及ばないが、その煌

めきは二千年が経過しても変わるものではなかった。

寒々しい風がセイバーの衣袴を翻す。彼の右手には小さな櫛が握られている。

元々この櫛を使うつもりは毛頭なかった。いや使ってはいけなかった。再び戦いにおいて、彼の妻を殺す真似をすることは許されない。

だが、彼の願いの為にその櫛の力がどうしても必要だった。

果てのない戦いを続けるためではなく、自らの終わりを受け入れる為に。そして人生を続ける彼のマスターの為に。

苦しくても生きていること自体が、誰かの希望になる事もある。

セイバーには、妻が何を願い思つて身を投げたのかは永遠にわからない。しかし――

「――お前は、ただ、俺に生きていてほしかったのか」

明の友人が明の健やかなることを願うように。セイバーが明の未来を願うように。

かつての妻は、日本武尊の使命が果たされることでもなく、最強たることでもなく、ただ生きることが望んでいたのかもしれない。

死者の気持はわからない。

わからないなりにセイバーは考えて、未来を拓くために、力を借りようと決めたのだ。

ふと屋根から庭を見下ろすと、ポーチから見慣れた神主姿が出てきた。何か目的がある様には見えずふらふらしているので、庭の散歩のようだ。

セイバーは勢いをつけて屋根から飛び降りると、丁度良く彼の目の前に着地した。

「どわっ!!セ、セイバー!!」

唐突に立ちふさがった闖入者にたたらを踏んで、一成は危うくひっくり返りそうになった。

「そういえばお前、その服はお前の普段着なのか?」

「違えよ!魔術礼装だっつーの」

聖杯戦争当初は制服である学ランを身に付けていた一成だが、明と共闘するようになってからは常に魔術礼装である神主服を着るようになっていた。碓氷邸にいる分にはいいが、キャスター戦前にホテルに宿泊していた時期もこれで通していた為無駄に目立っていた。

セイバーは聞いた割に興味なさそうに話を交えた。

「それより、お前とは色々あったが世話になった。礼を言う」

「……………」

「どうした」

「…………お前、本当にセイバーか？」

「ついに壊れたか」

「やっぱセイバーだった。悪い」

(セイバーの意思ではなかったとはいえ)腕を切断されるわ、殺すと言われるわ、共闘しても扱いは雑だわ、何故か世話を焼かされるわロクな目にあっていない一成である。まさか今になって礼を言われるとは思ってもいなかった。ただそれでも感謝されれば、一成も悪い気はしない。

「…………俺も世話になったから、お互い様だ。あと少しだけよろしくな」

「ああ。そして非常に遺憾だが、お前に頼みたいことがある」

「…………ほんつとーに一言多いよな」

とはいえ、一成にとってはもう慣れたことである。セイバーの様子もふざけたところなく、極めて真面目な話だろうことはわかる。

そして、セイバーは深々と一成に向かって頭を下げた。

「この戦いの結末がどうあれ俺は消える。だからその後、もしお前が生きていたらマスターをよろしく頼む」

時が止まった。むしろ一成の脳はかつてないほどの超高速で動いていたが、早く動き過ぎて焼け付いていた。

完全に石化した一成を不審に思ったセイバーは、無遠慮に彼をどついた。

「何を呆けている。返事は」

「…………いや、セイバー、落ち着け。っていうかお前は碓氷の何なんだ

!？」

「妙なことを聞く。俺は碓氷明のサーヴァントだ」

「いやそーじゃなくて!!その、よろしく頼むってのは、その」

セイバーの真面目くさった態度と、自分が消えるから頼む、というのは、つまりだ。一体セイバーが明の何気取りなのはか全く以って不明だが、まさかの発想が一成の脳内を占拠している。

セイバーは、ああと何気なく呟いてから説明を始めた。

「マスターとサーヴァントは嫌なところばかり似るもので、アレは内に籠りやすい。お前くらいのバカが友人にいた方がいいだろうと思っただ」

再び時間が止まった。一体この勘違いは、一成が思春期真っ盛りなせないなのかそれともセイバーの言い方が悪いのか判断がつきかねる。

「……あ、うん、そうだよな、うん。わかった」

「ならばよい。お前も少しでも寝ておけ」

セイバーは一成の答えに満足したのか、踵を返して碓氷邸に戻った。無駄に動揺続きの一成は、肩を落としたがもう少し碓氷邸を眺めることにした。

セイバーに言われるまでもない。出会ったのなら、その出会いを無かったことにすることはできないししたくない。だから最後まで戦う。

まだ明け方の千里天眼通が尾を引いており、頭が痛い。自分も休もうとセイバーに続き、一成は屋敷へと足を向けた。するとセイバーと入れ替わりに、想像明が玄関から顔を出して一成を呼んだ。妙に真面目な顔つきである。

「ちよつと一成」

「んだよ」

一成は後ろ手に玄関の扉を閉めると、想像明に向き直った。彼女は小声で一応、と前置きしてから話を続けた。

「たぶん大丈夫だと思うから言わなかったけど、やっぱり心配だから伝えとく。一成、ちゃんとコントロールできるようになるまで眼を使うのはやめといて」



「そりや使う気はねえけど」

正直、眼を起動する感覚なら掴みかけている。死を意識する——それは、魔術回路のスイッチのオンオフと近い。ただやはりネックは止める方だった。一回目は自分の魔力切れによる強制停止、二回目は明の術式妨害による回路の強制ショート——自分の意志で止められない。

最後の戦いでは頼みの綱である明が傍にいてもなく、キリエの意識も遠い。ゆえに眼を開いてキリエの魔力すら使い切るころには、「」からの洪水の如き情報で脳が死んでいる。

「……あなた、まだ体があちこち痛かったりしてるでしょ」

「……おう、よくわかったな」

とりあえず行動に支障はないが、筋肉痛のような状態が朝から続いている。学校では帰宅部とはいえ運動部の助っ人によく出るため（運動は得意だが部活動レベルでは人数が足りない時の人数合わせ）、筋肉痛とすれば久々だが——そうではないことは流石に理解している。

魔術回路のショートが治りきっていないのだ。

明とて重度な後遺症が残るようなやり方はしていない。問題は一成の方で——彼はすでに一度、魔術回路をオフにしないまま焼け付かせかけたという前科がある。

そして日をおかずに無理にショートさせたため、今一成の魔術回路は非常に脆弱な状態になっている。せめて一ヶ月以上は間において治療をうけるべきなのだ。

「朝は私が使わせといて都合良いのはわかってる。だけでももしショートならまだしも焼け付かせたりしたら、よくて魔術が使えない、悪くすれば体自体が壊れる」

それは、薄々一成も感じていた。腐っても魔術師の端くれで、自分の身体の状態が危ういかどうかくらいはわかる。

さらに明は何事か言うべきか言わざるべきか迷っているのか、しばらく黙ってから意を決して口を開いた。

「ぶっちゃけた話、最後の戦いで神父は強くないライダーとシグマをなんとかできれば大丈夫なんだ。神父を倒せなくてもいい。本当

に危なくなったら逃げて」

一成は沈黙した。確かにもう神父を倒してもライダーが消滅するわけでもなく、魔力が足りなくなるわけでもない。一成が逃げても、戦闘の大局に影響はないのだろう。

自分の身体を損なうことを覚悟してまで神父を倒す意味があるのだろうか。

本体の明がそれを言わなかったのも、想像明が作戦会議でそれを告げなかったのも——一成の意思を汲んでのことだろう。

腕を失ってもアーチャーとの邂逅を求めた一成の姿を、虚数の少女は鮮烈に覚えていた。

だから、一成は思わず笑ってしまった。

「お前、やっぱり魔術師のくせに甘いよな」

「……それは私あの子に言つてよ。私を理想としたのはあっちなんだから」  
「それだ。理想ならもつと魔術師然とした想像明おまえにもなれたはずなのに、ならなかった。だからあいつは甘いってことを良しとしてるんだろ」

それが魔術師としては良いかどうかはともかく、一成には好ましい。甘さを理想から消さなかったということは、魔術師としてふさわしくなくても「そうあることが良い」と思っているからだ。彼女は矛盾を受け入れると決めている。

「俺、お前のそーゆーとこいいと思うけどな」

「……」

「何だその顔」

一成は首を傾げた。想像明は盛大に溜息をつき、ジト目で彼を見据えた。

「なんであなたは非モテをこじらせたようでありながらそういうことをさらつと言うかな？キリエが泣くよ？」

「なんでそこでキリエが出てくるんだよ」

「まあそれは置いといて。とにかく、無理をしないで。神父が妙なことをしないようにしてくれればいい。一成が無理をしたって得る

ものはないはずなんだから」

想像明は妙にムキになっている。本体の明よりも想像明の方が自信もあり大人びていると感じていたが、今はそうでもない。一成も自殺志願者ではないのでしなくていい無理をする気はない。

しかし、力が必用とされるのであれば——一成のすることは決まっている。それに一成の目算では、あと一回の使用に限って言えば自分の意志で接続を切れる。

「あーあーわかったって。お前、本体の明よりおせっかいなんじゃないか?」

「それは否定できないね。明の姉は、基本的にお節介なマセガキだったから」

かつて明が憧れていたという彼女の姉。一体どんな人間だったのか興味があるが、聞くタイミングを逸してしまっている。すると想像明はやおら一成の方に振り返って、人差し指を一成の唇の前に突き出した。

「気になるなら全部終わった後、私あの子に聞いてみて。だから、ちゃんと生き残ってね」

\*

——光が、見える。

有りうべからざる色、眩い黄金。その色は往古から人心を惑わす魔性を持つと同時に、人々が目指し続けていた完全性の具現でもあった。錬金術が黄金の練成を目的としていたのも、完全なるものとしての金、人間をさらなる高い階梯へと登らせるための一歩だったからだ。

そして女が纏うは遙か悠久の過去に在りし黄金。

女は笑う。女は笑う。女は笑う。刺され焼かれ砕かれても、女は笑

う。

しかし眼ではなく感覚でとらえる女の姿は、すでに人ではない。それも、最初から人ではなかった。

黄金そのもの。遙か極寒の大地に輝く、終天の黄金華——。

「……………」

キリエが意識を取り戻したのは、外と気温の変わらない寒々しい室内だった。さりとて、既に感覚を失いつつある彼女にはあまり関係のないことではあったが。

その聖杯の少女は一目で概ね、自分がいる場所を了解した。

畳張りの部屋、木造建築の社。天井の造りから見ると、様式までは判断できないが神社の神殿である。それに、キリエが寄りかかっている段——さらに部屋を前後に分かつ扉の装飾に、五芒星を刻んだ提灯が左右に取り付けられていた。

春日の神社で五芒星の提灯を飾る神社は、土御門神社しかない。そもそも自分が聖杯である彼女にとって大聖杯がどこにあるかはあまり重要ではない。

キリエは立ち上がろうとしたが、それは叶わなかった。全身が異常にだるく、立ち上がろうとすると気を失いそうなほどのめまいがした。有り余るはずの魔力も全くない。

この状態を鑑みるに、おそらく血を致死量ギリギリにまで抜かれているのだろうとキリエは判断した。

魔術師の血には魔力が溶けこんでいる。魔力と体力を同時に奪い取る、単純だが簡単な方法だった。ただ、既にサーヴァント五騎が消滅した状態では、そんなことをしなくともキリエは自力で行動できない。

既に味覚と触覚を切っているのだが、その工夫も焼け石に水であった。

キリエは全身が聖杯だが、核はある。それは心臓であり、キリエを

殺し心臓だけ抜いてもかろうじて聖杯として機能はする。しかし完全に願いを叶えようと思うのならば得策ではない。ゆえに大西山で敵の手に落ちた時も生かされていたのだが――。

英霊五騎の強大な圧迫感の最中にあり、周囲に人のない今の状況で指一本動かすことさえ至難のキリエに許されていることは僅かだ。

一成とつないだパスはかろうじて生きているが、今は彼の生存がわかるくらいだ。この身は聖杯であり、さらに春日の大聖杯から流れ込む魔力があるうえ、英霊五騎の魂に浸されている彼女とより深くつながるものに意識は占領されている。

それは、大聖杯。ゆえに彼女は大聖杯の異変に気付く。

――何者かが大聖杯に触れようとしている。

この状況でそんなたいそれたことをなそうとする人物はただ一人。キリエは今だにその姿を見てすらいない、シグマ・アスガード。

彼女が何をしようとしているのか、キリエには把握できる。それより気になることは、何故彼女が神父に協力し、あまつさえきちんと御雄神父の願いを叶えようとしているのかである。

そう、今シグマが大聖杯を改竄しようと試みているのは、神父の願い「聖杯戦争を何度でも繰り返す」を正しく叶えようとするがゆえなのである。

摩訶不思議な神父の願い。大聖杯を破壊しなければ三十年後以降に、春日で聖杯は再び満ちる。しかし神父はより短いスパンで――一年ごととか――聖杯戦争を行いたいと考えている。ただそうすると神父自身にも告げたように、いつか魔力の帳尻が合わなくなる。

シグマが成そうとしていることは、絶対的に訪れる魔力不足を解消するための所業。

正直、彼女であつてもそれは不可能だとキリエは見ている。

ただ成り行きを見守っているに過ぎないのだが、「動機」の疑問は尽きなかった。

『シグマ・アスガード。貴方は何を望み、オユウの願いを叶えようとするの？』

聖杯に触れんとする黄金に、キリエは語りかけた。むこうもキリエ

の存在を感じていたようで、滑らかに会話は始まった。

『――聖杯戦争は、大聖杯だけでははじまらないでしょう？マスターたる魔術師がそろわなければ、ね』

『……目的は人だともいうつもり？ハルカ・エーデルフェルトを傀儡にしたように』

『違うわよ。傀儡にしたのはそつちの方が便利だっただけ。だけど、人が目的というのは間違っていないわ。ああ……聖杯の、泥。これを浴びれば私はきつと死ぬでしょうけど、きつと今なら浴びれるのかしら』

最後にはキリエの言葉が届いているのかいないのか、恍惚として蕩けた声音が広がった。シグマが一流以上の魔術師であることは了解しているが、聖杯の改竄が成るかは別の話である。

『聖杯の娘。天の衣を持たない今のあなたには何もできないでしょうけど、特等席で見ているといいわ』

遠ざかる弾む声を、キリエはただ送るだけだった。凍える寒さの神殿に、一人。

しかし彼女は待っている。彼女が生きること願った未熟な陰陽師が助けに来ることを。危ないから止せと言って止まる人ではない彼を、待っている。

12月9日① 土御門神社・上空

深更、夜明けを迎える前に一同は眼を醒まし、身支度を整えた。明と想像明は薄桃色のブラウスにワインレッドのプリーツスカートに黒タイツにブーツを着ている。

一成はいつもの神主服にブーツを履いている。冬にコートすら着ないのは寒いのだが、これから嫌になるほど動き回るのだから先んじて着ないことにしたのだ。

セイバーは例の衣袴だが、まだ魔力の鎧は編んでいない。

明は片手に鞘に収まった黄金の柄の剣を携えていた。一成に何かと聞かれたが、彼女はとりあえず秘密兵器、とだけ伝えた。

四人は悟に見送られ、碓氷の屋敷に別れを告げた。

土御門神社は碓氷邸から徒歩二十分、山とはいかないまでも小高い丘の上にある神社だ。セイバーに頼んで飛行しようかと思っただが、明二人に一成という人数の為歩いて向かうことになった(セイバーと共に飛行するには、全員がセイバーの体のどこかにつかまらなければならぬ)。

話すべきことは昨夜全て話し終えている。四人は注意を払いながら、黙々と夜明け前の闇の中を歩いていく。

住宅街のはずれに位置する土御門神社の石階段の前に、四人は立っていた。この手の神社は、結界が張ってあることが多く、神社に至る場合は正面の鳥居から入る方が好ましい。

すでにこの時点で——土御門神社は尋常の場所ではないことが感知された。

魔力が異常に濃い上に、無色ではない。色で例えると漆黒の、呪いを帯び瘴気にも近い魔力。木々の生い茂る石階段の先の神社も、風一つなく木の葉のこすれ合う音もない沈黙の社。

明は剣を抱え直して、想像明、セイバーと一成を見た。一成の眼で神社のどこに何が配置されているかはわかつている。

「孔が境内で開けられつつあるんだと思う。表向きの聖杯——キリエ

がいる。そしてサーヴァントの召喚を可能にし、渦に至る道を開けるほどの魔力を貯めた大聖杯は地下にある」

シグマは地下の大聖杯の許で工房を作成している。御雄神父は定まった居場所はないようで、地下にいる可能性も境内にいる可能性もある。

「一成は境内にいるキリエを助けてから来て。というか、地下に入る時はよく空気読んできてね。多分一成を護りながらあの女と戦えないし、そういう意味で」

巻きこまれて死なないように身を守れよ——明の瞳はそう告げていた。一成は真面目に頷き、石階段の先を見上げた。

「どうやら俺もここからは別行動だ。ライダーは境内にいる」

セイバーは天叢雲剣を片手に取り、魔力で編み上げた白銀の鎧を纏いつつ言った。

ライダー自身は頓着しなさそうだが、広いとはいえ地下空間で対城宝具同士がぶつかれば地下が崩落しかねないため、シグマが地下で彼らの戦いを認めるとは思えない。明は軽く頷いた。

「じゃあーっで」

戦いが始まれば、セイバーはセイバーの戦いを、明は明の、一成は一成の戦いに全力を投じる。

まともに会話ができるのは、これが最後だ。

「一成、無理はしないで」

「お前も無茶すんなよ」

それから明はセイバーに向き直り、右手の甲をかざした。最後に残った一画を使うならば今しかない——今の願いはただ一つ。

「セイバー、勝ちなさいー」

手の甲から赤光が迸った瞬間にセイバーを取り巻いたのは、猛烈な蒼き風。「勝て」という言葉に込められたのは、令呪の魔力を全てセイバーに与える命令だった。魔力風は夜明け前の林の木々をゆすり駆け抜け、静寂が戻った。

セイバーはいつもの真面目くさった顔のまま頷いた。



「わかった。明——武運を祈る」

別れは済ませている。簡潔な言葉で十分である。明はこれから階段を上らず、こんもりと樹木の生い茂った丘の側面にある入り口から地下に入る。

セイバーが先に立ち一成が後をついて登っていく姿を見送って、オリジナルの明は手にしていた黄金の柄の剣を勢いよく引き抜いた。

月下に輝くその剣は美しく、観る者を魅了する魔剣である。

——これでもう、逃げられない。

明は剣の鞘を想像明に手渡し、互いに頷き合うと森の中に足を踏み入れた。

\*

じやり、じやりとセイバーと一成が石段を上る、その音だけが月明かりの静寂に響く。境内は階段からも薄明りを放っていることが確認でき、一段一段登っていくほどに濃密で悪寒のするような魔力をはつきりと感じられる。

階段を登り切り一の鳥居を潜り境内を見回すと、参道の両脇には木々を植えていて鬱蒼と森のように茂っていた。

神社自体は確か、一万五千平米——野球のグラウンドの一・五倍の広さだった。それは丘を登りきった純粋な神社としての面積で、丘全体としてはもつと広い。

一成たちの目の前の石畳と灯籠の伸びる先に、二の鳥居が立っている。それから真つ直ぐ進み、左手には社務所に手水舎、右手に絵馬を飾る絵馬舎に清明像がある。

それらを通り過ぎ真つ直ぐ歩いた先に、安倍清明を奉る本殿が鎮座する。

五芒星を刻んだ提灯が飾られ、一般に思い描くような神社とは多少趣を異にしている。

そして本殿前の賽銭箱で胡坐をかいているのは——烏ごそいな  
ものの、一昨日と同じく白金の短甲に身を固めたライダーだった。

自律する剣は彼の周囲をぐるぐるとまわっている。その傍らには、  
昨日見たばかりの神父の姿があった。

「——よく来た、陰陽師」

「——よく来た、神の剣」

「——ッ!!」

一成が息を呑んだのは、二人の姿を認めたこともあるが、それ以上  
に彼らの背後にあるものを捉えたせいだった。

本殿の上に——黒い穴が開いていた。その黒い穴からはどろどろ  
と得体の知れない粘性の液体が流れだして本殿を溶かし、神社の  
背後に沼を作っていた。視覚化され手に触れられるほどに濃縮され  
た、呪いの具現である。

そして黒い穴の前には——視えない十字架に張り付けられたよう  
に手を広げた全裸のキリエが浮いていた。

「——キリエッ!!」

「待て、土御門。あの娘はまだ死んでいないように見える」

セイバーはすかさず手で一成を制した。眼は閉じられてぐったり  
しており、血色もよくないが——それでも一成に魔力が流れている時  
点で、キリエは生きている。

しかし一昨日の夜、キリエをむぎむぎと攫われた時のことを思い出  
して、一成は激昂した。

「セイバーの言うとおりで、土御門一成。キリエスフィールは死んで  
いない」

「……っこの……キリエを返せ!」

「少し黙れ!」

有無を言わさぬセイバーの鉄拳が一成の頭に落ちて、一成はその場  
に蹲りかけた。セイバーは一步前に進み出て、ライダーを睨みつけ  
た。

ライダーは頬杖をついて笑いながら問う。

「……今も現界できているということは何か手をつかって繋ぎ直した

か。そこまでしてこの戦いに執着するとは、公を満足させうる答えは出たか？」

「お前が満足するかは知らない。しかしその神父の訳のわからない願いに加担した時点で、お前は春日を滅ぼすモノだろう——死んでもらう」

セイバーは両手に天叢雲剣を構え、臨戦態勢に入った。ライダーは悠々と立ち上がると、軽やかに布津御霊剣を手に取る。ちらりと神父に振り返り微笑む。

「あの草がシグマを相手取り、お前が公を、そこな草が御雄。まあそんなところだろう。御雄、お前はお前の願いの為尽力せよ——!!」  
「言われずとも」

神父の返事を待たずにライダーは石畳を蹴り刹那、セイバーへと突撃した。セイバーは天叢雲剣でその突撃を受け止めるが勢いに押され、すさまじい勢いで地を滑って後退した。

一成がセイバー、と叫ぶ声も消し飛ばす強力が彼を襲う。

セイバーの魔力は一昨日の状態よりはるかに改善し、令呪もあいまってむしろ全快以上の状態ではある。しかし今の明はセイバー以外にも想像明の実存を保つために魔力を割いている。

明の魔力量は破格であるが、それでも有限には変わりなく、その上彼女も彼女で魔術に魔力を割く。

それに引き換え、無限とほぼ同義の魔力を有するライダーに追いつくためにはどうするか。

——そのための、最後の令呪だったはず！

セイバーが意識的に放った強烈な魔力風にあおられ、一度ライダーの剣は止まる。天叢雲剣を振りかざし、編み上げた鎧は傷一つなく煌めいている。

これまでにないほど魔力に満ちたセイバーは、覚悟も新たに地を蹴った。

「ライダー！俺が死ぬために、お前を殺す！」

その叫びを聞き届け、ライダーはむしろ笑む。強く自らの剣を握りしめ、魔力風を斬り払って駆け抜け、空に舞った。

「地上は狭いだらう」

西の空に、うつすらと上弦の月が見えた。夜明け前が最も暗いという言葉通り、世界はまだ眠りについている。

明ける夜を迎えるために、セイバーは助走をつけて空を駆った。眠る街を眼下に、太陽の御子たる二人の英霊は視線を交す。セイバーは素早く左右に視線を走らせたが、鳥と神舟の姿がない。

鳥は体に取り入れているのかもしれないが、白く輝く剣を手に、セイバーは問うた。

「貴様、鳥と船はどうした」

「今の公は、鳥を破棄して断絶剣で初めて本当に世界を斬るゆえ、破棄した。なに、あの紛い物の聖杯のせいだ」

船はまだあるがな、と付け加えてライダーは隠さず答えた。冬木の穢れまで模倣した春日聖杯は、内部につきりきったライダーに膨大な魔力を与え、(日本国内において)憑代さえも不要とする多大な加護を与えている。

しかしその魔力は悪に呪われ切った魔力であるため、通常の英霊ならその人格すら保てない。ただライダーは素であれば、正気のままその程度の人間の業は受け止められる。

しかしライダーは「聖杯を浄化する」目的で余分な力を使ってしまい、呪いを受け止めるだけの力が不足してしまっていた。にもかかわらず今極めて正常であるのは、ライダーそのものの精神力と魔力を得る際に犠牲となった何かがあったのだ。

「聖杯の汚濁から公を護るために経津主神の人格と神性が犠牲になった。建御雷神は経津主神の相方であるからして、公を捨てることはできないんだ。ま、そのせいで剣が本来の力を発揮できていなかったのだ」

あれで本気の方ではなかったと知り、セイバーは心の中で苦々しく歯噛みした。しかし、一方で鳥を破棄したわけも理解できた。

剣とおなじく神象宝具である鳥を破棄する、正確に言えば鳥の神性で剣の神性を補うことによって剣本来の性能を取り戻そうとしているのだ。

「なまじ神そのものであるだけに、公の意思だけでは破棄できん。御雄めに令呪を使わせようとしたが、あやつはあやつであの時盛り上がっておった」

美玖川での戦い、深手を負ったセイバーをあえて放置したライダーは本来の剣を取り戻すために立ち去ったのだ。そんなことをしなくても、あの時ただの一刀でセイバーは消滅していたのだから、やはり舐められている……そこまで考えて、セイバーは独り首を振った。

この男は、慢心や油断をしているわけではない。ただ自分が不利になつても、勝利という結果を絶対としていないからどうでもいいと思っている。

楽しませた者がいるなら、褒賞として自害して聖杯を与えようというのだから。

「……さてお前は答えを得たようだが、それを聞いておこう。お前を生きながらえさせた理由そのものだからな」

「その酔狂は、お前を殺すぞ」

「その何が悪い」

サーヴァントとマスターが似るといふ。セイバー自身己と明の件で痛いほどに自覚していたが、それはライダーも同じようだ。今だ深い夜の中、セイバーは明確な意思を以て答えを告げた。

「――俺は死ぬ。日本最強が真実でなくとも、偽物であっても俺の人生だ。聖杯に用はない」

返答を聞きながらも、ライダーは既にその答えを予想していたようである。舞う布都御霊剣を右手で受け止め、まんざらでもなさそうに頷いた。

「……お前は聖杯を欲さない。ならばあの道楽神父の報償に、聖杯をくれてやることにしよう。それに元々公は、既に死んだ英雄よりも、今を生きる名も残さぬ人間の方が好きでな？」

闇が深い中、白い光が天叢雲剣を包み、同じく白い光が布都御霊剣を包んでいる。神威の直刀と清廉なる蛇行剣が、交わるまで僅か。

ライダーは邪悪ではない。だが決してその目的を、神父の願いを、シグマの願いを遂げさせるわけにはいかない。

「——ッ!!」

白銀の閃光と白金の閃光が炸裂する。共に神代と人世に橋をかける、深い神秘を秘めた英霊同士の戦いである。共に神性を具え、神殺を具えた英霊。

魔力がうねりを上げている。大気が震えている。ライダーとセイバーが発散する魔力によって、乱気流の如き暴風が発生している。遠く雷鳴の音さえ聞こえるのは、ライダーの剣——建御雷によって振るわれた剣のことを思えば、気のせいではない。

蒼い風を切り裂き、セイバーの体はライダーへと迫る。速さは神速。威力は暴風。洗練とは程遠く、本来の担い手そのものごとく全てを破壊せんが為に振るわれる天叢雲剣は、この国の始祖たる英霊へと牙を剥く。

全力の魔力放出を加えた裂帛の一撃は、ライダーの剣に受け止められる。ライダーは顔色一つ変えず受け止めてみせる。

ほう、とライダーの感嘆の声が漏れたのも僅か。返す刀でセイバーの剣を弾き返し、腰を落としてセイバーへとその剣を振るう。

その剣は今や白い光——雷光を纏って激しく輝く。「魔力放出(雷)」——セイバーの魔力放出と同様の出力増強に加えた追加効果。まだ草薙が失われていなかった時、天叢雲の蒸気を纏っていたことを思い出す。

「ハ——!」

セイバーの剣が横なぎに振るわれれば、ライダーの剣はそれを受け止め弾き返す。ライダーの剣が袈裟がけに振り下ろされればセイバーの剣がそれを防ぎ押し返す。

音速に近い速度で交わさせる剣戟に悲鳴を上げるのは両サーヴァントではなくその周囲。空気が悲鳴のような高い音を上げ、衝撃派はあたりかまわず放たれるが上空であったのが、街の救いだらう。

セイバーの剣が暴風の破壊ならば、ライダーの剣は雷の鋭さ。荒々しくも針に糸を通すような正確さでセイバーを襲う。前回と違いメインは手を離れた操作にせず、己れで剣を持ち戦うため威力も倍増している。

既にどれだけ切り結んだか不明。一撃一撃が必殺に過ぎたる威力を以て、セイバーに襲い掛かってくる。一部の隙も許されず、一部の油断もありえない。その瞬間、セイバーは座に帰っていることだろう。

さらに数えきれないほどの打ち合いが重なり、力と力が鏖競りあう。力ではほんのわずかにセイバーが上、巧みさではライダーが上、速度は互角か。

ただ油断が許されないのは変わらないが、眼は慣れる。パターンを読むことができるようになる。

その戦闘論理にて、セイバーは一瞬を只管待つ。剣の軌道、不意に手放される自律剣の動きを見切れるその時を。ライダーは弾かれた剣から刹那手を放し、身を低く屈めセイバーの脇を横切った。

しかし雷剣はまだセイバーの前にあり、放電を繰り返しながら鋭く切りかかる。そして背後からはライダーの腕が首を狙って伸びる。セイバーは雷剣に背を向けて気配だけでその剣を避け、ライダーの凶腕を逆にとらえようとしたがそれは叶わなかった。

紙一重で避けたはずの剣は、確かにセイバーの脇腹あたりの鎧を掠めはしたものの直撃はしていない。

しかし——セイバーの身体は麻痺にかかったように動きを止めてしまった。

烈しい雷を纏う剣は、紙一重では避けたことにならなかった。雷は意志を持つ生き物のごとくに、セイバーに突き刺さった。その隙をライダーが見逃すはずもなく——右腕がセイバーの首を捉えて容赦なく締め上げた。

神の力でセイバーが怪力を持つのならば、それはライダーもまた然り。息がつまると同時に背後に——ブーメランのように戻ってきた自律剣の気配を感じる。

「——ッ!!」

首をねじ切らんとするライダーの腕を掴み返し、体を背と足の筋力で振り——ライダーの腕を起点に倒立まで体を振り上げ、セイバーは拘束から逃れる。

神速で戻る自律剣はそのままライダー自身に突き刺さる、ことはない。まかり間違っても己の剣、自律剣を熟知しきる騎兵は華麗に受け止めると同時に——再び剣を手に取ったセイバーの背後からの一撃を見事に受け止めていた。

「——公の元は建御雷、雷を操ることくらい造作もない」

ライダーはその瞬間、何の未練もなく己が剣から手を離して拳を握り体を捻り——強烈な回し蹴りをセイバーの左腕に叩き込んだ。白銀の籠手で覆われているからダメージはない——とはいかぬ。

「——ッ！」

飛ばされるであろう方角へ自ら飛び、衝撃を減殺しようと試みたが焼け石に水程度の効果しかなかった。鈍く、しかし古く感じたことのある衝撃。

とつさに剣のにぎりを右手に移して、手放すまいとしたのが精々だった。

セイバーは十メートルほど吹き飛ばされたが、宙にて身を翻して体勢を立て直した。右で持った剣を隙なくライダーに向けた。

身体の痺れは神剣の加護の御蔭か最初から一時的なものなのか、既に解消している。しかし、

（左腕、折れたな。今の魔力状態なら数分で治るが——）

戦闘時における数分どころか数秒がどれほど命とりなのか、セイバーは身に染みて理解している。神剣の加護によって治癒するまで全力で剣を振り抜けない。

（——強いのはともかく、あれは俺の原典。<sup>オリジナル</sup> やりにくい）

日本武尊と神武天皇。双方とも東征の逸話を持ち、神威の鳥の伝説を担い、神を殺し、この国の礎を築いた英雄。開闢の帝と、東征の皇子。

似通った伝説を抱いていながらも、神武天皇と日本武尊は英霊としては著しく異なる。

この国の始原にして至高。この秋津島における開始点。日本武尊の白鳥伝説も、元をたどればこの靈鷲が原典であり、東征も神武東征



の延長線上にある。

セイバーの苦渋を余所に、ライダーは剣を肩に乗せ下を眺めた。空を駆けながら戦いを続けてきた二人の眼下には——あの時の美玖川が、変わらず静かな流れを湛えていた。

「ふうむ、予想をしてはいたが魔力に不足のないお前に宝具なしではいまひとつ圧し切れぬ。さて、かといってお前も攻めきれぬ。畢竟公らにはこれしかないわけだ」

セイバーはライダーの意味するところを察し、同じく眼下に眼をやった。剣戟を続けてもおそらく、の繰り返しが続くだろう。つまり、彼らのすべきことは。

「——宝具の撃ち合い」

剣同士でうまくいかぬのならば、己が神秘をぶつけあうしかない。ライダーは先んじて美玖川へと向かって滑空し、水面に足を下ろした。くるりと布津御霊剣をまわすと、その切っ先をいまだ空高くに浮かぶセイバーに向けた。

今ここで逃げてもどうにもならぬ、とセイバーは同様に滑空して未玖川の上——ライダーの向かいに立つ。

互いの距離は三十メートルほどか。既にライダーが掲げた布津御霊剣には雷が火花を放ち、魔力を凝縮させていく。剣を中心に風が逆巻き、白く激しく昼間の太陽のように輝く。

僅か一昨日、セイバーを討ち果たし草薙剣を奪い去った断絶の宝具。

幸いにして場所は川。河川敷近くの民家は少々怪しいが、川に沿って『全て呑み込みし氾濫の神剣』を放てば被害は少ないだろう。

ただそれ以前に左腕の回復を待たねば、満足に放てず撃ち負ける。(あれは因果を逆転させる類のものではない。ならば——)

未来予知に近い直感スキルを持つセイバーは、瞬時に行動を決した。宝具を放てば撃ち負ける、水面という地面にも等しい足場を得てライダーの狙いがぶれることはない。

となれば魔力を収斂させているこの時に迫り——斬る。宝具をぶつけ合うという選択肢を捨て、闇を渡り歩く暗殺者の如く、水上で走

る音さえ殺し、セイバーは飛ぶように闇を駆けた。

激しい追い風を受けてライダーは葦原平定の剣を掲げ、再びその真名を高らかに謳わんとする。どちらが先か、両手で剣を振り上げているライダーへ天叢雲剣の黒い刃が襲い掛かるが——雷が、迸った。

刹那、ライダーと視線が交錯したが——開闢の帝はその口で真名を紡がない。魔力放出で放たれる高電流が、先ほどまでの威力を遥かに上回る鋭さでセイバーを突き刺したのだ。

鋭く凍った氷で貫かれたような衝撃に、セイバーは一瞬だけ動きを止めてしまった。

「雷を纏う公の魔力は、攻撃しかできぬと思うたか」

その囁きといえるほどの声を聞き届けたセイバーに、悪寒が走った。「天地神明」

そう、ライダーはまだ真名を紡いでいないだけで、剣の魔力は充填されている。二人の間は一メートルを切るといふ指呼の間に、神代の名は謳われた。

「開闢せし断絶の剣神！」

12月9日② 土御門神社・境内

ライダーの突撃を皮きりに、二騎のサーヴァントは戦闘を開始した。双方とも破壊力は自然現象そのものと称して偽りのないサーヴァントだ。

ライダーが気遣ったのか、セイバーが明の命令を重視したのかは不明だが、二騎は光を放ちながら空へと戦場を移していった。

ゆえに今土御門神社の本殿前に立つのは、御雄神父と土御門一成の二人のみである。本殿の上空に吊り上げられたキリエを気にしながらも、一成は鋭い眼で神父を睨みつけた。それに応え、神父は薄く微笑んだ。

「一、三日ぶりだな、この戦争オタク神父」

一昨日の碓氷邸襲撃の際、一成は神父と直接対話をしたわけではない。ただキリエとのパスを通じて、異様な会話の一端を知っている。

人の営みの極限として、戦の鑑賞を求める神父。

「——ふむ。前は話す時間も余裕もなかったからな、土御門一成」

神父の足取りは、武術の熟練者のように静かで気配を感じさせない。聖杯戦争にとりつかれ、戦争を見たいという「道楽」の為に全てを費やしてきた神父は、ここでも常と変わらない。

只、聖杯戦争を見てみたかった。その願いで生きてきた神父は、今だに堂々と立ちふさがる。

「お前、戦争が見たいんだってな。けどなんでよりもよつて聖杯戦争なんだ。人と人が争うのは——イヤだけど、紛争地帯でもどこでも、世界中で起こってることだ。なのに何で聖杯戦争に拘る」

神父はク、と笑った。「——例外はあるが、基本的に聖杯戦争の参加者は自ら参加しようと志している者であることが大きい。そして英霊という、聖杯戦争でしか見られぬものもある」

「？」

「私は紛争地帯にまで足を運んだこともある。だがな、あの地で実際に命を懸けて戦う者は主体的に戦闘を望んだわけではない。ただ生

まれた場所がたまたまそこで、たまたま戦わずには生きられなかった者たちだ。戦いを望んだわけではないだろう」

一成とて、最初は彼なりの望みがあつて参加を決めていた。悟も――アサンがやめておけ、と誠意を以て忠告したにもかかわらず、自ら参加を望んだ。確かに世界の紛争と比べれば、はるかに自分の意志が反映されている。

「――英霊も、召喚を拒否することができない。にもかかわらずサーヴァントに身を落としてまで人類史に名を遺した英雄が戦うなら――それほどの強い理由で、強い願いで戦う戦が興味深くない訳がないであろう。監督役の立場は観戦という意味で、良い立ち位置だったよ」

一成は絶句した。神父がさすががしく語る姿を見て、彼に悪意がないことが本当にわかつてしまったから、黙らざるを得なかった。

御雄神父は明や一成、果ては他のマスターを害する気はこれっぽっちもない。争うさまが見たいという欲だけ。

しかし――その思いに至るまでの過程が、一成にはさっぱりわからなかった。

「アンタ、なんでそんなことしようと思ったんだ」

「解つたら苦労はすまい。畢竟、私には自分の人生よりも人の人生の方が尊かったのかもしれない。この道楽なしに私という存在はありえない。つまり私自身には何もないわけだからな」

「他人を尊い、って思う奴がこんな他人を何人も殺しかねない危険な儀式を喜々としてやるわけねえだろうが。お前、自分の娘まで聖杯戦争の為に使い捨てやがって」

一成自身は神内美琴と深いかかわりがあつたわけではない。ただ教会にて一度会話をしたきりだ。御雄は深いため息をつき、しかと一成を見据えた。

「……美琴か。あれを拾ったのは自分を試したかっただけだが――結局私には親の情など得られなかった」

一成の手は僅かに震えていたが、それはいつしか止まっていた。

自分が傷つくことを了解していても、自分が誰かの命を摘み取るこ

とを考えていなかった。それはバーサーカーとの戦いで嫌というほど思い知ったが、今や腹は決まっていた。

本人は優れた魔術師ではなくとも、確氷や土御門、アインツベルンという他人を巻きこむことでこの男は戦争を甦らせた。

かつてアーチャーは言った。人はどのような状態にあつても、人と争う。争うことを真に止めるとすれば、それはもう人ではないと。

争い全てを肯定するわけではない。避けられぬこともある。

戦うしかないこともある——しかし、神父の願いはむやみやたらに戦を増やすだけ。

——このままにはおけない。

「これが最初で最後だ、土御門一成。私の願いが成就すれば、私は再びこのように戦うことはない」

「そうだな、最初で最後にしてやるよ」

方や聖杯戦争を続けるために、方や聖杯戦争を終わらせるために。彼らには最初から妥協の道などなかった。神父の背後、本殿の上から泥がしたり続けて、本殿は半ば溶解して沼となっている。

「……急急如律令!!」

一成の詠唱とともに成されたのは、自らの身体強化。起源的に「身を守る」意味での身体強化であるが、自分から攻撃を仕掛ける際の反動を防ぐ機能にもなる。

されど通常の状態では相手を害する魔術が使えないがゆえに、彼は自らの腕で神父を殴りとばさんと走る。神父は右腕を伸ばし一成を指さして、遠当てを放った。しかし身体強化を施している一成は、全く躊躇することなく、魔力塊が直撃するのも厭わずに突き進む。

明日く神父は「魔術師としては三流、代行者のような武闘派でもない」——ゆえに一成は勝ち目がある、はずだった。

急接近する一成に対し、神父は何も持たぬまま手を伸ばす。何をしてもかまうかと、一成の渾身の拳は神父の頬を激烈に痛打する。しかし神父もただ怠けて生活してきた者ではない——その体が吹き飛ばされることはなく、ふらりとよろめいただけにとどまる。

「——ッ!!」

しかしよろめきはよろめき。一成はただの拳で神父を倒せると思っていない。只管に拳を叩きつけるのではなく、明より借り受けた影のナイフを左手で取り出す。どこでもいい、ただの一突きを浴びせかければよい。

いかな聖杯戦争という修羅場をくぐってきているとはいえ、一成は専門的な戦闘の訓練を重ねた者ではない。神父は出血も厭わずそのナイフを掴み、さらに言葉紡いだ。

「二二三四、布留部ふるべ——由良由良布留部ゆらゆらとふるべ、私は拒絶する」  
「!?」

それは神道における祓いの魔術。物部氏の始祖たるニギハヤヒが葦原国に降りる際に、天照大神から授かったといわれる十種の神宝とそれにちなんだ呪言である。

詠唱が完了すると同時に、神父の手の血はとまり動きも俊敏に一成から距離を取った。

「——本来神道魔術とは「祓う」呪術でな。直接的に敵を殺めるものではない。それらは後年陰陽道呪禁道との混交によって取り入れられたもの。今や陰陽道を明確に分かつ術はないほどに混ざり合った神道には、呪いもある」

殴られた頬を撫でながら、神父はゆったりと手を広げている。右手には白い人形、左手には何も無いと思いきや、何かの毛が数本握られていた。

まさか、と一成は不吉な予感にとらわれた。一刻も早く神父を倒さなければ、こちらが殺される。

神父は右手の親指をかみ切ると、数本の毛と人形もろともにその血を擦り付けて詠唱を為す。その声は一成と同時に発せられた。

「二急急——如律令!!」

一成は自分を護るための防壁を展開したが、その行為は無意味と帰した。神父との距離は十メートル以上あるにもかかわらず、矢が飛んできたわけでもものに動けない。

気道が塞がれて息ができない——見えない何かに首を絞められて

いる。

「か……」

かろうじてその場に崩れ落ちることはなかったが、走っていた足は止まる。神父の手に握られている人形による呪い。

——呪術には大きく分けて「類感呪術」「感染呪術」に分けられる。類感呪術は象徴を扱い、感染呪術は記号を扱うとされる。どちらも「同じ形をしたモノには何らかの共通性がある」という意味で呪術は「共感魔術」と呼ばれることも多い。

象徴とは「良く似た何かを、対象に見立てる」、記号は「モノの一部をモノそのものに見立てる」ことを意味する。人形は人間そのものに、毛は——一成に一撃殴られた際に奪った彼の髪の毛。

つまりこれは紛れもない呪術であり、なじみ深いところで言うところ「丑の刻参り」の変形である。

人間に見立てられた人形は、髪の毛という情報が与えられることで「土御門一成」という一人に限定される。神父の持つ人形は、無残にも首がねじ切られている。

確かにこの男、魔術師としては三流、神父としては二流であろう。だが呪術師としてはどうか？ 明も知らなかったくらいだから、その腕は多少錆びているにしても。

「……………あ……………」

声は出せない。呪言を唱えて呪符を芯に魔力で剣を編み上げた神父が、一成の命を絶つべく走った。詠唱はそもそも自己に働きかける言葉であり、詠唱に代わるモノがあれば省略や代替はできる。

一成は地面に足をつき、片手で五芒星を切った。ギン、と鋭く刃が交錯した。神父の剣と、一成のナイフが交錯して弾き合った。一成は息も荒く神父から距離を取った。

呪術は強力ではあるが、仕組みとしては単純である。さらに「保護」を得意とする一成にとって解呪自体は困難ではなかった。

「……………てめえ、呪術師」

「お前とそう変わらない系統だ、陰陽師。流石に直接殺せるだけの呪殺は不可能らしい——……………天照大神！」







臓を抉り取るようなあの——死の感覚を。

——竜より賜った蒼の眼。

現時点で引き出せるものは、この血肉も以てする千年前の陰陽師だけ。

「……ッ、解！」

縊る呪術を一言で解呪し、一成は泥の中を走った。いくら術儀を身に着けても体は生身の人間であり、この泥は毒に過ぎる。空から滴り落ちる呪いから免れている御神座へと飛び移り、扉をこじ開けて乱入し、彼はやつと人心地つく。

祭壇に奉られている御神体は白い木箱に封じられている。一成はよろしくないのと知りつつも、その箱に手を伸ばし懐にねじ込んだ。

一成は激しい頭痛を噛み殺しながら、すぐに御雄神父の方へと振り返る。沼を挟んで立つ男は、動揺せずに言葉を紡いだ。

「……噂には聞いていたぞ、土御門一成。その力がお前を焼き果たすが早いのか、それとも私が殺されるほうが早いのか——  
ひふみよいなむやこことり  
一二三四五六七八九十」

十草の神宝に基づく祓いの言葉を以てしても、聖杯の泥を浄化することは叶わない。しかし唱えられた言葉は神父の身体を覆いつくし守護する防護となる。

信じがたいことに、神父は自ら泥の沼に一直線に飛び込み脇目も振らずに走り抜ける。さらに呪言を重ねる。

「ふるべゆらゆらとふるべ布留部由良由良布留部ッ！」

自ら持つ剣とは別に符を撒き散らし、それを核に幾本もの剣を精製した。それだけならただの剣だが、さらに聖杯の泥をも纏わせた。一撃、一切するだけで死に至るであろう必殺の剣。

一成は蒼い目で向かい来る神父を見据え、ひとつ唱える。

「——叫べ、ろうらん楼嵐！」

魔力によって強制的に突き動かされる大気の塊。物理攻撃として

大嵐の風が容赦なく神父と剣を襲うが、彼らは止まらない。

トツカノツルギ  
「十拳剣！」

風圧をもものともせず、剣は一成へと襲い掛かる。ライダーが操る布津御霊ほどの精緻なコントロールはなく、しかし放たれた矢のように飛ぶ。

既に一成は数秒先の未来を予測しているため、泥の剣を避けることは容易かったが神父は止まらない。あの呪いは、たとえ魔力による保護を施したとしても耐え難いほどの苦痛を与えるにも拘わらず——その姿を見て、眼のゆえかあるものを感じる。

「……お前、自分のことは——興味がないのか」

人の戦いをみることが欲望。それはわかるが、そのために費やした神父の労力と人生は計り知れない。魔道を辞めて、親交もない聖堂教会に身を移し、三十年以上もこの時だけを待っていた。

キリエを通じて知った話からもわかるが、この神父はそれ以外に何も残していない。

その眩きが届いたのか、神父は不釣り合いなほどにこやかに笑った。

「つまらないことを言うな、陰陽師。自分に興味も何もないからこそ、世界が色鮮やかに見えることもある」

「——ッ!! 呪相・炎天<sup>えんてん</sup>!」

空を焦がす豪熱を纏い天に迸る炎柱も、神父は祓いの術で突破する。神父の呪術師としての腕は一級といつて差し支えない。

ずぶり、とより深く沼へと足を踏込み、神父は一成の元へと、御神座の前に辿り着く。扉はすでに呪いの剣でぐずぐずに崩れ去っていて、御神体を祭る祭壇を露わにしていた。

「ぐ……」

半ば崩れ落ちた本殿の畳の上で、二人は再び対峙する。炎天でカソックが焦げていたが、神父本体にやけどはない。ただ一流の祓いを以てしても、一成の術を防ぎながら聖杯の呪いから逃れ続けることは至難であり足許から呪いの浸食が始まっていた。

しかし一成も呪いとは別の部分、千里天通眼による根源検索による情報過多により割れんばかりの頭痛に苛まれている。しかし一成は思考の片隅で可笑しい、と感じていた。清明の術はこの程度ではない

はずだ、と。

大西山での戦いでは清明レベルの魔術を行使できるようになっても、魔力が足りずに大仰な魔術は実質使えなかった。しかし今はキリエとパスを繋いでいるため、その点を解消できているはずだ。

ならば何故、高度な術を使えないか。それは、明に頼まれた神社の検索ですでにわかっていたことだが、一成は「検索」も完全にこなせていないからだ。

ゆえに情報の波にさらわれ、肝心の「欲しい情報」の検索も不完全にとどまっている。今だ一成は、陰陽術の深奥を掴んでいないのだ。

本殿の最奥、御神座という神聖な空間において神父は穢れも厭わずに剣を向けた。

「——本来、私はここまで戦いに出張るべき人間ではない。これが最初で最後の表舞台だ」

道楽が体と人生を蝕む域に達していても、自らを侵す呪いも、寿命の長短も、きつとこの神父には関係がない。神父・神内御雄がどうしてこのような想いに至ったのか、生まれつきそうであったのかは結局わからない。

ただ他人の戦い<sup>ひと</sup>を望み、自分の戦いには興味がない——自ら戦う今でさえ、御雄神父自身に精神の高揚や悲嘆はない。

——その解る事実だけで、一成の勘に障る。

別に神父が何を考えていようと、どうでもいいのだが……。

「神父、俺はあんたが嫌いだ」

「知っている」

その時、みしりと畳が、そして柱が歪んだ。既に本来の形状をとうに失っている本殿は、支える柱もないためいつ全壊しても可笑しくない状態だった。

二人の呪術使いの足場は一気に崩壊し、再び祭壇もろとも沼へと落下する。

## 12月9日③ 土御門神社・地下大空洞

「しかし一成の地図は解りやすいのかわかりにくいのか……」

二人の明はセイバーと一成を見送った後、地下空洞への入り口を捜すために、昼間に一成に書かせた地図を頼りに林の中へと分け入った。

二人とも慣れた靴を履いているが、舗装された道ではなくさすがに歩きやすくない。

しかも今は夜明け前で、最も暗い時刻だ。月明かりと視覚強化を頼りに木の根につつかえぬように歩いていく。明は黄金の柄の剣を握りしめ、もう一人の明が先導する。

丘のふもとであるここから内部は見えなくても、丘の上にある神社から薄紫の光が漏れているのが見て取れた。

土御門神社内で開いた孔。一成にはキリエ救出を頼んだものもし彼自身に危機が迫るなら一度撤退しろと告げた。ただ、一成の性質を考えるにそれはありえないだろう。無茶をしていなければいいが、と明が考えていると想像明から鋭くつつこまれた。

「一成の心配より、私の心配をしなよ。こっちはまかり間違えば一成以上の苦戦をするよ。きつと相手はサーヴァントレベルだから」

その忠告に、明はただ頷いた。シグマ・アスガードは絶対に上の土御門神社にはいない。彼女が神父の願いを叶えるべく聖杯の改竄を目論むのならば、作業は大聖杯のある地下空洞でされるはずだ。

想像明は限定的空間転移を使って一気に地下空洞にまで移動する手もあったのだが、一成による確認だけでも異様な魔力の濃さだと判明しておりリスクが高すぎると判断した。あまりに土地勘のない場所、魔力の濃すぎる場所に初めて移動するには帰還時の座標測定に大きな齟齬が生じる。

十分か、二十分か。茂る林の中を黙々と歩き続け、明たちは地図が占めず地点へとたどり着いた。魔術に依る操作をしなくとも、雑草と岩に隠れてはいるものの明らかに人が通った痕跡がある道が、斜面から丘の中へと続いていた。

日常魔術的な措置を全くしていなかったとは考えにくい（一般人が偶然に見つけ出す可能性がある）ため、シグマが解除してそのままにしているのだろう。簡単な肉体強化でどかせるほどの岩をずらし体を滑り込ませ、二人の明は元の明を先頭に丘の内部、そして地下へと足を踏み入れた。

明白に人が来ることを想定して作られた内部。地下深くへと降りていく階段。地表のここからどこまで続いているかわからないほどに階段は深い。

救いは申し訳程度につけられた電燈が道しるべになっていることか。だがそれも途中までで、あまりに深くなるとその光も目に届かない。地表付近の壁や階段はコンクリートで塗り固められていたが、途中から地肌が見えている。

「……」

奈落へとつづくように見える階段を眼下にしなから、それよりも私たちは別のことで没面を作っていた。

丘の林を歩いていった時とは、もう空気が違った。色が見えないのが不思議なくらいに、濃い魔力に満ちている。しかも呪い、瘴氣一步手前の危うい魔力だ。この先が大聖杯の魔法陣へ向かっていることは火を見るより明らかだった。

知らず知らずのうちに息を殺して、二人は神社の深部、地下へと向かっていく。息が詰まるほどの濃密な魔力が蟠っている。矢張り途中から電燈は消えたが、代わりに蛍のような明かりが宙を舞ってぼんやりと階段を照らしていた。

思い出すのは、大西山での鬼火。

どれくらいの間、階段を下り続けていたのだろうか。先も見えず、上を振り返っても見えない。上下の空間感覚が狂いそうだ。人間は横や前後の水平の位置感覚には鋭敏だが、上下の空間感覚はそれに比べて遥かに劣っているという。鉄の塊で空を飛べても、魔術で飛行できても、所詮人間は地べたをはいずる生き物らしい。

それでも薄明りの中を深く深く降りていく。するとようやく階段が終わり、平らな地面となった。ぴちよんと、水が滴る音が時々聞こ

える。鍾乳洞のようになっていたのか。

道は広さだけはある、六人が横一列になって歩いていても問題はないくらい幅がある。じりじりと進んでいくと、間もなく開けた場所に出た。

いや、開けたどころの話ではなかった。一成の千里天眼通で知らされてはいたものの、明はその空間に圧倒された。

星の祭壇——壁の端から端まで二キロ以上はありと見え、さらに天蓋は暗い闇となりどれくらいの高さがあるのかうかがい知れない。薄紫色の光りがぼんやりと覆っており、空気の禍々しさはここに頂点に達した。

そして、祭壇の中央には黒い太陽が浮かんでいた。燃える地獄、溢れだす憎悪と悪意。マジックで塗りつぶされたように非現実的な黒の孔の縁から、暗紫色の光がぼんやりと放たれている。穢れた冬木の聖杯を模倣した春日の聖杯。

アインツベルンことキリエは気にしなかったのか。第三魔法の成就さえ叶えばどうでもよかったのか——。

「——来る！」

挨拶、口上、そういったものは皆無。そう、この地下空洞はすでにシグマ・アスガルドの陣取る魔術工房。襲い掛かったのは目に見えるわかりやすいものではない。

胃の中のものをすべて吐き出し潰れてしまいそうな圧迫感だ。——異物は異物として、空間そのものが敵として確氷明という存在を押し潰しにかかっていた。

春日の聖杯の真下に立つ、黄金の魔女が笑う。

瞬間、想像明は姿を消した。虚数空間にダイブして、この物質界からの影響から逃れるために。しかしただの明にその芸当はまだ不可能——それゆえに、彼女は躊躇いもなく剣を構えた。

刀身は六十センチ弱の剣。刀身は磨き抜かれた明鏡といえる美しさをもち、黄金の柄がきらびやかなその剣は、今この世に生まれたよ

うに輝いている。

伝承に曰く。その剣は黄金の柄を持ち決して錆びることはなく、狙ったものを切り裂くと。

伝承に曰く。その剣は鞘から抜き出した者の願いを三度叶えると。伝承に曰く。その剣は抜き出したが最後——必ず持ち主に破滅をもたらすと。

『破滅呼ぶ勝利の剣』——謂れは神代より現代に伝わった、碓氷の大本の宝の一。そして聖杯戦争開始序盤に、明の父が手紙と鍵を以てして「使うことを許可」していた奥の手でもある。

そして想像ではない明は、美しいその剣を躊躇いなく、詠唱を乗せて上段切りに振り下ろした。

「J u o m a m a a i l m a s s a , M u r s k a t a m a a i l m a n  
——！」

剣を覆った漆黒の炎は、虚数の影。しかしそれが通常の魔術行使よりも何倍にも増幅されて黒い光線として放たれる。

「分解」の特性を持つ虚数の影は、際限なく四方から襲い潰す空間自体を「分解」した。

何らかの意思、明への敵意を持った「空間」は一度影にて分解されても終わることなく、再度彼女を押し潰さんと牙を剥くが、明は恐れることなく剣を揮う。

上段から振り下ろし、水平になぎ払い、下からはね上げる。明に剣自体の技術はないが、強化魔術による力づくの振るい方であつて十分だった。四方八方へ明を守るように——しかし攻撃的に放たれる虚数の魔力は空間にかかった魔力を分解する。

この剣から放たれる虚数の影の魔力量は、およそセイバーの草薙剣開帳の一撃分に及ぶ。放たれる膨大な影はを以て只管に縦横無尽に空間を切り裂き、術者の身体を護っていた。

明の眼には遠く、この巨大地下空洞の中心に坐す黄金が見える。湿った地面を蹴りつけて剣から影を放つこと幾合か。黄金に魅せられた空間は黄金の意のままに異物・碓氷明を揺り潰さんと押し掛かる



が、分解の影によって相殺されて叶わない。

「——ッ!!」

シグマにとって、この程度は見戯に過ぎない。明はただの一発放つだけで全身の小源を絞りつくし枯れるほどの影で応じている。

そうして斬り続ける事幾許か、明は意図的にシグマへと近づいていったのだが——明と黄金の魔女は、濃密な魔力の中で約百メートルの間隔をあけて対峙していた。

「——やっぱり持ってたのね。持ってきてくれると思っていただけ。だって今の明ちゃんが私を殺すと願うなら、それを持ち出すくらいはしないよね」

明の手に握られている明鏡の剣は、この昏い大空洞の中でも美しく輝いていた。

——『破滅呼ぶ勝利の剣』。碓氷の元である大家が所蔵していた、現存する宝具の一つ。大家分裂の抗争の際、碓氷の一代目が持ち出した宝剣。それは極東の碓氷において厳重に保管されていたが、その実使用されたことは一度もなかった。

これを持ちだすほどの大事が出来しなかったこともあるが、仮に大事があったとしても歴代の当主はこれを使わなかったであろう。

何故ならばこれを使ったが最後、勝利とともに死も約束してしまうからだ。

主神オーデインの孫であるスヴァフルラーメは、鍛冶の妖精のドヴァリン、ドウリンを脅迫してとある剣を作らせた。柄は黄金にして鉄をも容易く切り裂き、持ち主に勝利をもたらす剣との注文だったが、鍛冶の妖精たちはそれに呪いを加えた。

「抜かれる度に人の命を奪い、三度まで願いを叶えるが、持ち主も破滅に至る」と——。

結果、その呪いは現実となった。

スヴァフルラーメ自身はこの剣によって数多くの戦功をあげたが、侵略者アルングリムの盾に剣が滑り落ちてしまい、それを奪われて命を落とした。それを皮切りにスヴァフルラーメの孫、その娘、その子へと剣は受け継がれていくが、剣を抜いた者はだれもかれもが非業の

死を遂げている。

王位と女と黄金を巡り血族が殺し合い、剣はひたすらに血を啜った。

そうして——正真正銘魔剣の伝説だけが残った。

妖精によって造られた魔剣は決して錆びることなく鉄をも斬る。しかしドヴェルグの掛けた呪い「願いを叶える」は、持ち主が剣に向かつて願いを唱えれば叶うわけではない。神話の所有者たちは圧倒的な武力を以て敵を殺すことで願いを叶えてきた。

この剣が「願いを叶える剣」というのは、「絶対に敵を屠る結果、願いを叶える」ゆえのこと。

ならば、何故敵を殺せるのか。それは決して斃れることなく戦い続けられるからだ。

魔剣は「持ち主の魂を代償に、一時的に魔力の永久機関化を許す」。ゆえにこの剣に抜いた明はセイバー並、それ以上の魔力を出し惜しむことなく振るい続けることができる。

小規模な星の触覚である妖精の剣は、抜き払った者の肉体にある魂を記録して星幽界の当該の魂から、エネルギーを引き下ろす。

これを魔力として担い手に与え、再びエネルギーを引き下ろすことをひたすらに繰り返すのだ。

——魂とは物質の記録で、本来物質界より一つ上の星幽界に属するものだ。そこから特定の魂が特定の肉体やエーテル体に宿り、生物として活動したり、幽体になったりする。魂は物質界において永久不滅の存在だが、特定の肉体失くして存在を保つことができず、一度肉体に囚われると肉体の期限までしか存在できない。

星幽界から物質界に魂を落とすためのエネルギーより、魂自体が持つエネルギーが大きいためもし魂それ自体で物質界に存在できるようになれば、いくらでも魂からエネルギーを取得できる。

この永久機関を限定的に実現しているのが、魔剣ティルフィング——無限に戦い続け勝利を掴む剣である。

但し妖精が呪ったこの剣の魔力は、剣から放つ「何かを害する」という明確な意思を持つ魔術にしか使えない。

その上、永久機関を実現した代償、妖精の呪いの代償に、この剣を手放した瞬間に記録した魂は剣に奪われて死に至る。歴代の持ち主——神話時代だけでなく、碓氷の大家に移ってからのもとの魂も未だに剣の内部にたくわえられている。

魂は本来星幽界のモノであるゆえか物質界に存在する魔術師には変換しにくいものであり、魔術として扱えた人間は稀有も稀有である。

碓氷とてこの剣が如何にして肉体にあらずして魂を保管しているのか解明していない。

精霊種、鍛冶の妖精に冶金され打たれた魔の剣。

遙か古くになされた、魔術の概念の存在しない時分にあった魔法の一端。

以て影の少女は黄金を殺すべく、剣を抜いたのだ。

シグマ・アスガードは大聖杯の元で笑っていた。今度こそ絶対にニセモノでは有り得ない、シグマ本人、そのものが立っていた。碧眼だったはずの瞳は黄金に輝いて、明を甘く見つめて舞い踊る。

その一挙一動に気を取られそうになるたび、明は血がふき出るほどに剣を握りしめた。

「——何故碓氷がこの地に聖杯を置くことを碓氷が許したか。神父もそれがわからなかったみたいだけど、そりゃあそうでしょうね。だって、神父は魔剣の存在を知らなかったのだから」

シグマの言う通り、明も何故先代が大聖杯の設置という土地の魔力ばかりを食う行為を許したのか疑問に思っていた。

それに冬木の聖杯は一度も完成を見ていない。それでも根源の到達の可能性があるなら取り組むべき、といえばそれまでで納得できないこともなかったが、答えはもつと近くにあったのだ。

アインツベルンが求める第三魔法の成就。

その第三魔法の一端を、既に宝具として所有する碓氷。

「仮に聖杯が紛い物であっても——すでに魔剣があるのだから、魔剣を以て聖杯を完全に至らしめることはできないか？そういう思惑を、

確氷は懐いていたのね」

明が考えていたことを読みとったかののように、シグマはあつさりと述べた。今や本当に父が「聖杯戦争は寝耳に水」と手紙で書いていたことも真実か疑わしいのだが、明は首を振った。

「……あなたこそ、本当に聖杯の成就を期待していたの？ 違うでしょ。シグマ・アスガード」

「……ん？ やっぱりわかった？ 私、そこまで根源に執着してないもの。まあ明ちゃんがいたのは本当に望外の喜びだけど——神父の願いを叶えれば、この地には無尽蔵に魔術師が来て入れ食いじゃない」

本当は時計塔でやればいいんだけど、あそこは面倒だし、実家から目をつけられて面倒なのよ——と、シグマは明るく言った。この魔術師は根源という大望のためではなく、自らの欲求に従って動いている。

その生まれつきの虚、巫女としては至上にして人としては欠落のために。

アスガードは英語読み、本来の読みではアスガルド家は神代からの降霊術の大家である。遠く神代を離れた今にあつてもその技を残し続けている權威だが、三百年前の騒動で大家は五つに分裂した。

その第一位であるアスガルド家は、他四筋を力づくでも統合し再び全盛の力を取り戻す野望を懐いていた。それゆえに以前にもまして、彼らは強く勤しんだ——現代において神代の巫女を生み出すことに。そして彼らは生み出した。真エーテルの薄れた今では神代の巫女そのものは不可能にしても、限りなくそれに肉薄するモノを。

神を余すことなく具現するために、あらかじめ肉体に入る魂を希釈する荒技。それは肉体に宿る記録を薄める——己を薄めるにも等しい行為だ。

果たしてこの女に自我などあるのか。今明の目の前に立つ女は、シグマ・アスガードという確固たる人格は、存在するのか？

ないから欲する。魔術師としてよりももっと前から——根源よりも、今を生きる人格を求めて歩く女の形をした何か。

その女の本質に加え、改造に改造を重ねられた巫女は神霊を落と

す。ゆえに対峙しながらも、明は今そこに立つ女が本当に本物のシグマ・アスガードなのか判じかねていた。

否、正確に言うならばシグマかどうか疑っているのではなかった。

「——あなた、今のシグマ・アスガードという人物は……人間なの？」  
「安心して明ちゃん、人間よ。人間だもの。人間になるのよ」

刹那、シグマの背後上空十五メートルに——想像明が姿を現していた。シグマはそれに気づいた様子なく、余裕で真正面の明を見つめている。上空の想像明は音もなく太腿の影ナイフを虚数空間に潜らせ、未玖川での戦いのように直接心の臓を狙い撃った。

虚数空間を通過して音もなく現れる必殺の影は——再び物質界に現れるより前にシグマに避けられて指でとらえられた。

「!!」

そして次の瞬間、宙に浮かぶ想像明はハエたたきが無慈悲にハエを潰すが如く、巨大な目に見えぬ何かによって上から地面に叩きつけられた。

「——ッ!!」

声さえ出ない。眼を見開き、血を吐いてもんどりうった想像明を目撃して明は剣を振り上げた。このままだと虚数空間に退避する間もなく想像明が潰されて死ぬ。

「呑み込めー！テイルフィング!!」

剣から迸る強烈な影が、百メートルの距離も問題にせず「空中から落ちてくるなものか」を遮り想像明を守るために空間を砕き、空間を操る魔力を分解し去った。

その刹那に想像明は必死で詠唱し、再び虚数の世界へと身を隠した。それだけ確認し、明は強化魔術を駆使して一瞬跳びにシグマへと接近したが、感覚がおかしい。

まだシグマとは距離があったはずなのに、今や黄金の女は目の前にいる。その嫺やかな手が明の首筋をするりと撫でて、耳元で何事かを囁かれる。視界が歪み、目の前の女で視界がいっぱいになる。

この奥深い地底で、おぞましくも美しい黄金に耳元でささやかれ——明はふと、何故己がここにいるのかわからなくなった。

見えるものは何か——明にとっての黄金の記憶。輝かしく曇りもない、幼き日々。

姉が、家政婦が、友がいて、優しげに笑う母もいる。

在りし日に望んだ、幸福の姿。温かい春の日、氷は解け去って桜の散る中に歩く。

最初から己はここにいて、皆もここにいて、何も欠けるものなき完全な世界がある。

苦しいことの何一つない、こんな穏やかな世界こそ自分がいるべき真の世界であると、心の底から思う——。

12月9日④ 今生きるものたち

「!!」

御雄と一成は二人そろって再び、悪意の泥沼へと落ちていく。回避する方法がないのも同じ。そぶりとおぞましい音と共に、陰陽師と神父は悪意に浸かった。

御雄神父は呪いで寿命を縮めることを最早全く恐れていないのか、呪いの浸食を防ぐために割く魔力を最小限にとどめて呪符を核にした剣を生み出した。

神父と同様にどっぷりとなかりながらも、一成は違う——絶対にこいつと心中などしてたまるかと強く思っている。命にすら響く泥と頭痛の中で、すべきことを見定めた。

一成にできることは限られている。

——するのはより精緻な「検索」しかない。ある意味地の利、清明神社のご神体——「占事略決」写本。

安倍清明が記したとされる、陰陽道に関する最古の書物。真本は失われて久しいが、同じく魔術師である高名の陰陽師が書写した本が御神体として祭られている。

自分の血肉に加え、さらに精緻に情報を引き出すためのインプットはある。やってできないことはない——目前に迫る泥の沼から自分を守るよりも、一成はそちらを優先した。

頭痛が止まらない。襲い来る暴力的なまでの情報の奔流にさらされながら——さらに間近に忍び寄る悪意の呪いを感じながら、一成はひたすらに自分の内側へと意識を向ける。

——安倍清明。

稀代の陰陽師。脳裏に過るのは——酒吞童子／玉藻前／土蜘蛛、都を脅かす妖魔の群れ。

それらに臆することなく、ただし基本は直接手を下すことなく——日本史の英雄たちが退治するのを手伝うにとどめる、大陰陽師の姿。

——来い。なんでもいい、今こいつを倒せるだけの力を！

「ハッ！」

閃くのは、神父の泥の剣。呪いをまとわりつかせたそれは、一成の四方八方を取り囲み隙間なく串刺しにせんと襲い掛かる。うずくまった一成は微塵も動く様子を見せなかったが、呪言はむすばれた。

「——叫べ、桜嵐」

突如として吹き荒れる春の嵐。

魔力によつて突き動かされ、渦を巻いた場違いな温風が、物質化した呪いを風圧任せに払いのけた。先ほど一成が使つて見せた暴風の呪術だが、遥かに威力が上がっている。

ただその魔力風は呪いを消したわけではなくさらに周囲にまき散らしただけで、神社を護る木々へと容赦なく泥を降り注いだ。ただ一成の体をこれ以上の浸食から護るための業。

この突風により神父も吹き飛ばされたが、彼も同時に呪いからは一時的に解放された。突然の風にも動揺もなく、神父は石畳の上に着地した。呪符を剣に変えて何本も背後に侍らせたまま。

違和感——それを感じた神父は、彼から距離と取りながら問うた。

「お前は、土御門一成か？」

「……そうだ」

懐から取り出し、右手で持つ占事略決写本をつきつけながら、普段の土御門一成とは似ても似つかない口調と目つきで喋る土御門一成。瞳からは光が失われ、どこを見ているのかはつきりしない——ただその眼の蒼さだけは変わらずに。既に失われたとされていた千里天眼——正確には陰陽道の家ではなかった神父はその力の詳細を知っていない。

しかし、明らかに今の一成は先ほどまでの彼とは違う。

「……安倍清明」

「違う。アビラウンケ——ッ！」

急がぐりと、その場に足をつく一成。何が起きているのか神父



にも把握できていないが、隙は隙。

侍らせた呪剣を一斉に射出し、一成を蜂の巣にする。されど急に顔をあげた一成が切った五芒星<sup>セーマン</sup>の結界によって、剣は見事に弾き返された。

しかし奇妙なことに一成は攻撃に移らず、その場にうずくまっているばかりだ。これ幸いに神父はあらかじめ作り置いてある人型をかざし、それに一成の髪の毛と己の血を塗りつけて呪いをかける。

共感魔術・丑の刻参り。一息に殺すべく、魔力を込めて一成と人形を重ねるイメージを張り付ける。

きゅ、と一成の首が締め上げられる——が、上げられたその顔は笑っていた。たとえるならば、狐に似ている。ずる賢く罠にかかった獲物を見るように、首をねじり上げられながら一成は指で詠唱代わりに九字を切る。

「臨、兵、闘、者、皆、陳、烈、在、前……人を呪わば、穴二ツツ!!」  
「つつ——!!」

共感・類感するということは、対象とこちらに共通点を見出す、つまり対象と己を繋げることに他ならない。

もちろん術をかける方は相手の痛みが自分に返ってこないように己に精神防御として共感断ちを施しているのだが、そもそも共感魔術であるだけに、共感状態でなくなることは決してない。

その根底に流れる共感状態を逆手にとり、呪いをかけられる側から共感状態を強化し、掛けられた呪いを反転する。共感断ちを破り、逆からその呪いをかけなおす呪い返し。

便利などころはあくまで魔力元が先に呪いをかけた側であるため、返す側は一切魔力を必要としないこと。

ただし、呪いを受けた瞬間に共感状態を引き上げるだけの技量が要される。高度な呪術師同士の戦いはこの呪いと呪い返しの応酬になっってしまうため、前述の物理的自然現象のぶつけ合いになっってしまうことが多い。

しかし一成が呪い返せると思っていたいなかった御雄神父は、呪いで終わらせようとしていた。

神父は首元から出血しながら一成から距離をとった。

幸い気づくのが早く、首をねじ切られるには至らなかった。しかし考える間もなく、一成の体は追撃を始めた。懐に備えていた呪符を引き出すと、僅か一言、三言呟くのみ。瞳に宿るのは冷たい眼差しだけ。

「轟け、霹靂！」

西洋魔術にたとえれば僅か一小節。僅かそれだけで、烈しい稲光の槍が幾数本も浮かび、疾風迅雷神父へ突き刺さる。

「唸れ、流黒！」

西洋魔術にたとえれば僅か一小節。僅かそれだけで吹き荒れる冬の風が神父を吹き飛ばし、刃の鋭さまで伴って切り刻む。

「弾ける！玉氷！」

西洋魔術にたとえれば僅か一小節。僅かそれだけで降り注ぐ氷の塊が、上空からそして跳ね返って地面から神父を殴りつける。

物理現象たる呪術による嵐のような自然現象に対応せんと、御雄神父は五芒星を切り結界を創り上げるが、それを遥かに上回る威力で粉砕される。

一方の一成は自身身体強化を掛けた上に嵐の中を突き進み、その体で男を蹴り飛ばした。よけきれずに鳩尾に蹴りを食らった神父はそのまま石畳の上を転がった。

「……！」

あつという間に神父を圧倒した一成は、昏倒したその体を靴で踏みつけていた。右手には確氷明から借りたナイフ。起き上がろうにも神父の左腕は骨折を負い、肉体の戦闘能力でも水を空けられていた。

容赦ない呪術で圧倒された神父が見上げた土御門一成の瞳は——やはり、これまでの彼とは全く違っていた。周囲では一度風で吹き散らされたはずの呪いが、再び黒い太陽のもとに集まりつつある。

一成と御雄——彼らが再び沼に呑み込まれるのも時間の問題である。

それを知りながら、神父は問うた。

「お前は、誰だ」

「……あ」

その問いかけで、呆けたような声が漏れた。瞳の色がかつてみたものに戻る。

そして急に崩れ落ち、頭を抱えてうずくまった。

神父には一連の中で一成にどのような変化が起きていたのか、詳細を知る由もない。しかし、「占事略決」写本を以てさらに精緻な「検索」を試みた一成は、晴明の術だけでなく——その人格さえも読み込んでしまっていた。

ただそれも読み込もうとして読んだわけではないのが祟り、今は一成の人格と清明の人格が入り混じった状態に陥っていた。

それでも残る一成の闘うという強い精神が、晴明の術を以てここに具現していた。

外部からの呼びかけで我を取り戻しかけた一成だが、開きつばなしの「」への扉。

情報量に脳が耐えきれぬ限界を超えて、今も頭を割るような痛みに苛まれている。

ふらふらと、かすむ視界で立ち上がる一成。一成の変調を見てとり、立ち上がる神父。双方とも、限りなく動きは遅く。周囲は泥が忍び寄る。

一成は自分で眼を止められない。けれど一回だけ、無理やり止める方法を知っている。それは明にもう眼を使うな、と言われた時からわかっていて敢えて言わなかったのだが。

キリエとのパスを自分から切断する。そうすれば魔力がなくなり、眼は強制停止する。

ただしこれは正規の手順ではない強制停止、一成の回路は三度目のダメージを負う。

……悪い、確氷。お前の言う通り、逃げればよかったのかもな。でも逃げられない。逃げたくない。

最後が死であっても、意地を張りたくて仕方ないこれは病気だ。

——俺は、魔術師になりたかったわけじゃない。最初聖杯が欲し

かったのも、生まれた家が続けてきたものを俺の代で終わらせたくなかっただけだ。

でも、その願いはもう叶えなくていい。俺は魔術を途絶えさせるのが嫌だったんじゃない……祖父が大事にしてきたものが潰えるのがいやだった。

だからもう魔術は使えなくなっても構わない。

今はただ、こんな争いを続けようとする奴を……殺す！

「ツ！神父!!」

上がりきった体温に呼吸、今すぐ倒れろと願う体を叱咤して、一成はナイフを片手に神父へと突撃する。方や神父も満身創痍、血反吐を吐き出しながらそのナイフを躲し、呪剣を両手で持ち振り下ろしてくる。二人とも、気力で立っているようなものだった。

「……私はお前のことを嫌いではないよ。陰陽師」

一成のナイフが御雄の脇腹を掠めていくと同時に、放たれた剣が一成の右肩を貫いた。桜嵐で吹き飛ばした泥はぞろじわじわと孔の下へ集まりつつあり、二人に触れるのは時間の問題。一成はキリエからの魔力で防御、さらに自前の身体強化をかけて——清明のレベルにて、神父の剣をはねのける。

「……気持ち悪いこと言うんじゃない！」

「私は人の人生が見たい。そして見るのに——お前という存在はふさわしい」

己の為に戦うから。己の意志を以て聖杯戦争に臨み、己の意志で戦争を終結させるべく戦うから。神父は言った——「己の望みで戦うところこそ、最も見るに値する」と。

土御門一成の戦いは、見るに値すると。

凜猛な銀——放り投げた呪符が、無数の剣となり三百六十度覆い尽くす。比較的魔力が込められていない剣は身体強化でものものもしいが、そうでない場合はまずい。周囲の泥の様子を見て、長い戦闘は不可能であると悟った御雄神父は一気に攻勢をかける。

魔術師には結界に特化し、結界自体を移動させ身に纏う絶対の防御

を扱う者もいるという。ただそれは清明の業ではない——今引き出せる最大の防御でこれをしのぎ切るには。

もう目の前が暗い。夜だから、ではなく視野が狭窄し瞳孔が勝手に収縮している。神父が泥に飲まれる前にと思うと同様に、一成はこの眼が己を壊す前に終わらせなければならぬ。

「急急如律令!!」

「呪層——黒天洞!!」

呪層界とは、特定の人物を呪い殺すための固有結界とは似て非なる空間である。黒天洞はこの呪層界を一時的に発生させ、渦巻く負の念を反転させる。体や精神を害する呪いを守護の呪いに、精神を削るなら精神を安らかに——呪詛を反転させれば願いになる。

普段の一成では決してあり得ぬ呪詛の嵐、ナイフ自体で切られた五芒星で発した紫光。

雨あられと降り注ぐ剣の弾幕をそのまま受けて、一成は黒いカソツクにむけてひた走る。

泥は忍びよる。二人は幾度も己が倒れる幻想を見た。

「神内御雄——!!」

一成のナイフが真正面から御雄神父の胸を穿ち、神父の剣が一成の腕を斬り落とした——義手である左腕を。

真つ暗な視界の中、一成は息を詰めて一息にナイフを抜き去り、大きい神父の身体を突き飛ばした。

彼が倒れる姿はまるでスローモーションのように映り、ただ休むためだけに倒れたように地に堕ちた。

一成は気を緩めず、倒れた男の姿を見据えた。ゆっくりと唇が動き、言葉が漏れる。

「……もし転生が、あるのなら——また見たい、ものだ」

末期の言葉まで、何一つ変わることもなく。

道楽に一生を費やした神父は、眼を開いたまま——生命活動を止め

た。それを確認する前に一成は、鳴り響く剣撃の音を体の奥底で聞いてその場に倒れた。

最後の力を振り絞って、一成はキリエとのラインを断ち切った。適切な止め方がわからないから、魔力源であるラインを断ち切って無理やりに回路を停止させて魔力不足に追い込み、眼を止める。自分の意志で止められる、一回きりのやり方。

「っ…………ぐ…………!!」

体中が痛い。特に胴体、中身が——雨のように降り注いだ剣の傷で全身くまなく出血しているが、それは些細な傷だった。強制的にショートさせた魔術回路が焼け付く痛みで、一成は動けなくなってしまうた。

今にも目をつぶって気を失ってしまいそうなところを必死でこらえる。まだここは安全地帯ではない——吹き散らした聖杯の泥と、上から漏れるそれが一成の周りを取り囲み閉じ込めようとしていた。

このまま目を閉じて倒れていたら、泥の風呂に浸かって気づけば死んでいるに違いない。地面をはいつくばって、一成はじりじりとかつて沼でなかった場所まで移動しようと足掻く。神父の体を運ぶ余裕など全くない。自分がまず生きなければ、キリエに合わせる顔がない。

死んだら、顔も合わせるも何もないのだが。

キリエを助けなければ。

聖杯を壊さなければ。

明たちと合流しなければ。

明は「死ぬな」と言った。

自分はキリエに「生きてほしい」と思っている。

だから今、ここで倒れているわけにはいかない——

周囲を覆っていく泥、この世全ての呪い。暗くなっていく視界の中、一成は地面を這いずっている。

\*

完全。完全。完全——か？

それは違う。己の人生は、もっと歪で欠けていて、失ったものだらけでみつともない——けれども、それは己だけの人生であつたはずだ。

「!」

ガン、と後頭部を殴られたような衝撃と共に明は我に返る。血をすするまで戦い続けることのできる剣から与えられる加護、サーヴァント換算で対魔力EXを身に着けた明が魔眼に飲み込まれることはない。

今、シグマと首筋を撫でられるほどの近距離にいる。彼女は真正面から明を抱きすくめていて、明の右手と魔剣は今だ無事だったが——シグマのしなやか指が這い、離されようとするところだった。

惚けていたのは須臾の間だった。明はそのまま剣を左手に持ち替え——ためらいなく、背中からシグマを突き刺したのだ。

シグマごと自分を貫いてしまつては目も当てられない。背骨があることも考え明は上から下に、女の身体に剣を滑り込ませていた。

一撃で貫き、引き抜いた直後にシグマを蹴りとばし、再び自分から迫り何度も何度も剣を突きたてた。

血飛沫が舞い、肉片が飛び散る。まるで明の方が狂っているかのような体たらくだがそれでも彼女は殺害を辞めない。

飛び散つた血潮が明をも赤く染めていく。シグマの美しかった金髪も見ると影もなく萎れていたが、突如その手が振り下ろされる剣を掴んだ。

「!」

万力のような力で掴まれ、明は剣を再び振り上げることができない。明は剣から勢い任せに魔力を放ち、影で分解しその手をもぎ取つて飛び退つた。しかし驚くべきはシグマ・アスガード——致命傷を何度も受けて右腕をもちがれたにも拘わらず、彼女は悠々と立ち上がりつ

て明にゆらゆらと近づいていく。

消えた腕も元通りに蘇る。まるで、何事もなかったかのように。

彼女が紡ぐのは歌。世界が始まり、そして終焉ラゲナロクを迎えるまでの呪歌ガルドル。

旋律は美しいが、古く神代に至る言葉の為明にも理解はできない。

「——さあ私を貫きなさい。さあ私を三度燃やしなさい。幾度でも繰り返しなさい。全て手無駄に帰すけれども——何故なら貴方たちが黄金わたしを求めているから！」

「——殺す！」

明は己を奮い立たせ、強く地面を蹴った。この事態も予想してなくはなかったではないか。それにこの魔剣がある限り、明は決して目の前の黄金華に劣ることはない。

——セイズ魔術。北欧における神話に生まれた降霊術にして、その状態の巫女が語る言葉は『予言サオルスパー』。世界の始まりから終わり、神話のあらゆる英雄譚を紡ぐ預言である。

そのセイズの創始者たる女神の名は、グルヴェイグ。

黄金の擬人化にしてアース神族とヴァン神族の争いと呼び、終焉ラゲナロクへと導く破滅の女神。槍に貫かれ三度燃やされ、それらを何度繰り返しても死なずに蘇り続けたという。

アスガルド家は、狙ってこの女神を降霊したかったのではない。

真に巫女たるべく何代にもわたって身体改造を重ね、魂の希釈にまで手を出した末の傑作がシグマ・アスガード。その巫女である彼女が降霊するのにふさわしかったのが、グルウエイグという神霊だっただけだ。

しかし彼女はアスガルド家が思いもよらなかつた特質まで備えて生まれてきた。

起源は『虚』。魂をも薄められた少女には、文字通り何もなかつた。齢五歳を迎えても何も話さず、ただいふ事を聞くだけの人形だった。魔術の素養自体は文句のつけられない完璧さだったこともあり、本人の意思など重要視されない家において彼女を危ぶむ者はおらず、その完成度を言祝がれるばかりだった。ただ最高傑作であるがゆえに恐



れられ、半ば監禁状態で過ごしていた。

しかしある日、降霊術の過程において彼女は人を殺してしまった。正確に言えば半殺しで済んでいたのだが、——そこで彼女は倒れて動かないヒトの肉を食った。

当然周囲のアスガルド家の者たちは驚いた——今まで命じたこと以外の行動をしなかったシグマに驚愕しただけだったが、次に彼らはさらなる衝撃に襲われた。

むしろむしろと食われた魔術師の持っていた魔術回路が、そのままシグマの回路に加わっていた。つまり、既に持っているシグマの回路が増加していたのである。

そして彼らが気づくのはさらに後のことになるが、シグマは回路だけでなく他家の魔術師の魔術刻印まで奪い、我が物としていた。

通常回路は疑似神経、刻印は臓器にたとえられ、他人のそれを植え付けると非常な拒否反応が出て失敗に終わるはずなのだ。にもかかわらず、彼女が無事にここまで生きていられるのは——起源と、生まれつき己の魂が薄い、己の意思が薄いという体ゆえ。

体に拒否反応はある。だが彼女は拒否反応を感じないまま、もしくは無視して他人の臓器と神経を同化させている。

監禁という純粹培養の環境で出会った他者に、彼女は酷く興味を抱いた。

彼女は拒絶しなかった。異物に興味を持ってしまった。排斥ではなく包摂。

色鮮やかななものかを、欲しくなってしまった。

自分には何も無いから。己の存在が薄すぎるから。

ないものを満たすとすれば、もう他から持つてくるしかない。

そうして「人を食らう」悦を知った巫女は、ただ魔術師の研究の結果と生涯を得る虚となった。

『?』の名。それは「アスガルド家の歴史の総和としての魔術師」としてつけられたものだったが、今や魔術師の屍を食らうだけ力を「総和」する名になり果てた。

女に何かを成そうという気概があったわけではない。ただ満たす

ために食う。腹を空かせた子供のまま成長してしまった黄金の女。本来の巫女の機能とは別に得てしまったこの力こそが、シグマを封印指定たらしめた理由だった。

——その虚にして希薄な女が、本来の造られた力を以て行使する魔術こそ、疑似神霊憑依『終末の黄金華』。

神話にある通り、この魔術下にある彼女が死に至ることはない。黄金の擬人は魅了の魔眼であらゆるものを魅了する。その魅了は相手の心をとらえるというレベルをはるかに超えて、無機物であろうと揺り動かし意のままに操る暴力そのもの。

同時にその目はあらゆるものを見通す千里眼。マナに直接働きかけて瞬時に魔術を行使する、神霊の代行者。

真エーテルの薄れた現代において、それでも神霊を最大限人の身に落とす「疑似」神霊憑依。

空間さえも魅了し、敵を押しつぶす。黄金の魔眼。明がそれに耐えしのげているのは、いわずもがな魔剣のおかげである。呪われた勝利の剣は、勝利を得るまでは持ち主が剣から手を離すまでは持ち主の戦いを続行させる対魔力を与える。

しかしこの魔術、魔力の消費量は莫大である。他人を食ってきたシグマが所有する魔術回路量は明を圧倒するが、それは有限。しかしその問題はシグマはここに陣取り続けていたことで解決されている。

彼女は聖杯に宿る魔力を拝借しているのである。既に春日聖杯は、一成とキリエに微量ではあるにしても魔力を分け与え続けてきた。既に魔力の貯蔵にはころびがある聖杯から、さらに魔力を流すために——彼女はここに籠り続けてきたのだ。

セイバーとライダーが神話の再現を成すのなら、明とシグマも神話の再現だった。

明が無限回星幽界から魂を引きずりおろし無限の魔力を得るのなら、

シグマは己の魔術回路と聖杯から無尽蔵の魔力を得る。

「その剣、存在を知っていたけど面倒ね。放つものが明ちゃんの分解の影だとすれば、なおさら」

歌うようにシグマは手を伸ばした。それより早く、再び距離を詰めて明が闇に舞った。不死のシグマをどう殺すか——可能性としてその力を考慮してはいる。

今、シグマは死なない、死ねないのだ。

「Musta varjo, Irronta!」  
Hajoaminen、

威力をたがわず放たれる漆黒の炎。シグマに襲いかかるそれは直前に一条の炎から彼女を覆う網のように変形し、逃がさんとばかりに包み込む。

死角はないが、小気味よくステップを踏むことで影がねじ曲がる。虚数の影さえも魅了して、シグマは逆に影を明に叩き返す。鏡に反射した光のごとく、刹那に明を狙い撃つ分解の影。即座に明は突き進む足を止め、剣から放つ影で跳ね返ってくる魔術を相殺せんとした。しかし——

「そっちも、私の言う通り」

相殺するための影が、容赦なく明に向けられる。畳みかける魅了による魔術の強制介入に、明は避ける暇もなく自らの魔術を自らの腕に受けてしまった。

「っ、ぐ——!!」

分解の魔術が本人を襲う。しかも魔剣を握る右腕に。

今手を離してしまうと、即座に明の魂は剣に食われて全てが終わってしまう。明の体内をめぐる魔力、起源「分解」において分解の魔術を分解する。しかしそれに夢中になっている間に迫るは、当然シグマ・アスガルド。

黄金の瞳、黄金の吐息、黄金の軟肌、黄金の美髪が視界を覆い——その手は明が握る魔剣を支えながら、まるで吸血鬼のように、明の首筋にかみついたのだ。

「っづ、ああ……ッ!!」

幾度もシグマに明を襲撃するチャンスがあったのにあえてしなかったのは、生きていることに意味があるからだ。

魔術的にシグマの特異性は回路や刻印を奪えることとされるが、彼

女が敵から奪っているのはそれだけではないはずだ。回路と刻印だけなら死体からでもいい——生きていることが肝要なのは、魂を欲していたからではないか。生きた人間の記録を欲していたのではないか。

確かにシグマは魔術師だが、ただ本当に魔術師らしいだけの魔術師なら明をここまで生かしていない。一直線に聖杯に向かえばいいのに、それをしなかった。

魔術師としての意識の他に、この女を突き動かすモノ。

明は喉笛を食い破られるほどに傷つけられながら、それでもまだ、意識を失わなかった。

神経の全てがかみつかれた部分へ集中し、そこへ全身の回路が集合するイメージを幻視しながらも——明はシグマの支える手を死に物狂いで振り払い、黄金の柄でシグマの後頭部を殴りつけた。一瞬怯んだ隙を逃さず、明は一回転後振り向きざまに渾身の影魔術で薙ぎ払う。

長い詠唱などしていられない。詠唱とは自己暗示、いくら短くても自分に意味が通じればそれで成るもの。

大切なものは想像イメーと現実を繋げる力。なによりも己は——虚数使いである！

「——ハッ!!」

一息の言葉で放たれた虚数魔術は、真一文字にシグマを上下に真つ二つに裂いた。先ほどぶつけようとした魔術は、影で四肢を切断するものの分解の仕方を調節して四肢を虚数空間に送りつけるものだった。

生きながらにしてシグマをだるまにすれば、まだ少しはこちらに考える余裕ができることを目論んでいた。しかし精密なコントロールゆえに、今のようなギリギリの攻防では使えなかった。

そして真つ二つになったシグマは、明が息を整えるうちに何事もなかったかのようにくっつき蘇った。大西山で戦ったキャスターの眷族よりも早い再生速度に、舌打ちするしかない。幸い首は動脈を食い破られておらず、まだ戦える。

お互いに魔力の制限はなし。お互いに死ぬことはない。

一見して勝負がつかないのではと思われるが、明が不利なことは明白だった。

明はこの剣を手放したら一巻の終わりなのだ。そのうえ何度も繰り返したことだが、魔術を放つても叩き返されて、叩き返された魔術を処理するために隙が生まれる。

その隙だらけの明をシグマが襲う。生きながらにして食われていく。

場は、静かだった。遠く、穢れた聖杯の胎動が聞こえる気がした。今まで笑顔だったシグマが、いつの間にか笑顔を消していた。

「——明ちゃん。これまでにない、明確な殺意があるわ。どういう心境の変化かしら」

「男子三日会わざれば剋目して見よつて言うけど」

シグマに語る必要など感じない。

今まで、自分の体のせいで大事な人の人生を台無しにしてきた。生まれつきだから仕方ないと、もう諦めていた。

でももう「仕方ない」とは言いたくない。

生まれた価値を見つけてみたい——今は無理でも、いつか、自分の力で。

だから今は殺す。仕方ないから、殺さなくてはいけないからではない。

明確な意思を以て己が「良い」と信じるこの春日の、身近の幸福の為に殺してやるのだ。

「私の邪魔をしないでくれるかな」

明の様子を見て、シグマは再び笑みを浮かべていた。

「貴方も食べれば、きっとその理由もわかるのね——!!」

受けるばかりであったシグマが仕掛ける。「来ないのならば、魔術を使わせてあげるわ——<sup>アンザス</sup>火」

指で空中に描かれたのは「火」のルーン。激しく噴き上げ輝く紅い熱——押し寄せるのは空間ではなく、火の壁。轟々と燃え上がるスルトの炎は、すぐ殺すのではなく明の魔術を誘うように直撃で殺しに来

ず逃げ場なく彼女を覆い尽くした。

魅了のコントロール下にある炎はシグマの意のままに、奇妙な形状でじりじりと囲いを狭めていく。このまま燃やされつくすかそれとも分解の魔術か。魔術を使えばそれも乗っ取られてコントロールされる。

明が判断を迷ったその時、再びシグマの背後に己の姿を見た——両手にナイフを備え腰を落とした想像明。

しかしこの空間の神となったシグマは、とうに想像明を察知していた。後ろ手に再び火のルーンを描き、想像に用はないと最大出力の業火で焼き果さんとする。炎の熱気で空洞全体がめらめらと輝いた。

だが想像明は焼かれる——魔力によって体を保護しながら、何事かを静かに唱えながら、その業火の中を熱さも構わず走り抜けた。シグマのルーンを完全に無効化できず、彼女の服が、髪が、肌が燃えていく——しかしそれは些事とばかりに駆け抜け、そしてシグマの背後を襲撃し、両手のナイフで突き刺した。

だが、その程度シグマには無意味。いかな急所を貫こうと死なぬ黄金華は煌めき続ける。ほしいものは真に回路と刻印を持つ明だけとばかりに、シグマは想像明を気にも留めない。

はずだったが。

シグマの背に突き立てられた二本の影ナイフ。真後ろに立つ想像明は、先ほどまでの想像明ではなかった。服が焼け焦げ、炎が彼女の顔や体まで嘗めつくす直前に見えた姿は——先ほどの想像明よりも遥かに大人びて成熟した女性の姿をしていた。

「汝に権を与えよ、Antaa juri sinulle.  
生きながらにしてSukeltavat  
想像の世界に足を踏み入れたいmielikuvitusmaailmassa elinäkään.

「まさか、貴方!？」

シグマの目が見開かれる。炎に包まれた想像明はシグマの背後に取りついたまま離れない。

「変な物質のEriaineidenvanki.  
至れ、想像のMielikuvitustabusiness vapauteen.

——！」

前方より迫るのは本来の明。身体強化の重ねがけでできる限界の速度による接近にして、剣の魔力を使うことなく力でシグマの眉間を串刺しにしさらにそのまま、想像明の顔も串刺しにした。真つ二つに割れる二つの頭蓋と、あふれる鮮血と脳漿——二人が絶命したことを確認して、明はシグマを蹴り飛ばして炎と血濡れの剣を引き抜いた。剣自体はシグマに魅了されない——それに、想像明が詠唱を終えた時点でシグマには何もできないことがわかっていた。

シグマ・アスガードは殺せない。その上、もし仮に何らかの方法で殺せたとしてもこの空洞は既にシグマの工房。つまりこの世界は彼女の世界であり、その中で神霊の一端を行使する彼女は「神」ですらあった。

神の死は世界の死。世界が死ねばその中にいる明もただでは済まない。ゆえにシグマは殺せない。

ならばどうするか。

永久に戦闘不能へ追い込むしかない。

虚数空間は虚数使い以外に目に見えない。

しかし今のシグマには見えているのかもしれない——背後に空いた、奈落の底。虚数の世界が。

「ッ——！！あなた、まさかそこまで至る——！！」

シグマの絶叫が空洞に轟いた。脳を破壊された想像明は体を保てず、その場で霧のように霧散し果て——そして黄金華は消えた。

生暖かい地下空洞の中に立つのは、確氷明ただ一人。戦いの後である焦げた臭いと鉄臭を残して、周囲には静寂が満ちた。

残された明は真黒い太陽を見上げ、大きく息を吐いた。そしてその場に倒れこみ、魔剣を手放した。

想像明は死に、シグマ・アスガードは消えた。

最後の魔術——あれは、想像明がシグマ・アスガードを虚数に変換して虚数空間に連れ去ったのである。シグマの居場所を物質界から

虚数空間へ移動させただけなので、彼女は死んではない。

不死であるのなら、虚数空間のどこかで存在してはいるだろう。ただ虚数使いではなく、口ぶりから虚数使いの回路や刻印を所持していないだろう彼女は永久に物質界に戻れない。

殺せないなら戦闘不能にする。虚数の牢獄に送り込む——それが、確氷明の答えだった。

想像明が最初から虚数空間に籠っていたのには、シグマの攻撃を避ける以外に理由がある。

もし初撃でシグマを倒せばそれでよし、もしそれが叶わなかった時にその答えを現実のものとする予定だった。

本来、虚数空間にアクセスできるのは虚数の使い手のみだ。虚数の使い手が自分の魔力を通した物体ならたやすく送れるが、他人の魔力を帯びたもの、いわずもがな他人の、それも虚数使いではない魔術師を虚数空間送りにするのは高難度も高難度の魔術である（想像明が明を連れて空間転移できたのは、明が虚数使いであり、同意の上でもあったからである）。

そんな魔術は、まだ想像明にも使えなかった。

ただし、それは「オリジナル明が生み出した想像明」の話である。

シグマを強制的に虚数空間送りにする方法——それは、想像明による「イマジナリ・ドライブ」無限再生。

元々イマジナリ・ドライブは明の父が教え手のいない虚数魔術自主学习のために考案した魔術だ。「今自分ができない魔術ができる自分」を生み出す魂の偽造。

できないことができるようになれば、思考が変わる。またイマジナリ・ドライブを繰り返し、自分を自分の先生もしくは対戦相手にして自分を鍛え上げる方法だった。

——だが、そこで。生み出されたもう一人の自分が、さらに魔術の通じた自分を生み出し、さらにそのもう一人の自分がさらに魔術の通じた自分を生み出し、を繰り返し返したら——どこまでも虚数を極めた魔術師が生まれるのではないか？

ただしそれはクローンを元にクローンを作り続けるようなもので、



性能がどこまでも上がるにつれて魂は偽造に偽造を重ね、原形を失い崩壊までのリミットも早まっていく。

——しかし、想像明はそれをよしとした。

一分でも三十秒でも、詠唱さえ成る時間分だけ生きていられれば、最後の自分がシグマを刺す。

時間の進み方が異なる虚数空間において、想像明はその試みを何度も繰り返し、長い時間の果てに最強の己を生み出した。畢竟物質界で現界を維持するための魔力は本体の明頼みで——最後に生み出した己を受け渡すことだけ明に託した。

シグマを連れ去る詠唱を成就させた、新しい想像明がシグマを監獄送りにした。

明はその新・想像明を魔剣で殺す。想像明の魂はクローンがオリジナルの遺伝子と同一の遺伝子を持つように、偽造ではあるが明と同一——つまり想像明の魂を贅に食わせることで、本体の明は無事に魔剣から解放されたのだ。

——これができるからお父様は魔剣を使ってもいいと言ったんだよね。

身も蓋もなく言えば、今や明はノーリスクでこの魔剣を使い放題である。

その為に、使う度に己を殺すことを呑み込めるのであれば。

「私を殺す？」と問うた想像明に、明は「私には死んでもらう」と応じた。

その時に、この結末は知っていた。

ゆえに最初の想像明はもういない。虚数空間に消えた彼女との間にあるパスがない——想像明は己で自分の命を絶ったのだ。

三か月程度は現世で暮らせるだろうが、未練が残るからいいと。そして彼女はまた、本体の明に重荷を負わせることも拒んだ。

お前が殺したのではない、私が選んで死んだのだと——明は深いため息をついた。

明が好きだった姉。その憧憬が混ぜられて生まれた偽の魂。

あこがれた姉が自分で選んで死んだ、と言って喜ぶ妹がいるか。明は魔力不足できしむ体で起き上がり、想像明が虚数空間に逃げ込む際に投げ捨てた鞘を拾いに入り口近くにまで歩く羽目になった。鞘を拾い、剣を納めると背後に輝き続ける聖杯を見た。

——決して、私はこれまで殺した誰かのことを忘れない。そしてこれから先も。

——私は最善の道を探し続けるけど、もし立ちふさがる何かがあれば、殺すだろう。

——偽善でも、利己と言われようとも、己の為に生きてみたい。

## 12月9日⑤ 最後の剣

その宝具の開帳に、わざわざ取り出して手に取る必要はない。いつも身に着けているものだから——それでも間に合うかは一か八かだった。

『この道繋げし我が妻よ』!!』

日本武尊が持ちうる最強の結界宝具。前回ライダーの宝具を受けた時には障壁の三分の一が破壊されたが、今回はいかほどか。単純計算なら同じく三分の一である八枚が突破されるだけのはずだが——

次元を割く雷——混沌を太極へと分けた原初の雷が至近距離で迸った。障壁の展開から、セイバー自身は位相のずれた世界に隔離され、そこから現実世界のありさまを目撃し、美玖川の氾濫の様子を見続けていた。走る激震、対界宝具の力を再度目の当たりにしセイバーは歯を食いしばった。

光の横溢が終わった世界へ、セイバーは元の世界へ帰還した。須臾の判断だったが、戻ってこれたことはライダーの宝具を防ぎきったことの証左でもある。間違うことなく、櫛はその威力を發揮した。横溢する光を目撃しながらも、宝具による結界への浸食を感じながらも傷を負うことはなかった。

——帰還の異相がずれて美玖川上空に投げ出されていたが、宝具の櫛と、周囲の惨状を見て目を疑った。

一時的に美玖川の水が押し上げられ、堤防を越えて流れ出していた。どろどろになった河川敷を見てセイバーは驚いたが、さらに櫛を見て絶句した。

——櫛にヒビが入っている。既に壊れる寸前になっていた。

鳥の神性を吸収した布津御霊剣の一端を見た思いがして、セイバーは口を固く結んだ。前回よりも宝具の威力が向上しているのは火を見るより明らかだった。そして櫛の様子を見るに、後一撃の宝具も防ぐことはできないだろう。

水面に泰然と立つライダーは、どうせ戻ってくるだろうと微動だにしない。もう剣戟でやりあうことの無意味さをお互いがわかってい

る。また先程までのせめぎ合いのやり直しで、決着がつかない。

ただいたずらに戦い続けてもセイバーの消耗が先、そして宝具を開帳しても回数的にセイバーが負ける。一撃のもと、確実に霊核を破壊するしか勝つ方法はない。

セイバーは宝具よりも剣同士の戦いにおいて、ライダーの隙をえぐりだし殺すことを狙っていたがそれは難しい。目がないとはいわないが、厳しいというのが本音だ。相手は慢心しているのではない。楽しんでこそ万全で臨んでいるからこそ油断はせず難しい。

——大聖杯を破壊したいと明が言った。それをするにはセイバーの宝具がほしいとも。だからまだ——セイバーは魔力をとっておきたいという意味で、宝具を使いたくなくとも思っていた。

しかし、そんな余裕は許されない。先のことを考えていたら、死ぬ前に死んでしまう。

ライダーはすでに魔力の再充填をはじめ、再び宝具を放つ構えだ。何回でも、どこまででも付合おうと赤い瞳が笑っている。

セイバーは深く息を吐いた。「——決着をつけるぞ、ライダー」

ライダーは笑って首を傾げた。「これは異なることを。公はさつきからそう言っている」

闇のしじまに、さらに深い沈黙が下りた。嵐の前の静けさか——セイバーは先ほど護られたばかりの櫛を取り出した。

もうこの櫛は宝具を防げないなら、使い方は一つだけ——セイバーは一息にそれを砕き壊した。

この宝具は日本武尊だけを護るもの。何しろかつての妻が日本武尊を護るべく、命を懸けた結果の宝具なのだから。

妻はせめて自分には生き残ってほしい、と考えていたのかもしれないが——日本武尊が誓っていたのは、やはり皆で帰ることだった。

それは、今も昔も。

だから、皆で帰るために——そして死を迎えるために、セイバーはこの宝具を壊す。

元来宝具は『壊れた幻想』ブローケン・ファンタズムとして、宝具を破裂させて爆弾として使用することもできる。モノによっては本来の宝具以上の破壊力を

発揮することもあるが、宝具は一度破壊すると修復には長い時間がかかるため、まず使われることはない。

そして壊れた幻想として使われるこの櫛は——本来人を傷つけることができないう神話の巫女の魔力が籠った礼装は、担い手たる日本武尊の霊核の破壊さえ修復して余りある膨大な魔力塊として機能する。その溢れる魔力を令呪の代わりに、日本武尊はひとつのことを願った。

「——ふるべ、ゆらゆらとふるべ。我が名は日本武尊大神なり！」

砕け散った櫛の破片が綺羅綺羅と散っていく中に唱えられた言葉。セイバーの体が青く光り、その瞳はきつとライダーを見据えていた。

令呪並の魔力行使による、一時的な神性の引き上げ——もしこの場にマスターの誰かがいれば、セイバーの神性は今やEX（規格外）のランクを示していることがわかるだろう。

わざわざそれをした理由はひとつ——『あま全て呑み込みしむ氾濫の神剣』の完全開放をするため。この宝具は剣に込められた力を担い手の神性で縛り上げ、エネルギー変換して放つ。だが素のセイバーの神性ではその制御力が足りず、不完全な形での開放を強いられていたのだ。

ゆえにこの選択。セイバーが何をしたか瞬時に悟ったライダーは、突然何々大笑した。

「ッ、ハハハハ!! 神の剣よ。神を嫌うお前が神になるか」

セイバー自身はこれまで意識したことさえないが、現界にあたり彼の神性は本来の神性より下がっている。

理由はセイバー自身が無意識のうちに神霊を嫌っているためだ。天津神や国津神の差はあれど、彼は神霊なるものの手によって生まれながらに人生を歪められ、旅路において妻を奪われ、概ね役目を完遂したとみなされて伊吹山の死も放置された。

そのくせ、彼がこれまで戦ってこられたのはその加護の多さゆえでもある。

己に欠かせないと知りながら、半ば己自身でもありながら、彼は神

霊を嫌っていた。

神霊よりも人間にあこがれて、彼らと共に生きたいと願っていた。

それでも今、このときだけは。

この力があってこそ、救える何かがあるのならば——日本武尊はまっすぐにその方策へ手を伸ばす。

セイバーはもう迷うことなく、ただ己の真実だけを口にした。

「——もう否定のしようもない。お前は俺より強い。我が祖、はつくにしらすすめらみこと原初の天皇」

ライダーは静かに口を閉じ、セイバーの様子をうかがった。深く沈む夜の闇が終わり、黎明は近い。太陽神の直系である二人の時が、すぐ間近にまで迫っている。

「それでも今は、負けない——決着をつけるぞ」

天叢雲剣が鳴動し、それ自身が魔術回路となり魔力を精製し始める。白銀の光に包まれたセイバーは天叢雲剣の呪布を巻きつけることはせず握りしめる。

セイバーが神性を上げた状態の天叢雲剣と、今のライダーの布津御霊剣でやつと互角。

その時、ライダーが楽しげに、それは愉しげに笑った。

「——よくぞお前はたどり着いた。認めよう我が子孫よ——ゆえに全力を以て撃ち殺す！」

ライダーの白い髪が舞い踊る。最大の一撃を与えるべく、川面がさざなみ立ち二つの魔力が渦を巻く。大気が動き、唸りをあげて逆巻く突風。空気中の水分が電気を帯びて火花を放つ。

遙か東のかなたに伺える地平線から、一筋の赤光が漏れ出している。夜明けはほど近く、二振の神剣は朝日を待ち、終わりが始まる。

白金の魔力と白銀の魔力の相克の後——幻想は、紡がれた。

「八岐大蛇の尾より出でた剣よ——その伝説、断絶せよ！」

宝具と英霊の伝説を断絶する——その効果は、草薙剣が未だに使えないことで良くわかつている。それでもセイバーは止まらなかつた。

この春日を護るため、明の未来を守るため、そして己の運命を繋ぐための戦いだ。

最強になるというただ一つのためではなくて、様々なモノの為にこの戦いはある。

今も、昔も。本当にずっと一人だったなら、自分はここにさえ至れなかつた。

己が最強と謳うのならば、己と共に闘ってきた輩も間違いなく最強なのだ。

ライダーからその真名が紡がれる直前、己にしか聞こえない声で、セイバーは呟いた。

「——そうだ、俺は、勝つためには手段を選ばない」

セイバーが両手で持っていた天叢雲剣は、いつの間にか右手だけで支えられていた。

「天地神明！開闢ふつのみたまのつるぎせし断絶の劍神——！」

セイバーの空いた左手には、いつの間にか脇差程度の長さの刀が携えられていた。これはセイバーの宝具ではない。

左に鞘に装飾のある美しい脇差、右に天叢雲剣を掲げ、セイバーは高らかに謳う。

「我は皇統を助けし者 我は皇統を保護し者 我は皇統を長らえし者！」

——これは託された刀。消えゆくアサシンが繋いだ、対神性用拘束宝具。アサシンの宝具の本質は強奪ではなく『所有権の書き換え』。

アサシンが一度自分のモノにした宝具を、他の誰に明け渡すもアサシンの自由。

そしてアサシンは、消える前にこの宝具をセイバーに託した。

この土壇場で、己以外の力を頼るなど論外か？そんな発想は元々セ

イバーにはない。

そんなちつぽけな誇りより、勝ちとらねばならぬものがある。  
気は合わない暗殺者にまでも、託された勝利がある。

『つぼきりのみつるぎ尊きを受け継ぎし剣!!』

銀色の光がライダーを襲う。

決してライダーを傷つけることはないが、アーチャーの宝具は神を縛る。

両親を神に持つという最高の神性によって、ライダーの動きは刹那、完全に止まる。

だが、今や神霊にも等しい神性を持つライダーほどの相手を拘束するためには、莫大な魔力が要求される。数秒動きを止められれば御の字——だが、その数秒が運命を変えることは、戦いの中に身を置くものならば誰でも知っていることだ。

セイバーは壺切御剣を左手に、天叢雲剣を右手に持ったまま。

「な……それは……!!」

ライダーはこの宝具のことを思いもしなかったはずだ。なにしろアーチャーはライダーが姿を現す前に消滅しているのだから。

ライダーの布都御霊剣は、宝具を解放する直前で停止している。

ライダーが動きさえすればすぐさま断絶の剣はセイバーを襲うだろう。

「我が神威の剣で消え去るがいい！ライダー！」

この一撃で消えてもいい——セイバーは今己の持てる魔力の全てを注ぎ込む。

己は人か、神か、剣か？

そんなこと、どうでもいい。

空気が唸る。夜明けを呼ぶ。水が迸る。遠き古き神代の猛威がこ



の世に具現する。そして壺切御剣を消して、両手を己が剣に添える。ライダーの体が大きく震える。セイバーが全力を天叢雲剣に注いだせいで、壺切御剣による拘束が解けた。ライダーは完璧に神剣解放の準備は整っていたが、絶対的にセイバーよりも遅い。

その刹那で十分だ。

セイバーの体は如何なる突風よりも敏速で、如何なる雷よりも迅速だった。

『八雲封印・光裁神剣』——!!』

白い——清冽なる一条の光だった。直線状の川水は膨大な圧力と熱量を受け、蒸発しながら押し出され再度激しい水柱を噴き上げさせた。

水と水の壁の間にセイバーとライダーが二人きりで——そうして神造兵装の一部も無駄もなく、完全に力を破壊の光線として変換しきった一撃が決して違うことなく、ライダーの体に直撃した。

闇を割り、遙か彼方の朝日に届くように——一条の光は原初の帝の体を貫いていた。

噴きあがった川水は夕立のように降り注ぎ——神の剣たちに降り注いだ。まだその体を維持しているライダーに向かい、セイバーは決して隙を与えずに水面を疾走して確実に霊核を破壊しようと剣を突き立てた。

その剣はまるで今までの苦戦が嘘のように、吸い込まれるかのように天叢雲剣はライダーの核をえぐり取った。

——この感覚を思うに、今の一撃がなかったとしても、おそらくライダーは現界を保つことができなかつたろう。

ずるりと血まみれの剣を引き抜いてセイバーは冷静に思った。当のライダーは鮮血を吐き出しながらも、決して膝をつかずに立ち続けていた。

それでも、ライダーの限界は手に取るようにはつきりとわかる。

「——あの盗人、いや……公が現れる以前にいたとかいう、貴族の剣か……」

「お前の方が強い。だが、俺の勝ちだ、ライダー」

からん、と布津御霊剣を取り落としたライダーは、セイバーを見つめてやはり笑っていた。

「……やはり、最初から見物しているべきであった。損をした気分だ。そのあたりは業腹だが、よしとしておくか——」

今際の際にも、後悔などなく。ただ残念そうに、赤い瞳の天皇は呟いた。

きつとこの男は——生前も今も、僅かな心残りがあっても、後悔はなく生涯を終えたのだと、なんとなくセイバーは思った。

払暁。東から強くなる橙色の光を最後に——ライダー・神武天皇は消滅した。

「……」

ライダーの消滅を確認したとたん、セイバーの体にはどつと疲労が押し寄せた。この一撃で消えてもいいと覚悟したほどの宝具開帳のため、もう魔力がほとんど残っていない。

まともなサーヴァント戦は不可能だが、魔術師同士の戦いなら助けられる。明とのパスは生きている——彼女を助けるべく、そして聖杯を破壊すべく——セイバーは力を振り絞って、夜明けの春日の空を飛んだ。

\*

シグマを虚数送りにしても、大聖杯が消えるわけではない。今もこの星の祭壇で、黒い太陽を捧げる巨大な柱はその根を下ろし続けている。

明は自分の魔力の大部分を使い果たした——剣から放つ魔力ではなく自身への身体強化、セイバーに与え続けたこと、さらに想像明に多くの量を割いたからである。サブの回路も使用しており、ここまで派手に消耗したのはいつぶりか。

明はじつと、己の右手の甲を見つめた。もう僅かな跡を残すだけとなった令呪だが——セイバーの繋がりはまだはつきりと感じる。そして、彼女は勢いよく振り向いた。

「……セイバー……」

「マスター、無事か」

振り返った先には、少し前に別れたばかりだが、長らく会っていないかったような気のするサーヴァントがその姿を現した。

煤汚れているのは当然として、五体満足の姿を見て明は胸を撫で下ろした。

「セイバーも無事で良かった」

ここにセイバーが居る——即ち、残るのはセイバーだけ。

正真正銘、セイバーと明は春日聖杯戦争の勝者となった。

だが、セイバーと明に喜ぶところはない。聖杯を不要と断じた彼らには、まだ為すべき役目が残っていた。ゆえに彼らは安堵することも喜ぶこともなかった。

大聖杯——目の前に坐すこの大魔法陣を破壊しなければ、時を経て再び聖杯戦争は開かれる。それに此度の戦争で願いを叶えた者がいないため、魔力が大いに残っており、より短いスパンで再び起こる可能性も大きい。明はセイバーに尋ねる。

「セイバー、宝具開帳分の魔力はある？」

もう明から与えられる魔力は雀の涙程度だ。ほとんどをセイバーに賄ってもらわなければならない。

「俺の全部の魔力をかき集めればどうにかなる」

あつさりとそう言い放ち、彼はちらりと後ろに振り返った。それは、ここに来るまでの道を振り返る所作だった。

「この閉鎖空間での天叢雲剣はお前も巻き込みかねない。しばらく待つから、早く地上へ行け」

すでに高ランクの神性を失っているセイバーは『全て呑み込みし氾濫の神剣』しか使えない。屋外の大西山ではよかったが、この閉鎖空間では宝具開帳と同時に発生する激流を逃がせる当てがない。

それに対城宝具を放てば、空洞そのものが崩壊する危険もある。セ

イバーの判断は至極当然のことだった。

「  
セイバーを召喚した時から、ずっと、この時が来ることは知っていた。むしろこれは最上ともいえる終わり方で、これ以上のナニカを望んではいけない。」

たとえ大聖杯が無くなるうと、明は明の魔力でセイバーを現界させ続けることができる。

しかし、それはすべきことではない。

僅か、昨日の夕方。ショッピングモールの屋上が沈む夕日に燃える中。

セイバーは聖杯戦争後に現界し続けることを拒んで、死を迎えることを選んだ。

「それでも俺は帰るさ」

それは、決して絶望して死を望んだからではない。

「だって、人間は死んで終わるものだろう？」

太陽は東から昇って西に沈む、空が青いと言うように——当然のごとく、彼は言ったのだ。

たとえその体と運命がどんなに歪であっても、最期は人として死を迎えたい。

名もなき人間として生きてかった英雄の、星を掴むような話。

だから、このうす暗い場所が最後の別れ。もう二度と出会うことはない。

明は唇を強く噛んで、それから深く息を吸った。土と血で汚れた手を、無造作に彼に差し出した。

「セイバー……ありがとう」

セイバーは目を見開き、それから自分も手を差出し、明の手を握った。

「俺からも礼を言おう。碓氷明……それから、地上の土御門にもよろしく言っておいてくれ」

セイバーは露骨に嫌そうな顔だったが、それでも礼を言うところは生真面目さである。一成とセイバーが顔を合わせた頃を思い出し、随分仲良くなったものだと思つたと勝手に微笑ましい気持ちになつていた。

セイバーはこほんと咳払いをすると、剣で来た道を指示した。

魔力に満ちた大空洞、春日の聖杯戦争、始まりの場所。

「そろそろ、夜が明けている筈だ。神社では土御門とキリエスフィールが待っている。——行け」

明はセイバーの言う通り出口へと向かおうとするが、足が動かない。

セイバーが宝具を解放したとしても、直ぐにここが崩壊を迎えるとは限らないのではないか、せめて地上まで共に、夜明けを迎えられはしないのか。こんなところにセイバーを一人にしておいていきたくない——それが、今に至つても明の足を遅らせていた。

「お前を巻き込むわけにはいかない。早く行け」

一方のセイバーは腹を決めたのかあつさりとしたもので、さつと明に背を向けた。

「……うん」

セイバーの様子に明も心を決めて、勢いよく踵を返した。魔剣をかかえ傷だらけで走り始めたその時だった。

「そうだ、言い忘れていた」

ぬけぬけとそう言い放つた剣の英霊は、くるりと振り返つた。当然、明もつられて足を止めて振り返つてしまう。

折角踏ん切りがついたのに、と少々腐れた気持ちでいた明だったが

——その表情に、目を奪われた。

「——明、俺は」

その言葉は、朝の挨拶のようでもあり。

その言葉は、感謝の言葉のようでもあり——彼の希望に満ちていた。

「お前の幸せを、願っている」

ああ、本当にこの人は。

人ならざる体を持って、人ならざる運命を持って、

人らしい願いが相応しい存在ではないと、死ぬほどわかっているくせに——身近な人の幸いという、どこまでも人間臭い願いを捨てられないのだ。

本当に愚かで、本当に真つ直ぐだったあまりに破滅へと歩むことになっても、不釣合いであっても、その願いは彼の在り方そのものだった。

その願いになんと答えればよいのか、明にはわからなかった。願いが叶うかどうかは、まだ遙か未来の話だから。

ゆえに、明はセイバーの目を見て、強く頷いた。

「うん。頑張るよ——」

明の姿が見えなくなつてからも、セイバーは消えた先をしばらく見つめていた。地上ではもう夜が明けて、黎明の光が覗いていることだろう。今でも体内時計には自信がある。

明が地上へ戻るまで、あと三分程度か。セイバーは禍々しく輝く黒い太陽——孔を見上げた。穢れた願望器、呪いの釜——正体はそのような紛い物であれ、この聖杯は間違いなくサーヴァント七騎を召喚する力を持っていたのだ。

もし、ここで自分が大聖杯を破壊せず自害して果てたらどうだろうか。

自分は世界との契約を破棄して、人としての終わりを迎えて大和に帰る。

だが、この春日の地に聖杯は残る。また、時間かけて魔力が溜まる。そうすれば再び聖杯戦争が開かれ、再びサーヴァントが召喚される。

さすれば、もしや、自分は再び、この地に置いて召喚され。

さすれば、もしや、自分は再び、もう一度、今一度、彼女と共に――

そのような幻想も、僅か。セイバーは静かに頭を振り、眼を閉じた。

「――さて」

再び目を開いた日本武尊に、迷いはない。

役目は果たすもの。約束は護るもの。ゆえに彼は剣を取る。

これが真正銘、ラストファンタズム――最後の幻想。

「八雲立つ出雲八重垣、其は暴風の神よ――」

魔力が濃いこの空洞自体、サーヴァントにとつては良い環境である。天叢雲剣は自ら鳴動を始め、魔力を生成していく。

蒼白の光、自然の猛威の凝縮――全ての準備は整った。

凜冽にして壮烈、獰猛にして清廉な光が闇をかき消す。

「以て朝敵討ち果たさん！『あ全て吞み込みしむ氾濫の神剣』――!!」

――俺は、帰るよ。

epilogue 冬来たりなば春遠からじ

来た道と同じ道に戻り、明はうつそうと茂る林の中へと舞い戻った。木々の葉から漏れる光はまだわずかでも、東には橙色の光と温もりを感じた。

たとえ誰がいなくなっても朝は来る。微睡に包まれた樹木たちも、あと少しで今日という日を始めるだろう。一日で最も冷え込む時間ゆえ、立った霜柱を踏み潰しながら、明は祈る気持ちだった。

決して無理をするなど、一成には言った。それでも彼はきつと無理をするだろうとわかっていた。強制的、かつ一度きりだが一成が接続を切る方法があることを明は承知していた。

暗黙の裡に、あと一回なら天通眼を使えと許可していたに等しい。

人数的に神父の相手をする誰かが必要だったのもあるが、明は一成に頼っていたのだ。その眼を当てにして。一成は絶対に自分の意思ですると知って。

(……こういうとこ、良くも悪くも私も魔術師ってかんじする)

誰も不満を懐かないことがわかりきっているからいいものの、明はそう考える自分に呆れる。しかし、それは魔術師としてやっていくにあたり必要な思考あることも理解している。

——と、その時。突然地下から突くような振動。地震ではない——  
今まさに、セイバーが宝具を開帳した証。

そして、明はここ数週間共にあり続けたつながりを、正真正銘失った。

紫色に染まる西の空も、徐々に朝を受け入れながら目覚めていく。明は一度立ち止まったが——何かを振り切るように、そのまま強く神社の階段下へと急いだ。

足早に林をくぐり抜け、明は元の神社の階段下に辿り着いた。まだ一成とキリエスフィールの姿はない。大聖杯は破壊され、神父の願いは絶対に叶わなくなったが、彼らの安否は。



明は勢いよく階段の上を見上げたが、眼に入ったのは——階段から落下する一成と、彼に肩を貸された全裸のキリエスフィールだった。

「かっ………！」

避ける間もなく、否避ける余裕があつたとしても、避ければ一成たちが石階段に激突するため避けられなかつたのだが——明は思いつきり二人を受け止めるように体当たりされ、石畳に倒れ込む羽目になつた。

「………！一成！キリエっ!!」

痛みにもんどりうちながらも、明は強く一成とキリエを叩いた。一成が押し掛かっている形になるため、彼の体温が異様に上がっていることに気づいた。

おそらく四十度近い発熱がある。——天眼通を使ったことによる、回路の焼き付き。

「……う、うすい………？」

半ば焦点が合っていない眼で訊ねられ、明は容赦なくその頬を叩いた。「起きて！一成！」

「……おう………悪い………動くのが、きつい」

「……ッ」

一成の状態をおおよそ理解している明は、とにかく一度一成の下から這い出した。予想するに神父との戦闘は一成の勝利に終わったものの辛勝で、キリエを救出したはいいものの眼の反動でそれもままならなくなつていたところに、明と遭遇したということなのだろう。

他人の魔術師に重力操作魔術をかけるのは難しいが、一成レベルの魔術師ならうまくいくかもしれない。だがキリエはもう明が負ぶつていくしかない。しかも彼女は全裸で、まだ払暁の今のうちに家まで戻らねば人の眼が気になる。

「——あーもうー！」

明はすり減つた魔力を絞って、自分たちに視線誘導の魔術をかけ、一成には重力操作の魔術をかけ、キリエを自分で背負い碓氷邸まで歩くことになつてしまった。

日は昇りつつあり、東の空は橙色の光を受けていた。セイバーが消え、想像明も消え、聖杯は破壊された。街に残された爪痕は深く、それが立ち消えるまでには長い時間を要することはわかる。

今後為すべきことは山積みだが、それでも明は今、間違いなく清々しい気持ちでいた。

\*

最終決戦後、寝ずに待っていた悟に迎えられた明、一成、キリエの三人は結果的に全員昏倒状態だった。

明は一時的な魔力の目減りと疲労、一成は天眼通の反動、キリエは聖杯化を免れたものの根本的に寒さに晒され続けた疲労である。

明は力を振り絞り、碓氷かかりつけの医者を家に呼んでから、悟にキリエの世話など全てを丸投げして泥のように眠った。

結局、キリエと明が目を覚めたのは丸一日後だった。明は眼を醒ました後、キリエと共に一成の身体を確認していた。正確に言うと、彼の魔術回路の状態である。

脳に対する負荷については起きてみなければわからないが、回路は確認できる。

結論から言えば、疑似神経たる回路は無事だった。ただ半ばショートしかかった状態のため、一ヶ月は松葉杖生活に（目算だが）半年は魔術禁止である。あとは彼が目覚めさえすればいいのだが、決戦から丸二日たった今も眠り続けている。

そして明も明で暇ではなかった。一成の世話はキリエと悟に任せ、てしまい、聖杯戦争の事後処理に着手していたのだ。おそらく時計塔からは今聖杯戦争の顛末について報告を求められる上に、ライダーによって破壊された碓氷邸結界の修復、それに神父不在によって放置された聖杯戦争被害の処理。

近いうちに新たに聖堂教会に着任する神父もしくはシスターが来るだろうが、できるだけ先手を取って用意をしておきたいところである。

——神父は、死んだんだよね。

明は自分が目覚めたその日に彼女は再び土御門神社に出向き、人払いの結果を掛けると同時に境内を確認した。その時に残っていたものは、聖杯の泥によってめちやくちやに破壊された本殿と木々の惨状だけで、人の死体はどこにも転がっていないかった。さらなる情報は、一成の起床をまつことになる。

現在、午前十一時。低血圧で不機嫌の明は、疲労も取りきれていないまま悟が作り置きしていてくれた朝ごはんを食べていた。ニュースをつけると、いまだに春日連続殺人事件の話とテロの事件を取り扱っていた。

嵐の日々が終わりを告げた。聖杯戦争が終結してまだ丸二日、丸一日眠っていた明の体感では一日。

結果、聖杯戦争の関係者で生き残ったのは碓氷明、土御門一成、山内悟、キリエスフィール。

聖杯戦争さえなければ、真凍咲はあのように死ななかった。キリエは生まれることすらなかっただろうが、聖杯を担わされることもなかった。美琴も巻き添えになって死ぬこともなかった。

大聖杯は破壊したが——その構造の解明。再発を防ぐための施策を練らなければならない。

春日の聖杯は冬木の聖杯を模倣したものだから、時計塔にいるであろう冬木の聖杯解体者に教えを仰ぐのがよいだろう。それにしても一朝一夕で済むことではないだろうが、やらないという選択肢はない。

「……時計塔か」

いつか行くことになるだろう、とは思っていた魔術師たちの互助機

関にして最高峰の魔術師たちが集まっている総本山。

権謀術数渦巻く魔導の巣窟へ行くのは正直気がめいるのだが、どうせいつかは行くことになっていた場所である。それに、今あちらに居るはずの父——碓氷影景にも尋ねたいことがある。

本当に父は、この地に大聖杯があることを祖父から伝えられていなかったのかどうか。真の敵は身内にあり——長年付き合っていた神父が黒幕だったことを思い出し、口の中に苦いものが広がった。

遅い朝食を平らげて皿を洗ってから、明は一度自分の部屋に戻った。昼からはまた用事があるが、それまでに自分の部屋を片付けたかった。

特にモノが散らかっているわけでもないが、ただ、もう使わないものがあるのだ。明の筆筒のとなりに、ちよこんと畳まれている何枚かの服がある。霊体化できないセイバーのために買った洋服だ。男物のジャケットやズボンにジャージ。

「……私が着れないわけじゃないんだけど」

セイバーと明の背丈が似通っていた為、これらは明も着られる。だが、なんとなく気が引けると言うか、着るたびに少し悲しくなってしまうような気がするのだ。

明は意を決して服を全て掴んだ。

「よし、捨てよう」

リサイクルショップに売りさばくことも一案だが、むしろこの世に残らない方がいい。あとで燃えるごみで大丈夫か確認しようと心に決めた。そしてあとはこの部屋にある異物だ。

そう、セイバーの愛した現存する宝具『この世すべての怠惰』である。元々明の部屋にこたつはなく、父が地下室に置いておいたものをセイバーが引つ張り出してきたという経緯がある。

セイバーはいやにお気に召しており、世間でこたつのあまりの快楽に冬を越してもそのままにしておく人間もいるそうだが、生憎明はこたつ愛用者ではない。

「アキラツ！カズナリが眼を醒ましたわ！」

炬燵に手を掛けた時、キリエがものすごい勢いで部屋に飛び込んできた。すっかり体調を取り戻したキリエは、顔を紅潮させて明の手を引いた。明も急いで隣の部屋、父の部屋に向かった。

扉を開くとそこには、仰向けに寝転がっている一成の姿。眼ははつきりと覚醒していて、傍らに座る悟と会話をしていた。

「……一成！大丈夫!？」

「……生きてるっていう意味だと大丈夫だけど、体マジ動かせねーんだけど」

「それはそのうち治る。話した感じ、頭の方もまあ大丈夫そうだね。千里天眼通に関するあれこれはキリエから後で聞いて」

明は父の机から椅子を移動させ、悟の隣に座った。「無事で良かった」

「お前も」

明るい日差しが室内に差し込み、部屋は平穏に包まれている。様々なものを失い、様々なものを得てここにいる。明も暇な身ではない――本題に入った。

「これからの話だけど、一成に本当の義手を作らないとね。もう依頼はしてあるから、あと二三日で届くと思うけど」

「おう」

「ローンOKだから安心してね」

「……おう……」

身体の検査と義手の装着で、一成は少なくともあと三日は碓氷邸にいたことになる。一成は複雑な表情で明に礼を言くと、悟とキリエに水を向けた。

「僕はもう今日出ていきます。もともと土御門くんが眼を醒ますまで、という話を碓氷さんとしていたんです」

悟はそもそも碓氷家から出て行って全く問題のない立場だ。それがここまで居残ってしまったのは、うかつに教会に行けない状態であつたことが一つ。

二つは戦闘で満身創痍になった明と一成に代わり台所に立ったり、

一成の着替えを持っていくなどかいがいしく世話を焼いていたからだ。悟からすれば彼らは命の恩人であり、当然のことだという想いもあつたが、そろそろこの非日常も潮時だ。

悟は、悟のなすべきこと——具体的には就職活動をしなければならぬ。

「がんばりさない、サトル・ヤマウチ。私はこの碓氷邸にずっといるわ」

胸を張って宣言するキリエ。大聖杯破壊の折、英霊の魂からも解放された彼女は今やすつかり元氣を取り戻していた。

杯を得ると言う大望に敗れた彼女には、もはやアインツベルンにおける居場所はない。キリエ自身も冬の城に戻ることに執着してはいない。ということ、碓氷邸にて彼女は暮らすこととなった。キリエの耐用年数は本人いわく残り三年だという。

さらなる延命を望むなら、それこそアインツベルン城に戻るべきなのだが、キリエはそれを選ばなかった。「長く生きればいいってものじゃないわ」と。

「ここにはアキラとカズナリがいるもの。それで十分楽しいわ」

「キリエが居れば魔術の手伝いしてもらえるだろうし。多分、お父様もだめだとは言わない」

「……そうか」

一成はほっと胸を撫で下ろした。最悪、キリエを自分のワンルームマンションに連れて行くか実家に連れて行くかを検討していたが、碓氷明がそう言ってくれるなら越したことはない。

今後の話。未来の話。本当に戦いは終わったのだという実感がわいてくる。

「……俺もちゃんと高校にいかねーとな。つーか聖杯戦争あつたからとはいえサボりすぎてて絶対授業わかんねエ……」

「元からあんまりわかってないんじゃないの」

「よくわかつたな！……ってバカにしすぎだろ!!てか小さな声でバカズナリとかいうんじゃないか!!」

「無駄に耳いいなあ。というかそりやあなた高校は行くと思うけど、魔術的にはどうするの」

明は彼の突っ込みをスルーして、真面目なことを尋ねた。淡々としている彼女にツツコミを入れ続ける不毛さを知っている一成は、早々と訂正を諦めた。

「……うーん、御爺様は土御門の跡継ぎについては他から養子取るって言ってるから俺が魔術する必要はねーんだけど」

両親は、一成が一般人として生活することを望んでいる。ここで一成が一般人になると言っても止める人間はいない。一成は根源を追い求め続ける熱意にはついていけないが、これまで学び続けてきた魔術に未練がないといえば嘘になる。

しかし問題は魔導を学び一成が何を成すかである。

「……私は多分、近々時計塔に行くことになる。色々冬木聖杯のことも調べようと思うけど——帰ってきたらあの地下空洞を再調査する。手伝って」

「おう」

「そのためには眼を本当にコントロールできるようにしてもらえると助かるんだけど。一成、実家に眼のことって言っていないよね」

一成は沈黙した。当然眼のことを伝えていないのだが、もしこれが発覚したら実家ではややこしいことになる。彼はもう土御門家を継がないことになっているのだが、およそ五百年ぶりの千里天眼通保持者であることが発覚したため一気に覆される可能性がある。祖父・嘉昭は狂ったように喜ぶに違いない。

「まずい。どうにか隠し切れないか?」

「聖杯戦争が終わって魔力をもらえなくなったあなたはもう眼を使えないわ。だから今のところそのままです十分だと思うけれど。私とパスをつなぎ直せば別だけど」

一成はにやり、と笑うキリエから敢えて目をそらした。今後、それぞれにやるべきことがある。真っ先に立ち上がったのは、悟だった。

彼は動けない一成の手を毛布から出して強く握り、それから明やキリエにも手を差し出した。

「……それじゃあ、僕は行きます。碓氷さん、土御門君、キリエさん、ほんとうにありがとうございます」

「アキラとカズナリはともかく、私はあなたを殺そうとしたのに。そのお人よしき、気をつけなさい」

少し居心地悪げに返すキリエに、悟はにつこりとほほ笑む。

「こちらこそありがとうございます。仕事決まったら教えてください」

「はい。アサシンは会ってたんですけど、みんなにも娘や妻を紹介したいです」

それぞれと固く握手を交わし、悟は部屋を後にする。そしてまた一人、非日常から日常へと戻っていく。

明は嬉しそうにしていたが、扉が閉じられたことを確認してから、真面目な顔で一成に向き直った。

「——一成、神父は死んだ？」

「……ああ、死んだよ。泥に吞まれて、骨も残さず」

心臓を貫く感触。倒れて動かなくなった体——その光景は、今も睨に焼き付いている。倒さねばならぬ敵でも、己が殺した人物の最後。

「そう」

明はそれだけ確認すると、深く追求しなかった。たとえ必要であっても人を殺したという業を背負い、明も一成も先を生きる。必要な話は終わった。

一成はちらりと目だけで明を窺ったが、彼女の姿に悲しみの影はない。人と深いつながりを得ることが喜びである反面、離別の苦しみをいや増す。悲しまないよりも、いつそ派手に悲しんでいるほうがいい。

一成が眠っている間に済ませたのか知らないが——彼女にセイバーが消えたという悲しみは、なさそうに見えた。

「碓氷、セイバーが消えたこと、悲しくないのか」

「悲しいよ。なんか思い出すと泣きそう。だけど、それよりもあるべ



き場所にもどったっていう気がする」

一度出会えたことが奇跡と。その奇跡を喜べど、悲しみ続けることではない。

「……ほら、デパートで迷子を視つけて、一緒にお母さん探して見つけられたみたいな」

そのたとえはどうだろう。一成からすれば、迷子同士が手を取り合って何とか進んでいったように思えるのだが、突っ込むのはよしておいた。

しかし、思えば自分もアーチャーが消えたこともアサシンが消えたことを悲しいとは思ったが、引きずりはしなかった。悟も、キリエも悲しみつづけることはなかった。

——サーヴァントと駆けた日々は、ひと時の夢。

まさに、嵐の半月だった。一日が一週間分あるような濃密さで過ぎて行った日々は、忘れようと思っても忘れられないだろう。

夢のような現実は、忘れがたい思いと傷と決意を残した。

「キリエとか一成はまたアーチャーとかアサシンとかキャスターに会いたいって思うの？」

「私？ そうねえ、逢えたら、って感じかしら」

「……俺もそんなんだな。あ、でもアーチャーは一発ぶん殴るくらいのことしねーとって謎の義務感がある……けど、勘弁してやる」

サーヴァントたちとは、二度と出会うことはない。出会うような現実を起こしてはいけない。でも、今を生きるマスターたちに築かれた出会いは本物で、生まれたつながりは、繋ごうと思えばまだ何度でもつなぐことができるものだ。

窓から外を見れば、清澄に澄み渡った蒼い空。さぞかし吹き付ける風が寒いであろうと

想われる冬の日。

まだ十二月中旬で、寒さの本番はこれからだ。

——運命とは何か。本当にあるのか。

一成に答は出せない。

たとえあろうとなかろうと、自分の目的は自分で決めてそれに向かって進むだけ。

「生きることは戦い」だと告げたサーヴァントの言葉が蘇る。とすれば、一成の戦いも、明の戦いも、キリエの戦いもまだ始まったばかりだ。

どう生きてても、絶対に悔いは残る。悔いは残っても、最後には自分の生を認められるように生きていきたい。

冬が来る。寒さは増して深い傷跡に震える街にも、やがて春は来る。

空気は涼やかながら温もっている。緑は茂り始め、桜の木はその花を散らし、甘やかで暖かい春の匂いで満たしている。

日の光を受けて目にも優しい影を織りなす中を、男は一心不乱に駆け抜ける。

「——ッ、は、——なめる——」

おとひこのきみ 弟彦公は、茂み深き森を駆けていた。もう少し整備された道があるのだが、多少歩きにくくともこちらの方が近道であった。

森を抜け、道に出る。向かう先を見ると、地面には妙な跡が残っていた。

屈んで見てみると、それは大量の血の跡だった。何かに引きずられるように後を引いたそれは、まだ残っているだけ新しい。

弟彦公が探している主人は、間違いなくここを通っている。

一人で剣も持たず伴も連れず、皇子が伊吹山に向かってから一週間が経っていた。皇子の足ならもう帰ってきてもいい頃合いだが、何の音さたもない。

胸騒ぎを覚えた弟彦公を始め東征の仲間たちは、皇子がどこにいるのかと探しつづけていた。

もしや、さつさと伊吹山の神を倒してしまったから大和へ向かっているのではないかと——都合のいい希望を想いながら、弟彦公は伊勢へと辿ってきた末に今に至る。

——随分長く尾張にいますが、殿下は大和にお帰りになりたくはないのですか？

——いや、帰るさ。

「連れて行くのならば、弓を得手とするものがいい」と言われ、皇子がまだ成長期さえ迎えていなかった時分、弟彦公はその腕を買われて皇

子のクマソ討伐へ随行した。

それから今に至るまで、弟彦公はずっと皇子の傍に在り腕を振るってきた。

自分と同じか、もしくは年下だった皇子の強さは常軌を逸していた。それこそ神威を背負っているような、相手が立ち向かう気力さえ削いでいく何かを持っていたのだ。

その力故に皇子は、帝に厭われて東征へ行かされたのだと弟彦公は知っている。

それでも皇子は淡々と、そして確実にまつろわぬ者達を討伐していった。誰が相手でも関係なく、神剣を持つ彼は負けなかった。

焼津にて吐き気がするほど人を燃やし斬り捨てても、皇子はいつものままだった。

恐怖も高揚もなく、息をするように簡単に敵を殺すのだ。

普段はどこか抜けたところのある皇子だが、弟彦公は、その姿を恐れたこともある。

いや、弟彦公だけでなく皇子に従う者で、その感情を抱かないものはいなかったのではないだろうか。何しろ、双子の兄さえ簡単に殺して平然としているのだ。

皇子と弟彦公の付き合いは長い。もし少しでも「実はこう思っている」と話してくれば、もう少し皇子の事がわかっただろうと、弟彦公は思う。

皇子は、いつも多くを語らない。派手に嘆く姿を見たこともなければ、派手に喜ぶ姿も見ることがない。烈しく泣いたり怒ったりすることもない。

いつも物静かで冷静沈着だが、戦う時には冷酷に見えるほどに殺していく。

——殿下は、本当に人ではないかのようだ。

けれど、四阿嶺にて東国を平定した時に、皇子は一度東国の方を振り返って、海に身を投げた妻のことを、本当に密やかに呟いた。それを、弟彦公は偶然聞届けた。

ゆえに、弟彦公は思う。あまり感情を表すことのなかった皇子は、敢えてそうしていた部分があるのではないかと。死刑宣告にも等しい絶望的な旅で、頭である皇子までも悲壮な顔をしていては軍があつという間に瓦解する。

まとめあげるには、皇子が誰よりも何よりも強くあるしかなかったのではないかと。

「ミコトがおられる限り、絶対に負けることはない」という言葉を人の口から弟彦公は何度も聞いた。

「真実、皇子は最強だった。」

辿る血の跡がだんだんと新しくなっている。この出血でどうして歩けるのかが不思議に思われるくらいだ。弟彦公は嫌な想像を振り払い、桜の散る中を走る。

そうして弟彦公はついに見つけた。血の跡は足跡どころか這っていたかのようにべつたりと続いている先にある、一本の桜の木。

その幹に寄りかかって座っている男は、弟彦公の探し続けた皇子——日本武尊、その人だった。

「……殿下！」

足は曲がってはいけない方向に曲がり、履物はぐつしよりと赤黒に濡れている。弟彦公が駆け寄ったのに気付いたのか、皇子は億劫そうにその顔を上げた。

「……なんだ、お前か」

「何だ、ではありません!!殿下、何故……」

神剣を持って行かなかつたのか、一人で行ったのか、皆で大和に帰る筈、と言いたいことが弟彦公の頭の中で空回りして逆に言葉に詰まってしまう。

何度も唾を飲み、弟彦公はやつこのことで言葉をひねり出した。

「はい、いや、何故あなたは一人で、しかも、剣を持たずに行ったのですか!!皆で故郷の大和に帰るはずだったでしょう!」

「……お前の故郷は大和ではなく、美濃だったと思うが……」

「ああもう、そんなことはいいいんですよ！何で剣を置いて、神を相手にいかれたのですか!!」

弟彦公は主人の隣に座る。弟彦公を見ている皇子の目は、弟彦公を見ていながら見ていない。既に視点が定かではなく、目に映るモノがない。

そして肌の色がまるで蟬のようで、生きている人間には到底見えなかった。死の淵に立ちながら、皇子は言葉を紡ぐ。

「……そうだな、——もう、生きるのが嫌になった。山の神が、俺を殺すなら殺せばいいと、」

烈しい咳で言葉は切れた。

弟彦公は頭を鈍器で殴られたような衝撃と共に、更に言葉を重ねる。

「——ッ、何故ですか」

「……もう、大和は俺の望んだ大和ではない。帰っても、また」

戦うだけだと、声にはなっていなかったが弟彦公にはわかった。残酷にも時は過ぎる。皇子が幸福な時を過ごした大和は、もうどこにもない。

「だが、それでも……、あそこは、俺が、愚かでも幸福であった、場所だ」

弟彦公は、自分でも知らぬ間に泣いていた。皇子には見えていないから、せめて気づかれぬように声は殺した。

皇子は強かったかもしれないけれど、戦いを求めていたのではない。

きっと、誰も皇子の本心を知らない。

当の本人でさえ、死に瀕するまでわからなかったのだから、余人が知りようがない。

「——お前が来る前、少し夢をみた」

今にも活動を辞めてしまいそうな体に反し、皇子は、穏やかな顔をして呟いた。

「夢？……神のお告げですか？」

「……そんな陳腐なもの、ではない。そうだな……」

見えてはいないだろうに、皇子は空を見上げた。つられて弟彦公も見上げると、青い空にぼつんと白いものが飛んでいた。鳥だ、と思うと、それはこちらに近づいてくる。

僅かの曇りもない純白の鳥は、血だらけの皇子の足に留まった。

「……酷く温かい……、俺は、未来をあげられたの、か」

そう呟く皇子の顔が、灯消えようとする人間の顔とは思えないほど穏やかで、弟彦公はつい口を挟んだ。

「……夢でなくとも、殿下の剣は道を切り開きました。この国、大和の、そして、共に旅した私たちの未来を、与えました」

「——そうか」

「それは、殿下の真なる願いではなかったかもしれませんが。でも、それでも、貴方の剣は大和の未来を繋げたのです」

皇子が愛した人が暮らし、皇子の愛した人が愛する国。

その人々に生きている間に認められることはなかったが、彼の功績自体は誰もが喜ぶ。それは、誇りに思っただけではない。

従者の真意を知ってか知らずか、皇子は遥かに蒼穹を見上げて、ゆっくりと目を閉じた。

「——長い旅だった、な」

それきり、彼が目を開くことはない。弟彦公の目の端に、白いものが映る。先ほど皇子の足に留まった鳥が、じつと弟彦公を見ているような気がした。

鳥は足先にて、何物にもとらわれることなきその翼を悠々と広げて再び大空に舞った。

その白鳥が、一度だけ弟彦公に振り返ったような気がした。

日差しを受けて輝く白は、皇子が持っていた剣の耀きに良く似て、

見る者の目を奪う。

「――殿下？」

抜けるような碧空を翔る白鳥は、そのまま主人の求めた故郷――大和へ向かつていく。

あれが主人の魂であればいいと――そうして共に故郷の地へ連れて行ってくれと、弟彦公は願った。

やまとは　くにのまほろば　たたなづく　あおがき  
やまごもれる　やまとしうるはし



EX: Fate/beyond material:  
Fate/beyond material:  
サーヴァント三騎士編

【セイバー】

真名……日本武尊やまとたけるのみこと

性別……男性 身長……160cm/53kg

属性……秩序・悪・天 血液型……A型

イメージカラー……青・黒

マスター……碓氷明うすいあきら

筋力 A 耐久 C (D) 敏捷 A 魔力 B+ 幸運 B 宝

具 A+

聖杯にかける願い…… 聖杯戦争に勝利すること

【クラス別スキル】

対魔力……A (C)

A以下の魔術はすべてキャンセル。

事実上、現代の魔術師ではセイバーに傷をつけられない。

騎乗 ……―

飛行スキルの代償として、騎乗スキルは失われている。

【保有スキル】

神性…… B (D)

神霊適性を持つかどうか。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。天照大神の直系とされる。(セイバーそのものの神性はBだが、本人が自覚なし十神嫌いのためランクはD。しかし神剣の加護によりB)

偽装…… C

偽装による認識操作。

ただし己、またはマスターを偽装・隠ぺいする場合にのみ有効。

直感…… A (C)

戦闘時に常に自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。

研ぎ澄まされた第六感はもはや未来予知に近い。視覚・聴覚に干渉する妨害を半減させる。

飛行…… C

死後、その魂が白鳥となったことに由来するスキル。自由に空を跳ぶことができる（ある程度の助走が必要）。宝具を十全に使う場合は、地面に足をつかなければならない。

魔力放出… A

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。

【Weapon】

『草薙剣／天叢雲剣』

二銘で一振、一振で二銘の剣。草薙剣の形態は白銀の諸刃の剣で、火打石と一体化しているため火属性を持つ。通常時は天叢雲剣が鞘、戦闘時は草薙剣の焰により気化して蒸気となり剣全体を覆っている。『幻想返し』の特性を持ったため、この剣を振り回したり打ち合ったりした個所の魔力を無効化・はぎ取る。（四次ランサーのゲイジャルグに近い）

天叢雲剣の形態は草薙よりも長い諸刃の剣であり蛇行剣。鋼は黒く水の縁取りがなされている。セイバー以外で剣を所持している者が負った傷をいやす。心臓ぶち抜かれても平気。しかし傷を負ったあとに持たせても回復はせず、悪化を留める効力に止まる。

セイバーが持つ場合は、剣を持っていなかった時に負った傷も、剣を持って回復することができる。

天叢雲剣自体は、生み出した葦原国に蔓延る悪神どもを排除するために火廣金ヒヒロカネを原料として高天原が生み出した神造兵装（対国宝具）。八岐大蛇の中から出てきたのも、敢えて葦原国に落して地の伝説・幻想種のデータを収集するために大蛇に取り込ませ、後に大蛇の身体から抽出するつもりだった（素戔嗚が抽出することになったが）。天叢雲剣のプロトタイプが十拳剣。

【宝具】

「我が身を焼く、焰などなし」

『くさなぎのつるぎ全て翻し焰の剣』

ランク……B+

レンジ……1～99 最大補足 1～100人

種別……対軍宝具

相模国にて国造の火計を迎え火により跳ね返したことによる、幻想返しの剣。通常自から攻撃をしかけ真名を解放すると、白い浄化の炎で相手を焼き尽くす。しかし最大の力を発揮するのは、相手の最大出力の宝具を真正面からうけ止める時。その場合は相手の宝具使用魔力+セイバー自身の炎を纏わせて相手に跳ね返す。返すタイミングはぎりぎりであればあるほど効果は高い。(チキンレース宝具……いやなんでもない)

また、跳ね返す敵の宝具は一撃がわかりやすいほうが効果は高い(ベストは青セイバーの「エクスカリバー」みたいなもの。固有結界とかは微妙)。あまりに敵宝具のランクが上すぎるとうまくいかない場合あり。令呪などの補助が必要。セイバー曰く「綺麗に決まると爽快感ヤバイ」

「八雲立つ出雲八重垣、其は暴風の神よ」

『あまのむらぐも全て呑込みし氾濫の神剣』

ランク……A++

種別……対城宝具

レンジ……1～99 最大補足 1000～人

草薙剣が名を変える前の姿。草薙剣の性質は炎であるがこちらは水。通常時は草薙剣の炎で霧状になって草薙剣を覆い、真名秘匿の役に立っている。天叢雲剣そのものはヤマトタケルの持ち物ではない。川の氾濫の化身である八岐大蛇の尾から造られた「天候を御し豊穰と破滅をもたらす剣」。それは人の意思の介在しない、神の神による神のための神造兵装であり素戔嗚尊の持ち物である。

セイバー曰く「これは借り物」で、神霊ではない彼にはこの神剣を完全に使いこなすことができず、神剣を発動させるのみである(ス

イツチのオンオフはできるが、強弱の調節ができない。暴風・台風の神素戔嗚の力と氾濫する川の水神でもある八岐大蛇の力を、与えられた神命で束ねて放ち朝敵を討つ光の刃（とかいてビームと読む）。力そのものは神剣に全て込められており、それを制御し光に変換するのは使用者の魔力と神性頼みである。

前述のようにセイバーは神霊ではない為、完全に使いこなすことができていない。

ゆえに、束ね漏れた素戔嗚と八岐大蛇の力がそのままの姿——まさしく氾濫する河川と嵐、洪水となりレンジ内を破壊し尽くす。セイバーそのものの属性が炎であるため、噴出する膨大な水は全て熱湯となっている。

「暴風の韃、氾濫を御する神々の剣——八雲に仇なすもの、天照大神の名に於いて滅すべし（BY素戔嗚）」

『八雲封印・光裁神剣』

ランク……EX

種別……対国宝具

レンジ……1〜99 最大補足 100000人

何らかの方法でセイバーの神格を素戔嗚と同レベルに引き上げること、荒ぶる水神の力を完全に敵を討つ光に変換することができる。元々天叢雲剣の担い手は素戔嗚だが、彼は一度天照に剣を献上しているため、その際に太陽神の加護をも得て熱線ビーム宝具と化している（見た目は青いビーム）。天照素戔嗚のデュオ宝具

その鳴き声は国中の山を枯らし、海や川をことごとく干上がらせた素戔嗚の膨大なエネルギーを反映して最大威力は『全て呑込みし氾濫の神剣』の1000倍。只本来は神霊のもの、つまりは神代使用を想定しての武装のため、現代における展開ではたとえ素戔嗚であっても部分展開に留まってしまう。

天叢雲剣……四尺半くらい（130CMくらい）。デカイ。セイバーの身長……160CM

草薙剣……三尺ないくらい（80CMくらい）。エクスカリバー

より若干短い。

『この道<sup>わ</sup>繋<sup>つ</sup>げし我<sup>ま</sup>が妻<sup>は</sup>よ<sup>や</sup>』

ランク……A+

種別……結界宝具

レンジ……― 最大補足 1〜???

日本武尊の道を切り開くため、その身を海に投げた弟橘媛の伝説が結晶化したもの。形状はもちろん櫛。宝具はセイバーを如何なる障害・万難からも守護する、四種各八枚計二十四枚の障壁。「神から日本武尊を救う」という伝説ゆえに神性に対して特防を示すが、伝説ゆえに「日本武尊」を護るためにしか機能しない。なお使い方としては障壁として行使するほかに、櫛を破壊することで秘められていた膨大な魔力を行使することも可能（魔力量はセイバーの霊核が完全破壊されても全快まで回復させられる程度の量）。基本的に無色の魔力だが、「日本武尊を救う」という指向性を持っているため、彼以外が櫛を壊しても使用することができない。しかし宝具は「壊れた幻想」であるため、一度破壊してしまうと修復には長い時間がかかってしまう。

#### 【戦法】

セイバーのくせに思想はアサシン寄りで、マスター殺し推奨をしている。

防戦・撤退戦には不得手な方。まつろわぬ国々・悪神からすれば日本武尊の所業はまぎれもなく征服者のそれであり、基本的に生前は自分から攻めてかかる戦いがほとんどだったため。戦術はあるが戦略はない。生前からしても「死ねばいいのに」という無茶振りを腕力で片づけてきたタイプだから、彼に全任せにするのはわりと危うい。

アルトリアを前のめりに殺意を上げた代わりに防御力を失ったセイバーな感じ。搦め手が好きな割に、敵の搦め手にはやや脆弱かも。

#### 【外見】

（一言で言えば） 男の娘

少年とも少女ともつかない中性的な美貌の持ち主。無愛想。女装にためらいなし。

召喚時の姿は衣袴に旅装のマント。必要に応じて魔力で鎧を編み上げる。

肉体的最盛期は二十五歳前後だそうだが、何故か成長期を迎える前の姿で現界している。日本武尊自体の戦闘力は人間の体の成長には影響されないため、本来肉体的最盛期はあつてないようなものである。ただし戦闘経験は歳を重ねただけ増えるので、セイバーの感覚としては成人してからが「戦闘的最盛期」。しかし彼の場合成長Ⅱウツになっていく過程でもある。精神的に一番健やかだったのは征西帰路のため、その時期を優先して反映し少年の姿で現界している。

【備考（性格・その他）】

真名……日本武尊。

出典……『古事記』『日本書紀』

時代区分……人代（神話時代）

日本書紀では「日本武尊」、古事記では「倭建命」。またの名を日本童男・倭男具那命（ヤマトオグナ）。景行天皇の第二子で、母は播磨稲日大郎姫（はりまのいなびのおおいらつめ）。幼名を小碓命（オウスノミコト）。

幼少から武芸に秀で、父天皇の命を受けて西の熊襲健、出雲健を討ち、その後僅かな手勢と共に東国十二国の荒ぶる神々とまつろわぬ者どもを討ち東国の平定を成し遂げる。しかしその帰路において伊吹山の神を討つ際に、剣を持たずに向かった為に呪いを受け大和への道半ばで没する。享年三十歳。

日本書紀と古事記で大幅にキャラ変しているが、当SSでは古事記90%。日本書紀ヤマタケは「ありえたIF」のヴァージョン。

基本的に真面目、愚直。仕事はキツチリこなす完璧主義の犬系サーヴァント。ただし赤玉的な子犬系ではなく、主人以外に吼えまくり主人にぶっ叩かれてしよげる番犬系。

生来のコミュ障（大体キヤス狐の大本のせい）。生前言葉によって神の怒りを買うことが多かったのは、偉ぶっていたのではなく「思ったことをストレートに言ってしまう質」だったせい。

聖杯自体への望みはないが、目的は「他陣営サーヴァントの皆殺し」

で、要するに勝つこと。実はまだ死んでおらず、死の直前に「日本最強を証明してから死ぬ」Ⅱ「日本が消滅するまでに成立する英霊全てに勝つ」という世界との契約で、日本の英霊が召喚されうる儀式には優先的に呼ばれる。故に聖杯戦争以外の儀式にも数度呼ばれている。

また、場所と時間は違うが聖杯戦争にも参加したことがあり、その時はアサシンだった時には勝者になったこともある。勝利者とはなったが、根源を求めたマスターは自殺。その時の記憶があるため、根源に至る為には「サーヴァントが皆殺しにされる」ことを最初から知っていた（聖杯の仕組みを知るわけではないため、確信ではなく「春日の聖杯でもその可能性はある」というレベル）。上記のように確信はなかったためにそのことについてギリギリまで言及することはなかったが、殺されるにしても自分以外のサーヴァントが消えた後になるのでセイバーの願いにも障りはないため、マスターに自害させられても構わないと思っていた。

「最強を証明する」——その願いの根本は「自分に「最強」を望んだ者たちの為に、自分はこの国で最強であると立証した後に死ぬⅡ大事な人の願いを叶えたい」こと。

とにかくその願いの元戦っていたが、「結局生前の仲間が本当に最強を望んでいたかはわからない」ことを悟り、たとえ生前の願いが叶えられなかったとしても、自分の生を受け入れることを決めてマスターと己を救うために剣を取り、聖杯戦争の勝者となり本当の死を迎えた。

小碓命は、「天津神の神威が薄れぬうちに、神々がまだ影響を及ぼせるうちに、この秋津島の他の神々を駆逐して国を安定させてしまいたい。なら今のうちに、その役目を果たせる者を誕生させるべきだ」と神武東征の後を継ぐべく、強制的に先祖帰りさせられ戦闘能力のみに特化された、メイドバイ天津神々のデザインベイビーである。先代東征・神武天皇において神々は「知識を与えすぎた」と反省した為、日本武尊には自分が人ではないモノであることを知らせず、生まれながらの神命も教えずに葦原国へと生まれさせた。日本武尊改造時のモデルは素戔嗚尊（先代神武天皇のモデルは忠実な建御雷だったが、そ

れの転生体をしてあの体たらくだったため、「じゃあいつそ素戔嗚」と開き直った天照たちの発想による)

もとより神の力は人代においてあまりにも異質過ぎ、人々におそれられることは目に見えていたから、小碓命は何の憂いもなく(というよりそれしかすることがなく)悪き神々を駆逐するだろうと目論んでのことだった。つまり最初から日本武尊は「叛逆の芽と悪神共を刈り取る」最強の剣としてこの世に送り出されたのである。

本来の神性は高い(B相当)ため、見方が大局的かつ俯瞰的になりがちであると同時に剣(道具)——一つの目的の為に存在する——ため、視野が狭く特定のことにとだわりがち。ゆえに「街ひとつ消し飛んでも、この国が亡ぶわけでない」と言いながら碓氷明の些細なことを気にするのである。

セイバーの神性が低いのは自分の「神の血」への意識の薄さと、勝手に体をいじくった天津神々への無意識下の反発と妻をぶんどっていった海神への嫌悪、つまりは神嫌いの為である。

セイバーは東征の過程であまり表情を出さないように心がけるようになったが(最強たるもの慌てたり泣いたりすべきではないという考えの元だが、これが周囲とのコミュニケーション不足に拍車をかけた)、素の性格は神話の素戔嗚に近い。

余談ではあるが、仮にセイバーが世界との契約を続行して目的を達成することは可能。しかしその場合、ほぼ確実に精神崩壊を起こして本当に戦闘機械に成り果てる。「日本が滅亡するまでに成立する全ての英霊に勝つ」ということは、「英霊となった彼の生前の父親や叔母、果ては妻を殺す」ことをも意味する。大事な人たちの願いを叶えたかったのに、その大事な人たちを殺さなければ願いを叶えられないというジレンマの果てに殺害を選んでしまったら、もうあとは転がり落ちるだけである(愉悦)。

あと死ぬ直前の姿ではなく少年の姿で現れているのは、霊体化できない以外は聖杯によって他のサーヴァントに準じさせられている春日聖杯の仕様のため。本来戦闘力を「修行や鍛錬」によるものよりも「生まれ以ての機能」としてもつ日本武尊は、「最盛期」という基準は



意味を持たない。

召喚の触媒は熱田神宮の草薙剣。ちなみに他の陣営が草薙剣を使わない限り、明は触媒なしでも日本武尊を呼んだ。

【他適正クラス】

もしかしたら全クラスいけるのではないだろうか。暗殺するし父から槍もらってたりニンク投げたりもするし。しかし最適はセイバー。

\*

【アーチャー】

真名……藤原道長ふじわらのみちなが

性別……男性 身長……175cm / 65kg

属性……秩序・中庸・人

イメージカラー……紫

マスター……土御門一成つちみかどかずなり

筋力 C 耐久 D 敏捷 C 魔力 B 幸運 A+ 宝具 A+

聖杯にかける願い ……真の幸福とは何かを問う

【クラス別スキル】

対魔力……C

魔術詠唱が二節以下のものを無効化する。

大魔術・儀礼呪法など、大掛かりな魔術は防げない。

単独行動……C

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。

ランクCならば、マスターを失ってから一日間現界可能。

【保有スキル】

黄金律……B

人生において金銭がどれだけついてまわるかの宿命。

大富豪でもやっていける金ピカぶりだが、出費も多い。

飲水の病…D

生前からの呪い。糖尿病。他サーヴァントと比較して傷が治りにくい。

また視力への影響があり、索敵能力がダウンしている（逆に視覚から影響を及ぼす魔術に対する抵抗力は上がっている）。

言上げの弓A

アーチャーの放つ弓に幸運補正をかける。

敵とアーチャーの幸運値に開きがあればあるほど、弓は必殺となる。

### 【宝具】

「我は皇統を助けし者 我は皇統を保護し者 我は皇統を長らえし者」

『尊つきぼきりのみつるぎぎ』

ランク……A

レンジ……2～3 最大補足……1人

種別……対神宝具

真明解放を条件に、対魔力を貫通し神性を持つサーヴァントの肉体を拘束し操ることができ（強さは令呪一個分前後）。神性の中でも、特に天照直系の神性を持つ者に強く作用する。神性が高ければ高いほど拘束力も上がるが、消費魔力も倍増する。

ただしアーチャーはあくまで臣下として天皇に仕えており、かつ神殺を成したものではない為、命令で拘束対象自身を傷つけさせることはできない（EX・自害を命じられない）。

また拘束だけでなく、対象の強化も可能（天皇と貴族に調和が取れば、政治がうまく回ることの具現）。要するに對神専用令呪。

由来は己が孫を東宮位にするが為、東宮となった敦明親王に対し東宮の証である『壺切御剣』を渡さなかつたこと（後に敦明親王は自ら

東宮位を降りている)。

というかこの宝具、あんなに最後まで出張ってくるとは……。

「この世をば わが世とぞ思う 望月の 欠けたることも なしと思へば」

『約束された栄華の月』

ランク……A+

種別……????

レンジ……1～99 最大補足 300人

あまりにも有名な「この世をばく」の和歌を詠った、アーチャーの権力の絶頂期を心象風景として再現する、魔法に近い大禁呪である固有結界。展開されている間、風景は夜かつ満月で桜が舞う。アーチャーのパラメータは各1ランクアップ、かつ幸運値はEXとなる。

アーチャーの言上げは、莫大な幸運値により因果の逆転を引き起こして結果を先に得、現実となる。さらに必要とされる経過を省略する為、結果を引き起こすために必要な動作を不要とする。固有結界内において、アーチャーの言葉は発された時点で「真実」であることが確定する。別名「スーパード望月タイム」。発動時には「この世をばく」を詠唱としなければならぬ。が、アーチャー的にこの歌は「テンション上がりすぎてやらかした」歌のため、本人はあんまりこの宝具を使いたがらない。

かつ、「人生最高の時」は何度も起こっては「最高」ではなくなり「普通」に墮す。そのためこの宝具を開帳すればするほど、因果律へ及ぼす力は薄くなり、最後には宝具自体が使えなくなる。アーチャー曰く「二度の戦争において、精々三回が限度」。

初見が一番強く、かつ意識的に操れる未来視でもなければ予見不可、正統なキヤスター並の因果律干涉魔術でないと防御もできない完全なる初見殺し。

### 【戦法】

正体が正体故に、血や死を穢れとして忌み嫌っている。だからあまり戦いたがらないが、本人に強い願いがある為ちやんと戦ってくれ

る。自分の力は正確に把握しているので、まずは他の陣営と同盟を組みながら強い相手を撃破して行こうと計画している。ぶっちゃけ、同盟相手に戦わせようとしているフシがある。宝具は全然弓じゃなく剣と固有結界だけど、まあアーチャーだし。あとパラメータが少し残念なのはマスターのせいです。でも比較的高い方だと思われる。

#### 【外見】

(一言で言えば) 優雅なおツサン

優雅なおツサン。バツチリ衣冠束帯で召喚され、それで戦う。常に余裕を感じさせる振る舞いで、スーツを愛用する。中肉中背。イケメンかと言われたらそうでもない。

#### 【備考 (性格・その他)】

真名……藤原道長

出典……史実&『御堂関白記』『大鏡』『栄花物語』

時代区分……平安時代

平安時代中期の公卿。摂政(日記は『御堂関白記』という名前が一般だが、関白になったことはない)。父兼家の末っ子であったため、兄に隠れて目立たない存在だったが疫病の大流行で当時の太政官の大半が死去したことを切っ掛けに、政争を経て左大臣となった。当時の帝に娘を入内させ子をなし、天皇との姻戚関係がものをいう世界で「一家三后(一つの家から三人の皇后を出す)」という未曾有の繁栄を築き上げた、王朝政治の最高峰。聖徳太子の生まれ変わりだとか部下(??)に安倍晴明、源頼光とその四天王、紫式部など。むしろ部下の方がサーヴァントっぽいやつら。ちなFGOにでてきた頼光は道長家の家司(筆頭執事みたいなもの)である。まじか。

マスターがマスターなこともあって、人生の先達者的な雰囲気醸し出すことも多いが基本は狸親父。本来は結構癩癪持ちだったり人の好き嫌いが激しかったりするが、生前特に執政者であったときはそこそこ抑えていたらしい(引退後、というか出家後は解き放たれたのか結構横暴)。聖杯戦争に置いては自分の気持の赴くまま動く。

能天気に見えるが、細かいことに気が付く方でありかなり空気が読める（あえて外すときもある）。鷹揚に見えかつ気にしていないように振る舞うが、人に言われた悪口や批評などをちゃんと覚えていて生涯忘れないクチ。要するに、第一印象から受ける鷹揚な印象よりめんどくさい内面をしているが、半分くらい生前政治家だったゆえの癖。文学趣味持ちなので、現代の図書館や本屋は結構好き。源氏物語の続き読みたさに生前紫式部の部屋を荒らした前科がある。

マスターに忠誠を誓うかと言われるばそうでもなく、完全にマスターの人格・能力次第。本人曰く「私が英雄とは異なることを申す」というわけで、自分を英雄だとは思っていない。

ちなみに男がマスターの場合と女がマスターの場合で扱いに歴然とした差がある。

聖杯に掛けた願いは「本当の幸福とは何か」を問うこと。生前あまりにも「幸運」に恵まれてしまったがゆえに、幸福とは何かを見失ってしまったっていた。自分の人生を受け入れる為に、その答えを聖杯に求めたが過程でマスターである土御門一成を裏切る。しかし、再び合い見えた一成によって命を絶たれると同時に、彼から問いの答えを得る。

召喚の触媒は自筆日記『御堂関白記』。千年前の権力者かつ自筆ということで国宝になった。

【他適正クラス】

セイバー（壺切御剣が宝具にあることからワンチャン）

アーチャーなのは『大鏡』における逸話から。

\*

【ランサー】

真名……本多忠勝ほんただただかつ

性別……男性 身長……180cm / 70kg

属性……秩序・中庸・人

イメージカラー……渋茶

マスター……ハルカ・エーデルフェルト

筋力 B 耐久 A 敏捷 A 魔力 C 幸運 D 宝具 B

聖杯にかける願い …… 尋常なる戦いそのもの（聖杯には願いが  
ない）

### 【クラス別スキル】

対魔力……B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法を以ってしても傷つけるのは難しい。

### 【保有スキル】

無窮の武練 A

ひとつの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。

心技体の完全に近い合一により、いかなる地形・戦術状況下にあつても十全の戦闘能力を発揮できる。

心眼（真） ……B

修行・鍛錬によって培った洞察力。 窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す。 戦闘論理

“ 無傷の誉れ…A

生前戦場で一度も傷を負わなかった逸話から得たスキル。

無窮の武練・心眼と合わせり判定B以下の物理攻撃を無効化する。  
ただし一度大きなダメージを負うと、直すのに多くの魔力を要する。

### 【宝具】

「この槍、掠れば死ぬぞ」

『絶てぬもの無き蜻蛉切』

ランク……B

レンジ……2～3 最大補足……1人

種別……対人宝具

止まったトンボがそのまま切れて死んだという逸話を持つ槍。

宝具を発動し、攻撃を行い相手に僅かでも（服を掠めるだけ・髪の毛の一本を切ったなどでも）当たった場合、『急所を貫いた』という結果に書き換える一撃必殺の槍。心臓ではなく『急所』のため、確実に霊核を破壊する。

この宝具から逃れるためには因果を書き換えるほどの幸運持ちであるか、または直感をも含めた完全回避を行うしかない。

ちなみに通常攻撃時にはランサーの意のままに自由自在に伸びたり縮んだりする（1メートル〜6メートル）。生前、自分の体の変化によって長さを変えていた逸話から。

『黒糸威胴丸具足』  
くろいとおどしどうまるぐそく

ランク……D

レンジ……1 最大補足……1人

種別……対人宝具

ライダーが生前身に着けていた漆黒の具足。重々しい見た目とは裏腹に軽量にできている。兜の鹿角が印象的でそれだけで真名がわかかってしまう。ちなみに常時展開型宝具なので、真名解放は必要ない。マスターの魔力を余分に消費することにより、スキル「無傷の誉れ」を強化する。スキルだけではBランクまでの物理攻撃の無効化だが、この鎧を身に着け魔力を得ることでAランクまでの攻撃を無効にできる。セイバーの魔力放出が魔力消費によって攻撃力を上げるスキルならば、こちらは魔力消費で耐久を引き上げる限定礼装である。

【戦法】

現界時の願いゆえに、十全の力を発揮するのは小細工なしの一对一。しかしスキル・生前の逸話的には全サーヴァント中最も潰しが効く。撤退戦・他サーヴァントとの共闘・ガンガン敵を責めるもなんでもござれで、ランサーらしく堅実な戦いが得意。ちよつと宝具が地味だが、反撃は不可能なので強いと思う。

しかし面倒なことに本人は全力VS全力を所望するから、宝具のぶ

つかり合いを望んでいる。俊敏値が高いので、速攻で敵を片付けるのがいい。あと真名を名乗りたがる。三河武士めんどくさい（関係ない）

### 【外見】

（一言で言えば）ガチムチおっさん

筋肉隆々の三十代おっさん。普通に歩いてても「レスリングの選手？」とか「自衛隊の人」とか思われる外見。サーヴァント補正で別にちよんまげじゃない(?)。有名な兜と鎧は勿論持っているが、ここぞと言うときにしか身に着けない。通常時は鎖帷子で動きやすさ重視の格好。

### 【備考（性格・その他）】

真名……本多忠勝

出典……史実

時代区分……戦国時代〜江戸初期

戦国時代から江戸初期にかけての武将であり大名。徳川四天王・徳川十六神将・徳川三傑に数えられ、紛れもない神君徳川家康の功臣。幼いころから家康に仕え、初陣のときに叔父から「この首をとって戦功にしろ」と言われたが「自分だけの力で武功をとってやる」と本当に敵の首を取り、姉川の戦いでは一方に対し一騎駆けをするなど、武功の話に暇がない。名前の「忠勝」は「ただ勝つのみ」からで、家康からもらった名前。

生前忠義を尽くしきつたので「今も昔も儂が仕える殿は生前の殿ただ一人」と言つてはばからない。マスターは彼にとって目的を同じにする仲間という感じだが、根はやっぱり義理堅いのでマスターが明らかに邪悪でなければ裏切ることはない。むしろ墓場までついていくてくれる。生涯五十以上の戦場を駆け抜けて無傷を誇った武勇が有名だが、武将としての采配も得意で、かつ関ヶ原後に桑名領主として名を馳せたこともあり領主としての才能もあった。セイバーが只管に個人戦闘力を上げて殴りまくるのに対して、もう少しあれやこれやと器用なのがランサー。ただそれだけ器用であったが故に、関ヶ原後



にもう「世の中に武者が必要とされていない」ことも理解しそのために武者であった己が家康に遠ざけられたことも承知していた。しかし根本では武者であるために煩悶は死ぬまで残り続けていた。故に願いは聖杯になく、「ただ強いものと戦いたい」。セイバーが最後に行ったように、彼は戦闘で死にたいと思っていたかは微妙だが、武者にとつては「戦場のなくなつた世界で生き続けるより、戦場の中で死ぬ」というのは幸福であることも間違いではない。

基本的に快活、裏表のない益荒男で一本気、真面目。セイバーに良く構っていたが、容赦がない事は共通するものの二人の戦闘に対するスタンスはかなり違う。敵に容赦はないが、「死ねばみな仏」と思うランサーは敵を尊重する念を持つ。全鯖で屈指の常識派ではあるがめんどくさい三河武士であり、忠義の在り方もセイバーとは異なる。主君だろうと自己主張は激しいので、たとえ家康相手でも「儂を倒してからにしてください!!」など陰悪になる事も辞さない。全く余談だが親ばか。召喚の触媒は蜻蛉切。

当聖杯戦争においては最初からマスターと不和(というほどではないか?)であり、全力での勝負を望みながらもサーヴァントよりもマスターたちの思惑に振り回されつづけてしまった。自害せよ、ランサー!

さらに余談だが真ハルカ・エーデルフェルトとの相性は良かった。

【他適正クラス】

ライダー(愛馬の黒鹿毛をつれて)

F a t e / b e y o n d m a t e r i a l II :  
サーヴァント四騎士編

【キャスター】

真名……酒吞童子しゅてんどうじ

性別……?? 身長……162cm 47kg 305CM /

257Kg

属性……混沌・悪・地

イメージカラー……暗い紅

マスター……キリエスフィール・フォン・アインツベルン

筋力 D+++ 耐久 D+++ 敏捷 D++ 魔力 A 幸

運 C+ 宝具 A+

（鬼の姿の時は宝具以外1ランクアップ。陣地内での戦い・宝具の使用如何により大幅補正がかかる）

聖杯にかける願い ……魑魅魍魎だけの理想郷を作る

【クラス別スキル】

陣地作成……A++

魔術師として自らに有利な陣地「工房」を作成可能。酒吞童子の場合「大江山」の如き拠点を築くことができる。

土地次第で完成した陣地が地脈から魔力を精製して得ることができる。また、前身が山の神でもあったため、山と同一となり異常を感じさせずに結界を構築できる。

道具作成……―

宝具による召喚能力を得た代償に、道具作成が失われている。

【保有スキル】

魔力…… D

魔力を帯びた美貌で異性を誘惑する。対魔力スキルで回避可能。ただし鬼の姿では効果が発揮されない。（キャスターは男でも女でも

ないため、両方に効果がある)

戦闘続行：A

名称通り戦闘を続行する為の能力。

決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能。

神性：… E—

神霊適性を持つかどうか。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。酒吞童子は八岐大蛇の子で前身は伊吹山の神でもあり、鬼神としての信仰もあるが、魔物として現界しているためここまで退化している。

動物会話：B 動物と意思疎通を図ることができる。

かつて伊吹山に捨てられた時に、獣に育てられたことによるスキル。

### 【宝具】

『神しんべんの方便鬼きどくしゆの毒酒』

ランク：…B

レンジ：…—— 最大補足 1人

種別：…対人宝具

酒吞童子討伐の際、八幡・熊野・住吉の三神が頼光四天王に授けられた神の造りし酒。鬼種には神経をしびれさせ行動不能にする毒薬だが、人間が飲めば超人的な力を与える妙薬。

宝具としては人間が飲めば並のサーヴァントレベルの筋力と耐久力を獲得し、一時的に自己回復力も向上させる。ただ、超人となる薬なのであまりに摂取しすぎると人としての自我を喪失する危険性がある。鬼種（酒吞童子）が摂取すると伝説通り、パラメータを二ランク下げる。仮にキヤスターがバーサーカーで召喚されていた場合、この宝具を飲んでいれば理性を取り戻し、魔力消費を抑えられる利点があるが、キヤスターと呼ばれている為酒吞童子本人には無用の長物の酒。

『大江山百鬼夜行』

おおよやまにようまよゆけ

ランク…… B～A＋

レンジ…… 1～100 最大補足 —— (陣地内)

種別…… 対軍宝具

妖魔を総べた鬼の首領としての宝具。鬼の状態に戻らないと宝具の使用ができない。

かつての部下である魑魅魍魎・怨霊・鬼の類を召喚し使役することができる。キャスターの魔力が持つ限り、眷属たちは殺されても何度でも蘇る。ただし、陣地外に眷属を出したり自分が出たりする場合、召喚した鬼たちは夜の間しか行動できず力もパラメータランクダウンする。また、一度解放すると夜の間は勝手にこの宝具を使用している状態になる(日の昇っている間は選択可能)。

陣地を山に設定する場合、キャスターは山を依代としてマスターが消失しても現界持続可能。当戦争ではキリエの力も借りて結界を張り、大西山自体を巨大な魔術回路となし魔力を生成している。

【戦法】

本来はバーサーカークラスだが、いろいろあってキャスターで召喚された。しかし割とキャスターらしく、陣地作成Aで陣地を作成しそこへ敵が来るのを待つパターンが一番強い。いかに良い霊地に陣地を作れるかがカギ。ついでに禁酒した方がいい。魔術師クラスのおに陣地作成以外は魔導の嗜みゼロなので(使えるのは飛行や呪いなど限られている)、マスター(魔術師)と手札が重複しないレアなタイプ。

【外見】

(一言で言えば) 妖艶な美女 ※ただし鬼になる前

二十代半ばの妖艶な美女の姿をとる。健康的な色気ではなく、退廃的な感じ。黒い巫女服を着て、袴の裾は擦り切れている。ちなみに美男子にもなれるらしいが、女の方が好きらしいからこちらの姿をとっているだけ。

鬼となると体長三メートル超えの赤鬼。赤銅の如き肌に、鋼鉄にも等しい四肢で変化前の面影ゼロ。

天地人属性が天ではなく地なのは、神霊の系譜よりもお伽草紙の側面が強いため。

【備考（性格・その他）】

真名……酒吞童子（伊吹童子）

出典……『御伽草紙』

時代区分……平安時代

丹波国の大江山に住んでいたと伝わる鬼の頭領。父親は八岐大蛇で幼少期は（とはいっても偉く長い間）伊吹山に住み伊吹童子と呼ばれていた。ひよんな心変わりから山を下りた後、鬼となり酒が好きだったことから、手下たちから酒吞童子で呼ばれるようになった。

数多くの鬼や魍魎を従わせ、平安京を襲い姫や若者を攫っては食っていた。しかし事態を重くみた朝廷により派遣された源頼光とその四天王により、騙されて討伐される。

基本何も考えていない。発言は思わせぶりだが、思わせぶりなだけで中身はない。生前

より嘘を嫌っているので、つかないしつけない。自分の欲望になに より正直で、好きなモノを好きだけ主義。人間を食べることが趣味だが、罪悪感はない（彼女に言わせれば、「人間だって豚や牛を食べるのに罪悪感なんてないでしょ？」）。何気に千を超える年数を生きており、一人の時間が長かったために寂しがり屋。わりとベタベタしたがる。自分の心と目的に関しては驚くほど純粹であり、疑いを抱かない。仲間意識は強く、彼女の願いは仲間意識の強さゆえにある。

人間との倫理の違いを除けば天真爛漫、無邪気な小悪魔。女性の姿をとってはいるが、本来は男でも女でも人間でもない。女の姿がかわいいからそれに化けているので、男にもなれる。その感覚で誰に対しても接するので、異性には気のある素振りに見えることも多い。

何も考えてないが反省はしているので、禁酒を試みたり人間断食をしたりしている（人

間を食わなければ死ぬわけではなく、デザート感覚らしい。

マスターは男女よりも人間か否かで判断する。裏切る気はないどころか、マスターを見て「おいしそう」とか言うので信頼関係どころの話ではない。キリエは純正な人間ではない為、マスター的にはあまりおいしそうに見えないらしい。

召喚の触媒はなし。人外のキリエ——白亜の城に一人きりで、神父という仲間だけを待ち

続けていた冬の娘と、仲間と愉しく暮らしたかった人外という類似性による召喚。二人とも倫理が一般とはズレてるし。

F G Oで酒吞童子が実装されたけど、当SSのキヤスターもゴールデンのことを全く恨んでいない（詐術を弄したことだけは根に持っているけど）。

生前ゴールデンにも大江山に来ない？と誘ったが、大江山の連中が都の人間を攫っていると知ってしまったゴールデンは、むしろやめさせようとするが酒吞童子はやめない。

キヤスターは「金時、あなたは人間の味方で私は鬼の味方。もしあなたたちが私の大江山（楽園）を壊そうというなら壊せばいいわ。やれるものならね——真正面から叩き潰してあげるから——」といったものように笑顔で言ったらしいので、結果としてその戦いに酒吞童子が敗れただけであり、彼女は自分の力不足や認識不足を悔いているが金時自体に恨みはない。

「——私に人間の価値なんかわかんないけど、金時は守りたいもの（人間）を護ろうとし

ただけじゃない？私が大江山という楽園にずっといたかったように」

寧ろ金時を恨んでいるのは茨木童子の方。

【他適正クラス】

バーサーカー（此方の方が本領）

\*

【アサシン】

真名……石川五右衛門いしかわごえもん

性別……男性 身長……180cm 80kg

属性……混沌・善・地 血液型……B型

イメージカラー……金

マスター……山内悟やまうちさとる

筋力 D 耐久 E 敏捷 A+ 魔力 E 幸運 C 宝具

A

聖杯にかける願い ……受肉↓現世漫遊したい（聖杯にはない）

【クラス別スキル】

気配遮断…A+

サーヴァントとしての気配を絶つ。完全に気配を絶てば、探知能力に優れたサーヴァントでも発見することは非常に難しい。ただし自らが攻撃態勢に移ると気配遮断のランクは大きく落ちる。十分は逃げる時のみ発動する。

【保有スキル】

反骨の相…C

一つの場所に留まらず、また、一つの主君を抱かぬ気性。

自らは王の器ではなく、また、自らの王を見つける事ができない流浪の星。同ランクまでの「カリスマ」スキルを無効化する。

無辜の怪物 B

生前の行いによる人々のイメージによって、後に過去の在り方を捻じ曲げられた怪物。能力・姿が変貌してしまう。アサシンの場合、生前は一介の盗賊であったにも関わらず、後世の創作により義賊・忍者の能力が付随する。

カリスマ…D

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、一軍のリーダーとしては破格の人望である。

【宝具】

『金欄襦袢』  
かぶきのいししょう

ランク……C

レンジ……2～3 最大補足 ——

種別……対人宝具？

江戸時代、歌舞伎で定番となった五右衛門の衣装。スキル「無辜の怪物」の産物。

袖の中が蔵のようになっており、何でも入れておくことができる。意思のある生き物でもサーヴァントでも人間でも入れられる。マスターをここにに入れておけば、暗殺される危険はなくなる。仮にマスターを入れたまま現界を保てなくなった場合、座に戻る直前に異物としてマスターは吐き出される。

某英雄王のそれとは違い「溜め込む蔵」の性格がない（「全ては天下の廻り物」というアサシンにとつて、溜め込むことが意味を持たない）ため、入れられたマスターが出たいと思えばすぐに宝具から出ることができる。

また、あまりに長い間保管しかつ使用していないといつの間にかその物品は消える。

多分ゲートオブゴエモンのことをするとガラクタが大量に出てくる。

『よにぬすつとのたねはつきまじ全ては天下の廻り物の』

ランク…… A++

レンジ……2～3 最大補足 1人

種別……対魔術宝具

天下の大盗賊・石川五右衛門の技術が宝具化したもの。同ランクま



での敵サーヴァントの宝具を盗むことができる。その宝具の使用法・持ち主の技量・伝説まで盗むので魔力と条件さえ整えば盗んだ宝具を使用することもできる。

但し盗めるのは『物体としての形があり』『持ち主がはっきりしている』ものに限る

(EX宝具・固有結界系の宝具は盗めない EX・アーチャーの『約束された栄華の月』、青セイバーの『アヴァロン』、A UU のエア)。

盗むためには以下の条件を満たす必要がある。

①真名を看破している。②その宝具の発動をアサシンが目撃している。③アサシンの宝

具開帳時、相手がアサシンの存在を認識していない。

ちなみに盗んだ宝具はアサシンの『金襴襜褕』に収納される。仮に宝具を盗まれた敵が宝具を奪還したとしても伝説はアサシンに盗まれたままの為、開帳は不可能。完全に取り戻すには、アサシンを殺すか交渉により所有権を返してもらうかの二択。宝具の本質は「強奪」ではなく「所有権の書換え」。天下ものは全て回りものとするアサシンは財をかき集めるつもりはない。ただ、盗める宝具の数に限度はない。

召喚の触媒は豊臣秀吉の香炉。五右衛門が秀吉を暗殺しようと思ひ込んだ時に、この香炉が音を鳴らして秀吉を起こし、暗殺は失敗した逸話がある。最初のマスターは五右衛門ではなく、秀吉を呼ぼうとしていた。

## 【戦法】

かなりテクニカルなサーヴァント。序盤はいかに敵陣営を偵察できるかがその後大きく影響する。宝具で何を盗むかもかなりキーポイント。セオリーはマスター殺しだけど、サポート役として抜群の性能を持つアレなサーヴァント。

パラメータが相当残念だけど、それはアサシンクラスのせいだけではなく(元々クラス合っていないんだけど)マスターの問題もあってだな……。純魔術師的でサーヴァントを使い魔扱いするマスターとは

決定的に反りがあわない。

逆に右も左もわからない、または未熟なマスターの方が関係はうまくいく。だがアサシン自体強くない為、完全に矛盾を抱えた面倒くさいサーヴァント。

### 【外見】

(一言で言えば) クソ派手なおっさん

三十代半ばの派手なおっさん。アサシンのくせに見た目的には隠れる気がまるでない。着流しの上に黒字に金糸の刺繍の襦袢を羽織り、その上に朱い網掛けを着ている。歌舞伎っぽく隈取までついているおまけつき。しかも、消せない。普段は黒い雨がっぱを着ている。天地人属性が人ではなく地なのは、生前の人格ではなく物語に語られた五右衛門であるため。

### 【備考 (性格・その他)】

真名……石川五右衛門

出典……史実&歌舞伎『楼門五三桐』浄瑠璃『石川五右衛門』

時代区分……戦国時代 (江戸時代)

戦国時代に京を荒らしまわった盗賊集団の頭。豊臣秀吉の手のものに捉えられ、一家もろとも釜茹での刑に処される。史実としての彼はこの程度の記述しかのこっていないが、江戸時代においてその凄まじい死に様が良い題材となったのか、歌舞伎や浄瑠璃で描かれ、伊賀の忍者であるとか金持ちばかりを狙う義賊であるとか、南禅寺の南大門に住んでいたなどのイメージが定着した。※当時の寺の門の上は人が住めるようなスペースがあった。

全サーヴァント中最も世渡りができる大人であり、かつて正義の味方になりたかった男。「石川五右衛門」本人であるが、純粋な本人ではなく彼の死後歌舞伎で演じられた義賊・石川五右衛門像に在り方が上書きされているため、自分にもどこまでが本物の記憶でどこからが歌舞伎の五右衛門か判断できない。(スキル「無辜の怪物」)

刹那主義かつ快樂主義。今が楽しければそれでよし。独立独歩で

自分勝手だが親分肌で頼ってくるものの期待には応えてやろうとする。(その点悟は最高であったわけだが……)

元々盗賊に身を落としたのも、戦国の世で食い詰めたためである。刹那主義も「いつ死ぬかわからないから後悔ないよーに楽しくいこう」という想いから生まれている。ゆえにどんなに見苦しくても生き足掻く者を軽蔑することは絶対にならない。自分が生きるために他者を殺めることを良しとしているため、自分の終わりが家族もろとももの釜茹でとなったことを後悔してはいない。生きるために盗賊を選んだ、その終わりが悲惨だっただけの話である。だがそのせいか、家族だんらんとかには弱い。

在り方に弱いものの肩を持ち権力者を嫌悪する心性が染みついているので、当SSのアーチャーや原作の王様系サーヴァントとは軒並み反りが合わない。

エミヤ・ロビンフッド・ドレイクあたり近しいかもしれない。

#### 【他適正クラス】

なし (アサシンも若干クラス違い)

\*

#### 【バーサーカー】

真名……平将門たいらのまさかど

性別……男性 身長……210cm 91kg

属性……混沌・狂・人

イメージカラー……黒

マスター……真凍咲しんとうさき

筋力 B 耐久 A+ 敏捷 B 魔力 B 幸運 C 宝具

A+

聖杯にかける願い …… (狂化状態の為不明)

【クラス別スキル】

狂化…… B

全パラメーターを1ランクアップさせるが、理性の大半を奪われる。

【保有スキル】

鉄人…… A+

その尋常ならざる強さゆえに、体が鉄でできていたという伝説により生まれたスキル。Bランク以下の物理攻撃を無効化する。

神性…… E-

現代でも多くの神社に祭られて信仰を得ている。しかし本戦において、むしろ怨霊として現界しているためにここまで退化している。

カリスマ…… E-

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。強化前はBランクだったが、狂化によりここまで退化している。

【宝具】

『将門七人衆』  
みょうけんのしちかじ

ランク…… B

レンジ…… —— 最大補足 1人

種別…… 対人宝具

妙見菩薩が武勇にたけていたバーサーカーに与えた加護。この宝具のために将門は六回までは生き返る。スキル「鉄人」は常に適用されているが、弱点の米神部分は鉄人スキルの適用外。そこを的確に貫くことによつてのみ殺すことが可能。

それ以外の場所（ex. 心臓、首、胴体）を突かれても死んだことにはならない。

『将門大新皇』  
ばんどうのてんのしゅう

ランク……A++

レンジ……2～100 最大補足 100人

種別……対人宝具（霧は出るけどあくまで自分の強化のため）

バーサーカーで召喚された際にのみ追加される宝具。怨念の霧を周囲に展開し、敵の索敵能力を低下させ、魔力を削り取る。怨念の霧は対魔力の弱いものに害を与える（特に女には害が強い）。同時にスキル「鉄人」に加え、Bランク以下の魔術も無効化する。また、筋力がA、耐久がEXランクに上昇する（パラメータのA++の十分）。

また、霧の中において分身が可能になる。分身体力は本体のバーサーカーと同等。生み出せる分身の数はその時の残機数による（ex. たとえば既に二回殺されている状態であれば、分身できるのは4体まで）。よって最高で六体の分身+一体（本体）=七体。条件が整えば一騎で全陣営とやりあうことも可能。ただし、分身体を稼働させている場合の魔力消費量（通常戦闘分+宝具開帳分）×バーサーカーの数（最高七）というアホな消費量になるので、普通の魔術師なら一瞬で魔力が切れる。（咲が最初から将門大新皇をぶっぱなさなかつたのは、これが理由）

正真正銘バーサーカーのラストウェポン。

### 【戦法】

魔力泥棒バーサーカーゆえに、マスターの力が十全だとすればまず負けることはない。だがマスターをものごく選ぶ。というか全力で運用できるマスターとかキリエ（アインツベルンホームクルス）くらいしかいないんじゃないか。真名バレが致命的弱点なので、いかに秘匿するかが重要。とにかく打たれ強い。一度戦ったら殺るか殺られるか。偵察は完全に不向き。

### 【外見】

（一言で言えば） 黒い戦闘マシーン

黒いマントに黒い鎧を身につけている巨人。肉厚の反りのある太刀を振るいまくる。目元もガードで覆われているため、表情も読み取

れない。

【備考（性格・その他）】

真名……平将門

出典……史実&『将門記』

時代区分……平安時代

平安時代中期の豪族。元をたどれば皇族（桓武天皇五世）。平氏内部の争いが関東一円を巻き込む争いへとなった時、国衙を襲撃し京都の朝廷に対し「新皇」を自称し朝敵となった。しかし朝廷より派遣された藤原秀郷、平貞盛によって打ち取られた。

京都に運ばれたその首は、関東目指して飛び去って行ったという。また将門の強さを見込んだ妙見菩薩の加護で六体の分身を持ち、体は鉄のように固くいかなる攻撃も受け付けなかった。だが米神だけは弱く、またその弱点を愛人の桔梗姫が藤原秀郷に漏らしたことで斃されたとも。現代でもその崇りを恐れられ、数多くの神社に祭られて信仰されている。

狂化状態のため性格はあってないようなもの。だが両親の殺害を命じた咲の命令に抗うなど、全理性が吹っ飛んだわけではない。いくらその手を血に染めてもマスターである彼女を護るべく、最後の最後まで忠実なサーヴァントであった。

バーサーカーとして召喚された平将門は、生前の人格よりもむしろ長年畏れられ続けてきた怨霊として顕現している。もし生前の人格で召喚されたら、いきなりセイバーに襲いかかることもなかった。結果的に朝廷に叛くことになってしまったが、彼自身は朝廷に対して明確に叛意があったわけではない。性格的には弱気を助け強きを挫く、自分を頼ってきた者にを無下に扱えない兄貴分。ただその性格のせいで、坂東における争いはどんどん拡大してしまい新皇を名乗ることとなってしまった側面もある。戦はゲリラ戦が得意。

召喚の触媒はないが、強いて言えば遠い血縁。真凍家は遠く遡れば将門にいきつく。

【他適正クラス】

ライダー

\*

【ライダー】

真名……神武天皇じんむてんのう／建御雷たけみかづち

性別……男性 身長……179cm 71kg

属性……混沌・善・？ イメージカラー……白

マスター……神内御雄じんないおゆう

(素) 筋力 C 耐久 B 敏捷 B 魔力 C 幸運 A

宝具 EX

(聖杯補正) 筋力 A 耐久 A 敏捷 B 魔力 A 幸運 B

宝具 EX

聖杯にかける願い ……なし

【クラス別スキル】

対魔力 ……A

A以下の魔術はすべてキャンセル。事実上、現代の魔術師ではライダーに傷をつけられない。

騎乗…… A

幻獣・神獣ランクを除く全ての獣、乗り物を自在に操れる。

【保有スキル】

神性…… A+

神霊適性を持つかどうか。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。最大の神霊適性を持つ。両親ともに神の系譜にっらなり、かつ建御雷のアルターエゴであるがゆえの最大神性。

啓示…… A

”天からの声”を聞き、最適な行動をとる。『直感』は戦闘における第六感だが、啓示は目標の達成に関する事象全て（例えば旅の途中で最適の道を選ぶ）に適応する。だが根拠がない（と本人には思える）ため、他者にうまく説明できない。

カリスマ：A＋（B）

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。カリスマは稀有な才能で、一国の王としてはBランクで十分と言える。此度は日本での召喚の為、Aランク。

魔力放出（雷）……A

武器ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出することによって能力を向上させる。ライダーの場合、白熱する雷が魔力となつて武器ないし自身の肉体に宿る。

（因果視 EX……原因と結果を繋ぐ線を可視化する（サーヴァントとマスターの因果線も含まれる）。因果線を辿ることにより過去視と未来視が可能となる。因果線を布津御霊で切断することで、「未来の可能性」を抹消することができる。本来フツヌシのもつ「断絶」の概念を成立させるため＋建御雷の大本のためにあるスキルだが、サーヴァントとしての顕現の為大部分がオミットされている）

### 【宝具】

『天啓齎す導きの金鷄』  
たかむすひのやたがらす

ランク……B

レンジ……1～99 最大補足 100人

種別……神象宝具（対軍宝具）

神武東征の際、熊野の險路を先導するために高天原から遣わされた八咫鳥。高御産巢日神の化身で神霊の一端（ライダーよりも神格が高い）。此度は神霊としてではなくライダーの宝具として格を落とした状態で現界している。

この宝具が発動した時、八咫鳥の力で敵を行動不能にする。サーヴァントに限らず、ライダーが「敵」と認識した者すべてに適用され



る。ただし同じく天照大神に連なる神性の持ち主、またはスキル「反骨の相」如何により効果が弱まり、抵抗はある程度可能。ちなみに神の代理として人格をもつので、ライダーが解放しようとしても鳥自身が「ヤダ」と思えば解放命令を破棄することができる。

『開闢せし断絶の剣神』

ランク…… A+

レンジ…… 1～99 最大補足 1～1000人

種別……神象宝具（対城宝具・対界宝具）

建御雷が用いて葦原国を治めた剣であり、また高倉下を経てライダーに授けられた神剣。熊野山中で荒ぶる神神の毒気に充てられて病んでいたライダーたちを救った、魔力を払う力を持つ。

剣そのものが神格を持つ（経津主神）、神造兵器ならぬ神化兵器。こちらにもライダー以上の神性を持っているのだが、ライダーの宝具として格を落とすことで現界を果たしている。

「ふつ」という切断の擬音から名づけられたこと、毒霧を晴らしたことから「形・概念・因果律あらゆるものを切断する」能力を持つ。剣に込められた膨大な雷の力を解放し、自身の魔力で縛り上げて志向性を持たせて放つ斬撃。仕組みはセイバーの『全て呑み込みし氾濫の神剣』と同じだが、神性の制限を受けない。

自律意志をもちそのもの意思で動くことも可能（今回は聖杯の泥からライダーを護るため、汚染されてしまったため人格を失っている。そのためライダーの意思で操れる飛び道具となっている）。真名解放時もライダー自身が剣を握り振り抜かずとも開帳できる（ただし自ら振り抜く時ほどには正確に狙いが定まらない）。

ちなみに「形・概念・因果律」などを切断するだけなら真名解放は不要。さらにちなみに汚染なしで人格を保っていた場合、ライダーが解放しようとしてもフツヌシ自身が「ヤダ」と思えば解放命令を破棄することができる。

『開闢と終焉分かつ剣神』

ランク…… EX

レンジ…… 1～99 最大補足 1～10000人

種別……神象宝具（対界宝具）

八咫鳥を破棄することにより（鳥の神性を得ることにより）、ライダーが建御雷と同格の神性（EX）を得て本来の力を発揮した布津御霊剣・建御雷の力の顕現。

『開闢せし断絶の剣神』の効力に加え、こちらの出力では発動時点の状態を基準とし、時点から過去と未来につながる因果律と並行世界を断ち切る最大規模の雷撃で次元断層・空間断層を生み出す。世界に存在するあらゆる因果律を全て切断するということは、それ以降は新たな因果を精製していかねばならない——つまり、新しい世界の始まりとなる。神々の世界を終わらせ、人代を始める断絶にして開闢の剣。一時的に星からのバックアップを受け、神霊レベルでの行使を可能にする（生前はこれを乱発して神代を一気に二千年くらい早送りしようとしたが、いろいろ考えて取りやめている）。

ただしあまりに神霊より——権能であるため、使用すればするほど人格が主たる建御雷に

引きずられていく。

ちなみに本編でライダーは八咫鳥を破棄していたが、今回は聖杯の穢れを受けて落ちたフツヌシの神性を通常に戻すためにしていること。こちらのレベルに至るまでの神性上げはできておらず、『開闢せし断絶の剣神』と『開闢と終焉分かつ剣神』の中間威力でのブツパになっている。

『天地渡る岩鳥船の神』

ランク…… EX

レンジ…… 最大補足 1～10人

種別……神象宝具（??）

建御雷の葦原中国平定の際、副使として派遣された鳥のように空を舞う神霊。前二つの宝具と同様、元は神霊だがライダーの宝具として格を落として現界している。この宝具自体に攻撃力はない。元々高

天原から葦原中国へと建御雷を運ぶ神だったため、その力は天地——世界の裏側と物理法則に支配されたこの世界を繋ぐもの。すなわち世界の裏側へ直通する乗り物。いざライダーが乗り込み世界の裏側へと逃亡すれば、対界宝具でもシャットアウトする（ただし逃げ込んでいる間は、ライダー自身も世界の表側に干渉できない）。

本来神霊であり高天原において生まれたモノなので（イザナギとイザナミの子）、その機動は物理法則外。伝説的には神武天皇のモノではなく、建御雷神に由来する宝具。

建御雷神のアルターエゴである彼であり、かつ大聖杯がこの日本に設置されていたことによる限定宝具。日本以外では持ち込めない。

もしライダーが戦う気なく只管逃亡して生きながらえることをよしとし、世界の裏側（高天原）に引きこもられてしまつては手が付けられない。そんなことをよしとする柄じゃあないが。ちなみに人格をもつので、ライダーが解放しようとしても岩鳥船自身が「ヤダ」と思えば以下省略。

### 【戦法】

バーサーカー程ではないが、ヤタガラスとフツノミタマも召喚していることになるので、かなりの魔力食いサーヴァント。実力は折り紙つきであり、アサシンのイレギュラー宝具にひっかからない限りは敵なしといっても過言ではない。しかし基本マスターの言うことを聞かず好き勝手やるので、いかにいい関係を築けるかが問題。ちなみに高すぎる神性と対魔力によつて令呪二画を凌ぎ切るので令呪は大切にナ！

### 【外見】

カラーリングはだいたいイリヤ（白髪の赤目）安直に言えばロンゲのポニテ。イケメンという次元ではなく彫刻とか美術品的な美しさ（※喋ったり動いたりしなければ）。関係ないけどアルターエゴなだけあって建御雷神とは見た目は瓜二つ。

【w e a p o n】

『布津御霊剣』

刃渡り一メートル超の反りのない直刀。刀身には神代文字が刻まれている。その正体は刀ではなく刀剣の神である経津主神であり、彼の刀形態（人間風の姿もある）。

断絶の概念はライダーではなく、この剣そのものにある力。どうしてもいいけどなぜかオネエキヤラ。

【備考（性格・その他）】

真名……神武天皇（諡号）

出典……『古事記』『日本書紀』

時代区分……人代（神話時代）

初代天皇。名は神日本磐余彦尊（カムヤマトイワレヒコノミコト）。瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）の曾孫、彦波瀲武廬茲草葺不合尊（ウガヤフキアエズノミコト）の子、母は妃玉依姫命（タマヨリヒメノミコ）にして天照からわずか五代目。日向を出発して瀬戸内海を東進し難波に上陸したが、長髓彦（ナガスネヒコ）の軍に妨げられたため迂回して吉野を経て大和に攻め入り、ついに大和一带を平定した。前六百年大和畝傍橿原宮に都し、元旦に即位。媛蹈鞰五十鈴媛命（ヒメタタライスズヒメノミコト）を立てて皇后とし、百二十七歳で没したと伝えられる。

初代神の剣——天孫の国を打ち立てると言う神命のもとに建御雷のアルターエゴとして生をうけた。怪力と未来を知る力（啓示）をふんだんに与えられて葦原国に生まれたため、自分の将来や兄たちの終わりも、生まれながらにして知っていた。全ての結末を知るがゆえに何物にも関心を抱かなかったが、東征を経てその思考は変わる。それは神々にとつては望まぬ変化であり、一時は神への反感を持った彼によって、段階的に世界の裏側へと移行するはずの神代が強制的に終了させられる危機に陥った。

基本的にエラそうだが、上記のように聖杯戦争の行く末に興味がないため本人は秋津島（日本）世界をどうこうする気はない。作中で

言っていたが、基本的に案山子で観戦を決め込むつもりであったが、現界が遅れたため&日本武尊に興味を持ったこと、神父の願いを叶えるべく剣を抜く。

誰でも「民草」「草」と呼ぶが、博愛主義であり（案外）人付きあいがいい。ただしその博愛は真に誰にでも平等であるが、ひっくり返せば「平等に殺す」ということでもある。今生けるものを皆愛するが、特別がないイメージ。強いて言うならお兄ちゃんか……。

実は日本史鯖中最もマスターの影響を受けるサーヴァント。マスターの願いが一般的に悪とみなされるものでも善でみなされるものでも、願いの主がそれに向かって努力し成就することが至上と思うならライダーはその価値を認める。結果がこの世の地獄だろうと天国だろうと、前述の如く過程主義のため興味はない。

一人称の「公」の原義は「私」が寄り集まっているという意味。自分一人では成り立たず、他がいなければ存在しえないモノ。無残な終わりがあると知っていても、生きようとする人間の様を直視することによって生まれた「カムヤマトイワレヒコ」という魂。そのか弱き人間たちの生き様なくただ一人でいたのなら、開闢の帝は「カムヤマトイワレヒコ」ではなく神霊「建御雷」の単なる複製人格でしかなかったであろう。

何物にも揺らがぬ唯一絶対の個とは対極にある、人の生き様をによって誕生したものが「カムヤマトイワレヒコ」の魂である。この魂は英霊化しているものの、「人々の在り方」という土台で成立しているモノのため、変化をし続けることが完成形であるという特殊性を持つ。

明らかに天地人の属性では天くさいが、実は一概に天とは言えない。「建御雷」のアルターエゴとしての魂は天（ガイア）だが、「カムヤマトイワレヒコ」の魂は「人の生き様・意識」から生まれたためむしろ人（アラヤ）である。結局どっちなんだと言われたらライダー曰く「その時の気分」。余談だがブラコン。さらに余談だが神武と建御雷とニギハヤヒは同じ顔。召喚の触媒は石上神宮の布津御霊剣。

ちなみに本編では烏を破棄して布津御霊の神性を回復して全力

ぶっぱでできるようにしているが、本来はその必要はなく素で全力ブツ  
パできる。何故そんなことをする必要があったかといえは、大聖杯の  
穢れを浄化するべく大奮闘してしまい、呪いの汚染から身を守るため  
に布津御霊が犠牲になったため。穢れの浄化という「余計な労力」を  
割かなければ、精神力だけで聖杯の呪いに耐える。

生前の東征だが、ヤマタケのそれがどこか常時お葬式ムードなのに  
対しこっちは死人が多そうなのに珍道中感が否めない。

#### 【他適正クラス】

セイバー・アーチャー むしろ本来はそちらのクラス

説によっては姿が完全にモンスターじゃないという場合もあり、バー  
サーカーもあり。

F a t e / b e y o n d   m a t e r i a l   Ⅲ : マ  
スター編

【セイバーのマスター】

うすいあきら  
碓氷明

性別……女性

年齢……十九歳

身長・体重……165cm   52kg

血液型……AB型

職業……大学生（魔術師）

イメージカラー……薄紫

誕生日……十一月七日

好きなこと・もの……昼寝

嫌いなこと・もの……高所

特記事項……碓氷家の体質として、他の家の魔術に非常にかかりにくい（暗示・催眠など）。

属性……架空元素・虚数   起源……分解

魔術系統……虚数魔術（による物質創造・転移・変換）、北欧の降霊術

魔術回路・質……C   /   魔術回路・量……A+   /   魔術回路・

編成……異常（虚数概念への偏りあり）。

質は普通だが量と頑丈さがズバ抜けている。ロシア製拳銃。

B90W63H88

着やせするがボンキュッボン寄り。

活動報告と絵のせいでおっぱいキャラになっててすまない。

【備考】

春日の管理者代行、かつ碓氷の家の次期当主（七代目）である架空属性虚数を持つ魔術師。名前は「明があつてこそその影」から。

現当主である影景があまり家にいないため、実際の管理者は彼女。作中年齢十九歳、電車で春日駅から二駅の公立大学に通う女子大生。経済学部・サークル所属なし。

碓氷邸に実質一人暮らししているため、部屋が余りまくりで掃除が

非常に面倒くさいらしい。

基本的に根暗。人見知り。責任感はあるが、できれば手を抜きたいと思っっていることも多い。友情には厚く、害そうとする者には容赦がない。仲が良くなると相手に対する態度に遠慮が無くなるが、甘えている証左でもある（好例は一成とセイバー）。

人づきあい経験値が低い為に相手の意図を勘違いすることも多い。思ったことをストレートに言うため、結構天然たらしなところもある。めんどうくさがりであり女らしい言葉づかいをしないが、中身が男っぽいわけではない。

優れ過ぎた魔術の素養の為、これまでの人生を大きく振り回されてきた経緯があり自分の将来に期待をしてはいけなそうと思ひ込みながらも、「どうして自分が」という想いも燻り続けており、そのわだかまりが彼女を魔術師として非常に中途半端にしていた。

一般人である家政婦に育てられたため感覚が一般人寄りとなったため、魔術師として名声を得、根源に至ることよりも凡百の幸福を良しとしていた。彼女が聖杯戦争をする原動力はそれであり、自分に興味はなくとも人を傷つけることは許せなかった。

セイバーと共に聖杯戦争を経て、自分の価値を自分でつけるために生きることにすると、心を新たに魔術師としての道を歩むことを決心した。

自分で自分の価値をつけられれば、その時こそ自分のために頑張れるだろうと信じて。

たとえそれが叶わなくても——己を信じようと努力したことは、無駄ではないと信じて。

セイバーとの共通点は「己の意思に関係なく与えられた力により運命を規程されて諦めた、のわりに幸せになりたがり」点などところ。

ちなみに恋愛スキルについては「ド底辺、というか幼稚園児レベル。原因はこれまで自分の力を飼い慣らすことに一生懸命で、青春できていない（～中学時代）、かつ幼少時からロクな男にあっていない為にその機会と動機に恵まれなかったから。

恋愛においてのおぼこ鈍感っぷりはかのセイバーも上回る（セイ



バーは生前妻帯しているため若干経験値あり)。つまり明は恋するものすごくややこしいことになるのであるのだが、本編では情緒未発達すぎてその段階まで至ってないのであった。愉悦。

ちなみに明の世話は生まれてからずっと家政婦の間宮透が行い父影景は教師のような立ち位置であったが、もし影景が明を手ずから育てていたら明は冷酷非道になっていた可能性が高い。

またもし何かしらの理由で影景が死んでいたら、明は魔術師を辞めて一人きりで死ぬまで生きるか、静かに自殺している(影景が死んだところで明の体質と素質がどうにかなるわけでないから)。

#### 【魔術】

非常に稀有な架空元素・虚数の使い手。碓氷家は北欧由来の魔導の家であり、遡れば神代にも至るが三百年ほど前に争いで分裂し、現存する宝具も散逸している。碓氷は分裂した一派の二代目が日本に至り本拠地としたことに始まる。

曰く「魔術協会の目が比較的届かなくて好きに研鑽ができそうだから」というアレ。

代々珍しい属性を輩出する家系だった(ex. ノーブル、二重属性)が、明の父(三重属性)と明の二代はその中でも特に稀有。元々魔術師は研究結果を自家以外の者に広めない、その上珍しい属性持ちと来ては手探りで適した魔術を構築することになるため、明は四苦八苦しっている。

明の影魔術は起源の『分解』を掛け合わせているため、影によって触れたものを跡形もなく分解して平面世界(虚数空間)へと呑み込む。分解してどうなるのかは明自身にもよくわかっていないが、不可逆の分解であるため元に戻すことはいかなる魔術でも不可能(時間を戻す魔法でもないかぎり)。

また高等虚数魔術である虚数空間へのアクセスも習得しているが、聖杯戦争開始時点では試運転状態で効果が安定していない。物語終盤で放つ「イマジナリ・ドライブ」が初実践。

本来北欧魔術の家のため、ガンドはガトリングガンと化している。また降霊術である『セイド』が得意だが、本人はあまりやりたくない

らしい。

虚数魔術関連については用語集「虚数魔術」「イマジナリ・ドライブ」参照。

### 【アーチャーのマスター】

つちみかどかずなり  
土御門一成

性別……男性

年齢……十七歳

身長・体重……168cm 59kg

血液型……B型

職業……高校生（魔術師）

イメージカラー……赤

誕生日……五月六日

好きなこと・もの……料理・ゲーセン

嫌いなこと・もの……

勉強・シイタケ

特記事項……起源の保護が強く影響しており、他人に害を与える魔術（呪詛等）が使えない。だが本当は……

属性……火 起源……保護

魔術系統……陰陽道・神道全般

魔術回路・質……C / 魔術回路・量……E / 魔術回路・編

成……正常・シンプル。

質は普通だが量が少ない。燃費はいい方。

### 【備考】

安倍晴明を先祖に持ち、千年を数える陰陽道の大家の一人息子。ちなみにアインツベルンのように血筋を他に分けずに千年を経たわけではなく、分家の存在（他流派）は多い。しかし土御門の魔術回路は数代前から衰退を始めており、一成に至って次の代には無くなるとされている。

柳洞寺の息子さんと漢字が被ってしまったが読みは「かずなり」。意味は「人生は一つを成せばよい」ということから。名づけは祖父・嘉昭。

春日で一人暮らしをする高校二年生。成長の限界を迎えつつある

土御門家の魔導を絶やすまいと「根源に至る」ことを願い、聖杯戦争に参加したアーチャーのマスター。

直情径行かつ頭より体が動くタイプであるが、根はまっすぐでお人よし。何だかんだで頼られたら断らない(断れない、のではない)。芯が強く一度言い出したことは曲げず、やり抜く。頑固ともいう。

聖杯戦争の過程で「魔導」なるものがいかに非人道的であるかを知り、考えた末に「根源に至る」という願いを捨て、聖杯戦争を終わらせるため、参加したからにはやり抜くためと目的が変化する。

深謀遠慮型のアーチャーとは凸凹コンビで仲良くやっていたが、バーサーカー戦後に裏切りにあい左腕を喪失する。その後も明とセイバーに協力する形で、アサシンを新たな相棒として戦い大西山にて再び合い見える。その結果、アーチャーは消滅に至る。

残念なことあまり一成の学校生活を書けなかったが、学校では色々な意味で有名。歩く騒動埋火高校の鉄砲玉。春日のトラブルメーカー。非モテ最後の砦。色々とやらかす奴の為、学校で彼の名を知らぬ者はモグリ(何の)。

非モテと散々からかわれているが、外見は中の上くらいで「ひいき目で見ればかっこいいかも」。誰にでも分け隔てなく話し掛けるタイプできさくだが、上記のように歩く騒動野郎でありおっかないと思う女子も多数。あと、人からの好意には鈍い。

彼の友桜田正義によれば「ホントにマジで冴えなくていいとこゼロのやつをクソ非モテ！ってからかえねえよ」

つーか「非モテ」たる原因はもつと別、彼自身以外にあつたりする。時と場合で戦う相手が違ってても、一成が相手にしているものは基本的に「己」であり、「逃げるのが嫌だ」の一言につきる。畢竟、一成に興味があることは「自分がどうするか」であり、ぶっちゃけ他人はどうでもいいのである。

言い方は悪いが beyond 中最強の自己中。そういう在り方をしている為、誰がサーヴァントだろうと状況が変わろうと一成は一成。歪みない。相性がいいのは(裏切りという結末になったが)アーチャーとアサシン。

ラッキースケベやキリエに好かれる件、というかこいつ自身が女の子に救われるというよりは女の子を救う方、あんまり弱みがないという意味でエロゲの主人公である。

長男坊のくせにまったく長男坊らしきがないのはモデルの人物のせい。

跡形もないが、モデルになった人物はアーチャーの回想に出てくる「藤原隆家」。

### 【魔術】

陰陽師。陰陽道は魔術よりも呪術に近い性質をもつため、サーヴァントの対魔力も貫通する。ただ彼自身の魔術回路は本数も少なく生成される魔力も少ない。

さらに起源「保護」の縛りで呪詛（他人を害する）の術が不得手である。しかしその真の原因は『千里天眼通』の起動のため、魔力が自動でそちらに流れて行ってしまっている為、流れに逆らってまで使える術が特性のある「保護」関連のものだけだったから（用語集『千里天眼通』参照）。

春日聖杯から流れる魔力によって、聖杯戦争中に天眼通を使えるようになるが、自力で制御できないために「強制的に魔力不足に追い込み」使用をやめさせるという無茶な使い方をしていたため回路が焼け付き、聖杯戦争後は調律師の治療を受けている。

普段使う魔術は式神による使い魔、結界術程度。

### 【ランサーのマスター】

ハルカ・エーデルフェルト（Halca || Edelvelt）

性別……男性

年齢……三十三歳

身長・体重……173cm 60kg

血液型……A型

職業……魔術師

イメージカラー……濃紺

誕生日……八月三十日

好きなこと・もの…… 闘・練習 嫌いなこと・もの……狭いところ

特記事項……一流の宝石魔術の使い手。

属性……水 起源……??

魔術系統……宝石魔術

魔術回路・質……B / 魔術回路・量……B / 魔術回路・編

成……正常・シンプル。

質も量も上質の一流魔術師らしい回路。燃費は良い。

### 【備考】

結局本編には真の人格が出てくることはなかった悲しきランサーのマスター。エーデルフェルトの分家の魔術師。得意とするのは宝石魔術にエーデルフェルトのお家芸である格闘術に時計塔の格闘術を混ぜて作り上げた宝石格闘術。

魔術はそもそも根源に至るための方法であり戦闘自体は目的ではないが、本来のハルカは手段が目的化している節もある。それでも自分が魔術師であることに疑いを全く持つておらず、多分明のような懊悩は理解できないタイプ。

金髪的美男子であり、実年齢よりずいぶん若く見える（二十代半ばに見える）。ただ口調や態度は慇懃無礼である。ただ彼のそれはもう癖みたいなので、悪気はない。

見た目の優男さに反して超好戦的とにかく直走る質。ゆえにランサーとの相性はかなりよい。ただ二人ともイケイケドンドンだから立ち止まって考える、という役がない。

エーデルフェルトは冬木の第三次聖杯戦争で辛酸をなめている為、二度と冬木の地には行かないと決めていた。しかしハルカは春日聖杯戦争の話聞き、自分の力を試したいと思うと同時に「聖杯戦争の屈辱は聖杯戦争で晴らすべき」との思いから当主を説き伏せ、無理に参加権を得た（ハルカがあくまで分家であったことも有利に働いた）。

実は碓氷影景とは歳は離れているものの昵懇の仲であり、碓氷邸にも宿泊したことがあるほど（明は幼かったため、ハルカのことは記憶

にない)。その時に神父も加えて話をしたことがあり、神父はその時の彼と聖杯戦争時の彼に大きな乖離がある——と感じていた。ちなみに空港から春日教会に至るまでにシグマの襲撃を受けているため、彼の記憶に聖杯戦争のことは全くない。

### 【キャスターのマスター】

キリエスフィール・フォン・アインツベルン (Kyriesviel Von Elnzbern)

性別……女性

年齢……見た目十歳前後？(実

年齢三十二)

身長・体重……128cm 25kg 血液型……O型

職業……魔術師 イメージカラー……濃紫

誕生日……十二月二十日

好きなこと・もの…… アイス・遊ぶこと

嫌いなこと・もの…… 思い通りにならないこと

特記事項……春日の聖杯の為に作られたホームクルス。改造を加えられているので魔術回路の量は群を抜く。

あくまでマスターとして作られたので、魔術師としての技量は中の上。

属性……?? 起源……??

魔術系統……錬金術(陰陽道)

魔術回路・質……A++ / 魔術回路・量……A++ / 魔術

回路・編成……異常(聖杯)。

春日聖杯特化型のため、質量もそのために調整されている。

B69W58H73 十歳に足るか足りないかの身体。合法ロリ。

### 【備考】

アインツベルンが春日聖杯戦争のために铸造したホームクルスであり、聖杯。母はアインツベルン製のホームクルス、父は日本の陰陽師(土御門家の親戚)。だが母はキリエを出産して死に、父はその魔術

刻印を利用するために刻印を剥がし、生きながらにして廃人状態にされている。

ゆえにイリヤのように父や母と言える存在の人間はおらず、純粹にアハト翁の教えに従いメイドに傅かれる生活を送った。

彼女がそれら以外で接する人間は春日聖杯戦争を持ちかけてきた張本人たる、神内御雄神父のみだった。ゆえに誰かを恨むわけでもなくただ「聖杯を獲るのが目的」と信じていたため、イリヤよりも精神的に幼く、好奇心の塊。

当初春日戦争は五年で開始される予定だったが三十年もかかったため、実際の年齢は三十二。

見た目は成長を止めているので、八〜十歳程度の少女。戦争開始が延長されてしまったこともあり、その間はさらに戦争に備えるべく陰陽道と錬金術の習得に勤しんだ（キリエ自体は聖杯であるので、可能な事なら願えば過程をすつとぼして実現させる力もある）。

当初は布津御霊剣で神武天皇をセイバーとして召喚するつもりであったが、失敗（厳密では失敗ではなく、むしろ上出来）しキャスターを召喚する。その失敗がトラウマとなり、召喚したのがキャスターであったこともあり、態勢が整うまでは全く戦おうとしなかった。彼女が姿を現したのは、勝利できる陣地を作成するまで決して戦闘に出ず、また一成を裏切ったアーチャーを使役し、さらにはランサーまでも得て勝利を確信したその時である。

ただ当初からの協力者であったはずの神父の裏切りと、セイバー＆アサシン同盟によって敗北する。「聖杯を得る」ことだけを生きる使命としていたため、敗北によって精神的に不安定な状況に追い込まれるが、一成の助けを得て神父と向き合い、ホムンクルスとして残り短い命でも生き抜こう決意する。大好きな仲間がいた、という意味ではひとりきりだったキリエはキャスターに憧れていた側面がある。

最も相性がいいのはなんだかんだキャスター。

## 【魔術】

アインツベルンの千年を数える錬金術と、父の魔術刻印を利用した

陰陽道。陰陽道のほうはアインツベルンとは全く違う魔術である為、父の陰陽師の魔術刻印を剥がし空中に固定して使用する方法を取っている。錬金術と比べればはるかにレベルが低い(それでも一成よりもかなり上の使い手)。

### 【アサシンのマスター】

やまうちやとる  
山内悟

性別……男性

年齢……三十五歳

身長・体重……170cm 62kg

血液型……A

型

職業……無職

イメージカラー……

茶

誕生日……三月二十九日

好きなこと・もの…… 旅行・家族 嫌いなこと・もの……

卑怯な事・残業

属性……―― 起源……――

特記事項……一般人。先祖に魔術師がいたらしく、回路が残っていた。た。

### 【備考】

春日に暮らす本当の一般人。先祖に魔術師がいたと思われるが、回路はとつくに衰退している。勤めていた会社で横領の濡れ衣を着せられ、会社を懲戒免職されてその結果妻・子とは別居状態になっている(妻が見限ったのではなく、妻の実家が問題)。

現在無色で春日に古いアパートを借りて再就職活動をしているが、懲戒免職のシヨックから立ち直れておらず自分を責め、無気力状態になっていた。アサシンの前マスターがセイバーに殺害され、今にも消滅しそうなアサシンを発見したことでアサシンと契約を果たす。

「過去をやり直し、事件を無かったことにする」という目的の為聖杯戦争に参加するが、a p oのれいかさんのように逸一般人ではなくガチの一般人のため、いきあつたキリエとキャスターに対しても満足な対応



ができずに呪いをかけられて戦闘不能になつてしまう。その後アサシンの判断でセイバー陣営に下り、キャスター陣営を倒す共闘体制となる。

キャスター討伐後は体も回復し、戦闘や急速に忙しい明や一成に代わつて碓氷邸の家事を一手に引き受ける主夫となる。

温厚で真面目な性格で、正義感に熱い一面もある（それが会社での悲劇につながった側面もある）。元々裕福な家の出ではない一般人のため、明やそれに一成の考え方にはついていけないことも多い。

何事にも偏見なく理解したいと思つてゐる為、年下の明たちに礼を損なうことはない、人格者。前述のように妻帯者であり、一人娘の華にメロンメロンである。

### 「バーサーカーのマスター」

真凍咲

性別……女性

年齢……十三歳

身長・体重……150cm 38kg

血液型……B型

職業……中学生

イメージカラー……ピン

ク

誕生日……十一月十五日

好きなこと・もの…… 魔術の修行 嫌いなこと・もの……バカ

な人間

属性……水・風の二重属性 起源……流転

魔術系統……細菌魔術

魔術回路・質……B / 魔術回路・量……D / 魔術回路・編

成……正常。

量は少ないが質でカバーする。燃費の良い回路。

B71W59H73 病によりそれ以前よりも痩せてしまつてい

【備考】

春日に根を張る魔導の家の一人娘。素質に恵まれており、本人も魔導に意欲を燃やしている。基本的に真面目なため、生まれて物心つくときからずっと魔導一直線。学校の成績はあまりよくない（中の下）だが、それよりも「魔術の勉強でしょ」って思ってたやっついでないのでやればできる。というかやれば上の上いけるだけの地力はある。

親も咲の素質に喜び厳しく魔術を鍛えており、咲もそれに応え——むしろ応えすぎて年中寝不足の状態であった。常時体調不良であることと、年齢故に自意識の肥大（ある意味中2病的「私は他の人間とは違う」という意識）で周囲につらくあたるようになってしまっ、学校で孤立しいじめにもあっている（本人は歯牙にもかけていない）。魔術師としての矜持が彼女を支えているが、それでもまだ十三歳で、魔術師としての精神は発展途上である。

長期にわたる不摂生が引き金になったのか、いつの間にか難病に罹患しており、気づいた時には残り命は半年となっていた。聖杯戦争に親が出るつもりと聞いてきつと願いは「病気の治癒」だと信じたが、親は魔導の存続の為咲に見切りをつけていた。

その会話を聞いてしまった彼女は自分を救うのは自分だけと、バーサーカーを召喚して親を食い殺させ、春日で殺戮を始める。病身でなくともバーサーカーを運用できるだけの魔力を持たない彼女は、聖杯戦争に勝つためにはサーヴァントに人を食らわせるしかなかった。

背伸びしがちで勝気ではあったが、周りの変化に良く気が付く方である。また魔術師の家系であることに強い誇りを持っており魔術師になることを心に決めている。尊敬できる人には礼儀正しいが、その真逆の人はガン無視するタイプ。

ぶっちゃけた話、碓氷明とは全くそりが合わない。彼女にとって碓氷明とは自分より長い歴史を持つ魔導の家、それも管理者で、しかも希少属性持ちという恵まれに恵まれてる身近な魔術師である。にもかかわらず「つらい」と弱音を持ちながらうじうじ懊悩する明は、勝気で中2病に罹患気味の咲としては「そんなにイヤなら私がやる!!そこどけ!!」と怒鳴りつけたくなる感じなのである。

明よりかなり内面的に男っぽく頑丈にできている（打たれ強い反面、一回転んでしまうとずるずると転がり落ちてしまう危うさはある）。

もし病気になるらず成長していたら、うっかりしない女時臣。

### 【魔術】

真凍の魔術は魔術回路のみでなく身体中の細菌・細胞からも魔力を生み出して運用する魔術。属性ゆえ得意とするのは流体操作。だがまだ年若く、ケイネス先生みたいに特性の礼装をつくるに至っていないために本戦では病院から血液を拝借して操作し、魔力任せに海水を操作して使用している。

病身の為本来普通の魔術行使すら厳しいはずが、バースカーの食らった魔力が逆流するイレギュラーで解消させている（咲の意思であり、著名な英霊のバースカーの意思でもあり・人食いによる魔力過剰状態のなせる業）。しかし共闘するアーチャーとセイバー陣営に敗れ、魔力の枯渇によって死に至る。

### 【ライダーのマスター】

神内御雄じんないおゆう

性別……男性

年齢……五十五歳

身長・体重……178cm 71kg

血液型……B

型

職業……神父

イメージカラー……

黒

誕生日……三月三十一日

好きなこと・もの…… スポーツ観戦、ゲーム観戦

嫌いなこと・もの……なし

属性……火・土の二重属性 起源……??

魔術系統……陰陽道・神道全般

魔術回路・質……A / 魔術回路・量……D / 魔術回路・編

成……異常（共感概念への偏りあり）。

量は少ないが質でカバーする。呪術向きの回路。

【備考】

春日聖杯戦争の監督役。第八秘蹟会所属。やや年齢不詳な相貌をした春日聖堂教会の神父。

きちんと鍛えているため体つきにぶつたるんだところは無い、精悍な親父。春日聖杯製造を目論んだ言いだしっぺにして黒幕。生まれながらの「傍観者」——むしろサポーター。

「戦い」を見るのが何よりも好きで、それが生きがいと化している。自分自身の人生にはさほど興味がなく、人の争うさまこそ最大の娯楽にして道楽だと思っている。その極限は「命を懸けて、何者かを殺しても欲しい何かの為に争う」ことこそ人の真髄が楽しめるとし、さらに自分を使い魔に落してまで叶えたい願いを持つ英雄の有様を見られると聖杯戦争に異様な興味を持った。

魔術師を辞めて聖堂教会に入ったのも、監督役という聖杯戦争砂被り席を手に入れるため。そして紆余曲折を経てアインツベルンと確氷を引き合わせ、春日聖杯を実現させた。

このように黒幕ではあるが、根本は聖杯戦争を見たいという欲求だったため、戦争が始まった時点で彼の願いは叶っており本来は無害なはずだった。しかし長年の願いが成就してしまったことから、「一体己はこれからどうするのか」と考え始め、その末に「何度でも聖杯戦争を行う、という願いの為に聖杯を使う」ことに思い至る。

ただ神父がそう思うだけでは決して聖杯は神父のものになる事はなかったが、ハルカ（シグマ・アスガード）と出会ってしまったことでその願いは現実味を帯びてしまった。

元神道魔術の家の出である為、魔術師（呪術師）でもある。本家は神代から続く家だが、神父の家は明治に分家したため、西洋の魔術を取り込もうとしていた伝統がある。そのため二十になる前に時計塔に留学したこともあり、その際にガンドなど西洋魔術も多少習得している。

【魔術】

魔術師としては三流、神父としては二流、呪術師としては一流。最も得意なのは呪術。丑の刻参りなど共感呪術に長けている。直接的攻撃としては呪符を核に魔力で剣を精製し、敵に射出して串刺しにする術を多用する。

神道の祓いを用いた呪いの浄化（解呪）・結界の構築も得意。かつて神内家でも屈指の戦闘能力を誇っていたが、魔術師を辞めてからはめったに使わなくなったので腕は錆び気味。

【その他】

神内美琴じんないみこと

性別……女性

年齢……二十五歳

身長・体重……167cm 55kg

血液型……A型

職業……修道女

イメージカラー……朱色

誕生日……七月十三日

好きなこと・もの……仕事

嫌いなこと・もの……ぐずぐずして行動しないこと・退屈

属性……火 起源……放出

魔術系統……陰陽道

魔術回路・質……C / 魔術回路・量……C / 魔術回路・編

成……正常。

至ってノーマルな魔術師の回路。

B83W62H84。バランスのとれたプロポーションで明よりも筋肉質で鍛えてあるイメージ。

【備考】

春日聖杯戦争の監督役補佐。第八秘蹟会所属。養父である御雄の火付けにはなんらかかわっておらず、最後まで養父の本性に気づくことはなかった。かつては九州の魔導の一族だったが、魔術師の在り方

に馴染み切れず、かつ十五歳の時に両親が事故死したことをきっかけに家出し実家からは勘当されている。

聖堂教会の教えに共感したわけではなく、行きやすい宛として家出後向かっただけであったが（美琴の家は西洋魔術を専らにする家ではなかったため、元々協会との縁は薄い）、徐々に敬虔な信徒になる。その際に後见人（養父）として神内御雄が彼女を引き取ることになり、それ以来春日教会で暮らしている。御雄から粗雑にあつかわれることもなく、また御雄も美琴と同じく元魔術師↓聖堂教会の過去を持つため、指針としてとても頼りにしていた。

快活で明るく、何事もはきはきとものごとを言う。齒に衣着せないタイプでもある。修道女よりもバリバリのキャリアウーマンのイメージで、迷える子羊を導くよりも引き連れていく感じ。魔術師と修道女という違いはあったが、割合年が近くかわることも多かった確氷明に対してはある種姉のようにふるまっていた。やや明は美琴の押しが強さと行動力にたじたじとなるときもあったが、引っ込み思案の彼女とは好対照で悪い仲ではなかった。

春日聖杯戦争においては、明と同じく「何事もなく戦争を終わらせる」ことを目標としていた。神父の動きには気づかず、むしろ神父が観戦目的であるゆえにかなり後始末をやらされていた（本人は当然の職務だと思っているので、不満はなかった）。神父が何もしなければ無事だったが、シグマというイレギュラーとの接触により体を操作され、いいように使われることになる。

## 【魔術】

今や修道女であるが、戦闘においては教会の秘蹟よりも生まれ持った魔術回路と魔術を使っている。起源覚醒者であり「放出」に実家の剣術である示現流を生かした『二の太刀要らず』の戦闘型。

むしろそれ以外の魔術はできないとはいわれないものの苦手。鉄甲作用を習得していないものの、放出の力で同等の威力で黒鍵を投擲することもできる。黒鍵は最初から剣を数本修道服の下に仕込んでいる。余談だが神父は呪符で剣を精製できるので、戦闘でコンビを組む

と相性がいい。

【真・ランサーのマスター？】

シグマ・アスガード (Sigma Asgard)

性別……女性

年齢……二十六歳

身長・体重……163 cm 52 kg

血液型……O

型

職業……魔術師

イメージカラー……黄

金

誕生日……一月二日

好きなこと・もの……食事 (うまい店探し)

嫌いなこと・もの……空腹

属性……風・水の二重属性

起源……虚

魔術系統……北欧魔術全般 (特に降霊術・サイズ)

魔術回路・質……EX / 魔術回路・量……E / 魔術回路・

編成……異常 (増殖)。

何代にもわたり恣意的に改造されてきた結果の神代回帰。二つ名に「魔術師食い」。

B98W60H90 絵にかいたようなボンキュツボン。ただ服

装は露出度低め。

【備考】

聖杯にマスターとして選定されたわけではないのに紛れ込んだ、ランサーの真のマスターにして封印指定の魔術師。令呪を持つハルカを傀儡にし、ハルカを通じて聖杯戦争に参加する。その過程で神父と知り合い (そしてハルカそのものではないと見抜かれ)、共同戦線を張ることになる。

封印指定を受けており、実家の援助をうけつつ各国を転々とし日本にいた時に春日聖杯戦争の話を目にした。明確に聖杯にかける願いがあったのではなく、聖杯とはどんなものかを拝んでやろうくらいの気持ちだったが、明の稀有な素質を欲し、自分の「魔術師食い」を進

めるべく神父に手を貸した（聖杯戦争を餌に集まる魔術師を狩りまくる目論見）。

本来自我が極めて希薄であったが、食べた魔術師の人格を取り込み混ぜて現在の性格になっている。よって厳密に「こういう性格」というものがないが、最初の心——欲しいものは手に入れるまで追いかける、自重しないところだけは変わっていないらしい。

ちなみにバイ。彼女曰く、魔術師食いを続けていけばまた微妙に性格は変化し続けるとのこと。

本来の名前はシグマ・アンヌツカ・アスガルド（本編ではミドルネーム省略。アスガルドの英語読みでアスガード）。碓氷の大本であるアスガルド家の分裂後、第一位のアスガルドの血筋。かくかく云々（アスガルド家参照）で、神代の巫女を生み出そうとしていたアスガルド家の最高傑作。

シグマの名は「これまでのアスガルド家による研究の総和」の意味がこめられている。

その最高傑作の名の通り、現代において限界までつきつめた巫女だが、起源「虚」の影響で一族の斜め上の性能になってしまった。予定として偽・神霊憑依『終末の黄金華（グルヴェイグ）』は当然のこととしても、さらに他人の魔術回路と刻印をそのまま自分に組み込めるという力を持つ（彼女が封印指定を食らっているのは、巫女としての力ではなく後者の為）。後者の力は巫女として造られた副産物——下ろす神霊の為に余計な情報を限りなく薄める『魂の希釈』に加え、起源「虚」のため確固たる己が何もない、本当に「器」として造られてしまった。

満たされる望みの在った聖杯であるキリエと違い、永久に満たされることのない器は欠落を埋めるべく、本能的に他者を求めて貪る魔術師になった。魔術回路や魔術刻印は死体から魔術的に摘出することで構わないが、本人の人格・魂の情報を得るには生きたまま、魔力の解けた血をすすり肉を食らわねばならないためにカニバリズム嗜好を持つ（肉体の死とともに魂も消滅するため）。

ちなみに他魔術師から強奪した刻印は、今のところシグマが子を



作っても引き継げない。あまりにも雑多な魔術刻印を身に着けられるのはシグマだからできる一代限りの技である。

ただシグマはどうでもいいと思っっているが、その刻印・回路の收拾能力を貴重とし、かつ今後の研究次第では刻印をそのまま子孫に継げるようになるのではないかという期待があったため、アスガルド家は陰ひなたに封印指定のシグマを援助していた。

#### 【魔術】

回路量がEなのは生まれ以ての数であり、現在は並みの魔術師の2000倍はある。今までに食らった魔術師の刻印をいかになく発揮し、生来の北欧魔術に加え陰陽道・神道までも操り洗脳や幻術までも得意とする万能型（降霊術以外は特化には程遠い）。

偽・神霊憑依『終末の黄金華』については用語集の方を参照。

## 語集 あ行くさ行

## 【ア行】

アーチャー（サーヴァント）

サーヴァント・アーチャー欄参照

青森日向（あおもり ひなた）（その他人物）

明の大学の友人。経済学部で明と同じゼミに入っている。真面目で物事をきっぱりという、やや男勝りの女性。がさつというわけではなく、お菓子作りも好きなど女の子っぽい趣味ももつ。社会人の彼氏がいる。ちなみに写真サークルで、よくカメラをぶら下げて海浜公園などの自然の多い場所に出没する。実は歴女で史学科に行きたかったが、親の意向で諦めたそう。

アサシン（サーヴァント）

サーヴァント・アサシン欄参照

アスガルド（魔術）

確氷の大本。神代からの降霊術を受け継いできた北欧魔術の大家。俗世と魔術世界とは交流をしていなかったが、五百年前に魔術協会の門戸を叩いてそれ以来確固とした地位を保っている（貴族派）。しかし三百年前の家の内紛で、アスガルド家は五つに分裂し、所持していた礼装などもそれぞれに分かれてしまった。現在のアスガルド家はその分裂時の第一位となった女魔術師……ウネルマ||アンヌツカ||アスガルド（Unelma Annukka Asgard）の流れである。その分裂後のアスガルド家は、魔術世界において権力を保つためには統合が必要と考え、謀略と武力によって残り四家の再統合を開始した。四家中二家は早々に再統合できたが、残り二家は今だ統合を果たしていない。そしてアスガルド家は全統合——三百年前の完全な形に立ち戻ることを諦めていない。

その統合過程において生まれた「神代回帰の巫女」の最高傑作がシ

グマ・アスガルドであり、アスガルド家としても予想だにできなかった「魔術刻印回収」の力で、今代中の全家統合を目論んでいる。封印指定のシグマを影から支援し魔術協会から逃れさせているが、彼ら自身もシグマをコントロールできていない。

北欧の大家だけあって主な魔術はルーン魔術だが、最たるものは降霊術のセイド。セイド自体が巫女のなす魔術の為(男でもできるが)、基本的に当主は代々女性。

碓氷の一代目は分裂時第三位……カイ||オーフヤーネン||アスガルド(Kai Ohutjnen Asgard)。ちなみに男性。オーフヤーネンは「小さき薄氷」の意で、日本に移住した際におおよそ同じ意味の「碓氷」を名字とした。

熱田神宮(あつたじんぐう)(場所)

愛知県の名古屋にある由緒正しいお宮。草薙剣をご神体とし、主祭神は熱田大神こと天照大御神。相殿神は素戔鳴尊、日本武尊、美夜受媛命、建稲種命(ミヤズの兄)。明はこの草薙剣を触媒にセイバー・日本武尊を召喚した。本来召喚は大聖杯設置場所である春日市内でなければならぬが、御三家特権によりどこでも召喚が可能になっている。

全て呑込みし氾濫の神剣(あまのむらくも)(宝具)

サーヴァント・セイバー欄参照

八雲封印・光裁神剣(あまのむらくも)(宝具)

サーヴァント・セイバー欄参照

天地渡る岩鳥船の神(あめのとりふね)(宝具)

サーヴァント・ライダー欄参照

混沌大極へ分かつ雷槍(あめのぬぼこ)(???)

イザナギとイザナミに振るわれて混沌をかき混ぜ、オノゴロ島を生み出した権能の矛。正確には矛ではなく、混沌を大極へと二分した雷の具現であり、その影。建御雷の本体。

五瀬命(いつせのみこと)(その他人物)

本編で名前だけチラッと出てきた、生前のライダーの兄。東征の過程においてナガスネヒコの軍との戦いの最中、矢に穿たれて死亡。ラ

ライダーも含め同腹の弟が三人いる長男坊のせいか、弟たちと比べて性格がマイルドかつ鷹揚。生前のライダーの人格を変えた（カムヤマトイワレヒコを生んだ）切っ掛けの人物。ただライダーが今の人格に近くなるのは晩年のため、もし五瀬命が今のライダーを見たら「!? 誰だキミは!？」となること請け合い。神武天皇には遠く及ばない神性ながら、東征に出れば、（何時かまではわからないものの）必ず死ぬことは知っていた。

想像明（イマジナリ明）（魔術）

イマジナリ・ドライブにより生み出された「もう一人の明」。身体的特徴はオリジナルの明と同じ。ただオリジナル明は肩につく程度の髪の毛の長さだが想像明は背中の中ほどまでであり、かつリボンでハーフアップにしている。また身体つきも僅かながらオリジナル明よりも成長して、ちよつとだけ胸が大きくてくびれている。

生み出される際にイメージされた人格は明の姉である碓氷茜がベース、魔術としては今明が習得しようとしているものを完璧に熟せること。よって魔術の練度ではオリジナル明よりずっと上で、虚数空間を介した限定的空間転移、（作中で書けなかったけど）ノタリコンを自在に使えるようになっていく。性格的には明が記憶している茜に近く、積極的でお姉さん風、やや意地っ張り。

現在の明の力による偽造の魂では、精々持つて三か月。想像明は短い間でも生きていることを望んだが、シグマ・アスガード打倒の為にその命を使った。最初からオリジナル明が彼女を殺して利用するために想像明を呼んでいたとしても、彼女がいたことを誰かが憶えている限り、想像明が何かを恨んだまま消えることはない。

また本編最終局面において、シグマを虚数空間へと引きずり込んだ想像明は最初に生み出された想像明とはまた別人。想像明によって生み出された、さらに虚数の魔術を極めた想像明 $\beta$ である。

イマジナリ・ドライブ（魔術）

碓氷明が本編で使用した魔術。別名魂の偽造、架空疾走・虚数の魂など。虚数空間において、自分の魂・肉体の情報のコピーを作る術。虚数物質を用いて行うため、術者の想像力如何で好きに魂と肉体を改

造できる。大事なのはイメージ力であり、いかに微に入り細を穿つ想像ができるかが重要となる。明は今まできちんと「自分の未来」を想像したことがなかったため、急場では「最も自分が憧れた人Ⅱ姉」の人格をモデルに、さらに今自分が習得しようとしている魔術が可能になった未来の自分、の想像に留まっている。

虚数空間でくみ上げた「もう一人の自分」を物質界に引き連れてくることは可能(というか、それができないと現状意味がない)だが、「もうひとりの自分」は体も魂も虚数で作られている為、それだけでは物質界に存在できない。

よって、もともとの術者の魔力で存在を維持する必要がある(偽造の魂と肉体は物質界において座標を定め存在を固定するために虚数使いの魔力が必要。想像明は酸素チューブを繋がれている海の底のダイバーに近い)。本編では明はセイバーにも魔力を供給しているので、大体サーヴァント二騎分の魔力を使っている。

また「もう一人の自分」の魂はあくまで偽造であるため、本来の魂よりも寿命が極端に短く(魔術の腕を上げれば延長も可能だろうが、現時点での明では無理だった)、早くに腐って人格を変えてしまう。

元々は明の魔術師としての修行用に明の父・影景が考案した魔術。稀な素質の架空元素は修行が難しく碓氷の家でも虚数使いが過去にいなかったため、どうやって修行をするかがネックだった。そこで虚数世界で「想像上の自分(虚数の魔術を高レベルで習得した自分)」を仮定し一時的に物質界に作り出すことで、その自分から手ほどきを受けて修行し、その先への次元へと到達できる。

つまり自分自身を教師・対戦相手にしてレベルを上げていくための魔術で、元々戦闘用に考えられたものではない。

また、偽造とはいえ同一の魂を持つ存在を作り出せる明は碓氷の家宝『破滅呼ぶ勝利の剣』を、ノーリスクで使用できるようになるという絶大なメリットがある。

飲水の病(いんすいのやまい)(スキル)

生前の病からくる呪い。いわゆる糖尿病。視覚に影響を及ぼしており、索敵能力が低下している。逆に視覚から影響を及ぼす魔術に対

する抵抗力は向上する。

所持サーヴァント……アーチャー（D）  
ウエルフェア（場所）

春日にあるショッピングモール。二階建て、屋上には駐車場がある。駅から少々離れている為、地元民がメイン客。一階はスーパーとフードコートがあり、他キッチン用品や寝具などの販売を行っている。二階は洋服屋や本屋、美容室やリラクゼーションサロン、レストランが入っている。かつて屋上には子供向けのミニ遊園地のようなものがあつたが、子供の転落事故があつて以来いつの間にか潰されて、全面駐車場化している。

こういうちよつとベッドタウン的なものが少し駅から離れたところにある辺り、まだ春日再開発は途上である感じ。

請井将（うけい しょう）（マスター）

アサシンのマスター。触媒はアサシンが豊臣秀吉を殺そうとした時に音をたて、危ういところから秀吉を救った香炉。ぶつちやけ五右衛門を呼びたかつたのではなく、秀吉を呼びたかつた。サーヴァントを道具扱いする典型的なませ犬系マスターだが、そこに五右衛門が来たのがさらにまずかつた（アサシンは基本的に偉そうな人間は嫌い）。喧嘩をし、アサシンを離していた隙に女装したセイバーに捻りつぶされて死亡した。

碓氷（うすい）（魔術）

三百年前、北欧の大家が分裂した際に分かれた一派。分裂時第三位カイを祖とする。碓氷の名字はカイのミドルネーム「オーファーン（小さき薄氷）」から。分割された領地が狭かつたことと、アスガルド家の圧迫、いつそ新天地で自由にやりたいとのことから二代目ヴィルヘルムの時に日本への移住を決めた。

ヴィルヘルムが日本にやってきたとき、当時日本は幕末という過渡期にあつた。港町でもあり霊地でもあつた春日に居を選び、先に居ついていた土着の陰陽師を追い払い管理者となつた。

碓氷の魔術特性は「分解」。破壊ではなく分解、要素に分けていき解析へといたるイメージ。北欧の魔術師でありルーン魔術・セイド・ガ

ンドは家の全員が習得しているが、それ以外は特性に合わせて決める（ちなみに明はルーンがあまり得意ではない）。

また祖であるカイの体質を引き継ぎ、碓氷の魔術師は通常の魔術師に比べて魔術干渉に対する高い抵抗力を持つ。自分より高度な魔術師の魔術でも、まず洗脳暗示の類にはかからない。代わりに治癒や強化など、プラスの効果を及ぼす魔術も効かない。ただし血の近い魔術師は例外。

現在の当主は六代目・碓氷影景。祖父までは純スウェーデン人だったが、それ以降は日本の家との婚姻も始め彼はクォーター。明は八分の一スウェーデン人。

ちなみにカイは大家の跡継ぎではなかったため、自分の代から源流魔術刻印を作ったがその核はティルフィングの柄の黄金。

躊躇いなくこれを選んで使うあたり呪われている感と魔術師感ハンプない。

当主は男と限られているわけではないが、男系の家系らしく女兒が生まれても男児の方が碓氷の魔術に適した体質のことが多かった。女当主は明が初。魔術的因果関係はいまだ不明だが、ノーブル属性や多重属性など希少な属性持ちが生まれやすい家。

碓氷茜（うすい あかね）（その他人物）

碓氷明の実姉。歳の差は一つ。属性は火。明とは打って変わって勝気な性格でプライドも高い。黒髪のポニーテール娘。

生まれた時は体が弱かったため、もしもの時に備えた予備として妹の明が生まれた。だが明の方が突出した素質を持っていた為、最終的に碓氷の家督は明に譲られることになった。前述の碓氷の体質のため、他の家に養子に出してもその家の魔術に馴染みにくいため受け入れ先がなかった。ただ大人しくしているなら明の予備として甘んじて生きる道もあったが、明に大怪我をさせてしまったことにより一緒にしておくことはできないと見做した父により魔術回路を潰し記憶を書き換えた上で一般の家に養子に出された。

魔術回路を潰した影響で車いすの生活を余儀なくされているが、養父母と共に平和に暮らしている。

碓氷明（うすい あきら）（マスター）

マスター・碓氷明欄参照

碓氷影景（うすい えいけい）（その他人物）

碓氷明の実父。御年四十五。現春日の管理者であり碓氷の六代目。作中には登場しない。名前の由来は「根源の景色を見る、無理でもその影は掴め」という父（明にとっては祖父）の言葉から。性格は一言で言えば陽気なマッドサイエンティストで、土御門一成をもっとドギツクして良識を放り出した感じ。「魔術の家生まれなかつたら絶対科学者になつてた」とは明の言。魔術師の割には引きこもる型ではなく、明が幼少のころから家にいないことの方が多かった。

色々な魔術呪術に首をつっこんでいるが、全ては自分の魔術を鍛え上げる為という生粋の魔術師。二人の娘を愛していたが、それは勿論魔術師として愛するという意味である。基本的に人の人間性に興味なく、それは娘に対しても同様である。しかし興味はなくせに「わかってる」のがまた厄介なところ。碓氷の魔術特性「分解」から「分析」に通じ「解析」し「再構成」へと至った熟練にして稀有の魔術師。ちなみに妖精眼持ち。

はてさて、彼がこの聖杯戦争を全面的に娘に任せた真意は如何に。

そして本当に彼は「春日の聖杯戦争」について、始まるまで全く気付かなかつたのか。

碓氷邸（うすい）（場所）

春日駅から南東に徒歩三十分（私鉄の南春日駅からは五分）の碓氷の屋敷。三百坪の大きな御屋敷。かつては家政婦を雇って掃除や洗濯などの家事をまかせていたが、とある事件が起きてから明の一存で家政婦を雇わなくなった。庭だけは月一で庭師がやってきて手入れするが、屋敷内部は明が魔術で掃除している。結界もきちんと張っており、某遠坂邸と異なり幽霊屋敷の評判はない。影景があまり家に行かないため、全てのやりくりは明が一手に行っている。

埋火高校（うすみびこうこう）（場所）

土御門一成の通う私立高校。偏差値は六十〜六十五の間でやや進学校であり、生徒の殆どが大学に進学する。中学時代の一成の成績で



は手の届かない学校だったが、学力試験が全てマークシートである為奇跡が起きたらしい。全国高校名鑑では学食の美味しい高校ベスト三位に食い込んでおり、一成が惹かれたのはその一点(余談だが、土御門の家から遠ざけたがった両親により選択肢は遠方の学校のみ、かつ嘉昭が許可を出した地域のみ)。

一学年平均三百人前後、全校生徒千人と規模はやや大きめ。二年進学时に文理でクラス分けされる。部活動は入部するもしないも自由。生徒会活動が活発で、体育祭・文化祭などのイベントごとの裁量は生徒会を主体とした委員会に大きく与えられている。

ちなみに生徒会長は一成の天敵。

黄金律(おうごんりつ)(スキル)

人生においてどれほどお金が付いて回るかという宿命を指す。

所持サーヴァント……アーチャー(B)

Bランクの場合、「一生涯に困らないが、出費も多い」。「上に立つものがケチケチしてはいかん。入ってくる分部下にも振舞ってやらねばならぬ」(byアーチャー)

小碓命(おうすのみこと)(その他人物)

故郷に在りて、何もかもが失われていなかった時の少年の名。

遠く西の宴の夜に、彼は全く別の何かに変質した。

小碓命という少年がいなくなっても、一人の女だけはその名を呼び続けていた―彼女が身を投げる、直前まで。

大碓命(おおすのみこと)(その他人物)

本編に出てこない人物。セイバー日本武尊の双子の兄。当然双子なので同じ顔。弟が文武共に優秀かつ真面目に鍛錬するのに対し、どうにか楽できないか怠けられないかと考えている残念な兄。反面楽しい事面白いことが大好きで、人懐っこいため周囲に人が絶えない。周囲も内心天皇となる器ではないなどは思っていたが、決して邪険にされていたわけではなく、また本人にも天皇となる野心はなかった。事あるごとに弟小碓に対し「お前は父帝にできがいいって褒められていいよな」と常に劣等感と羨望丸出しだったが、同時に「優秀な弟

がいるから俺が兄でも天皇にならなくてもよさそ〜」とも思っており、なんやかや弟のことは好きだった。

バカだが身の程は弁えている、そんな感じ。

大江山百鬼夜行（おおえやまにようまよゆけ）（宝具）

サーヴァント・キャスター欄参照

大西山（おおにしやま）（場所）

春日駅から車で一時間ほど東へ向かった場所にある山。周囲は森に囲まれており、山の半分は春日市からはみ出ている。春日市における一番の霊地であり、キャスターの根城（碓氷邸は第二の霊地）。碓氷がここに居を定めなかったのは、強すぎる土地の魔力は特に幼い時に影響が強すぎるため。

弟橘媛（おとたちばなひめ）（その他人物）

セイバー生前のリアル俺の嫁その一。キュートかセクシーで言えばキュート。あほの子？本編ではあまり人柄がわかる部分がないが、東征軍においてムードメーカーな紅一点（pixivに上げたマンガ「人の外装を纏う神の剣」）。走水の海にて神の怒りを鎮めるために入水する。セイバーの背中を押した人。崖っぷちからの意味で。

ちなみに当SSにおいてはかつて巫女さんであり、セイバーとの間に子もいたけど大和に置いてきた設定（身分ある人の子だから母が直接育てることはそもそもないんだけど）。当然コミュ障なセイバーは彼女が何を思って旅についてきて、何を思って海に身を投げたのかわかっちゃいないのである。

そして彼女が何を想い、身を投げたのかは今や彼女にしかわからない。

陰陽道（おんみようどう）（魔術）

中国の陰陽五行説を元に、道教や神道を取り入れ日本独自の変化をとげた魔術。その性質は呪術に近く、サーヴァントの対魔力を貫通する。主な魔術は式神（使い魔）、結界術、呪詛。当SSにおける使い手は土御門一成、キリエスフィール・フォン・アインツベルン、神内御雄、シグマ・アスガード。

## 【力行】

春日市（かすがし）（場所）

関東某所に位置する地方都市。地方都市だが、数駅移動した場所に新幹線停車駅もあり、かつここ数年で再開発が進んでいる為榮えつつある。監理者は碓氷。

春日総合病院（かすがそうごうびょういん）（場所）

春日駅近くに位置する総合病院。春日の中では最大の病院で三棟の病棟からなっている。真凍咲が入院していたが、バーサーカーを召喚した彼女が魔術で少しずつ患者を死に至らしめていた。そして最後には病院の一棟全体に人払いをかけてバーサーカーを大暴れさせ、一棟まるまる皆殺しにする暴挙に出た。世間的には不審死に引き続き原因のわからない大事故により、現在は閉鎖されている。

カスミハイツ（場所）

山内悟、現在の住まい。築三十年の和室一部屋。春日駅から徒歩三分のぼろアパート。実体化したアサシンと悟が一緒にいると実に狭い。

金欄襜褕（かぶきのいししょう）（宝具）

サーヴァント・アサシン欄参照

カリスマ（スキル）

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。団体戦闘に置いて自軍の能力を向上させる稀有な才能。

所持サーヴァント……アサシン（D）、バーサーカー（E）、ライダー（A+）

※ライダーは日本召喚による補正がかかっている為、外国であればBランクになる。

Bランクであれば国を率いるに十分な度量。A+ランクともなれば魔術・呪いの領域。

騎乗（きじょう）（スキル）

「剣士」「騎兵」のクラス特性。

乗り物を乗りこなす能力。「乗り物」という概念に対して発揮され

るスキルであるため、生物・非生物を問わない。また、英霊の生前には存在しなかった乗り物（例えば古い時代の英雄にとっては見たことも無いはずの、機械仕掛けの車両、果ては飛行機）すらも直感によって乗りこなすことが可能。

所持サーヴァント……セイバー（なし）、ライダー（A）

セイバーは「飛行」スキルの代償に失っている。ライダーのAランクではすべての乗り物を乗りこなすことが出来る（天鳥船に乗っている時点で神霊を乗りこなしているに等しい）。

偽装（ぎそう）（スキル）

偽装による認識操作。

所持サーヴァント……セイバー（C）

Cランクでは、己、またはマスターを偽装・隠ぺいする場合にのみ有効。

女装の場合成功率が上がる。

キャスター（サーヴァント）

サーヴァント・キャスター欄参照

虚数魔術（きよすうまじゅつ）（魔術）

架空元素・虚数という稀有な体質を持つ魔術師が行使しうる非常に珍しい魔術。確氷明の得意とする魔術。目に見えぬ不確定を以て対象を拘束し、平面世界へと呑み込む影の海を生み出す。この世ならざる者（幽霊・悪霊の類）に最も効果を発揮する魔術であり、サーヴァントにも有効（※ただし対魔力持ちのサーヴァントはその限りではない）。

作中では明がキャスターの四天王中二人を平面送りにし、最期には想像明が命を引き換えにシグマを送った。術者の暗黒面を剥き出しにして刃とする禁呪であり、未熟な術者の場合自分の暗黒に呑み込まれる危険を孕む。

また平面世界（虚数空間）は物質界から時間・空間共に切り離された場所であり、虚数の属性持ちの魔術師でなければ干渉できない。

キリエスフィール・フォン・アインツベルン（マスター）

マスター・キリエスフィール・フォン・アインツベルン欄参照

全て翻し焰の剣（くさなぎのつるぎ）（宝具）

サーヴァント・セイバー欄参照

偽・神霊憑依『終末の黄金華』（グルウェイグ）（魔術）

シグマ・アスガルドの魔術。アスガルド家が代々心血を費やして巫女を改造してきた傑作だからこそ可能な降霊術。その名の通り神霊を体に落す業だが、無論現代に真エーテルが存在しない事などの制限により完全なる神霊の降霊は不可能——その現代において限界まで神霊を降ろすことを追及した結果がシグマである。

彼女が降ろすものは北欧神話の女神・グルウェイグ。黄金の擬人化といわれ、彼女が現れる前、神々は黄金に興味を持たなかったが、彼女の出現で黄金への欲望を掻きたてられヴァン神族とアース神族の争いが始まったといわれる。また神々に何度殺されても決して死ぬことがなかった。

シグマが使えるのは、このグルウェイグの権能の一端。具体的に言えば原初のルーンに魅了EX、不死の力。一時的に虹の魔眼を得て使う魅了は魅了の域を超え、意思を持たぬ物質さえ引き付け操る（サーヴァントであっても対魔力EX持ちでない）と防げない。明が無事だったのは『破滅呼ぶ勝利の剣』のため。明との最終決戦では空間自体で明を潰しにかかった。また神話の不死はそのまま、いかなる方法でも彼女を殺すことができない。そもそも、憑依空間において「神」である彼女が死を迎えるのはそのまま一つの世界の終わりでもあり、シグマが死ぬと同時に同空間にいるものも世界もろとも死ぬことになる。

最終的にイマジナリ・ドライブ無限展開の想像明最終形態によって虚数空間送りにされて、生死不明。

一応この魔術を発動させるためには下準備（工房作成）が必要で、シグマは第二章終了以降、ほとんど大空洞に籠っていた。また燃費も良くはないのだが、それはこれまで蓄えつづけた回路と地下空洞に渦巻く魔力を利用している。

景行天皇（けいこうてんのう）（その他人物）

第十二代天皇、和風諡号は大足彦忍代別天皇（おおたらしひこおし

ろわけのすめらみこと)。セイバーこと日本武尊の実父だが、神の血はヤマタケの十分の一以下(ヤマタケが異常)。子供が八十人以上いるため、ヤマタケひとりにかけられる時間が多くなかったことがあらゆる悲劇を生んだともいえる。景行天皇本人も熊襲征伐に出たこともあり武勇もある。ヤマタケを遠ざけたのは自分の身に危険を感じたことと、「これを大和の国において置いては災いを呼ぶ」と危惧したから。

余談だがもしヤマタケが大碓を殺さなかった場合、景行天皇はヤマタケを信頼するがその腕を買われて結局ヤマタケは東征に行くことになる(御付の軍ももつとたくさんもらえるのでだいぶ東征軍の雰囲気は明るくなる。IF日本書紀ルート)。

啓示(けいじ)(スキル)

”天からの声”を聞き、最適な行動をとる。『直感』は戦闘における第六感だが、啓示は目標の達成に関する事象全て(例えば旅の途中で最適の道を選ぶ)に適応する。

だが根拠がない(と本人には思える)ため、他者にうまく説明できない。

所持サーヴアント……ライダー(A)

ライダーの場合、天というよりは「天津神々」の意志を聞く。というかこいつは建御雷。

気配遮断(けはいしやだん)(スキル)

「暗殺者」のクラス特性。

自身の気配を消す能力。完全に気配を断てばほぼ発見は不可能となるが、攻撃態勢に移るとランクが大きく下がる。

所持サーヴアント……アサシン(A+)

あくまで盗賊であるアサシンは、トンズラをこくときにこそ真価を発揮するので逃走時に十分が発動する。逃げ足ならサーヴアント随一。

黒刃影像(こくじんえいぞう)(魔術)

明の魔術礼装。明の影の分体。簡単に言えば思うように飛ぶ刃。ただし操り方は視覚に頼っているから、複雑な挙動は視界の良い場所

でないとは難しい。単に手元に戻すだけなら視界がなくても可能。

動力源は明の魔力の為、ためられた魔力が尽きればただのナイフに戻る。確氷は宝石魔術のような力の流動を特性とせず、むしろ分解の特性であるために魔力は貯められて精々一時間程度。魔力がある間は影の分体でもあるため、ナイフから魔術を放つこともできる。最終戦で一成に貸していたが、使い手が一成なのでそのときはただのナイフ。

言上げの弓（ことあげのゆみ）（スキル）

アーチャーの放つ弓に幸運補正をかける。

敵とアーチャーの幸運値に開きがあればあるほど、弓は必殺となる。

所持サーヴァント……アーチャー（A）

約束された栄華の月（このよはわがよ）

サーヴァント・アーチャー欄参照

## 【サ行】

相楽麻貴（さがら まき）（その他人物）

明の学友。同じ経済学部。実は明と同じ中学校出身だったが、中学当時、麻貴は明を知って居たが明は麻貴を知らなかった。過去に魔術師がいたのか、靈感を持っておりセイバーを人間ではないと見破っており、明とセイバーが何か危険な事をしているのもわかっている。純粹に友として、明の性質と在り方を心配してセイバーに託す。

シグマ・アスガード（マスター）

マスターと書いたがマスターではない。マスター・シグマ・アスガード欄参照

宝石近接格闘術（ジュエル・サイレント・キリング）（魔術）

ハルカ・エーデルフェルト独自の戦術。エーデルフェルト家伝来のレスリング格闘術はもちろん、時計塔で学ぶに当たり、他家の格闘術を吸収し自ら改良（改造）した独自の格闘術。こだわりなくつかえそうな部分を取り込んだ末の混合格闘術のため、ハルカ自身は「時計

塔流」と呼んでいるが、時計塔独自の格闘術というわけではない。な  
んやかんや脳みそ筋肉傭兵エーデルフェルトである。

心眼（真）（しんがん・しん）（スキル）

修行・鍛錬によって培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残さ  
れた活路を導き出す戦闘論理。

所持サーヴァント……ランサー（A）

神象宝具（しんしょうほうぐ・神象兵装）（魔術）

当SSでは主にライダーの宝具全て。神造兵装が「人の望みによつ  
て造られながら、人の意思に影響されず生まれるもの」であれば、こ  
ちらは「神の望みと神の意志によって生まれた、神のために生まれた  
もの」。

神象兵装にまつわる人の幻想は、神象兵装にまつわる神話とともに  
育まれる。

神性（しんせい）（スキル）

神霊適性を持つかどうか。ランクが高いほど、より物質的な神霊と  
の混血とされる。

「粛清防御」と呼ばれる特殊な防御値をランク分だけ削減する効果が  
ある。また、「菩提樹の悟り」「信仰の加護」といったスキルを打ち破  
る。

所持サーヴァント……セイバー（BまたはD）、ライダー（A+）

セイバーの素の神性はBだが、彼にその自覚が薄い事と神嫌いに  
よってDまでランクが落ちている。しかし神剣所持時は加護により  
Bまで戻されている。

ライダーはいわずもがな、国津神と天津神の両親を持ちかつ建御雷  
の別人格であるため。

神内御雄（じんない おゆう）（マスター）

マスター・神内御雄欄参照

神内美琴（じんない みこと）（その他人物）

マスター・神内美琴欄参照

酒吞童子四天王（しゅてんどうじしてんのう）（その他人物）



茨木童子・星熊童子・虎熊童子・熊童子・鐘童子の四人。五人じゃねえかとおつこんではいけない。茨木を副首領としてそれ以外を四天王としよう（適当）。

茨木童子は主に狩衣姿の青年で、副首領として大暴れしがちな他メンバーを仕切る役回り。酒呑童子と他の四天王が暴れる方が好きで呪術の勘所を忘れがちな分、最も呪術に長けている。酒呑童子とは男女の関係は全くない。もし金時が人間側でなく鬼側について、酒呑童子と恋人になっても酒呑童子が幸せならば茨木童子は気にしない。同族にも拘わらず酒呑童子を謀って殺したという点で、金時大嫌い。

星熊童子は人間の姿であるものの、赤っぽい肌と虎柄の腰巻に金棒が武器という最も鬼っぽい姿をしている。脳みそ筋肉マンのため、四天王の中でも鉄砲玉的存在。比較的クールな虎熊童子とコンビになっっていることが多い。

虎熊童子は黒髪ポニテに二刀流の美女。スレンダーでくのいち風。四天王の中でも比較的冷静で頭脳ポジションであるが、その割に喧嘩っ早いから結局相棒の星熊童子と得物争いをしていことも多い。

熊童子・鐘童子は瓜二つの少年姿。水干を着た美少年で、一目ではどちらがどちらか判断することができない（酒呑童子、四天王ズは見分けられるらしい）。喋るときもほぼハモってる状態。寡黙な方で馬鹿騒ぎで中心になるより、隅っこで酒を飲みながら眺めているタイプ。

首領の酒呑童子と同じく決まった姿かたちは存在せず、自由に変化で変わることができる。上記の姿で出てくることが多いのは、単にその姿が気に入っているから。

全員酒呑童子大好きファンクラブ。酒呑童子は鬼サーの首領（ドゥン）。

真凍咲（しんとう さき）（マスター）

マスター・真凍咲欄参照

神の方便鬼の毒酒（しんべんきどくしゅ）（宝具）

サーヴァント・キャスター欄参照

素戔嗚命（すさのおのみこと）（その他人物）

直接本編に関係のない神霊。海原を干上がらせたり、高天原にウンチをぶちまけたり、馬の皮を剥いでぶん投げ、マザコンのうえシスコンであり、女装して詐術を弄しヤマタノオロチをぶつとばして最後はカワイコちゃんとかくつつく日本神話の最強DQNドラゴンスレイヤー。そういえば親バカでもあった。

嵐の化身であり天叢雲剣の本来の持ち主。百パーセントの神剣解放ができるが、本人はそれよりも荒れ狂う嵐のままに剣を振るうほうが性に合っている（ヤマタケ式解放）。

セイバーは素戔嗚のアルターエゴではないが、性格的にはかなり近い。感情を放出するタイプか、内にためこんでいくタイプかの違い。

姉の天照筆頭に神々が葦原国の邪神討伐計画には興味がないため、姉たちが何をやってたのかよくわかっていない。ヤマトタケルが自分をモデルに製造されたことも後で知った。高天原追放神話があるため、神格落しで春日聖杯戦争に召喚されることもありえた（クラスはセイバー・ライダー・バーサーカー）。当SSでは草薙Ⅱ天叢雲のため、熱田神宮の剣で呼ぶこともできるが今回はヤマタケの世界契約があつたため出てくることはなかった。天叢雲剣は標準装備。

蘇民将來說話で牛頭天王と同一視されているため、疫病神の親玉でもある。本人も根の国住まいのため、極東における嵐の神霊。ワイルドハント

アライメント混沌・中庸。

明はヤマタケセイバーではなくスサノオセイバーを呼んでいたら、ヤマタケ明のめんどくさいいぎこぎはなくあっさりと解決する。ただしメチャクチャセクハラされる。

セイバー（サーヴァント）

剣の英霊。剣士の英霊。「三騎士」の一角で、バランスが取れた能力から「最優」と称される。サーヴァント・セイバー参照

戦闘続行（せんとうぞつこう）（スキル）

名称通り戦闘を続行する為の能力。決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能。

所持サーヴァント……キャスター（A）

逸話では首を切られた後も、首だけで頼光四天王に襲い掛かり食い殺そうとしたという。

千里天眼通・蒼（せんりてんがんつう・あお）（魔術）

安倍晴明が幼い時に救った蛇が縁となり、竜王から送られた「青眼」による能力。これにより晴明は鳥獣の言葉を解し、人の過去と未来を見通すようになったという。

その実は五感から得た情報を入力として五行（根源）にアクセスし、望んだ情報を出力として受容する能力である。部分的に根源と接触する極めて高度な魔術。目はあくまで送受信を行う装置であり、送信する情報を選択し、返信を受け取り理解するのは脳のため魔眼ではない。

具体的に可能な事柄は、未来視・過去視、それにまつわる技能の取得。

未来視は、入力を中心に五行から「もつとも可能性の高い」未来の選択肢を映像として取得する。「可能性の高い」未来を取得するだけなので、測定ではなく予測の未来で改変可能。また高次の術者であれば「強固な望んだ未来」の幻想（イメージ）をインプットとして、測定の未来視もできるようになる。しかし現在の一成にできることは行き当たりばつたりに未来を見るだけで、どこそこのいつをみたい、と制御ができていない。

過去視は未来視と同様に入力を中心に五行から過去にまつわる情報を持つてくる。たとえば目の前に一つの箱があったとして、それを入力として過去その箱がどこにあったか、誰の所有物であったかなどの情報を取得できる。情報として得るだけなので、記憶の追体験をするわけではないために壮絶な過去を体験することで精神をやられる可能性はない。サイコメトリーみたいなもの。勿論物体だけでなく人間の過去も覗くことができる。その副産物として、覗いた人物の技能を一時的に取得することも可能。しかし技能と方法は身につくが、あくまで使用するのは術者の体である為、体力等がおっつかずに大本と同様のことができるかは術者のスペック次第。

一成は対アーチャー戦にて安倍晴明直系の子孫である自分自身の

体をインプットとし、安倍晴明の術儀を一時的に取得していた。最後の対御雄戦ではご神体である超占事略決写本も加え、さらにその精度を上げて戦った。

また、過去を覗きごんごん遡っていけば、この人間の過去は、この人間を生んだ親の過去は、この親の過去は、国の過去は、地球の過去は、宇宙の過去は、……と際限なく遡ってしまい最後には「根源」そのものに至ってしまい、破滅する。

ちなみに本編において一成は最後まで「検索」を完璧にできていない。

晴明の血を受け継ぐ土御門の家系には、この体質（機能）を持った子が十代に一人前後の割合で排出されている。しかしこの「機能」を覚醒させるためには多量の魔力が必要とされ、魔力が足りなければ覚醒せず、この「機能」があることさえも気づけない。

しかし気づかずとも「機能」は確固として魔術師の体内にあり、かつ何をおいてもこの力を真つ先に覚醒させようとする性質を持つ。ゆえに他の魔術を行使する術式を組み実行したとしても、「機能」を覚醒させようとする性質が相剋し、結果成そうとした魔術は大抵失敗する。

つまりこの「機能」を持ち得たとしても、それに見合うだけの「魔術回路Ⅱ魔力」を精製できなければ、むしろ、「不出来な魔術師（陰陽師）」の烙印を押されて生涯をすこす羽目になる。現にそれでこの稀有な機能を持ち得ながら、「不出来」として不遇をかこつた土御門の術者は多い。というか、この「機能」を覚醒させられる時点でかなりの魔力と才覚を有していることを意味し、そういった人物は仮に千里天眼通がなくても土御門に名を遺す。

ちなみに一成がかりうじて治癒や防壁の術を行使できていたのは、起源「保護」があるため「機能覚醒」の相剋に押し勝っていたから。

しかし聖杯戦争参加で、「聖杯から魔力が送られていたこと」「アーチャーによって重傷を負った生命の危機」がスイッチになり、かつ「大西山という魔力塊の中で戦闘を行った」ことにより、千里天眼通が覚醒する。ただキャスター戦後は魔力不足に陥り、キリエの魔力供給を

受けるまでは使用不可になっていた。

魔術回路は枯渇寸前だが、元来一成の資質は「保護」の「一点特化」で優れている。もし千里天眼通の機能を受けずに生まれれば稀代の結界師となり、土御門最後の精華となっていた（素質はあるが、魔術回路が枯れかけているのはどうしようもない）。やっぱり呪詛の類は苦手。

また一成の祖父嘉昭が一成のこの体質を看過してしまっていたのは、最後に天眼通を発現させたものが戦国時代であることに加え、関白秀吉の時に陰陽師は迫害の憂き目にあい、その際多くの研究書が焼かれてしまったことによる。

【タ行】

対魔力（たいまりよく）（スキル）

魔術に対する抵抗力。一定ランクまでの魔術は無効化し、それ以上のランクのものは効果を削減する。サーヴァント自身の意味で弱め、有益な魔術を受けることも可能。なお、魔力によって強化された武器や、魔術によって作られた武器による物理的な攻撃は効果の対象外。また、呪術は物理現象であるために対象外。

「剣士」「弓兵」「槍兵」「騎兵」の四クラスにクラス特性として与えられるが、英霊自身の能力や逸話によってもランクは増減するため、必ずしも同クラスが同ランクになるわけではない。また、他のクラスでも生前の逸話次第では所持が可能。

所持サーヴァント……セイバー（A）、ランサー（B）、アーチャー（C）、ライダー（A）

天啓齋す導きの金鷄（たかむすびのやたがらす）（宝具）

サーヴァント・ライダー欄参照

建御雷（たけみかづち）（その他人物）

本編に出てくるわけではない、日本神話の神霊。イザナギが息子であるカグツチの首を切り落とした際に飛び散った血液から生まれた。葦原中国平定に於いて、「いい加減国よこせや」とキレかけの天照と高天原の神々の推挙を受けて天鳥船に乗り込みフツヌシを携え降臨し、タケミナカタをぶつとばして無事平定を成し遂げる高天原最終兵器。武神でもあり雷神でもある。葦原中国平定を終えてからは高天原でまったり暮らしていたが、時が経っても葦原の天孫が周りの悪神共に悩まされているのを見かねたこと、天孫による統治を広げる目的もあり、建御雷が再度使わされることに決定した。だが時が経ちすぎたり、すでに世界は物理法則に支配されつつあったため、再度の神霊降

臨は不可能だった。よって次善の策として建御雷が人として転生して役目を果たすこととなった。その転生先がカムヤマトイワレヒコ、後の神武天皇である。

転生後は自分が神霊であることを忘れたまま成長するが、自分が他の人間とは明らかに異なり神命を授かった存在であることは自覚している。そして熊野において布津御霊剣を授かった際に本来の自分（建御雷であること）を思い出す。だが、本来何者であったかを思い出したことによりこれまで人として育ってきたカムヤマトイワレヒコとしての人格がより鮮明となり、建御雷としての人格はむしろ影に押しやられてしまうことになる。

建御雷自体の性格は寡黙で冷静沈着。例えるなら戦闘マシーンで、セイバーから「人ではない」ことに悩む葛藤を全部抜き去った正真正銘のターミネーター神霊。略して神（カーミ）ネーター。心はあるものすごくさっぱりしていて「兵器である己」を是とし、そう扱われることを当然としている。道具としての幸せを体現しており、そのあり方に不満はない。日本神話最強についてはすみわけって感じで、全体宝具スサノオ単体宝具ミカヅチ、破壊力あるけど制御できない暴風スサノオ、大規模破壊は向いてないけどコントロールできる神（カーミ）ネーターミカヅチ。ギャグが寒い？すまない。

ちなみに建御雷自体の本体は天沼矛であり、混沌を裂いた原初の雷の擬神化。

単独行動（たんどくこうどう）（スキル）

「弓兵」のクラス特性。

マスター不在・魔力供給なしでも長時間現界していられる能力。マスターがサーヴァントへの魔力供給を気にすることなく自身の戦闘で最大限の魔術行使をする、あるいはマスターが深刻なダメージを被りサーヴァントに満足な魔力供給が行えなくなった場合などに重宝するスキル。反面、サーヴァントがマスターの制御を離れ、独自の行動を取る危険性も孕む。

所持サーヴァント……アーチャー（C）

マスターを失っても、Cランクならば一日は現界可能。

直感（ちよっかん）（スキル）

戦闘時、つねに自身にとつて最適な展開を「感じ取る」能力。Aランクの第六感はもはや未来予知に近い。また、視覚・聴覚への妨害を半減させる効果を持つ。

所持サーヴァント……セイバー（A）

土御門一成（つちみかど かずなり）（マスター）

マスター・土御門一成参照

土御門（つちみかど）（魔術）

平安時代の安倍清明に端を発し、歴史は専念を数えるもつとも正当な陰陽道を受け継ぐ一族。分派が多いため、陰陽道自体を旨とする魔導の家は無数に存在するがその宗家的存在である。しかし土御門家の魔術回路は数世代前から減退の一途をたどっており、一成の次で魔術回路がなくなってしまう。主人の嘉昭は一成に魔術刻印を譲らず、分派の陰陽道の家から子をもらい継がせる予定である。

陰陽道は元々道教の影響を強く受けているため、「呪術」としての性質を強く持つ。魔術は「そこにあるものを組み替える」術であるが、呪術は「自らの体を組み替える物理現象」として扱われるため、サーヴァントの対魔力を貫通する。また、確氷の体質も「魔術」に対する抵抗力のため、明にも効く。

専ら土御門家が得意とするのは使役——式神の術である（春日聖杯の令呪担当）。その派生で呪殺も得意とする。一成の「保護」は正直、現在の土御門陰陽道からは若干ずれている。

土御門正明（つちみかど まさあき）（その他人物）

一成父。御年四十三歳。嘉昭の実子だが、跡継ぎではなく刻印も受け継いでいない。最初は後を継ぐ予定であったが、母の末路を知ってしまったことが決定的引き金になり跡継ぎを退いた。現在サラリーマンとして働いている。嘉昭が割合あつさりと跡を継がないことを許したのは、正明の回路や素質がそこまで優れたモノではなかったため。ただし妻の泉希は母体として優れていたため、その子供は生まれたら跡継ぎにすると言われていた。（結果として一成がへっほこだったため、嘉昭は落胆し夫妻は喜んだ）



土御門泉希（つちみかど みずき）（その他人物）

一成母。御年四十一歳。土御門家に嫁入りをしており、旧姓は三善（みよし）で、こちらは今も残る陰陽道の家。元々三善家の跡継ぎではなく、他家へ嫁に行くことだけが決まっていた。ぶつちやけた話正明よりも魔術の素質はあるが、必要がないとして磨かれていない。元々魔導に命を懸ける意味を見出していたわけではないが、家に逆らうほど強い思いがあつたわけでもなく、言われるがままに土御門家に嫁入りした経緯がある。彼女が一成にその道に行つて欲しくないと思つたのが、一成が生まれたことそのものと、正明の母の末路を知つたことによる。なんだかんだ、正明と泉希は似た者夫婦だつたことになる。

正明泉希夫妻の二人はかかあ天下気味だが、土御門家の最高権力者が嘉昭のため、あまりその気配は感じられない。

土御門嘉昭（つちみかど よしあきら）（その他人物）

一成祖父。御年八十、現土御門家当主。魔術刻印もまだ自分で保持している。春日の聖杯の首謀者で、当初の予定通り五年で魔力が満ちれば自分が戦争に参加するつもりであつた。だがその目算が外れたため、かつ一成が不肖の孫であつたために今回の戦争は見送る予定だつた。彼が生まれた頃には既に土御門家の回路は限界に達しつゝあり、彼自体が「土御門家最後の精華」と言われていた。その名の通り呪術の腕は当代最高峰であり、特に呪殺に長じていた。良く言えば職人気質の魔術師で、悪く言えば魔術師らしく一般の倫理観は失われている。彼の妻である鈴子（すずこ）は生きながらにして春日聖杯の核となり、春日聖杯がセイバーによって破壊されるまで固定され続けていた。一成の不出来を見て、ついに自分直系の血筋に刻印を譲ることを諦め、他陰陽師の家系から養子をとりつがせることに決めた。余談ではあるが、日本史 fate アナザールートでは間桐さんちの蟲爺ばりに八面六臂の活躍をする。

尊きを受け継ぎし剣（つぼきりのみつるぎ）（宝具）

サーヴァント・アーチャー欄参照。

破滅呼ぶ勝利の剣（テイルフィンング）（魔術）

これ単体として宝具ランクはC（実質無限の魔力供給を可能とするが、その魔力をどう使うかは使い手の采配に委ねられるため）。

碓氷の一代目が大家から強奪した宝、現存する宝具。破滅剣ティルフィング。北欧神話においてオーディンの孫に脅迫された鍛冶の妖精（ドウエルグ）が造りだした魔剣。細かい神話は作中の描写とグルグル先生に任せるとして、その機能は「願いを叶えるが、持ち主は破滅に至る」剣。言い換えて「敵を屠るという手段を以て願いを成就させる」、つまり「勝つまで（敵を殺すまで）戦い続けることを可能とする剣」。

剣を鞘から抜き払った担い手の魂の情報を取得し、星幽界から魂を引き下ろして魔力に変換し、剣から自身の魔術として放つことができる。魂を降ろすことに必要なエネルギーより魂自体のエネルギーの方が大きいため、実質永久機関であり限定的第三魔法。その魔力に物を言わせた分厚い結界で様々な魔術干渉から持ち主を護り、対魔力はEXランクに相当する。

難点の一つ目は、無限魔力は剣から魔術としてしか放てず（つまり敵を殺すためにしか使えない）用途が限られてしまっていること。二つ目は戦い続けた末に敵を殺せたとしても、剣を手放した瞬間に担い手の魂が剣に強制的に奪われてしまう＝死を迎えること。

この二つ目の難点のため、宝具を持つ碓氷家もまともに扱えずに来た。しかし明は虚数魔術であらかじめもう一人の自分を生み出し、そのもう一人の自分の魂を魔剣に食らわせることによりノーリスクで使うことができる。

ちなみにシグマは魔剣を碓氷が持っていることは知っていた為、魔剣の機能（願いを叶える）で聖杯が紛い物でもきちんと機能するモノに作り替えようとしていた。

シグマ曰く、神代の宝具というものは本来真エーテルの満ちた世界でもって振るわれるべきものであり、エーテルの薄い現代においては神話そのものの力を発揮できない（終末の黄金華が「偽」の冠を戴くのと同じ理由）。本来はもつと凄まじい力で本当に「願いを叶えていた」のではないかと考えている。

また碓氷（明ではなく）も、限定的第三魔法の具現である魔剣を以て、仮に聖杯が紛い物でも全き聖杯にできるのではないかと考えていたらしい。

デカイセイバー（サーヴァント）

セイバーの肉体最盛期の姿。見た目は二十五歳前後・身長百八十三センチ、体重七十八キロのややマツチヨ寄りのただのイケメン。しかしこの時期鬱っぽかったので、現界時の姿は最盛期の姿として少年である。余談だがイケメン度合はプロトセイバーとどっこいどっこいをイメージしているものの、無愛想で目つきが鋭く、何を考えているのかわかりづらく近寄りがたい感じ（実際は「夜何食べよう」としか考えてない）。

これはこれで需要はある（真顔）。

鉄人（てつじん）（スキル）

その尋常ならざる強さゆえに、体が鉄でできていたという伝説により生まれたスキル。Bランク以下の物理攻撃を無効化する。

所持サーヴァント……バーサーカー（A+）

実はランサーの「無傷の誉れ」と効果は同じスキル。

動物会話（どうぶつかいわ）（スキル）

言葉を持たない動物との意思疎通が可能。動物側の頭が良くなる訳ではないので、あまり複雑なニュアンスは伝わらない。

所持サーヴァント……キャスター（C）

徳川家康（とくがわいえやす）（その他人物）

ランサー生前の主君にして、江戸幕府將軍一代目。タヌキおやじとの定評が高いが、若いころは苦勞人なのでその結果としてのタヌキおやじ。ただし型月世界の本物の家康は若いころに死に、それからは影武者の家康がまじもんの家康として動くというリアル映画「影武者」状態らしいね。家康が幼少のころ（本物の家康）から仕えていたランサーは薄々入れ替わったことに感じていたものの、それを口に出すことはなかった（言い立てても徳川にいいことはない、影武者の家康が悪人でなかったことをわかっていた）。めんどくさいことに定評のある三河武士のアイドル。

絶てぬものなき蜻蛉切（とんぼぎり）（宝具）

サーヴァント・ランサー欄参照

## 【ナ行】

二の太刀要らず（にのたちいらず）（魔術）

神内美琴の得意とする剣術。「一撃必殺」を旨とする九州は薩摩の示現流。現在はその「一撃」をはずした後の為の連撃もあり、美琴は免許皆伝の腕前を持つ。本来この剣術は刀の切れ味を重視せず破壊力をよしとするため、彼女は黒鍵を用いて攻撃を行っている（投擲もする）。起源「放出」を使いこなし、攻撃の出力だけならサーヴァント一歩手前レベル。身を顧みず、一撃に全力を込めるならば瞬間的に筋力……Aの破壊力に達する。

## 【ハ行】

バーサーカー（サーヴァント）

サーヴァント・バーサーカー欄参照

破軍七星剣（はぐんしちせいけん）（ロンギヌス・オリエンタル）ルート（その他）

描かれることはないBeyondアナザールート。本編（beyondルート）がSNでいうfaterルートとUBWルートを足して二で割ってエクス↑カリバー↓で木っ端みじんにした感じとすれば、こちらはHFルートの立ち位置。とは言ったものの、ガツチリと話が決まっているわけではないのでフワツとしたイメージを書いておきます。

一成が本当に主人公をし、嘉昭じいちゃんが蟲爺並みの八面六臂の暗躍をしキリエと大聖杯を奪取し、神父とシグマが味方になるもの破滅剣は叩き折られていてセイバーはオルタになるし悟おじちゃんとか咲ちゃんとかは死に、七星剣を持った一成が死にかけながら大暴れし、ついでに正式に一成×明が成立する。一成に超強化入って本編でイマイチ全力を見せられなかった千里天眼通完全覚醒。

ちなみにライダーが仲間になるんだけどマジで役に立たない。

一時期マジで二ルートやるべきではと思ったものの、beyondルートでだいたい全鯖見せ場はあったし、マスターズも大体……となった、あとどうせ長いので書く時間と熱意と他のものの書きたさ、時間は有限（リアル）という事情でお蔵入り。誰か書いて。

ハルカ・エーデルフェルト（マスター）

マスター・ハルカ・エーデルフェルト参照

反骨の相（はんこつのそう）（スキル）

一つの場所に留まらず、また、一つの主君を抱かぬ気性。自らは王の器ではなく、また、自らの王を見つける事ができない流浪の星。

所持サーヴァント……アサシン（C）

同ランクのカリスマ等のスキルを無効化する。このスキルによりライダーの鳥に対し抵抗を見せたが、完全に抗しきるには至らなかった。

将門大新皇（ぼんどうのてんのう）（宝具）

サーヴァント・バーサーカー参照

飛行（ひこう）（スキル）

体一つで空を自由に飛ぶスキル。

所持サーヴァント……セイバー（C）

Cランクでは普通に飛行する分には音速も越えられる。だが、飛行状態での宝具の解放は威力が減殺される。

聖杯（ひじりのさかずき）（魔術）

冬木の聖杯を模倣して造られた聖杯。冬木の御三家のうち、残っているのはアインツベルンのみで、新たな協力者として遠坂の代わりに碓氷、間桐の代わりに土御門となっている。冬木の模造のため基本的に型落ちではあるものの、サーヴァントを七騎呼び出し、七騎消滅させた際には根源に至る力を持っている。ただし、聖杯の汚れも模造されているため、願いの成就の方法は殺戮に寄ってしまう。

冬木聖杯との違いは、サーヴァント制御（令呪）の役割が陰陽術を旨とする土御門家担当となったため、「聖杯」の概念がない日本の英霊が召喚可能であること。理論的には春日聖杯でも西洋の英霊を呼ぶ

ことは可能だが、陰陽道の「支配」のため、西洋の英霊を呼んだ場合に万が一令呪の縛りが十分に働かない可能性があつた。令呪の問題と、開催地が日本であることの知名度補正を考慮にいれたため、結果的に日本の英霊のみの聖杯戦争となつた。

また、ライダーの離れ業（一度召喚を受けておきながら、拒否して大聖杯にとどまる）が

可能であつたのも、陰陽道を導入した春日聖杯であつたため。冬木では不可能。

土御門が聖杯模造に参加した理由は「枯れかけの回路を復活させ、さらなる研鑽を積めるようにすること」。碓氷が参加した理由は、元々碓氷が第三魔法もどきの剣を持っており、仮に聖杯自体が不出来であつたとしても、家宝で補い第三魔法に辿り着く公算を持っていた為（碓氷はこのことを神父にもアインツベルンにも伝えていない）。大聖杯の設置場所は土御門神社直下の大空洞。本来は大西山に設置したかつたが、碓氷が許可を出さなかつた。最終的にセイバーの対城宝具によつて大聖杯は破壊された。

藤原隆家（ふじわらのたかいえ）（その他人物）

平安時代中期の人物。生前のアーチャー藤原道長の甥であり政敵、暴れん坊貴族。結果的には隆家が政争に敗れて道長が出世することとなつた。そのため生涯（道長がいる限り）栄達の芽はなくなつたわけだが、彼は自ら京を去り、九州大宰府において異民族の襲来を追い返すという快挙を成し遂げる。だがかつて道長の政敵であつたという過去が尾を引いて、その功績も都において評価されることはなかつた消された英雄。

当時の平安京社会において、隆家の最盛期は道長に敗れる前——彼の父も母も姉も兄も健在で、『枕草子』に描かれる栄華を謳歌していた十代後半の時代だと認識されていた。それ以降彼は都において「過去の人」だつた。

しかし彼の特筆すべきは都で栄達が断たれたとしても、人生を諦めなかつたこと。誰にも評価されなくても、現地にて正しく武力を使い略奪者を撃退したことは彼自身の誇りだつた。

「別に褒められるなんて思ってたんじゃねえ。ただ、やる奴が俺  
しかいなかったただけだ。つか、今更叔父上（道長）に褒められても気  
持ち悪いしな」

それがかつての政敵であり勝者に、己の人生に対するしこりを残し  
たとはつゆほども思ってははいない。流石に大人なので付き合いは多  
くこなしていたが、道長のことは嫌い。

実は作者の一番好きな日本史の人物で最初サーヴァントになる予  
定だった。しかしマイナー人物の逸話からうまく宝具をつくれな  
かったこと・道長と隆家の確執とか大好物だけどもあまりにも内輪話過  
ぎてつまんなかったためにお蔵入りした。あと引つ張つてくれる気  
のいい兄貴系キャラがアサシンと被った。

経津主神（ふつぬし）（宝具）

あら？ 剣わたしの項目があるの？ ヤツダくくだったら最初から言いなさ  
いよツだったらちゃんとおめ研かしきたのにイ！ もうあんまり見ない  
でくくスツピンなんだから！ え？ なんで本編で人格が出てこないの  
かって？ もくく聞いて！ あのバカレヒコ、召喚に応じたと思つたら  
「クソ聖杯を清掃するぞくく」とか言い出して、でも思つた以上にてこ  
ずつて……あのバカを守るために私がひと肌ぬいで人格が削ぎ落ち  
ちやつたのよくく!! バカレヒコは嫌いだけど、あれでも建御雷ダーリンの別  
人格だもの、放つておけないわよツ、まったく世話が焼けるんだから  
……もくくなんで超絶クールガイ、触れれば切らんみたいなたケミカ  
ちゃんの別人格があんなちゃらんぽらんバカなのか信じられないわ  
ヨ！ ハツ……でもクールにふるまう一面、実はハジけたい欲望が表出  
しているとしたら……悪くないわね（真顔）。

開闢せし断絶の劍神（ふつのみたまのつるぎ）（宝具）

サーヴァント・ライダー参照

開闢と終焉分かつ劍神（ふつのみたまのつるぎ）（宝具）

サーヴァント・ライダー参照

分解（ぶんかい）（魔術）

碓氷家の魔術特性。また、碓氷明の起源でもある（覚醒はしていな  
い。明は魔術特性と起源の二重で分解を得手とするため、機械や人体

をバラすのがとても得意)。碓氷家の魔術師の特異体質でもあり、他家の魔術師による干渉を極めて受けにくい（暗示や洗脳にまずかからない）。「分解」の特性で魔術を分解してしまうため、碓氷にそれらにかかるためには膨大な魔力をかけて行うしかない。分解が間に合わないくらいの物量で攻めるイメージ。碓氷の人間に対して暗示や洗脳をかけるなら、魔術戦もしくは近代兵器で殺した方が早い。

あくまで「分解」であり「破壊」ではない。分析・解析にも通じる特性であるが、明は分解専門で分解したはいいものの元に戻すことはできない。父の影景は起源が分解ではない為、通ずる「解析」にも長けているらしい。

## 【マ行】

魔眼（まがん）（スキル）

魔眼を有していることを示すもの。

所持サーヴァント……キャスター（C）

キャスターの場合、生前の逸話から男女問わず相手に恋愛感情を抱かせる働きを持つ。対魔力スキルで回避可能。対魔力を持っていないくても抵抗する意思を持っていれば、ある程度軽減することが出来る。

スキルではないが、『終末の黄金華』のシグマも魅了の魔眼をもっている。

間宮透（まみや とおる）（その他人物）

碓氷家に勤めていた家政婦。死亡時四十八歳。三十三歳から碓氷家の家政婦となり、明とその姉の世話をしていた。彼女自身交通事故で両親を失っており、施設にて育てられた。一度結婚し妊娠するも、またしても事故で夫とお腹の子供を失う（流産し、その影響で妊娠できなくなっている）。天涯孤独の身であり都合がよい（もしもの場合殺しても文句を言う人間がいなし）とした碓氷影景に碓氷家の家政婦として雇われた。育児放棄状態の影景の代わりに親のように明と姉を育て、授業参観や運動会など学校の行事にも彼女が出ている。



魔術刻印移植中の苦痛・影魔術による精神不安定化・友人の死が重なった中学生の明が、地下室にて自殺を試みた際、透は悲鳴を聞きつけて立ち入りを禁じられていた地下室に足を踏み入れ止血を施し、救急車を呼んだ。明はそれにより一命を取り留めたが、地下室——魔術の生業を見てしまった為に、影景によつて殺される。その死体をどうしたかは影景しか知らないが、当然ながら墓もない（明が聞いていないのは「どうせろくでもない方法」だと感付いているから）。生きた痕跡を世界から失いながら、救った碓氷明に良くも悪くも大きな影響を与えた人間の一人。ちなみに生前影景のことは「旦那様」、明のことは「明さん」と呼んでいた。

魔力放出（まりよくほうしゅつ）（スキル）

武器・自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によつて能力を向上させるスキル。いわば魔力によるジェット噴射。絶大な能力向上を得られる反面、魔力消費は通常の比ではないため、非常に燃費が悪くなる。

所持サーヴァント……セイバー（A）、ライダー（A）

ライダーのスキルは「魔力放出（雷）」の為、攻撃に雷撃が宿る。ちなみにセイバーはマスターが明、ライダーは大聖杯の魔力を吸っている為に燃費の悪さは問題になっていない。神内美琴のは起源により、魔力放出と同等の効果を得ている。

美夜津媛（みやずひめ）（人物）

セイバー生前のリアル俺の嫁その2。男運はないけど女運の良さには定評のあるヤマタケさんです。セクシーかキュートでいえばセクシー。ぶつちやけた話、ヤマタケ氏外見的にはタチバナよりもミヤズの方が好みではある。

兄が東征について行った武者である影響を受け、彼女も剣が使える。だが男勝りに手柄を上げた欲はなく、平和に尾張で暮らせればいいかなという思考。ただ害を成そうとするものには容赦がない。クールデレ娘。

実は彼女も草薙剣の担い手であるため、草薙剣の触媒で召喚に応じる可能性あり。

将門七人衆（みようけんのごかご）（宝具）

サーヴァント・バーサーカー参照

無辜の怪物（むこのかいぶつ）（スキル）

生前のイメージによって、後に過去の在り方を捻じ曲げられた怪物。能力・姿が変貌してしまふ。このスキルを外すことは出来ない。

所持サーヴァント……アサシン（A）

アサシンの場合、死後に歌舞伎として人口に膾炙した「石川五右衛門」像により、義賊であり忍者の技術を取得している。

無傷の誉れ（むきずのほまれ）（スキル）

生涯五十を超える戦場を駆け抜け、なおかつ無傷を貫き通したランサーの逸話によるスキル。Bランク以下の物理攻撃を無効化する。しかしAランク以上の攻撃で手傷を負った際には、傷の回復に多くの時間と魔力を要する（彼の死因が、小刀によって小指を傷つけたことである逸話のため）

所持サーヴァント……ランサー（A）

無窮の武練（むきゆうのぶれん）（スキル）

ひとつの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあっても十全の戦闘能力を発揮できる。

所持サーヴァント……ランサー（A）

## 【ヤ行】

山内悟（やまうち さとる）（マスター）

マスター・山内悟参照

山内華（やまうち はな）（その他人物）

山内夫妻の一人娘。御年五歳。現在は母の椿とともに、母の実家で暮らしている。腕白系じゃじゃ馬娘だが、将来はアサシン曰く「べっぴんになるぞ！」

山内椿（やまうち つばき）（その他人物）

山内悟の妻。御年三十二歳。スレンダー系の美人で、白いワンピース

すが良く似合う良家出身。悟との結婚を実家には認められていなかったが、華の誕生で和解を見た。しかし悟が巻きこまれてしまった事件で、再び実家に連れ戻されている。今は離婚こそしていないものの、別居状態。なんだかんだ旦那を立てるタイプで強く主張することはないが、意思は強い。今も実家において誤解を解き、再び一家で暮らせるように手を打っている。ちなみに悟との出会いは、なんと合コン。二人ともそういうイベントに積極的に顔を出す方ではなく、数合わせで呼ばれたのが始まり。

ヤマタケ顔（やまたけがお）（その他）

なんだこのアホな項目は。それはともかく、beyond世界には日本武尊と同じ顔の人物が二人いる。一人目は日本武尊もとい小碓命の双子の兄、大碓命。双子なのだから同じ顔でも当然である。ただ大碓は小碓と違って感情表現が豊かで愛想がいいので判断はすぐにつく。

もう一人は本編に出ない神霊である素戔嗚尊。というか日本武尊の力のデザイン元が素戔嗚尊のため、むしろオリジナルはこっちである。正しくはスサノオ顔であった。

全ては天下の廻もの（よにぬすつとのたねはつきまじ）（宝具）

サーヴァント・アサシン参照

## 【ラ行】

ライダー（サーヴァント）

サーヴァント・ライダー参照。

ライダー顔（ライダーがお）（その他）

なんだこのバカっぽい項目は（二回目）。beyond世界にはライダーもとい神武天皇と同じ顔も二人おり、一人目は神武天皇の大本である建御雷。もう一人はニギハヤヒノミコト。神武のスペア（バックアップ）的立ち位置であるが、ニギハヤヒも建御雷のアルターエゴゆえ。ただし髪は黒い。

ランサー（サーヴァント）

サーヴァント・ランサー参照。  
ルージュノワール春日（場所）

一成が一人暮らしを営むアパート。築十五年リフォーム済みの三階建て。一階が大家の家兼駐車場、二階に三部屋、三階に三部屋あり一成は二〇二号室の住人。春日駅から徒歩十分、家賃は共営費抜きで五万五千円。二十平米ワンルーム。

春日が近年発展を遂げている都市の為、お隣さんとの付き合いは薄い。二〇二号室は文字通り一成の城であり、友人たちのエロDVD&本の避難場所にもなっている。

## 「ワ行」

この道繋げし我が妻よ（わがつまはや）（宝具）  
サーヴァント・セイバー参照

## ★Q & A

Q ヤマタケのパンツの色は？

A ノーパンなので色はないです。ただし女装の際に、「現代女性はパンツを履くことがスタンダード」と理解しあえて履くときはあります。そのときは明のを参考にします。たまに勝手に穿きます。メチャ怒られます。

Q 破滅剣テイルフィングの宝具ステと、破滅剣を触媒にした時誰が呼ばれるか？

A 明が使ったやつはランクB相当。無限の魔力供給を可能とするも、その使い道は担い手に任せられるのである意味自由度が高いと言えなくもない。

触媒にすると本命ヘルヴォール（伝説最初の方の）

対抗アンガンチュール（伝説ラストの方の）

大穴（いろんな手を使って）ドヴァリン・ドウリン

明が振るう破滅剣と、召喚されたサーヴァントの振るう破滅剣の効果は異なる。

Q ゴッドハンド持ちのヘラクレスや百貌のハサンが破滅剣使ってもノーリスク？

百貌ハサンはアウト。ハサンは一の魂を百個に分割して、大本は一つであると解釈。星幽界から魂を引き下ろす際にはその大本の一つとして引きおろし、最後に魂を回収する際にも大本の一つ分を回収していくため。ハサンが一人が剣を抜き、手放した瞬間に他の九十九のハサンも同時に魂を食われる。

ヘラクレスのゴッドハンドは蘇生魔術の重ねがけだったと思いますが、その蘇生魔術は魂をどう扱っているのかによります。破滅剣の性質上「同一の魂を複数個持っているかどうか」が鍵です。

肉体の消滅とともに消滅した魂を甦らせているなら破滅剣を手放して魂を回収されても、またヘラクレスは復活するから使えます。

Q 今回はセイバー勝利ルートだったが、仮に他の鯖が勝ち残るとしたらどんな勝ち筋があるか。そもそも勝ち筋あるのか。

あります。今回のSSだと、明と一成が同盟組まなかったらおそらくライダー勝利ルートに行っていました。完全別ルートだとアーチャーが勝ってたりしましたね。

4、セイバーは日本英霊が呼ばれる聖杯戦争に優先的に呼ばれるらしいが、日本鯖1、海外鯖5みたいな聖杯戦争でも日本鯖に引かれて呼ばれる可能性はあるのか。

A あります。セイバーは「日本英霊が出る可能性がある儀式（聖杯戦争とは限らない）」に召喚されるので、極端な話呼ばれた日本英霊がヤマタケだけだった、というパターンもありえます。

Q 原作鯖とビヨンド鯖がクラス別対抗戦やったら、各々の勝敗はどうなるのか。

A 四次五次だけ&マスターなど状況とか抜いて相性で考えます（エクストラやFGOまで考え出すとキリない）

セイバー アルトリア対日本武尊

ギリギリ日本武尊？ 流石にアヴァロンに引きこもられると手に負えない。SSでいいところのなかった悲しみの草薙剣は、エクスカ

リバーのようなビームを幻想返しするために存在するので宝具の相性がよくない。ただ戦闘能力自体は総じて互角（アルトリアの方が丸くてヤマタケのほうが攻撃より）。アルトリアは四次みたいにあヴァロンをマスターに持たせたままの方がいいね！ヤマタケ直ぐマスター殺したがるので。

ランサー クー・フリーン対ディルムッド・オディナ对本多忠勝

クーフリーン。ディルの黒子は無意味、かつ黄薔薇はあろうとなかろうと、忠勝は傷を負うこと自体がマズいので宝具自体は忠勝には恐怖ではない。むしろ兄貴の生き汚きの方が天敵でいい勝負をしよう。しかし、この三人衆の戦いは暑苦しいながらも楽しそうな顔をしてそうでよい。

アーチャー ギルガメッシュ対藤原道長

ギルガメッシュ。固有結界は乖離剣で切り裂ける、壺切剣はギルの神性が高すぎて長時間拘束はできない。ただ道長宝具、すごい初見殺しなので慢心しているとアレだけど……。

ライダー メデューサ対イスカンドル対神武天皇

多分神武。二人とも神性持ちだから八咫鳥の効きはイマイチだけど、ライダー自体神殺持ちであり対界宝具で固有結界もぶった切るの、相性がいい。

キャスター メディア対ジルドレ対酒吞童子

メディアの辛勝……？とりあえず酒吞童子は魔術自体の腕はからきしで、魔術合戦を迫られると即死です。あとメディアのルルブレがメディアの魔術よりヤバくて、あれで四天王ズたちの繋がりをばっさりやられたり結界の破壊を試みられる方がつらい。多分ジルドレの怪魔はみんなでよってたかって潰せる気がする。というかある意味ジルとは近いのでは？

アサシン 呪腕のハサン対百貌のハサン対石川五右衛門

百貌のハサン？ というかそもそも、五右衛門の宝具は「宝具として形のあるもの」しか盗めないうえに魔神の腕をどうにかできるか（使えるか）って聞かれたら微妙なので、すごいあっさりハサンズに負けてしまいそう。

バーサーカー →ヘラクレス対ランスロット対平将門

ヘラクレス。ヘラクレスのゴッドハンドがやばすぎた。ランスには一斉に分身して攻勢をかけて殲滅するスタイルでいけば勝てるけど、四次みたいにいへりなどで移動をされ始めると厄介。

Qビヨンド鯖に、今回呼ばれたクラス以外での該当クラスがあれば教えてください。

Aセイバー →ランサー・アーチャー・ライダー・アサシン・バーサーカー

ランサー →ライダー

アーチャー →キャスター セイバー?ないな……

ライダー →セイバー・ランサー・アーチャー・キャスター・バーサーカー

ランサーは当SSの設定限定の節がない事もない

キャスター →バーサーカー

アサシン →なし

バーサーカー→ライダー

Q擬似サーヴァントヘルヴォール(明)のステータスとかなんとか

Aアレ一発ネタだったのであんまり真面目に考えてなかった(笑)

セイバー ヘルヴォール(確氷明) ARTS2枚 Quickl  
枚 Buster2枚

筋力 B 耐久 A 敏捷 B 魔力 A+ 幸運 C 宝具

B

クラススキル

対魔力EX 自身の弱体耐性をアップ

騎乗C 自身のクイックカードの性能をアップ

固有スキル

直感 スター大量獲得

第三魔法(限) NPチャージ

魂の偽造 ガッツ2回+HP大回復

宝具 『破滅呼ぶ勝利の剣（テイルフィング）』（ARTS）  
敵単体に強力な攻撃＋自身にNPリチャージ＋HP回復＋2ター  
ンスタン



【予告】 fate / imaginary bound  
ary

ここは、どこだ。

男が意識を覚醒させた時に最初に思ったことはそれだった。部屋は暗く、日は疾うに暮れきった時間らしい。見知らぬ家屋の中、大体十五平方メートル程度であろうと思われる、広い板張りの部屋のベッドに横になっていた。

ベッドは右側を壁に接しており、足の方にベランダが見える。中途半端に開かれたカーテンからは、白光が差し込んでいる。

——蒸し暑い。

日本の夏は湿潤で不快と聞いていたが、確かにこれは不快だ。夜でさえこうなのだから、昼は考えたくもない。

そこでふと、男は違和感を抱いた。自分がこの日本にやってきたのは、フィンランドに比べれば笑止とはいえ寒さが身に沁みる季節だったような気がしたのだ。

「何を勘違いしているのか、私は」

今が冬のはずはない。それに季節など些事だ。

彼はここ、春日で開催されると言う戦争に参加するために来た。

聖杯戦争。聖杯に選ばれた七人の魔術師マスターと、召喚に応じた七騎のサーヴァントによって行われる血で血を洗う戦争である。男は時計塔から「この聖杯戦争に勝つ（何事もなく終わらせ、できればその聖杯を持ち帰る）」という任務を与えられた。

戦争の監督役である教会の神父とはすでに時計塔からして連絡済であり、触媒もそちらで用意してくれていると聞いていた。

「——私は、一体何を」

記憶が定かではない。この春日という市に到着した時までのことは覚えているが、それ以降自分が何をしていたのか覚えていない。体

は見たところ異状なく、痛みなどもない——丁度その時、階下から何者かが上がってくる足音を聞いた。その音を聞く限り、気配を消す気もなくまた武術を嗜んだものでもないことは明白だった。

それでも彼は張りつめた空気を纏い、懐を確かめた。

「マスター！気が付いたんですね！」

一かけらの警戒もなく扉を開いたのは、なんと女だった。背は百六十あるかないかで、二十歳に満たぬ、少女と女性の間をさまよう年ごろであった。美人というよりは愛嬌のある顔立ちをしており、かわいらしいという言葉がふさわしい。

薄桃色の衣を纏い、白の裳（長いスカート）を身に着けて縞模様の帯を腰のあたりで縛っている。衣よりは濃い桃色の領巾を腕にかけていた。

暗い部屋であつたが、差し込む月光を受けて輝く黒髪は薄く緑色を帯びて見えた。

「貴方は誰ですか」

幻想的なまでの女の姿であつたが、男の体は油断するなど頻りに訴えていた。この女、明らかに人間ではなく——おそらくは、サーヴァント。

しかし女は男の警戒を知ってか知らずか、呆れるほどに能天気な答えた。

「何言ってるんですか、貴方が召喚した愛しのサーヴァントですよ。覚えてないんですか？」

「……」

理解しかねる形容が一か所あつたが、それ以外について考える。確かに自分はサーヴァントを召喚するべき魔術師であり、目の前の女から敵意や殺意の類は全くうかがえない。流星に彼とて英霊召喚は生まれて初めての試みの為、召喚後に疲労しそのまま眠ってしまったこととはあり得る。

男が答えないことを「覚えていない」という返事と解した女は、肩を竦めながらも嫌がることなく説明をした。

「私を召喚した後、お疲れになつて眠っちゃったんですよ。あとここ

はマスターが同盟？を結んでいる神父？からあてがわれた拠点だつて、ご自分でおっしゃつてたところですよ」

召喚の余波で記憶が混濁しているのか。女の言っていることは欠落していない記憶とは一致している。男はまじまじと女を見つめた。「……う・そんなじつと見ないでください、恥ずかしいです」

頬を赤らめる女とは反対に、男は内心首を傾げていた。確かに目の前のサーヴァントは敵ではない。殺意があれば自分が呑気に眠っている間に殺してしまえばいい話で、そうしていいことから明らかに明らかだ。

だが、確か自分が召喚するはずだったサーヴァントは、このか弱い乙女ではなかったような気がする。

戦国の世を風靡し、駆け抜けた無数の戦場に置いて傷一つ負うことなかった益荒男と共に戦うはずだった――

「……ッ」

月光が眩しい。一度目が眩んだ。

「!? マスター、まだ御具合が」

「……いえ、問題ありません。それよりどうやら、召喚の余波で多少記憶が混乱しているようです。状況整理を手伝ってください」

「はい、私にできることでしたら」

男は顔を上げて、女を見た。まだ初見も同然だが、彼女からは邪悪なものを感じない。根が悪い者ではなく、全うで善良な英霊なのだろう。

警戒はしていたが、悪感情はない。

「貴方は何のクラスのサーヴァントなのですか」

「フッフ、当ててみてください」

「言いなさい」

「当ててみてください」

冗談が好きな質なのか、半笑いで素直に答えようとしない。内心面倒くさいと思いなながらも、男はそれに付き合うことにした。見た感じ武勇を誇る英霊とは思えず、また意思疎通もできている。

とすればキャスターかアサシンといったところか。

「キャスターですか」

「違います」

「アサシンですか」

「違います。もつと素敵でロマンチックでいい感じのクラスです！」

サーヴァントのクラスとして、「素敵」で「いい感じ」とくれば、一つである。

「もしかしてセイバーですか」

「ブツブツ！違います！正解は、「ラヴァー」<sup>LOVER</sup>のクラスです！」

キヤー言っちゃったー！とほざきながら顔を手で覆いその場でぴよんぴよん跳ねる女を見ながら、男は内心前言に追加した。

この英霊、アホだ。

というかこのように無駄な問答をしなくとも、マスターは自分のサーヴァントのステータスを見られたはずである。

「……何だ、ライダーでしたか」

「ぐはっ！何故わかりましたし……くっ、ラバーラバーと呼ばせて刷り込んでいく策略が」

「何を刷り込むんですか。ラバーってゴムですか？ゴムのサーヴァントなどありません」

ちなみに英語のLOVERは単数形であれば女の恋人ではなく男の恋人を指すことが多いために使い方としては良くないのだが、純日本英霊である彼女はそこまで頓着していないらしい。ライダーがぎりぎり呻いているところに、男はさらに質問を重ねた。

「もう一つ聞きたいことがあります。召喚に応じたのだから、貴方にも何か願いがあるのでしよう。その願いは何ですか」

英雄となった者が無償で魔術師の使い魔をやるはずはない。彼らは彼等の願いがあつてその立場に甘んじるのだ。しかし、聖杯に掛けるような願いを聞くことは人の奥深くに踏み込む行為である。

だがマスターとのサーヴァントの願いが相反するものだったばあい、協力関係に支障が出る。男としては、彼女の願いが常軌を逸した

ものでなければなんでもよかった。

「……願いですか？まあ、あるにはありますけど、召喚された時点でもう叶っちゃったといえますか。あとは楽しくやればいいかなーとか、マスターの願いを叶えたいなあとか」

「……ふむ。ひとまず、そう信じます」

少々闘争心に欠ける願いではあるが、悪い願いではない。これ以上踏み込む気のない男はそれで良しとしたが、ライダーが問い返してきた。

「私も聞いていいですか？ マスターの願い」

「私の役目はこの戦争に勝ち、聖杯を手に入れることです。それを目的として時計塔から派遣されてきたのです」

ライダーから返事がない。何とも言えない表情で男を見てから、ゆっくり口を開く。

「マスターは、その時計塔とかに命じられたからここにいるんですか？ 聖杯なんて興味ないし戦いたいわけでもないけど、命じられたことだから聖杯を欲するんですか」

「それは違います。この戦争に派遣してくれと願ったのは私自身です。魔術師同士の戦いをしたくてここに来たのです。——願いは戦うこと、役目は聖杯を得ることと言えればいいですかね」

抑々、時計塔にとってこの聖杯戦争は厄介ごとでしかない。既に聖杯は贋作であると認定されているが、神秘を漏らさぬため、万一「渦」へ至ることができた場合の為人を派遣する。

負けることは許されず、榮譽もない。だから厄介者が任命される役目だが、男の家はれつきとした貴族で時計塔でも無下に扱われる家柄ではない。

むしろ一族は男の参加を引き留めたのだが、男の強い意志で派遣が決まったのだ。男は、自ら望んで戦いに身を投じようとしているのだ。

ゆえにライダーの言葉は盛大に的を外している。しかし、ライダーは男の言葉を聞いて安心したように胸を撫で下ろした。

「……そうですか！ならば問題なし——かしこ 畏み畏み申す。たかま 高天祀り

磐座いわざ祀り、八雲やくも祀りて幾星霜。吾われは神の妻ときじくのかぐのこのみ非時香実の巫女、今一時貴方様のお力となりましよう」

たおやかに微笑む女の姿。窓から差し込む月光に照らされた彼女の姿は、神々しくさえあった。サーヴァントはもともと過去の英雄――神代に近い者であれば、そういうこともあるのかと男はぼんやり思った。

「……あ、一つ聞き忘れていました」

男の感慨も知らず、彼女は変わらぬ、神秘さのない声音で軽く尋ねた。

「マスター、お名前を教えてください！」

男にとって拒むほどの問いではなかった。だから時計塔の魔術師は変わらぬ口調で答える。

「ハルカ。ハルカ・エーデルフェルト」

## 【EXTRA】余談

・小碓と大碓（オウスとオオウス）

風も爽やかに鳥さえずる季節。ある晴れた日に、小碓命は兄・大碓命に呼び止められた。それは日課になっている剣の稽古の後のことであった。

「おい小碓！ちよつと待てよー！」

自分と全く同じ顔をした少年が、彼に駆け寄ってくる。パツと見ただけではどちらがどちらか判断できないほどよく似た顔。双子だから当然である。

「なんですか兄さん」

無愛想な顔と同じく無愛想な声で、弟の小碓命は振り返った。肩で息をする兄をため息をついて視た。なぜならこういう風に兄が彼を呼びとめるとき、ロクなことを言わないのを経験からわかっているからだ。

「なあ明日の試合、わざと負けてくんね?」

……これである。

ちなみに大碓命が言う明日の試合とは、御前試合のようなものである。とはいってもそれほど格式ばったことではなく、単に父・景行天皇が息子の成長を見る——稽古を見に来るといっただけの話である。

しかし相手は現人神、尊敬すべき天皇——すめらみこと実の息子とはいえ彼らが緊張しました気合いを入れるのも当然である。

大碓命は弟に向かい、両手を合わせて拝み倒さんばかりの勢いだつたが、当の小碓はあっさりと言った。

「いやです」

「なんでだよ!!この前もその前もお前が勝ってるんだから一回くらいいいだろ!!」

「この前もその前もだけではなく、僕の記憶では僕は兄さんに負けたことはありません」

「ああそうだよ！だから一回くらいいいだろ！俺だつて父君にいいとこみせたい！いつもお前ばっか「小碓はできた子だ」って褒められて

るじゃん！」

「それは実際、僕が兄さんよりできているからです」

無常にも、弟は厳然たる真実を兄に突き付けた。剣の鍛錬だけではなく、神々の伝承の記憶や大和の周りの国々の勉強においても、弟は兄よりも優れていた。弟の方が兄に比べ優れていることは、誰の目から見ても明らかだった。流石にそれを知っている大碓命は、地団駄を踏んで唸った。

「~~~~！知ってるよ！お前もう剣の先生よりも強いしっ！かお前より強い人、大人でもいるの？ほんとに俺の弟??勉強でもわからないこと積極的に聞くん！いい子か！」

「兄さんはできないのに練習もしませんね。だから父君にも嫌われるんです」

「褒められはしないけど嫌われてない！だって前に父君が体調を崩された時、こっそりお会いしに行ったらとっても喜んでたし！」

まだあれは寒い時分だったろうか、父帝が体調を崩されて臥せておられた時期があつた。その時、周りの者からは「安静が必要なのでしばらくはお会いになれません」と言われていたはずである。小碓命は今ひとたび、兄の行状に呆れた。

「また言いつけを破つたんですね」

「う、お、怒られたけど！でも山葡萄持っていったら、父君とってもお喜びになったからいいんだよ！お前の顔見て元気であつて言つたからー！」

「医師は「人と話すことも疲労の元」と言っていた筈です」

「そーかあの時お前も連れてけばよかったのか！お前の方がいい子だからちよつとくらい変なことしても怒られなかったかも！しまった」

最早最初の話は何だったのかすっかり忘れ果てた様子の兄・大碓命はその場で頭を抱えて悶え始めた。正直付き合うのが面倒くさくなっていた小碓命は、元々「わざと負ける」気もさらさらなかったために兄を放置して歩き出した。

剣を下げて、特に目的もなく小碓命はそぞろ歩いていった。初夏の熱



を孕んだ日差しも、風の涼やかさにやわらげられて心地よい。

——全く、兄さんは困ったやつだ。

鍛錬をさぼったり、勉強をさぼったり、いたずらをして周りを困らせたり。父帝も「何が不満なのか」と長い時間をかけて兄と話していたりする。父帝はヒマではないのだから、手を煩わせてはいけない。父帝の役に立てるように、自分たちはしつかり鍛え学んでいかなければならない。

だから自分は決して間違っていない。間違っているのは兄の方だ。

——お前の顔見て元気でたつて言つてたから！

それなのに、何故なのか。あの人に迷惑ばかりかけている兄の周りには、いつも笑顔があつた。いつも誰かがいた。何がいいのか全く分からないが、呆れ顔をしながらも、あの兄から遠ざかる人はいない。そして一向に素行の良くなる兄に、父帝は多くの時間を使つているように見える。

きつと、自分によりも。

小碓命は、黙つて青い空を見上げた。自分の行いを振り返つてみたが、間違つたことは何一つしていない。だからこのまま、頑張ればいいのだと信じた。

### ・ある巫女の話

御杖代みつえしろとは、天照大神を奉り、時にはその言葉を受け取る巫女のことである。

初代御杖代が高齢の為にその役目を彼女に引き継がせたのだが、まさしく彼女はその役割を全うするだけの力を持っていた。生まれ以て神霊の気配とお告げを受け取れるだけの能力を持ち合わせた彼女にとって、御杖代は天職であり神命でもあつた。

神を奉る神宮は、森に囲まれており、人里離れた神聖な場所である。そこに立ち入るのであれば、相応しい手順で身を清めた者たちでなければならぬ。

つまりは日常人の立ち入る区域で人を相手とするのではなく、自然

に宿る神々を相手とすることが彼女の役目であった。そうして、彼女もそれを望んでいた。

——人の多い場所は、あまりにも辛すぎる。

神霊の言葉を聞き届ける彼女は未来をも視る。彼女は今時点において、これから訪れるべき未来がどのようなものか——訪れる可能性の高い未来を知る。それはあくまで「可能性が高い」だけの話であり、いくらでもこれから変えられるものであり、形をもたないものだ。

そして、彼女が見た多くの人々の未来は——悲惨であった。明確に「人を害そう」とする気持ちが無かったとしても、お互いにとって「良かれ」と思つて行動した末に悲劇が待つ。人は悪意によつて不幸になるのではない。善意と、欲と、それから生まれる少しの悪意と、偶然のためだ。

そして人が多い場所では、意図せずしてそれらを視てしまう機会も増える。故に彼女は都を避け、神を奉る森閑たる場所を望んだ——しかし、それすらも、彼女が人を避けた真の原因ではない。

「人の多い場所で暮らしては、きつと私は「未来に形を与えて」しまう」「可能性の高い未来」を見るだけならば、よかつた。しかし彼女は、「彼女が望む未来」を神に問い、神の決裁を受け許可を得たならば、その未来を強制的に確定させる力さえ持つていた。

——もし人里で暮らし続け、あまりにも不幸な最期を迎える人に出会ってしまったら、きつと私は「未来に形を与えて」しまう。

それは他人の未来を、自分勝手に操り決めること。当人の意志も何もかもを無視して、彼女が「幸せ」だと思ふ形を他人を押しつける事だ。人の人生を自分の玩具にすることに他ならない。

たとえば彼女から見れば絶対不幸だと思うことであっても、当人にとつてはわからない。未来を視るだけで、当人の心を知るわけではない彼女には判断できないことだ。

神でもない巫女である自分に、そのような傲慢が許されるはずもない。

そう思いながらも、目に余るほどの残酷、悲惨、不幸を迎えるであろう人間に出会ったら、その力に手を伸ばさぬ自信がない。それゆえ

に、彼女は人ではなく神に仕えることを良しとした。

そうして、彼女はその力に手を付けることなく人生を終えた。

たとえ親愛なる甥が、千回生まれ変わっても、九百九十九回は不如意な死を迎えると知って居ても、彼女は「未来に形を与える」ことをしなかった。

自分の分を弁えたこともある。だが、生まれもって神命という名の運命を与えられてしまった甥に、さらに彼が自分で選ぶ余地の残る未来まで、自分の手で勝手に決めることは許されないと考えた。

その判断が正しいのか、最後まで彼女にはわからなかった。

自分ではないものに勝手に決められた幸福が良いのか。苦難であつても、自分で歩く悲惨が良いのか。

自己満足かもしれない。答えは出ない。

たとえ決められた道のみであつたとしても、何を思うかは自由だと。その険しき道のりで、何物かを得てほしい。

その儂くも幸せな可能性を、信じていたが為に、倭姫命は微笑んで甥を送り出したのだ。

「——幸いにも旅は、一人ではありませんから」